

---

# 遊戯王～拒絶に巻き込まれた転生録～

秋風

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

遊戯王〈拒絶に巻き込まれた転生録〉

### 【Nコード】

N2721V

### 【作者名】

秋風

### 【あらすじ】

ありのままに起こったことを今話す・・・俺、城戸秋は普通の大学生4年生だ。就職を控え、大学で研究と趣味のカードゲームをする毎日。だがある日目覚めると俺は遊戯王の世界にトリップしていた。しかも俺の身体じゃない！それは武藤遊戯の従弟「武藤秋」の身体だった。どうしてこうなったか、原因は今一つ俺にも理解できない。だが分かることは一つ。俺はこの世界で生きて行かなければならないということだ。ならば何が何でも、この世界で戦い抜いてやる！行くぜ、俺のターン！

注意！ 作者である私、秋風のデュエルタクティクスはかなーり低い上、展開も結構テンプレな描写が最初は多いと思います。ちなみにタクティクスはアストララルもびっくりのレベルなわけで、ここは普通こうするだろ的なレベルの事態もいきなり変なことになったり、単純すぎて面白くないという感じも多くあると思います。それでも見てやろうという方は温かい目で見守ってくださいると嬉しいです。この小説は夏休み企画の第一弾として描いていく小説です。どうかよろしくお願いします。

## 拒絶に巻き込まれた者（前書き）

というわけで、前々から予告していた遊戯王小説です。説明でも書いたとおり、私のデュエルタクティクスは

アストラルもびっくりのタクティクスの低さです

正直言って、他の小説のクオリティの高さに比べたら相当低いです。他の小説を見たり、アニメを見たりして勉強しながら書いてる感じ  
です。

どうか温かい目で見守ってくれたらなあと思います。

それでも読むという方は下へとお進みください。

夏休み中に更新続ける予定ですが、他の小説を優先させることが多いので、更新速度が微妙ではありますが、よろしくお願いいたします。

それでは、よろしくお願いいたします

拒絶に巻き込まれた者

お前、弱いなあ！

ほんと、こんなんで決闘者デュエリスト名乗るなんてな！

………やめてくれ

お前、それでもあの伝説の決闘者デュエリストの従兄かよ！

雑魚の癖にレアカード持ってさ！

僕は、望んでこんなことをしてるんじゃない……

お前は決闘者デュエリストなる資格なんかねーんだよ！

お前となら何回でも勝てるぜ！

きつと伝説の決闘者デュエリストの実力もたいしたことないんだろうぜ！

……誰か、誰か僕を、この世界から逃がしてくれっ………！！

.....

Side ????

今ありのままに起こったことを話そう。俺は知らない天井に起きて上がった。そして知らない部屋にいた。知らない街が広がっていた。俺は昨日大学の研究室で寝ていたはずだ。

「ここはどこだ？」

机の上には遊戯王のカードが散らばっている。その人のものだろうか？俺はカードを見る。見ると随分ひどいデッキだった。攻撃力の最高がデーモンの召喚の2500・・・シンクロもエクシーズもあつたものではない。他は全てバニラであり、低級のモンスターばかり。なぜ「アサシン」のカードがデッキに入っているのだろうか。そして鏡を見て驚愕する。身長が縮み、若返っているのだ。俺は22歳なのだが、今は16歳くらいの年齢だろうか。もはや意味が分からない。

「・・・テレビ」

テレビがある。試しに付けてみた。

『・・・もうすぐ行われる海馬ランドのイベントでは・・・』

・・・はい？意味が分からなくなったので番組を変えて見る

『デュエルモンスターズの生みの親、ペガサス氏は・・・』

チャンネル変更

『今季のデュエルアカデミアの・・・』

OK・・・落ちつこう。海馬ランドって何？答えは海馬社長の作ったテーマパーク。ペガサスって？答えは遊戯王の世界でデュエルモンスターズの生みの親のこと。デュエルアカデミアって何？遊戯王GXの舞台だ・・・あの、これってもしかして？

「ここ、遊戯王の世界？」

どうやら俺は遊戯王の世界に来てしまったようです。

しばらく混乱していたがようやく落ち着きを取り戻し、色々と周囲を物色し始める。写真などがある以上、ここは俺の部屋ということ。そして俺の名前は『武藤秋』ということらしい。俺の名前は元々「城戸秋」と言う名前だ。下の名前だけ変わっていなかった。それより気になるのはこの武藤という名字だ。そしてこの写真。明らかに映っているのはヒトデ頭の男だ。そして裏には『遊戯兄さんと一緒に大会にて』と書かれている。どうやらこれは武藤遊戯ということらしいが・・・この家は双六の店ではない。つまり俺は武藤遊戯の親戚ということ。

「ん？」



机の上にはまだあった。これは試験要項。デュエルアカデミアのものらしい。筆記試験は明後日か・・・どんなテスト問題が出てくるのかは分からないが、やるだけやってみようか。あとは・・・デッキ、どうにかしなきゃな

## 拒絶に巻き込まれた者（後書き）

というわけで、今までにない入り方してみました。

今回の所説は本当にタクティクスが重要なので、自分の持つデッキが多かったり、似たようなパターンが多重になってしまうことがあるので、気を付けて書いていくつもりです。

ストーリーに沿って行くことが多いので他の小説と被るようなことも多いですが、とりあえずオリジナルストーリーが進行できるようにもがんばります

よろしく願います

## 始まりを告げる決闘（前書き）

いきなりデュエルです。シンクロを試験で出す時点で結構テンプレですね・・・むむむ、もつと普段使わないデッキを考えなければ

秋「さて・・・記念すべき最初の最強カードは・・・ジャンク・ウオリアーか」

ジャンク・ウオリアー

「ジャンク・ウオリアー」+チューナー以外のモンスター1体以上このカードがシンクロ召喚に成功した時、このカードの攻撃力は自分フィールド上に表側表示で存在するレベル2以下のモンスターの攻撃力の合計分アップする

秋「不動遊星の相棒とも言えるカードだな。俺もシンクロ召喚をする時はこいつを含め、A・O・Jカタストルか、TGハイパー・ライブラリアンを出すことが多いな。効果の名前は『パワーオブフェローズ』攻撃名は『スクラップフィスト』だ」

ちなみにこの小説でユーザーの方にシンクロ召喚を教わり、最初に出したシンクロモンスターです。今回の小説の中で同じように出しました。懐かしいです

それでは小説をどうぞ

## 始まりを告げる決闘

とりあえず、幾日か時が流れた。この間にすることはデッキの構築。本番では筆記試験は結構簡単だった。基本的なデュエルタクティクスがあれば出来るような問題はかり

例えばだが、モンスターの基本攻撃力などが低いレベルの問題。高いレベルの問題は俺の世界のOCGの様なカードの調節中の問題などだ。

受験生も多かったが、どれだけ合格できるのか。俺は筆記では順位が10番以内には入っていたものの、一位というわけではない。どこで何を間違ったのだろうか。アニメ効果とOCGは違うからなあ・・・それにしても、なぜ普通の国語、数学、理科、社会などの問題が出て来なかったのかと疑問が残るが、それはこの世界だからということに納得してしまう。次はカードだ。カードは部屋の隅に置かれていたケースがあった。海馬社長が持っていたようなあんなの。その中には以前自分が使っていたカードがいくつもあった。シンクロモンスターやエクシーズモンスターはもちろんのこと、漫画にでてOCGとなったものやOCG限定で出されたカードなども多くあるが、流石に「青眼の白龍」「三幻神」「三邪神」「三幻魔」「地縛神」「ブラック・マジシャン・ガール」は持っていない。使うのはまずいだらう。この世に特定の人物にしか出回っていないカードを使うのは流石にまずい。

「さて、と・・・」

俺は現在デュエルアカデミア実技試験の場所へと向かっている。それにしてもこの時間大丈夫かな。電車の遅れとはいえ、確実に遅刻なのだ。十代と同じような感じだな。会場に着くとこの世界の主人公「遊城十代」がクロノス相手にデュエルをしていた。

「行け！フレイム・ウィングマン！スカイスクレイパーシュート！」

「マンマミーア！我がアンティーク・ギアゴーレムがあー！」

「そしてフレイム・ウィングマンの効果！このカードが戦闘によってモンスターを破壊し墓地に送った時、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを受けてもらうぜ、先生！」

アンティーク・ギアゴーレムが崩れ、クロノスはその下敷きになってしまった。あれってソリットビジョンじゃないのか？それにしてもソリットビジョン、すげえ

「ペペロンチーノおお！」

「ガッチャー！楽しいデュエルだったぜ、先生！」

クロノスのLPは0となり、敗北。十代の勝利となった。俺はそれをスルーし、近くの試験官に電車の遅刻の事情を説明した。10番以内に筆記で入ったということもあつたのか、試験を受けることができるらしい。相手は……

「では始めよう！」

名も知らない試験官だった。まあいい……俺の、この世界でのソリットビジョンを使った初デュエルだ。

「試験番号5番武藤秋！行くぞ！」  
「<sup>デュエル</sup>決闘！」

秋           LP4000

「先行は君からだ。さあドロートまえ」

「俺のターン！ドロート！」

デッキは一応この世界に合わせてシンクロを使わないようにしたはずなのだが・・・というか、あれ？俺ただの魔法使い族デッキのはずなのに、なんで引いたのが「ジャンク・シンクロン」？これ、シンクロ用のデッキだ。シンクロしないと勝てないぞ、これ

「っち・・・」

「どうした？手札事故かね？」

・・・ある意味事故だよ。デッキセレクトを間違えるとは。同じデッキケースしかなかったし仕方ないと言えば仕方ないが・・・それにしても本当に事故に近いな。どうするか・・・

「俺は『ボルト・ヘッジホッグ』を守備表示で召喚、カードを二枚伏せてターンエンド！」

ボルト・ヘッジホッグ ATK800/DEF800

「私のターン！ドロート！私は手札から『キラートマト』を召喚する。キラートマトで攻撃！」

キラートマト ATK1400/DEF1100

「リバーズカードオープン！『くず鉄のかかし』！1ターンに一度

相手モンスターの攻撃を無効にする！そしてこのカードは再びセツトされる！」

くず鉄のかかしがキラートマトの攻撃を防ぐ

「なんだと！？ならば・・・」

「そう、攻撃を通すには2体以上のモンスターの攻撃が必要になる」

「私はカードを3枚伏せ、ターンエンドだ」

互いの場にはモンスターが1体ずつ。カードは相手が3枚か・・・召喚に対応して発動するカードの可能性は高いだろう。ならば・・・

「俺のターン！」

だーくそ！手札悪すぎるだろ！なんだよこの手札！

「俺は手札から『シールド・ウイング』を守備表示で召喚する。ターンエンド」

「私のターン！手札から魔法カード『手札断殺』を発動！互いのプレイヤーはカードを2枚捨て、2枚ドローする！」

俺も同じようにカードを捨ててドロー・・・やはり手札が悪い。この手札でどう勝てと？

「さらに私は手札から『闇魔界の戦士ダークソード』を召喚」

攻撃力1800のバナラさんじゃないですか。この人のテーマは闇

デッキか？

「バトル！キラートマトでボルト・ヘッジホッグに攻撃！」

「リバーズカードオープン！『くず鉄のかかし』！説明は以下略！」

「ならば闇魔界の戦士ダークソードでボルト・ヘッジホッグに攻撃する！」

ボルト・ヘッジホッグが叩き斬られ、砕け散る。だがボルト・ヘッジホッグは墓地にいてこそ効果を発揮する。後は手札の『ジャンク・シンクロン』をどこまで生かすことができるかだ。

「カードを一枚セットし、ターンエンド」

「俺のターン！」

来たのは・・・つく！これじゃ駄目だ。まだ耐えなければ！

「俺はカードを一枚伏せてターンエンド」

「私のターン！ドロー！私は手札から『終末の騎士』を召喚！カードの効果には使用しない！そしてバトルだ！キラートマトで攻撃！」

終末の騎士 ATK1400 / DEF1200

何故に終末の騎士の効果を使わなかったんだ？あれって落とすためにあるようなモンスターだろ？再び襲い掛かるキラートマト。それにしてはキラートマトって口を開いて襲い掛かってくるんだな。



「リバーズカードオープン！『くず鉄のかかし』効果は以下略！」

「終末の騎士で攻撃！」

「シールド・ウイングの効果発動！このカードは戦闘では2回まで破壊されない！つまり3回目の攻撃でなければ破壊されない！」

この計算だと4体目が出てくるまで大丈夫なのだが・・・大丈夫か？これ

「つく！私のターンは終了だ」

「俺のターン！ドロー！」

よし！これならまだ逆転できる。試験官はくず鉄のかかしのリスクのためにモンスターをリリースはしていない。これなら・・・

「俺は手札のレベル・ステイラーを捨て、チューナーモンスター『クイック・シンクロン』を特殊召喚！」

クイック・シンクロン ATK700/DEF1400

「チューナー？」

試験官が首を傾げる。まあ知らないだろ、この世界にはないんだから。デッキのチョイスミスとはいえ、これを人前でさらしたくはなかったのだが・・・もうどうとでもなってしまうえ！

「さらに墓地の『レベル・ステイラー』の効果！『クイック・シンクロン』のレベルを一つ下げて『レベル・ステイラー』を特殊

召喚！さらにフィールドにチューナーがいる時、フィールドに『ボルト・ヘッジホッグ』を特殊召喚する！」

5 4

レベル・ステイラー ATK600/DEF0

ボルト・ヘッジホッグ ATK800/DEF800

ざわざわ

なんだアイツ？さっきから弱いモンスターばかり・・・

アイツはあんなもんか？

外野からはそんな声が飛び交う。俺はそんなことを構いはしない。こいつらの強さは俺が一番知っている。

「俺はさらに手札から『大嵐』を発動！」

このカード・・・俺の世界じゃ禁止なはずなんだが・・・強欲な壺とかも大丈夫だったし、規制って緩いもんだなあ

「つく！私のミラーフォースと落とし穴と死者蘇生が・・・」

何故に死者蘇生を伏せたし・・・手札抹殺でも持っているのか？さつきからどこか手加減をしているようにも見える。やはり試験と言うこともあるのだろうか。本来なら終末の騎士の効果でネクロガードナーなりなんなり落としておくべきのはずだが・・・

「そしてさらに速攻魔法『非常食』を発動！俺は2枚のカードを墓地へ送りライフを2000回復する」

秋 LP4000 LP6000

破壊したのはエンジェルリフトとくず鉄のかかしだからな。このターンで決めれば問題はないだろう。

「行くぞ！レベル1のレベル・ステイラーに、レベル4となった『クイツク・シンクロン』をチューニング！」

「チューニング！？なんだそれは……！」

1 + 4 = 5

「……集いし星が新たな力を呼び起こす。光さす道となれ！シンクロ召喚！いでよ『ジャンク・ウォリアー』！」

ジャンク・ウォリアー ATK2300 / 1300

『ハアアアアアッ！』

ジャンク・ウォリアーが召喚される。か、かつこいい……。流石最終回で登場するだけはある……。っと、見惚れている場合じやなかった。

「ジャンク・ウォリアーの効果！召喚に成功した時、自分のフィールド上にいるレベル2以下のモンスターの攻撃力の分だけ攻撃力がアップする！『パワー・オブ・フェローズ』！」

ジャンク・ウオリアー

ATK 2300 3100

「攻撃力、3100・・・だと!？」

試験官が驚きの顔でそれを見ていた。それにしても・・・3000越えはそこまで凄いのか?この世界のカードなら・・・やりようによってはもつと行くだろ。カイザーがいい例だが

「さらに俺は手札からチューナーモンスター『ジャンク・シンクロン』を召喚!そして効果発動!召喚に成功した時、自分の墓地からレベル2以下のモンスターを特殊召喚!こい!レベル・ステイラー!」

ジャンク・シンクロン ATK1300/DEF500

レベル・ステイラー ATK600/DEF0

フィールドはジャンク・ウオリアー、ジャンク・シンクロン、ボルト・ヘッジホッグ、レベル・ステイラー、シールド・ウイング・  
・勝ったな

「レベル2のシールド・ウイング、レベル1のレベル・ステイラー、レベル2のボルト・ヘッジホッグにレベル3のジャンク・シンクロンをチューニング!」

2+ 1+ 2+ 3= 8

「さらにチューニングというのをする気が!？」

「集いし闘志が、怒号の魔人を呼び覚ます！光指す道となれ！シンク口召喚！」

試験官をシカトし、俺は口上を述べて行く。現れるのは腕が4つあるスーパーロボットっぽい感じのモンスター・・・実はお気に入りだったりもする。

「粉碎せよ！ジャンク・デストロイヤー！」

ジャンク・デストロイヤー ATK2600 / DEF2500

「ジャンク・デストロイヤーの効果発動！このカードがシンク口召喚に成功した時、このカードのシンク口素材としたチューナー以外のモンスターの数までフィールド上に存在するカードを選択して破壊することができる！俺がシンク口素材としたのは3体！よって俺は、相手フィールドのモンスターを全て破壊する！『タイダル・エナジー』！」

試験官のフィールドにいたキラートマト、闇魔界の騎士ダークソード、終末の騎士が破壊される。残ったのは俺のモンスターたちのみ

「な、な、なあ・・・」

「行くぞ、ジャンク・デストロイヤーでダイレクトアタック！『デストロイ・ナックル』！」

「ぐああああああああああっ！」

試験官LP4000 1400



「結果、か・・・」

それにしても、結果というのはなかなか楽しみだな。大学の合格発表日以來だ。俺は封を開けて中を見た。結果は合格。ただし条件付きでオシリス・レッドということだ。その条件というのが・・・

『その実力でオシリス・レッドを叩きあげて欲しい』とのこと。どうやら今年の1年は相当できが悪かったらしい。具体的にはその力を振るい、オベリスクブルーに勝てというもの。それに感化されるレッドも出てくるだろうという考えだ。まったくもって意味が分からん。報酬として1年間学費は免除、さらにはオベリスクブルーになることもできるとか。校長直々のお願いということである。正直お断りしたいところだが、電車の事故とはいえ遅刻は遅刻。それではリスクがある以上は断るのは非常に面倒。別に普通の高校に行ってもいいわけだが、アカデミアは普通の高校より学費が安い所がある。受けざるを得ない、か・・・

「嫌なことがないと良いが・・・」

正直、原作に関わってもいいが、必要以上に関わる必要もないだろう。なぜ俺が『武藤秋』に憑依したか分からない以上、必要以上の介入が何をもちたらすかもわからない。

「さて、デツキは・・・？」

シンクロデツキ、E・HEROデツキ、魔法使いデツキ（遊戯デツキ改造）、天使族デツキ、エレキデツキ、エクシースデツキ、六武衆、アンデットか・・・エレキは完全にお遊びだし、他は？あ、D・HEROデツキだ。これもこの世界では使えないな・・・青眼の

白龍デッキも同じだ、無理。ジャックデッキ、BFデッキ……この辺はなあ？

「BFか……」

現実ではかなり強いデッキだ。シンクロデッキに含まれるが、かなり強力だ。

「よし！」

デッキは持つ量も決めた。カードもトランクで全部送った！これでもう何も怖くない！

(僕と契約して魔法(r y))

今変な電波が来たのは気のせい気のせい。

そして出発の日

「行つてきまーす！」

「あ、待ちなさい秋」

秋の母親に呼びとめられた。

「ん？」

「これ、遊戯君からよ？」



受け取ったのは手紙だった。遊戯・・・武藤遊戯か。多分AIBOの方だよな？大会の写真ではアテムだったけど。とりあえず手紙を読む。

『アカデミア合格おめでとう！頑張つてね。僕も応援しているよ。よかつたら使って。きっと君を守ってくれるはずだ』

封筒の中には『ブラック・マジシャン』そして『ブラック・マジシャン・ガール』が入っていた。精霊のカードって知っていたのだろうか？というか、これ主力や。そう簡単に手放して・・・って、AIBOの嫁はサイレント・マジシャンだったな。この世界の『武藤秋』という人物はそこまで遊戯に信頼されているのか？

まあともかく、こうして俺はアカデミアへ向かうこととなる。

これから起こる非日常のことなど、この時俺は知るはずもない。そう、この時は

## 始まりを告げる決闘（後書き）

というわけで、ブラック・マジシャンことマハードさんとブラック・マジシャン・ガールのマナさんは秋の元に。そのうち理由も明かしますが、秋の精霊はこのカードたちではありません。

後は原作介入しますが、次回からTFキャラが沢山？出てきます。次の話では最初あの人です・・・それではノシ

## 奪われた調律（前書き）

連続で少しだけ投稿します。

書き溜めが多いので、別にこれだけを書いてるわけじゃないので・

・あしからず

??「今日の最強カード・・・ふふっ、TGハイパー・ライブラリアンね」

TGハイパー・ライブラリアン

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上。このカードがフィールド上に表側表示で存在し、自分または相手がシンクロ召喚に成功した時、自分のデッキからカードを1枚ドローする。

週刊少年ジャンプに付属していた闇属性・魔法使い族のシンクロモンスターです。まだシンクロを知らなかったのにも関わらず5枚持っていました。電車の棚から拾ったり、友達からもらったり・・・どうしてこうなった

??「ちなみに、このカードの強みはシンクロに成功した時に1枚ドローするという効果に加え、このA・O・Jカタストル・・・よくわからないけど、このカードにも勝てるということね・・・うふふ」

さあ、この??の正体は・・・?

## 奪われた調律

さて、デュエルアカデミアへ向けた船に乗り込んだわけだが・・・やけに視線が痛い。ちらほらと俺のことをひそひそ話している。やはりシンクロデッキを使ってしまったのがまずかったのだらう。視線が非常に不愉快だ。俺は船の中にある自動販売機でコーラを買って飲む。そして船の外のベンチに座った。

「はあ・・・」

声が重なった。

「え？」

隣にいたのは薄紫色の髪をツインテールにした少女だった。いや、少女というよりも女性と言わせるほど大人びている。15歳には見えないだらう。

「あら、貴方も悩み事？」

「え？ああ・・・まあ」

俺が言うと、少女はクスリと笑った。

「貴方・・・あの時の坊やね？」

「あ、あの時？」

坊やって言われたぞ・・・仮にも同じ年に。最悪でも中は大学生を

超えた男なんだけど。

「そう・・・シンクロ召喚、だったかしら？それで試験官に無傷で勝った坊や・・・そうでしょ？」

「・・・まあ、そうだが」

「そんな貴方が何故オシリスレッドなのかしら・・・気になるわ。何故？」

と、言いよる少女。所々身体に触れてくるのが何故か怖い。ここは人気がないからなのか、それともこの女性がそういう趣味なのか・・・別にいいが、15歳でこんな色っぽい声出す奴はそういないだろう。

「理由は・・・まあ、遅刻していたからな。本来なら失格だったけど公共の理由だし、そう言う処置なんだろうね」

俺が適当に言っでごまかすと少女はピクリと眉を動かし、さらに顔を近づけた。

「私、嘘は嫌いよ？」

「・・・なんのことかな？」

俺は大人の対応を取ろうとする。この距離間ではそれも無意味そうだが・・・

「私の名前は藤原雪乃・・・また会いましょう？オシリスレッド、武藤秋」

「えっ……」

こいつ、なんで俺の名前を……あ、自分で試験の時名乗ってたっけ？

「じゃあね、坊や」

そう言っつて藤原は出て行った。

「あ、ちよつとま……あ！いたいた！おーい！」ん？

藤原が歩いていく方と反対の場所からこの世界の主人公、遊城十代そして丸藤翔、空気男……否、三沢大地が現れた。

「お前だろ！？この前の試験で俺の後に試験官相手に無傷で勝って……ええと、シンクロ召喚だっけ？それで勝った奴だろ」

「よければだが、この前のシンクロ召喚について知りたいんだが。5番君」

「……あのさ、いきなり来て名乗りもせずにとりやないだろ、自分の名前を名乗ってから聞いてくれないか。それと俺の名前は武藤秋だ」

「ああ、そうだな。失礼した。俺は三沢大地ライイエローだ」

「俺は遊城十代！オシリスレッドだ！よろしくな」

「僕は丸藤翔っす！」

と、自己紹介。まったく、興奮するのはいいがもつと落ちついて話  
ができないのかよ。藤原と話した後だからか、こいつらが妙にガキ  
っぽく見えてしまう。

「で、シンクロ召喚についてか」

「ああ、聞いたことがないんだが・・・」

「ま、トウーンなんかと一緒にだ。あまり人に知られていない」

「なるほど、限定ということか・・・シンクロの詳細は？」

と、三沢。どうやら彼は原作通りかなりの研究者らしい。

「シンクロ召喚はチューナーと呼ばれるモンスターを必要とする。  
例えるならそのチューナーは融合の効果を持ったモンスターと考  
えてもいい。例えばこの前のようにレベル1のモンスターとレベル4  
のチューナーをチューニングするとレベル5のシンクロモンスター  
を融合デッキから召喚できる。属性条件などもあるカードがあるが、  
レベルを合わせて召喚できる。つまり、レベルの低いモンスターも  
強力なモンスターへと姿を変えらるということだ。レベルが低い、攻  
撃力が低いというだけの概念でモンスターを見ていると痛い目を見  
る」

「なるほど・・・」

と、考える三沢とよくわかってない十代。

「なんでもいいや！向こうについたらデュエルしようぜ！」

「ああ、そのうちな」

こうして、船はデュエルアカデミアへと着実に向かっていた。

デュエルアカデミア

「でけえ・・・」

思わずそんな声が漏れた。ここがデュエリスト達の学びの場。デュエルアカデミア・・・感動だ。素直に、感動している。始業式を終えた俺はその辺をぶらぶらと歩いている。オシリスレッドの寮はぼろいが、俺は一人部屋だ。遊城十代たちと同じ部屋の広さなのだが・・・この辺は校長の配慮なのだろう。別にいいが・・・一度校長にも会う必要があるかもな

「さて・・・」

カードはこれか、生活用品はこれ・・・カードはこっちか。食事、レツド寮は美味しいのか怖いので材料もどこから入手する必要があるな。あとは・・・

「おい！秋！いるんだろー！」

そろそろ来ると思った。外で十代の声が聞こえる。

「ああ、ちょっと待ってくれ」

デュエルデスクを持って外へ出る。そこには既にデスクを付けた十



代がいた。

「デュエルだ！秋！」

「わかった……たく、そのうちって言ったろ」

「いいじゃん、やるぜ！」

「ま、諦めるっス」

と、翔に肩を叩かれる俺。なにはともあれ、こうしてデュエルスペースに移動する俺達。オベリスクブルーの紋章があるところを避け、フリースペースへと訪れた。

「行くぜ！秋！」

「はあ……ああ「おい！お前ら！」あん？」

オベリスクブルーの男たちが俺と十代の前に出て来た。

「ここはオシリスレッドのドロップアウトボーイたちの来るところじゃないぞ」

「はあ？」

俺が答えると、男たちが俺を指差す。

「ここはお前達見たいなドロップアウトが使っている場所じゃねーんだよ！」

「知るか、向こうならともかくここはフリースペース、クラス関係なく使う場所だ。お前らに指図される道理はない」

ここはそういう場所だ。ここでデュエルするなら問題ない。

「貴様！オシリスレッドの分際で俺達に盾突く気か！」

「おい十代、やるぞ」

「お？おう！」

無視。これ以上は時間の無駄だしな。さっさとデュエルして部屋でゆっくりしたい。

「貴様あ！」「何を騒いでいる」「あ、万丈目さん！」

そこに現れる万丈目サンダー・・・正直なところ、こいつ序盤だと超嫌なキャラだからな。それ相応の態度で帰してやるとしよう。

「アイツ誰だ？」

首を傾げる十代。確かに

「さあ」

俺が言うと、取り巻きらしき男が声を上げる。

「お前ら！万丈目さんを知らないのか！？」

「知るか、今日来たばかりの人間に無茶難題言つなよ」

「万丈目さんは同じ1年でも中等部からの生え抜き、超エリートクラスのナンバーワン！」

「未来のデュエルキングと呼び声高い万丈目準様だ！」

と、高らかに言う取り巻きと偉そうにする万丈目。いるんだな……  
こういうの

「……で？」

「な、なに？」

「だからなんだ？その未来のデュエルキングが俺達のデュエルの邪魔をする権利あるの？」

俺はとつとと十代とデュエルして戻りたい。まあ個人的に十代とはやりたいとも思っていたが。

「落ちつけ諸君。それにしてもオシリスレッドの分際で随分と態度がでかいんだな」

「むしろ同学年で上下決めている奴らよりはまともだと思っているが？」

「いいだろう……確かあのクロノス教諭を倒したやつと、龍導先生を倒したやつだったな。このアカデミアの厳しさを教えてやろう」

あの先生、そんな名前だったんだ。まあモブキャラだからどうでもいい。

「はいはい、後でね。俺は十代と戦うのが先だから」

と、シカト。かつこよく決めたんだろうが、滅茶苦茶ださいぞ

「貴様……貴方達何をしてるの？」て、天上院君！」

そこに現れるのは金髪の少女。明らかに高校1年生のスタイルではないこの世界のヒロイン……こいつ、さっき物影に隠れていたの  
見えたぞ。

「綺麗つす……」

と、呟く翔

「万丈目クン、なにしてるの？」

「……やあ天上院君。この新入りたちがあまりにも世間知らずなんでねえ、学園の厳しさを少々教えてさしあげようと思って」

「もうすぐオベリスクブルーの歓迎会が始まるわ。もう戻った方がいいんじゃない？」

「うち……お前ら戻るぞ」

「「はい！」」

と、3人を追っ払って俺達の方を向く。

「駄目よ、彼らの挑発に乗ったら」

いや、挑発に乗った覚えはないんだが・・・

「いきなり出てきてなんだ？」

と、十代が首を傾げる。

「私は天上院明日香よ、よろしくね」

「俺は遊城十代だ！」

「ぼ、僕は丸藤翔ツス！」

「……………武藤秋だ。それで？いきなり出てきてなんだ？」

俺が言うが、明日香は表情を崩さない。

「ちょっと注意して上げたの。感謝してね」

「感謝する必要性がないな・・・俺達を助けたつもりでいるようだが、なんであいつが出てくる前に出て来なかったんだ？さっきその物影に隠れてたのに・・・見えてたぞ」

「っ！見てたの？」

「あんなので隠れたつもりだったアンタがおかしい。そろそろ時間だな・・・戻る」

そう言っつて俺はデュエルスペースを後にする。

「あ！待てよ秋！」

「待ってよ秋君！」

こうして戻る俺達だった。歓迎会では飯が美味しいかどうか微妙な料理だった。やっぱり自分で作らないと駄目だな。あとは・・・フム、メール？

『やあ、ドロップアウトボーイ。午前0時に決闘場で待っている。互いのベストカードを賭けたアンティールで決闘だ。勇気があるなら来るんだな。 by 万丈目 』

・・・あいつ、どこで俺のメアドを知ったんだ？すると、隣でドアを叩く音が聞こえた。

「おい！秋！」

「・・・なんだ十代」

「万丈目からメールが来たんだ！」

シカトしろよ・・・普通するだろ？

「ああ、俺のところにも来たぞ。どうするつもりだ？」

「もちろん行くっきゃないだろ！決闘者たるもの！勝負には逃げないぜー！」

「別にいいが、それで退学になっても知らんぞ」

「え？」

「生徒手帳に書いてあるぞ、夜中の外出は禁止つてな」

いちいち出てくるオベリスクブルーもオベリスクブルーだが・・・はあ、こっちはまだ作業が残ってるつてのに

「でもよあ・・・」アンティも禁止のはずだ。こいつら構うだけ無駄だろ」でも逃げたくないだろ！デュエリストたるもの、売られた喧嘩は買うべきだぜ！」

この熱血馬鹿は・・・まあ、こういうところが子供に好かれるのは分かる気がする。うち、原作介入はなるべく避けるつもりなんだがなあ・・・しかたがない

「わかった、付き合うよ。デュエルスペースだな」

こうして俺達3人はデュエルスペースに向かった。

デュエルスペース

「よく逃げなかったな、ドロップアウトボーイ」

・・・はあ、そんな校則破って仁王立ちしてもかっこ悪いぞ」

「なっ！それは貴様も同じだろっ！」

「秋君、声に出てるっス」

「あ、まじ?」

万丈目は額に青筋を浮かべていた。

「良いだろう! 貴様俺とデュエルだ! メールの通りアンティルール! 貴様のベストカードを出してもらおう」

「・・・期待しないで聞くけど、お前のカードは何?」

「万丈目さんだ! 俺が言う必要はない! 勝つのは俺だからだ!」

やれやれ・・・エリートというのは何故こつもひどいのだろうか。

「まあいい・・・さっさと終わらせて帰ろつ」

「行くぞドロップアウトボーイ!」

「・・・はあ」

秋LP4000

万丈目LP4000

「デュエル!」

「先攻は「先攻はこの俺様だ!」あ?」

「俺のターン! ドロー!」



なん、だと！？……じゃんけんかなんかで決めるどころか先に先攻取られた。この世界だと言ったもの勝ちなのすっかり忘れてた

「俺は手札から地獄剣士を召喚する」

ATK1200/DEF1400

「カードを二枚伏せてターンエンドだ！」

ふむ、地獄剣士……か。原作でも出て来たカードだな。もしかしてデッキの内容アニメと一緒に？確か地獄剣士は相手モンスターの攻撃によって破壊され墓地へ送られた時、戦闘によって自分が受けた戦闘ダメージを相手ライフにも与えるカードだったな。そんなカードよく使うな……俺の世界でもレアくらいにはなっていたっけ？

「俺のターン！ドロー」

伏せているカードはブラフか？それともアニメ通り『ヘルポリマー』か……？

「俺は『シールド・ウィング』を守備表示で召喚」

ATK0/DEF900

「ふはははは！貴様に相応しい貧弱なカードだ！」

「言ってる。カードを3枚セットし、ターンエンドだ」

「俺のターン！ドロー！俺はさらにスナイプストーカーを召喚だ！」

ATK1500/DEF600

「効果発動！手札を一枚捨て、カードを選択。サイコロを振って2〜5が出た場合、そのカードを破壊する！対象はその雑魚カード、シールド・ウイング！」

ルレットが廻り出し、出た目は3！

「シールド・ウイングを破壊！そして2体でダイレクトアタックだあ！」

「トラップ発動！『ガード・ブロック』！相手ターンのモンスター1体の戦闘ダメージを0にして俺はカードを一枚ドロウする！」

「ならば地獄剣士でダイレクトアタック！」

「手札からバトルフェーダーの効果を発動する！相手モンスターの直接攻撃時に発動可能！手札から特殊召喚することでこのターンのバトルフェイズを無効にし、バトルフェイズを終了させる！」

バトルフェーダー ATK0/DEF0

このデッキはシンクロデッキ・・・なので使えるカードは手当たり次第に入れている。ガード・ブロックで引き当ててよかった。

「っち！運がいいな・・・ターンエンドだ！」

「俺のターン！」

といつても、俺が不利なものには変わらない、ここで何とかしなければ！

「俺は手札から手札断殺を発動！互いのプレイヤーはカードを2枚まで墓地に送り、2枚ドロー！」

つく！何故毎回毎回ドロー運が悪い！？ここでやるしかない！

「俺はチューナーモンスター『ゾンビキャリア』を召喚！」

ゾンビキャリア ATK400/DEF200

「そして先ほど手札断斬で送った墓地のボルト・ヘッジホッグの効果を発動！自分のフィールドにチューナーがいる時、自分のフィールド上に特殊召喚できる！来いっ！ボルト・ヘッジホッグ！」

ボルト・ヘッジホッグ ATK800/DEF800

「レベル1のバトルフェーダーとレベル2のボルト・ヘッジホッグに、レベル2のゾンビキャリアをチューニング！」

ここはコイツしかいないでしょ！頼むぜ！

「リミッター解放、レベル5！レギュレーターオープン！スラストーウォームアップ、オーケー！アップリンク、オールクリア！GO、シンクロ召喚！カモン『TG ハイパー・ライブラリアン』！」

TGハイパー・ライブラリアン ATK2400/DEF1800

「新しいシンクロモンスター！」

「かつけー！」

と、驚く十代と翔

「ふふふ！この時を待っていたぞ！トラップ発動！『ヘルポリマー』」

「・・・は？」

まあ、シンクロモンスターを知らない奴なら、融合デッキから出てくればそうなるか？

「このカードは融合モンスターの『このモンスター、融合モンスターじゃないぞ』な、なんだと！？」

人の話し聞いていたのか？伏せは2枚・・・大嵐やサイクロンはない。だが・・・

「ここは臆せず攻める！バトルだ！ライブラリアンでスナイプストーカーに攻撃！」

「させるか！攻撃の無力化！攻撃を無効にし、バトルを終了させる」

「つち！」

「カードを1枚伏せ、ターンエンド！」

さて、ここからどう出る、万丈目！

「俺のターン！つふ！ふははははは！」

「・・・？」

「今度こそ貴様のカードをもらおうとしよう！俺は手札から強制転移を発動させる！」

「何！？」

原作であんなカードを持っていたか！？つく！

「俺は地獄剣士を選択！貴様は強制的にTGハイパー・ライブラリアンを選択！2体のコントロールを入れ替える！」

「そんな！じゃあシンクロモンスターは！」

十代が叫ぶ。確かにこれは鬱陶しいな・・・

「俺が使つてやろう！そしてスナイプスターカードの効果発動！対象は地獄剣士！」

ルーレットが廻る。止まったのは・・・2だと！

「地獄剣士を破壊！2体でダイレクトアタックだ！」

「リバーズカード発動！エンジェルリフト！戻ってこい！ゾンビキヤリア！」

「構うな！ケチらせえ！」

ライブラリアンがゾンビキャリアを破壊した。

「ぐあああああああっ！」

秋LP4000 2000

「スナイプストーカーで追撃！」

「ぐうっ！」

LP2000 500

「つち！ライフが後1000をきった！次のドロで何とかしなければ！」

「俺のターンは終了だ！さあドロしろ！もしくはサレンダーか？  
ふははははは！」

「・・・サレンダー？ふざけるな・・・諦めるか」

「まだだ、まだ終わっていない・・・アイツの伏せは「ヘルポリマー」  
だけ。ここでライブラリアンを倒せるレベルのモンスターを召喚で  
きなればいけない。手札にあるカードだけではライブラリアンに  
は劣る。ならば・・・このドロに全てが掛っている。」

「そのような雑魚カードでデッキを組んで自分の愚かさを呪うとい  
い！」

「それは違うな・・・」

言ってみたかったセリフがある。

「この世に不要なカードなどない・・・そして、信じなければ物に出来ないカードがある！俺のターン！ドロー！」

そう叫び、カードを抜いた。

## 奪われた調律（後書き）

万丈目編は話をまたぎます。

ヘルポリマーはぶつちやけ万丈目さんがお茶目なところを見せたいというのがあったので出しました。

個人的にアニメ版万丈目君は好きです



## 三叉の槍（前書き）

とりあえず、ここまで・・・で、いったん終了です

秋「今日の最強カードは・・・おい、氷結界の龍トリシューラかよ」

氷結界の龍 トリシューラ

チューナー+チューナー以外のモンスター2体以上

このカードがシンクロ召喚に成功した時、相手の手札・フィールド上・墓地のカードをそれぞれ1枚までゲームから除外する事ができる

秋「原作では使う奴がないものの、鬼柳の中の人を使うカードだな。レベル9のシンクロカードの中でも有名なカードだ。10体いるレベル9のシンクロカードの中でも大会では入れる人が多いな・・・」

ちなみに作者はミスト・ウォームも使ってます

韓国版 530円也

## 三叉の槍

Side 雪乃

私は夜、万丈目の坊やが出て行くのを見かけた。取り巻きも一緒だ。明日香の話では昼間に遊城十代という生徒と、あの武藤秋が絡まれているという。万丈目グループの御曹司と言うこともあってか態度が大きいあの坊やは好きではない。あの時の坊やのほうが好み……。私は明日香に連れられ、デュエルスペースへと訪れた。

「俺のターン！っふ！ふははははは！」

「……？」

「今度こそ貴様のカードをもらおうとしよう！俺は手札から強制転移を発動させる！」

「何！？」

万丈目の坊や、運がいいわね……。これでは彼のシンクロモンスターが奪われる

「俺は地獄剣士とTGハイパー・ライブラリアンのコントロールを入れ替える！」

「そんな！じゃあシンクロモンスターは！」

状況は坊やが不利。カードの引きが悪いように思える。そしてライフが900になった。

「シンクロモンスター・・・あれが」

「どうしたの？明日香」

「あの秋という子・・・あの時は引きがよかっただけ？それとも万  
丈目君の方が強いのかしら」

確かに、今の状態では強いようには見えないわ。

「どうかしらね・・・私はあの坊やにかけてもいいわよ？」

「あら、珍しいわね雪乃、貴方がそんなことを言うなんて」

「ふふふ、どうかしら」

さて、見せて頂戴・・・貴方の力を・・・！

「この世に不要なカードなどない・・・信じなければ、物に  
出来ないカードがある！俺のターン！ドロー！」

そう叫び、彼はカードを抜いた。

S i d e 秋

「！」

これならまだ、可能性がある！どんなにドロー運が悪くても・・・  
！これなら！

「俺は手札から命削りの宝札を発動！手札を5枚になるようにドロし、5ターン後に全てを捨てる！3枚ドロー！」

来てくれよ……！よし！

手札は5枚……そして

「俺は強欲な壺を発動！さらにカードを2枚ドロー！」

「このタイミングで強欲な壺!?」

今度は6枚……これで勝てる！

「俺は手札のレベル・ステイラーを捨て、チューナーモンスター『クイック・シンクロン』を特殊召喚！さらに『クイック・シンクロン』のレベルを1つ下げ『レベル・ステイラー』を特殊召喚！」

クイック・シンクロン ATK700/DEF1400

レベル・ステイラー ATK600/DEF0

「そしてレベル1の『レベル・ステイラー』にレベルが4となった『クイック・シンクロン』をチューニング！集いし思いが、新たに輝く力となる！光指す道となれ！シンクロ召喚！いでよ、ジャンク・ウォリアー！」

ジャンク・ウォリアー ATK2300/DEF1300

「っふ！飽き足らずシンクロ召喚のようだが、ライブラリアンの攻

撃力は2400だ！攻撃は届かんぞ！さらにライブラリアンの効果でカードを一枚ドロウする！」

「どうかな？俺は手札から『ボルト・ヘッジホッグ』を捨て、『パワー・ジャイアント』を特殊召喚！」

パワー・ジャイアント ATK2200/DEF0

「このカードはレベルが4以下のモンスターを墓地へ送ることで特殊召喚できる。ただし、このカードを特殊召喚した場合、このカードのレベルはその墓地へ送ったモンスターのレベルの分だけ下がる！」

6 4

「だったらどうした！」

「最後まで話は聞くものだ！さらに俺は手札からジャンク・シンクロンを召喚！」

ジャンク・シンクロン ATK1300/DEF500

「ジャンク・シンクロンの効果発動！このカードの召喚に成功した時、自分のフィールド上にレベル2以下のモンスターを特殊召喚する！来い！『ボルト・ヘッジホッグ』！」

ボルト・ヘッジホッグ ATK800/DEF800

フィールドはジャンク・シンクロン、ジャンク・ウォリアー、ボルト・ヘッジホッグ、パワー・ジャイアントだ。ここから逆転はまだ

可能だ！

「俺はレベル4となっているパワー・ジャイアントとレベル2のボルト・ヘッジホッグに、レベル3のジャンク・シンクロンをチューニング！」

4 + 2 + 3 = 9

「破壊神より放たれし聖なる槍よ、今こそ魔の都を貫け！シンクロ召喚！『氷結界の龍トリシューラ』！！」

3つ首の龍、トリシューラがその姿を現した。氷の翼が神々しく光る。ターミナルでもかなり人気の高い上、満足先生の中の人を使う竜、トリシューラ

氷結界の龍トリシューラ ATK2700 / DEF2000

「レ、レベル9・・・攻撃力2700だと！だが、カードを一枚・・・」

「トリシューラの効果を発動！このカードがシンクロ召喚に成功した時、相手の手札、フィールド上、墓地のカードをそれぞれ選び、除外する！」

「な、なんだとお！？」

驚きを隠せない万丈目。このまま押しきる。

「俺は万丈目の俺から見て右側のカード、フィールドのライブラリアン、墓地の地獄剣士を除外する！ライブラリアンは返してもらおう

ぞ！さらに俺はデッキトップにカードを1枚戻し、ゾンビキャリアを特殊召喚！さらにトリシューラのレベルを一つ下げて『レベル・ステイラー』を特殊召喚！行くぞ万丈目、バトルだ！トリシューラでスナイプ・ストーカーに攻撃だ！裁きの氷炎！アイシングフレア！」

レベル・ステイラー ATK600/DEF0

「万丈目さんだ！ぐあああつ！」

万丈目LP4000 2800

「さらにジャンク・ウォリアーでダイレクトアタック！」

「グオオオツ！」

万丈目LP2800 500

「やった！これで秋の勝ちだ！」

「つく！馬鹿な！この俺が・・・何を勘違いしているんだ」何！？」

「まだ俺のバトルフェイズは終了していないぜ！」

もともと終了してないけどな。フィニッシュがゾンビキャリアやレベル・ステイラーでは恰好がつかないだろう。というお馬鹿な考えが頭をよぎったのでこいつを発動する。

「トラップ発動！『緊急同調』！」

「緊急同調!？」

「このカードは、バトルフェイズ中のみ発動可能!シンクロモンスターを1体シンクロ召喚する!レベル5のジャンク・ウォリアーとレベル1のレベル・ステイラーに、レベル2のゾンビキャリアをチューニング!」

5 + 1 + 2 = 8

「集いし願いが、新たに輝く星となる!光指す道となれ!シンクロ召喚!飛翔せよ!『スターダスト・ドラゴン』!」

スターダスト・ドラゴン ATK2500/DEF2000

白い龍が飛翔する。

「ば、ばかな・・・」

「スターダスト・ドラゴンで攻撃!響け!シューティング!ガードマンが来るわ!アンティールは校則で禁止されている、時間外に施設を使っているし、校則違反で退学かもよ!」空気読めやあ!」

突然現れた明日香の言葉に、思わずそんな叫びをあげてしまった。

「天上院君、それに君は藤原君・・・見ていたのか・・・」

「やれやれ・・・次にデュエルをしかける時は、もっと昼間にしてくるんだな・・・デュエルはノーゲームか」



「な、情けをかけるというのか！ドロッパアウト風情がこの俺に！  
！」

万丈目が叫ぶが、知ったことか。こちとらいきなり退学になるのはごめんこうむる！

「万丈目さん！ヤバイっすよ！！」

「早く行かないと見つかりますよ！！」

取り巻きがせかす。どうやら2人も焦っているようだ。万丈目達が逃げ、俺達も逃げ始める。

「こっちよ」

「君は・・・藤原！？」

今気が付いた。藤原雪乃がここにいる。原作では明日香一人だったはずだが・・・？

「ふふ、坊や久しぶり・・・さ、行きましょう」

こうして俺達はその場を脱出した。

寮付近

「まったく、散々な目にあつた」

「あーあ、もうちょっとで勝てたのに、残念だったな秋」

「ああ、まあ俺はカードはいらない・・・というか」

無駄なことをしないでさっさとトドメを刺せばよかったな。そんな話をしていると明日香が近寄ってくる。

「どうだった？オベリスクブルーの洗礼は？」

「どうだろう、洗礼というか・・・もうちょっとで俺が勝ってたし  
つたく、最後攻撃すれば2000オーバーのオーバーキルが出来た  
のに・・・」

「そ、そう・・・それにしてもシンクロ召喚、凄いわね」

「・・・そりやどうも。それにしても天上院、アンタは随分あの状  
況に詳しくかったな」

「えっ・・・!？」

驚く顔の天上院。謎がいくつもあった。

「何故俺達が万丈目に呼ばれていたのを知っていた？そして逃げる  
時何故アンティだったことを知っていた？」

「そ、それは・・・」

「大方、歓迎会の時にでも万丈目達の話聞いてたんだろ？それに  
してもお前は覗きが趣味なのか？」

「し、失礼ね！そんなことないわよ！」

と、喰ってかかる明日香。だって・・・

「俺達のデュエル、ずっと見ていたんだろっ？夕方では俺達の止めに入ったのにもかかわらず、どうしてアンティという違反行為を止めに来ないで静観していたか・・・疑問だな」

「うっ・・・それは・・・」

目が泳いでいる明日香。どうやら俺や十代の力を凶るためにあえて万丈目を止めなかったようだ。

「ま、今となつてはもうどうでもいい・・・帰るか、眠いし」

「坊や、待ちなさい」

「・・・ん？」

藤原に呼びとめられる。

「坊や、なら貴方は何故アンティを受けたのかしら？貴方だって人のことは言えないでしょう？」

「・・・」

理由としてはアレだな、一回は原作キャラがどの程度か知りたいとそういうのがあった。この世界が本当にアニメの世界なのか・・・まだ万丈目としか戦ってないからアレだが、後は十代たちか

「まあいいわ・・・またね坊やたち。明日香帰るわよ」

「え、ええ・・・」

こうして帰って行く藤原と天上院・・・眠い。

「俺達も帰ろうぜ」

「ああ、だな」

「もうこんな時間っす！」

俺達も寮へと戻って行った。

翌日

現在授業を受けているわけだが・・・果てしなくだるい。デュエルタクティクスに関しての話しなのだが・・・ああ、どうしてこのような話をするのかわからん

「そこで寝てイルーオシリスレッドの武藤秋、フィールド魔法にツイーテ説明するノーネ」

フィールド魔法か、ふむ

「フィールド魔法はフィールドカードゾーンと呼ばれた場所に設置する魔法カードのこと。適用は自分だけでなく相手のフィールドも干渉を受ける。それぞれ多種多様な種類があり、攻撃力と守備力の上昇の『草原』、『荒野』など特定の種族の攻守変動カード他、『

天空の聖域』などの自分が天使族を使っていれば戦闘ダメージを0にすることができると存在する。天空の聖域があれば別効果も使用できる天使族がいるのも存在し、他にも『魔法族の里』など魔法使い族がいることで相手の魔法カードを使用不可にもするロツクカードもある。さらには『死皇帝の陵墓』というライフを一定はらうことで上級モンスターを召喚できるケースも存在している。そして攻撃力の増減でも攻撃力が上がって守備力が下がるものもあるがそれだけでなく、『摩天楼 スカイスクレイパー』などのように攻撃する時のみ攻撃力が上昇するカードもある。ここでフィールド魔法について注意するのは例えば互いに同じ『E・HERO』を使っていた場合は相手にも同じ効果が得られる部分である。他にも海として扱うことができる『伝説の都 アトランティス』などもまた同じく互いに水属性を使っていけば相手もレベルを下げて上級モンスターを召喚してしまう可能性がある。先ほどの天空の聖域も同じなので以下略。フィールド魔法が発動されて不利になることもあるが、そのフィールド魔法を逆手に取ることも可能であり「もういいノーネ！十分ですーノ！」あ、そうですか」

そう言っただけで席に着く。周囲が目を丸くしているが……俺、何か間違ったことした？

この後は原作通り翔が答えら得ず十代がクロノスを馬鹿にして終わった。やれやれ、この学校は人を見下さないで済まないのか？ま、どうでもいいや……授業は終了。この後はなんだっけ……ああ、翔の覗き騒動か。頑張れ十代、応援しているぞ。応援だけなそんなことを思い出しながら歩いていると、誰かにぶつかつた。

「キヤツ!？」

「つと……」

思わず抱きとめてしまったが・・・

「だ、大丈夫か？」

「べ、別に僕は平気なんだから！離してよ！」

ピンク色の髪の少女がそう言いながら俺を払いのける。カードがバラバラになってしまった。

「これは・・・」

六武衆、だと・・・？このカードはまだまだ先のはずなのに、何故この子が持っているんだ？

「変わったカードを持つてるな」

「ちょっと！勝手に見ないでよ！」

「ああ、すまん。ぶつかっただのは俺のよそ見だしな・・・はい、これで全部か？」

そう言っただけ俺がカードを渡す。少女はカードをひったくる様に受け取った。

「べ、別に感謝なんかしてないんだから！・・・でも、ありがとう」

そう言っただけ顔を紅くする。この子誰だったかな・・・俺はタッグフォースをやったからあまり知らないんだよな。藤原雪乃も確か髪がショートだったような？ああだめだ、この辺は覚えてないや

「あ、ああそう・・・悪かったな。俺は武藤秋だ。君は？」

「僕はツアン・ディレ・・・って、なんでアンタなんか自己紹介しなきゃいけないのよ」

「いや、なんでだろう?」

「僕に聞かれても・・・あんた、変なやつね」

ツアンには変な奴と言うことで一区切りにされてしまった。なんか凹む。それにしても

「六武衆・・・か」

「何?僕のカードがどうしたのよ?」

「いや、珍しいカードだよな。聞いたことがなかったからさ」

「そう?まあ使ってる人は少ないわ・・・って、もうこんな時間!お風呂入れない!」

どうやら時間がないようだ。これ以上は引きとめてはいけないだろう。

「引きとめて悪かったな。またな」

「・・・さよなら」

そう言ってツアンは走って行った。途中で俺の顔を見て顔色を変えたのは何故だろうか?まあいい・・・俺は部屋でカードの整理をす

るとしよう。

ツァンSide

なによなによなによ！なんなのよあいつ！アイツ、試験で先生にノ  
ーダメージで勝った奴じゃない！しかも知らない召喚方法を使つた  
りする！オシリスレッドの癖に、僕に対してまったく態度を変えな  
いで！でも・・・

「あんなに人と話したの、久しぶりかも」

僕は基本誰とも居ない。その方が楽だから。友達なんかいても、僕  
は何故か突っぱねてしまう。

「べ、別に・・・友達が欲しいとか、そんなんじゃないんだから・・・」

僕はそう呟きながらカードを握りしめ、自分の寮へと帰って行った。

Side秋

「はー・・・疲れた」

カードの整理は終わった。購買でカードケースを買ってから振り分  
けた。それにしても眠い・・・ご飯食べ終わると眠くなるなあ・・・

「考えても駄目だ・・・寝よ寝よ。おやすみー」秋！大変だ！・・・  
・・・何の用だ、十代」



寝ようとした瞬間にこれか。

「大変なんだ秋！翔が捕まっちゃった！」

「はあ？誰に」

「わかんねえ！女子寮で待ってるって！」

「なら行けばいいじゃん。なんで俺のところに来るのさ」

「女子寮の場所がわからなねえ！それに秋も連れて来いって！」

十代の言葉に俺は頭を抱えてしまった。どうやら俺は完全に原作へ組み込まれてしまったようだ。

## 三叉の槍（後書き）

トリシューラの攻撃名はオリジナルです  
アイシングフレア

・・・カッコいい名前、募集してます  
そしてツアン登場。今回はTFのキャラの紹介です

藤原雪乃 初登場作品 TF 2

ツインテールと甘ったるくエロい喋り方が特徴で、台詞の多くが性を連想させる台詞というゲームの対象年齢的にアウアウな人

認めた人間以外は子供扱いするが、過去に二人だけ認めた人間がいる。そのうちの一人はTF 1から3時代の主人公であり、そしてもう一人は、校舎内を裸で走り回っていた漢らしい人物とのこと。

TF 5では一人増えて三人になっている。TF 4の主人公だろうか？

TF 5ではシンクロ召喚のレベルを合わせることで会話が成立するミニゲーム「数字の話」があるのだが彼女の肉まんの話は必見。

パートナーデッキはTF 2及び3の時が【推理ゲート】

TF 4以降、キーカードの「名推理」と「モンスターゲート」が規制されたため、終焉の王デミスを中心とした【儀式天魔神】に乗り換えている。

前者は上級モンスターがホイホイ現れ、後者は場のカードをすべて吹っ飛ばすなどどちらも漢前なデッキである。

ツアン・デイレ 初登場 TF 4

TF 4から登場したいいわゆるツンデレなデュエリストであり、さらにぼくっ娘である。

好みのアイテムをプレゼントしても素直な台詞で受け取らない。

TF5では一部のD2デユエリスト（いわゆるモブキャラ）に新規グラフィックが与えられたが、彼女は特に表情豊かなCGをもらっており、スタッフからの優遇ぶりが窺える。

しかし、パートナーを連れて話しかけると、大抵は機嫌が悪くなってしまうため、あまり話しかけてもらえないため優遇と不遇が相殺されている。

パートナーにした際に使用するデッキは【六武衆】

TF4ではAIが改善されたおかげで展開力が上がり、TF5では「六武の門」が登場したため、デッキのポテンシャルは高い。

ただし、ツンデレとかけた駄洒落で「ツンドラの大蠍」がお気に入りに指定されているため、種族統一デッキの強力なカード「一族の結束」が使用できない。

「連合軍」や「強者の苦痛」で妥協するか、召喚されないことを祈ろう。

どちらもピクシブ大百科より抜粋

とりあえずお気に入りのこの二人の登場です。この後もどんどん出てきます・・・TFキャラクター

後は宇佐美さんとかも好きですね・・・ゆまちゃんも好きです

ま、今後にご期待ください

お薦めデッキとかも受け付けております

## 絆（前書き）

とりあえず4話目・・・そろそろ仮面ライダーを更新します

ツアン「今日の最強カード・・・なにこれ、No.39 希望皇ホープ？」

レベル4モンスター×2

自分または相手のモンスターの攻撃宣言時、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除いて発動する事ができる。

そのモンスターの攻撃を無効にする。このカードがエクシーズ素材の無い状態で攻撃対象に選択された時、このカードを破壊する。

効果能力の名前は「ムーンバリア」

攻撃名は「ホープ剣スラッシュ」

ツアン「・・・何これ、黒い変なカード」

エクシーズモンスターは作者の周りでは最初シンクロモンスターと比べる人が多かったですね。私もそうです

例えば・・・ヴァイロン・ディングマの場合

レベル4 モンスター×3

これは・・・合計レベル12じゃんみたいな感じで

しかしながら、慣れると使いやすさを考えるものですね。私の最初のエクシーズモンスターはホープでした

## 絆

俺は行かないと言ったのだが無理やり十代に引っ張られてきた。デ  
ツキも十代が適当に選んでいた。おい待て、この黒いケースは……  
まさか

「おい！翔！」

「兄貴〜！秋君〜！」

女子寮に辿りつくくと、グルグル巻きにされた翔の姿があった。はあ・  
・

「よく来たわね、十代、それと秋」

「俺はおまけか」

なら帰ってもいいよな？もう寝てもいいよね？疲れて寝たいのに・  
・ どうしてこいつらは元気なんだろうか。あれか？主役補正か？事  
情を聞くと翔が覗きをしたということらしい。翔はラブレターをも  
らったということだが、それは遊城十代宛てとなっており、結局覗  
きをしたということになる。翔の解放条件は俺と十代の勝利。相手  
は明日香ということだ。

「待って明日香、坊やの相手は私がするわ」

「いいえ、両方私がしたいの……させて頂戴」

藤原の言葉に明日香が食い下がる。藤原は明日香の言葉にやれやれ

とため息をつき、下がった。

「……で？どっちがやるんだ？俺としては早期に帰って寝たい。  
このまま翔が退学になっても……まあ、どんまい」

「ひどいっす！」

「よっしゃ！なら俺が先だぜ！」

と、十代が前へ。それにしても……ここでデュエルするの？原作と違って場所が開けているのは御愛嬌だが……ま、いいか。ん？

「ツアンじゃないか、また会ったな」

「……僕だって、好きでいるんじゃないわよっ！」

「……は？」

「僕はたまたまお風呂入っていて、彼女達が来たの。それで僕も覗かれたんだからここにいろって……僕、どうでもいいのに！」

それだけ明日香達が心配しているってことじゃないのか？よくわからんが

「それだけ心配されたんだろ？なら良いじゃないのか？」

「……なんでみんな僕に関わるの？僕は一人でいればそれでいい。  
他の人なんて知らない。勝手にすればいいのに」

と、俯くツアンはどこか寂しそうだった。ツアンはどうやら他人を

突っぱねてしまう性格のようで、そのせいで前に何かあったのだろう。それについて聞くのは野暮だろうし言うことはない。

「いいんじゃない？」

「え？」

「今は別にそれでも。でも一人じゃいつかは限界がある。人生においても、カードにおいてもさ。六武衆はそう言うカードだし」

言いながら、十代と明日香のデュエルを見る。十代がサンダー・ジヤイアントを召喚した。どうやらデュエルも終盤のようだ。

「デュエルだつて、モンスター一体じゃ何もできないことがある。支えがあつて初めて真価を發揮する。今は他人を理解できなくてもいいさ。でもいつか人と分かりあえるなら、その嬉しさはあると思うよ」

実際、この世界で本当に俺は一人なのだ。友達も、家族も、この世界では『武藤秋』の友達であり、俺自身の友達かなのは不明なのだ。見ると、十代が明日香を倒していた。

「終わったか」

「ああ！勝ったぜ！」

負けてうなだれているかと思いきや、既に構えている明日香。やれやれ・・・そんなに俺が戦わなきゃいけないのか・・・

「次は俺か」

「そうよ、シンクロモンスター……私が倒して見せる！」  
意気込んでいるところ悪いんだが……

「今回俺はシンクロ使わんぞ」

「「ええ!?!」」

と、驚く十代と明日香、そして声は出していないものの、驚いた顔の藤原とよくわかっていないという取り巻きのえーと……ジユン  
コトモモエだっけか?あとツァン

「文句なら十代に言え。デッキチョイスをしたのはこいつだからな」  
デッキを選ばせてくれる余裕があったらジャックのデッキかBFで  
行ったんだけどな

「けどまあ……都合はいいか」

ちらりとツァンを見る。

「ツァン、見せてやるよ……絆の力」

デュエルディスクを構え、エクストラデッキにカードを納めた。

「まあいいわ……貴方を倒す!」

「行くぜ?」



「「<sup>デュエル</sup>決闘！」」

秋LP4000

明日香LP4000

Sideツァン

昔から僕は人との関わりを避けて来た。それは僕の性格だった。友達が出来てもなぜか無意識に相手を跳ねのけてしまう。そして人が遠ざかって行く

「ツァン、見せてやるよ・・・絆の力」

あいつは本当に分からない。なぜかあいつには強く言ってはねのけようとする事ができなかった。そしてアイツは言った・・・今はそれでもいい、でもいつかは理解すべき・・・同い年の奴に言われて凄く癪だけど、悪い気はしなかった。

「あら、ツァン、どうしたのかしら？」

「別に・・・何でもない」

「坊やが気になるのね？」

近くにいた藤原雪乃はそう言った。べ、別に・・・

「別に、気にしてなんかないんだから・・・」

「そっ」

それつきり、藤原雪乃は何も言わなかった。アイツと天上院明日香のデュエルが始まる。

Side 秋

「先攻は私よ！ドロー！」

ま、また先攻持ってかれた・・・ひどくね？さて、シンクロデッキでないこのデッキ・・・どうしたものか。幸いにも人がいないのが助かったが。手札は前よりか悪くない。

「私はエトワール・サイバーを召喚！」

ATK1200/DEF1600

「さらにカードを3枚伏せ、ターンエンド！」

「俺のターン！・・・これは、いきなり行けそうだな」

前回と違い手札は悪くないということを大事なので二回言おう。これならいきなり攻めに入ってよさそうだな。

「自分のフィールドにモンスターが存在しない時、俺はジャンク・フォワードを特殊召喚！」

ジャンク・フォワード ATK900/DEF1500

「さらに、俺は魂を削る死霊を召喚！」

魂を削る死霊 ATK300/DEF200

「シンクロ召喚でないのになぜそんな攻撃力の低いモンスターを？」

「今から見せてやるさ！レベル3のジャンク・フォワードと、レベル3の魂を削る死霊でオーバーレイ！2体でオーバーレイ・ネットワークを構築！」

3×2

「オ、オーバーレイ・ネットワーク！？チューニングじゃないの？」

「エクシーズ召喚！いでよ、グレンザウルス！」

グレンザウルス ATK2000/DEF1900

「なっ・・・エクシーズ召喚ですって！？何よそれ！」

「バトル！グレンザウルスでエトワール・サイバーに攻撃！」

「甘いわよ！トラップ発動！ドゥーブルバッセ！モンスターは破壊されず、対象となったモンスターの攻撃力、つまり貴方にはエトワール・サイバーの1200の攻撃力がダメージとして入る！」

ダメージはグレンザウルスのダイレクトアタックとなり、明日香のライフは2000となった。そして俺もダメージが適用される。

明日香 LP4000 2000

「なるほど・・・だがこちらのモンスター効果を使うことにならな  
いで済んだが、モンスターを残してしまったか」

「え？」

「このカードはモンスターを破壊した時エクシーズ素材を一つ取り  
除くことで相手に1000のダメージを与えることができる。結果  
的にその能力は発動せず、モンスターもそっちにのこったな・・・」

「つく！なんなの？エクシーズモンスターって」

「エクシーズモンスターはそれぞれレベルが同じモンスターをオ  
ーバレイ・ネットワークで構成して召喚するカードだ。これもシン  
クロと同じく融合デッキから召喚される。そして召喚されたエクシ  
ーズモンスターはレベルではなくランクとして定められる。同じレ  
ベル同士でなければ召喚は不可能だ」

Side十代

すっげー！エクシーズモンスター！シンクロとは違うデッキか！ア  
レ選んで正解だったかもな。それにしても・・・

「すげえカードだなあ・・・」

「そうかしら」

隣の藤原が呟く

「え？」

「十代の坊や、分からない？秋の坊やは1ターンで手札から2体のモンスターを召喚してエクシーズというのを使用した。でもモンスターは攻撃力の低いものばかり。そう簡単にレベルがあつたモンスターが来るわけじゃない。シンクロのようにレベルがバラバラで行えるのはまたわけが違うわ」

「でも防げば出せるだろ？」

俺の言葉に雪乃は頷く。

「そうね・・・例えば破壊されてもリクルートモンスターなら再び召喚できる。破壊耐性のついた魂を削る死霊がいるのを見ると、モンスターがフィールドにいないければいけないのが前提条件。でもそう簡単になんターンもカードが残るわけがない」

確かになあ・・・地割れとか使われたり、ブラックホールなんかで破壊されたら場がから空きだし。それを考えるとあんな風に速攻で出さなきゃいけないのにレベルが合ってなかったら意味ないもんな。

「だけど秋は強い、明日香も強かつたけど負けないぜ！」

「何よ！明日香さんは強いんだからね！さっきのだってまぐれなんだから！」

と、さっきまで隣にいたジュンコとかいうのが言ってくる。へっ！  
どうだろうな！

「まあ見てれば分かるわ・・・明日香も本気で頑張っているんだもの」

俺もデュエルを見る。頑張れよ、秋！

Side秋

ドゥーブルバツセ・・・OCG化されてないカードか。これでエクスーツ素材を取り除く必要はないが、このターンモンスターを破壊できなかったのは後々厄介だな。次のターンサイバー・ブレイダーを召喚される可能性が高い。

「俺はカードを2枚伏せ、ターンエンド」

「私のターン！ドロー！私は『サイバー・チュチュ』を召喚するわ！」

サイバー・チュチュ ATK1000/DEF800

「げっ・・・」

「さらに手札から融合を発動！フィールドのエトワール・サイバーと、手札のブレード・スケーターを融合！来なさい！『サイバー・ブレイダー！』」

サイバー・ブレイダー ATK2100/DEF800

「バトルよ！サイバー・チュチュは相手フィールド上に存在する全てのモンスターの攻撃力がこのカードの攻撃力よりも高い場合、こ

のカードは相手プレイヤーに直接攻撃することができる！サイバー・  
チユチユでダイレクトアタック！」

「ぐっ！」

秋LP2800 1800

「だがこの瞬間、俺はダメージ・コンデンサーを発動！ 自分が戦  
闘ダメージを受けた時、手札を1枚捨てて発動することができる！そ  
の時に受けたダメージの数値以下の攻撃力を持つモンスター1体を  
デッキから攻撃表示で特殊召喚する！来い！召喚師セームベルの特  
殊召喚！」

召喚師セームベル ATK600/DEF400

「ならサイバー・ブレイダーで召喚師セームベルを攻撃するわ！行  
きなさいサイバー・ブレイダー！この時攻撃力は貴方のフィールド  
に2体いるため倍になる！」

サイバー・ブレイダー ATK2100/DEF800 ATK4  
200/DEF800

「させるか！リバーズカードオープン！永続罠『グラヴィティ・バ  
インド - 重力の網 - 』！このカードの効果により、レベル4以上の  
モンスターは攻撃できない！」

「つく！カードを一枚伏せてターンエンドよ」

「俺のターン！ドロー！」

手札は3枚だが・・・

「俺は手札から強欲な壺を発動する。カードを2枚ドロー！」

4枚になる。これはこれで嬉しいドローだ・・・それにしても、俺はシンクロデッキに嫌われているのだろうか？今回はかなり手札が  
いいぞ？

「そしてメインフェイズ、召喚師セームベルの効果を発動！自分の  
メインフェイズ時、このカードと同じレベルのモンスターを1体手  
札から特殊召喚できる。このカードの効果はこのカードがフィール  
ド上に表側表示で存在する限り1度しか使用できない！来い『召喚  
師セームベル』！」

召喚師セームベル ATK600/DEF400

2体目のセームベルが登場し、互いに頷き合っている。結構可愛ら  
しい。

「俺はさらにゴブリンドバークを召喚する！」

ゴブリンドバーク ATK1400/DEF0

「このカードが召喚に成功した時、手札からレベル4以下のモンス  
ター1体を特殊召喚することができる。この効果を使用した場合、  
このカードは守備表示になる！俺は効果を使用し手札から『異次元  
の女戦士』を特殊召喚！」

異次元の女戦士 ATK1500/DEF1200



「最初に2体の召喚師セームベルでオーバレイ・ネットワークを構築！行くぞ！エクシース召喚！こい、『ガチガチガンテツ』！」

ATK500 / DEF1800

ガタイのいい鼠色の肌をした男が出てくる。そして守備表示で召喚された。

「そのカードの効果は？」

「このカードはフィールド上に表側表示で存在するこのカードが破壊される場合、代わりにこのカードのエクシース素材を1つ取り除く事ができる。このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分フィールド上に表側表示で存在するモンスターの攻撃力・守備力はこのカードのエクシース素材の数×200ポイントアップする！」

ガチガチガンテツ ATK500 / DEF1800    ATK900 /  
2200

グレンザウルス    ATK2000 / DEF1900    ATK240  
0 / 2300

ゴブリンドバーグ ATK1400 / DEF0    ATK1800 / 4  
00

異次元の女戦士 ATK1500 / DEF1200    ATK1900  
/ DEF1600

「だがこれで終わりじゃない。俺はさらにレベル4のゴブリンドバ

ーグと、レベル4の異次元の女戦士でオーバーレイ・ネットワークを構築！行くぞ、エクシーズ召喚！『No.39 希望皇ホープ』！」

No.39 希望皇ホープ ATK2500/DEF2000

39と肩に書かれたモンスターが召喚される。一応言っておくが、OCGカードだ。ナンバーズでなくては破壊できないわけではない。あの効果は多分、この世界だと反則になるだろうな。でもこれってアストラルの記憶のはずだよな？俺の手にあるということは、このカードは本当にただのカードであり、人の欲望を増幅させたりするものではないということか

「そしてホープの攻撃力も上がるところだが、残念ながら俺のフィールドのモンスターは3体。サイバー・ブレイダーの攻撃力は元に戻るものの、相手のコントロールするモンスターが3体のみの場合、このカードは相手の魔法・罠・効果モンスターの効果を無効にする・・・だったか？」

「そうね、その通りよ」

「ま、普通に攻撃すればいいってことだな」

「つく！サイバー・ブレイダーの効果により貴方のグラヴィティ・バインドは無効になってる・・・攻撃が可能に・・・」

確かに、レベル4以上のモンスターは攻撃が出来ない。そう『レベル4以上』の話だ。

「残念だったな天上院、先ほど説明したがこのカード達はランクでありレベルという概念がないんだ」

「な、なんですって!?!」

「行くぜ、希望皇ホープでサイバー・ブレイダーに攻撃だ!ホープ  
剣スラッシュ!」

「きゃあああああああ!」

明日香LP2000 1600

「そしてサイバー・チュチュにグレンザウルスで攻撃!この時グレンザウルスの攻撃力は再び上昇!」

グレンザウルス ATK2000/DEF1900 ATK2400/DEF2300

明日香LP1600 200

「さらにグレンザウルスのエクシース素材を取り除き、相手に1000ポイントのダメージを与える!」

「あ、あああああああ!」

グレンザウルスがさらに炎を吐き、明日香に直撃した。

明日香LP2000 0

「いよっしやあああ!秋の勝ちだあ!」

十代が喜ぶ

「やったすう！これで僕も無罪放免っす！」

おい翔、女子寮に入り込んだ罪は消えんぞ。まあいいか……

「完敗だわ、強いよね」

「天上院もなかなかだ。初めてまともなオベリスクブルーと戦った気がするよ」

まあ、実際まだ万丈目としかやってないけど。

「明日香で良いわ。秋」

「そうか？ならそう呼ぼう」

「あら、明日香……抜け駆けは感心しないわね。ぼっや、私も雪乃でいいわよ？」

妙に顔が近い雪乃。

「やれやれ……って、あれ？」

ツアンがいつの間にか寮の中へ歩いていった。今はやっぱり難しいかな。アイツとも良い友達になれるといいんだが。

「さて帰るか……翔、いつまでグルグル巻きになってんだ」

「好きでなってるんじゃないっす」

「よし十代、このまま転がして帰るか」

「おもしろそうだな！よっしゃ行くぜ翔！」

と、俺達は芋虫状態の翔を回し始める。

「ちよっ、アニキっ！？秋君！？ひどいっす！」

と、翔の悲鳴が響きわたったのは言うまでもない。

## 絆（後書き）

エクシーズモンスターはほとんどがOCGカードです。アニメ効果のカードはあるかって？もちろん、シャークさんのカードですね

ツアンはタッグフォースと違い、まだツンデレじゃないです

もうちょっとしたらツンデレになります。ファンの方も少しお待ちください。

ツンデレの人は勘違いする人がいる・・・そんな感じですね

ツンデレに萌える人と萌えない人って結構ハッキリ別れる気がします  
自分は萌える方です

それにしても、ツンデレってウィキペディアにも載ってるんだ・・・

## 素直な気持ち（前書き）

言い忘れてましたが、武藤秋の読み方は「むとう しゅう」です  
「あき」でも良いかなと思っただのですが、後のことを考えると「あき」はまずいかなとおもったので・・・

秋「今日の最強カードは・・・レッド・デーモンズ・ドラゴン。ジャックの愛用するカードだな」

レッド・デーモンズ・ドラゴン

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードが相手フィールド上に存在する守備表示モンスターを攻撃した場合、ダメージ計算後相手フィールド上に存在する守備表示モンスターを全て破壊する。

このカードが自分のエンドフェイズ時に表側表示で存在する場合、このターン攻撃宣言をしていない自分フィールド上のこのカード以外のモンスターを全て破壊する。

秋「ちなみに、攻撃名は『アブソリュート・パワー・フォース』と『灼熱のクリムゾン・ヘルフレア』効果名は『デモン・メテオ』だな。他のモンスターを破壊してしまう効果も存在するが、守備モンスターを全部破壊できる。皆既日食と合わせて使うと疑似的なサンダー・ボルトにもなる強力な効果だ」

スターダストを当てたいと願って10パック買ったのに当たったのがこのカードだったのを覚えています。残念にもほどがある。当てて喜んでたらジャンプについてると友人に言われかなり凹みましたね

## 素直な気持ち

あれから数日。あれから何故か明日香や雪乃が俺と十代、翔、ハヤトの所に来るようになった。もともと俺が一人でいたところに十代や翔が来ている。まあ別にいいんだが・・・それにしてもハヤトは寝ていたのかこの前の騒動にはいなかったな。現在俺はドローパーンを買う。さて・・・どうなんだろうか

「・・・いただきます」

自分のドローパーンのなさを呪った。入っていたのはキムチだった。

「！？み、水！げほっ！ごほっ！」

「ぼ、坊や！？大丈夫？ほら、お水よ」

雪乃に渡された水を一気に飲み干す。

「ごほっ！がはっ！誰だ！こんなふざけたパンを作った奴！」

「あらあら、坊やは辛いのが苦手なのね？じゃあ私のクリームパンと交換して上げるわ」

パンを交換して食べる俺。甘いパンのほうがいいな、うん

「あー辛かった」

「秋は辛いのが駄目なのか」



「三沢、いたの？」

気が付かなかった

「いたよ！最初っから！」

なんて冗談を言っていると、明日香が顔を紅くしていた。

「明日香？どうしたの？」

「え？なんでもないわ（秋は気づいてないの！？さっきの水とパンは雪乃の食べかけ飲みかけよ！？しかも雪乃、その顔確信犯でしょ！）」

よくわからんが楽しい昼食だ。って……ん？

「あれ、ツアンじゃないか」

一人弁当箱の様なものを持って、屋上へと向かうツアンの姿だった。

「ああ、あの子ね。あの子確かいつも一人よ」

「そうなのか？」

「ええ、前に誘ったんだけど「いい」の一言で行っちゃって」

「中等部でも誤解が多くて嫌われることもあったみたいね……」

なるほど……ん？ツアンの後ろを付いていく妙に気持ち悪

い男子生徒がいた。オベリスクブルーのようだが……どうかしたのだろうか？

「悪い、ちょっと席外すわ」

そう言っただけ俺はその後を追った。

S i d e ツァン

「はあ……」

屋上で僕は一人、食事を食べる。さっき武藤秋の姿が見えた。友達と仲良く食べる姿はとてつうにやましい。そう思う

『デュエルだって、モンスター一体じゃ何もできないことがある。支えがあつて初めて真価を発揮する。今は他人を理解できなくてもいいさ。でもいつか人と分かりあえるなら、その嬉しさはあると思つよ』

「別に、そんなこと分かつてるんだから……」

でも、怖い……また自分が相手を傷つけそうで、相手が嫌な顔をするのを僕は見たくない。

「僕は……」「よお〜！ツァン！」……何よ、あんた」

そこにはオベリスクブルーで中等部から僕にしつこく迫る男子生徒の姿だった。

「なんだよこんなところで一人なのか？寂しくないのか？」

「べ、別に寂しくないわよ！あんたこそ何の用？しつこいわよ」

「ここ最近、この男は僕の所に来ては言いよってくる。しつこい・・・

「食堂で一緒に飯を食べようぜ。な？」

「離してよ！アンタのことなんて知らないわよ！離せっ！」

僕は相手に向かってビンタする。すると、同じように殴られる。い、痛い・・・

「このアマア・・・付け上がりやがって！俺が優しくしてるうちに従えばいいのによ！」

言いながら男は僕を押し倒す。近い！そして臭い！

「触らないで！」

「俺のもんになれよ、ツァン」

「嫌よ！離して！」

必死に抵抗するも、男の力に女は叶わない。嫌だ・・・誰か、助けてよっ！

「おい！そこで何してんだ！」

声がした。知ってる人の声。つい最近知りあつて聞いた声だった。

「しゅ、秋・・・！」

思わず名前を呼んでしまう。

「おい、お前何してんだ」

「な、なんだよお前！邪魔するな」

男が立ち上がり、私はその隙を付いてその場を脱出。武藤秋の後ろに隠れた。

「ツアン、大丈夫か？」

「なんで、ここに・・・」

「いや、なんかあいつが挙動不審にお前を追っかけていて気になってさ。で、案の定か・・・」

言いながら秋が相手を見る。

「てめえ・・・」

「お前、恥ずかしくないのか？無理やり女の子を押し倒しなんかして」

「うるせえ！てめえには関係ないだろ！」

そう、彼に僕のことは関係ない。なのになんで・・・なんで、助けしてくれるの？

「なんで、僕を・・・」

思わずそんな言葉が漏れる。だが秋は男子生徒を見たまま呟く。

「誰かを助けるのに、理由があるか？」

「っ!」

「っく!こうなったらデュエルだ!俺が勝ったらツァンをこっちに渡せ!」

「・・・ツァン、デュエルディスクを貸してくれ」

「う、うん・・・」

近くに置いていた自分の鞆からデュエルディスクを取り出して渡す。はっ!なんで僕ってば普通に渡してんのよ・・・

「<sup>デュエル</sup>決闘!」

二人のデュエルが始まった。

S i d e 秋

よくわからんがあのおベリスクブルーはひどい奴だな。この前別の生徒にも似たようなことをしていたぞ。拳句の果てに女に手を上げるとか最低な奴だな

「<sup>デュエル</sup>決闘！」

秋LP4000

ブルー生徒LP4000

「俺の先攻！ドロー！」

相変わらずシンクロ使うと俺のデッキは答えてくれないなまったく！キングよ！俺に力を！

「俺はダーク・リゾネーターを守備表示で召喚！カードを二枚伏せ、ターンエンドだ」

ダーク・リゾネーター ATK1300/DEF300

「俺のターン！俺はゴブリン突撃部隊を召喚する！」

ゴブリン突撃部隊 ATK2300/DEF0

「攻撃だ！」

ゴブリン突撃部隊とはまた懐かしいカードだな。だが・・・

「ダーク・リゾネーターは1ターンに一度破壊されない！」

ダーク・リゾネーターがゴブリン突撃部隊の攻撃を防ぎ、ゴブリン突撃部隊が守備表示となった。

「っち！俺はカードを2枚伏せてターンエンドだ」

「俺のターン！ドロー！」

ここは臆せず攻める！手札が悪くても何とかするしかない

「俺は手札のボルト・ヘッジホッグを捨ててパワー・ジャイアントを特殊召喚！」

パワー・ジャイアント ATK2200/DEF0

「パワー・ジャイアントはレベル4以下のモンスターを墓地に送ることで特殊召喚できるカード。ただし墓地に送ったモンスターのレベル分、このモンスターのレベルが減る」

6 4

「そして俺は手札から『バトルフェーダー』を召喚！」

本来は手札にいてこそ真価を発揮するカードだが、こいつにダイレクトアタックをさせる気はないからな。

「レベル1の『バトルフェーダー』とレベル4となった『パワー・ジャイアント』に、レベル3の『ダーク・リゾネーター』をチューニング！」

1 + 4 + 3 = 8

「チューニング！？お前まさか、入学試験の・・・！」

どうやら俺のことを知っているらしい。というか、俺はどういう解釈されているんだらうか？ツァンにはエクシーズは見せてもこれは

見せてなかったからな。驚いている。

「王者の鼓動、今ここに列を成す！天地鳴動の力を見るがいい！シンク口召喚！我が魂！」  
「レッド・デーモンズ・ドラゴン！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン ATK3000/DEF2000

「こ、攻撃力3000だとお！？」

「バトル！」  
「レッド・デーモンズ・ドラゴン」で「ゴブリン突撃部隊」に攻撃だ！  
「アブソリュート・パワーフォー스！」

「つく！リバースカードオープン！」  
「和睦の使者！」  
「このターン戦闘ダメージは0となり、モンスターは破壊されない！」

「それは悪手だ！  
「レッド・デーモンズ・ドラゴンの効果発動！  
「守備モンスターを攻撃した時、ダメージ計算後に相手フィールドに存在する全ての守備表示のモンスターを破壊する！」  
「デモン・メテオ！」

レッド・デーモンズ・ドラゴンがゴブリン突撃部隊を破壊する。

「ターンエンド！」

「つくそ！くそお！  
「ドロー！  
「俺は手札から光の護封剣を発動！  
「3ターン相手は攻撃が出来ない！」

「つち！  
「3ターン封じ込められたか・・・  
「サイクロンが大嵐を引けば話はべつだが・・・  
「このデッキで答えてくれるとは思えないな。さらに言えばレッド・デーモンズ・ドラゴンは攻撃できなければ攻撃



しなかった自分以外のモンスターをすべて破壊してしまう。それにしてもたかが3000の攻撃力で驚きすぎやしないか？

「俺は不屈闘士レイレイを召喚！さらに二重召喚によってもう一体不屈闘士レイレイを召喚する！さらにカードを2枚伏せてターンエンドだ！」

後3ターン・・・レモン（レッド・デーモンズ・ドラゴンの略称）が出ている以上他のモンスターを出すのは自滅行為・・・どうするか

「俺のターン！・・・！俺は強欲な壺を発動し、2枚ドロー！」

ここからどうするか・・・伏せているカードは1枚。フィールドはレモンで相手はレイレイ2体と光の護封剣・・・そしてカードが2枚・・・見たところパワーデッキのようだ。上級モンスターを召喚されるのも困る。

「俺は手札から永続魔法『強者の苦痛』を発動する！強者の苦痛は相手フィールド上に表側表示で存在する全てのモンスターの攻撃力はレベル×100ポイントダウンする！」

「なんだと！？（これじゃあ『突進』で同士撃ち出来ないじゃないか！）」

不屈の闘士レイレイ？ ATK2300 / DEF0    ATK1900  
/ DEF0

不屈の闘士レイレイ？ ATK2300 / DEF0    ATK1900  
/ DEF0

「さらに、俺は手札断殺を発動！互いのプレイヤーはカードを二枚まで捨て、二枚ドローする！」

このターン、俺に出来ることはこれくらいだ。墓地にはボルト・ヘッジホッグとグローアップバルブを送った。このシンクロデッキは使えるカードがごちゃ混ぜのため、俺が使えると思ったカードがふんだんに使われている。

「俺はカードを一枚伏せ、ターンエンド」

「俺のターン！俺は1枚のカードを伏せ、不屈闘士レイレイに伝説の剣を装備し、手札から『天よりの宝札』を発動する！」

不屈闘士レイレイ ATK1900/DEF0    ATK2400/DEF0

「え!?!」

ツアンが驚く、そうだった・・・天よりの宝札はこの世界では最強のドローカードだ。しかも非常に高いレアカードとしても有名だ。そんなカードをブルー生徒が持っているとは思えない。

「僕の父さんの会社の手にかかればこんなカードすぐに手に入る！」

秋 手札2枚 手札6枚

ブルー生徒 手札2枚 手札6枚

・・・シンクロデッキを相手にドローさせるのは悪手だよ？手札がないのを焦ってメタモルポッドを反転召喚するのも悪手だ。まあ、相手はそんなことを知らないだろうけども

「俺は不屈闘志レイレイを生贄に・・・『デーモンの召喚』を召喚する！」

「あ、悪魔族最高のレアカード・・・」

ツアン、驚きすぎだ。まあ、俺の世界では100円くらいで買えるがこの世界では究極的に高いレアカードだ・・・今度売ろうかな。レッド・アイズとかも似たようなもんか。500円が数十万円・・・美味しすぎる。

「だが、強者の苦痛の効果は適用される」

デーモンの召喚 ATK2500 / DEF1200 ATK1900 / DEF1200

「だが俺はさらに『デーモンの斧』を『デーモンの召喚』に装備する！」

デーモンの召喚 ATK2000 / DEF1200 ATK2900 / DEF1200

「攻撃力2900!？」

「バトルだ!レッド・デーモンズ・ドラゴンに攻撃!この瞬間速攻魔法『突進』を発動！」

デーモンの召喚 ATK2900 / DEF1200 ATK3600 / DEF1200

「つく！畏発動！『くず鉄のかかし』！相手の攻撃を一度だけ無効にする！そしてこの畏カードは再びセットされる！」

くず鉄のかかしが攻撃を防ぐと、再び場にセットされる。

「つく・・・カードを一枚伏せてターンエンドだ」

デーモンの召喚 ATK 3600 / DEF 1200    ATK 2900  
/ DEF 1200

「俺のターン、ドロー！」

手札は6枚。手札が多くても攻撃力2900の『デーモンの召喚』を超えるカードはレモンのみ。決着を付けるには手札を増やすか・

「俺は『カップ・オブ・エース』を発動！コイントスをして表なら俺が2枚、裏ならお前がカードを2枚引く」

コイントスの結果は表。手札はこれで7枚・・・サイクロンはないが、これなら十分だ。

「俺は手札の『レベル・ステイラー』を墓地へ送り、クイック・シンクロンを特殊召喚！」

ATK 700 / DEF 1400

「さらに墓地のボルト・ヘッジホッグの効果を発動！自分のフィールドにチューナーが存在する時、このカードを特殊召喚する！」

ボルト・ヘツジホッグ ATK800 / DEF800

「そして手札からジャンク・シンクロンを召喚！」

ジャンク・シンクロン ATK1300 / DEF500

「ジャンク・シンクロンの効果発動！墓地からバトルフェーダーを特殊召喚！レベル2のボルト・ヘツジホッグと、レベル1のバトルフェーダーにレベル5のクイック・シンクロンをチューニング！」

1 + 2 + 5 = 8

「集いし闘志が、怒号の魔人を呼び覚ます！光指す道となれ！シンクろ召喚！粉碎せよ『ジャンク・デストロイヤー』！」

ジャンク・デストロイヤー ATK2600 / DEF2500

「ジャンク・デストロイヤーの効果発動！このカードがシンクろ召喚に成功した時、このカードのシンクろ素材としたチューナー以外のモンスターの数までフィールド上に存在するカードを選択して破壊することができる！俺がシンクろ素材としたのは2体！よって俺は光の護封剣とデーモンの召喚を破壊する！『タイダル・エナジー』」

光の護封剣が破壊され、デーモンの召喚とそれに装備されたデーモンの斧が吹き飛ぶ。フィールドには不屈の闘士レイレイと伝説の剣そして伏せが1枚

「俺はさらにジャンク・デストロイヤーのレベルを一つ下げ、レベル・ステイラーを特殊召喚！」

8 7

レベル・ステイラー ATK600/DEF0

「レベル1のレベル・ステイラーにレベル3のジャンク・シンク  
ロンをチューニング！」

1 + 3 = 4

「シンクロ召喚！いでよ、アームズ・エイド！」

アームズ・エイド ATK1800/DEF1200

「シンクロモンスターが・・・3体・・・」

場にはレッド・デーモンズ・ドラゴン、アームズ・エイド、ジャンク・デストロイヤーがいる。ツアンがぽつりとつぶやくが、ブルー生徒は青ざめた表情でその光景を見ている。

「さらに、アームズ・エイドの効果発動！ジャンク・デストロイヤーにアームズ・エイドを装備させることで、ジャンク・デストロイヤーの攻撃力は1000ポイントアップする！」

ジャンク・デストロイヤー ATK2600/DEF2500 A

TK3600/DEF2500

「な、なあ・・・」

「バトルだ！ジャンク・デストロイヤーで不屈闘士レイレイを攻撃

！『パワーギア・ナツクル』！」

「うわああああああああっ！」

ブルー生徒LP4000 2800

「そしてアームズ・エイドを装備したモンスターが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える！」

「そ、そんな・・・！」

ブルー生徒LP2800 400

「さあ、覚悟は良いか・・・レッド・デーモンズ・ドラゴンで直接攻撃！『アブソリュート・パワーフォース』！」

「うわああああああああっああああああっああああっああああっ  
！」

ブルー生徒LP4000 (2600オーバーキル)

「ひ、ひいいいいい！」

ブルー生徒は悲鳴を上げて逃げて行った。

「ふう・・・相変わらず運が悪いな。手札でドロー強化しないと勝てないとか・・・」

シンクロデッキ・・・バランスが悪いのかなあ？・・・うーむ

「っと、それより・・・ツアン、はいこれ」

「あ・・・」

俺は決闘盤をツアンに返す。

「ツアン、大丈夫か？」

頬が腫れている。水で冷やした方がいいかな？

「随分腫れているな、医務室に行こうか」

「いいわよ・・・放っておけば、治る」

「女は顔が命だろ？そう言うこと言うなって」

S i d e ツア ン

デュエルは武藤秋が勝った。そしてブルー生徒は逃げて行く。そして近づいてくるアイツは、どこか優しかった。駄目・・・来ないで

「ツアン、大丈夫か？」

やめて、私に優しい言葉をかけないで

「随分腫れているな、医務室に行こうか」

「いいよ・・・放っておけば、治る」



「女は顔が命だろ？そう言つこと言つなって」

お願いだから・・・

「もう、やめてよっ！」

「え？」

「どうして僕に構うの！？どうして僕を助けるの！？僕みたいなやつ嫌でしょう！？僕みたいなやつを見ていてウザいと思うでしょう！？？」

僕は何を言っているのかしら・・・僕は、秋に自身の本音をぶちまけてしまった。性格からなんでも突っぱねてしまふ僕が・・・今、本音をぶつけている。

「・・・ツアン」

優しく、アイツは僕の手を取った。

「大丈夫だツアン、俺は君を嫌いにならないし・・・俺は君の友達でいたい」

「でも、僕はっ・・・」

「大丈夫さ、きつとみんなも理解してくれる」

扉の向こうには遊城十代や天上院明日香たちの姿があった。どうやら遅かった武藤秋の様子を見に来たんだろう。

「すごかったなあ！さっきの決闘！」

「ああ、そうだな・・・シンクロモンスターの可能性、まだまだ研究しないと」

みんなが僕たちの所へ駆け寄ってきた。

「ツアン平気？ほら」

天上院明日香が僕の頬に濡れたタオルを当ててくれた。

「それにしてもさっきの坊や・・・気にくわないわね、後で報告しなくちゃ」

キーンコーン カーンコーン

「やべっ！予鈴だ！」

「急ぐか！」

みんなが走り出す。出遅れた僕に、武藤秋は振り返った。

「さ、行くうぜツアン、仲間が待ってる」

「ふ、ふんっ！別に、仲間になるなんて言っていないわよ！でも・・・あ、貴方達が仲間になって欲しいっていうなら・・・なってあげなくもないんだから・・・」

僕の言葉に、“秋”は苦笑していた。

「ああ、そうだな。じゃあ今日から仲間だ。行「うぜシマ」

「……………」

「うして、みんなの後を追った。

## 素直な気持ち（後書き）

というわけで、ツァン仲間フラグの話でした

個人的にレッド・デーモンズは好きです。確かにスタダの方が多用されるのですが、初めて当てたシンクロのウルトラレアですので、お気に入りカードです

## 精霊（前編）（前書き）

秋の精霊が登場します。

皆さんもよく知るカード？だと思えます

個人的に可愛いと思うので

他の小説だと「エフェクト・ヴェーラー」や霊使い系のカード、他にもブラック・マジシャン・ガールやマジシャンズ・ヴァルキュリアなんかがいい例ですね

なので今回は一風変わった？カードになります

十代「今日の最強カードは・・・っと、お！『天よりの宝札』だ！最強のドローカードだぜ！」

天よりの宝札

互いのプレイヤーはカードを6枚になるようにドローする

秋「このカード、OCGでは酷い効果になってたただのノーマルカードだが、この世界では最強のドローカードだな。他にも俺が使う『命削りの宝札』などもいい例だ」

アニメで主人公がピンチになると発動するこのカード。海馬も命削りの宝札で頑張っていましたね

こんなカードあったら絶対OCGじゃ禁止カードですね

## 精霊（前編）

デュエルスペース

Side秋

今俺はデュエルスペースに立っている。というのも、テスト前の事前的デュエルと言うことらしい。それにしても、ハア・・・予行とはいえ相手が

「行くぜ、秋！」

「……………どうしてこーなった？」

十代だ

さかのぼること数時間前

レッド寮

「それにしてもよお、俺って秋とデュエルしてないよな」

突然食堂で十代がそんなことを言いだした。

「そっいえばそうだな。みんなが寄って、たかってデュエル吹っかけてくるけど」

どうやらシンクロ召喚を見たいということもあるのかもしれないが、万丈目、明日香、ブルー生徒、噂を知った生徒が数名だ。どれも強力な相手ではあったはずだ。

「よし決めた！今日の予行デュエル、俺と勝負だ！」

「……えー」

テンションが下がる俺。それを見て不満を上げる十代

「なんだよ、テンション下げてさ」

「……だってさ、お前が戦いたいのってシンクロデッキだろ？」

「そりゃそつさー！」

そつなるとさあ……

「自分のドロー運のなさに泣きそつだからやだ」

「確かに、アニキのチートドローは凄いつすからねえ」

「そつかなあ？」

と、首を傾げる十代だが、この後の物語でもチートドローによって何度も危機を回避しているという。漫画版に限ってはどえらいことになるからな。

「でもシンクロ以外なら良い手札が来てさ」

「秋君、いつも逆転しているのにデッキが悪いことはないつす」

「あのデッキはもともとあんなに劣勢になったりしないんだよ」

大体ならすぐにシンクロモンスターが出てくることがある。

「デッキが答えてくれるほどの器じゃないのかなぁ・・・」

はぁ、とため息を漏らす俺

「でも・・・うーん」

と、十代が一人唸っている。

「どうした」

「いや、何でもない！だけど後でデュエルだ！絶対だぜ」

そう言って飯をかき込むと自分の部屋へと戻っていった。

Side十代

「うーん、シンクロデッキに愛されてない、かぁ」

『クリー』

俺にしか見えない精霊の相棒、ハネクリボーが俺を見る。

「なあハネクリボー、お前は秋があいつに愛されてないと思うか？」

『クリー！』

と、身体を左右に動かす俺の相棒。どうやら否定の意味らしい。



「ま、アイツ次第だよな、アイツには精霊もいるし・・・でも、見えないのかな」

『クリー』

どうやらハネクリボーも秋の精霊が必死に話しかけているのを見ていて不憫に思っていたようだ。そしてあの精霊の一言

『私、マスターに愛されていないんでしょうか・・・手札にあるのに使ってもらえることが少ないし、一生懸命話しかけても無視されるし・・・』

「そんなことはないと思うんだよなあ・・・」

『クリー』

きつと、アイツの出番がないのはアイツと釣りあうデュリストがないからかもしれない。ならやることは一つ！

「俺が釣りあうようなデュエルをしてやるぜ！やるうぜ相棒！」

『クリー！』

こうして俺は寮の部屋に鞆を取りに行った。

S i d e ? ? ? ?

私、武藤秋さんの精霊です。十代さんとはお話をしますし、ハネク

リポーとも会話が続きませんが、お話しています。

『酷いんですよマナさん、マハードさん、マスターに今日も朝から無視されちゃいました』

私は今、伝説のデュエルキングと呼ばれた武藤遊戯さんの精霊『ブラック・マジシャン・ガール』と『ブラック・マジシャン』とお話をしています。私とマナさんは年が近い感じなので、とても仲良しです。ブラック・マジシャンのマハードさんは私にとっては雲の上の方です。

『そうだねー・・・まあ、私のマスターも普段から見えるってわけじゃないし』

『うむ、フィールドに出て会話は出来るのだがな』

じゃあ十代さんが特殊なのかなあ・・・

『何か良い方法はないのでしょうか？』

『うーん、一番いいのはデュエルで使ってもらえることだよね』

『でも私デッキをまだ使ってもらっていませんし・・・シンクロデッキに一応はありますが、使ってもらえませんし・・・私、だめな子なんですよか』

『自分を卑下することはない。秋殿もきつと気が付いてくれるだろ』  
『う』

『そうだよー！ゲンキ出してー！』

マハードさん、マナさん……

『それに……』

『はい?』

『いいじゃない、私やお師匠様だってデッキを使ってすらもらってないんだよ?今のマスターはあの子なんだし、会えなくて辛いのは私も一緒』

『あ……』

そ、そうでした……マスターはシンクロデッキとエクシーズ、他には不動遊星コピーというのを使っています。用意している魔法族デッキはまったく使っていません。それを言えば他のデッキも使っていないですね。マスターそんなにしょっちゅうデュエルしませんし

『さ、マスターが私達を持って出かける見たいだから行こ!』

『は、はい……マナさん』

『では行くとしよう』

マハードさんに促され、私達は外へ出た。マスター……私のこと気づいてくれますよね?

冒頭へ戻る

「では、遊城十代対武藤秋の試合を始める」

「<sup>デュエル</sup>決闘！」

十代LP4000

秋LP4000

「先攻は俺だ！ドロー！」

“ちゃんとした” コイントスにより先攻は十代

「俺は手札からバブルマンを召喚して効果を発動！自分のフィールドに他にカードがない場合、デッキからカードを二枚ドロー！」

E・HEROバブルマン ATK800/DEF1200

「お得意のバブルマンか」

アニメ効果ってずるいよね。なんとというチートカードだ

「さらに手札から融合を発動！手札のクレイマンとフィールドのバブルマンを融合！現れる！E・HEROマッド・ボールマン！」

E・HEROマッド・ボールマン ATK1900/DEF3000

「っく、いきなり3000の壁か・・・」

「へへっ！どうだ！シンクロモンスターでもそう簡単には破れないぜ！」

相変わらず俺の手札は悪いからな・・・出てもせいぜいジャンク・ウォリアーだ・・・俺の課題、それはドローク数。質よりも量だ。どっかの偉い人も『戦いは数だよアニキ！』といていた。決して翔がいったわけではないが・・・

「俺はカードを二枚伏せてターンエンドだ」

あの二枚はブラフか？それとも補助カードか？ヒーローシグナルやヒーローバリアなんて可能性もある。

「俺のターン！ドローク！」

つく・・・

「俺は手札からシールド・ウィングを守備表示で召喚。さらにカードを2枚セットし、ターンエンド」

今回はシンクロデッキではあるのだが・・・最近こればかりだな。

「へへっ！お得意の守り戦法だな。俺のターンドローク！俺は手札から融合回収を発動！クレイマンと融合を手札に戻すぜ！」

「うち、相変わらずのチートドロークだ」

「そして融合！手札のスパークマンとクレイマンを融合！現れる、E・HEROサンダー・ジャイアント！」

E・HEROサンダー・ジャイアント ATK2400/DEF1500

つく、攻守共に上級レベルか

「さらにサンダー・ジャイアントの効果！自分の手札を1枚捨てる事で、フィールド上に表側表示で存在する元々の攻撃力がこのカードの攻撃力よりも低いモンスター1体を選択して破壊する。手札を捨ててシールド・ウイングを破壊！いけ！『ヴェイパー・スパーク』！」

シールド・ウイングが破壊される。

「そしてダイレクトアタックだ！行け、サンダー・ジャイアント！『ボルテック・サンダー』！」

「畏発動！『くず鉄のかかし』！このカードの効果で1ターンに一度、相手モンスターの攻撃を無効にする！さらにこのカードは発動後再びセットされる！」

くず鉄のかかしが攻撃を防ぎ、再びセットされた

「やっぱり伏せていたな！俺はターンエンドだ」

「俺のターン！ドロー！俺は手札のボルト・ヘッジホッグを捨て、クイック・シンクロンを特殊召喚！さらにボルト・ヘッジホッグ自身の効果でボルト・ヘッジホッグを蘇生する！」

クイック・シンクロン ATK700/DEF1400

ボルト・ヘッジホッグ ATK800 / DEF800

蘇るボルト・ヘッジホッグ・・・まるでどこかの過労死ヒーローみたいだ。本当にすまん

「レベル2のボルト・ヘッジホッグにレベル5のクイック・シンクロンをチューニング！」

2 + 5 = 7

「集いし怒りが、忘我の戦士に鬼神を宿す。光さす道となれ！シンクク召喚！吠えろ、ジャンク・バーサーカー！」

ジャンク・バーサーカー ATK2700 / DEF1800

紅い身体に斧を持った巨人が登場する。ジャンク・デストロイヤーとはまた違う感じだ。そして新たなシンクロモンスターに目を輝かせる十代

「すっげ〜！カッコいいじゃん！」

「そんなことを言っている暇あるのか十代・・・俺はさらに手札からシンクロン・エクスプローラーを召喚！」

シンクロン・エクスプローラー ATK0 / DEF700

「攻撃力0!？」

「シンクロン・エクスプローラーの効果発動！自分の墓地からシンクロンと名のついたモンスターを一体、墓地から復活させる！こい

『クイック・シンクロン』！」

クイック・シンクロン ATK700 / DEF1400

「俺の融合回収みたいだな」

「ああ、その通りだ。このままシンクロ素材にすることも可能だからな。行くぞ、レベル2の『シンクロン・エクスペローラー』にレベル5の『クイック・シンクロン』をチューニング！」

2 + 5 = 7

「集いし思いが、ここに新たな力となる！光指す道となれ！シンクロ召喚！燃え上がれ！」『ニトロ・ウォリアー』！」

ニトロ・ウォリアー ATK2800 / DEF1800

「攻撃力2800！」

「行くぞ、バトル！」『ニトロ・ウォリアー』で『E・HEROサンダー・ジャイアント』に攻撃！ダイナマイト・ナックル！」

「リバーズカードオープン！」『ヒーローバリア』！自分フィールド上にE・HEROと名のつくモンスターが存在するとき、一度だけ攻撃を無効にできる！」

扇風機のようなバリアが飛んでいき、ニトロ・ウォリアーの攻撃を防いだ。

「つく！ならば『ジャンク・バーサーカー』で攻撃だ！」



巨大な斧でサンダー・ジャイアントを真っ二つにした。

十代LP4000 3700

「だが、サンダー・ジャイアントが破壊されたこの瞬間、俺は『ヒーローシグナル』を発動！自分のデッキから俺は『E・HEROバースト・レディ』を守備表示で特殊召喚！」

E・HEROバースト・レディ ATK1200/DEF800

「やるな、十代。このバトルでもしサンダー・ジャイアントが破壊された場合、大ダメージを与えられたんだが」

S i d e 雪乃

うふふ、さすがは坊や・・・でも十代の坊ややはり強いわね。明日香が注目しているだけはあるのかしら？巡るめく今の攻防、普通のデュエルではまず見られないでしょうね。やっぱり坊やたちとは一度戦ってみたいわ

「やるな、十代。このバトルでもしサンダー・ジャイアントが破壊された場合、大ダメージを与えられたんだが」

あら、どういうことかしら？あのニトロ・ウォリアーにはそんな効果があるの？

「もしこのターン、サンダー・ジャイアントの攻撃が通った場合、十代のフィールド上の表側守備表示のモンスター・・・つまり、マ

ツド・ボールマンを攻撃表示に変更して二トロ・ウォリアーはもう一度攻撃が可能だったわけだ」

なるほど、そうなればマッド・ボールマンの攻撃力は1900・・・さらに900のダメージを十代の坊やは負っていたわけね・・・もしチェーンの順序でサンダー・ジャイアントが破壊され、ヒーローシグナルでバースト・レディを守備表示で出していたらバースト・レディが表示形式変更対象になってさらに大ダメージを受けていた。恐ろしいわ

「俺はカードを1枚伏せ、天よりの宝札を発動！互いのプレイヤーは手札が6枚になるようにドロースる！」

秋 手札2枚 手札6枚

十代手札2枚 手札6枚

これで坊やの手札は6枚・・・伏せの一枚は「くず鉄のかかし」・・・マッド・ボールマンとバースト・レディではあの2体を突破するのは不可能・・・十代の坊やはどう乗り越えるかしら？それにしても、十代の坊やの手札を増やすのはまずいんじゃない？それとも相変わらず手札がそんなに悪いのかしら？

「雪乃」

「あら明日香、どうしたの？」

「いえ、どちらが勝つかしら？このデュエル」

うふふ、明日香ったら前にあの子達と戦ってるものね・・・

「どうかしらね・・・低い攻撃力のモンスターを融合し、神がかつたドローを見せる十代の坊や・・・そしてそれに対し、低い攻撃力をシンクロで攻撃力を爆発的に高める秋の坊や・・・どちらもどうなるか楽しみね」

言いながら再び視線を二人に戻す。さあ、どちらが勝つのか見ものね・・・

Side秋

「俺のターン！ドロー！俺は強欲な壺を発動して2枚ドロー！」

相変わらずのチートドロめ・・・カードがなくなってもすぐに補充される・・・やはり手札を増やしたのはまずかったか・・・だが俺の手札も悪い以上、手札を増やし、このターンを防ぐしかない。

「そして手札から『融合』を発動！手札のフェザーマンとフィールドのバースト・レディを融合！現れる！マイフェイバリットモンスター！『E・HEROフレイム・ウィングマン』！」

E・HEROフレイム・ウィングマン ATK2100/DEF1200

「だが、攻撃力は二トロ・ウォリアーにもジャンク・バーサーカーにも及ばない」

「だったらHEROの舞台上で戦えばいいのさ！俺はフィールド魔法『摩天楼・スカイスクレイパー』を発動するぜ！」

フィールドが摩天楼へと塗り替えられていく

「そして俺は手札から死者転生を発動！カードを一枚捨てて墓地のスパークマンを手札に加える！そして墓地の『E・HEROネクロダークマン』の効果を発動！墓地にこのカードがいるとき、一度だけ生贄なしの召喚が行える！俺は手札から『E・HEROエッジマン』を召喚！」

E・HEROエッジマン ATK2600/DEF1800

い、一気に上級モンスターが2体・・・！

「行くぞ、エッジマンでジャンク・バーサーカーに攻撃だ！『パワー・エッジ・アタック』！」

E・HEROエッジマン ATK2600/DEF1800 AT  
K3600/DEF1800

「ぐうっ！」

秋LP4000 3100

「そしてフレイム・ウィングマンでニトロ・ウォリアーに攻撃！フレイム・シュート！」

E・HEROフレイム・ウィングマンATK2100/DEF1200  
ATK3100/DEF1200

「畏発動！『くず鉄のかかし』！攻撃を一度だけ無効にし、このカードは再びセットされる！」

「つく！俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ」

「俺のターン！ドロー！」

十代の場はエッジマン、フレイム・ウイングマン、マッド・ボールマン・・・それに対し俺のフィールドはニトロ・ウォリアーと伏せが2枚。十代の伏せカードが気になるところであるが・・・ここは臆せず攻める！

「俺はチューナーモンスター『ジャンク・シンクロン』を召喚！」

ジャンク・シンクロン ATK1300/DEF400

「ジャンク・シンクロンの効果を発動！墓地に存在するレベル2以下のモンスターを復活させる！俺は『シンクロン・エクスペローラー』を復活させる！」

シンクロン・エクスペローラー ATK0/DEF700

「そしてさらに魔法カード『ワン・フォー・ワン』を発動！手札から『ボルト・ヘッジホッグ』を墓地に送り、デッキから『チューニング・サポーター』を特殊召喚！」

チューニング・サポーター ATK100/DEF300

「え、えーと・・・チューニング・サポーターが1だろ？ジャンク・シンクロンが3で、シンクロエクスペローラーが2・・・レベル6か！」

と、計算している十代。何故にそんなことを計算してるんだ？

「さらにリバースカードオープン！『エンジェル・リフト』！自分の墓地からレベル2以下のモンスターを攻撃表示で特殊召喚する！このカードの効果で蘇生したモンスターがフィールドから存在しなくなつた時このカードを破壊し、このカードがフィールドを離れた時、蘇生したモンスターを破壊する！蘇れ、ボルト・ヘツジホッグ！」

ボルト・ヘツジホッグ ATK800/DEF800

「レベル1のチューニング・サポーター、レベル2のボルト・ヘツジホッグ、レベル2のシンクロン・エクスペローラーにレベル3のジャンク・シンクロンをチューニング！」

1 + 2 + 2 + 3 = 8

「集いし闘志が、怒号の魔人を呼び覚ます！光指す道となれ！シンクロ召喚！粉碎せよ、ジャンク・デストロイヤー！」

ATK2600/DEF2500

「げっ！そいつかよ！」

「ジャンク・デストロイヤーの効果！このカードがシンクロ召喚に成功した時、このカードのシンクロ素材としたチューナー以外のモンスターの数までフィールド上に存在するカードを選択して破壊することができる！俺がシンクロ素材としたのは3体！よって俺は、エッジマン、マッド・ボールマン、フレイム・ウィングマンを破壊する！『タイダル・エナジー』！」

全てのヒーロー達が破壊される。これで・・・！

「チューニング・サポーターの効果で1枚カードをドロウ！そして十代のフィールドには何も無い！これで終わりだ！ニトロ・ウォリアーでダイレクトアタック！ニトロ・ウォリアーの攻撃力は魔法力1000ポイントアップする！ダイナマイト・ナツクル！」

ニトロ・ウォリアー ATK2800 / DEF1800 ATK3800 / DEF1800

「つく！させるか！墓地のネクロ・ガードナーの効果発動！このカードを除外することでバトルを一度だけ無効にする！」

いつの間にネクロ・ガードナーを！？そうか、サンダー・ジャイアントの効果か！

「だがジャンク・デストロイヤーの攻撃が残っている！デストロイ・ナツクル！」

「うわあああああつっ！」

LP3700 LP900

「ターンエンドだ」

完全に計算が狂った・・・！ニトロ・ウォリアーで十分と思っていたが・・・ネクロ・ガードナーがいたとは。だがこれなら勝てる。いや、十代のチートドロウはこんな逆境さえもはねのける。そして

何より・・・

「すっげえぜ！シンクロ召喚！わくわくする！俺のターンだな！」

こいつがこの逆境さえ楽しんでいるのだから

「まだまだ！俺のターン！ドロー！」

そう言って高らかに十代はカードをドローした



精霊（前編）（後書き）

十代に対して天よりの宝札・・・自殺行為以外の何物でもないですねえ

某小説ではその十代のチートドロウを逆手にとって作ったアンチデツキもありましたが・・・十代のドロウ運は最早伝説級ですね

中編へ続く

## 精霊（中編）（前書き）

中編です

十代と連続決闘ですね・・・そして秋の精霊の登場です

??「今日の最強カードは・・・『ホープ・オブ・フィフス』E・HERO専用のドローカードですね」

ホープ・オブ・フィフス

自分の墓地に存在する「E・HERO」と名のついたカードを5枚選択し、デッキに加えてシャッフルする。

その後、自分のデッキからカードを2枚ドローする。

このカードの発動時に自分フィールド上及び手札に他のカードが存在しない場合はカードを3枚ドローする。

秋「E・HERO版の貪欲な壺だな。フィールドに何もなく、手札が0の時は3枚ドロー出来るカードだ」

作者は貪欲な壺が高くて買えないほど金欠なのでHEROデッキでこのカードは非常に助かっています。

## 精霊（中編）

Side 秋

「俺のターン！ドロー！」

そう高らかに十代はカードをドローした

「俺は手札から『ホープ・オブ・ファイフス』を発動する！」

「ここでホープ・オブ・ファイフスだと!？」

相変わらずのチートだな・・・

「俺はサンダー・ジャイアント、マッド・ボールマン、フレイム・ウィングマン、クレイマン、バブルマンをデッキに戻してカードを2枚ドロー！」

エクストラデッキへ戻るのが3枚・・・デッキは実質2枚しか増えることはない。そしてこのドローで手札は4枚か・・・

「いよっしゃあ！俺は手札からバブルマンを召喚する！」

「なっ・・・」

デッキに戻したカードの中でバブルマンを引いただと!？

E・HEROバブルマン ATK800/DEF1200

「自分のフィールドに他にカードがない時、俺はカードを二枚ドロ  
ーする！」

十代手札3枚 5枚

「そして俺は手札から『ミラクル・フュージョン』を発動！俺は「  
フェザーマン」と「バースト・レディ」を除外！こいつ！『E・H  
EROフレイム・ウイングマン』」

E・HEROフレイム・ウイングマン ATK2100/DEF1  
200

やるな十代・・・相変わらずのチートドローだ。だが、俺の場には  
くず鉄のかかしが伏せられている。攻撃は通らない。そして俺のモ  
ンスターたちの攻撃力は2800と2600・・・フレイム・ウイ  
ングマンとバブルマンがいるが・・・くず鉄のかかしでフレイム・  
ウイングマンの攻撃を防ぐ。バブルマンの攻撃力は上がったも18  
00・・・攻撃は超えられない。が・・・

「俺は手札から『サイクロン』を発動する！『くず鉄のかかし』を  
破壊だ！」

「つく！やっぱり引いたのか！」

「さらにつ！手札から『死者蘇生』を発動！蘇れ、エッジマン！」

E・HEROエッジマン ATK2600/DEF1800

ど、どんだけチートドローなんだよおおお！ふざけてんのか！



「ったーく、お前のドローには負けるよ」

やれやれとため息を吐きながら立ち上がる。すると十代が俺に手を差し出した。

「ほら」

「ああ、サンキュ」

互いに手をとりあう俺達。一部の女子から嬉しそうな悲鳴があがったのはなんでだろうか……？

Side 十代

勝った！かなりギリギリだったなあ……やっぱり秋は強い！そして超わくわくした！またやりてえなあ……

『クリクリ』

「ん？どうしたんだ相棒」

部屋に戻った俺達。翔は補修でハヤトは先生からの頼まれごとなわけ、俺は一人暇をしていた。するとハネクリボーが部屋の隅を刺した。そこには

『うう、どうせ私なんて……どうせ私なんて役に立たない駄目な子なんだ。マスターだってきつと私のせいで負けちゃったんだ』

秋の精霊が膝を抱えて座っていた。あつちやー・・・そういえば忘れてたぜ。またこいつ出て来なかったな。

「お、おいおい・・・そう落ち込むなって」

『だって・・・私またマスターのお役に立てることなく・・・しかも十代さんにマスターは負けちゃうし』

お、おいおい・・・俺がなんだか悪役みてえじゃねえか

「た、確かに俺が勝ったけどさ・・・でも負けたのはお前のせいじゃ・・・」

「いいんですよー・・・どーせ私なんか・・・能力は使えてもシンクロデッキじゃ対して役にもたないしー？なんであのデッキに入っているかわからないしー？しかも世間じゃ顔がきつい顔しているとか言われているしー？どーせ私なんて・・・」

なんかもう自分の世界に閉じこもっちゃった。駄目だこりや・・・デュエルに夢中になってこいつのことすっかり忘れていたぜ・・・どうしたもんかなあ

『クリー、クリクリー！』

と、何やら相棒がどこかへ・・・

「おい相棒！どこへ・・・」

「はぁ・・・負けたぁ・・・」

思えば負けたのは初めてだったなぁ・・・十代超強い・・・この時期の十代はネオスやNシリーズがないと思つて完全に油断していた。いや、油断はしていなかった・・・全力でぶつかりはしたんだが・・・デッキを一度見直す必要もあるかもなぁ。遊星デッキやジャックデッキ、クロウデッキ、アキデッキがあっても、やはり特化ではなく普通にシンクロデッキを使うしなぁ

『クリー！』

・・・ん？

「なんか今、聞こえた気がしたが・・・」

部屋は4人部屋だがここは俺一人の部屋だ。だれもいないはずなんだが・・・ん？クリー？

『クリー！クリクリー！』

「・・・・・・・・オーケー、確認しよう。これは夢じゃない」

頬を引っ張って確認

「つぎ、目の前にいるのは多分・・・十代の精霊、ハネクリボー」

『クリー』

頷く羽の生えた茶色い毛玉



「カードの、精霊・・・だな？」

『クリー！』

強く頷くハネクリボー・・・俺、精霊を見る力なんてあったのか？

「『・・・・・・・・』」

互いに沈黙。にらみ合いが続く・・・そして

『クリー！』

「俺のデッキ？」

ハネクリボーは俺のデッキを指差す。指差したのはシンクロデッキのようだが・・・

「このデッキに何かあるのか？」

デッキをペラペラとめくって行く。すると、一枚のカードをハネクリボーが指差した。

『クリクリー』

このカード・・・？

「このカードがどうかしたのか？」

『クリ！クリクリクリー！クリクリー！』

「ふんふん……」

『クリ！クリクリクリ？』

……

「なるほど、全然言葉がわからん」

『クリっ！？』

超ショックを受けるクリボー。いや、だってクリクリ言われましても……まるで意味がわからんぞ。でもこのカードがどうかしたのかな

『クリー……』

「おい、相棒……どこだー？」

『クリ？クリクリー！』

十代の声が聞こえる。するとハネクリボーが顔だけを外に出している。器用なまねでいるんだな。

「お、いたいた……ってここ秋の部屋じゃん。秋、入るぞー」

「十代か」

「おう、そつだ聞きたいんだけどよ」その前に、そこに浮かんでるハネクリボーはなんだ？」「お前、見えるのか！？」

驚く十代。一応頷く

「ああ、まあな・・・なんで見えるようになったのかはよく分からないけど」

「こいつは伝説のデュエリスト『武藤遊戯』さんにもらったカードなんだ！よくわかんねえけど、精霊のカードなんだぜ！」

と、嬉しそうに話す十代。精霊のカードは確か他にもあったな。万丈目のおジャマ、ネオス、ネオ・スペーションそして学園祭に何故か登場するB M G・・・さらに十代の記憶から消えたユベルのカード・・・

「そうだ！秋、お前も精霊のカード持つてるんだろ」

「は？」

いきなり言われて目を丸くする俺。精霊のカード・・・？

「いや、持ってないぞ」

「そんなことないさ、さっきまで俺の部屋でいじけていたんだからいじけていた？まず俺が精霊のカードを持っていると仮定して・・・何故にいじけている？」

「その、なんだ・・・一番使っているシンクロデッキなんだけどさ、その中にそのカードが入っているみたいなんだ。でも一回も出てきてないからって自分は役立たずなんだっていじけているんだぜ？」

「……で？その精霊ってのはどこにいるんだ？」

「さっきからお前の横にいるぞ」

「は？」

横を見るが誰もいない。

「自覚がないからかなあ……」

『クリクリー』

と、俺のカードを指差すハネクリボー……これ？

「お、それぞれ！そのカードがお前の精霊だぜ！」

「これ？」

指差されたカードを見る俺。えー……このカード？

「……これが？」

『マスター……』

……ん？

「どうした、秋」

「今、声が聞こえた気がしたんだけど……」

気のせいだったのかな？それにしてもこのカードが俺の精霊ねえ・

「いよっし！もう一度デュエルだ秋！きつとデュエルで分かるかもしれないぜ！」

「・・・わかった。十代がそこまで言うなら、そうなんだろう」

こうして、俺と十代の再度のデュエルの始まりである。

レッド寮前

「「<sup>デュエル</sup>決闘！」」

秋LP4000

十代LP4000

「先攻は俺だ、ドロー！」

手札は・・・あれ？いつも悪いのに今日は少しだけいいぞ・・・？

「俺は手札からシールド・ウィングを守備表示で召喚」

ATK0/DEF900

伏せもなんだかさつきとほぼ同じ。でも手札が違つ。

「カードを2枚セットして、ターンエンド」

「いよつし！俺のターン！ドロー！俺は手札からE・HEROクレイマンを守備表示で召喚！カードを2枚伏せて、ターンエンド」

E・HEROクレイマン ATK800/DEF2000

十代にしては守備に廻ってきたな。見たところ融合を引かなかったと見える。

「俺のターン！ドロー！」

……このカードは、十代が精霊だと教えて来たカード。だが、今はここで使う必要がない。

「俺は手札のレベル・ステイラーを捨ててクイック・シンクロンを特殊召喚！」

クイック・シンクロン ATK700/DEF1400

「そして墓地のレベル・ステイラーの効果！クイック・シンクロンのレベルを一つ下げること、レベル・ステイラーを特殊召喚する！」

クイック・シンクロン 5 4

レベル・ステイラー ATK600/DEF0

「そして手札からチューニング・サポーターを召喚」

チューニング・サポーター ATK100/DEF300

「チューニング・サポーターはレベル2としても扱える。レベル2のチューニング・サポーターとレベル1のレベル・ステイラーにレベル4となったクイツク・シンクロンをチューニング！」

2 + 1 + 4 = 7

「集いし叫びが、木霊の矢となり空を裂く！光差す道となれ！シンクロ召喚！いでよ、ジャンク・アーチャー！」

ジャンク・アーチャー ATK2300/DEF2000

「うおっ！また新しいモンスターか！」

「チューニング・サポーターの効果でカードを1枚ドロ！そしてジャンク・アーチャーの効果！1ターンに1度、相手フィールドのモンスターを一体選択して効果を発動！選択したモンスターをこのターンのエンドフェイズまで除外する！俺が選択するのはクレイマシオンだ！『デイメンション・シュート』！」

「げっ！（これじゃあヒーローシグナルが使えねえ！）」

これでフィールドはがら空き。伏せカードがあるとはいえ、どうなるか。だがここは臆せず攻める！

「ジャンク・アーチャーでダイレクトアタック！『ジャンク・アロ

』！」

「畏発動！攻撃の無力化！」

「つく・・・ターンエンド。そしてエンドフェイズ時、クレイマンはフィールドへ戻る」

これで決められると思ってはいないが、クレイマンを残した以上、融合に使うだろうし。

「俺のターン！俺は手札から強欲な壺を発動！2枚ドロー！へへっ！手札から『ヒーロームスク』を発動！デッキのネクロダークマンを墓地へ送り、クレイマンはネクロダークマンとして扱う！そして融合！手札のスパークマンとネクロダークマンとなったクレイマンを融合！こいつ！『E・HEROダーク・ブライトマン』！」

E・HEROダーク・ブライトマン ATK2000/DEF1000

「ダーク・ブライトマンか・・・！」

何故サンダー・ジャイアントを召喚しなかったんだ？いや・・・ネクロダークマンが墓地に行ったということは・・・

「さらに墓地のネクロダークマンの効果発動！このカードが墓地にいる時、1度だけ生贄なしの召喚が行える！俺は『E・HEROエツジマン』を召喚！」

「っち！この戦法は・・・！」

「そしてフィールド魔法『摩天楼 スカイスクレイパー』を発動！バトルだ！ダーク・ブライトマンでジャンク・アーチャーを攻撃だ！」



E・HEROダーク・ブライトマン ATK2000/DEF1000  
ATK3000/DEF1000

やばい！この場合は・・・

「っち！このダメージは通す！」

秋LP4000 3700

「そしてエツジマンでシールド・ウィングに攻撃だ！」

「畏発動！『くず鉄のかかし』！攻撃を一度だけ無効にする！そしてこのカードは再びセットされる！」

「ダーク・ブライトマンは攻撃した後守備表示になる。俺はターンエンド」

もし今のバトル、先にジャンク・アーチャーを守るためにくず鉄のかかしを使えばエツジマンの攻撃を防げず1700のダメージを受けていたな。危ない。十代の手札は0だ。そして場には伏せカードが一枚・・・一方の俺はシールド・ウィングに伏せのくず鉄のかかしともう一枚・・・次のドローだな

「俺のターン！ドロー！俺は強欲な壺を発動して2枚ドロー！」

ダーク・ブライトマンもエツジマンもどちらも守備モンスターに対し、貫通効果を持ったカードだ・・・次でまたダメージを喰らうことになる。伏せカードも気になるところだ。もしアレがヒーローシグナルなら、何かモンスターを出されてミラクル・フュージョンなんてこともあり得る。逆に十代が反応型のカードを使うとも思えな

いが・・・万が一もある。

「俺は伏せていた『ロスト・スター・ディセント』を発動！」

「聞いたことないカードだな・・・」

「このカードは、自分の墓地に存在するシンクロモンスターを一体選択して自分のフィールド上に表側守備表示で特殊召喚できる。この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化され、レベルが1つさがり守備力は0となる。また、表示形式の変更は出来ない。戻ってこい、ジャンク・アーチャー！」

ジャンク・アーチャー 7 ATK2300/2000

ATK2300/DEF0

「そしてさらにジャンク・アーチャーのレベルを一つ下げること  
でレベル・スティーラーを特殊召喚する！」

6 5

レベル・スティーラー ATK600/DEF0

「さらに手札からワン・フォー・ワンを発動！手札のボルトヘッジ  
ホッグを捨てることで、俺はデッキからグローアップ・バルブを特  
殊召喚！」

グローアップ・バルブ ATK100/DEF100

「レベルが5となったジャンク・アーチャーと、レベルが2のシー  
ルド・ウィング、レベル1のレベル・スティーラーにレベル1のグ

ローアップ・バルブをチューニング！」

5 + 2 + 1 + 1 = 9

「破壊神より放たれし聖なる槍よ、今こそ魔の都を貫け！シンクロ召喚！氷結界の龍トリシューラ！」

氷結界の龍 トリシューラ ATK2700/DEF2000

「こいつは万丈目と戦った時の！」

「見ていたなら効果は知っているだろう！フィールドのダーク・ブライトマン、墓地の融合を除外！ダーク・ブライトマンは破壊された時、相手のモンスターを1体破壊するカードだ。だが、除外された場合の効果発動はない！」

「つく！」

俺はまだ通常召喚をしていない。もしお前が精霊のカードだということなら、力を貸してくれ

「俺は・・・手札から久遠の魔術師ミラを召喚する！」

## 精霊（中編）（後書き）

というわけで、登場する精霊は久遠の魔術師ミラです

GENERATION FORCEで登場し、ノーマルレアの中でも当たりとされているカードで、その取引額もなかなかのもの。召喚に成功した時相手のカードを一枚確認できるので、奈落の落とし穴や激流葬に流されない効果を持つ強力なカードです。

基本的にアタッカーとしては1800と申し分なく、墓地に行けばカオス・ソーサラーのコストにもなります。

次回、ミラが活躍・・・するのかな？

## 精霊（後編）（前書き）

とりあえず、これでV S十代は終わりです  
今回は別の人とデュエルです

秋「今日の最強カードは・・・『ギガンテック・ファイター』か」  
チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上  
このカードの攻撃力は墓地に存在する戦士族モンスターの数×10  
0ポイントアップする。このカードが戦闘によって破壊され墓地に  
送られた時、墓地に存在する戦士族モンスター1体を選択し自分フ  
ィールド上に特殊召喚する事ができる。

秋「この効果は自分自身も例外ではない。戦闘で破壊されればコイツをまた召喚できるし、べつの上級戦士族モンスターが墓地にいればそいつを呼び出せる。それに墓地全体の戦士族の数で攻撃力が変わる強力なカードだ」

・・・作者はこのカード拾いました。  
カードは拾った

まさにこの言葉が相応しい。何故か捨てられていたボロボロのギガンテック・ファイター。今ではうちの主力モンスターですね

## 精霊（後編）

Side 秋

「俺は・・・手札から久遠の魔術師ミラを召喚する！」

久遠の魔術師ミラ ATK1800 / DEF1000

『やっと・・・やっと会えました！マスター！』

ミラがこちらを振り向き、笑顔を見せた。

「ソリットビジョンが、喋った？」

「いいや違うぜ！秋！そいつはカードの精霊なんだ。ソリットビジョンとは別として現れたんだろ」

嬉しそうな顔をするミラ。このイラついた顔からどうやってこんなにも満点の笑顔が想像できただろうか？

「き、気を取り直してデュエルを続行！久遠の魔術師ミラの召喚に成功した時、相手フィールド上にセットされたカードを一枚確認することができる！」

『はあああっ！はっ！』

ミラの魔術の様なものにより、カードがあらわになる。ヒーローシグナル！

「これでカウンタートラップに怯える必要はない」

「すげえな、ミラって」

『えへへ、十代さんにも褒められました』

「……あのー、すまんミラ」

『はい?』

本当に申し訳ないんだが……

「お前の出番、多分これだけだ」

『………え?』

きゅ、急に涙目になるな!こっちだって勝つためにやっているんだから!

『ま、マスター……私やっぱりいらな子なんですか?』

「ええい!そんな目で見るな!俺はデッキトップのカードを一枚墓地へ送ることでグローアップ・バルブを特殊召喚!」

グローアップ・バルブ ATK1000/DEF1000

「そしてトリシューラのレベルを一つ下げ、レベル・ステイラーを特殊召喚!」

レベル・ステイラー ATK600/DEF0

「さらにワン・フォー・ワンの効果で墓地に送ったボルト・ヘッジホッグの効果！チューナーが場にいるとき、このカードは特殊召喚される！」

ボルト・ヘッジホッグ ATK800/DEF800

「ホントすまん、ミラ。レベル4の久遠の魔術師ミラ、レベル1のレベル・ステイラー、レベル2のボルト・ヘッジホッグに、レベル1のグローアップ・バルブをチューニング！」

『え、あ。ちよつ・・・マスター！』

4 + 1 + 2 + 1 = 8

「闇を蹂躪する不屈の闘志よ、今こそ鋼の身体に魂を宿し大地を砕け！シンクロ召喚！立ち上がれ、ギガンテック・ファイター！」

ギガンテック・ファイター ATK2800/DEF1000

「すっげえ・・・でも秋、ミラが涙目だったぞ」

「そのことは言うな。ギガンテック・ファイターは墓地に存在する戦士族一体につき100ポイント上昇する。十代、当然お前の墓地も適用されるぞ」

十代の墓地にいるのはスパークマン、クレイマン、ネクロ・ダーク



マンの3体。そして俺の墓地にはジャンク・アーチャーがいる。

「ギガンテック・ファイターの攻撃力は400ポイント上昇！つまり、攻撃力は3200！」

ギガンテック・ファイター ATK2800/DEF1000 ATK3200/DEF1000 A

「バトルだ！ギガンテック・ファイターでE・HEROエッジマンを攻撃！ギガンテック・インパクト！」

ギガンテック・ファイターがエッジマンの腹を殴り、エッジマンが吹き飛ばされる。それによりエッジマンは破壊された。

十代LP4000 3400

「つく！だが知っての通り、伏せてるのはヒーローシグナル！俺はデッキから『E・HEROバースト・レディ』を召喚するぜ！」

E・HEROバースト・レディ ATK1200/DEF800

「ならばトリシューラで攻撃！アイシングフレア！」

バースト・レディが凍りつき、燃え散る。

「そしてさらに、墓地へ2体のHEROが逝ったことで、ギガンテック・ファイターの攻撃力は上昇する。」

ギガンテック・ファイター ATK3200/DEF1000

ATK3400/DEF1000

「うおっ・・・でもやっぱりワクワクするぜ！いくぜ、俺のターン！ドロー！よし、俺は手札からホープ・オブ・ファイフスを発動する！俺が戻すのはクレイマン、バースト・レディ、スパークマン、エツジマン、ネクロ・ダークマンだ！これによってお前のギガンテイツク・ファイターの攻撃力は500ポイント下がる！」

ギガンテツク・ファイター ATK3400/DEF1000 AT  
K2900/DEF1000

「つく！」

「そして手札とフィールドにカードがない時、ホープ・オブ・ファイフスの効果で俺はカードを3枚ドロー！」

つく・・・流石だな、まさかこのタイミングでホープ・オブ・ファイフスを引き当てるとは・・・ん？まさか、いや、これは言葉に出すと怖い。だって十代がすごく良い笑顔なんだもの。

「俺は・・・E・HEROバブルマンを召喚！」

どちくしょおおお！やっぱりそいつか！やっぱりそうだったか！なんでさっきのデュエルと同じことが起きるんだ！？どんだけアイツはドローの神様に恵まれてるんだああ！

「そしてバブルマンの効果発動！フィールドに他のカードがない時、俺はカードを2枚ドロー！」

手札が0の状態から3枚になり、バブルマンの効果で4枚にまで戻

すとは・・・さつきも体感したが、やはりこれはチートすぎるだろ！

「そして手札から融合を発動！手札のフェザーマンとバースト・レディを融合！現れる！」『E・HEROフレイム・ウイングマン』！」

E・HEROフレイム・ウイングマン ATK2100/DEF1200

「なあ！？十代、まさか今のドロで引いたのか！？」

「ん？ああ、最初のホープ・オブ・フィフスでバースト・レディと融合、さっきのバブルマンでフェザーマン引いた」

こ、このチートドロがあああ！だ、だが！

「だが融合でフェザーマンとバースト・レディが墓地にすることでギガンテック・ファイターの攻撃力は上昇！これによりスカイスクレーパーの効果であろうと、攻撃力は並ぶ！」

ギガンテック・ファイター ATK2900/DEF1000 ATK3100/DEF1000 A

「確かにな！だがまだ俺のメインフェイズは続くぜ秋！俺はさらにミラクル・フュージョンを発動！」

「ここで、ミラクル・フュージョン！？」

「俺は墓地のバースト・レディとバブルマンを除外！行くぜE・HEROスチーム・ヒーラー！」

E・HEROスチーム・ヒーラー ATK1800/DEF1000

「これでギガンテック・ファイターの攻撃力はまた変動する！」

ギガンテック・ファイター ATK3100/DEF1000 A  
TK3000/DEF1000

「バトルだ！E・HEROスチーム・ヒーラーでトリシューラを攻撃！この瞬間スチーム・ヒーラーの攻撃力は上昇！」

E・HEROスチーム・ヒーラー ATK1800/DEF1000  
0 ATK2800/DEF1000

「いけえ！」

蒸気のようなものがトリシューラを包む。氷だからか？なんか知らんが凄く苦しそうに破壊された。

秋LP3700 3600

「そしてスチーム・ヒーラーの効果！このカードが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターの攻撃力分だけ自分のライフポイントが回復する！」

十代LP3400 6100

「さらにバトル！フレイム・ウィングマンでギガンテック・ファイターを攻撃だ！『スクレイパーシュート』！」

フレイム・ウィングマン ATK2100/DEF1000 A  
K3100/DEF1200

「うわあああっ!」

秋LP3600 3500

「そしてフレイム・ウィングマンの効果!破壊して墓地へ送ったモンスター元々の攻撃力分相手にダメージを与える!」

秋LP3500

「ライフが減らない!?!」

「ギガンテック・ファイターの効果が発動!ギガンテック・ファイターは戦闘で破壊され墓地に送られた時、墓地に存在する戦士族モンスター1体を選択してフィールド上に特殊召喚する」

「なっ・・・!?!それじゃあ!」

「そう、自身も例外ではない!立ち上がれ、ギガンテック・ファイター!」

ギガンテック・ファイター ATK2800/DEF1000 A  
TK3000/DEF1000

「この場合、チェインはギガンテック・ファイターの方が早い。よって墓地に行かなかったことでフレイム・ウィングマンの効果は不発となる」

「やるなあ秋!俺はターンエンド!」

「俺のターンドロロー！よし、俺は手札から命削りの宝札を発動！カードを5枚になるようにドロローし、5ターン後に全て捨てる！ハンドレスの状態だから5枚ドロローだ！」

秋手札0枚 手札5枚

「これなら・・・俺は手札からスノーマンイーターを捨て、パワー・ジャイアントを特殊召喚！」

パワー・ジャイアント ATK2200/DEF0

「そしてスノーマンイーターのレベルは3！よってレベルは3つ下がる」

6 3

「さらにデブリドラゴンを召喚！」

デブリドラゴン ATK1000/DEF2000

「デブリドラゴンの効果発動！このカードの召喚に成功した時、攻撃力500以下のモンスターを特殊召喚する！来い、スノーマンイーター！」

スノーマンイーター ATK0/DEF1900

「レベル3のスノーマンイーターにレベル4のデブリドラゴンをチユーンング！」

3 + 4 = 7

「魔都を貫く第二の神槍よ！今こそその力で世界を凍らせる！シンクロ召喚！全てを貫け！氷結界の龍グングニール！」

氷結界の龍グングニール ATK2500/DEF1700

「うおおおおっ！かけえ！」

「グングニールの効果発動！カードを2枚まで捨てることで、捨てた数だけ相手のフィールド上のカードを破壊する！フレイム・ウィングマンとスチーム・ヒーラーを破壊！」

「つく！しまった！」

「これで終わりだ十代！ギガンティック・ファイター！パワー・ジヤイアント！グングニール！一斉攻撃！」

「う、うわああああああっ！」

十代LP67000

か、勝ったあ・・・

『やりましたね！マスター！』

「・・・ああ、そうだな」

俺の隣で嬉しそうな顔をしているミラの姿があった。

「おっ！秋、ミラが見えるんだな！」

「ああ、しつかりとな」

こうして、俺はこの世界で初めて妖精と出会った。

S i d e ミラ

夜、マスターが眠った頃、私はデッキで眠っていたマナさんとマハードさんとお話をしています。

『良かったね、ミラちゃん!』

『はい! 嬉しいです! マスターがお話をしてくださるようになったんです!』

マスターは優しい方です。あの後私をアタッカーとして使用しなかったことを謝りました。でも戦うのにいちいち私情など出すことが出来ないのは私も承知しています。だから私も同じように謝りました。変なことを言っでごめんなさいと

『それにしても、秋さんは何故ミラちゃんが見えるようになったのでしょうか、お師匠様』

『さあな、もしかしたら彼・・・遊城十代の影響下もしれん。元々彼はミラを持っていない・・・なぜミラが突然秋殿の所へ現れたのか・・・』

『それは私もです同じことを思います。私自身も気が付いたらマスターの所にいました。そしてこの世界に存在しない様々なカードた



ちが・・・マスターの場所にあるのです』

どうしてでしょうか？するとマハードさんが難しい顔になりました。

『以前だが・・・秋殿は今のようには明るくはなかった』

『どついうことですか？』

『我らのマスター・・・武藤遊戯の従兄。その重荷を背負って生きる彼はどこか暗い表情が印象的だったからな』

マスター・・・辛い思いをしていたんですか

『元々彼はデュエルが得意でも好きでもなく、ただ周りに流されてデュエルをしている存在だった。そしてデュエルをすれば武藤遊戯と言う名の重圧を背負うことになる。もしかしたら・・・このデュエルモンスターズが嫌いだったかもしれない』

『そうですねー・・・秋さん、マスターと会うたびに渋い顔していましたが、私もドキドキでしたよ・・・マスターが私達を送って秋さんが受け取った日、破られちゃうんじゃないかって』

『さすがにそれはないが、まずここデュエルアカデミアには連れて来なかっただろう。だが彼は我らを大切にしまいこみ、デッキまで作った。彼は前とは何かが違う』

マハードさんの言葉に、マナさんがうんうんと頷く

『それにシンクロ召喚はともかく、エクシーズ召喚なんて聞いたこともないですし』

『もしかしたら、彼は我々が知らないところで何かがあったのかも  
しれないな』

『……でも』

たとえば、変わった方であろうと、例え異質であろうとも

『私のマスターは武藤秋、それは変わりません。もし彼に何かがあるのなら、私はマスターを支えます。たとえどんなことになるかと、この世界を敵に回そうと、この力でマスターを守ります。それが・  
・私がここにいる意味』

私の言葉に、マハードさんは短く笑い、マナさんはニコニコと笑顔になりました。

『そうだな、マスターが我々を授けた以上、私も彼に全力を注がねばならん』

『それに、今のマスターは秋さんですからね』 秋さん可愛いです  
『し』

『だ、駄目ですよマナさん！マスターは私のマスターです！』

そんな感じに騒ぎながら、夜は更けて行きました。

S i d e 秋

「ふあぁ〜……」

『マスター！おはようございます！』

起きると、笑顔のミラがいた。

「・・・うん、おはようミラ」

次の日から、ハッキリと確認できる久遠の魔術師ミラ。ミラはニコニコと俺を見る。流石に着替えをするときなどは消えるが、基本はどこでも一緒なのだという。

「さあて、今日も頑張るか」

『はい！マスター！』

こうして、俺の一日が始まる。

テスト1週間前 武藤秋 対戦成績 4勝1敗

**精霊（後編）（後書き）**

これでVS十代編終了。次回は中間テストです

## 女帝（前書き）

仮面ライダーよりこっちが進んでいるのが・・・ひどいですね。すいません

雪乃「今日の最強カードは・・・うふふ、カオス・ソーサラーね」

このカードは通常召喚できない。

自分の墓地に存在する光属性と闇属性のモンスターを1体ずつゲームから除外した場合に特殊召喚する事ができる。

1ターンに1度、フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択してゲームから除外する事ができる。

この効果を発動するターン、このカードは攻撃する事ができない。

雪乃「私のお気に入りのカードよ。光と闇・・・それぞれを交わりて召喚するカードよ」

昔、カオス・ソルジャー開闢の使者っていましたね。カオス・エンペラー・ドラゴン終焉の使者ってのも・・・まあどっちも禁止カードなわけですけど

## 女帝

テスト前日。授業のテスト要項をみる。

「何故・・・こんなにもテスト範囲が凄いいことになっているんだ？」

デュエルについての勉強＋一般の5教科目。いくらデュエルアカデミアがデュエルの学校とはいえ、ちゃんと5教科も勉強する。国語、数学、理科、社会、英語・・・まあ良いとしよう。でも社会の問題・・・

『問1 バトルシティの舞台はどこか』

これって社会の問題か？他にも5科目の中にデュエルに関することが多く記述されていた。アニメ見てなかったら辛かったかも。

『マスター大変ですねえ』

「それでもないよ、理科がちよっと嫌いだけど後はね」

高校の問題は苦手だがまあ・・・行けるだろ

「さて、寝るか」

『もう寝るんですか？十代さんも机に突っ伏してましたけど。翔さんにいたっては死者蘇生でお祈りしていましたし』

あいつら・・・もういい、放置。俺は寝る

「眠いから寝よう・・・明日遅刻とか洒落にならん」

『そうですね、おやすみなさいマスター』

こうして俺は闇に落ちたそして、その日、俺は夢を見た

『アレが伝説のデュエリスト武藤遊戯の従兄かよ』

『なんでえ、デュエルよわっちいなあ』

これは・・・

『これなら武藤遊戯もたいしたことないんじゃないの？』

『こいつがこれじゃあなあ』

これは、武藤秋の記憶？

『お前弱すぎ！デュエルやるしかくないなあ！』

『こんなデツキじゃ大会になんか出れないだろ！』

『お前がデュエルアカデミアに？馬鹿じゃねえの！』

やめろ、不愉快だ・・・

『もういやだ！僕はこの世界から逃げ出したい！』

・・・お前は・・・俺？光が俺を包む。アレは・・・

「っ……!!」

夢、か……

『マスター？おはようございます、お早いですね』

「ああ、ミラ……おはよう」

朝6時……早く起きすぎたな。それにしても、あの夢はいつたい

『マスター？どうしたんですか？』

「なんでもない、さて今日の午後の実技用のデッキを調整するか」

たまには、シンクロ以外のデッキも使わないとな

『マスターファイト！です！』

「ああ、そうだな」

ミラの言葉に、思わず笑みがこぼれた。

教室

「十代の奴、確実に遅刻だな」



「僕たちは一応起こしたっス」

「でも十代はおきないんだなあ」

あいつ、大丈夫か？確か今日は万丈目と十代のデュエルだったな。俺の相手は誰だろうか。ブルー生徒だったらやだなあ・・・あいつら負けを認めないし。今回はまぐれだとかこんな卑怯だとか、俺が負けるはずがないだとか言うしさ。運も実力のうち、まぐれでも負けは負けなんだ。エリートさんはこれだから嫌いだ。

「くあ・・・眠い」

「（マスター・・・昨日結構早めに寝ましたよね）」

「・・・ぐう」

駄目だ、眠い・・・

「（ま、マスター！？後5分でテスト始まりますよ！起きてくださーい！）」

「うう・・・ホント駄目だ、寝むすぎる」

どうしたんだ、本当に・・・何と云うか、身体の全身の力が抜けそうだな。やれやれだぜ。ん？大徳寺先生が来たな

「では、席に着いて教科書しまうのにや〜テストを始めるのにや〜」  
テスト、か・・・ま、頑張ろうかね

テスト開始

問1 無限ループに関して一つ答えよ

問2 バトルシティの戦いに置いてのベスト8をすべて答えよ

問3 デュエリストキングダムで必要だった参加証明を4つ答えろ

問4 KC社開発の現在の最新デュエルディスクは第何世代のものか？

問5 バトルシティに置いての禁止カードを答えよ

問6 特殊勝利条件はどのようなものがあるか

問7 攻撃力、守備力が定まらない『?』と書かれたモンスターを出来るだけ上げよ

問8 デュエルアカデミアのオーナーの名前を答えよ

問9 バトルシティに置いて決勝に進むために必要なものは何か

問10 青眼の白龍は世界に何枚あるか

……どれも漫画とアニメ見てれば簡単に答えられる問題だった。この後も20問ほど続いたが……なぜ所々で問題が飛ぶのかは不明だ。俺はとっとと答えを書いて寝ることにする。結構簡単

だったなあ……

「……う、秋、起きなさい」

「……んう」

誰だ……？我が眠りを妨げるのは……って、そうじゃないやん？

「明日香？」

「おはよう秋、テストは終わったわよ」

「そうか……ねむ」

「十代たちは購買に新しく出るカードパックを買いに行ったわ。行かなくてよかったの？」

新しいカードか……俺はいいや、多分持ってるし

「明日香は？明日香も新しいカードに興味があるんじゃないの？」

「一応、興味が合っても買うつもりはないもの。私は今のカード、デッキを信じてるし」

「ふーん……」

教室には昼食を取る生徒がちらほら。そういえばもう昼か

「昼飯食べたの？明日香」

「いいえ、まだよ」

「なら飯でも行こうか・・・ドローパン以外で」

もうドローパンはやだ。キムチパン以来絶対にドローパンは食べないと思心に決めた。

「ふふっ、いいわ。行きましょ」

こうして俺は明日香と食堂へ向かった。食堂に着くと雪乃とツアンがいた。

「雪乃にツアン」

「あら、坊や・・・ようやくお目覚めね」

「まったく試験中に寝るなんて馬鹿じゃないの？」

どうやら寝ていることを知っているらしい。まあ同じ教室だしな。

「それにしても凄い勢いで寝ていたな、秋・・・テストはできたのか？」

「うーんどうだろ、出来る範囲のことはしたよ。てか、三沢いたの？」

「いたよ！最初っから！」

全然気が付かなかった・・・おいおい、もう影が薄くなり始めてるのか？頑張れよ三沢

「ま、とりあえず飯食べようぜ」

食堂でとりあえずラーメンを頼む。ドローラーメンなんてものもあつたが、絶対にやらないと断固拒否した。また変なものがあったらごめんこうむる。

「そういえば午後の試験、坊やはどうなの？またシンクロデッキ？」

「いや、今日はシンクロデッキは使わない。他のデッキも回さないとな」

「うふふ、楽しみにねえ」

ん？楽しみと言われても・・・普通の天使族デッキなんだけど

「そつか・・・今日の午後試験「ツァン、そのことはナ・イ・シヨ」  
うう・・・分かったわよ」

内緒ってなにがだ？まあともかく・・・今日のデッキは天使族デッキと決めている。後はそうだな・・・普段回さないデッキも今度回してみるとしようか。

『マスターってデッキいくつ持っているんですか』

「（・・・うーんどうだろ、結構な数だよ）」

サイバーのデッキもそのうち使ってやろうかな。作るだけ作ってか

ら放置なんてザラだし、中途半端なものもある。カードが多いのはいいけど、はぁ・・・

## 午後の試験

### 試験会場

「万丈目！これでお互いライフは1000ポイントずつ！ここで攻撃力1000以上のモンスターを引いたら面白いよな！」

いや、相手にしてみればまったく面白くないですよ？十代さん。現在十代VS万丈目を鑑賞中。もちろん原作通りハネクリボーが活躍してこの状態だ。それにしても、万丈目・・・

「何を戯言を！そううまくいくものか！」

「でも引いたら面白いよな！ドロー！俺はフェザーマンを召喚！」

E・HEROフェザーマン ATK1000/DEF1000

「フェザーマンで攻撃！フェザーショット！」

「ば、ばかな！この俺があぁあ！」

万丈目LPO

「あーあ、万丈目の負けか」

「あら、坊やは十代の坊やが負けると思ったの？」

「え？ああ・・・」

まあ、ねえ？

「万丈目はどういうデュエルがしたかったんだろう・・・X、Y、Zが揃ったところで普通に攻撃したほうがダメージも大きかったのにわざわざ合体させて攻撃力下げちゃったしさ」

「た、確かに・・・」

「それに、わざわざVWXYZと揃える前にとっとと攻撃も出来た。十代もそれに気が付いてるのかな・・・」

あの様子じゃ多分気付いてないけど。ま、いいか・・・

「次は俺か・・・あれ？雪乃、お前はまだなのか？」

「ええ、私も最後みたいね」

「ふーん・・・ガンバレよ」

「ええ」

こうしてデュエルスペースに上がる俺。さーて？相手はどなたかな・

「・・・え？」

目の前に立っていたブルー生徒・・・それは

「じゃあ頑張らせてもらおうよ、坊や」

「ゆ、雪乃!？」

相手は雪乃だった。

S i d e 雪乃

うふふ、驚いてる驚いてる。よっぽど私と当たることを想定してない顔ね。本来なら同じ寮の人間同士のデュエルなのだけれど、私が先生に我儘を言っつて秋と戦うように頼んだ。

「さ、行くわよ坊や」

「はは、まさか雪乃とは・・・行くぞ」

「「<sup>デュエル</sup>決闘!」」

さあ、魅せて頂戴? 貴方の力!

S i d e 秋

まさか雪乃とはな・・・まだ戦ったことのない生徒だったし、丁度いいか

「先攻は私ね・・・その前に、秋?」

「なんだよ、雪乃」



「賭けをしない？」

「賭け？」

「いったいなんのこつちや」

「もし私が勝ったら私の言うことを聞く、貴方が勝ったら私が言うことを聞く……」

「へえ……面白い、それだけ自信があるのか」

「行くわよ？ドロー……私はクリッターを守備表示で召喚、カードを2枚伏せるわ。ターンエンド」

クリッター ATK1000 / DEF600

クリッター……面倒なカードだ。そして伏せは2枚……

「俺のターンドロー！俺は手札から『神の居城ヴァルハラ』を発動する！このカードがフィールドにあるとき、自分のフィールドにモンスターが存在しない場合、1ターンに1度、天使族モンスターを特殊召喚出来る！来い！『光神テテユス』！」

光神テテユス ATK2400 / DEF1800

「うふふ、ダメ……罨カード『奈落の落とし穴』テテユスは除外されるわ」

「つく……なら俺は手札からコーリング・ノヴァを守備表示で召

喚！」

コーリング・ノヴァ ATK1400/DEF800

「カードを2枚伏せ、ターンエンド」

「私のターン……ドロ。私は『マンジュゴット』を召喚ね。そして効果発動……私は手札に『高等儀式術』を加えるわ。そして手札から発動……私はデッキからデーモン・ソルジャーを2体生贄に捧げる。そして来なさい『闇の支配者・ゾーク』！」

マンジュゴット ATK1400/DEF1000

闇の支配者・ゾーク ATK2700/DEF1500

「ゾーク……！」

「さあ、ゾークの効果を発動するわ。ダイスを振って目が1・2の場合、相手フィールド上のモンスターを全て破壊。3・4・5の場合、相手フィールド上のモンスター1体を破壊。そして6の場合、自分フィールド上のモンスターを全て破壊する」

これは……なるほど、これで6が出てもクリッターが墓地に行くことで1500以下のマンジュゴットを手札にまた加えることが出来るわけだ。

「随分なギャンブルカードだな、雪乃」

「うふふ、人生やデュエルには刺激が必要よ。さあダイスを回すわ」

まがまがしいダイスが出現して下に転げ落ちる。ダイスの目は……  
5！

「5ね……コーリング・ノヴァ破壊！」

「っち！」

「そして直接攻撃ダイレクトアタック！行きなさい、ゾーク、マンジュゴット、クリツター！」

この総攻撃は受ければ負けだ……だが！

「リバースカードオープン！『和睦の使者』！このカードを発動したターン、相手モンスターから受ける全ての戦闘ダメージは0になる。このターン自分のモンスターは戦闘では破壊されない。モンスターはいないがダメージは0だ！」

「流石ね、回避策もあるとは。私はターンエンドよ。ここで終わる貴方じゃないでしょう？」

「俺のターンドロ！手札から強欲な壺を発動して2枚ドロ！まだ何とかなる……俺はフィールド魔法『天空の聖域』を発動！」

天空の聖域が展開される。古代遺跡と雲が辺りを包み込んでいく。

「そして手札から俺は神秘の代行者アースを召喚！」

神秘の代行者アース ATK1000/DEF800

「代行者？聞いたことないカードね」

「アースは召喚成功時に代行者と名のついたカードを手札に加えるが、天空の聖域が出ている場合は手札に『マスター・ヒュペリオン』を加えることができる。そしてフィールドのアースを除外！マスター・ヒュペリオンを特殊召喚！」

マスター・ヒュペリオン ATK2700/DEF2100

「ゾークと同じ攻撃力！？なんてカードを・・・！」

「このカードは代行者と名のついたカードを除外することで特殊召喚できるカードだ。さらにリバースカードオープン！『異次元よりの帰還』！このカードは自分のライフを半分にすることで互いのプレイヤーは可能な限りモンスターをフィールド上にこのターンのみ特殊召喚できる！俺はアース、とテテュスを特殊召喚！」

秋LP4000 2000

「やるわね、これだけのモンスターを召喚するなんて」

「それだけじゃないよ？雪乃」

「え？」

アースは・・・『チューナー』なのさ

「レベル5の光神テテュスとレベル2の神秘の代行者アースをチューニング！」

「チュ、チューニング！？今回シンクロデッキではないと・・・」

「ふふ、雪乃・・・シンクロデッキは使わないけど、誰もシンクロしないとは言っていないよ？」

5 + 2 = 7

「聖なる守護の光、今交わりて永久の命となる。シンクロ召喚！降誕せよ！『エンシエント・フェアリードラゴン』！」

エンシエント・フェアリードラゴン ATK2100/DEF3000

「綺麗・・・」

雪乃がそう一言呟く。廻りもエンシエント・フェアリーに魅了されている。エンシエント・フェアリーはスターダストとはまた違う美しさがあるからな。本来なら、ブラック・ローズ・ドラゴンか、もしくは天使族のエンシエント・ホーリー・ワイバーンなのだが、どちらも現在の状況では相応しくないカードだ。

「でも残念ね・・・エンシエント・フェアリードラゴンの攻撃力は2100・・・テテユスは2400だったわ。プレイミスなのかしら？」

「いや、これでいいんだ。俺はマスター・ヒュペリオンの効果を発動する！マスター・ヒュペリオンは1ターンに一度、自分の墓地にある光属性で天使族のカードを除外することで、相手のモンスターを1体破壊する！そして『天空の聖域』存在する場合はその効果を2回使用できる」

そのために異次元からの帰還で2体を戻し、チューニングして再び墓地に送った。このターンのエンドフェイズ、テテュスとアースは除外されるからな。

「俺はコーリング・ノヴァとテテュスを除外することで、ゾークと伏せカードを破壊する！そして1ターンに1度、このカードの効果でフィールド魔法カードを破壊する事ができる。破壊した場合自分は1000ライフポイント回復する。さらに、自分のデッキからフィールド魔法カード1枚を手札に加える事ができる！」プレイン・バツク」

秋LP2000 LP3000

「あっ!？」

破壊されたりバースは・・・聖なるバリア - ミラーフォース - か・

「行くぞ！マスター・ヒュペリオンでクリッターに攻撃！」

「いけない子ね・・・だけど、墓地に行ったクリッターの効果を發動するわ！私は『マンジュゴット』を手札へ加える」

雪乃LP4000 2300

「さらにエンシエント・フェアリードラゴンでマンジュゴットに攻撃！エターナル・サンシャイン！」

「あぁん！いじわる」

.....

「あの、雪乃さん？」

「いいわぁ・・・坊や、貴方の攻撃」

心なしか、雪乃が怖くなった。攻撃を受けて顔を紅くし、ゾクゾクと身体を震わせ、吐息を漏らして喜んでるんだけど、この人・・・

Side 明日香

「はぁ・・・」

雪乃の悪い癖が出たわね。相手に攻撃されて喜び、甘い声を上げてしまう。まわりの男子は顔を紅くしている。あんな色っぽい声を出されたら当然か。アカデミア中等部の時代から『アカデミアの女帝』として言われる雪乃だけど、この癖だけは本人も治せないとか。いつも二つ名の通り女帝の様な振る舞いなのに、こうなると怖いわね。若干名、自分の前を抑える生徒も何人かいる。

「なんだ？みんなどうしたんだ？」

・・・そうだった、ここにいたわね。超鈍感の十代がおバカ

「気にすることないわ、デュエルの続きを見ましょ」

「・・・？おっ」

さあ、ここからどうするつもり雪乃？そして秋、ここから何を見せ  
てくれるのかしら？

Side秋

「・・・うん、ここはスルーだな、俺は再び天空の聖域を発動して  
ターンエンドだ」

「このスリル・・・癖になりそう！ドロー！」

そう言っつて雪乃はドローする

「うふふ、私は『強欲な壺』を発動して2枚ドロー・・・手札から  
『マンジュゴット』を召喚して再び効果を発動。私はデッキから『  
奈落との契約』を手札に加えるわ。そして『奈落との契約』を発動  
フィールドのマンジュゴット、手札の『暗黒界の番兵 レンジ』を  
生贄に捧げ・・・現れなさい『終焉の王デミス』！」

終焉の王デミス ATK2400/DEF2000

「デミス！？だが効果は2000のライフを切っているから使えな  
いぞ、雪乃」

マスター・ヒュペリオンの攻撃力は2700・・・倒せるのはエン  
シエント・フェアリードラゴンだけ

「別に効果は使わないもの。そしてこれだけじゃないわ・・・私は  
墓地の『マンジュゴット』と『暗黒界の番兵 レンジ』を除外。来



なさい『カオス・ソーサラー』!」

カオス・ソーサラー ATK2300/DEF2000

「カオス・ソーサラー……!」

「そして効果発動。除外するのは当然、マスター・ヒュペリオンよ」  
マスター・ヒュペリオンが闇の穴の中へと消えて行く

「さあ、バトルよ……行くわ坊や。デミスでエンシェント・フェ  
アリードラゴンを攻撃!」

「うっ……!」

秋LP3000 2700

「うふふ……カードを一枚伏せてターンエンド」

「っ……まだまだ、まだ終わっていない……俺のターン!ドロ……  
・人生には刺激が必要か。確かに。行くぞ雪乃!俺は墓地の神  
秘の代行者アースを除外!2体目のマスター・ヒュペリオンを特殊  
召喚!」

マスター・ヒュペリオン ATK2700/DEF2100

「2枚目が存在したの!?でも残念ね、畏発動!『激流葬』!全ての  
のモンスターを破壊する!」

すべてのフィールド上のモンスターが破壊される。ヒュペリオンも

もちろん例外ではない。

「さあ、振り出しに戻ったわね。ライフは私が劣性だけど、貴方のエースは2体ともいないわ」

「それはどうかな・・・？」

「え？」

「俺は言ったはずだ、人生には刺激が必要なことに同意すると・・・これが本当の最後のカードだ。2体目のマスター・ヒュペリオンを召喚した場合、お前が罫を発動させることを想定して俺は賭けに出た・・・そして、俺は賭けに勝ったよ、雪乃」

このカードこそ、俺を救う最後のモンスターカード

「俺はここでヴァルハラの効果を発動！手札より俺は『The splendid VENUS』を特殊召喚！」

The splendid VENUS ATK2800/DEF  
2400

Side雪乃

「あ・・・ああ」

目の前には神々しい女神の様なモンスターが立っていた。これが秋の勝利の女神。マスター・ヒュペリオンの効果で焦り、ヴァルハラや通常召喚を見誤った私のプレイミス

「行くぞ、The splendid VENUSで攻撃！」  
「ホー  
リー・フェザー・シャワー！」

光が私に降り注いだ。私の負け・・・ね

雪乃LP1600 LPO

## 女帝（後書き）

VS雪乃でした。とりあえず、そのうちツァンとのバトルもしたい  
と思います

本来なら「エンシエント・ホーリー・ワイバーン」でも良かったの  
ですが、状況が状況だったので・・・エンシエント・フェアリー様  
にしました

## 傷跡（前書き）

今回は・・・結構謎パートです。

秋がどうして武藤秋としてGXの世界へと流れたのか？

その謎がすこーしだけ見えてきます

明日香「今日の最強カードは・・・『バスター・モード』？」

バスター・モード

自分フィールド上に存在するシンクロモンスター1体をリリースして発動する。

リリースしたシンクロモンスターのカード名が含まれる「/バスター」と名のついたモンスター1体を自分のデッキから攻撃表示で特殊召喚する。

明日香「なるほど、モンスター強化の罨カードね・・・それに「/バスター」と名のつくカード・・・沢山あるみたいね

作者が持っているのはスターダスト、レッド・デーモンズ、ギガンテック、アーカナイトくらいです

## 傷跡

Side秋

試験会場に歓声が響き渡った。先ほどの十代VS万丈目に負けないくらいの歓声が響き、校長先生がマイクを取った。

『武藤秋君、そのデュエルタクティクスと筆記試験のことから考えて、貴方は問題なくライイエローに昇格です。時期をみてオベリスクブルーへの昇格も考えています』

ざわざわとする周囲。まあ当然だろうな。時期を見て、というのは手紙にあったことからだろう。この人は多分俺のことを『武藤遊戯の従兄』として見ているんだろう。俺は校長が立ち去るのを見届けた後、座り込んだ雪乃の所へと歩み寄った。

「雪乃、俺の勝ちだな」

「ええ・・・負けちゃったわ」

手を差し伸べる。互いに全力でやったのだ。十代とやったときと同じ・・・

「賭けは貴方の勝ち・・・私は何でも言うことを聞くわ。でもその前に・・・」

手を取って立ち上がった雪乃は、勢いよく俺に抱きついた。

「ゆ、雪乃!？」

「うふふ、痺れたわ・・・貴方のデュエル。素敵だった。ますます貴方がいいと思っただわ『秋』」

坊やじゃなくて秋と呼ぶ雪乃。俺は慌てて雪乃を離す。なぜなら周りからの視線が凄いいことになっているからだ。ある者は殺気をふりまき、ある者は顔を紅くしている。雪乃はいたずらっぽい笑みを浮かべる。

「うふふ、じゃあね秋、先に私は寮に戻るわ」

そう言っただけ雪乃は立ち去って行った。そういえば、賭けには勝ったけどこれじゃあ保留かな・・・

## Sideツアン

・・・秋が雪乃に勝った。雪乃だって相当な実力者だった。ってそんなことより！なんでアイツ雪乃に抱きついてんのよ！べ、別に、悔しいとかそんなんじゃないんだからね！？

「むう・・・」

でもなんだか胸がズキズキする。なんでだろ

## Side明日香

ゆ、雪乃ったら大胆ね・・・流石と言うべきかしら。やっぱり秋のことが好きなのね。

「・・・・・・・・」

「ん？どうしたんだ明日香」

「いえ、何でもないわ」

はあ・・・なんか知らないけどあたしって恋愛はよくわからないのよね。十代や秋、翔君や三沢君、隼人君はただの友達だし・・・でも付き合うなら十代や秋みたいに頼りになるような・・・って、何を考えてんのよ私！

Side 秋

『カンパニー！』

現在レッド寮にて何故か俺の昇格のお祝いをしている。十代はイエローにはならずそのままいるという。まあ、俺も寮が小奇麗なのは好きじゃないからな。そのまま昇格してもレッド寮に残った。こっちの方が気楽だ。なによりライイエロー全員が三沢みたいになやつじゃない。オシリスレッドから上がった俺を嫌な目で見ていたしな。服は既にライイエローの制服となっている。

「ようこそライイエローへ」

「ありがと三沢、いつ「最初からいたからな」あ、そう」

もうこのネタで通じなくなっただか。まあいいや。寮長の大徳寺先生も何故かお祝いに参加。料理は何故か雪乃とツァンが作っていた。しかも意外にも料理が上手い。



「うっめー!」

「おいしいっす!」

「うまいんだなあ」

「へえ・・・雪乃もツァンも料理が出来るんだ」

俺が言うと、雪乃はクスクスと笑い、ツァンは俺を睨む。

「うふふ、これくらい女の嗜みよ」

「と言うか何?出来ないとも思った?僕だって普段のお弁当は自作なのよ?」

その中で静かに料理を食べる明日香。空気を読まない十代が明日香を見た。

「明日香は?」

ギクツ!という擬音が聞こえてきそつだ。どうやら明日香は料理が出来ないらしい

「う・・・」

「明日香は家庭科の成績凄く悪いわよ」

「はっ!」

バツサリと切る雪乃。哀れだな明日香、雪乃が弄りがいのある玩具を見つけたような顔をしてるぞ。

「お裁縫も駄目だもんねえ明日香？」

「つく・・・言わないで雪乃」

「前に作ったクマと題した「あー！駄目！お願い言わないで！」あら、残念」

「え？何々？クマと題した？」

と、十代達興味津津。明日香が慌てているのを見て楽しむ雪乃。この後もみんなで大騒ぎをすることとなった。そして消灯時間が近づいた。

「さて、そろそろ3人はブルー寮に帰らないとな」

「そうね、もうこんな時間だもの」

「本当なら、秋と夜を共にしてもいいのよ？」

「ちよつ雪乃！な、なななな・・・何言ってるのよ！」

「あらツアン、貴方がしたいの？」

「そ、そそそそ・・・そんなわけないでしょ！？」

と、顔を真っ赤にするツアン。そんな冗談で顔を真っ赤にするなんて面白いなあ

「別に冗談じゃないわよ？秋」

「え？」

こうして帰ることになる3人。三沢はイエロー寮だし、三沢だけではと十代が言い出し、俺達も一緒にブルー寮まで送ることになった。大徳寺先生もこれには賛成してくれた。

「中間テストも終わったし・・・ゆっくりできるな」

「おう！デュエルしまくるぜ」

「アニキにはデュエルのことしか頭にないっすか」

と、話している俺達。すると俺達の目の前に一人のブルー生徒が現れた。誰だ？

「よお武藤！久しぶりだな」

ガラの悪いブルー生徒。一体誰だ？何故か知らんが俺の手が・・・震えている？

「・・・誰、だ？」

「忘れたか？俺だよ俺！小学校で一緒だっただろ？」

「小学校・・・？」

記憶の歯車が動く。こいつは・・・そうか！本来の『武藤秋』の記

憶にあつた奴だ

『お前、武藤遊戯の従兄の癖にデュエル弱いなあ!』

『そんなんなら辞めちまえ!』

「まさかあの弱虫泣き虫の武藤がデュエルアカデミアにいるとはなあ……驚きだぜ!」

「あの男……」

「明日香?」

明日香が怪訝な顔で生徒を見ていた。

「あの男、中等部から良い噂がない生徒よ。デッキを盗んだり、アンティでカードを奪ったり、禁止カードを使ったり、最近ではオリスレッドをいじめたりする最低最悪の男ね」

「良い女ばかり連れてるな武藤!俺にも紹介してくれよ」

「さっきからゴチャゴチャと……なんなんだお前」

十代が生徒を睨む。他のメンバーも同様だ。だが、俺は腕の震えどころか、身体が震えだす。この体に刻まれた恐怖が、無意識に動き出す。

「つぐ……」

「秋!?!どうしたの?」

とうとう膝をつく。身体の震えが・・・止まらない!?

「つくつくつく・・・思い出したか俺を?思い出したよなあ!あんなだけ可愛がってやったんだ!そりゃあ身体も震えるだろ!伝説のデュエリスト『武藤遊戯』の従弟、駄目デュエリストの武藤秋よお!」

『ええ!?!』

全員が一斉に驚いて俺を見た。今まで気づいていなかったのだろうか?それとも武藤という姓などありふれたものなのだろうか?俺の身体がガチガチと震える。そんな俺をツアンが支えてくれていた。

「あんた秋に何したのよ!」

「ツアン・ディレか・・・くくく!俺達はそいつを小学校の3年からずっといたぶり続けたのさ!」

「俺達・・・?それにいたぶるって!」

「ほぼ学年全員だな。武藤遊戯の従弟の癖に弱小のデュエリスト・・・そんな奴をいじめるのは楽しくて仕方がなかったのさ!」

汚い笑いをするこの生徒。どうやら『武藤秋』に対していじめを行っていたリーダー格の男のようだ。

「しまいにゃもうやめてくれって泣いてたなあ・・・なあ?」



めに泣いてたなあ！」

「なんて奴だ……」

「酷いつす……」

十代がデュエルディスクを構える

「てめえ！もうゆるさねえ！」

「なんだ？俺とやるのか？俺とやるならアンティだ……テムエのデッキを賭けな！」

「アンティは禁止よ！」

明日香が声を上げるが、男は笑みをやめない。

「禁止だあ？そんなもん勝った人間がもみ消せばいいんだよ……  
今までだってそうしてきたんだからなあ。さあ来いよ雑魚が！」

「……」

俺はゆっくりと立ち上がる。

「十代……デュエルディスク」

「秋……お前」

「正直な話、話すことが多すぎるけど……アイツだけは、俺が叩きのめさなきゃ気が済まない」

デッキを持ち、生徒を見た。記憶はまるで走馬灯のように流れた。『武藤秋』がどれだけのいじめを受けて来たのか・・・どれだけ辛かったのか・・・

「わかった、勝てよ！」

十代からデュエルディスクを受け取り、デッキをセットする。

「なんだあ？最弱デュエリスト様がお怒りかあ？ぎゃはははは！」

「・・・いちいちうるせーよ」

「あ？」

Side十代

デュエルディスクを渡して見守る俺達。男は相変わらず笑い続けていた。だがその笑いは、秋の一言で止んだ。

「さつきからギャーギャーと・・・耳障りなんだよ」

明らかにいつもと雰囲気が違う秋。あいつ、怒ってる？

「ああ！？泣き虫が何言ってるんだ！調子乗ってるじゃねえぞ！」

「いいから構えろ、雑魚が・・・」

「上等だコラア！行くぞ！」



男もデッキを構える

「デュエル！」

デュエルが始まる。勝てよ、秋……！

ブルー生徒LP4000

秋LP4000

「先攻は俺だあ！俺は手札から『黒き森のウィッチ』を召喚！」

ATK1100/DEF1200

黒き森のウィッチだって！？禁止カードだろ！？

「さらにカードを2枚伏せてターンエンドだ！」

「……俺のターン、ドロ……俺は手札からバイス・ドラゴン  
を特殊召喚」

バイス・ドラゴン ATK2000/DEF2400

レベル5のモンスターがいきなり生贖召喚もなしに出て来た！

「……相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド  
上にモンスターが存在しない場合、このカードは手札から特殊召喚  
する事ができる。この効果で特殊召喚したこのカードの元々の攻撃  
力・守備力は半分になる」

バイス・ドラゴン ATK2000 / DEF2400 ATK1000 / DEF1200

「はっ！そんな雑魚を」さらに、手札からワン・フォー・ワンを発動、手札のグローアップ・バルブを捨ててレベル・ステイラーを特殊召喚」

レベル・ステイラー ATK600 / DEF0

「そしてジャンク・シンクロンを召喚」

ジャンク・シンクロン ATK1300 / DEF500

「レベル5のバイス・ドラゴンとレベル1のレベル・ステイラーに、レベル3のジャンク・シンクロンをチューニング」

5 + 1 + 3 = 9

レベルは9！もう秋のエースの登場か！

「破壊神より放たれし聖なる槍よ、今こそ魔の都を貫け。シンクロ召喚・・・氷結界の龍トリシューラ」

いつもより低い声で口上を言う秋はどこか怖かった。他のみんなもそうかもしれない。だがそれを気にせず秋はデュエルを続ける。

氷結界の龍 トリシューラ ATK2700 / DEF2000

「このカードがシンクロ召喚に成功した時、相手の手札、フィールド

ド上、墓地のカードをそれぞれ選び、除外する。黒き森のウィッチ、左の手札を除外……」

「っち！」

「トリシューラのレベルを1つ下げてレベル・ステイラーを蘇生。さらに手札から『大嵐』を発動。互いのフィールドの魔法トラップを全て破壊する」

レベル・ステイラー ATK600/DEF0

破壊されたのは……なっ!? 聖なるバリアー・ミラーフォースが2枚!?

「待てよ! ミラーフォースは制限のはずだろ!」

「知るか! 勝てばいいんだよ勝てばなあ!」

「喋るな……ダイレクトアタック、アイシングフレア」

ブルー生徒LP4000 LP1300

「レベル・ステイラーでダイレクトアタック」

ブルー生徒LP1300 LP700

よし! やっぱり秋は強い! あとちよつとだ!

「さらに……カードを2枚伏せ、ターンエンド」

『十代さん……』

「ありゃ？ミラ？どうした」

何故か知らんがミラが俺の隣に……

『その、今のマスター……凄く怖いんです。でも、すごく悲しそうです……』

確かに、アイツはいつも楽しそうにデュエルするのに……なんだよ秋、どうしてそんな怖い顔して、悲しい目でデュエルしてんだよ！

「俺のターン！はっはあ！俺は手札から強欲な壺を発動！カードを二枚ドロウする！そしてもう一度強欲な壺を発動！」

アイツ、制限や禁止カードを無視しすぎだろ！なんてひどいデッキなんだ！手札を除外したのもう5枚に戻っちゃった！

「そして俺は『サンダーボルト』を発動！」

『サンダーボルト！？』

流石に驚くぜ……禁止カードであり、レアカードのサンダーボルト。そんなひどいカードがあるなんて……

「……畏発動『スターライト・ロード』」

なんだ？スターダスト・ドラゴンの絵が描かれている？

「・・・自分フィールド上に存在するカードを2枚以上破壊する効果が発動した時に発動する事ができる。その効果を無効にし破壊する。その後、「スターダスト・ドラゴン」1体をエクストラデッキから特殊召喚する事ができる」

すげえ効果だ！禁止カードを逆手に取ったな！

「凄いカードね・・・」

「それだけ秋も本気・・・ということなのだろう」

明日香と三沢が言う。確かな・・・

「飛翔しろ、スターダスト・ドラゴン」

スターダスト・ドラゴン ATK2500/DEF2000

スターダスト・ドラゴンが羽ばたき、輝きを見せる。このドラゴンの美しさにはいつもみんなが魅了されていた。でも俺だけなのかな・・・その輝きが今日見る時だけは、凄く悲しそうに見えたのは・・・

「何体増えようと同じだぜ！もう一度『サンダーボルト』を発動！」

「・・・スターダスト・ドラゴンの効果発動。自身をリリースすることで効果による破壊を無効にして破壊する『ヴィクテム・サンクチュアリ』」

スターダスト・ドラゴンが飛翔し、消えた。すると発動されたサンダーボルトも消えた。スターダスト・ドラゴンってそんな効果もあったのか！この前は戦闘にしか出て来なかったから分からなかった

けどすげえな！

「ごさかしい！俺は手札からさらに『心変わり』を発動！トリシューラのコントロールを得る！」

なっ！最大級の禁止カードじゃねえか！なんであんなカードを・・・！

「そしてさらに手札から『闇魔界の戦士ダークソード』を召喚！」

闇魔界の戦士ダークソード ATK1800/DEF1500

「覚悟しろ武藤お！トリシューラで攻撃い！」

自分の主を攻撃することを悔いるように、悲鳴を上げて攻撃するトリシューラ。攻撃されたレベル・ステイラーは凍ってから燃え散る。

秋LP4000 LP1900

「闇魔界の戦士ダークソードでダイレクトアタック！」

秋LP1900 LP100

あ、後100！？あ、あぶねえ・・・

「ひやはははは！ライフはあと100かあ！今のうちにカードにお別れを言っておきなあ！さらに『二重召喚』を発動！トリシューラを生贄として『デーモンの召喚』召喚！」

デーモンの召喚 ATK2500/DEF1200

「残念だったな！トリシューラは墓地行き！俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ！」

「俺のターン、ドロー・・・手札から強欲な壺を発動、2枚ドロー」  
強欲な壺か・・・！これで何か・・・

「さらに貪欲な壺を発動。スターダスト・ドラゴン、バイス・ドラゴン、氷結界の龍 トリシューラ、レベル・スティーラー、ジャンクシンクロンを墓地からデッキへ戻し、2枚ドロー」

ここでさらにドロー強化か、確かに秋のドロー運はあまりよくはない。ここは大量ドローで繋げるしか・・・

「墓地のグローアップ・バルブの効果を発動。デッキトップのカードを墓地へと送ることで、このカードを特殊召喚」

グローアップ・バルブ ATK100/DEF100

「グローアップ・バルブを生贄に、サルベージ・ウォリアーを召喚」

サルベージ・ウォリアー ATK1900/DEF1600

チェーンを持ったモンスターが姿を現す。秋は滅多に生贄召喚をしないはずなただけ・・・

「サルベージ・ウォリアーの効果発動。自分の手札、または墓地からチューナーを特殊召喚出来る。墓地からグローアップ・バルブを

特殊召喚する」

グローアップ・バルブ ATK1000/DEF1000

「そして、このカードは墓地からモンスターが特殊召喚されると手札から特殊召喚できる。『ドッペル・ウォリアーを特殊召喚』」

ドッペル・ウォリアー ATK8000/DEF8000

「レベル5のサルベージ・ウォリアーとレベル2のドッペル・ウォリアーに、レベル1のグローアップ・バルブをチューニング」

5 + 2 + 1 = 8

「集いし願いが、新たに輝く星となる。光差す道となれ・・・シンクロ召喚。飛翔せよ、スターダスト・ドラゴン」

再び召喚されるスターダスト・ドラゴン。これなら絶対に勝てる！

スターダスト・ドラゴン ATK2500/DEF2000

「この瞬間速攻魔法発動！『収縮』！これでメエのモンスターは攻撃力が半減だ！」

スターダスト・ドラゴン ATK2500/DEF2000 AT

K1250/DEF1000

「今のうちならサレンダーも許してやるぜえ！当然カードは燃やすがなあ！」



「秋……！」

これじゃあ秋が負ける！こんなのって……！

「……何を勘違いしている？この程度、想定済みだ」

「あ？」

「ドッペル・ウォリアーの効果発動。このカードがシンクロ素材となった時、ドッペル・トークンを二体、フィールドに特殊召喚する」

ドッペル・トークン？ ATK400/DEF400

ドッペル・トークン？ ATK400/DEF400

秋の目はまだ死んでない……まだ、デュエルを続ける気なのか！  
？お前の手札は一枚なん；だぞ！？

「……命削りの宝札を発動、カードを5枚になるようにドロ……」

ここで命削りの宝札！普段引きが悪いけど頼む、秋を助けてやってくれ！

「……さらに、俺は伏せていた『バスター・モード』を発動する」

バスター・モード？

「自分フィールド上に存在するシンクロモンスター1体をリリースして発動する。リリースしたシンクロモンスターのカード名が含ま

れる「ノバスター」と名のついたモンスター1体を自分のデッキから攻撃表示で特殊召喚する。装着しろ！『スターダスト・ドラゴンノバスター』！」

スターダスト・ドラゴンの身体を鎧の様なものが纏う。攻撃力・・・  
3000!?

スターダスト・ドラゴンノバスター ATK3000/DEF2500

「な、なっ、なあ!？」

「さらに手札のボルト・ヘッジホッグを捨ててクイック・シンクロンを特殊召喚。ボルト・ヘッジホッグ自身の効果でボルト・ヘッジホッグを蘇生」

クイック・シンクロン ATK700/DEF1400

ボルト・ヘッジホッグ ATK800/DEF800

このモンスターたちの合計は8!これならいける!行けるぜ秋!

「レベル2のボルト・ヘッジホッグとレベル1のドッペル・トークンでレベル5のクイック・シンクロンをチューニング・・・」

2 + 1 + 5 = 8

「集いし闘志が、怒号の魔人を呼び覚ます・・・光差す道となれ。シンクロ召喚。粉碎せよ『ジャンク・デストロイヤー』」

ジャンク・デストロイヤー ATK2600/DEF2500

「そしてジャンク・デストロイヤーの効果。このカードがシンクロ召喚に成功した時、このカードのシンクロ素材としたチューナー以外のモンスターの数までフィールド上に存在するカードを選択して破壊することができる・・・俺がシンクロ素材としたのは2体。よって俺は、デーモンの召喚とダークソードを破壊『タイダル・エナジー』」

これでフィールドはがら空き。最後の最後、伏せカードを出してれば何とかなったかもしれないけどアイツはしなかった。秋のことを甘く見ていたから。アイツは凄く焦っている

「そ、そんな・・・そんなバカな！」

「そして、死者蘇生を発動・・・『スターダスト・ドラゴン』を復活」

恐ろしい怒気の籠った声が周囲に響く。そして秋を取り巻く2体の龍と1体の巨人。

「ひいっ！」

「モンスターで一斉攻撃・・・『デストロイ・ナックル』 『アサル  
ト・ソニック・バーン』 『シューティング・ソニック』」

「う、うわああああああああああっ！」

ブルー生徒LP7000

「よっしゃあ！秋の勝ちだあ！」

「やったッス・・・って」

「ひっ・・・ひい！許して！俺が、俺が悪かった！な？なっ？謝るから！」

腰を抜かしたブルー生徒にゆっくりと歩み寄る。手には・・・木の枝！？しかもかなり太い！どこからそんなもん拾ったんだよ！秋がブルー生徒に振りかぶろうとする。やばい！あんなもので人殴ったら死んじまうぞ！俺達は急いで秋を取り押さえる

「やめろ秋！こんな奴殴っても何にもならねえよ！」

「駄目よ秋、正気になりなさい！」

「何やってんの！その木を降ろして！」

「秋、やめて！」

「秋君、やめろっス！」

「こんなことしてもカードは戻らないし、恨みを晴らしたことはないぞ！」

俺、雪乃、ツアン、明日香、翔、三沢が秋を抑える。こいつ、こんなに力あったのか！

「どけ・・・」

「やめろって！いつもの秋に戻れって！」

「こいつは許せない……こいつは許せない……こいつは……  
こいつは……」

まるで壊れた人形のように言葉を繰り返す秋……涙を流しながら  
動こうとする。

「ひ、ひいい！」

逃げ出そうとするブルー生徒

「逃がさないんだなあ！」

「ぐあっ！」

隼人がブルー生徒を抑え込んだ。ナイスだ隼人！って！俺が気を緩  
ませたら秋が抜け出しちまった！やべえ！

「こいつが……こいつがあああ！」

秋が木の棒を振り下ろした。だがその木の棒はブルー生徒に当たる  
寸前で止まり、落ちた。ブルーの生徒は泡を吹いて気絶。失禁まで  
している。

「あ……」

糸が切れたかのように、秋の身体は崩れ落ちた。本当に壊れてしま  
った人形のように

「秋……？秋！」

「大変！すぐに保健室へ！」

「隼人はそいつも引きずってきてくれ！」

「あわわ！僕は大徳寺先生に知らせて来るっス！」

みんながパニックになりながらも自分が出来る最善をしようとする。

「おいしっかりしてくれよ！秋！秋うー！」

俺の声が、夜空に木霊していた。

傷跡（後書き）

とりあえず、オーバーキルでしたね

次回は多分デュエルがないです。申し訳ない

なぜか毎回出てくるデーモンの召喚・・・実はお気に入りだったり

（笑）

## 仲間（前書き）

また更新です・・・そろそろ、脳内ストックが切れる頃ですね。次の話を考えなくては・・・

それにしても今日、ついにといいますが（汗

とあるシヨップのシヨーカーズコーナーで韓国版のE・HEROP  
リズムマーを見つけてしまった。530円・・・おい、安すぎだろ  
つてなわけで購入してしまいました。他にも、英語版のシークレッ  
トレアの冥府の使者ゴーズをゲットしました。こちらは280円也。  
・・・これ、シヨーカーズのレンタル代元取れてるんでしょうかね？  
ちよつと疑問です

秋「今日の最強カードは・・・なるほど、友情YU・JYOか・・・

」

相手プレイヤーに握手を申し込む。

相手が握手に応じた場合、お互いのライフポイントは  
現時点でのお互いのライフポイントを合計して半分にした数値にな  
る。

自分の手札に「結束 UNITY」が存在する場合、

そのカードを相手に見せる事で、相手は必ず握手に応じなければな  
らない。

遊 戯 王キャラクターズガイド「真理の福音」 付属カードで  
登場した通常魔法。お互いのライフを平均化する。「握手を申し込  
む」というOCGどころか、TCG全体でそう見ない効果を持つカ  
ードですね



今回はデュエルがないのでこんなカードですww

## 仲間

Side十代

保健室に秋を運びこんで早30分。今は鮎川先生が診てくれている。

「鮎川先生・・・秋は」

「・・・外傷がないとはいえ、問題は心の傷。それだけは医学では治せないの」

鮎川先生に事情を話した俺達。秋は依然として眠ったままだった。

「それにしても・・・秋がああの武藤遊戯の従弟、だったなんてね」

「でもそれを言えなかった・・・きつと、小学校の時のことを思い出すかもしれないから、無意識に言わないようにしていた」

明日香と雪乃が言う。あの遊戯さんの従弟・・・遊戯さんは兄弟がないけど、やっぱり従兄だと思われればデュエルも強いと思われる。

「そつえばアイツはどうなったんだ？」

「教員たちが全員で緊急会議をしているわ。この時間帯ならまだ起きている先生が大半だし、あの生徒の素行も以前から問題になっていたみたいね」

オベリスブルーの3人の訴え。俺達の訴えなら聞いてくれないか

もしないけど、3人、そしてイエローの三沢が言えば先生たちは動いてくれるだろうし。

「でも・・・秋は目が覚めたら僕たちのことなんて言うかしら」

「え？」

「今まで知って欲しくなかったことを知られたんだ・・・秋は、俺達と話をしてくれなくなるかもしれない」

三沢の言葉に、沈んだ表情になる全員。もしかしたら、この学校から出て行ってしまいかもしれない。

「失礼しますよ」

そこへ校長先生が入ってきた。なんで校長先生が！？

「鮎川先生、武藤秋君はどうですか？」

「ええ・・・一応今は寝ています。ただ、やはりこの子達の説明からして心の傷は大きいです」

「そうですね・・・」

と、考え込んでしまう校長。なんで

「なんで校長先生がここに？」

「君たちは・・・そうか、君たちは秋君の友達かね」

「ええ、そうです」

雪乃が頷き、他の全員も頷く。

「そうですか・・・では彼のことも知ったのですか？」

「伝説のデュエリスト、武藤遊戯の従弟・・・ってことですか？」

校長先生は頷き、秋を見た。

「ではもう一つのことも？」

「もう一つ？」

なんのことだ？

「もしかして・・・秋のネームバリューを学園が利用していたこと？」

ツアンが校長を睨みつける。確かに、校長が秋を利用してこの学園に利用したということであればそれは許されない。

「とんでもない！私はそんなことをしませんよ・・・つまり知らないようですね」

校長は慌ててそれを否定する。じゃあ一体なんのことだ？

「君たちは疑問に思いませんでしたか、何故彼が『オシリスレッド』で入学したのか」

そういえば・・・秋の奴、試験でダメージを受けず、凄く召喚をして勝ったのに。いくら電車で遅刻したとはいえ・・・なんでオシリスレッドなんだろうと思ったことはあるな。

「実を言えば、あながち彼を利用したというのは間違っではいません」

「え？」

「ただ、それは彼も同意した上でのことでした。実はですね・・・」

校長先生は今年の入学者のことについて教えてくれた。今年の入学生は例年にもまして成績が低く、ライエロークラスも三沢など一部だけ。俺や秋なども実力者ではあるのだが遅刻してきた理由もあった・・・そして試験の中で無傷で勝ったのは秋だけ。そんな秋に校長は商談を持ちかけたということ。オシリスレッドとして入学し、オシリスレッドの生徒たちのやる気を向上させるために学費免除などをしたと

「なるほど・・・秋はそれを承知していたわけですね、校長」

「ええ、元々彼はライエロークラス、いえ、オベリスクブルークラスにまでなつてもいいくらいでした。断られてもライエローとして入学し、遊城十代君・・・君にこれを頼んだかもしれません」

「お、俺？」

「クロノス先生を破ったんだ・・・そういうことも視野にあったんだろ」

三沢が言う。そんなもんかなあ・・・

「じゃあ校長先生は知っていたんですか？秋が武藤遊戯の従弟だつて」

「いえいえ、知ったのはごく最近ですよ。依頼した時にご家族の關係を見せていただきましてね、その時に知りました・・・しかし、我が学園の生徒にあの様な生徒がいるとは」

多分あいつのことを言ってるんだろう。

「うっ・・・」

ベッドから声が・・・

「秋！」

「じゅっ、だい・・・？」

ゆっくりと身体を起こす秋。身体が重そうだ。

「駄目よ、まだ寝てなきゃ・・・」

「ありがと明日香・・・大丈夫」

明日香に支えられ、上半身だけを起こす秋は頭を抱えていた。

「ご・・・保健室だよな？俺、どうしたんだ・・・？デュエルして・・・それから・・・あれ？」

秋・・・あの時のことを忘れてるのか？

『お前が！お前があああ！』

「デュエルが終わった後、お前は倒れたんだよ・・・その、緊張の糸が切れたんだろう」

三沢がその辺のことを濁して言う。あの時のことは言わないほうがいいかもしれないな。

「そっか・・・みんなに迷惑かけたんだな、ゴメン」

「気にすんなよ、悪いのはあの生徒だしさー！」

「そっだ・・・あいつは」

俺が言おうとした時、校長先生が前に出て来た。

「どうも、武藤秋君」

「校長先生・・・ですね、どうも」

「申し訳ない」

深く校長先生が頭を下げた。全員が驚く。もちろん秋も

「あの、まったく話がかめないんですが」

「君のような実力者をオシリスレッドから入るように頼み、目立つことをさせて・・・再び君にトラウマを掘り起こさせることをさせて

しまった。あの生徒を高等部に上げてしまった私達教師にも責任がある」

「あ、あの・・・頭を上げてください校長先生、別に気にしていませんよ」

この後校長先生はお詫びと言うことで秋に今度の試験でブルーに上がるように言ったが、自分の実力でしっかりと上がれるようにすると言って断り、校長先生は出て行った。

「それにしても、平気そうね・・・本当に大丈夫？秋」

「ああ、大丈夫だよ雪乃・・・」

「まったく、アンタは心配しかせないのね！呆れてものも言えないわー！」

「心配してくれたんだな、ありがとツアン」

「べ、べべべ別に！お礼なんてされても嬉しくなんかないんだからー！」

どこか、元気がないのは気のせいなのか？秋・・・

「それより・・・黙ってて悪かったな」

「何が？」

「俺が、伝説のデュエリスト『武藤遊戯』の従弟だ・・・なんて」



ああ、なんだ。そのことが

「別に気にしてないぜ！確かに遊戯さんはすごいデュエリストだけど秋は秋だろ？」

「そうっす！秋君は秋君であって、遊戯さんは関係ないっすよ」

「別に遊戯さんの従弟だからって変な目で見たりしないんだなあ」

「そうだとお前はお前だ」

「それに、言いたくないことなら別に言う必要はないでしょ？」

「秋は秋よ・・・それ以上でもそれ以下でもない。私がいいのは武藤遊戯の従弟としての貴方ではなく、武藤秋としてのあなたよ」

「べ、別に、気にしてなんかいいわよ。アンタはアンタなんだからねっ！」

俺、翔、隼人、三沢、明日香、雪乃、ツァンが言う。

「俺達は仲間だ！辛いことがあつたら一緒にいればいい。だろ？秋」

俺の言葉に、秋は短く笑った。

「ああ、そうだな」

十代達は自分の寮へと帰った。俺は保健室で朝を迎えることになり  
そうである。

『マスター……大丈夫ですか？』

「ミラか……ああ、ごめんな。心配掛けただろ」

『いえ、いつものマスターになってくれてよかったです』

「……？いつもの、か。さっきの俺はそんなに怖かったか？」

俺が言うと、ミラは驚いた顔になった。

『もしかして……さっきのこと覚えていたんですか！？』

「一応な、止めようとしたんだが歯止めが聞かなかった……武藤  
秋は止まろうとはしない」

『……？それってどういう……』

ミラには……話しても問題ないのかな

「ミラ、俺は誰だと思う？」

『マスターはマスターですけど……』

「俺はな、武藤秋であり、武藤秋ではない……俺は『城戸秋』と  
いう別の名前が存在する」

ミラはよくわからないという表情だ。

「俺はこの世界の人間じゃないんだよ、ミラ……」

### Sideミラ

マスターの説明は、よくわからないと思いました。この世界がアニメの世界？今いるマスターは本来のマスターではない？わからない！わからない！わからない！マスターは何を言ってるの！？マスターはマスターなのに！

「“本当の”武藤秋は……知つての通りいじめを受けていた。俺はそれを夢で見た。そして……“武藤秋”はこの世界でこう願った。『この世界から消えてしまいたい』と」

『……！』

「そして何の因果か、俺はこの世界で“武藤秋”となつてしまった。そしてミラ、お前を始めとするこの世界ではまだ作られていない『シンクロモンスター』『エクシーズモンスター』を俺は連れてきてしまったんだ」

『……』

「だから、俺は……目の前にいるのは、武藤秋ではないんだ。別の人間なんだよ。俺はお前の主である資格はない」

『違いますっ！』

私はマスターの話聞き終えてから、私は思わず叫んでしまった。

「ミラ？」

『マスターは優しくて、良い人で、もうおバカが付くくらいお人好しで！いつもいつも他人のことはすっかり心配してる方で！マスターが“武藤秋”という人物でなかったとしても！私は『あなたの』精霊なんです！次言ったら怒ります！』

肩で息をしながら私は言いたいことを全てマスターにぶつけました。するとマスターは驚いた顔をしていましたが、すぐにクスクスと笑っていました。

『ま、マスター？』

「ありがとうミラ・・・そう言ってくれると嬉しいよ」

『マスター・・・』

「それに、ミラがカードの絵柄通りに怒った顔になった・・・くく・・・」

鏡を見ると、私の怒った顔が映りました。

『そ、それは写真写りが悪いんですっ！気にしているんだから言わないでください！』

「ああ、悪い・・・でもありがとう、ちょっとだけ答えが見えたかも」

『え？』

「俺は俺でしかない・・・俺は“城戸秋”だ。でもこの世界では武藤秋としてその魂を引き継ぐ。この世界に城戸秋はいない・・・俺は“武藤秋”なんだ。いつか、本物の武藤秋がこの世界で目覚めてから・・・彼が悲しい思いをしないように、この世界で生きて行く」

『マスター・・・』

マスターの顔が、心なしか寂しそうな眼をしていました。

「いつかあいつらにも話さないとな・・・さて、明日も早い。寝るか」

『はい、おやすみなさいマスター』

「ああ、おやすみ」

マスターはそう言ってベッドの中に入って目を閉じてしまいました。マスター・・・この世界での絆は貴方のものです。決して、それは武藤秋の絆にはならないですよ？貴方の答えは自身を傷つけてしまつんですよ？本当にそれでいいんですか？元の世界に戻ってしまったら・・・私とももう会えないかもしれないですよ？その時私はどうしたらいいんですか？教えてください、マスター・・・

Sideブラック・マジシャン（マハード）

・・・まさか、武藤秋殿の身体にまったく別の人格が宿っていたとは。まるで千年アイテムの二重人格のようだ。今の私のことといい、

未来からシンクロ召喚という力を持つ不動遊星、そして未来の遊城十代が来たことといい・・・もはやちよつとやそつとの異常な事態に驚くことはないと思っていたが・・・まさか私達のこの世界はアニメの世界だなどとは・・・

『お師匠様』

『マナか・・・』

『秋さんの中に宿るもう一人の秋さん・・・まるでマスター達みたいですね』

『それともまた違うだろう・・・秋殿の身体に宿るもう一人の人格はまったく別の世界から来た人格だ・・・何故そのような人格があり、乗り移ったのか・・・』

マスターはこれを見越して私達を彼の元へ送り届けたのだろうか。

『でもでも・・・秋さんの中の秋さんは別世界からの人格ですけど・・・どうして元々の秋さんはこうなったんでしょうか？彼は千年アイテムの影響なんか受けていませんよね』

『確かに・・・秋どのの中の秋殿は言っていたな・・・彼が『この世界から消えてしまいたい』と懇願したと・・・』

『その願いが何かを引き金に秋さんの中の秋さんを引き寄せてしまった？』

もしかしたら・・・その秋殿の中の秋殿と入れ替わったかもしれないとも考えたが・・・先ほどの行動からしてももしかしたら、心の奥底

に秋殿の人格もまた眠っているのかもしれないな……

『お師匠様は結局どうなさるおつもりなんですか？』

『……マスターは我々に言った。『彼を守ってくれ』とだが彼は『武藤秋』ではない。しかし……』

『今の秋さんも放つてはおけない……ですよ？』

『ああ、その通りだ』

マナは私の答えを先読みして笑顔になる。今の秋殿もまた違う形で支えて行かなくてはならない存在。普通いきなり別の人間に乗り移ったなどとなれば混乱したり発狂したりするもの……だが彼は自らの絆を犠牲にしても“武藤秋”として生きると言った。ならば我々もその答えが正しいのか……最後まで見届ける必要があるのかもしれんな

Sideブラック・マジシャン・ガール（マナ）

お師匠様がそう仰るのなら、私も全力で秋さんを手伝っちゃうもんね

（うーん……でもどうやって会うか、が問題だよ。私はマスター……遊戯さんしか使わないとまで言われているだもん……デッキで使う確率は凄く低い。となるとお）

何か良い考えはないかな？あれ？なにこれ……学園祭要項？鮎川先生って人のかな。何々？レッド寮主催コスプレデュエル？あは

良いこと思いついちゃった！お師匠様に知られたら怒られちゃうから黙っておこーっと

『マナ、どうした』

『ふえ？い、いえいえお師匠様！さ、私達も休みましょう！』

『あ、ああ・・・』

うふふ、みんなが驚く顔、早く見たいなあ



## 仲間（後書き）

秋の本音と、マナの企て。この企てフラグはセブンスターズ編まで多分ないです

その前に遊戯のデッキ騒動がありますからねえ

次回もお楽しみに

## 闇の決闘（前書き）

ということ、タイタン編です。秋はタイタンとは戦いません

秋「今日の最強カードは・・・『E・HERO エアーマン』か」

E・HERO エアーマン

このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、

次の効果から1つを選択して発動することができる。

自分フィールド上に存在するこのカード以外の「HERO」と名のついたモンスターの数まで、フィールド上に存在する魔法または罠カードを破壊する事ができる。

自分のデッキから「HERO」と名のついたモンスター1体を手札に加える。

秋「このカードの強みはE・HERO限定ではないため、D・HEROのデッキやE・HEROのデッキにも必ず刺さるといのがいいな。攻撃力も1800と高いうえ、第一効果も非常に強い」

昔はこのカードが制限かかるまえに「エアーマン」を召喚して「エアーマン」を手札に加えるなんていうカオスな時代があったものです

## 闇の決闘

Side秋

あれから少しだけ時間が流れた。今日は怖い話をするということらしい。はぁ……この後って確かタイタンとのデュエルだろ？俺は眠いから寝るぞ……ん？大徳寺先生

「おや？どうしたんだにや秋君、食堂でみんなは怖い話をやっているのにや」

「自分夜は睡眠を取るためだけにあると思ってるので……寝ます」

俺が言うと、大徳寺先生はにやりと口を釣り上げた。

「おやおやあゝ？もしかして秋君は怖い話苦手なのかなにやゝ？」

「……さあどうでしょう？十代がこの世界にはカードの精霊がいるとも言っていましたし、案外すぐ近くにいるんじゃないですか？あ、大徳寺先生の後ろ……」

「にやにや！？」

「ファラオがいますね」

ファラオが後ろで眠そうにあくびをかいていた。

「せ、先生をからかうもんじゃないのにや！」

「いや、先生が騙されんのが悪いんでしょ……では、おやすみなさい」

「おやすみなのにゃ（ちっ）」

俺はこうして部屋へと戻る。アムナエルさんアンタの策略には乗らんよ？後々セブンスターズが来るときに俺のデッキを明かすわけにもいかないからな。

『マスターは行かないんですか？』

「ああ、俺は眠いからな……」

『授業でいつも寝ていますよね』

……気のせいだ

「さっさと寝て……明日はデッキを作るか」

あんまり作らないロックデッキなんてのもどうだろう。オベリスクブルーとかはこういうデッキを嫌う。ロックを解除しきれないのは自分の実力だと分かってしまうからな。部屋のドアを開けると、そこには雪乃がいた。

「………雪乃、なんでここに」

「あら……私がここにいたら駄目？」

駄目も何も、ここレッド寮だぞ

「貴方だってイエローの寮があるのにこちらにいるじゃない」

「俺は男、雪乃は女・・・男女じゃ扱いが違うだろ」

「うふっ・・・いいじゃない。それとも私がここにいたらだめ？」

別にいいけどさ

「実は貴方に相談があるの」

「相談？」

珍しいな、雪乃が俺に相談なんか・・・普段は自分のことは自分の力でなんでも解決しようとするのに。どうしたんだ？

「実は明日香のことなんだけど・・・」

「明日香？明日香がどうかしたのか？」

「最近あの子、一人でどこかへ夜出かけているの・・・場所を聞いても『ちよっと』と言って出て行ってしまっし」

それって・・・旧校舎のことか。まいったなあ・・・

「もしかして、明日香がどこに言ってるのか突きとめようとしたりする？」

「ええ、よくわかったわね、その通りよ」

といわれても……

「お願いよ、私……明日香が心配なの」

雪乃が俺を見る。で、何故か俺にひつつく……

「わかった……行こう」

ここまで言うんだ。雪乃も友達が心配なんだろう。でも……

「明日香をどうやって探す？」

「あら、PDAで登録されたPDAは互いの場所を確認できるのよ？」

そんな機能があったのか……これ高性能なんだな。さすがK.C社……

「さ、行きましょう」

雪乃に連れられ、俺は明日香を追うことになった……あーあ、結局タイタンとの戦い見届けなきゃいけないんですか。こうして俺はデッキを手に取り、外へと出ることにした。

少年少女移動中

元特待生寮

「ここは・・・」

「ここは特待生寮ね・・・前に明日香が言っていたわ。昔、ここでお兄さんが行方不明になったと」

行方不明、ね・・・実際はセブンスターズの一人となってしまうているわけだが。ここで言う必要性はまったくないから言わないが・・・

「なかなか不気味だな」

「え、ええ・・・そうね」

・・・おんやあ？雪乃ちゃん

「どうした雪乃、顔が青いぞ？」

「なんでもないわ・・・」

「そうか・・・？ならこの手は？」

見れば雪乃が俺の手をしっかりと握っていた。

「こ、これはその・・・あの・・・しゅ、秋が怖いかなって」

「・・・あ！あそこにカードの精霊！」

「ひうつ！」

普段の雪乃からは見れないようなしぐさだ。正直なことを言つと

超が付くほど可愛い。

『実際に私いますけどね』

まあね。指差した方向に本当に様子を見に行ったミラがいたわけだが

「い、いじわる・・・」

「ごめんごめん・・・」

『はたからみればバカップルにしか見えませんよマスター』

そうかなあ？俺はこういう雪乃の意外な一面が見られて面白いだけ  
なんだけど。雪乃はまだ震えている。普段のあの性格を見ていると  
ギャップが凄いくらい面白い。

「雪乃、明日香のPDAの反応は？」

「え、ええ・・・この中みたいね。あら？十代の坊やたちの反応も  
あるわ」

「・・・そうだ、あいつら怖い話をしていたな。肝試しにここにも  
も来たのか？」

頭を抱えたくなる。原作通りタイタンが出てくるということだ。そ  
してどっかにクロノス教諭でも潜んでいるだろう。

「まあとりあえずあいつらが戻って「きゃああああああああつ！」  
ん？」



「今の声は・・・明日香？」

どうやらタイタンが明日香を連れ去ったらしい。

『マスター・・・この中から邪悪な気を感じます』

・・・確か闇に取り込まれるんだっただな、タイタン。こここの屋敷に何かしら仕掛けをしていたんだっただか？

「雪乃、俺は様子を見てくるから先に寮へ戻れ」

「いやよ」

ぱつぱつと切り捨てる雪乃。先ほどの怯えた表情はもうない

「明日香に何かあったのなら・・・私も行くわ」

「どっつなっても知らないぞ？」

「愚問ね、友達を助けに行くことに理由があるの？」

「だな・・・行くぞ、雪乃」

こうして俺達は旧特待生寮の中へと入って行った

寮内

「・・・暗いな」

電機はPDAの電気を使用して周囲を見る。辺りは暗く、周囲の壁なども穴があいている。まるで何十年も経って壊れてしまったように

「どっちかしら」

「とりあえず・・・手分けは危険だ。一つ一つ探すしかない」

『マスター！あっちから闇の気配が大きくなっています』

「わかった・・・こっちだ」

「え？」

とりあえず奥へと進む俺達。するとそこには闇の空間があった。

「これは・・・」

「な、何？これは・・・」

まるでドーム状のものが覆っている。中では十代とタイタンがデユエルしている。

「これはなんなの・・・？」

遮られるドーム状の何かは壁となっている。どうやら中の様子を見れていても外の様子を見ることはできないらしく、こちらの声も届いていないと見える。

「きゅっ！？」

俺達の目の前になにか得体のしれないものが現れる。人の形をした何か・・・おいおい、俺は原作でこんなの見たことないぞ・・・闇のゲームをしている人間の所に人を近づけないための仕掛けだろうか？腕にはデュエルディスクが装着されている。しかもかなり古いタイプのものだ。

『たちいること、禁ずる・・・』

「悪いが通してもらおう・・・俺は一刻も早く帰って寝たい！」

デュエルディスクを構えると、その得体のしれない物も構えを取った。

『闇のゲーム・・・開始』

「闇のゲームね・・・まさかやることになるとは思わなかったぞ」

「『デュエル  
決闘！』」

秋LP4000

闇のゲームの番人LP4000

「先攻は俺がもらおう・・・ドロー！」

十代にこのデッキ見られなくて良かったかも。

「俺は『E・HEROエアーマン』を召喚！」

E・HEROエアーマン ATK1800/DEF300

「HERO!? 秋、貴方HEROデッキも使うの?」

雪乃が驚いた顔になる。何を今更。俺は一杯デッキ持っているでしようが。

「エアーマンの効果! 召喚に成功した時デッキから『HERO』と名のついたモンスターを1体手札に加える! 俺は手札に『E・HEROオーシャン』を加え・・・カードを2枚セット、ターンエンドだ」

「私のターン・・・私は手札から『レベル制限B地区』を発動・・・これによりレベル4以上のモンスターは全て守備表示となる・・・さらに手札からモンスターをセット・・・カードを3枚伏せてターンエンド」

相手の手札は1枚・・・そして攻撃してこない。そしてレベルB地区・・・これはまさか?

「俺のターン! ドロー! 俺は手札から『融合』を発動! 手札の『E・HEROアイスエッジ』とフィールドのエアーマンを融合! 現れる、『E・HEROアブルート・Zero』!」

E・HEROアブルートZero ATK2500/DEF2000

氷を纏ったE・HERO・・・漫画版だと紅葉さんの最強HEROだ。

『だがレベルB地区の効果が適用される』

「んなこたあ分かっている・・・俺はさらに手札から融合回収を発動！手札にエアーマンと融合を戻し、再びエアーマンを召喚する！」

E・HEROエアーマン ATK1800/DEF300

「そしてエアーマンの2つ目の効果を発動！このカードが召喚に成功した時、このカード以外の『HERO』と名のついたモンスターの数だけ相手の魔法・罫を破壊する！俺のHEROはエアーマンを除き1体！よって俺はレベル制限B地区を破壊だ！だがこのターンモンスターは守備表示・・・攻撃は出来ない。ターンエンド」

『私のターン・・・私は手札からモンスターを一枚セット・・・ターンエンド』

「俺のターン！ドロー！」

やはり攻撃してくる気配がない・・・このままだと面倒なことになりそうだ。

「俺はモンスターたちをそれぞれ攻撃表示に変更！さらに手札から『E・HEROプリズマー』を召喚！プリズマーの効果発動！俺は『E・HEROダークブライトマン』を見せてE・HEROネクロダークマンを墓地へ送る。」

E・HEROプリズマー ATK1700/DEF1100

「さらに手札から融合を発動！フィールドのネクロダークマンとなったプリズマーと手札のバーストレディを融合！現れる『E・HEROノヴァマスター』！」

E・HEROノヴァマスター ATK2600/DEF2100

これでフィールドには3体のモンスターがいる。あの伏せカード3枚が気になるが行くしかない。ここは臆せず攻める！

「バトル！ノヴァマスターで右側の伏せモンスターに攻撃！」

『伏せていたのはマシュマロン・・・戦闘では破壊されない。そしてリバース効果で相手は1000のダメージを受ける』

マシュマロン ATK300/DEF500

「うわっ!？」

マシュマロンがヒーローたちを擦り抜け、俺にかみついた。

「ぐっ・・・!？」

噛みつかれた痛みが浸透し、血が流れる。

「秋!？」

雪乃が悲鳴を上げる。そりゃソリットビジョンに噛まれて血が出れば驚くだろう。

「大丈夫だ・・・バトル続行！アブソルトZeroでもう一体の伏せモンスターに攻撃！」

『セットされていたのはペンギンソルジャー・・・フィールド上に

いるモンスターを2体まで手札に戻す。貴方のノヴァマスターを戻す」

「なっ……！」

ノヴァマスターがエクストラデッキに戻る。

「俺はカードを1枚セットしてターンエンド」

『私のターン……私は手札から再びモンスターをセット……さらに私はライフを2000払うことで魔法カード『終焉のカウントダウン』を発動20ターン後私は勝利する……ターンエンド』

闇のゲームの番人 LP4000 LP2000

残り20ターン

やっぱり、終焉のカウントダウンデッキかよ。なんで今まで発動……あ、今まで手札になかったのか。こいつのデッキはロックだ……このロックを破るのは面倒だな……

「俺のターン！ドロー！強欲な壺を発動して2枚ドロー！俺は手札から『E・HEROオーシャン』を召喚！これによりアブソルートZeroの攻撃力は500ポイントアップする！」

E・HEROオーシャン ATK1500/DEF1200

E・HEROアブソルートZero ATK2500/DEF2000  
ATK3000/DEF2000

「さらに手札から『ミラクル・フュージョン』を発動！墓地のプリズマーとバーストレディを除外！現れる、『E・HERO The シャイニング』！」

E・HERO The シャイニング ATK2600/DEF2100

「シャイニングの攻撃力は除外されたE・HERO×300ポイント上昇する」

E・HERO The シャイニング ATK3200/DEF2100

「・・・カードを一枚伏せ、ターンエンド」

「だめだ、いくら召喚しても攻撃が通らない。あのセットカードにもうかつには攻撃ができない・・・」

「私のターン・・・後19ターン・・・私は伏せていた重力の網・グラヴィティバインド・を発動する。そしてペンギンソルジャーを反転召喚。The シャイニングとペンギンソルジャーを戻す。さらにモンスターをセットしてターンエンド」

「ロックの典型だな・・・どうするか」

「俺のターン・・・ドロロー！」

「・・・よし！これでロックを破ることが出来る！」

「俺はスタンバイフェイズにオーシャンの効果によりエアーマンを



手札に戻す！手札から命削りの宝札を発動！カードが5枚になるようにドロロー！5ターン後全て捨てる！さらに手札から速攻魔法『マスク・チェンジ』を発動！このカードは自分フィールド上に表側表示で存在する「HERO」と名のついたモンスター1体を選択して発動する。選択したモンスターを墓地へ送り、選択したモンスターと同じ属性の「M・HERO」と名のついたモンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。アブソルトZeroを墓地へ送り、現れる！『M・HEROヴェイパー』！」

M・HEROヴェイパー ATK2400/DEF2000

「そしてアブソルトZeroの効果！このカードがフィールドを離れた時、相手のフィールドのモンスターを全て破壊する！」

『……ぐっ！だが……攻撃は出来まい』

「どうかな？俺の手札にはこいつがいるんだぜ？俺はエアーマンを召喚して再度効果を発動！このカード以外のHEROと名のついたモンスターの数だけ魔法罫を破壊する！俺のフィールドには2体！よってグラビティ・バインドと伏せカードを破壊！」

E・HERO エアーマン ATK1800/DEF300

さっさとオーシャンを手札へ戻せばよかったのに……まあ、効果を知らなかったんだろうけど

「これで終わりだ！M・HEROヴェイパーで攻撃！」

『………！』

闇のゲームの番人 LP2000 LP0

ダイレクトアタックを受けた闇のゲームの番人はそのまま消えて行った。

「ふう……」

「秋、大丈夫？」

「ああ……問題な「嘘おっしやい？」「いあっ！」

雪乃にマシユマロンに噛まれた方の腕を叩かれる。

「……信じ難いことね。ソリットビジョンが現実化するなんて」

「だな……これが闇のゲーム……いや、デュエル闇の決闘」

そんなことを話していると、ドームが消え、十代達が姿を現した。十代は明日香をお姫様抱っこで抱えている。

「十代、翔、隼人」

「あれ？秋と雪乃じゃねえか……どうしたんだこんなところで」

少年説明中……

「へえ……俺も同じだ。闇のゲームをするって言った奴……タイトルって奴と戦ってさ。最初はただのいかさまだったのに途中

から変な闇みたいなのが・・・」

と、説明する十代。そして小声でハネクリボーが助けしてくれたんだと言っていた。詰まる話は原作通りと言うことだ。結局タイタンは闇の中に消えた・・・再びセブンスターズとしてここに来ることは間違いないわけだが、今は今度のことを考える必要がある。今度・・・  
・ 査問会が来るな。あーやだやだ

「とりあえず帰ろうぜ」

寮の外を出て目を覚ました明日香が顔を真っ赤にしてすぐに十代から降りた。十代は明日香を送って行くと歩いていく。そういえば明日は休みだったな・・・で

「雪乃、お前も寮に戻らないのか？」

「あら、秋の手当ては私がするつもりなのよ？なんで寮に戻る必要があるのかしら？」

「このくらい1人で出来るよ」

「いいから、けが人は甘えなさい」

こうして寮に連行されて行く俺だった。

Side Out

「隼人君、僕たち空気だね・・・」

「それ言っちやだめなんだなあ・・・翔」

闇の決闘（後書き）

なんかあんまりロックじゃなかったですね。そもそもロックデッキはHEROデッキみたいな展開力が広いデッキは得意じゃありませんからね。

個人的にロックデッキは苦手なのでもっと勉強します

## 怒り（前書き）

今回も決闘はありません

雪乃「今日の最強カードは・・・『狂戦士の魂』よ」

狂戦士の魂

手札をすべて捨てる。デッキからモンスター以外のカードが出るまでカードをドローし、全て墓地に捨てる。モンスターカードを引いた回数分、攻撃力1500以下のモンスターは追加攻撃できる。

雪乃「私は理不尽や友達が傷つけられるのは嫌いな・・・うふふ」

ドーマ編見たとき吹きました。このカードの効果には。そして神ドロウというか、明らかに事故としか思えないドローをした王様。羽蛾、悪いことをするからそうなるんだよ？

このカードは実際TFで使用できるカードです。

## 怒り

闇のゲームから三日。俺は連休で休日なのでまったりと寝ることにした。で、朝目を覚ますと雪乃が隣で寝ていた。何故？

「雪乃？」

「んう……」

腕を掴んで離さない雪乃。こいつ……こんなに力が強かったのか？

「雪乃、雪乃！」

「ん……あら、秋……おはよう」

「おはよう……まず、なんで俺のベッドで寝てんの？」

「あら……嫌だった？」

嫌というか、この子はどうしてこうもうちよつと恥じらいと言つても持たないのだろうか？疑問で仕方がない。まず、なんで自分専用のパジャマまで持って来てるんですか？無駄にエロいの。ここ最近腕の怪我を口実にここに泊まりに来ている雪乃。とりあえず着替えるためにトイレへ。パジャマからジャージに着替えた。食堂は……ああそうだった、この時間はまだ空いてない。無性に腹が減つてしかたがないな……お茶わかして冷蔵庫に……ああ、昨日買ったゼリーがある。

「あら・・・お茶飲むの？」

「ああ、雪乃は？」

「いただくわ」

とりあえず朝なので緑茶。机に広げたデッキを見る。機皇帝デッキ・  
・面白いかもなあ。この世界はパーツが存在している。OCGの  
ように一つになっていないのだ。ワイゼル と4つのパーツ+。  
これは非常に楽しい。相手がシンクロしない限りどうだろうと思っ  
てしまうが

「そう言えば秋、怪我は平気？」

「ん？ああ・・・なんか知らんけど平気、あんまり痛くない」

傷はほぼ塞がっている。マシユマロンの噛みつきが予想以上に痛か  
ったが・・・

「さて・・・今日は『ドンドンドン！』・・・はあ」

来た。この朝早くから・・・常識はずれにもほどがある。

「我々はアカデミア倫理委員会の者だ！開けないとここを爆破する  
ぞ！」

「随分物騒ねえ・・・」

確かに。てかホントに爆発させる気じゃねえだろうな。雪乃と部屋  
の隅まで避難。しばらく待ってみる。



「……………」

一向に爆発する気配がない。

「どれだけ幼稚な脅しなのかしら……今時“爆破させる”なんて

「……確かに」

原作だと慌てて十代が開けていたからな。実際どうなるかと思っ  
たが……

ドンっ！ドンっ！

蹴っている音が聞こえる。爆破しないんだね……ふむ……

『あ、マスターおはようございます』

「（んーと……おはようミラ）」

珍しく遅く起きたミラが、隣で不思議そうに俺達を見ていた。テレ  
パシーみたいに心に念じれば最近では言葉が話せることが分かった  
のでこうして話すことがある。現状を把握したらしいミラが杖を取  
りだした。

『なんか知りませんが……ドアを開けられないようにした方がい  
いですね』

「（そだね）」

何かの魔力なのか知らんけど杖を振ることでミラがドアを強化したらしい。ドアの向こうから悲鳴が聞こえた。

『とりあえずドアを鉄級の硬度に変えてみました』

「（おお〜・・・）」

などと感心する俺。すごいな魔法って・・・てか、そんな魔法があるのか。雪乃は何が起きたのか分からず首を傾げるばかり。すると女性の声が聞こえてくる

「もう一度言うが我々はアカデミア倫理委員会の者だ・・・すぐにここを開けて出て来い」

「どうするの秋・・・」

「どうするもこうするも放っておけばいいんじゃないの？」

校長先生との契約もあるしな、退学ということはないんじゃないの？多分・・・

「貴様を連行するように命令を受けている。早く出て来い！落ちこぼれのオシリスレッド！」

プチン

・・・ん？プチン？

「・・・」

雪乃がゆらりと立ち上がり、ドアの方へと歩いていく

「ゆ、雪乃？」

声をかけるが反応なし。そして勢いよく足を構えた。あれはドアを蹴り飛ばそうとしてるな

「（あー・・・ミラ？）」

『大丈夫です、元に戻しました』

ドコッ！

勢いよく扉が開いた。

「オゴッ！」

そして近くにいたのだろう。査問会の女性が吹っ飛んだ・・・ここが1階なのが幸いだろうか？痛そうに鼻を抑える女性。あーあー痛そう鼻血出てるじゃん。周囲の男たちは女性に駆け寄り人間と男性寮のオシリスレッドの寮であるはずの場所に雪乃が出て来たことに驚いている人間がいる。

「貴様・・・何をする！」

「あらごめんなさい・・・勢いよく開けたらぶつかっちゃったのね」

悪気の1つも見せない雪乃。正直超怖い。

「そもそもオシリスレッド寮に何故ブルーの女子生徒がいる！不純

異性交遊だぞ！」

「随分と古臭い言い方ねえ……『オバさま』」

「お、おば……貴様あ！」

キレる女の人……そりゃ年上だけとおばさんはないでしょおばさん……

「そもそも、貴女にいちいち文句を言われる筋合いはないわ。こちらには正当な理由としてここにいる……それをとやかく言う権利はあるのかしら？ねえ、そこの坊や」

「ぼ、坊や！？俺のことか！？」

「ええ……貴方はどう思う？もし、仲のいい女友達といて理由があつてそこにいるのにその言い分を聞かずにいきなり不純異性交遊だなんて言われたら……」

「そ、そりゃ……ちよつとムツとくるけど……」

「貴様はどつちの味方だ！」

キレる女性。雪乃に語りかけられた男性はビクリと身体を震わせた。駄目だこりゃ、完全に雪乃のペースだな……

「おいっ！そいつを抑えろ！」

「失礼します」

と、一言別の男性が言って雪乃を抑えようとするが・・・

「気安く触らないで、坊や」

その一言と同時に近づいた男の股間に蹴りを入れる雪乃。知つての通りオベリススクブルーの女子生徒が着用するブーツの先は大変尖っている。当たった場合は非常に痛い。何人かがそれを見て痛そうに股間を抑えている。

『マスター、アレって痛いんですか？』

「・・・・・・・・・・どうだろうね、男はとても痛いよ」

蹴られた男性は泡を吹いて倒れる。どんだけ本気でやったんだ？雪乃のやつ・・・

「な、何をしている！さっさとそいつを抑えろ！」

言われても反応なしの男性陣・・・もう既に雪乃の怖さに逃げ出している人もいる。残っているのは・・・あれ、怖くて動けない感じですか。

「つく！なんて情けない！それでも倫理委員会か！」

「いや、アレは多分男は誰でも逃げるよ？」

『同感です』

なんて遠くから眺めていると大徳寺先生が駆けつけて来た。遠くで俺達のことを発見したのだろう。雪乃をどうにか説得し、俺はとり

あえず倫理委員会に連れて行かれることとなった。

真つ暗な部屋

「「退学うゝ!?!?」」

「・・・・・・・・・・」

『三日前、遊城 十代以下3名は閉鎖され立ち入り禁止となっている特別寮に入り込み、内部を荒らした。調べはついている!』

倫理委員会の女性と、その後ろにボコボコにされた倫理委員会の男性が数人。どうやら女性から制裁を受けたようである。俺は画面の横に映る校長先生を見る。

「校長、この人じゃ話にならないんでチェンジで」

『なっ・・・・・・・・! 貴様舐めているのか!』

「・・・・・・・・まず、第一の疑問。それ誰からの情報?」

『答える必要はない』

バツサリと切り捨てる女性だが、俺は面倒なのでタッグデュエルをしないように促そうとする。

「じゃあ証拠がないと・・・・・・・・それなのに無実の生徒を退学にするんですか」

『・・・匿名で通報があった』

「匿名じゃ証拠になりませんよね」

『つつ、うるさい！』

駄目だこの人、早くなんとかしないと。さて、なんとか切り返さないと退学だ・・・制裁タッグデュエルをしてもいいが、俺と十代でいけるかな

「失礼するわ」

『シニョーラ天上院とシニョーラ藤原・・・どうしたノーネ』

明日香と雪乃がそこにいた。明日香は妙にビクビクしているが、雪乃の余裕はどこから出てくるんだろうか。

「この3人の件に関しまして弁護として参りました」

そう言つて一礼する雪乃。気のせいかなあ？雪乃の頭から悪魔のハネが出て、後ろにしっぽが見える気がするんだけど・・・

「まず初めにですが・・・今回外出したことについては事実、認めざるをえません」

『はっ・・・！弁護と言つておいて自白とはな！』

馬鹿にした態度で雪乃を見る倫理委員会の女の人。だが雪乃はそれを無視する。

「しかしながら正当なる理由があるのならば・・・それは問題ない  
ものではありませんか？」

『正当な理由？何かあったのでしょうか』

「ええ・・・実は先日、泥棒がブルー寮内に侵入してきました」

『泥棒・・・ですか？』

・・・おい、雪乃？これってまさか

「そしてここにいる天上院明日香と私、藤原雪乃の下着、カード、  
金品を奪って逃走して逃げて行きました。しかし寮長の鮎川先生は  
出張でいらつしやらず、我々だけで対処せざるを得なくなりまして。  
そのためにもオシリスレッドの実力者である彼ら2人とライイエロ  
ーの彼に協力を要請したわけです」

嘘八百を並べる雪乃。明日香はドキドキしながら見ているのが分か  
る。十代が何か言おうとするが、翔がそれを止める。

『そんなことがあったのですか・・・』

『馬鹿なっ！我々はそんな話を聞いてないぞ！』

「よって、今回の原因は学園側と警備、さらにそれらを補佐とする  
倫理委員会の職務怠慢によって起こった事件であり、その3人に  
は罪はないと主張いたします」

雪乃の話はとても筋が通ったものだった。しかしクロノスが食い下



がる。

『待つノーネ、シニョーラ藤原』

「何でしょうかクロノス教諭」

『そもそも、なんでオシリスレッドに頼んだノーネ・・・そして何故特待生寮だと分かったノーネ』

「私、男子でオベリスクブルーに友人はいないものでして・・・彼らに頼んだ次第です。それに先に天上院さんが追いかけたもので。ねえ？天上院さん？」

「え、ええ・・・その通りね」

と、何とか答える明日香。これ以上言えばクロノスもあそこにいたことがばれるので余計なことはいえない。例え雪乃が嘘を並べようとも

『・・・』

「校長先生？最終的なご判断をお願いしたいのですが？」

『・・・そうですね、正当な理由がある以上は彼らを退学にすることはできません』

『しかし校長！彼らは査問委員会の方で強く疑われている！退学を覆すことは出来ん！』

「・・・黙らっしやいな、口の減らないその女」

『なっ・・・なんだと貴様!』

言いかえす倫理委員会の人だが、それ以上に雪乃が怖い。

「私達は不審者に襲われ、泥棒されて金銭的にも精神的にも被害を受けたの・・・秋に限ってはそれで怪我もしているわ。明日香も一時は人質に取られている。それなのに何? 貴方達は何も知らず、不審者がこの学園に入ったことも知らず・・・仕事もしないで何をしていたのかしら? 自分たちの起こした事態がどれほどのものか分かってないのでしょね。下手すれば・・・私達は死んでいたわよ」

確かに、あの闇のゲームは負ければ死を招く。俺達は十代から事情を聴いている。逆に女の人は顔を青くしていた。

「私の両親は俳優と女優なのだけけど・・・こういった事態の時は良い弁護士を紹介してくれるわ・・・」

これは脅しだ。かなーり怖い。そしてそんな脅しに押し黙ってしまつ3人・・・正確には校長先生はただ黙っているだけのようだ。

「では校長先生、ご判断を」

『わかりました・・・今回の事態、不問としたいと思います』

『なっ!?!?』

「おっしやあ!」

「やったっす!」

驚く二人に喜ぶ二人。

『今回の件は言われてみれば多くこちら側に不備があります。不審者をこの学園に入れてしまったこと、女子生徒が被害にあっていること。非常事態に学園側が動かなかったこと・・・理由によっては制裁デュエルも考えましたが・・・』

と言う校長先生。第一、契約をしてる俺が退学すると困るのは校長だ。十代達も俺の友人と言うことになってるのであいつらがやめたら俺もやめるかもという校長の考えがあるのだろう。

『待つてください校長先生！』

『そうなのーネ！この子達が外に出た事実を認めないといけナイ！そして他の先生にも知らせなかつたノーネ！せめて制裁タッグデュエルで決めるノーネ！』

ふむ、とまた考える校長先生。すると俺を見た。

『どうしますか武藤君、クロノス教諭達はああ言っています』

「論外ですね・・・俺達が悪くないのになんで俺達が負けたら退学になるんですか。第一俺達が勝つてもメリットないじゃないですか・・・むしろ制裁を受けるのはそちらでしょう？」

『ぐぬぬぬぬ・・・』

『ではタッグデュエルで勝利した場合、今度の期末試験を免除しましょう。負けても反省レポートとそうですね、無断外出の罰という

ことで数日の謹慎……これでどうですか?』

期末試験免除か……ふむ、おいしいな。

「それは俺達5人ですか?」

『デュエルする君たち3人です』

「良いでしょう、受けます……十代達はどつ?」

俺が聞くと十代達が頷く

「おう!期末試験免除だなんてすげえぜ!」

こうして結局タッグデュエルをすることにはなったが……色々  
話が違う方向へと進むこととなった。

レッド寮 秋の部屋

「さて、どうしようか」

現在、俺達5人とツアン、三沢、隼人がいる。いつものメンバーだ

「俺達がそれぞれどうタッグを組むかだな」

「見たところ、十代の坊やと翔の坊やは相性が良いみたいだけど?」

原作でも迷宮兄弟相手に奮戦していたもんなあ

「で、でも・・・僕とアニキで釣りあうのかな」

「別に良いんじゃない？」

「翔は頑張っているからきつと大丈夫なんだなあ」

「となると問題は・・・秋だな」

どのデッキでやるのかなあ・・・シンクロデッキやエクシーズは他の人が同じデッキでない限り難しい。基本この世界ではリリースか融合に特化していることが多い。

「シンクロデッキの基本は低レベルモンスターの掛け合わせだ。エクシーズも同じようなもんだし、そういうデッキ特化ならどうするかも考えないとな」

「別にシンクロだけじゃないさ・・・大体の種族のデッキは持っているし・・・でも誰かと組むかとなると難しい気も・・・」

「ねえ、そのタッグデュエル・・・僕が組んだら駄目かしら。べ、別に他意はないわよ！？私の六武衆ならレベルも調節しやすいと思っただけなんだからねっ！」

声を上げたのはツアン。六武衆デッキだったな・・・それぞれ真・六武衆は持ってないものの、六武衆はレベルが3〜4の構成だし補助も強力だ・・・いけるな

「ツアン、タッグデュエル組んでくれるか？」

「しょ、しょうがないわね！どうしても言うなら組んであげな

くもないわ!」

タッグは決まった。制裁デュエルまで待つか……

## 怒り（後書き）

怖い雪乃さんでした。私の小説の雪乃さんは結構表情豊かです

次回はVS六部衆ですお楽しみに

## 武士（前書き）

相変わらずのデュエルタクティクスの低さ……（汗）  
自分が悲しくなりますね。もっと勉強しよう……

質問なんですけど、ブラックフェザー・ドラゴンの効果って相手ターンでは発動……できませんでしたよね？

秋「……とりあえず、今日の最強カードは『六武衆の師範』か」

ツアン「僕のデッキの中でも主軸になるカードよ」

自分フィールド上に「六武衆」と名のついたモンスターが表側表示で存在する場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。

このカードが相手のカードの効果によって破壊された時、自分の墓地に存在する「六武衆」と名のついたモンスター1体を手札に加える。

「六武衆の師範」は自分フィールド上に1枚しか表側表示で存在できない。

秋「自分のフィールドに特殊召喚され、効果で破壊されれば自身さえも戻すことが出来るからな」

DTで出てくるまではウルトラレアとしても非常に高いカードでしたねえ

最近でもウルトラはまだ高いかな……？

それよりも高いのが紫炎や真・六武紫炎、そして六武の門だろうか



## 武士

とりあえず、互いにどのようなデッキか分かりあうためにも、俺とツアンでデュエルすることになった。

「そういえばツアンとデュエルするのは初めてだな」

「そうね・・・僕もこの学校ではあまり無闇やたらとデュエルしたりしないから」

「・・・それは俺に言っているのか？十代に言っているのか？どっちだ」

「まあいいや・・・行くぞ、ツアン」

「ええ、僕は負けないわよ」

「デュエル！」

秋LP4000

ツアンLP4000

「僕の先攻！ドロー！僕は永続魔法『六武衆の結束』を発動する！このカードは六武衆と名のついたモンスターが召喚される度にカウンターが乗り、載っているカウンターの数だけドローできるわ！最大数は2つだけど・・・さらに僕は手札から『六武衆の御霊代』を召喚するわ！」

六武衆の御霊代 ATK500/DEF500

カウンター 0 1

「さらに六武衆と名のつくモンスターが存在する時、僕は『六武衆の師範』を特殊召喚する！来て、師範！」

六武衆の師範 ATK2100 / DEF800

「そして六武衆の御霊代はユニオンモンスター！よってこのターン僕は師範にこのカードを装備！これで攻撃力守備力が500ずつ上昇するわ！」

六武衆の師範 ATK2100 / DEF800 ATK2600 / DEF1300

六武衆デッキの基本的な動きだな・・・だけど紫炎を引かなかったのか？

「さらに僕は六武衆の結束の上に乗ったカウンターを2つ取り除いてこのカードを破壊し、2枚ドロ・・・カードを3枚伏せてターンエンド」

1ターン目からいきなり2600のモンスターか・・・さすが六武衆デッキ

「俺のターン！俺は手札から魔法カード『希望の転生』を発動！2枚のカードを墓地に送ることで、2ターン後デッキからモンスターカードを1枚手札に加える！俺は『レベル・ステイラー』と『ポルト・ヘッジホッグ』を墓地へ送り、俺は『ジャンク・シンクロン』を召喚！」

ジャンク・シンクロン ATK1300 / DEF500

「さらにジャンク・シンクロンの効果で墓地から『レベル・ステイラー』を特殊召喚！そしてチューナーがフィールドに存在する時墓地から『ボルト・ヘッジホッグ』を特殊召喚！」

レベル・ステイラー ATK600 / DEF0

ボルト・ヘッジホッグ ATK800 / DEF800

「シンクロ召喚ね・・・いいわ、来なさい！」

「ああ！レベル1のレベル・ステイラーと、レベル2のボルト・ヘッジホッグにレベル3のジャンク・シンクロンを召喚！」

1 + 2 + 3 = 6

「疾風の使者よ・・・鋼の願いが集う時、その願いは鉄壁の盾となる！シンクロ召喚！現れる、『ジャンク・ガードナー』！」

ジャンク・ガードナー ATK1400 / DEF2600

「・・・？ジャンク・ガードナー・・・防御特化のカードってところ？」

「まあな。俺はカードを2枚伏せてターンエンド！」

「僕のターンドロー！僕はもう一度永続魔法『六武衆の結束』を発動！そして『六武衆・ザンジ』を召喚してカウンターが乗るわ！」

カウンター 0 1

六武衆・ザンジ ATK1800 / DEF1300

「バトル！ザンジでジャンク・ガードナーに攻撃！」

ザンジの効果でジャンク・ガードナーを破壊するつもりか！？それはさせないぜ

「ジャンク・ガードナーの効果発動！1ターンに1度、相手フィールド上に存在するモンスター1体を選択し、表示形式を変更することができる！ザンジを守備表示にする！」

「なら僕はこの瞬間速攻魔法『突進』を発動！師範の攻撃力をこのターンの終わりまで700ポイントアップさせる！」

六武衆の師範 ATK2600 / DEF1300 ATK3300  
/ DEF1300

なるほど

「そしてモンスターを破壊した時、御霊代を装備しているから1枚ドローする！」

・・・六武の門がないとはいえ、なんとというドロー率。だが、師範に攻撃されて終わるジャンク・ガードナーではない！

「ジャンク・ガードナーの新たな効果を発動！このカードが破壊され墓地へ送られた時、相手のカードを1体守備表示に変更する！」

「なるほど・・・なら僕は1枚カードを伏せてターンエンド」

「俺のターン！ドロー！俺は伏せていた『エンジェルリフト』を發動！このカードの効果により、レベル2以下のモンスターを一体特殊召喚！『レベル・ステイラー』を召喚！」

レベル・ステイラー ATK600/DEF0

「さらに手札からデルタフライを召喚！」

デルタフライ ATK1500/DEF900

「デルタフライの効果発動！1ターンに1度、このカード以外の表側表示で存在するモンスターのレベルを一つ上げる！」

レベル・ステイラー 1 2

「レベル2となったレベル・ステイラーに、レベル3のデルタフライをチューニング！」

2 + 3 = 5

「刻まれし正義の名のもとに、今こそ破壊の限りを尽くせ！シンク口召喚！起動せよ、A・O・Jカタストル！」

A・O・Jカタストル ATK2100/DEF1200

「バトルだ！A・O・Jカタストルで六武衆の師範に攻撃！この瞬間カタストルの効果が発動！このカードは闇属性モンスター以外と

の戦闘では、計算を問わずそのモンスターを破壊する！」

「うっ……！でも装備されていた六武衆の御霊代を代わりに破壊することで、師範はフィールドに残る！」

六武衆の師範    ATK2600 / DEF1300    ATK2100  
/ DEF800

鎧が砕け散り、師範はフィールドに残っている。だが……

「カタストルがモンスターを対象のモンスターを破壊できなかったとき、再びバトルとなる！」

「え？嘘！」

「そして『リビングゲットの呼び声』でカタストルを蘇生させ、ターンエンド」

ハンドレスは辛いな……次のターン命削り、天よりの宝札、強欲が引ければまだなんとか……

「僕のターン！僕は魔法カード『紫炎の狼煙』を発動！レベル3以下の『六武衆』と名のついたモンスターをデッキから手札へ加える！僕は『六武衆・ヤイチ』を手札に加え、ヤイチを攻撃表示で召喚する！来て、ヤイチ！さらに再び2体目の師範を特殊召喚！」

カウンター1 2

六武衆の師範    ATK2100 / DEF800

六武衆 - ヤイチ ATK1300 / DEF800

「自分フィールド上に「六武衆 - ヤイチ」以外の「六武衆」と名のついたモンスターが存在する限り、1ターンに1度だけセットされた魔法または罫カード1枚を破壊する事ができる！この効果を使用したターンこのモンスターは攻撃宣言をする事ができないけど・・・効果を発動！伏せてあるカードを破壊するわ！」

「ミラーフォースが・・・！」

「ふふん！私はさらに六武衆の結束の効果を発動して2枚ドロウするわ・・・よし！僕はモンスターをそれぞれ攻撃表示に変更！そして『連合軍』を発動する！ボクのフィールドにいる戦士族・魔法使い族モンスター1体につき、ボクの戦士族モンスターの攻撃力が200ポイントアップする！今は3体の戦士族がいるから、それぞれ600ポイントアップするわ」

六武衆の師範 ATK2100 / DEF800 ATK2700 / DEF800

六武衆 - ヤイチ ATK1300 / DEF800 ATK1900 / DEF800

六武衆 - ザンジ ATK1800 / DEF1300 ATK2400 / DEF1300

「さあバトルよ！師範でA・O・Jカタストルに攻撃！」

師範が向かってくる。だが師範の攻撃は通らず、カタストルが攻撃を受け止めていた。

「えっ!？」

「・・・カタストルの効果だ。このカードが闇属性以外のモンスターと戦闘を行う場合、ダメージ計算を問わず、そのモンスターを破壊できる。その効果はもちろん、相手が攻撃した時にも適用される。」

S i d e 十代

「・・・カタストルの効果だ。このカードが闇属性以外のモンスターと戦闘を行う場合、ダメージ計算を問わず、そのモンスターを破壊できる。その効果はもちろん、相手が攻撃した時にも適用される。」

六武衆の師範つてモンスターをカタストルが破壊した。今、秋とツアンが戦っているけど・・・なんて効果だ!あのモンスター!俺のヒーローデッキと戦ったらまったく刃が立たなくなる!しかもダメージ計算を問わずって・・・

「なるほど、秋も結構本気で勝負しているわね」

「雪乃?」

「六武衆のデッキはなかなか強力よ。あなたのHEROと同じくシリーズで効果を発揮するモンスター・・・普段デュエルをしないツアンだけど、成績は上位クラスですもの」

へえ〜アイツ強かったんだな!俺もワクワクして来たぜ!



「すっげえ！俺も次相手してもらおうかな！」

「十代の坊やは次、翔の坊やとでしょう？」

つとと、そうだったぜ。翔とも久しぶりに・・・ってあれ？

「翔、どうした？」

元気がなさそうな翔。俺の言葉も聞こえていないようだった。ん？ツアンが動くみたいだな

Side秋

ぶっちゃけ、カタストルさん使うと凄いことになるからアレでしたが・・・良いよね別に！六武衆だってガチなんだもの！強いんだもの！

「っ！何よそのモンスター！反則すぎよ！」

「六武衆も人のこと言えんだろうが」

「むー・・・なら僕は墓地へ送られた師範の効果で師範を手札に戻し、師範を特殊召喚！カード1枚を伏せてターンエンドよ」

現在フィールドにはツアンが3体のモンスターを並べ、2枚のカードを伏せている。この状態はすこし面倒だな。俺のモンスターカタストルだけだし

「俺のターン！ドロー！希望の転生の効果がここで発動！俺は手札に『ゾンビ・キャリア』を加える！……バトル！」

つく、このカードじゃない。

「カタストルで師範に攻撃！効果により師範を破壊する！」

「させないわ！畏発動『六尺瓊勾玉』！自分のフィールド上に六武衆と名のついたモンスターが存在する時に発動可能！カードを破壊する効果モンスターの効果・魔法・畏カードの発動を無効にし破壊するわ！よってカタストルを破壊！」

なっ……そんなカードまで持っていたのか！？あれって確か真・六武衆が出るくらいの時のカードだろ！？

「……つく、ターンエンドだ」

「ふふっ！どうやら僕の勝ちみたいね！ドロー！僕は六武衆・ニサシを召喚するわ！」

六武衆・ニサシ ATK1400/DEF700

「当然、連合軍の効果は適用されるわ」

六武衆の師範 ATK2700/DEF800 ATK2900

/DEF800

六武衆・ヤイチ ATK1900/DEF800 ATK2100  
/DEF800

六武衆・ザンジ ATK2400/DEF1300 ATK2600  
0/DEF1300

六武衆・ニサシ    ATK1400 / DEF800    ATK2200  
/ DEF800

「バトル！師範でダイレクトアタックよ！」

「ぐあっ！」

秋LP4000    LP1100

「これで・・・」ふふ、掛ったなツァン「え！？」

「この瞬間、手札の冥府の使者ゴーズの効果が発動！来い！冥府の使者ゴーズ！カイエントークン！」

冥府の使者ゴーズ    ATK2700 / DEF2500  
カイエントークン    ATK2900 / DEF2900

「なっ・・・」

「危なかったな・・・このカード達がなかったら負けていたんだからな。さて、どうする？」

「だったら僕はザンジでカイエントークンを攻撃！行って！ザンシ！」

ザンジがカイエントークンに特攻する。だがカイエントークンに弾き飛ばされ、切り捨てられる。その瞬間ザンジが持っていた雑刀を投げ、カイエンの胸に突き刺さった。

「ザンジが墓地へ行ったことでそれぞれの攻撃力は下がるけど・・・

これで師範が破壊されることはなくなつたわ。師範はカード効果で墓地に行かないと墓地効果は発動しないから」

六武衆の師範      ATK2900 / DEF800      ATK2700  
/ DEF800

六武衆 - ヤイチ      ATK2200 / DEF800      ATK1900  
/ DEF800

六武衆 - ニサシ      ATK2200 / DEF800      ATK2000  
/ DEF800

ツアンLP4000      3700

「僕はこれでターンエンド」

場にはゴーズが一体・・・次のターン何かしら引かないと、どのモンスターを攻撃しても次のターンゴーズが破壊されてダイレクトアタックを受ける。恐るべし六武衆

Sideツアン

秋のライフはあと1100・・・これなら僕の勝ちは確定ね！手札が悪かったのか知らないけどこっちは絶対調！勝ちももらったわ・・・でも、きつとアイツはこの戦況をひっくり返すようなことをしてくるに違いない・・・と思っていたけど随分意思消沈しているわね

「ちょっと、秋のターンよ」

「ああ、そうだったな」

・・・元気ないけど、まさか

「あんだ、まさか諦めかけてないでしょうね」

「ん？あ、いや・・・考えているだけだ。俺がデュエルで諦めたことあった？」

「そうね、ないわ」

どうしてかしら・・・僕自身、この戦況を秋がどうひっくり返すのが楽しみで仕方がない。

「ならとつとと来なさいよ！」

「ああ、俺もこんなんじゃ満足できねえぜ！行くぞ！」

今までデュエルをしてそんなことはなかったけど。でも、今はそんな気分だった。さあ、ここからどう戦況をひっくり返すつもり？秋・・・！

Side秋

やばいやばい、少し諦めていたなんて口が裂けても言えないな。諦めない・・・諦めたら、この世界での俺の時は止まってしまう気がする。俺の世界ではデュエルはただの遊び。でもこの世界では違う。この戦いこそが存在意義だ。

「俺のターン！ドロー！」

俺は、戦い続ける！

「俺は手札から『天よりの宝札』を発動！互いのプレイヤーはカードを6枚になるようにドロー……！」

「そのカードを引いたのね……さあ来なさい秋っ！」

「ああ……！俺は『カードガンナー』を召喚！」

カードガンナー ATK400/DEF400

「攻撃力、400？」

「カードガンナーの効果発動！1ターンに1度、自分のデッキから3枚カードを墓地へ送り、送った数×500ポイント攻撃力を上昇させる！」

カードを墓地へ……送る！

カードガンナー ATK400/DEF400 ATK1900/  
DEF400

「墓地へ送られたのは『グローアップ・バルブ』！『レベル・ステイラー』！『星屑のきらめき』！」

よし、チューナーが落ちた！

「俺は墓地の2体のレベル・ステイラーをそれぞれ、ゴーズのレベルを下げて特殊召喚！」

7 5

レベル・ステイラー ATK600 / DEF0  
レベル・ステイラー ATK600 / DEF0

「さらにデッキからカードを一枚墓地へ送り、グローアップ・バルブを特殊召喚！」

グローアップ・バルブ ATK100 / DEF100

「レベル1のレベル・ステイラー2体と、レベル3のカードガンナーに、レベル1のグローアップ・バルブをチューニング！」

1 + 1 + 3 + 1 = 6

「雪風に舞う氷結の龍よ、裁きの時は来た！今こそその稲妻で撃ち払え！シンクロ召喚！吹きすさべ！」氷結界の龍ブリューナク！」

氷結界の龍ブリューナク ATK2300 / DEF1400

「さらにブリューナクの効果！手札を2枚まで捨てることで、捨てた分だけ相手のカードを手札に戻す！手札を捨てることで俺は六武衆の師範と六武衆・ニサシをツァンの手札へと戻す！これにより連合軍の効果も低下する！」

六武衆・ヤイチ ATK1700 / DEF800 ATK1500  
/ DEF800

「つく！でもそれによって僕のリバースが発動するわ！」六武衆推参！」これにより僕は「六武衆ザンジ」を守備表示で特殊召喚！こ

のターンに破壊されるものの、これで連合軍の効果は上昇！」

六武衆 - ザンジ    ATK1800 / DEF1300    ATK220  
0 / DEF1300  
六武衆 - ヤイチ    ATK1500 / DEF800    ATK1700  
/ DEF800

「・・・ふふっ」

思わず笑みがこぼれる。十代意外にこんなにも強敵がいるとは。他の奴らも強いけど、ツァンもすごく強い。

「なによ」

「なんでもない・・・俺はさらに、手札から『ワン・フォー・ワン』を発動！手札の『ボルト・ヘッジホッグ』を墓地へ送ることで、俺はデッキから『エフェクト・ヴェーラー』を特殊召喚！」

エフェクト・ヴェーラー    ATK0 / DEF0

「そして墓地のボルト・ヘッジホッグの効果により、このカードを特殊召喚！」

ボルト・ヘッジホッグ    ATK800 / DEF800

「さらに！魔法カード『異次元からの埋葬』を発動し、ボルト・ヘッジホッグを墓地へ戻す！そしてボルト・ヘッジホッグの効果も発動！」

「っ！いつの間にな！」



ボルト・ヘッジホッグ ATK800/DEF800

「レベル2のボルト・ヘッジホッグ2体と、レベル1のエフェクト・ヴェーラーをチューニング！」

2 + 2 + 1 = 5

「リミッター解放、レベル5！レギュレーターオープン！スラスト・ウォームアップ、オーケー！アップリンク、オールクリア！GO、シンクロ召喚！カモン『TG ハイパー・ライブラリアン』！」

ATK2400/DEF1800

ここでライブラリアンというのも・・・まあ、別にいいか

「さらにライブラリアンのレベルを一つ下げ、レベル・ステイラーを特殊召喚！」

5 4

レベル・ステイラー ATK600/DEF0

「これがラストバトルだ！ゴースで師範に攻撃！」

「うっっっ！」

「これで連合軍の効果も再び低下！」

ツァンLP3700 3500

六武衆・ヤイチ ATK1900 / DEF800 ATK1700  
/ DEF800

「そしてさらにバトル！ブリューナクでヤイチに攻撃！」

LP3500 LP2900

「そしてレベル・ステイラーでダイレクトアタック！」

LP2900 LP2200

「・・・やっぱり秋は強いわね。敵わないわ」

「ライブラリアンでダイレクトアタック！」

LP2200 LPO

## 武士（後書き）

とりあえずVS六武衆ということでした  
次回はカイザーの話になります

## 帝王（前書き）

つてなわけで、今回も決闘ないです  
決闘する しない する しないの無限ループ・・・orz

秋「さて、馬鹿を放っておいて・・・今日の最強カードは『正々堂  
々』？」

お互いのプレイヤーは、それぞれ自分のターンには手札を全て公開  
し続けなければならない

ま、今回の話に関係してくるってことで。ちなみに私はリスケット  
デュエルってよくわかりません

秋「だめじゃね？それ」

・・・気にするな

ちなみに今日、とあるレンタルケースのお店で黄泉ガエルが280  
円でした・・・馬鹿なの？死ぬの？

## 帝王

Side秋

俺とツァンのデュエルが終わった後、俺達は十代と翔のデュエルを観戦していた。十代は楽しそうにデュエルをするのに対し、翔は途中であきらめたり『パトロイド』の効果を使わずにデュエルを続行したりと、酷いデュエルだった。

「僕のターン……ドロー……っ！」

翔の表情が変わる。ああ、パワー・ボンドか。なんでアイツは封印されてるカードをデッキに入れるんだろうか。使わないカード入れていたって、ただの邪魔だと思っただが。結局、原作通り十代が勝利し、翔はどこかへ走り去ってしまった。そして少し落ち込んだ表情で十代が戻ってきた。

「ねえ十代の坊や、私はあの翔の坊やのデュエルに納得がいかないのだけれど」

「……ああ、もしかしたらさっきのデュエル、翔が勝っていたかもしれないんだ」

十代は翔の手札にパワー・ボンドがあったことを話していた。そしてそのカードが兄に封印されているカードであることも

「ふーん……」

「ふーんて……あんた何も無いの？」

いや、そう言われましても……退学が掛っていない以上翔が学園を出て行くことは多分ない……と信じたい。そして明日香が俺と十代にカイザーについて話してくれた。

「よし！俺はカイザーにデュエルを挑むぜ！」

「無茶言わないでよ、カイザーとのデュエルする予約は何人いるかわかったもんじゃないわよ」

ツアンが十代をあきれ顔で見る。まあ、カイザーを倒して地位を確立したい生徒なんて五万といるだろうしな。隼人が翔の様子を見に行っただし、とりあえずは大丈夫だろ。翔がここで諦めるのはどういふことが、アイツ自身が一番分かっているはずだしな。

「はぁ……俺は疲れたよ。制裁デュエルまであとちょっとだな」

とりあえず相手は迷宮兄弟……デッキ調節はしっかりとしておかないとな

2日後

「大変だ秋！これを見てくれ！」

十代がいきなり部屋に入って来るや否や、俺に紙を付きつける。そこには探さないでくれと書かれた翔の手紙。はぁ……なんで退学が掛ってないのにそんな話になっただし

「はぁ……やれやれ探すか」

「おう！」

こうして俺と十代は翔を探しに外へと出た。十代と二手に分かれて探すが見つからない。どこかの海岸だったな……

『マスター！あそこ！』

ミラが指差す方向を見ると、十代と翔が海の中で言い合っている。とりあえず海岸まで辿りついた

「十代、翔……お前ら何してんだ」

「あ、秋！お前も翔に何か言っちゃって来てくれよ！」

「……はあ、とりあず食料もなしにその丸太の船で帰ろうとしたお前が凄いな」

「言うことが違う！」

と、十代が怒る。だってなんか言っちゃれって言ったんじゃない。まあ、冗談はさておき……」

「聞こえてる、聞こえてる」

「相変わらず声に出てるっス……」

と、言い争っていた翔までも俺に対してため息をつく始末。とりあえず風邪をひくとあれなので、2人は海岸へ上がる。

「とりあえずさ、翔・・・何故に学園を出て行くとした？」

「それは・・・僕が兄貴の役に立てないから・・・」

「そうしたらタッグデュエルは十代一人で戦うことになったかもしれないぞ」

「でも、秋君がいるじゃないっすか！」

あのねえ・・・

「俺のパートナーはツァンだろうが。別に組むことになっても構わないが、お前は十代の信頼を裏切ろうとしたんだぞ」

「で、でも・・・僕なんかじゃ・・・兄貴の力にはなれないよ！僕はアニキや秋君のようにデュエルが上手くはない！三沢君のように頭もよくない！僕じゃ力になんてなれないよ！みんなだってそう思ってるはずだ！」

あー・・・駄目だ、イライラする。この世界に来てからと言うものの、何故か熱くなりやすい俺。武藤秋の影響があるのか？

「ざけんな！」

「「！」

思わず、そんな声を俺は上げ、翔の胸倉を掴んでしまった。

「テメー・・・黙って聞いてりゃ、言いたいことばかり言いやがって！いつ俺達がそんなことを言った！俺や十代みたいに強くない



！？三沢みたいに頭がよくない！？じゃあテメエは一度でも俺達に追いつこうと努力したことはあったのか！？デュエルでも逃げる！俺達からも逃げる！お前は一体なんでこの学園に来たんだよ！俺達は仲間じゃなかったのか！」

言いたいことが爆発した。口は止まらない。俺自身がずっと思っていたことだったが。俺は溜めこみ、言わなかった。だがこれは仲間だと言ってくれた翔への『武藤秋』の想いだっただのかもしれない。

「よ、よせよ秋……」

十代に引き離され、翔はその場へたり込んだ。

「俺は……いや、俺達は『仲間』じゃないのかよ。俺達がこの学園でやってきたことは、翔にとって何だったんだよ……！」

「秋君……」

そんな所に、明日香達が駆けつけていた。隼人、明日香、雪乃、ツアン、三沢……そして、青い制服を纏った生徒。翔の兄、丸籐亮否、カイザーがいた。

「不甲斐ないな、翔」

「お、お兄さん……！？」

不甲斐ない……？元々の原因はお前だろうが。お前が『パワー・ボンド』を渡したのが原因だろうが！翔がどんなデュエルをしても、アンタが翔を信用していたとしても！それはこいつの押し付けではないんだ。

「逃げ出すのか？」

「ぼ、僕は……」

「……それもいいだろう」

こいつ、それでも兄かよ……困っている弟を助けてやるうとは思わないのか……！？あっさり切り捨てやがって……

「翔……」

「うッ……うッ……うッ」

俺が名前を呼んでも翔は俯いて、べそをかきだす。イカダの残骸に足を進めると壊れたそれを拾いだした。こんなの、兄弟じゃねえ

「行っちゃまってよ！アンタの弟！」

「仕方ないな」

十代の言葉に一言言うカイザー……その仕方ないは普通の意味とは違う。切り捨てるということ、関係ないということ。俺はもう我慢できなくなった。

「おい」

「……ん？」

「歯あくいしばれえ！」

俺は思い切りカイザーを殴り飛ばした。

S i d e 亮

突然のことだった。先ほどまで翔に怒鳴っていたイエローの生徒に俺は殴り飛ばされた。男は『武藤秋』明日香の話ではあの伝説のデユエリスト『武藤遊戯』の従弟だという。試験でもシンクロ召喚という特殊なものを使う注目を集めた生徒だった。

「・・・それでも兄貴か！」

「な、に・・・？」

「自分は高い所から見ているだけで、弟の力になってやろうとは思ったり出来ないのか！」

武藤は俺の襟をつかみ、怒鳴る。武藤の瞳には怒りが籠っていることがよくわかった。

「つく・・・お前には、関係ない・・・」

「」のっ・・・」

「やめて秋！」

再び俺を殴ろうとする拳を止めようと、明日香が武藤の腕を掴む。他のブルーの女子や、イエローの生徒も同じだった。

「離せよ！」

「駄目よ、落ちつきなさい！」

明日香が武藤を怒鳴りつけ、武藤は少しだけ大人しくなった。

「翔が今までどれだけ苦しんだかも知らず、翔がどれだけ悩んだかも知らず、テメエは知ろうともしなかった・・・！拳句の果てにカードを封印だ？翔にどれだけ重荷を背負わせたら気が済むんだテメエは！」

翔に、俺が・・・重荷を背負わせているだと？

「アンタのレスペクトデュエルという概念を押し付け、翔がどれだけ苦しんだと思ってやがる。デュエルに勝利しないことが、どれだけ辛いかわかるのか！アンタにはそれがわかるのか！」

「レスペクトデュエルはどんな相手でも全力で互いに戦えるように尊重し合い、たとえ負けても相手に敬意を払う！それがレスペクトデュエルだ！勝敗にこだわるのが大事ではない！」

「笑わせるな！勝つ気がないのに自分が勝っているとも言いたいのか！？相手に手加減してやってるとしか聞こえねえ！」

「違う！俺は全力で相手に望んでいる！」

違う、俺が求めるレスペクトデュエル・・・それを翔に分かって欲しかっただけだ。俺はそれを信じて翔にパワー・ボンドを・・・

「だったら全力で戦うなら相手の隙を崩して戦うのが普通だろうが

！」

「ふざけるな！そんなのただの弱い者いじめだ！」

「アンタはそうやって他人を見下してんだよ！アンタには分からないだろな！どんだけ翔がプレッシャーをこの学園で受けて来たのか！デュエルで負けることが慣れてしまっただけ辛かったのか！」

彼の言葉は止まらない。彼はどうしてそこまで・・・

Side 明日香

なんとか2発目の拳を私達は止めた。でも秋の言葉は止まらない。翔君の辛いことを、翔君自身が言えないことを、秋は亮にぶつけていた。

「アンタはそうやって他人を見下してんだよ！アンタには分からないだろな！どんだけ翔がプレッシャーをこの学園で受けて来たのか！デュエルで負けることが慣れてしまっただけ辛かったのか！」

この言葉の意味を、私達は知っている。秋は翔君以上の苦しみを小学生の時から味わっていた。『武藤遊戯』の従弟と言うレッテル。それが重荷となり、彼を苦しませた。デュエルで負け、悔しい思いをして・・・大切なカードを燃やされた。そんな彼にとって、確かにリスペクトデュエルは正しいデュエルとはいえない。勝つためになりふり構ってられなかった秋にとって、それは信じられないデュエルだから。だから翔君がきつと自分と重なって見えたのかも

しれない。もちろんそんな辛いことを『武藤遊戯』本人に言えるわけもない。だからこそ、秋は亮を殴ったのだと・・・私は思った。

「俺は・・・」

「アンタは結局弟と向き合おうとしていないだけだ・・・たった一度の裏切りで、アンタはまた自分が裏切られるんじゃないかって怖いんだろう！過去がなんだ！心情がなんだ！困っている弟を助けようとするのが兄弟じゃないのかよ！」

秋の言葉に、とうとう亮は何も言えなかった。この前私達は仲間だと言った秋はきつと・・・私達に何かあったならきつと同じことをしてくれるのかもしれない。秋は私達の手を振り払うと、デュエルディスクを構えた。

Side秋

「・・・随分言いたいこと言っちゃったな。『武藤秋』としての記憶が頭に流れ込んだせいでもかなり言いたいことを全力でカイザーに言っちゃったな。俺自身、元の世界では勝つことも負けることもどっちもどっちだった。俺はデュエルで負けたせいで酷いと思ったことはない。だがきつと『武藤秋』は翔と自分を重ねるだろう。だからこそ、俺に出来ることはたった一つしかない

「おい、デュエルしろよ」

「何？」

「アンタがリスペクトデュエルをするってんなら・・・俺はアンタ

を全力で叩き潰す」

やることは一つ、全力で戦う。

「いいだろう・・・最早言葉で語るのは難しいだろうな」

同じように亮もデュエルディスクを構えていた。

「デュエル！」

俺達の戦いが始まる

帝王（後書き）

つてなわけでカイザーぶんなくる秋でした。  
次回はVSカイザーです



## 勝敗（前書き）

カイザー戦です。色々考えてやったデュエルの結果がどえらいことに・・・

はあ、テンプレか・・・orz

とりあえず、ですが・・・今回の秋のドロワーは遊星くらいどえらいことになってます

秋「今回の最強カードは・・・『ハイ・アンド・ロー』か」

自分フィールド上に攻撃表示で存在する攻撃力2000以上のモンスターが攻撃対象に選択された時、相手攻撃モンスターの攻撃力が攻撃対象となったモンスターよりも高い場合、攻撃対象となったモンスター1体を対象に以下の効果を発動する。

デッキからカードを1枚めくり墓地へ送る。そのカードがモンスターだった場合、その攻撃力の数値分だけ対象モンスター1体の攻撃力をアップする。

この効果を3回まで任意でくり返す事ができる。

この効果によって対象モンスターの攻撃力が相手攻撃モンスターの攻撃力を超えた場合対象モンスターを墓地に送る。

秋「遊星がジャックとの最後の戦いで使用したカードだな。アニメオリジナルであり、モンスターを連続で引かなければ意味がない罠カードだ」

では、VSカイザーお楽しみください

## 勝敗

Side雪乃

「デュエル！」

カイザーと秋のデュエルが始まった。現在学園No.1の実力者と  
言われた丸籐亮と、入学以来怒涛の快進撃を見せる秋・・・果たし  
てどちらが勝つのかしら・・・シンクロデッキで丸籐亮のデッキと  
どこまで戦えるのか・・・コイントスで先攻は秋。少しまずいわね、  
秋が先攻・・・

「俺のターン！ドロー！俺は手札から『マツシブ・ウォリアー』を  
守備表示で召喚！カードを2枚伏せてターンエンド！」

マツシブ・ウォリアー ATK600/DEF1200

いつものパターンからの始まりだけれど・・・マツシブ・ウォリア  
ーは初めて見るカードだね。もしかしたらまた防御用のカードかし  
ら？

「俺のターン！俺は手札から『パワーボンド』を発動！手札の『サ  
イバー・ドラゴン』3枚を融合！現れる『サイバー・エンド・ドラ  
ゴン』！」

サイバー・エンド・ドラゴン ATK4000/DEF2800

ATK8000/DEF2800

つ・・・！1ターン目からサイバー・ドラゴンとパワーボンドが手

札にあるですって！？まるで意味がわからないわよ！滅茶苦茶だわ！

「バトル！サイバー・エンド・ドラゴンで攻撃！『エターナル・エヴォリユーション・バースト』！」

「マツシブ・ウォリアーの効果発動！このカードは1ターンに1度破壊されず、受けるダメージは0となる！受け止める、マツシブ・ウォリアー！」

マツシブ・ウォリアーが砲撃を受け止めていた。

「つく・・・！ならば俺は『サイバージラフ』を召喚。このカードを生け贄に捧げることで、このターンのエンドフェイズまでこのカードのコントローラーへの効果によるダメージは0になる。カードを1枚伏せてターンエンドだ」

なるほど、本当に運がいいわね。これでカイザーの坊やはライフを削ることはない・・・手札がないとはいえ現状では不利であることには変わらない。そしてサイバー・エンド・ドラゴンがフィールド上にいる。どうするつもり？坊や・・・

「俺のターン！俺は手札から『愚かな埋葬』を発動！このカードの効果により、俺はデッキから『チューニング・サポーター』を墓地へ送る！」

なるほど、チューナーで引き寄せるつもりね・・・カイザーは何をしたいのか分からない表情ね・・・でも、ここから秋は巻き返すわ。

「俺は手札から『グロリアップ・バルブ』を墓地へ送ることで、チューナーモンスター『クイック・シンクロン』を特殊召喚！」

クイック・シンクロン ATK700/DEF1400

動くのね、秋・・・

「さらに『ジャンク・シンクロン』を召喚！そして効果発動！自分のレベル2以下のモンスターを特殊召喚出来る！来い！『チューニング・サポーター』！」

ジャンク・シンクロン ATK1300/DEF500

チューニング・サポーター ATK1000/DEF1000

これであるサイバー・ドラゴンを倒せるというの？秋・・・

「レベル2のマツシブ・ウォリアーにレベル5のクイック・シンクロンをチューニング！」

2 + 5 = 7

「集いし思いがここに新たな力となる。光さす道となれ！シンクロナ召喚！燃え上がれニトロ・ウォリアー！」

ニトロ・ウォリアー ATK2800/DEF1800

「さらに！レベル1のチューニング・サポーターにレベル3のジャンク・シンクロンをチューニング！」

1 + 3 = 4

「いでよ！アームズ・エイド！」

アームズ・エイド ATK1800/DEF1200

「チューニング・サポーターの効果でカードを1枚ドロー！手札から俺は『強欲な壺』を発動し、さらにカードを二枚ドロー！」

秋、今日は随分デッキが答えているのね。このタイミングでさらに2枚ドローするなんて。でもサイバー・エンド・ドラゴンの攻撃力は8000・・・どうするつもり？例え二トロ・ウォリアーの攻撃力が3800になり、アームズ・エイドを装備しても4800・・・勝てるはずがないわ。

「さらにリバースカードオープン！『エンジェル・リフト』！墓地にあるレベル2以下のモンスターを復活させる！来い！『チューニング・サポーター』！」

チューニング・サポーター ATK1000/DEF1000

「そして魔法カード『ワン・フォー・ワン』を発動！手札のボルト・ヘッジホッグを捨てることで、俺はデッキのレベル・ステイラーを特殊召喚！そしてデッキトップのカードを一枚捨てることでグローアップ・バルブを特殊召喚！」

レベル・ステイラー ATK600/DEF0

グローアップ・バルブ ATK1000/DEF1000

「レベル2としてチューニング・サポーターを扱い、それにレベル1のレベル・ステイラーとグローアップ・バルブでチューニング

「！」

2 + 1 + 1 = 4

「いでよ！アームズ・エイド！」

に、二体目のアームズ・エイド！これで攻撃力をさらに上げようというの！？

「そして2体のアームズ・エイドをニトロ・ウォリアーに装備する！これによりニトロ・ウォリアーの攻撃力は一体につき1000ポイントアップ！」

ニトロ・ウォリアー ATK2800 / DEF1800 ATK4800 / DEF1800

巡るましいシンクロ召喚が続き、ニトロ・ウォリアーが強化されて行く。攻撃力4800……でもこれでは攻撃は防げない……一体何を？

「さらに、ニトロ・ウォリアーのレベルを一つ下げ、レベル・ステイラーを守備表示で特殊召喚」

7 6

レベル・ステイラー ATK600 / DEF0

「……ターンエンドだ」

夕、ターンエンドですって！？一体何のために魔法カードを使った

の？バトルフェイズにニトロ・ウォリアーの効果を発動させるのではないの！？

「どうした？諦めたのか？」

「……………」

「まあいい……俺のターン！バトルだ！ニトロ・ウォリアーにサイバー・エンド・ドラゴンで攻撃！『エターナル・エヴォリューション・バースト』！」

「秋！」

砲撃がニトロ・ウォリアーに迫る。だが、秋の口元は笑っていた。

Side 亮

シンクロ召喚……今までにないほど驚く召喚だった。弱いモンスター達が力を合わせ、一つの力になって行く。俺も翔とこんな風力を合わせたかった……。だが今はそれを付き離して、弟に味方する相手を倒そうとしている。

「……ターンエンドだ」

攻撃せずにターンエンドするということは、この8000のサイバー・エンド・ドラゴンを倒せないということだ。きつとこれが彼の精一杯だったのだと思う。彼の想いは分かった……。だがそれは俺のところには届かない。

「ニトロ・ウォリアーにサイバー・エンド・ドラゴンで攻撃！『エターナル・エヴォリューション・バースト』！」

攻撃が放たれた瞬間だった……武藤の口元が緩んでいた。まさかカウンタートラップか！？

「畏発動！『ハイ・アンド・ロー』！」

聞いたことのないカードだ……その効果は一体？

「自分フィールド上に攻撃表示で存在する攻撃力2000以上のモンスターが攻撃対象に選択された時、相手攻撃モンスターの攻撃力が攻撃対象となったモンスターよりも高い場合、攻撃対象となったモンスター1体を対象に発動することが出来る！デッキからカードを1枚めくり墓地へ送り、そのカードがモンスターだった場合、その攻撃力の数値分だけ対象モンスター1体の攻撃力をアップさせる！この効果を3回まで任意でくり返す事ができるが、この効果によって対象モンスターの攻撃力が相手攻撃モンスターの攻撃力を超えた場合対象モンスターを破壊する！」

なに！？

「カイザー……お前は言った！どんな相手でも全力で互いに戦えるように尊重し合い、たとえ負けても相手に敬意を払う！それがリスペクトデュエルだ！ならば俺はそのアンタの象徴である『サイバー・エンド・ドラゴン』に真っ向からぶつかってやる！」

相手のデッキを見る限り、低級のモンスターが多い！だがその分相手のLPは残るとのこと！



「カイザー！これは俺自身を試す一手だ！俺は俺自身の可能性を信じる！例えモンスターが弱くとも、どれだけ勝つことが出来なくともその先の勝利を、俺は信じる！いくぞ！一枚目をドロー！」切り込み隊長』の攻撃力は1200！」

二トロ・ウォリアー ATK4800/DEF1800 ATK6000/DEF1800

「二枚目をドロー！」ジャンク・シンクロン』の攻撃力は1300！」

二トロ・ウォリアー ATK6000/DEF1800 ATK7300/DEF1800

ここまで差を縮めるとは……

「なるほどな、ここまで攻撃力を上げられてしまつては……このターン勝つことは……」

「俺は『ハイ・アンド・ロー』の三回目の効果を使う！」

な、なんだと!?

「ここで攻撃力700以上のモンスターを引いたら自滅だ！それを分かっているのか!？」

「分かっているさ……アンタはなんのリスクも負わずに勝つことは出来ないだろう。そして何より、俺自身が俺を信じる限り！俺は自分を諦めることなどしない！ドロー……!！」

そう言っただけは高らかにカードを引き抜いた。

Side翔

僕は今、お兄さんと秋君のデュエルを見ている。攻撃力8000のサイバー・エンド・ドラゴンと戦う秋君は諦めようとはしない。普通だったなら諦めるところ。

「俺は『ハイ・アンド・ロー』の三回目の効果を使う!」

「ここで攻撃力700以上のモンスターを引いたら自滅だ!それを分かっているのか!？」

「分かっているさ・・・アンタはなんのリスクも負わずに勝つことは出来ないだろう。そして何より、俺自身が俺を信じる限り!俺は自分を諦めることなどしない!ドロー・・・!」

自分を諦めない・・・秋君の言葉が海岸に響く。僕はいつも諦めてばかり。そしてデュエルに負けても仕方がないと思った。お兄さんのようにリスペクトデュエルは出来ない。そして勝つことすらできない。昔お兄さんの想いを裏切ってしまったこと・・・僕は・・・

「・・・・・・・・・・引いたカード『クイック・シンクロン』!その攻撃力は700!」

二ト口・ウォリアー ATK7300/DEF1800 二ト口・  
ウォリアー ATK8000/DEF1800

・・・・!

「馬鹿な！サイバー・エンド・ドラゴンと攻撃力が互角に！？」

「俺は自分の運命を引き寄せた！迎え撃て！ニトロ・ウォリアー！」

「行け！サイバー・エンド・ドラゴン！」

ニトロ・ウォリアーがサイバー・エンドに掴みかかる。サイバー・エンドがニトロ・ウォリアーに噛みつくけど、ニトロ・ウォリアーはそれを耐え、一撃を加えた。それによって互いが爆発する。秋君が諦めなかった結果、奇跡は起きた。そして僕は手にあった「パワーボンド」を見つめる。僕は……

Side十代

すっげえ！サイバー・エンド・ドラゴンを倒しちゃった！攻撃を8000まで上げた秋はやっぱりすげえ！そしてカイザーも強い！くう〜！俺もやっぱり戦ってみてえ！

「つく……ならば俺はメインフェイズ2に入り、サイバー・フェニックスを守備表示で召喚」

サイバー・フェニックス    ATK1200    DEF1600

「ターンエンドだ」

「俺のターン！」

これで互いに振り出した。秋はどう出る？もうチューナーが沢山墓

地に行っているのに・・・

「俺は手札から『シンクロン・エクスペローラー』を召喚！」

シンクロン・エクスペローラー ATK0/DEF700

「このカードの召喚に成功した時、自分の墓地に存在する「シンクロン」と名のついたモンスター1体を選択して特殊召喚する！蘇れ、クイック・シンクロン！」

クイック・シンクロン ATK700/DEF1400

うおー！そう言えばこいつがいたな！こいつがいればジャンク・アーチャーがジャンク・バーサーカーが出てくる！

「レベル2のシンクロン・エクスペローラーと、レベル5のクイック・シンクロンをチューニング！」

2 + 5 = 7

「集いし叫びが、木霊の矢となり空を裂く！光差す道となれ！シンクロ召喚！いでよ、ジャンク・アーチャー！」

ジャンク・アーチャー ATK2300/DEF2000

「ジャンク・アーチャーの効果発動！1ターンに1度、相手フィールド上のモンスターを選択し、除外する！」

「なんだと！？」

「俺はサイバー・フェニックスを除外！『デイメンションシュート』」

おっし！これでフィールドはから空きだぜ！

「ジャンク・アーチャーで直接攻撃！『ジャンク・アロー！』」

「ぐうつ・・・！」

亮 LP4000 LP1700

「メインフェイズ2で俺はジャンク・アーチャーのレベルを一つ下げ、レベル・ステイラーを守備表示で特殊召喚。そしてターンエンド時、サイバー・フェニックスはフィールドに戻る」

7 6

レベル・ステイラー ATK600/DEF0

「俺のターン・・・俺は『天よりの宝札』を発動する」

こ、ここで天よりの宝札だつて！？カイザーの手札は0枚・・・対する秋も手札は0だ。互いを尊重し合い全力でデュエルする『リスペクトデュエル』・・・これがその表れなのか？

「俺は手札から『死者蘇生』を発動！戻ってこい、サイバー・エンド・ドラゴン！」

サイバー・エンド・ドラゴン ATK4000/DEF2800

「行くぞ！サイバー・エンド・ドラゴンでジャンク・アーチャーに攻撃！エターナル・エヴォリューション・バースト！」

「ぐっ……！」

秋LP4000 LP1300

一気に逆転された……秋、大丈夫なのか！？

「さらにカードを2枚伏せ、ターンエンドだ」

「俺のターン……ドロー！」

秋は目を閉じながら、カードを引いた。

Side秋

天よりの宝札で死者蘇生なんか引くか？普通……ドロー運のない俺にとつてはありえないの一言だな。場にはサイバー・ヴァリーとサイバー・エンド……伏せは2枚。だが俺の手札は6枚。まだ行ける……！

「俺は手札から魔法カード『サイクロン』を2枚発動！伏せカードを2枚破壊する！」

破壊されたのは……リビングデットとサイクロンか。カウンターを狙ったと思っただが、いらぬ心配か？いや、あと1枚カードがある。それよりも……この攻撃力4000をどうにかしないと

「俺はさらに手札から『調律』を発動！自分のデッキから「シンクロン」と名のついたチューナー1体を手札に加えてデッキをシャッフル。その後、自分のデッキの上からカードを1枚墓地へ送る！俺が加えるのはジャンク・シンクロン！」

そして墓地へ送られたのはゾンビキャリア

「そしてジャンク・シンクロンを召喚！」

ジャンク・シンクロン ATK1300/DEF500

「効果によりマツシブ・ウォリアーを復活！」

マツシブ・ウォリアー ATK600/DEF1200

「さらに墓地に存在するボルト・ヘッジホッグの効果！このカードの効果によりボルト・ヘッジホッグは蘇生する！」

ボルト・ヘッジホッグ ATK800/DEF800

「行くぞ！レベル1のレベル・ステイラー、レベル2のボルト・ヘッジホッグ、レベル2のマツシブ・ウォリアーにレベル3のジャンク・シンクロンをチューニング！」

1 + 2 + 2 + 3 = 8

「集いし願いが、新たに輝く星となる！光差す道となれ！シンクロ召喚！飛翔せよ『スターダスト・ドラゴン』！」

スターダスト・ドラゴン ATK2500/DEF2000

「それがお前のエースモンスターか」

「・・・どうだろうな、まあ主要なのは間違いない。さらにスターダスト・ドラゴンのレベルを一つ下げ、レベル・ステイラーを特殊召喚。そして装備魔法『団結の力』をスターダスト・ドラゴンに装備」

レベル・ステイラー ATK600/DEF0

スターダスト・ドラゴン ATK2500/DEF2000 AT  
K4100/DEF2000

「スターダスト・ドラゴンがサイバー・エンド・ドラゴンを上回った！」

「・・・・・・・・」

「行け！スターダスト・ドラゴン！『シューティング・ソニック』！」

「ぐああああっ！」

亮 LP1700 LP1600

「カードを3枚セットし、『命削りの宝札』を発動！5枚になるようにドロー！さらに1枚セットしターンエンド」

「俺のターン！俺は手札からプロト・サイバー・ドラゴンを召喚！」



プロト・サイバー・ドラゴン ATK1100/DEF600

「このカードはフィールド上に表側表示で存在する限り、カード名を『サイバー・ドラゴン』として扱う。さらに魔法カード『二重召喚』を発動し、もう1枚のプロト・サイバー・ドラゴンを再び召喚・  
・そして融合を発動！現れる、サイバー・ツイン・ドラゴン！」

サイバー・ツイン・ドラゴン ATK2800/DEF2100

サイバー・ツインだと？まさか・・・

「さらに手札から『リミッター解除』を発動！サイバー・ツイン・ドラゴンの攻撃力を倍にする！」

サイバー・ツイン・ドラゴン ATK2800/DEF2100  
ATK5600/DEF2100

「これで終わりだ！スターダスト・ドラゴンに攻撃！『エヴォリユーション・ツイン・バースト』！」

「秋！」

カイザー・・・お前は強い。だが！

「リバースカードオープン！『聖なるバリア ミラーフォース』！」

「甘い！トラップ発動！『トラップ・ジャマー』！」

トラップ・ジャマーが発動し、ミラフォが破壊される・・・

「・・・カイザー！この勝負はまだ終わらない！俺は非常食を発動！伏せたカード1枚を墓地へ送り、ライフを1000回復する！」

秋LP1300 LP2300

「さらにトランプ発動！『プライドの咆哮』！」

「何！？二重トランプ・・・！」

「このカードは戦闘ダメージ計算時、自分のモンスターの攻撃力が相手モンスターより低い場合、その攻撃力の差分のライフポイントを払って発動！ダメージ計算時のみ、自分のモンスターの攻撃力は相手モンスターとの攻撃力の差の数値+300ポイントアップする！」

秋LP2300 LP800

スターダスト・ドラゴン ATK4100/DEF2000 AT  
K5900/DEF2000

「迎え撃て！スターダスト・ドラゴン！『シューティング・ソニック』！」

「行け！サイバー・ツイン・ドラゴン！」

互いの口から吐かれる砲撃がぶつかり合う。だがその力はスターダスト・ドラゴンが押し、跳ね返した。

亮 1600 1300

「つく・・・俺は、ターンエンドだ」

「俺のターン！ドロー！俺は手札から『死者蘇生』を発動！蘇らせるのはお前の墓地のサイバー・ドラゴン！そして手札から『ダーク・リゾネーター』を召喚！」

サイバー・ドラゴン ATK2100 / DEF1600

ダーク・リゾネーター ATK1300 / DEF800

相手の場には最早サイバー・フェニックス1体これで決まった

「レベル5のサイバー・ドラゴンにレベル3のダークリゾネーターをチューニング！」

5 + 3 = 8

「王者の鼓動、今ここに列を成す！天地鳴動の力を見るがいい！シンクロ召喚！我が魂！『レッド・デーモンズ・ドラゴン』！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン ATK3000 / DEF2000

「バトル！レッド・デーモンズ・ドラゴンでサイバー・フェニックスを攻撃！アブソリュート・パワー・フォース！」

レッド・デーモンズの攻撃に寄ってバラバラになるサイバー・フェニックス。そしてカイザーはカードを1枚ドローする。だが、もはやドローカードは関係ないだろう。

「そして、スターダスト・ドラゴンでダイレクトアタック！『シューティング・ソニック』！」

シューティング・ソニックが放たれ、カイザーをその光が包み込んだ

亮 LP1300 LP0

.....

S i d e 明日香

デュエルは、秋の勝利で終わった。サイバー・エンド・ドラゴン、ツイン・サイバー・ドラゴン・・・どちらも亮のエースモンスターだったはずなのに・・・それをも倒してしまった秋。彼の強さは、カイザーを超えていたというの・・・？

「見事、だ・・・まさか、俺が負けるとはな」

「.....アンタは、今負けてどう思う」

「何？」

秋はデュエルディスクをしまいながら、亮を見た。

「.....このデュエルは俺の勝ちだ。現状でアンタはそれをどう思うのかと聞いている」

「.....全力は出したんだ、悔いはない」

「確かに、1度だけならそう思うだろう・・・だがそれが、5回、

10回、50回・・・一度も勝利することなく、負けが続いてみる。それはどれだけ空しいことだ？」

秋は亮を見てから、いまだにパワーボンドを見つめる翔君を見た。

「お前が兄なら・・・アンタのその態度が本当の正しいことなのか、弟との絆が本当にそれでいいのか・・・考えて見るんだな」

そう言っつて秋は静かにその場を去って行つた。

Side秋

「はあ・・・」

『マスターお疲れ様です』

「ありがとうミラ」

ミラと寮へと戻る。カイザーに勝つた・・・かなりギリギリの状態。だが解せない。あの場面で何故、サイバー・エンド・ドラゴンではなくサイバー・ツイン・ドラゴンを出したのか・・・この辺曖昧なんだよなあ・・・サイバー・エンドって1体だけなのか？

『それにしてもマスター・・・随分怒っていましたね』

「だな・・・俺の中の『武藤秋』が言いたいことを言った感じにも思える」

心と言うよりも身体が反応した感じだったしな・・・後のことは、  
自分自身で解決するだろう

『そういえばマスターはご自身の世界での戦績ってどうだったんですか？』

「うーん・・・どうだろうなあ。ガチデッキや中堅デッキも多かったけど、ネタデッキもあったし・・・その使用したデッキによるな」

俺の言葉にミラは首を傾げる

『ガチデッキ？中堅デッキ？ネタデッキ？なんですかそれ』

「帰ったら教えるよ」

こうしてレッド寮に帰る俺達。帰ってからそれぞれの意味を教えろと、ミラは「うわー」とガチデッキについて引いていた。何故だ？

## 勝敗（後書き）

ガチデッキ⇨遊戯王カード×

ガチデッキ⇨ソリティア

初めて出た大会でガスタワンキルされてどんだけ凹んだことやら・

・  
そのときから真面目にデッキ構築を考えようと思いましたね

今回はとうとうタッグデュエルです。まさかのあの人が登場!?

## 伝説（前書き）

とりあえず、連続更新・・・また脳内ストックが切れて来た（汗）  
そろそろ夏休みに突入します。残念ながらサイコシヨッカー騒動や  
レアカードハンターのなあれは話に入れません。その代わりにちよ  
つとウフフな話があったりなかったり

秋「今日の最強カードは・・・『燃える闘志』か」

発動後このカードは装備カードとなり、  
自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体に装備する。  
元々の攻撃力よりも攻撃力が高いモンスターが相手フィールド上に  
存在する場合、  
装備モンスターの攻撃力はダメージステップの間、元々の攻撃力の  
倍になる

秋「ゼアルの新しいパックに入ってたやつだな。このカードは色々  
なデッキに刺さる」

作者の私も結構多用してます。流石に複数枚入れませんが、ピン刺  
しです。

さて、今回はあの人が・・・！



## 伝説

制裁デュエル当日。デュエル場で俺、ツァン、十代、翔が立っていた。翔はあれから亮と仲直りをしたという。

『それでーハ、制裁タッグデュエルを始めるノーネ!』

クロノス教諭の言葉と共に、ステージに上がる俺達。そして相手は・

「「とおう!」「」

「うおっ!」

現れたのは迷宮兄弟。こいつら・・・たしかDMの最終回でもEDで出てたな。まあ、それはどうでも良いか・・・ガーディアンをどう潰すか、それが鍵となりそうだ。遠くで校長が興奮しているところを見ても、やはり伝説のデュエリストと戦った男達に興奮しているようだ。やれやれ・・・

「お前達の相手は」

「我ら迷宮兄弟!」

「「いざ、尋常にデュエル!」「」

・・・何が尋常にデュエルだ。プレイヤーキラーで鍵の番人とか言いながら如何様していたくせに。

「いよっしゃ！俺と翔が最初でいいよな！」

「ああ、好きにしろ」

「僕は構わないわ」

『それでー八、制裁タッグデュエルを開始するノーネ！』

頑張れよ十代、翔

S i d e ????

・・・ふうん、なかなか面白いことをしているじゃないか。久しぶりにアカデミアを視察に来たと思えば制裁タッグデュエルか・・・あいつのことに来たが、探す手間も省けたな

「・・・さて、俺も行くとするか」

終わろうとするデュエルの場所へ、俺はゆっくりと歩いて行った。

S i d e 秋

とりあえず、本当に原作通りだった。迷宮兄弟は『ユーフォーロイド・ファイター』によってブチ止めされた。

「やったぜ！」

「か、勝ったス！」

まあ、あのダーク・ガーディアンを倒したんだ。流石とも言つべきだろうな。

「じゃ、次は俺らか」

「・・・敵に対してこういうのもなんだけど、あんな倒され方した後に僕達戦つていいのかしら？」

「・・・確かにな」

なんてことを言いながらデュエルステージに上がった俺達。だが、そこにいたのは迷宮兄弟ではなかった。

「なっ・・・」

「え!?!」

「ふうん・・・この俺を待たせるとはいい度胸だ」

そこにはこの世界では伝説のデュエリストに数えられる男、海馬瀬人がいた。は？なんでこの人こんなところにいるわけ!?!

『お、オーナー!?!何故ここに・・・』

校長もまさかの事態に驚いている。そういえば朝、ジェット機の音がしたようになかったような・・・

「ふうん、この学園の学園調査と個人的な私用だ。久しぶりだな、武藤秋」

「・・・お、お久しぶりですね、海馬さん」

顔をひきつらせる俺。アルバムの中にも海馬と武藤秋が映る写真を見つけていた。どうやら面識はあるようだ。

「貴様が制裁タッグデュエルを受けるといつのを知ってな。俺が受けてやるう・・・その服である以上、はったりはあるまい？」

「マジツすか」

「当然だ」

既にデスクを構える海馬。やるしかなさそうだな・・・けど

「ツアン？」

「・・・・・・・・え？あ、な、何よ」

どうやら海馬を前に、緊張してるようだ。まあ伝説のデュエリストがいるんだ。仕方があるまい。

「大丈夫、俺たちなら勝てるさ」

「・・・・・・・・う、うん」

「大層な自信だな・・・いいだろう。ライフは互いに8000だ。行くぞ！」

俺達もデスクを構える

「『デュエル  
決闘！』」

1人VS2人のタッグデュエルのルール

・ライフは1人が8000、2人は2人で8000

・ターンは海馬 ツアン 海馬 秋 海馬の順

・モンスターの効果、及び魔法罫は自分が伏せたもののみしか発動  
できない

・モンスターゾーン、魔法トラップゾーン、墓地は共有

海馬瀬人 LP 8000

武藤秋 ツアン・デイレ LP8000

「俺の先攻・・・ドロー！俺は手札から『マンジユ・ゴット』を召喚！」

マンジユ・ゴット ATK1400/DEF1000

「マンジユ・ゴットの召喚に成功したことにより、俺は白竜降臨を手札に加え、白竜降臨を発動！マンジユ・ゴットを生贄に、『白竜の聖騎士』を召喚！」

白竜の聖騎士 ATK1900/DEF1200

「さらに白竜の聖騎士の効果発動！このカードを生贄に、デッキ、手札から『青眼の白龍』を特殊召喚する！いでよ、我が最強の僕！『青眼の白龍』！」

青眼の白龍 ATK3000/DEF2500

現れる青眼の白龍。これだけでも十分ふつくしいな、顎社長。まあ、実際には攻撃力3000なだけのバナラさんなわけだがな

「い、一ターン目からいきなり・・・！？」

「先攻は最初のターン、攻撃は出来ない。カードを2枚伏せてターンエンドだ」

「ぼ、僕のターン・・・（青眼の白龍が目の前に・・・なんて威圧感なの！？）」

ツァンの手が震えている。

「ツァン」

「っ・・・！？」

「大丈夫だ、お前はお前のデュエルをすればいい」

俺が言うと、ツァンは深呼吸をして、デッキに手をかけた

「僕のターン！ドロー！僕は手札から紫炎の狼煙を発動！デッキからレベル3以下の「六武衆」と名のついたモンスターを1体手札に加える！僕は『六武衆・ヤリザ』を加える！さらに手札から『六武

衆・ヤリザ』を召喚！さらに六武衆と名のつくモンスターがフィールドにいる時『六武衆の師範』を特殊召喚できる！来て、師範！」

六武衆・ヤリザ     ATK1000/DEF500

六武衆の師範       ATK2100/DEF800

「僕はカードを2枚伏せてターンエンドよ！」

「俺のターンドロー・・・ふうん、そんな雑魚どもを並べたところで我が青眼の前では無力！俺は手札からロード・オブ・ドラゴンドラゴンの支配者    を守備表示で召喚！」

ロード・オブ・ドラゴン   ドラゴンの支配者     ATK1200/  
DEF1100

「さらにドラゴンを呼ぶ笛を発動！俺の手札から青眼の白龍を2体、召喚条件を無視して召喚！」

青眼の白龍？       ATK3000/DEF2500

青眼の白龍？       ATK3000/DEF2500

笛に呼ばれて出てくる2体の青眼の白龍。フィールドに出て来たってことは手札に融合はないということか？

「さあ行くぞ！バトルだ！青眼の白龍！その雑魚モンスターを粉砕しろ！」

「と、畏発動！『和睦の使者』！このターンダメージは0となり、

モンスターも戦闘では破壊されない!」

和睦で防いだか・・・ツァンのもう一枚は・・・なるほどな、俺が渡していたカードか

「良いだろう、ターンエンドだ」

「ようやく俺のターンか・・・俺のターン!ドロー!」

フィールドにはヤリザと師範か・・・

「俺は手札から『愚かな埋葬』を発動!デッキから『グローアップ・バルブ』を墓地へ送り、効果を発動!デッキトップのカードを墓地に送ることで、このカードは特殊召喚できる!チューナーモンスター『グローアップ・バルブ』を特殊召喚!」

グローアップ・バルブ ATK1000/DEF1000

「チューナーモンスター?なんだそれは」

「見ていれば分かりますよ。そしてこのカードは、墓地からモンスターが特殊召喚された時、特殊召喚できる!『ドッペル・ウォリアー』を特殊召喚!」

ドッペル・ウォリアー ATK800/DEF800

「ふうん、雑魚を並べたところで、俺の青眼の白龍には勝てん」

攻撃力3000が3体か・・・だが、こちらも負けるわけにはいかない。



「ツァン、いくぞ」

「秋に任せるから、さっさとやりなさいよ」

「レベル2のドッペル・ウォリアーと、レベル5の六武衆の師範にレベル1のグローアップ・バルブをチューニング！」

「チューニング!?なんだそれは！」

海馬が驚きの声を上げる。そりやそうだ。チューニングなんて外じや絶対に知られていないだろうし、まあ、問題はない・・・のかな。

「集いし願いが、新たに輝く星となる!光差す道となれ！」

2 + 5 + 1 = 8

「シンクロ召喚!飛翔せよ『スターダスト・ドラゴン』！」

スターダスト・ドラゴン ATK2500/DEF2000

「な、何だこれは・・・だが、そのモンスターの攻撃力は2500・・・我が青眼の白龍には遠く及ばん」

「いいや、まだまだ!ドッペル・ウォリアーがシンクロ素材となった時、フィールド上にドッペル・トークン2体を特殊召喚できる！」

ドッペル・トークン? ATK400/DEF400

ドッペル・トークン? ATK400/DEF400

「そして通常召喚！チューナーモンスター『ジャンク・シンクロン』」

ジャンク・シンクロン ATK1300/DEF500

「レベル1のドッペル・トークン2体とレベル3の六武衆・ヤリザに、レベル3のジャンク・シンクロンをチューニング！」

1+ 1+ 3+ 3= 8

「王者の鼓動！今ここに列を成す、天地鳴動の力を見るがいい！シンクロ召喚！我が魂、『レッド・デーモンズ・ドラゴン』！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン ATK3000/DEF2500

「青眼の白龍と攻撃力が互角だと！？」

「さらに手札から装備カード『ファイティング・スピリッツ』を發動し、スターダスト・ドラゴンに装備！このカードを装備した装備モンスターの攻撃力は相手フィールド上に存在するモンスター1体につき300ポイントアップする！よって1200ポイントアップ！」

スターダスト・ドラゴン ATK2500/DEF2000 AT  
K3700/DEF2000

「やった！これで青眼の白龍を上回ったわ！」

「スターダスト・ドラゴンで青眼の白龍に攻撃！響け、『シユータ

「イング・ソニック！」

「甘いわ！畏発動！『攻撃誘導アーマー』！このカードは、相手モンスターの攻撃宣言時、そのダメージ計算前に攻撃モンスター以外のモンスター1体を選択して発動する。攻撃モンスターは選択したモンスターと戦闘を行い、ダメージ計算を行う！俺はレッド・デーモンズ・ドラゴンを選択！」

レッド・デーモンズ・ドラゴンにアーマーが装着され、スターダストはレッド・デーモンズ・ドラゴンに向けてシューティング・ソニックを放つ。レッド・デーモンズ・ドラゴンは無抵抗のまま消えてしまった

「きゃあああ！？」

「うわあああつ！」

武藤秋 ツアン・ディレ LP8000 LP7300

「つく……」

俺が出来ることは……

「カードを2枚伏せ、ターンエンド！」

「ふうん……俺のターン！俺は手札から『命削りの宝札』を発動！カードを5枚になるようにドロし、5ターン後に全て捨てる！ふふふ……ふはははは！見せてやるわ、青眼の白龍の力を持ってして生まれる最強のカードを！俺は手札から『融合』を発動！青眼の白龍3体融合！現れる『青眼の究極竜』！！！！」

ブルーアイズ・アルティメットドラゴン

「！！！！」

青眼の究極竜 ATK4500 / DEF3800

「こ、これが・・・青眼の究極竜・・・？」

出たか、青眼の究極竜・・・！これより青眼の白龍が墓地に言った  
ということとは、龍の鏡を使ってくる可能性もある。つく、しかもフ  
アイテイング・スピリッツの効果が下がる・・・！

スターダスト・ドラゴン ATK3700 / DEF2000 AT  
K3100 / DEF2000

それを想定したとして、あの伏せカードはまさか・・・

「ふはははは！見るがいい！これが絶対なる力！孤高の先にある最  
強の力だ！さらに装備魔法『ビッグバン・シュート』を青眼の究極  
竜に装備！バトル！青眼の究極竜でスターダスト・ドラゴンに攻撃  
！アルティメット・バースト・ストリーム！」

青眼の究極竜 ATK4500 / DEF3800 ATK4900  
/ DEF3800

「あんたが孤高を貫くなら、俺達は絆の力だ！畏発動！『燃える闘  
志』！発動後このカードは装備カードとなり、自分フィールド上に  
表側表示で存在するモンスター1体に装備する。元々の攻撃力より  
も攻撃力が高いモンスターが相手フィールド上に存在する場合、装  
備モンスターの攻撃力はダメージステップの間、元々の攻撃力の倍  
になる！」

スターダスト・ドラゴン ATK3100 / DEF2000 AT

K5600 / DEF2000

「迎え撃て、スターダスト・ドラゴン！『シューティング・ソニック』！」

「ぬおおおおおっ！」

海馬瀬人 LP8000 LP7300

「やってくれたな・・・だが！俺は手札から速攻魔法『超再生能力』を発動！エンドフェイズにこのターンに墓地に送られた数だけカードをドローする！さらに手札から『龍の鏡』を発動！青眼の白龍3体をゲームから除外し、現れる『青眼の究極竜』！」

青眼の究極竜 ATK4500 / DEF3800

「そして、カードを3枚セットし、ターンエンドだ！このエンドフェイズ、カードを4枚ドロー！さあ、貴様のターンだ！」

Sideツァン

相手フィールドには青眼の究極竜が1体と、ロード・オブ・ドラゴン・ドラゴンの支配者。そして伏せカードが4枚・・・でもこっちは攻撃力が倍になった『スターダスト・ドラゴン』がいる。そして伏せカードは僕を含めて3枚・・・でも、あの相手フィールドの雰囲気はなに？ここまでのライフの攻防は全部秋がやった・・・僕は何もやってない・・・

「僕のターン！ドロー！」

僕も力にならなきゃ・・・べ、別に秋のためじゃいんだからね！？  
僕だってオベリスクブルーなんだから、いい所を見せなきゃいけないだけなんだから！来たのは・・・！

「僕は手札から永続魔法『六武衆の結束』を発動！そして『六武衆・ザンジ』を召喚！さらに六武衆がフィールドにいる時、僕は2枚目の『六武衆の師範』を特殊召喚する！」

六武衆・ザンジ     ATK1800/DEF1300

六武衆の師範     ATK2100/DEF800

「これにより、武士カウンターが結束に二つ溜まったわ！僕は結束を破壊してカードを二枚ドロー！」

お願い、この状況から確実に勝利へ導ける方向へ持っていけるカード・・・来てえ！

「・・・！！僕は、自分のフィールド上に『六武衆』と名のついたモンスターが2体以上いることで『大將軍 紫炎』を特殊召喚するわ！」

大將軍 紫炎     ATK2500/DEF2400

「さらに突進を究極の青眼竜に装備するわ！」

究極の青眼竜     ATK4500/DEF3800     ATK5200  
/DEF3800

「行くわよ！スターダスト・ドラゴンで、青眼の究極竜に攻撃！  
シューティング・ソニック！」

「畏発動『聖なるバリア ミラーフォース』！」

「さ、させないわ！畏発動『魔宮の賄賂』！相手の魔法、畏の発動を無効にし相手はカードを1枚ドローする！」

これで・・・！

「なんだと！？ぐあああああっ！」

海馬瀬人 LP7300 LP6900

「そしてザンジでロード・オブ・ドラゴン・ドラゴンの支配者に攻撃！」

「ちいい！」

「さらに、紫炎と師範でダイレクトアタック！いけえ！」

紫炎と師範がダイレクトアタックにかかる

海馬瀬人 LP6900 LP2300

「カードを1枚伏せてターンエンド！」

「よくも俺にここまで仕打ちを・・・俺のターン！」

相手のライフは風前の灯・・・これならいける！きつといけるわ！

Side秋

・・・流石六武衆。恐ろしいほど効果が鬼畜だな。

「ふうん・・・この手は使いたくはなかったが、速攻魔法『月の書』  
！大將軍 紫炎を裏守備表示にする！さらに非常食を発動し、この  
カードを破壊！」

破壊されたのは・・・なるほど、『激流葬』このターンで勝負を付  
ける気か！？だがこの局面でいったい何を使う気だ？

海馬瀬人 LP2300 LP3300

「さらに永續罫『スキルドレイン』！1000ライフポイントを払  
って発動する。このカードがフィールド上に存在する限り、フィー  
ルド上に表側表示で存在する効果モンスターの効果は無効化される  
！」

海馬瀬人 LP3300 LP2300

な、なあ！？社長ってそんなカードをデッキに入れてたか！？これ  
じゃあ効果モンスターの効果が使えない・・・！

「そして俺はさらに罫を発動！『異次元からの帰還』！ライフを半  
分にすることで、互いのプレイヤーは除外されているモンスターを  
可能な限り特殊召喚できる！」

あ、アニメ効果だ！？まあ俺達はモンスターを除外していないか



ら意味はないが・・・

「蘇るがいい・・・！青眼の白龍たちよ！」

海馬瀬人 LP2300 LP1150

青眼の白龍？ ATK3000/DEF2500

青眼の白龍？ ATK3000/DEF2500

青眼の白龍？ ATK3000/DEF2500

青眼の白龍が3体・・・！だがこれでスターダスト・ドラゴンの攻撃は上昇する！

スターダスト・ドラゴン ATK2500/DEF2000 ATK  
3400/DEF2000

「そして融合を発動！これにより、青眼の白龍を3体融合！再びその姿を現せ！青眼の究極竜！」

青眼の究極竜 ATK4500/DEF3800

スターダスト・ドラゴン ATK3400/DEF2000 AT  
K2800/DEF2000

「さらに！手札から装備魔法『巨大化』を発動し、青眼の究極竜に装備！」

青眼の究極竜 ATK4500/DEF3800 ATK9000

/DEF3800

スターダスト・ドラゴン ATK2800/DEF2000 AT  
K5300/DEF2000

「攻撃力、9000!?!」

「ふはははは!どうだ!神をもしのぐ最強の力!青眼の究極竜で  
スターダスト・ドラゴンに攻撃!」

何!?!なぜわざわざ攻撃力の高いスターダスト・ドラゴンを!?!な  
らば!

「畏発動 聖なるバリア ミラーフォース 「畏発動!」トランプ・  
ジャマー!」

「なっ!?!」

ここでヴェクテム・サンクチュアリを使うわけには……!

「行け!アルティメット・バースト・ストリーム!」

「うわあああっ!」

「きゃああ!?!」

武藤秋 ツアン・ディレ LP7300 3700

「ぐっ……この瞬間、ファイティング・スピリッツの効果発動!  
装備したモンスターが破壊される時、このカードを代わりに破壊す

ることで、破壊を無効にする・・・！」

そしてスターダスト・ドラゴンがボロボロの状態でフィールドに残る。フィールドに残っているのはスターダスト・ドラゴン、裏守備の紫炎、攻撃表示のキザン、師範

「さらに速攻魔法『融合解除』を発動！青眼の白龍3体は元の姿を現す！」

青眼の白龍？ ATK3000 / DEF2500

青眼の白龍？ ATK3000 / DEF2500

青眼の白龍？ ATK3000 / DEF2500

「バトル続行！青眼の白龍でキザンに攻撃！滅びのバースト・ストリーム！」

武藤秋 ツアン・デイレ LP3700 LP2500

「さらに師範へ追撃！」

武藤秋 ツアン・デイレ LP2500 LP1600

「スターダスト・ドラゴンにトドメをさせ！滅びのバースト・ストリーム！」

「うわああああああっ！」

「きゃああああああっ！」

衝撃が俺達を襲う。スターダスト・ドラゴンが俺達を庇うように破壊されたのが一瞬見えた気がする。俺達のライフは・・・

武藤秋 ツァン・デイレ LP1600 LP1100

「つく・・・次の攻撃を喰らったら終わりだ」

「我が青眼の白龍達を前に、怖気づいたか」

「誰が・・・！」

次のターンが、俺のラストターン・・・

「サレンダーなら今のうちだが、どうする？武藤秋」

「誰がサレンダーなんかするか・・・！ツァン・・・！？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ツァンが青い顔で青眼の白龍を見ている。戦意を根こそぎ持っていかれたいらしい。

「ふうん・・・相方はもう駄目らしいな。それでもやるか？」

「最後の最後まで、俺は諦めない・・・！俺の、ターン！」

俺はカードをドローした

## 伝説（後書き）

まさかの海馬社長登場。前作のキャラ達・・・社長以外に出てくる機会・・・あるのか？

## 意地（前書き）

というわけで海馬との決着&平穩に戻ります

秋「今日の最強カードは『シンクロ・ストライカーユニット』だな」

アニメオリジナル

永続罫

発動後このカードは装備カードとなり、自分フィールド上に存在するシンクロモンスター1体に装備する。

装備モンスターの攻撃力は1000ポイントアップし、エンドフェイズ毎に800ポイントダウンする。

秋「5D'sでは遊星が使っているカードだ。初登場はジャンク・ウォリアーに装備されたが、その後はシューティング・スターなどにも装備されているな」

なんでこのカードOCG化しなかったのかな・・・そこまでぶっ飛んだ効果だろうか？

## 意地

Side秋

「俺の・・・ターン！ドロー！」

カードを引く。来たのは強欲な壺！

「さらに、強欲な壺で2枚ドロー！」

こい、逆転の一手・・・！つく！

「俺は手札の『ボルト・ヘッジホッグ』を墓地へ送り、『クイック・シンクロン』を特殊召喚！さらに墓地のボルト・ヘッジホッグは、自分のフィールド上にチューナーがいる時、特殊召喚できる！」

クイック・シンクロン ATK700/DEF1400

ボルト・ヘッジホッグ ATK800/DEF800

これで出せるのはジャンク・バーサーカーとニトロ・ウォリアー。それにジャンク・アーチャー・・・だが、それでは青眼の白龍は倒せない。どうする？どうすれば・・・ん？そして海馬の伏せカードも気になる・・・って伏せカード・・・そうか、俺がツァンに渡した、このカードがあった！

試合前

「ツァン、これ」

「何これ？」

俺が渡したのはあるカード

「もし、ツァンがシンクロモンスターを操る時、こいつが使えるかもしれないだろ？」

「ふーん・・・確かに、それは悪くない考えだわ。私も一緒に戦うんだもの」

俺はカードを渡す。すると、ツァンが顔を紅くした

「か、勘違いしないでよね！？あくまでも僕は貴方の数合わせにしているだけなんだから！」

「はいはい・・・」

そうか、まだ・・・手はある。

「そして通常召喚！来い！」『チューニング・サポーター』！」

チューニング・サポーター ATK1000/DEF1000

「ツァン、まだ行ける・・・まだ諦めるな！」

「あ、秋・・・でも・・・」



「俺を信じる！」

ここまで来たんだ・・・諦めて溜まるものか！ここまできたら、俺の逆転への一手に賭ける！

「レベル1のチューニング・サポーターと、レベル2のボルト・ヘツジホッグに、レベル5のクイック・シンクロンをチューニング！」

「諦めずにまだチューニングをしてくるか・・・（伏せカードは『奈落の落とし穴』もう勝負は決まったな）」

1 + 2 + 5 = 8

「光速より生まれし肉体よ、革命の時は来たれり。勝利を我が手に！シンクロナ召喚！きらめけ『フルール・ド・シュヴァリエ』！」

美しい花の頭をした騎士のモンスターがその姿を現した。

フルール・ド・シュヴァリエ ATK2700 / DEF2300

「シンクロナ召喚か・・・悪いが消えてもらおう。畏れ発動『奈落の落とし穴』！」

周囲から驚きの声が漏れる。だが・・・

「フルール・ド・シュヴァリエのモンスター効果！相手が魔法・畏れカードを発動した時に発動！その発動を無効にし破壊する！」

「なに！？だが攻撃力2700のフルール・ド・シュヴァリエで我

が青眼の白龍とどう戦う気だ！」

これが、俺達の最後の攻撃……！

「行くぞ！バトルだ……！フルール・ド・シュヴァリエで、青眼の白龍を攻撃！」

「ふうん、返り討ちだ……青眼の白龍！滅びのバースト・ストリーム！」

「ツアン！今だ……！」

今こそ、ツアンに託したカードが……意味を成す！

「畏カード発動！『シンクロ・ストライカーユニット』！」

「このカードは、発動後シンクロモンスターの装備カードとなり、装備したモンスターの攻撃力が1000ポイントアップする！」

フルール・ド・シュヴァリエ ATK2700/DEF2300  
ATK3700/DEF2300

だが、この一撃じゃ海馬は倒せない。俺の伏せた最後のカードを今使う！

「さらに畏発動！『シンクロ・バトン』！このカードは、自分フィールド上に表側表示で存在するシンクロモンスター1体を選択して発動！選択したシンクロモンスター1体の攻撃力は、自分の墓地に存在するシンクロモンスターの数×600ポイントアップする！俺の墓地に眠るのは、2体のシンクロモンスター！」



「ツァン!？」

「やった!やったわ!僕達勝ったのね!」

ツァンが興奮して我を忘れてる!?

「落ちつけツァン!」

「だって僕達勝ったのよ!?落ちつけるわけがないじゃない!」

「周囲見ろ!みんな見てるから!」

俺の一言で、ツァンが顔を真っ赤にし、目を点にして周囲を見た。そしてさらにその顔の赤が濃くなり、すぐに俺から離れた。

「べ、べべべべべ別に!嬉しくなんかないんだから!」

「遅いって・・・」

すると、いつの間にか海馬は消えていた。帰ったのかな?

Side 海馬瀬人

「・・・ふうん」

俺は騒ぐ二人をそのまま放置し、外へと急いだ。次の仕事が待っているから当然だ。それにしても、あの武藤秋が俺に勝利するとはな・・・そしてシンクロモンスター・・・俺の知らないカード・・・詳

しく調べる必要があるな。偽造カードでもあそこまでは上手く動かん。我が社のデュエルディスクシステムがなんの混乱もなくあの様なモンスターを動かせるはずもない。俺は通信端末を取りだす

「・・・磯野か、至急調べて欲しいことがある」

別に今すぐと言うわけではないが・・・少々気になることもあるしな。とりあえずしばらくはこのままでよからう。

Side 秋

「ってなわけでクロノス教頭、これで俺達はテスト免除、ですよね？」

「ぬぐぐぐぐぐぐぐ・・・約束は守るノーネ」

「ああそれと」

みんなが立ち去っている中、俺は振り返る。

「生徒を甘く見ない方がいいですよ？ご自分のためにも」

「ぐぬぬ〜！」

クロノス教諭は悔しそうにハンカチを加え、その場から走って行った。ま、これではしばらく静かな学園生活が送れるだろう。セブンスターの話までは・・・相当先だしな

あの騒動から数日が経った。いつも通りでみんなで食事をしていると、一人の女子生徒が俺達の前に現れた。

「武藤秋君！」

「……はい？」

緑髪に眼鏡をかけた女子生徒……この子見覚えあるな。えーと……

「あら、委員長じゃない。どうしたの？」

そうだ！委員長か、色々と行事とかで率先して仕事してたからどこかで見てたなとは思っていたけど。確か名前は……原麗華だったかな？

「武藤秋君！貴方を懲らしめに来ました！」

……いきなり話が物騒なんですけど

「あの、俺何かした？」

「してます！女の子とイチャイチャイチャイチャ！不純異性交遊という言葉を知っていますのですか貴方は！」

……この言葉、最近聞いた気がする。

「あら委員長、秋が不純異性交遊していると何かいけないの？」

雪乃が言う。いや、俺してる覚えないんだけど・・・いや、これだけみんな話したりしてるのでも駄目と言うつもりかこの子は

「駄目に決まっています！大衆の前で女の子に抱きついて！社会に出ていい大人になれませんし、他の生徒にも示しが付きません！」

いや、正確には俺が抱きついてるわけじゃなく、抱きつかれてる側なんだけど。雪乃は思い出して嬉しそうに笑ってるし、ツァンは顔を紅くしてorzな状態になっているし・・・

「ともかく！武藤秋君！私とのデュエル、受けてもらいましょう！」

「・・・とりあえず、ご飯食べてからでいい？」

「食事中でしたか、すいません」

周囲見てください。ここ食堂です

デュエルスペース

「これより授業を始めます！」

「・・・・・・休み時間に授業って」

「「デュエル！」」

原麗華 LP4000

武藤秋 LP4000

「私の先攻です。ドロー！私は手札から『封印の黄金櫃』を発動！  
2ターン後に『悪夢の拷問部屋』を手札に加えます！」

バーンデッキか・・・雪乃の言ったとおりだったな

『いい？秋・・・彼女のデッキはバーンデッキ。しかも光の護封剣  
や悪夢の鉄檻なんかで動きを止めてくるわ』

『・・・なるほど、っていいの？』

『私は貴方を応援してるのよ？情報を与えるくらい当然でしょ？』

・・・とりあえず、彼女のバーン対策のデッキは使っけど、  
このデッキはどこまで俺に答えてくれることやら。

「さらに、私は手札から『昼夜の大火事』を発動します。貴方に8  
00ポイントのダメージです」

「うおっ！」

秋 LP4000 LP3200

「さらにモンスターをセットし、カードを1枚セット。ターンエン  
ドです」

「俺のターン！ドロ・・・！よし俺は手札から『BF・暁のシロ  
ッコ』を召喚！」



BF - 暁のシロッコ ATK2000 / DEF900

「このカードはレベルが5であるものの、相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない時、生贄なしで召喚できる。さらに、『BF - 黒槍のブラスト』を特殊召喚！」

BF - 黒槍のブラスト ATK1700 / DEF800

「このカードは、BFと名のつくモンスターがフィールドにいる時特殊召喚できる。そしてこいつも同じだ。チューナーモンスター『BF - 疾風のゲイル』を特殊召喚！」

BF - 疾風のゲイル ATK1300 / DEF400

「そして『BF - 暁のシロッコ』の効果を発動！1ターンに1度、自分フィールド上に表側表示で存在する「BF」と名のついたモンスター1体を選択して発動！選択したモンスターの攻撃力は、そのモンスター以外のフィールド上に表側表示で存在する「BF」と名のついたモンスターの攻撃力の合計分アップする！俺はBF - 黒槍のブラストを選択する！」

BF - 黒槍のブラスト ATK1700 / DEF800 ATK5000 / DEF800

「行くぞ！BF - 黒槍のブラストで攻撃！」

「畏発動！『攻撃の無力化』！相手モンスターの攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了します！」

「つく！」

このターン攻撃が出来なかった。ということは、あのモンスターはよほど守るべきカードということなのか？つまり、俺のすべきことは……

「俺はレベル5の暁のシロツコに、レベル3の疾風のゲイルをチューニング！」

5 + 3 = 8

「黒き疾風よ！秘めたる想いをその翼に現出せよ！シンクロ召喚！舞いあがれ『ブラックフェザー・ドラゴン』！」

ブラックフェザー・ドラゴン ATK2800/DEF1600

「カードを1枚伏せてターンエンドだ！」

「それが噂のシンクロ召喚ですか。私のターン……ドロー！私は手札から『火炎地獄』を発動！相手に1000のダメージを与え、自分には500のダメージを与えます！」

「ブラックフェザー・ドラゴンのモンスター効果発動！自分がカードの効果によってダメージを受ける場合、代わりにこのカードに黒羽カウンターを1つ置く。このカードの攻撃力は、このカードに乗っている黒羽カウンターの数×700ポイントダウンする。つまり、委員長！ダメージを受けるのは君だけだ！『ダメージ・ドレイン』！」

「そんな・・・キャア!？」

炎は俺ではなくブラックフェザー・ドラゴンを襲い、ブラックフェザー・ドラゴンはそれを吸収する。一方の委員長はその自分の効果を受けてダメージを受けることとなった。

ブラックフェザー・ドラゴン ATK2800/DEF1600  
ATK2100/DEF1600

原麗華 LP4000 LP3500

「ならば、その効果でそのモンスターの下げるまで!私は『デス・コアラ』を反転召喚!このカードは手札の枚数×400ポイントのダメージを与えます!貴方の手札は2枚!よって800ポイントのダメージです!」

デス・コアラ ATK1100/DEF1800

「ダメージ・ドレイン!黒羽カウンターを置く!」

ブラックフェザー・ドラゴン ATK2100/DEF1600  
ATK1400/DEF1600

「ならばさらに手札から『昼夜の大火事』を発動!」

「同じくダメージ・ドレインだ!」

ブラックフェザー・ドラゴン ATK1400/DEF1600  
ATK700/DEF1600

ブラックフェザー・ドラゴンの羽根が、どんどん黒く染まっていく。

「随分と下がりましたね。これならデス・コアラで十分倒せます。  
デス・コアラで攻撃！」

「畏発動！『炸裂装甲』！デス・コアラを破壊する！」

「つく・・・なら私は手札から『命削りの宝札』を発動します。5  
ターン後に全て捨てる代わりに5枚ドロ！そして『光の護封剣』  
を発動します。さらに魔法カード『御隠居の猛毒薬』を発動し、私  
のライフを1200ポイント回復！」

原麗華 LP3500 LP4700

「そして再び『火炎地獄』を発動！これにより私は500のダメー  
ジを受け、貴方は1000のダメージを受ける！」

原麗華 LP4700 LP4200

「ダメージ・ドレイン！」

ブラックフェザー・ドラゴン ATK700/DEF1600 A  
TK0/DEF1600

「とうとう攻撃力0になりましたね。私はモンスターを一枚伏せ、  
カードを1枚伏せ、ターンエンドです」

「俺のターン！ドロ！俺は強欲な壺を発動して2枚ドロ！手札  
からチューナーモンスター『BF-銀盾のミストラル』を通常召喚  
！そして『BF-黒槍のブラスト』を特殊召喚！」

B F - 銀盾のミストラル    A T K 1 0 0 / D E F 1 8 0 0

B F - 黒槍のブラスト    A T K 1 7 0 0 / D E F 8 0 0

「そして手札から『大嵐』を発動！」

「こ、この局面で大嵐を!？」

このままチューニングし、一気に攻める!

「レベル4の黒槍のブラストに、レベル2の銀盾のミストラルをチューニング!」

4 + 2 = 6

「漆黒の力!大いなる翼に宿りて、神風を巻きおこせ!シンクロ召喚!吹きすさべ、『B F - アームズ・ウィング』!」

B F - アームズ・ウィング    A T K 2 3 0 0 / D E F 1 0 0 0

「バトルだ! B F - アームズ・ウィングで、セットモンスターに攻撃!」

「セットしていたのはマシユマロンです!貴方には1000のダメージを受けていただきます!」

無駄だ!

「再びダメージドレイン!そしてアームズ・ウィングは貫通効果を

持つモンスター！さらに守備モンスターを攻撃する時は500ポイント攻撃力が上がる！ダメージは受けてもらう！」

原麗華 LP4200 LP1900

「そして黒槍のブラストで伏せモンスターを攻撃！黒槍のブラストも同じく貫通効果を持っている！」

「きゃあああああああ！」

原麗華 LP1900 LP700

「そして、カードを2枚セットし、ターンエンドだ」

「私のターンドロー！この瞬間封印の黄金櫃の効果で『悪夢の拷問部屋』を手札に加え、発動！さらに手札から、ライティングボルテックスを発動。手札を捨てて相手モンスターすべてを破壊します」

うげえ・・・えげつねえ

「・・・・・・・・ターンエンド」

「俺のターン！俺も手札から『命削りの宝札』を発動！5枚になるようにドローし、5ターン後に全て捨てる！そして死者蘇生を発動し、『BF - 黒槍のブラスト』を特殊召喚！」

BF - 黒槍のブラスト ATK1700/DEF800

これで勝利へのPEACEは揃った。行くぞ！

「バトル！黒槍のプラストでマシユマロンを攻撃！そしてこの瞬間手札から『BF・月影のかルート』を手札から墓地へ送ることで黒槍のプラストの攻撃力は1400ポイントアップ！」

BF - 黒槍のプラスト    ATK1700 / DEF800    ATK3  
100 / DEF800

「なんですって！？きゃあああああ！」

原麗華    LP700    LP0

「やったぜ！秋の勝ちだ！」

十代達が俺の周りにやってきた。

「すげえな！BF！俺のHEROみたいだったぜ」

「確かに、BFはそれぞれのモンスター効果で互いの力を引き出すからな」

俺達がワイワイと話していると、委員長が近づいてきた。

「私の完敗です・・・私もまだまだ、勉強不足と言うことですね」

「悪いな委員長。俺の勝ちってことでお咎めなしな」

「しかたありません・・・」

言いながら眼鏡を外す委員長。へえ・・・

「委員長、眼鏡外すと可愛いな」

「っ……！あ、あ、あ、貴方は！何を言ってるんですか！」

「……へ？」

「いや、委員長っていつも眼鏡かけて怒ってるイメージが強かったから。眼鏡外すと可愛いって……」

「っ！武藤秋君！次はこうはいきませんからね！覚えてなさい！」

そう言っつて委員長は走り去って行った。

「なんだっただ？」

「……秋、わざとなのかしら？」

雪乃が俺に言いよる。なんのこっちゃ？

「え？」

「これは……」

「天然ね……」

明日香とツァンは俺を見てため息をつく。ついでに三沢、隼人、翔もだ。十代は首を傾げてるみたいだけど……俺もよくわからん。

謎だ



この後数日間、委員長が眼鏡を外す回数が多くなったのはまた別の話

意地（後書き）

B F・・・恐ろしい子。

カルトでオーバーキル必要がなかった気もするけど・・・まあい  
つか

次回は新キャラが登場します。お楽しみに

## 妹（前書き）

とりあえず予告していた新キャラです。TFのキャラではありません  
まあ、出番は相当少ないですが・・・

秋「今日の最強カードは『真紅眼の不死竜』か」

真紅眼の不死竜

このカードはアンデット族モンスター1体をリリースして

表側攻撃表示でアドバンス召喚する事ができる。

このカードが戦闘によってアンデット族モンスターを破壊し墓地へ送った時、そのモンスターを自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

アンデット族モンスターに特化したデッキや、強制転移で相手にアンデットを送ってそれを破壊し、自分のフィールドに持つてくるとか、もしくは『アンデットワールド』を使うのが一番有効的だな

作者はアンデット族デッキが大好きです。お気に入りはもちろん真紅眼の不死竜です

## 妹

あれからしばらく時が流れた。そういえば隼人のイベントのがしたな・・・デツキ構築してて気が付かなかった。

「最近面白いことないなあ・・・」  
やることと言ったら十代とデュエルばかりだし。てか、最近万丈目見ないな・・・

「そういえば、秋は冬休みとかどうするんだ？」

「んー・・・どうしようかなあ」

家に帰るのもいいが、他人の家にいるみたいで気まずいからなあ・・・  
ってか、家に帰ると・・・なあ

「実家に帰ったりか？」

「どうしようかなあ・・・家に帰ると大変なことになるからなあ」

『マスターのお家には大変な子がいらっしやいます』

「大変な子？」

「俺の妹だ」

「へえ、妹いたのか」

そう、この妹・・・かなーり問題がある子である。元々の「武藤秋」

に問題があったからではあるものの、多分だがとんでもないことをしでかすだろう。

「どんな子なんだ？」

「小学生でな・・・超が付くほど面倒臭い」

『マスターのことが大好きなんですけど、デュエルアカデミア行く時なんて大泣きして止めようとしてたんですよ？』

そう、もともと武藤秋がいじめられていたことで引きこもりの感じだったらしく、妹はすごく世話を焼いてきた。おまけにデュエルもなかなか強い。

「へえ・・・会ってみたいな」

「会わないほうがお前の身のためだ」

俺に近づく家族以外の人間に対して敵対心むき出しだな。あいつ友達いるのか疑問になってくる。今頃どうしてるのかねえ

『（マスターはあの子のことどう思ってるんでしょう？本当のご家族ではないですけど・・・）』

「秋！やっと見つけたわ！」

「ん？明日香じゃないか・・・どうした？」

なんか慌てた様子の明日香。いったいどうしたんだ？

「と、とにかく来て！」

「お、おい！」

明日香に引つ張られ、俺はデュエルスペースの方まで引つ張られて行った。

デュエルスペース

「ぐわあああああ！」

オベリスクブルー生徒 LP 0

「私の勝ちです！」

デュエル場の壇上に少女が一人。オベリスクブルーの生徒を倒していた。そしてその少女を見た瞬間頭を抱えなくなった。

『ええ！？』

驚いているのは明日香と十代。まあ、オベリスクブルーの生徒が倒されてしまったとあっては当然である。てか、普通に負けんなよ、名も知らないオベリスクブルーの生徒よ

「はぁ・・・」

黒い髪にツインテールの少女・・・間違いない、あの子は

「ほ、ほら・・・貴方のお兄さん連れて来たわよ？」

「お兄ちゃん！」

武藤秋の妹だ・・・凜は俺に抱きつき、顔をうずめる。「お兄ちゃんの匂いだあ」なんて言葉は多分俺の空耳だ。

「お兄ちゃん！元気だった？いじめられてない？」

「・・・凜、お前どうしてここにいる？」

武藤凜。小学校六年生。普通の学校に通う武藤秋の妹である。何故ここにいるのか、そもそも何故、俺も知らない生徒と凜がデュエルして、凜が勝っているのだろうか？すると、近くにツァンがいるのを見た。

「ツァン、状況説明して」

「なんで僕が・・・まあ別にいいけど」

Sideツァン

数十分前

「はぁ・・・もうすぐ冬休みか・・・」

家に帰ってもやることないし。どうしたもんかしら。いつその島に残ってるという手もある。けどそれって仮にも女子高生としてど

うなのかしら。そうだ・・・秋はどうなのかしら？って、なんであいつが出てくるの！？

「って・・・何かしら」

なにか広場が騒がしい。広場に行くと、小さな女の子が周囲をチヨロチヨロと走り回っていた。

「どこの子かしら・・・」

というか、なんでこんなところに小学生くらいかしら？子供がいるのだろう

「ねえ、その貴女どうしたの？」

明日香がそれとなく背をかがめ、少女に視点を合わせる。

「んと、武藤秋という名前を御存知でしょうか？」

秋の名前が出てきて驚く私。明日香もそう見たい。ジュンコとモモエも同じみたいね。

「秋？ええ、知っているけど・・・」

「私、妹の凜と言います。兄の所在を御存知でしょうか？」

い、妹ですって！？まさか妹なんてあいつにいたの！？まあ、今まで話に出てないだけで兄弟がいても別におかしくはないけど。

「ええと・・・今授業が終わって放課後だし、ちょっと待ってね」



そう言いながらPDAを取り出そうとする明日香。するとオベリス  
クブルーの生徒がぶつかつた。腰をかがめていたせいか、明日香は  
それに反応できなかつたようだ。

「いった」

「あ、わりい」

ブルーの生徒は特に悪びれた様子もなく、そのまま通り過ぎ去ろう  
とする。しかし……

「はっ！」

いきなり秋の妹がクツを飛ばし、ブルー生徒の頭にぶつけた。

「いつて……クツ？」

「その貴方！女性にぶつかつておきながら今の態度はないんじゃないですか！？」

「なんだ？子供？」

「そこの方に謝りなさい！」

なんというか、秋とはまた違う意味で変な奴ね……あの子

「子供の癖に何言つてんだ？つてか、どこの子供だよ」

「デュエルです！私が勝つたらそこの方にちゃんと謝罪しなさい！」

・・・言葉のキャッチボールが出来てないわよ？明日香も困った顔になってるし。で、なんでブルーの生徒もブルーの生徒でデュエルする気なのよ

「いいだろう、付いてこい」

すぐそこにデュエルスペースがあるからすぐ出来るみたいね。あの子を取りだしたのは・・・旧型のデュエルディスクね。昔のものみたいだけど

「デュエル！」

凜 LP4000

ブルー生徒 LP4000

「先攻は譲ってやるよ、ガキンチョ」

「誰がガキンチョですか！私のターン！ドロー！私は手札から『ゾンビ・マスター』を召喚します！」

ゾンビ・マスター ATK1800/DEF0

「さらに『愚かな埋葬』を発動し、『ゾンビ・マスター』を墓地へ送ります！そして召喚したゾンビ・マスターのマスターの効果！1ターンに1度、手札のマスターを一枚墓地へ送ることで、墓地のアンデット族マスターを一枚、特殊召喚します！」

アンデットデッキ・・・ああいう女の子が使うのは珍しいわね

「私は手札の『ゴ布林ゾンビ』を墓地へ送り、墓地へ送ったゴ布林ゾンビを守備表示で特殊召喚します!」

ゴ布林ゾンビ ATK1100/DEF1050

アンデット族を自分で墓地に落とし、そのモンスターを召喚する。  
なるほど

「さらにカードを1枚伏せてターンエンドです!」

「気食悪いモンスターだな・・・俺は手札から『不屈闘士 レイレイ』を召喚!」

不屈闘士 レイレイ ATK2300/DEF0

出た・・・なんでブルー生徒ってあのモンスター使う人多いわけ?  
見てるだけである時のことを思い出して腹が立つわ。

「行くぞ、バトル!不屈闘士 レイレイでゴ布林ゾンビに攻撃!」

「つく!」

破壊されるゴ布林ゾンビ。リバースカードを発動しない?

「レイレイは攻撃した後は守備表示に変更される」

「ゴ布林ゾンビのモンスター効果!このカードが墓地へ送られた時、自分のデッキから守備力1200以下のアンデット族を1体選

択し、お互いに確認して手札へ加える！私は『ゾンビ・マスター』を選択！」

「・・・なるほど、ならカードを3枚伏せてターンエンドだ」

あの子のデッキはアンデット族を中心に展開するデッキか・・・あまり見ないデッキね

「私のターン！ドロー！ゾンビ・マスターのモンスター効果！私は手札の『ゾンビ・マスター』を墓地へ送ることでゾンビ・マスターを召喚！」

ゾンビ・マスター ATK1800/DEF0

「さらにもう一体のゾンビ・マスターの効果！手札の『ゾンビキャリア』を墓地へ送ることで、墓地から『ゴ布林ゾンビ』を召喚！」

ゾンビキャリアって確かチューナーモンスターでしょ！？あの子もまさかシンクロ召喚をするの！？

ゴ布林ゾンビ ATK1100/DEF1050

「そして伏せていた罠カード『DNA改造手術』を発動！貴方のモンスターはアンデット族へと変化します！さらに手札から『強制転移』を発動！貴方のレイレイと私のゴ布林ゾンビのコントロールを入れ替えます！」

不屈闘士 レイレイの肌がオレンジっぽいから紫色へと変化する。気持ち悪っ・・・て、コントロールが入れ替わった！？ゴ布林ゾンビは相手のフィールドに特殊召喚されたけど・・・どうするつも

り？レイレイはこのターンコントロールを変えることはできないのよ？

「そして不屈闘士 レイレイを生贄に捧げ、いでよ！『真紅眼の不死竜』！」

真紅眼の不死竜 ATK2400/DEF2000

れ、真紅眼！？いや、ちょっと違うかしら？なんか所々溶けてる感じね。

「馬鹿な！真紅眼！？あのレアカードを！？」

「このカードは『真紅眼の黒竜』ではありません。間違える人も多いですが・・・このカードはアンデット族の『不死竜』です。このカードはアンデット族1体で生贄召喚が可能です。さらに手札から『大嵐』を発動！フィールド上の魔法罫を全て破壊します！」

これであの生徒を守るカードは全て無くなったわね。DNA改造手術もレイレイがいらないんじゃないかな。不要なカード・・・

「バトルです！真紅の不死竜でゴブリンゾンビに攻撃！『アンデットフレア』！」

「ぐあああっ！」

ブルー生徒 LP4000 2700

「さらにゴブリンゾンビの効果が発動します！私は『ゴブリンゾンビ』を手札に加える！」

決まったわね。ゾンビ・マスター2体で攻撃すればこれで勝ちじゃないかしら？

「そして真紅の不死竜のモンスター効果！このカードがアンデット族を破壊し、墓地へ送った時そのモンスターをフィールド上に特殊召喚できます！」

ゴブリンゾンビ ATK1100/DEF1050

「これで終わりです！モンスターで一斉攻撃！」

「ぐわあああああああっ！」

オベリスクブルー生徒 LPO

・・・オベリスクブルーの生徒に小学生が勝っちゃった。しかもオバーキル

SideOut

Side秋

「とまあ、こんな感じね。大体は」

「・・・凜、お前な」

「あの人が悪いんです」

と、反省の色一切ない凜。凜は現在レッド寮の食堂で俺の膝に乗りながらジュースを飲んでいる。

「で、明日香は明日香でこの事態に俺を呼ぼうにも転んだ反応でPDAの調子が悪くなったから俺を探して走っていたと」

「そうよ。ありがとうね、凜ちゃん」

「いえ、当然のことをしたまでですから」

「えばるな」

とりあえず拳骨を喰らわせる俺。凜は痛そうに頭を抑えていた。まったく……

「で？お前はわざわざ何しに来た。このデュエルアカデミアまで」

「お兄ちゃんを連れ戻しにk」アホを言うな「くっ！」

再び拳骨。このガキ……

「なんでそうだった？」

「だってお母さんが『もうすぐお兄ちゃんが帰ってくる』っていうから。学校が終わった日にすぐにこのデュエルアカデミアに来たの」

「……交通費は？」

「お母さんのへソクリ」

頭が痛くなってきた。

「凜、そのお母さんの「もうすぐお兄ちゃんが帰ってくる」「っていうのは、俺がこの学校をやめるんじゃない、冬休みだから帰ってくるってほうの意味だと思っぞ」

「へ？」

駄目だこいつ、まったく意味を理解していないらしい

「……ようするに、俺は学校をやめないって意味だ」

「……えーーーーー!?!」

大声で驚く声を上げる凜。思わず耳を塞ぐ。

「だって！お兄ちゃんがこの学校で残れるはずないもん！デュエルだって強くないし、勉強だって出来ないし！ドジだし！引きこもりだし！」

「言いたい放題言われてるわね、秋」

「頭が痛い……」

雪乃が面白そうに笑っている。他人事だと思っ……

「貴女ね！お兄ちゃんをたぶらかしてるのは！」

と、ズビシと擬音が聞こえてきそうな感じで雪乃を指差した凜。



「あらあら、私？」

「やめんか凜・・・てか、なんで雪乃？」

「女の勘！」

オメーの勘は当たらねえから。勘の前に常識を鍛えろ

「デュエルです！お兄ちゃんは渡しません！」

「あらあら、いいわよ。ただしさっきの生徒と同じように見ないとね」

「上等です！」

言いながらデュエルディスクを構える凜。

「勝手に決めんな」

「あつっ」

「俺はこの学校で学習して、仲間作って楽しくやってんだ。お前が勝手に決めるな」

「だつてえ・・・」

と、悔しそうに俺を見る凜。武藤秋ならこのまま凜に押し切られた  
だろうが、俺はそうはいかない。

「冬休みに帰ってやるから、今日は大人しく帰れ」

「でも……」

「……あの、秋？非常に言いにくいことなんだけど」

「？」

「デュエルアカデミアと本土を繋ぐ連絡船……5時が最終で次来るのは1週間後よ？」

雪乃の言葉に硬直。頭を抱える。せつかく厄介事が無くなったかと思っただけの厄介事がくるとは思わなかった。

「じゃあお兄ちゃん！お兄ちゃんの部屋泊めてね」

「……とりあえず、大徳寺先生に相談するしかなさそうね」

レッド寮

「事情はわかったのにやー凜ちゃんは1週間ここにいといいのにや。高校の見学と言うことで秋君と一緒になら、自由に校内を歩けるように申請もしておくにや」

「ホントですか！？わーい！」

まじかよ……

「……いいんすか？大徳寺先生」

「見たところしつかりした子みたいだし、問題さえ起こさなければ大丈夫にゃ」

いや、早速問題起こしてるんですけど・・・

「なあなあ、お前強いんだろ？俺とデュエルしようぜ？」

「えーと・・・あなたは？」

「俺は遊城十代だ！よろしくな！」

「・・・・・・・・・・・いいでしょう、この武藤凜、お相手いたします」

こうして外へ出る凜と十代

「ねえ秋、凜ちゃんの雰囲気変わってない？」

流石明日香、するどいな・・・

「ああ、アイツは前に色々あってな・・・大丈夫かな、十代」

俺は不安を抱えながら外へ出ることにした。

## 妹（後書き）

というわけで妹登場。オベリスクブルー弱い（汗  
次回、凜の十代に対しての態度の理由があらわになります

## 誤解（前書き）

久しぶりにクラッシュタウン編が見たくなったので、DVDを借りて満足してきました。今度インフェルニティデッキ作りたいなあ・  
・私も満足したい

でもインフェルニティ・デーモン高いんですね、ゲーム限定だし、単価で2000円超えてるしorz

秋「今日の最強カードは・・・『ハネクリボー』か」

作者は持ってないですこのカード。クリボーですらどこかに行ってしまった。残ってるのが・・・何故に屋根裏の物の怪？

秋「さあ、満足させてくれよ!」

## 誤解

Side秋

「よつしゃ！いくぜえ！」

「・・・お相手いたします」

「<sup>デュエル</sup>決闘！」

十代 LP4000

凜 LP4000

十代と凜のデュエルが始まる。大丈夫かな、十代・・・

「先攻はもらうぜ！俺のターン！俺は『E・HERO スパークマン』を召喚！」

E・HERO スパークマン ATK1600/DEF1400

「さらにカードを2枚伏せ、ターンエンド！」

「私のターン・・・ドロー！十代さん、貴方はお兄ちゃんとうい関係ですか？」

「ん？普通に仲間だけど、どうかしたか？」

「いいえ・・・その言葉がどこまで本当かと思ひまして。私は『ピラミッド・タートル』を守備表示で召喚」

ピラミッド・タートル ATK1200/DEF1400

召喚されたのはあいつか・・・あのデッキは一応サイドデッキに『帝』も入っているからな。十代大丈夫か？

「さらにカードを1枚セット。ターンエンド」

「俺のターン！俺は手札から融合を発動！手札の『フェザーマン』と『バースト・レディ』を融合！現れる！マイフェアリットモンスター！『フレイム・ウィングマン』！」

フレイム・ウィングマン ATK2100/DEF1200

「行け、バトルだ！フレイム・ウィングマンでピラミッド・タートルに攻撃！『フレイムシュート』！」

「つく・・・ピラミッド・タートルのモンスター効果。戦闘で墓地へ送られた時、自分のデッキから守備力2000以下のアンデット族モンスターを特殊召喚。現れよ！『真紅眼の不死竜』！」

「だが、フレイム・ウィングマンの効果により、破壊したモンスター分のダメージを受けてもらうぜ！」

凜 LP4000 LP2800

真紅眼の不死竜 ATK2400/DEF2000

もう召喚したか・・・いつもならゾンビ・マスターとかを召喚して展開を広げることもあるんだが・・・

「げっ・・・攻撃力2400か。ならスパークマンを守備表示にして、ターンエンド」

「私のターン・・・私は手札から邪神機ダークネスギア-獄炎ごくえんを召喚」

邪神機 - 獄炎    ATK2400 / DEF1400

「なっ・・・レベル6を生贄なしで!?!」

「どっいつこと・・・?」

明日香達も驚きの声を上げている。まあ、あのカードは知らないだろうな

「・・・あのカードは生贄なしで召喚できる代わりに、リスクがある。もしエンドフェイズ時に自分の他にアンデットがいなかった場合。破壊されて墓地へ行く。もし墓地へ行けば、その分のダメージを喰らうというわけだ」

「なるほど、彼女はそれなりのリスクを負っているというわけか」

三沢が言いながら獄炎を見る。まあ、あのカードは元々俺のカードの1枚だしな。知ってる奴の方がいるわけがないか。

「バトルです。真紅眼の不死竜でフレイム・ウィングマンに攻撃」

「畏発動! 『ヒーロー・バリア』! このカードはE・HERO1体への攻撃を一度だけ無効にする!」



「ならば、獄炎でフレイム・ウィングマンに攻撃」

「つく！」

十代 LP4000 LP3700

「この瞬間にもう一枚の罠が発動！『ヒーロー・シグナル』！モンスターが破壊された時、自分のデッキか手札からモンスターを特殊召喚する！『E・HEROワイルドマン』を特殊召喚！」

E・HERO ワイルドマン ATK1500/DEF1600

「カードを1枚伏せ、ターンエンド」

「俺のターン！ドロー！俺は強欲な壺を発動！カードを2枚ドロー！」

さて、ここから十代がどう巻き返すかな？

「フィールド魔法『摩天楼・スカイスクレイパー』を発動！バトルだ！ワイルドマンで真紅の不死竜に攻撃！」

「罠カード「悪いがワイルドマンは罠の効果を受けないぜ！」っ！」

「そしてワイルドマンはスカイスクレイパーの効果で攻撃力が1000ポイントアップ！『ワイルドスラッシュ』！」

E・HERO ワイルドマン ATK1500/DEF1600  
ATK2500/DEF1600

凜 LP2800 LP2700

「カードを1枚伏せてターンエンドだ！そして、獄炎は破壊される！」

「つく・・・」

なるほど上手いな十代・・・凜に大ダメージを与えたようだ。

凜 LP2700 LP300

「私のターン・・・ドロ！私はまだ負けません！『強欲な壺』を発動し2枚ドロ！さらに罨カード『リビングデットの呼び声』を発動！蘇れ、『真紅眼の不死竜』！」

真紅眼の不死竜 ATK2400/DEF2000

「さらにフィールド魔法『アンデットワールド』を発動！これによりスカイスケレイパーは破壊となる！」

辺り一帯がおぞましい光景へと姿を変える。墓場なども現れる。

「ひうつ！」

雪乃が驚いて俺の腕を掴む。よほど怖いらしい。

「アンデットワールドはこのカードがフィールド上に存在する限り、フィールド上及び墓地に存在する全てのモンスターをアンデット族として扱います。また、このカードがフィールド上に存在する限りアンデット族以外のモンスターのアドバンス召喚をする事はできま

せん」

「いい!?!」

十代のやつ大丈夫か?これじゃあエッジマンは召喚できないし、真紅眼の不死竜に攻撃されたらワールドマンとスパークマン取られるぞ?てか凜、アンデットワールドってことは帝を入れてないみたいだな。

「さらにゾンビ・マスターを召喚!そしてゾンビ・マスターの効果!手札の『ゾンビキャリア』を墓地へ送り、『ゾンビキャリア』を召喚!」

ゾンビ・マスター     ATK1800/DEF0

ゾンビキャリア     ATK400/DEF200

「ゾンビキャリア!?!ってことはまさか・・・」

「レベル4のゾンビ・マスターに、レベル2のゾンビキャリアをチユーニング!」

4 + 2 = 6

「永久とこしえに彷徨う不死なる竜よ、愚者の魂を従えて今こそ蘇れ!シンクロ召喚!現れよ『デスクイザー・ドラゴン』!」

げえ!出やがった、アンデットワールドと最高に相性がいいあのカード。あげたのは俺だけど・・・大丈夫か、アイツ普段のデュエル

で使ってねえだろうな

デスカイザー・ドラゴン ATK2400 / DEF1500

「デスカイザー・ドラゴンのモンスター効果！このカードが特殊召喚に成功した時、相手の墓地に存在するアンデット族モンスター1体を選択し、攻撃表示で自分フィールド上に特殊召喚する事ができる！私は十代さんの墓地の『E・HERO バースト・レディ』を選択！」

E・HEROバースト・レディ（アンデット） ATK1200 / DEF800

「バースト・レディが！？」

「バトル！真紅眼の不死竜でワイルドマンを攻撃！『アンデットフレア』！」

「畏発動！『攻撃の無力化』！攻撃を無効にしてバトルフェイズを終了する！」

「運がいいですね・・・ならば『ライティングボルテックス』を發動！スパークマンとワイルドマンを破壊！」

さて、これで十代の手札は0枚。フィールドはがら空き。ここから巻き返せるかな？

「すつげえなお前！俺も負けてられないぜ！俺のターン！」

「・・・なぜ」

「あん？」

「何故、諦めないんですか？この状況で・・・貴方が不利なのは目に見えてるのに」

・・・凛

「へっ！デュエルつてのはさ、最後まであきらめなければカードが答えてくれるんだぜ？それにこんなに楽しいデュエル、滅多に味わえないぜ！ドロー！」

さて、十代・・・凛に勝てるか？

「いよっしや！俺は『E・HERO バブルマン』を特殊召喚！このカード1枚の時特殊召喚できる！そしてこのカードの召喚、特殊召喚時、他にカードがない場合は2枚ドロー出来る！」

さあ、十代・・・アイツに光を見せてやってくれ。

「俺は、さらに『融合』を発動！手札のクレイマンとバブルマンを融合！現れる『E・HEROマッド・ボールマン』！」

E・HERO マッド・ボールマン ATK1900/DEF3000

さて、3000の壁か。俺の知る限りライトニングボルテックスはアイツのデッキに1枚だけだ。そして3000を超えるモンスターはいない。どうする凛？

「俺はこれでターンエンドだ!」

「私のターン……ドロー……ターンエンドです」

最悪の策としてブラック・ホールがあるが、引かないか。

「俺のターン!ドロー!いよっし!俺は手札から『ホープ・オブ・ファイフス』を発動!墓地のフェザーマン、スパークマン、バブルマン、フレイム・ウィングマン、クレイマンをデッキに戻し、2枚ドロー……俺はこれでターンエンドだぜ!」

「私のターン……ドロー!私はゴブリンゾンビを召喚!」

ゴブリンゾンビ ATK1100/DEF1050

「私はこれでターンエンド」

「俺のターン……ドロー!つく、ターンエンドだぜ!」

お互い攻撃が出来ないようだな。さて、どちらが先に勝利のキーカードを引くのか……

「私のターンドロー!私は魔法カード『ブラック・ホール』を発動!全てのモンスターを破壊します!そしてゴブリンゾンビが墓地へ送られたことで私は『ゾンビ・マスター』を手札に加え、『ゾンビ・マスター』を召喚!バトルです!ゾンビ・マスターでダイレクトアタック!」

ゾンビ・マスター ATK1800/DEF0

十代 3700 1900

「カードを1枚伏せてターンエンド・・・次モンスターを引けなければ負けですよ?」

「俺のターン・・・ドロー!」

十代がドローをする。これが恐らくラストドローだ・・・さて、どうだ?

「へへっ!来たか相棒!俺はハネクリボーを攻撃表示で召喚っ!」

『クリクリ〜!』

ハネクリボー ATK300/DEF200

「ハネクリボー!」

「攻撃表示・・・!?!」

凜が驚いた顔をしている。ハネクリボーなんて知らないカードなうえ、効果も未知数。それを攻撃表示にすることとは何か策があるのかと考えているのだろう。

「さらにカードを1枚伏せ、ターンエンドだ!」

「秋、これは・・・」

「ああ、三沢が思った通りだと思っぞ」

これで、凜が攻撃するか否か？

Side 凜

「ハネクリボー！？」

攻撃力300！？舐めてるの！？

「私のターンドロ・・・十代さん、どういつもりですか！」

「へへ、これはお前を倒す切り札だぜ？」

切り札？こんな攻撃力300のカードが？効果は・・・フィールド上に存在するこのカードが破壊され墓地へ送られた時に発動。発動後、このターンこのカードのコントローラーが受ける戦闘ダメージは全て0になる？なるほど、その場しのぎ・・・違う！あの伏せカード！きつとミラーフォースかなにか！

「十代さん、そんな手には引つ掛かりません！ミラフォなんか伏せても無駄です！」

私の伏せにはお兄ちゃんがくれた『トラップ・スタン』がある。このターンでハネクリボーを倒し、次のターンで私の勝ち！

「私は手札から魔法カード『生者の書・禁断の呪術』を発動！墓地のアンデット族を1体復活させ、相手の墓地のモンスターを除外！私は自分の墓地の『真紅眼の不死竜』を復活させ、貴方の墓地の『E・HEROMッド・ポールマン』を除外！」



真紅眼の不死竜 ATK2400/DEF2000

「バトルです！真紅の不死竜でハネクリボーを攻撃！『アンデットフレア』！」

「この時を待つてたぜ！速攻魔法発動！『進化する翼』！」

そ、速攻魔法！？罨じゃない！？

「手札を二枚捨てることで、ハネクリボーはハネクリボーLV10へと進化するんだ！」

ハネクリボーLV10 ATK3000/DEF2000

「レベル10！？」

「そしてこのカードを生贄に捧げることで、相手フィールド上の攻撃表示モンスターを全て破壊し、破壊したモンスターの元々の攻撃力の合計分のダメージを相手ライフに与える！」

「なんですって！？きゃあああああっ！」

凜 LP300 LP0

Side秋

「すみませんでした」

デュエルを終えてから、凜は十代に頭を下げた。

「え？お前なんかしたっけ？」

「その、十代さんに勝手に勘違いして怒ってデュエルしてました・  
」

「勘違い？」

・・・しょうがない

「昔俺がいじめられた時期があっただろ？」

「ああ。」

「その時からか、凜は俺と同年代の人間に対して不信感を抱くようになっちまったんだ」

十代が言葉を聞いて驚く。十代だけではない。他のみんなもそうだ

「こいつなりに、俺を守るつという意思だったんだ。許してやってくれ」

「別に気にしてないぜ！あんなに楽しいデュエルができたんだ！またやろうぜ！凜！」

「十代さん・・・私のこと怒ってないんですか？」

凜が驚いた顔で十代を見る。だが周囲はやれやれとため息をついていた。

「十代はそんなことを気にするほどの人間じゃないわ」

「そうそう、アニキはいつもこんな感じっす」

明日香と翔の言葉に、凜は十代にまた頭を下げる。

「ありがとうございます十代さん、これからも兄をよろしくお願いします」

・・・厄事が増えたものの、こいつの俺と同年代への不信感が緩和できただけで良しとするかな？

## 誤解（後書き）

つてなわけで、凜のデッキはアンデットです。凜の軽い紹介を一つ

武藤 凜

12歳

使用デッキ アンデットワールドデッキ（サイドデッキに帝有）  
フェイバリットモンスター 真紅眼の不死竜

武藤秋の妹で、兄を守ろうとすることからブラコンとなっている。将来の夢は兄のお嫁さんとまでこの年で豪語する。

小学校では浮いた存在ではあるものの、そのデュエルの強さに惹かれる男子生徒や女子生徒も多い。

多分友達比率は 女の子<男の子

兄と同じ年の人間を極端に嫌っていたが、十代とのデュエルで和解し、現在は十代、翔、隼人、三沢とは普通に接することができるようになった。

次の出番はあるものの、冬休みをまたいだら学園祭まで出て来ない・  
・多分

## 欲望（前書き）

とりあえず更新・・・さっきのさっきまでパソコンが壊れてて直すのが大変だったorz

秋「今日の最強カードは・・・おい、なんでアクロバットモンキーなんだ？」

超最先端技術により開発されたモンキータイプの自律型ロボット。非常にアクロバティックな動きをする。

通常モンスターで、本田が猿にされた時もこんなロボットだった

いや、あんまり核心になるカードだとまた怒られちゃうから・・・

秋「それ言ったら龍亜と龍可はかなりネタばれしてた気が・・・」

## 欲望

「すげえな三沢！オベリスクブルーになれるかもしれないんだって？」

十代と翔が昼休みに騒ぐ。そういえばもうそんな時期か

「お兄ちゃん、この学校って昇格とかがあるの？」

「ああ、オベリスクブルーが一番上、ライイエローが中間、レッドが下だな」

「へえー」

と、凜は言いながら飯を食ってる。こいつのせいで食費がぶっ飛ぶのが空しい。母さんからは凜がおしかりを受け、ちゃんと見ておいてくれとのこと。学校はまだ終わりじゃないしな。普通の市立の学校とはいえ1週間休むのはまずいんだろう。

「まだ決まったわけじゃない。今度万丈目とデュエルすることになっている」

「なるほどなあ・・・でも三沢なら万丈目にも勝てるって！」

「そりゃどうだろうな・・・」

三沢のデッキは確か属性が全部あるデッキだったけ？

「一応いくつか試作は作ったんだがな・・・」

「俺も三沢とデュエルしたいぜ！」

「それは駄目だ。まだお前を倒すためのデッキは構築中だからな。万全の態勢で戦うつもりだしな」

ああ、そう言えば三沢って試作デッキをいくつも持ってるんだっけか。

「もちろん秋、お前のシンクロデッキ、そしてまだ見ぬデッキのためにも構築中だ」

「そりゃ楽しみだ」

「お兄ちゃんエクシーズは使わないの？」

「そういえば少ないな、使用回数。明日香と一回やっただけだし」

そんな感じで、楽しく昼休みを過ごす俺達。この時俺は忘れていた。この後起こる悲しい出来事を

翌日

「秋！大変だ！」

「どうした十代、こんな早くに」

「いいから来てくれ！」

十代に連れられ、海岸へと訪れた。そこにあっただのは三沢のデッキだった。

「これは・・・」

「酷いことをするものね・・・」

雪乃達も駆けつける。そうだった・・・万丈目がカードを海に捨てるんだった。知ってるのに対処出来なかった自分が空しくなる。俺は上着を脱ぎ、靴を脱ぐと海へと飛び込んだ。

「プハッ！」

カードをかき集めるが、なかなか海は深い。潜るといくつか流れかけているカードも見つける。

「秋！俺も手伝うぜ！」

十代と翔も飛び込み、カードを拾い始める。 37、38、39、40枚・・・よし、カードは全部あるな。

「これで全部だな」

「でもこれじゃカードはもう使えないわね」

そ、そうだった！デュエルディスク読み込めないじゃん！そしてカードはやはり三沢のものだった。方程式やら何やらがカードに書かれているので判断できた。方程式なんかカードに書くなよと突っ込みを入れたくなる。とりあえず覚悟しろよ、万丈目！



デュエル場

「万丈目!？」

「ふん、来たか・・・」

犯人はアイツだ。だが下手に動くことはしない。俺も万丈目がこんなことをした理由を知っているからだ。

「万丈目・・・」

「なんだその眼は」

「お前が三沢のカードを!？」

「何の話だ」

十代が叫ぶが、万丈目は反応がない。なんとか抑えるが、我慢できない。殴り飛ばしてやりたいくらいだ。だが、クロノスがいる以上ここで派手なことはできない。カイザーの時は人がいなかったからな。教師が

「いい、十代」

「三沢・・・」

「デッキはある。心配するな」

「な、何!？」

驚く万丈目。そりゃそうだ。

「あのデッキは調整用のデッキだ。そしてこれが俺の本当のデッキだ！」

上着に収納された6つのデッキ。これが三沢のデッキ

「上等だ・・・俺の憎しみの炎でそれを潰す！」

「「<sup>デュエル</sup>決闘！」」

デュエルの結果は原作通り、三沢の勝利だった。三沢はライエロ  
ーのまま、俺達を倒すまで残ると言いだした。そして万丈目はデュ  
エル場を後にしてしまった。この数日後、万丈目が行方不明となつた

「なあ・・・万丈目どこいったんだろうな」

「さあな・・・」

「この学園広いですから、どこかにいるんじゃない？」

凜が授業中にそんなことを言ってくる。机の上には小学校の問題が  
ある。先生に頼んで自習用に作ってもらったものだ。

「じゃあ探そうぜー！」

こうして、俺達は授業を抜け出すことにした。

「・・・で、なんでお前らまで？」

いるのは俺と十代、翔、隼人、凜だったのだが、何故か明日香、モエ、ジュンコ、雪乃、ツアンがいた。三沢は真面目だからな、抜け出すことはないだろう。

「私達も万丈目君が気になるのよ。探しましょう」

「しょうがないな・・・行くか」

大人数となった俺達は万丈目の搜索を開始する。森の中を進み、周囲を搜索するが一向に見つからない。

「見つからないな」

「この学園ってか、島は広いからな・・・」

最初に万丈目の部屋に行ったがいらない。学校内を探すがいない。と  
いうか、学校内で先生に見つかりそうになったので慌てて逃げて来た。  
んでもって今は森の中を歩いているわけだが・・・

「いねえな」

「いないな・・・」

「いねえっす・・・」

ため息をつく俺達。その時だった。

「ウキヤー！」

突然猿のような何かがジュンコを掴んだ。

「きゃー!?!」

「枕田！」

「ジュンコ!?!」

猿……!?!てか、SALだっけ?

「いたぞ！」

黒スーツの男たちが出て銃を構えようとする。

「な、なんだお前ら!?!」

「ここの生徒か……悪いが答える義務はない」

言いながらジュンコ否、猿に標準を合わせようとする。

「おい!やめろよ!」

「そうよ!ジュンコに当たったらどうする気!?!」

「麻酔弾だ……」

麻酔弾だからって済むか阿呆が!俺はカードをデッキから引き抜き、

銃を構える男に向かってカードを投げつけた。

「ぐあっ！」

・・・流石は鉄をも裂くデュエルモンスターのカード・・・ってか、それをやった俺もすげえ・・・自分で言うのもなんだけど

「貴様、何をする！」

「銃を仲間に向けている奴に対処しただけだろうが・・・十代、至急不審者がいると連絡しろ！」

「おう！」

言いながら大徳寺先生に連絡。銃を俺達に構えようとするので、逃げながらSALを追う。あの方角って確か・・・

「あつちは立ち入り禁止の危険エリアよ！」

「まじか、やべえな・・・」

このままだと大変だ。と思いきや、猿はその場で停止し、ジュンコを木の上に乗せたまま降り立った。

「はあ、はあ・・・っ、疲れた」

「うきー！」

「た、助けてー！」

随分メカニツクな猿だな、改めて見ると。確かカードでもこんな  
いた気がする。

「協力感謝しよう」

「誰だ？」

偉そうな老人と黒スーツの男たちがそこにはいた。そういえばこい  
つらが猿を改造した張本人だっけか？

「おいおっさん、なんだよあの猿は」

十代が老人に疑問をふっかける。そりゃそうだ。

「あれはデュエルが出来るように我々が教育し、更には機械により  
反射神経を底上げたのだ。その名もSuper Animal  
Learning。略してSALだ」

『そのまんまじゃん』

全員の声がハモル。そして男たちが銃を構えた。

「おい、だから枕田に当たるだろうが！」

「うおりゃー！」

十代が俺と同じようにカードを投げる。おいおいおい・・・

「ぐあっー！」

って、刺さってるし・・・

「いい加減に、なさい！」

後ろから雪乃お得意の股間蹴り。超痛そうだ。あ、そうだ。アイツデュエル出来るんだよな。原作でも確か十代が同じこととしてたし

「助けてー！怖いー！」

そら崖の上にある今にも折れそうな木にぶら下げられたら怖いわな

「SAL！俺とデュエルだ！俺が勝ったら枕田を返してもらおうぞ！俺が負けた時は自由だ。好きにしる」

「ちょっと武藤！あんた無責任なこと言ってんじゃないわよー！」

「たく、相変わらずだな枕田だな。」

「行くぜSAL！」

周囲は殆ど片づけたし、じじいが雪乃に股間蹴られて悶えている。雪乃、老人にも容赦ないな。他のメンツもよくもまあ大人に対してあそこまで・・・まあ、それはさておき

「『デュエル  
決闘！』」

・・・やっぱ喋れんのね

秋 LP4000

SAL LP4000

『私のターンンドロー・・・！』『怒れる類人猿』を召喚！』

怒れる類人猿 ATK2000/DEF1000

『さらにカードを2枚伏せ、ターンエンド』

やっぱり猿のカードか。原作通りなら、アクロバットモンキーも出てくるはずだ。

「俺のターンンドロー！俺は『ゴゴゴゴレム』を守備表示で召喚！

ゴゴゴゴレム ATK1800/DEF1500

「カードを2枚伏せ、ターンエンドだ！」

『私のターン！私は手札から『アクロバットモンキー』を召喚！バトル！怒れる類人猿で『ゴゴゴゴレム』を攻撃！』

アクロバットモンキー ATK1000/DEF1800

「ゴゴゴゴレムのモンスター効果！1ターンに1度、このモンスター破壊されない！」

『ならばカードをさらに1枚伏せ、ターンエンド』

「俺のターン！ドロー！」



手札は・・・よし、これなら

「俺は手札から『ゴブリンドバグ』を召喚！」

ゴブリンドバグ ATK1400/DEF0

「そしてゴブリンドバグのモンスター効果！このカードの召喚に成功した時、手札からレベル4以下のモンスターを手札から特殊召喚できる！その際ゴブリンドバグは守備表示になるが・・・俺は手札から『ジャンク・フォワード』を特殊召喚！」

ジャンク・フォワード ATK900/DEF1500

「そして、レベル4以下のモンスターの特殊召喚に成功した時、『TGワーウルフ』を特殊召喚する！」

TGワーウルフ ATK1200/DEF0

『いくらモンスターを召喚しても、怒れる類人猿には届かない』

「それはどうかな？レベル4のゴブリンドバグと、レベル4のゴゴゴレムでオーバーレイ！2体でオーバーレイ・ネットワークを構築！エクシーズ召喚！現れる『No.39 希望皇ホープ』！」

No.39 希望皇ホープ ATK2500/DEF2000

『・・・！』

「さらに！レベル3のジャンク・フォワードと、レベル3のTGワーウルフでオーバーレイ！2体でオーバーレイ・ネットワークを構

築！エクシーズ召喚！現れる『No.17 リバイス・ドラゴン！』

No.17 リバイス・ドラゴン ATK2000/DEF0

「リバイス・ドラゴンのモンスター効果だ！オーバーレイユニットを取り除くことで、リバイス・ドラゴンの攻撃力は500ポイントアップする！」

No.17 リバイス・ドラゴン ATK2000/DEF0 A  
TK2500/DEF0

「バトルだ！希望皇ホープでアクロバットモンキーに攻撃！『ホープ剣スラッシュ』！」

『畏発動『攻撃の無力化』攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了する』

「つく・・・ならばターンエンドだ！」

『私のターン！ドロー！私は手札から2体目の『アクロバットモンキー』を召喚！さらにバトル！怒れる類人猿でリバイス・ドラゴンに攻撃！この瞬間手札から『突進』を発動し攻撃力を700ポイント上昇させる！』

アクロバットモンキー？ ATK1000/DEF1800

怒れる類人猿 ATK2000/DEF1000 ATK2700  
/DEF1000

「希望皇ホープのモンスター効果発動！オーバーレイユニットを取

り除くことで、攻撃を無効にする！『ムーンバリア』！」

ホープの羽根が広がり、シールドになる。

『・・・つく！ならば1体目のアクロバットモンキーを守備表示に変更！ターンエンド！』

「俺のターン！ドロー！」

いよっし！これならいける！

「手札から魔法カード『強欲な壺』を発動し2枚ドロー！そして再び手札からゴブリンドバーグを召喚！」

ゴブリンドバーグ ATK1400/DEF0

今回の引きはかなりいいものだ。これなら一気に決めることができる！

「そしてゴブリンドバーグの召喚に成功した時、効果の前に罫を発動！『コピーナイト』！このカードは自分のフィールド上にレベル4以下のモンスターが召喚された時、同じ名前、レベルのモンスターとして特殊召喚できる！そしてゴブリンドバーグの効果！手札から俺はカゲトカゲを特殊召喚！」

コピーナイト（ゴブリンドバーグ） ATK1400/DEF0

カゲトカゲ ATK1100/DEF1500

「そして！レベル4のゴブリンドバーグ、同じくコピーナイト！そ

して同じくカゲトカゲの3体でオーバーレイ！3体でオーバーレイ・ネットワークを構築！エクシース召喚！現れる、『No.10 白輝士イルミネーター』！」

白輝士イルミネーター ATK2400/DEF2400

これで追加だな。

「リバイス・ドラゴンのオーバーレイユニットを取り除くことで、攻撃力をポイント上昇させる！」

No.17 リバイス・ドラゴン ATK2500/DEF0 A  
TK3000/DEF0

「バトル！白輝士イルミネーターで怒れる人類に攻撃！」

SAL LP4000 LP3600

『ぐあああつー！』

あ、ちゃんとそういう音声も揃ってるんだ。すごいな

「さらにリバイス・ドラゴンでアクロバットモンキーに攻撃！」

守備表示となっていたアクロバットモンキーが消え去る。残るは攻撃表示のアクロバットモンキー・・・いよし

「希望皇ホープ！アクロバットモンキーに攻撃！ホープ剣スラッシュ！」

「うきつ!？」

何故リバイス・ドラゴンで攻撃しなかったのかというような表情のSALそれにはちゃんと理由がある!

「そして!ホープの効果発動!俺はホープ自身の攻撃を無効にする!」

「ええ!？」

「なんでそんなことを!」

周囲も驚きの声を上げる。だが俺はこのカードのために攻撃をやめた!

「速攻魔法発動!『ダブル・アップ・チャンス』!このカードは!モンスターの攻撃が無効になった時、そのモンスター1体を選択して発動する。このバトルフェイズ中、選択したモンスターはもう1度だけ攻撃する事ができる!その場合、選択したモンスターはダメージステップの間攻撃力が倍になるんだ!よってホープの攻撃力は・  
・・!」

NO・39 希望皇ホープ ATK2500/DEF2000 A  
TK5000/DEF2000

「攻撃力5000!」

『うきい!..』

あ、とうとう音声システムまで猿になった。

「ホープ剣スラッシュ！」

L P 3 6 0 0 L P 0

「俺の勝ちだぜSAL、枕田は返してもらっぜ」

「うき〜・・・」

落ち込むSAL。近くにまで来ていた仲間の大軍も落ち込んだ様子である。

「なーに、どっちにしるお前は自由だぜ、好きなところに行きな」

「うき!?!」

「な、何を勝手なことを・・・!」

股間を抑えながら老人が叫ぶ。だって・・・

「別に俺、SALに負けたら研究所に戻れなんて言ってないし」

「そうそう!それに、牢屋に入るのはおじさんたちよ!」

そう言っつて凧が写真を見せる。学園内で銃を構えたり、SALの姿の写真だ。

「枕田、大丈夫かー?」

「だ、大丈夫じゃないわよ!とつとと助けなさい!」

やれやれ・・・

ベキッ!

「・・・ベキ?」

「え、あ嘘・・・嘘お!?!」

ジュンコが木から落下する。そっちは崖だ!

「枕田!」

手を伸ばし、なんとか腕を掴んだ。や、やべ・・・普通の俺の手ならいけるけど、この『武藤秋』の筋力じゃ持たない・・・!

「ひ、ひいい・・・!」

「枕田!下見るな!手を離すなよ!」

「い、言われなくても・・・」

つく・・・重い!

「アンタ今重いとか思ったでしょ!?!」

「い!?!今はそれどころじゃ!」

「秋!大丈夫か!」

十代がジュンコの手を掴む

「「せーの!」」

なんとか引き上げる。

「ハア、ハア・・・し、死ぬかと思った」

「危なかったなあ・・・そういえばSALは？」

「ああ、俺が拘束具外してやったぜ」

SALはディスクを付けたまま、嬉しそうに仲間の元へと帰って行った。やれやれ・・・これで一件落着・・・

「き、貴様ら良くも余計なことを・・・」

なんとか立ち上がった男たちだ。そういえばまだいたのかよ

「おいお前達!すぐにSALを・・・!」そうは、いかないんだにやー!」誰だ!?!」

「大徳寺先生!」

そこには大徳寺先生の姿があった。まったく、遅いんだよ

「ことが大きくなれば凜ちゃんの言うとおり、牢屋に行くのは貴方達なのにやー。既に警察にも連絡済み、観念するんだニヤー!」

「ぐっ・・・くそ・・・」



こうしてSAL事件は幕を閉じた。

レッド寮

「万丈目が学園を出てった!？」

「そうなんだにゃー・・・」

原作通りになったか。別に支障はないだろうが、ノース校に辿りついて自力で帰ってくるだろう・・・多分

「そっか・・・」

落ち込む一同。なんだかんだで万丈目のことを心配してるのか。

「ま、そのうち帰ってくるだろ。気長に待つとしようぜ」

「そっだな」

そんなことを話していると、枕田が近づいてきた。

「あの、武藤・・・あと、十代・・・」

近づいてきたというより、明日香とモモエに押されてきた感じだな

「どっした枕田」

「その、あ、ありがとう・・・助けて、くれて」

「なんだそんなことか、気にすんなよ。俺たち仲間だろ？」

十代が言うと、ジュンコは顔を紅くする。

「仲間を助けるのは当然だしな、十代」

「おう！」

なんてことを言って、みんなが笑顔になる。

「さて、もうこんな時間か」

「お兄ちゃん、お腹すいた」

「そつえば夕食の時間すぎるんじゃないか？」

「やべえな・・・しょうがない、イエローの食堂使つかあ」

「なら先生が奢るのにゃー」

「お！大徳寺先生太っ腹！」

そんな風に騒ぎながら食堂へ向けて足を進める俺達だった。

欲望（後書き）

ってなわけでスイマセン、話詰め込みすぎちゃいました

万丈目の活躍はノース校戦までお待ちください

SALとのデュエルも一方的でしたね。もっと練らないと・・・o

r  
z

## 過去の残照（前書き）

ちよつとだけ今回はデュエルなしで「城戸秋」の過去に迫ります  
デュエル少ない・・・orz

秋「今日の最強カードは久遠の魔術師ミラだ。俺の精霊でもあるな」

星4 / 光属性 / 魔法使い族 / 攻1800 / 守1000

このカードが召喚に成功した時、

相手フィールド上にセットされたカード1枚を選択して確認する。

この効果の発動に対して、相手は魔法・罠カードを発動することはできない

秋「この効果の強みは召喚した時に奈落の落とし穴や激流葬に引っかけられない点が意味をする。攻撃力が1800というのも、魔法使い族でも上等なカードだ。アツカーとしても十分利用できるぞ。前にも紹介していたが、カオス・ソーサラーの素材としても使えるのも一つの強みだ」

作者が大好きなミラちゃんです。この作品では勝手になんであんなきつい顔でカードが映ってるのかねつ造しました（笑）

## 過去の残照

Side秋

もうすぐ休みか・・・1週間が経って凧も無事帰ったが、多分怒られるだろうな。予定は立ててないなあ。そのまま学園に残るか？そうすればサイコシヨッカーの事件に巻き込まれることにはなるんだろうが・・・

「秋、今いいかしら？」

「雪乃、どうかしたか？」

雪乃が俺のところに来た。いつもは明日香がツァンといるのに、今日は珍しく一人だな。

「秋、冬休みの予定は・・・どうなの？」

「え？ああ、一応家に帰るつもりで入るよ。凧も帰ってこいってうるさかったし」

「そう・・・なら、よかつたらうちに来ないかしら？」

「雪乃の家に？」

別にいいけど・・・

「是非とも父と母にあなたを紹介したいのよ」

「お前の両親に？」

まるで恋人を紹介するような彼女だな。やれやれ・・・

「んじゃ、そうだな・・・日程は後で送る。後で連絡してくれるか？」

「ええ、わかったわ」

そう言っつて雪乃は嬉しそうに教室を出て行った。

『マスターも大変ですね』

「何が？」

「秋！」

すると今度はツァンがやってきた。

『ほら、言ったそばから』

なんのこつちや？

「秋？その、えっと・・・や、休み中の予定、その聞いてもいい？」

「ん？一応家に帰ると、雪乃の実家に遊びに行くって言うのがあるな」

「そ、そう・・・（雪乃、僕より先に・・・）」

「どうかしたのか？」

「え？えっと・・・その！良かったら休み中うちに遊びにこない？  
べ、別に深い意味はないわよ？と、友達をママとかに紹介したいと  
思ってたの・・・えっと・・・」

そういえばツアン、友達が少ないから母親が心配してるとかなんとか  
か前言ってたな。

「ああ、いいよ。日程をあとで送る」

「う、うん・・・よろしくね！」

そう言ってツアンは走って教室を出て行った。さて、俺も寮に帰って  
荷物をまとめる準備でもしますか・・・

武藤家

「ただいまー」

「お兄ちゃん！お帰りー！」

帰ってきて玄関先でいの一歩に凜に抱きつかれた。やれやれ・・・

「ただいま凜」

「あらあら、お帰りなさい秋」

「母さん、ただいま」

とりあえず部屋に荷物を置き、昼食を取る。ふう……本当の我が家ってわけじゃないけど、我が家っていいねえ

「お兄ちゃん！決闘！」

「なんで」

「お兄ちゃんが向こうに 行っているから出来なかったじゃない！」

「却下……俺は疲れてるから」

ソファーに寝っ転がり、ジュースを飲む。あ……いいわあ、こんなに向こうじゃまったりしないから

「む……！」

いきなり凜がのしかかってくる。重い！うっとうしい！

「邪魔だ！どけ！」

「やだ」

つたく……俺はそのまま携帯電話をいじくる。スケジュールもそんなにじゃないが詰まっているな。早めに帰る予定でもあるし、雪乃とツアンからも家に行く約束をしてるし。幸い、二人の家はそんなに離れた場所じゃない。家からも5駅か6駅程度だしな。

「お兄ちゃんのスケジュール……あー！あの女の所行くの!？」



耳元で凜が叫ぶ

「凜、うるさい……」

「駄目駄目駄目！絶対に許さないんだから！」

「なんでお前が却下するんだよ。友達の家遊びに行くだけなんだし、そもそも、お前が却下する理由がいまいちわからん」

だが凜は納得していないのか、頬を膨らませたままである。

「ぶー……」

とりあえず、日程では明後日からだし、準備もしてゆっくりしよう・

夜

「「「いただきまーす」「」」

夕食になり、3人で食事。武藤秋の父親は海外で仕事をしているため滅多に家には帰らない。なので3人で食事をするのである。

「そう言えば秋、学校はどう？楽しい？」

「うん、まあ色々と面倒事に巻き込まれて入るけど……ね」

そういえば夏休み中もいくつかイベントがあったな。まあいっか。俺がいなくても大して支障ないだろ……あの島

「そういえばお兄ちゃん、十代さん達は元気？」

「ん？ああ・・・お前帰ったの少し前だっただろうが。ま、いつも通りだろうな」

「ふーん」

そんな何気ない会話を交わしながら夕食を終えると、部屋のベッドに倒れ、天井を見上げた。この場所が全ての始まりだった。目を覚ませば俺はこの世界で「武藤秋」としてこの場所にいた。それが数ヶ月前のこと。そして遊戯王の世界で俺はデュエルアカデミアに入学して、十代達に出会った。原作に埋め込まれ、人生を生きている。そして、武藤秋の過去と闇を知った。

「・・・はあ」

過去を知って、いつからか武藤秋になりつつある俺がいる。俺はこんなキャラだっただろう？カイザー殴り飛ばしたり、友達のために頑張ったり。俺ってそんな人生送ってなかった気がしたんだけどなあ

『マスター』

「ん？」

『どづかしました？』

「いや・・・この世界に来る前のことを考えてた」

色々あったから、前の世界のことを忘れつつあった気がしたなあ・

『そつえば聞いてもいいですか？マスター』

「ん？」

『マスターの世界のこと』

ミラが聞きたそうに俺に近づく。もう凜も母さんも寝ている。まあいいだろう

・・・俺の世界は、本当にアニメが盛んな日本だ。デュエルディスプレイシステムだって、この世界じゃ普通であり、デュエルモンスターズで全てが解決するなんて言うのをアニメとして面白おかしく見る世界。非現実を受け入れぬ、今ある事実だけを受け入れる、そんな世界。俺の家は母子家庭でな、親父を早くに亡くし、お袋が女手一つで俺を育ててくれたんだ

「母さん！やったよ！俺、大学合格したよ！」

「ホントに！よく、頑張ったわね・・・！」

今まで友達は普通にいたし、学校でもやりたいことをやってきた。正確にはやらせてもらったって感じだったな。お金だって厳しいのに高校まで行かせてもらってたさ。

『大変だったんですね・・・』

「まあな・・・」

んで、大学に入って目に入ったのが・・・「遊戯王」この世界で言う「デュエルモンスターズ」だったんだ。

『遊戯王?』

「ああ、元はマンガだったんだがな・・・この世界で、武藤遊戯が活躍する漫画だよ」

『・・・(この会話、マハードさんたちも聞いているんですけど。大丈夫でしょうか)』

もともと、遊戯王は12歳以上に向けたカードゲームでな、最初はノーマルカード同士で戦わせたりするだけだったけど、年を重ねるごとにそのカードは効果モンスターが生まれ、融合モンスターが生まれ、シンクロモンスターが生まれた。最近ではゼアルってアニメでエクシーズモンスターが生まれた。

「城戸もやらないか?面白いぜ」

そんな友人の一言で、俺は遊戯王にのめり込んだ。カードを集め、デッキを作り、大会に出て、負けて、研究して・・・また大会に出て勝つて。お金なんて飛ぶように消えたよ。だからバイトして、大学でも勉強して母さんを楽させようとしてさ・・・

「ま、そんな感じだな。で、大学の研究やって、家に帰って寝たらこうなったってところだ・・・そういえば」

『はい?』

「お前が前十代に言っていたんだよな、なんでお前がシンクロデッキに入っているのかって」

『はい、私ってシンクロデッキにあうカードじゃないんじゃない?』

そうだな・・・そういえば・・・

「今日は・・・そうだった、新しいパックの発売日だな」

ゼアルが出てからの初めてのパックの発売日、俺はカードを買いにコンビニへ出かけた。前々から予約していたカード

(当たりはリバイスドラゴン・・・外れは、何故か弱体化してしまったエアロシャーク)

「楽しみだ」

箱でカードを買い、家に帰ってパックを開ける。外れや当たりがある。リバイスドラゴン、リヴァイエール・・・色々なカードが当たる中、一枚のカードに目を止めた。

「久遠の魔導士、ミラ?」

そのカードは今回の弾で出るノーマルレアカード。その中でも随一の当たりだった。

「へえ、可愛いカードだな・・・」

何故かこの時、このカードは面白いなって思っと思わず入れたんだよ、シンクロデッキにな

『マ、マスター・・・私つてもしかして結構稀少なんですか？』

「ああ、ノーマルレアは一箱に1枚だしな、ノーマルレアも4種類ある。4分の1だしな」

『そ、そうなんですか・・・』

ま、それ以前に・・・

「いろんなカードがある中で、お前が可愛いと思ったからな」

Sideミラ

「いろんなカードがある中で、お前が可愛いと思ったからな」

その言葉を聞いた瞬間、私の顔は熱くなった。か、可愛い・・・そんな、私、精霊界でもいつもキツイ顔してるとか言われ、憧れていた魔導戦士ブレイカーさんには振られ、気が付いたらここにいたのに・・・カードに収まる時もその時不機嫌であんな顔映りになったのに・・・

「ミミラ?」

『あう、あううう……マスターはズるいですう』

「へ?」

ひ、人の気も知らないでえええ!

『もう寝ます!マスターおやすみなさい!』

「え?あ、ミミラ!？」

そのまま私はカードの中に戻りました。マスターは私のカードをやられといったようすでデッキケースに戻しました。おやすみなさいマスター……良い夢を

S i d eマハード

「やられやれ、お休み……」

秋殿が眠りについた。彼の話はなかなか興味深かった。私のことまでひ聞きたいものだ。それにしても……

「マナ、お前は何をしている?」

「だって……私もマスターとお話したいです!」

「我慢しろ。我々も表立ってデュエルに参加することなど出来んの

だからな」

私のカードは複数あるとはいえ、マナのカードは世界に1枚とまで言われている。無闇に出るわけにもいかないだろう。

「ぶー・・・」

「まあ、そのうち出してくれるだろう。その時に話せばいい」

「はい」

私も眠りにつくことにしよう

S i d e マナ

お師匠様にはああ言われたけど、ウッフ、私には計画があるんだもんね」

「それにしても・・・」

私のカードはマスターの世界だとなったっているのかな？うふふ、私もお話が出来るようになったら聞いてみよっと

「む？どうしたマナ」

「いえいえ、私達も寝ましようか」

「そつだな」



お休みお師匠様。お休みミラちゃん、お休みマスター・・・きつとお話しましょうね

Side秋

ミラのカードをデッキに戻し、ベッドに戻った。明日もきつといいことがありますように

・・・その日、俺は夢を見た

「ミラは？」

真っ黒な空間に俺はポツリと立っていた。ん？

「お前は・・・」

身体をうずめる少年の姿があった。あれ？俺の身体・・・元の体にも？でも身体は透けてる・・・ここはいつたいどこなんだ？コイツ、俺じゃないか？いや、武藤、秋？

「武藤秋？」

「僕を・・・誰か・・・」

・・・？

「えっ!?!」

光が周囲を包み込む。気が付くとそこは森の中だった。

「僕を誰か……消してくれ……」

武藤秋の声が聞こえた。

「武藤、秋……」

俺が触ろうとするが、その手は武藤秋を擦り抜ける。

タスケテ アゲテ

「!?!? 誰だ!?!」

周りを見る。だが、周りには誰もいない

カレヲ、スクツテ……

幼い少女の声が聞こえた気がした。その声を探ると、白い光があった。

「君は……」

お願い、マスターヲ……スクツテ……おね、ガイ……

「っ……!?!?」

俺は再び眩しい光に包まれた。

「っ……!？ゆ、夢？」

「お兄ちゃんおっはよー!ど、どうしたの!？汗びっしょりだよ!」

凜が入ってきた。言われてみれば、俺は凄く汗をかいていた。

「おはよう凜……いや、ちょっと悪い夢を見てな」

「そ、そうなの？ほら、じゃあお風呂いこー!」

言いながら俺の手を引く凜

「ああ、そうだな……」

あの夢が何だったのかは俺にはわからない……でも、あの夢はきっと、俺がこの世界に来たことに関係しているはずだ。これから先、起こる事件……セブンスター編……それで、何かが分かるかもしれない……

## 過去の残照（後書き）

ということ、最後に謎ワードを残しました（笑）

今後武藤秋が城戸秋と向き合う日が来るのか？

お楽しみください

・・・それにしても回想と織り交ぜながら書くのって難しいorz

## 冬休み（前編）（前書き）

主人公チートドロ化注意！主人公チートドロ化注意！

チートが苦手、もしくは嫌悪を感じる方・・・ここは危険よ！早く逃げて！

ぶっちゃけ、冬休み話は4話構成ですが、読まないでいてもあんまり本編には支障が・・・微妙にありそうでないです。

読むか読まないかは読者の皆様にお任せします

ここからは主人公がチートドロと化します。原作に介入しない代わりにヒロインたちとちょっとウフフな感じになるのを考えて書いてしまった私の失態です

まあ、ウフフな展開かと聞かれればいつも通りなのでどうだろうと自分で自己嫌悪中・・・

そういえば、ジャンプを日曜日に販売するお店にて、No.56ゴルド・ラットを入手しました。でも良く見るとこれ・・・ギヤラクシー・クイーンの方がよくね？って感じになってしまいました  
次は本についてきますね

秋「今日の最強カードは・・・未来融合　フューチャー・フュージ  
ヨン」

自分のエクストラデッキに存在する融合モンスター1体をお互いに確認し、決められた融合素材モンスターを自分のデッキから墓地へ送る。発動後2回目の自分のスタンバイフェイズ時に、確認した融合モンスター1体を融合召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚する。このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。そのモンスターが破壊された時このカード

を破壊する。

秋「手札消費がこのカード1枚で済む融合用カードだな。F・G・Dのために伝説の白石とか落とせば青眼の白龍が手札に一気に3枚きたりする。HEROなんかでも墓地にあれば『ホープ・オブ・フイフス』や『ミラクル・フュージョン』なんかのためにも使えるカードだ。サイバーデッキによって制限がかけられてしまったカードだな

サイバー・デッキで墓地に機械族全部墓地に送ってわーいな展開になるカードですね

ハッキリ言っであの悪夢は二度と体験したくない

冬休み（前編）

「えーと・・・」

今日は雪乃の家に遊びに来た。駅を降りてからはまあ良かった。地図もあったし、住所も教えられた通りに来たはずだったんだが・・・

「どうして、こうなった？」

「オラア！とつと構えろやあ！」

高級住宅地付近の公園で、何故か不良たちに絡まれてデュエルすることになった。理由はすごく簡単だった。道のりに沿って歩いていたはずなのに迷子になったのでその辺の人に道を聞いたら運悪く不良グループだった。なんでこんな連中に話しかけたのか俺でも疑問だ。んで、代償としてレアカードよこせなんていうものだから『断る』って言ったらキレてこうなった。最近の若者ってキレやすいのね。あ、俺も若者が・・・

「てめえもいい所の坊ちゃんなんだろお？レアカードくれれば痛い目を見ることはなかったのになあ」

完全に、間違われてる。俺はしがない小市民です。

「デュエル！」

仕方がない、速攻で終わらせよう

秋 LP4000

不良 LP4000

「俺が先攻だ！ドロー！へっへえ！『切り込み隊長』を召喚！」

切り込み隊長 ATK1200/DEF400

「さらに効果を発動！『戦士ラーズ』を召喚するぜえ！」

戦士ラーズ ATK1600/DEF1200

戦士族デッキか？

「さらにラーズの効果発動！俺はデッキの一番上に『コマンドナイト』を置くぜ！さらに強欲な壺を発動して2枚ドロー！」

ほう・・・ただの不良かと思えば結構頭使ってるじゃないか。ふむ・

「そして『伝説の剣』を切り込み隊長に装備！」

切り込み隊長 ATK1200/DEF400 ATK1500/  
DEF700

・・・えーなんで切り込み隊長に・・・まあいいけど。どうやらただの決闘者のようで、あんまり強くないようだ。デュエルアカデミアの連中が凄く強く見えてしまう。

「これでターンエンドだ！さあ掛ってきな！レアカードを持っていても生かされてないぼっちゃんよお！」



「・・・切り込み隊長召喚しておいて伝説の剣を装備したあげく、伏せカードも伏せない人に言われたくない。何を狙ってそんなことしてんのかまったく意味分からないんだけど。一応外に出て来たということで持っているのはシンクロじゃないけど・・・この手札はあれか？いきなり決めろってことか？もういいや・・・現状不良しか人いないし」

「・・・俺のターンドロ・・・はあ」

「どうしたどうした！さっさとしねえか！」

「・・・俺は手札から『未来融合・フューチャー・フュージョン』を発動。デッキの中にあるサイバー・ドラゴン、そして20体の機械族モンスターを全て墓地へ送る」

「な、なにに！？」

もういい、どうとでもなれ・・・

「2ターン後、キメラテック・オーバー・ドラゴンを特殊召喚する。そして相手フィールド上にモンスターが存在し、自分のフィールドにモンスターが存在しない時『サイバー・ドラゴン』を特殊召喚」

サイバー・ドラゴン    ATK2100 / DEF1600

「な、なあ！？」

どうやら不良たちはこんなカードを見たことがないようだ。この辺に住んでいる子供とかのレアカードがどの程度のレアカードか気に

なるところだな。

「さらに『オーバーロード・フュージョン』を発動。墓地の機械属性モンスター、フィールドのサイバー・ドラゴンを除く……現れよ！『キメラテック・オーバー・ドラゴン』！」

キメラテック・オーバー・ドラゴン ATK ? / DEF ?

「キメラテック・オーバー・ドラゴンは、このカードの融合召喚に成功した時、このカード以外の自分フィールド上のカードを全て墓地へ送る。このカードの元々の攻撃力と守備力は、融合素材にしたモンスターの数×800ポイントの数値になる」

「な、なんだと！？お前が融合素材にしたのは……」

そう、フィールドにいたサイバー・ドラゴンと墓地の21体の機械族モンスターだ。よって攻撃力が恐ろしいことになる。

キメラテック・オーバー・ドラゴン ATK17600 / DEF16800

「こ、攻撃力が……一万を超えた!?!」

「何言ってるの？手札から『リミッター解除』を発動。このモンスターの攻撃力はこのターン倍ね」

キメラテック・オーバー・ドラゴン ATK35200 / DEF35200

「ひ、ひい……」



「ひ、ひい！」

「この住所、どこ？」

俺が聞くと指をさす。すぐそこだったのか・・・不良はすぐさま逃げて行った。取り巻いていた仲間もリミッター解除辺りから逃げしまっていた。やれやれ・・・

・・・

指差された方向に進み、家を見つけた。そこにはFujiwaraと書かれた表札。なんだけど・・・

「でけえ・・・」

そこには豪邸が建っていた。でかい・・・家の5倍くらいか？超でかい。確か両親が俳優と女優だったな。どっちも収入が凄いだろうな、多分・・・とりあえず、インターフォンを押すか

『どちら様でしょうか？』

「えーと・・・藤原雪乃さんの友達の武藤秋と言います。ゆk・・・いや、藤原さんは御在宅ですか？」

『少々お待ちくださいませ』

これだけでかい豪邸だし・・・まさか家政婦でもいるのだろうか。しばらくすると門が開いた。そしてインターフォンから声が聞こえ

る。

『お嬢様の確認を取りました。どうぞ中へ・・・』

・・・入るのが怖いんだけど。大丈夫かなこれ

「ええい！男は度胸だ！」

覚悟を決めて庭へと立ち入った。庭には番犬がいる。さらに池などもある。広いな・・・

「秋、よく来たわね。いらっしやい」

「雪、乃・・・？」

そこにはいつものオベリスクブルーの制服ではなく、私服の雪乃の姿があった。その服は服とドレスの中間を取ったような服で、いつもの雪乃とはまた違った感じがしていた。

「あら、どうしたの？」

「い、いや・・・私服の雪乃は初めて見たからさ」

「それを言ったら私も秋の私服は初めてよ」

クスクスと笑う雪乃はどこか妖艶でありながらも少女っぽい笑みを浮かべていた。

「さ、中に入りましょう。お父様とお母様もいるから」

手を引かれ、中に入ることとなった。ん？なんか2階あたりから視線が……？

「気のせいかな」

「どうかしたかしら？」

「いや、何でもない」

とりあえず雪乃と家の中に入ると、中でも驚かされた。すげえ……

「こつちよ」

「ああ」

中に入ると……リビングだろうか？とんでもなく広い場所。とんでもなくでかいソファが置かれていた。そしてそこに座るのは何とも威厳のある男性と雪乃よりも妖艶で、気品のある女性だった。

「お父様、お母様、友人の秋よ」

「武藤秋と言います」

「おお、君が雪乃の言っていた友人か……まあ座りたまえ」

すっげえ怖い……てか、すっげえ緊張する。

「デュエルアカデミアでも殆ど負けがないという話を聞いたよ。デュエルが強いそうだね」

「い、いえ・・・それは・・・えと、まあ」

すごくプレッシャーがかかる。これが俳優と女優のオーラか・・・

「あら、桜は？」

「ああ、まだ部屋じゃないか？」

「呼んでくるわ。ちょっと待っていてね秋」

・・・え？まさかこの二人を前に俺だけ残して行っちゃうわけ！？  
こんな二人の前で俺プレッシャーに押しつぶされて死ぬよ！？

「武藤君」

「は、はい！」

思わず驚いて二人を見てしまう。だが今度見た表情はさっきとは裏腹に穏やかな表情を浮かべていた。

「ありがとう」

二人から頭を下げられていた。わけがわからん・・・

「え？」

「君のおかげで雪乃があそこまで明るくなった。君のおかげだよ」

「あの、スイマセン・・・話が読めないんですが」

雪乃って前からあんなんじゃないの？

「あの子は昔から私達のことですプレッシャーを受け、大人びようとして一生懸命努力していたの。将来は女優でありながら決闘者でありたいとも言っていたわ。でも、そんなあの子は大人びたせいで周りの子が近づくことが出来なかったのよ」

似ている。雪乃と武藤秋がどことなく・・・

「そしてあの子は中学でデュエルアカデミアに進学し、友人は複数で来たと言っただけのもの、あの子の暗い表情は変わらなかった」

「だが、高校に進級してから君や、その他の友人たちに出会い、帰ってきたあの子はとてもいい笑顔で帰ってきた。帰ってきてても君のことばかり楽しそうに話っていたよ」

雪乃がそんなことを・・・

「だからこそ、君にお礼を言いたいのと同時に頼みがある」

「頼み、ですか？」

「ええ、これからもあの子を支えて欲しいの・・・あの子、実は結構メンタルは弱い子だから」

・・・なんだ、そんなことが

「その必要はないですよ」

「え？」



「雪乃には俺だけじゃない、沢山の仲間がいるんです」

俺だけじゃない、雪乃には明日香が、ツァンが、十代が、翔が、隼人が、三沢がいる。

「俺達は仲間です。友達です。そんな友達を支え合うことは、当然のことだと俺は思います」

俺の言葉に二人は驚きながらも、笑顔を見せてくれた。

「君になら雪乃を任せられるな」

「孫の顔が楽しみね。うふふ・・・」

いや、話飛躍しすぎでしょ・・・

「お待たせ秋・・・あら、お父様達何を話してたの？」

「何、他愛もない世間話さ」

「そう。秋、紹介するわ。私の妹の桜よ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

桜と呼ばれた少女は雪乃の後ろに隠れ、俺のことをじっと見ていた。年齢は随分と幼いようだ。

「ほら桜、挨拶なさい？」

「……………桜」

「武藤秋だ。よろしくな」

言いながら近づき、身をかがめて手を差し出すが、手は叩かれてしまった。

「桜!」

「…………男なんてみんな嫌い!」

言いながら桜ちゃんは走って行ってしまった。

「ごめんなさい秋…………」

「いや、気にしてないよ」

それにしても俺に敵意がむき出しだったって言うよりは、男に対して敵意を向けた気がしたんだが…………

「あの子、この間学校の帰りに不良に大切なカードを取られてしまったらしいのよ」

…………不良?

「それからあんなにふさぎこんで…………」

「不良って、この辺にいる不良のことか?」

「ええ、小学生くらいの子供からカードを巻きあげているらしいわ。」

この辺は高級住宅街だから、レアカードを持つ子供も沢山いるの」

「……さっき潰したあの不良グループか？もしかして

「さて、辛気臭い話はそこまでにして、食事にしよう」

「翔子さん、食事の準備をお願いできるかな？」

「はい、旦那様」

どこからか出て来た家政婦さんが一礼して部屋を後にしていった。  
大切なカード……か

夕食はすごく……おいしかった。てか、高級料理のオンパレード  
だったんだけど。あの家政婦さん何者？まあ、雪乃の手料理もあつ  
たわけで、美味しく料理を頂くことが出来た。そして夜。客間で俺  
は寝巻きから私服へと着替え、デュエルディスクを腕に装着した。

「これでよし」

『マスターホントにやるんですか？』

「ああ、もちろん」

これから不良どもを探し、叩き潰す。というか、桜ちゃんのカード  
を取り戻してやろうと思う。俺にこうさせるのは恐らく武藤秋の影  
響だろう。昔カードを取られ、拳銃の果てに燃やされる。不良たち  
のことだからカードを売ろうとも考えるだろう。間に合うといいん  
だが。ドアを開けて誰もいないことを確認する。よし……

「行くか」

「どこへ？」

「〜!？」

突然声がしたから驚いてそちらを見る。そこにいたのは雪乃だった。

「しー」

口を抑えられる。雪乃の服も私服で、腕にはデュエルディスクが付  
けられていた。

「こんな事だろうと思ったわ。貴方のことだから桜のカードを取り  
かえすつもりね？」

「あ、あはは・・・」

「私も行くわ。溜まり場を知っているし・・・何より、妹のことだ  
もの」

こうなった雪乃はテコでも動かないだろう。それに情報を持っている  
なら十分だろう。

「よし、行くぜ」

「ええ」

こうして俺と雪乃は屋敷を抜けだし、外へ出た。だが俺達はこの時

気が付かなかった。俺達が出て行くのを見る視線があつたというこ  
とを

Side Out

そこは不良たちのたまり場である廃工場。その廃工場では数十人の  
不良たちがカードを見ていた。

「やっぱりこの辺のやつらはいいいカード持つてるなあ」

男は不良グループの統率者である。その脇には秋に倒された不良も  
立っている。ボコボコの状態を見ると、負けたことで制裁を加えら  
れたということである。

「んで？コイツを倒したって奴はどんな奴だ？」

「その、黒髪で恐ろしいカードを・・・攻撃力が3万とか超えて・・・」

別の不良がその報告をする。

「ケツ！本当かどうか耳を疑うな。まあいい・・・俺様が倒してレ  
アカードを奪うか・・・ククク」

ドオン！

突然、その廃工場の扉が蹴破られる。そこにいるのは黒髪の少年と、  
紫色の髪をツインテールに結った少女だった。

「なんだテメエ！」

「あ！アイツです！俺を倒したの！」

やられた不良が驚きながら指をさす。統率者の不良はにやりと笑い、立ち上がった。

「テメエか、うちの後輩を倒したってのは」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「こんなところにまで来るとはいい度胸だなあ！一体何の用かな？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「俺達のところで仲間になりにも来たのか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

沈黙を続ける二人。それに痺れを切らす不良。

「テメエら、なんとかいったら」「おい（ねえ）」「」

秋と雪乃は言葉を遮り、デュエルディスクを構えた。

「デュエルしろよ（なさい）」「」

冬休み（前編）（後書き）

とりあえず普段持っていないデツキで1キル構成。うん、書いててもこれは酷いとしか言いようがないorz1

昔はもっとどえらいことになった気がするけど・・・まあいいか

## 冬休み（中編）（前書き）

雪乃との冬休みはこの話で終わりです  
今回はツァンとの冬休みになります

秋「今日の最強カードは『確率変動』だ」

コイントス、ダイス、ルーレット、スロットを行う効果を無効にし、  
違う目が出るまでコイントス、ダイス、ルーレット、スロットを出  
るまでやり直す。

城之内も使っていたカード。このカードはギャンブル系で最強だと  
思う

OCG化されなくてよかったかも

カップ・オブ・エースとかで使用したら必ず2枚ドロージ

秋「時の魔術師とかで使っても十分凄いことになるな」

作者的にギャンブルはあんまり得意じゃないです。昔ポーカーを友  
達内でやったくらいですね

マジジャンのルールを知らない私です



## 冬休み（中編）

Side 秋

「デュエルだとお？」

「俺達が勝つたら、今までこの近所で巻きあげたレアカードは返してもらおう」

とりあえず遊星風に喧嘩吹っかけてみた。すると統率者らしき男はにやりと笑った。

「ほーう？大層な自信だな・・・ならアンティールだ。お前らのデッキと、その女を賭けてもらうか!？」

・・・性根が腐ってんな。

「構わないわ」

「雪乃・・・？」

「負ける気がないもの。こんな屑どもじゃ、私を満足させることから叶わないでしょうし」

うえい・・・雪乃さんマジパネエッス

「いいだろう！バトルロワイヤル式タッグデュエルだ！おら、テメエ負けたんだろ、来いや！チャンスを与えてやる！」

「は、はい！」

俺が負かした不良が広場に来る。

「互いのライフは共通で8000のタッグデュエルだ！」

「デュエル決闘！」

順番 秋 不良リーダー 雪乃 不良

秋 雪乃 LP8000

リーダー 不良 LP8000

「俺のターンドロー！」

手加減するつもりはない。シンクロデッキで叩き潰す。この場所には不良しかいないし、他の一般人の目もないので恐らく大丈夫だろう。

「俺は手札から『ボルト・ヘッジホッグ』を墓地に送り、『クイック・シンクロン』を特殊召喚！」

クイック・シンクロン ATK700/DEF1400

「さらに、フィールドにチューナーがいる時『ボルト・ヘッジホッグ』は特殊召喚出来る！」

ボルト・ヘッジホッグ ATK800 / DEF800

「レベル2ボルト・ヘッジホッグとレベル5のクイック・シンクロンをチューニング！」

「チューニング!?なんだアレは・・・！」

2 + 5 = 7

「集いし想いが、ここに新たな力となる！光差す道となれ！シンクロ召喚！燃え上がれ、『ニトロ・ウォリアー』！」

ニトロ・ウォリアー ATK2800 / DEF1800

「な、なんじゃこりゃあ・・・」

「攻撃力2800が1ターン目から!？」

そりゃ、なんじゃこりゃーだろうな。

「いいの?秋・・・シンクロ召喚なんてして」

「勝てばなんとかなるさ。カードを2枚伏せてターンエンド!」

さて、この包囲網をどうくぐるかな?不良グループよ

「お、俺のターン!俺は手札から『キラー・トマト』を守備表示で召喚!」

キラー・トマト ATK1400 / DEF1100

「カードを3枚伏せて、ターンエンドだ！」

「私のターンね・・・ドロー」

さて、頼んだぜ雪乃

「私は手札からマンジュ・ゴットを召喚するわ」

マンジュ・ゴット ATK1400/DEF1000

「畏発動！『落とし穴』！攻撃力1000以上のモンスターを破壊する！」

「構わないわ。効果は発動するもの。手札に『高等儀式術』を加えるわ。そして高等儀式術を発動。デッキの『デーモンソルジャー』二体を生贄に捧げ、現れよ『闇の支配者-ゾーク-』！」

闇の支配者 ゾーク ATK2700/DEF1500

「カードを2枚伏せ、ターンエンドよ」

これでは上級モンスターが2体。相手フィールド上にはキラートマトと伏せが3枚か・・・んで、あの不良は確か・・・

「俺のターンドロー！俺は『切り込み隊長』を召喚！そして効果で『戦士ラーズ』を召喚！」

切り込み隊長 ATK1200/400

戦士ラーズ      A T K 1 6 0 0 / D E F 1 2 0 0

「そしてラーズの効果で『コマンド・ナイト』をデッキトップに移動させる！」

・・・今日やってきたのと同じパターンキター・・・

「そ、そして！へ、へへっ！デーモンの斧をラーズに装備するぜ！」

戦士ラーズ    A T K 1 6 0 0 / D E F 1 2 0 0    A T K 2 6 0 0 /  
D E F 1 2 0 0

「カードを1枚セットしてターンエンドだ！」

さてと、俺のターンに戻ったな

「俺のターンドロー！俺は手札から『カードガンナー』を召喚！」

カードガンナー    A T K 4 0 0 / D E F 4 0 0

「カードガンナーの効果発動。デッキトップからカードを3枚まで落とし、落としした数×500ポイント攻撃力がアップする」

カードガンナー    A T K 4 0 0 / D E F 4 0 0    A T K 1 9 0 0 /  
D E F 4 0 0

落ちたのはゾンビキャリア、ジャンク・シンクロン、マツシブ・ウオリアーか

「そして魔法カード『命削りの宝札』を発動。5枚になるようにド

ローし、5ターン後全て捨てる」  
まあ、5ターンなんて経過させる気はさらさらない

「さらにデッキトップに1枚カードを戻し、ゾンビキャリアの効果発動。このカードを特殊召喚する」

ゾンビキャリア ATK400/DEF200

「さらに墓地からモンスターが特殊召喚されたので手札から『ドッペル・ウォリアー』を特殊召喚する」

ドッペル・ウォリアー ATK800/DEF800

「レベル3のカードガンナー、レベル2のドッペル・ウォリアー、レベル2のゾンビキャリアでチューニング」

3 + 2 + 2 = 7

「冷たい炎が、世界の全てを包み込む。漆黒の華よ、開け！シンク  
口召喚！現れよ、『ブラック・ローズ・ドラゴン』！」

ブラック・ローズ・ドラゴン ATK2400/DEF1800

「はっはあ！畏発動！『激流葬』！フィールド上のカードを全て破壊させてもらおう！」

なるほど、そう来ると思ったよ

「畏発動！『スターライト・ロード』！このカードは2体以上モンスターを破壊する効果を無効にし、破壊する。そしてエクストラ・

・いや、融合デッキから『スターダスト・ドラゴン』を特殊召喚する！飛翔せよ、『スターダスト・ドラゴン』！」

スターダスト・ドラゴン ATK2500/DEF2000

うわーい！シグナーの夫婦が揃ってしまった。

「さて、バトルの前にゾークの効果を発動！サイコロを振るぜ」

「さ、サイコロ！？」

「そう、1ターンに1度だけサイコロを振り、サイコロの目が1・2の場合、相手フィールド上のモンスターを全て破壊する。3・4・5の場合、相手フィールド上のモンスター1体を破壊する。6の場合、自分フィールド上のモンスターを全て破壊する。いくぞ！」

サイコロが出現し、ダイスが地面に落ちた。出た目は・・・やばい！6！

「はっはあ！自滅かよー！」

「それはどうかしら？罨発動『確率変動』！コイントス、ダイス、ルーレット、スロットを行う効果を無効にし、違う目が出るまでコイントス、ダイス、ルーレット、スロットを出るまでやり直すわ。つまり、6はもう出ないのよ」

「な、なんだとお！？」

再びサイコロが振られる。出た目は1！

「出たのは1だ！モンスターを全て破壊する！」

「ば、ばかなあ！？」

「いくぞ！スターダスト・ドラゴン！『シューティング・ソニック』  
！ブラック・ローズ・ドラゴン！『ブラックローズフレア』！ニト  
ロ・ウォリアー！『ダイナマイト・ナックル』！ゾーク！『ダーク・  
カタストロフィー』！」

「ぎゃあああああああ！」

リーダー 不良LP8000 LPO

男たちはその衝撃で倒れる。

「さあ、奪ったレアカードを全て渡してもらおうか！」

「つく！このお！」

リーダー格の男が拳を放つ。しかし、雪乃が先に足を出していた。

「~~~~~！？」

わき腹に強烈な一撃が入った。そんな尖ったクツの先端で蹴らなく  
ても。若干敵に同情してしまった俺。

「さて、私は貴方達見たいな屑は嫌いよ・・・さつさとカードを返  
してもらいましょうか」

言いながらリーダーの男を雪乃が踏みつける。もう殆どの人間が逃



げてしまった。残るのはリーダーの男と、そこでのびているパートナーだった男だけだった。

藤原家

「ふう……」

夜、こっそり帰ってきた俺と雪乃。カードは沢山あった。桜ちゃんが取られたカードはレアカード『真紅眼の黒竜』だった。女の子が持つカードじゃない気もするけど、あの子がおじいさんからもらった誕生日プレゼントだったらしい。

「これでいいわ。後のレアカードも、近所を回って返すことにしましょう」

「ああそうだな……さて、そろそろ遅いし寝ないとな」

「そうね」

客室へ入る俺と雪乃……ん？俺と雪乃？

「うふふ、この前まで貴方の妹に邪魔されてしまったもの。久しぶりに一緒に寝ましょう？」

「……え」

「拒否は駄目よ、ほら」

そう言ってベッドに入る俺と雪乃。次の日、起こしに来てくれた家

政婦さんが驚きの声をあげたのは無理もない

朝

「・・・はい、これ」

俺は朝下に降りて来た桜ちゃんに真紅眼の黒竜のカードを渡した。

「これ・・・私の『真紅眼の黒竜』」

「君のカードだろう？取り返して来たよ」

驚いて硬直する桜ちゃんしかし次第に涙ぐみ、泣き始めた

「ふ、ふえええええ！」

「困った子ね、桜も・・・よしよし」

雪乃が優しく頭を撫でる。この後桜ちゃんは嬉しそうに笑っていた。

今日は雪乃が買い物に行きたいということで外へ出かけている。桜ちゃんも行きたいといいだし、雪乃は少し戸惑ったものの、結局了承して3人で一緒に出かけることとなった。

「ねえお兄ちゃん！肩車！」

「え？ああ、はいはい」

すっかり俺に懐いた桜ちゃん。うむ、こういう小さい女の子が元気なのはいいことだな。言われるがままに肩車をする俺。桜ちゃんは嬉しそうだ。

「まったく困った子ね、桜も」

「そういう雪乃、お前は何してるの？」

「どう？恋人みたいでしょ？」

雪乃は現在俺の腕に自分の腕をからませている。

「さて、どこ行くんだ？」

「この街通りは結構服とかが売ってるの。カードもあるし・・・そこへ行きましょう」

こうして街の中を歩く俺達3人。

『（マスターは大変ですねえ・・・主に女性面で。将来苦労しそうです）』

何か聞こえた気がするけど、多分気のせいだよな？

繁華街

「そついえばもうすぐクリスマスなのね」

「ああ、そついえばそうだな・・・」

12月下旬・・・そういえばそんなイベントがあったな。大学生活で4年間彼女が出来なかった俺にとっては「クリスマス？何それ美味しいの？」だったからなあ・・・

「はあ」

「どうかしたのかしら？秋」

「いや、クリスマスにいい思い出がない」

「うふふ、ならクリスマスにまた会うのはどうかしら？」

それはどういう意味でなんでしょうか、雪乃さんが言つと非常に怖いです。

「桜もクリスマスにお兄ちゃんと会いたーい！」

「あ、あはは・・・ん？カードショップか」

近くにカードショップを見つけた。入ってみるとこの世界では珍しい、俺の世界にあったようなショーケースに入ってるカードが多くあった。

「・・・デーモンの召喚が万越え？馬鹿なの？死ぬの？」

「秋、どうしたのよかしら？」

「いや、なんでもない・・・」

この2500のバナラが8万で・・・あれか？遊戯が使ってたし、攻撃力が高いからの感じか？ないわ・・・まじでないわー

「ってことは・・・」

俺は10円20円のカードを漁り始める。やっぱり

「ワイト10円とか・・・美味しすぎるな」

「お兄ちゃんそんなカード買うの？」

何を言うか、元の世界だと300円位するんだぞ、これ。他には・・・黄泉ガエルが20円。やっぱりこの世界の『攻撃力の低いカード』『雑魚カード』の方程式はおかしいもんだな。この調子だと・・・あつたよ、D・D・クロウ

「あらあら、秋はそんなカード買ってるけど・・・どうしたの急に」

「ん？こいつらのデッキでデッキ組もうかなと」

実際、この世界で目覚めた時は大体のカードはあつたけどこういうローレベルのカードは少なかつたんだよな。

「そのカード達で？難しいんじゃないかしら？」

「雪乃、世の中にはローレベルデッキって言うのもあるんだぞ？」

ワイトだって俺の世界じゃ馬鹿に出来ないカードだしな。まあ、ガチデッキならワイトキングとかばかりになるけど・・・それでも稀少だ。他にも色々デッキはあるしな

「でも、私も最近思うわ。弱いカードが雑魚カードと言っわけではない。貴方のシンクロのように、一つ一つの力が結集すれば爆発的な力を得ると」

「だな、だからこの辺は俺にとっては宝庫だ」

この後も色々見て俺の世界だと合計で数千円する値段が五百円以内となった。なんてお得なのだろうか。買うものは買ったのだが、桜ちゃんがじーっとシヨーケースを見つめていた。

「ん？桜ちゃんどうした」

「・・・・・・・・」

シヨーケースの先にあるカードは・・・これは『黒竜の雛』のカードか。30000円！？なんでそんな高いんだ！？いくら真紅眼の黒竜のサポートカードとはいえ・・・

「あら桜、これが欲しいの？いいわ、買ってあげる」

雪乃が店員にいい、カードを受け取る。おいおいおい・・・

「わーい！お姉ちゃんありがとう」

「どういたしまして、大切になさい」

うーん、お金持ちのやることは分からん

「さて、次行くか」

「ええ、そうね」

このあと色々なところを周り、楽しんだ。そして・・・

「もう帰っちゃおうのー!？」

「ああ、ごめんな」

とりあえず、この後の日はツァンの家に行かないといけないう・・・

「じゃ、お邪魔しました」

「ああ、また是非遊びに来てくれ」

「楽しみにしてるわ」

「うー・・・」

雪乃の御両親、桜ちゃんに見送られ、俺は雪乃と駅へ向かう。玄関先で家政婦さんが頭を下げる。

「・・・この先の未来、どうかお気を付けて」

「え!？」

「秋?どうかしたの?」

気が付けば既に玄関の近くまで家政婦さんは歩いていった。

「・・・・・・・・・・」

「さ、行きましょう。電車が出るわ」

「ああ」

この先の、未来・・・？彼女は何者なんだろうか。そんな疑問を抱えたまま、俺は家へと帰宅することになった。



冬休み（中編）（後書き）

前回と今回出て来た桜ちゃんを紹介します  
桜ちゃんもオリキャラです

藤原桜

6歳

使用デッキ ドラゴン族デッキ

フェイバリットカード 真紅眼の黒竜

容姿 Fateの幼少期桜そのまま

ぶっちゃけ、名前は雪乃 冬なので相対して春ってことで桜にしました

## 冬休み（中編？）（前書き）

とりあえず更新・・・結構話を溜めてから更新します

秋「今回の最強カードは・・・ブラック・マジシャンか」

ブラック・マジシャン

魔法使いとしては、攻撃力・守備力共に最高クラス

マハードさんカッコいいですね。個人的にパンドラマジシャンも好きですけども

秋「サポートカードは青眼の白龍や赤眼の黒竜同様豊富だな。専用デッキと言うのも悪くないかもな・・・俺のデッキはただの魔法ビートだが」

今回の話も相変わらずです。やっぱりライフ4000だとなあ・・・

orz

## 冬休み（中編？）

S i d e 秋

時間10分前、か・・・とりあえず間に合ったな。俺は現在ツアンの家に向かうための電車から降りた。最寄駅でツアンが待っているとのことだ。行くと、目立つモニメントの所に、私服のツアンが立っていた。

「ツアン」

「遅いつ！」

一言目がそれですか・・・

「いや、だって10分前・・・」

「僕はもう30分前からここにいたのよ！？寒いんだからもっと早く来なさいよね！」

えー・・・そんな理不尽な

「その、ゴメンな、ツアン」

「分かればいいのよ・・・さ、行くわよ」

そう言ってツアンが歩き出す。しばらく歩き、途中で他愛のない会話を交わしながら駅からそこへ向かった。住宅街へ入ると、ツアン

が足を止めた。

「じいよ」

「だな」

DELIREと書かれた家の表札。話に聞けば両親は母が外国の人、父親が日本人で、婿としてディレ家のお母さんと結婚したらしい。ようするにツァンはハーフなのだ。家もそれなりに大きい

「ただいま」

「おじゃまします」

「あら、初めまして。母のヤンよ」

「武藤秋です」

お辞儀して、荷物を置くように促される。お母さん日本語へらへらだな

「さ、行くわよ秋」

「へ?」

「この街を案内するわ。行くわよ。行ってきます、ママ」

「ええ、行ってらっしゃい。帰りは御馳走を用意して待ってるわね」

こうして街へ出る。俺とツァン。もしかしてこのためだけに家に寄

ったのか？街の繁華街を歩くと、クリスマス前ということで賑わいを見せる。やはりどこも一緒なんだな

「どうしたのよ」

「いや、何でもないよ」

「何考えてんだか知らないけど、今日はとことん遊ぶのよ！ほら、行くわよ！」

ツアンに手を引かれ、街の中へと入って行く。昼食を取り、ゲーセンに赴き、シヨッピングをし・・・なんとも普通の高校生の遊びをする俺達。カード漬けになっていたのでいい機会だ。街中を歩いていると、ようやくツアンが手を繋いでいるのを気づき、慌てて手を離した。どうやら無意識だったらしい。顔を紅くし、目を点にしながら『べ、別に他意はないのよ？秋が迷子にならないようにしただけなんだから！』と言っていた。やれやれ・・・

「分かった分かった・・・ん？」

すると、遠くでなにやら人だかりが出来ていた。

「さあさあ！誰かこのアマチュアチャンプに挑戦する方はいるかい！？買ったらこのブランド物のブレスレッドをあげるよー！参加料は1回500円だ！」

「へ・・・面白そうだな」

言いながら覗く。身体のごっつい男性がどうやらチャンプと言いつとらしい。それに対して若い男性・・・どうやらカップルで来てい

るようだが。男性の方はボコボコにされ、負けた。可哀想に……

「ねえ秋、アンタなら勝てるんじゃないの？」

この人前でシンクロさせといるのかお前は……。いや、待てよ？  
そう言えばまだ使っていないデッキがあつたな

「OK任せな」

言いながら解説者らしき男に金を渡す。すると周りからは俺に無謀だなんだという声がする。言ってる

「坊主！俺に挑戦するのか？俺はアマチュアでもチャンプだぜ？」

「……ふーん、たかがアマチュアで態度大きいね、おっさん」

挑発には挑発。こつこつ奴は沸点低いからな

「このガキ……後悔するなよ？行くぞ！」

「「決闘<sup>デュエル</sup>！」」

アマチュアチャンプ LP4000

武藤秋 LP4000

「先攻はチャレンジャーだ！カードを引きな！」

「俺のターンドロ……ふむ、俺はモンスターをセットし、カー

ドを2枚セット。ターンエンド」

「俺のターンドロ―！俺はサファイアドラゴンを召喚するぞ！」

サファイアドラゴン ATK1900/DEF1600

「そしてドラゴンの秘宝を装備！」

ドラゴンの秘宝なあ？攻撃力300上げるだけじゃんまあいいけど・

サファイアドラゴン ATK1900/DEF1600 ATK2  
200/DEF1600

「バトルだ！セットモンスターに攻撃！」

「セットしていたのは墓守の偵察者。守備力は2000。よって破壊されるが、リバー効果を使う。『墓守』と名のついたモンスターを特殊召喚する。『墓守の偵察者』を守備表示で特殊召喚

墓守の偵察者 ATK1000/DEF2000

「っけ！壁モンスターをいくら出したところで！カードを2枚伏せてターンエンドだ！」

「俺のターンドロ―！俺は手札から『強欲な壺』を発動しカードを二枚ドロ―。さらに『魔導戦士ブレイカー』を召喚。召喚に成功したことでカウンターが乗り、攻撃力が300上がる」

魔導戦士ブレイカー ATK1600/DEF1000 ATK1

900/DEF1000

「そしてカウンターを取り除くことで相手の魔法罫を1枚破壊する」  
左のカードを破壊すると、定番のミラフォだった。やれやれ・・・

「カードを1枚伏せてターンエンド」

「俺のターン！俺は2体目のサファイアドラゴンを召喚！バトルだ！」

ほう、そのままバトルをしかけてくるか。

「ドラゴンの秘宝を装備した。サファイアドラゴンで魔導戦士ブレイカーを攻撃だ！」

甘いな・・・罫も魔法も警戒せず突っ込んでくるとは

「速攻魔法発動！『デイメンション・マジック』！攻撃対象となったブレイカーを生贄に捧げることでサファイアドラゴンを破壊！そして手札から『ブラック・マジシャン』を特殊召喚する！」

うむ、カッコいいぞマハード。この前の映画では普通に喋っていたけど、俺とも喋れんのかな

「頼んだ！ブラック・マジシャン！」

俺が言うと、え？頷いたあ！？やっぱり精霊だからか？

ブラック・マジシャン ATK2500/DEF2100



「ぶ、ブラック・マジシャン!?あの伝説のデュエリストの武藤遊戯が使っていた!?!」

驚きすぎだろ。俺の知る限りじゃパンドラとかも使っているし。レアカードなのは確かだが、持っている人は持っているんじゃないか?

「か、カードを1枚伏せてターンエンドだ・・・」

「俺のターンドロ―!俺は場の墓守の偵察者を生贄に捧げ、いでよ!」『ブリザード・プリンセス』!」

ブリザード・プリンセス ATK2800/DEF2100

「このカードは魔法使い族1体の生贄で召喚が出来る。このカードの召喚に成功したターン、あなたは魔法罫を発動できない!」

ブリザード・プリンセスが相手を見下し、鼻で笑ってる。そして魔法をかけて魔法トラップゾーンに伏せられたカードを氷結させた。

「な、なにいい!?!」

「さらに、自分の墓地に3体闇属性モンスターがいる時『ダーク・アームド・ドラゴン』を特殊召喚する!」

ダーク・アームド・ドラゴン ATK2800/DEF1000

「こ、攻撃力・・・2800」

「そして、自分の墓地の闇属性のカードを1枚除外し、相手のカー

ドを1枚破壊する。俺が破壊するのはサファイアドラゴン！」

これで決まったな。

「行くぞ！モンスター一斉攻撃！ブラック・マジシャン！『黒・魔・導』！ブリザード・プリンセス！『ブリザード・ハンマー』！ダーク・アームド・ドラゴン！『ダーク・プレス』！」

アマチュアチャンピオン LP4000 LPO

「ひ、ひいいい！」

「俺の勝ち、でいいんだよね？」

「は、はい！どどどどどぞぞ！景品ですうう！」

何故か景品を俺に渡してから走って逃げて行った。なんだっただ。それにしても最近速攻で決めてしまうことが多いな。なんでだろう。

この後分かったことだが、あの男たちはただの詐欺師で、決してアマチュアチャンプなどではなかったらしい。相手の手札を覗き見てデュエルするのだが、俺のモンスターの効果がよくわからないのでイカサマ出来なかったらしい。

「ただいま」

「流石って言えばいいかしらね、ノダメージなんて」

「ね、最近強い奴と戦ってないかも」

十代達と無性にデュエルしたくなったのはなんでだろうな・・・

「そういえばハイ、これ」

商品のブレスレットを渡した。これは本物で女性ものだった。俺には不要だし、凜にはまだ早いからな。

「え、いいわよ！僕なんか付けても似合わないし・・・」

「そんなことないって。ほら」

言いながらツァンの腕に着ける。ブレスレットは輝きを見せた。

「綺麗・・・」

嬉しそうにブレスレットを見るツァン。すると俺の視線に気づいた。

「べ、別に嬉しくないんだからね！？どうしても言うからもら  
って上げただけなんだから！」

「はいはい・・・」

この後も、ショッピングを楽しみ、ツァンの家に帰宅となった。

Side ????

さっきの人、凄かったなあ・・・うつん！きつと亮様の方が断然強いんだから！

「頑張るわよ、僕！恋する乙女は強いんだから！」

僕はそう自分に言い聞かせ、さっきのデュエルを思い返しながらかへと帰ることにした

ディレ家

「ただいまー」

「戻りました」

「あらお帰りなさい。丁度夕食が出来たわ」

ツアンのお母さんが食事の場所まで案内してくれる。するとそこには御馳走が並べられていた。

「うわ、すごい・・・」

「遠慮せずに食べてね」

「はい、いただきます」

「いただきます」

こうして食事を頂いた。食事はとてもおいしく、楽しい会話も出来た。そして食後

「じゃあママ、僕お風呂入ってくるわね」

「ええ、行つてらっしゃい」

そう言つてツアンが風呂へと向かった。

「ねえ武藤君？」

「はい、何でしょう？」

ツアンのお母さんがお茶を置いてくれる。

「あの子、学校では上手くやってるかしら？」

「へ？」

「昔からあんな性格だから、友達も少なかったのよ。そしてこの前、貴方を紹介するんだつて言つた時もびっくりしたくらいだから」

「・・・」

そういえば、ツアンは友達がいなかったのは知つてたけど・・・

「貴方のおかげね、やっぱり」

「はい？」

「帰つてからあの子、ずっと貴方の話ばかりしていたわ。男子生徒に襲われて助けてくれたとか、お猿さんとデュエルをしたとか・・・  
本当に沢山」

「ツアンがそんなことを・・・」

「あの子を孤独から救ってくれたのは貴方。ありがとうね、武藤君」  
「なんで2連続親御さんからお礼を言われているんだらうか、俺は・・・」

「多分、似ていたからだと思います」

「え？」

「俺とツアンが・・・俺も友達はいませんでした。そして別の仲間が出来て、独りだったツアンを見つけた。俺はツアンが一人であるのが昔の俺みたいだったと思っただけです。だから、彼女を救いたかった・・・そして友達になって、楽しくしているんだと思います」

俺の言葉を、ツアンのお母さんが黙って聞いていた。

「そしてツアンにも俺だけじゃない、沢山の仲間がいます。だからツアンはきつと大丈夫ですよ」

「そうなの・・・なら、安心ね。あんな子だけど、これからも支えてあげて？」

「はい」

俺が頷き、ツアンのお母さんが笑った。するとそこへ、ツアンがお風呂からあがってきた。

「お風呂開いたわよ、秋」

「ん？ああ」

寝巻きと下着を持って風呂場へ向かう。俺。風呂に入ってから借りた部屋へ戻った。

『マスター』

「え？」

俺の横には、あのブラック・マジシャンがいた

「ぶ、ブラック・マジシャン！？」

『お初にお目にかかる・・・武藤秋殿、いや、城戸秋殿』

え？俺の名前ばれてる！？

『マスター、ずっとマハードさんはお話聞いていましたよ？』

「マジで！？」

んじゃあ遊戯王の話とか全部聞いていたのかよ！

「ま、まさか・・・『ブラック・マジシャン・ガール』を召喚！」

隠し持っているブラック・マジシャン・ガールをディスクにセットして召喚する。すると元気よくブラック・マジシャン・ガールが飛び出してきた。

『はいはい！マスター初めましてー！』

やっぱり・・・

「まさか、最初から・・・」

『むろん、全て見ておりました』

『マスターのことも、この世界のことも、ゼーんぶ知ってますよ』

「ミミラ!?!」

『すいませんマスター・・・口止めされてまして』

申し訳なさそうに謝るミミラ。はぁ・・・

「もしかして?」

『今日私を召喚したことで、私と貴方の認識が互いに来るようになったのでしよう』

まあ、俺が声掛けたら反応したからまさかとは思っただけだよ

「やれやれ・・・まさか武藤遊戯の精霊に知られるとは」

『気にすることはありません。マスターにこのことを言っつもりは  
ありませんからね』

『そつですよー！お気になさらずー！...』



気にするよ。まあ別にいいけどさ・・・どうでもいいけど

「ブラック・マジシャンもブラック・マジシャン・ガールも、敬語を俺になんか使わなくていいよ」

『そう言うわけにはいきません。マスターから貴方を手助けしろとの命を受けている以上、こうさせていただく。私の名はマハードと呼んでいただいて結構です』

『私はマナです！』

「うん、分かった・・・よろしくね、マハード、マナ」

べつやら、また賑やかになりそうだ・・・

冬休み（中編？）（後書き）

ってなわけで、ツァン編はちょっと短かったですが、彼女のための話が後で出てくるのでお楽しみに

## 冬休み（後編）（前書き）

連続投稿です

秋「今日の最強カードは・・・ゾンビキャリアか」

手札を1枚デッキの一番上に戻して発動する。

墓地に存在するこのカードを自分フィールド上に特殊召喚する。

この効果で特殊召喚されたこのカードは、

フィールド上から離れた場合ゲームから除外される

秋「大会でも大体の人のデッキには入ってるな。このカード。ぶっちゃけ効果が強力だ」

家に5枚くらいあります。何故だorz

## 冬休み（後編）

Side秋

ツァンの家から帰って数日後。今日は12月25日……つまりクリスマスだ。

「お兄ちゃん、あの女をなんで呼んだの!？」

怒る凜。あの女とは無論雪乃のことである。

「俺の仲間呼んじゃ悪いか？」

「だつて……」

「お前が雪乃を敵視する理由が分からんが、今日はクリスマスパーティーなんだ、変なことを起こすなよ？」

「はい……」

凜が頷く。頭を撫でると嬉しそうにする。

『マスターは苦労してますねえ』

マナ、それは言わない方向で頼む

ピンポン!

「はいはい」

今日は母さんも町内会の年末旅行とやらでない。なので俺と凧の二人なのだが・・・

「久しぶりだな秋！」

「ホントっス！」

「久しぶりなんだなあ」

「元気にしてたか？」

十代、翔、隼人、三沢たちだ。クリスマスパーティーをするとみんなを呼んだのだ。多分イベントは全部消化してるだろ。

「ああ、久しぶり。さ、あがってくれ」

3人が中に入る。こいつらが1着か

「十代さん、翔さん、隼人さん、三沢さん！お久しぶりです！」

凧が嬉しそうに走ってくる。やはり仲良くなった年上の人達が嬉しいのだろう。

「飾り付けはこんなもんでいいっすか？」

「相変わらず隼人は絵が上手いな・・・」

「そつでもないんだなあ」

「む、この角度より・・・」

みんなでワイワイと部屋を飾って行く。翔が飾りを付け、隼人が絵を書いていく。三沢は飾りの角度を見て悩んだりしている。十代は・・・おい、つまみ食いするな!

ピンポン

すると再びインターフォンが鳴った。

「はい」

「久しぶり、秋」

「私達はそうでもないけど、久しぶり秋」

「お兄ちゃんだー!」

「ひ、久しぶりね!呼ばれたからしょうがなく来てあげたわよ!」

・・・ん?

「あれ、ジュンコとモモエはいないのか」

「ええ、あの子たちは実家が遠いから」

「そっか」

そこにいたのは明日香、雪乃、桜ちゃん、ツアンだ。久しぶりに全員集合とはいえないのか・・・ちよつと残念だな。でも大体は揃っ

たかな。

「カンパニー」

『カンパニー!』

みんなでワイワイと食事をする。今年のお疲れ様会と言うことで集まった俺達。そして食事をしながら十代からサイコシヨッカーの話なんかも聞いた。

「いよーし！秋！久しぶりにデュエルだあ！」

「たまにはデュエルから離れようよ十代・・・」

頼むから年末くらいゆっくりさせてくれ

「なら私が貴女にデュエルを申し込むわ！」

言いながら凜が雪乃を指差す。またか！

「いいわよ、来なさい」

そして乗り気の雪乃。えー・・・

「おいおい・・・」

「お兄ちゃん！これは女の戦いのよ！黙ってて!」

「は、はい・・・」

凜に押し切られてしまった。なんか・・・ショックだ。

とりあえず狭いので庭へ出る。寒くはあるものの、みんなで感染する

「お姉ちゃんががんばれー！」

「凜ちゃんもがんばるっス」

「<sup>デュエル</sup>決闘！」

雪乃	LP4000
凜	LP4000

「先攻は私！私は手札から『アンデットワールド』を発動！」

・・・おいおい、初回からか？

「このデュエル、雪乃が不利かもな」

「そう言えばあの子、怖いのが苦手だっけ・・・」

明日香が思い出したかのように言う。周囲が墓場に変化する。お？  
少しだけ頑張ってる。判断力が低下しないと良いが・・・

「ふ、ふん・・・さっさとなさいな」

「ふふ、アンタがお化けとか嫌いなのは知っているわよ！手札から『ゾンビ・マスター』を召喚するわ！」



ゾンビ・マスター ATK1800 / DEF0

「カードを2枚伏せ、ターンエンド！」

「わ、私のターン！ドロー！私は『デーモンソルジャー』を召喚！」

デーモンソルジャー ATK1900 / DEF1500

「そしてバトル！デーモンソルジャーでゾンビ・マスターを攻撃するわ！」

「つく！」

凜 LP4000 LP3900

「カードを2枚伏せてターンエンドよ！」

「私のターンドロー！私は手札から『ゴブリンゾンビ』を守備表示で召喚！ターンエンドよ！」

ゴブリンゾンビ ATK1100 / DEF1050

「ふふ、そう来ると思ったわ！私のターンドロー！私はマンジュゴットを召喚し、効果を発動！手札に『エンド・オブ・ザ・ワールド』を手札に加えて発動！フィールドのマンジュゴットとデーモンソルジャーを生贄に捧げ・・・いでよ！『破滅の女神ルイン』！」

破滅の女神ルイン ATK2300 / DEF2000

「ルイン？見たことないカードね！」

「俺があげたカードだ」

実を言えば雪乃とツアンにはこの前家でお世話になったお礼としてカードを上げている。それを見て凜がルインを指差す

「ル、ルインですって!？お兄ちゃんのカードじゃない!」

「うふふ、もらったの」

「むー……お兄ちゃんめえ……」

「バトルよ。ルインでゴブリンゾンビに攻撃!」

「畏発動!『攻撃の無力化』!」

「あらあら……ならばカードを1枚セットしてターンエンドよ」

「私のターン!『強欲な壺』を発動して2枚ドロ!来たあ!『ワ  
ン・フォー・ワン』を発動!手札の『馬頭鬼』を墓地へ送ることで、  
『ワイト』を召喚するわ!」

ワイトか……って!アイツ俺のカードを勝手に!

「ワ、ワイトですって!?!」

ワイト ATK300/DEF200

「そして!ゾンビキャリアを召喚!」

ゾンビキャリア ATK400 / DEF200

「さらに『愚かな埋葬』を発動！デッキから『魂を削る死霊』を墓地へ送る！そして馬頭鬼の効果発動！このカードを墓地から除外し、墓地のカードを特殊召喚する！『魂を削る死霊』を特殊召喚！」

魂を削る死霊 ATK300 / DEF200

「レベル1のワイト、レベル3の魂を削る死霊、レベル2のゾンビキャリアをチューニング！」

1 + 3 + 2 = 6

「暗黒より生まれし轟雷の悪魔よ！今こそ地の底より蘇り、不死となりて我が前に姿を見せよ！シンクロ召喚！轟け！『アンデット・スカル・デーモン』！」

アンデット・スカル・デーモン ATK2500 / DEF1200

「なっ・・・」

「バトル！アンデット・スカル・デーモンでルインに攻撃！『アンデット・サンダーブレイク』！」

「つく！畏発動！『リビングデットの呼び声』！ルインを蘇生するわ！」

雪乃LP4000 LP3800

破滅の女神ルイン ATK2300 / DEF2000

「ならバトルは中断！ターンエンドよ！」

「私のターン！ドロー！（あのモンスター・・・何とかしなくては）カードを2枚伏せる。そして『命削りの宝札』を発動し、5枚になるようにドロー！来たわ！伏せた『救世の儀式』を発動！手札のマジュゴット、ネオバクを生贄に捧げ、来なさい！『救世の美神ノースウエムコ』！」

救世の美神ノースウエムコ ATK2700/DEF1200

うお、救世の儀式はさっきので伏せたとはいえ、良くノースウエムコ引いたな。

「このカードは召喚に成功した時、モンスターを選択する。選択するのはルインと私の伏せカード。選択したモンスターがフィールドにいる限り、このモンスターが効果で破壊されることはないわ」

「面倒なカード出してくれたわね・・・！」

「バトル！ノースウエムコでアンデット・スカル・デーモンに攻撃！」

「畏発動！『聖なるバリア・・・』甘いわよ！『トラップ・スタン』発動！『なあ！？』」

破壊されるアンデット・スカル・デーモン。流石は雪乃か・・・オベリスクブルーの中でも伊達じゃないな。

凜 LP3900 LP3700

「さらにゴブリンゾンビにルインで攻撃！」

「でもゴブリンゾンビが破壊された時、手札に守備力1200以下のモンスターを手札に加えられる！『ゾンビ・マスター』を選択するわ！」

「でもルインでモンスターを破壊した時、もう一度攻撃が出来るのよ？行きなさいルイン！直接攻撃！」

「ちよっ！それ反則！」

凜 LP3700 LP1400

「・・・カードを1枚セットしてターンエンド」

さて、ライフの攻防がすげえな。だが、凜はここから何かを狙ってくるな

「私のターンドロ！私は手札から「命削りの宝札」を発動！1枚だから4枚ドロ！そして『ゾンビ・マスター』を召喚！」

ゾンビ・マスター ATK1800/DEF0

「ゾンビ・マスターのモンスター効果！手札の『ファラオの化身』を墓地へ送ることで『ゾンビ・マスター』を蘇生！さらに蘇生したゾンビ・マスターの効果で手札の『ピラミッド・タートル』を捨ててゾンビキャリアを召喚！」

うおー！こっちも命削りの宝札かよ！どんだけこいつらドロに恵ま

れてんだよ！

「レベル4のゾンビ・マスターとレベル2のゾンビキャリアをチューニング！」

4 + 2 = 6

「永久に彷徨う不死なる竜よ、愚者の魂を従えて今こそ蘇れ！シンクロ召喚！現れよ『デスカイザー・ドラゴン』！」

デスカイザー・ドラゴン ATK2400/DEF1500

「さらに！デスカイザー・ドラゴンの効果でデーモンソルジャーを召喚するわ！」

デーモンソルジャー（アンデット） ATK1900/DEF1500

「そしてカードを1枚デッキトップに戻すことでゾンビキャリアを特殊召喚！レベル4のデーモンソルジャーとレベル2のゾンビキャリアをチューニング！」

4 + 2 = 6

「冥界の闇を彷徨いしかつての王よ！今こそ冥王の名を捨て魔王となれ！シンクロ召喚！蹂躞せよ！『蘇りし魔王ハ・デス』！」

蘇りし魔王 ハ・デス ATK2450/DEF0

「新しいシンクロモンスターですって！？」

・・・いやー雪乃のデッキなら既にアンデット・スカル・デーモンを破壊した時点で結構有利だぞ。

「そして、手札から永続魔法『一族の結束』を発動！このカードは自分の墓地に存在するモンスターの元々の種族が1種類の場合、自分フィールド上に表側表示で存在するその種族のモンスターの攻撃力は800ポイントアップする！よって・・・」

ゾンビ・マスター ATK1800/DEF0 ゾンビ・マスター  
ATK2600/DEF0

蘇りし魔王 ハ・デス ATK2450/DEF0 ATK325  
0/DEF0

デスカイザー・ドラゴン ATK2400/DEF1500 AT  
K3200/DEF1500

「なっ・・・」

「バトル！ゾンビ・マスターでルインを攻撃！」

雪乃 LP3800 LP3500

「さらにデスカイザー・ドラゴンで攻撃！ノースウエムコに攻撃！」

「速攻魔法発動！『収縮』！デスカイザー・ドラゴンの攻撃力は半分よ！」

デスカイザー・ドラゴン ATK3200/DEF1500 AT

K 2000 / DEF 1500

攻撃を仕掛けるも、逆にノースウエムコに返り討ちにされるデスカイザー・ドラゴン。だが、まだハ・デスが残っている。

凜 LP 1400 LP 700

「けどまだハ・デスがいるわ！ハ・デスでノースウエムコを攻撃  
！」

雪乃 LP 3500 LP 2950

「これでターンエンド！デスカイザー・ドラゴンはやられちゃったけど、これで貴方のフィールドにはなにもいないわ！」

確かに、これで雪乃の勝利への確立は低くなった。だが凜のライフもたった500そして・・・

「確かに凜が優位だ・・・」

「けど」

「このまま終わる雪乃でもないわよね」

全員がそれを分かっている。さあ、ここからどうする？雪乃

「私のターンドロー！ふふ『強欲な壺』を発動して2枚ドロー！そして手札から死者蘇生を発動して『破滅の女神ルイン』を蘇生させる！」



破滅の女神 ルイン ATK2300/DEF2000

ここで強欲な壺か、良く引いたな

「そして手札から『奈落との契約』を発動！ルインを生贄に捧げ、いでよ！『闇の支配者 ゾーク』！」

ここでゾーク？まさか・・・

「ゾークですって？」

闇の支配者 ゾーク ATK2700/DEF1500

「さあ、これでラストバトルになるわ。貴女と私、どちらの運が上なのか・・・試してみましようか。ダイスを振って1、2なら貴女のモンスターは全滅。3、4なら貴女のモンスター1体を破壊、6なら私のモンスターが全滅・・・」

この場合、1、2が出れば雪乃の勝利だ。3、4が出ればハ・デスを倒せるが、次のターン凜は何か知らをしかけるだろう。そして6は無論雪乃の負けだ。このギャンブル、1、2が出なきゃ雪乃の勝利はない・・・

「さあ行くわよ！」

サイコロが振られ、地面に落ちる。カッン、カッンと音が鳴り響き、サイコロが止まった。サイコロの目は・・・

「サイコロの目は『2』よ！」

つまり凜のフィールドのモンスターは全滅

「わ、私のモンスター達が・・・」

「楽しかったわよ、凜・・・バトル！ゾークでダイレクトアタックよ！」

「きゃああああああああっ！」

凜LP700 LP0

「ま、負けちゃった・・・」

すごい、戦いだったな。雪乃にカードを渡したとはいえ、そのカードを使って勝つとは。

「いい、デュエルだったわよ、凜」

「ゆ、雪乃さん・・・」

「貴女の想いはとてもよくわかったわ・・・貴女が・・・」

雪乃が小声で話している。何を話しているのだろうか？だが凜の顔は笑顔になり、握手をしている。

「なんだったんだ？」

「さあ？」

首を傾げる俺と十代。ため息をつくその他一同だった。

この後、新年までみんなで楽しく過ごし、デュエルアカデミアへと戻って行くこととなった俺達。凜は雪乃と再戦を約束した。とりあえず俺のカードを勝手に使うなどは怒ったのはまた別の話である。

冬休み（後編）（後書き）

というわけで冬休み編終了

次回は物語に戻ります

## 青春（前書き）

というわけで、原作復帰。頑張れ秋・・・めっちゃ頑張れ

秋「今回の最強カードは・・・サービスエース」

アニメオリジナル

通常魔法

自分の手札からこのカード以外のカードを1枚選択し、相手にそのカードの種類を当てさせる。当たった場合はそのカードを破壊する。ハズレの場合はそのカードをゲームから除外し、相手に1500ポイントのダメージを与える。

デス・メテオよりもデカイ威力を持ったバースンカード・・・これ、委員長も入れてるんだろうか  
威力はでかいけど・・・

秋「微妙だな」

だね

## 青春

冬休みが終わり、アカデミアに帰ってきた。デュエル・アカデミアよ！私は帰ってきた！それにしても……

「体育ってこの学校必要なんだろうか……」

現在体育の授業中だ。テニスの授業なのだが、疲れる。

「だらしないわね、しっかりしなさい」

「んなこと言っても明日香……体育って必要か？」

「高校の授業課程では必要なことよ。我慢なさい」

いや、まあそれ言われたらそれまでだけどさ……カードで何でも決まるこの世界では絶対にいららないと思うんだ、体育。

「なあ秋ー！次は俺とやろうぜー！」

「パス！」

と言って断る。十代は不服そうだが、テニスなんてやるのはごめんこうむる。疲れるだけだし……

「武藤君！」

「委員長……」

「授業をさぼってはいけませんよ！しっかりしなくては！」

「えー……」

「えーじゃありません！」

そう言われながら引つ張られる俺。ちょ、おまっ……

「わかったわかった！わかったから服を引つ張らないでくれ！」

こうして引きずられて行く俺であった。

しばらくして、委員長にじごかれていると向こうが騒がしくなった。

「……なんだあれ」

黄色い声援が飛ぶ。思い出した……綾小路……なんだけ、そんな名前の部長がいるんだっけ、この部活。この後十代とアイツが明日香を賭けて戦うんだっけか？

「ほら武藤君！よそ見はいけませんよ！」

「ん？ああ……」

と、ラリーを続ける俺達。休憩することになると、雪乃とツアンが別コートから歩いてきた

「ふう……」

「お疲れ雪乃、ツアン」

「ダブルスというのは大変ね、タイミングが合わせづらいわ」

「もつと合わせてよ、大変だったじゃない」

と、言い合う二人。俺はさっき隣のコート見ていたけど結構息ぴったりだと思ったけどなあ

「あ、やべ・・・タオル明日香といたところに置きっぱなしじゃん」

と、コートを歩き明日香の所にまで戻る

「あら、どうしたの秋」

「いや、タオル」

と言いながらタオルを拾い上げる俺。その時だった・・・

「明日香！秋！あぶねえ！」

「へ？」

十代の撃った弾らしきものが勢いで俺達のもとに向かう。突然のことで十代の声に反応できず、直撃するかと思われた刹那、男が走り込んでボールを打ち返した。ボールは威力を落とさずに打ち返され、審判席に座っていたクロノスの顔面に直撃した・・・あれ、絶対わざとだろ困惑する明日香。まあ大丈夫だろう。まあ・・・この後のことを思い出したけど、そんな悠長なこと言ってられなかった気がする。



「あの・・・ありがとうございます」

ボールを打ち返した男子生徒が立ち上がって明日香の方を振り向く。ゆっくりと振り向くとなんか、いい笑顔で歯を輝かせていた。

「大丈夫だったかい？怪我しなかった？」

それを見たジュンコとモモエは目をハートにしてるんだけど・・・そんなにもんか、アレ。正直俺には理解できない。むしろ俺としては友達になりたくない人No.1だな。

「・・・誰アレ」

「僕はよくは知らないけど、確か3年生でテニス部部长だったから。綾小路モーターズだかの御曹司だったはず」

寄ってきたツアンにそんなことを教えてもらっ俺。そして明日香の手を握る部長。すぐに我に帰って素振りしながらどつかにいった・・・ああいうタイプは相手にしたくないな

「御曹司ねえ・・・」

この後十代がクロノスに呼びだされていた。頑張れ十代・・・

放課後

「頼むよ秋！一緒に付き合ってくれ！」

「えー・・・」

十代は結局テニス部でしごかれる羽目になった。その道づれに俺を連れていくというものらしい。テニス部の中に知り合いがないみたいだし・・・しょうがないな

「俺は見るだけな」

「おう！」

というわけで、テニス場へ訪れる俺達。さっそく部長直々のしごきが始まる。よくよく考えればあのボール当てたのあの部長だよな・

「あら秋」

「明日香、雪乃、ツアン」

いつものメンバーがいる。お前らもよほど暇なんだな

「秋は参加しないの？」

「俺はクロノス教諭にボール当ててねえから。みんなはどうしたんだ？」

「ちょっと十代に聞きたいことがあって。雪乃とツアンとはそこで会ったのよ」

と、話をする俺達。一方のテニスコートでは

「いいぞ遊城十代君！その調子だ！さあ、頑張るんだ！いいぞ、あと十球だ！美しき青春、万歳！」

・・・正直な感想を言ってしまうおう。うぜえ

「ん？ゼエ、ゼエ、明日香じゃん」

十代の声で部長も気付いたのか、歯を光らせて振り向くと相変わらぬのウザい笑顔で明日香に声をかける。だからいちいち歯を光らせるな。気食悪い

「やあ明日香くん、うれしいなあ。僕に会いに・・・」

「十代、ちよつと話があるんだけど」

明日香は華麗にスルーした。なんか見てて哀れだな。部長が離れたことで休憩を取る十代。悪い十代、部長の妬みを買ってくれ。応援はするから。あっちは十代に任せて俺はさっさと観客側へ移行する。

「武藤秋くん！」

・・・は？

暑苦しい声が聞こえてきたからで悪い予感がしつつも振り向いた。そこには予想通り、全身を嫉妬の炎に燃やし、目に炎まで灯した部長が俺をすごい目で睨んでいた。

「何か用っすか」

「あまりこういうことは言いたくないが、3人の女性を弄ぶのはや

めた方がいい！」

「はぁ？」

なぜそうなった・・・

「君は今日の授業で明日香さんと仲良さげに話しながら雪乃くん、そしてツアンくんとも親しげにするなど！男の風上にも置けない！」

・・・まるで意味が分からんぞ

「だったらなんですか？明日香達の付き合いなんて結構長いですよ？俺ら」

無論、十代達のことも含んでいったのだが、部長の耳には『付き合い』というキーワードと、呼び捨てしたことしか聞こえていないようだ。

「彼女らには、僕のような男こそ相応しい！君の様なライイエローのような男には似合わないのだよ！」

「何勝手なことやってんのこの人？」

「さあ？」

と、俺とツアンで首を傾げる。明日香は困った表情で、雪乃はクスクス笑っている。

「いいだろう武藤くん！僕とデュエルだ！！君もデュエリストなら

ばデュエルで決着をつけようじゃないか!」

「なんの」

「無論!このデュエルで勝った方が雪乃さんと明日香くん、そしてツアンくんのフィアンセになるのだ!」

・・・キレていいよな、俺

「まあまあ、秋、抑えて、抑えて」

明日香が俺を止める。もうやるしかないってか・・・結局こうなるのかよ・・・

「まあっ、フィアンセですって」

「どこをどうしたらそうい話になるのよ」

ももえはどうしたらそんな考えに至れるのか、頬を染めて楽しそうにしている。ジュンコは呆れてため息をついているが・・・

「まあいいや・・・新作のデッキの実験台になってもらおう」

どうせこんな展開になるんだろうとデッキは持ってきてたしな。

「気を付けて秋」

「雪乃?」

「あの部長、噂ではカイザーに匹敵するほどの勝率を持ってららし

いわ

・・・アレで？

「<sup>デュエル</sup>決闘！」

綾小路 LP4000

秋 LP4000

「先攻は僕がもらっよ！ドロー！」

歯を輝かせる部長。超ウゼエ・・・

「僕は手札から『サーブスエース』を発動するよ！手札から選んだカードの種類を君が当てる。魔法か、罠か、はたまたモンスターか。見事当てることができればオツケー。だがもし間違えたら、君は1500ポイントのダメージをくらうことになる」

「・・・魔法カードだ」

「残念モンスターだ！1500ポイントのダメージを受けてもらおう！」

秋 LP4000 LP2500

「・・・」

「そしてもう一度『サービスエース』を発動！さあ選びたまえ！」

「魔法だ」

「残念！畏だ！」

秋LP4000 LP1000

「……………」

「さあ、君のライフはもう1000だ！」

S i d e 雪乃

いきなりの展開ね……随分と追いつめられたようだけど……まるで驚きも焦りもしてない秋。一体なぜかしら？まるでわざとダメージを受けているようにも見えるわ。それにしてもあの部長、気持ち悪いわね……フィアンセだとか勝手に決めないで欲しいわ。それに、私はもう秋のものになるのだから……

「どんどん行くぞ！『スマッシュエース』を発動！僕が引いたカードがモンスターの場合、君に1000のダメージを与える！ドロ！」

さて、結果はどうかしら……部長が笑っている。まさか……？

「僕が引いたのは神聖なる球体！ホーリーシャイン・ボールこれで僕の勝ちだ！」

「ええ!？」

秋 LP1000 LP0

球体に寄って飛ばされる秋。そんな・・・

「秋が、負けた？」

「しかも、先攻1ターンキルで・・・」

「どうだい？これが僕の力だ！」

みんなが驚きの声を上げる。部長がその笑みを私達に向けてくるけど・・・正直不快だわ。バーンで1キルなんて出来て当然。それをさも自分の力のような顔でこちらを見ていた。その時だった

「クク・・・ククク・・・!」

秋がゆらりと立ち上がった。秋の背中にはオーラが纏っているようにも見える。そのオーラは集約し、モンスターとして形が現れる。

「なっ・・・LP0なのに・・・どうしてモンスターが!？」

インフェルニティ・ゼロ ATK0/DEF0

「このカードは俺が効果ダメージでライフを0にされた時、他の手札を全て捨てて特殊召喚できる・・・このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、自分はライフポイントが0でも敗北はしない。自分の手札が0枚の場合、このカードは戦闘では破壊されず、自分へのダメージ500ポイント毎にこのカードにデスカウ



ンターを1つ置く。このカードにデスカウンターが3つ以上乗っている場合、このカードを破壊する・・・つまり、俺はデスカウンターを受けることに敗北へと近づくのさ」

な、なんてでたらめなカードを！秋は初めからこれを狙っていたというの！？

「バーンデッキでカイザーと同等だなんて笑わせんな・・・さあ、どうする？」

「つく！ならば僕はさっきのカードのコストでデッキから3枚カードを墓地へ送る！モンスターを伏せてターンエンドだ！」

「俺のターンドロ・・・ふん、俺は『インフェルニティ・デーモン』を特殊召喚！」

インフェルニティ・デーモン ATK1800/DEF1200

「このカードは手札が0の時にこのカードをドロした場合、手札から特殊召喚が出来る。バトルといこうか？セットモンスターに攻撃だ」

破壊されたのはメガ・サンダーボール・・・あの部長まさかボールって名前だけでカードをデッキに入れてるのかしら？

「ターンエンド・・・さあ、満足させてくれよ？」

「僕のターンドロ！強欲な壺でカードを2枚ドロ！ふふふ、僕は再び『スマッシュエース』を発動！ドロ！モンスターカードだ！1000のダメージを・・・」

部長がそう言った瞬間、銃を持ったモンスターが出現し、その銃を部長の頭に突きつけた。

「ひい！？なんだこれは・・・！」

「そのカードは『インフェルニティ・デスガンマン』・・・自分が効果ダメージを受ける時、墓地のこのカードを除外して効果ダメージを無効にできる。そして相手プレイヤーは効果を選択できる」

効果を選択・・・？

「俺が今から自分のデッキの一番上をめくる。そのカードがモンスターだったら、お前はその効果ダメージの倍のダメージを受ける。もしモンスターじゃなかったら、俺はその効果ダメージを受ける。もしくはこの選択を拒否した場合、効果ダメージは無効」

つまり、ロシアンルーレット。ずいぶんと賭けに出たわね

「俺も正直、このデッキにどれくらいモンスターをブチ込んだか覚えてねえ・・・さあ、どうする？」

これは・・・部長の選択次第ね。このまま効果を続行させてもし秋がモンスターを引かなければ、カウンターが一気に2つ溜まる。逆にモンスターなら、2000のダメージを受けてしまう。さあ、どうするのかしら？

「・・・選択は、選択はしない」

「いいんだな？それで」

「ああ、僕は無謀な賭けはしない性質でね・・・神聖なる球体を守備表示で召喚！カードを2枚伏せてターンエンドだ！」

神聖なる球体 ATK500/DEF500

それは単に臆病だという感じもするわね・・・まあどうでも良いけど。というか、神聖なる球体って・・・

「俺のターン！ドロー・・・命拾いしたな、俺は『インフェルニティ・ミラージュ』を召喚！」

インフェルニティ・ミラージュ ATK0/DEF0

モンスターカード・・・上手く避けたようね。

「そして、インフェルニティ・ミラージュをリリースすることで、墓地に存在する『インフェルニティ』と名のつくカードを2体まで特殊召喚する。俺は墓地に送った『インフェルニティ・ビートル』と、『インフェルニティ・ドwarf』を特殊召喚する」

インフェルニティ・ビートル ATK1200/DEF0

インフェルニティ・ドwarf ATK800/DEF500

フィールドにはインフェルニティ・ゼロを含めた4体のモンスター・・・これが通れば相手に大ダメージだけど、部長もそう簡単には攻撃を通さないはずね

「レベル4のインフェルニティ・デーモンと、レベル2のインフェ

ルニティ・ドワーフに、レベル2のインフェルニティ・ビートルを  
チューニング！」

ここでチューニング・・・やはりインフェルニティに関連するカー  
ドかしら？

4 + 2 + 2 = 8

「死者と生者、ゼロにて交わりしとき、永劫の檻より魔の竜は放た  
れる！シンクロ召喚！いでよ、『インフェルニティ・デス・ドラゴ  
ン』！」

インフェルニティ・デス・ドラゴン ATK3000/DEF24  
00

なんともまあ、また禍々しい龍が出て来たものね。

「バトルだ。インフェルニティ・デス・ドラゴンで神聖なる球体に  
攻撃『デス・ファイア・ブラスト』！」

「ぐおおおっ！」

ただしモンスターは守備表示・・・これではダメージは与えられな  
いわね。それにしてもあの伏せカードはカウンターではなかったよ  
うだけど・・・あの部長は本当にバーンしかやらないのかしら？

「ターンエンドだ」

「ぼ、僕のターンドロ！僕は手札から『ファイアー・ボール』を  
発動する！」

火の玉が飛んでいく。流石にもうデスガンマンはいないみたいね。その火の玉を受ける

デスカウンター 1

「僕はさらに手札から『天よりの宝札』を発動するよ！さあ6枚ドロ―したまえ！」

なるほど、考えたわね・・・秋のあのデッキでは手札が0枚時発動するカードが沢山ある。言うなればそう・・・ハンドレスコンボ。それを封じるにはカードをドロ―させる以外にない

「僕はさらに手札から『メガ・サンダーボール』を攻撃表示で召喚！」

メガ・サンダーボール ATK750/DEF600

は？攻撃表示？

「さらにカードを2枚伏せてターンエンド！」

・・・明らかにカウンター狙ってるじゃない。見え見えよ。これでカイザーと同じ実力なんて・・・まずあり得ないわね

「俺のターンドロ―・・・カードを2枚セットし、手札から魔法カード『バレット&カートリッジ』を発動する。自分のデッキからカードを4枚墓地へ送り、1枚ドロ―できる。その後、このカードをデッキの一番上に置く。このカードの効果でデッキの上に置かれたこのカードをドロ―した場合、このカードを墓地へ送る」

言いながらカードを戻す秋。なるほど、デッキのインフェルニティを落とすのね。そして伏せカードの量からして、ハンドレスを狙っている。

「さらに、手札から『インフェルニティ・ビースト』を召喚！」

インフェルニティ・ビースト ATK1600/DEF1200

「そして『二重召喚』を発動。俺はインフェルニティ・ビーストを生贄に、『インフェルニティ・アーチャー』を召喚！」

インフェルニティ・アーチャー ATK2000/DEF1000

「ターンエンドだ……」

伏せたカードに秘策があるのかしら？秋の手札は2枚……このターン攻撃しないのはあの部長の伏せたカードの警戒も意味しているかもしれないけど……次バーンカードを引かれたら終わりよ？

「僕のターンドロロー！僕は『メガ・サンダーボール』をリリース！エメラルド・ドラゴンを召喚するよ！」

エメラルド・ドラゴン ATK2400/DEF1400

「僕のように青春の風を吹き、輝くカード！あの海馬瀬人が使ったカードだ！どうだい？美しいだろう！」

……どうでも良いけど、いきなりボール関係のカードから外れたわね。ボール関係の上級モンスターは聞いたことないけど。これに

は秋も呆れているみたいね。攻撃力2400の通常モンスターがど  
うしたというのかって顔をしているわ。そもそも、なんであんなモ  
ンスターデッキに入ってるの？ドラゴンⅡ卵つまりボール？そんな  
感じかしら・・・

「さあバトルと行くよ！エメラルド・ドラゴンでインフェルニティ・  
アーチャーに攻撃だ！」

破壊されるインフェルニティ・アーチャー・・・でもデスカウンタ  
ーは乗らないわ。攻撃力が後100足りないもの・・・もしかして  
それを忘れてたの？あの部長

「・・・畏発動『インフェルニティ・リフレクター』！『インフェ  
ルニティ』と名のつくモンスターが戦闘で破壊された時、手札を全  
て捨てて発動する事ができる。そのモンスター1体を自分の墓地か  
ら特殊召喚し、相手ライフに1000ポイントダメージを与える」

普通罫を警戒すべきよ。魔宮の賄賂やトラップ・ジャマーで罫を潰  
すのが定石かしら？私の場合はトラップ・スタンを秋からもらった  
けど・・・

インフェルニティ・アーチャー ATK2000/DEF1000

綾小路 LP4000 LP3000

あらあら、バーンデッキなのに攻撃なんか転じるからこうなっちゃ  
うのよ？

「ふ、ふふ・・・これで防いだようだけど、僕はこれを発動するよ  
！『サービスエース』！さあカードを指定したまえ！」

さ、最後の最後でこれ！？あの部長ってホント好きになれそうにな  
いわ！

「・・・モンスターカードだ」

「外れだよ！魔法カードだ！」

言った瞬間、ボールが現れる。けど、あれだけ墓地へカードを送つたのよ。インフェルニティ・デスガンマンがいるはず。そう思っている予想通り、インフェルニティ・デスガンマンが部長の頭に銃口を突き付けた。

「うつ・・・」

「俺は墓地から、インフェルニティ・デスガンマンと、インフェルニティ・クライマーの効果を発動した。わかってるな・・・？」

ちよつと待つて・・・今デスガンマンの後に別のカードの名前を口に  
しなかった？

「俺のデッキの一番上がモンスターだったら俺の勝ち、そうじゃなければ俺の負けだ・・・選択しなければ効果ダメージは発生しない。モンスターカードはあと何枚あるかわからない・・・さあどうする？」

「フフ、フフフ・・・僕を誘っているのは分かっているよ。でも君はミスを犯した！」

ミス・・・？



「君はさっき戻ってしまったよね、一番上に……そう、魔法カード『バレット&カートリッジ』のカードを！」

あ！そうだったわ……これじゃあロシアンルーレットでどこに弾が入っているのか分かってしまうのと同じに……

「引くといい！引き金を！」

「ドロー……！」

秋は静かにそのカードをドローした。

「僕の青春の勝利だ！スマッシュ！」「モンスターカード！『インフェルニティ・クライマー』！」な、なんだってえ！？

さっきデスガンマンの後に言ったカード！？まさか……

「インフェルニティ・クライマーの効果は、手札が0の時、このカードをデッキの上に置くことができる……勝負ありだ」

デスガンマンが引き金を引いた。銃声が辺りに響きわたる。

「そ、そんな……まさか……」

綾小路 LP3000 LPO

「僕が……この僕が負けるなんて……」

「人の話を聞くべきだったな……俺はちゃんとクライマーの効果

を発動したと言ったぜ？」

「そんな・・・僕が・・・この僕が・・・う、うわーん！」

部長はいきなり泣き出し、その場から走り去って行った・・・

「はあ・・・こんなんじゃ満足できねえよ」

秋はただ一言そう呟いた。

Side秋

「・・・無駄に疲れた」

満足先生のように満足できなくて残念だ・・・てか、負けて泣きながら逃げるって・・・変な奴だな。それにしてもアニメ効果のカードを何枚か入れては見たものの・・・これOCG化されたらとんでもなかったな。そしてデス・ドラゴンよ、活躍させられないですまん

「秋！やったな！」

「こんなんじゃ満足できねえ・・・」

ため息をつきながらデッキを片づける俺。次はもっとOCGに近づけたデッキを作ろう。うん、そうしよう

「ちょ、ちょっと待っててくださいまし！明日香さん達に何もありませんの！？」

はい？

「フィアンセの話よ！どうなの！？」

呆れていたはずのジュンコまでもが俺に問い詰める。俺にどうしろって言うんだ

「いやあのなお前ら・・・俺はまず同意してないし、部長が勝手に決めたことだろ？それに本人たちの同意がないまま決められるかっての。そもそも、3人で・・・」

この国は一夫多妻ではありません。納得していない2人。すると雪乃が俺のところ近づいてくる

「あら、別に秋ならフィアンセでもいいわよ」

「は？」

「満足できてないんでしょ？なら満足させてあげてもいいわよ？」

いやいやいや・・・何を言ってるんですか雪乃さん。そしてツアン、私も別にいいみたいな表情でこっち見るな！明日香は明日香で顔を紅くして困ってる。あれ？何この状況・・・

S i d e ミニ

『あちゃー・・・』

『あはは、マスターも大変だねえ』

テニスコートの上からマスターの様子を見る私とマナさん。

『まあ、これもマスターの鈍いのが原因ですし、自業自得ですけどね』

『あれ、ミラちゃん妬いてる？』

はい？

『なんで私が妬くんですか？』

『だってマスターのこと好きでしょ？』

『どうでしょう・・・私は確かにマスターが好きですけど、精霊ですし、お傍に入れるだけで十分幸せですから』

そう、私はマスターと絆で結ばれている。だから他の女性とくっついてもいい。むしろ、マスターを好意的に思ってくれる人たちを応援したい。

『ミラちゃん偉いね』

『そつでしようか？』

ちなみに、この後マスターが雪乃さんに言い寄られ、ツアンさんは無言で秋さんを見続け、明日香さんが困った様子でブツブツ呟く光景は20分ほど続き、疲労困憊でマスターが寮に戻ったのは別の話です



青春（後書き）

ってなわけで今日の投稿分終了

カード買ってきます（笑）

## 武藤遊戯（前書き）

すみませんでしたあああああ！

前回の話の「青春」にてサービスエースの効果にデスガンマンの効果割り込ませることが出来ないという指摘をいただきました。ぶっちゃけ、ここまでかつこよく決めといてこれかよと自分で自己嫌悪中でございます

ほんと、私のデュエルタクティクスはアストラルもびっくりです。一応言うと自分としてはこれ以上ないくらいの出来だと思っておりますので、修復がその、不可能に近いと言いますか、厳しいです。

実際どうしてなのかは感想をご覧になれば分かると思いますのでご覧下さい。

一応直す予定で入るのですが、一気にセブンスターズ編まで行ってしまいたいので、今のところ色々直す予定は未定です  
タクティクスに問題があるせいで色々申し訳がないです

秋「まったく・・・今日の最強カードは・・・『ブラック・マジシャン・ガール』か」

マナ「わーい！私だあ！」

ブラック・マジシャン・ガール

お互いの墓地に存在する「ブラック・マジシャン」「マジシャン・オブ・ブラックカオス」1体につき、このカードの攻撃力は300ポイントアップする。

プロモカードで登場し、後にPREMIUM PACK 4でレプリカとして一般発売された闇属性・魔法使い族の上級モンスター。師匠の《ブラック・マジシャン》と共に抜群の知名度を誇り、墓地に眠る《ブラック・マジシャン》・《マジシャン・オブ・ブラックカオス》の数に比例して攻撃力を上昇させる永続効果をもつ。

秋「この世界では武藤遊戯しか使わず、ブラック・マジシャン使いのパンドラさえ知らなかった伝説のカードだ。世界に1枚というのなら、青眼の白龍より稀少価値があるのは気のせいだろうか？」

作者は4つのシリーズを全てスリーブに入れてあります



## 武藤遊戯

この前の事件から幾日かの日が過ぎた。その間にもドローパーン事件だとかカード狩りだとかあったけど、全部夜中の話なので俺は家で寝ていた。睡眠取らしてください。お願いです・・・デッキを構築したり考えたり整理したり・・・色々と面倒なことがあって介入できなかつたというのもまた事実。

「遊戯兄さんのデッキ?」

「ああ、なんでもデッキが公開されるらしい」

・・・何故にそんなことをしたんだと思いたくなる俺。現在食堂でみんなとご飯を食べている真つ最中である。

「といっても、秋は見る必要がなさそうね」

「まあなあ・・・一応デッキレシピ持ってるし」

作る気はないけどな。

「へえー・・・」

「そう言えばさっき整理券をゲットしてきたッスよ!ほら!」

と、俺達に整理券を渡してくれる翔。

「へえ、翔の坊やにしては、なかなか気が効くことしてくれたのね」

「えへへ」

と、嬉しそうにする翔。でも確か・・・最終的に夜中に見学に行くとか言う話じゃなかったか？俺はそんなことを思いながら、食事の箸を進めるのだった。

夜

「秋、起きてるか？」

夜中、部屋がノックされる。

「・・・ん？」

「んう・・・十代の坊やみたいね」

・・・俺が目を覚ますと、相変わらず雪乃が俺と同じ布団で寝ていた。雪乃がドアを開ける

「どうしたの？十代の坊や？」

「あれ、雪乃・・・まあいいや、お前も一緒に見に行かないか、遊戯さんのデッキー！」

「ふあ・・・この夜中によくやるな・・・三沢まで」

三沢も後ろにいる

「少しフライングして見に行こうと思ってな」

また退学になっても知らんぞ・・・ま、付き合いますか

「待ってる、着替えてくるから」

こうして、俺達は学校の中へ潜入することになった。

学園内

「マンマミーヤ！」

クロノスの悲鳴が聞こえる方へ走る。するとそこにはデッキケースが割られ、デッキがなくクロノスが硬直していた。

「デッキが消えてる！」

「まさかクロノス先生が!？」

と、十代達が叫び、クロノスが必死に弁解する。俺は優しくクロノスの肩を叩いた。

「・・・先生、温かいスープ飲んでから、一緒に警察に行こうか？」

「なんでこんな時だけ優しくするんですーノ！」

「先生、自首するのと逮捕じゃ牢屋に入るのは年月だいぶ差があるんですよ?？」

と、雪乃まで俺の悪ふざけに乗ってきた。

「だから私じゃないノーネ！」

「まあまあ、二人とも悪ふざけはここまでにしよっぜ・・・先生がやるわけないじゃん」

「まあ鍵持ってるからな」

「シニョール十代・・・うう、持つべきものはやはり生徒なノーネ」

おいおい・・・いつも十代を退学させようとするくせにそりゃないだろ

「まあいいや、とにかくみんなで探そう！」

こうして俺達は散り、デッキを盗んだやつの搜索を開始した。

森の中

「マハード！マナ！遊戯のデッキの気配は！？」

『ここから先・・・む！？誰か既にデュエルしている！』

俺はマハードとマナとその遊戯のデッキを探す。彼らは共に戦ってきた仲間の気配を読むことができる。

「キマイラで攻撃！」

「うわああああ！」

翔 L P O

「翔！」

場所に着くと、十代と俺がその場所にいた。

「つくつくつく・・・次は遊城十代と武藤秋か・・・」

「お前か！デッキを盗んだのは！」

「俺はこれで誰にも負けない・・・最強のデッキを手に入れた！これで誰にも負けないんだ！クロノスだろうと！カイザーだろうとお！」

「ふん、遊戯・・・兄さんのデッキを使うだけで最強気分か？いい御身分だな」

とりあえず挑発してみる。

「なんだと！？丁度いい！お前も倒してやる！」

「・・・ふん、十代、ここは俺にやらせてもらえないか？」

「ああ、もちろんだぜ！勝てよ秋！」

デッキをディスクに入れる。

「神楽坂だったな・・・俺が勝つたらそのデッキは返してもらおうぜ」

「いいだろう！こい！武藤秋！」

秋 LP4000

神楽坂 LP4000

「<sup>デュエル</sup>決闘！」

「先攻は俺だ！俺のターン！俺は手札から融合を発動！幻獣王ガゼルとバファメットを融合！現れる！『有翼幻獣キマイラ』！」

有翼幻獣キマイラ ATK2100/DEF1800

「ターンエンド」

「俺のターン！俺は手札から魔法カード『古のルール』を発動！レベル5以上の通常モンスターを特殊召喚する！現れる！我が最強の僕！『ブラック・マジシャン』！」

ブラック・マジシャン ATK2500/DEF2100

『・・・どうでもいいですが、そのセリフ、かつてマスターがパラドックスと戦った時のですね？』

あ、ばれた？

「<sup>ぶ</sup>、ブラック・マジシャンだと！？」

「すげえ！ブラマジきたあ！」

十代がはしゃぎ、神楽坂が驚きの声を上げる。

「バトル！ブラック・マジシャンで有翼幻獣キマイラに攻撃！『黒・魔・導』！」

神楽坂    LP4000    LP3600

「ぐっ・・・馬鹿な！何故お前がブラック・マジシャンを・・・！俺はキマイラの効果でバフォメットを守備表示で召喚！」

バフォメット    ATK1400 / DEF1800

「さあな？自分で考える。カードを2枚伏せ、ターンエンドだ」

「俺のターン！ふっ・・・俺は手札から『黒魔術のカーテン』を発動！ライフを半分にすることで、デッキからブラック・マジシャンを特殊召喚する！」

召喚されるブラック・マジシャンだが・・・

「・・・パンドラマジシャンじゃね？」

目つきの悪い、赤いブラック・マジシャン。他にカードなかったのかよ

『あやつは・・・久しいな』

『ふっ・・・また貴様と戦えるとはな』

向いづのブラマジも喋ってるよ。まあいいけど

神楽坂    LP3600    LP1800

「そしてバファメットを生贄に捧げ、『ブラック・マジシャン・ガール』を召喚！」

『はいはい！お呼びですかあ？』

ブラック・マジシャン・ガール    ATK2000 / DEF1700

肌の黒い、赤い服がモチーフとなった gangslo のブラック・マジシャン・ガール

「ブラック・マジシャン・ガールっス！・・・でも、なんか違うよ  
うな」

まあ、コピーカードみたいだしな

「そして手札から装備魔法『魔術の呪文書』を発動し、ブラック・マジシャン・ガールに装備させる！」

ブラック・マジシャン・ガール    ATK2000 / DEF1700  
ATK2700 / DEF1700

「バトル！ブラック・マジシャン・ガールでブラック・マジシャンに攻撃だ！『黒・魔・導・爆・裂・波』！」

「畏発動！『攻撃の無力化』！攻撃を無効にし、バトルを終了させる！」



「つく！カードを1枚伏せ、ターンエンドだ！」

現状では俺とマハードだけでは不利か……

「俺のターンドロロー！」

なら力を貸してもらおうじゃないか……マナ！

「俺は手札から『師弟の絆』を発動！ブラック・マジシャンがフィールドにいる時、弟子である『ブラック・マジシャン・ガール』をデッキから特殊召喚する！」

ブラック・マジシャン・ガール ATK2000/DEF1700

『うふっ！わーい！マスターにやっと使ってもらえたー！』

マナが嬉しそうにはしゃぎ、マナを見た翔も大はしゃぎしている。

「ブラック・マジシャン・ガールっす！感動っす！」

「馬鹿な……何故、ブラック・マジシャン・ガールが……」

「遊戯……兄さんから俺はこのカードを預かっていてな。あいにくだがそれはコピーカードさ」

納得する十代と翔。だが神楽坂は一人驚いている。

「だ、だが！俺のブラック・マジシャン・ガールの攻撃力には敵わないー！」

「それはどうか？さらに俺は、手札から魔法カード『黒・魔・導・  
双・弾』ブラック・シン・バーストを発動！このターン、ブラック・マジシャンの攻撃力を、  
ブラック・マジシャン・ガールの攻撃力分だけアップさせる！」

ブラック・マジシャン ATK2500 / DEF2100 ATK  
4500 / DEF2100

攻撃力4500・・・オベリスクの数値超えちゃったよ。さすがです

「バトルだ！行け！ブラック・マジシャン！ブラック・マジシャン・  
ガール！ブラック・マジシャン・ガールに攻撃！」

『行くぞマナ！』

『はい！お師匠様！』

二人が杖を重ね、爆発的な魔力を生み出す

『『『黒・魔・導・双・弾』！』』』

「畏発動！『攻撃の無力化』！」

何！？アイツもあのカードを入れていたのか・・・攻撃は相殺され、  
消えてしまう。

ブラック・マジシャン ATK4500 / DEF2100 ATK  
2500 / DEF2100

「ならば、カードを2枚伏せ、ターンエンドだ」

「いくぜ秋！俺のターン！俺は手札から『天よりの宝札』を発動！互いのプレイヤーはカードを6枚になるようにドローする！」

あー・・・そういえば入ってたな。困った時の天よりの宝札だし

「そして俺は魔法カードのドローでこのカードを引いた！『ワタポン』を特殊召喚する！」

ワタポン ATK200/DEF300

「そして『手札断殺』を発動互いのプレイヤーはカードを2枚墓地に送り2枚ドロー！さらにワタポンを生贄に捧げ『デーモンの召喚』を召喚！」

デーモンの召喚 ATK2500/DEF1200

「そして墓地のバフォメットとワタポンを除外し・・・現れよ！『カオス・ソルジャー - 開闢の使者 - 』！」

カオス・ソルジャー - 開闢の使者 - ATK3000/DEF2500

「つく・・・！」

ここでカオス・ソルジャーか・・・！しかもこいつの効果は・・・！

「バトル！カオス・ソルジャーでブラック・マジシャン・ガールに攻撃！」

まずいつ！

「速攻魔法発動！『ハーフ・シャット』！カオス・ソルジャーを選択し、カオス・ソルジャーの攻撃力はこのターン半分となり、戦闘では破壊されなくなる！」

カオス・ソルジャー - 開闢の使者 - ATK3000 / DEF2500  
00 ATK1500 / DEF2500

『女の子に手を上げるなんて最低よ！カオス・ソルジャー！』

マナが言いながら攻撃を跳ね返す。カオス・ソルジャーは申し訳なさそうに元のフィールドに戻って行った。

神楽坂 LP1800 LP1300

「ならばブラック・マジシャンでブラック・マジシャン・ガールを攻撃！『黒・魔・導』！」

『きゃああ！？』

「マナ・・・！」

秋 LP4000 LP3500

「さらにブラック・マジシャン・ガールでブラック・マジシャンに攻撃！『黒・魔・導・爆・裂・波』！」

『ぐおおおー！』

秋LP3500 LP3300

「マハード！つく！畏発動！『奇跡の残照』！このターン！バトルで破壊されたモンスターを復活させる！蘇れ！『ブラック・マジシヤン』！」

ブラック・マジシヤン ATK2500/DEF2100

「ならばカードを2枚伏せてターンエンド！これが強さ！俺は最強のデュエリスト！完全無欠のデュエリストなんだ！」

「笑わせるな……」

「何がおかしい？」

俺がこの状況で笑っていることに疑問を持つのだろう。最強のデュエリスト？笑わせんな

「遊戯兄さんが最強のデュエリストだなんて、俺は思ったことはない」

「何！？」

「遊戯兄さんだって無敵だったわけじゃない……敗北だって経験している。だがそれを乗り越え、あの人は強くなった。それまでに繋いできたカードとの絆、そして仲間との友情……それがあってこそ『伝説のデュエリスト 武藤遊戯』になっただ。猿真似したくらいでその人になることはできない」

『秋殿……』

そもそも、猿真似で強くなれたって意味ないし、苦労しないっての  
・  
・

「黙れ黙れ黙れえ！俺は武藤遊戯だ！最強にして無敵のデュエリス  
トだ！」

「じゃあそれを証明してくれよ・・・俺のターンドロー！」  
・・・来たか

「俺は手札から『久遠の魔術師ミラ』を召喚！」

久遠の魔術師ミラ ATK1800/DEF1000

『マスター！大丈夫ですか！？』

「ありがと、大丈夫だよ。ミラの効果を発動！このカードの召喚に  
成功した時、相手のセットしたカードを1枚確認できる！」

俺が返事を返すと、ホツとため息を漏らすミラ。そして開かれたの  
は『魂の綱』・・・さて、ここから逆転してやるさ

「さらに手札から『死者蘇生』を発動！蘇れ！『ブラック・マジシ  
ヤン・ガール』！」

ブラック・マジシャン・ガール ATK2000/DEF1700

『ふうー・・・あ、ミラちゃん！』

『はい！マナさん！』

これで俺の精霊たちは揃った。俺達の力でアイツを倒す。

「さらに！ブラック・マジシャンに装備魔法『ワンダー・ワンド』を装備！攻撃力を500ポイントアップさせる！」

ブラック・マジシャン ATK2500 / DEF2100 ATK  
3000 / DEF2100

「だがそんな攻撃力では、俺のモンスター達には敵わないぜ！」

「そして手札から魔法カード『拡散する波動』を発動する！1000のライフを払い、選択対象はブラック・マジシャン！いくぞ！ブラック・マジシャンで攻撃！『超・魔・導・波・動・弾』！」

秋LP3300 LP2300

「ぐあああつー！」

神楽坂 LP1300 LP500

「つく・・・ブラック・マジシャン・ガールに装備された魔術の呪文書がフィールド上から墓地へ送られた時、1000ライフポイント回復する！そしてデーモンの召喚が攻撃される瞬間に速攻魔法『神秘の中華なべ』を発動！」

神楽坂 LP500 LP1500 LP4000

「すまんマハード！」

『気にするな・・・うおおおっ！』

魔力を解放し、カオス・ソルジャーを倒すマハード。そして相討ちになったカオス・ソルジャー・・・となると当然

「『魂の綱』を発動！自分フィールド上のモンスターが破壊され墓地へ送られた時に発動する事ができる！1000ライフポイントを払う事で、自分のデッキからレベル4モンスター1体を特殊召喚する事ができる。『岩石の巨兵』を守備表示で特殊召喚！」

岩石の巨兵 ATK1300/DEF2000

神楽坂 LP4000 LP3000

守備力の高いモンスターか・・・だが！

「忘れていたことがあるぜ、神楽坂・・・ブラック・マジシャン・ガールは墓地のブラック・マジシャンの攻撃力分だけアップする！」

ブラック・マジシャン・ガール ATK2000/DEF1700  
ATK2600/DEF1700

「行け！ブラック・マジシャン・ガール！『黒・魔・導・爆・裂・波』！」

『えーい！』

粉々になる岩石の巨兵。

「いくぞ！ミラで攻撃だ！『エタニティ・マジック』！」



「手札を全て伏せてターンエンドだ」

「つく・・・そんな・・・俺が・・・最強の決闘者の俺が・・・」

「どんなにその人になりきろうと、その人の絆はその人だけのものだ」

俺が言うと、神楽坂がライフポイントの上に手を当てようとする。降伏、サレンダーしようと言うのだ。

「待てよ！神楽坂！」

「遊城、十代・・・」

待ったをかけたのは十代だった。

「続けてくれよ！お前のデュエル！」

「だけど・・・俺は遊戯さんじゃない。デュエルの才能もない・・・俺じゃ、勝てない・・・」

「そんなことないぜ！あんなに遊戯さんのカードを使いこなすなんてすげえ才能じゃねーか！最後まであきらめんな！デッキは答えてくれる！」

十代が神楽坂を励ます。すると神楽坂の顔つきが変わった。

「行くぜ！俺のターン！」

・・・見せて見るよ、お前のデュエルを！

## 武藤遊戯（後書き）

ってなわけで、遊戯デッキ編です。

それにしても魔法使い族を中心に行っているものによくこんなデッキで遊戯はデュエルキングになったな・・・十代はHEROで統一してるし、遊星だってジャンクデッキで統一がなされてるのに・・・疑問だ

そして次の話に続きます

## それぞれの想い（前書き）

というわけで、続きです

秋「今日の最強カードは『混沌の黒魔術師』・・・超禁止カードだな」

混沌の黒魔術師

このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、自分の墓地から魔法カード1枚を選択して手札に加える事ができる。このカードが戦闘によって破壊したモンスターは墓地へは行かずゲームから除外される。このカードがフィールド上から離れた場合、ゲームから除外される。

・・・何これチート？

秋「ハッキリ言うが、良くこんなんでもOCG化したよな」

昔、旅行の帰りに買ったパックに入っていたのを覚えています。しかもパラレルレアだったかな？

すぐに盗まれましたけど（汗

## それぞれの想い

Side秋

秋 LP2300

神楽坂 LP1200

「俺のターン！……！俺は手札から『命削りの宝札』を発動！カードを5枚ドロ―し、5ターン後に全て捨てる！そして俺は『死者蘇生』を発動し、『ブラック・マジシャン』を蘇生！」

ブラック・マジシャン ATK2500/DEF2100

「これにより、ガールの攻撃力は下がる！」

ブラック・マジシャン・ガール ATK2600/DEF1700  
ATK2300/DEF1700

「さらに手札から『大嵐』を発動！フィールド上の魔法罫を全て破壊する！」

つく……！しまった！

「バトルだ！『ブラック・マジシャン』で久遠の魔術師ミラに攻撃！『黒・魔・導』！」

『きゃあああつー！』

「ミラ！つく！」

秋LP2300 LP1600

「カードを2枚伏せ、ターンエンド!」

「俺のターン!俺も同じく『命削りの宝札』を発動!カードを5枚ドロー……!」

手札は……よし!

「俺は魔導騎士ディフェンダーを守備表示で召喚!このモンスターにはカウンターが1つ乗る!」

魔導騎士ディフェンダー ATK1600/DEF2000

魔力カウンター 0 1

「そして手札から魔法カード『マジシャンズ・クロス』を発動!このターン、ブラック・マジシャン・ガールの攻撃力は3000となる!」

ブラック・マジシャン・ガール ATK2300/DEF1700  
ATK3000/DEF1700

「バトル!ブラック・マジシャン・ガールでブラック・マジシャンに攻撃!『黒・魔・導・爆・裂・波』!」

「畏発動!マジカルシルクハット!」

シルクハットがブラック・マジシャンを隠す。

「真ん中に攻撃だ！マナ！」

『はい！』

だが真ん中は外れ。バトルフェイズ終了時にシルクハットは消滅した。

「カードを2枚伏せてターンエンドだ」

「俺のターン！『強欲な壺』を發動して2枚ドロ！来たか！手札から『光と闇の洗礼』を發動！ブラック・マジシャンを生贄に、いでよ！『混沌の黒魔術師』！」

混沌の黒魔術師 ATK2800 / DEF2600

ブラック・マジシャン・ガール ATK2300 / DEF1700  
ATK2600 / DEF1700

「このカードの召喚、特殊召喚に成功した時、墓地の魔法カードを1枚回収できる！俺は『死者蘇生』を選択し、死者蘇生を發動！蘇れ、『カオス・ソルジャー - 開闢の使者 - 』！」

カオス・ソルジャー 開闢の使者 ATK3000 / DEF2500

再び姿を現したカオス・ソルジャー・・・！くそっ！

「バトルだ！混沌の黒魔術師でブラック・マジシャン・ガールに攻撃！『滅びの呪文』！」

させるか！

「魔導騎士ディフェンダーの効果発動！魔法使い族が破壊される時、カウンターを取り除くことで戦闘による破壊を無効にする！」

「だがダメージは受ける！」

秋 LP1600 LP1400

「そしてカオス・ソルジャーで攻撃だ！『開闢双破斬』！」

『きゃああああっ！』

「マナ！」

秋 LP1400 LP1000

「さらにカオス・ソルジャー - 開闢の使者 - はモンスターを破壊すれば続けて攻撃が出来る！ディフェンダーに攻撃！」

「カードを1枚伏せ、ターンエンド」

・・・フィールドには攻撃力2800の混沌の黒魔術師、3000のカオス・ソルジャー・・・対する俺は魔導騎士ディフェンダーのみ・・・相手のライフは1200この1200が、どうあっても削りきれない・・・！というかホント酷いな開闢の使者と混沌の黒魔術師！禁止カードのオンパレードじゃねえか！俺の世界、俺の時代だったらの話だけでも！

「俺の・・・ターン！」



来た！逆転への一手・・・だが、あの男が遊戯になりきっていると  
して、果たしてこの手に乗るのか？いや・・・迷っている暇はない

「畏発動！『リビングゲデットの呼び声』！蘇れ、『ブラック・マジ  
シャン』！さらに手札から『早すぎた埋葬』を発動！戻って来い！  
『ブラック・マジシャン・ガール』！」

秋LP1000 LP200

ブラック・マジシャン ATK2500/DEF2100

ブラック・マジシャン・ガール ATK2000/DEF1700

ATK2300/DEF1700

「だが、残念だったな・・・そのモンスターたちじゃ俺のモンス  
ター達には勝てないぜ！秋！」

まるで闇遊戯の否、王様のような口調の神楽坂。そう、このままで  
は勝てないのだ・・・だが、信じて伏せたカードが俺に答えてくれ  
た！

「畏発動！『ブラック・スパイラル・フォース』！ブラック・マジ  
シャンがフィールドにいる時、モンスター1体の攻撃力を2倍にす  
る！」

ブラック・マジシャン・ガール ATK2300/DEF1700

ATK4600/DEF2100

「攻撃力・・・4600、だと」

「行け！ブラック・マジシャン・ガール！ブラック・マジシャン！  
混沌の魔術師に攻撃！『ブラック・スパイラル・バーニング』！」

「う、うわあああああああ！」

神楽坂      LP1200      LPO

・・・デュエルを終え、俺と十代、翔そして後から駆けつけたらしい三沢と雪乃は神楽坂の所へと歩み寄った。

「神楽坂」

「・・・さすがは、遊戯さんの従弟だけはある・・・」

「いいデュエルだった。まるで兄さんとデュエルしているような感覚だったよ」

「でも勝てなかった・・・やっぱり俺には才能がない」

言いながら地面に手を着く神楽坂

「そんなことはない」

すると別の方から声が聞こえた。

「お兄さん!？」

「カイザー！？」

そこにはカイザー亮がいた。

「どうしてここに？」

「俺達も一足早くデッキを見に来たんだがな、クロノス教諭がデッキを盗まれたと聞いて探していたんだ」

「俺達？」

「私達もいるってことよ」

そこにいたのは明日香とツアンだった。

「始め、見つけた時は止めようとも思っただけど」

「止めるにはあまりにも惜しいデュエルだったからな」

ああ、そういえばそんなだったな、止めなかった理由。本当にぎりぎりだったから視線にも気付かなかった。見れば周りで拍手が巻き起こっていた。沢山の生徒がそこにはいて、俺達のデュエルを見ていたようだ

「良い物見せてもらったよ！」

「凄かったぞ！2人共！」

「みんな・・・」

「確かに、人のデッキを勝手に持ち出したのは良く無いが・・・武藤 遊戯のデッキが戦うところを此処のみんなが見たかったのもまた事実」

亮は言いながら遊戯のデッキを見つめる。

「お前が弱いわけでも、武藤遊戯に成りきれなかったわけでもない・・・お前がカードを信じることが出来なかった。それがお前の敗因だ」

「カイザー・・・」

「後は、お前がどうすべきかを考えるといい」

神楽坂はカイザーの言葉を受けて立ち上がると、ディスクからデッキを取り出した。

「・・・すまなかった、君の従兄とはいえ、お兄さんのデッキを、俺は・・・」

「気にするな・・・さっきも言っただろ？いいデュエルだったってな」

言いながらデッキを受け取る。

「今度はまた、お前のデッキと戦いたい。全力でな」

「ああ！望むところだ！」

「あ！ずりいぞ秋！俺もデュエルしてえ！」

ワイワイと騒がしく話、夜は過ぎていく。こうして、この事件は幕を閉じた

……はずだった

「ねえ、秋」

「ん？どうしたツアン」

「雪乃がここにいてるってことは、十代達と一緒に来たってことよね」

「ああ、そうだけど」

俺が言うと、ツアンの表情が険しくなった

「どうして僕を誘ってくれなかったのよ」

「えっと……それは」

まさか、雪乃が俺の部屋で寝てたなんて言えるはずないしなあ……

「ああ、それなら俺が部屋に行った時に雪乃がいたから誘ったんだ

」

十代ー！！！！

「な、なんなんですって!?!」

「あら、私結構秋の部屋で寝てるけど……知らなかった?」

『ええ!?!』

その場にいたカイザーを除くいつものメンバーが声を上げる。カイザーはただ驚いている表情のようだが……ツアンが顔を伏せる

「あの……ツアン……さん?」

「秋の……馬鹿ー!」

「ぐぼお!?!」

ボディーブローを喰らい、吹っ飛ばされた。

「あ……ゴメ……ふ、ふん!」

ツアンはそのまま走って行ってしまい、そこで俺は気を失った。

……

「っ……」

目を覚ますと自分の部屋にいた。

「お！目が覚めたな！」

「十代・・・そうだ！」

身体を起こす。ツアンがなんかめっちゃ怒ってたんだよな。

「兄貴がいけないんすよ、ツアンさんに余計なこと言うから」

「悪い悪い・・・」

どうしたもんかなー・・・この後十代からデッキはちゃんと戻したことを聞いた。そしてもう夕方になった。相当きつい一発を受けたらしい。それよりも問題はツアンだ・・・

「十代、秋は・・・って、秋、やっと目を覚ましたのね」

「明日香」

明日香が部屋に入ってきた。

「あの、ツアンは・・・」

「はあ・・・すっかり塞ぎこんじゃったわよ。まったくもう」

「ちゃんと謝ってこい」

と、三沢。いやだって・・・

「俺なんかした!？」

『はぁ・・・』

十代以外がため息をつく。いや、だって俺殴られるようなことしたか!？

「ホント駄目ね・・・秋、もっと女の子のことを考えたらどう？」

「考えたらって・・・そんなこと言われても女子とまともに話すのって高校入ってからが初めてだし・・・」

そう、この世界に来る前でも、俺は中高が男子校で、大学も女子が比較的に少ない。ここまで積極的に女子と話したりするのはこのアカデミアが初めてなのだ。てか、多分武藤秋もいじめられていたところを見ると殆ど女子と会話などしなかっただろう

「とにかく・・・原因は雪乃と貴方よ」

「あら・・・私も？」

いつの間にかいる雪乃。何故か俺のベッドに座る

「当たり前でしょ・・・」

「別にいいじゃない・・・言っとくけど、私は悪いと思ってないわよ?？」

「あのねえ・・・」



「仮に私が悪いということにしても、何が悪いの？」

雪乃の言葉に、詰まる一同。確かに・・・俺だって

「秋はともかく、私は自分に素直になっただけ・・・何か反論はある？明日香」

「うっ・・・それは、そうだけど・・・でも・・・ツアンだって・・・」

「知ってるわ。でも、私だってこの想いは本物よ？」

会話の意味が理解できない俺。えーと・・・俺はどうすればいいんだろうか

Sideツアン

武藤遊戯のデッキが盗まれ、僕は明日香と一緒に探しに行った。最初はこっそり二人で覗きに行く予定だったけど・・・途中でカイザーとも合流して搜索していると、秋はその盗んだ生徒とデュエルをしていた。そして、秋は勝利した。真っ先に駆け寄ろうとした時、雪乃の姿が目に入った・・・

「え・・・」

僕は、一瞬戸惑った。どうして雪乃がここにいるのかと。雪乃も偶然この場に居合わせたのかと思った。でも、雪乃は三沢といた。つまり、秋たちといたのだ。モヤモヤとした想いが僕の中で渦巻いていた。この気持ちは何？僕は思いきって秋に聞いてみた。

「ねえ、秋」

「ん？どうしたツァン」

「雪乃がここにいてるってことは、十代達と一緒に来たってことよね」  
この疑問に、私は否定して欲しいと思った。違うのだと。ただの偶然だったのだと、そう言っただけで済んだ。でも、帰ってきた言葉は違った。

「ああ、そうだけど」

これを聞いて、さらにモヤモヤしたものが増えて行った。そして自然に、僕はこんな言葉を口にしていった。

「どうして僕を誘ってくれなかったのよ」

「えっと・・・それは」

戸惑う秋。 どうして誘ってくれなかったのか気になってしょうがなかったけど、なにより雪乃が何故一緒に行動できるほど近くにいたのかを知りたかった。ブルーとレッドの寮はとても離れている。なのになぜ。そして十代から僕は思わぬ言葉を聞いた。

「ああ、それなら俺が部屋に行った時に雪乃がいたから誘ったんだよ」

「な、ななんですって!？」

驚く他なかった。秋と一緒に部屋にいた？一緒に寝ていたということ？僕は何が何だか分からなくなっていった。そして次に雪乃が言った言葉は、信じられないことだった。

「あら、私結構秋の部屋で寝てるけど・・・知らなかった？」

『ええ！？』

その場にいたカイザーを除くいつものメンバーが声を上げていた。僕はホントに何も分からなくなった。そして、秋が僕に近づいてきた。

「あの・・・ツアン・・・さん？」

「秋の・・・馬鹿ー！」

そんな言葉と共に、僕は秋を殴り飛ばしていた。

「ぐぼお！？」

そんな声を上げて、秋は倒れ伏した。

「あ・・・ゴメ・・・ふ、ふん！」

謝ろうと思ったけど、僕はとっさにその場から離れてしまった。どうしてこうなったんだろう・・・どうして僕は秋にあんな当たり方をしてしまったのだろうか？僕はどうして・・・

「はあ・・・」

部屋で一夜開けたその日。今日はお休みなのでベッドの上で寝っ転がっていた。気まずい・・・あんな形で思いつきり秋を殴ってしまった。雪乃が原因であるはずなのに、その大本である秋を殴ってしまったのだから、本当に気まずい・・・

「はぁ・・・」

ため息ばかりが漏れる。すると、部屋がノックされた

「ツァン」

「明日香・・・」

「その、私秋の様子を見に行くけど、どうする？」

いつもなら、行くというところ。でも、僕は今そんなことはできない

「いい・・・ちょっと一人にして」

「あ、うん・・・」

明日香は頷き、ドアを閉めた。悪いのは僕であり、明日香たちも気まずくなってしまった。どうしよう・・・

『行こうぜ、ツァン！』

アイツの顔が、今日は無性に浮かんでいた。あんなことして・・・きっと怒ってる。あの笑顔を、秋はもう僕には向けてくれないだろう。でも・・・

「やっぱり・・・謝るべきなんだろうな・・・」

ぽつりと、僕はそんなことを言っていた。悪いのは僕なのだから・・・謝って当然・・・謝ろう。僕の足は自然とレッド寮へ向けて歩いていた。

レッド寮

・・・来ちゃった。気づいたらもう夜だし。どうしよう、なんて謝ろうか決めてないのに。僕の馬鹿。とりあえず僕はレッド寮の秋の部屋まで歩く。すると声が聞こえた。どうやらみんな集まっているようだ。

「とにかく・・・原因は雪乃と貴方よ」

「あら・・・私も？」

明日香が上半身を起こした秋と会話していた。いつものメンバーがそこにいる。でも、そこに立ち入ることができない。

「当たり前でしょ・・・」

「別にいいじゃない・・・言っとくけど、私は悪いと思ってないわよっ」

「あのねえ・・・」

「仮に私が悪いということにしても、何が悪いの？」

はあ・・・アイツつてだから駄目なのよね。ほんと鈍感・・・つて、僕つては何を考えてんのよ

「秋はともかく、私は自分に素直になっただけ・・・何か反論はある？明日香」

「うつ・・・それは、そうだけど・・・でも・・・ツアンだって・・・」

「知ってるわ。でも、私だってこの想いは本物よ？」

雪乃が羨ましい。雪乃は勇気がある。秋が好きだと、以前僕に言っていたことがあった。僕はその時どうして僕に言ったのか分からなかった・・・でも、今僕は・・・

「ツアン・・・！」

「誰かを助けるのに、理由がいるか？」

『最後の最後まで、俺は諦めない・・・！俺の、ターン！』

僕は・・・

「つ・・・！？」

その時だった、扉の隙間から覗いていたのにもかかわらず、僕の目と秋の目が合ってしまった。

「ツアン？」

一同がドアの方を向いた。僕は思わず、その場から逃げ出してしま  
った

それぞれの想い（後書き）

つてなわけで、読者の方々が気になるでしょう雪乃とツァンの恋の  
行方

お楽しみに



## 想い（前書き）

WARNING!! WARNING!! WARNING!!

ここからは非常にリア充なお話になります。藤原雪乃、ツアン・デイレと結婚済み、もしくは結婚する予定の方・・・ここは危険よ！早く逃げて！

つてなわけで、恋愛成就のお話です。ぶっちゃけこんな話の中盤で恋愛成就つても奇妙な話ですが・・・

まあ、私が面白いと思ったのでそれでどうか一つ（オイ

まあ、こんな中途半端な場所でこうなったのにも理由があるので、それは後のお楽しみと言うことでお待ちください

秋「今回の最強カード・・・何故、『万能地雷グレイモヤ』なんだ？」

万能地雷グレイモヤ

通常罠

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。相手フィールド上に表側攻撃表示で存在する攻撃力が一番高いモンスター1体を破壊する

リア充め！このリア充め！爆発しろ！

秋「・・・ただのやつあたりじゃねーか」



## 想い

Side 秋

話をしていると、ドア越しで視線を感じた。桃色の髪が見えた・・・あれって

「ツァン！」

「っ・・・！」

ドアから離れているのが分かった。

「おい！ツァン！待てよ！」

俺は起き上がって上着を羽織って外へ飛び出した。アイツ、足速い・・・！

「ミラゴメン、どこに行ったのか追ってくれ！」

『は、はい！』

「秋」

「雪乃・・・」

走りながら、雪乃が追いつく。雪乃も足速いってか、俺が遅いのか？

「今ホントにツァンがいたの？」

「ああ、確かに・・・」

「そう、貴方はどうするの?」

「えっ・・・」

どうするって・・・とりあえず逃げてる理由を聞くっきゃないでしょ

「別にどうでも良いけど・・・ツァンは今とても繊細よ?わかってるの?」

「それってどういう・・・」

「行けばわかるわ・・・急ぎましょう」

俺と雪乃は急いでツァンを追う。

『マスター!ツァンさんちよつと高い崖の方へ行きましたよ!』

「(わかった!)」

俺と雪乃は足を速めた。

アカデミアから外れた海岸

S i d e ツァン

お、思わず逃げちゃった・・・

「・・・はあ」

なんで逃げちゃったんだろう・・・多分秋が悪い。うん、きっとそう。急に起き上がって・・・

「・・・」

僕は一人、海を見つめる。誰もいない。なんだか、昔に戻った気分だった。昔から僕はこの『僕』という一人称や性格から馬鹿にされたり、誤解されることが多かった。中学でも、高校でも、ずっとそう。高校では、最初から友達を作らない気だった。私一人で何でもやれる。そう思って・・・でも、そんなある日、アイツにあった。

『へえ、六武衆か・・・』

人からあまり知られていない六武衆のことを知ってる人と会えて親近感がわいた。でも、僕は着き離れた。友達なんていらなないと思っただから。でも、アイツはそれから良く合うことになった。

『見せてやるよ、絆の力』

『大丈夫か？ツアン』

アイツと友達になってから、その友達たちとも仲良くなった。オシリスレッドの落ちこぼれ達。でもそんな落ちこぼれがいるんな敵を倒すのを僕はみて来た。そして知った。彼らは落ちこぼれなどではない。優秀な生徒なのだ・・・そして僕はそんな彼らと仲良くなれたのが嬉しかった。でも、また一人になってしまった・・・僕は・・・

「うっ……うっ……」

自然と涙がこぼれる。どうして涙が出るの？僕は寂しくなんかない・  
・前からそうだったことでしょうか？なんで……

「ツァン！」

……え？

「やっと見つけた……」

息を切らしてくるそいつを見て、僕は驚いた。

「どうして……ここに……」

「どうしてって、お前が逃げるからじゃん」

秋と、雪乃がそこにいた。

「………なんの、用？」

「何の用……いや、その……お前がドアの前にいたから、ツァ  
ンが用あったんじゃないの？」

確かに、用はあったけど……

「はぁ……」

そのすぐ後ろで雪乃もため息をついている。

「ま、いいや・・・戻ろうぜ？みんな心配してたし」

「なんでよ・・・」

「は？」

「僕、アンタのこと殴ったのよ！？怒ってるんじゃないの!？」

「そうだ、きつとそうだ・・・あんな顔して、心の底じゃ怒ってるに決まってる！」

「いや、怒っているというか・・・むしろ、なんで殴られたか聞きたかったというか・・・」

「っ・・・!」

「言いたくない。雪乃と一緒に部屋にいたのが許せなかったただなんて

「秋、そんな言い方したら言うにいけないわよ？そうでしょ、ツァン」

「・・・」

「僕は反射的に雪乃を睨んでしまった。悪気はないんだけど・・・」

「あらあら・・・嫌われたものね」

「その、昨日誘わなかったのは悪かったよ・・・寝てると思ってたし、整理券もあったから、ツァンは行かないだろうなあかと思って

て

僕はそんな言葉を聞きたくない・・・

「・・・・・・・・」

「んでまあ、雪乃がいたのもその日は偶然でさ・・・」

いや、聞きたくない・・・このままだと、一番聞きたくない言葉を、僕は聞いてしまう

「・・・・・・・・・・・・・・・・ゴメン」

いやっ！

「ツァン」

いつの間にか僕はしゃがみこんでいた。耳を塞ぎ、目を塞ぎ、全てを否定するかのようにな

「・・・・・・・・ツァン、こんなこと言いたくないけど、もう少し素直になつたら？」

雪乃の声が聞こえる。そんなこと分かってるんだ・・・でも、でもっ！

「うるさいわねっ！もう放っておいてよ！僕だって・・・僕だってねえー！」

「放っておけるわけないでしょ・・・」



雪乃が僕の腕を掴む。なんで・・・

「私達は、友達でしょうか？同じように、同じ男を好きになった、友達同士じゃないの」

「僕は・・・」

次の一言を言おうとした、その時だった。

ピシッ・・・！！

「「え？」」

何かに亀裂が走る音が聞こえる。次の瞬間、僕たちがいた崖が崩れる。

「「キヤアアアアア！？」」

海に落ちる！？そんな・・・！！

「雪乃！ツアン！」

秋が私達を抱える。ちよっ・・・近いつ・・・！そんなことを思っている。海面に叩きつけられた。そこで僕は気を失ってしまった。

Side 秋

「ぶはっ！」

崖から海面は約10メートルほどだった。下に何も無いのが幸いか。海面に叩きつけられたシヨックで気を失った雪乃とツアン。俺はとっさにミラが魔法をかけてくれていたらしい。

「くそ、重いつ！」

服に水が入る。そして冷たい！冬の海なんかホント入るもんじゃねえ！下手すれば死んでるぞこれ！なんとか二人を背負って泳いでいるが、相変わらず俺のこの『武藤秋』の筋力じゃやばい……！しかも暗くてなんも見えねえし！

『マスター！あっちの方に陸ありますよ！』

ミラが光をくれるので、なんとかその海岸まで上がった。上がったまでにはいいんだが……

「おいおいおい……」

そこは断崖絶壁。運よく洞窟らしきものがあるが、雨風をしのげる程度であって、よろしいものではない……

「さむっ……って、雪乃、ツアン！」

水を飲んでるのか息をしていない二人。

『この場合、人工呼吸ですか？』

………非常事態だ

「ミラ、お前は十代達を呼んでくれ！」

『わかりました！』

……とりあえずミラは行った。2人が……

「………覚悟を決めよう」

ホントヘタレだな、俺。そう思いつつも、ツァンの身体を横にし、軌道を確認する。

「すまん」

謝ってから口を合わせ、空気を吹き込む。

「ゲホッ！ゴホッ……！」

水を噴き出すツァン。よし……！

「次！」

すぐに雪乃のところに近づく。そして同じく口を合わせ、空気を送る。

「ゴホッ……ゴホッ！」

水を吐き出す雪乃。良かった……とりあえず二人とも無事……  
つて、背中から凄い殺気が。ゆっくりと後ろを振り返ると、ツァン  
が俺を睨んでいた。

「秋！あんなにしてんのよー！」

「え、いや・・・人工呼吸・・・」

「っっ！あんたねえ！」

「うつ・・・秋、ツアン・・・大丈夫なの？」

身体を重そうに起こした雪乃。

「雪乃！こいつ今アンタにキスしてたのよ！？」

「だから人工呼吸だって！第一、お前にだって・・・・・・・・・・  
あ」

やべ、これは俺でも分かった。地雷踏んだ

「な、な、な、な、なななな、なんですってえ！？」

「あらあら・・・」

「アンタはあゝへ、ヘックシ」

「もう少し奥行くか・・・」

とりあえず中に進む俺達だった。

「なあ、ツアン、怒ってるか？」

「・・・・・・・・・・フン」

ますます機嫌が悪くなったツァン。そして雪乃・・・

「なんでお前は下着なんだよっ!」

「あら、あのままじゃ風邪ひくでしょ」

俺も上着は脱いでいるけどさぁ・・・

「だからって・・・」

「ほら、ツァンも脱ぎなさいな」

「な、ちよっ・・・やめなさい!雪乃!」

無理やり脱がされるツァン。俺はとりあえず見ないように別方向を向いていることにした。

「もうお嫁にいけない・・・」

シクシクと泣いているツァン。見てはいない・・・うん、見てはいない

「いいじゃない、そこに責任とってくれる人がいるんだから」

「・・・・・・・・・・は?」

何を言っているんでしょうか雪乃さん

「・・・・・・・・この際、ハッキリとさせましょう。秋」

「いや、何が？」

「ツアン、いじけてないでこっち来なさい」

と、ツアンを引っ張ってくる雪乃。ツアンも何が何だか分からない感じである。

「私は、秋・・・貴方が好きよ」

「っ!？」

はい!？

「貴方のデュエルを初めて見た時、驚いたわ・・・高校で真の男を探そうとした私が、いきなりその男を見つけたんだから」

「雪乃・・・」

「私は今までいろんな男に迫られたけど、自分から迫ったのは初めてよ。秋、私は貴方が好き・・・」

雪乃が言いながら抱きつく。あの、すげえ恥ずかしいんですけど・・・

「さあツアン・・・自分に素直になりなさい。私はもう既に自分で意思を伝えたわ」

「僕は・・・僕は・・・うっ・・・うっ・・・!アンタが好きよっ!秋!」

「ツァン……」

泣きながら俺に抱きつくツァン。

「僕は……ずっと一人だった。でも、秋が……助けてくれて……僕は、ずっと秋といたいよ……」

自身が下着姿であるのさえ忘れていたのだろうか。顔を真っ赤にして、俺を強く抱きしめていた。

「うふふ、秋……私達の想い、貴方はどう受け止めるのかしら？」

え……それはあれですか？今ここで選べと？彼女いない歴〓年齢だった俺にそういうことをしろって言うんですか？

「えっと……その……俺はその、どちらも選べないというか……（どっちも友達だと思ってたからな……女性として見てはいたけど……）」

「それは私達両方を受け入れようとしてるのかしら？」

「え？いや「仕方がないわね」え、あ、雪乃!？」

雪乃が一層強く抱きつく

「ツァン、私はそれでもいいわよ？貴女はどう思う？」

「僕は……秋といえればそれでいいわよ……」

え、ちょ……はい！？ツアンさん！いつもの貴方なら全否定しても離れてくれるんじゃない……

「そう言うわけで、秋？私達以外の女に手を出すことは許さないからね？」

「え？あの、え？」

もう決定事項なんですか！？それは！結局、二人は俺に抱きついたまま眠りについた。俺は眠れず、外を見つめる。

「俺が好き、ねえ……」

……二人は武藤秋の惚れたのだ。決して、城戸秋に惚れたわけではない。

「どうしたもんかねえ……」

『マスター！もうすぐ十代さん達が……って！どうしたんですかこの状況！』

「……カクカクシカジカ」

『……えー……と、とりあえず、おめでとつございます』

いや、嬉しくねーよ！お前だって俺の言いたいこと分かるんだろうが！

『マスターの気持ちは分かりますが……素直に受け止めてあげべきですよ。乙女の想いはそれだけ大きいんですから』



「でもな・・・」

『今は、二人を受け入れてあげてくださいマスター』

二人は幸せそうに眠っていた。無垢な少女の笑顔がそこにはあった。

「もういい、諦める」

こうして、ミラに言いくるめられ、この二人を受け入れざるを得なくなった。もし俺が元の世界に帰ることになったら・・・この二人はどうなるのだろうか、そんな不安を抱えながら

この後十代達に無事保護された俺達だが、二人が下着姿だったため、激しい誤解を招くことになるのは別の話である

想い（後書き）

ってなわけで、リア充爆発しろおお！な話でした。

まあ、本当にこの二人の恋愛成就是今後この世界の物語でも深く関係をしてくるものですので、お楽しみにお待ちください

ではっ！

## 恋する乙女（前編）（前書き）

というわけで、恋する乙女シリーズです

まだ後編まで行ってませんが、コミケなので全部投稿してしまおうというよくわからない考えに至りました（笑）

秋「今日の最強カードは……『恋する乙女』か」

恋する乙女

のカードはフィールド上に表側攻撃表示で存在する限り戦闘によっては破壊されない。このカードを攻撃したモンスターに乙女カウンターを1個乗せる。

結構扱いが難しいカード。ぶっちやけアイドルカードな気もします。なぜOCG化されない？

注意！今回の話からかなーり砂糖を吐くことになりそうです。お気を付けてください

恋する乙女（前編）

Side秋

「ほら、あーん」

「・・・づう、あー」

あれから数日が過ぎた。いつものメンバーの食事であるはずなのに、なんというか・・・こんな状況である。

「今度はこつちよ！ほら、あーん！」

「え、あ・・・あー」

雪乃とツアンに挟まれ、食事をする俺。そのたびに食事を食べさせるといふ行為をされている。十代達もこれには驚いている。普段から生活する時は部屋に常にこの二人がいる。拳句の果てにはパジャマまできっちり部屋に置いておく始末だ。

「まったく、呆れてものも言えないわ」

「明日香、助けて・・・」

「却下。ちゃんと責任取りなさい」

「ぐう・・・」

俺達を助けてくれた十代達が駆けつけた時、俺は上半身裸。雪乃達は下着。これでもいい誤解を受けてしまったのだ。

「それにしても羨ましいっす」

「俺はアレ大変だと思っただなあ・・・」

「そう思うなら助けて隼人！」

「頑張るんだなあ」

応援のみですか

「そういえば、ノース校との交流試合は誰が選出されるのだろうか」

そんな話題を三沢が出した。そういえば、今日の朝礼で言っていたな・・・そんな時期か

「またカイザーじゃないか？去年ノース校を倒したとか言ってたし」

「まあ、学園最強が出るのは当然だしな」

「そうかしら？私は秋だと思っけど？」

「僕もそう思う・・・だって、カイザーに勝ったじゃない」

そんなことを言ってくる雪乃とツアン。それは非公式での話な。みんなの前で戦ってないし、そもそも、あの試合って確か十代が出るんだろ。

「どちらにしても、シンクロ召喚やエクシーズ召喚を他の学校の人間に知られるのはちょっとな」

今更ではあるものの、これを公にするのはあまりよろしくないだろう。

「あら、なら秋、HEROを・・・雪乃！それは言っな！」え？」

そんなこと言ったら・・・

「何！？秋！お前HEROデッキも持っているのか！？」

ほらぁ・・・十代が目をキラキラさせてるじゃないか・・・

「デュエルだ秋！俺のHEROと勝負しようぜ！」

こうなると思っただよ。

とりあえず、十代とは今度の機会についてことで約束はしておいた。それよりも問題はこれだな

「早乙女レイです・・・よろしく」

これである。朝飯は珍しく遅れてしまったため朝食では見なかったが・・・

「大徳寺先生、何故に俺の部屋？」

「秋君の部屋は一人だし、十代君達の部屋でも良いと思ったけど、

あそこは既に3人埋まってるんだにゃあ」

だからって俺のところに戻るか普通……まさかこの前のタイタンの時の仕返しか!?

「レイ君は非常に強いんだにゃあ……編入生としても高い実力で入ってきた生徒だから、仲良くするといいのにゃあ……それに、この子は形式だけオシリスであるものの、すぐにライイエローに上がることもできるのにゃー」

なるほど、だから現在ライイエローの俺に手助けしろということか……はあ

「わかりました」

「助かるんだにゃあ。じゃ、後はよろしく頼むにゃ」

そう言って立ち去る大徳寺先生。

「とりあえず中入れ」

「うん……オホン! ああ」

いや、言いなおすなよ。とりあえずどうしたもんかな……PDAを取り出し、通信でツァンを呼びだす。

「ツァン、今いいか？」

『秋? どうしたの?』

「ああ、頼みがある……とりあえずシャンプーとリンスとボディソープ持ってきてくれ」

『は？いきなりどうしたのよ』

「理由は後、頼んだ」

『あ、ちよ……』

PDAを切り、レイを見る。レイは男の部屋に入ったからか、そわそわしている。やれやれ……

コンコン

「ん？」

「私よ」

「雪乃か、入っていいぞ」

雪乃が部屋に入ると、レイを見る。

「あら、この坊やは誰？」

「編入生の早乙女レイだ。少しの間俺の部屋で預かることになった」

「そう、私は藤原雪乃。秋の彼女よ。よろしく坊や」

「はうえ！？よ、よろしく……」



驚くレイ。そりゃそうか・・・さて、そろそろツアンが来ても・・・

「秋！言われたもの持って来たわよ！」

そんなに息を切らしてこなくても・・・

「ありがとツアン。とりあえず入ってくれ」

ドアを閉め、レイに向き直る。

「さて・・・そろそろ話してもらおうか？早乙女レイ」

「え？えつと・・・何を・・・」

そりゃ言えないよな。

「ていつ！」

俺が帽子を取る。するとそこから長い髪が垂れる。それを見て雪乃とツアンが驚いた

「え！？」

「なっ・・・」

「あ！返して！僕の帽子！」

レイが女の子だったのを知ってるのは俺だけだしな

「俺が聞きたいのは、わざわざ男装してまでこの学校に編入してきたか聞いているんだ」

「あつう・・・」

「まさか女の子だったなんてね・・・ビックリだわ」

そりゃそうだろうな・・・さて、とりあえずレイのここに来た本当の理由を話してもらった。カイザーが好きになり、会いたくてこの学園に無理して入ってきたこと。まだ小学校5年生だということ。恋する乙女は強いよ、だそうだ。

「・・・ハッキリ言うが、呆れてものも言えん」

「うう・・・ごめんなさい」

「それで？このこと親は知っているの？下手すると警察沙汰でしょ？」

確かに、雪乃の言うとおり。勝手に編入してきたということは親の相談もなしと言うことだ。というか、勝手に編入した時点で親は知るわけがない。

「というか、書類偽造までしてくる小学生って・・・なんて執念」

「やれやれ・・・」

ため息をつく俺達3人。ことの重大さをようやく理解したレイもシヨンとなる。

「・・・ま、その執念は認めるよ。帰ってから心配してくれた人たちにちゃんと謝って、ちゃんとした年齢に達したらこのアカデミア

に來い。応援はしてやるから」

と、頭を撫でる。すると、レイは嬉しそうに頷いた

「は、はい！」

「あらあら」

「・・・秋」

雪乃が俺を生温かい目で見てくる。が、ツァンはムツとした表情で俺を見てくる。

「え？俺何かした？」

「僕たち以外の女に優しくしてる・・・」

え、これさえ駄目なんですか！？どんだけ！？

「あの、雪乃さんは秋さんの恋人なんですよね」

「ええそうよ」

「じゃあツァンさんは？」

「もちろん恋人よ」

「ええ！？」

驚くレイ。そりゃそうだろうな・・・てか、もう恋人は確定的なのね

「え、だって・・・ええ!？」

「まあ、普通じゃないのは百も承知よ。気にしないで?」

「は、はあ・・・」

と、どう返答していいかわからないレイ。とりあえず・・・

「俺はちよつと外に出てるから・・・着替え済ませといてくれ」

「ええ、わかったわ」

「うん」

そう言って俺は外へ出た。

S i d e l e y

正体がものの数秒でばれちゃった・・・そういえばあの、前に街で見た人かな。えつと・・・ツアンさんだっけ・・・この人と一緒にいた気がする

「あの、ツアンさん・・・」

「何?」

「あの、秋さんって、前に街でデュエルしてアマチュアチャンプの

人に勝っていませんでした？」

「ああ、あれ？見てたんだ・・・秋の話だと、あの人はただの詐欺師だったらしいわよ」

・・・詐欺師ってことは、あんまり強くないのかな。じゃああの人もあんまり強くないのかな・・・でもブラック・マジシャンとか持ってたし・・・

「別に相手が素人でも、秋は強いよね？その辺勘違いしないでね」

こ、心読まれた・・・とりあえずパジャマに着替える僕。というか・・・

「なんでお二人も着替えているんですか！？」

二人はさも当然のようにパジャマに着替えている。

「あら、私達は普段こっちで寝泊まりしてるのよ？」

「だ、だって・・・3段ベッドだし・・・」

「ああ、今日はどっちだったかしら」

「僕よ。昨日雪乃は寝たでしょ？」

と、話してる。どっち？寝た？ま、まさか・・・

「あの人と一緒に寝てるんですか？」

「貴女用のベッドは明日届くみたいだし、開いてるベッドを使いなさいな」

えー……!？何それ。なんでこの人達こんなラブラブなの？そんなことを思いながらベッドに上がろうとすると、机の上のカードが目に入った。なんだろう、この白いカードと黒いカード……

「あら駄目よ？人のもの勝手に見たら」

「あ、ご、ごめんなさい……」

「これは秋の大事なカードだから、触らないで上げて頂戴」

雪乃さんに言われて僕はカードを触るのをやめてベッドに入る。すると雪乃さんがPDAで連絡を取っていた。

「秋？ええ、着替え終わったわ……あら、そうなの？ええ、分かっただわ」

「どうしたんですか？」

「ああ、ちょっと生徒に捕まったらしくて、今から決闘デュエルしに行くらしいわ」

こんな夜中に？就寝時間前だけど……

「先生公認らしいから……デツキを持ってきてくれないかですつて。どうするツァン」

「はぁ……せっかく着替えたのに」

ツアンさんはブツブツと文句を言いながらさっさと着替えていた。雪乃さんに限っては目にもとまらぬ速さだった。

「レイ、貴女はどうするのかしら？子供はもう寝る時間だけど・・・」

今は・・・9時前。むー・・・僕だってそこまで子供じゃない

「いいですよ！僕も行きますー！」

「・・・じゃあすぐ着替えて頂戴。問題はこれね・・・どれがいいと思う？」

「普通にいつものでいいんじゃないの？」

「そうね」

何の話だろ。雪乃さんが机のカードをしまい込むと、デュエルデスクを持ち出した。

「さ、早く着替えて頂戴」

「は、はい！ごめんなさい！」

帽子をかぶって・・・これでよし！こうして僕はお二人と一緒にデュエルスペースへと向かった。

S i d e 秋

「まだか！」

「ちよつと待つてる」

現在ブルー生徒に捕まりました。聞けば雪乃のファンと言うことらしい。どういう関係かと問い詰められ、恋人と返したらキレられて無理やりデュエルすることに・・・ああ、面倒くさい。しかも集団らしく、4人位がいる。代表格の男は俺のことを睨み続けている。

「秋！」

「雪乃、ツアン・・・と、レイか」

何故にレイまでくつついてるんだ。

「雪乃様！？なぜこのような男に・・・」

「あら、あなた誰？」

雪乃に言い寄ろうとする男子生徒だが、雪乃が一蹴した。けっこうシヨックらしい。

「必ず貴様を倒す！」

「はぁ・・・勝手に言ってる」

「「決闘<sup>デュエル</sup>!!」」





恋する乙女（前編）（後書き）

ってなわけでデュエルです今回結構デュエル成分少ないなあ・・・

頑張ろう

## 恋する乙女（中編）（前書き）

つてなわけです連続投稿です

秋「今日の最強カードは・・・『召喚僧サモンプリースト』か」

召喚僧サモンプリースト

このカードはリリースできない。

このカードは召喚・反転召喚に成功した時、守備表示になる。

1ターンに1度、手札から魔法カード1枚を捨てる事で、

自分のデッキからレベル4モンスター1体を特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターは、そのターン攻撃する事ができない。

秋「前はレスキューキャットと一緒に使われてどえらいことになったカードだな」

このカード自体レベル4で、すぐにエクシーズもできるので非常に便利。レスキューシンクロの猛威の影響か、制限にされているのが難点である

## 恋する乙女（中編）

S i d e レイ

話を聞くと、どうやらこの雪乃さんのファンの人が秋さんに怒ってデュエルを仕掛けたらしい。僕も亮様に彼女が出来てたら同じことしたかもしれない・・・

「<sup>デュエル</sup>決闘！」

ブルー生徒      L P 4 0 0 0

秋                      L P 4 0 0 0

「先攻は俺だ！ドロー！」

高らかにカードを引くブルーの生徒。話を聞くとこの学校は上からオベリスクブルー、ライエロー、オシリスレッドってことらしいけど・・・エリートの人にライエローの秋さんが勝てるのかな・・・？

「俺は手札から『魔導戦士ブレイカー』を召喚する！」

魔導戦士ブレイカー      A T K 1 6 0 0 / D E F 1 0 0 0

「そしてカウンターが乗り、攻撃力が300ポイントアップする！」

魔導戦士ブレイカー      A T K 1 6 0 0 / D E F 1 0 0 0      A T K 1

900/DEF1000

魔力カウンター 0 1

「カードを2枚伏せ、ターンエンドだ」

「・・・雪乃、確かアイツってこの学校でも上位ランカーじゃなかった？」

「そう言えばそうね・・・顔しか知らなかったわ」

可哀想に・・・上位ランカーでも雪乃さんが顔を知らなかったら意味ないんだね・・・恋していても互いが知らないと・・・って、僕も人のこと言えないの！？もしかして・・・

「俺のターン、ドロー！さて・・・と」

前見た限りだと、魔法使い族、しかもブラック・マジシャンまで使っている人だったから・・・今回も魔法使い族を・・・

「俺は手札から、『召喚僧サモンプリースト』を召喚！」

召喚僧サモンプリースト ATK800/DEF1600

魔法使い族・・・だけどあんなカード見たことがないなあ・・・僕の使っている『恋する乙女』も魔法使い族だからある程度魔法使い族を勉強しているけど・・・

「サモンプリーストの召喚に成功した時、このカードは守備表示になる。1ターンに1度、手札から魔法カード1枚を捨てる事で自分

のデッキからレベル4モンスター1体を特殊召喚する。この効果で特殊召喚したモンスターは、そのターン攻撃する事ができない」

変なカード・・・魔法カードを墓地に送ってモンスターを召喚なんて

「このカードの効果により、俺は手札の『シンクロキャンセル』を墓地へ送り、チューナーモンスター『トップ・ランナー』を召喚！」

チューナー？

トップ・ランナー ATK1100/DEF800

「あら、お早い登場ね・・・」

「そうね、合計のレベルは8・・・」

レベルの合計なんて知ってどうするんだろう・・・

「レベル4の召喚僧サモンプリーストに、レベル4のトップ・ランナーをチューニング！」

チューニング！？何それ！っていうか、トップ・ランナーって機械族のモンスター・・・！？魔法使いビートじゃないの！？

「王者の鼓動！今ここに列を成す！天地鳴動の力を見るがいい！シンクロ召喚！我が魂、『レッド・デーモンズ・ドラゴン』！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン ATK3000/DEF2500

な、なにあれ！？悪魔の龍！？というかシンクロ召喚！？なによそ

れ！

「あ、あの・・・雪乃さん!？」

「ああ・・・シンクロ召喚のこと？シンクロ召喚はチューナーと呼ばれるモンスターと、それ以外のモンスターでレベルを調節してモンスターを融合デッキから召喚する特別な召喚よ。この学園でも使っているのは秋だけね・・・」

そんな特別なカードなの!？というか、1ターンで攻撃力が3000のモンスターって・・・!

「バトルだ。レッド・デーモンズ・ドラゴンで魔導戦士ブレイカーに攻撃。『アブソリュート・パワーフォース』!」

「ぐっ・・・」

ブルー生徒 LP4000 LP2900

「この瞬間畏発動!『リビングデットの呼び声』!ブレイカーを復活させる」

「あらあら、きつと攻撃力1900で余裕をかましていたのね」

雪乃さんが言いながらブルー生徒を見る。そういえば結構余裕そうに立っていたね

魔導戦士ブレイカー ATK1600/DEF1000

「俺はカードを2枚伏せて、ターンエンド」

「俺のターンドロロー！俺は魔導戦士ブレイカーを生贄に！いでよ『デーモンの召喚』！」

デーモンの召喚 ATK2500/DEF1200

デーモンの召喚！？あの悪魔族の最高級のレアカード！というか、あの人のデッキ魔法使い族デッキじゃないの！？

「さらにデーモンの召喚に『デーモンの斧』を装備！」

デーモンの召喚 ATK2500/DEF1200 ATK3500/DEF1200

「バトルだ！デーモンの召喚でレッド・デーモンズ・ドラゴンを攻撃！『魔光雷』！」

「・・・伏せくらい警戒しろよ。速攻魔法発動！『月の書』！相手モンスター1体を裏守備表示へ変更する！」

裏守備表示になるデーモンの召喚・・・僕でも一応伏せカードは警戒するよ。

「つく！カードを1枚伏せ、ターンエンドだ！」

「俺のターンドロロー・・・ふむ、俺は手札から『強欲な壺』を発動して2枚ドロロー。さらに『愚かな埋葬』を発動してジャンク・シンクロンを墓地へ送る。『シンクロン・エクスプローラー』を召喚。このカードの召喚に成功した時、墓地から『シンクロン』と名のつくモンスターを特殊召喚する。こい『ジャンク・シンクロン』」



シンクロン・エクスペローラー ATK0 / DEF700

ジャンク・シンクロン ATK1300 / DEF500

また出て来た・・・またチューニングするのかな

「そして、このカードは墓地からモンスターを特殊召喚した時、特殊召喚できる。『ドッペル・ウォリアー』を特殊召喚！」

ドッペル・ウォリアー ATK800 / DEF800

「そしてさらに『命削りの宝札』でカードを5枚になるようにドロ・・・うん、魔法カード『ワン・フォー・ワン』を発動。手札のボルト・ヘッジホッグを墓地へ送ることで、デッキから『チューニング・サポーター』を特殊召喚する」

チューニング・サポーター ATK1000 / DEF1000

次々と出てくるモンスター達・・・でも弱いモンスターばかり。さっきのシンクロってレベルが高いのを出すのに苦労するんだね。っていうか、今さりげなく『命削りの宝札』なんて使ったけど、あれかなりのレアカードじゃなかった!?

「レベル1のチューニング・サポーター、レベル2のドッペル・ウォリアー、レベル2のシンクロン・エクスペローラーに、レベル3のジャンク・シンクロンをチューニング！」

1 + 2 + 2 + 3 = 8

「集いし願いが、新たに輝く星となる！光差す道となれ！シンクロナ召喚！飛翔せよ」スターダスト・ドラゴン』！」

ATK2500/DEF2000

その龍に、僕は目を奪われた。輝きを放つのはまさしく星屑。綺麗な輝きが周囲を包み込んだ。そして吠える咆哮がその気高さを証明していた。すごい・・・

「チューニング・サポーターの効果で1枚カードをドロウする！そしてドッペル・ウォリアーはシンクロ素材となった時、フィールドに2体のドッペル・トークンを置く」

ドッペル・トークン？ ATK400/DEF400

ドッペル・トークン？ ATK400/DEF400

フィールドには2体の龍と、2体のトークン。これで決まったのかな？でも相手の人の伏せカードは2枚あるし・・・

「秋は今日調子いいみたいね・・・」

「ええ、あのドロウしたカードも恐らく・・・」

え？何言ってるの二人とも

「俺は手札から『天よりの宝札』を発動。互いのプレイヤーはカードを6枚になるようにドロウする」

ええええええええええ！？ここでそんな最強ドロウカード引くの！？  
？というか、そのカードって高いカードじゃ・・・！？

「ま、今日は調子いいけど、今度はどうでしょうね」

「え？それってどういう？」

「秋は基本的にドロー運が凄く悪いのよ。デッキによってドロー運も違うし、本人も運よりも量だと言っててるくらいだから」

そ、そうなんだ・・・じゃああのカードを引けたのって偶然？

「そして手札から『グローアップ・バルブ』を捨て、『クイック・シンクロン』を特殊召喚」

クイック・シンクロン ATK700/DEF1400

「レベル1のドッペル・トークン2体と、レベル5のクイック・シンクロンをチューニング！」

1 + 1 + 5 = 7

「集いし叫びが、木霊の矢となり空を裂く！光差す道となれ！シンクロ召喚、いでよ『ジャンク・アーチャー』！」

ジャンク・アーチャー ATK2300/DEF2000

「そしてジャンク・アーチャーの効果！1ターンに一度、相手モンスターを一体ゲームから除外する！『デイメンション・シユート』！」

闇の中に消えていく裏守備表示のデーモンの召喚。ああやってみる

と凄く可哀想だね。悪魔族でも高いレア度を持つてるのに

「さらに、墓地のグローアップ・バルブの効果発動。デッキトップからカードを墓地へ落とし、グローアップ・バルブを特殊召喚」

グローアップ・バルブ ATK100/DEF100

「レベル7のジャンク・アーチャーとレベル1のグローアップ・バルブをチューニング！」

ま、まだするの！？もう許してあげなよ！

7 + 1 = 8

「黒き疾風よ！秘めたる想いをその翼に現出せよ！シンクロ召喚！舞いあがれ！『ブラック・フェザー・ドラゴン』！」

ブラック・フェザー・ドラゴン ATK2800/DEF1600

な、ななな・・・こんどは攻撃力2800！？なによあれ！

「・・・ああ、なるほど」

「そついで」と

何がなるほどでどういことなの！？僕に分かるように説明してよ！

「秋、かなりキレてるわね」

「でしようね・・・」

キレてるって何！？そんなに雪乃さんのこと言われるのが嫌だったの？さつきから罵声を浴びせている人はいるけれども……！

「罵声もそうでしょうけど、もう9時過ぎ……秋は睡眠を阻害されるのが何よりも嫌いなもの……ツアン、今日大丈夫？」

「……正直、大丈夫か不安ね」

ええー……そんな理由で。って、ツアンさん何が不安なの？

「貴女も気をつけなさい？秋は夜中になんか起こしたら凄く不機嫌になるから」

……ああ、すでに経験済みなんだ

「……最後に『トラップ・スタン』を発動。このターン畏は発動できない」

「な、なんだと！？」

え、えげつない……これで速攻魔法があれば何とかなるけど、多分無理だろうし。あの慌てぶりじゃ

「俺の睡眠を減らしたことを後悔しろ。あと、雪乃に手を出そうとしたこともな。全モンスターでダイレクトアタック！『シューティング・ソニック』！『アブソリュート・パワーフォース』！『ノーブルストリーム』！」

ドラゴンたちの一斉攻撃……こ、怖い。僕だったらデュエルする

のやめちゃうよ・・・

「ぎゃあああああつー！」

ブルー生徒 LP2900 LP0

合計でえーと・・・8300？なにそれ怖い

「で、次はどいつだ？」

秋さんが睨みつけると生徒たちは一目散に逃げて行った。

「お疲れさま秋」

「眠い・・・」

「まったく、困った奴らね・・・」

と、二人が秋さんのところに寄って行く。なんというか・・・あれなら他の男の人に恨まれても仕方がないような気がする。

「先に戻って着替えている。後から行く」

言われて戻る僕達。雪乃さんは自分のために戦ってくれたのが嬉しそうにしている。ツアンさんはちよつとだけ不安があるのか、それとも雪乃さんのことで気になっているのか、複雑な表情で戻って行った。

・・・あれ？僕っていた意味あった？

S i d e 秋

デュエルを終わらせ、3人の着替えが終わるのを待ってから部屋に入った。俺はいつも通りトイレで着替えを済ませると、ベッドに寝転んだ。

「ん・・・」

ベッドに入ると、その後に続くようにツァンが侵入してくる。慣れたもの・・・と言うわけでもないが、眠い・・・俺は静かに眠りに落ちた

S i d e レイ

とりあえず、僕はちょっと気になることがあったので下に降りて見た。というのも、上から

僕

—  
雪乃さん

—  
秋さん、ツァンさん

—  
って感じでベッドに寝ているので、トイレに行くフリをして下の様子を覗いてみた

「あ、秋・・・うあ・・・アンっ！」

な、ななな何をしているの！？僕は恐る恐る覗いた。そこで見たのは・・・

「秋、抱きつき、すぎ・・・」

「ん・・・ぐう・・・」

爆睡中の秋さんと、抱きつかれて顔を真っ赤にして甘い声を出しているツアンさんの姿だった。後に聞いた話だけど、秋さんは爆睡中だ何でもかんでも『握る』動作をするらしい。例えば鉛筆なんか授業中持っていたら、寝ているとグシャツと行くらしい。なので現在のその鉛筆役は分かりやすく言えばツアンさん。で、甘い声が流れているけど、あんまりうるさくすると怒るらしいのでツアンさんも思うように声を上げることができないということだ

「（ご愁傷様です）」

僕は一言心の中で呟いてから、ベッドの上に戻り、寝ることにした。明日は・・・亮さまの部屋へ・・・ぐう



恋する乙女（中編）（後書き）

書いてたら手が勝手に！

恋する乙女の話・・・めっちゃ長いです

恋する乙女（中編？）（前書き）

うーむ、何故こうなった？めっちゃ長い

雪乃「作者はロリコンね・・・今日の最強カード、『立ちはだかる強敵』ね」

通常罠

相手の攻撃宣言時に発動する事ができる。

自分フィールド上の表側表示モンスター1体を選択する。

発動ターン相手は選択したモンスターしか攻撃対象にできず、

全ての表側攻撃表示モンスターで選択したモンスターを攻撃しなければならぬ。

ってなわけで、久しぶりに怒る？秋です

デュエルはしばらくないです。ごめんなさい

## 恋する乙女（中編？）

Side秋

あー・・・今何時だ

「きゅー・・・」

「ん？」

目を回しているツアンがいた。ベッドで俺は何をしたのだろう。う  
ー・・・6時か。この時間帯なら

「（マハード、起きてる？）」

『（む、おはようございます）』

と、出てくるマハード。大体だが、精霊たち3人は出てくる時間帯、つまり寝ている時間帯が違う。深夜0時から9時にかけてはマハードが。6時くらいから10時ではミラが。で、マナは大体適当に起きたり寝たりしている。マハードはあまり活動する時もやたら出てきたりはしない

「（おはよう・・・あの、ツアンに俺なにかしたかな）」

『（・・・まあ、貴方が寝るのを落ちついてから・・・2時頃ですが、貴方の手が緩み、ツアンさんが離れようとした時、偶然にもねぞうで動いた貴方の顔が動き、唇がツアン殿の頬に当たり、混乱して気絶してしまいました）』

……なんだそれ

「まあいいや……今のうちに着替えちまおう」

机をみると、いくつかカードが目に入った。マハードだな

「(マハード、またデッキ作っていたの?)」

「(ええ、まだ出来てはいませんが……)」

デッキ内容を確認。ブラック・マジシャンを中心に回していくデッキで、要するに魔法使いビートである。アーケイン・ファイロなども見る限り、アーカナイト・マジシャンやマジック・テンペスターなんかも回す気だろうか。回れば凄いやけど事故率高くね?

「(頑張つてマハード、でも……見つからないでね?)」

「(無論です。ちゃんと結界も張っていますから)」

まあ、頑張れ。マナはマナでブラック・マジシャン・ガール専用デッキだ。というか、女の子デッキだな、これ……実体化出来るのはこの二人だけ。ミラは出来るようになるために練習中だとかなんだとか……

「さてと……」

着替え終えてからお茶を入れる。食堂のお茶はお世辞にも美味しいとは言えないので、自分の部屋で入れるのが一番いい。それにしても、出来たデッキの量がすごいことになったな……今度はどのデ

ツキを回そうか

「んう……いい匂い……」

「ん？レイが起きたか……気を付けるレイ。階段滑るぞ」

「んー……キヤア!？」

俺が注意した瞬間に階段を踏み外して落ちるレイ。あ、フラグだったか？今の発言。ベッドの近くにいたので何とかキヤツチ。俗に言うお姫様抱っこであるのだが……軽いな。上から落ちてくるのを受け止められるのって……

「はうえ!？」

「ったく……気を付けるって言っただろ」

レイを降ろし、ため息。最近はため息が多い気がする。

「い、ごめんなさい」

「よろしい。お茶でも飲むか？」

「い、いただきます……」

お茶を入れてやる俺。そういえば……こいつのデッキってアニメオリジナルのカードが殆どなんだよな。ちよっと興味ある。

「レイ、デッキ見せて見る」

「は、はい・・・」

デッキを借りる代わりにお茶を渡す。苦いというが・・・やはり子供か？この程度で根を上げると大人になったら大変だぞ。ふむ・・・『恋する乙女』ねえ。攻撃表示の限り破壊はされないって・・・この攻撃力で？

「あ、あの・・・」

「ん？」

「僕のデッキ・・・ど、どう？」

何を期待しているのかはよく分からんが・・・正直酷いデッキだな。これでよく勝てるな。確か実技とかも突破してここに来たんだろ？戦った奴の実力を是非とも知りたい。まあ、酷いなんて言ったら小学生だし・・・泣くだろうな。ふむ、ちょっと遊星っぽく言ってみるか？

「お前のデッキは・・・そうだな。ちょっと自分勝手すぎる」

「え・・・」

あ、これでも駄目か。ちょっと自分でもやっちゃまった感があるな。まあ、アドバイス位してやるか。

「恋する乙女を中心に回すデッキだが・・・低級モンスター相手ならまだ耐えられるだろうが上級モンスターなんか出されたら瞬殺だろうな。コントロール奪取を中心にしたというデッキならもっとやり方もある。このデッキは結局どうしたいのかわからん」

落ち込むレイ。ふむ・・・

「コントロール奪取をしながら相手にダメージを与えるなら簡単だ。ちなみに聞くぞ、レイ」

「な、なに？」

「お前は勝ちたいデッキを作っているのか、それとも恋する乙女を出しただけのデッキなのか？」

この一言で黙り込むレイ。そりゃ今まで恋する乙女でのデッキが強いと思つてたなら仕方がないだろう。

「ま、応援だけしてやる。頑張れ」

さて、そろそろあいつら起こさないと・・・学校に遅刻する。

「ツアン、起きろ」

「きゅー・・・」

駄目だこりゃ。後にするか

「雪乃、起きろ」

「んう・・・んっ」

「ほら、もう朝だ・・・いい加減にしろ」

揺すると眠そうに眼を開ける雪乃。昨日はそんなに疲れてたのか？

「おはよう、雪乃」

「おはよう・・・んう」

抱きついてくる雪乃ちよつと待て！ここ2段目だ！落ちる落ちる！

「わかったから離れて雪乃。俺が落ちる」

「いじわる・・・」

ぽつりと呟く雪乃。俺は階段を降りて再びツアンのところへ

「ツアン、ツアン・・・ほら、起きろ！」

「あう・・・大きな声出さないでよ・・・しゅ、う・・・！？」

ツアンが飛び上がって起きる。やれやれ

「俺は先に食堂にいるから。お前らも自分の寮で食事とれよ。行くぞレイ」

「は、はい！」

既に着替え終えたレイを連れ、食堂に向かう俺達。相変わらずメニューひどいなここ。イエロー寮まで行っていいけど・・・面倒だからなあ

「・・・」



「どうしたレイ」

「えっと・・・」

飯の量が少ないと言いたげである。小学生は育ち盛りだからな・・・  
仕方がない

「俺のやるから喰え」

「え、でも秋さんは・・・」

「面倒だがイエロー寮で喰う。飯食い終わったら教室で待っている。  
鍵は渡しておく」

言いながらイエロー寮へ。相変わらず視線が痛い。最近は雪乃たちの  
のこともあってか、殺気が増えた気がする。まあ、気にすることは  
まったくないのだが。

「秋じゃないか、おはよう」

「三沢じゃん。おはよう」

「・・・珍しいな、秋がここにいるなんて」

「色々あってな」

言いながら食券で食事をもらう俺。

「そついえば三沢、十代対策デッキってできたのか？」

「ああ、7番目のデッキのことか。もちろんだ。8番目のお前の対策デッキも・・・といたいところだが、秋、お前はデッキをコロコロ変えるからな。正直対策の取りようがない」

「まあな」

俺がデッキを色々回す一つの理由でもある。特定の研究をされてアンチを組まれると面倒くさいからだ。三沢なんかがいい例だが、何度か実習で戦った生徒はアンチシンクロとして特殊召喚を良く封じてくるのだが、普通にそれを予測して先に天使デッキでこちらから特殊召喚を封じたりなんかもしている。別に特殊召喚できなくても負けるわけではないからな。食事を終え、荷物を持ってアカデミアへ向かう。教室に入ると既にレイがちゃんと座って待っていた。

「よう、早いな」

「う、うん・・・ちゃんと早かったよ」

あの二人はいつも遅いからな。気にしないでおう

1日の授業が終わってから、レイがどっかにいった。あの餓鬼どこ行きやがった・・・鍵はあいつに渡しっぱなしなんだぞ。しようがないな・・・雪乃とツアンを探そう。PDAを取り出し、呼びだす・・・

『あら、秋？どうかした？』

「俺の部屋の鍵は持ってるか？」

『ええ、持っているわ。ああ、レイに持たせたままなの？』

「ああ、そのレイがどこかに行つたから、雪乃は今どこだ？」

『自分の寮よ。そろそろ洗濯物も溜まつてきたし。洗つておかないと』

まあ、着替えの大半を俺の部屋に置いてるもんな。別にちゃんと片付けておいてくれるならいいんだけどさ。

「わかつた、寮の前まで行くからよろしく」

『ええ』

女子寮は男子禁制だからな。入ることはできないし……とりあえず寮へ行くか

S i d e l e i

僕は今亮様の部屋に侵入している。侵入と言うか……その、デッキケースに僕の髪留めを入れようというもの。すると秋さんと仲良くしている生徒の人が慌てて亮様の部屋に入ってきた。

「おい！そんなことしたらノース校のスパイと勘違いされるぜ！」

「なっ……僕はスパイなんかじゃない！」

逃げようとした瞬間にデッキをばらまき、髪留めを落としてしまった。そして走つた勢いで帽子が取れる。

「レイ・・・お前！」

「つく！」

僕はとにかく無我夢中で走る。とにかくこの場を離れなければと、走る。まずい要項1女だとばれた。まずい要項2デッキに髪留めを入れることなく、その辺に落としてしまった。部屋に落としたのは間違えなくても、亮様の目に留まることはない。急いでレッド寮まで逃げ込んだ。あれ？部屋空いてるや・・・

「っ・・・！」

「お帰りレイ、遅かったな」

ニコニコと笑っている秋さんがいた。い、今の僕ならすっかりわかる。秋さん怒ってる。すごーく怒っている。

「しゅ、秋さん？」

「レイ、お・そ・かつ・た・な？」

そ、そういえば・・・鍵・・・渡されっぱなしだった。

「あ・・・もしかしなくても、怒ってます？」

「怒るなんてもんじゃないわ！わざわざ雪乃のところに鍵を取り行ったら委員長に見つかって説教喰らうわ、雪乃が洗濯してるのが俺の下着や服でそれが鮎川先生に見つかって問い詰められるわ！どんだけ俺が怒られたと思ってやがる！」

ひいひいひいっ！修羅が！目の前に修羅がいるううう！僕は涙目になりながらも必死に謝って許してもらった。とりあえず、どうしよう・・・十代・・・だったよね、あの人にばれちゃったんだけど・・・

「あの、秋さん？」

「あ？」

「ひいっ！ごめんなさい！」

「別に怒ってない。なんだ」

とりあえず。事情説明。その説明後ため息をついてから秋さんは僕に拳骨を喰らわせてきた。い、痛い・・・

「面倒事持ち込みがって・・・」

どこか不機嫌な秋さん。まあ、原因は僕なんだけども・・・

「そして十代か・・・ふむ」

考えてる秋さん。どうしたんだろう？

S i d e 秋

すっかり忘れてたな、このイベント・・・どうしたもんか

『(マスターどうしたのー?)』

起きてたか、マナ。あれ？ミラは？

『ミラちゃんはただいま修行中です』

なるほど・・・じゃあマナに頼むか

「(マナ、ちょっと十代探してきて。呼ばなくていいからどこにいるかだけでいいや)」

『(はいはい！行ってきまーす！)』

そう言って出ていくマナ。さて、このまま十代に面倒を押しつけるというのも悪くないな。そもそも、この子が惚れるのは十代だ。なら全部十代に任せるか。

「レイ」

「は、はい」

「とりあえず十代と話をしてこい」

「ええ！？なんで!?!」

驚くレイ。どうやら俺に何とかしてもらいたかったらしい

『(マスター！十代君がマスターの部屋に向かってきてるよー)』

お、ナイスタイミングだな。

「秋ー！いるかー？」

「丁度いい、十代が来た」

「え……」

そ、そんな子犬みたいな目で俺を見るな！つく！下手に介入したせいで変な方向に話が向かって行こうとしている！

「秋ー！いるんだろー？」

「……」

だー！もう！

「ああ、ちょっと待ってる」

俺は手でトイレ辺りにでも隠れるように促し、ドアを開ける。

「よっ」

「どうかしたか？こんな時間に」

「ああ、レイいるか？ちょっと話をしたいんだが……」

やれやれ……

「いや、まだ帰ってきてないな。どうかしたのか？」

「い、いや・・・なんでもない。そっか、帰ってきてないか・・・」  
と、考える十代。ま、別にいいけど

「あら、十代の坊やじゃない」

「お、雪乃とツアン。おっす」

雪乃が帰ってきた。後ろにはツアンもいるところを見ると風呂上りか。レイはさつき水浴びさせて来たからいいとして・・・

「どうかしたの？こんな時間に」

「ああ、レイにちょっと用事があったな」

俺が二人にアイコンタクトを送る。理由を理解した雪乃が小さく頷いていた。

「そうなの・・・十代の坊や、もうこんな時間だし、明日にしたら？」

「それもそうだな・・・悪かった。またな秋！」

「おっ」

十代は自分たちの部屋へと戻って行く。そして部屋に入る二人。

「レイ、もういいぞ」

「・・・」



「ばれちゃったのね？」

「っ……!」

雪乃の一言に、ビクリと身体を震わせるレイ

「ばれた以上、覚悟を決めなさいな？レイ」

「そ、それってどうゆう？」

レイが疑問を抱く中、雪乃がPDAを取りだした。

『こんな時間にどうした、藤原雪乃』

「あらカイザー……こんな時間でも連絡したら駄目なのかしら？」

「カツ!？」

慌てて自分で自分の口を塞ぐレイ。だが雪乃は気にせず会話を進める

「ちょっと貴方に会わせたい子がいるのだけど、今どこかしら？」

『灯台だ』

「そう、なら今から行くわ。ちょっと待ってて頂戴」

そう言ってPDAを切る雪乃。

「さて、舞台は作って上げたわよ」

「ゆ、雪乃さん!？」

「あら、当初の目的はなんだったかしら？」

「あう・・・」

こうしてレイはまた物語と違った形でカイザーに告白することになりそうである。

恋する乙女（中編？）（後書き）

さあ、告白フェイズです

頑張れレイ！負けるなレイ！

・・・まあ、結果は次回

恋する乙女（中編？）（前書き）

つてなわけで連続（ry

だいが長いですね、恋する乙女・・・

秋「今日の最強カードは・・・『恋文』？」

通常魔法

自分フィールド上にモンスターが存在し、魔法・罠カードゾーンにカードがセットされている時に発動可能。

次の効果から相手が1つを選択して発動する。

相手は自分フィールド上のモンスター1体のコントロールを得る。

自分の魔法＆罠カードゾーンのカード1枚を相手のコントロールに移し、相手の魔法＆罠カードゾーンにセットする。

・・・今時下駄箱にラブレター入れる人っているのだろうか

秋「いや、いないだろ」

恋する乙女（中編？）

S i d e 秋

と言っわけでやってきました灯台部！灯台部とは亮、明日香、吹雪の3人からなる部活である！って、誰に説明してんだ俺は。とりあえず灯台のところに来ると、亮と明日香がいた。

「遅くに悪いわね、カイザー」

「いや、別にいい・・・それで？俺に用があるというのは・・・」

視線はレイに行く。レイは髪の毛をおろしている。ま、帽子だと微妙に女の子だと分からなくなるからな。

「あ、あの！亮様！」

「う、うむ・・・なんだ？」

勢いあるレイのアタックに少々たじたじのカイザー・・・見てて非常に面白い。

「わ、わ・・・私！亮様に会うためにこの学園に来たの！」

「それでは・・・これは君のか」

手にあるのはレイの髪留めか。仕込もうとして落としてきたんだな。

「私・・・亮様が好きです！それはその証・・・その、それをそのまま受け取ってください！」

レイが頭を下げる。カイザーは俺との戦いで少しは言動を改めたと思明日香が言っていたが・・・本当だろうか？大丈夫かな。決闘が全てみたいなことを・・・

「……レイ、お前の気持ちは嬉しい。だが、今の俺には決闘デュエルが全てなんだ」

一語一句同じじゃねーかあああ！まさかのかよおお！どこが言動を改めるようになったんだよ明日香あ！泣きだすレイ。亮は髪留めをレイに握らせ、そのまま立ち去ろうとする

ブチっ

その時・・・・・・・・・・どっかで聞こえた擬音が、俺の隣で聞こえた気がした。

Side 明日香

あーあ、やっぱり断っちゃったか。まあ、亮ならそう答えてしまうでしょうね。泣きだす女の子。確かレイって名前だったわね。レイちゃんはその場でポロポロと涙をこぼす。亮が立ち去ろうとした瞬間、寒気がした。寒気と言うか、むしろ殺気かしらね。

「待ちなさいなカイザー」

そしてその殺気の発信源は私の大切な友人の一人、雪乃だった。

「なんだ？」

「その前に秋・・・今くらいレイに肩を貸してあげなさい」

「・・・ああ」

秋も気迫に押されながら頷き、レイを呼び寄せる。レイは秋のところですすり泣いている。それを確認してから、雪乃は強い視線を亮にぶつけた

「さて、カイザー？随分とまあ・・・デリカシーのない言葉を並べてくれたわね」

「何の、話だ？」

こわい・・・正直な感想だった。雪乃が怖い。ここまで怒った雪乃を見たのはそう・・・秋や十代、翔君の退学騒動の時代以来だわ。

「真剣に告白してきた女の子に対してその返事はなんなのかしら？『気持ち嬉しい』？『決闘がすべて』？随分とふざけたことを言っているものね。帝王<sup>カイザー</sup>なんて呼ばれて傲慢になってるんじゃないかしら？」

「なんだと・・・」

亮も雪乃を睨むけれど、雪乃の方が断然怖い。

「決闘がすべてだなんて・・・興味ないと言っているのと同じよ？その辺分かっているの？」

「そう言う意味ではない！」

「ならどういう意味？そう言う意味でないならこの言葉は出ないわ。それとも小学生だから？子供だからちゃんと女性として扱う必要がないとでも思ってるの？随分とお偉いことね」

とうとう雪乃の言葉に何も言えない亮。すると雪乃はそれを鼻で笑っていた。

「黙ってれば終わるとでも思ってた」「雪乃」あら？」

秋が呼ぶ。秋も言葉を発していなくても、目で何かを合図していた。

「……カイザー……今日は秋に免じて許してあげるわ。自分の愚行をちゃんと考えることね」

「………すまない」

そう言って去って行く亮。一体何に対しての謝罪だったのかしら

「はぁ……疲れたわ」

「まったく、雪乃は……」

「しかたがないでしょ？許せないもの」

私の言葉に、今だ怒りが籠ってる雪乃。どうやら相当怒っているようだ。



「明日香もまだまだね・・・決闘だけじゃなくて、女としても磨きなさいな。じゃないとカイザーみたいになっちゃうわよ?」

「なっ・・・わ、私にだって・・・気になる人くらい・・・」

「あらあ・・・興味あるわね」

し、しまったあああ!

「じつくりその辺のこと」わ、私も戻るわ!じゃあね、雪乃、ツァン、秋!」

私も走つてその場を離脱する。最後に雪乃から「自分の恋に気が付きなさい」と言われた気がした。私の恋?私は誰が好きだったのかしら・・・思い浮かぶ男性・・・兄さん・・・?ううん違う・・・

『ガツチャ!楽しいデュエルだったぜ!』

「っ・・・!」

なんで十代の顔が浮かんだのかしら・・・

## S i d e 秋

やれやれ・・・雪乃が怒ってる途中でレイが俺に目でやめさせてくれと訴えていたので中断させたが・・・はあ、まだ泣きっぱなしか。くつつきながら歩かれるので諦めて抱っこして上げた。もちろん普通の抱っこである。

「雪乃、ありがとう」

「あら、ツァン・・・私何かした？」

「私、多分雪乃がなんとかしなかったらカイザーをぶん殴ってたわ」

こ、こええ！ツァンのパンチの威力は知れてるしな・・・って、あれ？

「レイ？」

「スー・・・スー・・・」

寝ちゃってるよ。泣き疲れたのかな？部屋へ戻り、レイを降ろそうとする・・・が

「離れない・・・」

頑張つて引つpegがそうとするが、がちり服を掴んでるせいで取れない。取れないって言い方はおかしいか。離れない。とりあえず上着を脱いで、どうしたもんか・・・

「いいわ秋、一緒に寝てあげなさい」

「え？」

「その方がいいわ。傷ついた乙女の心を癒してあげて」

「でも雪乃！」

ツアンが不服そうな顔をする。逆に雪乃はやれやれとため息をつく

「この子の傷を治してあげるのはこれが一番よ。それに、私だって今日は秋と寝られないのだから・・・仕方がないでしょう?」

「むー・・・」

ちよつと納得できないようだが、しびしびと自分の寝る場所へ戻って行つた。

「おやすみ二人とも」

「ええ、お休み秋」

「・・・おやすみ」

お休み雪乃、お休みツアン、そしてお休みレイ・・・どうかいい夢を

S i d e レイ

んう・・・あれ?僕、どうしたんっけ・・・いつの間に寝ちゃったんだろ。鳥の鳴き声が聞こえるってことはもう朝だよな?起きないと・・・

「ん・・・」

う、動けないっ!なんで!??って秋さん!なんで!??どうして!??  
なんで僕秋さんと一緒に・・・あ、思い出した

「昨日僕、フラれちゃったんだ」

亮様にフラれてから、秋さんに抱きついて泣いて・・・抱っこしてもらって・・・もしかして僕、そのまま寝ちゃったの？そういえば服もそのままだ。秋さんも上着は脱いでるけど・・・はうつ！？なんか苦しいっ・・・って！秋さん！なんでそんな・・・顔近い！顔近いってば！

「よい、しよっ！」

腕は離れないけど、逆に頭をがっちりつかまれる。いたたたた！これをツアンさん絶えてたの！？絶対僕じゃ無理だよ！あうっ・・・なんとか弱まった。でも、温かい・・・しかも気持ちい・・・ふみや・・・眠いや・・・もうちょっと寝ても・・・いいよね？お休み秋さん

・・・

ん・・・あ、そうだ、僕秋さんのところで二度寝を・・・って！まだ寝てる！？これじゃあ助けも呼べないよ！でもやっぱり気持ちい・・・ちよつと自分から抱きついてみたり・・・あ、気持ちい。温かいし、ぽかぽかする・・・うん、もう少しこのままでも・・・

「・・・レイ？起きてるのね？」

襟首を掴まれた。つて、ツアンさん!?

「レイ、起きているなら言ってくれば起こしてあげたわよ?」

「あ、あの・・・その・・・」

お、怒ってるううう! ツアンさんが怒ってる! つてあれ? 離された

「ま、いいわ。小学生相手に僕も大人げないわね。もう少し寝てなさい」

と、元のところに引き戻された。秋さんはいなくなった僕(抱き枕)を探しているようだった。僕が近づくと僕を再び引き寄せ、安堵の声を漏らす。ふあ・・・は、恥ずかしい・・・でも、嬉しいかも

「んん・・・?」

あ、秋さん目が覚めたのかな

「ふあ・・・眠い・・・ああ、そうだった。レイ? 起きてるのか?」

「あ・・・おはよう、ごいいます」

言いながら離してくれる秋さん。ちょっと寂しい・・・かも

「おはようツアン、どうした?」

「な、なんでもないわよっ・・・」

「嘘だな、どうかしたか?」

すごい、一発で不機嫌だつて見抜いちゃった。普通ならあまり気づかないような気もするけど……

「……ん」

無言で抱きつくツアンさん……ちょっと羨ましいかも。あれ？僕なんで羨ましいなんて思ってるんだらう

「ったく……あれ？雪乃はどうした？まだ寝てるのか？」

寝てるってもう10時だよ？休日とはいえそれはないんじゃない？

「雪乃なら一度寮へシャワーを浴びに行ったわ。すぐ戻るって」

「そうか……さて、腹が減ったな。雪乃が戻ったら飯に行くか」

「うん……僕もお腹すいたわ」

そういえば、僕もお腹すいたな……昨日あんなに泣いたからか、すぐくお腹がすいてる。

「俺はちよつと外で体操でもしてるから、そのうちにレイ。着替え  
ておけよ」

「は、はい」

そうだった、着替えないと駄目だよな。秋さんは部屋を出て行った。さて、着替え着替え……

S i d e 秋

「ふぁ……」

眠い。寮の前で軽く体操する俺。随分身体がだるい。最近しよつちゆうだな。なんでだろうか……。何かに引っ張られる。そんな感じだ……

お願い、彼を……。スクツテ

あの夢は、いつたい……

回想

また、ここか……。俺は森の中を歩く。ここはどこなのだろうか？

また、会いましたね……

同じ声だ。こいつは……。武藤秋の所にいた

「お前は確か、武藤秋のところにいる奴だな。姿を見せたらどうだ」

それはできません

「できない？」

私が、まだ不完全だから・・・

不完全？どうということだ？

灼熱の業火にその身を焼かれ、主と離れてしまった

灼熱の業火？主と離れる？こいつ、まさか・・・

「お前はもしかして・・・武藤秋がいじめられているときに  
焼かれたカードの、精霊か？」

・・・

光は何も答えない。しょうがないな。だが、精霊がいるというこの  
森。後に5D'sでも出てくるこの森・・・まさか？

「ここは精霊界か？」

・・・はい

つまり、今俺の精神は精霊界へ引っ張られているということか。

「じゃあ武藤秋はこの精霊界にいるのか？」

そうです、私が彼をここで守っています

「なら武藤秋の身体に俺を憑依させたのもお前か」

それは違います



なに？武藤秋の精神を知りながら『俺』を知らないというのは一体  
どういうことなんだ？ではなぜ、俺はこの世界に……？

貴方は……もっと別の……

光が段々と薄れていく。いったいどういうことだ！？

「おい！待て……！」

時間がない……お願い、彼を救ってあげて

救うだと！？俺はこの精霊界ではアイツに触ることすら敵わなかつ  
たんだぞ！？一体どうやってアイツを救えというんだ！

お願い、彼を……スクツテ

そこで俺の意識は途切れた。

回想終了

「……俺をこの世界に呼んだ人物と、武藤秋を精霊界に引きずり  
込んだのが別の人物だと……？どういうことなんだ……」

訳が分からない。なぜそうなっているのか。何故そんなことになっ  
たのか……はあ。考えるのをやめよう。もしかた精霊界へ行くこ  
とが出来たなら……武藤秋と対話してみるのも悪くないかもしれ  
ない

「お！秋！おーす！」

「ん？十代か・・・おはよう」

十代がやってきた。そういえばレイのこと解決した？んだと思うのだが・・・どうしたもんかな。こいつのことだからまたしつこく聞いてくるんだろう

「なあ、今部屋にレイは・・・」いるけどツアンが着替え中だ」  
「そうか」

こいつも雪乃とツアンが部屋にいるのは知ってるからな。

「それと、レイの件ならもう解決した。無理にお前が首突っ込まなくていいぞ」

「へ？もしかしてレイのこと知ってたのか？」

「同じ部屋の人間だぞ。大体のことは把握してるつもりだ。だからこれ以上お前がひっかきまわさなくてもいいということだ」

「なんか引つ掛かるな・・・それに俺も気になるし・・・よし！俺と決闘デュエルだ！」

・・・どうしてそうなった？

「俺が勝ったらレイの訳を教えてもらっぜ！」

「俺が勝ったらどうするんだ？」

「……うーん、よし！5日分飯を奢る！」

ほう……言っただな十代。その言葉よく覚えておくぞ

「いいだろう。デッキ取ってこい」

「おう！」

俺も部屋に戻る。一応レイは着替え終えてるようだし、しょうがない、HEROデッキで勝負してやるか。

「あれ？秋さんまた決闘するんですか？」

「……ああ、お前のせいだな」

「ええ！？僕のせい！？なんですか!?!」

「もしかして十代？」

ツァンの言葉に頷くと、ツァンはため息をつく

「ま、頑張つて」

外へ出ると、既に準備万端の十代。

「よっしゃ！行くぜ秋！」

「ああ、行くぞ！」

「  
「  
決闘<sup>デュエル</sup>！！  
」  
」

恋する乙女（中編？）（後書き）

ってなわけで久しぶりの十代とのデュエルです

今回はようやくデュエルだ・・・はふう

恋する乙女（中編？）（前書き）

つてこと（ry

秋「今日の最強カードは・・・『E・HEROアブソルトZero  
』か」

E・HEROアブソルトZero

「HERO」と名のついたモンスター+水属性モンスター

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードの攻撃力は、フィールド上に表側表示で存在する「E・HERO アブソルトZero」以外の水属性モンスターの数×500ポイントアップする。このカードがフィールド上から離れた時、相手フィールド上に存在するモンスターを全て破壊する。

・・・どうしてこのカードは制限にならないんでしょうね

秋「まったくだ。融合でアブゼロを出し、さらに融合してアブゼロを出してぶっ放す。もしくはジ・アースなどで吸収してぶっ放すなどが代表的だな」

まあ、私はHEROデッキは全てHEROはピン刺しです

## 恋する乙女（中編？）

Sideレイ

なんというか、僕のせいで秋さんが十代さんとデュエルすることに・  
・だ、大丈夫かな。確かシンクロデッキに唯一勝ってる人が十代  
さんだってツアンさんから聞いたけど

「あら、どうしたの？」

雪乃さんが戻ってきた。ツアンさんが事情を説明すると、深く雪乃  
さんがため息をつく

「十代の坊やにも困ったものね・・・真っ直ぐなのはいいことなの  
だけけど」

「<sup>デュエル</sup>決闘！」

<sup>デュエル</sup>決闘が始まった。

秋	LP4000
十代	LP4000

「俺のターンドロー！俺は手札から『E・HEROクレイマン』を  
守備表示で召喚！」

E・HEROクレイマン ATK800/DEF2000

「カードを2枚伏せてターンエンドだ！」

「俺のターンドロォー……ふむ、俺は手札から『E・HEROエアーマン』を召喚！」

E・HEROエアーマン ATK1800/DEF300

「な、なんだそのHERO!?見たことないHEROだぞ!?!」

た、確かに……レベル4のHEROってあんなに強くなかった気が……

「エアーマンの効果。このカードが召喚に成功した時、デッキから『HERO』と名のつくモンスターを1体手札に加える。俺は『E・HEROオーシャン』を加える」

「ま、また知らないHEROだ……」

ほ、ほんとだよ……そのHEROはどんな効果なんだろう。

「そして『融合』!手札に加えたオーシャンとフィールドのエアーマンを融合する!現れる『E・HEROアブソルートZero』!」

E・HEROアブソルートZero ATK2500/DEF2000

「す、すげえ……」

確かに凄い。氷を纏ったHERO……



「こいつは水属性とHEROと名のついたモンスターで融合が可能な特別なHEROの一体だ」

「属性とHEROの融合！？そんなHEROが・・・いや、秋なら持っている感じだな」

ええええええ！？何その納得条件・・・まあ、別にいいけど

「バトル！クレイマンに攻撃だ！『瞬間氷結』！」

吹雪が巻き起こり、クレイマンが凍りついた。そしてはじけ飛ぶ。

「ぐっ・・・この瞬間暴発動！『ヒーロー・シグナル』！デッキからE・HEROを呼ぶ！俺が呼ぶのは『E・HEROスパークマン』！」

E・HEROスパークマン ATK1600/DEF1400

「ならば、カードを2枚伏せて、ターンエンド」

「俺のターンドロー！俺は手札から『強欲な壺』を発動して2枚ドロ！よし、俺は手札から融合を発動！手札のエッジマンとワールドのスパークマンを融合！現れる、『E・HEROプラズマヴァイスマン』！」

現れるのはスパークマンがなんかこう・・・筋肉質？になった姿。そしてこれでアブソルートZeroってモンスターを上回った・・・

「そしてプラズマヴァイスマンの効果！手札を1枚捨てることで、

相手フィールド上のモンスターを1体破壊する！」

「ならば速攻魔法発動！『マスク・チェンジ』！自分フィールドのHEROを対象に、融合デッキからM・HEROを特殊召喚！」

M・HERO！？なにそれ、聞いたことないんだけど！

「行くぞ、アブソルートZero！変身！『M・HEROヴェイパー』！」

へ、変身！？融合じゃなくて！？現れるのは水という漢字が顔のマスクについたHERO。攻撃力は・・・え！？2400!？

M・HEROヴェイパー ATK2400/DEF2000

「つく！外したか、なら・・・墓地のアブソルートZeroの効果発動！」何っ!？

「このカードがフィールドを離れた時、相手モンスターを全て破壊する！」

「なんだって!?!うわっ!」

凍りつき、砕け散るプラズマヴァイスマン・・・な、なんてでたらめな効果なんだろう

「だ、だったら・・・『E・HEROワイルドマン』を守備表示で召喚。ターンエンド」

せっかくの上級モンスターが破壊されてたじたじの十代さん。

E・HEROワイルドマン ATK1500/DEF1600

「俺のターン！ドロー……！俺は手札から『融合回収』を発動！  
墓地のエアーマンと融合を手札に加える！そして『E・HEROエ  
アーマン』を再び召喚！」

E・HEROエアーマン ATK1800/DEF300

「そして効果発動！HEROを1体加える！俺が加えるのは『E・  
HEROザ・ヒート』！さらに融合を発動！手札のザ・ヒートとフ  
イルドのエアーマンを融合！現れる『E・HEROノヴァマスタ  
ー』！」

E・HEROノヴァマスター ATK2600/DEF2100

「こいつは炎のモンスターとHEROで融合できる」

「すげえ……すげえよ！新しいHERO！最高にワクワクするぜ  
！」

こ、この状況でワクワクって……十代さんってどこまでデュエル  
大好きなの？

「バトル！ヴェイパーでワイルドマンを攻撃！『フリーアテイクエク  
スプロージョン』！」

「畏発動！『ヒーロー・バリア』！E・HEROへの攻撃を1度だ  
け無効にする！」

「ならばノヴァマスターで攻撃だ！『灼熱烈波』！」

破壊されるワイルドマン・・・すごい、これが秋さんのHEROデッキ・・・

「そしてノヴァマスターの効果！モンスターを破壊した時、カードを1枚ドローする！俺はカードを1枚伏せてターンエンド！」

「俺のターン！ドロー！俺は『E・HEROバブルマン』を守備表示で召喚！」

E・HEROバブルマン ATK800/DEF1200

「っち」

え？秋さんが舌打ちした・・・どうして？

「バブルマンの効果発動！バブルマンの召喚時、他にカードがない場合カードを2枚ドローする！」

な、なるほど・・・ドロー強化のカードなんだ。

「いよっしゃあ！俺は『融合回収』を発動する！対象はスパークマンと融合だ！そして『戦士の生還』を発動！墓地のクレイマンを手札に戻し、融合！俺は『E・HEROマッド・ボールマン』を召喚！」

E・HEROマッド・ボールマン ATK1900/DEF3000

しゅ、守備力3000！これじゃノヴァマスターでもヴェイパーで

も超えられない！

「ターンエンド！」

「面倒なカード出してくれたな・・・俺のターンドロー！これでターンエンドだ」

やっぱり守備力3000は容易じゃない。どうするつもりだろう

「俺のターンドロー！俺はスパークマンを召喚！」

E・HEROスパークマン ATK1600/DEF1400

「さらにフィールド魔法『摩天楼 - スカイスクレイパー -』を発動！」

フィールドがビル群に覆われていく。確かこのフィールド魔法の効果って・・・

「マッド・ボールマンを攻撃表示に変更してバトル！スパークマンでヴェイパーに攻撃！『スパーク・フラッシュ』！」

E・HEROスパークマン ATK1600/DEF1400 A  
TK2600/DEF1400

E・HEROマッド・ボールマン ATK1900/DEF3000  
0 ATK2900/DEF3000

「つく・・・！」

秋 LP4000 LP3800

「そしてマッド・ボールマンでノヴァマスターに攻撃だ！」

秋 LP3800 LP3500

互いにダメージ0だったのに、あの状況をひっくり返すなんて・・・

「カードを1枚伏せてターンエンド！」

「つく・・・俺のターンドロ！・・・俺は手札から『E・HEROフォレストマン』を守備表示で召喚し、ターンエンドだ」

E・HEROフォレストマン ATK1000/DEF2000

「俺のターン、ドロ！俺は手札から『ヒーロー・マスク』を発動！デッキから『ネクロダークマン』を墓地へ送ることで、スパークマンをこのターンネクロダークマンとして扱う。マッド・ボールマンを守備表示にしてターンエンド」

え？今の行為って何か意味があったのかな・・・

「俺ターンドロ・・・スタンバイフェイズ、フォレストマンの効果で俺はデッキ、または墓地から『融合』を手札に加えることができる。墓地から融合を加えよう」

「な、なに!？」

すごく便利な効果・・・守備力は2000だし、それは頼もしい効果かも

「そして俺も『戦士の生還』を発動。エアーマンを再び手札に戻し、エアーマンを召喚！」

ま、また出てきた・・・エアーマン。

「効果により、俺はE・HEROネクロダークマンを手札へ加える。そして『融合』！エアーマンとネクロダークマンを融合！現れる、

『E・HERO Great TORNADO』！」

E・HERO Great TORNADO ATK2800/DEF2200

今度は風のHERO・・・でも、これじゃあマッド・ボールマンを超えられない・・・

「Great TORNADOの効果発動！このカードの召喚成功時、相手のモンスターは全て攻守が半分になる！」タウン・バース

ト

E・HEROマッド・ボールマン ATK1900/DEF300  
0 ATK950/DEF1500

E・HEROスパークマン ATK1600/DEF140  
0 ATK800/DEF700

「なっ・・・これじゃあ！」

「バトル！Great TORNADOでマッド・ボールマンを攻撃！『スーパースェル』！」

突風が吹き荒れ、マッド・ボールマンは竜巻に消えてしまった。

「カードを1枚伏せ、ターンエンド」

「俺のターンドロー！『死者蘇生』発動！エッジマンを召喚蘇生！」

E・HEROエッジマン ATK2600/DEF1800

「なに？どうするつもりだ・・・」

ほんと、攻撃力ではGreat TORNADOの方が上だよ？  
一体何を・・・

「さらに罫発動！『エッジ・ハンマー』！」

エッジ・ハンマー！？エッジマンの専用カードってこと！？

「エッジ・ハンマーは自分フィールド上に存在する「E・HERO  
エッジマン」1体を生け贄に捧げることで、相手フィールド上に  
存在するモンスター1体を破壊し、そのモンスターの元々の攻撃力  
分のダメージを相手ライフに与える！俺はGreat TORNADO  
DOを選択！」

破壊されるGreat TORNADO・・・これじゃあ秋さんの  
ライフは・・・！

秋 LP3500 LP700

「ターンエンドだ」



「俺のターンンドロー！スタンバイフェイズ、フォレストマンの効果で融合を手札へ加える。さらに手札から『ホープ・オブ・フィフス』を発動する！墓地のアブソルトZero、Great TORN ADO、ノヴァマスター、エアーマン、オーシャンをデッキへ戻しシャッフル！そしてカードを2枚ドローする！」

デッキへ戻ったのは実質2枚のカード。そして2枚ドローする・・・ここからどうする気だろう。

「俺は手札の『融合』を発動！手札の『E・HEROバブルマン』とフィールドの『E・HEROフォレストマン』を融合！現れる、『E・HEROアブソルトZero』！」

ま、また出てきた！しかも十代さんの場にはスパークマンだけ！これなら・・・

「アブソルトZeroでスパークマンに攻撃！『瞬間凍結』！」

十代 LP4000 LP2300

「カードを1枚伏せてターンエンド！」

「俺のターンンドロー！俺は『ホープ・オブ・フィフス』を発動！墓地のプラズマヴァイスマン、エッジマン、マッド・ボールマン、スパークマン、クレイマンをデッキへ戻しカードを2枚ドロー！」

この局面でそのカード引くなんてすごい・・・

「いよつし！秋、お前のカードを使わせてもらうぜ！カードを1枚伏せてから『命削りの宝札』を発動！手札が5枚になるようにドロー！」

「して、5ターン後に全て捨てる！」

うわぁ・・・なんとというドロ運。秋さんの顔が若干引き攣っている。渡さなきゃよかったみたいな感じの顔だね。

「さらに手札から融合を発動！手札の『E・HEROフェザーマン』と『E・HEROバースト・レディ』を融合！現れる、マイフェイバリットモンスター！『E・HEROフレイム・ウィングマン』！」

E・HERO フレイム・ウィングマン ATK2100/DEF1200

「バトルだ！フレイム・ウィングマンでアブソルートZeroを攻撃！スカイスクレイパーシュート！」

E・HERO フレイム・ウィングマン ATK2100/DEF1200 ATK3100/DEF1200

これが通れば十代さんの勝ち！？フレイム・ウィングマンって、敵を倒したらそのモンスターの攻撃力分のダメージを与えるはずじゃ・・・！？

「させるか！速攻魔法発動『サイクロン』！スカイスクレイパーを破壊！」

E・HERO フレイム・ウィングマン ATK3100/DEF1200 ATK2100/DEF1200

攻撃するも反撃にあい、凍りついて消えるフレイム・ウィングマン

十代 LP2300 1900

「つくそ・・・なら俺は手札から『フレンドッグ』を守備表示で召喚！」

フレンドッグ ATK800/DEF1200

フレンドッグ？機械の犬みたいだけど・・・

「また面倒なモンスター出したなお前」

「へへっ、まだまだ、勝負は終わらないぜ！」

面倒？何が面倒なんだろ・・・

「俺のターンドロロー！よし、エアーマン召喚！」

本日4回目の登場のエアーマン・・・あの、なんというか、ソリットビジョンのはずなんだけど・・・なんか、疲れてない？肩で息してるもん！もうやめてあげて！エアーマンのライフは0だよ！どんだけ使いまわしてんの！？ほら、すっごく疲れているよ！エアーマン！

「エアーマンの第1効果発動。自分以外のHEROの数だけ魔法、罠を破壊できる。俺が一番左のカードを破壊する！」

破壊されたのは・・・聖なるバリア・ミラーフォース・・・危ないね。

「そしてさらに罠発動『転生の予言』このカードは墓地からカード



十代LP 1900 1000

「カードを2枚伏せてターンエンド!」

これで秋さんの手札は0枚。でもどうやって十代さんはアブソル  
トZeroを対処するつもり?

「俺のターンドロ!これで最後だぜ秋!俺は手札から『ミラクル・  
フュージョン』を発動!」

ミラクル・フュージョン!?!この局面で?いったい何を融合するの  
!?!

「来い!『E・HEROシャイニング・フレア・ウィングマン』!」

シャイニング・フレア・ウィングマン ATK2500/DEF2  
100

「ここでシャイニング・フレア・ウィングマン・・・かよ。お前も  
よくやるぜ」

頭を抱える秋さん。どうしたんだろう

「俺の墓地のE・HEROの数×300ポイント、このモンスター  
の攻撃力はアップするんだぜ!」

ええええええええ!?!そりゃ秋さんも頭抱えたくなるよ!この局面  
でそんな切り札をよく出せたね。墓地のカードは2枚ってことは・

シャイニング・フレア・ウィングマン ATK2500/DEF2100  
ATK3100/DEF2100

「バトルだ！シャイニング・フレア・ウィングマンでアブソルートZeroに攻撃だ！『シャイニング・シュート』！」

光がアブソルートZeroに向かって行く。

「だが十代、甘かったな、俺の勝ちだ！畏発動『燃える闘志』！このカードは発動後モンスターの装備カードとなり、装備される！アブソルートZeroにこのカードを装備！相手のモンスターが元々の攻撃力よりも攻撃力が高いモンスターが相手の場にいる場合、このカードを装備したモンスターの攻撃力は倍になる！」

E・HEROアブソルートZero ATK2500/DEF2000  
ATK5000/DEF2000

「シャイニング・フレア・ウィングマンを迎え撃て！アブソルートZero！『瞬間凍結』！」

燃える闘志で炎を纏ったアブソルートZero・・・なんか、矛盾してない？攻撃がぶつかり合い、徐々に押されるシャイニング・フレア・ウィングマン。頑張っていたみたいだけど、とうとうアブソルートZeroに押し切られ、倒されてしまった。

「うわああああああっ！」

十代LP1000 LP0

恋する乙女（中編？）（後書き）

うーん。最後燃える闘志でよかったのかなあ・・・

次回で恋する乙女は終わりです

恋する乙女（後編）（前書き）

な、長かった・・・恋する乙女編。ようやく終わり

とりあえず、今日からコミケの2日目に備えます。頑張らなければ

秋「今日の最強カードは・・・なぜ、『大嵐』なんだ？」

通常魔法

フィールド上の魔法罫を全て破壊する

まあ、レイが色々ひっかきまわしたということだ

秋「・・・今度は何が起きるんだ」

注意：相変わらず砂糖吐くことがないように注意！



## 恋する乙女（後編）

Side秋

「くっそー！負けたー！」

いやいやいや、十代・・・お前のそのチートドロ本当に怖かったよ。格段的に性能に差があるはずのアニメ版HEROと漫画版HERO・・・俺のHEROはOCGだけど、それをここまで追い詰めるとは・・・まあともかく

「勝負は俺の勝ち。レイについては、深く追求しないこと。いいな？」

「しょうがないよな、負けちまったし！んじゃ、俺は部屋戻るぜ！」

そう言っただけで帰って行く十代。はあ・・・

「疲れた」

「お疲れ様秋・・・ホント、十代って強いわね」

「まったくね・・・あの子のチートドロには困ったものだわ」

ホントだよ・・・十代とデュエルするといつもギリギリまで追いつめられるからな。

「さて、飯でも食い行くか・・・今ならまだ、イエローの食堂も開いているだろ」

あそこは食券制度で夜までぶっ通しで開いているからな。それなりに美味しいし、量もある

「え、イエロー寮の食事食べられるんですか？」

目をキラキラとさせるレイ。そういえばここ数日はレッド寮だけの食事だったからな。

「んじゃ行くか」

こうしてイエロー寮で食事をする事になった俺達。それにしてもやっぱりと言うべきか・・・レッドとイエローでもだいぶ格差あるな、これ。着いた時は丁度12時。デュエルが長引いたからな。結局1食を抜く形になってしまった。

「いただきますっ！」

レイが頼んだのはハンバーグカレー。やっぱり子供だな。嬉しそうに頬張つてら。俺はとんかつ定食。雪乃はハンバーグステーキ、ツアンはラーメン。食事をしていると、三沢がやってきた。

「よう、みんな」

「お、三沢。おっす」

三沢がレイの隣に座る。

「ん？君は・・・」

「ああ、その子は早乙女レイって言ってな。俺の相部屋の人間だ。実力ではイエローだが編入の関係でレッドにいる」

「そうなのか・・・俺は三沢大地だ。よろしく」

「あ、早乙女レイです。よろしく」

カレーを頬張っていたレイはすぐに口にあったものを飲みこみ、三沢と握手していた。やれやれ・・・もうすぐ定期便が来る。レイともお別れだな。

S i d e レイ

あれから数日が過ぎた。明日には定期便が来て、僕は帰ることとなる。お父さんとお母さんには電話越しで心配もされ、怒られもした。でも、秋さんが説得してくれたおかげでなんとかなった。現在部屋でデッキを構築している秋さん。どんなのを作ってるのかな・・・

「あの、秋さん？」

「なんだ」

「何のデッキ作ってるんですか？」

「フルモンスターデッキ」

ふ、フルモンスター！？魔法や罫を入れないってこと！？

「馬鹿にしているようだが、フルモンスターと言うのは非常にハイ

レベルなデツキだ。1ターンに1度だけの召喚条件から、どのようにカードを特殊召喚していくのかそれが鍵となる」

すごいなあ・・・僕じゃ多分まわせないんじゃないかな。

「・・・つと、そろそろシャワー行け。俺は外にいる」

「あ、はい・・・」

こうして出ていく秋さん。なんか、寂しい・・・

シャワーを浴びてから10分くらい経って、秋さんが帰ってきた。丁度そこで雪乃さんたちとも会ったらしい。手には・・・お菓子とデザート？

「今日で最後だからな、みんなを呼んできたぞ」

「うおっすー！」

そこにいたのは秋さん達3人の他に、今日知りあった三沢さん、それに十代さん、翔さん、隼人さん、亮様と一緒にいた女の人・・・えつと、明日香さん、だったかな。が一緒にいた。秋さんは最後だということでも十代さん達に女の子であることを教えていた。男装した理由は誤魔化してくれたし特にみんなは追及をしてこなかった。みんなでお菓子やジュースを食べたり、デザートを食べたり。楽しかった。すごく楽しくて、その時の時間はあつという間に流れていた。みんなで笑い合ったり、ふざけ合ったり、まるで僕は最初からその場所について・・・いつもの楽しみをしているみたいに楽しかった。時間は流れ、時が過ぎる。みんなは部屋に帰り、いつもの3

人の人達が残った。

「さて、俺達も寝るか」

「うにゆ・・・」

眠、い・・・もう2時だ・・・先生はよく許してくれたなあ・・・  
秋さんはあんまり眠くなさそう。珍しい

「寝るか」

「そうね・・・今日は僕だけど、雪乃いいの？」

「構わないわ。順番は順番ですもの」

どうやら僕のせいで雪乃さんは秋さんと一緒に寝ることが出来なかつたみたい。なんだか悪いことしちゃったな・・・でも、もうちょっとだけ、秋さんに甘えたい。

「あの・・・秋、さん」

「ん？どうかしたかレイ」

「僕も、その・・・一緒に寝てもいいですか？」

それを聞いてツアンさんは相変わらずムツとする・・・と思っただら、黙ってベッドの上へと行ってしまった。

「いいぞ、おいで」

言われるがままに、ベッドの中へ入った僕。まだ起きてる秋さんは僕の頭を優しく撫でてくれた。ふみゃあ・・・気持ちいよう

「レイ」

不意に名前を呼ばれた。なんだろう？

「何？秋さん」

「楽しかったか？」

「・・・うん」

出来ることなら、もっと一緒にいたい。もっとみんなと楽しく勉強したい。もっとこの学園にいたい・・・涙が溢れる。なんでだろう？なんで涙が流れるの？亮様にフラれた時よりも涙が出る。なんで？なん・・・

「・・・」

泣いているのに気づかれて、秋さんが僕を抱きしめてくれた。温かい・・・頭を撫でてくれるし、とても気持ちがいい

「ふあ・・・」

僕は静かに目を閉じ、秋さんの温もりを味わうことにした。お休み秋さん・・・でもやっぱり、帰りたくないなあ

・・・しくじった。どこで間違っただろうか

『マスターも大変ですね』

ミラ、久しぶりだな・・・なんか

『最近は大変だったので・・・修行面で・・・その、マハードさんに見てもらったりしてて』

ああ、アイツの修行ってすごそうだからな。

「ふぁ・・・」

抱きしめてやるとレイは嬉しそうに俺にうずくまり、眠ってしまった。これで泣くことはないだろう。

『マスター・・・流石に今回は自覚したんですか？』

「（・・・まあ、な）」

デュエルで十代に惚れるんだ。ここまで優しくしてしまえばこの子は俺を見るだろう。女の子とかの涙に非常に甘い俺。はぁ・・・だから子供は

『ため息は幸せを逃しますよ？マスター』

「（そりゃわかってるけどさー・・・）」

ほんと、十代に全部押し付ければよかった。そうすればレイは原作

通りになるはずだったのに……

『(別にいいんじゃないですか？これで)』

「(は?)」

『(だってもう彼女が二人いるんですよ？好きになってもきつと諦めますよ)』

……だと、いいんだけどな

「(でも、武藤秋の記憶のせいかな凜のこともあって……自分より年下の女の子には優しくしなきゃって思うんだよな)」

『マスター……それって世間でいう『シスコン』と『ロリコン』ですよ?』

……言うな。俺は静かに目を閉じ、レイを優しく抱きしめる。恋する乙女の心の傷を癒してやるために

Sideミソ

大変ですね、マスターも……こんなだからいるんな人に睨まれるんですよ。でも、それがマスターのいいところです。誰にでも優しく、人を愛する。

「頑張ってくださいね、マスター」

修行の成果。ちょっとだけ実体化。そしてマスターの頭を撫でる。



うん、上出来です。

「あら？」

マスターの机が光っていました。机を見ると、1枚のカードが光っている。これは……

「この、カードは……？」

手に取ると、光が収まってしまいました。

「救世竜……セイヴァー・ドラゴン？」

見たことがないカードですね。少なくとも、マスターのデッキには入っていないカードです。すると、マスターのエクストラデッキも輝きを放っていました。それも手に取ると、同じくカードが姿を現します。このシンクロモンスターはいつたい？

「セイヴァー・スター・ドラゴンとセイヴァー・デモン・ドラゴン？」

どちらもスターダストとレッド・デーモンズが必須のカードですが……なぜこのカード達は光を放っていたのでしょうか？なにか、嫌な予感がします。

「何か、悪い予感を知らせるような……あれ!？」

いつの間にかカード達は真っ白になってしまいました。これは……

「っ……!？」

すると、見慣れないデッキケースが転がりました。出てきたのはシンクロモンスター達

「今度のこれは・・・何でしょう・・・シューティング・スタードラゴンとスカーレット・ノヴァ・ドラゴン？それに、フォーミュラ・シンクロン・・・あ、また!？」

またしてもカードは白くなり、何もなくなっていました。これはマスターに知らせるべきなのでしょうか、それとも知らせないべきなのでしょうか・・・

「どう思いますか？」

「うむ・・・どうということなのか・・・」

「さっきのテキスト見えたけど・・・アクセルシンクロってなんだろうね」

同じく実体化したマハードさんとマナさんが考えてくれます。確かに聞いたことのない召喚方法です。

「この世界の干渉の影響なのか・・・それとも何かの前触れなのか・・・」

「最近なんですけど、私凄く調子がいいんですよ、お師匠様」

「それは私もだ。これほど魔力が流れることは現実世界ではありえないのだが・・・」

本当に何か悪い予感がしてなりません。マスター……

「そんな顔しちゃだめだよ、ミラちゃん」

「ふにゃ！？いふあいふよ、マナふぁん！」

頬を引つ張られてしまいました。痛い……

「マスターを守るんでしょう？今からそんな今根気詰めたらだめだよ」

「は、はい」

そうです……マスターは私が守るんです。私がしっかりしなければ……！

「じゃ、私達も寝よつか！お師匠様、おやすみなさい」

「マハードさん、おやすみなさい」

「ああ」

こうして眠りにつく私達。マスター……貴方は必ず私が守りますからね

S i d e 秋

朝、目が覚めると相変わらずレイががっちりと俺をフォールドしていた。レイ本人は気持ちよさそうに眠っている。今日は俺の方が早

く起きた。珍しい・・・今、何時だ

「あらおはよう、秋」

「雪乃・・・」

見ると、雪乃がお茶を入れているところだった。レイをなんとか引き剥がすと、ベッドから降りる。

「おはよう雪乃」

「ええ、おはよう。お茶飲むかしら？」

「ああ、頼むよ」

時間は・・・あ、9時か。確か船は1時だったな。

「ツアンはどうした？」

「不機嫌そうに、気分転換ですって。昨日寝てあげなかったからでしよ？」

「あー・・・」

こいつはまた、機嫌を直すのには骨が折れそうだな。

「あら、私が不機嫌には見えないのかしら？」

ゆっくりと後ろから俺に手を回す雪乃。やれやれ・・・

「雪乃はこの程度で嫉妬するほどの性格じゃないからな」

「あら、わかってるのね・・・秋」

一度離れ、胡坐をかく俺の上に座る雪乃。まるで猫のように寄り寄ってきた。

「どうした？」

「他の女ばかり見ちゃ、イヤよ？」

「わかってるよ・・・雪乃」

頭を撫でると、嬉しそうにする雪乃。そろそろレイも起こさないと  
な。

「レイ、起きろ。朝だ」

「あう、うう？」

寝ぼけているらしい。寝れなかったのか？いや、確かに寝たはずだが・・・やっぱりまだ小学生に深夜まで起きてたのは辛かったかな？

「ほら、レイ」

なんとか抱き起こし、ベッドから降ろす。だがハッキリしていないらしくすぐにその場に座り込んでしまう。

「あ、うう・・・」

「やれやれ……」

レイが意識を覚醒させるまで、結局膝枕で寝かせるしか選択肢はなかった。

船の前

「じゃあ元気でなレイ」

「うん、秋さん、それにみなさん……ご迷惑かけちゃいました」

「気にするな。また来いよ」

レイは両親が迎えに来て、ワンピースを着ている。

「今度は俺とデュエルだ！またなレイ」

「あ、はい！十代さん」

見送りに来たのはいつものメンバー+亮が遠くから隠れている。ちやんと会ってやればいいのに。

「そろそろ時間だ……行きな、レイ」

「あの、秋さん……」

「ん？」

「僕、本当に楽しかった・・・このデュエルアカデミアにきたこと・・・前に怒られちゃったけど、でも、僕後悔してないよ！こんなに楽しくて、沢山友達が出来たんだから！」

レイの言葉に、俺を含め、十代達が微笑む。そりゃよかった

「そっか、大きくなったらまた来な。俺達は待ってるぜ」

頭を撫でる。そして俺は1つのデッキケースを手渡した。

「これ・・・」

「そいつは前に言ってたコントロール奪取の『勝つための』デッキだ。これからそれを使うか否かはお前に任せる」

「た、大切にする！ありがとう秋さん！」

笑顔のレイ。ちょっとしょぼくっていたからな。これくらいのプレゼントなら機嫌も治るだろう。

「んじやな、ご両親が待ってるぜ」

「秋さん、秋さん」

レイが俺にかがむように手で動作する。すると、俺に何かを握らせた。

「これは・・・」

それはカイザーに返されたはずの髪留めだった。

「お前これ・・・っ!？」

言いかけた瞬間に唇に温かい感触が当たった。

「えへへ、お礼だよ、秋さん！バイバイ！」

「な・・・」

硬直。それ以外ないものでもない。全員が止まっていた。そして船が発進し、本土へ向けて動き出す。そしてレイが顔を出し、手を振ってる。

「また、必ず、必ず来るから！待っててね！秋さん！きつとよー！」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

俺は船が見えなくなるまで、ただ単に手を振ってやることしかできなかった。そして、俺の両方に手が乗った。

「さて、秋？さっき言った約束を破るとは・・・いい度胸ね？」

「まさかあの子あんなことを・・・秋、覚悟してね」

修羅と化した雪乃とツアン。ちよ、ちよっと待て！俺が悪いのか!？

「まで、落ちつけ・・・じゅ、十代助け・・・って、いねえ！」

見ると全員が一目散に逃げている。こ、この裏切り者おおおおお



おおお！

「さあ、じっくり』お話』しましょうか？そう、じっくりね」

「覚悟しなさいよね」

「え、ちょっと・・・待って・・・ぎゃー！」

「・・・・・・・・レイが残して行ったのは非常に面倒なことのようにある。」

恋する乙女（後編）（後書き）

というわけでレイフラグです。多分レイも出てくるのは学園祭です

次はとうとう 一、十、百、千、万丈目サンダー！  
が帰ってきます

お楽しみに！

## 女王、再び（前書き）

久しぶりの更新です

ちよくちよく更新を再開します

秋「今日の最強カードは『一族の結束』か」

自分の墓地に存在するモンスターの元々の種族が

1種類の場合、自分フィールド上に表側表示で存在する

その種族のモンスターの攻撃力は800ポイントアップする

非常に強力なカードです。天使族のみで構成されるデッキに入れる  
のもお薦めですね

秋「テーマデッキにはよく入るカードだな」

## 女王、再び

Side 秋

レイの騒動から幾日かが過ぎた。今日も相変わらず眠たい授業を受けている。

「秋、授業が終わったわ・・・秋！」

「ん・・・もうか・・・ふぁー・・・」

雪乃に起こされ、起き上がる俺。見れば殆どの生徒が帰る支度をしていた。

「そういえば、大徳寺先生が後で残るように・・・ですって」

「は？」

なんかあつたけか・・・

「もうすぐノース校との対校試合よ。忘れたの？」

と、ツアンが呆れた顔で言つが・・・待て、俺が出るといふことはまずないだろう。うん、ないない

「俺はないだろ」

「何を言ってるの・・・貴方の実力は既にオベリスクブルーよ？」

いやいやいや、考えても見てくれよ。シンクロ召喚なんかテレビの前でやってみ？大変なことになるから。ペガサス会長とかすっこんでくるよ？

「勘弁しろよ……」

ため息をつきながらSHRを待った。

放課後、集まったのは俺、雪乃、ツアン、十代、翔、隼人、三沢、明日香……そしてカイザーだ。校長と大徳寺先生、そしてクロノスがいる。

「さて、今回君たちに残ってもらったのは他でもありません。君たちに対ノー schools の代表を決めたいと思うからです。今回は丸藤亮君に出してもらい、勝利を飾りました……そして、今回は亮君に推薦された君たちから、選出しようと思うのですが……亮君、一番の推薦者は誰ですか？」

「……俺は、武藤秋を推薦します」

……おい、カイザー貴様……

「ふむ、武藤君ですか？」

「お断りします」

「そ、即答ですか……」

と、驚く一同。「冗談じゃない！シンクロやエクシーズやってテレビ

で晒されてたまるか！そんなことしたら社長が動いたりするに決まってる！他にデッキもあるが・・・マハード、マナが入った魔法使いデッキや、天使族デッキなんかも、殆どが『一般上』で知られていないカードばかりだ。そんなカードを晒してみる？大騒ぎになる

「ふむ、では武藤君、断るというなら自分以上の実力者を選出するということですか？」

「そうですね・・・俺は十代を推薦します」

「お、俺か？」

「な、なんーデ、こんなドロップアウトボーイを選出するノーネ！と、怒るクロノス。恐らく俺が三沢や明日香を推薦すると思ったからだろう。」

「・・・クロノス教諭、そのドロップアウトボーイの負けたのはどこの誰でしょうね？」

「っぐ！グググー・・・」

「俺が十代を選んだのにもちゃんと理由があります。まずこの中で俺に勝っているのは十代だけです。他にも今までの定期の実技試験や制裁タッグデュエル他、あらゆる実力に置いても校長先生より『ライエロー』への昇格も認められた実力者です。その実力は先生も御存じだと思いますが？」

黙り込むクロノス。そして考え込む校長先生

「だが、秋・・・お前もその十代に勝利しているだろう。実力ではお前の方が上のはずだ」

カイザーが俺に言うが・・・絶対いやだ。

「出たくないのに無理やり出すのはどうなんだ？カイザー・・・俺は無理やりなんか出されたら即刻サレンダーするぞ」

「む・・・」

そもそも、相手は万丈目だろ？なら十代でも十分勝てるだろ。他には

「後は雪乃とツアンも推薦しますよ。この二人なら十分戦えるはずです」

「わ、私達・・・？」

「む、無理に決まってるでしょ！？何勝手なことやってんのよ！」

何を言うか・・・俺がカード上げてデッキパワーアップしてるくせによく言うわ。特にツアン、お前のデッキはOCGでも十分乗り越えて行けるほどのデッキだろうが。無理なんてことは100%ないから安心しろ。

「そもそも、私じゃ十代の坊やには勝てないわ」

「僕も同意見。十代のチートドロになんて勝てないわよ」

おいおいおい・・・戦う前からそんなこと言ってどうするのさ

「俺は別にいいぜ！他の学校のやつと戦うなんてワクワクするぜ！」  
と十代

「待つノーネ！なら私はシニョール三沢とシニョーラ天上院を推薦するノーネ！」

「お、俺ですか・・・」

と、驚く

「ならこうしない？私達でトーナメントをして、勝者が代表選に出る」

「だから俺は「秋、勝つてね」え・・・」

雪乃に押し切られ、結局出ることになった俺。敗北は許さねないらしい。結局出るのは4人。俺と十代と三沢と明日香だ。組み合わせは以下の通り

俺VS明日香 十代VS三沢

なぜ、こうなったし

デュエル場

「さあ、全力でやらせてもらっわよ」

「・・・明日香？もしかして」



「あら、ばれちゃった？貴方が代表を断るのは勝手だけど、貴方と全力で戦いたかったわけ」

んなことだろうと思ったよ明日香・・・はあ

「<sup>デュエル</sup>決闘！」

明日香 LP4000  
秋 LP4000

「私の先攻ドロー！私は手札から『荒野の女戦士』を守備表示で召喚！カードを2枚伏せてターンエンドよ」

荒野の女戦士 ATK1100/DEF1200

「俺のターンドロー・・・俺は手札からジャスティス・プリンガーを召喚」

ジャスティス・プリンガー ATK1700/DEF1000

「バトル！荒野の女戦士に攻撃！『ジャスティス・スラッシュ』！」

「つく！荒野の女戦士の効果発動！戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキから攻撃力1500以下の戦士族・地属性モンスター1体を自分フィールド上に表側攻撃表示で特殊召喚する！私は『ブレード・スケーター』を召喚！」

荒野の女戦士の破壊から出てきたブレード・スケーター・・・ふむ

ブレード・スケーター ATK1400/DEF1500

「カードを2枚伏せ、ターンエンド!」

「私のターンドロー!私は手札から『融合』を発動!フィールドのブレード・スケーターと、手札の『エトワール・サイバー』を融合!来なさい!『サイバー・ブレイダー』!」

サイバー・ブレイダー ATK2100/DEF800

「さらに『一族の結束』を発動するわ!ふふ、貴方からもらったカードよ」

そうだった・・・クリスマス会で何枚かカードみんなに上げたんだよな。忘れてた・・・

サイバー・ブレイダー ATK2100/DEF800 ATK2900/DEF800

「バトル!サイバー・ブレイダーでジャスティス・プリンガーに攻撃するわ!『グリッサード・スラッシュ』!」

「させるか!畏発動!『くず鉄のかかし』!1ターンに1度相手モンスターの攻撃を無効にする!そしてこのカードは再びセットされる!」

あ、あぶねえ・・・

「なるほど・・・ならばもう1体の『荒野の女戦士』を召喚。ターンエンドよ」

荒野の女戦士 ATK1100 / DEF1200 ATK1900 / DEF1200

「うち、リクルートモンスターばかり・・・厄介だな。シンクロで一気に決めたいところだが、来るかな」

「俺のターンドロー！よし、俺は『ジャンク・シンクロン』を召喚」

ジャンク・シンクロン ATK1300 / DEF500

「レベル4のジャスティス・プリンガーにレベル3のジャンク・シンクロンをチューニング！」

4 + 3 = 7

「集いし叫びが、木霊の矢となり空を裂く！光差す道となれ！シンクロ召喚！いでよ、『ジャンク・アーチャー』！」

ジャンク・アーチャー ATK2300 / DEF2000

「ふふふ、苦勞したんでしょうけど悪いわね、畏発動！『昇天の黒角笛』！」

「な、なんだと!？」

「召喚、特殊召喚に成功した場合、それを無効にして破壊する。」

つく・・・明日香のやつ、ちゃんと研究してきてんな・・・面倒な

「ならば、カードを1枚伏せてターンエンド」

「私のターンドロ！さらに『強欲な壺』でカードを2枚ドロする！私は『サイバー・ジムナティクス』を召喚！」

サイバー・ジムナティクス ATK800/DEF1800 AT  
K1600/DEF1800

「バトルよ！サイバー・ブレイダーでダイレクトアタック！」

「くず鉄のかかし！」

「ならば、荒野の女戦士で攻撃！」

「ぐあああつ！」

LP4000 LP2100

「よし、このまま行ける！サイバー・ジムナティクスで『畏発動！』つ！？」

「『痛恨の訴え』！このカードは、相手モンスターの直接攻撃によって自分が戦闘ダメージを受けた時に発動する事ができる。相手フィールド上に表側表示で存在する守備力が一番高いモンスター1体のコントロールを次の自分のエンドフェイズ時まで得る！この効果でコントロールを得たモンスターの効果は無効化され、攻撃宣言を

する事もできない。よって、俺がコントロールするのはサイバー・ジムナティクスだ！」

俺のフィールドに舞い降りるサイバー・ジムナティクス。こいつの効果は強力だ。さつさと駆除しないとな

「ならば、カードを1枚伏せてターンエンドよ」

「俺のターンドロ―！俺は手札から『ゾンビ・キャリア』を召喚！」

ゾンビ・キャリア ATK400/DEF200

「レベル4のサイバー・ジムナティクスとレベル2のゾンビ・キャリアをチューニング！」

4 + 2 = 6

「大地を駆ける疾風の騎士よ、その速度で音速を超えろ！シンクロ召喚！大地を砕け！『大地の騎士ガイアナイト』！」

大地の騎士ガイアナイト ATK2600/DEF800

「暗黒騎士ガイア・・・？」

「それに似てるカードなただけだ。結局シンクロモンスターでも2600の通常モンスターと違ってもらって構わない。そして手札から『サイクロン』を発動！一族の結束を破壊する！そしてバトル！ガイアナイトでサイバー・ブレイダーに攻撃だ！『螺旋剣一閃』！」

ガイアナイトがサイバー・ブレイダーを貫こうとするが、それを防

がれる。

「サイバー・ブレイダーの効果よ！このカードは相手フィールドにモンスターが1体の時、戦闘では破壊されない！『パ・ド・ドウ』」

「っち、分かっているさ。だがダメージは受けてもらっ！」

明日香 LP4000 LP3500

「カードを1枚伏せ、ターンエンド」

とりあえずダメージは与えたが・・・荒野の女戦士を破壊してもリクルートされてまた同じのが出てくるのが落ちか・・・次はどうくる？

「私のターンドロ・・・そして『命削りの宝札』を発動。カードを5枚になるようにドロするわ。うふふ、また貴方は自分で自分の首を絞めることになりそうよ？」

「なに？」

「私は『リビングデットの呼び声』を発動し、『ブレード・スケーター』を蘇生するわ！」

ブレード・スケーター ATK1400/DEF1500

「そして、切り札を出させてもらっわよ、秋」

「・・・おい、まさか？」

嫌な予感しかないんですけど

「サイバー・ブレイダー、荒野の女戦士、ブレード・スケーターを生贄に捧げ・・・いでよ!」ギルフォード・ザ・ライトニング!」

ギルフォード・ザ・ライトニング ATK2800/DEF1400

「3体での生贄召喚に成功した時、相手フィールドのモンスターは全滅するわ!」ライトニング・サンダー!」

ガイアナイトが雷によって破壊された。

「さらに『サイクロン』を発動!『くず鉄のかかし』を破壊するわ!」

「っち!」

「バトル!ギルフォード・ザ・ライトニングで直接攻撃!」ライトニング・クラッシュ・ソード!」

させるかつ・・・!

「畏発動!『体力増強剤スパーZ』!このカードは、ダメージステップで攻撃力2000以上の攻撃を受ける時に発動できる!その戦闘ダメージを引かれる前に、1度だけライフを4000ポイント回復する!」

秋 LP2100 LP6100

「でもダメージは通るわよ！やりなさい、ギルフォード・ザ・ライ  
トニング！」

秋 LP6100 LP3300

「カードを2枚伏せ、ターンエンド」

「俺のターン、ドロー！俺は手札から『天よりの宝札』を発動！カ  
ードを互いのプレイヤーは6枚になるようにドローする！」

これでなんとか繋げるか・・・？

「さらに、俺は手札のボルト・ヘッジホッグを墓地へ送ることで『  
クイック・シンクロン』を特殊召喚！」

クイック・シンクロン ATK700/DEF1400

「そしてボルト・ヘッジホッグはフィールドにチューナーがいると  
き特殊召喚できる！」

ボルト・ヘッジホッグ ATK800/DEF800

「そして通常召喚！『チューニング・サポーター』！」

チューニング・サポーター ATK100/DEF100

「レベル1のチューニング・サポーターと、レベル2のボルト・ヘ  
ッジホッグに、レベル5のクイック・シンクロンをチューニング！」

1 + 2 + 5 = 8



「集いし闘志が、怒号の魔人を呼び覚ます！光差す道となれ！シンクろ召喚！粉碎せよ！」  
「ジャンク・デストロイヤー！」

ATK2600 / DEF2500

これで、行ける・・・！

「チューニング・サポーターの効果で1枚ドロ！そしてジャンク・デストロイヤーの効果を発動！素材となったモンスターの数だけカードを破壊する！俺は『ギルフォード・ザ・ライトニング』と、伏せカードを破壊！『タイダルエナジー！』」

破壊された伏せカードは攻撃の無力化。このまま直接攻撃する・・・！

「バトルだ！ジャンク・デストロイヤーで攻撃！『デストロイ・ナツクル』！」

「つく！」

明日香 LP3500 LP900

「でもこの瞬間、私は『ダメージ・コンデンサー』を発動！自分が戦闘ダメージを受けた時、手札を1枚捨てて発動する事ができるわ。その時に受けたダメージの数値以下の攻撃力を持つモンスター1体をデッキから攻撃表示で特殊召喚する。私が受けたダメージは2600・・・よって私は手札を捨て、デッキから『コマンド・ナイト』を守備表示で召喚する」

コマンド・ナイト ATK1200/DEF1900 ATK1600/DEF1900

「ならばターンエンドだ」

面倒なカードを持ってきたな・・・ここからどう動く？

「私のターンドロ―！『死者蘇生』を発動し、『ギルフォード・ザ・ライトニング』を特殊召喚するわ。さらにコマンド・ナイトの効果で攻撃力は400ポイントアップする」

ギルフォード・ザ・ライトニング ATK2800/DEF1400  
0 ATK3200/DEF1400

「さらに、手札から『D・D・アサイラント』を召喚！」

D・D・アサイラント ATK1700/DEF1600 ATK  
2100/DEF1600

「バトルよ！D・D・アサイラントでジャンク・デストロイヤーに攻撃！」

「畏発動！攻撃の無力化「させない！魔宮の賄賂！」なっ」

破壊される『攻撃の無力化』カードを1枚ドロ―する俺・・・つぶ

「このモンスターとバトルを行ったモンスターはゲームから除外されるわ！」

明日香LP900 LP400

「つく！」

「さらにギルフォード・ザ・ライトニングでダイレクトアタック！」

秋LP3300 LP100

「ダメージを受けた瞬間このカードを特殊召喚する！こい！『冥府の使者ゴーズ』！『カイエントークン』！」

冥府の使者ゴーズ ATK2700/DEF2500  
カイエントークン ATK3200/DEF3200

「つく……ターンエンドよ」

「俺のターン、ドロー！『強欲な壺』を發動して2枚ドロー」

相手の場はギルフォード・ザ・ライトニングとコマンド・ナイト。ただし、コマンド・ナイトはギルフォード・ザ・ライトニングを倒さないと攻撃は不可能。まあ、このターンで俺がモンスターを召喚すれば問題ない。けどこのレベルで出せるモンスター……俺の勝ちだ

「……俺は手札から死者蘇生を發動する。召喚するのは『ジャンク・シンクロン』」

ジャンク・シンクロン ATK1300/DEF500

「そして墓地からモンスターが特殊召喚されたんで、手札から『ドッペル・ウォリアー』を召喚。そして通常召喚だ。こい、『久遠の

魔導士ミラ』！」

ドッペル・ウォリアー ATK800/DEF800

久遠の魔術師ミラ ATK1800/DEF1000

『久しぶりの出番です！』

……まあ、すぐにいなくなる。ゴメンなミラ

「ミラの召喚に成功した時、相手の伏せカードを確認できるが……残念ながら伏せカードはないな」

『あの、マスター？もしかして……』

「うん、じめんミラ」

『いいんですよ……別に私は……うう』

やめろ、そう言うつこと言われるとやりづらいだろつが

「レベル2のドッペル・ウォリアーとレベル4の久遠の魔術師ミラにレベル3のジャンク・シンクロンをチューニング」

2 + 4 + 3 = 9

「破壊神より放たれし聖なる槍よ、今こそ魔の都を貫け！シンクロ召喚！『氷結界の龍トリシューラ』！」

氷結界の龍 トリシューラ ATK2700/DEF2000

「こ、ここので・・・その龍出すの？反則よ・・・」

「・・・うん、否定はしない。効果発動！フィールドのギルフォード・ザ・ライトニング、左の手札、墓地の・・・荒野の女戦士除外。バトルだ。ゴーズで攻撃」

破壊されるコマンド・ナイト

「そして一斉攻撃！」

「きゃあああっ！」

LP400 LP0

「せっかくいい所まで追いつめたのに、ゴーズは反則よ・・・」

「残念でした。まあ、今のところ俺のことをライフ100にまでしたのは明日香じゃないか？」

「次は負けないわ。覚悟しておいてね」

こうして、俺と明日香のデュエルは終了。十代と三沢の対決は当然十代の勝ち。これによって校長は十代を代表ということに決めた

## 女王、再び（後書き）

ってなわけでVS明日香でした。

最近シンクロデッキ使っていないからいいかなと思ひまして

次回、ようやくアイツが帰ってくるサンダー！

## 帰ってきた男（前書き）

というわけで、対ノース校戦です

秋「今日の最強カードは『アームド・ドラゴンLv7』か」

このカードは通常召喚できない。

「アームド・ドラゴン Lv5」の効果でのみ特殊召喚する事ができる。

手札からモンスター1体を墓地へ送る事で、そのモンスターの攻撃力以下の攻撃力を持つ、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスターを全て破壊する。

どう見てもライトニング・ボルテックス

しかもモンスターを捨てないと効果が発動できないというね・・・

秋「これなら普通にライトニング・ボルテックスでも良い気がするな」

## 帰ってきた男

Side 秋

1週間後、対校試合前日となった。相変わらずの俺の部屋。デッキを組んでいると、部屋をノックする音が聞こえた。

「はい？」

「秋、入っていいかー？」

十代だった。

「ん、ちょっと待て」

デッキをかたづけ、カードをケースに入れてからドアを開ける。珍しく一人の十代。

「どうかしたか、もしくはまた何か厄介事か？」

「俺が厄介事持つてくること前提！？ちげえよ、ちょっと相談があるんだ」

「相談？まあいい・・・とりあえず入れ」

今は二人が風呂に言ってるしな。まあ、問題はないだろう

「それで、相談ってなんだ？」



「いや、なんつーか・・・相談というか、お願いというか・・・なあ」

「言いたいことははっきり言え。なんだ」

「ああ、実はその・・・」「断る」まだ何も言っただけでねえ！」

「だいたい読めた。」

「・・・お前の代わりに俺が代表戦に出ろってか？」

「なんだ、分かってたのかよ」

「だってそんな顔してたし、ここ数日考え込んでばかりだったからな。大体予想はついてたさ」

「だってよ、この学園の中で今強い奴っていつたらやっぱりお前じゃねーか。なのに俺が出るのもおかしい話だろ？」

「戦績じゃなくてやる気の問題だろ。俺は出る気はないし、出たくない。シンクロやエクシーズは、お前のカードの精霊である「ハネクリボー」のように特別なものだ。それを俺は人前に晒したくない」

「けどよ・・・」

と、何とも言いたそうな十代。俺が持っているカードなら、確かに万丈目など即刻で倒してしまうだろう。ああ・・・こんなところに変な原作変化が出来るよ。

「しょうがない」

俺は立ち上がり、あるものを取り出し、十代に手渡す。

「なんだこれ」

「・・・E・HEROだ」

デッキケースを手渡すと首を傾げる十代。開けるように促すと、十代は自分の目を疑ったかのように驚いた。

「こ、これ・・・お前が俺と戦ったHEROデッキじゃねーか！どうして俺に・・・」

「それをどう使うかは十代に任せるし、どんな形にするかも任せる」

「そうじゃなくてだな・・・」

「そのデッキとお前のデッキを組み合わせた場合・・・多分俺は100%負ける。シンクロデッキだろうと、エクシーズデッキだろうとな」

ぶっちゃけ、漫画版HEROとアニメHEROを組み合わせたデッキを作ったことがある。回れば相手が泣きたくなるデッキだが、事故れば自分がアウトだ。だが十代の場合、そのチートドロージャックなら余裕だろう。

「でも・・・」

「お前の好きにしてくれていい。だが、これだけは断言する。何かあると、俺は他校との交流試合には絶対出ない」

「・・・わかった！俺がお前の分まで頑張るぜ。これは借りてくぞ  
！」

「ああ、頑張れよ十代」

こうして十代が意気揚々と出ていく。ま、アレくらいじゃないと主人公つとまらねーしな

「いいんですか？」

「何が？ミラ」

「あの中には・・・精霊のカードに匹敵する1枚が入ってるんですよ？」

「何を今更」

後にネオスだって使ってるんだ。アイツになら余裕で使いこなせるさ。響紅葉が使うエースをな。

「マスターが言うんでしたら、私も十代さんを信じましょう・・・  
あ、雪乃さん達が帰ってきたみたいですね。ではマスター」

「ああ」

さあ、十代・・・頑張れ

Side 十代

なんか、秋には迷惑かけっぱなしだなあ・・・今度なんか恩返ししてやるう。飯は・・・この前5日連続で奢ったし、カードは大体何でも持っているしなあ・・・今度聞いてみよう。

「さて、と・・・」

部屋で二人が寝たのを確認し、カードを広げる。勝つには使うカードの特性を理解しないと。

「えーと・・・まずは『E・HEROエアーマン』」

こいつはすごいよなあ・・・1枚だけでも、この前あんなに出たり消えたりしてたけど、その効果も強力だ。こいつはHEROをサーチできるし、他にHEROがいれば魔法罫も破壊できる。

「次は・・・フォレストマン」

こいつはクレイマン並みの防御力を持ってて、スタンバイフェイズに融合を手札に持ってこれる強力なカードだな

「で、オーシャン」

これは・・・同じだな、スタンバイフェイズに墓地のHEROを手札に戻せる。これはフォレストマンと同じで使いどきがありそうだ。

「これとこれ、これも・・・うーん」

ブルームとクノスペは・・・使いどころが難しいな。これはこつちで・・・え？なんだこれ・・・アナザー・フュージョン!?こんな

レアカードどうして秋が・・・いや、秋だしな。持ってるだろう。

「あとはこれだな、アブソルートZero、ノヴァマスター、ガイア、エスクリダオ、Great TORNADO、Theシャイニング・・・」

属性との融合か・・・これはびっくりしたぜ。これなら今までのHEROを使わない方が強いって思っちまうくらいだからな。

「デッキ枚数は・・・よし、40枚だぜ・・・ん？」

融合デッキから何か力の様なものを感じた。手に取った1枚の融合モンスター・・・

「これは・・・」

不思議な感じだ。何かに引き寄せられるような・・・カードの輝きに見とれるというか・・・こいつは、すげえな

「見るよハネクリボー」

『クリクリ』

ハネクリボーもその力を感じて驚いている感じだ。俺もビックリだぜ

「よし、明日は頑張らないとな！おやすみ！」

俺はこうして眠りにつく。明日のために・・・絶対勝つぜ！その日の夜、なぜか俺は知らない眼鏡をかけた男の人とデュエルしている夢を見た。すごく優しいひとだったけど・・・なんだったんだろう



がつてえええ！そういえば全国放送で放映されんだっけ？まあ、ちやんと手をつつてあるから大丈夫だけどな

「（ミラ、マハード、マナ、よろしくね）」

『はい！』

『お任せを』

『まっかせてー！』

一斉に精霊たちが飛び立ち、カメラを破壊する。理由は簡単。漫画版HEROを人前にさらさないため。それだったら俺が出ればいいだろうが、HEROといえは十代という印象が強いからな。俺が出るよりもいいだろう。少なからず、危機を破壊しても今回のデュエルが外に出ないという保証はない。それに十代のデッキを追いそれ全国放送するわけにもいかないからな。多少の混乱の後、デュエルが無事に始まった。

十代	LP4000
万丈目	LP4000

「『決闘』<sup>デュエル</sup>」

さあ、見せてもらおうか、ノース校の性能とやらを！

「先攻は俺だ！ドロー！俺は手札から仮面竜を守備表示で召喚する

「！」

仮面竜 ATK1400/DEF1100

「カードを2枚伏せ、ターンエンドだ！」

「俺のターンドロ―！俺は手札から『増援』を発動！レベル4以下の戦士族を1体手札に加えるぜ。俺が加えるのは『E・HEROエアーマン』だ！そしてエアーマンを召喚！」

E・HEROエアーマン ATK1800/DEF300

早速エアーマンか・・・流石十代と行ったところか。1ターン目に手札になくてもそれを補助するカードが必ず手札にあると・・・

「な、なんだそのHEROは・・・」

「秋！あのHEROまさか！」

雪乃とツァン他、明日香や三沢が驚く。そう、これが俺のHEROだから当然である。

「エアーマンは召喚、特殊召喚に成功した時にHEROを1体手札に加えられる！俺は『E・HEROプリズマー』を加えるぜ。そしてバトル！エアーマンで仮面竜に攻撃！『エアースイート』！」

「仮面竜の効果発動！戦闘で破壊された時、デッキから1500以下のドラゴン族を召喚する！俺が召喚するのは『アームド・ドラゴンLv3』だ！」



アームド・ドラゴンねえ・・・まあ、万丈目のキーカードだが、サイレント・ソードマンやサイレント・マジシャンの方が好きだったりするな、俺の場合は

「ふーん・・・じゃあ俺はカードを3枚伏せてターンエンドだぜ」

「俺のターンドロー！この瞬間、俺はアームド・ドラゴンLv3を墓地へ送り、Lv5を召喚する！」

アームド・ドラゴンLv5    ATK2400 / DEF1700

「そして、手札からモンスター1体を墓地へ送る事で、そのモンスターの攻撃力以下の攻撃力を持つ相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して破壊する！俺はアームド・ドラゴンLv5を墓地へ送り、エアーマンを破壊する！」

「ぐっ・・・！だがこの瞬間俺の罠が発動するぜ！『エレメンタル・ミラーージュ』！効果で破壊された『E・HERO』を復活させるぜ！蘇れ、エアーマン！」

E・HEROエアーマン    ATK1800 / DEF300

「そしてエアーマンの効果は特殊召喚でも発生する！俺は手札に『E・HEROバースト・レディ』を加えるぜ！」

ほう、この局面でミラーージュを使っているってことはもう一枚の伏せカードはよくわかるカードだな

「ならばバトル！エアーマンに攻撃しろ！アームド・ドラゴン！アームド・バスター！」

十代 LP4000 LP3400

「つく！もう一枚の罫を発動！『ヒーロー・シグナル』！俺は効果で『E・HEROオーシャン』を特殊召喚するぜ！」

E・HEROオーシャン ATK1500/DEF1200

「ふん！そんな雑魚で何が出来る！エンドフェイズに効果を発動！戦闘でモンスターを破壊したこのターン、Lv5を墓地へ送り、Lv7を特殊召喚する！」

アームド・ドラゴンLv7 ATK2800/DEF1000

「うわーい、Lv7か。それにしても万丈目、ステータスだけを見て言うなんて痛い目見るぜ？そのモンスターの効果は恐ろしいからな」

「見たか！伝説のレベルアップモンスター、アームド・ドラゴンLv7だ！」

「うおー！かつちよいいなあ！俺も欲しいなー！」

「馬鹿が！お前の身が危ないんだぞ！感心している場合か！」

確かに、十代・・・いくら余裕があるとはいえ、もうちょっと焦るようにしろ。オーシャンをシグナルで呼んだということは既に融合が手札にあるということだろう？

「へへっ！行くぜ万丈目！俺のターンドロー！この瞬間、オーシャンの効果発動！墓地のHEROを手札に加える！当然、呼び戻すの」

は『E・HEROエアーマン』だ！そしてエアーマンを召喚！」

E・HEROエアーマン ATK1800/DEF300

「エアーマンの効果だ！俺は手札に『E・HEROネクロダークマン』を加える。そして『融合』を発動！手札のネクロダークマンと、フィールドのエアーマンを融合！現れる、『E・HERO Great TORNADO』！」

E・HERO Great TORNADO ATK2800/DEF2200

「Great TORNADOの効果発動！召喚に成功した時、相手フィールド上のモンスターの攻撃力を半分にする！『タウンバースト』！」

「な、なんだとお！？」

アームド・ドラゴンLv7 ATK2800/DEF1000 ATK1400/DEF500 A

「……アブソルートZeroでは攻撃力も足りないからな。だが十代……プレイミスに気が付くべきだぞ」

「バトルだ！Great TORNADOでアームド・ドラゴンLv7を攻撃！『スパーセル』！」

「畏発動！『攻撃の無力化』！攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了する！」

「つく！ならカードを1枚伏せ、オーシャンを守備表示に変更！ターンエンドだ！」

Lv7をフィールドに残してしまった。あの場合、エアーマンの効果は第一効果を使って伏せを破壊するべきだった。まあ、勝利に焦ったということだな

「俺のターンドロー！『強欲な壺』でカードを2枚ドロー！」

そして当然、万丈目もこの攻撃力変動を物としないだろう

「俺はこの瞬間、Lv7のアームド・ドラゴンをリリースし、出て来い！『アームド・ドラゴンLv10』！」

アームド・ドラゴンLv10 ATK3000/DEF2000

「こ、攻撃力3000!？」

まあ、青眼の白龍と並べばそりゃびつくりするわなあ・・・この世界の場合はだが。それにしても、Lv10は斎王戦で初登場するんじゃないかったか？よく覚えてないが・・・

「そして手札を1枚捨て、相手のフィールド上のモンスターを全て破壊する！」

「な、なんだって!?!うわあ!！」

ライトニング・ボルテックスと同じ効果だな。ぶっちゃけコストとかも見て見るとやっぱり普通にライトニング・ボルテックスで消し去った方が早い。冷静に分析して戦うなら、あの場面ではアブソル

「トZeroを召喚しておくべきでもあったかもしれない。万丈目のことだ。怒りにまかせてそのまま突っ込んできただろう。アイツの視線は今、自分の兄貴たちにあるからな……」

「そして『リビングゲットの呼び声』を発動！アームド・ドラゴンLv5を特殊召喚！」

アームド・ドラゴンLv5 ATK2400/DEF1700

うおっ……なかなか怖いな、この状況

「バトル！アームド・ドラゴンLv10でダイレクトアタックだ！くらえ！『アームド・ビッグ・バニッシャー』！」

「させるかよ！畏発動！『攻撃の無力化』！」

……なんとか防いだが。だがLv10がいるとなると、十代はどうするつもりだ？

「ならば俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー……よし、俺は手札から『E・HEROバブルマン』を守備表示で召喚！」

E・HEROバブルマン ATK800/DEF1200

「他にカードがない時、カードを2枚ドロー！」

さて、十代のお得意のバブルマンだ。今回は漫画版HEROが多く出てたから出番が少なかったようだが……

「さらに融合を発動！フィールドのバブルマンと、手札の『E・HEROバースト・レディ』を融合！現れる！『E・HEROアブソルトZero』！」

E・HEROアブソルトZero ATK2500/DEF2000

「スチーム・ヒーラーじゃない！？なんだそのHEROは！」

さきほどからGreat TORNADOも出ていただろうに・・・まあ、アレは漫画版HERO同士の融合だったからな。しょうがないと言えばしょうがないが・・・どうするつもりだ十代

「さらに！手札から『沼地の魔神王』を捨てて手札に融合を加える！もう一枚の融合を発動！」

おいおい・・・恐ろしいドロ運だな

「手札のプリズマーと、アブソルトZeroを融合！現れる！『E・HERO Theシャイニング』！」

E・HERO Theシャイニング ATK2600/DEF2100

何故融合召喚したばかりのZeroを使って融合したのかって顔してるな。まあ、コスト的にはお前と同じだけ、万丈目

「アブソルトZeroの効果発動！このカードがフィールドを離れた時、相手フィールド上のモンスターを全て破壊する！」

「な、なににい!?ぐううう!」

「バトルだ!シャイニングでダイレクトアタック!」  
『オプティカル・ストーム』!」

万丈目 LP4000 LP1400

「俺はこれでターンエンド!」

「まだまだ・・・俺は負けるわけにはいかない!俺は兄さん達の期待に応えるため、そして俺の価値を証明するため、どんなことがあっても・・・遊城十代!お前を倒さなければならぬ!」

「そう簡単にはやられないぜ!万丈目!」

「万丈目さんだ!俺のターンドロー!」

・・・さて、ここからどう逆転するのかな?万丈目

帰ってきた男（後書き）

次回、決着！



## 己の誇り（前書き）

今回はちょっとだけ短いです。すいません

十代「今回の最強カードは……『E・HEROジ・アース』！紅葉さんの最強カードだぜ！……ってあれ？紅葉さんって誰だ？」

「E・HERO オーシャン」+「E・HERO フォレストマン」このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

自分フィールド上に表側表示で存在する「E・HERO」と名のついた

モンスター1体をリリースする事で、このカードの攻撃力はこのターンのエンドフェイズ時まで、リリースしたモンスターの攻撃力分アップする。

漫画版GXの十代のエースです。紅葉さんのエースでもありませんが、どう見てもフリーザ様。このカードの利点はHEROを何体でも生贄に捧げられる点ですね

## 己の誇り

Side秋

十代      LP3400

万丈目    LP1400

「俺のターンドロワー……！」

さて、ここから万丈目がどう逆転してくるか？見ものだな

「俺は手札から『貪欲な壺』を発動する！墓地に眠るアームド・ドラゴンLv3、Lv5を2体、Lv7、Lv10、をデッキに戻しシャッフル……2枚ドロワー！」

ほう、ここでそのカードか……アイツのデッキにはLv7が2枚でLv10は1枚だし、いい手だ。そして万丈目のデッキにはおじやまも入っていたようだ……今回は使わないのか？あ、イエローが出てきた。でも十代が気づいたらひっこめられている。可哀想に……

「俺は手札から『アームド・ドラゴンLv3』を召喚！」

アームド・ドラゴンLv3    ATK1200/DEF900

「そしてさらに『レベルアップ！』を発動！『アームド・ドラゴンLv5』を特殊召喚する！」

アームド・ドラゴンLv5    ATK2400/DEF1700

「そして手札の『竜の騎士』を墓地へ送り、The シャイニングを破壊する！」

「つく！」

「バトルだ！アームド・ドラゴンLv5でダイレクトアタック！  
アームド・バニッシャー！」

「うわあああつ！」

十代LP3400 LP1000

「カードを1枚伏せて、ターンエンドだ」

ふーん・・・万丈目もやるな。ここまで漫画版とアニメ版HERO達を苦しめるとは。やっぱりなれないカードを十代に渡したのはまじだったのか？って、ターンが進まないと思ったらなんか話し込んでいる。万丈目がノース校に着くまでの経緯を話すが・・・別にどうでもいい。

「俺は負けない！行くぜ万丈目！」

「万丈目さんだ！」

「俺のターンドロー！俺は手札から『E・HEROフェザーマン』を  
守備表示で召喚！」

E・HEROフェザーマン ATK1000/DEF1000

素材になるフェザーマンを召喚し、わざわざ出したのはその手札のためだろうか？十代

「さらに『命削りの宝札』を発動！カードを5枚になるようにドロ  
ー！」

ハンドレスからの5枚ドロ・・・さて、どうなる？

「手札から『融合回収』を発動！戻すのはエアーマンと融合！そして融合を発動！手札のワイルドマンとフェザーマンを融合！現れる！『E・HEROガイア』！」

・・・自分で言うのもなんだが、完全にアニメHEROの出番が消えたな。

E・HEROガイア ATK2200/DEF2600

「ガイアの効果発動！このカードの召喚成功時、相手のモンスターを指定してそのモンスターの攻撃力を半分にする！そしてその半分にした分の数値をガイアに加える！俺が選択するのは『アームド・ドラゴンLv5』だ！」

アームド・ドラゴンLv5 ATK2400/DEF1700 A  
TK1200/DEF1700

E・HEROガイア ATK2200/DEF2600 ATK3  
400/DEF2600

「バトルだ！ガイアでアームド・ドラゴンに攻撃！『コンチネンタルハンマー』！」

「さげんぞ！畏発動！『聖なるバリア・ミラーフォース』！」

「なんだって！？うわぁ！」

ガイアが破壊される。さて、このままだと十代の負けか？

「お、俺はカードを2枚伏せてターンエンド！」

「俺のターンドロ！俺は再び『レベルアップ！』を発動！アームド・ドラゴンLv7を特殊召喚する！」

アームド・ドラゴンLv7 ATK2800/DEF1000

ふむ・・・レベルアップの連続使用か。この方法は正規の召喚方法ではないから・・・もし『レベルダウン！？』を使っても戻せない。勝負に出る気か、万丈目

「バトルだ！アームド・ドラゴンLv7でダイレクトアタック！」

「畏発動！『ヒーロー見参』！さあ選べ万丈目！右か、左か！」

1枚は融合回収で戻したエアーマンのはずだ。なら、もう1枚はなんだ？

「・・・俺から見て左だ！」

「つまり俺から見て右側のカード・・・『E・HEROフォレストマン』を守備表示で召喚！」

「ちいい！うつつとうしい！攻撃再開だ！」

「畏発動『ヒーローバリア』！HEROへの攻撃を1度だけ無効にする！」

随分防ぐな・・・まあ、フォレストマンを召喚出来たのは利点。そして万丈目手札は0だ。これでは万丈目はメインフェイズ2でフォレストマンを破壊することはできない。

「っち！相変わらず運のいい奴め・・・ターンエンドだ！」

「俺のターンドロー！この瞬間フォレストマンの効果で墓地の融合を手札に加える！そして俺は手札から『ホープ・オブ・ファイフス』を発動！墓地のオーシャン、アブソルートZero、Theシャイニング、Great TORNADO、ガイアをデッキに戻して2枚ドロー！」

デッキの枚数も少ないな・・・果たして結果は？

「俺は手札からエアーマンを召喚！」

E・HEROエアーマン ATK1800/DEF300

・・・今日何度目の登場だ、エアーマンよ。精霊でないはずだが・・・肩で息をしているのがよくわかるぞ。恨むなら十代を怨んでくれよ？

「効果により俺はデッキから『E・HEROオーシャン』を手札に加える！そして『融合』！手札のオーシャンとフィールドのフォレストマンを融合！行くぞ『E・HEROジ・アース』！」

E・HEROジ・アース ATK2500/DEF2000

「攻撃力2500だと!?フンツ!なぜGreat TORNADOを召喚しなかったか疑問だな!」

「へへっ!万丈目……この最後の手札がもし、状況をひっくり返すカードだったら……面白いよな?」

「何を馬鹿な……この状況をひっくり返すだと!?!」

おいおい……まさか!?!

「手札から『ミラクルフュージョン』を発動!墓地のフェザーマンとバースト・レディを除外して融合!現れる!マイフェアリットモンスター!『E・HEROフレイム・ウイングマン』!」

E・HEROフレイム・ウイングマン ATK2100/DEF1200

ここでフレイム・ウイングマン?なんでここでそのカードを……

「馬鹿な!?!何故ここでフレイム・ウイングマンを……」

まったくだ。何故この状況でそいつなんだ?

「これは俺の証明だからだ」

「証明、だと?」

「万丈目、俺はこの戦い、一人で戦ってない。秋と一緒に戦ってる。アイツが俺に託してくれたカードと、俺のカード達の力で、お前を倒すってことの証明だ！」

十代・・・とてもいいことを言ってくれているのは嬉しいんだけど。それだとなんか・・・俺が死んだみたいな言い方なんだけど

「行くぞ万丈目！ジ・アースの効果発動！自分のフィールド上の『E・HERO』を生贄に捧げることで、その分の攻撃力を得る！俺は『E・HEROフレイルム・ウイングマン』と『E・HEROエアーマン』を生贄に捧げる！」

E・HEROジ・アース ATK2500/DEF2000 AT  
K6400/DEF2000

「攻撃力・・・6400だとお！？」

ジ・アースの身体が真っ赤に燃え、剣を携える。マグマのように燃え盛るその身体。

「行くぜ！バトルだ！ジ・アースでアームド・ドラゴンレベル7に攻撃！『アース・マグナ・スラッシュ地球灼熱斬』！」

「ぐ、ぐああああああっ！」

万丈目 LP1400 LPO

歓声が巻き起こり、十代がガッツポーズをする。そして俺達の方に親指を立てるので俺も同じように返してやった。さてと・・・



「準！なんというざまだ！」

万丈目の兄貴達が万丈目を責め立てる。やれやれ・・・

「（ミラ？）」

『はい。ちゃんとカメラ回してますよ〜』

・・・特別何かしてやることはできないが、ああいう奴らのせいで周りの連中が気分を悪くしてるからな。俺も気分悪いし。するとテレビのスタッフが慌て始める。

「お、おい！どうなってるんだ！カメラが回ってるぞ！」

「「！？」」

驚く万丈目兄弟。まあ、そりゃ驚くわな。そして万丈目兄弟へブーイングが巻き起こる。

「帰れ帰れー！万丈目！よくやったぞー！」

「サンダー！万丈目サンダー！」

万丈目へ向けて、両方のアカデミアから声援が送られる。そして兄の1人が携帯を取り出して顔を真っ青にしていた。

・・・後日、あの放送のせいで兄二人がそれぞれの業界で大打撃を受けたのは言うまでもない

数日後

「ほら、秋！」

「ん？」

十代が俺にデッキを返しに来た。

「なんだ、いらないのか？」

「別に俺はくれなんて言っていないぜ。それに、俺には俺のHERO達が付いてるからな！」

「・・・そっか、じゃあ返してもらっておくよ」

そのカードを受け取る。うん、みんなお疲れ。特にエアーマン、本当にお疲れ様

「さ、飯行こうぜ飯！」

「ああ」

こうして歩く俺と十代。なにか・・・後ろで視線を感じる。後ろを振り返ると誰もいない。なんだっただらろうか？

Side Out

「ど、どう!?!」

一人の女子生徒がカメラを手にしていた。

「ばっちりよ!」

陰に隠れていたのは数人の女子生徒たち。そしてその手にあるカメラに映ってるのは十代と秋である。

「はあはあ・・・十代君×秋君・・・いい」

「これで次のイベントまで困らないわね・・・!」

彼女達は男性愛好会。要するに腐女子である。

「さあ、どんどん続けるわよ!私達の誇りに賭けて!」

「」「」「おー!」「」「」

と、勢いづくメンバー達。だが、彼女達は気づかない。後ろに修羅と化した3人の女子生徒達がいることを

・・・数日後、男性愛好会の写真は全て没収された。

## 己の誇り（後書き）

ノース校編終了。もう少しでセブンスターズ編です。  
長い・・・泣

## 光と闇（前書き）

というわけで、セブンスターズの前に遺跡の話です

書いていてサラをどうにかTF3のようにしてあげたく、完全に原作ブレイク。だったんですが・・・これ、なんか別の人の小説に被ってるや・・・

ホントスイマセン。無意識に書いてたらこんなことに・・・でもTFやってたらこうしたい人はいるはず・・・なのか？

まあ、そんなわけで・・・

秋「今日の最強カードは『墓守の暗殺者』だ」

「王家の眠る谷・ネクロバレー」がフィールド上に存在しなければ発動できない。

このカードの攻撃宣言時、相手表側表示モンスターの表示形式を変更する事ができる。

ネクロバレーがあればかなり強力なカードだ。そしてネクロバレーの単価が高い！

そしてあいつらが登場！『武藤秋』の運命はどうなる！？

## 光と闇

今日は楽しいピクニック・・・なはずあるかぁ！今日って遺跡探検の日だろっ？あー・・・やだやだ。なんでこの暑苦しい日にピクニックなんだ。

「秋、大丈夫？」

「ん？ああ。雪乃とツアンは平気か？」

「ええ、大丈夫」

「僕も平気」

メンバーはいつも通りだ。大徳寺先生が企画したこれに参加する俺達。俺は元々行きたくないと思っただが、二人が行きたいと言い出した。理由はまあ、だいたいわかるけどさ

「さて、お昼にするのじゃー」

目的地に着いてお昼を食べる。が・・・

「秋、ほら・・・あーん」

「・・・あーん」

最近慣れたな、これ・・・

「今度はこっちーアーン！」

「あーん」

「き、貴様ら！一体何をしている！」

万丈目が何故かキレた。どうした万丈目、なにかおかしいことでもあるのか？

「おかしすぎるだろうが！貴様らは何とも思わないのか！」

と、十代達に言うが、頷く十代達。そして口をそろえて・・・

『慣れた』

「なんだそれはあー！」

まあ、万丈目は俺達が恋人同士になってるのを知らなかったからなしょうがないと言えましょうがないだろう。

「文句言うなら僕たちが作った弁当食べないでね。そのまま餓死して死ねばいいのよ」

「っぐ！ツァン君、しばらく会わないうちに随分辛口になったな・・・」

まあ、最近はねえ・・・。しばらくすると異変が起き始めた。太陽が3つに分かれ始めた。っち！これが異変か・・・！

「みんな遺跡に逃げるのにゃー！」

大徳寺め・・・ツアンと雪乃を巻きこむわけにはいかない！

「ツアン、雪乃！このまま真っ直ぐアカデミアの方角に逃げるんだ！」

「え！？秋ちよつと・・・」

「マハード！」

「緊急事態だ、しかたがない！」

マハードが姿を現し、ツアンと雪乃を抱える。

「なっ！？どうなっているの！？ブラック・マジシャン！？」

「これはいつたい・・・って飛んでる！？」

十代達は既に遺跡の中のような。だが、そこで問題が起きる。遺跡ごと俺達を包もつとしたオーロラがあまりに巨大だったのだ。

「しまった！」

「きゃあ！？」

「なにこれ！？」

「っぐ！」

外にいた俺達もそのまま巻き込まれてしまう。そこで俺は意識を失った。



Side 雪乃

「……………ここは、いったい？見たところ遺跡みたいね。起き上がると、ブラック・マジシャンがいた。」

「あなたはさっきの……ブラック・マジシャン」

「目が覚めたか……初めましてと言っておこうか。私はブラック・マジシャン……名はマハードだ」

「マハード……ね、貴方は秋のカードから出て来たけど……」  
「一体どういうことかしらね。十代がカードの精霊の話をしていると、いうことを聞いたことはあったけど、まさか？」

「察する通り、私はカードの精霊であり武藤遊戯のカードの精霊だ。今は秋殿を支えている」

「やっぱり、そういうことね……」

「……はどのなの？」

「精霊界だ……だが、いくつか存在する精霊界の一つと言っておこうか」

「流石は最高クラスの魔法使いね。わかりやすい説明だったわ。」

「なら、秋や十代の坊や達もここに？」

「うむ、そのようだ・・・と言いたいところだが、秋殿だけ気を感じることが出来ない」

心配ね・・・あの時のことを冷静に思い返せば大徳寺先生の行動やどこか怪しいわ。なぜ遺跡から離れず遺跡に入ったのか？冷静になれば逃げ出す場所を選ぶこともできたはず。どこか、引っ掛かるわ

「ううーん・・・」

「ツアン、起きたのね」

「雪乃・・・と、ブラック・マジシャン!?」

とりあえずツアンにも事情を説明し、中へ進む私達。秋、無事できて欲しいわ。しばらく進むと、兵士たちの様な姿があった。どこか・・・見たような姿ね。

「む・・・」

「どうしたのマハード」

「彼らは・・・姿こそ少し違うが、墓守の一族だ」

墓守の一族・・・ああ、あのネクロバレーを使うとどえらいことになる魔法使い族たちね

「だれだ！」

突然マハードが杖を向ける。そこにいたのは褐色肌の女性。この人は一体？

「……私はサラ。墓守の暗殺者だ」

「私はブラック・マジシャン……名はマハード」

「安心してくれ、私は敵ではない。警告しに来たのだ。即刻、ここを立ち去れ」

言われなくても立ち去るわよ。って、そのバッグは！

「それは十代の坊やのバッグね。私達の仲間はどこにいるの？」

「……彼らは、墓荒らしとして捕まった。生き埋めにされるだろう」

「それって殺すってことじゃないの！」

ツァンの言う通りね……でもツァン、こんな遺跡の中でそんな大声なんか出したら……

「誰だ！そこにいるのは！」

ほらやっぱり……すぐに兵士たちが駆けつけちゃったじゃないの。囲まれたわね

「マハード、貴方の力でどうにかできないの？」

「この精霊界では何故か思うように魔力を出せない。1発が限度だ」

じゃあ無理ね・・・その1発は後に取っておくべきね。

「私は藤原雪乃、こっちはツァン・ディレ・・・私達の友人と恋人を返してちょうだい」

「お前達は墓荒らしとして処刑されるのだ。生きたまま石棺の中、葬り去られる。それがここの掟だ」

・・・まずいわね。槍を向けられて何もできないわ。長のような男が持っているのはカードじゃないかしら？なら、突破口があると考えるべきね

「掟、ね・・・なら何か私達はその掟を覆せるチャンスくらいあるんじゃないの？」

「ほう？確かにある・・・儀式だ」

やっぱり、決闘デュエルなのね。

「雪乃殿、このデッキを」

「これって・・・」

渡されたデッキケースは・・・これって、シンクロデッキ!?

「秋が直前に私に投げた物だ。何かのためにだろう」

じゃあ秋はどうしてるの!?急がなければ・・・!

「決闘デュエルよ!私の大事な人と友達を返してもらおう!」

「いいだろう」

棺に納められそうになっている十代の坊やたち。でもおかしいわ。秋の姿がない！

「明日香！無事ね！？」

「雪乃！ツアン・・・と、ええ！？ブラック・マジシャン！？」

「話は後！秋はどうしたの！？」

「秋？貴方達と一緒にじゃないの！？」

「どういふこと・・・！？」

「決闘デュエルの前に聞かせて・・・捕まえたのは彼らだけ？」

「そうだ」

「どういふことなの？まさか、秋だけ別の精霊界へ？」

「さあ、始めようか」

「つく！」

今は考えるよりも行動だわ・・・行くわよ！

「決闘！」

S i d e 秋

・・・うつ。ここは一体？

「ててて・・・」

目の前に広がるのは古の森のように輝く場所だった。あるえ？確か遺跡に行くんじゃないのかよ・・・でも、俺はこの森を知ってるな。

・・・

「やっぱりな・・・武藤秋、お前がいた場所だ。で、お前か」

相変わらず光だけの精霊。お前はなんなんだ？

「お前は・・・何のカードだ？」

光は答えない。そして近くに、武藤秋を見つける。

「武藤秋」

「・・・誰？」

顔を見ると驚いた。俺と瓜二つなのだ。目の色こそ違うものの、ほぼ俺と一緒に。ATMなんかのように背の差も違わぬ。俺自身が目の前にいる

「僕が、いる？」

「・・・俺の名前は、城戸秋」

「僕は、武藤秋・・・不思議だね、顔だけじゃなくて名前も同じなんだ」

まるで自分自身と会話しているようだ。なんとも不思議な感じだ。

「今は、俺が武藤秋になってるけどな」

「え？」

俺は今起こっている出来事を話した。武藤秋は驚きながらも俺の話に熱心に聞いていた。

「じゃあ、君が僕としてあの世界で？」

「ああ、俺は武藤秋としてデュエルアカデミアにいる」

「そっか・・・凜は元気？」

「ああ、お前のことが大好きだったのがよくわかる」

そっか、と再び言うと、武藤秋は俺を見る。

「城戸さん、お願いがあるんだ」

「お願い？」

「あの世界で、僕として生きてくれないか」

・・・なに？

「どういう意味だ」

「僕はあの世界にはいられない・・・いられるだけの力も、勇氣もない・・・」

・・・

「断る」

「えっ・・・」

「俺はお前じゃない。俺は俺自身だ。お前の我がままで俺はこの世界に来て生きている。確かにお前は自分の世界を拒んだ。だが、だからと言って俺を巻きこむのはどうなんだ？」

俺の言葉に、何も言えない武藤秋。

「だって・・・しょうがないじゃないか！」

「何？」

「僕はあの世界で生きていくには弱すぎる！カードが全てを決めるあの世界で！僕がどれだけの仕打ちを受けたのか君も知っているだろう！？」

・・・確かに知ってる。こいつが受けて来た仕打ちを

「遊戯兄さんのせいとは言わないさ！でも伝説の決闘者の従弟だか



らって強いわけじゃない！僕は僕の日常を生きて生きたいだけなんだ！それなのに！それなのに！」

「なっ……！？」

武藤秋の身体から何か負のオーラらしきものが出る。なんだこれは……！？

『ソウダゼ、相棒……オマエハ悪クネエンダ……オマエハココニイテイインダゼ』

あの姿……あの2つの影……おいおい！まさか！

「お前は、マリクの闇人格！？それにバクラ！？」

「なんだあ……俺様たちのことを知ってるのか」

「まさか俺達を知る人間がいるとはなあ……」

なんでこいつらが……

「お前らは遊戯に負けて消えたはずじゃ……」

「ククク……残留思念つてやつだなあ……俺達は時期に消える運命だったんだ。だが、こないいい所に闇を持つてる奴がいてよお」

まさか……あの武藤秋から流れ出る力はアイツ自身の闇なのか！？

「僕はここにいたいんだ……！僕は！僕はあ！」

「ぐあつ……！」

闇の力に吹き飛ばされる。つく……どうすれば……！

私を使ってください……

「これは……」

デッキケースが光る。このカードは！？光が形成され1枚のカードが出来上がる。マハードもミラもマナもない！こいつに頼るしかない！

「エレメンタルマスター 精霊術師 ドリアード』を召喚！」

ドリアードが姿を現す。これが……武藤秋の精霊だったのか！ドリアードが5つの光の球体を出現させ、壁を形成させた。その結果によって闇は逸れる。

「ちいい……また俺様達の邪魔をするのか」

秋……闇に負けないで……

「俺達の力は今じゃホワイト以下だ……引くしかねえなあ……」

3人の後ろに闇が現れる。逃げるつもりか！

「待て！」

「いずれ戦ってやるさ……こいつが真の闇に目覚めれば、俺様達はこの身体の宿り、戦うことができる」

「こいつとこいつとなり、最強の闇になる……そして武藤遊戯に再び復讐する」

段々と消えていく3人

「つく！待て！俺と戦え！俺と、俺とデュエルしろおおおおお！」

俺が叫ぶも、3人は闇の中へと消えて行った。

「ドリアード……すまない」

……貴方のせいではありません

「だが……俺があんなことを言わなければ」

いいえ……貴方の考えは正しいのです。あの子は、深い闇の中にある

だが……

「アイツがあの世界に戻るとは、もう俺には思えない」

それは、分かっています。きっと、あの世界で生きていくことは不可能に近い。でも、それでも……信じてあげたい……私の主を……

アイツの居場所を、俺が奪ったも同然だな。あの世界には……もうアイツを待つ人はいない。

「ドリアード、俺は本当に俺自身の世界には帰れないのか？」

「……それはわかりません。一つ気になったのですが……  
・貴方がこの世界に来た原因があるのではないのでしょうか？」

俺の、原因……？」

肉体と精神はそう簡単に離れたりするものではありません。何が現状を引き起こした……そう考えるべきだと思います。

そんなこと言われても気が付いたら武藤秋になってたしな……

秋になる前の記憶は？」

秋になる前の記憶？そりゃ……なんとも平凡な日常で。もうすぐ就職だから大学の研究の集大成に入って……あれ？」

「大学の研究の日までは思い出せるのに……どうしてだ！？その後の記憶がない！？」

思い出せない！この世界にいる理由も、この世界に来る直前のことも！どうして……思い出せないんだ……

……世界が揺れています。貴方はもう、戻らないと

「わかった……すまない」

いいえ……主も心配ですが、あなたも心配です。気を付けてくださいね

「ありがとう、ドリアード」

俺が言うと、ドリアードは静かにその場から姿を消し、俺の手からもカードは消失してしまった。俺の意識はまた薄れていく。

……俺はどつすればいいんだろうか……ワカラナイ

光と闇（後書き）

というわけで顔芸と盗賊登場！  
次回、遺跡編終末

秘めたる想いは世界を超えて（前書き）

というわけで遺跡編終了

頑張れ雪乃、めっちゃ頑張れ

秋「今日の最強カードは『王家の眠る谷 - ネクロバレー』」

このカードがフィールド上に存在する限り、お互いのプレイヤーは墓地のカードに効果が及ぶ魔法・罠・効果モンスターの効果を無効にし、墓地のカードをゲームから除外する事もできない。

また、このカードがフィールド上に存在する限り、フィールド上の「墓守の」という名の付いたモンスターカードの攻撃力・守備力は500ポイントアップする。

墓守強化のとんでもないカードです。単価も高いので作ってる人のデッキはかなりお金がかかってるはず・・・

秘めたる想いは世界を超えて

S i d e 雪乃

「<sup>デュエル</sup>決闘！！」

「儀式を始める！」

雪乃            LP 4000

墓守の長       LP 4000

「先攻はもらうわ！私のターンドロー！」

秋が私達にカードを託してくれたんだもの。ツアンも私に任せてくれた。なら、私も期待に答えなくちゃいけない

「私は手札から『カードガンナー』を召喚するわ」

カードガンナー    ATK 4000 / DEF 4000

「カードガンナーの効果を発動。1ターンに1度、カードを3枚まで墓地へ送る。そして送った枚数×500ポイント、エンドフェイズまで攻撃力が上がる」

カードガンナー    ATK 4000 / DEF 4000    ATK 19000 /  
DEF 4000

落ちたのは・・・ボルト・ヘッジホッグ、ミラフォ、シールド・ウ



イング・・・ミラフォが落ちたのは痛いわね

「カードを2枚伏せ、ターンエンドよ」

カードガンナー     ATK1900 / DEF400     ATK400 /  
DEF400

「私のターンだ！ドロー！モンスターをセット、カードを2枚伏せてターンエンドだ！」

あら・・・てつきり攻撃してくると思ったのだけれど。それにしても慣れないデッキなのにこうも分かりやすいデッキだなんて・・・秋は流石というべきかしら？他人のデッキってその人の癖とかがあるから使いにくいのよ？

「私のターンドロー！」

あの伏せモンスター・・・どう潰すべきかしら？

「カードガンナーの効果を発動するわ！」

カードガンナー     ATK400 / DEF400     ATK1900 /  
DEF400

落ちたのは・・・よし、グローアップ・バルブ、星屑のきらめき、レベル・ステイラー・・・！秋のデッキの回し方は大体把握している。これならいけるわ！

「私は手札から『ジャンク・シンクロン』を召喚するわ！」

ジャンク・シンクロン ATK1300/DEF500

「そしてジャンク・シンクロンの効果発動！召喚に成功した時、レベル2以下のモンスターを特殊召喚出来るわ！来なさい、ボルト・ヘッジホッグ！」

ボルト・ヘッジホッグ ATK800/DEF800

「レベル2のボルト・ヘッジホッグと、レベル3のカードガンナーにレベル3のジャンク・シンクロンをチューニング！」

2 + 3 + 3 = 8

「チューニング！？なんだそれは・・・」

あら？カードの精霊も知らない召喚方法なのね？これ

「王者の鼓動！今ここに烈を成す！天地鳴動の力を見るがいい！シンクロ召喚！我が魂！『レッド・デーモンズ・ドラゴン』！」

初めてシンクロ召喚の口上を並べたけど、これ結構恥ずかしいわね。いつも秋はやってるけれど・・・

レッド・デーモンズ・ドラゴン ATK3000/DEF2500

「バトル！レッド・デーモンズ・ドラゴンで攻撃よ！『アブソリュート・パワー・フォース』！」

「リバーズ発動！」

伏せていたのは……っ！墓守の番兵！

「このカードは、リバーズした時相手のモンスターを1体選択して手札に戻す！『レッド・デーモンズ・ドラゴン』を選択！」

「つく……カードを1枚伏せ、ターンエンドよ」

「私のターンドロー！」

「落ちついて雪乃！」

そ、そうだったわ……伏せモンスターを警戒せずに……私としたことが！

「私は手札からフィールド魔法『王家の眠る谷・ネクロバレー』を発動！」

しまった……もう発動された！

「そして、手札から『墓守の暗殺者』を召喚！」

墓守の暗殺者 ATK1500 / DEF1500 ATK2000  
/ DEF2000

「さらにバトル！墓守の暗殺者で直接攻撃！ゆけい！」

「させると思う？罠発動！『攻撃の無力化』！」

「残念だがそれは無効だ！罠発動『トラップ・ジャマー』！」

攻撃の無力化が破壊され、私は墓守の暗殺者に斬りつけられる。っ  
ぐ……これは！

雪乃 LP4000 LP2000

「雪乃！」

「だ、大丈夫よ……」

痛みが本物……これは、かつて秋が行った闇の決闘！ダメージが  
現実になるというのね。痛い、わ……

「カードを1枚伏せ、ターンエンドだ」

なんとかしなければ……

「私のターンドロー！」

来た！

「私は手札から『サイクロン』を発動！ネクロバレーを破壊するわ  
」！

「な、なに！？」

厄介なカードが消えた。ここから反撃できる！

「さ、さらに手札から『デブリ・ドラゴン』を召喚！」

デブリ・ドラゴン ATK1000/DEF2000

「そして効果発動！攻撃力500以下のモンスターを蘇生させる！私は『カードガンナー』を蘇生させる！ただし……効果は無効化されるけどね」

カードガンナー ATK400/DEF400

くらくらする。このまま一気に決めるわ。秋が心配なもの

「そして、墓地からモンスターが召喚されたことで手札から『ドッペル・ウォリアー』を特殊召喚する！」

ドッペル・ウォリアー ATK800/DEF800

これで条件は揃った。保険のためにも……この手札のカードを使うべきね

「さらに手札から命削りの宝札を発動するわ！カードを5枚になるようにドロロー！5ターン後に全て捨てる」

「ほう……自らリスクを背負うとはな」

「問題ないわ。このターンで決めるもの」

「それは楽しみだ（私の伏せにはミラーフォースがある。問題はな  
い）」

何か企んでいるようだけど、バレバレよ？

「レベル3のカードガンナーと、レベル2のドッペル・ウォリアー

にレベル4のデブリ・ドラゴンをチューニング！」

3 + 2 + 4 = 9

「破壊神より放たれし聖なる槍よ、今こそ魔の都を貫け！シンクロ召喚！『氷結界の龍トリシューラ』！」

氷結界の龍トリシューラ ATK2700 / DEF2000

「トリシューラのモンスター効果！召喚に成功した時手札、墓地、フィールドから1枚ずつカードを除外する！貴方の左の手札、フィールドの伏せカード、墓地のネクロバレーを除外！」

除外された伏せカードは・・・やっぱり、ミラフォネ。

「そしてドッペル・ウォリアーが素材となった時、トークンを2体召喚するわ！」

ドッペル・トークン？ ATK400 / DEF400

ドッペル・トークン？ ATK400 / DEF400

「そして！『リビングデットの呼び声』を発動！墓地のデブリ・ドラゴンを蘇生！そしてチューナーが居る時、ボルト・ヘッジホッグを蘇生する！」

デブリ・ドラゴン ATK1000 / DEF2000

ボルト・ヘッジホッグ ATK800 / DEF800

「レベル1のドッペル・トークン2体と、レベル2のボルト・ヘッジホッグに、レベル4のデブリ・ドラゴンをチューニング!」

1 + 1 + 2 + 4 = 8

お願い、力を貸して・・・秋!

「集いし願いが、新たに輝く星となる!光差す道となれ!シンクロ召喚!飛翔せよ!『スターダスト・ドラゴン』!」

スターダスト・ドラゴン ATK2500/DEF2000

確実に倒さなければいけない・・・このまま決めるわ!

「さらに手札から死者蘇生を発動し、『ジャンク・シンクロン』を蘇生させるわ!さらにトリシューラのレベルを一つ下げて『レベル・ステイラー』を特殊召喚!」

ジャンク・シンクロン ATK1300/DEF500

レベル・ステイラー ATK600/DEF0

「レベル1のレベル・ステイラーとレベル3のジャンク・シンクロンをチューニング!」

1 + 3 = 4

「来なさい!アームズ・エイド!」

アームズ・エイド ATK1800/DEF1200

これで勝てる！

「アームズ・エイドの効果により、スターダスト・ドラゴンにアームズ・エイドを装備！これによりスターダスト・ドラゴンの攻撃力は1000ポイントアップ！」

スターダスト・ドラゴン    ATK2500 / DEF2000    ATK  
K3500 / DEF2000

「バトルよ！トリシューラで墓守の暗殺者を攻撃！『アイシングフレア』！」

「ぐおおおお！」

墓守の長    LP4000    LP2800

「これで終わりよ！スターダスト・ドラゴンでダイレクトアタック！『シューティング・ソニック』！」

墓守の長    LP2800    LP0

か、勝った・・・

「やった雪乃の勝ちだわ！」

「はあ、はあ・・・私の勝ち・・・仲間を解放してくれる？」

「よかるう、掟だからな。試練を乗り越えた証だ。受け取るがよい」



渡されたのは古風のペンダント・・・綺麗ね。

「それは特別なものでな。もし闇の決闘をまた受けることになった時、お前の助けになるだろう」

「そう、闇の決闘はもうこりこりだけど・・・受け取っておくわ」

長と暗殺者の二人に案内され遺跡の外へ・・・変だわ

「ねえ、本当に捕まえたのは彼らだけ？」

「うむ・・・他に連れがいるのか？」

「ええ・・・私達の恋人がいないの。黒髪で黒眼のそっね・・・私より背が高い男の子なんだけど」

「捕えたのは彼らだけだ・・・他はわからぬ」

秋・・・どこにいるの？

「雪乃、とりあえず精霊界を脱出しよう」

「マハード・・・秋を見捨てるの!？」

「そうではない・・・ここにいないとなれば、あのオーロラに巻き込まれなかった可能性がある。もしくは、別の精霊界にいる可能性もな」

別の、精霊界・・・秋がそちらにしていると信じたい。ここにいないな

ら、可能性はそれだけだもの

「でも、どうやって帰るの？」

十代の坊やの近くにハネクリボーがいるわ……なるほど、アレもカードの精霊なわけね

「天の3つの光、1つに重なりし時光の幕が現れる前に、王家の墓の門より出でよ」

つまり、また太陽が重なったら出られると……そういうことね。突然足跡が聞こえた。何かしら……

「王家の墓を荒らす者には裁きを！」

『裁きを！』

「お前達やめないか！この者たちは試練を乗り越えたのだ！」

長が叫ぶけど、声は聞こえてないみたいね。

「こつちだ、急げ！」

墓守の暗殺者に連れられ、走り出す私達。秋……どこにいるの

「裁きを！裁きを！」

「しかたがない……」  
『ブラック・マジック  
黒・魔・導』！

黒・魔・導が近衛兵にぶつかると、人がドミノ倒しみたいになる。さ

すがね。なんとか走り切り門まで来た。光が走る。これね・・・！

「雪乃、貴方達の世界に帰ったら、その半身のアイテムを持っている人に伝えて欲しい。サラは例え異世界に居ても、貴方の事を忘れません。またいつかお会いできる日を信じていますと」

一途な思いね・・・でもその願い、私は聞き入れない

「自分の想いは自分で伝えるものよ？私と来なさい」

「駄目だ、私には墓守としての使命が・・・」

「自分の使命と恋を天秤にかけるなんて間違っているわ！ほら！早く！」

私は強引に腕を引っ張り、門の方へ駆けだす

「は、離せ！私は・・・」

「ああもう！マハードお願い！」

「ふっ！」

マハードが墓守の暗殺者の首を叩く。そして緑色の光が私達を包み込んだ。

.....

「じっは」

目が覚めると、全員が遺跡の外にいた。戻ってきたのね……

「あら？」

近くに落ちていたカードを見つける。『墓守の暗殺者』……サラのカードだわ

「サラ、いるんでしょう？」

『雪乃……』

精霊となったためか、半透明のサラ。怒ってるのと嬉しいのが混ざった何とも複雑な表情ね。マハードも近くにいる。私はどうやら精霊が見えるようになったのね。十代の坊やのハネクリボーも見えるもの。

「そっだ……秋！」

周囲を見渡す。すると木の近くに横たわって気絶していた秋を見つめる。私とツァンは急いで秋の元へ駆け寄った。

「秋！秋！しっかりして！」

「秋！起きてよ！ねえ！」

「うっ……うん？雪乃？ツァン？」

目を覚ました。良かった！良かった！私とツァンは思い切り秋に抱きついた。そして自然と涙がこぼれる。あんな怖い思いはもうごめ

んだわ……

「う、うう……うえええ」

「雪乃！？ツアン！？いったいどうしたんだ……！？」

「心配させないでよ、馬鹿ああ！」

とりあえずしばらくこうしていきましょう。大切な人の温もりを感じていたいから。

Side 秋

アカデミアに帰った後、寮で二人はすぐに眠りについた。遺跡のことがよほど怖かったのだろう。緊張の糸が切れたようだった。

「で、なんで君がここにいるのかな？ 『墓守の暗殺者』」

フードを取っている所見ると、確かサラという精霊だった気がする。この世界には来ないようだったが……

『雪乃に無理やり連れて来られたのだ……マハードの主はお前か』

「ああ、そうだ。ついでにミラとマナもな」

『おかげで使命を全うできなくなった』

ため息をつくサラ。まあ、いいんじゃない？ 頑張って想い人に想いをぶつけるんだな。

『秋殿、秋殿はあのオーロラの中でどこへ?』

「・・・面倒なことになったんだ」

俺はマハード、マナに武藤秋のことについて話した。そしてマリクの闇人格、バクラについてをな。

『まさか・・・マリク・イシュタールの闇人格とバクラの魂が武藤秋殿に取り付いているとは』

「あいつらの最終目的は遊戯への復讐だ。王様がいなくても、遊戯に復讐したいんだろうな」

『お師匠様・・・また、あの人が出てくるんですか』

ま、考えていても仕方がない。今日は寝よう。疲れた

「・・・え」

ベッドに入った瞬間、ベッドにいた雪乃とツァンに引き込まれた。もしかして今日、これで寝るの？

「すー・・・すー・・・」

「くう・・・くう・・・」

どうやら反射的に俺を捕えたらしい。恐ろしい奴らめ・・・まあ、今日ぐらいいいか

「お休み、雪乃、ツァン」

こうして俺は深い闇に落ちた

秘めたる想いは世界を超えて（後書き）

ってなわけで、サラTF3の通り、吹雪と再会なるか!？

サラの恋の行方も楽しみに!

次回、とうとうセブンスターズ編突入!



## 戦いの始まり（前書き）

やっとセブンスターズ編です

明日からキャンプです・・・うわー・・・やってられないorz

秋「今日の最強カードは『真紅眼の黒竜』か」

真紅の眼を持つ黒竜。怒りの黒き炎はその眼に映る者全てを焼き尽くす

攻撃力2400のバニラ・・・城之内のエースカードです

何故竜崎は恐竜デッキにこのカードを入れていたんだろっか

## 戦いの始まり

Side秋

あいかわらずの授業と日常。この前の闇の決闘からか、二人はさらに俺から離れなくなった。最近ではベッドは一緒に3人で寝るしまつである。

「秋君、聞いてるかにゃ〜？」

「聞いていませんでした」

授業中だったな。大徳寺先生が目の前で立ってた。

「そう面と向かって言わないで欲しいのにゃー・・・あそこで寝てる十代君より性質が悪いのにゃー」

十代は爆睡中である。さつき鮎川先生にぶつたたかれてなかったか。するとチャイムが鳴った。午前授業の終了を知らせるチャイムだ。今日は午前授業だけだったな・・・

「今日はここまで！このあと、十代君、秋君は残るのにゃー」

しょうがない、相変わらずの馬耳東風でやり過ぎそう。先生の説教そんなに怖くないしな。残ったのは俺と十代と、俺達を待ついつものメンバー。俺、雪乃、ツアン、十代、翔、隼人、明日香、カイザー、三沢、そして何故かクロノス

「揃ったニャー・・・それじゃ、みんなで校長室へ行くにゃー」

校長室？・・・・・・・・あぁ、セブンスターズか

「俺パス」

「コロコロコロ！逃げたら駄目なのじゃー」

出てこうとしたらどこからか現れたファラオにのっかられてしまった。ぐおおおお！この豚猫！重いんじゃぼけー！

「諦めた方がよさそうね・・・早く用事済まさないとか飯食べれな  
いわ」

「僕は早くご飯が食べたいわ」

「・・・・・・・・そつだな」

もう諦めるしかない感じである。こうして一同は校長室へ向かうの  
だった。

校長室

「・・・・・・・・三幻魔のカード」

校長が突然そんなことを言い出した。セブンスターズが現れたとい  
うことらしい。そしてここにいるメンバーに戦って欲しいとのこと

「どうですか、皆さん。戦ってくれますか」

どうと言われましてもねえ……元々俺はイレギュラーだし……  
って大徳寺先生！アンタは何故一線身を引いている！？

「先生は辞退して、秋君に任せるのにやー」

アナヘイムめ、この野郎……どうあつても俺を巻きこむつもりか。  
十代、万丈目、明日香、三沢、カイザー、クロノスが鍵を取った。  
最後の一つ……それが俺になるわけか

「秋君、どうですか？君は」

「……質問いいですか？」

「どっぞ」

「この鍵を取った時点で戦いから逃れなくなるのはいいとします。  
でも、俺の周りにいる人間たちも巻き込まれる……そういうこと  
ですよ？」

俺の言葉に、ハツとする一同。考えなしかお前ら。だから面倒なこ  
とになるんだろ

「当然、そんな怪しい集団と戦うわけですから……決闘デュエルだって普  
通じゃないはずだ。その辺はどう思ってるんですか？校長」

「……む、確かに、危険はあるでしょう。ですが……」

「その危険で俺達に万が一のことがあつた時はどうするんですか？  
そんな大層なカードですよ？決闘以外でもカードを手に入れようと  
するんじゃないですか？だったら『命』にだって関わることだ。そ

んなもんを生徒に任すんだったらいつそ壊した方が安全だし、戦いをしなくてもすみすよね？」

俺の言葉に黙る一同。だが校長は引かない

「しかし、これが伝統なのです。その伝統を破るわけには……」

「ならお断りします。俺は雪乃とツァンを巻きこむつもりはありません」

そう言つて俺は部屋を出る。昔の俺なら、迷わず鍵を取っただろう。だが、今俺には守るべき人間がいる。そいつらを巻き込むわけにはいかない。俺は、強い人間ではないのだから

S i d e 雪乃

校長室で話を聞いていた私達。秋の言葉から出る怒気に、全員が押し殺されていた。

「ならお断りします。俺は雪乃とツァンを巻きこむつもりはありません」

「あ、待ってよ秋！」

ツァンが秋を追って外を出た。私は鍵を見て、それを手に取る

「藤原君、君がこの鍵を持つのかね？秋君が何と言つか……」

「この鍵を守るのには私ではありません……秋です。なんとか渡し

て見せますから、私に預かせてもらってよろしいですか？」

「それは助かります。彼の協力は絶対だと、私も思っているのです……気に入らないわ。私達は誰かの手で踊らされている。そうとしか思えない。大徳寺先生、校長は何らかに関与していると考えてよさそうね。そして秋は私達を心配してああ言ったのでしょうけど、私としてはやっぱり戦うべきだと思うわ。」

「では失礼します」

そう言っつて部屋を出る私。多分食堂ね……早く秋のところに行っつてお弁当を食べさせてあげなきゃ

Side秋

帰ってから、雪乃が俺に鍵を差し出した。なぜ、これを……

「秋、これは貴方が持つべきよ」

「あんな、校長と俺の話聞いてたか？俺は……」

「もし持たないなら、私が持つ」

強い口調で、雪乃がそう言った。そして言葉を続ける

「私だつてオベリスクブルーですもの。腕に多少の自身はある」

「そうじゃない！この決闘だつてただことじゃないだろう！」

間違はなく、闇のゲームのはずだ。こいつらを巻き込みたくない。

「わかってるわ・・・でも、私はあなたに逃げて欲しくない。私が望んだ秋は、そんな秋じゃないもの」

「雪乃・・・っ!？」

雪乃が迫り、俺に抱きつく。そして唇を重ねた

「ん・・・」

「ゆき、の・・・?」

「お願い秋・・・私達のために、戦って頂戴・・・逃げないで、戦って」

「雪乃・・・」

強く抱きしめられ、身体が重なり合う。雪乃は、俺に逃げて欲しくないと言った・・・俺はこの前の一件で雪乃達が傷ついたのを見た。それがその場にいることができない自分が許せなかった。

「・・・わかった」

鍵を受け取り、雪乃を強く抱きしめる。が、後ろから殺気が来た。

「ゆき〜の・・・」

「あら、起きてたの?」

後ろに仁王立ちしたツアンがいた。

「ずるいじゃない！僕もする！」

そう言って抱きつくツアン。まったく・・・

「どうしてこうな・・・っ!？」

突然光が迸る。

「きゃあ!？」

「な、なに!？」

「ぐっ・・・」

光を受け、気を失う。これは、まさか・・・

・・・熱い。ここは、いつたい

「ぐっ・・・」

「目が覚めたか・・・」

目の前にいる男・・・そしてここはアカデミアの火山地帯！

「秋!」



「お前は……」

「我が名はダークネス。鍵を持つ者よ、私とデュエルだ」

原作とは違い、俺がその場にいる。何故かサラのペンダントを握りしめて。これはどういうことだ……！？雪乃とツァンは……つく！翔と隼人に位置にいるのか！

「二人を離せ……」

「彼女達は大事な人質だ……」

「俺がデュエルを受ければいい話だろ。二人を離せ」

「私に勝てば、彼女達を解放しよう……更に、貴様と私……どちらか負けた方はその魂をこのカードに封印される。お互いの魂……いや、命をも賭けて我々はこの決闘デュエルに挑まねばならない。それが、この私の間の決闘デュエル」

……この野郎

「御託はいい！かかって来い！」

「決闘デュエル！」

S i d e 雪乃

……まさか、ここまで危険なことだなんて。私達を覆う膜はとて

も薄く、何故溶岩に耐えているのか分からない。下手をすれば破けてしまいそう。

「ゆ、雪乃……」

「ツァン、落ちついて……きっと秋がなんとかしてくれるわ」

「う、うん……」

ツァンと抱き合いながら、岩の上の二人を見る。そして仮面を付けた男のペンダントが目に入った。

「……あれは（サラ！）」

『ああ、試練を乗り越えた者だ』

「（ということとは、サラの想い人ってことね？）」

『い、言わないでくれ……』

良く見れば、マハードや、ブラック・マジシャン・ガール、久遠の魔術師ミラが何らかの結界を張ってくれている。私達を守っているのね？

「負けないで、秋……」

私は祈る思いで秋の決闘を見守ることにした。

「<sup>デュエル</sup>決闘！」

秋LP4000

ダークネスLP4000

「私の先攻・・・私は『仮面竜』を守備表示で召喚」

仮面竜 ATK1400/DEF1100

「カードを2枚伏せ、ターンエンド」

「俺のターンドロー！・・・っ！」

よりもよつてこのデッキか！次からデュエル仕掛けてくる時はもつとデッキを選ばせる！

「俺はモンスターをセット、カードを1枚セットしターンエンド」

「私のターンドロー・・・私は『軍隊竜』を召喚」

軍隊竜 ATK700/DEF800

「カードを1枚伏せ、ターンエンド」

どちらもリクルートモンスターだな。確か天上院吹雪・・・いや、ダークネスが使うのは『真紅の黒竜』だ。見せてやるよ・・・それを上回るモンスターがいることを

「俺のターン！ドロー！俺はカードを1枚セットし、ターンエンド

だ  
」

「私のターン！私は2体のドラゴンを生贄に、このカードを召喚する！現れよ！『真紅眼の黒竜』！」

真紅眼の黒竜 ATK2400/DEF2000

「真紅眼の黒竜！？」

雪乃達が驚きの声を上げる。……確かにレアカードではあるものの、このカードの需要はあるのだろうか。確かにサポートカードも豊富だが、1枚では微妙だろう。

「バトルだ！真紅眼の黒竜でセットモンスターに攻撃！『黒炎弾』！」

「つぐ……セットカードは『仮面竜』だ！俺はデッキから『仮面竜』を召喚！」

仮面竜 ATK1400/DEF1100

「ならばターンエンドだ」

「俺のターンドロー！俺は手札から再びモンスターをセット。ターンエンドだ！」

……俺が待つカードが来るまで、俺は耐える。ライフが削られなければ、雪乃達は無事のはずだ。

「私のターン……私は手札から『黒炎弾』を発動する！真紅眼の

黒竜がフィールドに存在する時、相手に2400のダメージを与える！」

「畏発動！『魔宮の賄賂』！相手の魔法、畏を無効にし、破壊する！そして相手はカードを1枚ドロウする！」

「つく！ドロウ！ならば『仮面竜』を守備表示で召喚！ターンエンドだ！」

なんとか防いだ。2400も喰らったら洒落にならないぞ！？

「俺のターンドロウ！・・・ターンエンド」

「私のターン、ドロウ！バトル！真紅眼の黒竜で『仮面竜』に攻撃！」

「効果発動！デッキから『神竜ラグナロク』を守備表示で召喚！」

神竜ラグナロク ATK1500/DEF1000

「ターンエンド」

「俺のターン・・・よし！」

ようやく来たか！これならいけるぞ・・・！

「俺のターン、ドロウ！俺は手札から『未来融合・フューチャー・フュージョン』を発動！仮面竜、サファイアドラゴン、伝説の白石3枚を墓地へ送り、2ターン後、融合デッキから『F・G・D』を特殊召喚する！」

「な、なに・・・F・G・Dだと!？」

「さらに、伝説の白石が墓地へ送られた時、『青眼の白龍』を手札に加える。俺は3枚の青眼の白龍を手札に加える!」

俺が言った瞬間、ダークネスが驚きの声を上げた。

「ば、馬鹿な!青眼の白龍は伝説の決闘者である海馬瀬人しか持っていないはず・・・!」

「っふ・・・さあな」

まあ、ちゃんと理由はある。アレは数日前

「俺に届け物？」

黒スーツの胸にKとあるバッジを付けられた男からアタッシュケースを渡された。恐る恐るそれを開けると、そこには言っていたのは3枚の『青眼の白龍』だった。

「こ、これって・・・」

「社長からテレビ電話が入っております」

『ふうん、久しぶりだな・・・武藤秋』

しゃ、社長・・・!何の用だ!

「ど、どうも・・・何か？というか、これ何ですか」

『ふうん、見ての通り、我が青眼の白龍だ』

そりゃわかるけど。どういうことかと聞いてるんだ俺は！

『前に貴様が俺に見せたシンクロ召喚・・・我が社で総力を挙げて調べたがそんなものは存在しなかった。だが、実際に我が社のデュエルディスクに反応したという事実がそのカードの存在を矛盾している。どういうことだ？』

「お答えできません」

『ふうん・・・だろうな。前にペガサスを問い詰めもしたが、そんなカードは作っていない。だが、我が社のデュエルディスクに反応する。不思議なこともあるものだ』

「そ、そうですね・・・」

まさか、俺のカードを奪う気か？あんたの悪行は知ってるぞ？双六のじいさんのカードをすり替える。そして3枚揃えたところで挙句の果て破り捨てる。グッズを嫌っていると言いながらそれ並みの悪行を行ってるんだ。

『まあ、答えられないならいい。お前達には常識を覆すことが多い。オカルトなどは信じないが、この俺自身もいくつか体験している・・・今回は聞かないでおいてやる』

なら、このカードは何さ

『そして今俺は業界の方で大いに忙しく、決闘をしている暇がない。・・・そこでだ、その3枚を貴様に預ける。貴様が使いこなしてみろ』  
「はあ!？」

思わずそんな言葉が出る。だが社長はそれを気にせず言葉を続けた。

『聞けば遊戯もブラック・マジシャンとブラック・マジシャン・ガールを預けているそうじゃないか。・・・ならば、当然俺のも使えるはずだ』

要するに社長、アンタ遊戯に対抗意識を燃やして俺にこのカードを渡してきたんだな？自分の弟との絆の証でもあるこのカードを俺に渡してくるとは。・・・相当遊戯との因縁を感じているのだろうか？

「。・。・分かりました、お預かりします」

『ふうん。・。・何かあれば連絡するといい。力にはなってやる』

そう言っただけで通信を切られる。どうしよう、この3枚。・。・

。・。・っと、この前のことを思い出している場合じゃなかった。

「さらに俺は、手札から『古のルール』を発動！レベル5以上の通常モンスターを特殊召喚できる！来い！『青眼の白龍』！」

俺の前に、白き身体を輝かせる竜が姿を現した





戦いの始まり（後書き）

つてなわけでVSダークネス

青眼の白龍VS真紅目の黒竜をやりたかったただけだったりする（笑）

## 伝説再び(前書き)

というわけでまさかの青眼の白龍

ちゃんとセブンスターズ編終わったら返します社長に。そのときまたひと悶着ありそうだな

秋「今日の最強カードは『青眼の究極龍』」

青眼の白龍 + 青眼の白龍 + 青眼の白龍

.....効果が無い、4500のモンスター.....フィールドに3体出たらそつちのが強いよね

## 伝説再び

Side秋

秋LP4000

ダークネスLP4000

目の前に現れる青眼の白龍・・・その強い輝きは、自分の側にいる限り美しく感じ取ることができる。この前敵として放っていた威圧感などそこにはない。あるのは輝く銀の身体と蒼い瞳だけだ

青眼の白龍 ATK3000/DEF2500

「さらに、俺は『正義の味方カイバーマン』を召喚！」

正義の味方カイバーマン ATK2000/DEF700

「……………どう見ても社長だよな、このモンスター……………どういう意図でペガサス会長はこのカードを作り出したんだろう。KC社っていうか、海馬社長への嫌がらせか？それにしても効果がとてもいいものだけだな

「攻撃力2000だと？」

「こいつには恐ろしい能力があるのさ……………カイバーマンの効果発動！このカードを生贄とすることで、手札から『青眼の白龍』を特殊召喚する！」

青眼の白龍 ATK3000/DEF2500

「青眼の白龍が、2体・・・だと!？」

何も俺は怒りにまかせて決闘していたわけじゃない。手札が最悪だったのでそれを想定してここまでしただけ。仮面竜達は完全に困ったのさ。

「バトル!青眼の白龍で真紅眼の黒竜に攻撃!『滅びのバースト・ストリーム』!」

「つく!畏発動!『攻撃の無力化』!攻撃を無効にし、このターンのバトルフェイズを終了する!」

「ならばメインフェイズ2に入る!『白竜降臨』を発動!フィールドの『神竜ラグナロク』を生贄に捧げることで『白竜の聖騎士』を儀式召喚!」

白竜の聖騎士 ATK1900/DEF1200

「そして白竜の聖騎士を生贄に捧げることで!デッキ、手札から『青眼の白龍』を特殊召喚する!」

青眼の白龍 ATK3000/DEF2500

「ば、馬鹿な・・・わずか1ターンで・・・青眼の白龍が、3体・・・だと!？」

「さらに、『命削りの宝札』を使いカードを5枚になるようにドロ!5ターン後に全て捨てる。カードを2枚セットし、ターンエンド!」

「わ、私のターン・・・！ドロー！『強欲な壺』でカードを2枚ドロロー！『サイクロン』を発動して『未来融合-フューチャー・フュージョン』を破壊！そして『真紅眼の黒竜』を生贄に『真紅眼の闇竜』を特殊召喚！さらに罠カード『魔法反射装甲・メタルプラス』を発動し、真紅眼の黒竜に装備する！そしてこのカードを装備した真紅眼の黒竜を生贄に捧げ・・・『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』を特殊召喚する！」

レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン    ATK2800/DEF2400

ここでダークネスメタルか！

「さらに！このカードの攻撃力は自分の墓地のドラゴン族につき400ポイントアップ！私の墓地には3体のドラゴン族がいる。攻撃力は1200ポイントアップする！」

レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン    ATK2800/DEF2400    ATK4000/DEF2400

「さらに！『黒竜の雛』を召喚！」

黒竜の雛    ATK800/DEF500

「そして黒竜の雛を生贄に捧げ、現れよ！『真紅眼の黒竜』！」

真紅眼の黒竜    ATK2400/DEF2000

「さらに攻撃力が上がる」

レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン ATK4000/DEF2400

「バトルだ！レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンで青眼の白龍に攻撃！『ダークネス・メタルフレア』」

「ぐあああああああっ！」

秋 LP4000 LP2700

「秋！きゃあ!?!」

雪乃達を覆っている膜が揺れる。つく・・・目が、かすむ。この前のマシユマロンの噛みつきなんか比じゃない・・・身体が焼けるように熱い・・・

「が、はっ・・・!」

「どうだ、我がレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンの力は」

「こんなもの・・・」

といったものの、結構やばい。雪乃達もやばい・・・俺が、なんとかしなければ

「畏、発動・・・『正統なる血統』・・・！通常モンスターを復活する・・・よみ、がえれ・・・『青眼の白龍』・・・」

青眼の白龍 ATK3000/DEF2500

「私はカードを2枚伏せ、ターンエンド」

つくそ・・・目が・・・

「俺の、ターン・・・ドロー・・・!」

・・・!この、カードは・・・

「俺は、手札から『融合』を発動・・・3体の青眼の白龍を融合する・・・つく、現れる!『青眼の究極竜』!」

青眼の究極竜 ATK4500/DEF3800

「これが、青眼の究極竜か・・・」

「バトルだ!青眼の究極竜でダークネスメタルドラゴンに攻撃!『アルティメット・バーストストリーム』!」

「ぐおおおっ!」

ダークネス LP4000 LP3800

「さらに速攻魔法発動!『融合解除』!墓地から3体の青眼の白龍を召喚!」

青眼の白龍? ATK3000/DEF2500

青眼の白龍? ATK3000/DEF2500



青眼の白龍？ ATK3000 / DEF2500

「そしてバトル続行！青眼の白龍で真紅眼の黒竜に攻撃！『滅びのバースト・ストリーム！』」

「ぐあああつ！」

ダークネス LP3800 LP3200

「そしてダイレクトアタックだ！行け！『滅びのバースト・ストリーム』！」

「畏発動『レッドアイズ・スピリッツ』！「真紅眼」が破壊され墓地に送られたターンに発動できる！墓地から「真紅眼」と名の付くモンスターを召喚・蘇生条件を無視して特殊召喚する。私は今破壊された『真紅眼の黒竜』を守備表示で復活させる！」

真紅眼の黒竜 ATK2400 / DEF2000

「つく！バトル続行！行け！青眼の白龍！『滅びのバースト・ストリーム』！」

破壊される真紅眼の黒竜。もう一発を喰らえ！

「再びダイレクトアタックだ！」

ダークネス LP3200 LP200

「つく・・・」

まさか、あれを耐えられるとはな・・・

「ならば、カードを1枚伏せてターンエンドだ！」

「私のターンドロワー！私は『天よりの宝札』を発動！互いのプレイヤーはカードを6枚になるようにドロウする！」

ここで天よりの宝札だと！？

「つつ・・・手札より『死者蘇生』を発動！蘇るがいい！『真紅眼の黒竜』！そして『レッドアイズ・スピリッツ』を発動！くるがいい！『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』！」

真紅眼の黒竜 ATK2400/DEF2000

レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン ATK2800/DE

F2400 ATK4000/DEF2400

「さらに再び『黒炎弾』を発動！2400のダメージを受ける！」

「なっ・・・ここでだと！？ぐああああっ！」

秋LP2700 LP300

「きゃあああ！？」

「いやあああっ！」

「ぬわ、の・・・シア・・・ン・・・」

俺はその場に倒れ伏した。雪乃達を覆う膜が、破け始めた。つく、そ……今度こそ、やべえ……。目が……。かすむ……。い、意識が……

『マスター！マスターしつかり！』

ミラの声が聞こえる。だが、俺に、立ち上がる力は……

『お二人が応援してます。立ってくださいマスター！』

「秋！立って！」

「秋！負けたら承知しないんだからね！」

雪乃……ツアン……。俺は……。俺は！

「ぐ、おおおおおおお！」

無理やり身体を起こす。全身に激痛が走る。息をするだけで肺が焼けそうになる。だが、ここで負けるわけにはいかない。

「まだ終わっていないぞ！私はさらに私の真紅眼の黒竜に『巨大化』を装備する！これで攻撃力は倍だ！」

レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン ATK4000/DEF2400  
F2400 ATK8000/DEF2400

「これで終わりだ！バトル！レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンで青眼の白龍を攻撃！『ダークネス・メタル・フレア』！」

「トラッ、プ・・・発・・・動！」フォトナイズ「光子化」！このカードは・・・  
あい、てモンスター・・・一体の、攻撃を無効に、して・・・その、  
モンスターの・・・攻撃力分・・・自分のフィールド上にいる・・・  
光族・・・モンスター・・・1体の攻撃、力を・・・次の自分の、  
エンドフェイズまで・・・得る・・・俺は、攻撃、対象となった・・・  
・青眼の白龍を・・・せん、たく・・・」

青眼の白龍？ ATK3000/DEF2500 ATK1200  
0/DEF2500

「ならばメインフェイズ2！『ライトニング・ボルテックス』を発  
動！手札を1枚墓地へ送り、相手の表側表示のモンスターを全て破  
壊する！」

「ぐううう・・・！」

青眼の白龍たちが破壊される。まだだ・・・まだ、終わらない・・・  
！

「カードを1枚伏せ、ターンエンドだ！」

「俺の・・・」

勝ちたい・・・守りたい・・・あいつらを・・・この世界で出来た、  
大切な、人達をおおおお！！

「タアアアアンツ！」

引いたのは・・・龍の鏡！

「手札より魔法カード『龍の鏡』を発動！墓地の『青眼の白龍』3体を除外することで、融合デッキから『青眼の究極竜』を特殊召喚する！現れよ『青眼の究極竜』！」

青眼の究極竜 ATK4500 / DEF3800

「なっ……この状況で、まさか……」

「さらに畏発動！『異次元からの帰還』！ライフを半分とすることで、自分のフィールドに可能な限り、除外されたモンスターを特殊召喚する！いでよ、青眼の白龍たちよ！」

秋LP300 LP150

青眼の白龍？ ATK3000 / DEF2500

青眼の白龍？ ATK3000 / DEF2500

青眼の白龍？ ATK3000 / DEF2500

「そしてさらに大嵐を発動！フィールド上の魔法、畏を全て破壊する！」

破壊されるミラフォ……これで、最後だ！

「そして青眼の究極竜に同じく『巨大化』を装備させる！これで青眼の究極竜の攻撃力は9000になる！」

青眼の究極竜 ATK4500 / DEF3800 ATK9000

「馬鹿な・・・こんな、この、私が・・・」

「行け！青眼の究極竜！そして青眼の白龍達よ！『アルティメット・バーストストリーム』！『滅びのバースト・ストリーム』！」

「ぐ、ぐああああああああああっ！」

真紅眼の黒竜とレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンは碎け散り、光の閃光はダークネスに直撃した。

ダークネス LP200 LPO

「かつ・・・た・・・」

光が俺達を包み込む。気が付けば山のふもとにまで来ていた。だが、限界があつた・・・身体はポロポロで、動けない。これは・・・やばい・・・俺は意識を失つた。

Sideツアン

僕達は無事に火山のふもとにいた。夢じゃない・・・すると突然、秋が倒れる。

「秋！」

僕と雪乃は急いで秋に駆け寄つた。怪我は酷いものだった。全身火傷だらけで、煤が所々についている。

「つく・・・雪乃、運ぶわよ！」

「ええ、分かってるわ・・・あら？」

雪乃がカードを拾い上げる。そこにあつたのはダークネスが付けた仮面だった。魂が封印されるはずなのに、何故仮面が・・・？今はそんなことどうでも良い！秋を早く！早く連れて行かないと・・・って、ああああああああ！今日鮎川先生出張じゃない！あの先生肝心な時にいつもないんだから！

「マハード、実体化してくれる？」

「いたしかたない・・・これも、秋殿を助けるためだ」

と、また出てきたブラック・マジシャン。雪乃の話ではカードの精霊ということらしい。僕にはカードの精霊はいないから見えないけど・・・こうして実体化すればわかる。

「マナ、お前はそっちの男だ」

「はいはい！うわっ！すっごい美形です！」

と、はしゃぐブラック・マジシャン・ガール。確かに美形ね、ダークネスの素顔・・・ってちょっと待ってよ！この人どっかで・・・

「ゆ、雪乃・・・」

「ええ、驚いたわ・・・この人、行方不明のはずの明日香のお兄さんじゃない」

写真では見たことあった。確かに美形・・・って、今はどうでも良い！秋をはやく！

「ブラック・マジシャン！急いでよ！」

「う、うむ！」

僕はブラック・マジシャンに怒鳴りつける。こうして急いで寮へ戻る僕達。とりあえず身体を冷やし、治療する。ブラック・マジシャン達が治療しているらしい・・・段々と傷が消えていく。秋の顔にも、生気が戻ってきた

「これでもう大丈夫だ・・・後は数日間安静だ」

「ありがとうマハード、マナ、ミラ」

「いえいえ！マスターを守るためですから！」

精霊と会話する雪乃。べ、別に悔しくなんか無いわ・・・そう、悔しくなんか、ないんだから・・・

「では私達は消えます。マスターをお願いしますね」

そう言って消える精霊たち。良かった・・・良かった・・・秋、本当に、良かった・・・

「うっうっ・・・」

涙が止まらない。また、僕は涙を流す。僕ってこんなに泣き虫だった



たかしら・・・すると、その涙をぬぐう手があった。

「何、泣いてるんだ？ツアン・・・」

「しゅ、秋！？」

「ツアンは泣き虫だなあ・・・」

「ち、違つわよ！これはその、目に・・・そうよ！目にゴミが入ったのよ！別に秋のことを心配して泣いてるんじゃないんだからね！？」

ぼ、僕の馬鹿あ！また変なこと言っちゃった！でも、秋は笑ってくれている

「ははは・・・そっか・・・あ、やべ・・・眠くなってきた。ちよつと寝るわ」

「・・・早く寝なさい。見ててあげるから」

「ああ、お休み・・・ツアン・・・雪乃・・・」

「お休み・・・」

僕は秋の手を強く握る。

「もう心配かけるんじゃないわよ？・・・馬鹿」

僕は秋が寝息を立てるまでその手を握り続けた。



## 伝説再び（後書き）

というわけでVSダークネス終了。次はカミューラです

一難去ってまた一難（前書き）

というわけで、カミューラ登場

雪乃、相変わらず怖いです

カミューラ「今日の最強カードはそう！『幻魔の扉』！」

相手フィールド上に存在するモンスターを全て破壊する。

その後、相手の墓地からモンスターを1体選択し、召喚条件を無視して自分フィールドに特殊召喚する。

このカードを発動したエンドフェイズ時、自分のライフポイントは10分の1になる。

・・・まあ、TFで魂をいけにえなんてできませんからね。それでもライフ10分の1で・・・

## 一難去ってまた一難

S i d e 雪乃

今私は校長室へと足を進めている。看病はツアンに任せ、その足を進めていた。

「失礼します」

ノックの後、どうぞという声の後にドアを開いた。どうやら仕事中心だったらしい。

「おや、藤原君・・・どうかしましたかな？」

「昨日、秋が鍵を受け取りました」

「そうですか、協力してくれると・・・その直後、セブンスターの襲撃に会い、デュエルしました」な、なんと・・・」

驚く校長。まさか、いきなり秋を襲撃しに来るとは思わなかったのだろう。だけど、私の言いたいことは『そんなこと』ではない。

「そしてデュエルをした結果、秋は『重傷』を負いました」

「じゅ、重傷ですか？」

「デュエルでのダメージが現実となる『闇の決闘』・・・校長先生はご存知だったのではないですか？」

私の言葉に驚きを隠せない校長。まさか、知らなかったというの？

「して、秋君の容態は・・・」

「真紅眼の黒竜の『黒炎弾』を受けて一時瀕死になりました。今は一命をとりとめ、安静にしています」

「そ、そうでしたか・・・」

「校長先生、このような結果でも、校長先生はセブンスターズと生徒を戦わせるつもりでいらっしゃるのですか？」

私の言葉に完全に黙る校長。この人は生徒の命と伝統、どちらを守る気なのかしら

「むう・・・」

「それと、今日は私とツアンで秋の看病をさせていただきます・・・公欠にさせていただいてよろしいですか？」

「わかりました・・・それと、ささやかながらこれを」

と、校長が取り出しのは万札？

「今日の食事代です。使ってください」

「・・・こんなことを言いたくありませんが、これでこの件について口外するなど？」

「とんでもありません！これは私の気持ちです」

そう言つて渡される万札。とりあえず・・・十代の坊や達にも『闇の決闘』についてはちゃんと伝えておく必要があるそうね。

「それと、藤原君。吸血鬼の噂はご存知ですか？」

「吸血鬼？」

そんな噂、聞いたかしら？

「ええ、セブンスターズの一人という噂もあります。お気をつけて」

「肝に銘じておきましょう」

そう言つて部屋を出る。あ、吹雪さんの対処を言うのを忘れたわ・・・まあ、今は布団を引いてそこに寝かせてるし、明日香を呼んでおきましょう。

部屋に戻ると、ツァンが相変わらず秋の額にタオルを当てていた。昨日の夜から少し熱がある。あんな火炎弾受けたらそもなるでしょうね。もうお昼休みか・・・十代の坊や達を放課後にも呼びましようか

「十代の坊や？」

「ん？雪乃じゃん、授業どうしたんだよ」

「放課後、レッド寮の秋の部屋に来なさい。もちろん明日香、カイ

ザー、三沢の坊や、万条目の坊やも呼ぶのよ?」

『何だからわからねえけどわかった!』

そう言つて通信を切る十代の坊や

「ツァン、吹雪さんのほうはどうかしら?」

「駄目、相変わらず寝てるわ」

「そう・・・」

できれば情報を聞きたいところなんだけど、こんな状態じゃ無理か・  
しょうがない、起きるのを待ちましよう

放課後

「兄さん!」

明日香が部屋に入った途端、すぐに吹雪さんに抱きつく明日香。一  
応言っておくけど、その人滅びのバースト・ストリーム受けてるの  
よ?あんまりやると死んじゃうわ

「吹雪・・・」

カイザーも驚いているようね。まあ、当然か。

「秋!どうしたんだ!」



「馬鹿！大声出さないでよ！秋の傷に響くでしょ！？」

ツアン、貴女も十代の坊やと同じくらい声が出るわ・・・まあ、それはさておき

「鍵を持つ人間を集めたのは他でもないわ・・・秋がタベセブンスターズとデュエルしたからよ」

驚く一同。まあ、昨日誰にも知らせなかったから当然ね

「そして、相手はそこに寝ている天上院吹雪・・・『ダークネス』と名乗っていたわ」

「吹雪が、だと？」

「これを見て」

そう言っつて私は仮面が描かれたカードを見せる。

「これは？」

「・・・ある人から聞いた話では『魂の牢獄』というカードよ」

「魂の牢獄？」

マハードから聞いた話、かつて武藤遊戯の祖父、海馬瀬人を閉じ込めたという信じられない話のカード。闇の決闘の敗北者の末路だという。

「秋は決闘に勝利し、仮面を封じ込めた。つまり、この仮面が天上

院吹雪を操っていた可能性があるわ」

「そんなことが・・・」

「十代の坊やは体験しているのでしょうか？闇の決闘を」

「ああ、確かに・・・俺は本物の闇の決闘を受けた」

「・・・秋は、真紅眼の黒竜の黒炎弾を受けたわ。もしこの先、それ以上の攻撃を受けるとしたら・・・下手すると、死ぬわ」

私の言葉に黙る一同・・・まあ、当然ね

「そしてもう一つ・・・この闇の決闘で、私とツァンは人質として囚われたの」

「えっ・・・大丈夫だったのかよ!?!」

「よくわからない薄い、シャボン玉のような膜の中に閉じ込められたわ。しかも下は溶岩。本当に死ぬかと思ったわ（まあ、マハードたちが私を何とかしてくれてたみたいだね）」

この後全員で話し合い、今後すべき対策を決めた。とりあえず、今後決めたことは以下の通り

- ・セブンスターズと戦うときにはいかなる場合も油断しないこと
- ・戦うとき、部外者を連れていないこと
- ・常に鍵を持つ人間2人以上での行動に心がける

・無茶をしない

「十代の坊やは・・・万条目の坊やでいいでしょう。明日香はここでいいわ。吹雪さんの看病もしたいだろうし・・・カイザーは三沢の坊やとね」

「クロノス先生はどうするんだ？」

「あの人は生徒といるなんて聞かないでしょ。それにあの古代の機械デツキは大抵なら負けないわ」

「何故俺がこいつと・・・！俺は天上院君と・・・」

「いちいち文句を言わないでくれる？万条目の坊や・・・・・・・・・・  
・怒るわよ」

私の一言で押し黙る万条目の坊や。さてと、もう大丈夫でしょう。これで一同は解散。後は・・・セブンスターを待つだけね。

S i d e 秋

・・・ん？夜か・・・アレから何日経った？今日ってクロノス先生が戦うんじゃないか？いや待て、日付からして2日経ってる・・・まさか、カイザーが・・・俺はそう思い起き上がった。だが、突如身体に激痛が走る。

「いつてえ！」

身体がきしむ。まあ、ある程度は回復したみたいだけど・・・すると、ミラが実体化して俺を抑えた。

「駄目ですよマスター！絶対安静です！」

「大丈夫だ、ミラ・・・頼む」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ああもう！わかりました。行きましようマスター」

ミラに担がれ、俺達は城へと向かった。

城

城へ向かうと、沈んだ顔の一同がいた。翔が泣いている。

「あ、秋！？起きて平気なの！？」

ツアンが俺の元へ駆け寄る。まあ、2日も意識がなかった。

「ああ、この通り・・・「嘘おっしやい」いだあ！？」

雪乃に叩かれ、その場にしゃがむ俺。超痛い・・・

「まったく無理して・・・」

雪乃が俺を担ぐ。その場にカイザーの姿がなかった。事情を聞けば、カイザーがデュエルをしに向かった。そしてみんなの決め事の中で部外者を雪乃は立ち入れないようにとみんなで約束した。このため

戦いに行ったのはカイザー一人だったという。だが前日のクロノス戦を見たせい、翔は心配でいても経つてもいられず寮を飛び出して城へ。そこで幻魔の扉を発動され、カイザーは敗北となったという。

「だから言ったのよ。セブンスターズの戦いに関係ない人間が立ち入ることはすべきじゃないって」

雪乃とツァンは身を持ってそれを知ったためか、相当怒っていた。必死に説得したのに翔はそれを聞かず、そのせいでカイザーが負けたのだから・・・それは怒るだろう。

「一度寮に戻りましょう。対策を立てなければ」

一同は寮へ戻ることになった。

### レッド寮 秋の部屋

鍵を持つ5人とツァン、雪乃が部屋に集まった。翔は塞ぎこんだらしい。俺はベッドに寝かされている。

「次は誰が戦うか・・・だな」

「そうね」

「・・・ねえ」

「どづしたのツァン」

一人考えるしぐさだったツァン。何を考えていたのだろうか

「カミューラの戦いとき、どうもクロノス先生もカイザーも劣勢に追い込まれた。まるで、カミューラがデツキを知ってたみたいに」

・・・あーそうだった、あいつデツキを盗み見てるんだっけか。蝙蝠使って。それぞれデツキの特徴を潰してきたり・・・あー鬱陶しい

「俺達のデツキが見られているって事か？」

「なら、誰が戦う・・・」

「・・・俺だ」

言いながら俺は起き上がった。とりあえず、この中で複数にデツキを持っているのは俺と三沢だけだ。だが三沢のデツキで勝てるか不安だしな。まあ、十代に任せてもいいんだが、ここは俺が行くべきだろう。

「駄目よ！秋は怪我を・・・」

「いつまでも寝てられるか。これ以上黒星付けられて全滅するよりいいだろう。この中でデツキを唯一知られてない人間だぞ」

そもそも、俺のシンクロデツキは内容を知られてもどう動くかなど予測ができない。多彩なシンクロモンスター・・・エクストラデツキを変えてしまえばデツキの顔も変わる。そして何より、この世界にはサイドデツキという概念がない。

「でも・・・」

「大丈夫、俺を信じろ」

とりあえず一同はこの後解散。雪乃とツアン、そして明日香が部屋に残った。それぞれがベッドに入る。深夜、突然ツアンが俺を擦ってきた。

「秋……」

「どうしたツアン」

「大丈夫よね？秋は負けないのよね？」

弱々しい声が部屋に響く。俺は優しくツアンを抱きしめる。ツアンは「あ」と小さく声を上げる。

「大丈夫……俺は、負けない」

「うん」

静かに夜は更けていく。

翌日夜

「……やっぱ迫力あるな」

城へ訪れた俺達。行く前にサラの指摘でペンダントを吹雪から借りると、それを合わせて闇のアイテムを完成させた。おかしいな……原作だと吹雪が目覚めてペンダントを渡すはずなんだが……まあ

いいか

「んじゃ、ここで待ってるよ?」

「秋・・・気をつけて」

「負けちゃ駄目よ」

「勝てよ!秋!」

「ふん!無様に負けるなよ・・・」

「信じてるわ・・・」

「頼むぞ」

雪乃、ツアン、十代、万条目、明日香、三沢から言われ、領き城の中へと足を進めた。暗い回路・・・

「みんな、闇の気配は?」

『地下からだ・・・恐ろしいほど、邪悪な邪気だ』

マハードの言葉に、気を引き締める俺。とりあえず怪我は一時的にミラたちに魔力で補強してもらい、動ける身体になっている。これなら、デュエルしても問題はないだろう。地下の棺桶広場に着き、足を踏み入れた。

「出て来い、セブンスターズのカミューラ!」



「あら……今日は坊やが相手？」

「ああ、俺が勝ったらカイザーを元に戻せ……あとついでにクロノス教諭」

『マ、マスター……ついてって』

まあ、細かいことは気にするな。

「いいでしょう……私が勝ったら貴方も私のコレクションよ？」

「……できるものならな」

デュエルディスクを構え、デッキをセットする。

「さあ、始めましょうか？」

「ああ、いつでも来い」

「<sup>デュエル</sup>決闘！」

一難去ってまた一難（後書き）

コミュニーラ戦開始。コミュニーラとのバトルはびっくりするくらい早く終わります

デッキ内容によって瞬殺です

次回もお楽しみに

## 助ける理由（前書き）

カミューラ編完！

・・・最近友人に手抜きじゃね？と怒られた  
すいません・・・もっと内容を濃くしたいと思います  
頑張ります

秋「今日の最強カードは『ニードルワーム』だ」

リバース：相手のデッキの上からカードを5枚墓地へ捨てる

デッキ破壊においてかなり強いカードメタモルポッドや皆既日食の  
書なんか使つとデッキが一気に消える

秋「どうみても、ラーバモスの色違いだよな」

## 助ける理由

Side 秋

秋LP4000

カミュ - ラLP4000

「<sup>デュエル</sup>決闘！」

「先攻はもらう。俺のターンドロ・・・！カードを3枚セットし、ターンエンドだ」

「あら、伏せただけ？私のターンドロ！『ゴ布林ゾンビ』を召喚するわ！」

ゴ布林ゾンビ ATK1100/DEF1050

「バトル！ゴ布林ゾンビでダイレクトアタックよ！」

「畏発動『ソウル・オブ・スタチュー』！このカードは発動後モンスターカードとして扱われる。このカードがフィールド上にモンスター扱いとして存在する限り、このカード以外のモンスター扱いとした畏カードが相手によって破壊され自分の墓地へ送られる場合、墓地へ送らず魔法&畏カードゾーンにセットすることができる」

ソウル・オブ・スタチュー ATK1000/DEF1800

「守備力1800！？こ、攻撃中止よ！カードを2枚伏せてターン

エンド」

「伏せカード、ねえ……俺のターンドロウ」

ふむ

「モンスターをセット、カードを1枚セットしてターンエンドだ」

「（攻めて来ない！？）私のターンドロウ！ゴブリンゾンビを生贄に捧げ『ヴァンパイア・ロード』を召喚するわ！」

ヴァンパイア・ロード ATK2000/DEF1500

「そしてゴブリンゾンビが墓地へ送られたことで、私は『ゾンビ・マスター』を手札に加える」

「どっぞ」

「バトルよ！ヴァンパイア・ロード！その石像を破壊なさい！」

「却下だ。畏発動『重力の網-グラヴィティ・バインド-』レベル4以上のモンスターは攻撃できない」

「つく！ターンエンド」

さあ、早くしないとフィールドが整っちゃうぜ？はいとこ幻魔の扉とやらを引くんだな。じゃないと負けるぜ？

「俺のターンドロウ……俺はセットしていた『ニードルワーム』を反転召喚する」

ニードルワーム ATK750 / DEF600

「このカードがリバーした時、相手はデッキからカードを5枚墓地へ捨てる。さあ、カードを5枚墓地へ送りな」

「つく！（まずい、幻魔の扉のカードが・・・！）」

その様子だと幻魔のカードが落ちたな？

「そして手札からモンスターを再びセットする。そしてカードを1枚セット。さらに速攻魔法『月の書』を発動し、ニードルワームを裏側守備表示に変更する。ターンエンド」

「つく・・・そのデッキ、まさかデッキ破壊!？」

「気付いたところで遅い。お前はもう俺の術中にはまった」

「わ、私のターンドロー！（デッキは後28枚・・・まだ行けるわ）」

「畏発動『マインド・クラッシュ』カード名を1つ宣言して発動し、宣言したカードが相手の手札にある場合相手はそのカードを全て墓地へ捨てる。宣言したカードが相手の手札に無い場合、自分は手札をランダムに1枚捨てる。俺が指名するのは『ゾンビ・マスター』だ」

さっき自分で加えてたからな。これでゾンビ・マスターによるカード効果はない。

「つぐ……私の手札には2枚ある。2枚とも墓地へ送るわ」

ほう、ラッキーだな。まさか2枚手札にあるとは

「ピラミッド・タートルを守備表示で召喚。ターンエンドよ」

まあ、重力の網をやってれば攻撃できないし、サイクロンか大嵐を引けば話は別だが……

「俺のターンドロ……ふふふ、ならば罠カード発動『カース・オブ・スタチュー』このカードも同じくモンスターカードとして扱う」

カース・オブ・スタチュー ATK1800/DEF1000

「さらに、『メタモル・ポッド』を反転召喚」

メタモル・ポッド ATK700/DEF600

「このカードがリバースした時、カードを全て捨て、互いのプレイヤーは5枚ドロウする」

「つぐ……5枚ドロウ！」

デッキ破壊のデッキを相手にドロウするのがどれだけ酷いかわかってるらしいな。さらにさっきゾンビ・マスターを墓地へ送ったせいでアンデット族デッキとしての廻り方に狂いが生じているようだ。

「そして再び『ニードルワーム』を反転召喚」

ニードルワーム ATK750/DEF600

「リバーズ効果により5枚カードを墓地へ送れ」

「つくぐ……」

さて、計算から言つとあと17枚くらいだろう……デッキ

「さらに『手札抹殺』を発動。手札を全て捨て、捨てた数だけドロしな」

「5枚、ドロ……」

後12枚か……そろそろ戦意が喪失してきたところか？このまま一気に決めてやりたいが、手立てが少ないな。

「さらにレベル4のカーズ・オブ・スタチューと、ソウル・オブ・スタチューの2体でオーバレイ！2体のモンスターでオーバレイ・ネットワークを構築！」

4×2

「エクシーズ召喚！現れる、『発条機甲ゼンマイスター』！」

発条機甲ゼンマイスター ATK1900/DEF1500

「このカードの攻撃力は素材の数だけ300ポイントアップ」

「……（出たわね。そのまま攻撃なさい、ミラーフォースで消し去ってあげる）」



発条機甲ゼンマイスター ATK1900 / DEF1500 AT  
K2500 / DEF1500

攻撃待ちか？顔がニヤけているぜ？残念ながら攻撃のためにこいつを出したんじゃないんだよね。

「ゼンマイスターの効果発動。オーバーレイ・ユニットを一つ使い、自分フィールドの表側のモンスターを裏側守備表示にする。俺が選択するのは『ニードルワーム』だ」

「なっ……！」

悪いねえ、デッキ破壊のデッキに最適なんだよ、このカード

「ゼンマイスターの攻撃力も下がるが、この効果で裏守備にしたモンスターはエンドフェイズ時に表になる」

発条機甲ゼンマイスター ATK2500 / DEF1500 AT  
K2200 / DEF1500

「カードを3枚伏せてターンエンド。そしてニードル・ワームが表になる」

ニードル・ワーム ATK750 / DEF600

「墓地へ5枚送ってもらおうか？」

「……………」

最早戦意喪失か。この墓地送りのせいで何回キーカード逃したんだろうな？墓地を肥やすアンデットデッキでも、ここまで落ちたらもうどうしようもないんじゃないか？もしこれをデュエルでやられたら俺、そいつが友達だったら友達やめるもん。このデッキ

「私のターン……ドロー……ふふ、ふふふ……」

あとデッキは4枚か。ん？なんで笑ってんだ？この状況でキーカード引いた？

「一矢報いてあげる！」大嵐』発動！全ての魔法罫を破壊するわ！」  
ん？ああ……

「残念でした。リバーズカードをすべてオープン！」和睦の使者』  
『砂漠の光』 『皆既日食の書』 チエーンの逆順で皆既日食で全てのモンスターが裏守備になる。『砂漠の光』で表になる。さあ、手札を全て捨て、5枚ドローし、デッキから5枚捨てな？」

「そんな……私が……この、私が……」

カードをバラバラと床に落とすカミュ・ラ。まあ、こんな負け方したらそうなるだろうな

「さて？約束だ……2人を元に戻しな」

「つぐ……え!？」

突然『幻魔の扉』が光出す。扉が姿を現し、カミュ・ラを絡め取った。

「そ、そんな！？何故・・・何故私に幻魔の扉が！？」

「俺は闇のアイテムで守ってたからな。敗者であるお前にカードが反応したんだろっよ」

「た、たすけ、助けてえ！」

何故か引きずられ方がゆっくりだ。ダメージが一切なかったからか？

「お願い、助け・・・」

「っちいい！ああもう！カミュ・ラ！俺がお前を助けたら俺に服従すると誓つか！」

「誓う！誓うからお願い・・・助け・・・助けてえ！」

「マハード！マナ！ミラ！」

俺の声と共に、マハード、マナ、ミラが実体化する。

「黒・魔・導！」  
ブラック・マジック

「黒・魔・導・爆・裂・破！」  
ブラック・パーニング

「久・遠・魔・導！」  
エタニティ・マジック

一斉に扉へ攻撃を仕掛ける。それと同時に、俺は幻魔の扉のカードを拾い上げ、破り捨てた。それにより、扉は消滅しカミュ・ラは地面に叩きつけられた。

「ハア、ハア、ハア……」

「……ふう」

「まったく、秋殿……少々甘いのではないか？」

「そう言われましても……あれだけ助けを懇願されたらねえ……」

「約束だカミュ・ラ。助けたんだから俺に絶対服従だ」

これでカミュ・ラは俺達に手出しできない。

「……つぐ」

「もし破れば、私達は容赦しませんよー？」

言いながら杖を向けるマナ。笑顔で言う割にはかなり物騒である。

「カードの精霊とは……驚いたわ」

「貴様是我々の監視下に置かれる。約束を破ることは許さん」

マハードも同じように杖をカミュ・ラに向けた。殺気がパネエ

「分かったわよ……私も腐っても吸血鬼……約束事は守るわ」

カミュ・ラは両手を上げ、降参のポーズを取った。

「んじゃ、カミュ・ラ……さっさとカイザーとクロノス教諭を元

に戻してくれ。あと、ここに荷物があるなら持って出る。なんか崩れそうだし」

「わかったわ……すぐに出る」

カイザーが元に戻った。そういえばクロノスはどっかに置かれてたな。

「ここは……」

「カイザー、無事か」

「秋？ここは城……まさか、お前が勝ったのか!？」

「ああ……それより脱出しよう。カミュ・ラが後から来るしな」

「何？それはどういう……」

事情は後だと押し切り、脱出する俺達。外ではみんなが待っていた

「秋とカイザー!」

「ってことは勝ったのね!？」

「秋!」

十代達が喜び、雪乃とツァンが俺に抱きつく

「おっと……」

「よかった・・・よかった」

「秋・・・ばかぁ・・・」

「やれやれ・・・」

「お熱いのね」

後ろから声が聞こえ、全員がそちらを向いた。そこには荷物をまとめたらしきカミュ・ラの姿があった。おいカミュ・ラ、そのドでかい棺桶片手で持つってどーよ？見た目的に

「カミュ・ラ！？」

「お前なんでここに！」

「そこの坊やから聞いてないかしら？」

ああ、二人に抱きつかれていて話せなかった。俺は今までのことを説明。とりあえず、とっさに助けても手を出させないため『絶対服従』との約束を交わしたことで、驚きはしているが・・・

「秋！貴様何故こんな奴を助けたのだ！」

と、万丈目が俺の胸倉をつかんだ

「・・・じゃあ逆に聞くよ、万丈目」

「なんだ！」

「誰かを助けるのに、理由がいるのか？」

もし、あの時カミユ・ラを見捨てていたら、武藤秋も救うことはできないと俺は思った。闇に囚われた人間。闇を舞う吸血鬼……どちらも同じなのだ。だからこそ、救う……全てを

「……っ」

「よせ万丈目。カミユ・ラに勝ったのは秋だ。そのカミユ・ラの処遇をどうするのは、秋が決めることじゃないか？」

三沢に言われ、俺の胸倉から手を話す万丈目

「勝手にしろ！」

そう言って帰って行く万丈目。

「じゃあ行こうかカミユ・ラ」

「………ええ」

こうして、俺達は寮へと戻った

秋の部屋

「………まず一つ言わせてくれ

「部屋が狭い」

「そうね」

「狭い……」

「あ、あはは……ごめんなさい」

「悪いわね」

この部屋には俺、雪乃、ツアン、明日香、天上院吹雪、カミュ・ラがいる。

「とりあえずカミュ・ラ……お前には大徳寺先生に相談して数日中に部屋用意してもらおうから」

「助かるわ。その甘い空気に耐えられないもの」

右側に雪乃、左側にツアンが抱きついている。出来ればもうちょっと離れて欲しいんだけど……今だけ

「あと、吹雪さんの寝どこもそろそろ保健室だな。鮎川先生帰ってくるし」

「ごめんなさいね秋……兄が迷惑かけて」

方針は決まったし……

「今日はこのまま寝よう……今日は疲れた」

「お休み秋」



「お休みなさい秋」

両サイドに雪乃とツァンが入り、目を閉じる。ああ……疲れた……

Sideカミューラ

変な奴だ……そう私は棺桶の中で思った。仲間を散々ひどい目に  
あわせた私を助け、そして

『誰かを助けるのに、理由がいるのか?』

あんなことまで言う奴……馬鹿以外の何物でもない。でも、あの  
男の眼にはどこか悲しさがあつた。私を助けたのに他に理由がある  
ような……そんな感じ

「……やめましょう、考えるだけ無駄ね」

そもそも、考えてどうこうなる問題じゃないわね。アイツ……馬  
鹿っぽいし。考えるだけ無駄な気もする。

「ま、感謝はしておかないとね」

私は静かに目を閉じ、眠りにつくことにした。

## 助ける理由（後書き）

つてなわけでカミューラ助けました。

TFでも良くつれまわしてたな・・・直射日光の中  
よく死なないなカミューラ・・・

## 力（前書き）

キャンプから帰ってきました！時間がなかったので1話だけの更新ですが、とりあえず更新です

十代「今日の最強カードは・・・へへっ！エッジ・ハンマーだぜ！」

自分フィールド上に存在する「E・HERO エッジマン」1体を生け贄に捧げる。

相手フィールド上に存在するモンスター1体を破壊し、

そのモンスターの元々の攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

エッジマン専用のカードです。E・HEROにはそれぞれ専用のカードがあるのが面白いですね

## 力

S i d e 十代

俺はある日夢を見た。その夢では俺がデュエルしている夢で、翔と隼人が苦しんでいる夢だった。だけどそれだけじゃない。俺の目の前には巨大な3体のモンスターがいて・・・目の前には・・・秋が、俺の前にいるんだ。

『十代にダイレクトアタック!』

『や、やめろおおおお!』

.....

「うわあ!」

目が覚め、起き上がった。ハア、ハア・・・また、この夢かよ!あの夢は何を指してるんだ?どうして俺が秋とデュエルして、あんなに苦しまなきゃいけないんだ?ああもう、分からないことだらげじやねえか!

『クリー・・・』

「ハネクリボー・・・ははっ、ごめんごめん、俺は大丈夫だぜ!」

『クリー!』

相棒を心配させるわけにもいかないな。頑張らないと・・・

## Side 秋

最近、イヤな夢を見る。俺が三幻魔を操り、十代達を倒すという夢。アホか・・・俺は部屋の机にある引き出しからカードを取り出した。『オシリスの天空竜』『オベリスクの巨神兵』『ラーの翼神竜』『邪神アバター』『邪神イレイザー』『邪神ドレット・ノート』・・・そして『神炎皇ウリア』『降雷皇八モン』『幻魔皇ラビエル』の合計9枚に・・・

「そして『コレ（・・・）』か」

地縛神の7枚のカード・・・合計16枚。これらは全て普通のカードだ。だが、この世界では使えない、否使うことができないカードだ。地縛神は単なるOCGカードだからまだいいが・・・三幻神である『オシリス』『オベリスク』『ラー』・・・これはまずいよな  
「とりあえず、しまつてと・・・」

某死神漫画のような仕掛けを施した机。これ、高かった・・・orzとりあえず、色々と部屋には仕掛けが施してある。それこそ雪乃やツアンが知り得ないようなものばかりだ。

「これでよし」

「なにがよし?」

・・・What?

「秋、貴方さつきから何をブツブツ言ってるのよ」

「つ、ツァン!?!いつから・・・」

「いつからって・・・アンタが机閉めるあたりだけど」

ホツ・・・カードは見られてないな

「あなた・・・僕たちに何か隠してるんじゃないの?」

「カクシテマセンヨ?ホントダヨ?ウソツイテナイヨ?」

「怪しいわね・・・えい!」

と、手を伸ばそうとするツァン。俺はその手を掴み、抱きこむ。これで動けまい。

「な、ななな・・・」

「これで動けないだろ?」

「むー・・・ん」

ツァンが俺を強く抱きしめる。何を・・・

「いい匂い・・・」

いい匂いって・・・ツァンさんあなたね。今日は俺風呂入ってないよ?」

「そついえば、シャワー壊れてんだよなあ……」

イエローも水道管が壊れてるとかなんとか……はあ

「今日はどうするの？秋」

「ん？ああ……なんか聞いた話だと温泉があるとか聞いたから……そこ行くか」

「え、あの温泉！？ちよ、ちょっと待ってなさい！（あ、あそこって確か混浴……）」

ツアンが走って行ってしまった。どうしたんだらうか？

「おーい！秋ー！いるかー？」

「十代？いるぞー」

ドアが開くと、十代、翔、隼人がいた。話を聞けば温泉に行かないかとのこと。俺は了承してPDAで雪乃に連絡した。すると雪乃も気分的に温泉に行きたかったらしく、ツアンを連れて現地で集合したいとのこと。了承して温泉地に向かう俺達。途中、十代にいつもの元気がなかった。

「どうした？十代」

「ん？ああ……なんでもない」

「そっか」

どうしたのだろうか？まあ、こいつが悩んでいてもきつと大丈夫だろう。温泉地につくと、雪乃とツアンが既に待っていた。最初は顔を紅くしていたツアンだったが、十代達を見た瞬間にため息をついていた。

「ツアン、どうかしたのか？」

「なんでもない、期待した僕が馬鹿だったわ……」

なんのこっちゃ。とりあえず温泉の中へ入る。するとそこは広い……うん、とにかく広い温泉だった……。校長の趣味なのか？明らかにレジャーランドだろ。これ……

「ん？万丈目じゃねえか！」

「万丈目さんだ」

相変わらずの万丈目がいた。ふうー……

「あいつら、温泉で位ゆつくりできないのか？」

「まったくなんだなあ……」

と、遊ぶ十代、翔、万丈目を見る俺と隼人。まったく……

「うわっ！僕泳げないんす！助けてえ！」

と、浮き輪を外された翔が叫ぶ。やれやれとため息をついて俺達が近寄る。その瞬間立ちくらみが起き、俺は気を失った。



S i d e 十代

ハネクリボーがどこかに行ったから追ってたらいきなり穴の中へと落ちてしまった・・・なんだ？ここ。見ればモンスターたちがいっぱいいる。って、なんか声がするな

「マスター！マスターしつかり！」

「ん？ミラ！」

ミラが実体化して秋を呼び掛けていた。ここって・・・もしかして

「あ、十代さん！」

「ここって・・・」

「はい、ここは精霊界・・・といっても、前のように物騒なところではありません。攻撃力の低いモンスターたちが集う場所です」

周囲を見渡すと、キーマイスやプチ天使、プチリュウなんてのもいる。確かに、強いモンスターは見えないな。お、ルイズなんてのもいるのか！懐かしいな！

「ん・・・ここは？」

「秋！目が覚めたか！」

秋が目を覚ました。

「十代……に、ミラ？」は……」

俺は秋にここの説明をした。すると何か音が聞こえる。

「あれってもしかしてえ！？」

二人で同時に横へ避けると、翔、隼人、万丈目がそらから降ってきた。やっぱりな……さつきも俺が上から降ってきたんだし、そう  
だと思っただぜ

「……？」

「あれ、服着てるんだな……」

そういえば服着てるや……俺の腕に至ってはデュエルディスクが……そして俺、秋、万丈目には鍵がちゃんと首から下げられている。そしてそんな会話をしていると、そこへ変な奴が来た。

「精霊に導かれし決闘者たちとは貴様たちのことか」  
デュエリスト

「カイバーマン様！」

「カイバーマン？」

おじゃマイエローが言っつてことは……そうとう強い奴なのか？  
カイバーマンって確か……まあいいや。とりあえず聞いてみよう

「アンタがここのリーダーか？」

「……………」

え？反応なしかよ

「なんで俺達をこんなところに呼んだんだ？」

「……………」

これも反応なし？

「ちゃんと帰す気はあるのか？」

「……………」

沈黙を続けるカイバーマン。じゃあやつぱり！

「アンタもセブンスターズの一人なのか！？」

「ふうん……質問が多いぞ貴様。デュエルをすれば全てわかると、  
常々ほざいているそうではないか貴様……」

し、質問全無視かよ！ってか、俺のことを知っている？なんでだ？  
するとカイバーマンの腕に付けられたデュエルディスクが展開され  
る。俺もとっさにいつの間にか装着されたデュエルディスクを構え  
た。

「それとも、俺と決闘するのが怖いのか？それとも、その闇の決闘  
とやらが怖いのか？」

つぐ……確かに、前に経験した闇の決闘、そして秋が受けた闇の

決闘・・・どちらも恐怖を感じている・・・

「お、俺は・・・」

「ふうん・・・意気地のないことだ」

「つぐ・・・」

言わせておけば・・・！言いたい放題言いやがって！

「恥を知れ！己が頂点を目指すというのなら、この俺を乗り越えてゆけ！」

なんか無茶苦茶言っていないかコイツ。

「なんか、言ってることが無茶苦茶強引なんだな」

「兄貴、やっちゃいましようよあんな奴」

おいおい、翔・・・それはないんじゃないか？カイバーマンだって仮にもモンスターの精霊なんだぜ？

「怖気づいたんなら俺と代われ」

「がっかりさせるな・・・こいつが、貴様と戦いたいと言っているのだ」

そう言っただけで見せられるのは・・・青眼の白龍！？今は秋が持っているはずだろ！？？どういことだ！

「どうした？青眼の白龍を前に臆したか」

「青眼の白龍・・・受けて立つぜ！カイバーマン！」

そこまで言われたらやるしかない！俺も決闘者だにげねえ！

「<sup>デュエル</sup>決闘！」

十代 LP4000

カイバーマン LP4000

Side秋

まさか、精霊界に落ちるとはな。今回は別の場所のようだが・・・  
十代がカイバーマンと戦う話か。すっかり忘れてたぜ

「マスター大丈夫ですか？」

「ああ、まあな・・・」

とは言ったものの、落ちた時に相当強打したらしい。ま、大丈夫だ  
ろう

「俺の先攻ドロ・・・！？」

十代の先攻・・・のはずなのだが、十代の顔色が変わった。

「カイバーマン！どういうことだ！」

「何がどういうことかは知らんが・・・そのデッキは貴様の持ち得る最強のデッキのはずだ。そのハネクリボーが調節したんだからな」

ハネクリボーが？一体何の話をしているんだ？

「つく！俺は手札から『E・HEROエアーマン』を召喚！」

E・HEROエアーマン ATK1800/DEF300

エアーマン！？俺はアイツにカードを返してもらったはずだが・・・まさか、ハネクリボーが作り出したとでもいうのか？

「エアーマンの効果発動！このカードの召喚に成功した時、『HERO』と名のつくモンスターを手札に加える！俺が手札に加えるのは『E・HEROプリズマー』！」

「・・・つく！さらにカードを2枚伏せ、ターンエンド！」

「ふうん。考え事は済んだか・・・俺のターン！俺が引いたカードは『正義の味方カイバーマン』！」

正義の味方カイバーマン ATK200/DEF700

「カイバーマンが二体！」

「まさか！」

「……そのまさかだろうな。こいつが出た以上

「カイバーマンを生贄に、手札から『青眼の白龍』を召喚！」

青眼の白龍 ATK3000/DEF2500

「出たな！青眼の白龍！」

「ふうん……青眼の白龍を恐れないとはな……バトル！青眼の白龍でエアーマンを攻撃！『滅びのバーストストリーム』！」

「うわあああつ！」

十代 LP4000 LP2800

「つぐ！だがこの瞬間罨発動！『ヒーローシグナル』！デッキか手札から『E・HERO』を特殊召喚！現れる！『E・HEROフォレストマン』！」

E・HEROフォレストマン ATK1000/DEF2000

「ならばターンエンドだ」

「俺のターンドロー！ここでフォレストマンの効果発動！デッキから『融合』を手札に加える！そして手札から『E・エマジエンシーコール』を発動！デッキから『E・HEROネクロダークマン』を手札に加える！そして『融合』を発動！フィールド上のフォレストマンと、手札のネクロダークマンを融合！現れる、『E・HEROガイア』！」

E・HEROガイア ATK2200/DEF2600

「ガイアの効果発動！このカードの召喚に成功した時、相手モンスターの攻撃力を半分にし、その半分の攻撃力をガイアに加える！俺は青眼の白龍を選択！」

青眼の白龍 ATK3000/DEF2500 ATK1500/  
DEF2500

E・HEROガイア ATK2200/DEF2600 ATK3  
700/DEF2600

「伝説を打ち破れ！ガイアで青眼の白龍を攻撃！『コンチネンタルハンマー』！」

カイバーマン LP4000 LP1800

「ぐうう！やってくれたな貴様！」

「俺はカードを1枚伏せて、ターンエンド！」

E・HEROガイア ATK3700/DEF2600 ATK2  
200/DEF2600

・・・完全に漫画版十代になってるよ、十代のやつ。もしかしてハネクリボーは殆どそついう風にデッキ構成を組んだのか？

「俺のターンドロ―！ふうん・・・俺は手札から『強欲な壺』を發動して2枚ドロ―！さらに、手札から『死者蘇生』を發動する。蘇



れ！『青眼の白龍』！」

青眼の白龍 ATK3000/DEF2500

「そして手札から『マンジユゴット』を召喚！」

マンジユゴット ATK1400/DEF1000

「そして効果に寄り、俺は『白龍降臨』を手札に加え、発動！マンジユゴットを生贄に・・・降臨せよ！白竜の聖騎士！」

白竜の聖騎士 ATK1900/DEF1200

「さらに手札より、『滅びの炸裂疾風弾』を発動！！相手フィールド上のモンスター全てを破壊する！」

「なんだって！？うわあああっ！」

破壊されるガイア・・・まあ、しょうがないわな

「そしてバトル！白竜の聖騎士でダイレクトアタック！『ダークアウト・セイクリッド・スピア』！」

「うわあああっ！」

十代LP2800 LP900

「そしてメインフェイズ2・・・このカードを生贄に僕を召喚する」

「なにを、だ？」

まあ、当然・・・

「このカードを生贄に、デッキ、または手札からこいつを召喚する！現れる！青眼の白龍！」

青眼の白龍 ATK3000/DEF2500

ですよー・・・これで青眼の白龍が2体か・・・十代はどう巻き返すつもりだ？

「カードを2枚伏せてターンエンドだ」

「俺のターンドロー！『強欲な壺』を発動して2枚ドロー！俺はここで墓地のネクロダークマンの効果を使う！」

「ほう？」

「このカードが墓地にある時、1度だけ生贄が必要なくなる！来い！『E・HEROエッジマン』！」

E・HEROエッジマン ATK2600/DEF1800

「だがその程度の攻撃力では我が青眼の白龍は倒せん」

「そいつはどうか？」

「なに？」

「フィールド魔法、摩天楼 - スカイスクレイパー - を発動！このフ

イールドではE・HEROがバトルする時、攻撃対象のモンスターの攻撃力が自分のE・HEROより高い場合、E・HEROの攻撃力は1000ポイントアップする！」

E・HEROエッジマン ATK2600/DEF1800 AT  
K3600/DEF1800

「バトル！エッジマンで青眼の白龍に攻撃！」パワー・エッジ・ア  
タック！」

カイバーマンLP1800 LP1200

「ぬううう！だがここで罷発動『リビングデットの呼び声』！蘇れ・  
・青眼の白龍よ！」

青眼の白龍 ATK3000/DEF2500

青眼の白龍が今日は過労死気味だな・・・可哀想に

「ふふふ、心が騒ぐ」

「俺もだぜ！すっげえワクワクしてる！こんな気持ち 久しぶりだ  
！あんたすげえよ！」

十代は嬉しそうだな。アレでこそいつもの十代だ。

「迷いは吹っ切れたか。遊城十代！」

「え？」

「貴様の歩んできたデュエル道など まだ入口だ！世界にはまだ未知のデュエルがある！見えるはずだ！果てしなく続く戦いのロードが…！なのに 貴様はここで立ち止まるのか！？」

「立ち止まるもんか！」

十代は強くカイバーマンに言う。どうやら、もう心配はなさそうだな…この後の展開がもうまったく読めなくなってそっちの方が心配だけど

「そうだ！己がデュエルを…己のデッキを信じて進め！その踏み印したロード…それがお前の未来となるのだ！」

「カイバーマン…」

「ブルーアイズに恐れを抱かず向かってきた事は褒めてやる…だがここまでだ。遊城十代！俺のターン ドロー！ふうん…俺は手札より『命削りの宝札』を発動！カードを5枚になるようにドロウする！」

ここで命削りか…海馬社長そのものだな。もうまったく原作の面影がねえ。まあ、遊戯Ⅱ天よりの宝札で、海馬Ⅱ命削りの宝札という方程式があるしな

「そして融合を発動！見せてやろう！最強のドラゴンを！」

…最強はきつとF・G・Dだなんて絶対に突っ込まない。うん、突っ込まないぞ

「現れよ！青眼の究極竜！」

青眼の究極竜 ATK4500 / DEF3800

「青眼の究極竜・・・すげえ威圧感だぜ」

「さらに！『龍の鏡』を発動！青眼の白龍3枚を除外することで、もう一体の『青眼の究極竜』を召喚する！」

青眼の究極竜？ ATK4500 / DEF3800

「そして畏カード『異次元からの帰還』を発動！ライフを半分にするので除外されたモンスターたちを召喚する！戻ってこい！青眼の白龍達よ！」

青眼の白龍？ ATK3000 / DEF2500

青眼の白龍？ ATK3000 / DEF2500

青眼の白龍？ ATK3000 / DEF2500

・・・か、カオスだ。原作とまったく違うじゃん。何この状況？フィールドは十代がエッジマン1体に伏せが2枚。で、カイバーマンは究極竜2体で白龍3体・・・前に社長と戦った時よりも本当にカオスだ・・・

「そして手札より『沼地の魔神王』を墓地へ送ることで『融合』を手札に加え、融合を発動！」

はあ！？

「現れる！『青眼の究極竜』！」

青眼の究極竜？ ATK4500 / DEF3800

「う、うわぁ・・・」

思わず声を漏らしたが・・・凄い状況だ

「行くぞ！青眼の究極竜でエッジマンを攻撃！『アルティメット・バーストストリーム』！」

アルティメットドラゴンが攻撃を放とうとする。

「畏発動！『エッジ・ハンマー』！』エッジマンを発動コストに、相手フィールド上のモンスターを破壊する！そして破壊したモンスターの元々の攻撃力分のダメージを与える！」

エッジマンが攻撃を耐え抜き、究極竜に突撃していく。そして爆発

「さあ、究極竜の攻撃力、4500ポイントがお前のダメージだ！」

「ふうん・・・それはどうかな？」

煙が晴れ、そこにいたのは3体の青眼の白龍

青眼の白龍？ ATK3000 / DEF2500

青眼の白龍？ ATK3000 / DEF2500

青眼の白龍？ ATK3000 / DEF2500



「いや…楽しいデュエルだったぜ」

「負けを恐れれば 立ち止まるしかない。負けて勝て！遊城十代！」

「えっ？お前…。」

この後、カイバーマンはその場を立ち去り、俺達は元の場所に帰りたいと強く念じることで、元の温泉の場所へと戻ることになった。その後遅いと雪乃とツァンに俺は怒られたのは言うまでもない。

## Sideミラ

「まったく、貴方は少しやり方が強引すぎです」

「ふうん…貴様に言われる筋合いはない。そもそも、武藤秋を気絶させてここに引きずり込んだのは貴様ではないか」

「…まあ、今回精霊界へ連れて行ったのは、マスターと十代さんにデュエルの楽しさを思い出してもらったため。そして、カード達はマスターの部屋から拝借していました」

「だが俺も久しぶりにいい決闘が出来た。そう言う意味では、感謝しよう」

まったく、この人は素直じゃないんですから。でも、そんな彼だからこそ…十代さん、そしてマスターを立ち直らせてくれたんですね



「ありがとうございます。感謝しますよ？」

「ふうん・・・さっさと行け」

「はい！それでは！」

こうして、私は精霊界から出て、マスターの元へ向かいました。この後カードを持ちだしたことがマスターにばれて、怒られちゃいました・・・うう、ごめんなさい

カ（後書き）

ってなわけでカイバーマン編でした

自分で書いてみて・・・うん、カオスだった

合計ダメージ18000なんて気のせいだ、うん。

## 弱者の強さ（前書き）

というわけで、万丈目の兄貴とのデュエルの話です  
私は個人的にこの世界のステータス、レベルの低いカード＝雑魚と  
いう設定が大嫌いです

秋「今日の最強カードは『ワイト』だ」

どこにでも出てくるガイコツのおばけ。攻撃は弱いが集まると大変。

誰でも一度は手にしたであろうモンスター・・・1990年代・・・  
誰もがワイトを雑魚と扱う時代・・・後に最凶になって行こうとは  
誰も知らない

秋「・・・まあ、当時はバナラばかりだったしな」

## 弱者の強さ

ある日、校長室に呼ばれた万丈目。そしてそれについてきた・・・というか、おもしろそうだから行くこうぜと十代に引っ張られてきた俺。そして翔・・・何事だろうか？

「校長、どうかしたんですか？」

「まさか、次のセブンスターが・・・」

と、十代と万丈目が言うが、カイバーマンの後の話って確か・・・

「実はですね、万丈目君にしか頼めないことがありまして・・・」話を聞くと、やはり買収の話だった。社長は社長でデュエルに勝ったら学園はくれてやるか言ったらしい。あの人何を考えてるんだまったく。

「で、ハンデとして攻撃力500未満のモンスターのみに入れると・・・」

「そういうことなんだにゃー」

なんだその無茶苦茶なルール・・・

「用が済んだなら、俺は帰らせてもらおう」

「万丈目!？」

万丈目が部屋を出ていく。おいちよつと待て!

「万丈目！お前攻撃力500未満のカードなんて持ってんのかよ！」

「……………」

黙って出ていく万丈目。そうだった、アイツパワーデッキじゃねーか

……

「カードがない!?!？」

「唯一持っているとしたら、これくらいだ」

そう言ってみんなの前で見せたのは『おじゃまいエロー』のカードのみ

「そもそもさ……攻撃力500未満のモンスターで勝てるのかなあ」

「確かに……………」

と、ざわざわという周囲。まあ確かにな。でも……

「俺は、ローレベルのデッキが弱いとは思わないよ」

「秋？」

何故か一斉に俺へ視線が集まった。まあ、そんな発言をしたなら当

然だが

「だいたい、この学園でも世間的にもそうだが、攻撃力が低かったり、レベルが低いだけで屑カード呼ばわりする連中の気が知れん」

「じゃあお前はあの条件で勝てるっていつのかよ」

「500未満なんだろう？なら問題ない・・・十代、決闘だ」

「え？」

「俺は攻撃力500未満のデッキの手本を見せてやる」

「おっしゃ！いいぜ！やろっやろっ！」

とりあえず見せてやろうか、こいつらにローレベルデッキの恐ろしさをな

決闘場

Side雪乃

秋の発言で十代の坊やと決闘することになった秋。本当に大丈夫かしら？でも、前に言ってたわね・・・弱いカードなどないって。そしてあんな公衆で言ったからか、見学者の数も多い。

「秋、大丈夫かしら？」

心配そうなツアン。まあ、普通ならそうでしょうね

「ふん・・・さっさと終わらせる。俺は古井戸にカードを取りに行かねばならん」

万丈目の坊やは大徳寺先生の話でカードを取りに行くということになった。昔雑魚カードを捨てたと言われる古井戸・・・どんなカードがあるのかしらね？つと、決闘が始まるわ。今私の周囲にいるのはツアン、明日香、万丈目の坊や、カイザー、三沢の坊や、翔の坊や、隼人の坊や・・・そしてジュンコとモモエ。まあいつものメンバーね

「<sup>デュエル</sup>決闘！」

秋 LP4000

十代 LP4000

「先攻は俺がもらうぞ十代・・・俺のターンドロー！」

さて、見せて頂戴？ローレベルデッキの力を

「俺は手札から『サイバー・ヴァリー』を攻撃表示で召喚！さらに『機械複製術』を発動し、サイバー・ヴァリーを2体、フィールドに特殊召喚する」

サイバー・ヴァリー？ ATK0/DEF0

サイバー・ヴァリー？ ATK0/DEF0

サイバー・ヴァリー？ ATK0/DEF0

「サイバーモンスター!？」

「・・・あのモンスターとは、やっかいな」

「お兄さん、どういう意味っす？」

あまり見ないサイバーモンスターね。攻撃力と守備力が0だなんて  
・  
・

「見ていれば分かる。あのカードは厄介だ」

「ターンエンド。さあ、十代のターンだ」

「行くぜ秋！俺のターンドロ！俺はスパークマンを攻撃表示で召喚！バトルだ！サイバー・ヴァリーに攻撃！」スパーク・フラッシュ  
『！』

E・HEROスパークマン ATK1600/1400

この攻撃が通れば秋は大ダメージを・・・

「サイバー・ヴァリーのモンスター効果発動！攻撃対象となったサイバー・ヴァリーをゲームから除外し、バトルフェイズを強制終了させる。そしてカードを1枚ドロ！出来る！」

なっ・・・そんな効果が

「げげっ・・・やっかいだなあ・・・俺はカードを2枚伏せて、夕



ーンエンドだ！」

「俺のターンドロワー……！俺は『強欲な壺』を発動しカードを2枚ドロワー！ふっ……俺は手札から『ワン・フォー・ワン』を発動！手札の『グローアップ・バルブ』を墓地へ送ることで、『ワイト』を特殊召喚！」

ワイト ATK300 / DEF200

「ワ、ワイトだと!？」

「おいおい、アイツ何を考えてんだ……」

周囲で驚きの声上がる。まあ、弱小モンスターの代表格と言えば、このモンスターとも言えるでしょうね。でも、このカードは使い次第では恐ろしいカードへと変貌を遂げる。前にカードショップで大量買いしたものね、ローレベルモンスター

「さらに速攻魔法『地獄の暴走召喚』を発動！このカードは、相手フィールド上に表側表示でモンスターが存在し、自分フィールド上に攻撃力1500以下のモンスター1体が特殊召喚に成功した時に発動する事ができる。その特殊召喚したモンスターと同名モンスターを自分の手札・デッキ・墓地から全て攻撃表示で特殊召喚する。相手は相手自身のフィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択し、そのモンスターと同名モンスターを相手自身の手札・デッキ・墓地から全て特殊召喚する。ワイトを2体、攻撃表示で特殊召喚する！」

ワイト? ATK300 / DEF200

ワイト? ATK300 / DEF200

「十代、お前のデッキにはスパークマンは1体だよな？」

「ああ、俺は召喚できない……」

「さらに、魔法カード『サンダー・クラッシュ』を発動！自分フィールド上のモンスターを全て破壊し、その破壊したモンスターの数×300ポイントのダメージを与える！」

「うわああっ！」

十代 LP4000 LP2500

「一気にライフを減らした……」

「でも、アニキの場にはまだスパークマンがいる」

どうかしらね……ワイトを召喚するというよりも、アレはワイトを墓地へ送ることが目的のように見えるわ

「そしてさらに通常召喚！いでよ『ワイトキング』！」

ワイトキング ATK？/DEF0

「攻撃力が決まってない!？」

「ワイトキングは、墓地のワイト、及びワイトキングの攻撃力×1000ポイント攻撃力を上げるカードだ……よって攻撃力は3000だ！」

ワイトキング ATK? / DEF 0 ATK 3000 / DEF 0

「こ、攻撃力3000!？」

あのワイトが・・・どうしたらこんなことになるんでしょうね。恐ろしいとしか言えないわ。というか、そう言うモンスター使わないでよ秋・・・怖いじゃないの

「行くぞ十代！ワイトキングで攻撃だ！『キング・オブ・ナイトメア』！」

十代 LP 2500 LP 1100

「この瞬間罨発動！『ヒーロー・シグナル』！デッキから俺は『E・HEROフェザーマン』を守備表示で召喚する！」

E・HEROフェザーマン ATK 1000 / DEF 1000

「カードを1枚伏せ、ターンエンド」

「すごい・・・レベル1のモンスターだけであそこまでデッキを回して十代からライフを削るなんて・・・」

「レベル1のデッキに・・・あそこまで需要があったなんて・・・」

「俺、弱いカード見直してみようかな・・・」

周囲の声は、弱いモンスターたちを考え直すものだった。流石は秋といったところかしらね

「へへっ・・・やるな！さすがは秋だぜ！俺も負けてられない・・・俺のターンドロー！俺も『強欲な壺』を発動して2枚カードをドロー！行くぜ！魔法カード『融合』！フィールドのフェザーマンと、手札のバースト・レディを融合！現れるマイファイバリットモンスター！『E・HEROフレイム・ウィングマン』！」

E・HEROフレイム・ウィングマン ATK2100/DEF1200

「そしてフィールド魔法『摩天楼 - スカイスクレイパー -』発動！」

あ、相変わらず十代の坊やのドロークには驚かされるわね・・・2枚引いてそれって

「バトルだ！フレイム・ウィングマンでワイトキングを攻撃！」

E・HEROフレイム・ウィングマン ATK2100/DEF1200 ATK3100/DEF1200

「ぐっ・・・」

秋LP4000 LP3900

「そしてワイトキングの攻撃力3000のダメージを受けてもらっぜ、秋！」

秋LP3900

「あれ！？ライフが・・・」

「ワイトキングは墓地では攻撃力は？だ・・・前にもあっただろ？  
0だと受けるダメージも0だ」

・・・まだ序盤のはずなのに・・・なにこのハイレベルバトルは

「カードを2枚伏せて、ターンエンド！」

「俺のターンドロ・・・！」『命削りの宝札』を發動してカードを  
5枚になるようにドロ！そして手札から『ワイトキング』を召喚  
！」

ワイトキング ATK？/DEF0 ATK4000/DEF0

「こ、攻撃力4000のワイトって・・・」

「なんか恐ろしいわね・・・」

まったくね。

「これだけじゃないぞ十代。俺は手札から『高等儀式術』を發動す  
る。自分のデッキにある通常モンスターを墓地へ送って効果を發動。  
俺が墓地へ送るのは・・・『千眼の邪教神』だ。そして手札からこ  
いつを召喚する・・・こい！『サクリファイス』！」

サクリファイス ATK0/DEF0

レベル1の儀式モンスター・・・！そしてこのカードの能力はかな  
りのものよ！

「サクリファイスは、1ターンに1度相手のモンスターを吸収し、

その攻撃力を得る！フレイム・ウィングマンを吸収しろ！サクリファイアイス！」

フレイム・ウィングマンが吸収され、サクリファイイスの羽根の部分に埋め込まれた。これが、サクリファイイス……

サクリファイイス ATK0/DEF0 ATK2100/DEF1  
200

「さらに、デッキトップのカードを墓地へ送ることで、グローアップ・バルブを特殊召喚」

グローアップ・バルブ ATK100/DEF100

「そして十代、落ちたカードを教えてやるよ」

「落ちたカード？」

「墓地へ落ちたのは……『ワイトメア』だ」

ワイトメア？またワイト関連のカードということ！？

「ワイトメアは本来、このカードを手札から捨てることで除外されたワイト、またはワイトメアを墓地へ送るカードなんだが……  
・このカードもワイトとして扱う！」

ワイトキング ATK4000/DEF0 ATK5000/DEF0  
F0

攻撃力5000！これは、なんというか……酷いわね

「バトル！ワイトキングでダイレクトアタックだ！」

「畏発動！『攻撃の無力化』！攻撃を無効にしてバトルフェイズを無効にする！」

「防いだか・・・ならば、カードを2枚伏せ、ターンエンド！」

「へへ、楽しいデュエルはまだまだこれからだぜ！」

フレイム・ウィングマンを失った十代の坊や・・・どこまでやれるのかしら？フィールドは何ともカオスな状況ね。唯一の突破口だとしたら攻撃表示のグローアップ・バルブ。何かしらHEROを出して撃破すれば十代の坊やの勝ちだけど、あの2枚の伏せカードには何かある。十代の坊やもそれは分かっているはず。どうするつもり？

「俺のターンドロー！俺はここで畏カード『ヒーロー・プラスト』を発動！このカードは自分の墓地に存在する「E・HERO」と名のついた通常モンスター1体を選択し手札に加える。そのモンスターの攻撃力以下の相手フィールド上表側表示モンスター1体を破壊する！俺が戻すのはバースト・レディだ。そしてそれ以下の攻撃力であるグローアップ・バルブを破壊する！」

「っち！」

やっぱり何かを仕掛けていた？グローアップ・バルブの効果はデュエル中一回のみ・・・

「そしてバースト・レディを召喚！」

E・HEROバースト・レディ ATK1200/DEF800

「さらに、罨カード『バースト・リターン』を発動！フィールド上のバースト・レディ以外のフィールドの『E・HERO』を手札に戻す！つまり、サクリファイスに装備されたフレイム・ウイングマンは融合デッキへと戻る！」

なるほど、考えたわね・・・これによってサクリファイスの攻撃力は0になる

サクリファイス ATK2100/DEF1200 ATK0/DEF0

「そして『命削りの宝札』を発動！カードを5枚になるようにドロ―する！へへっ！行くぜ秋！『死者転生』を発動し、手札を一枚墓地へ送り、スパークマンを手札へ加える！さらに！『融合回収』を発動！フェザーマンと融合を手札に戻す！そして手札の『沼地の魔神王』を手札から墓地へ送ることで融合を手札に加える！」

な、なんてドロ―運なの！？秋、やっぱりあの子に命削りの宝札は危ないわよ

「『融合』を発動！現れる、『E・HEROフレイム・ウイングマン』！」

E・HEROフレイム・ウイングマン ATK2100/DEF1200

「そして再び『融合』！フィールドのフレイム・ウイングマンと、手札のスパークマンを融合！現れる『E・HEROシャイニング・



フレア・ウィングマン』！」

E・HEROシャイニング・フレア・ウィングマン ATK250  
0/DEF2100

「そして、このカードの攻撃力は墓地のE・HEROの数だけ300ポイントアップする！俺の墓地には『フェザーマン』『バーストレディ』『スパークマン』『フレイム・ウィングマン』そして死者転生で墓地へ送った『ネクロダークマン』が存在する。よって攻撃力が1500ポイントアップ！」

E・HEROシャイニング・フレア・ウィングマン ATK250  
0/DEF2100 ATK4000/DEF2100

攻撃力4000！十代の坊やも秋に劣らず凄いことしてくるわね・

「バトルだ！行け！シャイニング・フレア・ウィングマン！サクリファイスに攻撃！『シャイニング・シユート』！」

「畏発動！『聖なる鎧 - ミラーメール - 』！」

「ミラーメール？ミラフォじゃないのか？」

「このカードは、自分の表側表示のモンスターが攻撃対象となった時に発動できるカードだ。攻撃するモンスターの攻撃力と、攻撃対象となったモンスターの攻撃力は同じになる！」

攻撃力変動のカード・・・なるほど、元々グローアップ・バルブを囷としていたわけね。サクリファイスを墓地へ送るよりはいいわけ

ね。そして、サクリファイスの攻撃力は・・・

サクリファイス    ATK0 / DEF0    ATK4000 / DEF0

「迎え撃て！サクリファイス！」

サクリファイスに鏡の様なものがいくつか装備され、それにシャイニング・フレア・ウイングマンが映し出され、サクリファイスからもシャイニング・シュートが打ち出され、相殺される

「つく・・・！だったら、俺の最後の手札！『E・HEROバブルマン』を特殊召喚する！」

E・HEROバブルマン    ATK800 / DEF1200

こ、ここで・・・バブルマンなの？頭が痛くなってきたわ。あの子のドロー運ってどれだけいいのかしら。秋も頭を抱えているわね

「そして自分のフィールド上に、他のカードがない場合、デッキからカードを2枚ドロウする！よし、俺は手札から『ホープ・オブ・ファイフス』を発動！墓地に眠る『フェザーマン』『バースト・レディ』『スパークマン』『フレーム・ウイングマン』『シャイニング・フレア・ウイングマン』をデッキに戻してシャッフル・・・2枚ドロウする！」

・・・さっきまで十代の坊や、手札はバブルマン1枚のはずよね。なのになんで3枚に戻っているのかしら？

「カードを2枚伏せて、ターンエンド！」

「…………お前のドロ運には尊敬の意を表するよ、まったく」  
「へへっ…………まあな」

秋はため息をついてからデッキへ手をかける。

「俺のターンドロ！バトル！バブルマンにワイトキングで攻撃！  
『キング・オブ・ナイトメア』！」

「畏発動！『ヒーローバリア』！『E・HERO』への攻撃を1度  
だけ無効にする！」

防いだ…………ということとは、バブルマンを生かしておく理由がある  
？秋のLPは900…………そして十代のLPは1100…………どち  
らも引かない。どうなるのかしら

「カードを1枚伏せ、ターンエンド」

「俺のターンドロ！いよっし！俺はバブルマンを攻撃表示に変更  
！」

え？どういうつもり…………？

「そして手札から魔法カード『バブル・シャッフル』を発動！この  
カードはフィールド上に攻撃表示のバブルマンと相手フィールドに  
攻撃表示のモンスターがいる時発動できる！相手のモンスターは守  
備表示とバブルマンは守備表示に変更される！」

「そうか、ワイトキングの攻撃力は5000でも、守備力は0！」

「そして十代のあの手札にモンスターカードがあるのなら、ワイトキングは倒せる」

カイザーと三沢の坊やの言う通りね。十代の手札。先ほど伏せなかったとなれば・・・通常魔法、もしくはモンスターカード・・・

「俺は手札から、『E・HEROスパークマン』を召喚！」

E・HEROスパークマン ATK1600/DEF1400

「バトルだ！スパークマンでワイトキングを攻撃！『スパークフラッシュ』！」

E・HEROスパークマン ATK1600/DEF1400  
ATK2600/DEF1400 A

「っちい！」

「ターンエンドだ！」

「俺のターンドロ！俺は伏せていた『エンジェル・リフト』を發動！レベル2以下のモンスターを特殊召喚する！復活させるのは当然『ワイトキング』！」

ワイトキング ATK?/DEF0 ATK5000/DEF0

「そしてバトル！ワイトキングでスパークマンを攻撃！『キング・オブ・ナイトメア』！」

「畏発動！『異次元トンネル・ミラーゲート』発動！自分フィー

ルド上に表側表示で存在する「E・HERO」と名のついたモンスターを攻撃対象にした相手モンスターの攻撃宣言時に発動！相手の攻撃モンスターと攻撃対象となった自分モンスターのコントロールを入れ替えてダメージ計算を行う！このターンのエンドフェイズ時までコントロールを入れ替えたモンスターのコントロールを得る。つまり、俺のスパークマンと秋のワイトキングを入れ替えてバトルだ！」

ここでそんなカードを！？秋がエンジェル・リフトでワイトキングを戻すことを予測済みだったというの？

「悪いが十代・・・ワイトキングの攻撃力を見て見る」

ワイトキング ATK0/DEF0

「攻撃力が!？」

「そう、プレイミスだな十代・・・ワイトキング効果はあくまでも『自分の墓地』にワイトがあれば発揮する。バトル続行！スパークマン！ワイトキングを攻撃だ！『スパーク・フラッシュ』！」

「うわあああっ！」

十代 LP1100 LP0

まさか、本当にローレベルモンスターだけで勝つなんて・・・気が付けば万丈目の坊やが立ち上がり、何やら考えながら決闘場を後にしていた。

:

## 弱者の強さ（後書き）

というわけで、次回はあのカード達が登場！  
頑張れ万丈目！

・・・それにしても最近いいところなしの十代。頑張れ十代

落ちこぼれの意地（前書き）

というわけで・・・お腹痛いです  
前の病気が再発した感じ。夕食を抜いてなんとか保ってますが・・・  
痛い

秋「今日の最強カードは・・・」おジャマ・カントリー」だ」

1ターンに1度、手札から「おジャマ」と名のついたカード1枚を  
墓地へ送る事で、自分の墓地に存在する「おジャマ」と名のついた  
モンスター1体を特殊召喚する。自分フィールド上に「おジャマ」  
と名のついたモンスターが表側表示で存在する限り、フィールド上  
に表側表示で存在する全てのモンスターの元々の攻撃力・守備力を  
入れ替える

おジャマデッキの他にも、おジャマシンクロンなどでも使われるこ  
とのあるカード・・・これは当時確かジャンプ・フェスタでしか配  
られなかったカードで、なかなか入手できない稀少なカードだった  
秋「非常に入手するのが難しいカードだったな・・・今はそうでも  
ないが」

## 落ちこぼれの意地

Side万丈目

俺は兄さんとデュエルするため、カードを集めに山の中を歩いている。先ほどのデュエル・・・認めたくないが見事なものだ。ローレベルデッキでもあれだけの動きをすることができる。恐らく、ハンデなど関係ないだろう・・・そんなことは、今はどうでも良い。それよりも・・・

「なんで貴様ら二人が付いて来ている！」

俺の後ろには十代と秋が歩いていた。

「だって、お前の肩に学園の未来が掛ってるんだぜ？悪霊が出たらお前を守らないと！」

「俺は井戸に捨てられたカード達というのに興味がある」

「バカバカしい・・・悪霊などいるものか」

そう俺が言った直後、白い人魂のようなものが飛び交っていた。

「うち・・・本当にでやがった」

「うわっ！」

十代を人魂が通り過ぎるが・・・



「あれ？なんともない」

「そうか、こいつらの攻撃力は0！相手にダメージなど与えられないというわけだ」

「そっか・・・」

俺達はそいつらを放置し、先へと進む。

「お！井戸だ井戸！」

「やかましい・・・見ればわかる」

「本当に枯れ井戸だな・・・」

中を覗くとカードが散らばっているのが見える。ここで間違いはなさそうだ。梯子を降ろし、下へ降りる。十代と秋もそれに続いた。

「っと」

「ここがカードの墓場か・・・」

「なるほどな、攻撃力の低いカードばかりだ」

さて、どうしたものか

Side 秋

俺は万丈目達とその井戸を降りてカードを拾い上げる。おい、どこ

の馬鹿だ・・・『薄幸の美少女』捨てた馬鹿は・・・他にも・・・『プチモス』『アメーバ』・・・おい、なんで『サクリファイス』が捨ててあるんだ

『やいやい！何しにきやがった！』

『きやがった！』

「「「ん？」「」」

そこにいたのは『おジャマ・ブラック』『おジャマ・グリーン』の2体だ。

『ぶっ飛ばしてやるぜ！』

『してやるぜ！』

「やれるものならやってみろ、お前らの攻撃力で一体何が出来る」

まあ、こいつらの攻撃力は0だからな。

『できない！』

『できないぞ！』

泣きだすおジャマ兄弟。俺達はその五月蠅い声に耳を塞ぐが、その周囲の他の精霊たちも騒ぎだした。

『せめて弟がいればもう少しなんとかなるのにー！』

『なるのにー!』

『どこに行っただよ!おジャマ・イエロー!』』

二人が叫ぶと、万丈目の頭からイエローが出てきた

『おいらのこと呼んだ?』

『『え?』』

驚く2匹・・・まあ、そうだろうな

『無事だったのか!おジャマ・イエロー!』

『ブラック兄ちゃん!グリーンあんちゃん!』

抱きつく3人。感動の再会だが、シユールだな。それにしても、イエローって未っ子だったのか

「感動の再会だな」

「見るに堪えん」

すると立ち上がる万丈目

「どこいくんだよ」

「帰る」

「カードは?」

「お前が俺にカードを売れ、秋」

やっぱり、そんなこつたろうと思った

「お前が買った値段より高く出そう」

「だが断る。お前なあ……それじゃあ兄貴に頼るのと一緒だぜ？」

「つぐ……」

『ほら！あんちゃんたちこの人をお願いして！この人ならここから出してくれるよ！』

と、イエロー

『なら頼んでやる！ここから出してくれー！』

『他の奴なんてどうでも良いから！』

「……こいつら相当正確性格が歪んじまってるな」

「……確かに」

と、十代と俺。やれやれ……

「よつと……」

俺は一枚一枚丁寧にカードを集め始める

「何をしている秋」

「可哀想じゃないか。こんなところにカードが捨てられるなんて・・・」

「そうだな！」

俺と十代が拾い始めると、万丈目が梯子に手をかけるが・・・

『『『じー』』』』

「・・・」

『『『じー』』』』

「・・・あーもう鬱陶しい！わかったわかった！俺も拾えばいいんだろう！」

おじやま達の視線＋他の精霊たちの視線によって万丈目もカードを拾い始める。結局集まったのは本当に弱いカードばかり。中には稀少なカードも混じっているが、これは本当に価値を知らない人間の行動だったのだろう。万丈目が全てカードを預かるといふことで精霊たちは喜んだ。そして夜

「万丈目、入るぞ」

「なんの用だ」

万丈目はベッドの上でデッキを組んでいた。どうやら上手くいかないらしい

「デッキの進み具合を見に来たのさ」

「ふん・・・見ての通りだ」

なるほどね・・・

「なら丁度いい、万丈目・・・これもお前に『預ける』」

「・・・これは」

それはローレベルデッキに必要なカード達

「いらん」

「そついうな・・・これは俺からの謝罪だ」

「なに？」

怪訝そうな顔で俺を見る万丈目

「前にお前が海にカードを捨てた時、俺はお前を殴り飛ばそうとも思った。だが今日、お前はカードを拾い、そしてそこに大切にしまった・・・荒れてた時期がお前にあったとはいえ・・・そう思っていた俺がいた。すまなかつた」

「フン！貴様の謝罪などいらん！」

「それに、代表選では十代にカードを貸していたからな。お前にも渡しておくよ。言いたいことはそれだけだ。じゃあな」

「おい！」

俺はそう言い残して部屋を出て行った。

S i d e 万丈目

アイツの施しはいらんとも思ったが、明日は確実に勝たなければならぬ。ここはアイツに頼るほかないだろう。俺はカードを漁り始める。そこにあるのはレベルが低く、攻撃力が0でも、優秀なカードたちだった。

「・・・アイツの力を借りるのは癪だが、仕方がない」

俺は再びデッキを組み直し始めた

S i d e 秋

次の日、約束の日がやってきた。決闘場には万丈目の兄二人と、万丈目

「頑張れー万丈目ー！」

さあ、どうなるかな？万丈目はハンデいの500未満どころか、デッキには攻撃力が0のモンスターしか入れてないという。ふん、頑張れよ・・・万丈目

「『決闘』<sup>デュエル</sup>」

万丈目      LP4000

万丈目兄    LP4000

「俺のターンドロ―！俺は裏側守備表示でモンスターをセット！カードを1枚セットし、ターンエンドだ！」

「俺のターンドロ―！私は手札から『融合』を発動！『ロード・オブ・ドラゴン・ドラゴンの支配者』と『神竜ラグナロク』を融合！いでよ！『竜魔人キングドラグーン』！」

竜魔人   キングドラグーン    ATK2400 / DEF1100

現れたキングドラグーン……どうでも良いけど見にくい。無駄にキラキラしてる

「アレって!！」

「全部パラレルレアのカードか!！」

驚きを隠せないようですけど……え？なに？

「パラレルレアってそんなに価値あるか?！」

「何言ってるんスカ!5箱くらいカードを買って1枚入るか入らないかッスよ!?!？」



.....

「あ、そう・・・」

どうでも良いが、俺の世界ではもうパレルレアなんてトーナメントパックにしか入ってなかったな。価値があるのはフォログラフィックカレリーフレアのカードだが・・・まあ、話がややこしくなるから黙っておこう

「キングドラグーンの効果発動！1ターンに1度、一度手札からドラゴン族1体を特殊召喚出来る。手札から「エメラルドドラゴン」を特殊召喚！」

エメラルドドラゴン    ATK2400 / DEF1400

・・・ドラゴン族デッキなのはいいが、もっと需要のあるカード入れない？

「攻撃力2400が・・・2体!？」

「いきなりね・・・万丈目の坊やは平気かしら？」

「大丈夫だろ」

俺の一言で、周囲が驚く

「どっぴいっ」と??」

「セットカードはリバースモンスターだ・・・伏せカードもあるし・

「・・・万丈目も馬鹿じゃない。見てればわかるぞ」

「さあ、どうする万丈目兄」

「バトルだ！竜魔人で攻撃！」

「セットしているのは『薄幸の美少女』！このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、このターンのバトルフェイズを終了する！」

「まあいい・・・ターンエンドだ！」

「俺のターンドロ・・・！俺は『ミスティック・パイパー』を召喚！」

ミスティック・パイパー ATAO/DEFO

「このカードの生贄にもう一枚カードをドロウする！そのカードがモンスターなら、俺はもう一枚カードをドロウする！ドロウ！・・・引いたカードは『サイバー・ヴァリー』。よってカードをもう一枚ドロウ！」

このターンミスティック・パイパーを召喚したんだ。後はどうする気だ？

「俺は手札から魔法カード『暗黒の扉』を発動する。このカードによって互いのプレイヤーはバトルを1体で行えない！さらに手札から『天使の施し』を発動。カードを3枚ドロウし、2枚捨てる・・・俺は2枚のカードを墓地へ送る」

墓地へ送ったあのカード・・・なるほど

「俺が捨てたカード中に魔法カード『おジャマジック』が存在する。よって俺はデッキから『おジャマ・イエロー』『おジャマ・ブラック』『おジャマ・グリーン』を手札に加える」

「おじゃまのカードだ！」

精霊のカードとあってか、十代が喜ぶ。だが周りは困惑している。おジャマというカード・・・テキストでも3体揃えば何かが揃うと言われているが実際知る人は少ない。もつとも、この世界では・・・だがな。おジャマのせいで手札は9枚。消費しないと手札を捨てる羽目になる

「さらにカードを3枚セット！ターンエンドだ！」

「ふん、守りを固めてきたか・・・だがその程度のこと。俺のターンドロ―！私は『強欲な壺』を発動して2枚ドロ―！そしてサファイアドラゴンを召喚！」

サファイアドラゴン ATK1900/DEF1600

「さらに竜魔人の効果で私は『ダイヤモンド・ドラゴン』を特殊召喚！」

ダイヤモンド・ドラゴン ATK2100/DEF2800

(。。(

(。。(ゴシゴシ

( ; . . )

ダイヤモンド・ドラゴンキター！社長が破り捨てたカードの1枚！俺は36枚も持ってないが、使う人がいるとは思わなかったー！

「なあ、雪乃」

「なあに？秋」

「唐突に聞くが・・・ダイヤモンド・ドラゴンの価値ってどれくらいだ？」

俺が雪乃に聞くと、雪乃がしばらく考える

「そうね、レア度もかなり高いし、いいレアカードよ。桜もデッキに入れてるし・・・数万はするんじゃない？」

まじで？つと、決闘の方見ないと

「くらえ！エメラルドドラゴンでダイレクトアタックだ！」

「悪いな兄さん、罨発動『和睦の使者』！このターン、モンスターは破壊されず、戦闘ダメージは0となる！」

「ぐうぐうぐう・・・ござかしい！ターンエンドだ！」

「俺のターンドロー！俺は伏せていた『エンジェル・リフト』を発動！墓地へ天使の施しの効果で送った『サイバー・ヴァリー』を特殊召喚するー！」

サイバー・ヴァリー ATK0/DEF0

「ターンエンドだ」

「俺のターンドロー！ふっふっふ・・・準、お前に目にもものを見せてくれる！」

お？ダイヤモンド・ドラゴンとエメラルドドラゴンでどこまでやるんだ？是非見せてくれよ

「私は手札から速攻魔法『突進』を発動！ダイヤモンド・ドラゴンを対象にする！」

ダイヤモンド・ドラゴン ATK2100/DEF2800 AT  
K2800/DEF2800

・・・えー？なにそれ酷い。もうちょっとこう、ダイヤモンド・ドラゴンのためのカードとかないの！？てか、なぜエメラルドドラゴンに装備しなかったし

「バトル！ダイヤモンド・ドラゴン！サイバー・ヴァリーを攻撃！  
『ダイヤモンド・ブレス』！」

まんまやん・・・

「サイバー・ヴァリーの効果発動！このカードをゲームから除外することでバトルフェイズを終了し、自分はカードを1枚ドロウする！」

「ターンエンド！」

「俺のターンドロー！・・・『サイバー・ヴァリー』を召喚、ターンエンド」

サイバー・ヴァリー ATK0/DEF0

万丈目のやつ、何か狙ってるな？手札は5枚だが、そのうち3枚はおジャマだ。残る2枚の手札は消費していない・・・ということは、あのカード待ちか

「俺のターンドロー！私は手札から『命削りの宝札』を発動してカードを5枚になるようにドロー！そして竜魔人の効果で『レアメタルドラゴン』を特殊召喚！」

レアメタルドラゴン ATK2400/DEF1200

おお・・・レベル4にして攻撃力2400を誇る、遊戯王カードの中で一番効果テキストが短いモンスター

「レベル4で攻撃力2400!？」

「なんだあのモンスターは！」

驚く一同。このカードもレアカードなのか？

「あのカードはレベル4にして真紅眼の黒竜と同等の攻撃力を持つカードだが、あのカードは通常召喚ができないんだ」

さて、このターンはしのげるが、次がどうかかな？

「バトルだ！竜魔人！そのその攻撃力0のモンスターを攻撃しろ！」

「『サイバー・ヴァリー』！効果発動！このカードをゲームから除外することでバトルフェイズを終了し、自分はカードを1枚ドロースする！」

「ふん、所詮時間稼ぎか。ならばカードを1枚伏せ、ターンエンドだ」

「あのカードは！」

「十中八九、暗黒の扉を破壊するカード！」

おい、なんでそんなのわかるんだよ・・・

「俺のターンドロー！」

「この瞬間発動！『砂塵の大竜巻』！準！お前の暗黒の扉を破壊する！」

そして当たるカイザーたちの読み。すげえなお前ら。

「さあ、今のうちにサレンダーするならまだ許してやるぞ、準」

「・・・そのカードに用はない。俺は手札から『強欲な壺』を発動。カードを2枚ドロースする。っふ・・・兄さん、悪いがこの勝負、俺の勝ちだ」

「なに！？フィールドに何も無いお前に、一体何が・・・」

「どうかな？最後の伏せカードと、今引いたカード・・・どうやら万丈目は自分の待っていたカードを引いたようだ」

「俺は手札から『おジャマンダラ』を発動！1000のライフを支払い、このモンスターたちをフィールドに呼びだす！出て来い、雑魚共！」

万丈目 LP3600 LP2600

おジャマ・ブラック ATK0/DEF1000

おジャマ・グリーン ATK0/DEF1000

おジャマ・イエロー ATK0/DEF1000

「今更そんな雑魚共を出したところで何になる！」

「こいつらを馬鹿にする事は俺が許さん！」

「何!?!」

『『『あ・・・兄貴〜!』『『』』』』

「確かにこいつらの攻撃力は0!見てくれも性格も最悪!だが・・・俺はこいつらに教えてもらった!」

「ほう?」

「「何を!?!」」



十代と翔が首を傾げる。だがおジャマ3兄弟は誇らしそうだ

『兄弟の絆をさ!』

『力を合わせれば!』

『何だって出来るって事を!』

おお!いいことを言うじゃないか。でもまあ、万丈目のことだ・・・

「下には下がいると言う事を!」

万丈目の言葉でこける3体。まあそりゃ・・・ねえ

「こいつらに比べたら俺なんか 全然マシだ!」

「黙れ準・・・!落ちこぼれは 所詮落ちこぼれだ!」

そいつはどうか?いろんな場所で落ちこぼれは天才を凌駕するもんだぜ?

「ならば見せてやる!落ちこぼれの意地を・・・!伏せていた魔法カードをオープン!喰らえ!」おジャマ・デルタハリケーン!!」  
行けっ 雑魚共!」

伏せてたんかいつ!じゃあ何を待ってたんだお前は!

『『『やけつくそ〜!喰らえ〜!必殺〜おジャマデルタハリケーン

『!』』

3匹が回転し、ドラゴン達を包む。そして爆発し、ドラゴン達を粉砕した。絵が非常にシユールだ

「これは！」

「馬鹿な、俺のモンスターが全滅！？」

「すごい・・・」

周囲が驚きの声を上げる

「そう、おジャマに隠された力・・・だがそれだけじゃない。おジャマはさらなる真価を発揮する。万丈目の手札には、そのカードが存在する」

「え？」

「まだあるのか？」

「ああ」

俺の言葉に首を傾げる一同。そう、これでは終わらないんだよ、おジャマの真骨頂は

「さらに！俺は手札から『融合』を発動する！この雑魚3体を融合だ！」

『『『見せてやる、俺達の力を！』』』

「こい！おジャマ・キング！」

おジャマ・キング ATK0/DEF3000

『お、おジャマ・キング！？』

観客席にいた全員が驚きの声を上げた。そう、アレこそおジャマの真の姿であり、究極の姿とも言えるだろう

「でも、なんで攻撃表示で出したのかしら・・・」

「ああ、恐らく万丈目の手札には・・・」

「準！プレイミスだな！そのモンスターの攻撃力は0！守備表示で出せばいいものを・・・」

それはどうかな？

「さらにフィールド魔法！『おジャマ・カントリー』を発動！」

「な、なんだこれは・・・！？」

現れるのはおジャマの村。

「1ターンに1度、手札から「おジャマ」と名のついたカード1枚を墓地へ送る事で、自分の墓地に存在する「おジャマ」と名のついたモンスター1体を特殊召喚する。自分フィールド上に「おジャマ」と名のついたモンスターが表側表示で存在する限り、フィールド上に表側表示で存在する全てのモンスターの元々の攻撃力・守備力を入れ替える」

「な、なんだと!?!それでは・・・」

「そう、このおジャマ・キングの攻撃力と守備力が入れ替わる」

おジャマ・キング    ATK0 / DEF3000    ATK3000 /  
DEF0

「そして、このターンで俺は決めたい。俺はこのカードを使う。魔法カード『命削りの宝札』。カードを5枚ドロ―」

最後の手札がそれか。まあ、攻撃力守備力が入れ替わるってんなら・・・もう何でもいいんだろっが・・・

「・・・っふ、よりもよってこの3枚か」

ん?

「手札から『融合』を再び発動・・・俺が融合するのは手札の『おジャマ・レッド』『おジャマ・ブルー』!」

おお!?!アイツもドロ―運いいな!ここでこのカードとは・・・

「聞いたことないカードね」

「アレも俺がやったカードだ。まあ、あまり市場にも出回らないし、普通のやつらには見向きもされないうらな」

「いでよ!」おジャマ・ナイト『!」

おジャマ・ナイト ATK0 / DEF2500 ATK2500 /  
DEF0

「あ、ああ・・・」

「ちなみに、キングには相手のモンスターゾーンを3つ使えない効果があり、ナイトには2つ埋める効果がある。まあ、もうそんなことはどうでも良い」

やれやれ・・・長いデュエルだったぜ

「そして、おジャマ・キングに『団結の力』を装備」

おジャマ・キング ATK3000 / DEF0 ATK4600 /  
DEF1600

「ゆけ！おジャマ・ナイト！『おジャマ・タックル』！」

万丈目兄 LP4000 LP1500

「ぐうう・・・ひ、ひいい！」

あの場所からでは多分、おジャマキングが脅威だろうな。なんせオベリスクの攻撃力を上回っているんだから

「トドメだ！おジャマ・キング！『おジャマツスル・フライング・ボディアタック』！」

「う、うわああああああああああっ！」

万丈目兄 LP1500 LP0

わあああああああああああああああつ!!!!!!!!!!!!!!

歓声が決闘場内に響きわたる。

「やった！勝った〜！」

「やったぜ万丈目！」

喜ぶ翔と十代。まあ、流石おジャマ使いだな。いいデュエルだったぜ

『万丈目！万丈目！万丈目！万丈目！万丈目！万丈目！』

「いいや 俺の名は・・・一！十！」

万丈目が人差し指を上へあげる

「百！」

「千！」

「万丈目・・・！」

『サンダー！サンダー！万丈目サンダー！』

観客や、明日香達まで騒ぎまくる始末。唯一冷静でいるのは俺とカ

イザーとツアンと雪乃くらいだ。

「・・・万丈目、アレがなかったらカッコいいのにな」

「まったくね」

「ホント」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

この後、万丈目兄弟は万丈目を認め、帰って行った。

その日の夜 レッド寮

「何の用だ万丈目」

「カードを返しに来た」

そう言っただけ俺が貸したカードを俺に手渡した

「そうか？だがこれは持ってけ」

俺は「おジャマ・ブルー」「おジャマ・レッド」「おジャマ・マンドラ」

「おジャマ・カントリー」「おジャマ・ナイト」を渡した。

「・・・ふん、もらっておこう。秋」

「ん？」

「……………感謝する」

そう言って万丈目が出て行った。やれやれ

「これで一安心ね」

「ああ」

こうして俺達は布団の中に入る。その日の夜、万丈目の声がレツド寮で轟いていたのはまた別の話だ。



## 落ちこぼれの意地（後書き）

つてなわけで次回はとうとう三沢の話です。他の人が頑張ることに  
なりますが・・・まあ、お楽しみに！

## 闘技場での恋（前書き）

最近、大会に出るためデッキ調節しました。申し訳ない・・・  
大会は久しぶりで楽しかったですww

秋「今日の最強カードは『救出劇』だ」

フィールド上の「アマゾネス」という名のついた  
モンスターを対象にしたカードが発動した時に発動することができる。  
対象になったモンスターカードを手札に戻し  
別のモンスター1体を手札から特殊召喚する。

というわけで三沢VSタニヤです

## 闘技場での恋

万丈目の事件からしばらくしたある日のこと。相変わらずの朝。最近はず段ベッドであるはずなのに同じベッドに3人で寝ている。

「ふぁ……」

「ん……」

「んう……」

相変わらず心地の良い寝息をたてて眠る。最近慣れたというのと同時に、この二人の行為が少し嬉しいとも思える。が、一つだけ問題がある。

「まったく動けん……」

どちらかが起きるまで身体を動かすことが出来ない。そして二人のふくらみが身体に接触し、どうしても再び寝ることが出来なくなってしまうのだ。

「つぐ……」

なんとか抜け出そうとするが、この二人……正直女子としてはケタ外れた力を持っているので動こうにも動けない。まるで拘束されたかのように。腕には二人ががちりとホールドが成され、足は絡みとられているのでこれまたホールド。肩には二人の顔があり、動くことは完全に不可能……封印されしエクゾディアってこんな感じに動けないんだらうか……

「ツァン」

「くーくー……」

「雪乃」

「すーすー……」

駄目だこりゃ……時間は……まだ6時か。まあ、まだ2時間も  
あるから何とかなるけど

「マハード……」

『む、おはようございます。相変わらず幸せそうですね』

「マハード、お前からそんな言葉が出るとは思わなかったよ。とり  
あえず助けて……」

『……以前、引き剥がそうとしてツァン殿から拳を喰らいまして・  
……結論を申し上げます、無理です』

まじっすか……

「魔術でこう、なんとか……」

『そんな魔術ありません』

えー……こうなんか、攻撃力下げるような……さあ

「この二人は攻撃力とか以前に、純粋な力です・・・そういったものに魔力をかけると一生そのままになったりします。そういうのはあまりよろしくありません」

マハードは言いながら消えてしまった。この裏切り者オオオオ！と叫びたい気分だ。まったく・・・

ドオオオオオン！

「な、なんだ!?!」

二階からものすごい音が聞こえたけど・・・

「マハード!」

『はっ！確認してきます!』

そう言つて天井を通り抜けるマハードだが・・・すぐにやれやれといった表情で帰ってきた。

「ど、どうしたマハード」

『・・・三沢殿が十代殿達をリボルバードドラゴンの砲撃で起こしていました』

ソリットビジョンをそんなことに使うな、三沢

・・・結局、ツァンと雪乃が起きたのは1時間後の7時。支

度をして外を出る。そういえば、そろそろ次のセブンスターズが動き出すんじゃないだろうか？次は、タニアか？教室に入ると、生徒がほとんどいない。女子生徒は全員いるのだが、男子生徒が壊滅的に少ないのだ。

「誰か聞いてませんかニヤー」

と、大徳寺先生。すると、近くにいた三沢が声をかけて来た。どうやら三沢はこの騒動の原因をセブンスターズのせいだと睨んでいるらしい

「秋」

「ん？」

「これは、セブンスターズの仕業ではないだろうか？」

「考えられなくもないが・・・こんな直接的にか？今まで関係ない人間を巻きこんではきたが、こんな大平に・・・」

そんな話をしていると、女子教師がバッグを持ってやってきた。森の中で何人かの鞆が見つかったのだという。当然鍵を持つ人間達が探しに行くことになる。危ないと言ったのだが、これだけ全員にいるなら大丈夫だと雪乃とツアンたちもついてきた。まあ、タニヤは闇の決闘をしないこと知っているからな。しばらく森を歩き、奥深くまで進んでいく

「おーい！」

「みんなー！」

所々バッグを拾う俺達。デュエルディスクなどが落ちていたり、カードが落ちていたりする。その先にはコロシウムがあった。

「・・・・・・・・えー」

思わずそんな言葉を漏らす。こんな森の、しかもアカデミアの奥にあるはずのないようなものが置かれているのだ。意味がわからない。とりあえず全員で突入するとそこには働かされている生徒たちの姿が・・・・って、クロノス先生、アンタもかよ。見れば数人の職員もその姿を見せていた。

「みんななんか・・・・働かされてるな」

「だな・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

すると一人、雪乃が顔を青くしていた。

「雪乃？どうした？」

「・・・・・・・・・・」

無言で指を指す。その方向には一匹の虎がいた。

「と、虎!？」

『グルルルル・・・ガアアアアア!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!』

『わあああああああつ！』

「おい！なんで俺が一番前なんだよ！」

何故か俺の後ろに隠れる一同

「個人的に一番頼れる人がアンタだからに決まってるでしょ！」

「秋、男なら彼女のことは背中にまわして守るものなのよ！」

ツアン！雪乃！それなんか違うね！？てか、お前らまで何してんの！？てか、俺この前まで怪我人だぞ！？

「いや、俺はなんか便乗して・・・」

『同じく』

「大徳寺先生！アンタ猫と仲いいんだろ！アンタが行けよ！」

「嫌だにやー！あんなの猫じゃないのにやー！」

「虎は猫科だ！」

そんな感じに騒いでいると、奥から女性が出てきた。あれがタニヤだっけ。俺はチラリと三沢を見る。確か原作では三沢がデュエルすんのこれで最後なんだよなあ・・・大丈夫かな、三沢のやつ

「おかげでこの通りコロシウムは完成した。者共 感謝するぞ！」

「何だ？あいつは」



「バース！」

俺達を襲っていた虎がタニヤのもとへ近寄る。どうやらタニヤの虎らしい。

「皆さま！ありがとうございます協力してくれて！おかげで立派なコロシ  
アムが出来たわ。これほんの気持ち。ありがとうございます。お疲れさん！今  
日はゆっくり休んでね。はい ありがとね」

生徒達に何やら次々と給料のようなものを笑顔で渡してゆくタニヤ。  
なんというか・・・あの体格と顔であんな声と仕草されても喜ぶ人  
間なんて・・・って隼人！翔！顔紅くしてんじゃねえよ！

『むー・・・翔君私のファンじゃないの？』

マナがちよつとご立腹。まあ、気にするな

「カンツオーネ！ご褒美なの〜ね！」

「お前は気色わりいからやんない！」

「・・・・・・・・クロノス先生、どんまい

「そんななんない！不公平なの〜ネ！」

『ガLLLLLLLL・・・・！』

「ひえ〜ノ！怖いの〜ラー！アツディーオ！」

逃げ出すクロノス先生・・・まあ、あの先生は放っておこう。

「こらっ！何者だ！？お前！」

「私はタニヤ！偉大なるアマゾネス一族の末裔にして 長！そして  
セブンスターズの1人・・・」

「やっぱり！」

「アマゾネスって 確か」

「女子だけの一族が 世界のどこかにいるって 聞いた事あったけど」

「本当だったのね！」

本当だったのねって・・・まあ、ねえ。確か伝説上では古代ギリシヤの神話に登場する女戦士たちのことだ。女性だけの部族で社会を作り、生きていく・・・確かそんな部族だ。確かに伝説だからな、いるはずがないんだが

「このコロシムでも七精門の鍵を懸けた聖なる戦いを行う！でもねえ・・・私と戦う事が出来るのは 男の中の男だけ！」

「何よそれ!？」

落ち着け明日香・・・ん？確か、アマゾネスって仲間を増やす必要に迫られると近くの部族に出かけて行って、適当な男と交わったと言われてなかったか？しかも男の子が生まれた場合、川に流したり男の所に返したり・・・そんな部族の末裔が男の中の男を求めるの

か？

「我こそは男と言つ者！出てこい！」

「俺が！」

「いや 俺だろ！」

「いや 俺だ！」

「……………」

十代、万丈目、三沢が前に出る。俺はやる気がないので一步下がる。その横では明日香がそっぽを向いていた。

「明日香？」

「……………何よ」

「いや、そう拗ねるなよ」

十代は多分タニヤに惹かれたんじゃないやなくてデュエルしたいだけだし

「……………拗ねてないわよ」

拗ねてんじゃない

「うん……………面構えは皆悪くないけど……………ユー！」

三沢を指名するタニヤ。三沢のやつ、大丈夫かな……………？

「ちえ〜っ……」

「フン！」

やれやれ……

とりあえず俺達はコロシアムの観客席の上へ移動した。さて……  
三沢は大丈夫だろうか？

「お前……名前は？」

「俺は……三沢大地！」

「頑張れよ 三沢！」

「油断しないで〜！」

「俺達の間も 頼むんだな〜」

十代、翔、隼人が言う。とりあえず、俺は席についてデュエルを見  
ることにした。

「ああ。この日の為にずっと準備をしてきた。絶対に 俺は勝つ！」

「ここにお前の明暗を別ける 2つのデッキがある。一つは知恵の  
デッキ。一つは勇気のデッキ。お前に自分の運命を選択させてやる  
っ」

「勿論 知恵のデッキと勝負だ！」

「宜しい！」

「俺は動かざる事地の如し！地のデッキで相手をしよう！」

デッキを取り出す三沢。相変わらず6つもデッキ持ってるのか・・・カードはともかく、あのジャケット・・・どこで売ってるんだらう。自作か？

「言い忘れていたが このデュエルは闇のデュエルではない」

「何！？どういう事だ？」

「魂なんていらなあゝい！私はお前自身が欲しいのゝお！つまりいゝ私が勝ったらお前を婿として村へ連れて帰る！」

「ぶっ・・・！」

「ど、どうしたの秋？」

「な、なんでもないよ雪乃・・・く、くく・・・」

笑いを堪える。わ、笑ったら駄目だ・・・プ、ククククク・・・！ミラヤマナ、マハードまでも笑いを堪えている。

「婿！？訳のわからん事を・・・ならば もし俺が勝ったらどうする！？」

「そしたらあ私 三沢っちのお嫁さんになっただげるうゝ！！！」



翔、明日香、万丈目が言う・・・万丈目、お前多分明日香との結婚でも想像してるのか？・・・まあ、頑張れ

「お前など嫁にするつもりは毛頭ないが このデュエルには絶対に勝つ！」

「いいぞ三沢！ラストサムライ魂見せてやれ！」

おい、やめる十代・・・ラストサムライって確か最後に特攻したんだから

「任せろ！」

任せろじゃねーよ！縁起でもないんだぞ！

「三沢つち いただきっ！っ！」

「デュエル！」

三沢	LP	4000
タニヤ	LP	4000

「私の先攻、ドロー！私は『アマゾネスの剣士』を召喚！」

アマゾネスの剣士 ATK1500/DEF1600

「さらにカードを1枚伏せ、ターンエンド！」

「俺のターンドロロー！俺は磁石の戦士（マグネット・ウォリアー）  
（シグマ） + （プラス）を攻撃表示で召喚！」

磁石の戦士 + ATK1800 / DEF1600

「アマゾネスの剣士に攻撃だ！行け、磁石の戦士 +！」

破壊されるアマゾネスの剣士。だがアマゾネスの剣士の効果は・・・

三沢 LP4000 LP3700

「どうして三沢君のライフが！」

「アマゾネスの剣士」の効果発動。戦闘によるダメージは相手プレイヤーが受ける」

「そんなのありなのか？」

「三沢君らしくないわね」

「いや・・・三沢は自分のライフを削つてでも 相手のモンスターを減らしていこうと言う戦略をとつたんだ」

十代の言うとおりだ。三沢はデュエルに置いて無駄をすることはない。プレイミスならともかく・・・みんなはなかなかやらないが、デュエルディスクには相手の効果を確かめることができるシステムがこの世代から付けられているのは俺も知っている。漫画版では十代がトラゴエディアの召喚した『The supremacy S UN』の効果確かめようとして見られないなんてこともあったが、



三沢もそういつチェックは怠らないはず・・・だと信じたい

「さらに畏発動『一族のプライド』！アマゾネスモンスターが破壊された時に発動可能。同じアマゾネスモンスターをデッキから特殊召喚する事が出来る！私は『アマゾネスの戦士』をデッキから特殊召喚！」

アマゾネスの戦士 ATK1500/DEF1600

「どうやらお前の目論見は 外れたようだな。がっかりしないでえ  
〜三沢っち〜！」

「つく・・・俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ」

「キヤー！カツコイイ！痺れる〜う！男の哀愁〜う！」

最早笑うしかない。マナなんてほら・・・そこでお腹抱えてゴロゴロしてるよ。マハードも抑えられなくなって片ひざ付いてるし。なんでみんなは大丈夫なんだ？

「もしかしてあのタニヤって人 三沢君の1番苦手なタイプかも」

「大丈夫。なんたって三沢は ラストサムライだからな」

「・・・十代、ラストサムライって映画あるの知ってるか？」

「いや？」

だよな。じゃなきゃ多分、別の意味で使ってるんだよな。

「わかっているぜタニヤ。お色気で俺のペースを崩そうと言うその陳腐な作戦。だが俺の戦術は鉄壁！お前の桃色光線など 通用しない！」

・・・三沢、お前も随分壊れてきたな

「桃色光線って・・・何だ？」

「「さあ・・・？」」

つと、デュエルは・・・タニヤのターンだが、どう出るか。この辺アニメ結構飛ばしながら見た記憶があるな

「私のターンドロー！私は『アマゾネスの吹き矢兵』を召喚！」

アマゾネスの吹き矢兵 ATK800 / DEF1500

なるほど、原作通りの召喚か・・・となると？

「この瞬間罨発動！『マグネット・フォース・マイナス』！このカードは発動後装備カードとなり、相手フィールド上のモンスター1体に装備する。装備モンスターはマイナスモンスター扱いとする！装備モンスターは相手フィールド上のマイナスモンスターと戦闘を行う事ができず、また、相手フィールド上のプラスモンスターと戦闘を行わなくてはならない！アマゾネスの吹き矢兵に装備カード扱いで装備！」

アマゾネスの吹き矢兵 アマゾネスの吹き矢兵・（マイナス）

OCGになっていないカード達か・・・このカード達でもデッキを

組んだら面白そうだが、どうなんだろうな。

「プラスとマイナスの引き合う力により バトルが発生する！」

「いや〜ん！三沢っちとタニヤが引き合った」

「真面目にやれ！」

もうすっかりタニヤのペースだ。これは勝つのは無理か？

「……………ねえ、雪乃」

「あら、どうしたのツァン？」

「これ、セブンスターズとのデュエルよね」

「そうだけど……………」

「……………見ていて危機感も感じられずバカバカしいと思うんだけど、僕だけかしら」

よかった、ここにも常識人がいたよ……………まあ、闇のゲームでコレだったら、カオスだな

「ならば私は魔法カード『アマゾネスの呪詛師』を発動！ターン終了時まで、自分のフィールド上の「アマゾネス」という名のついた表側攻撃表示モンスター1体と、相手フィールド上表側表示モンスター1体の元々の攻撃力を入れ替える！」

「何っ!?!？」

「そんな！攻撃力が逆転するなんて！」

攻撃力の逆転か・・・OCGでも攻撃力をモンスター同士で入れ替えるカードはなかなかない。攻撃力と守備力なら『右手に盾を左手に剣を』や『反転世界』などがあるが・・・

アマゾネスの吹き矢兵    ATK800 / DEF1500    ATK1  
800 / DEF1500

磁石の戦士    +    ATK1800 / DEF1600    ATK8  
00 / DEF1600

「バトル！アマゾネスの吹き矢兵で磁石の戦士    +を攻撃！」

「ぐあああつ！」

三沢    LP3700    LP2700

「そしてアマゾネスの女戦士でダイレクトアタック！」

三沢    LP2700    LP1200

「クツ・・・馬鹿な！二度までも    俺の戦術の上をいくとは・・・  
！」

「恋の駆け引きはね・・・女の方が上手なのよ」

「ふざけるな！何が婿だ！嫁だ！！俺とお前は    敵同士なんだぞ！

俺達は 世界の破滅を懸けて戦ってるんじゃないのか!？」

「世界の破滅が何よ!恋は不滅よ!七星門の鍵でも開かないあなたのハートを私の鍵で開けてみせるわ!」

「……………三沢、虎に人間の常識なんて通用しないよ?

「訳がわからん…………お前、本当に俺に惚れたのか!？」

「惚れたわよん!」

「どこに惚れたんだ!？」

あ、一応聞くんた…………

「決まってるじゃない。その凛々しい顔よ!」

…………まあ、そうだろうな。こんな会って数分じゃ人間の中味なんてわからないからな

「……………」

すると隣でツァンが凄い剣幕でタニアを睨みつけていた。

「どうした、ツァン?」

「……………」

こ、怖い…………何故だろうか、ツァンがものすごく怖いんだけど?

「ゆ、雪乃……」

「今のツァンに話しかけないほうがいいわね……」

と、雪乃もタジタジのようだ。すると三沢が急に苦しみ出した。

「うう……！違う！あれは違うんだ！」

「どうしたんだ？三沢っち……」

「悩んでるみたいっすね……三沢っち……」

「そんな呼び方 やめる！」

あちゃー……本当に駄目だな三沢。俺が上げたカードも、どうやらあのデッキに入っていないみたいだし……

「俺のターンドロー！魔法カード『マグネット・コンダクター・プラス』を発動！自分の墓地のプラスモンスター1体を手札に加える。俺は墓地の磁石の戦士？+を手札に加える！さらに『超電導戦士リニア・マグナム±（プラスマイナス）』の効果を発動！このカードは通常召喚できない。自分の手札・フィールド上から、プラスモンスターとマイナスモンスターをそれぞれ1体ずつリリースした場合に特殊召喚する事ができる！俺は手札の磁石の戦士？+（プラス）と磁石の戦士<sup>マグネット・ウォリアー</sup>（オメガマイナス）を生贄に……『超電導戦士リニア・マグナム±』を特殊召喚！」

超電導戦士 リニア・マグナム± ATK2700/DEF2600

・・・名前長いよ、三沢。それにしても、特殊召喚扱いでこれか。なかなかだな。バルキリオンよりも需要がある気がする。あれは3体だし。まあ、+と-のカードを持ってないといけないのが難か？ だけどそれ専用のサポートカードも多そうだ。

「超電導戦士 リニア・マグナム $\pm$ 」の効果発動！フィールドの磁気モンスター1体の攻撃の半分が「超電導戦士 リニア・マグナム $\pm$ 」の攻撃力に加えられる！バトルだ！超電導戦士 リニア・マグナム $\pm$ でアマゾネスの吹き矢兵を攻撃！」

超電導戦士 リニア・マグナム $\pm$  ATK2700/DEF2600  
ATK3100/DEF2600

タニヤ LP4000 LP1700

「カードを2枚伏せてターンエンドだ！」

「すごお〜い！流石三沢っち！男気見せまくりい〜！私のターンドロ〜！バトル！アマゾネスの剣士で超電導戦士 リニア・マグナム $\pm$ を攻撃！」

自爆特攻か・・・アマゾネスの剣士の効果が適用されれば三沢のLPは0だが、三沢もそう単純ではないだろう。

「罠カード発動！『パワーオフ』！モンスター効果によって特殊召喚されたプラスマイナスモンスターを墓地へ送り、その特殊召喚時に墓地へ送ったモンスターを全て特殊召喚する！俺は自身の効果で特殊召喚された超電導戦士 リニア・マグナム $\pm$ を墓地へ送りその時墓地へ送られた『磁石の戦士？』+と『磁石の戦士 -』を特殊召喚！」

磁石の戦士? + ATK1800 / DEF1600

磁石の戦士 - ATK1900 / DEF1700

どっちも、、より強いな・・・

「ならば攻撃中止!」

アマゾネスの剣士は攻撃をやめ、タニヤのフィールドに戻った。

「よし!いいぞ三沢っち!」

「三沢っちはやめる・・・!」

十代の声援に若干キレ気味の三沢。十代、お前は三沢を怒らせて集中力をキレさせてどうするんだよまったく・・・

「ならば私は『アマゾネスの聖戦士』を召喚!」

アマゾネスの聖戦士 ATK1700 / DEF300

「このカードの攻撃力は 自分フィールド上にあるアマゾネスと名のつくカード1枚につき 100ポイントアップする。更にカードを2枚伏せてターンエンド」

アマゾネスの聖戦士 ATK1700 / DEF300 ATK1900 / DEF300

何かを考えている三沢。デュエルしている相手の戦術と言葉に惑わ



されているらしい

「見せて見る！お前の本性を！」

「見せてるじゃない！ずうっと。どうやってたら三沢っちを振り向かせる事が出来るか、一所懸命考えて・・・好きになってもらおうとしてるんじゃない！」

「あっ・・・」

・・・おい三沢「あっ」ってなんだ？おい・・・そしてツァン、お前の怒りのオーラはどうしてこう跳ね上がっているんだ？めっさ寒気がするんだけども

「三沢っちがプラスで タニヤがマイナス！違う者同士が引き合うにはたっくさん頑張らなくちゃいけないんだ！ウフフ！だから三沢っちも頑張って！」

「うっ・・・あ・・・」

顔を紅くする三沢とどんどん表情を悪くするツァン。本当にどうしたんだお前

「ちよつとツァン？」

「何よ・・・」

雪乃が話しかけると、本当に不機嫌なツァンだ。いつものアレだな・・・例えに出したくないが、俺に抱きついていている雪乃を見ている時より怖い。

「三沢っちの心のリバーズカード・・・オープンして!」

「あっ・・・か・・・可愛い・・・」

ブチっ!

げっ・・・この音は! って雪乃じゃないよな・・・じゃあ・・・

「こら三沢ー! とつととデュエル続けなさい!」

「お、落ちつけツァン!」

「そつよ、どうしたの!？」

「ゼエ、ゼエ・・・はっ! 僕としたことが・・・」

こっちはこっちで大混乱だ。で、三沢はツァンの一括で三沢はデュエルを続行する。

「俺のターンドロー! 『磁石の戦士? -』を召喚!」

磁石の戦士? - ATK1500/DEF2000

「さらに罠カード『10万ガウス!』を発動! 自分フィールド上にプラスモンスターとマイナスモンスターがそれぞれ1体以上存在する時に発動できる。相手フィールド上の表側表示モンスター1体を攻撃表示にしてその攻撃力を800ポイント下げる! 俺の場には磁石の戦士? + (プラス) と磁石の戦士? - (マイナス) が存在する! よってアマゾネスの聖戦士の攻撃力をダウンさせる!」

「よし！これなら「アマゾネスの剣士」の効果ダメージを受けても残りのモンスターの攻撃で 勝てる！」

いや、タニヤの伏せカードは恐らく・・・アマゾネスの補助カード

アマゾネスの聖戦士 ATK1900 / DEF300 ATK1100 / DEF300

「畏発動！『救出劇』！フィールド上の「アマゾネス」という名のついたモンスターを対象にしたカードが発動した時に発動！対象になったモンスターカードを手札に戻し別のモンスター1体を手札から特殊召喚する。私はアマゾネスの聖戦士を手札へ戻し『アマゾネスペット虎<sup>タイガー</sup>』を特殊召喚！」

やっぱりな。それにしても懐かしいカードだな・・・確か、前に舞がマリクと戦った時に使ったのを覚えているな。アマゾネス専用のカードだが、いいカードだ

アマゾネスペット虎 ATK1100 / DEF1500

「そしてアマゾネスペット虎の効果発動。自分フィールド上の「アマゾネス」という名のついたモンスターカード1枚につき、このカードの攻撃力は400ポイントアップする。相手はこのカードを破壊しない限り、他の「アマゾネス」という名のついたモンスターを攻撃できない」

「なんだって!?!」

アマゾネスペット虎 ATK1100 / DEF1500 ATK1

900 / DEF 1500

「三沢君のモンスターは あの虎にしか攻撃出来ない！」

「ならばバトルだ！磁石の戦士 - でアマゾネスペット虎を攻撃！」

「タニヤ 見せてやるぜ！俺の思い！バトルだ！磁石の戦士 -  
でアマゾネスペットタイガーを攻撃！」

「あの馬鹿！」

「まずい！」

「恋のリニアセイバー！」

おい三沢、アホかお前はっ！

「これが三沢つちの思い・・・私も全身全霊で受け止める！畏発動  
！「アマゾネスの弩弓隊」！相手のモンスターは 全て攻撃表示と  
なり、攻撃力が600ポイントダウンしたうえで 強制的に戦闘を  
しなければならない！」

磁石の戦士？ + ATK 1800 / DEF 1600 ATK 120  
0 / DEF 1600

磁石の戦士 - ATK 1900 / DEF 1700 ATK 130  
0 / DEF 1700

磁石の戦士？ - ATK 1500 / DEF 2000 ATK 900  
/ DEF 2000

「三沢君のモンスターの攻撃力が・・・！」

「アマゾネスペットタイガーを下回っている！」

「罨を見落とすなんて 奴らしくもない！」

「恋をすると 周りが見えなくなるのニヤ」

「ニヤアアン」

・・・大徳寺先生、それは何か違う気がするぞ

「アマゾネスペットタイガー！私の応えを三沢っちに伝えて！お受けします！」恋の成就 密林の王牙」！」

なんだその技名。恐ろしく言いたくない技名だな。

「ぐあああああああああつ！」

三沢LP1200 LP0

「三沢！」

十代たちが三沢に駆け寄ろうとするが、虎によって阻まれ、俺達はコロシムから追い出された

「三沢・・・！三沢！」

「アハハハハ！お嬢さん ゲット！」

「三沢ー！」

十代の声が森で響いていた・・・

## 闘技場での恋（後書き）

というわけで、超が付くほど原作通りです  
次回、また十代の見せ場が・・・orz  
とりあえず、次回もお楽しみに

## 恋と運命（前書き）

なんだかんだで50話です。ありがとうございます

とりあえずこれからもアストラルもビックリのタクティクスですが、頑張って行きます

秋「今日の最強カードは・・・『終焉のカウントダウン』だ」

2000ライフポイント払う。

発動ターンより20ターン後、自分はデュエルに勝利する

勘違いする人もたまにいますが、これは往復10ターンでの勝利です  
お友達をなくすデッキの一つです



## 恋と運命

三沢が夕方コロシウムを追いだされたどうやらタニヤを満足させることはできなかつたらしい。寮へ帰宅した翌日の昼、レッド寮の食堂に何故か三沢がいた

「・・・何故三沢がここに」

「あ！秋！大変なんだ！」

話を聞けば三沢がオムライスにジャムをかけたリ、ソース飲んだり、タバスコを飲んだりしているらしい。そしてうわの空。やれやれ・・・って、ん？オベリスクブルーの制服を見かけた。俺も見知った顔の生徒だ。

「マリアさんじゃないか、どうしたの？」

「あつ・・・しゅ、秋さん。こんにちは」

「こんにちは・・・で、どうしたの？」

「は、はい・・・ツアンさんから、三沢君がセブンスターズに負けたと聞いて・・・」

彼女の名前はマリア・アン。オベリスクブルーの女子生徒では珍しい、終焉のカウントダウンデッキを使う女性だ。オベリスクブルーの女子は大抵可愛いモンスターを入れることが多いのだが・・・彼女の場合それが一切ない。彼女のカウントダウンデッキは相当なものである。さらに凄いのが彼女の不運だ。彼女は何かと不幸らしく、

結構大変な目にあっているという。何度階段でこけそうになったところを助けたかわからない。

「それで様子を見に……でも三沢に今話しかけないほうがいいよ？」

「え？ど、どうしてでしょうか？」

「アレ見てみな？」

相変わらず放心状態の三沢……三沢、病院に行け

「あうう……三沢さん、大丈夫でしょうか？」

「どうだろう……俺の見る限りでは、多分駄目だな」

「そ、そうですか……」

「とりあえず寮に戻ると良いよ。アイツのことは俺達で何とかする」  
俺が言うと、マリアさんは頷く

「はい……あ、これを三沢さんをお願いします」

そう言って渡されたのはデッキのレシピだ。彼女はよく三沢にカードの診断を頼むことがある。

「わかった、一応渡してみるよ」

「はい、それでは」

丁寧に辞儀をして立ち去るマリアさん……渡してみるとは言ったものの……

「あんな状態じゃ、ねえ……」

今度はマスタード飲んでるし

決闘場

それから少しして、十代が三沢を呼び出した。デュエルで目を覚まして、そうというものだが、三沢からの言葉は否定だった。

「無理だ……俺には出来ない……」

「何だよー！ビビっちゃったのか？」

「ビビってる？俺が？そうじゃない」

「じゃあどうしたんだよ？らしくないぜ。お前」

「わからなくなっちゃったんだ……」

「女がか？」

おいおい、万丈目……まあ、それだったらアレかもしれないが

「馬鹿な！デュエルがだ……」

「あのタニヤと言う女は 闇のデュエリストでありながら その潔い戦いに 姑息さはなく 真つ直ぐに向かつて来る あの姿には 尊敬の念さえ覚えていて。彼女に会いたい！そして再びデッキを交えたい……！」

「デッキとデッキを交えた者同士のみが感じる事の出来る 絆の様なものか……」

頷く三沢。この世界だからこそ、そんな絆ができるのか……

「だが 今の俺の実力では タニヤを満足させられるデュエルは出来ない。それが悔しくて 情けなくて……」

「三沢……」

ツアンがユラリと三沢に近づく

「パアッ！」

次の瞬間、三沢はツアンのピンタに吹き飛ばされた。全員が呆気にとられ、驚いている。

「ツアン、なにをす「アンタ、本当にそう思ってるの?」「」

「え……?」

「たった1日しか会ってない女に負けて！見た目しか見ないような女に惚れて！そのデュエルで出来た絆とやらにしか眼を向けず、必死に伸ばそうとしている絆を見ないわけ!?!」

ツァンの言葉に、俺はハツとする

『これを三沢さんにお願ひします』

ようやく理解した。ツァンはマリアさんのことで怒っていたのだ。マリアさんは毎日三沢の所へデッキレシピやデッキを持っていき、三沢に話しかけていた。三沢もそれを快く引き受け、アドバイスなどをしていた。普通なオベリスクブルーである彼女がライイエローの三沢にそんな依頼をするわけがない。

「あの子がどれだけアンタを見て来たか・・・あの子がどれだけアンタに見て欲しかったのか知ってる！？知るわけもないでしょうね！そんな絆を取るアンタに！」

そういえば、ツァンとマリアさんは中等部から数少ない友達の人だと聞かされていた。彼女はどこか気弱で、何でもかんでも謝ったり奥手になったりしてしまうらしい。そんなマリアさんを、ツァンは力になりたいと思っていたのだろう。「友達のために頑張りたい」そうツァンは言っていた。だから俺もいくつかカードを提供したりもしていた

「見損なつたわ、三沢・・・アンタがそんな男だとは思わなかった」

「ツァン・・・」

「帰る・・・こんな男、助ける価値もないわ」

そう言つてツァンは帰ってしまった。俺は決闘場の別の入り口から、驚いた顔でその様子を見ていたマリアさんを見つけてしまった。俺の視線に気づいたのか、マリアさんはすぐに走って行ってしまふ。

俺も走り、マリアさんを追いかけた

「マリアさん！」

「っ……！つてきやう!？」

決闘場から少し離れた場所できつやく追いついた俺。というか、マリアさんが所々でこけるので、追いつくのは容易だった。マリアさんの目には涙が浮かんでいた。

「しゅ、秋……さん」

「マリアさん……」

「じ、ごめんなさい……私、やっぱり三沢君が心配で、後を付けていて……それで……」

俺はハンカチでマリアさんの涙を拭き取る。

「マリアさん、やっぱりこれは……君が渡すべきだよ」

俺は預かっていたデッサンレシポをマリアさんの手に握らせた。

「でも……三沢君の眼には、私は映っていないんです……」

「そんなことない。きっと、彼への絆は伸びているはずだ」

「私は、そのタニヤという人のようにデュエルは強くないし、何かと不幸だし……今まで好きになった男の人なんてみんなそう……私のことなんか見てくれない……」

マリアさんは泣き崩れる。三沢の目を覚ます方法……一体どうしたらいいんだろうか？

## S i d e ツア ン

マリアのために、今まで僕は頑張ってきた。数少ない親友だから・  
・あの子の手助けをしてきた。初めて出会った時、彼女とは何度か話をしたけど、どこか他人行儀。どうしてかと尋ねれば自分は何かと不幸に見舞われるので関わるべきではないとのこと。僕はふざけるなと一蹴して友達になった。

「……………」

僕はデッキを見つめる。思えば、このデッキを進めてくれたのもあの子だった。

『「う、こんなカード……どうでしょう?」』

『……………へえ、侍かあ』

それから僕は殆ど負けなしになった。マリアには感謝して、僕は『親友』になった。そしてあの子は高等部になってから恋をしたという。自分が階段から転落した時、受け止めてくれたのが三沢大地だったと教えてくれた。その彼の身体を張った行為と、彼の優しさに触れ、マリアは彼に恋をした。不幸な自分も、彼といればきつと不幸が払われるのではないかとまで思ったらしい。実際、彼女の周りの不幸は三沢の周りでは起きないというよくわからない現象があった。運命というものをマリアは感じ、僕もそれを見たと思った。

だからこそ、僕はマリアの力になりたいと思った。

『まかせなさい！僕が協力するから！』

自分にこの六武衆たちを巡り合わせ、強くしてくれたマリア。そんなマリアのために、僕は力になりたいと思った。マリアに恩返しをしたい。そんな思いから様々なことを考えた。彼の成績はライエローでもトップ。まずは話すことを始めるためにデツキレシピの話をさせ、徐々に世間話を出来るようにさせたりもした。でも、あのタニヤという女のせいで全てが吹き飛んでしまった。許せなかった。・・・タニヤが。外見だけで三沢に惚れたと言い、自分に合わないわかって捨てる。そして三沢も許せなかった。あれだけアタックをかけていても、三沢は気づかず、タニヤとの絆しか見ない。その2つから、僕は一つの決意をした。

「行くわよ、シエン」

僕はデツキケースを手に、寮を後にした。あの忌まわしきコロシアムへ向かうために。・・・。待ってなさい、タニヤ

Side秋

マリアさんを寮に送って明日香に任せると、俺は寮に帰った。

「あら、お帰り秋」

「あれ？ツァンは？」

珍しく、ツァンがいない。この時間帯は就寝前だ。いつもならこの



時間はツァンがいるはずなのだが・・・

「秋、ツァンと一緒にじゃないの？」

「あ、ああ・・・俺はマリアさんを寮に送ったんだ。雪乃と一緒にじゃなかったのか？」

PDAに呼び掛けるが反応がない。どうしたんだろうか？

「そのうち来るでしょう、そろそろ寝ましょう秋？」

「ああ、そうだな」

鍵は渡してあるし、大丈夫だろうが・・・って、ん？

「なあ、雪乃」

「何？」

「ツァンのデッキケースって、いつもここに置いてるよな」

あいつは挑まれるデュエルもよほどの時でない限り受けないし、カードを傷つけたくないと俺の机に置いていることが多い。荷物と一緒によくここに置いているのだが・・・

「ねえ、秋？」

「ん？」

「私、なんだかすごくイヤな予感がするのだけど・・・」

嫌な予感って……すると、部屋を勢いよく叩く音がした。

「秋！秋！いるか！」

「三沢！？どうしたんだ、こんな夜中に……」

「感じるんだ タニヤの闘気を！」

「はあ！？」

こいつ、とうとうおかしくなったか……イヤ、待て、タニヤの闘気、ツアンがない……

「三沢、確認するが十代は部屋にいるよな？」

「あ、ああ……」

「雪乃……」

「ええ、秋の想像通りだと思っわ」

まさかツアンの奴、一人でセブンスターズの所へ向かったのか！？

S i d e ツアン

コロシムを訪れると、門は開いていた。僕はゆっくりと足を踏み入れる。そこには虎……タニヤのペットがいた。僕を警戒してい

るけど、用があるのはお前じゃないわ

「出てきなさい！タニヤ！」

僕が叫ぶと、タニヤが現れる

「……昨日いた生徒だな。何か用？」

「僕はお前にデュエルを申し込むわ」

「デュエルを？悪いが女とはやらない……私が求めるのは男の血だからな」

でしょうね、でもアンタみたいな性格の人間を動かす方法くらいにくつつかあるわ

「あら、僕とデュエルをするの怖いの？」

「まさか……私はお前の様な女とデュエルしても燃えない。私の胸を焦がし、熱き血潮を滾らせるのは強い男だけだ」

「ああそうか、怖いんだ……僕とデュエルするのが」

「………なんだと？」

鋭くなるタニヤの目。やっぱりね……掛ったわ

「まあそうでしょうねえ……由緒正しきアマゾネスの末裔が現代の一般女子高生になんか負けたら、末代までの恥だもんねえ」

「言わせておけば貴様・・・アマゾネスである私を馬鹿にするのか！」

「馬鹿になんかしてないわ・・・事実よ」

「貴様あゝ・・・！」

「悔しかったらデュエルしてみたら？」

さあ、どう出るタニヤ。悪いけどトラへの対抗策も僕は用意してるわよ？

「バース！」

『ガアアアアッ！』

「アンタに用はないのよっ！カミュ・ラ！」

「ったくもう、アンタも人使い荒いわねっ！」

影から現れるカミュ・ラ。カミュ・ラは現在学園のレッド寮で副管理人として働いており、夜は自由に動いている。僕はカミュ・ラに頼み、虎の相手をするように頼んでいた。というか、カミュ・ラ・・・あんた人じゃなくて吸血鬼でしょ

『ガウツ！？』

襲い掛かる直前でカミュ・ラのとび蹴りが虎に直撃し、吹き飛ばす。片手である重たい棺桶を持ちだすのだから、ある程度力はあるでしょうね・・・猛獣を倒す力くらい持つてるはず

「仲間がいたのか!？」

「ありがとカミュ・ラ」

「まったく、これつきりにして頂戴・・・こんなこと」

「悪いわね・・・それにしても、自分が馬鹿にしたら自分ではなく虎を使うなんて、案外臆病者？」

僕の挑発にどんどん表情が険しくなるタニヤ

「いいだろう!そこまで言うのならやってやる!知つての通り、ここにお前の明暗を分ける2つのデッキがある。死して散り、名を残したいか?それとも負けても生き存え、恥を晒したいか・・・さあ選べ!」

「アンタに勝って、名を残してやるうじやないの!」

「いいだろう!」

「<sup>デュエル</sup>決闘!!!」

ツアン LP4000

タニヤ LP4000

恋と運命（後書き）

ってなわけで、ツァンVSタニヤです

次回もお楽しみに！

## 乙女の誇り（前書き）

明日メンテナンスらしいので急いで上げることになりました

書き溜めた分更新です

秋「今日の最強カードは六武の門だ」

「六武衆」と名のついたモンスターが召喚・特殊召喚される度に、このカードに武士道カウンターを2つ置く。

自分フィールド上の武士道カウンターを任意の個数取り除く事で、以下の効果を適用する。

2つ：フィールド上に表側表示で存在する「六武衆」または「紫炎」と名のついた

効果モンスター1体の攻撃力は、このターンのエンドフェイズ時まで500ポイントアップする。

4つ：自分のデッキ・墓地から「六武衆」と名のついたモンスター1体を手札に加える。

6つ：自分の墓地に存在する「紫炎」と名のついた効果モンスター1体を特殊召喚する。

秋「カウンターについては2つ目は数がある限り上乘せることが出来る恐ろしい効果を持っているぞ」

・  
・  
制限になって当然な感じですが、これが3枚の時代は恐ろしかった。

## 乙女の誇り

Side 秋

みんなでコロシラムに行くと、ツアンとタニヤのデュエルが既に始まっていた

「ツアン！」

「あいつ、セブンスターズに挑むつもりか……」

「遅かったわね」

俺の隣に突然カミュ・ラが姿を現す。あれ？なんでここに……

「あの子の頼みで虎を大人しくさせる役だったの……あそこでのびてるでしょ？」

カミュ・ラの刺す先には俺達を追いまわした虎が伸びている姿があった。

ツアン LP 4000

タニヤ LP 4000

「私の先攻！ドロー……！私は『アマゾネスの剣士』を召喚！」

アマゾネスの剣士 ATK 1500 / DEF 1600



「カードを1枚伏せて、ターンエンド！」

「僕のターンドロ―！僕は手札から『六武衆の結束』を2枚発動するわ！このカードは『六武衆』と名のついたモンスターを召喚、特殊召喚に成功すると『武士道カウンター』が乗る。そして乗ったカードを破壊することで、カウンターの数だけドロ―出来る。そして永続魔法『六武の門』を発動！このカードも同じく『六武衆』と名のついたモンスターを召喚、特殊召喚に成功すると『武士道カウンター』が乗る！」

初手から結束2枚と六武の門って！お前のドロ―はどうなってるんだツァン！

「そして手札から僕は『真六武衆 - カゲキ』を召喚するわ！」

真六武衆 - カゲキ ATK200 / DEF2000

六武の門 武士道カウンター 0 2

六武衆の結束？ 1

六武衆の結束？ 1

「攻撃力2000を攻撃表示！？」

「どついうことだ・・・」

翔と万丈目が驚きの声を上げる。カイザーは俺をチラリと見た

「秋、アレはお前が渡したカードなのか？」

「ああ、六武衆を超える力を持つ『真六武衆』だ。十代の持つヒーロー同様、結束に寄って恐ろしい効果を生み出していく」

なんせ、OCGの大会・・・日本選考会の4分の1が六武衆だ。(2011年8月現在)それに続いてジャンクデッキが続き、代行者、暗黒界と続いている。ツァンのデッキはまさに完成されたデッキだ。この世界でも勝てる人間はそうはいまい。

「カゲキのモンスター効果！このカードが召喚に成功した時『六武衆』と名のついたモンスターを手札から特殊召喚できる！来て！」  
真六武衆 - ミズホ「！」

真六武衆 - ミズホ ATK1600 / DEF1000

六武の門 武士道カウンター2 4

六武衆の結束？ 1 2

六武衆の結束？ 1 2

「カゲキは自分の他に『六武衆』と名のつくモンスターがいれば攻撃力は1500ポイント上昇するわ。そしてこれで武士道カウンターが2つ乗った！それぞれを破壊して4枚ドロ！」

真六武衆 - カゲキ ATK200 / DEF2000 ATK170  
0 / DEF2000

「2体モンスターを召喚した上で4枚のドロとは・・・」

「まだだ・・・真六武衆の恐ろしさはこれからだ」

この4枚のドロ・・・どうなるかな？

「さらに僕のフィールドにミズホがいる時『真六武衆・シナイ』を特殊召喚！」

真六武衆・シナイ ATK1500/DEF1500

六武の門 武士道カウンター6

「そして僕はさらに『愚かな埋葬』を発動するわ！墓地へ『真六武衆・キザン』を送る」

「自らのモンスターを墓地へ・・・」

「なあ秋、六武衆をなんで墓地へ・・・」

「見てれば分かる」

六武の門でもキザンを召喚出来たんだろうが・・・タニヤのフィールドにはアマゾネスの女剣士がいるからな。ミズホとシナイの効果を使つつもりか

「真・六武衆・ミズホのモンスター効果発動！自分のフィールドのモンスターを1体生贄とすることで、フィールドのカードを1枚破壊する！僕が生贄に捧げるのは真六武衆・シナイよ！アマゾネスの剣士を破壊する！」

「何っ！？ぐっ・・・」

「さらにシナイは効果で破壊され墓地へ送られた時、墓地にある自分以外の六武衆と名のつくモンスターを手札に加える！僕はさつき墓地へ送った『真六武衆・キザン』を手札へ加える。そしてキザンは自分のフィールドにキザン以外の『六武衆』と名のつくモンスターがいる場合特殊召喚出来るわ！来て！『真六武衆・キザン』！」

真六武衆 - キザン    ATK1800 / DEF300

六武の門    武士道カウンター6    8

「1ターンでモンスターが4体召喚され、3体が下級ながらも上位の攻撃力を兼ね備えているとは……」

驚くタニヤ。まあ、そうだろうな

「まだよ！キザンは自分のフィールドにキザン以外の六武衆と名のついたモンスターが2体以上いる場合、攻撃力は300ポイントアップ！」

真六武衆 - キザン    ATK1800 / DEF300    ATK210  
0 / DEF300

「そして永続魔法『一族の結束』を発動！このカードは自分の墓地に存在するモンスターの元々の種族が1種の場合、自分フィールド上に表側表示で存在するその種族のモンスターの攻撃力は800ポイントアップする！」

おいおいおい……そこまでするか？今回恐ろしいぞ、ツァン

真六武衆 - カゲキ ATK1700 / DEF2000 ATK2500 / DEF2000

真六武衆 - ミズホ ATK1600 / DEF1000 ATK2400 / DEF1000

真六武衆 - キザン ATK2100 / DEF300 ATK2900 / DEF300

これで攻撃が通ればツァンの勝ちだがそう簡単には行かないだろうな・・・それにしても、周囲はものすごく驚いている。ツァンのデッキには一応六武衆も入っているが・・・今回は引かないな

「バトルよ！モンスター総攻撃！」

「畏発動！『攻撃の無力化』！バトルフェイズを終了する！」

「決められなかった・・・カードを2枚セットし、ターンエンド！」

LP4000のこの世界では完全に1キルだったな。だが、これだけされて黙ってるタニヤでもあるまい。

「やるじゃないか・・・鍵を持ってないと思つて油断してたよ」

「御託はいいからドローしなさい・・・次のターンで叩き潰す」

「いい度胸だ・・・私のターンドロー！『強欲な壺』を発動してカードを2枚ドロー！私は手札から永續魔法『アマゾネスの闘志』を発動！このカードは自分のアマゾネスがそのアマゾネスより攻撃力の高いモンスターを攻撃する時に1000ポイント攻撃力をアップ

させる！」

十代のスカイスクレイパーなんかと同じ効果の永続魔法か・・・

「そして私は『アマゾネスの聖剣士』を召喚！」

アマゾネスの聖剣士 ATK1700 / DEF300

「そしてフィールド魔法『アマゾネスの里』を発動する。このカードがフィールドにある時、アマゾネスと名のついたモンスターの攻撃力は200ポイントアップする。「アマゾネス」と名のついたモンスターが戦闘またはカードの効果によって破壊され墓地へ送られた時、その「アマゾネス」と名のついたモンスターのレベル以下の「アマゾネス」と名のついたモンスター1体を自分のデッキから特殊召喚する事ができる。」

あれ？アマゾネスの死闘場を使うんじゃないのか？まさかタニヤは三沢同様、勇気と知恵以外にも複数のデッキを持っているのだろうか・・・？

「バトル！アマゾネスの聖剣士で真六武衆 - ミズホを攻撃！」

アマゾネスの聖剣士 ATK1700 / DEF300 ATK1900 / DEF300 ATK2900 / DEF300

「つく！」

ツアン LP4000 LP3500

「さらに『サイクロン』を発動！一族の結束を破壊！」

真六武衆 - カゲキ    ATK 2500 / DEF 2000    ATK 1700 / DEF 2000

真六武衆 - キザン    ATK 2900 / DEF 300    ATK 2100 / DEF 300

「カードを1枚伏せてターンエンド・・・一つ聞きたい」

「なによ」

「何故お前は私にデュエルを挑んだ？」

ツアンはゆっくりと立ち上がり、タニヤを睨みつける。その眼は怒りに満ちている。憎しみや復讐をするような眼では決してないのだが・・・

「理由は2つ・・・1つ、あんたは男を見た目だけで決めて中身なんて見ようとしない。中身を見たらすぐに捨てる・・・一目惚れだと言ったらおしまいだけど、そんな恋を僕は認めない。女として、何より一人の人間として・・・そして2つ、アンタの選んだ相手は僕の親友が好きな人間だった。そいつを好きになるのは構わない・・・でも、あの子が必死に思い続けた想いを消させるようなアンタを、僕は絶対に許さない！」

ツアン・・・

「だから、アンタを倒す！僕のターンドロー！僕は手札から『強欲な壺』を発動！カードを2枚ドロー！さらに罫発動『六武衆推参！』を発動！自分の墓地に存在する『六武衆』と名のついたモンスター

1体を自分フィールド上に特殊召喚する。この効果で特殊召喚されたモンスターはこのターンのエンドフェイズ時に破壊されるわ・・・来て、ミズホ！」

真六武衆 - ミズホ ATK1600 / DEF1000

六武の門 武士道カウンター 8 10

「さらにミズホの効果発動！僕はカゲキを生贄に捧げ、アンタのフィールドのアマゾネスの里を破壊する！そして六武カウンターを4つづつ取り除くことで、墓地に存在するカゲキとシナイを手札に戻すわ！」

六武の門 武士道カウンター 10 2

さすが真六武衆デッキ。これだけの動きを見せるとは・・・やはり怖いな

「そして手札から『真六武衆 - カゲキ』を召喚！効果により、僕はチューナーモンスター『六武衆の影武者』を特殊召喚する！」

真六武衆 - カゲキ ATK2000 / DEF2000 ATK1700 / DEF2000

六武衆の影武者 ATK400 / DEF1800

六武の門 武士道カウンター 2 6

「チューナーだって!?!」



驚く一同。そう、真六武衆シリーズに存在する、最強の六武衆を呼ぶために必要なのだ。

「チューナー？聞いたことがないカードだな」

「見てれば分かるわよ・・・そしてミスホがフィールドにいる時、シナイを特殊召喚！」

真六武衆 - シナイ ATK1500 / DEF1500

六武の門 武士道カウンター 6 8

「レベル3の真六武衆 - ミズホとレベル2の六武衆の影武者をチューニング！」

3 + 2 = 5

「天下統一の武士よ！その真なる力を解放し、世界を統べよ！シンクロ召喚！いでよ！『真・六武衆シエン』！」

真・六武衆シエン ATK2500 / DEF1400

六武の門 六武カウンター 8 10

『フハハハハハハ！我が力を振るう時が来たあ！見せようぞ、天下一の力を！』

・・・・・・は？

「雪乃？」

「え？ええ・・・今・・・」

「十代？」

「あいつ、喋った？」

まさか、アイツもカードの精霊だったのか？真六武衆・シエンは大將軍シエンの若き日の姿というところか？それにしても・・・

「（ミラ？）」

『いえ、私も初めて見ました・・・』

もしかしたら、俺と同じように使う人間を選び、適合したことで姿を現したのかもしれないな

「・・・は？何コレ」

『どうした主よ！行くのではないのか！』

ツァン自身も混乱してるな。

「あ、あんた精霊・・・？」

『その通りだ！行こうぞ！あの女戦士を倒すために！』

「ツァン、さっきから一人でなにをブツブツ言ってるのかしら？」

「さあ？」

明日香の言葉に、首を傾げる一同。まあ、精霊を見ることが出来るのはここでは俺と十代と雪乃だけだ。ツァンもどうやら目の前の現実を受け入れることにしたらしい

「行くわよ！六武の門のカウンターを2つ取り除く効果を5回分使用！真六武衆・シエンの攻撃力を500ポイント上げる！つまり5×500ポイント・・・つまり2500ポイント上がる！」

真六武衆・シエン    ATK 2500 / DEF 1300    ATK 5000 / DEF 1300

武士カウンター    100

・・・だから制限なんだよ、六武の門

「攻撃力5000!？」

カウンターは同一モンスターに対して複数回、カウンターの分だけ使用することができる。その結果・・・こういうことになる

「真六武衆・シエンでアマゾネスの聖戦士に攻撃！『六武衆奥義紫炎斬』！」

シエンの持つ刀に多大なオーラが集まる。攻撃力5000・・・キザンとカゲキの攻撃力も合わせると・・・8000を超える。そしてシエンの恐ろしい効果はそれだけじゃない

「畏発動！『アマゾネスの「真六武衆・シエンのモンスター効果発動!」何っ!？」

「シエンは1ターンに1度、魔法、罠、モンスター効果を無効にし、破壊する効果を持つ！」

『フハハハハハ！我に小細工など通じぬわあ！』

シエンの一閃・・・斬撃の波動が発動しようとした罠カードを破壊する。そしてシエンがアマゾネスの聖戦士に斬りかかった。

『喰らうがいい！我が一撃！』

「ぐああああああああああっ！」

タニヤ LP4000 LP7000

「そしてカゲキとキザンで攻撃！」

タニヤ LP700 LP0

「か、勝っちゃた・・・」

「ツアン君が・・・」

「セブンスターズに・・・」

「・・・まさか、あんなに早く決めるとは。次回もしツアンと戦うことになったら俺、勝てるだろうか？するとタニヤの姿が変化し、虎となった

「なっ・・・なっ・・・」

「いいデュエルをありがとう・・・」

タニヤはそうツアンに言い残し立ち去って行った。そして地面にグローブが落ち、グローブは消滅した。あれが闇のアイテムだったのだろう。

「俺は、虎に恋をしていたのか・・・」

呆然とする三沢に、万丈目がポンと肩を叩いた。

「いい女だったじゃないか・・・」

こうしてタニヤとの戦いは幕を閉じる。それにしても、鍵を持ってない人間でも倒せばそれでいいんだ・・・よくわからんけど

数日後

「み、三沢さん！今日もこれ、お願いします！」

「え？ああ・・・マリアさん。ええと・・・フム」

ちよつと離れた所から俺達は三沢の様子を見守っている。デッキレシピを見ながら、色々方程式を書いて説明する三沢。マリアさんは熱心に話を聞きながらも、嬉しそうに顔を紅くしていた

「あの二人、いい雰囲気じゃない」

「マリアさんも頑張っているみたいだな」

あの様子だと、三沢もマリアさんのことを気にして入るみたいだし・  
・頑張れ、マリアさん

## 乙女の誇り（後書き）

というわけでツァンVSタニヤ・・・一方的にフルぼっこだった件  
については最早何も言つまり

## 進む歯車（前書き）

というわけで、色々超スピードです

なんというか、色々中途半端にはなってますが、一番書きたいのが次の話だったというのもい止めません  
アドバイスの話まで一気にいきます

秋「今日の最強カードは『アクア・ジェット』」

自分フィールド上に表側表示で存在する

魚族・海竜族・水族モンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターの攻撃力は1000ポイントアップする。

秋「シャークさんのマジックコンボだ！」

ぶっちゃけ、これより装備された側のビック・ジョーズのレベル3で攻撃力1800に驚くべきだったかもしれない（汗

ちなみに、今回のビック・ジョーズはアニメ使用です

ビック・ジョーズ（アニメ版）

ATK1800/DEF300

効果

通常魔法を発動したターン、このカードを手札から特殊召喚できる



## 進む歯車

タニヤとの戦いからしばらくして突然のこと、俺達は校長室へと呼びだされた。いるのは校長と、警察の人間と名乗る男。どうやら鍵隠すということになったらしい。あれ？海の男のイベントがなかったな・・・ああそうか、ノース校との試合はテレビで放映されてなかったのか。だからかな？

「校長、どうしてそう言うことになったのですか？」

雪乃が鋭い視線でそう聞いた。そりゃそうだ。隠すなら最初からそうしろよという感じになる。

「既に7つの鍵のうち 3つはセブンスターズに奪われてしまったのニヤ。そこで校長と話して プロに警備を頼む事にしたのニヤ」

「最初からそうすれば良かったのではないですか？そうすれば秋は怪我をせずに済んだんですよ？」

「まあまあ、お嬢さん・・・」

と、マグレ警部と名乗る男が雪乃をなだめようとするが、雪乃は逆にマグレを睨みつける

「触らないで下さる？私を触っていい男は秋だけよ」

「っと・・・これは失礼」

マグレ警部はすぐに雪乃から離れる。どうやら今日の雪乃は不機嫌

らしい、大徳寺先生や校長の前ではいつもこのように不機嫌な態度になる。

「で、結局、みんなはどうしているんだ？」

「俺と万丈目は首からかけてるな」

「万丈目さんだ」

まあ、標的ですよって見せてるような感じだしな。

「私もよ」

「……俺も同じだ」

それぞれが隠すことになる。十代は引き出し、万丈目は流し台の下、明日香は小箱の中へ隠している。

「それで武藤君、君はどうするかね？」

警部が俺に聞いてくる。まあ、俺はアンタの正体を知っているからな……本当のことを言うつもりはないぞ

「俺の部屋にはいくつかがギミックが施してありましてね……偽物もいくつか置いています」

「に、偽物!？」

……ふん、嘘に決まってんだろ。

「一応、貴重なカードなどを入れる金庫もありますし、そちらには10個のうち3つを、机の中に10のうち3つを、雪乃とツアンがいつも寝るベッドの下に1つずつ、俺のベッドに2つ。そして最後は俺が首からかけているものです。そのうちのどれかと、本物をすり替えましょう」

驚いた顔をするマグレ。確か黒蠍盗掘団のザルグだったな。他の団員に伝えて精々頑張るといい……

夜

「（じゃあマハードたち、よろしくね）」

『了解した……精霊化ではばれてしまうので一応隠れてはいるが……』

「（一応手加減してね、マハードの力だと来た人殺しちゃうから）」

『心得た』

俺達は隣の部屋であるカミユ・ラの部屋に待機。ベッドに寝ているのはマナとミラ。隠れているのはマハード、シエン、サラだ。サラは実体化が出来ないので知らせることしかできないが……

「ねえ秋、状況はどう？」

「ああ、大丈夫……あれだけ嘘八百を並べたんだ。警戒してくるはずさ」

ツアンが俺に不安そうに聞いている。やはり泥棒が来ることを予測した俺の言葉を半信半疑に思っているからだろう。確か原作では全ての鍵が盗まれるんだったな。本物は今、俺のポケットの中にある。マグレには俺の部屋を見せているので、金庫の話をしたことから罠外しのクリフが来るだろう。この部屋にはカミューラが戦闘態勢で待ち構えているので問題はない。雪乃も同じくドアを少し開け、覗きこんでいる

「（秋、来たわよ！）」

眼鏡をかけた男、罠はずしのクリフ・・・警備員と大徳寺に紹介されていたが、なぜみんなは疑問に思わなかったのだろう。オシリスレッドのチツク、女医のミーネ、管理人のゴーク・・・全て昨日までいなかったはずの人物たちだ。雪乃とツアンもその人間たちを見知った人間だと思い込んでいる。どうやら違う世界から来た俺だけが“認識”をすることができるらしい。

（頼んだ、マハード・・・）

今はマハードたちを待つだけだ。

## S i d eマハード

我々は隠れ、その男を見る。眼鏡をかけた男・・・モンスターカードの罠はずしのクリフだな。クリフはキョロキョロと当たりを見渡し、秋殿が言った嘘の場所を探し続ける。机の中や開いているベッドを探るが、鍵がないことに気が付く。そして一番重要だと思っただらしい金庫・・・あれは雪乃殿の部屋にあったものだ。クリフはそ

れを解除しようとする。行くでしょう。私とシエンは頷き合い、クリフの後ろに立った。

「動くな」

「動けばその首、撥ねてしんぜよう」

「なっ……」

私とシエンは静かにクリフの後ろから杖と刀をつきつける。

「我が名はブラック・マジシャン……畏はずしのクリフよ、両手を組んで膝を付け」

「そして我が名はシエン……妙なことを起こせば命はないぞ？」

秋殿に教わった方法でクリフを脅す。ふむ……なんだか癖になりそう。だがクリフは隠し持ったナイフを取り出そうとした。その瞬間マナがそれをはたき落とす

「駄目ですよクリフさん たかが攻撃力1200の貴方が、攻撃力2500のお二人に2000である私に勝てるわけじゃないじゃないですかー」

マナは黒い笑みを浮かべ、杖を向ける。どこで教え方を間違ったのだろうか

「っち！」

逃げようとするクリフ。だが時既に遅し

「はっ！」

「がふっ!？」

ミラが杖でクリフを殴り飛ばす。玄関に逃げたのが運のつきだ

「これで捕獲完了です。マスター？」

ミラが秋殿を呼ぶ。

「ご苦労さん、とりあえずロープで縛っておくか」

この後ゴルグたちが駆けつけ、万丈目殿とデュエル・・・その後、一味は万丈目殿の部屋に居候することとなる。やれやれ・・・

## Side秋

・・・数日後の夜、夕食前に俺はデッキをいじる。最近は一クロデッキばかりだからな。たまには別のデッキも使ってやらな  
いと

「ねえ、なんだか外が騒がしいような・・・」

「そうね・・・」

ツアンと雪乃が起き上がる。外・・・？俺は外の窓を開けると、目を疑った。

「・・・・・・・・木乃伊？」

「な、なにあれ・・・」

「・・・・・・・・」

雪乃が顔を真っ青にして俺に抱きつく。痛い、痛い・・・俺はよしよしと雪乃を撫でる。確かこれは・・・セブンスターズの王様だったか？そして、呻き声から単語が聞こえた

鍵を持つ者・・・七星門の鍵

「面倒事、だな・・・」

で、空を見てみると船？空飛ぶ船がある。俺達は船から突然放たれた光に巻き込まれる。2人は俺を強く抱きしめる。前のダークネスと戦った時のことを思い出したのだろう。俺も二人を強く抱きしめる。そして光に耐えられず、思わず目を覆い隠して意識が落ちる。

Side 十代

眼を覚ますと俺達は船の上にいる。いるのは鍵を持つ俺達・・・と、大徳寺先生それにカイザーもいる。あと翔や隼人、雪乃にツアンもいる。俺達の前にいるのは・・・王様？みたいなやつだ。大徳寺先生はそれに驚いてこけたけど・・・

「お前は誰だ！」

「余の名はアビドス3世・・・セブンスターズの1人だ！」

「アビドス3世・・・!？」

「生涯一度も負けなかったと言う」

「伝説の・・・!？」

き、聞いたことあるぜ。生涯一度もデュエルに負けたことのない王様の話・・・って、秋？

「どうしたんだよ秋、その何と云うか・・・変態行為を働いたクマを見るウサギの様な眼をして」

「・・・いや、なんというか、なあ？」

胡散臭いという感じで王様を見てる秋。王様もそれに気が付いたらしい

「貴様らの鍵をもらい受ける・・・が、貴様、なんだその眼は」

「・・・デュエルで負けなし、ねえ？」

「そうだ、余は生まれてデュエルをしてから負けたことがない」

秋も負けたことはあるからな。絶対に負けたことのないデュエリストなんていないしな

「気に入らんその眼！いいだろう、まずは貴様を倒してそれを証明してやる！」



「良いだろう王様、覚悟しな」

「王に向かって無礼ぞ！」

近くにいる神官？っていつのか？そんな連中が怒りだす

「よい」

言いながら王様が立ち上がり、デュエルディスクらしきものを装着した

「万丈目、ディスクだ」

「万丈目さんだ！」

いいながらディスクを投げる万丈目。いい加減それ改定したらどうだ？

「デュエル  
決闘！」

アドビス3世 LP4000

秋 LP4000

「余の先攻！ドロー！『王家の守護者』を守備表示で召喚」

王家の守護者 ATK900/DEF0

「カードを1枚伏せてターンエンドだ」

・・・守備力0の通常モンスターを守備表示？本当にあの王様強いのか？

「俺のターンドロー」

「この瞬間異発動『第一の棺』！相手のターンのエンドフェイズ毎に「第二の棺」「第三の棺」の順にフィールドに出す。3つの棺が揃いし時 呪いの扉が開かれ そなたを絶望と闇が覆うであろう」

へえ・・・どんなのが出てくるんだろう！楽しみだぜ！

「ああそう、じゃあ俺はメインフェイズに入る」

・・・どこか機嫌が悪いな。あいつどうしたんだ？

「秋・・・またいつものアレね」

「そうみたいね」

「どうしたんだ？」

「多分、デッキが思ったのと違ったんじゃない？さっきまで嬉しそうに出来上がったデッキを見ていたし」

なるほど・・・そういや、俺も一回アイツのデッキ適当に選んだことがあったなあ・・・

「俺は手札から『ビック・ジョーズ』を召喚！」

ビック・ジョーズ ATK1800/DEF300 (アニメ版)

「そして、魔法カード『アクア・ジェット』を発動！このカードは水属性、海竜族、魚族のモンスターの攻撃力を1000ポイントアップさせる！」

うおおおっ！すげえ！通常魔法でそんな効果を持ったカードがあるのか！

ビック・ジョーズ ATK1800/DEF300 ATK280  
0/DEF300

「いくぞ、ビック・ジョーズで攻撃だ・・・『ビックマウス』！」

「ぐぐっ！」

「カードを2枚伏せ、ターンエンド」

「エンドフェイズ時、『第二の棺』が発動する」

あと一つで何が出てくるんだ？本当に恐ろしいカードなら・・・秋はどうやって対策を・・・

「・・・どうでも良いが、アンタのターンだ」

「ふっ・・・余のターンドロ！余は『強欲な壺』を発動してカードを2枚ドロ！さらに手札1枚をコストに『死者への手向け』を発動し、そのサメを破壊する！」

破壊されるビック・ジョーズ・・・それにしてもあのサメすげえな、

よくよく見ればレベル3で攻撃力1800じゃねえか

「さらに余は『ファラオのしもべ』を召喚！」

ファラオのしもべ ATK900/DEF0

さっきから弱いモンスターばかりだな。本当に負けなしなのかよ

「秋は勝てるかしら・・・神と呼ばれた決闘者に」

「どうしたんだよ雪乃、らしくねえぞ」

いつもなら秋が絶対勝つとか言うのに

「・・・十代の坊や達は知らないでしょう。あのデッキはまだ試作らしいの」

「試作!？」

「そう、あのデッキはまだ回し方が微妙だし、モンスターももつと選ぶ余地があるって考えていた程よ。そのデッキで秋が勝てるとはとても思えないわ」

確かに・・・試作のデッキでことはその時その時で邪魔なカードも出てくるわけだし・・・

「秋・・・」

「ファラオの僕でダイレクトアタックだ！ゆけい！」

「つち！」

秋 LP4000 LP3100

「余はカードを1枚伏せ、ターンエンドだ」

「俺のターンドロ―！俺は手札から『浮上』を発動！自分の墓地から、水属性モンスター1体を表守備表示で特殊召喚！現れる『ビツク・ジョーズ』！」

ビツク・ジョーズ ATK1800/DEF300

「そして、手札から『ハリマンボウ』を召喚！」

ハリマンボウ ATK1500/DEF300

同じレベルのモンスターが2体！これは……！

「レベル3のハリマンボウと、ビツク・ジョーズをオーバーレイ！2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！エクシ―ズ召喚！現れる『ブラック・レイ・ランサー』！」

3x2

ブラック・レイ・ランサー ATK2100/DEF300

すげえ！新しいエクシ―ズモンスターだ！

「エクシ―ズモンスター？なんだそれは……！」

「レベルが同じモンスター同士を合わせることで召喚する特殊なモンスターだ。行け！ブラック・レイ・ランサー！ファラオのしもべに攻撃！『ブラック・スピアー』！」

アドビス3世   LP4000   LP2800

「ぐっ……」

「カードを1枚伏せてターンエンド」

「このエンドフェイズ……第3の棺が発動する！」

とうとう来るのか、第3の棺が！一体何が起こるって言うんだ！？

「棺が3つ揃ったわ！」

「一体何が起こるんだ！？」

「余はこれらのカードを全て墓地に送り「スピリッツ・オブ・ファラオ」を攻撃表示で特殊召喚！」

スピリッツ・オブ・ファラオ   ATK2500/DEF2000

……なんか、手間かけた割には普通のカードだな。もっと凄いのが出てくると期待したんだけど。みんなもなんか拍子抜けって顔してるし

「このカードが第一の棺の効果で特殊召喚された時、レベル2以下のアンデット族通常モンスターを4体まで特殊召喚する事ができる！」

レベル2以下の通常アンデットモンスター？って言ったらさっきの  
ファラオのしもべとかいうのか？あんまりたいしたことないと思う  
けど

「くるがいい！王家の守護者！ファラオのしもべよ！」

王家の守護者 ATK900/DEF0

ファラオのしもべ？ ATK900/DEF0

ファラオのしもべ？ ATK900/DEF0

なんでファラオのしもべが2体？そうか！さっきの死者へのたむけ  
の効果か！」

「余のターンドロー！」

「あの男、本当に神と呼ばれていたのか？」

「ああ、そうは思えないような・・・」

「余は手札から『サウザウンド・エナジー』を発動！自分フィールド上に表側表示で存在する、全てのレベル2通常モンスターの元々の攻撃力と守備力は1000ポイントアップする！」

なんだって！？それじゃあ・・・弱いモンスターを出したのはこの  
ためだったのか！

王家の守護者 ATK900/DEF0 ATK1900/DEF0

ファラオのしもべ？     ATK900/DEF0     ATK1900/  
DEF0

ファラオのしもべ？     ATK900/DEF0     ATK1900/  
DEF0

これを通ったら秋の負けだ！スピリッツ・オブ・ファラオの攻撃力は2500！ブラック・レイ・ランサーを上回っている！

「バトルだ！スピリッツ・オブ・ファラオよ、ブラック・レイ・ランサーを攻撃せよ！」

「・・・罨カード『聖なるバリアー・ミラーフォース』発動。攻撃表示のモンスターは全て破壊だ」

「な、なんだと!？」

あっさりと破壊されるモンスター達・・・おいおい、なんかしかけてなかったのかよ

「よ、余のモンスター達が・・・」

「悪いな、で？」

「余はカードを1枚伏せ、『魂を削る死霊』を守備表示で召喚。ターンエンドだ」

魂を狩る死霊     ATK300/DEF200



すると、秋が王様に話しかけた。お前は自分が負けたことがないのに疑問はなかったかと。王様はやはり物足りなかったと言っていた。どうやら家臣の奴らが王様に手加減をしていたらしい。そりゃえらい人に勝つのは無理な話だよな。接待ってやつか

「悪いが、俺は手加減なんてしないからな・・・俺のターンドロ」

「うむ、全力で来てくれ」

全力か・・・今のところ試作って言う割にはちゃんとデッキが廻っている気がするけど

「・・・行くぜ、俺はブラック・レイ・ランサーの効果を発動！オーバーレイユニットを一つ使うことで『魂を削る死霊』の効果を手ンドフェイズまで無効にする！そして墓地へ送ったハリマンボウの効果発動！相手モンスター1体の攻撃力を500ポイント下げる！」

竜巻が起き、魂を削る死霊にぶつける。

魂を削る死霊     ATK300 / DEF200     ATK0 / DEF200

「俺は再び『浮上』を発動！墓地へ送った『ハリマンボウ』を特殊召喚！そして速攻魔法『地獄の暴走召喚』！相手フィールド上に表側表示でモンスターが存在し、自分フィールド上に攻撃力1500以下のモンスター1体が特殊召喚に成功した時、その特殊召喚したモンスターと同名モンスターを自分の手札・デッキ・墓地から全て攻撃表示で特殊召喚する！相手は相手自身のフィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択し、そのモンスターと同名モンスターを相手自身の手札・デッキ・墓地から全て特殊召喚する。ア

ンタのファラオのしもべはそれだけか？」

「・・・うむ、余のデッキにはこのカードは2枚だ」

フィールドに現れる2体のハリマンボウこれでフィールドは4体が

ハリマンボウ？ ATK1500/DEF300

ハリマンボウ？ ATK1500/DEF300

「そして、魚族のハリマンボウを特殊召喚したことで、シャーク・サッカーを特殊召喚！」

シャーク・サッカー ATK200/DEF1000

「おお・・・レベル3のエクシーズをまだできるのか」

「ああ、見せてやるぜ・・・・・・試作なのにここまで回るとは」

ん？最後秋の奴なんか言わなかったか？

「レベル3のハリマンボウと、レベル3のハリマンボウをオーバーレイ！2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！現れる『潜航母艦エアロシャーク』！」

潜航母艦エアロシャーク ATK1900/DEF1000

「そしてもう一度、レベル3のハリマンボウと、レベル3のシャーク・サッカーをオーバーレイ！2体のモンスターでオーバーレイ・

ネットワークを構築！現れる『No.17リバイス・ドラゴン』！

リバイス・ドラゴン    ATK2000 / DEF0

す、すげえ・・・水属性のエクシーズモンスターがここまで出てくるなんて・・・

「これが、これが現代の決闘者の実力か・・・すごいもんじゃないのう  
王様も喜んでるぜ

「リバイス・ドラゴンのモンスター効果発動！オーバーレイユニッツ  
を取り除くことで、攻撃力を500ポイント上げる！」

リバイス・ドラゴン    ATK2000 / DEF0    ATK2500  
/ DEF0

「バトル！エアロシャークで魂を削る死霊に攻撃！『ビツク・イ  
ター』！」

エアロシャークが魂を削る死霊を飲みこんだ。そして残っているの  
はブラック・レイ・ランサーと、リバイス・ドラゴンのダイレクト  
アタック

「いけ！ブラック・レイ・ランサー！リバイス・ドラゴン！ダイレ  
クトアタックだ！」

「ぬあああああああつ！」

アドビス3世    LP2800    LP0

吹き飛ばされ、仮面が外れる王様

「俺の勝ちだぜ、王様・・・どうだい、負けた気分は」

「・・・悔しいな。だが、清々しい気分だ。何故余が闇のデュエリストになったのか・・・一度でいい・・・そなたの様な男とこんなデュエルがしてみたかった・・・」

「そうかい」

秋がそう言って寝ている王様を起こした。

「うむ、これで天へ行ける」

どうやら、成仏ってことらしいな。これで事件も終わりか

「そうだ！お前も来ないか！」

「は？」

え？

「あんな楽しいデュエルを 一度だけで終わらせるなんて 勿体ない！だから！なっ！」

おいおいおい！それって秋に遠まわしに死ねって言ってるようなもんだぞそれ！すると雪乃とツアンが脱兎のごとく駆け出し、秋に抱きついた

「駄目よ！秋は連れてつちや！」

「そうよ！秋は私達のなのよ！絶対だめ！」

最早必死だな・・・あの二人。不服そうにする王様。秋は苦笑している

「悪いな王様・・・俺が死んだら、また相手してやるよ」

「ほ、本当か！？」

「しばらく時間はかかるが、気長に待つてくれ」

「うむ、まあ3000年はかかるまい・・・またな」

こうして消えていく王様。気が付くと俺達は寮の前にいた。

「ふん、良かったな秋！死んでからの行き先が決まって」

「ま、あの様子だし天国みたいだな・・・万丈目、お前天国いけるのか？」

「どづいつ意味だ！」

ぎゃいぎゃい騒ぐ二人。

「俺もあの王様とデュエルしてみたいぜ！」

「だな、死んだら一緒に行くか、十代」

「おう！」

なんて話していると、雪乃とツアンが起こった表情になる

「駄目よ秋、貴方は私達と死んでからも一緒よ？」

「そうよ！ずっと一緒なんだから！」

大変だなあ秋も・・・っと

「そろそろ飯行こうぜ！」

「もうそんな時間か・・・そうだな」

こうして俺達はみんなで食堂へ向かった。今日の飯は何かな？

## 進む歯車（後書き）

というわけで、たまにはアニメ版のカードも使ってみました

OCGのビック・ジョーズは使うの難しいからなあ・・・

## 闇の訪れ（前書き）

というわけで、久しぶりにあいつらが登場します

秋「今日の最強カードは・・・ボーガニアンだ」

自分のスタンバイフェイズ毎に相手ライフに600ポイントダメージを与える。

マリクの使ってたカードデス・・・これ、どう使えばいいのだろう



## 闇の訪れ

王様とデュエルしてから数日、特に何の問題もなく時が進んでいくが、問題は天上院吹雪だ。明日香の話では、まだ目を覚まさないとのことだ。もうすぐタイタンが来るのだろう。頑張れ明日香……

「じゃあ秋、お風呂に行ってくるわ」

「また後でね」

「ああ」

二人が出ていく。さて、もう少しデツキを見直すとするか……

「……………あれ？」

いきなり視界が悪くなる。これは、目眩？

「う、あ？」

「ま、マスター！？」

ミラが俺を支える。なんだ、意識が……遠のく……

……………

眼を覚ますと、俺は暗い闇の中にいた。

「クククク・・・主役のご登場だぜ」

「う・・・っ!?!?」

この、松本梨香ボイスは・・・!

「バクラっ・・・!」

俺は立ち上がり、バクラを見た。こいつら、俺を無理やり精霊界へ・・・

「おっと、俺を忘れてもらっては困るな」

「マリクの闇人格・・・!何故俺をここへ・・・!」

「単純な話さ、お前が邪魔なんだよ・・・お前は今武藤秋の身体の中にいるんだからな」

どういう意味だ?すると、暗闇の中から武藤秋が姿を現した。

「武藤秋!?!」

「・・・」

「さあ相棒・・・アイツを倒して身体を取り戻そうぜ」

「そっだぜ?お前のやりたいことが出来るんだ」

武藤秋の眼は虚ろで、光はない。手には黒いデュエルディスクがあった。

「武藤秋！」

「……君を倒して、僕の体を返してもらおう。そして、あの世界を壊すんだ……」

「っ！」

駄目だ、声は通じていない。恐らく、武藤秋の闇を完全にバクラ達に乗っ取っている……！俺はデュエルディスクを展開する。このデュエル、負けられない……！バクラとマリクの闇人格は武藤秋の中へと消えていく

「<sup>デュエル</sup>決闘！」

城戸秋 LP4000

武藤秋 LP4000

「先攻はもらうぞ、ドロー！」

……このデュエル、デッキ調節し終えたとはいえ、油断はできない。確実に勝ちに行かないとまずい。油断は命取りだ。だが相変わらず、手札が悪いっ！

「……俺は手札からモンスターを裏守備表示にしてセットしてターンエンド」

「……僕のターンドロー」

秋の実力はある程度知っている。傾向的なパワーデッキだ。種族を定めず、高い攻撃力のモンスターを出しながら闘う。だが、あの二人のことだ・・・何を仕掛けてくるかわからない

「僕は手札から兵隊人形ネクロソウルジャマーを守備表示で召喚・・・」

兵隊人形 ATK0/DEF0

「何!？」

バクラのカードだと・・・!？

「兵隊人形は・・・相手のスタンバイフェイズ時にデッキ外から「兵隊人形」1体を自分フィールド上に特殊召喚できる・・・カードを3枚伏せ、ターンエンド」

兵隊人形・・・厄介なカードを

「俺のターンドロー!」

「スタンバイフェイズ、兵隊人形を召喚」

兵隊人形 ATK0/DEF0

「・・・俺はフィールドのモンスターを反転召喚!セットしていたのは『スノーマンイーター』だ!兵隊人形を1体破壊する!」

「畏カード発動『天罰』・・・手札1枚をコストに・・・モンスター1の効果を無効にし、それを破壊する」

「何っ!？」

破壊されるスノーマンイーター・・・つく

「ならば俺は手札から『デブリ・ドラゴン』を召喚!このカードの召喚に成功した時、攻撃力500以下のモンスターを特殊召喚!戻って来い!スノーマンイーター!」

デブリ・ドラゴン    ATK1000/DEF2000

スノーマンイーター    ATK0/DEF1900

「畏発動『強制脱出装置』・・・特殊召喚したスノーマンイーターを手札へ戻す」

「なっ・・・」

手札に戻されるスノーマンイーター・・・チューニングさせない気か!こんなことを武藤秋が知るはずがない・・・なら、やっているのはバクラ達か

「・・・カードを1枚伏せ、ターンエンド!」

「僕のターンドロ・・・『強欲な壺』を発動して2枚ドロ・・・永続魔法『暗黒の扉』を発動。互いのプレイヤーはバトルフェイズでモンスター1体でしか攻撃できない」

攻撃封じ・・・やはりバクラのロックを

「さらに『ボーガニアン』を守備表示で召喚」

「ボーガニアン！？」

ボーガニアン ATK1300/DEF1000

まさか、バクラだけでなく・・・マリクの闇人格のカードまで！

「カードを1枚伏せ、ターンエンド」

「俺のターンドロー！」

「この瞬間、兵隊人形はまた1体召喚される」

兵隊人形 ATK0/DEF0

相手フィールドにはモンスターが4体、そして伏せカードは2枚・  
・この手札で、どこまでいけるだろうか

「俺は手札から『カードガンナー』を召喚！効果発動！デッキから  
3枚までカードを墓地へ送り、墓地へ送った数×500ポイント攻  
撃力をアップさせる！」

カードガンナー ATK400/DEF400 ATK1900/  
DEF400

墓地へ落ちたのは“ボルト・ヘッジホッグ”“バトルフェーダー”

“奇跡の残照”ボルト・ヘッジホッグなら何とかなる！

「レベル3のカードガンナーに、レベル4のデブリ・ドラゴンを手

「ユーニング！」

「……………」

3 + 4 = 7

「冷たい炎が、世界の全てを包み込む……漆黒の花よ、開け！シンクロ召喚！現れよ『ブラック・ローズ・ドラゴン』！」

ブラック・ローズ・ドラゴン ATK2400 / DEF1800

「ブラック・ローズ・ドラゴンのモンスター効果！このカードの「カウンター発動『神の宣告』……ライフ半分をコストに、その特殊召喚を無効にし、破壊する」何っ!？」

ブラック・ローズ・ドラゴンの特性を知っていた!? 神の宣告……封じられている。俺のシンクロ召喚が……!

武藤秋 LP4000 LP2000

「つく……カードを2枚セットし、ターンエンド」

「……僕のターンドロ……スタンバイフェイズ、ボーガニアンの効果により、相手プレイヤーに600ポイントのダメージを与える『地獄送りのボーガン』」

ボーガンが発射され、矢が俺の肩を貫いた。その瞬間に激痛が走った。これは、闇のゲーム!？」

城戸秋 LP4000 LP3400

『ククク・・・痛いだろう？お前の闇のアイテムは厄介だったが、夢の中じゃあその効力も発揮されない』

マリクの闇人格が耳障りに響く。声は武藤秋から発せられていた。どうやら身体を共有しているらしい

「つく・・・！」

「僕は兵隊人形を生贄に捧げることで『地獄詩人ヘルポエマー』を召喚する。」

地獄詩人ヘルポエマー    ATK2000 / DEF1400

ヘルポエマーか・・・どうする、俺のデッキにはカードを除外するカードがないぞ・・・

「バトルだ・・・ヘルポエマーで直接攻撃！」

「畏発動！『ガード・ブロック』！ その戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは0になり、自分のデッキからカードを1枚ドロウする！」

なんとか防いだが・・・このままじゃばい。もし、俺が思っデッキならば“あのカード”も入っているはずだ。

「・・・ターンエンド」

「俺のターンドロウ！」



フィールドの除去をに失敗している以上、大嵐やサイクロンを引くのを待つか。だが、時間も無い。一気に決めなければ！

「俺は手札の『グローアップ・バルブ』を墓地へ送ることで『クイック・シンクロン』を特殊召喚する！そして通常召喚！ジャンク・シンクロン！」

ジャンク・シンクロン ATK1300 / DEF500

クイック・シンクロン ATK700 / DEF1400

「ジャンク・シンクロンの効果発動！レベル2以下のモンスターの効果を無効にして特殊召喚！来い、『ボルト・ヘッジホッグ』！」

ボルト・ヘッジホッグ ATK800 / DEF800

「レベル2のボルト・ヘッジホッグにレベル3のジャンク・シンクロンをチューニング！」

2 + 3 = 5

ここは一気にコンボで叩く！そのためにもここは手札を一気に消費してでも……！

「リミッター解放、レベル5！レギュレーターオープン！スラストーウォームアップ、オーケー！アップリンク、オールクリアー！GO、シンクロ召喚！カモン、TG ハイパー・ライブラリアン！」

TG ハイパー・ライブラリアン ATK2400 / DEF1800

「さらにボルト・ヘッジホッグの効果を発動！自分のフィールドにチューナーがいる時、このカードを特殊召喚！」

ボルト・ヘッジホッグ ATK800/DEF800

「レベル2のボルト・ヘッジホッグにレベル5のクイック・シンクロンをチューニング！」

2 + 5 = 7

「集いし思いが、ここに新たな力となる。光差す道となれ！シンク口召喚！燃え上がれ！」ニトロ・ウォリアー」！

ニトロ・ウォリアー ATK2700/DEF1800

「ライブラリアンの効果で、シンク口召喚に成功したので1枚カードをドロウする！」

これでフィールドには攻撃力が2700のモンスターと2400のモンスター！暗黒の扉があるが、ニトロ・ウォリアーならば！

「バトルだ！」「畏発動『威嚇する咆哮』このターンバトルは行えない」なん、だと・・・！？」

最後の一枚の伏せカードがそれだと！？

「・・・っ！カードを1枚伏せ、ターンエンド！」

「僕のターンドロウ・・・スタンバイフェイズ、ボーガニアンの効果発動。相手に600ポイントのダメージを与える。『地獄

送りのボーガン』」

城戸秋 LP3400 LP2800

「つく……」

「さらに、相手の『TGハイパー・ライブラリアン』と『ニトロ・ウォリアー』を生贄に、『溶岩魔神ラヴァ・ゴーレム』を特殊召喚・  
」

「しまった……！」

このカードも入っていたのかっ！くそっ……

「……さらにカードを1枚伏せ、ターンエンド」

「つく……俺のターンドロ―！」

「ラヴァ・ゴーレムの効果発動。コントローラーはスタンバイフェイズに1000のダメージを受ける」

「うぐっ……」

あ、熱い……黒炎弾よりはましたが……だが、熱い……

城戸秋 LP2800 LP1800

「手札から『強欲な壺』を発動して2枚ドロ―！よし！魔法カード『アドバンスドロ―』を発動っ！ラヴァ・ゴーレムを生贄に捧げることでカードを2枚ドロ―する！」

ラヴァ・ゴーレムが消える。これでライフを減らされることはないが、フィールドにはヘルポイマーと兵隊人形が2体、そしてポーガンニアン・・・次のドローで全部決まってしまう・・・

「ドロー！」

引いたカードは・・・！！行ける、まだこれならっ

『ククク・・・どうなんだ？引いたカードはよお』

「まだ神様ってのは俺を見捨ててないのかもな」

『何？』

『どうせハツタリだろう？』

ハツタリというより、これは賭けだけだな

「俺は手札から『シンクロン・エクスプローラー』を召喚！このカードの召喚に成功した時、シンクロンと名のついたカードをフィールドに特殊召喚できる！来い『クイツク・シンクロン』！」

クイツク・シンクロン ATK700/DEF1400

「そして手札から「その前に罠カード発動『緊急脱出装置』」なっ・・・」

『ハツハツハ！テメエのシンクロモンスターの対策を怠るとでも思ったのかよ！』

『残念だがクイック・シンクロンは再び手札に戻る・・・残念だったな』

「なぜ、お前らは俺のデッキを・・・」

なぜ、特殊召喚を封じるカードが多様に出てくるのか分からない。神の宣告はともかく、昇天の黒角笛など特殊召喚を限定にしたピンポイントカードだ・・・そんなカードをいれるなど、アンチデッキ以外の何物でもない。だが、デッキはどう見てもマリクの闇人格とバクラの混合デッキだ。

『俺様達の念がお前に付着していてなあ・・・お前のデッキがどんなものか、あらかじめ知っていたのよお！』

「な、何!?!」

『クッククク・・・お前の様な普通の人間では普通気づかない、お前の元にいるあのマハードですら気付かないほどの微量な俺達の意思だ・・・』

どおりで！こいつらが知るはずのないシンクロ召喚の対策が取られていたのかっ！

『さっさとサレンダーするんだな』

『もうお前のキーカードもただの攻撃力0の役立たずだぜ？』

・・・・・・フッ

「それはどうかな？」

『『何？』』

「俺は待っていたのさ、お前達の場に伏せカードがすべて消えるのを！手札から魔法カード『調律』を発動！手札にジャンク・シンクロンを加え、ジャンクシンクロンを墓地へ送ることでクイック・シンクロンを特殊召喚！」

クイック・シンクロン ATK700/DEF1400

「こんな単純な手に引っ掛かるとはな・・・思ってもみなかったぜ？」

『ツチ！だがテメエのニトロ・ウォリアーはもう墓地だ！出て来ないだろうよ』

どうやらニトロ・ウォリアーの効果を知っているようだが・・・

「俺が召喚するのはニトロ・ウォリアーじゃない。手札から『ワン・フォー・ワン』を発動！手札の『レベル・ステイラー』を墓地へ送ることで、デッキから『チューニング・サポーター』を特殊召喚する！」

チューニング・サポーター ATK100/DEF300

「レベル1のチューニング・サポーターとレベル2のシンクロン・エキスプローラー、そしてレベル5のクイック・シンクロンをチューニング！」

1 + 2 + 5 = 8

「集いし闘志が、怒号の魔人を呼び覚ます！光差す道となれ！シンクろ召喚！粉碎せよ、『ジャンク・デストロイヤー』！」

ジャンク・デストロイヤー ATK2600 / DEF2400

『ちい！シンクろ召喚を許したか！』

こうなればこつちのものだ！一気に叩き潰す！

「ジャンク・デストロイヤーの効果発動！チューナー以外の素材の数だけ、フィールド上のカードを破壊する！俺が選択するのは『ポীগニアン』と『地獄詩人ヘルポエマー』だ！さらにチューニング・サポーターの効果でカードを1枚ドロー！引いたのは『サイクロン』だ！暗黒の扉を破壊！」

もうこれでダメージが削られることはない・・・フィールドは守備表示の兵隊人形2体だけだ。これならいける！

「さらに！ジャンク・デストロイヤーのレベルを一つ下げることですレベル・ステイラーを特殊召喚！」

レベル・ステイラー ATK600 / DEF0

8 7

「そして罠カード『リミット・リバーズ』を発動！攻撃力1000以下のモンスターを復活させる！蘇れ『カードガンナー』！」

カードガンナー ATK400/DEF400

これでダメージを全て通せば俺の勝ちだ！行くぜ！

「バトルだ！カードガンナーとレベル・ステイラーで兵隊人形2体を攻撃！」

破壊される兵隊人形達。これでから空き！俺の勝ちだ・・・！

「そしてジャンク・デストロイヤーでダイレクトアタックだ！『デストロイ・ナックル』！」

「・・・墓地の、ネクロ・ガードナーの効果を発動。このカードを除外し、モンスター1体の攻撃を無効にする・・・」

「なっ・・・」

ネクロ・ガードナーが現れ、その攻撃を防ぐ。な、なんでネクロ・ガードナーが・・・っ！

「そうか、天罰の効果の時！」

『そう簡単にやられるわけがないさ・・・俺様達を倒そうなんてなあ』

「っぐ・・・」

このままじゃやばい・・・

「墓地のグローアップ・バルブの効果発動！デッキの一番上のカー



ドを墓地へ送ることで、このカードを特殊召喚！」

グローアップ・バルブ ATK100/DEF100

「レベル3のカードガンナーと、レベル1のレベル・ステイラーにレベル1のグローアップ・バルブをチューニング！」

3+ 1+ 1" 5

「刻まれし正義の名のもとに、今こそ破壊の限りを尽くせ！シンクロ召喚！起動せよ『A・O・Jカタストル』！」

A・O・Jカタストル ATK2200/DEF1200

「……ターンエンド！」

「僕のターンドロ……手札から『命削りの宝札』を発動。カードを5枚になるようにドロ。5ターン後に全て捨てる」

なにつ！？この局面で、だと！？

「………死者蘇生を発動。ポーガニアンを蘇生する。そして……『早すぎた埋葬』を発動800ポイントのライフをコストに、『ラヴァ・ゴーレム』を特殊召喚する」

ポーガニアン ATK1300/DEF1000

ラヴァ・ゴーレム ATK3000/DEF2500

「通常召喚……ライトニングギア光神機 - おつか桜火を召喚。このカードは生贄ナシで召

喚できる」

光神機 - 桜火    ATK 2400 / DEF 1400

次々と召喚されたモンスター達・・・大丈夫、カタストルがいる限り、俺に攻撃は通らない。だが腑に落ちない・・・デストロイヤーはともかく、カタストルを破壊することはできない。ダメージは受けても600だ・・・あいつらも俺のカードを知るならそれを分かっているはず。なのに、なぜ？

『どーした？まるで俺様たちがこのターンで決めようとしているように見えるか？』

「な、に？」

『だがカタストルがいるのになぜと想っている？そうだろうか？』

お見通し、だというのか？だが、それならなおさら疑問に持つ・・・何故あいつらは、武藤秋はフィールドにモンスターを3体も並べたんだ・・・？・・・待て、モンスターが3体、だと？

『つくつくつく・・・ヒャーハツハ！気づいた用だな！』

「そんな・・・だつて・・・」

『甘いなあ・・・知らないのか？知っているはずだろう？この世界で3体の生贄で召喚できる！この俺様の切り札を！』

マリクの闇人格の声・・・そんな

「あのカードはもうないはずだ！」

「そう“本物”はない……だが1枚だけ現存するカードがある。それはコピーカード！」

「まさか……」

そんな……

「魔法カード『二重召喚』を発動……もう一度召喚を行える……  
フィールドの3体のモンスターを生贄に……！」

何語かわからない言葉を口にする武藤秋……ヒエラ、テキスト……  
……！？

「いでよ、究極の神！『ラーの翼神竜』！」

現れるのは金色の竜……いや、鳥とも取れるそのモンスター……  
その光はここ一体の闇を晴らすような光を放っている。だがその姿  
は今の俺には恐怖としてしか映らない

ラーの翼神竜 ATK？/DEF？

「ラーの翼神竜の攻撃力は、生贄にしたモンスターの合計となる」

ラーの翼神竜 ATK？/DEF？ ATK6700/DEF49  
00

「……ラーの翼神竜で、ジャンク・デストロイヤーを攻撃……」

そんなバカな！原作効果のラーは召喚直後攻撃を出来ないはずだ！  
モンスター効果を受けないとはいえ・・・召喚直後の攻撃は確かに  
できないはずじゃ・・・それに、何故コピーカードにヒエラテキスト  
トが！？

『クツクツク・・・何故か知らんがこのラーの翼神竜、テキストが  
変わっていたな』

そんな・・・なんで！？まさか、俺の影響なのか！？TFのラーは  
3体生贄後、そのまま攻撃が可能に・・・

「あ、ああ・・・」

「行け、ラーの翼神竜『ゴッド・ブレイズ・キャノン』」

「ぐああああああああああああああっ！」

城戸秋 LP1800 LP0

俺はその炎に焼かれ、吹き飛ばされた。身体が、焼けるように熱い・  
・

「う、あ・・・」

『ほう、神の攻撃を喰らって息があるとは・・・貴様で二人目だ』

「く、そ・・・」

身体が、言うことを・・・聞かない・・・

『逃げようとしても無駄だぜ？諦めな』

いつの間にかバクラとマリクの闇人格に囲まれている俺。ここまで・・・なのか・・・

『お前は这个世界で永劫の闇になるがいい・・・』

マリクの手が俺へと伸びる。ツアン・・・雪乃・・・十代・・・みんな・・・ゴメン・・・。俺は諦め、目を閉じる。その時だった

『ぐああっ！』

マリクの闇人格の悲鳴が聞こえた。目を開けると、温かい光が俺を包んでいた。この、光は・・・

「ドリアード・・・!?!」

そこにはあいつらの前に立ち塞がるドリアードの姿があった。

『またテメエか・・・』

『鬱陶しい女だ』

この世界の秋も、ここにいる秋も、貴方達の思うようにはさせない

ドリアードの言葉に、ニヤリと笑う二人

『今の俺様達は全盛期の力をほぼ取り戻したんだぜ？それでもやる

のか？ええ？』

.....

光の魔法陣が俺達を包む

『逃がすかつ！』

絶対なるこの光、悪しき者たち立ち入ることを禁ず

結界が張られ、二人ははじかれる

元の世界へ戻ります・・・貴方は、ここで死んではいけない

ドリアードの悲しい目が、俺の中へ飛び込んだ。そしてこの世界で最後に見たのは、マリオネットの糸が切れたように、俺と同じように倒れ込んでいる武藤秋の姿だった。

S i d e 雪乃

私達は風呂を上がると、途中でイヤな胸騒ぎがした。すると、サラが血相を変えて飛んで来ていた。

「あら、サラ・・・どうしたの？」

『大変だ雪乃、ツアン！秋が倒れた！』

「ええ！？」

「ど、どうして?」

『わからない!しかも途中から血が出たりしているんだ!急いでくれ!』

私達はサラの言葉に驚き、急いで部屋へと戻った。そこで見た光景に、私は絶句した

「しゅ、秋!？」

所々身体が焦げ、煤が付いている。体温が以上にまで高く、何か貫かれたような跡が出来ていた。

「秋!秋!しつかりして!秋!」

呼びかけても反応がない。マナとマハード、ミラが必死になって魔法で傷口を塞いでいる。そして、光が迸った

「っ……!鍵が!」

秋の付けていた七星門の鍵が消えてしまった。そんな、セブンスターズに秋が敗れた!?そんなはずはない!すると、また別の光が輝く。今度は温かいように思えた。現れたのは……モンスター?たしかドリアドじゃなかったかしら?

「あ、あなたは……」

まさか、アレがセブンスターズ!?

『・・・・・・・・・・』

ドリアードは一振りだけ杖を振るった。その輝きは秋へ降り注ぎ、  
傷や火傷の部分を瞬く間に消してしまった。

「あなた・・・」

「今は・・・」

私達が驚く中、ドリアードはその姿を消した。この日、秋の鍵は消  
失し、明日香はセブンスターズに勝利したという。一体、何が起  
っているの？



闇の訪れ（後書き）

というわけで、秋VS秋です

今後この3人がどう動くのか、お楽しみください

## 学園祭（前編）（前書き）

というわけで、学園祭編です

秋「今日の最強カードは「白魔導士ピケル」だ」

自分のスタンバイフェイズ時、自分のフィールド上に存在する  
モンスターの数×400ライフポイント回復する。

三沢のアイドルカードです

## 学園祭（前編）

Side 秋

武藤秋とのデュエルから次の日、俺は部屋で目を覚ました。身体にはいくつか怪我の後があり、七星門の鍵は消えていた。みんなから説明を求められたがセブンスターズに襲われ、不意を突かれたと嘘をついた。マハード、マナ、ミラには本当のことを話したけど。マハードは魔術で念入りに俺の身体を調べてくれた。少しだけ闇の残滓があつたので排除もしてくれたのだという。あと、セブンスターズについては情報がないものの・・・大徳寺先生が消えたという話をされた。まあ、アイツもセブンスターズの関係者だしな

「・・・・・・・・・・」

ムクリと身体を起こして時計を見る・・・もう昼過ぎだ。俺は負けただんだ・・・俺は、あいつらに負けてしまった。そうしながら机を開けた。神のカード達は変わらず置いてあつた。ここから使われたわけではないのがわかる。マリクの闇人格はコピーカードと言っていたな・・・確か来年のジエネシック大会でラーのコピーカードがあつたはずだ。ヒエラテキストを間違つた解読をしたからあんなことになつてたのか？ぶつちやけ、TFのカードだと召喚したターンに攻撃できるのは知っているが・・・

「秋、入っても大丈夫？」

「明日香？ああ、大丈夫だよ」

今日は学校だつたんだよな・・・クロノス先生が何故か俺を公欠に

してくれたし、ゆっくり眠ることが出来た。だから現在雪乃とツァンがいないんだが・・・ドアが開くと、明日香と・・・ええと、天上院吹雪？だっけか・・・がいた。

「秋、身体はどう？」

「ああ、だいぶ良くなったよ。身体も動くようになったしな」

「そう・・・あ、紹介するわね。昨日目が覚めたの。私の兄、天上院吹雪よ」

「初めまして、天上院吹雪だ・・・君には謝っても謝りきれないほど苦労をかけてしまった」

と、頭を下げてくる天上院吹雪。

「別に気にしてませんよ、原因はダークネスだったことだし・・・過ぎたことです」

「そっか、そう言ってもらえると少しだけ気が楽になるよ」

「そういえば、もうすぐ学園祭だから・・・それまでゆっくり休みなさい。後で雪乃とツァンも戻ると思うし」

「そういえばあいつら何してんだ？」

「雪乃は校長室へ秋が鍵を失ったことを言いに行つて、ツァンは貴方の怪我用の包帯とかを買いに購買へ行ったわ」

「そっか、どおりで遅いわけだ。迷惑かけっぱなしだな」

「ありがと明日香、ゆっくり休むことにするよ」

「ええ、じゃあ兄さん……」

「ああ、ちよつと秋君と話があるから先に戻ってくれ明日香」

「え？ええ……」

そう言つて明日香だけ出ていく。俺に話すこと？

「ぶつちやけ聞こう秋君、明日香をどう思つ？」

「………は？」

いきなりどうした

「いや何、長い間妹とは離れていたからね……あんなに美しくなつているとは思わなかったが……それで悪い虫が付いてたら嫌じゃないか」

そうだった……この人こういう性格だった。

「俺は別に明日香を恋の対象として見てませんよ？というか、俺恋人一応いますから」

「そ、そうかい……なら、君は明日香を見ている男性は誰だと思つ？」

「……まあ、万丈目じゃないんですか？」

「そうか、ふむ・・・」

「明日香の本音は知りませんがね・・・」

ここで十代のことを言うと後々面倒になりそうなので言わないでおこう。それにしても学園祭か・・・平和に終わるといいな・・・極力

・・・

数日後、学園祭が開かれた

「ふぁ・・・」

早朝からみんな忙しそうだ。時間は・・・まだ5時だぞ？身体を起こし、当たりを見渡す。そう言えば雪乃は実行委員会に協力しているんだっけか？だからいないのか。ツァンは相変わらず俺にひっついたままだけど

「よいしょ・・・」

『おはようございますマスター！』

「うん、おはようミラ・・・って、それ

ミラが着ているのはオベリスブルー用の制服である。もちろん女性用

「えへへ、今日はお祭りですもんねー」

なるほど、遊びたいってことね。お金は前にカードを売った金でだいぶ多く持つてるし、仕送りもまあまああるし……ってことで精霊3人にはしつかりとお金を手渡している。

「アレ？マハードとマナはどうした」

「マハードさんは調べることがあるって外へ出て行きました。マナさんはよく分からないです」

そういえば、マナって今日のコスプレデュエルに出るのかな？ああ、また面倒なことになりそうだ。ドアを開けると、オシリスレッドの生徒達が忙しそうに作業している。俺はライイエローだし、特にやることもないから屋台の協力はしてないけど。とりあえず食堂に降りて見る。すると衣装がその辺に並べられていた

「お、秋！おはよー！」

「十代か、おはよう」

色々と試着するレッドの生徒達。楽しいか？コスプレ

「秋もなんかやるうぜー！」

「朝っぱらから元気だな……ていうか、お前それ何のコスプレだ」

「なんか、色々と試着しているうちに何が何だか……」

アホか……って、ん？

「これは・・・」

開いていない箱を手にとった。俺宛の衣装？名前は・・・藤原？藤原って雪乃か？

「あ、それ雪乃が秋に渡してくれって言ってたぞ」

「は？」

とりあえず開けて見る。そこにあるのは希望皇ホープの衣装だった。ご丁寧に剣まである。剣はこれ・・・ゴムか？

「すつげえ！希望皇ホープの衣装じゃん！」

「雪乃の奴、ホープのカードを貸せて・・・こういうことか」

俺一応、ライイエローのはずんだけどな・・・まあ、イエローの行事に参加する予定がないって言ったからだろうか。ご丁寧に別の雪乃とツァンの衣装も用意されている。それにしても、フルフェイスなんだな。希望皇ホープも顔が見えないようなマスクがある。ツァンのはノースウエムコだし、雪乃のこれは・・・ルインか？

「はぁ・・・着ないと多分怒るだろうな、後で着るとしよう」

.....

しばらくして、朝9時・・・学園祭がスタートした。とはいったも



の、レッド寮ではまだまだ準備中。俺はホープの衣装を着る。甲冑も軽い素材で出来ているし、そこまで重くないが・・・これ、すげえ完成度だな

「秋？」

「ん？明日香か」

「ホープ・・・よね、どう見ても」

突っ込まないでくれ明日香。俺だってコレ好きで着てるんじゃないんだから。しばらくすると、恥ずかしそうにしているノースウエムコと妖艶な雰囲気を漂わせるルインが登場した。

「あら秋、よく似合ってるわよ」

「ははは・・・雪乃、お前こういう趣味？」

「違うわ。今日はお祭りよ？たまにはこういうのもありかと思ってるほどね。まあ、二人とも良く似合っているし、いいんじゃないか？可愛いし」

「ふむ、二人ともなかなかだね・・・明日香、君もやはり着替えてくるといいよ」

「嫌よ！私オベリスクブルーだし」

「あら明日香、こういうお祭りは楽しんでこそよ？着替えもあることだし、ね？」

なんだかんだ吹雪と雪乃、そして翔たちにも丸めこまれ明日香は着替えに行った。やれやれ・・・ん？なんだか遠くから凄いい音が聞こえてくるんだが・・・何と言うか、何かが駆けてくるような・・・  
って、あれは！

「おーにーいーちゃん！」

「り、凜！？ぐぼあ！」

突進し、俺に抱きつく凜。ゆ、雪乃・・・ムーンバリアは、ないのか・・・

「残念ながらムーンバリアは無理よ」

「ですよ・・・」

「お前、どうしてニコニコ」

「えへへ、ホームページで一般参加者の応募して、見事当選したの！皆さんお久しぶりです！」

「お、凜じゃん！」

「久しぶりッス！」

みんなでぎゃいぎゃい騒ぐ。それにしても・・・

「凜、お前よくここの場所が分かったな」

イエローやブルーの出し物はもつと開けた場所でやってるから、てつきり迷子になると思っていたんだが

「うん、ちょっと迷いそうだったけど、レッド寮の場所をその辺の人に聞いて、走ってきたの。そしたらお兄ちゃんの匂いがしたから」

犬か、お前は

「秋君、君の妹かい？」

「ああ・・・凜、こっちは明日香の兄の吹雪さんだ」

「よろしくね、まさか秋君にこんな可愛い妹がいるとは思わなかったよ」

「初めまして、武藤凜です。いつも兄がお世話になってます」

と、丁寧に辞儀。吹雪もにこやかに握手する

「いやいや、僕がお世話になってるし」

「・・・言っておくが、凜に手を出したら訴えるからな」

「わ、わかってるぞ」

それにしても、相変わらずというかなんというか。待てよ？

「凜、母さんから許可は？」

「もらってきた！」

「そうか、ならいい・・・」

前のレイの件があったからな。この世界の小学生は何でも行動あるのだろうか

「それにしてもお兄ちゃんホープなんだ・・・カッコいい」

「そうか？というか、フェイスはマスク付けてるのによくわかったな、俺だって」

「だからお兄ちゃんの匂いならすぐわかるよ」

・・・聞かなかったこと、にしたいよ、まったく。

「そついえばここって何するの？コスプレ広場？」

「いや、コスプレデュエルだよ。コスプレしてる連中が集って闘うんだ」

「へー・・・雪乃さんとツアンさんも似合ってるなあ・・・ねえ、私もコスプレしたい！」

「言つと思つたわ。ちゃんと用意があるの」

・・・用意がいいな、雪乃って、2着？

「ピケルとクラン、どっちがいい？」

「んー・・・じゃあピケルでー！」

「はい、じゃあ秋の部屋の鍵渡しておくから、着替えてらっしゃいな」

「ありがとうございます！」

そう言っつて鍵を持って部屋へ入って行った。それにしても

「雪乃、お前急に凜と仲良くなったな」

「うふふ、女の秘密よ」

そうですか・・・っと、あれは

「おねーちゃん！」

「あら、桜」

桜ちゃんと、ご両親だ。

「元気だったかい桜」

「ええ、お父様」

「あら、秋君の姿が見えないけど・・・」

「うふふ、目の前にいるじゃない」

「どづも・・・」

ホープのマスクを外して挨拶する俺。コレ、取り外し簡単にできるな。

「驚いた！久しぶりだね」

「カッコいいじゃない。うふふ・・・」

「お兄ちゃんかつこいいー！」

今年から一般参加者もなかなか多いという話を聞いたが、やはりこの学園も人気なんだろうな。このエリアは人があまり来ないはずなんだが、それでも一般客などもコスプレをしにここに来てるし

「お兄ちゃん！どう？」

黒い髪の毛のピケルが歩いて来た。

「なかなか似合っているな」

「えへへ〜」

「そつえば母さんどうした？」

「お母さんは家で留守番してるよ。船乗るの嫌いだから」

そつえばそうだったな。母さんは船嫌いだし

「さて、そろそろ準備ができたな」

結構集まってるなあ・・・

「さあ！デュエルだぜ！」

「とりあえず誰が出る？」

「そうだな・・・秋！デュエルだ！」

「また俺か」

十代とこのところよくやってる気がするのは気のせいか？

「あ、十代さんたち見つけた！」

「ん？レイ！」

やっぱりお前も来たのか・・・はあ

「久しぶりね、レイ・・・元気だったかしら？」

「ほんと、久しぶり」

「はい！雪乃さん、ツアンさん！って、あれ？秋さんは？」

「貴方の隣にいるでしょ？」

「へ？」

やはりこのマスク、外したままの方がいい気がしてきたな。

「よう、久しぶりだな」

「秋さん！かつこいい・・・お久しぶりです！」

「ねえお兄ちゃん・・・この子、誰？」

と、俺をジト目で睨む凜・・・俺、何かしたか？心なしか、レイの俺を掴む腕の力が若干強い気がするが

「・・・こいつは早乙女レイ。小学5年だがちょっとした事情でこの学園にいたことがある。レイ、こっちは俺の妹の凜だ」

俺が言うと、互いに笑顔で握手している。

「武藤凜です。よろしく早乙女さん」

「早乙女レイです。よろしく凜さん」

・・・一瞬、火花が見えたのは気のせいだろうか？と・・・そろそろデュエルの時間だな。誰と誰がやるんだろうか

「さて、誰か俺とデュエルだー！」

我慢できない十代がフィールドで騒ぐ。すると女の子二人が現れる。

「はいはい！私デュエルしたいですー！」

「私もよろしくお願いします」十代さん『」

「え・・・マナに、ミラ！？」



マナはそのままだが、ミラは制服を着ている。驚いているのは雪乃とツァンだ。そして十代も驚いている。そして周りの男子はマナを見て大興奮だ。さつきトメさんの残念なブラック・マジシャン・ガールを見て落胆してたからな。

「2体1ではあまりよろしくありませんし・・・マス・・・こほん、武藤秋さんとのタッグデュエルなどいかがでしょうか？」

「タッグデュエル・・・おっし！いいぜ！」

「やれやれ・・・ならばこの希望皇ホープこと、武藤秋と」

「遊城十代！」

「そのデュエル受けて立つ！」

俺達は二人同時にデュエルディスクを構える。

「ならば、ブラック・マジシャン・ガールことマナ！」

「・・・そして私、ミラ」

「行かせていただきます！」

二人も同じようにデュエルディスクを展開する。

デュエルはTF5のルールを基本とすることにします

「  
「  
「  
「  
決闘<sup>デュエル</sup>  
「  
「  
「

学園祭(前編)(後書き)

というわけで、秋&十代VSマナ&ミラです

次回もお楽しみに

学園祭（前編2）（前書き）

というわけで、デュエルです

秋「今日の最強カードは・・・『減量』だ」  
モンスターのレベルを2つ下げる

・・・どこの降格処分でしょうかね  
アニメのゼアルで闇川との戦いでドドドウォリアーのレベルを2つ  
下げました

## 学園祭（前編2）

Side秋

「「「決闘<sup>デュエル</sup>！」」」」

武藤秋・遊城十代 LP8000

ミラ・マナ LP8000

ターンの順番は十代 マナ 俺 ミラという順番。俺、じゃんけん弱いなあ・・・

「俺の先攻ドロー！俺は手札から『E・HEROバブルマン』を準備表示で召喚！」

E・HEROバブルマン ATK800/DEF1200

「バブルマンの効果！自分たちのフィールドにこのカード以外のカードがない場合、俺はカードを2枚ドローする！そしてカードを2枚伏せ、ターンエンド！」

初手としては悪くないな・・・さて、マナとミラはどつ出る？

「私のターンです！『ドロー！』」

ドローする瞬間に一緒に叫ぶ男子。うるさい・・・

「うーん・・・私は手札から『マジシャンズ・ヴァルキリア』を召

喚！」

マジシャンズ・ヴァルキリア ATK1600/DEF1800

「バトルです！マジシャンズ・ヴァルキリアでバブルマンを攻撃！  
行きますよ？」マジック・イリュージョン！」

本当にうっとうしいな・・・叫んでる男子の連中。そして破壊されるバブルマン

「つく・・・この瞬間『ヒーロー・シグナル』を発動！デッキから

『E・HEROスパークマン』を攻撃表示で召喚！」

E・HEROスパークマン ATK1600/DEF1400

「えへへ、甘いですよ？速攻魔法発動！『デイメンション・マジック』！自分フィールドの魔法使い族を生贄にして、手札からモンスターをさらに特殊召喚しちゃいます！私を召喚！」

ブラック・マジシャン・ガール ATK2000/DEF1700

「ブラック・マジシャン・ガール！すごい！ブラック・マジシャン・ガールが二人！」

翔が興奮気味である。そしてカイザーたち辺りがブラック・マジシャン・ガールは遊戯しか持っていないはずだと疑問に思っているのだ。やれやれ

「バトルフェイズは終わっていません！デイメンション・マジックの効果でスパークマンを破壊し直接攻撃！行きます『黒・魔・導・

爆・烈・波』！」

「うわっ……」

「ちい……！」

武藤秋・遊城十代 LP8000 LP6000

「カードを2枚伏せてターンエンドです！」

「いいぞー！ブラック・マジシャン・ガール！」

「流石だー！」

「どうもどうもー」

はあ、マナの奴、どうやら最初からこの日のためにデッキ調節をしていたようだ。ま、俺も全力で行かせてもらっけどな

「いくぞ、俺のターンドロ……俺は手札から『死者転生』を発動！手札1枚を墓地へ送ることで、墓地にいる『E・HEROSパークマン』を手札に加える！」

「あれ？それって十代さんのカードですよね？」

「タッグルールではフィールドは全て共有だ。その場合、墓地のカードや伏せたカードもそのターンのプレイヤーが発動できる。相手ターンのカウンターも、そのプレイヤーの前のターンのプレイヤーが発動することが出来る」

というのがTFのルールだからな

「なるほどなるほど、では続きをどうぞ」

「俺は手札から『ゴブリンドバグ』を召喚！」

ゴブリンドバグ ATK1400/DEF0

「そして効果発動！ゴブリンドバグの召喚に成功した時、自分の手札のレベル4以下のモンスターを特殊召喚できる！『E・HEROスパークマン』を召喚する！」

E・HEROスパークマン ATK1600/DEF1400

「行くぞ！レベル4のゴブリンドバグと、レベル4のスパークマンをオーバーレイ！2体のモンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築！」

4x2

「エクシーズ召喚！現れる！『No.39希望皇ホープ』！」

No.39希望皇ホープ ATK2500/DEF2000

Sideレイ

久しぶりに会った皆さんは相変わらず元気そうだった。そして秋さんもコスプレしてるけどカッコいいし 会えてうれしいなあ・・・でも、妹の凜さんだけは、なんとというか負けられない存在って感じ



がする・・・それにしても

「雪乃さん、エクシーズ召喚ってなんですか？」

「エクシーズ召喚は同じレベルのモンスターを重ねることで召喚する特別な召喚方法よ」

へえー・・・シンクロ以外にもそんなのを持つてるんだあ

「そういえばレイ、あとで衣装貸してあげるから貴方も着替えなさいな」

そう言っつて渡されるのは・・・黒魔導士クランの服？

「鍵ははい、秋の部屋で着替えるといいわ」

「はい・・・でも、今はデュエルを見ます」

そういつて再び僕はデュエルステージへ眼を向ける。

「バトル！希望皇ホープでブラック・マジシャン・ガールに攻撃！  
『ホープ剣スラッシュ』！」

「人でなしー！」

「大人げないぞー！」

主に男子生徒からヤジが飛ぶ。まあ、ブラック・マジシャン・ガールは人気だから仕方ないけど

「大丈夫、大丈夫 畏発動『攻撃の無力化』！攻撃を無効にしてバトルを終了しまーす」

「うち・・・ならカードを2枚伏せ、ターンエンド！」

「やっと私のターンですか・・・マナさんの後にやるのはちよつと気がひけますね。ドロー！」

ミラと名乗るあの人・・・あんな人、オベリスクブルーにいたかなあ？

「私は手札から『久遠の魔術師ミラ』を召喚します」

久遠の魔術師ミラ ATK1800/DEF1000

「ミラの召喚に成功した時、相手フィールドの伏せカードを1枚確認できます。マス・・・じゃない、秋さんの伏せた左のカードをオーブン！」

開かれるのは重力の網・グラヴィティ・バインド・・・このカードは別に見られても意味がないかも。でもあのミラって人と久遠の魔術師ミラってすごく似てる？

「あやや・・・厄介なカードですね。『サイクロン』で破壊しておきましょう」

破壊されるグラヴィティ・バインド・・・でもなんでグラヴィティ・バインドなんだろう

「秋のエクシーズモンスターはレベルではなく、ランクと定められ

ているわ。つまりレベルの定義がない。それによってあのカードはエクシーズモンスターの前では無意味になるというわけ」

「つ、つまり・・・レベル制限B地区なんかを使って相手を守備表示にしても、エクシーズモンスターが自分の場にいるとそのエクシーズモンスターは関係なく使えるってこと!？」

「す、すごい・・・」

「まあ、秋のデッキは今回ホープに合わせてエクシーズデッキなんでしょうね。面白いのが見れると思うわ」

と、ツアンさんは見ながらいうけど・・・

「ツアンさん、すごく似合っていますね・・・ノースウエムコ」

「う、うるさいわね・・・僕だって恥ずかしいのよ」

つと、デュエルの方を見損ねてた。

「さて・・・私は手札から魔法カード『死者蘇生』を発動します。

戻ってきてください、マジシャンズ・ヴァルキリア!さらに装備魔法『ワンダーワンド』をブラック・マジシャン・ガールに装備!」

マジシャンズ・ヴァルキリア ATK1600/DEF1800

ブラック・マジシャン・ガール ATK2000/DEF1800

ATK2500/DEF1800

「バトルです!ブラック・マジシャン・ガールで希望皇ホープに攻

撃です！」

「同士撃ちを狙った！？多少観客からブーイングが来てるけど、どうして!？」

「別に同士撃ちを狙ってませんよ？マナさんの罠カードオープン！『マジシャンズ・サークル』！互いのプレイヤーはデッキから攻撃力2000以下の魔法使い族をフィールドに特殊召喚します！って、この場合どうなるんですか？」

「互いのプレイヤーというのは、この場合この全てのプレイヤーが適用される。よって、俺、十代、マナ、ミラ……この4人のプレイヤー全員が適用される」

「へー……そうなんだ。でも十代さんってHEROデッキでしょ？魔法使い族いないんじゃない？」

「俺のデッキに魔法使い族はいないぜ」

「俺は『ガガガマジシャン』を特殊召喚する」

「私はもう一体のマジシャンズ・ヴァルキリアを召喚」

「では私はチューナーモンスター『フレイムベル・マジカル』です」

ガガガマジシャン ATK1500/DEF1000

マジシャンズ・ヴァルキリア？ ATK1600/DEF1800

フレイムベル・マジカル ATK1400/DEF200

ちゅ、チューナー！？ミラって人はまさか、シンクロ召喚を！？

「ミラのデッキ、もしかして」

「ええ、魔法シンクロね」

「え、でも・・・この学園でシンクロ召喚するのは秋さんだけだ  
って」

「まあ、彼女には事情があるのよ」

事情？どんな事情なんだろう

「バトルフェイズが逆戻りします。バトルを再開し、ブラック・マジシャン・ガールでガガマジシャンを攻撃！『黒・魔・導・爆・烈・波』！」

相変わらずの野次馬さん達・・・

「ホープの効果を発動！オーバーレイユニットを1つ取り除き、モンスターへの攻撃を無効にする！『ムーンバリア』！」

ホープがガガマジシャンを守るように背中への羽根を展開する。それによってブラック・マジシャン・ガールの攻撃が防がれた。そして防がれたことでまた秋さん達にブーイング・・・なんだかやりづらそうだなあ

「ここで追撃してオーバーレイユニットを消すのもいいんですが・・・狙いは違うように見えますね。私はカードを1枚伏せ、ターンエ

ンドー！」

「俺のターンンドロー！『強欲な壺』で2枚ドロー！って言ってもなあ……」

どうしたんだろう……十代さんが困ってる？

「……この状況で、十代の坊やが仮に融合召喚したとしても攻撃が出来ないのよ」

「攻撃が出来ない？」

すると、りよ、亮様！？それに三沢さんとえーと、クロノス先生がやってきた。

「マジシャンズ・ヴァルキリアにはあのカードが表側表示で存在する限り、相手は表側表示で存在する他の魔法使い族モンスターを攻撃対象に選択する事はできないという効果がある。つまり、その効果を持つモンスターが2体いるということは……片方を選択してももう一方の選択することが出来ないの効果が引っ掛かり、結局どちらも攻撃できない」

な、なるほど……ロックしたうえであの攻撃力のモンスター達……  
すこい

「十代、このターン無理に攻撃する必要はない。墓地にはあのカードがある」

「ん？そっか！そういうことか……なら問題ないぜ。俺はカードを2枚伏せて『E・HEROクレイマン』を守備表示で召喚！ター

ンエンド！」

十代さんは守備を固めた？場にはレベル4のモンスターが2体だし・・・オーバーレイするのかな？

「私のターンですね！『ドロー』！うーん・・・手札が悪いなあ『強欲な壺』を發動して2枚ドローしますねー！2枚ドロー！」

ブラック・マジシャン・ガールの手札はどうなんだろう。この2枚で逆に秋さん達を追い詰める術があるのかな

「あは いいカードが来ました！私は速攻魔法『減量』を發動します！このカードは自分フィールドのモンスターのレベルを2つ下げることができます！マジシャンズ・ヴァルキリアのレベルを2つ下げます！」

4 2

「シンクロか！ならさせないぜ！畏發動『ヒーローブラスト』！自分の墓地のE・HEROと名のついた通常モンスターを手札に戻すことで、その戻した攻撃力以下のモンスターを破壊する！俺は手札にスパークマンを戻すことで、レベル2のマジシャンズ・ヴァルキリアを破壊する！」

そっか！さっきムーンバリアでガガマジシャンを守った本来の意味は、スパークマンを墓地に戻すことに意味があったんだ！

「甘いですよ ミラちゃんの伏せた畏發動！『魔宮の賄賂』！魔法、畏の發動を無効にして、貴方は1枚ドロー出来ます！」

「つく！ドロー！」

これでレベル2のマジシャンズ・ヴァルキリアは生き残った……つまり、シンクロ召喚が来る！

「レベル2のマジシャンズ・ヴァルキリアとレベル4のフレイムベル・マジカルをチューニング！」

2 + 4 = 6

「魔術の星を司る力よ、今こそ嵐となりて魔力を刈り取れ！シンクロ召喚！いでよ！『マジックテンペスター』！」

マジックテンペスター ATK2200/DEF1400

現れたのはカマを持った女魔導士……観客の人達はマジシャンズ・ヴァルキリアがいなくなつて残念そうにする人と、シンクロ召喚に驚く人に別れた。

「マジックテンペスターの効果です！このカードの召喚成功時、魔力カウンターが乗ります！」

魔力カウンター 1

「そしてそして！チューナーモンスター『アーケイン・ファイロ』を召喚します！」

アーケイン・ファイロ ATK1000/DEF400

「レベル4のマジシャンズ・ヴァルキリアにレベル2のアーケイン・ファイロをチューニング！」



ま、またチューニング！？そしてレベルは6・・・同じモンスターを召喚するのかな？

「洗礼されし闇から生まれた光の力！今こそその魔導に宿りて輝きを見せよ！シンクロ召喚！いでよ『エクスプローシブ・マジシャン』！」

エクスプローシブ・マジシャン ATK2500/DEF1800

出てきたのは白い魔導の服を着た男の人。攻撃力は2500・・・ホープと並んだ！これでロックは解けてしまったけど、場には2体のシンクロモンスターとブラック・マジシャン・ガールと久遠の魔術師ミラ・・・これだけのアタッカーがいるんじゃ、防ぐのは難しい

「さてさて、お二人に問題です。この最後の手札、何だと思えます？」

「え？」

十代さんが首をひねる。秋さんは呆れた様子だけ・・・

「・・・恐らく、ドロー強化だな？顔がこの上なくニヤけてるぞ。

テンペスターを召喚したんだからな」

「正解ですっ！『命削りの宝札』を発動して5枚になるようにドロー！5ターン後全て捨てます！」

こゝでドロー強化・・・それにしてもテンペスターの効果って一体？

「テンペスターの効果です！手札を任意の枚数捨て、その分だけカウンターをテンペスターに乗せることが出来ます！私は手札1枚を墓地へ送り・・・カウンターを2にします」

魔力カウンター2

カウンターが増えたけど、何をするつもりだろう？

「本来、マジックテンペスターの効果はその乗ったカウンターを外した数×500ポイントのダメージを与えます。しかし、今回使うのはエクスプローシブ・マジシャンの効果です！このカードは自分フィールドの魔力カウンターを2つ取り除くことで、相手フィールドの魔法罫を1枚破壊できます！」

破壊される秋さんの伏せカード・・・は、リビングデットの呼び声だった

「バトルの前に、装備魔法『魔術の呪文書』をブラック・マジシャン・ガールに装備！攻撃力を700ポイントアップします！」

ブラック・マジシャン・ガール ATK2500/DEF1800  
ATK3200/DEF1800

「えへへ、バトルです！テンペスターでクレイマンを攻撃！『ダーク・ストーム・マジック』！」

破壊されるクレイマン。ただ攻撃はこれだけではないはず

「続けて、ガガガマジシャンにミラで攻撃！『久・遠・魔・導』！」

久遠の魔術師ミラがガガガマジシャンを破壊する。

「そして！エクスプローシブ・マジシャンで希望皇ホープを攻撃！  
『シャイニング・プラスター・マジック』！」

え！？ここで同士撃ち！？そうか、オーバーレイユニットを使わせるか、それとも同士撃ちにするのか・・・秋さんの考えによってきまる

「ホープの効果発動！オーバーレイユニットを取り除くことで、その攻撃を無効にする！『ムーンバリア』」

「しちやいましたね！この瞬間、ブラック・マジシャン・ガールで希望皇ホープを攻撃します！が、しかし！ホープはオーバーレイユニットがない状態で攻撃選択された時そのまま破壊されます！」

ええ！？ホープってそんなデメリット持ってたの！？それじゃあフィールドはがら空きに・・・！

「ブラック・マジシャン・ガールで直接攻撃！『黒・魔・導・爆・烈・波』！」

「ぐあああああつー！」

武藤秋・遊城十代 LP6000 LP2800

ライフを大きく削られちゃった！ブラック・マジシャン・ガールの力もそうだけど、ミラさんの伏せたカードを上手く使ってる・・・すごいコンビネーション

「カードを1枚伏せ、ターンエンドです！」

「やるじゃないかマナ・・・正直驚いたよ」

「えへへ、勝ったら約束守ってくださいねー！」

約束？何の約束をしているんだろう

「そうになると余計に負けられないな・・・俺のターンドロー！」

頑張って秋さん！

学園祭（前編2）（後書き）

ってなわけで今回ライブは互いに80000です  
このほうが面白いかな？と

では、次回もお楽しみに

学園祭（中編）（前書き）

というわけで、これで書き溜めというか、今日書きあげたのが最後かな・・・別の小説更新しないと読者の人に怒られる・・・頑張ります

秋「今日の最強カードは『ジェムナイト・パール』だ」

テキストなどない

まあ、シンクロでいえば大地の騎士ガイアナイト的役割の彼・・・彼の需要が大きくなるのははたしていつなのだろうか・・・

## 学園祭（中編）

武藤秋・遊城十代 LP2800

マナ・ミラ LP8000

Side秋

だいぶ大きく削られたなあ・・・さて、ここから俺も巻き返さないとな。とは言ったものの、今の手札じゃあの2人のモンスターを乗り越えるのは難しい。が・・・引いたカードは

「強欲な壺を発動してさらに2枚ドロー！」

来たカードはいいカードだが、マナの伏せカードも気になるところだ。だがここは臆せず攻める

「俺は手札から『死者蘇生』を発動し、マジシャンズ・ヴァルキリアを召喚！」

マジシャンズ・ヴァルキリア ATK1600/DEF1800

「さらに、手札から『TGワウルフ』を特殊召喚する！」

TGワウルフ ATK1200/DEF0

「このカードはレベル4以下のモンスターの特殊召喚に成功すると特殊召喚できるカードだ。さらに、俺も同じく『命削りの宝札』を発動。ハンドレスから5枚ドロー・・・5ターン後全て捨てる」

来たカードはいいカードだな。これならいける。

「俺は手札から『切り込み隊長』を召喚！」

切り込み隊長 ATK1200/DEF400

「さらに切り込み隊長の効果により、俺は『ゴゴゴレム』を特殊召喚！」

ゴゴゴレム ATK1800/DEF1500

「さすがですね！それだけのモンスターをすぐに召喚できるなんて」

「さあ行くぜ、レベル3のTGワウルフと切り込み隊長をオーバーレイ！2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！エクシーズ召喚！現れる『No.17リバイス・ドラゴン』！」

No.17リバイス・ドラゴン ATK2000/DEF0

「そしてさらに！レベル4のマジシャンズ・ヴァルキリアとレベル4のゴゴゴレムをオーバーレイ！2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！エクシーズ召喚！現れる『ジエムナイト・パール』！」

ジエムナイト・パール ATK2600/DEF1900

手札もいい感じだし・・・攻める！

「リバイス・ドラゴンのモンスター効果！オーバーレイユニットを1つ取り除くことで、攻撃力を500ポイントアップさせる！」



リバイス・ドラゴン ATK2000 / DEF0 ATK2500  
/ DEF0

「そして手札から『鬼神の連撃』を発動！自分フィールドのエクシ  
ーズモンスターを選択肢、そのエクシーズ素材を全て墓地へ送る。  
それによりそのモンスターはこのターン2回の攻撃が出来る！俺が  
選択するのはジェムナイト・パールだ！バトル！ジェムナイト・パ  
ールでエクスプロード・マジシャンに攻撃！『パールラッシュ』！」

マナ・ミラ LP8000 LP7900

よし、攻撃は通っている！これならいける・・・！！

「続けてジェムナイト・パールでマジックテンペスターを攻撃だ！  
『パールラッシュ』！」

マナ・ミラ LP7900 LP7500

「さらに、リバイス・ドラゴンで久遠の魔術師ミラを攻撃！『リバ  
イス・ストリーム』！」

「きゃああああああっ！！」

マナ・ミラ LP7500 LP6800

「大人げないぞー！」

「相手女の子だろうがー！手加減しろー！」

こっちだつて必死だから手加減なんてできるかつ！

「カードを2枚伏せ、ターンエンド！」

「私のターンです！ドロー・・・うん、フィールドがブラック・マジシャン・ガールだけになっちゃいましたね。『強欲な壺』を發動し、カードを2枚ドローします」

ミラの手札はこれで4枚か。ここからどう仕掛けてくる？

「私は手札から『賢者の宝石』を發動します！自分のフィールドにブラック・マジシャン・ガールが存在する時、デッキ、手札のどちらから『ブラック・マジシャン』を特殊召喚できます！私はデッキから『ブラック・マジシャン』を特殊召喚！」

ブラック・マジシャン ATK2500/DEF2100

登場する・・・マハードじゃないな、あれ。一応ブラック・マジシャンだけど。無表情だし、俺の持っていたブラック・マジシャンか。

「さらに！手札から『一族の結束』を發動！私達の墓地には魔法使い族だけ！よって800ポイント攻撃力をアップさせます！」

ブラック・マジシャン ATK2500/DEF2100 ATK  
3300/DEF2100

ブラック・マジシャン・ガール ATK3200/DEF1800  
ATK4000/DEF1800

「おいおいおい・・・」

ブラック・マジシャン・ガールが攻撃力4000で・・・

「行きますよ！バトル！ブラック・マジシャンでジェムナイト・パールを攻撃！『黒・魔・導』！」

「畏発動！『プライドの咆哮』！戦闘ダメージ計算時、自分のモンスターが相手モンスターより低い場合、その攻撃力の差分のライフポイントを払って発動する！ダメージ計算時のみ、自分のモンスターの攻撃力は相手モンスターとの攻撃力の差の数値+300ポイントアップする！俺はブラック・マジシャンとジェムナイト・パールの攻撃力の差分！つまり、700ポイントを払い、攻撃力をその分プラス300ポイントアップさせる！」

武藤秋・遊城十代   LP2800   LP2100

ジェムナイト・パール   ATK2600/DEF1900   ATK  
3600/DEF1900

「迎撃しろ！ジェムナイト・パール！『パールラッシュ』！」

マナ・ミラ   LP6800   LP6500

「でも、ブラック・マジシャン・ガールの攻撃は残っています！そしてブラック・マジシャン・ガールはブラック・マジシャンが墓地にあると攻撃力が300ポイントアップします！ブラック・マジシャン・ガールでリバイス・ドラゴンを攻撃！『黒・魔・導・爆・烈・波』！」

ブラック・マジシャン・ガール   ATK4000/DEF1800

ATK4300/DEF1800

「ぐあああああつ！」

武藤秋・遊城十代 LP2100 LP300

「カードを1枚伏せ、ターンエンドです！」

「つく！もう後がないぜ・・・俺のターンドロ！行くぜ！俺達の手を見せてやる！手札から『E・エマーゼンシーコール』を發動！デッキから手札に『E・HEROエアーマン』を加えるぜ！」

エアーマン！流石、ここで空気を読める男に・・・

「残念でした！それは読んでいましたよ！伏せカードオープン！『強烈なはたき落とし』！手札に加えたエアーマンは墓地へ送ってもらいます！」

「なあ！？でもまだだ！『戦士の生還』！を發動！エアーマンを手札に戻し、エアーマンを召喚するぜ！」

つく、マナのやつ。俺じゃなくて十代に対策を入れたのか・・・！

E・HEROエアーマン ATK1800/DEF300

「効果発動！このカードの召喚に成功した時、自分のデッキから『HERO』と名のつくモンスターを手札に加える！俺は『E・HEROネクロダークマン』を手札に加える！さらに『融合』を發動！手札のネクロダークマンとフィールドのエアーマンを融合！現れる！『E・HERO Great TORNADO』！」

E・HERO Great TORNADO ATK2800/DEF2200

「Great TORNADOの効果発動！このカードの召喚に成功した時、相手フィールド上のモンスターの攻撃力と守備力を半分にする！」

ブラック・マジシャン・ガール ATK4300/DEF1800  
ATK2150/DEF900

「さらに！『命削りの宝札』を発動して5枚になるようにドロ！『二重召喚』を発動！そして墓地のネクロダークマンの効果発動！このカードが墓地にある時、手札から一度だけE・HEROの生贄が必要なくなる！俺は『E・HEROエッジマン』を召喚！」

E・HEROエッジマン ATK2600/DEF1800

「うええええ！ずるいよお！マス・・・じゃない、秋さん！十代君にエアーマンたちを渡していたの!？」

「定期的にレンタルしていたからな・・・こいつが」

まあ、こんなデュエルになるとは思ってたけど、何枚か持っているからって前に十代にあげた・・・否、押しつけたんだよな。押しつけておいたかいたがよかったよ。

「わるいなマナ！行くぜ、バトルだ！エッジマンでブラック・マジシャン・ガールを攻撃！『パワー・エッジ・アタック』！」

「くううう！でもブラック・マジシャン・ガールが破壊されて魔術の呪文書が墓地に送られるから、ライフを1000回復！」

マナ・ミラ LP6500 LP6050 LP7050

「さらに！Great TORNADOでダイレクトアタックだ！  
『スーパーセル』！」

マナ・ミラ LP7050 LP4250

「そして！ジェムナイト・パールで攻撃だ！『パールラッシュ』！」

「きゃああああああああっ！！」「」

マナ・ミラ LP4250 LP1650

大幅にライフを削った。流石エアーマン・・・一度墓地に落ちても、そのまままた出てきてここまで場を荒らしていくとは・・・恐ろしい

「兄貴酷いよー！せつかくのブラマジガールがあー！」

「そっだそっだー！」

「手加減しろよー！」

おいおい、さっきのライフ差をここまで縮めたことに驚けよ・・・  
ったく

「気にすんな十代・・・」

「おう、カードを2枚伏せてターンエンドだ！」

これで互いのライフの差は随分と縮まった……だが俺達のフィールドには圧倒的にモンスターが多い……どうするつもりだ？

「私のターンです！まだまだ諦めないよ？ドロー！」

「畏発動！『砂塵の大竜巻』！『一族の結束』を破壊するぜ！」

「うう……でも、来ました！『天よりの宝札』！互いのプレイヤーはカードを6枚になるようにドローしちゃいます！」

ここまで来て6枚ドローか！

「えへへ、私は手札から『古のルール』を発動します！レベル5以上の通常モンスターを

特殊召喚！来て下さいお師匠様！『ブラック・マジシャン』を召喚！」

ブラック・マジシャン ATK2500/DEF2100

「ここでブラック・マジシャン！？」

「さらに、死者転生を発動！手札1枚をコストに、私は『ブラック・マジシャン・ガール』を手札に戻します！そして『師弟の絆』を発動！自分フィールドにブラック・マジシャンがいる時、『ブラック・マジシャン・ガール』を特殊召喚できます！」

ブラック・マジシャン・ガール ATK2000/DEF1800

ATK2300 / DEF1800

「さらに！手札から魔法カード『黒・魔・導・炸・裂』を発動！このターン、ブラック・マジシャンの攻撃力はブラック・マジシャン・ガールの攻撃力分アップしちやいます！」

ブラック・マジシャン ATK2500 / DEF2100 ATK  
4800 / DEF2100

「やつちやつてくさいお師匠様！ジェムナイト・パールに攻撃！  
『黒・魔・導・炸・裂』！」

「させないぜ！畏発動『燃える闘志』！相手フィールドに元々の攻撃力よりも攻撃力が高いモンスターが相手フィールドにいる時、選択したモンスターの攻撃力は倍になる！俺はジェムナイト・パールを選択！さらにもう一枚畏を発動だ！『立ちはだかる強敵』！このターン、manaはジェムナイト・パールしか攻撃できないうえ、強制的にバトルすることになるぜ！」

ジェムナイト・パール ATK2600 / DEF1900 ATK  
5200 / DEF1900

ジェムナイト・パールに炎が纏われ、ブラック・マジシャンたちの攻撃を受け止めた。

「反撃だ！『パールラッシュ』！」

攻撃が跳ね返されたことでブラック・マジシャンが消滅する

mana・ミラ LP1650 LP1250



「ブラック・マジシャンが墓地へ行きました。ブラック・マジシャン・ガールの攻撃力は300ポイントアップです」

ブラック・マジシャン・ガール ATK2300/DEF1800  
ATK2600/DEF1800

「ブラック・マジシャン・ガールが負けちゃうよ」

「ああ・・・」

と、お通夜状態になる男性チーム。だがマナとミラは笑顔だ。

「みんな！そんな顔しないで！私こんな楽しいデュエルできたんだから！いくよ！十代さん！秋さん！みんなも一緒にー！」『黒・魔・導・炸・裂・波』！」

ブラック・マジシャン・ガールがパールに攻撃を仕掛ける。だがパールはそれを跳ね返し、ガールは光に包まれた。

マナ・ミラ LP1250 LP0

試合終了。歓声が巻き起こる。はあ・・・疲れた。俺はへたり込んだ十代をそのままにし、同じように腰を降ろしたミラとマナの所に行った。

「お疲れさん。俺達の勝ちだな」

「うー・・・マスター達はやっぱり強いですね、惨敗です」

「あはは・・・これじゃあご褒美もナシですねー」

「残念ながらもな」

こいつらのご褒美というのは、一緒に寝たいというものだった。よくわからんが・・・

「じゃあ、私達からご褒美上げます」

「は？」

「え、あの・・・マナさん、本当にやるんですか？」

「もちろん！デュエルする前に言ったでしょ？」

話が見えない。するとマナとミラが急に立ち上がり俺のマスクを取り外した

「「チュ」「」

「・・・・・・・・・・は？」

「・・・・・・・・・・」

周囲が凍りついた。こいつら何をした？俺の頬に、キス・・・しなかつたか？今

「ウフフ、マスターはいつもお疲れですから！私達のご褒美ですよ！じゃ、私達は遊んできまーす！」

「し、失礼します！」

そういつてダツシユで逃げていく2人。おい、待て……この状況で俺を放置、だと？後ろを見ると、殺気だった男子達がいた。

「さあ、お前の罪を数えるツス……秋君」

「……オーケー……俺も腹をくくろう……かかって来いやあ  
！」

『ぶつ殺す！』

全員が襲いかかる。俺はとにかく手に持っていた2本のホープの剣でそいつらと戦った。うん、もうありえないくらい闘った。ゴムとはいえ、凄い威力のホープ剣スラッシュ……この後、雪乃とツァンが助けてくれたものの『後でお話しましょうね』という声が異常なまでに怖かったのは言うまでもない

しばらくして事態が沈静化した後、ピケルとクラン……つまり、凜といつの間にかコスプレしているレイが睨みあっていた。

「何やってんだあいつら」

「さあ？」

「私の方がお兄ちゃんのことを好きです！」

「ううん！僕のほうだもん！」

意味がわからん二人の喧嘩

「雪乃、これどういうこと?」

「まあ、女の戦いよ・・・黙って見てみましょう?」

「え?ああ・・・」

怖い、あの周囲の睨みあい・・・ピケルとクランのにらみ合いのはずなのに、背後にあって真紅眼の不死竜とトラゴエディアが見えるんだろう・・・すごく怖い

「・・・・・・・・」

三沢が幸せそうに2人を見ている

「三沢、手を出したら通報だぞ?」

「な、何の話だ!」

慌てる三沢。すると、どつやらデュエルをすることになったらしい

「勝負よ!」

「しよーぶ!」

ピケルVSクランか・・・面白そうだ。

S i d e レイ

凜さんがお兄ちゃんのことを好きなのか？と聞かれ、慌てて口ごもると、凜さんはやりと笑っていた。

「悪いけど、お兄ちゃんのことを一番知っているのは私・・・雪乃さんとツアンさんよりもね。私はいつかお兄ちゃんのお嫁さんになるの」

「・・・む！僕だって秋さんが好きだもん！お嫁さんになるのは僕だよ！布団で一緒に寝たし！」

「な、なんですって・・・ふ、ふん！私なんて手作りのお弁当食べてもらったのよ！」

「なっ・・・でも僕、デッキももらったし、キスもしたもんね！」

「ふん！私だってキスなんてとっくにしてるわ！私だってお兄ちゃんにカードもらってるもん！」

互いににらみ合いが続く。このままじゃ拉致があかない・・・！

「デュエルよ（だ）！お兄ちゃん（秋さん）がどちらに相応しいか！」「

こうして僕達はデュエルすることになった。周りの視線が痛かったのはなんでだろう？

「逃げるなら今のうちだよ」

「それはこっちのセリフだよ……」

「デュエル  
決闘！」

学園祭(中編)(後書き)

というわけで、次は凜VSレイです  
お楽しみに！

## 学園祭（中編2）（前書き）

というわけで、レイVS凛です

えー・・・最近感想が増えてくれるのは非常に嬉しいのですが  
できれば、できれば小説の感想も欲しいです。指摘をくれる〃小説  
を読んでくださっているとと思うので・・・

まあ、無理にとは言いません。これを思ったのはこのサイトで最近  
指摘しかくださらない方が多くてちよつと寂しいなー・・・なんて  
思ったり

まあ、アストラルもビツクリのタクティクスの私がそんなことを言  
える立場でもないのですが・・・ま、お暇でしたら指摘の他にも感  
想を書いてくれると嬉しいです

あとはデツキレシピのリクエストも受け付けています

アイツのあのデツキはどんな構想なんだ？とか、そんな感じで

ではでは、今日の最強カードです

秋「今日の最強カードは・・・『キューピッド・キス』だ」

このカードは乙女カウンターが乗っているモンスターを装備モン  
スターが攻撃し、装備モンスターのコントローラーが戦闘ダメージを  
受けた場合、ダメージステップ終了時に戦闘ダメージを与えたモン  
スターのコントロールを得る

乙女カウンターがなければ発動しないカード・・・どう見ても扱い  
が難しいな



## 学園祭（中編2）

Side秋

「<sup>デュエル</sup>決闘！」

凜 LP4000

レイ LP4000

そういえば、レイはあのデッキを使うのだろうか？俺をチラチラ見てたし・・・ま、頑張れ。どっちもな

「先攻は私！ドロー！私は手札から『ゴブリンゾンビ』を守備表示で召喚！カードを2枚伏せて、ターンエンド！」

ゴブリンゾンビ ATK1100/DEF1050

「僕のターンドロー！僕はモンスターを裏守備表示でセット、カードを3枚セットしてターンエンドだよ！」

・・・ふむ

「ねえ秋、前に秋はレイにデッキをあげていたけど、どんなデッキなの？」

「レイのデッキはそうだな・・・一応、前のデッキは恋する乙女を中心に回すデッキだ。俺が渡したのはコントロール奪取専門のデッキだな」

とは言ったものの、ガチデッキではなく中堅的なデッキだ。あれからどれだけ改造したかは知らんが、どれだけ使いこなせているか見ものだな。

「私のターンンドロー！私は手札から『アンデット・ワールド』を発動するわ！これでフィールドと墓地にある全てのモンスターはアンデットとして扱う！そしてこのカードがあるかぎり、アンデット族以外は生贄召喚ができない！私はゴブリンゾンビを生贄に『真紅眼の不死竜』を召喚！真紅眼の不死竜はアンデット族1体の生贄で召喚が出来るわ！」

真紅眼の不死竜 ATK2400/DEF2000

「ならそのモンスターもーらった！罠カード『インターセプト』発動！モンスター1体の生贄召喚に必要なモンスターが召喚された時、そのモンスターのコントロールを得るよ！これで真紅眼の不死竜は僕のカードになる！」

うわーお・・・この時代だとシンクロ召喚をする人間はいないからな、生贄の召喚に対してあのカードは非常に効力が高いし、使いやすいやな・・・まあ、シンクロが主体となった俺達の世界じゃ難しいけれども

「うつ・・・なら私はゴブリンゾンビの効果発動！このカードが墓地に送られたことで私は『ゾンビ・マスター』を手札に加える！カードを1枚伏せ、ターンエンド！」

「僕のターンンドロー！うーん、バトル！真紅眼の不死竜でダイレクトアタックだ！」

「悪いけどそうはさせない！『くず鉄のかかし』を発動！モンスターの攻撃を1度だけ無効にする！そしてこのカードは再びセットできるわ！」

む、万が一ってことで入れてたのか？あのカード・・・まあ、レイにとつてはあんまり関係ないだろうな。

「なら僕はこのままターンエンドだよ！」

「私のターンドロー！『強欲な壺』でカードを2枚ドロウする！これなら・・・」

お？なんかいいカード引いたのか？アイツのデッキだと難しいところもあると思っただけだ

「手札から永続魔法『ミイラの呼び声』を発動！このカードは自分フィールド上にモンスターがない時、アンデット族モンスターを特殊召喚する！私は手札から『真紅眼の不死竜』を特殊召喚！」

「うえええ！？2体持っているの！？」

「こういう上級モンスターは普通2体入れるのよ！そして通常召喚！『ゾンビ・マスター』！」

真紅眼の不死竜 ATK2400/DEF2000

ゾンビ・マスター ATK1800/DEF0

ほう、まあ一応凜には2枚渡してたからな、アンデットカードの中では強力な方だし。竜骨鬼が出てないけど来ないのか？

「さらにバトル！真紅眼の不死竜で真紅眼の不死竜を攻撃するわ！  
『アンデットフレア』！」

「キヤツ・・・」

同士撃ちになる真紅眼の不死竜。まあ、取り返す意味でも、同士撃ちは構わないんだが・・・ゾンビ・マスターが攻撃するであろう裏守備表示のモンスターは一体なんだ？

「バトル続行！ゾンビ・マスターで裏守備表示のモンスターを攻撃  
！」

「僕が伏せたのはシールド・ウイング！戦闘では2回まで破壊されないよ！」

シールド・ウイング ATK0/DEF900

「つく・・・なら私はカードを1枚伏せ、ターンエンド！」

「僕のターンドロー！えへへ、いいカード来ちゃった！僕は手札から『アミーバ』を召喚！」

お、アミーバか・・・周囲が驚きの声を上げる。まあ、普通に考えれば使えない雑魚カードというのがこの世界の認識だが・・・あのカードはコントロール奪取型として動くレイのデッキなら恐ろしいカードになる。

「僕は手札から魔法カード『強制転移』を発動！互いのプレイヤーはモンスターを選択して、そのコントロールを入れ変える！僕はア

「メーバを選択するよ！」

「・・・つく、私はゾンビ・マスターしかない」

「そしてコントロールが入れ替わったところで効果発動！アミーバのコントロールが移った時、相手は2000ポイントのダメージを受ける！」

「え、嘘！？きゃああっ！」

アミーバ ATK300 / DEF350

凜 LP4000 LP2000

そう、アミーバの正しい使い方だ。アミーバは本来攻撃力も低いのでこの世界では雑魚カードの一部に属されているが、この世界だからこそ・・・アミーバは恐ろしいカードへと変貌する。

「強制転移されたモンスターはそのターン表示形式を変更できない。バトルだ！ゾンビ・マスターでアミーバを攻撃！」

「つく！そう何度もやらせない！『くず鉄のかかし』を発動する！」

「忘れてた・・・僕はカードを1枚伏せてターンエンドだよ」

「私のターンドロー！これなら・・・まだいける！『命削りの宝札』を発動！ハンドレスから5枚ドローするわ！私のフィールドのアミーバを生贄に捧げ・・・3体目の『真紅眼の不死竜』を召喚！」

真紅眼の不死竜 ATK2400 / DEF2000

「さらに、手札から『生者の書・禁断の呪術』を発動！自分の墓地からアンデット族を特殊召喚し、相手の墓地のモンスター1体をゲームから除外する！私は『真紅眼の不死竜』を特殊召喚し、貴女の墓地にある『アメーバ』を除外！戻ってきなさい！『真紅眼の不死竜』！」

真紅眼の不死竜 ATK2400/DEF2000

真紅眼の不死竜を2体並べたか・・・ここからどうするかだな。

「バトル！真紅眼の不死竜で攻撃！『アンデットフレア』！」

「畏発動！『攻撃の無力化』！」

「・・・カードを1枚伏せ、ターンエンド！」

「僕のターンドロ！うーん・・・アメーバを除外、かあ・・・カードを1枚伏せて、僕も『命削りの宝札』を発動して5枚になるようにドロ！するよ！うん、なら次の手！僕は『恋する乙女』を攻撃表示で召喚！」

恋する乙女 ATK400/DEF300

「恋する乙女の力！見せてあげる！僕の方が秋さんに相応しいんだよー！」

・・・おいおいおい、あのデッキに恋する乙女入れてんのかよ。いったい何を抜いたんだ？ある程度改造できるように余地は残したけど・・・まさか恋する乙女とは。それとどうでも良いけど、舐めら

れていると思っっているのか、凜が心なしかムキになっってるな

「僕はさらにカードを1枚伏せるよ！ターンエンド！」

「私のターンドロ！私は手札から『ゾンビ・マスター』を召喚して効果発動！私は墓地に『ゾンビキャリア』を送る！そしてゾンビキャリアを特殊召喚！」

ゾンビキャリア ATK400/DEF200

「チューナーモンスター・・・まさか！」

「行くわよ！レベル4のゾンビ・マスターに、レベル2のゾンビキャリアをチューニング！」

4 + 2 = 6

「<sup>とこしえ</sup>永久に彷徨う不死なる竜よ、愚者の魂を従えて今こそ蘇れ！シンクロ召喚！現れよ『デスクイザー・ドラゴン』！」

デスクイザー・ドラゴン ATK2400/DEF1500

「デスクイザー・ドラゴンの効果は相手の墓地にモンスターがいないと発動しない・・・このままバトルよ！真紅眼の不死竜で恋する乙女を攻撃！『アンデットフレア』！」

「畏発動！『体力増強剤スーパージ』！2000以上の攻撃を受ける時に4000回復するよ！」

レイ LP4000 LP8000 LP6000

「恋する乙女は攻撃表示の場合戦闘では破壊されない！そして恋する乙女を攻撃したモンスターには乙女カウンターが1つ乗るよ！」

あくまでも、そのコンボをやりたいのかお前は。もうちょっと需要のあるカード入れようぜ。まあ、お前のフェイバリットカードだから文句は言わないけどな

「つく！ならそのまま連続攻撃よ！『真紅眼の不死竜』！恋する乙女を攻撃なさい！」

あ、馬鹿・・・伏せカードがどう考えても恋する乙女用だろうが

「畏発動！『ホーリージャベリン』！相手の攻撃分だけ回復！そして真紅眼の不死竜に乙女カウンターが乗る！」

レイ LP6000 LP8400 LP6400

「つく・・・！」

落ちつけ凜。ムキになるからそうなるんだ。この調子だともっと面倒なことになるぞ。

「ならデスカイザー・ドラゴン！恋する乙女を攻撃！」

「恋する乙女は破壊されない！」

「でもダメージは受けるわ！」

レイ LP6400 LP4400



「でも、凜さんのモンスター全てに乙女カウンターが1つ乗るよ」  
駄目だこりゃ、凜の負けだな

「ねえ秋、この勝負・・・」

「ああ、凜の負けだ」

「え？なんでだよ」

十代が首を傾げる。まあ、戦況的に見れば凜の方が優勢には見える。しかし・・・

「もう完全に凜の奴、頭が廻ってない。レイの戦略に乗せられてるよ」

ま、もともとレイのデッキはいやらしく組んであったからな。アイツのデッキだけじゃなく、凜のデッキにも言えることだ。今回凜は手札が悪いわけじゃないが、相性が悪かったな・・・

「ターンエンド！」

「僕のターンドロー！ふふふっ！この勝負、僕の勝ちだ！」

「な・・・恋する乙女だけで一体何を！？」

来たか、よく来たな・・・あのデッキの構成を考えても、入れられるのはそれぞれピン刺しが限界だと思っていたが

「手札から装備魔法『キューピッド・キス』を発動！真紅眼の不死竜に装備するよ！このカードは乙女カウンターが乗っているモンスターを装備モンスターが攻撃し、装備モンスターのコントローラーが戦闘ダメージを受けた場合、ダメージステップ終了時に戦闘ダメージを与えたモンスターのコントロールを得る！そしてシールド・ウィングを攻撃表示に変更し、魔法カード『死のマジック・ボックス』を発動！シールド・ウィングのコントロールを相手に移す代わりに、デスカイザー・ドラゴンを破壊する！そして『サイクロン』くず鉄のかかしを破壊するよ！」

「なっ・・・きゃあ!？」

突然シールド・ウィングを箱が包むと、デスカイザー・ドラゴンもそれに包まれた。そして破壊されるデスカイザー・ドラゴン・・・

「そしてバトルだ！恋する乙女で真紅眼の不死竜を攻撃！」

「つく！」

真紅眼の不死竜が炎を吐こうとするが、その無垢な恋する乙女の表情にためらいが生まれている。シールドだ、とてつもなく、シールドだ・・・そして爪で弾き飛ばされる恋する乙女

レイ LP4400 LP2400

『ひどい、ひどいわ・・・』

『グ、グルル・・・』

すげえ困ってるよ、真紅眼の不死竜・・・

『いいの、いいのよ・・・これは戦いだもの・・・』

『グルー！』

突然レイ側の方に移動する真紅眼の不死竜。どうやら寝返ったというところらしい

「なっ・・・真紅眼の不死竜！なんでそんな女の方に！」

『グ、グルル・・・』

ピケルこと凜の怒りに若干の戸惑いを持っているのだろうが、チラリと恋する乙女を見た真紅眼の不死竜はすぐに相手に向き直った。

「これで真紅眼の不死竜は僕のものだ！これで終わりだよ！真紅眼の不死竜！シールド・ウイングを攻撃だ！『アンデットフレア』！」

炎に包まれるシールド・ウイングだが、攻撃力が0ではどうしようもない。攻撃はそのまま凜を直撃してしまった。

「キャ、キャアアアアアアッ！」

凜 LP2000 LP0

歓声が沸く。まあ、こんな小さい子供たちがこんなデュエルをするんだ・・・いいデュエルだったとしか言いようがないしな。そしてそのまま駆けてくる凜。悔しかったのだろう、真っ直ぐに俺のところに来てすすり泣いている。

「……………負けちゃった」

「よしよし、ま……頑張ったんだ。次にまた闘えばいい」

「うん……………」

Side 雪乃

あらあら……やっぱり負けて悔しいのね。凜も……そして遠くで羨ましそうに見ているレイ。なんというか、戦いに勝って勝負に負けたというところかしら？秋は泣いている凜を抱き上げ、頭を撫でている。凜はそれを気に入ったようで、嬉しそうにすり寄っている。本当に12歳なのかしら？レイはレイで悔しそうに拗ねている……それにしても克蘭を抱き上げるホープ……なんだか、シュールね。すると私の衣装を引っ張る手があった。引っ張る小さな手……桜ね？

「あら、桜……どうしたの？」

「お姉ちゃん、私もデュエルする」

「貴女が……って、お父様とお母様は？」

「あそこでサイン書いてるよ」

と、桜が指を指す方向には、多数の一般客、生徒、教師がお父様とお母様にサインや握手を求めている光景だった。お忍びで来てもらってしまふ。まあ、当然よね。デュエルするのはいいんだけど……  
・相手は誰がいいかしら

「やあ雪乃君、どうしたんだい？」

「吹雪先輩……いえ、桜がデュエルをしたいと言うので」

すると桜が吹雪先輩をじーっと見つめている

「あーデュエルしよう！」

「ぼ、僕とかい？」

顔が若干紅いような桜。まあ、吹雪先輩……性格はアレだけど顔はいいから。まあ、秋には敵わないけど……

「お願い！」

「………分かった、この天上院吹雪、女性からの御誘いを断るわけにはいかないな」

そう言いながらディスクを手を持つ吹雪先輩……そういえば……

「桜、貴女デツキは？」

「ん！」

そうやって見せてくるデツキ。そういえばこの子もドラゴン族デツキだったわね。しかも秋が強化したデツキ。前に何度か電話でデュエルに負けたと泣いてきたことが合ったから秋がデツキレシピアカードを提供したことがあったわね……でも、このデツキで大丈夫かしら

「そう、ならこのデュエルディスクを使って……あそこでデュエルできるわ」

「はい！」

そう返事をする、デュエルディスクを手にフィールドまで走って行った。あの身体じゃあのディスクはちよつと重いかしら？そして吹雪先輩が来たことでざわめく会場。まあ、主にこの学園の女子生徒とかだけだね。

「お嬢ちゃんががんばれー！」

「あはは、可愛いー！」

桜にも声援が飛ぶ……というより、この対戦カードがシールドなものね。小学校1年生対高校3年生……勝負は目に見えている感じもするけど……

「頑張りなさい、桜」

「いっくよー！」

「ああ、いっこうか！」

「「<sup>デュエル</sup>決闘！！」」

学園祭(中編2)(後書き)

次回、吹雪VS桜です

皆さんはどっちを応援しますか？

学園祭（中編3）（前書き）

桜VS吹雪です

まあ、読者の皆様は大抵わかってらっしゃると思いますが・・・真紅眼の黒竜対決です

秋「今日の最強カードは真紅眼の闇竜か」

真紅眼の闇竜

真紅眼の黒竜を生贄に捧げてのみ、特殊召喚できる。自分の墓地に存在するドラゴン族1体につき、攻撃力は300ポイントアップする

真紅眼の闇竜はもはや絶版のストラクに入っていたカード・・・なかなか入手は難しいですね。ショップでも高いし



### 学園祭（中編3）

「デュエル  
決闘！！」

天上院吹雪 LP4000

藤原桜 LP4000

Side雪乃

始まった桜と吹雪先輩のデュエル・・・まあ、タクティクスなんかは完全に吹雪先輩が上でしようね。でも、それは今までの桜だったら・・・の話。小学校1年生ながら、桜は私と秋がいるんなアドバイスやカードを与えた存在・・・どこまでいけるか楽しみだわ。

「レディーファーストだ・・・さあ、桜ちゃん？君からどうぞ」

「う、うん！私のターンドロー！」

ちょっと緊張気味にカードを引く桜。 あらあら？

「（サラ、ちょっと妬いてるの？）」

『（そ、そんなことは・・・あるな。実体化出来るマナ達が羨ましいよ）』

まあ、そうでしょうね。そんな会話をしていると、明日香がコスプレを着替え終えて歩いてくる。明日香のコスプレ、本当はサイバー・ブレイダーにしたかったのだけれど、全身タイツってことで却下。私が選んだのはエフェクト・ヴェーラーの明日香。なかなか似合っ

ているじゃない

「ちょ、ちよつと雪乃！どうして兄さんと桜ちゃんが！？」

「桜もデュエルしたいんですって・・・ま、見守ってあげましょう？」

「わ、私は手札から『黒竜の雛』を召喚！」

黒竜の雛 ATK800/DEF500

「そしてこのカードを墓地に送って『真紅眼の黒竜』を特殊召喚！」

真紅眼の黒竜 ATK2400/DEF2000

「れ、真紅眼の黒竜だって！？驚いたな、僕と同じカードを使うのか・・・」

「おじいちゃんのくれたプレゼントなの。最初のターンは攻撃できないから・・・こういう時は、手札から『黒炎弾』を発動！相手に2400ポイントのダメージだよ！」

1ターン目からそれが全て揃ってるなんて・・・やるわね、桜

「な、なんだって！？うおおおっ！」

天上院吹雪 LP4000 LP1600

「カードを2枚伏せてターンエンド！わーい！」

「お、驚いた・・・こりゃ僕も手なんか抜けないかな？僕のターン  
ドロー！」

さて、吹雪先輩はどんな動きをするのかしら？

「僕は手札から『古のルール』を発動するよ！手札からレベル5以上の通常モンスターを1体特殊召喚だ！来い！『真紅眼の黒竜』！」

真紅眼の黒竜 ATK2400/DEF2000

同じく真紅眼の黒竜を出す吹雪先輩・・・でも、吹雪先輩のことだからそれだけじゃないはずね。

「僕も男の意地があるからね・・・僕は『真紅眼の黒竜』を生贄にして『真紅眼の闇竜』を特殊召喚だ！」

真紅眼の闇竜 ATK2400/DEF2000

「そして真紅眼の闇竜の効果発動。このカードは自分の墓地のドラゴン族1体につき、攻撃力が300ポイントアップする」

真紅眼の闇竜 ATK2400/DEF2000 ATK2700  
/DEF2000

「さらに、手札から『仮面竜』を攻撃表示で召喚だ」

仮面竜 ATK1400/DEF1100

「バトルと行くよ！真紅眼の闇竜で真紅眼の黒竜を攻撃だ！『ダークネス・ギガ・フレイム』！」

「あつっ……！」

藤原桜 LP4000 LP3700

「さらに、仮面竜で攻撃だ！」

「さ、させない！『リビングデットの呼び声』を発動！『真紅眼の黒竜』を墓地から特殊召喚！」

真紅眼の黒竜 ATK2400/DEF2000

ダメージは受けたけど、なんとか仮面竜の直接攻撃だけは避けたわね……このままだとまた破壊されるのがオチになる。どうなるのかしら

「なら攻撃中止だよ。カードを2枚セットしてターンエンドだ」

「わ、私のターン！ドロー！手札から『強欲な壺』を発動してカードを2枚ドロー！さらに魔法カード『テイクオーバー5』を発動！自分のデッキの上からカードを5枚墓地に送り、自分のドローフェイズにこのカードが墓地に存在する場合、このカードをゲームから除外する事で、デッキからカードを1枚ドローできるよ！」

そう言つて5枚カードを墓地に送る桜。遠くからだとなんか難しいけど、カードは3枚……落ちたみたいね

「一応確認するけど、何が墓地へ行ったのかな？」

「えっと……モンスター3枚と、魔法カード2枚……かな？」

なるほど、桜も同じことをする気ね？

「えっと・・・真紅眼の黒竜を生贄に捧げ・・・『真紅眼の闇竜』を特殊召喚！効果はさっき言ってくれたよね？」

「ああ、そうだね」

真紅眼の闇竜 ATK2400 / DEF2000 ATK3900  
/ DEF2000

「そして手札から『死者蘇生』を発動！『真紅眼の黒竜』を特殊召喚だよ！」

あらあら、常にそのカードはフィールドに出しておきたい感じなのかしら？そんなことをしたらせつかく攻撃力が上がった真紅眼の闇竜の攻撃力が下がるわよ？

真紅眼の闇竜 ATK3900 / DEF2000 ATK3600  
/ DEF2000

真紅眼の黒竜 ATK2400 / DEF2000

「どうして真紅眼の黒竜をフィールドに戻したんだい？そんなことをしたらせつかくの真紅眼の闇竜の攻撃力がさがつちやうよ？」

「このカード、おじいちゃんがくれたカードだから・・・墓地に置いておきたくなくて」

「そうなのかい・・・」

と、恥ずかしそうに言う桜。私達の祖父はまだ健在だけど、滅多に会えない・・・何しろ世界中を旅している。ま、今もどこかで元気にやっているでしょう。

「でも、理由はそれだけじゃないよ？・・・手札から『天よりの宝札』を発動！互いのプレイヤーはカードを6枚になるようにドロ―できる」

ここでドロ―強化？桜は一体何を待っている？

「手札から『召喚師のスキル』を発動！レベル5以上の通常モンスターを手札に加えるよ。私に加えるのは『真紅眼の黒竜』」

・・・そういえばおじい様、あの子に真紅眼の黒竜3枚渡していたわね。あの子、一体何をするつもりなのかしら？

「さらに、手札から『ロード・オブ・ドラゴン・ドラゴンの支配者』を準備表示で召喚！」

ロード・オブ・ドラゴン・ドラゴンの支配者 - ATK1200 / DEF1100

ロード・オブ・ドラゴンですって！？この前まであんなカード桜のデッキには・・・そうか、秋の仕業ね。

「そして！手札から『ドラゴンを呼ぶ笛』を発動！フィールド上に『ロード・オブ・ドラゴン・ドラゴンの支配者』が表側表示で存在する場合、手札からドラゴン族モンスターを2体まで特殊召喚できる！私は『真紅眼の黒竜』2体を特殊召喚！」

真紅眼の黒竜？ ATK2400 / DEF2000

真紅眼の黒竜？ ATK2400 / DEF2000

「お、おおう……」

これは吹雪先輩もタジタジね……。まあ、そうでしょうね。フィールドには真紅眼の黒竜が3体と真紅眼の闇竜、そしてロード・オブ・ドラゴン……。ここまでデッキが廻る桜のデッキが恐ろしいわ。

「バ、バトル！真紅眼の闇竜で真紅眼の闇竜を攻撃！『ダークネス・ギガ・フレイム』！」

「……残念だけどその攻撃は通らない！罨カード『和睦の使者』！このターンモンスターは戦闘では破壊されず、戦闘で受けるダメージも0だ！」

「う、うう……。通らなかった。カードを2枚伏せてターンエンド」

「僕のターンだ……。ドロー……。おっ！僕は『強欲な壺』を発動しよう。カードを2枚ドローする。これは本気を出さないとまずいね……。手札から『二重召喚』を発動！このターン僕は2回召喚が出来る。さらに『地割れ』を発動！相手フィールドにいる攻撃力が一番低いモンスターを破壊する。破壊されるのは紛れもなく、ロード・オブ・ドラゴンだ」

破壊されるロード・オブ・ドラゴン……。これで魔法、罨、モンスター効果を受けない効果は無効になった。さて、吹雪先輩はここからどう巻き返すのかしら

「僕は罨カード『魔法反射装甲・メタルプラス』を発動するよ。これを真紅の闇竜に装備し、このカードを生贄に捧げ・・・僕の真のエースを君にお見せしよう。いでよ！『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』！」

レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン    ATK2800/DEF2400

「このカードは自分の墓地のモンスター1体につき400ポイント攻撃力を上げるんだ。僕の墓地には今、真紅眼の黒竜と真紅眼の闇竜の2体だ・・・つまり攻撃力は3600になる」

レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン    ATK2800/DEF2400    ATK3600/DEF2400

「そして軍隊竜を召喚する」

軍隊竜    ATK700/DEF800

「さらに『二重召喚』の効果で僕はフィールドの仮面竜と軍隊竜を生贄に捧げ・・・『真紅眼の黒竜』を召喚する！」

真紅眼の黒竜    ATK2400/DEF2000

・・・まさか、吹雪先輩のデッキにも真紅眼の黒竜が3枚入っているんじゃないでしょうね？確か、真紅眼の黒竜はマニアの間では数十万の金額で取引がされるカードよ。秋も3枚持っていたけど、カードショップでも置いている店だって少ないし、売っていても五万以上の値段・・・真紅眼の黒竜が入っていたパックは最早絶版物だ



し、入手は困難のはず・・・こつも大量に見ちゃうとカードの価値  
って分からなくなるものね

「これでさらに、レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンの攻撃  
力は上昇だ」

レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン ATK 3600 / DEF  
2400 ATK 4400 / DEF 2400

前のダークネスだった吹雪先輩が使っていたカードね・・・青眼の  
白龍をおいつめたあのカード達。

「す、すごい・・・」

桜も驚きを隠せないようね。これで勝負は決まったのかしら？

「さて、どうなるかな？」

マスクの下で楽しそうに声を漏らす秋がいた。いつの間にか凜を降  
ろしてそのデュエルを魅入っている。

「さてって・・・もうあの子に勝ち目なんかないっすよ・・・」

「なんでそんなこと言えるんだ？桜ちゃんの目はまだ諦めてないぜ  
？」

まだライフは3700・・・攻撃力4400でも、3600の真紅  
の闇竜なら、まだ耐えられるはずよ。

「十代の言うとおりだな・・・あのデッキ、まだまだ恐ろしい力が

ありそうだ」

どこか、秋の音が楽しそう。まるで闘いたいという感じね。珍しい・  
・いつもなら自分から積極的にデュエルを相手に吹っかけるよう  
な姿勢じゃない秋が、今は十代の坊やのように、すぐにでも桜にデ  
ュエルを仕掛けそうなほど・

「バトル！真紅の闇竜にレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン  
で攻撃だ！」

「速攻魔法発動！『収縮』！レッドアイズ・ダークネスメタルドラ  
ゴンの攻撃力を半分にするよ！」

「甘いよ桜ちゃん！レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンの効  
果発動！このカードを対象にする魔法の発動と効果を無効にして破  
壊する事ができる！『マジック・リフレクション』！」

「にゃうっ!?!」

そう、これがレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンとレッドア  
イズ・ブラックメタルドラゴンの違い・・召喚条件が厳しい分、  
ダークネスメタルは強い。収縮が破壊され、攻撃が直撃する。

藤原桜      LP3700      LP2900

「こ、この瞬間畏発動！『レッドアイズ・スピリッツ』！このター  
ンに破壊され墓地に送られた「真紅眼」と名のついたモンスター1  
体を選択し、召喚・蘇生条件を無視して特殊召喚！帰ってきて！」  
真紅眼の闇竜』！」

真紅眼の闇竜 ATK2400 / DEF2000 ATK3600 / DEF2000

「最近、アカデミアのデュエリストと戦ってたけど、君と戦う方が断然面白いね……」

「あ、ありがとう……」

吹雪先輩がどこか嬉しそうだわ。桜もあそこまで興奮してデュエルしているところは初めて見たもの。

「僕はカード2枚セットしてカードを伏せ、ターンエンドだよ」

「私のターン！ドロー！さらに、テイクオーバー5の効果でカードをもう1枚ドロー……！手札から魔法カード『団結の力』を発動だよ！」

「悪いね桜ちゃん、レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンの効果！手札を1枚捨てることで、魔法カードの発動を無効にし、破壊できる！僕は手札の『仮面竜』を墓地に送るよ。これによってレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンの攻撃力が400ポイントアップする」

レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン ATK4400 / DEF2400 ATK4800 / DEF2400

ここで何故魔法カードを……？桜ならちゃんとカードの効果を改めてモニターで確認すると思っただけ……

「残念だね桜ちゃん……カードの効果、デュエルディスクから確

認できるんだよ？」

「知っているよ？・・・そして、それを承知で団結の力を使ったんだ」

「どういうこと・・・？」

「バトル！真紅眼の闇竜で、レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンを攻撃！」

「・・・っ！？どういうことだい！？」

バトルをするですって！？一体何を・・・！？真紅眼の闇竜とレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンの攻撃力差は1200よ！突進を使っても覆らないものをどうやって・・・

「そしてバトルフェイズに速攻魔法『虚栄巨影』を発動！このカードはモンスター1体の攻撃力を1000ポイントアップ！さらに罠発動！『メタル化・魔法反射装甲』！このカードは発動後このカードは攻撃力・守備力300ポイントアップの装備カードとなり、モンスター1体に装備できる！そして装備モンスターが攻撃を行う場合、そのダメージ計算時のみ、装備モンスターの攻撃力は攻撃対象モンスターの攻撃力の半分の数値分アップ！」

そうか！あの子はデッキにレッドアイズ・ブラックメタルドラゴンを入れている。でも、それをあえて真紅眼の黒竜ではなく真紅眼の闇竜に装備させた。速攻魔法『虚栄巨影』の効果はレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンの効果では手札がないから発動できない・・・これを狙ってわざと吹雪先輩のカードを減らしたのね。そしてこれによって攻撃力は激しい変動を起こす

真紅眼の闇竜 ATK3600 / DEF2000 ATK4600  
/ DEF2000 ATK4900 / DEF2000

「行って！真紅眼の闇竜！レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンを攻撃！『ダークネス・ギガ・フレイム』！」

真紅眼の闇竜 ATK4900 / DEF2000 ATK7300  
/ DEF2000

「つく！うおおおおおっ！」

天上院吹雪 LP1600 LP0

周囲でさっきのデュエルと負けにくいくらいの大歓声が巻き起こる。まあ、あの天上院吹雪を小学1年生の子供が倒したとなれば、それは驚きでしょう

「まさか、吹雪を倒すとは・・・」

「あの小学生、将来が楽しみなノーネ」

「ふむ・・・レッドアイズのデッキか、また新しい方程式を考えなければ」

カイザー、クロノス教諭、三沢の坊やがそんなことを言う。うふふ・・・どうかしらね、桜は将来デュエリストの道を進むのかしら・・・それはそれで、私もあの子の将来を楽しみにしたいと思えるようになるわね

「おねーちゃん！おにーちゃん！勝ったよー！」

嬉しそうに手を振る桜。うふふ、よかったわね。でも桜、忘れただめよ？吹雪先輩の2枚の伏せカード・・・おそろくカウンタートラップだったんでしょね。さて、そろそろ盛り上がってきたけど・・・

「秋、そろそろ食事にしない？もうお昼だわ」

「ん？もうそんな時間か・・・」

レッド寮の出し物も一応、午前と午後の部がある。休みは2時間・・・お昼はゆっくりできそうね

「じゃあ一度着替えないとな・・・お昼はどうしたい？食堂は確かあいてないし・・・」

「そうね・・・僕、ブルーの喫茶店はあんまりよくないって聞いたわよ？」

そう言えばそうね・・・プライドの高い人間が接客なんて・・・絶対無理ね。よろしくないわ。

「ならイエローの出し物でも行くか、ああいうのなら祭りっぽいかな」

目的は決まった。後は着替えてお昼を食べに行くだけだけど・・・今年から一般の客も入る・・・少しだけ不安があるわ。大丈夫かしら、秋

「ん？雪乃、俺の顔に何かついてるか？」

「いいえ、なんでもないわ。それより早く着替えましょうか」

「ああ」

こうして、私達は着替え、レッド寮を後にした。

学園祭(中編3)(後書き)

つてなわけです桜VS吹雪でした

まあ、吹雪の性格上こんな展開かなーなんて予想して書きました。

ちなみに吹雪が伏せていた2枚のカードはミラフォとレッドアイズ・スピリッツです



学園祭（中編4）（前書き）

少し遅れました、中編その4です

秋「今日の最強カードは『天使の施し』・・・禁止カードだな」

3枚カードをドロし、2枚墓地へ送る

昔はいいカードだったんですけどねえ

学園祭（中編4）

59 学園祭（中編4）

Side秋コスプレを着替え、いつもの服に戻った俺達はイエローの出し物の場所まで来た。

「お店が一杯・・・」

桜ちゃんが目をキラキラ輝かせている。というのも、雪乃のご両親はすっかりファンの人達に囲まれてしまい、動けないらしい。なので今は俺の上で肩車中である。

「お兄ちゃん！お金ちょうだい」

「・・・お前な、小遣いはどうした」

「えへへ・・・」

笑ってごまかせるとも思ったか・・・おおかたカードにでもつぎ込んだんだろう。俺はため息をつきながら財布から5千円札を渡した。

「ほれ」

「ありがとー」

嬉しそうにする凜。まあ、そんだけあれば好きなだけ遊べるだろ。

「レイ、お前は？」

「ふえ？ぼ、僕は平気！お母さんから一杯もらってるよ！」

と、俺にお金を見せるが、これ・・・帰りの費用じゃねーの？

「お前、帰りのこと考えてる？」

「帰り？・・・あ」

どうやらあまり考えていなかったらしい。行動力はあるが、こんなところは相変わらずのレイ。俺はため息をついて同じように5千円札を渡した。

「ほれ」

「え！？いいです！僕・・・」

「子供が遠慮するな。こういつのはありがたく受け取っておくもんだぞ」

「じゃ、じゃあ・・・ありがとう、秋さん」

控えめながらも、嬉しそうにそれを受け取るレイ。うん、子供は素直が一番だ。

「秋、随分気前がいいのね」

「・・・まあ、なんか知らんけど校長がセブンスターズと戦うことに金一封をくれるんだよ。毎回断ってたけどな」

「そうなの」

と、雪乃がいうが・・・どうしたんだ？

「・・・校長、私が言った通りにしてくれたみたいね。アレだけ怪我を負っているんだもの。これくらいの見返りは当然というところかしらね」

よくはわからんが、まあいいだろう。飯だ飯

「たこ焼き1つくれ」

「はいよ、400円だ」

「この綿あめちょーだい！」

「200円だよー」

と、色々と回る俺達。なんとというか、これぞ祭りの醍醐味と言うものだろう。あとで十代達にも焼きソバくらい届けてやろうかな。桜ちゃんは俺の頭の上で嬉しそうに綿あめを食べている。頼むから髪の毛にはつけないでくれよ？そして雪乃やツアン達も、いろいろ買っ買って・・・

「雪乃、それ」

「あら、何かしら？」

雪乃の手には3個か4個、袋に入った肉まんがあった。お前、そん

なに喰うのか。

「うふふ、肉まんは別腹よ」

「・・・そうか」

逆にツアンはツアンでバカでかいリンゴ飴を頬張っている。

「何よ、これはあげないわよ？」

いや、別にいらんです。

「それにしても、人が一杯だな」

「そうね、今年から一般客も沢山入るようになったし」

「ま、お祭りって言うのはこういうものだからな」

言いながら辺りを見渡す。どうしたもんか・・・落ちつける場所がない。ベンチは1人用か2利用が開いているものの、こっちは俺を含めて6人。そんな大人数が座れるスペースなどそうないだろう。

「ん？アレは・・・」

すると、走ってくる影を見つけた。あれって・・・

「ジュンコとももえじゃない・・・どうしたの？」

ツアンが首を傾げる。走ってきたのはジュンコとももえだった。息を切らし、俺の後ろに隠れる。おいおい・・・

「お、おい!？」

「秋さん! 助けてくださいまし!」

「変な連中が追いかけてくるのよ」

変な連中? 見ればガラの悪い男女が7、8人いる。ん? あいつらどつかで見たな・・・

お前は よわ

それで 本当に

お前 なん・カードを 資格

・・・あー、なるほどそう言うことか。こいつら、秋をいじめてた連中の一部だな。

「おいおいおい、逃げるなよ、一緒に遊ぼつって誘っただけじゃねーか」

「う、うるさいわね! アンタ達に付き合つつもりなんて毛頭ないわよ!」

ジュンコが声を上げる。俺の耳元で叫ぶな、うるさいから。すると後ろの影に俺の前に現れたそう、退学させられた元オベリスクラブの生徒がいた。

「あいつっ・・・」

「ん？武藤じゃねえか・・・お前？」

リーダー格らしき男が声を上げる。

「ホントだ、あの弱小デュエリストの武藤秋だ！懐かしいな」

「あら、あんたデュエルアカデミアにいたの？あんたが？キャハハ  
！」

睨みつけるツアンと雪乃。俺は桜ちゃんを降ろし、連中を見た。

「久しぶりだなあ・・・元気か」

「・・・・・・・・お前ら、誰？」

「はあ？あれだけいじめてやったのにそんな反応なの？やっぱり  
コイツ馬鹿ね」

笑いを上げる一同。

「そんなことはどうでも良い。ジュンコとももえが何かしたのか？」

「別に何もしてねえさ・・・俺達が誘ったら断るからよお。お前友  
達なら何とか言ってやれよ」

「そうそう、じゃないとまたカード燃やされちゃうぜえ？」

話を聞けば、ジュンコとももえはナンパされ、断って逃げて来たら  
しい。目の色を変え、殴りかかろうとする凜が目に入る。凜を止め、

一歩前が出る。

「良いだろう」

「秋!？」

「お兄ちゃん!？」

俺の言葉に驚く一同

「話がわか「ただし、俺にデュエルで勝ったらの話だ」はあ？」

「お前らの行為は十分迷惑行為だ。俺が勝ったら即刻この学園から立ち去れ」

「っけ!お前ごときに俺を倒せると?俺はこれでも「御託はいい、全員でかかって来い」な、なにい!？」

実質、ディスクを持っているのは3人。3体1か・・・なら、あのデッキで・・・

「あははははははっ!お前が?あの弱小決闘者のお前が俺達に?いじめられすぎて頭が行かれちまったんじゃねーの?」

「それとも、お前らだけじゃ俺に勝つ自信もないか」

こういう連中は挑発しやすいからな。俺の言葉に表情を変え、デュエルディスクを構える3人・・・

「良いだろう、そんなに言うならボコボコにしてやるぜ・・・デメ



「のアンティはそのデッキと、その後ろの女全員だ！」

「うち、こいつら完全に俺を舐めてるな。俺が雪乃達を見ると、雪乃達は頷いていた。」

「やっちゃんなさい秋」

「そうよ、そんな連中ボコボコにしなさい！」

「ああ、任せておけ」

俺はデュエルディスクを展開し、構えを取った。

「行くぜ弱虫ちゃんよお！」

「………来い！」

「『『『デュエル  
決闘』』』」

S i d e レイ

いきなり現れた不良の人達。そして秋さんがいじめられていたというよくわからない話を聞かされる。

「ねえ雪乃さん、秋さんがいじめられてたって……それに弱いって？」

あの実力で弱かってどうということなの？

「……………秋はね、伝説の決闘者『武藤遊戯』の従弟なのよ」

「ええ!？」

あの、伝説の!?!じゃあ凜さんも…

「でも秋は昔、デュエルモンスターズがあまり好きじゃなかったらしいわ」

「うん、お兄ちゃんは…デュエルモンスターズで戦うことが嫌いだっただ。戦うことより、カードを集めている方が楽しそうだった。でも、お兄ちゃんはそのせいでいじめにあって、大切なカード…燃やされちゃったの」

「そんな…」

そんな過去が、秋さんにあっただなんて。

「それからしばらくしてかな、不登校になってから急に部屋の外に出てきてね…いきなり私に向かって「おい、デュエルしろよ」だよ?びっくりしたよ…すぐくうれしかった。そして、今のお兄ちゃんなら…どんな人にも負けないってことが確信できるの」

凜さん…

「<sup>デュエル</sup>決闘」

そんな話を聞いているといつの間にかデュエルが始まった。サバイバル方式デュエル。先攻は最初攻撃できないとはいえ、4体1…勝てる、のかな?

武藤秋 LP4000

不良リーダー LP4000

不良下っ端 LP4000

不良下っ端？ LP4000

順番は不良のリーダー格 不良1 不良2 秋さん・・・こんなの、  
どう考えても不利だよ！

「俺のターンドロロー！『デーモン・ソルジャー』を召喚！カードを  
2枚伏せてターンエンド！」

デーモン・ソルジャー ATK1900/DEF1500

「俺のターン！『闇魔界の戦士ダークソード』を召喚！カードを2  
枚伏せてターンエンドだ！」

闇魔界の戦士ダークソード ATK1800/DEF1500

「俺のターンドロロー！『ビックシールド・ガードナー』を守備表示  
で召喚！カードを1枚伏せてターンエンドだ！」

ビックシールド・ガードナー ATK1000/DEF2600

一気に埋め尽くされたフィールド。モンスターは下級モンスターた  
ちの中でもえりすぐりのカード・・・そして伏せカードはすべて埋  
まっている。これじゃあ、攻撃なんてとてもじゃないけど無理だよ！

「・・・ふーん、口で言うだけはあるな。手札に初手からそれか・・・ふむ」

で、秋さん！なんでアナタはそこまで冷静なんですかつ！これだけされたら普通焦るでしょ！

「・・・俺のターンドロ・・・・・・あ、もう俺勝ったかも？いや、手札の状況だと・・・」

はえ？もう、勝った？何を言ってるのこの人は！明らかにおかしいよ！この状況打開なんて絶対無理だよ！

「この状況で勝てるなあ！？よくそんなことを言えるなあ」

「そうそう！お前じゃこの軍勢には勝てねえよ」

「・・・あ、そう。それが負け犬の遠吠えにならないといいね」

言いながらニヤリと笑う秋さん。いったい・・・？

「俺は手札から『天使の施し』を発動！3枚ドロし2枚を墓地へ送る。そして強欲な壺を発動して2枚ドロ！」

いきなり手札を入れ替え、増強する秋さん。い、いったい何をやっているの？

「・・・ふん、手札から魔法カード『大嵐』を発動する！フィールド上の全てのカードを破壊する！」

「させるかよ！速攻魔法『非常食』だ！伏せたカードを墓地に送ることで1枚につきライフを1000回復する！」

破壊される3枚のミラーフォース。こんなんじゃ絶対勝てなかったよ。でも、ライフが一気に4000も回復されちゃった！？

不良リーダー LP4000 LP8000

「……………なんだ、ただのカウンターか。使って損した」

使って損！？何のこと言ってるの？

「成金ゴブリンを発動。相手は1000のライフを回復し、俺はカードを1枚ドローする」

不良リーダー LP8000 LP9000

不良下っ端 LP4000 LP5000

不良下っ端 LP4000 LP5000

「さらに手札断殺を発動。カードを2枚墓地へ送り、2枚ドローする……フム、さらに俺は手札から『魔法石の採掘』を発動する。カードを2枚墓地へ送ることで、魔法カードを1枚加える。俺が加えるのは『天使の施し』だ」

ドローカードばかりを使う秋さん。一体何をしているの？相手だつてなんだか怒っているよ？

「おいテメー！いつまで自分のターンにドローしてやがる！とつと

としやがれ！」

「うるせえな、お前らはもう負けなんだよ……俺にターンを回した時点でな」

「はあ!?!」

どういう意味!?!すると、雪乃さんが笑っていた

「なるほど」

「ほえ?雪乃さん?」

「レイ、貴女は知っている?ドローするだけで勝つ方法を」

ドローするだけで勝ち?あつたかな、そんなカード……ドローするだけで、勝ち?ってまさか!

「エクゾディア!?!」

「のようね、もうデッキも半分以下……これは勝ったかしら?」

「さらに再び『天使の施し』を発動……3枚ドローし、2枚捨てる。そしてさらに『トレード・イン』を発動。手札の『神獣王バルバロス』を墓地へ送り、カードを2枚ドローする……カードを1枚伏せて『天よりの宝札』を発動。互いのプレイヤーはカードが6枚になるようにドローする。俺は4枚ドロー……ツフ」

笑った……まさか?

「伏せた『闇の量産工場』を発動・・・このカードは墓地の通常モンスターを2体まで加えることができる。俺が加えるのは先ほど天使の施して墓地に送った『封印されし者の右腕』と『封印されし者の左足』だ・・・これで全てのカードが揃った。俺の勝利だ」

言いながらディスクにカードをセットする。それは『封印されしエクゾディア』『封印されし者の右腕』『封印されし者の左腕』『封印されし者の右足』『封印されし者の左足』だった。

エクゾディア ATK / DEF

「な、な、なあ!？」

「行け、エクゾディア・・・『地獄の業火エクゾードフレーム』!」  
エクゾディアの攻撃でモンスター達は砕け散り、その地獄の業火は不良たちに直撃した。

「「「ぎゃああああああああっ!」「」」

吹き飛ばされる。不良たち。すごい、さすがは秋さん・・・

「さて、約束だ・・・この学園から失せる」

「うるせえ!もう一回だ!そんなお前の汚いデッキに負けるなんて間違いだ!」

汚いデッキだって!?!3対1で初手に3枚ミラーフォースが伏せてある貴方達のほうがあやしいよ!絶対アレはイカサマしてる!

「はぁ・・・」

「おい、どうした」

後ろから現れる不良っぽい・・・不良なのかな、あれ？黒い髪にリゼント・・・で、すごく大きい人。2mくらいあるかも。でも、不良たちが驚いてるってことはそのリーダーっぽい人？なのかな。でもさっきのリーダーみたいな人は・・・いた、ヘコヘコしてる。

「いつになったら俺のクレープを買ってくるんだお前は・・・ああ！？」

「ひい！す、すみません・・・轟元さん！」

こ、怖いいい！怖いのになんでクレープ！？お酒とかじゃねないの！？

「で、何の騒ぎだったんだ・・・」

「こ、こいつがデュエルしろってんでデュエルしたんでさぁ・・・」

「で、負けたと・・・」

「はい・・・」

敬語使ってるよ、あれだけ大きい態度だったくせに

「そのの奴か」

「そ、そうです・・・」



言いながら秋さんの前に出る。あ、秋さん……！

「お前さんか、うちの連中やるとは……やるな」

「……ああ」

「ほうう？こいつらとデュエルしたのには何かしら理由があるんだろ？」

「ああ、こいつらは俺に負けたらアカデミアを出ていく、俺が負けたら俺の友達をこっちに渡せと言ってきたからな」

にらみ合いが続く。僕は思わず雪乃さんにしがみついてしまう。すると、轟元と呼ばれた人は後ろを振り向き秋さんを罵倒した人を殴り飛ばした

「てめえ、祭りで人様に迷惑かけていいと思ってるのか？ああ！？」

「ひ、ひい……す、すみません」

「ナンパで俺に持つてくるクレープが遅れたとは、随分舐めた真似してくれんじやねえか」

なんか、話の論点がずれてる気がするよ……他の不良の人と、ギヤルみたいな女の人も怯えてる。なんとというか、不良なのに正しいというか怖いというかなんというか……

「……おい、あんた」

「あん？」

あ、秋さん！駄目だよ！秋さんも殴られちゃうって！

「アンタの行為も十分迷惑行為だ」

「………なに？………それもそうだな」

あ、あれ？フリ上げようとした拳を納める轟元という人。この後風紀委員みたいな人達が来て、不良たちは連行されて行った。どうやら色々と他のお客さんや生徒の人に迷惑をかけ、通報されていたらしくて、連れて行かれたらしい。轟元さんはその人達の親玉なんだけど……その人達が勝手についてきたただだったとか。クレープを買いに行かせて帰ってこない人達の様子を見に来たらしい。つまり、強い人に群がってただけってことあの人達

「すまんかったな、俺の連れが変なことをして」

そんな巨体が90度に謝る。不良が謝るシーンって……なんだかシユールだね。

「べ、別にいいわよ。アンタのせいじゃないし」

「そうですわ。お顔を上げてくださいますし」

ジュンコさんとももえさんは慌てている。

「そうかい、そう言ってくれると嬉しいね」

なんだか、この人は悪い人じゃないみたい。でもやっぱり怖い。す

ると、轟元って言う人が秋さんに向き直った。

「それにしても、久しぶりだな武藤」

「・・・ああ、轟元先輩」

え、・・・えええええええ！？せ、先輩！？どういうこと！？あの人も秋さんをいじめてたグループの人だったんじゃないの？

「り、凜さん！？あの人が知ってるの！？」

「うん・・・轟元しんもと暁さん。お兄ちゃんが中学校1年生の時・・・まだ不登校になる前、お兄ちゃんを助けてくれた二つ上の先輩だよ。久しぶりに会ったけど全然変わってなかった。」

「ってことは、秋さんはあの人のことが怖くないからあんな注意をしたんだ・・・」

「しばらく会わない間にデュエルも心もまるで別人だな・・・最初は分からなかったぞ。それに済まなかったな、あいつらがお前をいじめていた連中とは知らなんだ」

「気にしてませんよ。それに人つてのは時が過ぎれば変わるものです」

「・・・そうかい、なら一つ。あいつらを倒した実力を見せてもらおうか」

言いながらディスクを構える轟元さん。秋さんはさっきのエクゾディアデッキを外すと、別のデッキをセットした。一瞬見えたけど、

融合デッキにシンクロモンスターを入れているのがわかった。

「いいでしょう・・・」

「「<sup>デュエル</sup>決闘！」」

学園祭（中編4）（後書き）

たった1ターンで3人を！？ワンターン3キルウ

・・・今回の手札、どう見てもソリティア  
そして無理がありすぎる（汗）

ちなみにこの轟元さんのプロフィール

轟元暁 18歳

不良でありながら筋を通す男・・・否、漢である。  
曲がったことが嫌いだ、喧嘩好き。喧嘩のためだけにその悪いよ  
うな格好をしている。デュエルも強い  
中学校3年時、いじめられている秋を見つけて助け、以後友人とな  
る。

・・・どう見ても出落ちキャラ（汗）

## 学園祭（後編）（前書き）

というわけで、お久しぶりです。色々多忙だったので更新が遅れました。すいません

時に、皆さん。この前この小説のアクセス数を確認したんですが

……なんか、100万超えてました。

ありがとうございます。まだセブンスター編っていうか、1年時  
も終わってない、まだ斎王（子安）も出てないこの小説がここまで  
伸びると思つてなかつたです。

ぶっちゃけアストラルもビツクリのデュエルタクティクス+主人公  
がピンチになるとドロー強化という何とも残念な遊戯王だったので  
すが

ここまで来るとこれはもう、頑張るしかないな・・・と

最近身体の体内時間がおかしいので、投稿に狂いが出てくることに  
はなりますが、ご了承くださいませ

ちなみに、現在考えているルートがいくつかあります。まあ、2年  
時を過ぎながらも番外編として描こうかなーと考えている話がい  
つか。色々ありましたが、3つに絞りました

? 遊戯王5D's 編

? アイドルマスター 編

? 東方Project 編

……なにこれえ

とりあえず、それぞれの説明をしていこうと思います

遊戯王5D・S編

まあ、ぶっちゃけた話、5D・S編は世界の繋がりで何とかできるんですけどね(笑)

内容的にはちゃんとフォーチュンカップ編からスタート

・・・あの世界でシグナーの龍を使ったらどうなるんでしょうね(笑)

相変わらずヒロインはあの二人ですが、新規ヒロインも参入予定。この話はこれ以上するとネタばれですね

ですが、シグナー組と仲良くするかは微妙です

あえて敵対勢力にいたり、第3勢力にいた方が面白そうかなとWW

うちの妹の意見 満足先生2話に1回出さないとカード破くよ?

・・・マジツすか

アイドルマスター編

アイマスについては最近ハマったというのがありますが、2年時、明日香のアイドル養成コースについての話を見た時、歌って戦う決闘者・・・コレありじゃね?って言う考えがあったので

話的内容的には765プロダクションのある世界に秋が飛ばされ、アイドルたちを養成するために決闘を鍛えたり961プロダクションとの死闘を繰り広げるといふ・・・なんだこのテンプレ(笑)

しかも話の内容からすると完全に黒井社長悪役になります(まあ、もともと悪役ですけど)。しかもプロジェクトフェアリーが成される話から、ジュピターを無理やり出してやろうというオリジナルストーリーです

ようするに 響&貴音&美希の961とバトル 秋&765アイドル勝利 黒井社長が3人を用済みとして捨てる 765で3人回収

ジュピター登場!

なんて感じですよ。どう見ても普通のハーレムを連想しかできない(汗

こんな話で大丈夫か？  
大丈夫だ、問題ない（キリッ

うちの妹の意見 歌って戦うのはいいけど、主人公は歌とかダンスのプロデューズできんの？

・・・ですよー

東方Project編

幻想郷とはすなわち忘れられた者たちが集う場所・・・今まで伝説級に名を残してきた十代と秋・・・だが、秋の人格は別世界のもの。もし、その別世界で城戸秋の存在が忘れられているとしたら？

世間での名は武藤秋。だが本当の名前は城戸秋。その矛盾が「武藤秋」の身体を幻想郷に引きずり込んだ。そしてその引きずり込んだ張本人「八雲紫」の一つの目的を描く、東方決闘編。ぶっちゃけニコニコ動画の鬼柳が幻想入りの話しに釣られました（笑）

うちの妹の意見 ただ東方キャラ出したいだけでしょ、これ・・・（汗

とまあ、現在はこんな感じですよ。

妹に内容を教えて意見聞いたらこんな感じ

ちなみに妹のデッキはインフェルニティです。ガチデッキです

他にも候補はいくつかあったんですよ？例えば・・・

魔法少女リリカルなのは編

・・・もういくつかテンプレでGXの世界になのはたちが来る話が多数存在するので却下。というか、出来れば遊戯王となのはは区別したいと思いました。

管理局が秋のカードを古代遺失物と認定 秋「誰が渡すかー！」

決闘 勝利するとまた説得という名のO H A N A S H Iが来



る 管理局アンチになる

もう結果が目に見えたので却下

確実に書いていて私も読者の方々も面白くなくなることを確定

ひぐらしのなく頃に編

明らかにデュエル機能が時代と追いついてないので却下

遊戯王ZEXAL編

まだアニメの進行がアレなので却下

恋姫無双編

どう考えても無理があるので却下

とまあ、こんな感じです。読者の皆さんにも1〜3でどんなのがいいとかやってくれると嬉しいですよ

ちなみに？にしましてはキャラのデッキを考えてくれると嬉しいですよ

秋「・・・長かったが、今日の最強カードは『メタモルポッド』だ」

リバーズ：お互いの手札を全て捨てる。

その後、お互いはそれぞれ自分のデッキからカードを5枚ドロースる。

現在制限カード・・・ポッドと名のつくカードは何故か禁止か制限が多い

ちなみにまだ下にも募集要項があるので是非ご覧ください



学園祭（後編）

武藤秋 LP4000

轟元暁 LP4000

Sidley

「先攻はもらっぞぞ」

「どっぞぞ」

いきなり始まった秋さんのデュエル。見た限り、さつきと違ってシンクロデッキを使うみたいだけど、轟元さんは何デッキを使うのかな・・・

「俺のターンドロ・・・俺は手札から『ヘカテリス』を墓地へ送ることで『神の居城ヴァルハラ』を手札に加える」

ヴァルハラ！？ってことは天使族デッキ・・・に、似合わない

「そしてヴァルハラの効果発動！『アテナ』を特殊召喚する！」

アテナ ATK2600/DEF800

いきなり攻撃力2600のモンスターが召喚された。先攻は攻撃できないとはいえ、いきなり強力すぎだよ

「さらにカードを1枚伏せ、ターンエンド」

あれ？通常召喚をしないの？伏せカードは1枚。秋さんはこの状況からどう動くのかな、しつかり勉強しよつと

「俺のターンドロロー！俺は手札から『テイク・オーバー5』を発動！墓地にカードを5枚送る。さらに相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールドにモンスターが存在しない時『バイス・ドラゴン』を特殊召喚！」

バイス・ドラゴン ATK2000/DEF2400 ATK1000/DEF1200

あれ？攻撃力が半分になっちゃった。

「バイス・ドラゴンはこの召喚方法で召喚すると攻守は半分となる」

「それではアテナは超えられんぞ？」

「ふっ・・・俺はチューナーモンスター『ジャンク・シンクロン』を召喚！」

ジャンク・シンクロン ATK1300/DEF500

「チューナー？」

そっか！これでレッド・デーモンズ・ドラゴンが出ればアテナは倒せるし、秋さんが有利になる！

「ジャンク・シンクロンのモンスター効果発動！このカードの召喚に成功した時、墓地からレベル2以下のモンスターを特殊召喚！」

レベル・ステイラー』を特殊召喚！」

レベル・ステイラー ATK600/DEF0

「レベル1、レベル・ステイラーとレベル5、バイス・ドラゴンにレベル3のジャンク・シンクロンをチューニング！」

1 + 5 + 3 = 9

レ、レベル9！？そんなシンクロモンスターがいるの！？

「破壊神より放たれし聖なる槍よ、今こそ魔の都を貫け！シンクロ召喚！『氷結界の龍トリシューラ』！」

氷結界の龍トリシューラ ATK2700/DEF2000

出てきたのは三首の氷の龍。アテナより攻撃力は上だけど、一体どんなモンスターなのかな？

「氷結界の龍トリシューラの効果発動！召喚に成功した時、相手のフィールド、墓地、手札から1枚ずつカードを除外できる！」

ええ！？何その壊れ効果！すごいにも程があるよっ！

「ほう・・・やるな」

「俺は先輩の墓地のヘカテリス、フィールドのアテナ、真ん中の手札を除外する！」

除外されるモンスター達。そして手札は死皇帝の陵墓・・・上級モ

ンスターを召喚するデッキなのかな？

「バトル！トリシューラでダイレクトアタック！」

「畏発動！『攻撃の無力化』！バトルフェイズを終了する！」

「ならば、カードを2枚伏せてターンエンド！」

秋さんの攻撃は通らなかつたけど、秋さんはまだ有利！でもフィールドにはヴァルハラがある。轟元さん・・・次はどんなモンスターを召喚するんだろう

「俺のターンドロロー！秋、どうやら俺の知らない間に随分強くなつたな。だが俺も同じだ。お前と同様に強くなった・・・見せてやるう！俺はヴァルハラの効果を発動し、手札から『墮天使アスモディウス』を特殊召喚！」

だ、墮天使！？天使じゃなくて！？召喚されるのは黒い翼と鎧を持ったモンスター・・・そのさっきのアテナとは全く逆に禍々しさが表れている。

墮天使アスモディウス ATK3000/DEF2500

それに攻撃力3000って！

「アスモディウスの効果発動！1ターンに1度、自分のデッキから墓地へ天使族モンスターを1体送ることができる」

デッキ圧縮なのかな？でも、送るカードは一体・・・

「俺が墓地に送るのは『堕天使スベルビア』だ」

また堕天使？どんなカードなんだろう。でもそれより、フィールドのアスモディウスの攻撃力は3000・・・秋さんはどうやってこの現状を乗り越える気だろう？

「バトル！アスモディウスでトリシューラを攻撃だ！」

「永続罨オープン！『シンクロ・ストライカー・ユニット』！このカードは発動後シンクロモンスターの装備カードとなり、装備したモンスターの攻撃力を1000ポイントアップさせる！」

氷結界の龍トリシューラ ATK2700/DEF2000 AT  
K3700/DEF2000

「迎え撃て！『アイシングフレア』！」

轟元暁 LP4000 LP3300

「アスモディウスを破壊したか・・・だが」

墓地へ送られるアスモディウス。でもそこからアスモディウスが2体召喚された。ど、どうということ！？

「アスモディウスは戦闘で破壊されるとアスモトークンとディウストークンを特殊召喚できる。カードを1枚伏せてターンエンド」

アスモトークン ATK1800/DEF1300

ディウストークン ATK1200/DEF1200

「シンクロ・ストライカー・ユニットを装備したモンスターはエンドフェイズ時、攻撃力を800ポイントずつ下げる」

氷結界の龍トリシューラ ATK3700/DEF2000 ATK2900/DEF2000

「俺のターンドロロー！そしてテイク・オーバー5の効果でもう一枚カードをドロロー！俺は手札からチューナーモンスター『デブリ・ドラゴン』を召喚！」

デブリ・ドラゴン ATK1000/DEF2000

「デブリ・ドラゴンの召喚に成功した時、攻撃力500以下のモンスターを特殊召喚できる墓地の『カードガンナー』を特殊召喚する」

カードガンナー ATK400/DEF400

「そしてトリシューラのレベルを1つ下げ、レベル・ステイラーを特殊召喚する！」

氷結界の龍トリシューラ 9 8

レベル・ステイラー ATK600/DEF0

「レベル1のレベル・ステイラーと、レベル3のカードガンナーに、レベル4のデブリ・ドラゴンをチューニング！」

1 + 3 + 4 = 8



「集いし願いが、新たに輝く星となる！光差す道となれ！シンクロナ召喚！飛翔せよ」スターダスト・ドラゴン』！」

スターダスト・ドラゴン ATK2500/DEF2000

現れるスターダスト・ドラゴン。いつ見ても綺麗だなあ・・・星屑の龍の名を冠すその龍の翼から出るキラキラとした輝き。僕はいつもこれに目を奪われる。他のみんなも同じようにその龍に見惚れる。

「バトル！スターダスト・ドラゴンでアスモトークンを攻撃！」シンクロナ召喚』！」

砲撃に包まれて消える1体のトークン。そのまま連続攻撃すれば相手のフィールドはまた殻に・・・

「俺はこのままメインフェイズ2に移行する」

え？攻撃しないの？

「ほう？知ってたのか、ディウストーンクンの効果を」

「ディウストーンクンは戦闘では破壊できない」

そ、そうなんだ・・・だから戦闘をやめたんだね

「俺はトリシューラのレベルを1つ下げ、再びレベル・ステイラーを特殊召喚する」

レベル・ステイラー ATK600/DEF0

氷結界の龍トリシューラ 8 7

「カードを1枚伏せて、ターンエンド！シンクロ・ストライカー・ユニットの効果でトリシューラの攻撃力はまた800ポイント下がる。」

氷結界の龍トリシューラ ATK2900 / DEF2000 AT  
K2100 / DEF2000

これで秋さんの手札は0枚でフィールドにはトリシューラとスターダスト・ドラゴン・・・一方の轟元さんは2枚。そしてフィールドにはディウストークン。一見秋さんの方が有利には見える・・・見えるけど、轟元さんはこのままでは絶対に終わらない気がする。しかもトリシューラの攻撃力はここまで下がっているとただの雑魚モンスターに・・・

「俺のターンドロワー！ふむ、俺は手札から『トレード・イン』を發動する！手札の『墮天使ゼラート』を墓地へ送ることで、カードを2枚ドロワー出来る。さらに『強欲な壺』で2枚ドロワー！ふむ・・・俺はディウストークンを生贄に捧げ・・・いでよ！『墮天使エデ・アアラエ』！」

墮天使エデ・アアラエ ATK2300 / DEF2000

出てきたのはまた同じく墮天使・・・攻撃力は今のトリシューラを上回っている！

「バトル！エデ・アアラエでトリシューラを攻撃だ！」

「ぐっ・・・」

武藤秋 LP4000 LP3800

「カードを2枚伏せてターンエンド」

「ならば俺はエンドフェイズ『リビングゲットの呼び声』を発動しトリシューラを蘇生する！」

氷結界の龍トリシューラ ATK2700/DEF2000

再び現れるトリシューラ。でもシンクロ召喚じゃないから効果は発動しないみたい。これなら秋さんは有利なのは間違いない。でもなんでだろう・・・秋さんの顔に全く余裕がない。

「あの、雪乃さん？」

「何？レイ」

「なんだか、秋さんに余裕がないように見えるんですけど・・・」

「・・・そうね、堕天使デッキ。名前は聞いたことがあったけど、効果はよく知らない。でもプロの中にも使っている人を聞いたことがあるわ」

それほど強力なカードなんだ。

「俺のターンドロ―！俺は手札から『強欲な壺』を発動し、カードを2枚ドロ―！そしてトリシューラのレベルを一つ下げることです。レベル・ステイラー』を特殊召喚する！」

レベル・ステイラー ATK600 / DEF0

「畏発動！『激流葬』！フィールドのモンスター全てを破壊する！」

「させるか！スターダスト・ドラゴンの効果を発動！『ヴェクテム・サンクチュアリ』！このカードをリリースすることで、その効果を無効にし、破壊する！」

破壊を防ぐ秋さん。でもこうなるとこのターンは大ダメージを与えることはできない。

「さらに俺は手札のグローアップ・バルブを捨てることでチューナーモンスター『クイック・シンクロン』を特殊召喚する！」

クイック・シンクロン ATK700 / DEF1400

「レベル1レベル・ステイラーとレベル5のクイック・シンクロンをチューニング！」

1 + 5 = 6

「集いし絆が更なる力を紡ぎだす。光さす道となれ！シンクロ召喚！轟け、『ターボ・ウォリアー』！」

ターボ・ウォリアー ATK2500 / DEF2000

出てきたのは身体が紅い、タイヤのついたモンスター・・・なんて表現すればいいのかが正直ちよつと分からないかも。

「バトル！ターボ・ウォリアーで墮天使エデ・アラエを攻撃！」

アクセル・スラッシュ』！」

「っち！やるな！」

轟元暁   LP3300   LP3100

「さらにトリシューラでダイレクトアタック！『アイシングフレア』！」

「悪いな、罨カードオープン！『炸裂装甲』！攻撃宣言したモンスターを破壊する」

破壊されるトリシューラ・・・なんだか今日、トリシューラが出てきたり消えたり・・・可哀想に

「っく・・・ターンエンド！このエンドフェイズ、スターダスト・ドラゴンはフィールドに戻ってくる！飛翔せよ、スターダスト・ドラゴン！」

スターダスト・ドラゴン   ATK2500 / DEF2000

「俺のターンドロー！っふ、秋・・・お前とデュエルしているのに、まったく別の人物とデュエルしているように思えるよ。だがそれだけお前が変わった証だ・・・出し惜しみはしない、全力で行くぞ！手札から魔法カード『異次元からの埋葬』を発動し、墓地へアテナを戻す。そして『死者蘇生』を発動！蘇らせるのは『墮天使スペルビア』だ！」

墮天使スペルビア   ATK2900 / DEF2400

「そしてスペルビアの特殊召喚に成功した時、墓地からスペルビア以外の天使族モンスターを1体特殊召喚できる。俺が特殊召喚するのは『アテナ』！」

アテナ ATK2600/DEF800

「行くぞ、バトル！スペルビアでスターダスト・ドラゴンを攻撃だ！」

秋 LP3800 LP3400

「さらにアテナでターボ・ウォリアーを攻撃！」

「うわあああああつ！」

秋 LP3400 LP3300

い、一気にフィールドが……！すごい、これが墮天使デッキ……

「ターンエンドだ」

「つく、俺のターンドロー！手札から『貪欲な壺』を発動！俺はスターダスト・ドラゴン、トリシューラ、クイツク・シンクロン、ジヤंक・シンクロン、デブリ・ドラゴンをデッキへ戻しシャッフル……カードを2枚ドロー！」

これで引いたカードは2枚、で合計の手札は3枚。このライフとフィールドで勝てるかな……

「カードを1枚伏せ、モンスターをセット！ターンエンド！」

伏せモンスターと伏せカード・・・このままどうなるんだろう？

「俺のターンドロロー！どうやらここまでかな？秋」

「どうでしょうね・・・」

「俺はアテナの効果を発動。フィールドから『堕天使スペルビア』を墓地へ送る。そして再びスペルビアを特殊召喚！」

堕天使スペルビア ATK2900/DEF2400

「そしてアテナの効果でお前に600のダメージを与える」

武藤秋 LP3300 LP2700

また召喚されるスペルビア。こ、これじゃあまた墓地の天使族モンスターが・・・！

「そしてスペルビアの効果により、『堕天使ゼラート』を特殊召喚！そしてアテナの効果でお前に600のダメージだ」

堕天使ゼラート ATK2800/DEF2300

武藤秋 LP2700 LP2100

これでフィールドに並び立つアテナ、スペルビア、ゼラート・・・  
全て攻撃力は2500以上。こ、こんなのもう勝ち目なんてないよ・

・

「悪いが俺の勝ちだな、秋。ゼラートで守備モンスターを攻撃！」

「リバースカードオープン！『攻撃の無力化』！攻撃を無効にし、バトルを終了する！」

「ターンエンド・・・秋よ、諦めないことはいいいことだが、この状況で何ができる？諦める勇気も大切だと思うぞ」

「先輩、負けを恐れず一歩踏み出すのも勇気だと思いますよ？」

轟元さんの言葉に秋さんは笑い、そう返した。でも実際こんな状況もうひっくり返しようがないよ。秋さんシンクロデッキだとドローク運すごく悪いんでしょ？この状況じゃ・・・とてもじゃないけど

「俺のターンドローク・・・先輩、これは恐らく俺のラストターンだ。カードを1枚伏せる。そして反転召喚！『メタモルポッド』！互いのプレイヤーは手札を全て捨て、5枚ドロークする！」

メタモルポッド ATK700/DEF600

手札を全て捨てて5枚のドローク・・・秋さんの手札はゼロだからハンドレスからの5枚ドローク・・・でも、このドロークカードで全てが決まる。この状況をひっくり返すカードを、秋さんが引けるかどうか・・・

「行くぞ先輩！」

「こい、秋！」

「俺は伏せた『ワン・フォー・ワン』を発動！手札のボルト・ヘッ



ジホッグを墓地へ送り、デッキの『チューニング・サポーター』を特殊召喚！」

チューニング・サポーター ATK1000/DEF1000

「そしてデッキトップのカードを1枚墓地へ送り、グローアップ・バルブを特殊召喚！」

グローアップ・バルブ ATK1000/DEF1000

「さらに墓地からの特殊召喚に成功したことで『ドッペル・ウオリアー』を特殊召喚！そしてフィールドにチューナーがいるとき、ボルト・ヘッジホッグを特殊召喚！」

ドッペル・ウオリアー ATK800/DEF800

ボルト・ヘッジホッグ ATK800/DEF800

瞬間に埋まって行く秋さんのフィールドこれならまだいける！？

「レベル1のチューニング・サポーター、レベル2のドッペル・ウオリアー、レベル2のメタモルポッドにレベル2のボルトヘッジホッグ、レベル1のグローアップ・バルブをチューニング！」

1 + 2 + 2 + 2 + 1 = 8

「王者の鼓動！今ここに列を成す！天地鳴動の力を見るがいい！シンクロ召喚！我が魂『レッド・デーモンズ・ドラゴン』！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン ATK3000/DEF2500

この局面から、レッド・デーモンズ・ドラゴン・・・！

「そして、ドッペル・ウォリアーがシンクロ素材となった時、トークン2体を攻撃表示で特殊召喚！そしてチューニング・サポーターの効果でカードを1枚ドロウする！」

ドッペル・トークン？ ATK400/DEF400

ドッペル・トークン？ ATK400/DEF400

これだけの特殊召喚をしても手札は4枚・・・レッド・デーモンズ・ドラゴンと同じなのはアスモティウス。次のターンレッド・デーモンズ・ドラゴンをアスモティウスに攻撃されて相討ちにされちゃったら確実に秋さんの負け・・・なら、秋さんはまだ手を残しているはず！

「そして通常召喚！『ゾンビキャリア』！」

ゾンビキャリア ATK400/DEF200

「レベル1のドッペル・トークン2体と、レベル2のゾンビキャリアをチューニング！」

1 + 1 + 2 = 4

「いでよ、『アームズ・エイド』！」

アームズ・エイド ATK1800/DEF1200

「アームズ・エイドの効果発動！このカードを装備カードとして別のモンスターに装備できる！俺はレッド・デーモンズ・ドラゴンを選択！これによりレッド・デーモンズ・ドラゴンの攻撃力は1000ポイントアップ！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン ATK3000/DEF2500  
ATK4000/DEF2500

「バトルだ！レッド・デーモンズ・ドラゴンでアテナを攻撃！」アブソリュート・パワー・フォース！」

「いけ！アテナ！」

アテナとレッド・デーモンズ・ドラゴンがぶつかりあう。そしてアテナは碎け散った。

轟元暁 LP3100 1700

「そして、アームズ・エイドを装備したモンスターが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える」

「なるほど、俺の負け・・・だな」

轟元暁 LP1700 LP0

学園祭（後編）（後書き）

というわけで、番外編とは別に100万を記念して、前から何人かの方から募集があったデッキレシピの公開をしようと思います

誰の、何のデッキがいいのか？

例：秋の デッキのレシピを知りたいです

と、このような感じです。

それ+小説の感想ももらえると嬉しいです

よろしくです。もうすぐ学園祭編も終わります

## 学園祭（後編2）（前書き）

今回はすごく短いです。ごめんなさい

現在の投票

5 D・S 編	6 票
アイマス編	3 票
東方編	1 票

という感じです。まだまだ募集しますのでどうぞよろしくお願います

アンケートその1

番外編に何をみたいか？

- 1 5 D・S 編
- 2 アイドルマスター編
- 3 東方Project編

アンケート2

この作品の中のキャラクターが使用するデッキのレシピ

となっております

秋「今日の最強カードは・・・ない、だと!？」

はい、ありません。すいません

## 学園祭（後編2）

Side秋

デュエルは俺の勝利で終わった。墮天使デッキとか・・・マジで勘弁しろよ。スペルビアの効果とアテナの効果の組み合わせは強力すぎるからな・・・。しかもスペルビアはVジャンプの定期購読じゃないと手に入らないカードだから俺も前の世界では1枚しか持っていなかった。俺はゆっくりと轟元暁に近づいた。

「俺の勝ち、ですね」

「ああ、本当に強くなったな」

そう言いながら轟元暁は立ち上がり、手を差出す。

「久しぶりに負けをもらった・・・いいデュエルだった」

「いえ・・・」

同じように手を出し、握手する。武藤秋の記憶では、この人は曲がったことが嫌いで、なによりも俺を友として見てくれた。武藤秋を理解し、怪我を負ったこともあった。

「どうした、何か思いつめた顔だな。勝者がそんなんじゃないともねえぞ？」

「あ、あはは・・・すいません」

こういつた数少ない武藤秋の味方のためにも、俺は勝利しなければならぬ。あのバクラと、マリクの闇人格に・・・

「ま、何を思いつめてるのかは知らないが、一人で背負ってもいいことないぞ。俺は祭りも満喫したしそろそろ帰る。俺は今ドミノ町にいてな、気が向いたら遊びに来な」

「ええ、その時はまた」

「おう、じゃあな・・・プロで待ってるぜ」

そう言つて轟元暁は立ち去つて行つた。後に、あの轟元暁がプロデューリストになつてしていると知るのは、しばらく後の話だ。

とりあえず、学園祭は終盤へと近づいた。現在キャンプファイアーで生徒たちは盛り上がっている。イエローは食事会、オベリスクルーはパーティーらしい。一般の人もちやんと明日の船が出るので船の中で食事をする事が出来るらしい。今日一般人が来ていたのは豪華客船らしいからな。そして、俺達はというと・・・

『お疲れ様〜！』

俺、雪乃、ツアン、十代、翔、隼人、万丈目、三沢、マリア、レイ、凜、カイザー、吹雪、明日香、ジュンコ、ももえ、それにカミユールという、だいたいいつものメンバーである。最近三沢とマリアさんの仲が良くなったのでマリアさんもこのメンバーの一員でもある。いつものメンバーでお疲れ様会ということでレッド寮の食堂で食事となった。食事はもちろん雪乃、ツアン、マリアさん、カミユールだ。この4人は相変わらず料理が上手い。明日香については何も言

わないでおこう。さつきいじけていたしな。このメンバーでいた方が楽しいし、何より気楽だ。

「いやー・・・文化祭楽しかったなあ」

「楽しいって・・・十代、僕が見ていた限りアンタデュエルしかしてなかったじゃない」

・・・まったくだ。あの後レッド寮の前に戻ったら片っ端からデュエルを吹っかけて戦意を喪失した連中にまでもう一度デュエルを挑もうとする暴れっぷりだ。相当普段デュエル出来ないことが溜まっているのだろう。

「まったく、止めるのが大変だったわ」

「ははは、わりーわりー、つい楽しくってさ」

ため息をつく明日香と、笑っている十代。この二人はどう考えてもお似合いのだが、吹雪さんがいるので何も言わないでおこう。ま、十代は十代で女性に超が付くほど疎いし、明日香も明日香で奥手だからな

「・・・そういえば、レイ、凜。お前らも食事は船じゃなくてよかったのか？」

「うん、僕は秋さんと一緒の方がいいし・・・あの高い食事はもういいや」

「あの料理高いだけで美味しくもなんともないし、お兄ちゃんという方がいいもん」



「そうですか・・・」

ま、お前らが楽しいならそれはそれでいいんだけどね。俺は何も言わんよ

「だからお兄ちゃん、今夜はお兄ちゃんの部屋で泊る」

いいながら抱きついてくる凜。するとレイが頬を膨らませ、反対側から俺に抱きついた。

「だ、だめ！僕と一緒に寝るの！」

「駄目よ！お兄ちゃんは譲らないんだから！」

にらみ合いをする二人と、それに挟まれる俺。だ、誰か助けてくれ。そう思いながら顔を上げると、一斉に目を逸らされた。お前ら・・・

「ほら、やめなさい。秋が困ってるでしょ」

そう言いながら2人の襟首をつかむツァン。た、助かった・・・

「それに、今日秋と一緒に寝るのは僕の番なんだから」

「えー！ツァンさんずるい！」

「そうだよ！僕も一緒に寝るんだー！」

3人がぎゃいぎゃい騒いでいるうちに、いつの間にか雪乃がさりげなく俺の隣に戻ってきた。

「うふふ、秋」

「どうした？雪乃、心なしか頬が赤いような・・・というか、酒の匂い？」

手に持っているのはカミュラの持っていた、ワイン？

「しゅう〜・・・」

ぴったりと俺にくつつく雪乃。なんとも幸せそうな顔である。

「カミュラ！」

「別に私は無理に飲ませてないわよ？」

雪乃の奴、自分から飲んだのか？凄い酒臭いぞ

「しゅう〜・・・んー・・・」

俺の上に乗る、思い切り抱きつく雪乃。嬉しいことは嬉しいんだが、後ろの殺気が半端じゃない。

「秋（さん）（お兄ちゃん）」

「げっ・・・」

3人が騒ぐのを止め、ターゲットを俺に定めている！？

「十代助け・・・」

十代に助けを求めようとするが、既にあいつらは避難完了していた。

「秋！お前のことは忘れないぞ！」

「逝ってくるといいつス！」

「秋、女に疎いからこうなる、天罰だな」

「頑張るんだな」

「秋、すまん。どうにもならん」

「秋君、君も罪な男だね」

「……すまん」

十代、翔、万丈目、隼人、三沢、吹雪さん、カイザーが言う。この裏切り者オオオオ！この日俺はいろんな意味で泣きを見た。割と本気で……

### 秋の部屋

あの食事会否、打ち上げの後、とりあえず部屋に戻った。雪乃は酔いつぶれて寝ているのでベッドに寝かせる。そして3人はというと・

「」「」「」

まだにらみ合いをしていた。まったく・・・

「もういい、お前ら全員一緒に寝ればいいだろうが」

俺の一言にしぶしぶ了承し、ベッドに寝ることになった。右側にツアン、左側に凜が寝て、レイが俺の上に寝ることになった。レイはそこまで重くないからいいが、暑苦しい

「むー・・・まあいいけど、お休み秋」

「お兄ちゃんお休み」

「お休み秋さん・・・ああ、秋さんの匂い・・・」

「・・・お休み」

静かに時は過ぎていく。この世界で俺は大切な物が出来た。俺を思ってくれる大切な女性たち・・・この先、武藤秋が本当にこの世界を破壊するというのなら、俺は戦わなければならない。俺は、俺の力で・・・きつと、必ず。

## Sideミソ

今日は楽しかった。とても・・・戦いの間に出来たつかの間の休息でしたし、マナさんなんか遊び疲れて眠ってしまいましたし。マスター達も眠ってしまいました。マスターは何か考えているようでしたが、きつと自分のことを考えているのでしょうか。

「マスター・・・きつと私が守りますから」

「戻ったぞ・・・っと、ミラ。君だけか」

「マハードさん」

窓からマハードさんが入ってきました。

「マナはどうした？」

「マナさんなら疲れて寝てますよ」

私が言うと、マハードさんはため息をついていました。

「まったく、あれほど息抜きし過ぎるなといったのに」

「まあまあ、いいじゃないですか。それで、どうでした？」

「うむ、七星門の鍵・・・間違いなく秋殿の分も開いてしまっている」

つまりそれは、マスターがセブンスターズに負けた否、闇のゲームに敗北してしまったということ。

「もし、この先マスターに危険が迫るなら、私は命がけでマスターを守ります」

「それは私も同じだ・・・だが、何故バクラ達はすぐに秋殿の身体を狙わないのだろうか」

マスターの話ではバクラと呼ばれた男、マリクの闇人格と呼ばれた

男はもう全盛期の強大な闇の力を手に入れたという。だから私達も警戒をしている。それに関わらず、マスターの身体には何の異常も見られない。

「どちらにせよ、しばらく警戒を怠らないようにしなければな」

「ええ、もちろんです」

マスター・・・貴方は必ず、私が守ります。

学園祭（後編2）（後書き）

スイマセン、凄く短いです・・・（汗

**番外編 お試し版 遊戯王5D・S編 第一話(前書き)**

ということですが、5D・Sの第一話のお試し版です

投票数が一番多いので一番最初ってわけじゃないですが、他のも見  
て投票の方をお待ちしております

ではごきげん！



番外編 お試し版 遊戯王5D・S編 第一話

Side秋

「ここは、いつたい・・・」

気が付いたら、俺はここにいた。よく知らない町のど真ん中だ。正確には知らない場所で野宿していた。俺と雪乃とツアンと、十代・・・そして明日香。デュエルで救えることがなんなのか？その答えを探す旅。見知らぬ空き地で倒れていた俺は起き上がり周囲を見渡す。空き地を抜けるとすぐに都心部に出た。ここはいつたいどこなのだろうか？雪乃やツアンがいない・・・ついでに言えば精霊のみんなもいない。それにしても・・・

「すっげ・・・」

見れば幾重にも高層ビルが連なっている。日本ではあまり見ないような場所、ではあるのだがどこかで見たとような場所だ。ここは一体どこなのだろうか。すると、一つの看板が目に入った。

「ジャック・アトラス・・・!？」

そこにあつたのは看板だった。キング、ジャック・アトラス。俺の世界では元キングだとか、転倒王元キングだとか言われているあのジャック・アトラスだ。頭が痛い・・・詰まる話、俺は雪乃やツアンたちを置いて別の時代へ来てしまったということだ。俺はとりあえずコンビニを見つけ入る。俺の持つてる日本円は果たして使えるのか疑問だが、とりあえず聞いてみる。

「お願いします」

「はい、いらつしやいませ」

「この硬貨って使えます？」

と、俺はペットボトル分丁度の値段を見せる。

「え、ええ……もちろん。日本円ですから」

「じゃあこれで」

「はい、147円丁度いただきます」

とりあえずスポーツドリンクらしきものを購入し、外を出る。流石日本。お金は問題なくそのままを使えるわけか。とりあえず元の時代に帰りたいけど、どうやって帰ればいいんだ？町を抜け、港に出た。海が綺麗だな。そして遠くに見えるアレが、サテライトか？あそこだけ別世界って感じだな。ダイダロスブリッジは完成してないということは……えーと、フォーチュンカップ前か？まだジャックがキングだし

「カードは……」

あるよ。相変わらずトランクの中に。このトランクってどんな構造なんだろう。トランクの量は明らかに一致してない。とりあえず寝床が欲しいな。それとお金……銀行に行けばある程度この時代のお金に変えてくれるか？それともカードを売るか？それくらいならホテルには泊まれるだろうし

「考えていてもしかたないな」

この世界の事件はこの時代の人間がすることだ。俺には関係ない。いち早く十代達の元へ戻らなければいけない。

「おい、そこのお前」

「うん？」

後ろを振り返ると、確かセキュリティ？だったか、その服を着た男が近づいてきた。というか、この人牛尾さんじゃね？この人に関しては謎だ。というか、確か轟元さんの知り合いだったような……

「こんなところで何をしてる？ここは搜索区域だ。一般人は立ち入り禁止だぞ」

「そ、そうなのか、すぐに出ます」

「……まあいい、この辺に紅いDホイールに乗った男を見なかったか」

……ああ、遊星のことか。俺の見た限りでは見てないからなあ

「いや、見てない」

「ならいい……ここはもうすぐ搜索地区になるからとつとと離れな。捕まりたくなければな」

そう言って去って行く牛尾さん。なるほど、それで捕まってセキュリティにマーカー付けられたら溜まったもんじゃないな。それにし

ても、この辺が搜索区域だから人がいないのか。

「『忠告どうも』」

そう言っつてとりあえず歩き始める。それにしても広いなあ・・・ドミノシティとは全然違う。あれだけ小さな町がよくそこまで発展したものだ。町へ向けてしばらく歩く。やはり交通手段というものは欲しい。Dホイールか・・・ちよつと乗ってみたいけど、どれくらいするのだろうか。とりあえず免許は持っている・・・が、専用ライセンスがないのはやばいな。それにライセンスを取ろうにも住所とかその辺が。町の名前だつて旧の名前だろうし、何より免許の期間もコレすげえことになっている。ここつて何十年後の世界だろ？

「頭が痛くなつて来たよ・・・」

やるが多すぎて困る。そんなことを思索しながら歩いていると、どっかで見た緑色の髪の子供たちが目に入った。サテライトにいるような、なんとも柄の悪い男に絡まれている。とりあえずそいつらに介入することにした

「おい、子供相手になにやってるんだ」

俺が言つと、男は俺を睨みつける。

「こいつらがぶつかつてコーヒーを零しちまつたんだよ。クリーニング代を弁償してもらおうと思つてな」

「なんだよ！そつちがわざとぶつかつてきたんじゃないか！」

と、反発する緑髪の少年。まあ、龍亜だな。本来なら子供なんかに・

・・・と言いたいところだが彼らはトップスと呼ばれる金持ちが集まる場所に住んでいるほどだ。あの最上階の場所を2人で。そんな彼らに目を付け、金を取るうという魂胆なのだろう。

「子供から金を巻き上げるなんてみつともないな。サテライトの人間と変わらないぜ?」

「うるせえ!じゃあテメエが弁償してくれんのか?ああ!??」

・・・フォーチュンカップ編を見て思っていた感想だが、ネオドミノシティの人間はどうもサテライトという場所の出身だけで差別したり、マーカーが付いただけで色々と言句を言う。つまり団体的に少数を非難する連中のような。過去の人間として、別世界の人間としては何とも悲しいことだが・・・それが現実なのだろう。だが、時代が過ぎても変わらないことがある。

「ならデュエルだ。俺が勝ったら失せろ。俺が負けたらお前の服を弁償してやる」

「・・・いいだろう、やってやるぜ」

大体の出来事はデュエルでなんでも片づけることが出来る。

「<sup>デュエル</sup>決闘!」

S i d e 龍可

学校の帰りにぶつかった男の人が私達に服を弁償しろと言ってきた。

値段は破格のもの。今の私たちで払えないこともないけれど、そんな値段がするような洋服には見えない。そしてそこに龍亜が反発していた。そして私達の前に現れた男の人。黒い髪に黒いジャケット。・何かもが黒いその人は私達の肩代わりになってくれるという。そしてそれを決するためにデュエルをする。・そう言っていた。そして取り出したのは旧型のデュエルディスク。前に歴史で勉強したけど、前のデュエルアカデミアの本島で支給されていた物みたい。

「<sup>デュエル</sup>決闘！」

武藤秋	LP 4000
柄の悪い男	LP 4000

デュエルが始まった。

「俺の先攻ドロ！俺は。・。・。俺は手札からモンスターをセツト。カードを1枚伏せ、ターンエンド！」

一瞬、あの男の人の動きが止まったけど。・。・一体なんだったのかしら？

「俺のターン！俺は手札から『ゴブリン突撃部隊』を召喚！」

現れるゴブリン突撃部隊。 攻撃力2300のモンスター。・。・

ゴブリン突撃部隊 ATK 2300 / DEF 0

「バトルだ！裏守備モンスターを攻撃しろ！ゴブリン突撃部隊！」

開かれたカードは・・・シールド・ウイング！

「シールド・ウイングは戦闘では2回まで破壊されない」

「っち！ゴブリン突撃部隊は攻撃したら守備表示になる。カードを2枚伏せてターンエンドだ！」

「俺のターンドロ・・・っち」

さっきから頭を悩ませているように見える男の人。一体どうしたのかしら？

「ねえ龍可」

「なに？龍亜」

「なんだかあの人、さっきからカードを引くたびに息詰まってない？」

「そうね・・・どうしたのかしら」

男の人はしばらく考えた後、カードを選んだ。

「俺は手札から魔法カード『ワン・フォー・ワン』を発動。自分の手札にある『ボルト・ヘッジホッグ』を墓地へ送ることで、デッキから『チューニング・サポーター』を召喚！」

チューニング・サポーター ATK1000/DEF1000

「そしてチューナーモンスター『デブリ・ドラゴン』を召喚！さら

にフィールドにチューナーがいる時ボルト・ヘッジホッグを特殊召喚」

デブリ・ドラゴン ATK1000/DEF2000

ボルト・ヘッジホッグ ATK800/DEF800

チューナー・・・ってことはシンクロ召喚！

「レベル1のチューニング・サポーターと、レベル2のシールド・ウイング、レベル2のボルト・ヘッジホッグに、レベル4のデブリ・ドラゴンをチューニング！」

1 + 2 + 2 + 4 = 9

「破壊神より放たれし聖なる槍よ、今こそ魔の都を貫け！シンクロ召喚！『氷結界の龍トリシューラ』！」

氷結界の龍トリシューラ ATK2700/DEF2000

ト、トリシューラ！？持つてる人が限られる最上級のレアカード！あの人あんなものを持っているの！？

「な、トリシューラだとお！？」

「トリシューラの効果発動。シンクロ召喚成功時、相手の手札、フィールド、墓地のカードをゲームから除外。左の手札、フィールドの伏せカード1枚を除外する」

除外されたのはゴブリンエリート部隊と伏せていたらしい聖なるバ



リアミラーフォース・・・

「そしてチューニング・サポーターの効果で1枚ドローする。バトルだ。ゴブリン突撃部隊を攻撃！『アイシング・フレア』！」

凍って砕けるゴブリン突撃部隊。

「カードを1枚伏せ、ターンエンド」

「つく！俺のターンドロー！俺はモンスターをセットしてターンエンド！」

「俺のターンドロー・・・俺はカードを2枚伏せる。そして『命削りの宝札』を発動する」

命削りの宝札！？あれもまたレアカードだよな！？なんでそんなカードばかり！

「ハンドレスからの5枚ドロー・・・！さらにチューナーモンスター『ジャンク・シンクロン』を召喚！」

ジャンク・シンクロン ATK1300/DEF500

「召喚成功時レベル2以下のモンスターを蘇生する。こい、シールド・ウイング」

シールド・ウイング ATK0/DEF900

「さらに墓地からの蘇生に成功した時『ドッペル・ウォリアー』を特殊召喚」

ドッペル・ウォリアー ATK800 / DEF800

「レベル2のドッペル・ウォリアーとレベル3のジャンク・シンク  
ロンをチューニング！」

2 + 3 = 5

「刻まれし正義の名のもとに、今こそ破壊の限りを尽くせ！シンク  
ロ召喚！起動せよ『A・O・Jカタストル』！」

A・O・Jカタストル ATK2200 / DEF1200

「そしてドッペル・ウォリアーを素材とした時、ドッペル・トーク  
ン2体が特殊召喚される」

ドッペル・トークン？ ATK400 / DEF400

ドッペル・トークン？ ATK400 / DEF400

「そして手札の『グローアップ・バルブ』を墓地へ送り、『クイッ  
ク・シンクロン』を特殊召喚！」

クイック・シンクロン ATK700 / DEF1400

「レベル1のドッペル・トークンとレベル2のシールド・ウィング  
にレベル5のクイック・シンクロンをチューニング！」

1 + 2 + 5 = 8

流れるようにモンスターが展開され、シンクロ召喚される。すごい・

「光速より生まれし肉体よ、革命の時は来たれり！勝利を我が手に！シンクロ召喚！煌めけ『フルール・ド・シヴァリエ』！」

フルール・ド・シヴァリエ ATK2700/DEF2300

「あ、ああ・・・」

あの柄の悪い男の人は顔を青くしている。目の前には攻撃力2000以上のモンスターが3体も並んでいるのだから当然と言えば当然だった。

「さて、バトルだ。守備モンスターにカタストルで攻撃！」

破壊されるのはデーモン・ソルジャー・・・でも、壁にもならなかつたみたい。

「そしてモンスター一斉攻撃だ！」

「う、うわあああっ！」

柄の悪い男 LP4000 LP0

「すごい・・・」

その一言だった。龍亜も驚いて声も出ないみたい。本当にすごい・・・シンクロ召喚のコンボと、カードを展開する展開力・・・男の人は静かにデッキを納めた

「さて、約束だ。さつさと失せる」

「く、くそっ……！」

男はさつさと逃げて行った。それにしても、この人どこかで見たよ  
うな気が……

「大丈夫だったか？」

「あ、うん！ありがとうございます！」

「ありがとうございます」

お礼を言うと、男の人はにっこりと笑っていた。

「ああ、これからは気を付けな」

「……」

すると、龍亜がじーっと男の人を見る。どうしたのかしら？ほら龍  
亜、困ってるじゃない

「俺の顔に何かついてるか？」

「お兄さんどこかで見た気がする……うーん……？」

首を捻る龍亜。私もどこかで見た気がするんだけど。どこだったか  
しら？と、そう言えば



「エート、ヒトチガイデス」

「嘘つけ！」

目を不意に逸らした武藤秋さんに、私達は同時に突っ込んだ。

「すげえ！3代目決闘王が俺の目の前に！サ、サインください！」

「イヤ、ナンノコトカナ？シランヨ？」

「あの、秋さん、もう無理があると思うわ」

私の言葉に、秋さんはため息をついた。

「ですよー・・・ま、お察しの通り、武藤秋。3代目決闘王だ」

「でも、3代目ってもう何十年前の話・・・なんで顔がまったく変わってないのかしら」

もうおじさんか、お爺さんくらいの年のはずなのに

「それがその、何とかなあ・・・信じてくれるかは分からないんだけど、気が付いたらタイムスリップしてたんだよね、俺」

頭をかきながら言う秋さん。へえ・・・って、タイムスリップ！？

「そんなことがあるのかしら？」

というか、普通に聞いても信じられない・・・って、あれ？

「クリボン？」

『クリクリー……！』

クリボンがいきなり出てきた秋さんの周りを楽しそうに飛んでいた。

「おお、クリボンじゃん。ハネクリボーそっくりだなあ」

と、見ている秋さん。まさか

「秋さん、クリボンが見えるの!？」

「おう、俺も精霊は持っていたからな。今はいなくなったが……待てよ?」

言いながら秋さんは1枚のカードを取り出した。

「久遠の魔術師ミラを召喚！」

ディスクにカードをセットすると、モンスターが勢いよく出てきた

『マスター!』

し、しかも実体化したあ!？龍亜も驚いているみたい。久遠の魔術師ミラと呼ばれたカードは勢いよく秋さんに抱きついた。

「マスター!マスター!うう……うわーん！」

「お、おいおい……落ちつけよミラ」

「だって、だって……いきなりカードの中に入っちゃって……それ以降出れなくて……」

うーん……なんだか話がややこしくなって来たわね。

「あの、秋さん」

「ん？」

「よかつたらうちに来ませんか？タイムスリップってことはお家もないんでしょ？」

「話を信じてくれるのか？」

「ええ、秋さん悪い人には見えないし、私達を助けてくれたからお礼もしたいわ」

カードの精霊が見える人にきつと悪い人はいないわ。それに、龍亜も来て欲しいって雰囲気丸出しだし。

「うんうん！龍可の言うとおりだよ！」

「でも、ご両親も心配するんじゃないか？」

「私達2人暮らしなの。お部屋もいっぱいあるし、ね？」

こうして、私は秋さんとミラさんを引つ張り、自分たちの家へと向かうことにした。そしてこの出会いが、私達の運命を後に大きく変えることなど、今の私達は知らなかった。





番外編 お試し版 遊戯王5D・S編 第一話（後書き）

次はアイマス編のお試し版第一話です

**番外編 お試し版 アイドルマスター編 第一話（前書き）**

ってなわけでアイドルマスター編です

どうぞっ！

番外編 お試し版 アイドルマスター編 第一話

Side秋

目を覚ますと、俺は知らない場所に立っていた。時間帯からして夜だろう。綺麗な満月が見える。

「ここ、どこだ？」

見たところ日本ではあるようだ。でもおかしいな。俺達は国を超えていたはずなんだが……

「雪乃ー？ツアナー？十代ー？明日香ー？」

呼ぶが誰もいない。まあ、周囲に人影はないし……いったいどういうことなんだろうか？イマイチ理解に苦しむ。とりあえずどこか寝る場所を探してみよう。この様子だとミラ、マハード、マナもいないだろう。となれば……夢の中で精霊界に行ってみるしかない。

「」

移動しようとした時、歌声が聞こえた。とても可愛い歌声だ。

「誰かいるのか？」

もう夜だ。この時間帯に女の子の声がするなんて普通ないと思うんだがな。そう思いながらその歌の聞こえる方を見た。二つのリボンをつけた女の子が歌の練習をしている。丁度いい、あの子に道を聞

こう。見たところ日本のようだし、日本円の貯蓄もバッグに入っている。ホテルくらい探せるだろう。女の子は俺には気づかないようだ。必死に歌の練習をしている。でも、その足元にある物も気になった。アレは、デュエルディスク？俺のと同じ世代の物のようだが・・・とりあえず道を尋ねてみることにしよう

「なあ、そのキミ・・・」

「・・・はい？ってキヤア!？」

女の子は振り向いた瞬間盛大にこけそうになる。俺はとりあえずそれを受け止めるように止めた。

「だ、大丈夫か？」

「は、はい、慣れてますから。ありがとうございます」

慣れているって・・・何もない場所で振り向いた瞬間バランスを崩すことがしょっちゅうあるのか？つと、そんなことより・・・

「この辺にホテルとかないか？もちろん一般的宿泊用のホテルだが・・・」

この時間帯にホテルの場所を女の子に聞くと色々な意味で誤解されそうだな。なんというか、捕まりそうだ。なので一応、ワードに一般宿泊用と付けたわけだが

「え、ホテルってことは・・・泊まれる場所ってことですか？」

「ああ」

「えっと……この辺だと近くにビジネスホテルがあります！」

ビジネスホテル……まあ、寝るだけだし、妥当だろう。

「どっちにあるかわかるかな？」

「えっと、その道を出ると大通りに出るんです。あ、よかったです。案内しましょうか？」

それはありがたいな。この知らない場所で迷子になるというのも困る。この辺に住んでいる子であるというなら詳しいだろう……。が、この子随分人のこと疑われないんだな。俺は一見見れば不審者だし……。普通警戒するだろう。この時間帯で道案内とか普通しないぞ

「じゃあ、お願いしようかな……。えっと、君の名前は？」

「はい！私、あまみ はるか天海春香って言います！」

おおっ……。元気っ子だな。というか、アレだけ歌って踊っていたのに元気とか、すごいな。

「俺は武藤秋だ。よろしく」

「はい！じゃあ行きましょう」

と、歩こうとすると太っていて、眼鏡をかけ天海さんの写真がプリントされたシャツを着た男が現れた。

「春香ちゃん……。はあ、はあ……」

き、きもっ！なんだこの絵に描いたような典型的なオタクは！俺の世界にもこんなオタクいねーぞ！？というか、この子・・・歌を歌っていたということはアイドルとか歌手なのか？

「だ、誰ですか！？」

流石に天海さんも驚いているようだ。まあ、こんな典型的な人が出てきたら普通驚くだろう。

「ぶひひ・・・春香ちゃん、いつも練習見てるよ・・・いつも応援してるんだ・・・」

「え？あ、ありがとうございます？」

と、困りながら一応笑顔でお礼を言う天海さん。いや、これはお礼を言っちゃいけないフレーズだろ。いつも練習見てるって・・・

「そ、そ、そして！そこのお前！僕の春香ちゃんと何をしてるんだ！」

「・・・は？」

いきなり何を言ってんだこいつは。

「僕の春香ちゃんと一緒に、ホ、ホ、ホテルに行くとか！許さんっ！」

鼻息を荒くするオタク。超が付くほど気持ち悪い。そしてかなりの誤解がある。

「おい、ちょっと待て・・・俺は「言い訳無用!」おい、会話しろよ」

言いながらオタクはデュエルディスクを構えた。おいおい、デュエルで解決する気か。さっき携帯電話を見たが、こんな開けた場所であるはずなのに圏外。この世界が俺の世界かどうかと聞かれれば限りなく可能性は低いだろう。

「仕方がない・・・」

俺は鞆を開け、デュエルディスクを装着する。デッキは・・・もうシンクロデッキでいいだろう。

「・・・いいだろう、売られたデュエルは買うぞ」

「この豚田が貴様を肅正するんだ!覚悟しろー!」

・・・本当に絵にかいたような男だな。まあいい、俺が敗北した後何が起こるかわからん。この天海春香って子が何者かは後にして、今は目の前の男だ。

「い、い、い、行くぞお!」

「・・・はあ、来い!」

「<sup>デュエル</sup>決闘!」

武藤秋 LP4000



豚田 LP4000

Side 天海春香

突然始まった決闘。最近変な視線があると思ったら、あの人だったんだ。でも会話の内容聞いたら誤解しているのもわかる気がするけど、あの太った人・・・ようするにストーカー？そう考えると怖くなってきた。私まだテレビだって1度だけしか出てないし、ファンな人は嬉しいけど・・・そういうのはちょっと・・・

「せ、先攻は僕だ！ドロー！」

「好きにしる」

普通、じゃんけんとかで決めるのに・・・酷いなあ。勝手にドローしてるよ。あの武藤さんもため息をついてる。

「僕は手札から『ビック・シールド・ガードナー』を召喚！」

ビック・シールド・ガードナー ATK1000/DEF2600

「カードを2枚伏せてターンエンド！」

ビック・シールド・ガードナー・・・守備力2600の強力モンスター・・・すごい。武藤さんはどんなカードを出すんだろう・・・

「俺のターン！俺は手札から裏側守備表示でモンスターをセット、ターンエンド」

「ぼ、僕のターン！僕は手札から『デーモンソルジャー』を召喚！」

デーモンソルジャー ATK1900/DEF1500

今度は闇属性の 4でも攻撃力が高いモンスター！？

「攻撃だ！デーモンソルジャー！」

「・・・セットモンスターは『スノーマンイーター』だ。このカードはリバースした時、フィールド上のモンスターを1体破壊する。俺が破壊するのは『ビック・シールド・ガードナー』だ」

破壊されるビッグ・シールド・ガードナー・・・それに守備力1900！？見たことないモンスターだけど、すごく強力なカードだということ分かる。

「ぶ、ぶうー・・・ならば僕はカードをさらに1枚伏せ、ターンエンドだ」

「・・・俺のターンドロウ！俺は手札からチューナーモンスター『デブリ・ドラゴン』を召喚！」

チューナーモンスター？

「ぶ、ぶひっ！？なんだそれは！」

「見てれば分かる」

デブリ・ドラゴン ATK1000/DEF2000

「レベル3のスノーマンイーターに、レベル4のデブリ・ドラゴンをチューニング！」

『チューニング!?』

聞いたことのないことだけど・・・いったいなんだろう？

「・・・チューニングとは、チューナーと呼ばれたモンスターと通常のモンスターのレベルを足し、自分の融合デッキからモンスターを召喚する特別な召喚に必要な手順だ。そこからシンクロ召喚と呼ばれるものに繋げる」

すごいなあ・・・そんな方法の召喚があるんだ。

3 + 4 = 7

「冷たい炎が、世界の全てを包み込む・・・漆黒の花よ、開け！シンクロ召喚！現れよ、『ブラック・ローズ・ドラゴン』！」

ブラック・ローズ・ドラゴン ATK2400/DEF1800

黒いドラゴンが姿を現した。その花に身体を包むドラゴン・・・すごい

「ぶ、ぶひ!? 攻撃力2400だって!? (だ、だが大丈夫・・・僕の伏せたカードにはミラーフォースと炸裂装甲が・・・)」

「ブラック・ローズ・ドラゴンの効果発動! このカードの召喚に成功した時、フィールド上に存在するカードを全て破壊する事ができ

る。いくぞ、『ブラック・ローズ・ガイル』！」

風が吹き荒れバラの花びらが飛ぶ。そしてその花びらはモンスターや伏せカードを包み、破壊された。

「ぶひいひい!?!」

「ミラーフォースと炸裂装甲ねえ……カウンターだったなら得したな」

確かに、モンスターで攻撃していたらやられていたかもしれない。でも、召喚しちゃったし、このターン攻撃はできないんじゃない……

「魔法カード『死者蘇生』を発動。墓地へ送った『ブラック・ローズ・ドラゴン』を特殊召喚する! 舞い戻れ、ブラック・ローズ・ドラゴン!」

ブラック・ローズ・ドラゴン ATK2400/DEF1800

「バトルだ。ブラック・ローズ・ドラゴンでダイレクトアタック! 『ブラック・ローズ・フレア』!」

「ぶひいひいっ!」

豚田 LP4000 LP1600

「カードを1枚伏せてターンエンド」

「ぼ、僕のターンだ! ドロー! 僕は手札から再び『ビック・シールド・ガードナー』を召喚!」

ビック・シールド・ガードナー ATK1000/DEF2600

守備力がまた大きいカードが・・・これじゃあブラック・ローズ・ドラゴンでは攻撃を超えることはできない。

「そして『光の護封剣』を発動！さらにカードを1枚伏せてターンエンド！」

「俺のターンドロ・・・ふむ、どうするか」

考えている武藤さん。光の護封剣とビック・シールド・ガードナー・・・これじゃあ攻撃なんて容易に突破は出来ない。

「俺は手札から『愚かな埋葬』を発動。墓地へ手札の『チューニング・サポーター』を送る。さらに『シールド・ウィング』を守備表示で召喚。ターンエンド」

シールド・ウィング ATK0/DEF900

「僕のターンだ！ドロ・・・！僕が召喚するのは『疾風の暗黒騎士ガイア』！このカードは手札がこのカード1枚の時、生贄ナシで召喚できる！」

「・・・ほう」

「バトルだ！シールド・ウィングを攻撃！『螺旋槍殺』！」

「シールド・ウィングの効果！このカードは2度まで戦闘では破壊されない！」

す、すごい、そんなカードがあるんだ。そのカードが来れば3体目まで攻撃は通らないんだね！

「つくそ！僕はターンエンドだ！」

「俺のターンドロ―・・・俺は手札からチューナーモンスター『ジャンク・シンクロン』を召喚！」

ジャンク・シンクロン ATK1300/DEF500

「そ、そ、そ、そうはさせんぞお！畏カード発動！『激流葬』！（僕は伏せカードにリビングデットを伏せている。これなら・・・）」

「・・・残念だったな、畏発動！『スターライト・ロード』！」

出てきたのは綺麗な龍が描かれた畏カードだった。

「このカードは、相手の2体以上のモンスターを破壊する効果を無効にし、破壊する。そして融合デッキから『スターダスト・ドラゴン』を特殊召喚する。そして問題なく、ジャンク・シンクロンを召喚できるわけだ」

スターダスト・ドラゴン ATK2500/DEF2000

「きれー・・・」

カードから飛び出て来たのは白銀の翼と、白い体をしたドラゴン。とても綺麗で、キラキラと何かが周囲を覆う。星屑の龍・・・そう

呼ばれた通りの姿と、それでありながらキリツとしたその身体。思わず魅入ってしまう。いつもいるんな女の人が付ける装飾品なんか、かすんで見えてしまいそうな・・・そんな輝き

「そして、ジャンク・シンクロンの効果発動！このカードの召喚に成功した時、レベル2以下のモンスターを特殊召喚できる。墓地に送った『チューニング・サポーター』を特殊召喚！行くぞ、レベル1のチューニング・サポーターと、レベル2のシールド・ウィングに、レベル3のジャンク・シンクロンをチューニング！」

1 + 2 + 3 = 6

「疾風の使者よ、鋼の願いが集う時、その願いは鉄壁の盾となる！シンクロ召喚！現れる、『ジャンク・ガードナー』！」

ATK1400 / DEF2600

今度出てきたのは盾を持ったロボットみたいなモンスター・・・凄  
い、なんだかカッコいいなあ・・・

「そして、チューニング・サポーターの効果でカードを1枚ドロ  
する！俺はこれでターンエンド」

次の武藤さんのエンドフェイズ、光の護封剣は消える。

「ぼ、僕のターン！ぶひひ・・・お前を撃沈させる最強のカードだ  
！」

「なに？」

「僕は疾風の暗黒騎士ガイア、そしてビック・シールド・ガードナーを生贄に捧げ……いでよ！『千年原人』！」

千年原人 ATK2750/DEF2500

攻撃力2750！これじゃあ武藤さんのモンスターよりも攻撃力が高い！つて、なんだか余裕そうな武藤さん。というか、千年原人を珍しいそうに見ている

「……いるんだな、そのカードを使う人間が」

「その目障りな龍を倒してやる！いけー！千年原人！『ブラック・ローズ・ドラゴン』を攻撃だー！」

「ジャンク・ガードナーの効果発動。相手モンスターの表示形式を変更できる！千年原人を守備表示に変更！」

ブラック・ローズ・ドラゴンに襲い掛かる千年原人は攻撃を中止して元の場所で守備表示になった。

「く、くそう！ターンエンド！」

「俺のターンドロ……カードを1枚伏せ、ターンエンド！」

このターンで光の護封剣は消える。光の護封剣は消滅した。これで武藤さんは攻撃が出来る

「僕のターンだ！ドロ！僕はこれでターンエンドだ！」

「俺のターンドロ！チューナーモンスター『ゾンビキャリア』を



召喚！」

ゾンビキャリア ATK400/DEF200

「レベル6のジャンク・ガードナーに、レベル2のゾンビキャリアをチューニング！」

6 + 2 = 8

「王者の鼓動、今ここに烈を成す！天地鳴動の力を見るがいい！シンクロ召喚！我が魂！」レッド・デーモンズ・ドラゴン！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン ATK3000/DEF2500

「攻撃力、3000！」

すごい！あんなモンスターもいるんだ・・・攻撃力3000のモンスター・・・これで千年原人の攻撃力を上回った。

「そ、そんな・・・この僕が負けるわけが・・・」

「バトル！レッド・デーモンズ・ドラゴンで千年原人を攻撃！」アブリュート・パワー・フォース！」

炎の宿った腕が、千年原人を打ち砕いた。

豚田 LP1600 LP1350

「そしてスターダスト・ドラゴンとブラック・ローズ・ドラゴンでダイレクトアタック！」シューティング・ソニック！」ブラック・

ローズ・フレア』！」

「ぶ、ぶひひひひひ！」

豚田 LP1350 LP0

豚田さんは吹き飛ばされてしまった。すごい迫力だったなあ・・・

「やれやれ・・・」

ため息をついている武藤さん・・・もしかしたら、この人なら・・・

Side 秋

「ふう」

とりあえずデュエルディスクを収納した。気絶してるし、放置だなあいつは。

「・・・・・・・・」

天海さんが固まってる。どうしたんだ？

「あのー・・・天海さん？」

「すっ・・・・・・・・いいですー！」

「は？」

「デュエルがお強いんですね！びっくりしちゃいました！」

なんだかすごい笑顔を向けられる。えーと・・・まあ、うん

「あ、ありがとう」

「どうやれば私もあんな風に強くなれますか！？私その、これでもアイドルを目指しているアイドルの卵なんですけど、デュエルアイドルになるため、特訓中なんです！」

デュ、デュエルアイドル？なんだかアイドル育成コースに入れらそうになった明日香達みたいだな・・・

「へ、へえー・・・」

「それで！どうすればそんなに強くなれるんですか！？」

「強く、と言われてもなあ・・・」

基本的にカードで強いと言われましても・・・カードの種類が多かったり、シンクロしたりしてるからなあ。まあ、何よりも大切なのは・・・

「まず、自分のデッキを理解すること」

「理解、ですか？」

「うん・・・君のデッキがどういう風に動くためのデッキなのか？何を目的とするデッキなのか？明確に動き、特性を理解すること。理解と言うよりも知るということに近いけど、それだけでも運用性

はぐんと上がるはずだ」

「デッキを知る・・・はい！頑張りますっ！」

うん、意気込むのはいいことだ。いいことなんだけど・・・

「出来ればそろそろホテルの場所を案内してもらえると助かるんだけど・・・」

「はっ！そうでした！じゃあ行きましょ・・・わきゃああ！？」

歩き始めた瞬間ドテンツという効果音と共に盛大に転ぶ天海さん。

「だ、大丈夫？」

「は、はい・・・慣れてますから・・・」

そうなんだ・・・慣れてるんだ。さっきも言ってたな。こうして俺は天海さんと一緒に大通りへと出て行った。気絶した豚田は放置して

とあるビジネスホテル

「部屋がない？」

「はい、大変申し訳ないのですが・・・今日はお客様でいっぱいです・・・」

となると、どうかネカフェとかで時間を潰すか。他のホテルを探す

か・・・どうしようかな。時間は9時、か。あの豚野郎とデュエルしなければまた結果も違った気がするが仕方がない。とりあえずこんな時間だし、この子は家に帰さないとな。ホテルを出る。

「ここまでありがとう天海さん。もうこんな時間だし君は自分の家に帰らないと」

「えっ・・・でも、武藤さんはどうするんですか？」

「うーん、まあ・・・ネットカフェとか、漫画喫茶で一夜明かすさ。なければ最悪野宿くらいなんとかなるし」

「・・・こんな都会の様な場所で野宿したら通報されそうで怖いけどな。」

「そ、そうですか・・・・・・あっ！そうだ、よければ事務所に来ませんか？」

「事務所？」

「はい、私が所属している765プロダクションの事務所です。そこならソファもあるし、毛布もありますから」

「え・・・いや、気持ちは嬉しいけど、事務所の人が驚くだろうしいいよ」

「大丈夫です！今日はもうみんないません！」

いや、それはそれで問題だろ。天海さん一人にして大丈夫なのか、プロダクション

「それに、君だって帰らないと親が心配するだろ？俺が一人でプロダクションにいるわけにもいかないし……」

「大丈夫です！後で電話しますから！」

「いや、だからね？」

「その、迷惑……ですか？」

うっ……そう言われると心が揺らぐ。この子なりに精一杯俺に何かしたいということなのだろう………仕方がない

「じゃあ、お願いしようかな」

「はいっ！」

こうして俺は天海さんの案内で俺は765プロダクションへ向かうこととなった。この時の選択は少なくとも間違っではいなかった。それでも、彼女と、この後で合う子たちの運命は、少しずつ揺らいでいくことになるのを、俺はまだ知らない。

番外編 お試し版 アイドルマスター編 第一話（後書き）

次は東方Project編です

番外編 お試し版 東方Project編 第一話(前書き)

東方編です



番外編 お試し版 東方Project編 第一話

Side秋

気が付くと俺はよくわからない場所にいた。町着いてから、俺と雪乃、ツァン食料の買い出しをしていて突然穴へ落とされた。あの穴はいつたい？それに周囲は目が沢山ある空間。これはいつたい・・・？

「初めまして？武藤秋・・・」

俺の前に現れたのは金髪で紫色のドレスを着て、傘をさした女性だ。その女性らしい身体は魅力的に思うだろう。だが、今はそんなことどうでもいい

「お前は・・・何者だ？」

「私は八雲紫・・・幻想郷の管理者ですわ」

幻想郷？

「そんなことはどうでも良い・・・俺をここから出せ」

「そうはいかない。貴方はこのまま幻想郷に行くのだから」

幻想郷・・・？

「貴方・・・中に違う人格が混じっているのでしょうか？そしてその貴方の中の人格が、人々から忘れられている」

「っ……！」

なん、だと……

「武藤秋……武藤遊戯の従弟にして、決闘王としても名高いあなた。そんな貴方をお願いがあるの」

「お願い、だと？」

言いながら八雲紫はどこからかデュエルディスクを取り出した。

「このデュエルモンスターズを幻想郷に広めてほしいの」

「何？」

「この世界では、スペルカードと呼ばれる『弹幕ごっこ』というものが存在する。でも現世ではデュエルモンスターズが世間のことの全てを解決すると聞いているわ。そのデュエルモンスターズを是非この幻想郷に広めてほしいのよ」

幻想郷にデュエルモンスターズを？そんなことをして何に……いや、考えられるのはいくつかある。弹幕ごっこというのがよくわからないが、それ以上にデュエルモンスターズが安全かつ簡潔に事件や厄介事を解決する手段の一つだとしたら？だからこそこの女は俺にそれをやらせようというのだ

「断る、と言ったら？」

「貴方は一生、この世界にいることになるわね」

「脅しか、それは」

俺が言うと、八雲紫はクスクスと笑う

「別にそうじゃないわ。貴方に依頼をしているのよ」

「報酬がない依頼を依頼とは呼ばないな。俺にメリットがない」

「そうね、貴方を元の世界に帰すというのでどう？」

あまりに一方的だ。この世界に引きづり込んだのはあの女だ。それで報酬が元の世界に帰す？ふざけるのも大概にして欲しいものだ。

「なら、貴方に力を前報酬で与えるのはどう？」

「力、だと？」

「この世界ではデュエルモンスターの認識はまだ薄い。もし広めようとしてもそこで命を落とされたら本末転倒。ならば貴方に力を与える。私の式の力でね」

式・・・式神ってことか？

「貴方は望んでいるのでしょうか？そのデュエルモンスターの力で遊城十代の力になりたいというものを」

「っ・・・！」

「もし私の依頼を達成させたらその式の力を元の世界でも使えるよ

うにしてあげましょう。それでどう?」

「……魅力的な報酬、とはいえないが元の世界に帰る方法が現状でない以上、この女の話に乗る他ない。」

「……いいだろう、その話、乗ってやる」

「あら嬉しい……なら、もう一つお願いを聞いてくれる?」

「何?」

言っと、八雲紫はデュエルディスクをセットした

「私とデュエルをしましょう?」

拒否権はなさそうだ。仕方がない

「良いだろう、来い!」

「<sup>デュエル</sup>決闘!」

武藤秋 LP4000

八雲紫 LP4000

「先攻は頂くわ。決闘王に挑むのですもの、いいでしょう?」

「好きにしな」

こいつがどんなデッキを使うかは知らないが、負けるつもりはない。

「私のターンンドロー・・・私は手札から永続魔法『次元の裂け目』を発動するわ。これで互いのプレイヤーの墓地へ送られるモンスターは墓地へは行かずゲームから除外されるわ。そして、手札から『ガーディアン・エアトス』を特殊召喚する。このカードは墓地にモンスターがない場合特殊召喚出来るわ」

ガーディアン・エアトス ATK2500/DEF2000

おいおいおい・・・まさかのエアトス軸のデッキかよ。

「さらに、E・HEROエアーマンを召喚。第2効果を使用し、『E・HEROアナザー・ネオス』を手札に加えましょう」

E・HEROエアーマン ATK1800/DEF300

「カードを2枚伏せ、ターンエンド。さあ、貴方のターンですわ」  
完全に次元エアトスだな。このデッキでどこまでいけるか・・・否、行くしかない。

「俺のターンンドロー！俺は手札からモンスターをセット！カードを2枚伏せ、ターンエンド！」

「私のターンンドロー・・・私は手札から『E・HEROアナザー・ネオス』を召喚」

E・HEROアナザー・ネオス ATK1900/DEF1300

「ではバトル・・・アナザー・ネオスでセットモンスターを攻撃！」  
「セットしていたのは『マシユマロン』！戦闘では破壊されず、相手に1000のダメージを与える！」

マシユマロン ATK300 / DEF500

八雲紫 LP4000 LP3000

「やってくれますね・・・ならば、ターンエンド」

「俺のターンドロ！俺は手札から『ガガガマジシャン』を召喚！」

ガガガマジシャン ATK1500 / DEF1000

「そしてこのカードの召喚に成功した時、『カゲトカゲ』を特殊召喚！」

カゲトカゲ ATK1100 / DEF1500

「さらに！モンスターの特殊召喚に成功した時、『TGワーウルフ』を特殊召喚！」

TGワーウルフ ATK1200 / DEF0

これでモンスターは揃った。このまま行くぞ・・・！

「レベル4のガガガマジシャンと、カゲトカゲをオーバーレイ！2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！エクシーズ召喚！現れる、『NO.39希望皇ホープ』！」

No.39 希望皇ホープ ATK2500 / DEF2000

「希望皇ホープ・・・エクシーズモンスターね」

あの女、エクシーズモンスターを知っているのか・・・なら手加減なんて一切いらねえな！

「そしてレベル3のTGワールフとマシユマロンをオーバーレイ！2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！エクシーズ召喚！現れる、『No20 蟻岩土ブリリアント』！」

No.20 蟻岩土ブリリアント ATK1800 / DEF1800

これでエアトスを撃破し、ダメージを与えるしかないな。

「そして手札より『サイクロン』を発動！次元の裂け目を破壊する！行くぞ、ブリリアントの効果発動！オーバーレイユニットを1つ取り除き、攻撃力を300ポイントアップさせる！」

No.39 希望皇ホープ ATK2500 / DEF2000 AT

K2800 / DEF2000

No.20 蟻岩土ブリリアント ATK1800 / DEF1800

ATK2100 / DEF1800

「バトル！希望皇ホープでエアトスを攻撃！『ホープ剣スラッシュ』！」

八雲紫 LP3000 LP2700

「さらに、ブリリアントでアナザー・ネオスを攻撃！」

八雲紫    LP2700    LP2500

だいぶダメージを与えたな。伏せカードにデュアル・スパークの心配をしていたんだが、その必要はなかったらしい

「つく！やっつけてくれるわね・・・」

「ターンエンド」

「エンドフェイズに畏発動！『リビングゲットの呼び声』！エアトスを蘇生する」

ガーディアン・エアトス    ATK2500 / DEF2000

「バトル！エアトスでブリリアントを攻撃！」

「悪いな、畏発動！『グラヴィティ・バインド - 重力の網 - 』！レベル4以上のモンスターは攻撃できない！」

「ターンエンドですわ」

これで相手の攻撃は封じた。このまま行けるか？

「俺のターンドロ・・・！」

・・・このカード、今は不要なカードだな。そのまま決着を付けるか。



「俺はブリリアントの効果発動！オーバーレイユニットを一つ使い、攻撃力を300ポイントアップする！」

NO.39 希望皇ホープ ATK2800/DEF2000 AT  
K3100/DEF2000

NO.20 蟻岩土ブリリアント ATK2100/DEF1800  
ATK2400/DEF1800

「バトル！希望皇ホープでエアトスを攻撃！ホープ剣スラッシュ！」

「つく！」

八雲紫 LP2500 LP1900

このまま連続攻撃を決めていけば俺の勝ちだ。

「いけ！ブリリアント！エアーマンを攻撃！」

八雲紫 LP1900 LP1400

「ターンエンド」

「流石、というところね・・・私のターンドロー！うふふ、まだ私にも、手は残っているようね」

何？この状況でか？

「私は伏せていた『活路への希望』を発動！ライフが相手より10

00異常少ない時、1000のライフを払い、ライフの差1000ポイントにつきカードを1枚ドロー出来る！」

八雲紫   LP1400   LP400

何！？あのカードは本来2000ポイントにつき1枚のはずだ。まさか、遊戯王の世界だからこそなのか？確かアニメでは1000ポイントにつき1枚だった・・・そう言うことか

「貴方は無傷で私は400・・・差は3600ね。よってカードを3枚ドロー！」

3枚のドローか・・・さあ、どうする？

「さらに、私は『死者蘇生』を発動。このカードの効果で『E・HEROエアーマン』を蘇生する！」

E・HEROエアーマン   ATK1800/DEF300

「効果発動！効果で私は『E・HEROアナザー・ネオス』を手札に加え、召喚！」

E・HEROアナザー・ネオス   ATK1900/DEF1300

アナザー・ネオスを召喚してどうするつもりだ？この状況じゃどうしようもできないと思うが

「私はさらに手札から『地砕き』を発動！守備力が最も高いホープを破壊するわ！」

なに！？破壊されるホープ。これはおそらく攻撃を無効化されないための処置なんだろう……。だが、何故だ？こんなことをしても・

「さらに魔法カード『強欲な壺』を発動！2枚ドロするわ！」

これで八雲紫の手札は3枚に戻る。フィールドには2体のE・HE RO・・・融合とは考えづらいし、何をするつもりだ？

「ここからが本番ね。レベル4のエアーマンとアナザー・ネオスをオーバーレイ！」

何！？

「2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！エクシーズ召喚！来なさい、『ジエムナイト・パール』！」

ジエムナイト・パール ATK2600/DEF1900

エクシーズモンスター・・・！

「うふふ、驚いたかしら？エクシーズモンスターを扱えるのは貴方だけじゃなくつてよ？バトル！ブリリアントを攻撃！『パールラッシュ』！」

「ぐあっ！」

武藤秋 LP4000 LP3800

「ちいっ！次元エアトステッキじゃなかったのか！」

「貴方のデッキはシンクロが主軸だった。そしてエクシーズもね。それを封じるために除外カードを入れたけれど今回はちょっと引きが悪かったらか予定を変更しただけよ」

なるほどね・・・

「ターンエンド・・・さあ、どうするのかしら？」

「俺のターンドロ―！俺は手札からモンスターをセットし、ターンエンド！」

「あら、随分逃げ腰ね。私のターンドロ―！行きなさいジエムナイト・パール！」

「セットしていたのは『ゴゴゴゴレム』！このカードは1ターンに1度破壊されない！」

攻撃は防いだ。あの女も手札に余裕がないと見える。

「ならばカードを1枚伏せ、ターンエンド」

「俺のターンドロ―！俺は手札から『強欲な壺』を発動して2枚ドロ―！」

引いたカードは・・・よし、このまま行ける！

「俺は手札から『ゴブリン・バグ』を召喚！」

ゴブリン・バグ ATK1400/DEF0

「効果は使わない！レベル4のゴブリンド・バグとレベル4のゴゴゴレムでオーバーレイ！2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！エクシーズ召喚！現れる、『イビリチュア・メロウガイスト』！」

イビリチュア・メロウガイスト ATK2100/DEF1600

「そして『死者蘇生』を発動！戻って来い、希望皇ホープ！」

No.39希望皇ホープ ATK2500/DEF2000

これで条件は揃った。これならいける・・・！

「何故メロウガイストを召喚したのかしら？同じパールを召喚してしまえば同士撃ちにして貴方の勝ちだったのに」

「カウンターを警戒した結果だ。そして、お前のエクシーズを封じるためのカードを手札に持っていた結果でもあるな・・・」

「なんですって？」

不要だと思っていたカードだったが、まさか使うことになるとはな  
・  
・

「行くぞ、ホープとメロウガイストを生贄に、『銀河眼の光子龍』を特殊召喚！」

銀河眼の光子龍 ATK3000/DEF2500

「銀河眼の光子龍・・・」

「バトル！銀河眼の光子龍でジエムナイト・パールを攻撃！」

「と、畏発動！『次元幽閉』！貴方のそのカードをゲームから除外・・・」「無駄だ！」なんですって！？」

「銀河眼の光子龍の効果発動！このカードと攻撃対象となったモンスターをバトルステップに除外する！」

これで効果は不発となる。銀河竜の効果は相手モンスターに攻撃した時に相手が発動した次元幽閉等にチェインして、このカードの誘発即時効果を発動できる。除外される2体のモンスター

「つく・・・」

「そしてバトルフェイズ終了時、2体のモンスターは戻ってくる」

銀河眼の光子龍    ATK3000 / DEF2500    ATK4000 / DEF2500

ジエムナイト・パール    オーバーレイユニット2    0

「つく・・・」

あの様子では銀河眼の光子龍の効果を知っているらしい。

「俺はターンエンドだ」

「わ、私のターンドロー！私はモンスターを守備表示でセットし、

ジェムナイト・パールを守備表示に変更！ターンエンドよ」

「俺のターンドロ・・・（勝ったな）」

フィールドにはモンスターが2体で伏せカードはもうない。八雲紫は安心しきっているようだし、もうここいらで幕引きだろう。

「俺は手札から『マジック・ストライカー』を召喚」

マジック・ストライカー ATK600/DEF200

「なっ・・・」

「バトル、マジック・ストライカーは直接攻撃が可能だ。いけ！マジック・ストライカー！」

「きゃああああああっ！」

八雲紫 LP400 LPO

「俺の勝ちだ」

「うふふ・・・切り札を出しながらそれでトドメを刺さないなんて、なんともいやらしい人間ね」

「そりゃどうも・・・」

八雲紫はゆっくりと立ち上がり、俺に紙を渡してきた。

「これは？」

「これはデュエルモンスターズに興味を持ちそうな者達が住まう場所よ。幻想郷に着いたら参考にしなさい」

メモを受け取り、目を通した。そこに書かれているのは以下の通り

博麗神社

人里

紅魔館

守矢神社

妖怪山

魔法使いの森

白玉楼

地霊殿

永遠亭

天界

太陽の畑

三途の川の向こう



「……おい、ちょっと待て。ありえない場所がいくつがあるんだが。特に最後のコレ、これは……」

「おい、ちょっと待て……これ」

「場所の説明は向こうにいる人間の誰かに聞きなさい？それじゃあね」

そう言われた瞬間、俺は浮遊感に襲われる。そして下を見るとぽっかりと穴が開いていた。

「おぼえてろ！」

そう言っただけ俺は穴に落ちて行った。

Side 八雲紫

なかなかの決闘だったわね。弾幕ごっこはまた違う感じがして。

「後はあの子がどうするか？」

何かしらの手段で、あの子は私の依頼を達成するでしょう。そうすれば幻想郷と精霊界の異常も消えてくるはず……

「精霊界だけに、あの男を利用させるつもりはないわ。私達の幻想郷でも存分に働いてもらいましょう……」

私は静かにそのスキマの空間を後にした。

**番外編 お試し版 東方Project編 第一話（後書き）**

ってなわけで、以上が3つの番外編の第一話です

この3つを読んでからでもアンケートは可能ですので、どうかよろしくお願いします

## 闇の始まり（前書き）

ってなわけで、今回から最終決戦です

大徳寺先生、理事長、万丈目には悪いですがデュエルシーンはカットです。

いちいちやっていると今回ばかりは酷いことになるので（汗

さあ、これで1年は最後です。それにしても1年終わらせるのに50話すぎるといのは・・・卒業はどうなるんだろう・・・不安だ

秋「今日の最強カードは『悪夢再び』だ」

自分の墓地に存在する守備力0の闇属性モンスター2体を選択して手札に加える。

・・・2体の闇属性。そう、奴らです  
申し訳ないですが省略です



俺は悪夢を見終えて飛び起きた。時間は2時・・・この前十代が大徳寺とデュエルしてから幾日、俺はそこに立ち会えなかったが、十代はもう大丈夫だと俺に言っただけで聞かせた。だが、今はそんなことより頭から映像が鮮明に思い出される。吐き気さえも襲う、その状態・・・まるで俺の身体が段々と闇に侵されて行く。そんな感じだった。

「はあっ・・・はあっ・・・っ！」

俺は二人が起きないようにベッドを降りると、洗面台に向かった。

「うおえ、げっ・・・ええええっ・・・」

我慢が限界を通り越し、嘔吐した。ビチャビチャと不快な音と、夕食の食材や胃液がまざった不快な匂いが鼻を刺す。俺は水を流し、その洗面台一面に広げてしまった吐瀉物を洗い流した。

「はあ・・・はあ・・・」

俺は冷蔵庫から水を取り出し、一気に飲み干した。身体に水が染みわたって行くのが異常にも分かった。身体の繊維の隅々まで、水が行きわたって行くそんな感覚・・・俺はその場に座りこんだ。

「秋・・・」

「っ・・・!？」

俺は咄嗟に、驚いて振り向いてしまった。そこにいたのは雪乃とツアン。アレだけ音を立ててしまったのだ。起きて当然だった。最初は冷静でいたかったはずなのに、嘔吐した時点からなりふりを構っ

てられなくなったようだ。顔もきつと俺は酷い顔をしているのだから。

「わ、悪い・・・起こしたか？」

すぐさま作り笑顔をしてしまう俺。何とも似合わない・・・自分で自分を殴りたい気分だ。普段の俺ならこんなことしないだろうが、俺は頭が混乱して何がなんだかわからなくなっていた。

「秋、アンタ汗びっしょり・・・どうしたのよ・・・」

言いながら俺に触ろうとするツアン

「っ・・・!」

「キヤッ!？」

俺を触ろうとするツアンの手を、俺は反射的に弾いてしまった。ツアンは驚いて俺の顔を見る。当然だろう。心配してくれているのに俺はその行為を拒否したように弾き飛ばしたのだから。

「あ、秋・・・？」

「い、ゴメン・・・ツアン、俺・・・」

「・・・もっ」

今度は雪乃がため息をつくとき、俺の手を取る。今度は意識していたからか、振り払うようなことをしない。

「大丈夫よツアン、ゆつくり手を掴んであげて」

「……え、ええ」

今度はしつかりと、ツアンが俺の手を握った。温かい感触が俺を支配する。さつきと違った心地よい感触だ。俺は次第に落ち着きを取り戻すことが出来た。

「だいぶ、うなされていたわ……どうしたの？」

「……」

「黙ってたら分からないわよ？」

二人に言われるも、俺は何も言えない。何故言えないのだろうか？簡単なことのはずだ……

ちよつと悪い夢を見たんだ

そう言えば済むはずなのに、俺の口は動かない。否、動こうとしない。それどころか、目からポロポロと涙が落ちてくる。涙が止まらない。

「ど、どうしたの！？どこか痛いのか？」

「ち、違うんだ……俺、は……」

「秋……深呼吸して？」

俺は雪乃に言われるがまま、深呼吸をする。



「落ちついた？」

「……………ああ」

俺が言うと、雪乃は静かに俺に抱きついた。

「雪乃？」

「悪い夢を見たんでしょ？」

「……………ああ」

俺は静かに頷いた。雪乃は俺の左手と、右手を重ね合わせ、そのまま唇を合わせた。

「ん……………」

「んちゅ……………んふ……………」

雪乃の舌と俺の舌が絡み合い、イヤらしい音が響いた。ツァンが顔を紅くし、目を点にしているのが分かる。

「ぶはつ……………秋、貴方がどんな夢を見て、うなされていたか。私は知らないし聞く気もない。でもこれだけは言わせて？私は貴方の味方よ？私はどこまでも、どんな時でも、いつまでも……………私は貴方の味方」

「雪乃……………」

「そして・・・」

言いながら雪乃は離れ、ツァンを押した。

「キヤツ!？」

「この子も、同じ・・・ほら、ツァン？」

「う、うう・・・んっ!」

勢いよく、ツァンが俺の唇に自分の唇を押しあてた。そして雪乃と同じように俺の口の中へ舌を滑り込ませる。俺も同じように舌を動かした。ツァンは顔を紅くして目を瞑っていたが、次第に目を開け瞳を潤ませる。そして静かに離れた。

「僕だって、あんたの味方よ!？雪乃だけじゃ、ないんだからね・・・」

「うふっ・・・そういうこと」

雪乃はツァンと手を繋ぎ、そして俺の手を握った。その手は優しく、温かい

「私達3人は大切な絆がある・・・私達はどんな時でも、どんな場合でも、決して離れないし、裏切らない。だから、秋・・・私達を信じて?」

「雪乃・・・」

身体がさつきと違ってとてつもなく軽い。まるで背中に羽を得たよ

うな感覚を覚える。嗚呼、俺はこの二人に救われたのだと・・・そんな風な実感が持てた。

「俺は・・・二人と一緒にだ。ずっと、ずっと・・・」

「ええ、そうよ」

「当たり前よ・・・」

こうして、俺達は再びベッドに入ることにした。

Side雪乃

私が目を覚ましたのは、秋が目を覚ます数分前のこと。秋は魔されていた。汗を大粒に掻き、つらそうに唸り続ける。すると声を上げて起き上がった。その時ツアンも目を開けていた。私と目が合ったので眼で『動かないように』と意思を送る。ツアンも私が動かないことに察したのか、動じず、そのままだった。そして秋はゆっくりと身体を起こし、ベッドを降りた。恐らく私達を気遣ったのだろうけど、すぐにドタドタと足音を立てて洗面所に向かう。そして吐瀉物が撒き散らされる不快な音と、水の流れる音・・・

「雪乃・・・」

ツアンが私に聞こえるだけの声で呼びかける。若干震えているのが分かる。私も頷き起き上がる。秋は水を浴びるように飲みほしていた。ゆっくりと近づき、呼びかける。そしてまるで異物を見るような表情で振り返った秋は、すぐに笑顔になった。それが作り笑顔だというのが一発で分かる。普段の秋なら、こんなことはしないだろ

う。

「秋、アンタ汗びっしょり・・・どうしたのよ・・・」

ツアンが秋を触ろうとすると、驚いてその手を弾いた。その時悟った。秋は何か悪い夢を見たのだ。それに怯えている。私は落ちつかせ、唇を重ねた。互いの存在を確認し合える行動だと分かっていたから。そして秋が落ちつき、ツアンとキスを済ませた後、私達は再びベッドに戻った。さっきとは違い穏やかな表情を浮かべている。私は一層、秋の腕を強く握る。

「貴方は強い・・・でも・・・」

秋はいつも、私達に強い自分を見せている。でもどこかで私は見えてしまう。彼の弱い部分を・・・今回だってこれが初めてじゃない。何度か魔されているのを知っている。だから決めたのだ。私は秋を守るのだと。私が求めた真の男も完璧ではない・・・だからこそ、私がそばにいて支えるのだ。彼の心を・・・

「秋、貴方は私達が守るわ・・・」

誰にも聞こえない声で、私は小さくつぶやいた。

S i d e ツァン

ベッドに入ってから、雪乃の声が聞こえた。私達が守る・・・と。僕を変えてくれた存在の秋。そして同じようにその男を好きになった女、雪乃・・・僕たちの絆は世間から見れば異様なものだ。でも、それでも・・・僕はこの二人の絆を大切にしたい。もちろん、マリ

アや明日香、十代達の絆だって大切なものだ。でも、この二人との絆は絶対に手放したくはない。

「秋……」

これでもう何度目なのだろう？僕は何度か秋が苦しんでいるのを見た。1度や2度、うなされるのならまだ分かる。だけど、4度や5度なんかは明らかに異常だ。ここ数日、原因を考えたこともあった。鮎川先生に聞いても、夜うなされるのは心の原因であり、なにかが彼を蝕んでいるのではないかとも言われた。秋が抱えている何かを、僕は知らない……。でも、見てしまったものがあつた。前に見えてしまった机に秋が隠したカードの1枚……。オシリスの天空竜……。かつて、決闘王武藤遊戯がバトルシテイで得た神のカードの1枚。その後武藤遊戯は神のカードを使わなかったと聞いているが、何故秋の手元にあるのかは分からない

「あの、カード……」

でも、どんな理由にしろあのカードはきつと原因ではない……。ならば何か？それはセブンスターズとの戦い。きつとそれが何か関係しているに違いない。

「それでも、僕はアンタの味方よ……。絶対、この手を離さないんだから……」

私はそう呟き、静かに眠りに落ちて行った。

次の日、俺は二人を抱き寄せ、お礼を言った。とても良い朝だった。昨日慰めてくれたことに対してのお礼。二人は嬉しそうで何よりだった。が、事件が起きた。七星門の鍵を万丈目が誰かに盗まれたのだという。

「万丈目君！鍵を返しなさい！」

「嫌だ」

駄々をこねる万丈目。そして始まる万丈目と明日香のデュエル。それにしても万丈目の使うカードは全て、恋に気づかせるためのカードだと言うが、明日香は一切耳を貸さない。それにしてもなんだろう、さつきから不思議と頭痛がする。

「どうしたの秋？顔が青いわよ？」

「だ、大丈夫・・・なんでもない」

なんだろう、この違和感は・・・この後、封印が解けてしまうのは知っている。そして影丸理事長が出てくることも知っている。知っているのになぜだ？頭が痛い・・・デュエルが進むにつれて頭痛が激しくなる。そしてデュエルは終盤となり、万丈目の敗北で終わるデュエル・・・何故だ？何故、頭痛が・・・

「秋！？ちよっと・・・顔真つ青じゃない・・・秋！しっかりして！」

とうとう膝をつく俺。目眩がする。

「お、おい！秋！どうしちまつたんだよ・・・」

十代達も駆けよるが、その時光が進る。万丈目の首にあった鍵が門へと刺さった。そして、変なロボットが降りてきた。

「な、なんだあれ！？」

『ふ、ふふふふふふ・・・鮫島校長、私の声を忘れたのかね？』

「その声は……影丸理事長！」

影丸理事長の登場、か・・・

『時は満ちた。今これより、三幻魔復活の儀式を行う・・・』

「三幻魔復活の儀式・・・」

「どういう事だ何故七星門の鍵が勝手に開く！」

『最初からそういう仕掛けだからだ。三幻魔のカードをここに封印し、七つの鍵を鮫島に託したのは私自身なのだ』

淡々と説明していく理事長だが、俺の耳にそれは聞こえない。頭が痛い・・・俺は力を振り絞り、十代の方を向いた。

「十代・・・」

「秋！？」

「影丸理事長を、止める・・・お前だけが、それを・・・うっ・・・」

「  
駄目だ、頭痛が酷い・・・俺はそのまま気を失った。」

Side十代

「影丸理事長を、止める・・・お前だけが、それを・・・うう・・・」

「  
そう言つて秋は気絶しちまった。何がなんだかわからねえ・・・でも、やるべきことはあの理事長つて奴をぶっ飛ばさなきゃいけないつてことだ。」

『さあ、デュエルを始めよう・・・私の相手は遊城十代、貴様だ』

「俺か・・・秋の言うとおり、俺はアンタの野望を止める！」

デュエルディスクを構え、デッキをセットする。このデュエル、負けられないからな・・・

「『デュエル  
決闘！』」

Side秋

「  
・・・ここは？目を覚ますと、俺は闇の空間にいた。そして何やらあるのは鉄格子。これは、悪夢の鉄檻！？」

「お目覚めかい？」



俺の目の前にいるのはマリクの闇人格とバクラだった。

「お前ら……これはいつたい！」

「三幻魔のカードのおかげで俺達の力が強く働くようになってなあ……見る、戦っている姿を」

闇の空間から白い空間が現れ、そこには十代が影丸とデュエルしている様子が映し出されていた。

「俺達の計画もとうとう最終段階に移行するってわけよお」

「計画？最終段階？」

「お前は大人しく、その精霊と現状をここで見てるんだな……」

精霊……俺は足元を見る。すると、ボロボロのドリアードが倒れていた。

「ド、ドリアード！しっかりしろ！」

「しゅ……う……」

ボロボロのドリアード。そして視線の先には完全に闇と同化している武藤秋の姿があった。

「武藤秋……！」

「さあ行くこうぜ相棒……世界を破壊しに」

「この退屈な世界をぶっ壊しちゃいなあ」

そう言つて二人と武藤秋は消えてしまった。くそっ……どうしたらいいんだ！

Side十代

俺は影丸理事長に苦戦を強いられる。だが、諦めねえ……大徳寺先生に言われたことのためにも俺は負けない。そして俺は『賢者の石・サバティエル』の効果でカードをドロ！。引き当てたのはミラクル・フュージョン

「魔法カード『ミラクル・フュージョン』を発動！墓地のバブルマンとバーストレディーとスパークマンとフェザーマンを除外！現れる、『E・HEROエリクシーラー』！」

大徳寺先生の戦いの時と同じように姿を現すエリクシーラー……3度の願いを叶えた「賢者の石・サバティエル」が効果を発揮する。装備モンスターに相手の場のモンスターのだけ倍加する。影丸理事長の場のモンスターは5体。2900×5で攻撃力は14500に上がる。

「行け、エリクシーラー！」

「ば、馬鹿なあ！」

影丸理事長 LPO



「誰？君たち……」

「「え？」」

二人の声が重なる。そりゃそうだ。あいつらは秋と恋人同士だし……  
・ いったい？

「秋！」

「君も誰だ？僕は君を知らない……。でも、君は精霊を使うのか……」

俺まで忘れていて！？ いったいどうしたんだ？ アイツ、いつも自分のこと俺っていつのに、今は僕っていつてるし、口調もおかしい……  
・ いったい？

「君、目障りだな……。僕は今機嫌がいいんだ。でも、君みたいな精霊を持った人間を見るとイライラする……」

言いながらデュエルディスクを構える秋。一体どうしたんだよ！

「秋！俺がわからないのか！？」

「壊す、この世界を……。このおかしな世界を、不条理な世界を！僕は全てを、闇の力によって！」

本当に言葉が通じねえ！ もうデュエルするしかねえのか！？

「やってやるぜ！行くぞ秋、お前の目を覚まさせてやる！」

「待つて十代、僕たちも戦つわ」

言いながらデッキを構える雪乃とツァン……

「構わないよ……どうせ壊す世界だ、余興は派手にしないとねえ」

「いくわよ……」

「デュエル決闘」

これが、俺達の最終決戦になる

## 闇の始まり（後書き）

つてなわけで、デュエルをカットした理由がこれ！

次回から超デュエルです。

原作そのまま書いても読者の方も面白くないと思ひまして

描いてる側としても楽しいとはいえませぬ。次回からは1対3  
です。一応予定では三幻魔のカードは出て来ないです

でもそれ以上に面倒なカードが登場します。お楽しみに！

## 永久の闇（前書き）

お久しぶりです。今回は最終決戦を一気に公開です

秋「なんでも、今回は最強カード抜きでこの章を全て描くらしいぞ」

最強カード出すとネタばれになるので、ごめんなさい

## 永久の闇

「『『『デュエル 決闘！』』』」

武藤秋 LP4000

十代 雪乃 ツアン LP4000

順番 武藤秋 遊城十代 藤原雪乃 ツアン・ディレ

Side十代

始まった秋と俺達のデュエル。秋はポケットにカードを入れ、デッキを使う。つまり、秋は三幻魔を使うことはない。けどなんだ？この不安は……」

「先攻は僕だ……ドロー……僕は手札から『天使の施し』を発動。カードを3枚ドローし、2枚墓地へ捨てる。僕はデッキトップにカードを1枚戻し、墓地からダークチューナー『デスサブマリン』を特殊召喚……」

デスサブマリン ATK0/DEF0

ダークチューナー！？なんだそれ！チューナーとは違うのか！？

「ダークチューナー！？」

「僕はさらに『シールド・ウィング』を召喚」



シールド・ウイング ATK0 / DEF900

「レベル2のシールド・ウイングとレベル9のデスサブマリンをダークチューニング！」

『ダークチューニング！？』

チューニングとはまた違うのか？レベルの合計は9・・・トリシューラはモンスターを2体必要のはずだ。

「チューニングは足し算・・・でも、ダークチューニングは引き算なんだ」

引き算？ってことはレベル7のモンスターが出てくるってことか・・・

2 - 9 = -7

星がシールド・ウイングの中に入って行く。シールド・ウイングは苦しみの声を上げた。そしてシールド・ウイングははじけ飛び、星だけが残った。

「暗黒より生まれし者、万物を負の世界へと誘いざなう覇者となれ！ダークシンクロ！現れよ、『猿魔王ゼーマン』！」

猿魔王ゼーマン ATK2500 / DEF1800

現れたのは猿だ。攻撃力2500・・・相当強力だぜ。

「カードを2枚伏せてターンエンド・・・」

「俺のターンだ！ドロー！」

俺のデッキは秋がくれたHEROを入れたデッキだ。秋を元に戻すためにも、俺はこのデッキで戦う・・・！

「俺は手札から『E・HEROバブルマン』を守備表示で召喚！」

E・HEROバブルマン ATK800/DEF1200

「このカードを召喚したとき、他にカードがない場合・・・俺はカードを2枚ドローできる！魔法カード『融合』！フィールドのバブルマンと手札のクレイマンを融合！現れる『E・HEROアブソルトZero』！」

E・HEROアブソルトZero ATK2500/DEF2000

「カードを2枚伏せて、ターンエンド！」

「私のターンね、ドロー・・・手札から『高等儀式術』を発動するわ。デッキの『デーモン・ソルジャー』2体を生贄に・・・現れなさい、『闇の支配者・ゾーク』！」

闇の支配者・ゾーク ATK2700/DEF1500

「カードを1枚伏せ、ターンエンドよ」

1ターン目は攻撃できないからな。これでいい。互いにライフは4

000だ。そして攻撃力はゾークが2700でアブソルートZeroは2500・・・完全に俺達が有利だ。なのに何だ？秋から発せられる、禍々しいオーラみたいなのは・・・

「僕のターンドロー！僕は手札から『六武衆の結束』を発動し、『真六武衆・カゲキ』を召喚！そして効果でチューナーモンスター『六武衆の影武者』を召喚！」

真六武衆 - カゲキ    ATK200 / DEF2000    ATK170  
0 / DEF2000

六武衆の影武者    ATK400 / DEF1800

六武衆の結束    武士道カウンター    0 2

「六武衆の結束を破壊してカードを2枚ドロー！そしてレベル3の真六武衆 - カゲキに、レベル2の六武衆の影武者をチューニング！」

3 + 2 = 5

「天下統一の武士よ！その真なる力を解放し、世界を統べよ！シンク口召喚！いでよ！『真六武衆 - シエン』！」

真六武衆 - シエン    ATK2500 / DEF1400

現れるシエン。これで俺達のフィールドにそれぞれのエースモンスターが現れた。これだけのモンスターを相手に、どうするつもりだ秋。

「カードを1枚伏せてターンエンドよ」

ここから、攻撃が可能となる。だけど俺のフィールドにはアブソルトZeroがいて、ツァンのフィールドには真六武衆・シエンがいる。これは容易に突破できる壁じゃないはずだ！

「僕のターンドロワー……僕は手札から『ブラック・ホール』を發動する」

何！？自分のモンスターを巻きこむつもりか！

「させないわ！シエンの効果発動！1ターンに1度、魔法罫の効果は無効にして破壊できる！」

消えるブラック・ホール……一体何を？

「僕はさらにカードを1枚伏せ、手札から『命削りの宝札』を發動5ターン後、全てを捨てる」

早い段階での手札補充……秋のデッキは40枚より多い、60枚はあるみたいだ。デュエルルール規定では60枚までカードを入れることはできる。でも、その分欲しいカードが来る確率は格段に減るはずだ。

「さらに手札から再び『天使の施し』を發動。3枚ドロワーし、2枚墓地へ捨てる」

また手札交換！秋の奴、どんどん手札が減ったり増えたりする。おして何よりこのドロワー……凄いとしか言いようがない。これがあの秋なのか！？

「そして、ボーガニアンを守備表示で召喚」

ボーガニアン！？確か、毎ターン相手に600ポイントのダメージを相手に与えるカードか！

「さらに『リビングデットの呼び声』を発動・・・戻って来い『クリッター』」

クリッター ATK1000/DEF500

「レベル3のボーガニアンと、レベル3のクリッターをオーバーレイ・・・2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築。エクスィーズ召喚・・・現れる『No.30破滅のアシッド・ゴーレム』」

No.30 破滅のアシッド・ゴーレム ATK3000/DEF3000

出てきたのは紫色の、禍々しい気を放つ巨人だった。ラ、ランク3で攻撃力3000！？そんなモンスターがいたのか！？

「アシッド・ゴーレムは水属性・・・アブソルトZeroの攻撃力は500ポイント上がる！」

E・HEROアブソルトZero ATK2500/DEF2000  
ATK3000/DEF2000

「バトル・・・破滅のアシッド・ゴーレムで真六武衆・シエンを攻撃！」

「きゃあっ!?!」

十代 雪乃 ツアン LP4000 LP3500

シエンが破壊される。つく!ここはこれをチャンスにつなげる!

「畏発動!『ヒーローシグナル』!自分たちのモンスターが破壊された時、デッキから『E・HERO』を特殊召喚!来い!『E・HEROエアーマン』!」

E・HEROエアーマン ATK1800/DEF300

「エアーマンの召喚に成功した時、俺はデッキから『E・HEROプリズマー』を手札に加える!」

ここでエアーマンを攻撃してきても、HEROバリアで攻撃を防げばまだ何とかなる。それに、ツアンや雪乃もまだ伏せカードがある。

「バトル続行。猿魔王ゼーマンでエアーマンを攻撃・・・」

「畏発動『ヒーローバリア』!HEROに対する攻撃を、一度だけ無効にする!」

だが、ヒーローバリアは発動しない。発動しないまま消えた

「な、なんでヒーローバリアが!」

「ゼーマンがバトルする時、相手はダメージステップ終了時まで魔法罫を発動することはできない!」

そんな効果が・・・つく！エアーマンが破壊され、そのエアーマンのバイザーの破片が俺の頬を掠めた。それによって血が頬をつたう・・・ダメージが現実に！ま、まさか・・・

「これは、闇の決闘！？」

「気が付いたんだ・・・初めて使うからやっつと発動できたよ」

周囲を闇が覆い始める。アシッド・ゴーレムの時はなかったのはまだ準備が出来ていなかったということなのか！？それにしても、なぜ秋が闇のゲームなんかできるんだ！？一体何がどうなってるんだ・・・！

「・・・聞いてもいいかしら？秋」

「なんだい？」

「貴方は本当に秋なの？・・・いいえ、貴方は私達が知っている秋なのかしら？」

雪乃が秋を見ながら聞く。俺達が知らない秋？一体どういうことなんだ？いや・・・最初デュエルするまえ、俺達を誰だと聞いた。秋が、吹雪さんみたいに操られているとしたら？もしそうだとしたら、一体どうやって俺達はアイツを助けることが出来るんだ？

「僕は武藤秋・・・真正銘、本物の武藤秋だ。僕は僕でしかない、僕は武藤遊戯の従弟にして、この世界を破壊する決闘者だ」

秋の言葉に、ツァンの表情が険しくなる。雪乃はどこか怪訝な表情だ。

「・・・私達の知る秋と、貴方は別人、もしくは別人格の様ね」

「ど、どういうことだ？雪乃・・・」

「簡単なことよ、十代の坊や。まず、私達の知る秋の一人称は『俺』なのよ。そして秋はあのカードを普通なら使わないわ」

指をさすのはアシッド・ゴーレム・・・なんでだ？

「アシッド・ゴーレムは毎ターンオーバーレイユニットを取り除くか、毎ターン2000のライフを払うことになる。秋のデュエルスタイルに合わないカードなのよ」

デュエルスタイル・・・そうだ、秋はいつも召喚するならリバイス・ドラゴンや潜航母艦エアロ・シャークなんていうモンスターを使う。今まで自分にダメージを受けるカードを使うことはなかったはずなんだ。

「貴方は誰？」

「おかしなことを言うなあ・・・僕は僕だよ。僕は武藤秋であり、それ以上でもそれ以下でもない」

「・・・嘘ね、そうでしょうマハード」

『ああ、そのようだ。バクラ・・・貴様、秋殿の身体を乗っ取っているな！』



出てきたのはブラック・マジシャンの精霊。秋いわく、遊戯さんの精霊ということらしい。すると、秋の表情が見にくく歪んでいた。

「クツクツク・・・相棒、変わるうぜ」

『やはり・・・!』

「久しぶりだなあ、神官様よ・・・」

バクラ・・・って確か、バトルシティ本戦に出た人じゃなかったか？ 一体何がどうなって

『あの男の名はバクラ・・・エジプトでの大盗賊にして私の千年リングを奪った男だ。その人格が今、秋殿に乗り移っている』

「俺も忘れてもらっちゃ困るぜ・・・」

また口調が変わった。どうということなんだ!?

「・・・今、秋の身体には複数の人格が宿っている。そういうことね?」

「そのピンク髪のお嬢ちゃん、なかなか鋭いじゃないか・・・俺はマリク・イシュタルに潜む闇人格さ」

「秋を元に戻しなさい!」

雪乃が叫ぶも、マリク・イシュタルの闇人格と名乗る男はにやりと顔をゆがませた。

「おいおい、何を勘違いしているんだ？この男は真正正銘、武藤秋だぜ？」

いきなりブラック・マジシャンやハネクリボーみたいに男が秋の後に現れる。

『マリクの言うとおりだぜ・・・こいつ（・・・）は武藤秋だぜ？』

「嘘よっ！アンタ達が操ってるんでしょっ！」

『当たらずとも遠からずだ・・・俺達はこのつに闇の力を与えただけさ。まあ、お前達が求めている秋ってのは別の秋のことだと思っちなあ・・・』

別の、秋？一体どういうことなんだ？

『そのの神官様は知っていたんじゃないか？ええ？』

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

黙ってしまっブラック・マジシャン。どういうことだ？

『知らないなら俺達が教えてやるさ！お前達が今まで行動を共にしていたのは武藤秋って名前の人間じゃねえのさ』

「なんですって？」

『今まで武藤秋の身体にいたのは別の世界にいた『城戸秋』という別世界の人間の人格だったのさ・・・』

言っていることが分からない。別世界？城戸秋？別人格？

『分かりやすく言ってやるよ。ようするにお前達が友だと思っていたり、恋人だと思っていた武藤秋はまったく別の人間だったのさ』

別の、人間・・・あの秋が？

「まさか、凜の言っていたある日デュエルを急に始めたっていうのは・・・」

『そう、城戸秋が憑依していたからさ』

『まさか、秋殿の身体に城戸秋殿の魂を憑依させたのは・・・』

『そう、俺達さ。闇の世界をさまよっていたら偶然にも別世界の入り口を見つけてなあ・・・武藤秋に闇を定着させるために武藤秋の魂を精霊界に引きずり込んだ。そしてその間に代わりの人格として城戸秋の魂を入れていたのさ』

そ、そんなことが・・・

『ククク・・・わかったか？お前達が仲間だと思っていた秋はただの虚像だったのさ。今頃闇の中さ』

笑う二人。ゆ、許せねエ・・・あいつの身体を乗っ取るために秋を利用して、もう一人の秋も自分たちの思うように動かしていたなんて・・・

『お笑いだなあ・・・友達？恋人？お前達がそう思っている、城

戸秋はどうなっていたんだろうなあ？この異世界で友と思ったか？恋人だと思っただか？答えは否！アイツの想いは元の世界に戻るという願望のみ！この世界で誰にも真に心を開いてはいなかった！」

「僕は・・・カードを2枚伏せてターンエンド」

全員が沈黙する。秋が笑ってくれていた。みんなで馬鹿をやったり、デュエルが終わったあとだったり、みんな楽しんでいた。あいつはいつも、みんなの前で笑ってた。でも、俺にはバクラの言葉に心当たりがあつた。それはあの秋の過去を知る元オベリスクブルーの生徒との戦いの後・・・秋が見せた笑顔だった。優しく笑う秋・・・でもどこか寂しく、目は俺達を見ていなかった。その瞳の奥に、俺は悲しいものを見た気がした。

「・・・・・・・・秋」

それでも、俺はあいつが友達だと思っている。だから、アイツが別世界の人間だろうと、そんなの関係ない・・・秋は秋だ。

「秋は俺達の友達だ！俺はあいつを取り戻す！俺のターン！」

俺はカードを引く。待ってるよ、秋！

永久の闇（後書き）

というわけで、まったく出番のなかった主人公（笑）

消せない罪(前書き)

連続投稿です！

## 消せない罪

Side 秋

『秋は俺達の友達だ！俺はあいつを取り戻す！俺のターン！』

俺は悪夢の鉄檻の中で武藤秋と十代達のデュエルを見ていた。武藤秋が繰り出すのは紛れもなく俺の持っていた中でも、金庫の一番奥にしまっていたダークシンクロモンスターとダークチューナー……。そして、使わないであろうとしていたNo.のカード達だった。バクラ達はここまでしているとは思ってもいない。

「つくそ！」

悪夢の鉄檻はびくともしない。ドリアードも気絶したままだ。このままじゃ動くことは敵わない。向こうにマハードたちがいるということは、当然ミラやマナも向こうにいるということだ。

「このっ！」

悪夢の鉄檻は蹴っても殴ってもびくともしない。ただ俺の手に血が出来てしまうだけだった。悔しい……。自分の力の無力さが。そして、非力さが。カードを使うこと以外、この場所ではただの一般人だ。俺は漫画やアニメのカッコいいヒーローとは違う。あの世界で『武藤秋』という人間を演じ、十代達をだまし続けた情けない人間だ。バクラやマリクの闇人格が言うことは正しい。俺はいつも思っていた。自分の世界に帰りたいと。自分の日常を取り戻したいと……。このような非日常の世界にいたくはないと。俺はどこかで、十代達を、雪乃達を、仲間だと言ってくれた奴らのことを、心のどこか

で否定していた。

「十代・・・雪乃・・・ツアン・・・みんな・・・」

なのに、あいつらは俺を友達だと言ってくれた。俺を返せと言ってくれた。それでも、俺には何もできない。俺は・・・

「しゅ、う・・・」

「っ！ドリアード、気が付いたか」

うわ言のように武藤秋の名前を口にしていたが、今度はしっかりと目を開いていた。

「しゅ、うっ？」

「ああ、俺だ・・・大丈夫か？」

ドリアードはゆっくりと身体を起し、上の画面を見つめていた。

「しゅう・・・ああ、恐れていたことが」

「・・・・・・」

ドリアードの言葉に、俺は何も言えなかった。この事態に気づくべきだった。あの時のデュエルに勝っておくべきだった。七星の鍵を受け取らず、あの場で砕いてしまえばよかった。考え直せば、この事態を好転させる手立てなどいくらでもあったはずだった。

何故あの時、俺は普段から使っていたシンクロデッキを使った？



ソリティアに近いデュエルで勝利すれば、武藤秋は止められたかもしれない。

何故あの時、鍵を受け取った？あのままこの学園のしきたりなど構わずに鍵を破壊してセブンスターズの手立てを全て止めればよかったのではないか？

この世界にいる以上、この世界のことを考えて動けばよかったんじゃないか？いや、それ以前に……

「俺が、この学園に来なければ……」

そうだ、俺がこの学園に来なかったら、このような原作とは違う動きをすることはなかったはずだ。『武藤秋』という名のイレギュラーをこの世界、この学園に紛れ込ませてしまったことがそもそもの原因だ……俺は……俺が……

ペチン

不意に、ドリアードが俺の頬を叩いた。その手は弱々しいが、ハッキリとした意思が籠っていた。

「秋、落ち着いてください」

「ドリアード……？」

いつの間にか、ドリアードの身体の傷は段々と薄くなっていた。やはり彼女も精霊だ。この闇の中でも微力ながら力を使うことが出来るのだろう。

「確かに、この学園の現状を招いてしまったのは、まぎれもなく貴

方です・・・私も、冬休みに一度警告をしました。『これからの未来に気を付けるように』と」

「え？あの時の、家政婦の・・・」

「あの時は、彼女の精神を一時的に借りただけです」

彼女は、そんな能力を持っているのか。いや、今はそんなことは関係ないだろう。

「貴方はここまで一人で戦ってきた。だれにも頼らず、頼ろうともせず」

「それは・・・」

「貴方は、多くの罪を犯してしまった。現状を止めることが出来ない私もまた同罪です。それは変えようのない事実・・・」

違う、ドリアードに罪はない。悪いのは俺だ。俺が・・・

「貴方は先ほどからこう思っていた。あの時こうすればよかった。ここでこうすれば、この事態を避けることはできたのだ・・・と」

言われて、俺は何も言えなくなった。彼女は今俺の心を全てお見通しにしているようだ。

「俺は・・・」

「過ぎ去ってしまった出来事も、犯してしまった罪も、消えることもやり直すこともできません。そして罪は消えない・・・背負って

行くしかありません」

「……………」

ドリアードの手が、薄く光る。

「ドリアード、お前何を……………」

「この檻を破壊します。どいてください」

言われてすぐにどいた。すると、ドリアードはその自身の魔力らしきものを放出し、檻を破壊した。悪夢の鉄檻は吹き飛び、消えた。そしてドリアードが何やら扉の様なものを形成した。

「これで……………あちらの世界へ……………帰れ……………ま……………」

「ドリアード!?!」

突然崩れるドリアード。傷を自身で回復させたとは言え、やはり無理があるようだ。俺はドアを見つめる。このまま外へ出るか否か？出て行ってどうする？俺に何が出来る？武藤秋を倒す？倒したところでどうなる？それで全てが解決するのだろうか？何も解決はしない……………俺は……………

「行って、ください……………」

「……………!」

ドリアードの小さな声が聞こえる。かすれてしまいそうだけど、強い意志を秘めたそんな声。

「だが……」

「しゅ……う……を、そして、あなた自身を……救うには、デュエルで勝つしかない……」

「……!」

ドリアードの眼は、真っ直ぐに俺を見つめている。

「行きなさい! 城戸秋!」

俺の手にデュエルディスクとデッキが宿る。そのディスクはアカデミアで配られるディスクではあるものの、色は蒼く輝きを放っていた。そしてドリアードは元のカードに戻ってしまった。俺はそれを拾い上げる。

「ドリアード……」

アイツが自身の命がけで俺に賭けた。俺はカードをデッキケースにしまつと、立ち上がりドアノブに手をかける。

「俺自身の答えは、見えない……でも!」

ドアを開ける。

「俺自身に嘘をつきたくはない!」

そのドアの向こうへと飛び込んだ。全ての罪を背負い、一人の精霊の願いを背負い、俺は扉をくぐ……くぐって……あれ?

突然襲われた妙な浮遊感。ゆっくりと足元を見る……そこにあるのは、限りなく蒼い空だった。

「まじで?」

その言葉と共に、俺はまっさかさまに下へと落ちて行った。

Side十代

秋のフィールドにはゼーマンとアシッド・ゴーレム……対してこ  
っちにはアブソルートZeroとゾークだけだ。

「ドロー!」この瞬間罫カード発動「何っ!?!」

「永続魔法『宮廷のしきたり』『虚無空間』を発動。虚無空間はこ  
のカードがフィールド上に存在する限り、お互いにモンスターを特  
殊召喚する事はできない。そして宮廷のしきたりはこのカード以外  
の永続罫を破壊することはできない」

「なっ!?!」

特殊召喚封じ!?!融合とシンクロを封じられた!しかも死者蘇生な  
んかもできない……俺の手札に今、サイクロンや大嵐はない……  
ならば!

「俺は手札から『E・HEROオーシャン』を守備表示で召喚!」

E・HEROオーシャン ATK1500/DEF1200

「これにより、アブソルートZeroの攻撃力は500ポイントアップする！」

E・HEROアブソルートZero ATK3000/DEF2000  
ATK3500/DEF2000

「行くぜ！アブソルートZeroでゼーマンを攻撃だ！『瞬間凍結』！」

「ゼーマンの効果発動！自分フィールドのモンスターが攻撃対象に選択された時、自分フィールドまたは手札からこのカード以外のモンスター1体を墓地へ送る事で、その攻撃を無効にする。僕は手札の『ボルト・ヘッジホッグ』を墓地へ送る」

「何！？」

攻撃はゼーマンの前に現れたボルト・ヘッジホッグに防がれてしまった。

「くそっ！ならカードを1枚伏せてターンエンド！」

「私のターン、ドロー！私はここでゾークの効果を発動するわ！サイコロを振り、1〜6の数字で効果の変動が発生！1か2なら相手フィールドのモンスターを全て破壊！3、4、5の場合モンスター1体を破壊。そして6は自分のフィールドのモンスター全てを破壊！」

上手い！もしこれで6が出ても、アブソルートZeroの効果で相手モンスターを破壊できる。つまり、確率は2分の1！サイコロが出現し、落ちる。出た目は・・・2だ！

「出た目は『2』よ！貴方のフィールドのモンスターを全て破壊するわ！」

「残念だね・・・罨発動『デストラクション・ジャマー』」

「なんですって!?!」

「手札一枚をコストに、破壊する効果を無効にして破壊する。君のゾークには消えてもらおうよ」

破壊されるゾーク。つく！これじゃあフィールドのモンスターは俺だけか！

「つく・・・カードを2枚伏せてターンエンドよ」

「僕のターン！ドロー！つく、僕は手札から『真六武衆 - カゲキ』を守備表示で召喚するわ」

真六武衆 - カゲキ ATK200 / DEF2000

「カゲキの効果も使えない・・・僕もカードを1枚伏せてターンエンド！」

駄目だ、俺達のデッキは全て特殊召喚を中心にするデッキ・・・特殊召喚を封じられただけのはずなのに・・・3対1で、アイツのライフを1回も削ることが出来ないっ！

「僕のターン、ドロー・・・スタンバイフェイズに僕はオーバーレイユニットを一つ墓地へ送る。そして僕はカードを1枚伏せる。」

天よりの宝札』を発動。全てのプレイヤーはカードを6枚になるようにドローする」

またドロー強化のカード……アイツのデッキはなくならないのか！？

「伏せた『貪欲な壺』を発動。『デスサブマリン』『シールド・ウイング』『ライオウ』『バトル・フェーダー』『クリッター』をデッキに戻し2枚ドロー……」

「何！？デッキにカードを……」

2枚ドローするとはいえ、カードを3枚デッキに戻せる。天使の施しのせいでカードは無駄に落ちている。

「さらに手札から『二重召喚』を発動。このターン僕は2回の召喚を行える。僕は『ジエネティック・ワーウルフ』を召喚」

ジエネティック・ワーウルフ ATK2000/DEF100

俺達のフィールドには攻撃力3500のアブソルートZeroがいる。攻撃は勝っているはず。なのになぜ？

『ひやははは！これで条件は整った！お前らに神を拜ませてやるよ』

『さあ、さらなる地獄の始まりだ……』

「神……？」



『まさか・・・!』

ブラック・マジシャンが驚いたように目を見開く。このターン2回の召喚が出来る秋・・・何か、来る?

「フィールドのアシッド・ゴーレム、ゼーマン、ジェネティック・ワーウルフを生贄に捧げ・・・」

どこの国かわからない言葉が流れる。これはいったい?

『いかんつ!』

「いでよ!」ラーの翼神竜』!」

ラーの翼神竜 ATK ? / DEF ATK ?

そこに現れたのは金色に輝く1体の竜だった。それはかつて、バトルシテイの結晶トーナメントにおいて現れた三幻神の1体・・・

「ラーの・・・翼神竜・・・」

「そんな・・・」

「神の、カード・・・」

俺達は上手く言葉を出すことが出来ない。目の前にいるその神々しい竜に心を奪われてしまいそうになっているからだ。そしてそれと同時に、その竜から感じ取ることのできる恐怖に怯えてしまっているからだ。

「ラーの翼神竜の攻撃力は生贄にしたモンスター攻撃力の合計となる」

ラーの翼神竜    A T K    ? / D E F    ?    A T K 7 5 0 0 / D E F  
4 9 0 0

「攻撃力7500・・・!?!」

「神に対して魔法、畏、モンスターの効果は受け付けない。これは神というランクによるもの。つまり、てめえのアブソルートZeroを破壊したところでラーに効果を適用することはできねえのさ!」

「だがどの道にしろ、その攻撃力の差分からアブソルートZeroの攻撃力を引いても、俺達の勝ちだけだな・・・やっちな、相棒」

「バトルフェイズ・・・ラーの翼神竜でアブソルートZeroを攻撃『ゴッド・ブレイズ・キャノン』!」

「さ、させないわ!畏発動『燃える闘志』!相手フィールドのモンスターの攻撃力が元々の数値より高い場合、自分のフィールドのモンスター1体の攻撃力を倍にするわ!」

雪乃が畏カードを発動する。それによってアブソルートZeroが炎に包まれた。

アブソルートZero    A T K 3 5 0 0 / D E F 2 0 0 0    A T K  
7 0 0 0 / D E F 2 0 0 0

「よし!これでライフはまだ残る!」

『ライフは残っても、お前らがこれに耐えられるかな?』

バクラの声と共に発射されたゴッド・ブレイズ・キャノンがアブソルートZeroを破壊し、その500ポイント分のダメージが俺達を襲った。だが、その元々の攻撃力は7500。俺達はその衝撃に耐えきれず吹き飛ばされたしまった。

十代 雪乃 ツアンLP2800 LP2300

「きゃあああああっ!?!」

「うわあああああっ!」

地面に叩きつけられる俺達。くそっ・・・身体が、動かねえ・・・

「フフフフ・・・どうかな僕の攻撃は。神の力・・・そして手に入れた『三幻魔』の力・・・これさえあれば・・・ふふふ、あはははは!」

秋の音が響く。くそっ!くそっ!くそっ!こんなところで負けるわけにはいかねえんだ!

「うう・・・」

「つく・・・」

雪乃とツアンもなんとか立ち上がるうとするが、二人も傷が酷いのが分かった。あいつらが戦うことはもう無理に等しい。もう、駄目なのかよっ・・・!

己の力で立ち上げられるか？立てればよし。立ち上げなければ  
そこまでだ

不意に、カイバーマンの言葉が頭をよぎった。そうだ、俺は・・・  
俺はあああ！

「うおおおおおおおおおおおっ！」

『神の攻撃を受けてもなお立ち上がるか・・・ラーの攻撃を受けて  
立てる決闘者がこれで3人目・・・おもしろい』

「僕はカードを2枚伏せてターンエンド・・・さあ君のターンだ。  
だけど立ち上がれない決闘者デュエリストにターンは回ってこない。君は一人で  
神に挑むのさ」

フィールドには、ツアンが残したカゲキ、俺のオーシャンだけだ。  
そして伏せカードは2枚。これじゃあどうしようもない・・・！い  
つたい、どうすればいい、俺一人で、あんな化け物に勝てるのか！？

「つく・・・俺の・・・俺の・・・」

余りの身体の激痛と恐怖でカードを引くことが出来ない。その時だ  
った。急に俺達のいる場所の空間が避けた。

「あああああああっ！」

どしゃっ、という音と共に煙が巻かれる。そして起き上がる影。そ  
の叫び声は聞いたことのある声の主だった。

「いてて………よう、十代」

『秋!』

俺達の仲間が、そこにはいた。

消せない罪（後書き）

次回、決着！

## 救いの時(前書き)

今回は遊星のテーマをある場所から聞いてお楽しみください

ちなみに、今回だけ。本当に今回だけオリカを登場させました。  
多分OCG化しても使われないんじゃないかね？っていう超ピンポイント  
カードです

今回だけこんなカードを使ってスイマセン

## 救いの時

Side 雪乃

ラーの翼神竜。かつてバトルシティで名をはせた神のカード・・・そのカードが今日の前にいた。その神々しさは宝石などかすんでしまっただろう。だが同時に、どんなものよりも恐怖にかられてしまう息さえも忘れるほど、一歩動けば自らの身体が裂かれるのではないかと考えるほど・・・その竜は神々しくも恐ろしかった。そしてそんな攻撃を受けた。その灼熱の炎。攻撃力差から魅かれた500ポイント分のダメージのほすが、神の絶対なる力を受けて私達は倒れた。暑い・・・身体が焼けるように暑い。十代の坊やがかるうじて立ち上がった。でも私達は立てない。

「立ち上がれない決闘者デュエリストにターンは回ってこない。君は一人で神に挑むのさ」

武藤秋の声が響いた。立ち上がらなければ・・・私にターンが回らない。そして私達は負けてしまう。秋を取り戻せない！頭でわかっ  
ていても、私の身体は言うことを聞かない。お願い、動いて・・・私を、戦わせて・・・！その時、上空の空間がさけ、叫び声と共に何か降ってきた。その落下物の正体は私達のよく知る人物。最愛で、大切な人物・・・

「しゅ・・・う・・・」

そこにいたのは、いつものライイエローの服を着た、秋だった。



S i d e ツァン

いきなり降ってきたのは秋だった。

「秋・・・なの？」

余りの出来事に僕は混乱した。今までデュエルしていたのは確かに武藤秋だ。でも、城戸秋は魂だけだったはず。それなのに、なぜ秋はここにいるのか？

「みんな・・・」

「秋、お前・・・」

「話は後だ。ちょっと待っていてくれ」

そう言っつて秋は僕と雪乃の所に近づく。

「二人とも・・・大丈夫か？」

「秋・・・秋・・・！」

目から涙が止まらなかった。僕たちは抱き起こされ、岩の所に寄りかかるように座らされた。

「ごめんな・・・こんなに、傷ついて・・・」

僕たちの髪を撫でる秋の手は温かくて、今まで以上に心地が良かった。

「待ってる、すぐに決着を付けてくる」

秋はそう言って立ち上がると、デュエルディスクを展開した。

「俺も混ぜてもらおうか」

「……………どうしても僕の邪魔をするんだね」

『よくあの空間から脱出したなあ…………やるじゃねえか』

『おおかた、あの精霊の力だろうがな。まあいいだろう。その小僧の次にテメエだ。4対1でももう二人は戦闘不能だ。カードもそのままの条件で参加を認めてやるよ』

秋がデュエルディスクを展開し、カードを5枚引いた。

「行くぞ十代…………」

「ああ！行くぜ！俺のターン、ドロー！」

秋…………勝って…………

Side秋

あいつらのフィールドにはラーの翼神竜攻撃力7500、そして虚無空間と宮廷のしきたり…………伏せカードは2枚か。武藤秋の手札は3枚だし、完全にフィールドを封じている。そしてこっちはカゲキにオーシャンか。十代の手札は6枚。見たところ天よりの宝札が使われたことが分かる。

「・・・よし、スタンバイフェイズ、俺はオーシャンの効果で墓地のエアーマンを手札に戻す！そして俺は手札から『サイクロン』を発動！宮廷のしきたりを破壊する！これにより虚無空間も破壊される！」

「・・・」

「さらに『E・HEROエアーマン』を守備表示で召喚！第2効果発動！デッキから『E・HEROバースト・レディ』を手札に加える！」

これで厄介なカードが消えたな。このドロ―運、流石十代だ。ここは、防御の姿勢を取るしかない。

「そして俺は手札から『融合』を発動！フィールドのオーシャンとエアーマンを融合！現れる！『E・HERO Great TORNADO』！」

E・HERO Great TORNADO ATK2800/D  
EF2000

守備表示の姿勢を取るGreat TORNADO・・・ダウン・バーストはラーには効かないからな。フィールドにはこれで3体のモンスターが守備に回った。これならまだ突破口を見つけられる。

「俺はカードを1枚伏せてターンエンド！」

「俺のターンドロ―！俺は手札から『シールド・ウィング』を召喚！」

シールド・ウイング ATK0/DEF900

「カードを1枚伏せてターンエンド!」

「僕のターンドロウ・・・ねえ・・・なんで戻ってきたの?」

「何・・・?」

突然の言葉に、俺は思わず反応してしまった。

「君は元の世界に戻ることを望んでいたんじゃないの?この世界をどうとも思っていなかった君が、何故この場所にいるの?君はこの世界に不必要な存在じゃないの?」

「・・・俺は、確かに元の世界に帰りたいと望んだ。この世界を深く考えたこともない。そして、この世界に、俺はいてはならない。けどな、俺はこの世界で時を過ごしたことでかけがえのない友が出来た・・・そして愛することのできる女性たちが出来た。そんな奴らをホッポリ出して帰れるほど、俺は薄情者じゃないんでね」  
俺が言うと、バクラたちが笑いだした。

『ヒヤハツハツハ!ようするにテメーはただの偽善者じゃねーか!』

『おめでたい奴だ』

「偽善者で何が悪い」

『何?』

「偽善だろうがなんだろうが、俺は俺の意思で動く。武藤秋、お前のように操り人形に成るつもりはない」

俺の言葉に、一瞬だけ武藤秋の表情がゆがんだ。

「・・・君たちはただ壊すのは詰まらないな。片っ端から壊してやる。バトルだ！オーシャンを攻撃！『ゴッド・ブレイズ・キャノン』」

オーシャンが破壊され、その余波が俺達に当たる。

「っく！」

「ぐおっ！」

「ターンエンドだ！」

アイツのライフは4000・・・モンスターをとにかく増やして時間を稼がないと、一瞬でも気を抜いたら俺達の負けだ。

「俺のターンドロー！俺は手札から『E・HEROプリズマー』を召喚！」

E・HEROプリズマー ATK1700/DEF1100

「そして相手に『E・HEROシャイニング・フレア・ウィングマン』を見せることで、このターンプリズマーはその素材となる『スパークマン』として扱う！融合を発動！フィールドのプリズマーと手札の『沼地の魔神王』を融合！現れる！『E・HEROシャイニ

ング・フレア・ウイングマン』!」

E・HEROシャイニング・フレア・ウイングマン ATK250  
0/DEF2100

現れるシャイニング・フレア・ウイングマン・・・だが、このカードじゃラーには届かない。すると、十代は俺に視線を送った。何かを待っているのだろうか？

「シャイニング・フレア・ウイングマンの攻撃力は、墓地のE・HEROの数だけ300ポイントアップする!俺の墓地にはエアーマン、スパークマン、クレイマン、プリズマー、魔法石の採掘の効果で送ったネクロダークマン、アブソルトZero、オーシャンの7体!よって2100ポイントアップ!」

E・HEROシャイニング・フレア・ウイングマン ATK250  
0/DEF2100 ATK4600/DEF2100

だが相変わらずシャイニング・フレア・ウイングマンは守備表示のままだ。一体十代は何を待っているんだ？

「俺はこれでターンエンドだ!」

「俺のターンドロ・・・!」

そういえば雪乃とツアンが残したカード・・・これは・・・!そうか、十代が待っていたのはこれが。なら、俺はこのターン耐えなければならぬ。そして、召喚するカードも決まった。

「チューナーモンスター『ゾンビキャリア』を召喚!」

ゾンビキャリア ATK400/DEF200

「レベル4の真六武衆・カゲキとレベル2のシールド・ウイングに、レベル2のゾンビキャリアをチューニング！」

4 + 2 + 2 = 8

「集いし願いが、新たに輝く星となる！光差す道となれ！シンクロ召喚！飛翔せよ、『スターダスト・ドラゴン』！」

スターダスト・ドラゴン ATK2500/DEF2000

「カードを1枚伏せて、ターンエンド！」

「僕のターンドロ・・・バトルだ。ラーでGreat TORN ADOを攻撃！『ゴッド・ブレイズ・キャノン』！」

けし飛ぶGreat TORN ADOその反動で俺達もその衝撃を受ける。バランスを崩し、吹き飛びそうになる。

「しまった！」

身体がよろけた瞬間、俺を何かが支えた。そこにいたのは・・・

「雪乃、ツアン！？」

「秋、今私達は貴方を支えることしかできないわ」

「僕たちにターンは、回らないでしょね」

ポロポロの二人はよく見れば雪乃は足を。ツァンは手を怪我していた。これではデュエルなど続けられたものではないだろう。

「君たちの考えていることは本当に分からない・・・僕はさらに伏せていた『女神の加護』を2枚発動。僕のライフは3000回復する。そして再び『宮廷のしきたり』を発動。君たちが何をたくらんでいるか知らないけど、攻撃は通らないだろうね。この神の前では」  
ライフが回復を・・・！バクラとマリクの影響なのか？圧倒的、完全に勝利をもぎ取る気なのだろう。そのための保険として畏カードを・・・だがここで止まるわけにはいかない。

武藤秋 LP4000 LP10000

「大丈夫、二人がいるなら、俺はまだ戦える」

「その通りだ秋！俺のターンドロー！来たぜ！『死者蘇生』を発動！俺が蘇らせるのは『真六武衆・シエン』！」

真六武衆・シエン ATK2500/DEF1400

「俺はこれでターンエンド！」

後は俺のドロ・・・か、十代の送った俺への視線、雪乃とツァンがフィールドに残した1枚ずつのカード。本来俺が思う作戦であったのなら、スターダスト・ドラゴンで十分その役割が可能・・・はずだった。だが計算外が一つだけあった。それは武藤秋の異常なまでのライフの回復だった。アイツじしんが直観的に感じたのか、それともバクラとマリクの闇人格が何かをしたのかは分からない。



だが、これで俺の作戦が崩れた。これでは、もう・・・

『マスター・・・!』

「ミラ・・・!？」

突然俺の横にミラが現れる。お前、今までどこに・・・って、ラーの衝撃波から観戦しているみんなを守ってたのか。

『マスター・・・恐れちゃだめです。今、貴方は一人じゃないんです。今この場には十代さんがいます。雪乃さんがいます。ツアンさんがいます。そして応援してくれているみんなと、私達がいるんです!』

みんなが、いる・・・俺が十代を見ると、十代は頷いて笑顔を見せた。雪乃とツアンも同じように頷いていた。俺は一人じゃない、か・・・そうか、そうだな。

「いい加減諦めたらどう?もう終わりだよ」

「そうだな、俺の・・・ラストターンだ」

『諦めないというかただの悪あがきだろう?次のターンでラーの効果によってお前らのフィールドはがら空きになるんだからよお』

『さっさとサレンダーしなあ・・・』

そうか、そういうことか・・・・・・ライフを回復しておきながらなぜ効果を使わなかったのか。それは俺達に絶望させ、降伏を選ばせようとしていたということか。そのお前らの余裕は、俺が打ち砕



「レベル10のモンスター!?」

「集いし星の輝きが、新たな奇跡を照らし出す。光さす道となれ！シンク口召喚！光来せよ、『セイヴアー・スター・ドラゴン』」

光が周囲を包み込み、救世竜セイヴアー・ドラゴンが9つの星を包み込む。そして現れるのは光を宿す、救済の竜・・・

セイヴアー・スター・ドラゴン ATK3800/DEF3000

「そしてこの瞬間！俺が伏せていた『リビングデットの呼び声』を発動！墓地から『闇の支配者 - ゾーク』を復活させる！」

闇の支配者 - ゾーク ATK2700/DEF1500

フィールドに揃い立つのはE・HEROシャイニング・フレア・ウイングマン、真六武衆 - シエン、セイヴアー・スター・ドラゴン。

「俺は歩き続ける！自分が信じた道を！例え罪を背負おうとも、俺には仲間がいる！」

「ああ！その通りだ秋！畏発動！『エレメンタル・スパイラル・フォース』！このカードはE・HEROがフィールドにいる時、モンスターの攻撃力を2倍にする！」

セイヴアー・スター・ドラゴン ATK3800/DEF3000

ATK7600/DEF3000

「そうよ！私達は秋と歩き続ける、この道を！畏発動『サモン・スパイラル・フォース』！このカードは儀式モンスターがフィールド



『くそがつ！こんな奴にいいいい……！』

『覚えて、やがれえええつ！』

その光に浄化されて、バクラとマリクの闇人格は姿を消してしまった。そして武藤秋は糸の切れた人形のように倒れてしまった。

「……勝った？」

セイヴァー・スター・ドラゴンはその役目を終えたかのように消えて行った。

「私達、勝った……？」

「僕たちは勝った、のよね？」

「……ああ、俺達の勝ちだよ」

俺の言葉と共に、雪乃とツァンは自らが負った怪我を忘れて俺に抱きついた。

「やった！勝ったのね！」

「これで、僕たちの勝ち！やった、やったあ！」

「ああ、勝ったな……お別れだ」

俺の手が、身体が、段々と薄くなり始めていた。驚いた顔の十代達。そして遠くにいた明日香たちも駆けつけていた。

「秋！」

「そんな、なんで……!？」

「元々、俺の今の体は武藤秋の精霊のドリアドが形成したかりその肉体だ。役目を終えれば、俺は消える。この世界にはもうとどまれない」

「そんな……嘘よっ！僕は、信じないわ！」

「わりいな、こんな形で……俺も別れたくないんだが」

「駄目よ、勝手に一人で逝くなんて、許さない……」

雪乃が必死に俺を抱きしめる。俺を離さないように、俺が消えないように……

「僕を置いていかないでよ、秋……」

ツアンも同じように、俺を抱きしめる。

「じゅん」

「………謝っても、ヒック……許さないわ……うっ、うっ  
う……」

「そうよ、僕たちは……ずっと一緒だってヒッグ……やくぞく、  
した……ヒッグ……」

二人はとうとう泣き始める。だけど、その運命は刻一刻と近づいていた。

「十代、それにみんな」

「なんだ？」

「頼みがあるんだ・・・もし、武藤秋が目を覚ましたら、アイツと友達になってやってくれないか？闇が抜け落ちたアイツはまた一人になる。その時、誰かがアイツを支えないと駄目だ。だから、頼む・・・」

「おう！任せろ」

泣きそうな顔を必死に抑え、十代が俺に頷いた。

「任せるッス！う、ううう・・・」

既に泣く翔

「きつと、いい友達になるんだな」

目に涙を浮かべる隼人

「もちろんよ・・・」

明日香も、目が紅い

「ふん・・・貴様に言われるまでもない」

こちらを見ない、万丈目・・・

「もちろんだ。彼には最高のデュエルの方程式を教えていく」

涙をふき、強く頷いてくれる三沢

「任せろ」

カイザーはただ一言、相変わらずだな。

「もちろんさ、君の頼みだからね」

いい笑顔を向けてくれる吹雪さん。もう、これで思い残すことはない。そして、俺は3人の精霊たちに顔を向ける。

「今までありがとう、ミラ、マハード、マナ」

『マスター・・・う、ううう・・・』

『秋殿・・・』

『マスター・・・ヒック・・・う、うわーん！』

この遊戯王の世界で俺は仲間を作り、決闘者として戦った。それが例え他人の代わりであったとしても、偽りの姿であったとしても、俺は確かに絆を作った。この絆は誰も断ち切ることはない。大切な大切な絆だ。そして・・・

「雪乃、ツァン・・・」



「・・・・・・・・」

二人は答えてはくれない。きっと、もう数分もないだろう。この二人に言葉を送れば俺は消える。この二人は言葉を聞けば消えると思っっているだろうが・・・俺は言葉を続けた

「この世界で、二人は俺を好きになってくれた・・・絆をくれた・・・俺は、おとぎ話に出てくるようなカッコいい主人公なんかじゃない・・・そんな俺を、二人は好きだと言ってくれた。俺も二人が大好きで、心から・・・愛している」

「秋・・・イヤよ、行かないで・・・」

「僕たちは、ずっと・・・秋と・・・一緒に・・・」

俺は二人から離れ。そっと離れる。

「だから・・・・・・・・心から、雪乃、ツァン、君たちに言わせてくれ。」

こんな俺を・・・

こんなろくでもない俺を・・・

殺してくわてて・・・

ありがとう  
「じ」

## 救いの時（後書き）

オリカ紹介

エレメンタル・スパイラル・フォース

このカードは自分のフィールド上に『E・HERO』と名のつくモンスターが存在する場合に発動可能。自分のフィールド上にいるモンスター1体を選択し、そのモンスターの攻撃力を倍にする。ただし、このカードが発動したターン、『E・HERO』と名のつくモンスターは攻撃できない。

サモン・スパイラル・フォース

罨カード

このカードは自分のフィールド上に儀式モンスターが存在する場合に発動可能。自分のフィールド上にいるモンスター1体を選択し、そのモンスターの攻撃力を倍にする。ただし、このカードが発動したターン、儀式モンスターは攻撃できない。

六武式最終奥義 螺旋剣一閃

罨カード

このカードは自分のフィールド上に『シエン』又は『六武衆』と名のつくモンスターがフィールド上にいる時に発動可能。

自分のフィールド上にいるモンスター1体を選択し、そのモンスターの攻撃力を倍にする。ただし、このカードが発動したターン、『シエン』又は『六武衆』と名のつくモンスターは攻撃できない。

以上です

要するに劇場版に登場した『ブラック・スパイラル・フォース』と『ネオス・スパイラル・フォース』の違うバージョンですね。

ホントスイマセン・・・あ、石投げないで！  
ちなみに、この最後の攻撃が書きたくて実はこの小説を書き始めた  
りしてました

秋風「もうちょっとだけ続けるのじゃよ」

## 終わりの始まり（前書き）

というわけで……この小説も最終回です。

今まで応援してくれた方々、本当にありがとうございました。

この短い期間の中でこれだけの投稿をして、楽しいデュエルをする小説を書くことが出来たと思います。

この小説、当初から色々タクティクスにも問題があったり、誤字脱字があったり、突っ込みどころがあったり、タクティクスに問題があったり、やっぱりタクティクスに問題があったり……結局タクティクスに問題があったり

……まあ、色々ありましたが、ここまで私を支えてくれた読者の方々を始め、沢山の方に感謝感謝でございます。

これからも別小説で頑張っていくつもりですので、応援のほどをよろしく願います。

秋風の次回作にご期待ください



この私がこんな中途半端に1期だけで終わらせるわけないだろう！  
「ちくしょーなんだよー・・・終わるかよー」  
と思った奴らめ！まんまと騙されたな！ふははははははは！

秋「セイヴァー・スター・ドラゴンで攻撃！『シューティング・ス  
パイラル・ブラスター・ソニック』！」

ちよ、それ3万超えの攻撃・・・うぎゃああああああああああ  
ああああ！！

秋「読者の皆さんに失礼だろうが！今まで読んでくれた読者をなん  
だと思ってるんだこの駄目作者！こんなだから他の小説で荒らし  
に会っただろうが！」

だって、新しいと思って・・・

秋「新しさ求めんな！今まで通りでいけや！・・・と、言うわけで、  
『遊戯王』拒絶に巻き込まれた転生録』はこのまま続行です。こ  
こで一期として完結せず、突っ走ります。これからもどうかよろし  
くです」

番外編の集計結果とかもあるよ・・・

秋「えーと、何々？」

遊戯王5D・S編 25票

アイマス編 7票

東方編 5表

・  
・  
・  
・  
秋「……なにこれえ」

ま、当然の結果だな。ちなみにデッキレシピはまだまだ人が少ないから集計してないので引き続き募集してます。

秋「そろそろ尺ねーな、んじゃ！そろそろ始まるぞ！一期の最終回  
つてことでーっ！」

もう、ゴールしてもいいよね？

秋「お前にゴールなんてない。書き続ける！」

つてなわけで、これからも応援よろしくです！

それではみなさん一緒に？

デュエツ！＼（、（、＼／（、（、＼／（、（、＼／（、（、  
（、＼／（、（、

秋「だから、新しさ求めるな！デュエツ！＼（、（、＼／（、（、



## 終わりの始まり

Side秋

「ここは・・・」

目を開けると、そこは精霊界だった。初めて武藤秋と出会った場所。初めてドリアドと会った場所。全ての始まり、俺の世界とあの世界を繋いでいた場所。誰もいないその場所を、俺はぐるりと見渡した。俺が怖いのかは知らないが、モンスターたちの姿はない。

「さて、これからどうしようか・・・」

空を見上げ、呟く俺。誰もいないこの場所が少し寂しくも思えるが、仕方のないことだろう。さて・・・気長に、自分の世界へ戻る手立てを考えるとしようかな。あの世界はもう、武藤秋のものに戻ったのだから・・・

「ふうん、ずいぶんアツサリとしたものだな」

聞きなれた声が聞こえる。ヘルメットをかぶったその男。そこには海馬社長・・・じゃねーや、カイバーマンがいた。

「カイバーマン」

「貴様にしては、随分とあっさりした別れだったな・・・」

「なんだ、見ていたのかよ」

サイバーマンはその問いには答えず、俺の前に立った。

「お前はこれからどうするつもりだ？」

「・・・探すさ、自分の世界への入り口を」

バクラとマリクの闇人格は俺をその避けた空間で偶然にも見つけたと言っていた。なら、気長にその裂けた場所を探すだけだ。この身体は魂だけみたいだし、歳をとることもないだろうからな。まずはどこから探そうか。

「自らの世界を探す、か・・・それがお前の道か？」

「ああ、そうだな」

「あの世界に戻るという手段をとらないのか？」

「取ったところでどうなる。あの世界の居場所が本来の人間の場所に戻ったんだ・・・よしとしたいよ」

俺が言うと、サイバーマンは短く笑った。

「ふうん、その言葉と反して・・・身体はどうにも震えているようだが？」

腕が震える。俺の心のどこかに、まだ未練があるというのだろうか？

「・・・お前がこの世界から消え、帰ればあの世界にあつたお前のカード達は全て消えるだろう。そしてそれに関する人間たちの記憶もまたしかりだ。お前を覚えている人間ももういなくなる。武藤秋

という存在はそのまま遊城十代達と友となり動くのもまた事実」

だろうな、そんなことだろうとは思ってたぜ。

「だが根強く着いてしまった記憶はそうはいかん」

「なに？」

「お前が愛し、愛された女たちは・・・お前を忘れることはないだろう。そしてそれを引きずり、一生を過ごす」

「・・・雪乃、ツァン・・・」

「そして精霊の力を持つ、お前の友もまた然り」

十代・・・」

「貴様が立ち切ったつもりでも、お前達の間に来た絆は永遠のものだ・・・それはどんなものでも断ち切ることはできないだろう」

「俺は・・・」

「本当に世界に戻るかは、お前自身が決めることだが・・・お前は自分の世界に果たして帰れるかな？」

ニヤリと笑うカイバーマン。一体どういう意味だろうか？すると、カイバーマンは懐から紙切れを取り出した。

「貴様の世界に通ずる穴から見つけたものだ。受け取れ」





「元の世界に戻ったところで、それに宿る肉体がないということだ」  
なにいいいい！あの盗賊と顔芸め！なんてことおおお！

「そーいや、お袋は・・・」

「ふん、知らん」

ですよー・・・お袋、元気なのかな。まあ、お袋なら元気にやっていけるとは思うが。まあ・・・それはさておき・・・

「結局俺、どうしょ・・・」

ガツクリと肩を落とす。もういつそ、ユベルみたいに精霊になっちゃおうかな、俺。てか、精霊になるならない以前に亡霊だ・・・このまま消滅を待つだけの存在になっちゃったよ。

「はあ・・・」

「ふうん、いくじのない奴め」

「あんたが俺の生きてく理由を挫いたんだろうが！」

どうすんだよ、これ・・・やることもないし、ただ単に消えるのを待つだけだ。いつ俺は消えるんだろうか？数秒後？数十分後？数日後？数カ月後？数年後？数百年後？いつ、どのような形でこの場所を過ごせばいいんだ？

「貴様がどう動くことが、どう生きようが勝手だ。ではな」

そう言って立ち去ろうとするカイバーマン。

「おい！お前状況荒らしたいだけ荒らして帰るのかよ！」

「ふうん・・・知ったことか。俺は貴様に自分の現状を知らせてやっただけにすぎん」

そう言いながらカイバーマンは森の中へと消えていく。

「おい待て！俺は一体どうしたら・・・！」

「願えばこの世界では場所を移動することが出来る！貴様の思っとうりにするがいい！」

思っとうりにしろって・・・そんな適当な

「秋・・・」

「え？」

名前を呼ばれ、振り返る。そこにいたのはドリアードだった。そしてその後ろには驚くべきことに、武藤秋がいた。

「ドリアード！それに、武藤秋！？」

「ありがとうございます。貴方のおかげで、秋を闇の呪縛から解き放つことが出来ました」

言い方がややこしいのは御愛嬌・・・ま、同じ名前だから仕方がな

いと言えば仕方がないんだが。

「気にするな・・・っと、言いたいところだけど。俺はただ無我夢中だったただけだしな」

「城戸秋さん・・・僕は・・・」

「何も言うなって。悪いのはバクラとマリクの闇人格。それで良しとしよう」

だが、武藤秋は首を振った。

「僕は、自分の心の弱さのせいで闇に隙間から入られて・・・僕はその闇を魅入ってしまった。それは、僕の責任です」

「武藤秋・・・」

武藤秋は「武藤遊戯の従弟であるのに情けないなあ、やっぱり」と、小さく口に零す。

「それに、今更元の世界で家族に合わす顔もないです」

「そんなこと言うなよ、お前は・・・」

「だから、これからも秋さんに・・・あの世界で生きて欲しいんです」

「・・・は？」

「お前、何言ってるの？前にも言ったが俺はお前の代わりには・・・」



「別に、あの世界が嫌いだからとか、そんなんじゃないです。僕は自分を見つめ直したい。この精霊界で・・・ドリアードと一緒に」

「武藤秋・・・」

こいつの目には、今まで会った中でも、一番しっかりとした目をしてた。俺と違って目的を持ち、真っ直ぐとそれに進もうという姿が

「秋、心配しないで・・・この秋はもう前の秋じゃない。これが本来の、秋なのだから」

「それに、もうあの世界は僕の世界じゃありません。城戸秋さん。貴方の世界なんだ。あの世界に貴方を愛し、想ってくれる人達がいる。僕には、今隣にいてくれますから」

そう言う武藤秋の手と、ドリアードの手は固く結ばれている。ドリアードはとても嬉しそうな表情だった。

「・・・お前は、それで本当に、いいんだな？それがお前の選んだ道なんだな？」

「はい。僕はこれから、ドリアードと共に生きていきます。この世界で・・・この精霊界で」

こいつの決意は固いものがある。この瞳を動かすのには相当の苦勞があるだろう。

「あ、そうだ・・・これ」

「あん？これは・・・」

そういつて秋が取り出したのは一枚のカードだった。渡されたカード、これは・・・

「『終わりの始まり』・・・？」

「はい。僕は闇を断ち切り。闇の自分に終わりを告げたんです。そして、この精霊界でドリアドと一緒に、僕は新しい自分を始めます。そして、秋さん、貴方も・・・偽りの武藤秋じゃない。本物の武藤秋として、あの世界での新しい自分が始まるんです」

偽りの終わりと、新しい始まり、か・・・

「ありがとうよ」

「僕たちはいつでも、貴方達のことを応援しています。何かあったらきつと力になります。だから、あの世界で頑張ってください」

「城戸秋・・・私達はいつでも、貴方達を見守っていますから」

そう言いながらドリアドが再び扉を出現させたおい、まさか・・・

「開けて扉くぐったらまた落ちるって感じ？」

「あの時は力が不安定でしたから仕方ないです。今度こそ、大丈夫ですよ」

なら、いいか。俺はゆっくりと扉に向かい、そのドアノブに手をか

ける。あ、そうだ・・・

「なあ・・・」

「「？」」

「また会えるよな」

俺の言葉に、二人は笑顔で頷いていた。

「そつか、じゃあ・・・」『さよなら』「じゃなくて・・・」

「「「またな」」」

3人の声が重なる。俺はそれに苦笑しながらも、扉を開ける。扉からの光に俺は包まれ、意識が薄れていく。俺は静かにそれに身をゆだねた。

.....

### レッド寮 秋の部屋

### S i d e 雪乃

秋が、この世界から消滅して2日。秋は・・・いいえ、秋の坊やはいまだに目を覚まさない。私は認めた真の男からしか坊やを外すつ

もりはない。今私は秋の坊やの部屋で自分の荷物をツアンとまとめていた。もう、この部屋で寝泊まりすることはないでしょう。

「ツアン、用意はできたかしら？」

「うん、大丈夫よ。僕は全部詰めた」

「そう・・・私ももう少し・・・んっ・・・」

荷物を押しこむ。私達の備品が多くあったから分からなかったけど。この部屋案外広かったのね。

「ねえ、雪乃・・・」

「何？ツアン」

「雪乃は、これからどうするの・・・？」

ツアンが少し不安そうに聞いてきた。

「秋のこと・・・」

「私は友達になるけど、もう恋人として見ることはないでしょうね・・・彼はもう真の男ではなくなったから。まあ、あの子が私を満足させられるなら話はまた別だけれど」

あの様子から、私の予想では間違いなく彼は真の男には成りえない。秋という真の男を見つけてしまったからには、もうこの学園で真の男を探すことはできないと思う。

「僕は・・・それでも、秋のそばにいようと思う。秋も前の僕みたいに一人ぼっちになるだろうから」

「うふふ、貴女はやっぱり優しいのね・・・」

「べ、別に！僕はただ・・・僕は、ただ・・・」

声を張り上げたかと思うと、すぐに元気をなくすツアン。ふう・・・やっぱり、秋がいなくなった代償は大きい、わね・・・

「んっ・・・あ・・・ふぁ・・・」

すると、突然ベッドから声が聞こえる。起きたようね・・・武藤秋が。とりあえず自己紹介からするべきね。

「久しぶりね、武藤秋・・・私達を覚えているかしら？」

「もちろん、忘れてないわよね？アレだけしておいて」

「・・・・・・」

私達の言葉に、武藤秋は無言だった。ただ私達をジッと見つめている。

「私の名前は藤原雪乃・・・よろしくね」

「僕はツアン・ディレよ。まあ、アンタと友達になってあげなくもないわ」

「・・・・・・」

自己紹介にも関わらず、相変わらずの無言。そして私達をジッと見ている。すると、ツアンが我慢できなくなったように怒りだした。

「もつっ！なんとか言ったらどうなの！？反応しなさいよ！」

「そうね、秋の坊や？私達に何か言うことはないのかしら？」

私がそう言うと、武藤秋はベッドから降りて私達に一步、また一步と近づいてくる。彼の身体にまだ闇が残っているのかと思わず身構えてしまう。でも、次の瞬間私達は驚いた。突然武藤秋が私達のことを抱きしめたのだ。

「なっ……」

「ちよっ……何するのよ、離れてよ！」

「……ぶくっ、くくく、くく」

「「え？」」

突然の笑いを漏らす声が聞こえた。何故、彼は笑っているのかしら。私達が驚いているがそんなに面白いのかしら？とりあえずすぐに離れてビンタでも入れてやるつかしら？そう思った、その時だった。

「……ごめんな、ただいま。二人とも」

おもわず自分の耳を疑ってしまった。今彼は何と言った？『ただいま』そう聞こえた。そんな、じゃあ……まさか……

「秋、あなた・・・秋なの!？」

ゆっくりと離れ、微笑みを私達に向けてくれる。

「ああ・・・そうだよ」

私達はその言葉を聞いて、勢いよく飛び付いた。

「うおっ!？ちよっ・・・だぁ!」

秋の上に倒れ込む私達。でも、今はそんなこと関係はない。

「秋っ!秋・・・秋!本当に秋なのね!」

「嘘じゃないわよね!武藤秋が演技なんかしてたら承知しないわよ!？」

「嘘じゃないよ・・・俺は帰ってきたんだ。この世界に、この場所に。武藤秋として、な」

涙が止まらなかった。最愛の人が今、私の手を握ってくれている。ああ・・・この温もり、この匂い、そして何よりこの安心感。間違いない、彼は城戸秋の魂を宿す武藤秋なのだ。私はその手を一層強く握った。

「おかえりなさい、秋」

ツアンと二人で強く抱きしめた。そして一層手を強く握る。私にもう、この手を二度と離さない。離してなるものですか・・・

S i d e ツァ ン

突然の笑い声の後に聞いた一言に、僕は驚きと嬉しさがこみあげ、思わず秋にダイブしてしまった。秋は私達を支えきれずに倒れてしまった。でも、そんなことどうでも良い。僕は今、また再び最愛の人の胸の中にいるのだ。

「嘘じゃないよ・・・俺は帰ってきたんだ。この世界に、この場所に。武藤秋として、な」

この言葉を聞いて、僕も雪乃と同じように涙が流れる。僕は・・・これからもずっと一緒に入れる。これからも、秋と永遠に一緒にいたい。言葉で、行動で違うように動いてしまっても、秋はいつもそれを理解してくれる。だから言いたい。私達の最愛の人が帰って来たのだ。その言葉を

「おかえりなさい、秋」

雪乃と二人で強く抱きしめた。そして一層手を強く握る。私はもう、この手を二度と離さない。離してあげないんだから・・・



## 終わりの始まり（後書き）

第一期終了！

ようやく一区切りです・・・

番外編に關しましては、そのうち出来たら投稿をこの小説に投稿していくので、よろしく願います。

そういえば今日、28日はZEXALのサントラ発売日ですね。ちやんとシャークさんのマジックコンボだ！が入ってて安心しました  
ではまた次回！

## この手は離さない(前書き)

・・・三幻魔編が終わったので番外編制作中です

で、同時進行で1年の話をかく予定です

カイザー戦

隼人VSクロノス

などなど、やることはいっぱいある・・・いっぱいある、のですが

先日タッグフォース6を購入。即効で雪乃とツァンを落としにかかりました

その影響でツァン×秋の話を書きたくて書きたくてしょうがなくなり、現在に至る

今回は非常に砂糖を吐きだす内容となります

ブラックコーヒーとゴーヤを用意してご覧ください

秋「今日の最強カードは・・・『破壊輪』禁止カードじゃん」  
フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を破壊し、  
お互いにその攻撃力分のダメージを受ける。

リア充爆死しろおお！

秋「・・・」

あ、もちろん雪乃の話も今考えてますよー

この手は離さない

Side 秋

三幻魔の戦いから幾日の時が過ぎた。戻ってきた俺はみんなに驚かれた。まあ、そりゃ驚かれるだろう。あんなに悲愴的な別れ方・・・詰まる話、BADエンドだったはずが、こうしてその当事者がここにいるんだからな。十代たちとは抱き合っただし、翔、隼人、明日香とかには泣かれるし、色々大変だった。そしてある日のこと

「実家に戻る？」

「ええ・・・親戚に不幸があつたみたいなの」

と、雪乃が俺に言う。

「学園からも許可は出だし、2日くらいで帰るわ」

「そっか、その間の授業のノートは取っておくよ」

「ええ、ありがとう秋」

こうして、雪乃は一時、実家へと帰ることとなる

Side ツァン

雪乃の実家の方でなにやら不幸があつたらしく、雪乃は一度戻ることになった。これは、言い方があれだけど、秋と二人きりになれる

ということね・・・べ、別に出し抜こうってわけじゃないんだから！ただ、ちよつと二人きりの時間が欲しいなんて思ってたんだから。そんなことを思っていると、荷物をまとめた雪乃が僕に近づいてきた。

「（ツアン、二人きりで好きなこととしていいけど、その代わり春休みに最初秋がくるのはうちだからね？）」

むむむむむ・・・本当は真つ先に僕の家に来て欲しいけど、仕方ないわね

「わかったわよ」

「それじゃ、行ってくるわ」

「ああ、気を付けてな」

「ええ」

こうして雪乃が出ていく。部屋には僕と秋だけ。秋は相変わらずカードを見ているけど・・・えーと、えーと、何か、何かないかしら。秋と二人つきりですること・・・決闘？なんで僕まで決闘馬鹿みたいになつてんのよ。後は抱きつく・・・いつもやってるわね。後は・・・後は・・・何か、何かないかしら

「ふうー・・・そろそろ風呂行くな」

それだつ！

「秋！」

「ん？どうしたツァン」

「温泉行くわよ！」

僕が言うと、秋は目を丸くしていた

「ど、どうしたんだいきなり」

「べ、別に深い意味はないわよ？ただたまには気分転換と思って・  
・べ、別に、この前のことを根に持つてるわけじゃないんだからね  
!?!」

あううう・・・僕ってばまた何言ってるのよ。秋はしばらく驚いた  
顔をしていたけど、すぐに苦笑していた。

「了解、行こうか」

バスタオルと着替えを用意する秋

「う、うん」

「そうだ、十代達も・・・だ、駄目よ！」は？」

僕はそれを慌てて止めた。この前はそのせいで十代達+精霊たちに  
邪魔されたんだもの。それがまた起きるのは絶対嫌！

「ふ、二人が・・・そう！二人がいいの！他を呼ぶなんて駄目よ！」

「わ、わかった。分かったから落ちつけよツァン、な？」

「う、うん・・・」

こうして、僕たちは温泉の方へと向かうのだった。

S i d e 秋

なんというか、突然だったので驚いたがツアンと共に温泉に向かう。どうしてこうなったのかと理由を考えただけど、一応俺とツアンは恋人同士でもあるんだ。だから、こういうことをするのだろうか？でも普段のツアンなら恥ずかしがると思ったんだけど・・・やっぱり二人きりとかのほうがいいのかな？そんなことを考えていると、いつの間にか温泉についていた。

「ほら、行きましょ」

中に入るが、人気がない。やっぱりこっちに来るのは大変なのかなそして入ると、やはり広い。ほんとうにレジャーランドという感じである。とりあえず身体洗うか

「はぁ・・・イテテ」

あの戦いは闇のゲームだった。すくなくならず自分で付けた傷とはいえ、なかなか痛いものだ。それを避けながら身体を洗う

「お待たせ」

「ああ、ツア・・・ン」

そこにいたのは、ツアン。だが、ツアンの今の状態はタオル一枚という・・・なんというか、なんだろう。男として喜んでいい状態である。

「あ、あんまり見ないでよ・・・は、恥ずかしいから」

「水着じゃなかったのか？」

「風呂入るのに水着で入る馬鹿がどこにいるのよ」

前に水着で入ろうとした癖に。とりあえず風呂に入る。相変わらず広いな・・・

「よいしょ・・・」

俺の隣にツアンが入る。

「あいかかわらずここ広いわね・・・」

「そうだな。それにしても客いね・・・」

他の生徒が誰もいない。俺達の貸し切り状態だ。

「今の時間帯は『混浴』の時間なの。だからよっぽどなことじゃないと他の生徒は入りにこないのよ」

「へ・・・」

すると、ツアンが俺に近づき、頭を俺の右肩に乗せた。

「ツァン？あの・・・当たってるんですけど」

その、上半身にある柔らかくて大きなふくらみが・・・胸が、俺の腕に

「・・・当ててるのよ。言わせるな馬鹿」

「ゴメンナサイ」

何故、俺は謝るんだろう

「なんで謝るのよ」

「いや、なんとなく」

俺が言うと、ツァンがクスリと笑った。

「ふふっ・・・なんだか、こうして二人きりなのは久しぶりね」

「そうだな、冬休みに二人で町に行った時くらいか」

あの時はまあ、色々と楽しい時期だったな。町でデュエルから抜け出して遊んだ感じがあつたし

「そうね・・・でも、今はその時以上に貴方が好きよ。秋」

「ツァン・・・」

髪の毛が濡れ、目が潤むツァンが美しく見える。



「秋・・・温かいわ」

「そりゃ、風呂入ってればな・・・」

「・・・そついう意味じゃないわよ」

言いながら肩に頭を乗せるのをやめ、立ち上がる。

「ねえ、露天風呂に行かない？」

「ん？別にいいぞ」

言いながら立ち上がるが、タオルが濡れているせいで所々ツァンの身体が透けている。男としては嬉しいのだが、色々と・・・うん、本当に色々とアレなので少し視線を外す。露天ぶるは行ったことがなかったが、どんな場所だろうか？外へ出ると冷たい風が来るので急いで中へ入る。

「ふう・・・」

「ねえ、秋・・・見て」

「ん？」

外を見ると、海が見える。そして海の前に見えるのは夕焼けだ。綺麗な夕焼けが海を紅く染める。

「綺麗・・・」

「ああ、そつだな」

温泉着て、前は夕方に上がったからな。こんな風景を見ることはできなんだ。まあ、いいもん見れたな。

「秋・・・聞いてもいい？」

「ん？」

「雪乃は・・・美人だし、スタイルもいいし、秋のことを心から愛してると思うの。僕も、秋のことを愛してる。でも・・・秋は、秋は・・・」

少し、ツアン自身言うのを何かためらっていた。そして、ツアンは意を決したように俺を見た。

「秋は、僕が・・・恋人でよかったと思う？」

「ツアン・・・？どうしてそんな・・・」

「秋と、こんな風に恋人みたいなこと・・・一度もしたことなかったから」

「僕じゃやっぱり、駄目なのかな・・・雪乃の方がいいの？秋」

「はあ・・・何を言うかと思えば」

「あの子、何を言ってるんだお前は」

言いながら俺はツアンを引き寄せ、唇を重ねる。ツアンは驚いて目を見開くが、俺はそのまま目を閉じ、唇を合わせづける。そして唇

を離し、そのまま抱きしめた。裸同士で抱きしめているからか、その身体が密着するのがよくわかる

「あ、秋……」

「お前も、雪乃も……俺にとってはもう大切な存在なんだ。この手から離すもんか」

「でも……僕……」

「ツアン、お前があの時……闇の決闘でも、雪乃や十代と一緒に戦ってる姿を俺はちゃんと見ていたんだ。お前は、俺を取り戻すために戦ってくれた。それだけで、お前の気持ちは十分わかってたよ」

「秋……うつ……ひつく……うえええええ……」

いきなり泣き出すツアン。あ、あれ？

「な、なんで泣くんだよ……」

「知らないわよ、馬鹿あああ」

ツアンはひたすら、そこで泣いていた。笑顔で。どうして笑顔であるのに泣くのかは、イマイチ俺には理由が分からなかった。……でも、その涙で着飾った笑顔は……今まで見たツアンのどんな笑顔よりも、綺麗で、可憐で、何より……大切なものなのだ知った。

「そろそろ、出ましようか」

「ああ、そつだな」

夕焼けが沈みかけるころ、俺達は温泉を出た。ちらほらと女子生徒が見えたのでそそくさと退散した。また委員長に見つかったら大変だ。

「はぁー・・・秋、もういいわよね」

「ああ、こんだけ離ればな」

帰り道、一緒に歩く俺達だが、ツァンが少しだけ前を歩いている。

「ねえ、秋？」

「ん？」

「もし・・・これから、この先、僕に何かあったら・・・助けてくれる？」

こちらを向かず、夜空を見上げながらツァンは静かに呟いた。俺の言葉は決まっている。

「ああ、お前も、雪乃も・・・もう二度と、傷つけさせたりはしない」

「・・・雪乃と一緒になのね、こついつときは他の女の名前は出さないものなのよ」

少し、不機嫌なツァンの声が聞こえる。駄目だ、恋愛経験の少ない俺では向こうから見切られそつだな、そのうち

「わ、悪い・・・」

俺が謝ると、ツァンのクスリと笑う声が聞こえた。

「しょうがないわねえ・・・許してあげるわ」

そう言いながら、ツァンは振り返る。その振り返るツァンの笑顔は、月の明かりに照らされて輝いている。

「秋、今は私達二人を大事にしてくれると言っけれど、いつかは・・・僕が一番だって、言わせてやるわ。だからこれからも、一緒にいて」

そう言いながらツァンは上半身だけを振り返らせ、こちらに手を差し出す。俺の手は自然とツァンの手に向かい、しっかりとその手を握った。

「ああ、もちろん」

「この手は、絶対に離してあげないんだから！」

手を繋いで横に並ぶ俺とツァン、そしてその時見た笑顔もまた、月の明かりがないのに輝いて見えた。

## S i d e 麗華

先ほど久しぶりに温泉に行こうと思っ、行ったところ・・・秋君と

ツアンさんがいました。何やら喋りながら仲良く手を繋いでいます

「むむむむむ．．．秋君、やはり君は．．．」

学内でも噂の3人。武藤秋、藤原雪乃、ツアン・デイレ．．．この三人の恋人関係。許せません！生徒の乱れは学園の乱れ！この原麗華、学級委員にして時期生徒会会長候補である私が必ず、彼を粛正します！

「そのためにも、彼に勝つ方法を研究しなければ．．．そのためにも、まずはお風呂です」

こうして、私は温泉へと向かって行った

この手は離さない(後書き)

ゲフツ (吐糖)

なんだこのギャルゲーのエンディングみたいな話は・・・  
バカップルめ、ちくしょおおお！

今度、麗華ちゃんの怒りの鉄槌でも喰らえばいいんだああ！

作者の現在のTF6の攻略情報

藤原雪乃 FULL

ツアン・デイレ FULL

レイン恵 3

龍可 3

十六夜アキ FULL

不動遊星 2

作者の最近のカード情報

EXTRAPACK 4

complete

収獲

ダークソウル 1

ボガーナイト 1

ヴァナヴィーズ 3

ボルテクス 4

サイコデビル 3

エンプレスデーモン 3

増殖G 2

ブロッカー 1

つてな感じですよ

ではでは



帝王、最後の夜（前編）（前書き）

更新遅れました。

学園祭の準備で遅くなってしまうましたー・・・申し訳ない

最近、読者の方から『感想が指摘だけは規約違反で、よろしくない』という意見をいただきました

確かに、指摘はありがたいのですが、感想を書いて欲しいというのは私も望んでいます

指摘だけのものについては、本編と確認後削除する形を取ることにいたします

どうか、ご協力をよろしくお願いいたします

カイザー「今日の最強カードは『強制終了』・・・このカード以外のカードを墓地へ送ることでバトルを終了させる」

遊星の使っていたカードですね。

## 帝王、最後の夜（前編）

Side 秋

相変わらず平和な日。月日は3月・・・3年生は卒業シーズンに入る。当然ここで起こるのが十代とカイザーのデュエルである。あのデュエルは燃えたな、当時テレビで見ていた俺としては生で見られるのはいい。隼人とのデュエルもこの前だったが、クロノスが原作通りしつかりと教育者としての自覚を持ち始めていたので安心した。原作とは違うことになっていたら俺はもう対処のしようがないからな。俺の平和な日々はこの時だけ・・・でありたかった

「・・・行くぞ、秋」

「ああ、カイザー・・・いや、丸藤亮」

「「デュエル  
決闘！」」

そう、今俺はカイザーと共にデュエルを始める。カイザーの真の卒業デュエルを

今から5時間前

遊城十代 L P O

俺達は今、カイザーと十代のデュエルを見ていた。十代が使うのはもちろん漫画とアニメのヒーローを混ぜたデッキだ。それなのに、この結果か・・・流石としか言いようがないな

「大丈夫か・・・？」

「そつちこそ！」

二人は決闘場で倒れている。

「デュエルはいい・・・」

「ああ・・・あんととのデュエル、最高だったぜ！」

「後は頼んだぞ。在校生！」

「ああ！任せろ、卒業生！・・・卒業おめでとう、カイザー！！！」

学校卒業なのはいいが、確かカイザーはプロになるんだっただな・・・カードで飯が食っていけるってどうなっているんだろっな、この世界

「さて、帰るか」

「そつね・・・」

「あ、ねえ秋・・・確か今日購買で新しいパックが・・・」

雪乃やツアンと他愛のない会話をしながら戻る。流石に、俺はもう介入する余地ないからな、物語に。卒業まで静かに過ごすとしてよう

## レッド寮 秋の部屋

「・・・なにこれ？」

寮に戻ると、箱が置かれていた。届け物らしい。鮫島校長からだ。

「鮫島校長から？また何か企んでいるのかしら？」

「おいおい、雪乃・・・」

アレ以来、雪乃は校長をまるつきり信用してないからなあ・・・まあ、しょうがないと言えばしょうがないわけだが。さて・・・

「箱の中身は・・・」

「制服、ね」

「それもオベリスクブルーの・・・」

入っていたのはオベリスクブルーの服だ。これはあれか？昇進ってことでいいのか？

「校長、あんた契約どう思ってるんだ」

俺と校長の契約はレッド、イエローでいて、他の生徒たちの士気を上げることにあらずだ。だが、これでは意味がないのではないだ

ろうか？

「もしかしたら、レッドからブルーに上がった存在とさせたいんじゃないかしら？」

「なるほど」

それでこれか。俺、この制服嫌いなんだよな・・・ひらひらしてて、なんか鬱陶しい

「これでようやく、秋とおそろいね」

「そうね、これならブルー寮の寮同士近くなるし」

「・・・あのな、俺はあの寮に行くのは嫌だぞ」

無駄に豪華で、無駄に広くて、無駄に鬱陶しい・・・あんな場所、俺は嫌いだ。この部屋の広さは普通に生活するには十分な広さだしな。飯だってカミューラの飯、旨いし

「ま、そうだと思ったわ」

「僕たちもこっちから動く気ないから安心して」

「ああ、それだと嬉しいよ・・・ん？」

すると、PDAにメールが入る。誰からだ？カイザー・・・？

深夜0時、灯台で待つ

丸藤 亮

あるえー？なんで俺カイザーから呼び出し喰らってんの？俺なんかしたっけ・・・

「忘れたの？秋・・・貴方、この学園で唯一カイザーに勝利した生徒なのよ？」

「そのアンタと最後戦わないはずないでしょ」

「・・・なんでさ」

思わず某正義の味方志望の男の言葉を漏らす俺。なんでそうなった・・・だが、断るわけにもいかない。いかないけど・・・

「これでまた就寝時間の門限破ったとかで退学になったら嫌だな」

「大丈夫じゃない？多分、鮫島校長公認だと思うわ」

「何故そう思うんだ？雪乃」

俺が雪乃に聞くと、雪乃は制服を指差した。

「アレ着て、カイザーと戦えってことよ」

「・・・なるほど」

こうして、俺達は深夜0時に行くことに灯台に行くことに成った。

カイザーよ、俺は灯台部を継ぐ気はないぞ

深夜0時 灯台

俺達が灯台に行くと、既にカイザーが待っていた。

「来たか」

「・・・待たせたな、カイザー。何か用か？」

俺が言うと、カイザーはデュエルディスクを構えた。

「武藤秋・・・いや、城戸秋。お前にデュエルを申し込む」

「・・・何？」

「お前のことは十代達から聞いている。そして、お前との決着をつけたい」

まあ、俺のことはいいとして・・・決着って

「お前、案外根に持つタイプなんだな」

「そうではない・・・今の俺はカイザーではない。丸藤亮として、一人のデュエルアカデミアの生徒として、決闘者として！お前にデュエルを申し込む！」

決闘者として、か・・・なるほどね

「良いだろう・・・お前の申し出、受けて立とう」

俺も同じようにデッキをセットし、デュエルディスクを起動させた。

「・・・行くぞ、秋」

「ああ、カイザー・・・いや、丸藤亮」

「「<sup>デュエル</sup>決闘！」」

俺とカイザーのデュエルが始まった。

S i d e 雪乃

カイザーとのデュエル。それは、カイザーにとって真の卒業デュエルと言えるでしょう。私が聞いた中でも、無敗の神話を持つカイザー・・・セブンスターズとの戦いは生徒に知られていないことだから別としても、この戦いは特別な戦い

「先攻と後攻はどうする？」

「俺が先攻をもらう・・・全力でこい、カイザー！」

「いいだろう！」

あえて、カイザーに後攻を？まあ、カイザーにとって先攻後攻はあまり関係がないから問題はないけれど



武藤（城戸）秋 LP4000

丸藤 亮 LP4000

「俺のターンドロ・・・！俺は、手札から『カードガンナー』を召喚！」

カードガンナー ATK400/DEF400

「カードガンナーの効果発動！1ターンに1度、デッキからカードを3枚まで墓地へ送り、送った数×500ポイント、エンドフェイズまで攻撃力を上昇させる」

カードガンナー ATK400/DEF400 ATK1900/  
DEF400

まあ、秋の本来の狙いは攻撃力の上昇ではなく墓地へカードを送ることにある。先攻でこの効果は意味がある。

「カードを2枚伏せて、ターンエンド」

カードガンナー ATK1900/DEF400 ATK400/  
DEF400

「俺のターンドロ！相手フィールドにモンスターが存在し、自分フィールドにモンスターが存在しない時、『サイバー・ドラゴン』を特殊召喚！」

サイバー・ドラゴン ATK2100/DEF1600

サイバー・ドラゴン！もう出てきたのね。

「行くぞ秋！バトル！サイバー・ドラゴンでカードガンナーを攻撃！『エヴォリユーション・バースト』！」

「畏発動！『くず鉄のかかし』！1度だけ相手モンスターの攻撃を無効にし、このカードは再びセットされる！」

「俺はカードを2枚伏せ、ターンエンドだ」

「行くぞ、俺のターンドロ！カードガンナーの効果発動！」

再び墓地へ送られるカード、そしてカードガンナーの攻撃力も変動を起こす。

カードガンナー ATK400/DEF400 ATK1900/DEF400

「手札からチューナーモンスター『ジャンク・シンクロン』を召喚！」

ジャンク・シンクロン ATK1300/DEF500

「ジャンク・シンクロンの効果発動！レベル2以下のモンスターを蘇生する。戻って来い『チューニング・サポーター』！」

チューニング・サポーター ATK100/DEF100

出てきたのはチューニング・サポーター・・・レベルは合計で7になっ  
てしまふ。これではせいぜい呼べてもブラック・ローズ・ドラ  
ゴンだわ。

「レベル1のチューニング・サポーターと、レベル3のカードガン  
ナーに、レベル3のジャンク・シンクロンをチューニング！」

1 + 3 + 3 = 7

「くず鉄に宿りし不浄の悪魔よ！今こそ一つとなりて、その怨念を  
宿して現れよ！シンクロナ召喚！再起動！」スクラップ・デスデーモ  
ン  
『！』

スクラップ・デスデーモン ATK2700 / DEF1800

ブラック・ローズ・ドラゴンじゃない！？攻撃力2700の、レベ  
ル7のモンスター・・・！

「初めて見るわ・・・」

「うん、秋・・・まだあんなカードを持ってたんだ」

「チューニング・サポーターの効果でカードを1枚ドロー！そして  
バトル！スクラップ・デスデーモンで、サイバー・ドラゴンを攻撃  
！」スクラップ・スマッシュャー『！』

スクラップ・デスデーモンの攻撃で粉碎されるサイバー・ドラゴン。  
でも、これで終わるカイザーじゃないわね

丸藤 亮 LP4000 LP3400

「畏発動！『リビングデットの呼び声』！蘇れ、サイバー・ドラゴン！」

サイバー・ドラゴン ATK2100/DEF1600

「墓地のレベル・ステイラーをスクラップ・デスデーモンのレベルを下げて守備表示で召喚、ターンエンドだ」

レベル・ステイラー ATK600/DEF0

「俺のターンドロ―！俺は手札から『プロト・サイバー・ドラゴン』を召喚！」

プロト・サイバー・ドラゴン ATK1100/DEF600

「このカードはフィールドに存在する限り、サイバー・ドラゴンとして扱う」

フィールドに『サイバー・ドラゴン』として存在するモンスターが2体！まさか・・・

「手札から融合を発動！手札のサイバー・ドラゴンと、フィールドのサイバー・ドラゴン、プロト・サイバー・ドラゴンを融合！今こそ現れよ！『サイバー・エンド・ドラゴン』！」

サイバー・エンド・ドラゴン ATK4000/DEF2800

「来たな・・・」

「全力で行くぞ、速攻魔法『サイクロン』を発動し、くず鉄のকাশを破壊する！サイバー・エンド・ドラゴンでレベル・ステイラーを攻撃！『エターナル・エヴォリユーション・バースト』！」

「ならば畏発動・・・」

秋が言いかけた時、エターナル・エヴォリユーション・バーストがレベル・ステイラーに直撃した。

武藤秋 LP4000

「何・・・？」

煙が晴れると、そこにはレベル・ステイラーの姿はない。

「俺は畏カード『強制終了』を発動していた。このカードはこのカード以外のカードを墓地に送ることで、このターンのバトルフェイズを終了できる。俺はレベル・ステイラーを墓地へ送り、バトルフェイズを終了させたわけだ」

「なるほどな・・・俺はカードを1枚伏せ、ターンエンド」

「俺のターン！」

このデュエル、一体どちらが勝利者になるのかしら・・・？

帝王、最後の夜（前編）（後書き）

明日辺りにまた後半を上げます

## 帝王、最後の夜（後編）（前書き）

あゝ・・・やっとなんか更新できた

もうVSカイザーは描きたくないです

サイバー・ドラゴンばかりだから描くときにどうすればダメージが与えられるかわからないデス

ホントやだ

秋「今日の最強カードは『サイバー・ドラゴン・ツヴァイ』だ」

このカードは相手モンスターに攻撃する場合、

ダメージステップの間攻撃力が300ポイントアップする。

1ターンに1度、手札の魔法カード1枚を相手に見せる事で、

このカードのカード名はエンドフェイズ時まで

「サイバー・ドラゴン」として扱う。

また、このカードが墓地に存在する場合、

このカードのカード名は「サイバー・ドラゴン」として扱う。

ABSOLUTE POWERFORCEで登場したカードですね。

残念ながらカイザーのデッキには入ってませんでした。強いのにねえ・・・

帝王、最後の夜（後編）

武藤秋 LP4000

丸藤亮 LP3400

Side亮

俺は今、この学園で最後のデュエルをしている。俺に黒星を付けた男。その黒い瞳から放たれる強い意志を俺は感じ取る・・・本気で戦うとはこういうことだ。吹雪と戦う時や、遊城十代と戦った時とはまた違う、その秘められた相手を倒そうとする意思。リスペクトデュエルを否定しても、その真つ直ぐ向かってくるその強さ。彼のこととは友・・・そうかと聞かれれば微妙だ。彼と特別親しい間柄というわけではない。共にセブンスターズとも戦った。だが、戦友と言うのはまた違うだろう。そう、例えるなら・・・好敵手・・・

「なるほどな・・・俺はカードを1枚伏せ、ターンエンド」

「俺のターン！」

くず鉄のかかしを破壊したと思えば次は強制終了。一手先だけではなく二手、三手先をアイツは確実に読んでいる

「来い、武藤秋・・・！」

俺は思う・・・このデュエルが、心から楽しいものなのだと



S i d e ツァン

「俺のターン！ドロー！」

僕は雪乃共に、そのデュエルを見守っていた。その状況は前と似たような感じ。カイザーのフィールドにはサイバー・エンド・ドラゴン。そして、秋のフィールドにはシンクロモンスターが1体だけ。これでは、どこまで戦うか前と同じく難しい。

「俺は再び、スクラップ・デスデーモンのレベルを下げることで『レベル・ステイラー』を特殊召喚！」

スクラップ・デスデーモン 6 5

レベル・ステイラー ATK600/DEF0

「そして、手札のクイック・シンクロンを墓地へ送り、『クイック・シンクロン』を特殊召喚！」

クイック・シンクロン ATK700/DEF1400

「レベル1のレベル・ステイラーに、レベル5のクイック・シンクロンをチューニング！」

1 + 5 = 6

「疾風の使者よ、鋼の願いが集う時・・・その願いは、鉄壁の盾となる。光差す道となれ！シンクロ召喚！現れろ、『ジャンク・ガードナー』！」

ジャンク・ガードナー ATK1400 / DEF2600

「そして手札から『天よりの宝札』を発動！互いのプレイヤーは6枚になるようにドローする！」

ここで6枚のドロー・・・秋がサイバー・エンド・ドラゴンに勝つ方法はただ一つ、ただひたすら、シンクロで展開するのみ。それに必要なのは圧倒的なドローの量。でも、それは同時に十代と同じくチートドローを持つカイザーの戦いを有利にすることになる。

「俺は再び『レベル・ステイラー』を、ジャンク・ガードナーのレベルを下げた特殊召喚！」

ジャンク・ガードナー 6 5

レベル・ステイラー ATK600 / DEF0

「そして、チューナーモンスター『ジャンク・シンクロン』を召喚！効果で墓地の『チューニング・サポーター』を特殊召喚する！」

ジャンク・シンクロン ATK1300 / DEF500

チューニング・サポーター ATK100 / DEF100

再び揃うモンスター達・・・今度は何を召喚するつもりかしら

「レベル1のチューニング・サポーターと、レベル1のレベル・ステイラーに、レベル3のジャンク・シンクロンをチューニング！」

「刻まれし正義の名のもとに、今こそ破壊の限りを尽くせ！シンク  
口召喚！起動せよ、『A・O・Jカタストル』！」

A・O・Jカタストル ATK2200/DEF1200

出た！闇以外のモンスターを一掃する！あのカード僕嫌いなよね  
でも、さっきのレベルの合計は9にも出来たはず。そうすればトリ  
シューラでサイバー・エンド・ドラゴンを除外出来たはず。秋、ま  
さかすべてモンスターを粉碎するつもりで？

「チューニング・サポーターの効果でカードを1枚ドロロー！そして  
バトル！A・O・Jカタストルでサイバー・エンド・ドラゴンを攻  
撃！この瞬間、カタストルのモンスター効果発動！カタストルが攻  
撃する時、闇属性以外のモンスターである場合破壊する！」

「させるか！畏発動『天罰』！手札一枚をコストに、モンスターの  
効果を無効にし破壊する！」

「なっ・・・！」

上空のから来た雷によって破壊されるカタストル。これは痛い・・・  
光族星をせん滅するA・O・J・・・なのに、それが破壊されるの  
は痛いけど・・・なんでかしら、僕はカイザーに疑問を持った。相  
手の戦いを敬い、完全の勝利を求めるデュエル・・・それがリスペ  
クトデュエル。でも、今のカイザーはいつもと違う、そう・・・言  
うなれば、楽しそう・・・そう言うべきかもしれない。

「っち！なら、カードを2枚伏せてターンエンド！」

「俺のターンドロロー！俺は手札から『強欲な壺』を発動！カードを2枚ドロローする・・・そして手札から『融合回収』を発動！サイバー・ドラゴンと融合を墓地からデッキへ戻す！さらに、再び俺は『プロト・サイバー・ドラゴン』を召喚！」

プロト・サイバー・ドラゴン    ATK1100 / DEF600

ま、また手札に「プロト・サイバー・ドラゴン」！？天よりの宝札の効果とはいえ、どれだけドロロー運がいいの！？呆れてものも言えないわ！あいかかわらずだけど！

「そして手札から『融合』を発動！プロト・サイバー・ドラゴンとサイバー・ドラゴンを融合！現れる、『サイバー・ツイン・ドラゴン』！」

サイバー・ツイン・ドラゴン    ATK2800 / DEF2100

「バトル！サイバー・ツイン・ドラゴンでスクラップ・デスデーモンを攻撃！『エヴォリューション・ツイン・バースト』！」

「強制終了を発動！レベル・ステイラーを墓地へ送り、バトルフェイズを終了する！」

「ならば、『地割れ』を発動し、ジャンク・ガードナーを破壊！手札からカードを2枚伏せ、ターンエンド！」

「ジャンク・ガードナーの効果でサイバー・エンド・ドラゴンを守備表示に変更する！」

これでサイバー・エンドは再び守備表示になった。これなら・・・

「俺のターンドロワー！俺は手札からチューナーモンスター『グローアップ・バルブ』を召喚！」

グローアップ・バルブ ATK100/DEF100

「そしてボルト・ヘッジホッグを墓地から特殊召喚！」

さっきのカードガンナーの効果の中にそのカードがあったのね。

「レベル2のボルト・ヘッジホッグと、レベル5となっているスクラップ・デスデーモンに、レベル1のグローアップ・バルブをチューニング！」

2 + 5 + 1 = 8

「王者の鼓動！今ここに烈を成す！天地鳴動の力を見るがいい！シンクロ召喚！いでよ、我が魂！『レッド・デーモンズ・ドラゴン』！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン ATK3000/DEF2500

レッド・デーモンズ・ドラゴン！これならいけるわ・・・

「バトル！レッド・デーモンズ・ドラゴンで、サイバー・エンド・ドラゴンを攻撃！『アブソリュート・パワー・フォース』！」

「っく！」

「ターンエンド！このエンドフェイズ時、レベル・ステイラーは破壊される」

そうか、そう言えばレッド・デーモンズ・ドラゴンにはそんな効果があったわ。でもこれで、サイバー・エンド・ドラゴンは倒したから、これなら・・・

「俺のターンドロ―！俺は手札から『死者蘇生』を発動！蘇れ『サイバー・エンド・ドラゴン』！」

サイバー・エンド・ドラゴン ATK4000/DEF2800

う、嘘でしょ！？今ドロ―したカードだったじゃない！どんだけドロ―運がいいのよ！

「バトル！サイバー・エンド・ドラゴンでレッド・デーモンズ・ドラゴンを攻撃！『エターナル・エヴォリューション・バースト』！」

「畏発動！『シンクロ・ストライカー・ユニット』！シンクロモンスターは攻撃力を1000ポイントアップする！迎え撃て！『アブソリュート・パワー・フォース』！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン ATK3000/DEF2500  
ATK4000/DEF2500

互いの攻撃で相殺され、消え去るサイバー・エンド・ドラゴンとレッド・デーモンズ・ドラゴン。でも、カイザーのフィールドにはサイバー・ツイン・ドラゴンが・・・

「さらに畏発動！『リビングデットの呼び声』！蘇れ、『レッド・

デーモンズ・ドラゴン』！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン ATK3000/DEF2500

「つく・・・やるな、秋。俺はカードを1枚伏せてターンエンド！」

「俺のターンドロー！」

秋のライフは4000、カイザーは3400・・・これだけの攻防を繰り返しながら、両者が一向に譲らない。

「俺は手札から『貪欲な壺』を発動！墓地のジャンク・ガードナー、カードガンナー、チューニング・サポーター、スクラップ・デスデーモン、ジャンク・シンクロンをデッキへ戻しシャッフル・・・2枚ドロロー！バトル！レッド・デーモンズ・ドラゴンでサイバー・ツイン・ドラゴンを攻撃！『アブソリュート・パワー・フォース』！」

丸藤亮 LP3400 LP3200

「カードを1枚伏せて、ターンエンド！」

「ならば俺はエンドフェイズに畏発動！『リビングデットの呼び声』！蘇れ、『サイバー・エンド・ドラゴン』！」

サイバー・エンド・ドラゴン ATK4000/DEF2800

まさか、カイザーの伏せカードもアレだなんて・・・

「俺のターンドロロー！バトル！サイバー・エンド・ドラゴンでレッド・デーモンズ・ドラゴンを攻撃！『エターナル・エヴォリュージ

ヨン・バースト』！」

「ぐあああつ！」

武藤秋 LP4000 LP3000

「カードを2枚セットし、ターンエンド！」

「俺のターンドロワー！罨発動『ロスト・スター・ディセント』！このカードは墓地のシンクロモンスターを守備力0にし、レベルを一つ下げて守備表示で特殊召喚する！この効果で召喚したモンスターの効果は無効化され、守備力は0になる。そして表示形式は変更できない。蘇れ、レッド・デーモンズ・ドラゴン！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン ATK3000/DEF2500  
ATK3000/DEF0 8 7

「そして俺は『スポーア』を召喚する！」

スポーア ATK400/DEF800

チューナー・・・合計のレベルは8だけど、でも・・・スターダスト・ドラゴンではサイバー・エンド・ドラゴンを超えることはできない。

7+ 1= 8

「集いし鉄くずが、新たに息吹く命となる。今こそその意思を竜となりて姿を現せ！シンクロ召喚！瓦礫の化身『スクラップ・ドラゴン』！」



スクラップ・ドラゴン ATK2800/DEF2000

スクラップ・ドラゴン！スターダスト・ドラゴンかと思ったけど、あのカードもまた強力なカードの1枚！サイバー・エンドを破る方法としては得策ね！

「スクラップ・ドラゴンの効果発動！自分のフィールドと相手フィールドのカード1枚ずつを選択して破壊する！フィールドの強制終了と、サイバー・エンド・ドラゴンを選択、これによってそれぞれを破壊する！」

破壊されるサイバー・エンド・ドラゴンと、強制終了。フィールドに残ったのはサイバー・ツイン・ドラゴンと、カイザーの伏せカード。

「さらに、手札から魔法カード『ワン・フォー・ワン』を発動！手札の『ダンディライオン』を墓地に送り、デッキから『チューニング・サポーター』を特殊召喚する！」

チューニング・サポーター ATK1000/DEF1000

「そして、ダンディライオンの効果により、綿毛トークンが2体、フィールドに特殊召喚される！」

綿毛トークン？ ATK0/DEF0

綿毛トークン？ ATK0/DEF0

登場するモンスター達。一体どうやるつもりかしら？

「そして、墓地のダンディライオンを除外することで『スポーア』を特殊召喚する！この特殊召喚を行う時、除外したモンスターのレベル分、レベルが上がる！」

スポーア ATK400 / DEF800 1 4

「レベル1の綿毛トークン2体と、レベル2のチューニング・サポーターに、レベル4のスポーアをチューニング！」

1 + 1 + 2 + 4 = 8

「集いし願いが、新たに輝く星となる！光差す道となれ！シンクロ召喚、飛翔せよ『スターダスト・ドラゴン』！」

スターダスト・ドラゴン ATK2500 / DEF2000

出てくるのはスターダスト・ドラゴン。前にカイザーと戦った時にも出て来たわよね、スターダスト・ドラゴン

「バトル！スクラップ・ドラゴンでサイバー・ツイン・ドラゴンを攻撃！」

「迎え撃て！サイバー・ツイン・ドラゴン！」

互いの攻撃がぶつかり、二体のモンスターが消える。残ったのはスターダスト・ドラゴン

「行け！スターダスト・ドラゴン！『シューティング・ソニック』！」

丸藤亮 LP3200 LP700

「カードを1枚伏せて、ターンエンド！」

「俺のターンドロ！貪欲な壺を発動し、サイバー・エンド・ドラゴン、サイバー・ツイン・ドラゴン、サイバー・ドラゴン3体をデッキに戻して2枚ドロ！」

大幅にカイザーのライフを秋は削ったけど、カイザーも負けないでしょうね・・・まだ、カイザーの場に伏せたカードがある。でも、何を引くのかしら・・・

「俺は手札から『サイバー・ドラゴン』を特殊召喚！」

サイバー・ドラゴン ATK2100/DEF1600

「そして速攻魔法『リミッター解除』を発動！サイバー・ドラゴンの攻撃力をこのターン倍にする！」

サイバー・ドラゴン ATK2100/DEF1600 ATK4  
200/DEF1600

「バトルだ！サイバー・ドラゴンでスターダスト・ドラゴンを攻撃！『エヴォリユーション・バースト』！」

「うわああっ！」

武藤秋 LP3000 LP1300

「ターンエンド！エンドフェイズにサイバー・ドラゴンは破壊され

る！」

フィールドには秋は伏せカードが1枚、カイザーは何もない。もうお互い疲弊し、エースも殆どデッキか墓地にある。そして死者蘇生、リビングデットの呼び声はもうない。ここで秋がモンスターを引けば、カイザーに勝てる。でも、秋のドロー力でそれが可能なのかしら？

「秋……」

「なんだ、カイザー？」

「次で、ラストターンになるだろう。俺の勘がそう告げている」

「……それは、俺の勝利でか？」

秋の言葉に、カイザーは「まさか」と首を振った。

「ただなんとなく、そう思っただけさ。どの道にしる、互いに墓地からモンスターを蘇生するカードは使った。ならば、互いに引くのはモンスターのみ……互いに最後は出し惜しみはしない」

つまり、オーバーキル上等ってことね。

「良いだろう……俺のターン、ドロー！」

引いたカードは、何かしら？秋

「………チューナーモンスター『ジャンク・シンクロン』を召喚！」

ジャンク・シンクロン ATK1300 / DEF500

ジャンク・シンクロン！その攻撃力は1300！でも、ジャンク・シンクロンの効果はこれだけじゃない。

「ジャンク・シンクロンの効果発動！レベル2以下のモンスターを特殊召喚！現れる、『ドッペル・ウォリアー』！」

ドッペル・ウォリアー ATK800 / DEF800

「レベル2のドッペル・ウォリアーに、レベル3のジャンク・シンクロンをチューニング！」

2 + 3 = 5

「集いし星が、新たな力を呼び起こす！光差す道となれ！シンクロナ召喚！出でよ！『ジャンク・ウォリアー』！」

ジャンク・ウォリアー ATK2300 / DEF1300

「バトル！ジャンク・ウォリアーでダイレクトアタック！『スクラップ・フィスト』！」

「・・・俺の負け、だな」

丸藤 亮 LP700 LP0

勝者は秋で終わった。カイザーはおもむろにカードを1枚引く。そのカードは・・・

「サイバー・ドラゴン・ツヴァイ・・・」

それは秋がカイザーに譲ったカードの1枚だった。最後の最後、カイザーはそれを引き当てていた。もし、秋がモンスターを引けなかつたら秋の負けだった。秋の手札にはジャンク・シンクロンを超えるカードはなかったわけだし・・・

「流石だ、秋」

「いいデュエルだったぜ・・・」

「・・・ああ、いいデュエルだった」

互いに笑う。なんだかいいわね、男の友情ってやつかしら。ま、僕たちの絆の方が上だけど。するとカイザーは上着を脱いで秋に差し出した

「・・・受け取れ」

「は？」

「この学園最強なんだ、お前が着るべきだ」

カイザーの証・・・とでもいうのかしらね？でも、吹雪先輩も似たようなの着てたような気がするけど、アレは自前なのかしら？最強の証・・・か、なんだか、秋が近くににいるのにどんどん遠くに行っちゃう

「・・・断る！」

「なっ!?!」

「「ええ!?!」」

カイザーと僕と雪乃は驚く。すると、秋はクスクスと笑っていた。

「俺に『帝王』なんて称号はいらないさ。俺は『デュエリスト決闘者』だ。俺はその頂を目指すよ」

「デュエルキング決闘王……か」

「だからそのジャケットはいらない。それに、今日のデュエルはカイザーとデュエルしたんじゃない、丸藤亮とデュエルしたんだからな」

「そうか。そうだな……」

言いながらカイザーは再び上着を羽織り、灯台を後にしていった。

「さ、俺達も帰ろうぜ」

「そ、そうね……」

「そうね、『二代目帝王』?」

雪乃が言いながら秋の腕をからませ、いたずらっぽい笑みを浮かべていた。

「あのな……俺はなっとないって」

「いいじゃない、その彼女なんだから・・・私も嬉しいわ」

「ちよっ！雪乃！？ずるいじゃない！僕も・・・！」

僕たちはそのまま寮へと帰って行った。



帝王、最後の夜（後編）（後書き）

はぁ・・・しばらく決闘の話は描きたくないなぁ（汗

託された物と、守るべき物（前書き）

というわけで、1時間クオリティで描き上げた70話でございます

雪乃「今日の最強カードは・・・あら、ないの？」

ごめんなさい、ありません

雪乃「これはお仕置きが必要ね」

我々の業界ではご褒（ry

・・・ごめんなさい

## 託された物と、守るべき物

Side秋

春休み。要するに春季休暇というやつである。とりあえず、帰ってやるべきことがあった。それは凧に、そして秋の母に、全てを話すことだった。とはいったものの・・・どうしたものか。母親の方はなんだか知らないが商店街の福引で世界旅行に行ってしまったらしい。凧は一人で余裕だから行って来いと送りだしてしまったし・・・はあ、どうしたものか。とりあえず、凧にだけでも伝えなくてはならない

「ただいまー」

「お帰り！お兄ちゃん！」

「ただいま凧」

笑顔で迎える凧。これは、俺への『お帰り』ではなく、きっと秋へのお帰りなんだろう。

「なあ、凧？」

「何？お兄ちゃん！ご飯？それともお風呂？」

「・・・いや、大切な話があるんだ。聞いてくれるか？」

隠しだてしてはいけない。全てを、話そう

.....

## S i d e ミニ

今、マスターは秋さんのことを話しています。三幻魔との戦い、セブンスターズとの戦い、そして、武藤秋のこと・・・凛さんは静かに、一言も喋らずそれを聞いていました。

「・・・そういうわけだ。今、君の目の前にいるのは『武藤秋』ではなく、『城戸秋』という別の人間なんだ」

私達も隣に立って、凛さんを見ます。こんな話、普通なら信用など出来ないでしょう。でもデュエルマスターズの精霊たちを見れば、きつと理解もしてくれるでしょう。

「・・・・・・・・お兄ちゃんは、最後になんて？」

全ての話を終えてから、凛さんが最初に発した言葉でした。秋さんは目を閉じてから少し間を開けると、静かに開きました。

「『僕は闇を断ち切り。闇の自分に終わりを告げたんです。そして、この精霊界でドリアドと一緒に、僕は新しい自分を始めます。そして、秋さん、貴方も・・・偽りの武藤秋じゃない。本物の武藤秋として、あの世界での新しい自分が始まるんです』だそうだ」

「そっか・・・お兄ちゃん、やっと見つけたんだね。自分を」

「凜……」

「ふふっ！そっかそっか！お兄ちゃんは自分を見つけられたんだ！ならよかった！」

凜さんは笑顔でした。でも、それが偽りの笑みだということは、私もマスターもすぐにわかりました。

「凜……君は……」

「秋さんは……やっぱり私のお兄ちゃんだよ！変だと思ったんだよね……いきなりデュエルモンスターズ始めるし、ちゃんとデュエルアカデミアに行くなんて言い出すし！そっかそっか！私にもう一人、お兄ちゃんが出来たと思えばそれで……あー！すつきりしたよ……」

「凜っ！」

マスターは立ち上がり、凜さんをギュツと抱きしめていました。

「無理しなくていい……凜、君が泣きたいときは、泣いていいんだよ」

最初は驚いていた顔でしたが、その顔は段々と歪み、そして、涙をポロポロと零すようになり、声で泣き始めました

「ヒッグ……うえ……お兄ちゃんが……お兄ちゃんが……」

「ゴメンな、今まで騙して……」

「うわああああああああああああんっ！」

凜さんはそのまま、10分くらい泣き続けていました。

「マスター……」

「泣きつかれたみたいだ。ソファで寝かせてあげよう」

言いながらマスターは静かに凜さんをソファに寝かせてあげました。

「よかったのかな、これで」

「……」

「凜は、秋の中にある優しさにきつと惚れてたんだ。俺は『武藤秋』じゃない」

静かに毛布をかけて、テーブルのコーヒーを一気に飲み干すマスターは、どこかさびしそうな目でした。

「アイツは、闇から救われて……新しい世界でドリアドといえるでも、この世界で秋を慕った人達は……」

「マスター……私は、マスターの選択は間違っていなかったと思っています」

「ミラ……」

「確かに、マスターは『武藤秋』にはなれません。でも、武藤秋の代わりに、マスターが・・・凜さんのことを守ってあげることではできると思います」

マスターに出来ること、それは武藤秋の代わりとして、凜さんを支えること。マスターの家族構成では妹はいらっしゃらなかったようですが、それでも、きっとマスターなら出来ると思われています。すると、マハードさんとマナさんも出てきました

「ミラの言うとおりです、秋殿」

「マハード・・・」

「武藤秋殿もいつか、凜殿の前に現れることはあるでしょう。それまで、秋殿は凜殿を守らなければ」

「そうそう！私達もサポートしますからっ！」

お二人の言葉に、秋さんは短く笑いました

「ああ、そうだな・・・さて、夕食でも作るか。何がいい？」

「はいはい！ハンバーグがいいです！」

「マナ・・・」

ようやく、少しだけいつもの明るさを取り戻せた気がします。

ピンポン

「ん？」

「お客様でしょうか・・・でも、もう7時ですよね」

「俺が出るから、みんなは消えててくれ」

「はい」

こうして、私達は消え、マスターは玄関へと向かって行きました。

Side秋

とりあえず、現在7時で、こんな時間に誰が訪問してきたのだろうか？ドアを開ける。するとそこにいたのは、制服姿のままの雪乃だった。

「雪乃!？」

「こんばんは秋・・・中、入れて？」

「いいけど、お前実家に帰ったんじゃない・・・」

雪乃の家に行くのは2日後の予定だったんだけど。

「色々事情があるの・・・お願い」



「わかった……とりあえず入れよ」

雪乃を中に入れ、扉を閉める。すると雪乃はすぐに鍵を閉め、チェインをかけた

「やっと、逃げ切ったわ」

「何があっただよ……」

「……ちよつと、性質の悪い坊やから逃げて来たのよ」

息使いも荒いし、なんだかいつもの雪乃の余裕がない。

「大丈夫か？」

「駄目……ね、秋……慰めて」

そう言いながら抱きしめてくる雪乃。慣れた物なので、俺は静かに雪乃を抱きとめる。

「いったいどうしたんだ？」

「……ストーカーに追われてるの」

「は？ストーカー？」

いきなり何事だ？とりあえずリビングの食事する所まで戻る。ミラがコーヒーを入れ直してくれたのでそれを飲むことになり、そのまま事情を聞くことにした。

「それで、ストーカーがどうだった？」

「……ええ、一応ね。この前、親戚の不幸で実家に帰ったでしょ？」

「ああ」

そういえばそんなことあったな。

「その時の葬式で、変な坊やに目を付けられたのよ」

「変な坊や？」

S i d e 雪乃

2週間前

「はあ……」

今私は、私の母の遠い親せきの祖父の葬式に出ている。私と桜からすればまったく関わりのない方。母でさえ、顔を合わせたのは1度や2度だというのに……早く、秋とツァンの所へ帰りたいわ

「おねーちゃん」

「あら、どうしたの桜？」

「だいじょーぶ？」

心配した顔で私を見る桜。どうやら顔に出ってしまったようね

「ええ、大丈夫。ただちょっと寂しいだけ」

「おにーちゃんのこと?」

「ええ、そうよ」

「さくらも早く会いたいなあ・・・」

「そうね」

ああもう、早く終わってくれないかしら。こんな顔合わせの夕食会なんて興味ないわ。そんなことを考えていると、私の前に変な坊やが現れた

「やあ、どうしたんだい?沈んだ顔して」

「・・・いえ、なんでもありませんわ」

はあ、嫌になるわね。こういう社交辞令で対応するの。特にこの手の男、私は不快なのだけど

「そんな沈んだ顔、君には似合わないな・・・どうだい?僕とこれから」

「お断りしますわ」

私の言葉に、若干驚いているようだけど、下心が見え見えなのよ。

見かけ倒しの男に興味はないわ。

「これから海の見える公園にでも・・・」

「葬式の席で不謹慎ですわ。それに今私、非常に機嫌が悪いので・・・構わないでくださいます?」

私の言葉に、気押される坊や。ふん、確かこの男・・・どこかの財閥の若社長だったわね。うちの親族にいたのね、この男。興味もないけど

「では、失礼します」

「待ちたまえよ」

言いながら私の手を掴む男。不愉快だわ

「離してくださいさらない?」

「いいじゃないか、僕は君が気に入ったよ」

「私は気に入っていませんので」

そう言いながらそれを振りほどく。すると、男はニヤニヤと笑う

「是非君の名前を知りたいのだが・・・」

「名乗る気はありませんわ」

私はそう言って桜を連れ、会場を後にした。

2週間後、帰り途中

アカデミアの試験を終え、春休みを迎えた本土の船着き場で秋やツアンたちと別れ、家へ向けて電車に乗ることにした。すると携帯が鳴る

「あら、誰かしら」

非通知？

「はい、もしもし？」

『やあ、また声が聞けてうれしいよ』

「っ……！貴方……」

その声の主は、前に葬式で会った時の私を不愉快にさせた男だった。

『久しぶりだね、藤原雪乃さん』

「どうして私の名前と番号を……」

『これでも、僕は君たちの親族に繋がりがあからね。君と話が出てうれしいよ』

どこまでも不快な坊やねっ……！

「私は嬉しくないわ・・・女には拒絶したい人間もいるのよ」

『嫌よ、嫌よも好きのうち、じゃないかい？今、君の家の近くに  
いるんだ・・・これから迎えに行くよ』

私はそれを聞いた瞬間、その携帯の電源を切った。そして視線を感じ  
る。それは黒い服を着た男たち。恐らくあの男の部下ということこ  
ろかしらね。そして再び鳴り響く携帯電話の着信音。私は再び駅の  
ホームへと走る。追って来ているのは3人・・・最悪ね。私は無我  
夢中でその電車で飛び乗った。これなら大丈夫でしょう。それに・

「都合、良すぎるわね」

私が乗り合わせたのは秋の家へと向かう電車。これなら、逃げ切っ  
て見せるわ。私は携帯電話の電源を落とし、ひたすら追っ手が来な  
いことを祈った。

回想終了

S i d e 秋

「・・・と、いうことなの」

雪乃の説明を聞き終え、俺はため息をつく。完全にストーカーだな。  
大丈夫かよ

「それで、今はどうなんだ？」

「分からないわ・・・どれだけ人がいることが」

俺はとりあえず雨戸を全て締め切り、カーテンを閉める。

「はぁ・・・まったく」

「ごめんなさい秋、貴方に迷惑をかけてしまって・・・」

「いーよ、別に。俺はお前の彼氏だからな・・・これでも」

俺の言葉に、雪乃が笑みを浮かべる。

「言ってくれるわね・・・やっぱりそこの坊やとは大違い。ふふ・・・キュンと来たわ」

「そうか？」

「ええ、とつても・・・大好きよ、秋」

そう言いながら再び俺に抱きつく雪乃。やれやれ・・・

「わかったよ、なんとか対策を立てよう。凜も起こして夕食もとらないといけないからな」

こうして、雪乃がうちに居候することになった。はぁ・・・俺の平穩はどこに消えたのだろうか？

託された物と、守るべき物（後書き）

次回、VSストーカーでございます



## 世界で一番お姫様（前書き）

この話で一年生編おしまいです！

ツァンとの春休みの話も考えたんですけど、ツァンのはこの前やっただけだし、そろそろ2年に移りたいということだ

秋「今日の最強カードは『イビリチュア・ガストクラーケ』だ」

「リチュア」と名のついた儀式魔法カードにより降臨。

このカードが儀式召喚に成功した時、

相手の手札をランダムに2枚まで確認し、

その中から1枚を選択して持ち主のデッキに戻す。

このカード3枚積んだりリチュアデッキに何回泣かされたことか。

手札3枚とか、2枚スタートがざらでしたね。墓地へ送るのでも除

外でもなく、デッキに戻すカード・・・ほんと、恐ろしい

## 世界で一番お姫様

Side 秋

昨日から一夜明けて、身体を起こす。時間は6時か・・・いつもこの時間帯に起きてたからあれだけど

「すーすー・・・」

雪乃は相変わらず俺の横で気持ちよさそうに寝ている。

「マハード・・・いる?」

「おはようございます。どうかしましたか?」

「・・・外はどう?」

マハードには昨日、周囲に怪しい人間がいないか調べさせた。いくら雪乃が撒いてきたと言っても、絶対に後を付けられているだろう。

「家の前に車が2台。裏手に2人ほど確認しましたが・・・」

そこまでするか。完全に囲まれてるってことね。さて、どうしたものか・・・いつまでも雪乃が家の中に閉じこもるってのも無理な話だろ。それに外にはアレだし・・・うーん。あ、そうだ

「よし、これで行こう」

「何か策が思いついたのですか?」

「うん、まあね・・・ねえマハード」

「はい？」

「お前、服のサイズいくつ？」

「・・・は？」

さあ、作戦開始だ。

・・・

「雪乃、出かけようか」

「出かけるって・・・外には見張ってる人間がいるんでしょう？」

朝、朝食を済ませた俺は雪乃にそう促す。

「大丈夫だよ、優秀な護衛を付けるから・・・ほら」

そう言うと、後ろからマハード、マナ、ミラが私服姿で出てきた。

「貴方達その格好・・・」

マハードはでかいので服を合わせるのが大変だったが、俺の服を魔術で大きくしたらしい。マナとミラも、凜から服を借りて同じことをしている。こうして見ると、普通の一般人だな。マナ、お前に限っては単なるギャルだ。

「こいつらと『遊びに行く』ふりをして、護衛してもらおう。外に出て連中を叩く……その作戦というのは……」  
作戦を説明し、俺と雪乃は出発した。

Side Out

家を出た秋と雪乃を確認した黒服達はすぐに行動に移った。

『A班よりB班へ、対象が外へ出た。周りには一般人が5人。男性2で女性が2だ』

『B班了解……これよりマークに付く』

彼らは若社長である男の優秀な部下である。大抵のことをもみ消したり、仕事の隠ぺいをしたりする。そして社長の指示に絶対という使命を持っている。

『こちらB班。マークを開始……社長、一般人はどうしますか？』

A班の無線へ、その社長がいる車へ無線が入る。

「その男ってのは？」

『はい、標的が嬉しそうに腕組をしている男が1名……もう一人は後ろを歩いているだけのようです』

「……気にくわないな」

自分を差し置き、雪乃を自分のものにしてる男がいる。

「……………この『土屋蛭彦』の名において命ずる。その男は必ず……………消せ」

『はっ』

そこでB班の無線が途切れ、蛭彦はニヤリと笑う。

「僕のものになるなら……………そんな男はいらない雪乃……………僕のものになるのは必然だ」

S i d e 秋

「さあて、どこ行きたい？」

「この町……………初めて来たけど何があるのかしら？」

「ん……………特に特化した部分はない。自然公園くらいか」

確かこの町……………何かいいものがあるかと聞かれると微妙だな。普通に商店街があつて、カードショップもそこまですごくいいものねーし、遊園地とかもないしなあ

「じゃあ、その自然公園行きましょう」

「はいはい……………（みんな、どうだ？）」

「（後ろに車が1台・・・見張りのようです）」

「（公園なら車は入れないからな・・・その時は頼む）」

俺の言葉に、マハード達は無言で頷いていた。そういえば・・・

「なあ、サラはどうしたんだ？」

「サラなら、修行してますよ」

「修行？」

「はい。私みたいに、人に見えてもらえるように」

なるほど、吹雪に会うために頑張ってるんだな

「どおりで姿がないわけだ」

「ふふふ・・・恋する女は、何事にも諦めないものよ」

「へえ」

そんなことを話しているうちに自然公園に着いた。この場所は色々な動物などもいるので楽しいが・・・結構資格があるんじゃないかな、これ

「マハード」

「・・・10人ほど、ですね。全員武器を携帯しています」

おいおいおい・・・ストーカーにしちゃ物々しすぎだろ。そこまでして雪乃が欲しいのか？

「・・・走るか。雪乃」

「秋・・・？」

俺は雪乃の手を引き走る。すると黒服の男たちが俺を追う。おいおいおい、ホントに10人があれ？それ以上いるんじゃないの？

「こつちだ」

「ええ」

俺達はとりあえず、人がいない方へと走り続けた。

S i d e 雪乃

今私は秋と一緒に公園を走る。私の手を引き走る秋の姿は、なんだかいつもよりも頼もしく見えた。少女だった頃、想い描いた王子様それが今の秋な気がする。

「こつちだ」

「ええ」

秋の言葉に頷きながら走る。自然と頬が熱くなるのが分かる。そして開けた場所に出た。

「やあ、また会ったね」

そこにいたのは、私を不快にさせた男だった。

「…………お前か、雪乃のストーカーってのは」

「心外だなー…………僕は彼女が好きただけだ。そして、彼女のためならどこまでも追っさ」

それを世間一般上ストーカーというのよ。本当に世間知らずの馬鹿な坊やね。

「悪いが、雪乃は俺の彼女だ。消えな」

「消えるのは君だよ」

男の周りにいる黒スーツが武器を取り出した。まさか、秋を殺そうというの？

「後からもっと駆けつけるよ…………君に選択肢をあげよう」

「選択肢？」

「彼女を置いて、ここを立ち去るか…………それともここで死ぬか」

どこのB級映画よ。それはどっちにしても秋が死ぬフラグじゃないの。

「へえ…………そのもっと駆け付けるってのは…………あれ？」



と、後ろを指差す秋。そこには黒スーツの男がボコボコにされ、マハードやマナ、そしてミラがそれを積んでいた姿。

「なっ・・・なるほど、君は僕を誘い出したわけか」

「大体やることが読めたからな・・・マハードたちに任せて正解だったぜ。失せるのはお前の方だ」

優勢だと思っていたのが逆転したからか、若干顔を青くする坊や。すると、すぐにデュエルディスクを取り出した。

「ならば、僕とデュエルしろ」

「あ？」

「僕が負ければ、彼女は諦めるよ・・・君が負ければ、雪乃君を置いていく」

なるほど、金輪際彼が私に関わってくるというのがないというわけね。ならば・・・

「待ちなさい。ならば私が受けるわ」

「雪乃？」

「これは私の問題なの・・・なら、直接私があの方に引導を渡す」

秋にもらったカードで作った、新しいデッキ。これであの男を潰すわ

「私が負けたら、私は貴方の女になる・・・でも、私が勝てば、二度と私に関わらないで」

「いいだろう・・・その決闘を始めよう。この土屋蛭彦の美しさに酔うといい」

「「デュエル  
決闘！」」

藤原雪乃 LP4000

土屋蛭彦 LP4000

Side秋

二人のデュエルが始まる。俺はすぐさまある人物に連絡を取った

「もしもし」

『ふうん・・・貴様から連絡をよこすとは、何の用だ？』

「ええ、実は・・・」

俺はすぐに事の顛末を説明した。

『なるほどな・・・いいだろう。力になってやる。ただし、俺が気に入らぬカードを5枚よこせ』

「分かりました・・・ちゃんと揃えます」

そこで連絡が途切れる。さて、どんなデュエルになるだろうか？

「先攻はレディーファーストだ・・・さあどうぞ？雪乃君」

「気安く私の名前を呼ばないで・・・私のターンドロー！」

あーあーあー・・・雪乃のデッキは事故を起こさなければ最強だぞ？先攻なんて譲ったら

「私は手札からシャドウ・リチュアを墓地へ送る。それにより『リチュアの儀水鏡』を手札に加える。そして『トリード・イン』を発動。『イビリチュア・リヴァイアニマ』を墓地に送ってカードを2枚ドロ・・・」

やっぱり。もうデッキが廻り始めたな。これ、下手すると手札が殆ど消えるんじゃないか？

「手札から『リチュアの儀水鏡』を発動。手札の『イビリチュア・ガストクラーケ』を墓地へ送り、儀式召喚！現れなさい『イビリチュア・ガストクラーケ』！」

イビリチュア・ガストクラーケ ATK2400/DEF1000

「ガストクラーケの儀式召喚に成功した時、相手の手札を2枚選択して1枚をデッキに戻す。両端のカードを見せなさい」

「っく！」

見せるのは・・・奈落の落とし穴と、死者蘇生

「死者蘇生をデッキに戻さない」

言われるがままに戻す土屋。だが、雪乃のターンは終わらない。

「墓地の儀水鏡の効果を発動するわ。墓地の『イビリチュア・リヴァニアニマ』を手札に戻し、デッキに儀水鏡を戻す。そして再び手札から『シャドウ・リチュア』を墓地へ送る。これにより再び儀水鏡を手札に加える。さらに魔法カード『サルベージ』発動。2体の『シャドウ・リチュア』を手札に戻す。そして『リチュアの儀水鏡』を発動。『シャドウ・リチュア』を生贄に捧げる。シャドウリチュアは水属性の儀式召喚では1体でその役目を果たす・・・儀式召喚！現れなさい『イビリチュア・リヴァニアニマ』！」

イビリチュア・リヴァニアニマ ATK2700/DEF1500

「そして再び儀水鏡の効果で儀水鏡をデッキに戻し、『イビリチュア・ガストクラーケ』を手札に戻すわ。ターンエンド！」

さて、手札が一枚戻ったから4枚スタートか。昔、友達にリチュアぶん回されてハンドレスからスタートしたのが懐かしいな・・・懐かしいというか、トラウマだな

「ほ、僕のターンだ・・・ドロー！僕は手札から『ビッグ・シールド・ガードナー』を守備表示で召喚！」

ビッグ・シールド・ガードナー ATK100/DEF2600

「さらに装備魔法『竜魂の力』を装備！これによりビツク・シールド・ガードナーは戦士族からドラゴン族へ変更され、攻守が500上がる！」

ビッグ・シールド・ガードナー    ATK1000/DEF2600  
ATK600/DEF3100

「カードを1枚伏せ、ターンエンド！」

あの伏せカードは恐らく奈落だろうな。奈落使ってる奴この世界だとあんまり見ないけど……

「私のターンドロ……手札から強欲な壺でカードを2枚ドロするわ。そしてバトル！リヴァイアニマでビッグ・シールド・ガードナーを攻撃する！そしてこの攻撃宣言時、リヴァイアニマの効果でカードを1枚ドロできるわ！そしてそのカードが『リチュア』と名のついたカードの場合、私は貴方の手札を確認できる。ドロ……！」

雪乃がカードを引く。引いたのは『リチュア・ビースト』

「私が引いたのは『リチュア』と名のつくカード……真ん中のカードを見せなさい」

見せられたのは『ゴブリンエリート部隊』。おいおい、今時あんなカード使っている奴いるのかよ。まあ確かに、あのカードはスーパ―ではあるけど。そうこうしているうちにリヴァイアニマがビッグ・シールド・ガードナーに突っ込む。だがその盾に阻まれ、元の場所へと戻った。

藤原雪乃 LP4000 LP3600

「ビッグ・シールド・ガードナーは攻撃されたら確か攻撃表示になるはずよね？」

立ち上がるビッグ・シールド・ガードナー・・・流石攻撃力600。  
全然格好よくねえ

「バトル続行！ガストクラーケでビッグ・シールド・ガードナーを攻撃！」

土屋蛭彦 LP4000 LP2200

「ぐあああつ！や、やるね・・・流石は僕が認めた女性だ」

「貴方になんか認められたくないわ。カードを1枚伏せてターンエンド」

「僕のターンドロ―！僕は手札から『強欲な壺』を発動するよ。カードを2枚ドロ―！そして手札から『ゼラの儀式』を発動！」

はあ！？ゼラだと！？

「手札の『トライホーン・ドラゴン』を生贄に捧げ、現れよ！『ゼラ』」

ゼラ ATK2800/DEF2300

・・・久しぶりに見たぞ、ゼラなんて。確か大会で配られたのは通常モンスターとしてだったな。でもステンレス製でデュエル

には使用できないんだっただか。ちなみにカオス・ソルジャーのステ  
ンレスは確か248万円で取引されていたな。テキストにはB・W・  
Dと同等の力を持つ最強の戦士・・・だったっけか。というか、生  
贄にしたトライホーン・ドラゴンの方が攻撃力は50高いんじゃない  
・  
「君が儀式デッキを使っているのを知ってね。僕も使っているんだ  
・・・・どうだい？運命を感じないか？」

「感じないわ。とつととターンを進めなさい坊や。話の長い子は嫌  
いよ」

とことん冷たい雪乃。なんとというか、目が恐ろしく冷たいんですけ  
ど。あの子。それほど嫌いなのか

「言われなくてもするよ・・・バトルだ！ゼラでイビリチュア・ガ  
ストクラーケを攻撃！」

「つく！」

藤原雪乃 LP3600 LP3200

「ターンエンドだ！」

「私のターンドロー！私は手札から『サイクロン』を発動！伏せカ  
ードを破壊するわ！」

伏せられていたのは『奈落の落とし穴』だった。これで雪乃はモン  
スターを召喚できる。

「そして、『リチュア・ビースト』を通常召喚！」

リチュア・ビースト ATK1500/DEF1300

「このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在するレベル4以下の「リチュア」と名のついたモンスター1体を選択して表側守備表示で特殊召喚する事ができるわ。私は『シャドウ・リチュア』を守備表示で特殊召喚！行くわよっ！レベル4のリチュア・ビーストと、レベル4のシャドウ・リチュアをオーバーレイ！2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！エクシーズ召喚っ！今こそ現れなさい『イビリチュア・メロウガイスト』！」

イビリチュア・メロウガイスト ATK2100/DEF1600

現れたのはイビリチュア・メロウガイスト。男は驚いてそのモンスターを見る。エクシーズ召喚を知らなければまあ当たり前だろう。

「な、なな・・・なんだそれは！だ、だが、そのモンスターの攻撃力は2100！ゼラには遠く及ばない！」

「そうかしら？畏カード発動！『エクシーズエフェクト』！自分がエクシーズ召喚に成功した時、カードを1枚選択して破壊する！私はゼラを選択するわ！」

「な、なんだって!？」

破壊されるゼラ。エクシーズエフェクトは発動タイミングが限られてるからなかなか発動できないんだよな。エクシーズ召喚できるタームに手札にあっても使えないし。



「終わりよっ！2体でダイレクトアタック！」

「う、うわああああああっ！」

土屋蛭彦 LP2200 LPO

「社長！」

「大丈夫ですか社長！」

黒スーツが男に駆け寄る。そして雪乃は俺に抱きついてきた。

「秋っ！勝ったわ」

「ああ、いいデュエルだった」

個人的にすごーく、スカツとしたし。それにしても俺の周りの人間はどうしてこう、元の世界だと嫌ってほど強いデツキばかり組むんだろう。この世界だとまだ『フィッシュボーグ・ガンナー』が禁止じゃないし、『紫炎の狼煙』は制限じゃないし・・・すげえな

「約束よ・・・私の前から消えなさい。坊や」

「くっくく・・・くくくく！僕がそんな約束を守るとでも？」

言うと、黒スーツの男が役50人ほどか、男の前に現れる。

「僕がデュエルしたのは単なる時間稼ぎさ。本部からえりすぐりの精鋭たちを集めたんだ。その後ろの連中がどんなに強かろうと、これには敵わないだろう」

汚い笑みを見せる男。だが、甘いな。

「そうだな、確かに今の俺らならお前には勝てない・・・が」

俺の言葉と共に、同じようにそれを超える数の黒スーツの男たちが現れる。

「これならどうかな？」

「なっ！？なんだこれは・・・」

「実は、俺にはKC社と関わりが合っつてな・・・アンタの会社のことは全て調べたし、武力行使用の人数も集めていたんだよ」

「なっ・・・なっ・・・なっ」

「武藤様、こちらへ・・・後は我々が」

「ええ、よろしくお願いします『磯野さん』海馬社長には後日連絡しますので」

こうして俺達はそこを後にする。最後に聞こえたのは男・・・土屋蛭彦の悲鳴だった。

帰り道、マハード達は先に帰り、俺と雪乃二人だ。

「今日は大変な1日だったわ」

「そうだな・・・でも、雪乃が無事でよかったよ。雪乃が負けたらどうしようかと思った」

「あら、嬉しいことを言ってくれるわね・・・でも大丈夫、私は負けないわ。だって、秋がくれたカードたちがあるんですもの」

そう言いながら雪乃は俺の腕を強く握る。

「ねえ、秋？」

「ん？」

「秋は、もしこれからも似たようなことがあつたら私を助けてくれるのかしら？ずっと私の手を握ってくれるのかしら？貴方は・・・私の王子様でいてくれるかしら？」

雪乃の手が、少しだけ震えていた気がした。

「大丈夫、雪乃の手は離さないよ。ずっと、一緒・・・そう言ったのは雪乃だろ？」

「んふふっ・・・そうね、そうだったわ。ねえ秋・・・」

「今度は何？」

「キス・・・して？私の・・・私だけの、王子様」

雪乃は頬を少し紅くしながら、目をつむる。その頬の赤さは夕日の色だったのかもしれない。俺は背をかがめ、目をつむる雪乃に視線を合わせる。

「仰せのままに、お姫様」

そう言っつて唇を重ねる。そのキスは雪乃とのファーストキスをした  
ときのように、甘かった。

その後家に帰っつてから、凜に遅いと怒られたのは言っつまでもない。

世界で一番お姫様（後書き）

ってなわけで、雪乃さんの話でした

少し口から砂糖が垂れたけど・・・大丈夫だ、問題ない（キリッ

## 設定資料集（前書き）

第一期が終わった時点の設定資料です

そのうち絵も乗せるのでお楽しみに！

## 設定資料集

### 設定資料集

#### 城戸秋

大学4年生で、気が付いたら武藤秋という人物の身体に精神が憑依していた。何故か大量の遊戯王カードを所持している。現状に流されるがままに遊戯王GXの舞台であるデュエルアカデミアに入学し、現在オベリスクラブ。シンクロ、エクシーズを始め、その他世界に存在しないカードを操るデュエリスト。デッキを1つに定めないことから無限の顔を持つデュエリストとも一部の間では騒がれている。

性格はポディシブではあるものの面倒事を嫌っており、本人は平穏な日常が欲しいらしい。だが、時には熱く、遊戯王の世界で友となった十代達のために戦ったりもする。時折武藤秋の感情が混ざり「いつもの自分」とはまた違った言動をすることがある。また、朝に弱いため夜は極力早く寝るようにしているが、深夜とかに起こされると極端に機嫌が悪くなる。好きな物は昼寝

現在彼女が2人おり、周囲からの殺気に胃を痛めている。

使用デッキ

ジャンド エクシーズ 魔法ビート 代行者 ローレベル 青眼の白龍

E・HERO デッキ破壊 サイバーデッキ インフェルニティ  
e t c . . .

#### 武藤秋

高校一年生で伝説の決闘者『武藤遊戯』の従弟である。ただし、デュエルモンスターズをあまり好まず、カードコレクターになっていた。そのことから小学校、中学校ではよくいじめられておりカード

を燃やされるなどのいじめも受け、不登校となった。そして『この世界からいなくなりたい』という願いが何かのきっかけで目覚めたことで身体を城戸秋の精神へ移すこととなる。精霊界でバクラとマリクの闇人格に取り込まれ、操り人形となった。だが秋に倒されることで闇を払われ、精霊界でドリアードと暮らしている。

使用デッキ

悪魔族ビート マリク、バクラ混合デッキ

武藤凜

武藤秋の妹で小学6年生、そしてブラコン。小学6年生ながらも将来の夢は兄のお嫁さんである。いじめられている兄を何度も助けていることからか、あまりにも兄に対して過保護になってしまった。

デュエルアカデミアに行くと言い出した時も何が何でも止めようとデュエルを挑むが敗北する。普段はクールでデュエルでは最早秋以外に負けなしであり、学校の男女から人気が高いものの、兄の前では甘えん坊である本性をさらけ出す。秋の正体を知ってから秋を『兄』と認識し、好意を寄せている。

ライバルは藤原雪乃、ツァン・ディレ、早乙女レイ

使用デッキ

アンデットデッキ 帝アンデットデッキ

藤原雪乃

デュエルアカデミアのオベリスクブルーで、秋の彼女その1

中等部からの異名は『女帝』。その色っぽい容姿と、妖艶な声から大人な女の雰囲気を漂わせることで、男子からの人気は非常に高い。両親は俳優、女優であり、自分も将来は女優になりながらも、決闘者としての道を進みたいと考えていた。そしてその道を共に歩く最高のパートナーである真の男を探すために高等部に進学したはずだったが、入学試験で秋の戦う姿に惚れた。実力も見かけ倒しではなく上位ランカー保持者で、儀式モンスターを駆使して戦う。好



物は肉まん

なお、この小説ではオリジナル設定が成されており、お化けが苦手  
で、ホラー映画やアンデットモンスターが苦手である。

使用デッキ

儀式デッキ リチュア

ツァン・ディレ

デュエルアカデミアのオベリスクブルーで、秋の彼女その2

中等部から目立つことはないものの、その思っていることは反対  
のことを言ってしまったり、行動をしまったりすることで、周  
囲の人間を極端に避けてきた。秋と出会うことで自分に素直になる  
ことを覚え、秋に惹かれていく。しかしその抜群のスタイルや容姿  
から男子から少なからず評判がある。普段からも『ツンデレ』で秋  
と一緒にいるので損することもしばしば。使用デッキは六武衆であ  
り、実は雪乃より上の上位ランカーである。

この作品のオリジナル設定として、ツァンは日本人と別の国のハー  
フである

使用デッキ

六武衆 真・六武衆

藤原桜

雪乃の妹で小学校1年生である。純粹で真つ直ぐな性格であるが、  
不良にカードを取り上げられてから1度男性不信に陥った。だが秋  
からカードを取り返してもらったことで秋に懐く。実力も小学生と  
は思えないほど高く、飛び級の話も来ているが本人は仲良くみんな  
と遊べればそれでいいと拒否している。

使用デッキ

真紅眼の黒竜デッキ

## 久遠の魔術師ミラ

本来の名前はミラ。城戸秋の精霊で、目が覚めると秋の精霊として生きていた。自分が生まれた理由が明確に分かっておらず、城戸秋のお気に入りカードの1枚で会ったことから精霊としての魂を宿したと考えられている。

お人好しのマスターである城戸秋を心より愛し、大切に思っているものの、自分は精霊であるという立場から身を一線引いて、秋を同じように愛する雪乃、ツアン、レイ、凜の応援をしている。

使用デッキ

魔法シンクロ

ブラック・マジシャン・ガール

本来の名前はマナ。もともとは闇遊戯<sup>アテム</sup>の精霊である。武藤遊戯から秋の手に渡り、秋を見守り続けている。ドーマ編の性格から一変してお気楽で調子のいい性格になっている。冬休みにマハードの召喚でマハードを認識できるようになったことで試しに召喚されて秋に認知されるようになった。

武藤秋よりも城戸秋のことの方が好き（お気に入りの人間的な意味）で、秋のことをマスターと呼ぶ。世界に1枚しかないブラック・マジシャン・ガールのカードである

使用デッキ

B M G シンクロ

ブラック・マジシャン

本来の名前はマハード。言わずと知れた武藤遊戯のフェイバリットカードであり、カードの精霊。アテムの神官でもあったマハードである。

秋の真実を知ってなお、秋に助力する。秋のことを秋殿と呼び、遊戯に次ぐマスターであることを認識して共に行動する。雪乃、ツアンにも認識されており、信頼は厚い。

使用デッキ

魔法使いビート

真・六武衆 - シエン

若かりし頃の大將軍シエンのカード。ツァンの使用に寄り精霊として覚醒。ツァンを主と認めており、助力する。普段は姿を見せず、ツァンの呼び出しにのみ反応する。

## 設定資料集（後書き）

こんな感じですよ。次回は第二期の予告です

第二期 予告編(前書き)

文字とおりです

下にアンケートがあるので是非ともご回答をお願いします

## 第二期 予告編

### 第二期 予告

それは新たな始まり

「今日から、早乙女レイ！オシリスレッドで入学しました！」

再会と

「俺はティラノ剣山！ラ イエローだどん！」

新たな出会い……

「星の正位置……この男、放っておけば私の計画に支障が出そうだな」

暗躍する影

「十代が負けたっ!？」

「カードが真っ白な紙にしか見えないんだって……」

「あ、あなたは一体誰!？」

「私は斎王!さあ、デュエルだ……私が勝った時、お前達は忠実な僕となる」

標的は秋の最愛の女性たち

「私達は、斎王さまの・・・忠実なる僕」

「ツァーン！雪乃！目を覚ませ！」

「貴様が我がしもべとなるのなら、この二人を解放しよう・・・」

「斎王・・・テメエは1度や2度殴っただけじゃ気がすまない・・・」

「

秋の怒り、そして二人を救いたいと願う思いが新たな力を生む。

「これは・・・このカードは」

その名は・・・

「アクセルシンクロオオオ！」

そして呼応する、秋の友

「行くぜ！宇宙を守るHEROの力、見せてやる！」

「これが、僕のデッキ・・・？秋さんがくれたデッキが、変わって行く・・・」

そして現れる、謎の男

「貴方が世界にもたらした物は、未来にまた別の影響を与えていくのです」

「なら、俺はどうしたら・・・」

「救うのです、全てを・・・」

全ては、大切な物を守るために

「地球は青かった・・・か、その通りじゃねえか。まったく、こんなガラじゃないんだけどな」

「マスター……」

「行くぜ、ミラ……最後までついてこいよ？」

「マスターとなら、どこまでも」

男は、戦い続ける

「秋　っ！」

遊戯王の拒絶に巻き込まれた転生録の第二期、開幕



## 第二期 予告編（後書き）

アンケートは、今回このまま2期に行くか、それとも一度外れて5 D・sに行くか、というもの

1 2期へGO!

2 5 D・sへGO!

1か2でお願いします

ではノシ

## 新しい始まり（前書き）

というわけで、アンケートの結果

・・・二期の更新を決定しました。とはいっても、5D's編と二期はどちらも票は変わらず、わずかに二期の方が上でした

5D'sはそのうち、物語の途中で書こうと思います。多分ジエネシック大会あたりかな

あの辺りはデュエルばかり書いてるし

もしくは修学旅行編前あたりで書こうかなと

まあ、今回5D'sに入れた方がた、もう少しお待ちください

レイ「今日の最強カードは・・・あれ、ないの!？」

ごめんねレイ、次回ちゃんと活躍させてあげるから

## 新しい始まり

Side 秋

「あー・・・長かったあ」

「相変わらず、よね・・・この船の乗り心地の悪さ」

「まったくよ。だからこの島を行ったり来たりするの嫌いなものよ」

船から降り、デュエルアカデミアに戻ってきた俺と雪乃とツァン。  
今日から2年生か

「そう言えば秋、寮はどうするの?」

「寮か・・・そういえばそうだった。レッド寮にカードも荷物も全部置きっぱなしだからな」

「僕、別にレッド寮でもいいわよ?荷物運び出すの面倒だし」

「そうね、荷物もあるし・・・無理に寮を変える必要はないかしら?」

・・・お前ら、そんだけ面倒になるまで荷物入れたのがいけないんだろうまったく。

「てか、校長は俺をブルーにしたのはいいけど、これからの契約のことがよくわからないから一応校長室行くかな。二人は寮に行つていいよ」

「分かったわ・・・先に行ってる」

「じゃあ後でね、秋」

こうして2人は先に寮へと向かう。なーんか忘れてる気がするけど、まあいいか。始業式は明日だし、今日は適当に過ごしてゆっくりしよう。俺が覚えているのは小安（斎王）が出てくるのと、石田<sup>エト</sup>が出てくることくらいだったか・・・後はなんだっけ、やたら話かたが鬱陶しいのと・・・あー・・・最近忘れやすいな。ま、事件が起これば大体は思い出せるだろうな。そんなことを考えているうちに校長室に辿りついたので、ノックしてドアを開ける

「失礼しまーす」

「オウ、シニョール武藤ではありませんか、何か用ですーノ？」

「・・・クロノス教諭、アンタ何してんすか？」

「んふふ〜この席についてるのが分からないーノ？」

クルクルと校長席の椅子で回るクロノス教諭

「校長の椅子ですね、それくらい分かりますよ」

「そう、ならそれが答え！私は校長に校長として席を任されたノーネ！ラリホ〜」

・・・校長、完全に俺との契約忘れてんだろ。思い出したよ、確か一度旅に出て行くんだったな、そしてジエネシック大会に帰ってき

て、カイザーがデスカイザーになったりするんだ。この人のおかげで色々と思い出したよ。とりあえずPEDを取り出してと・・・

「あ、鮎川先生？お久しぶりです・・・今校長室なんですけど、重症患者が一名いるので至急来てください」

『は？重症患者って、どういうことかしら？』

「なんか知らんけど、クロノス先生が自分は校長になったとか言って椅子の上でクルクル回ってなんか奇声上げてます」

「ちょ、ちょっと待つノーネ！私は正常ですーノ！」

「なんだか見てて可哀想なんで、至急診察して精神病院にブチ込んでください」

俺が言うと、鮎川先生から困ったわと漏らす声が聞こえる。

『私、精神科なんて専門外よ？』

「なら至急へりで本土の病院にブチ込みましょう」

「だから！私は正常だって言ってるノーネ！校長になっているのも事実なーノ！」

「臨時を付けるのを忘れてもらっては困るのでアール」

「・・・あ？」

そこにいたのは小太りのおっさんだった。確かナポレオン教頭だっ

たな。トイソルジャーとかいうの使ったっけ

「アンタ誰？鮎川先生大変だ、校長室に不審者が」

『本当に！？至急行くわ！』

「ちょっと待つのでアール！誰であるのかはお前でアール！吾輩はナポレオン！この度この学園の教頭になったのでアール！」

「そうなんすか、クロノス教諭」

「そんなノーネ、その人は教頭先生なノーネ」

前に見たところの記憶をたどると、このおっさん確かレッド寮取り壊そうとするんだっけ。面倒くさい

「それで、お前は誰なのでアール、見たところ我が校の生徒で、オベリスクブルーのようでアールが・・・」

「彼はシニョール武藤。この学園でオシリスレッドから入学し、卒業した丸藤亮を倒した現在、学園最強のデュエリストなノーネ」

おい、クロノス。なんか勝手に話を・・・てか、なんで俺がカイザー倒したの知ってたんだ。

「ほほう、その最強のデュエリストがここに何の用でアルか？」

「別にアンタらに用はないよ。俺が用あるのは『校長』なんで。アンタらはお呼びじゃないよ」

「ぐぬぬ・・・教頭に向かってどの口を聞いているのでアール！」

事実言っただけだろ。めんどろだなあ・・・

「やめとくノーネ、ナポレオン教頭」

「なぬ？」

「彼はKC社の社長、海馬瀬人とも縁のある人物・・・変なことすると社会的に抹殺されるノーネ」

「おいおいおい、そんな物騒なこと・・・あ、この前1回だけしたな。というか」

「聞こえてますよ、クロノス『臨時』校長」

「そんなに臨時を強調しないで欲しいノーネ！と、とりあえず、校長は現在旅に出てていないノーネ、言伝ならメールで伝えられるノーネ」

「いや、いいつす。失礼しました」

そう言っただけで教室を出ると、丁度、鮎川先生がやってきた。

「秋君！不審者は・・・」

「不審者だと思ったら、教頭だったらしいです。俺教頭の顔知らなくって」

「もう・・・心配かけて」

大きくため息をする鮎川先生。どうやら本気で心配して走ってきてくれたようだ。

「すみません、今度吹雪さんの生写真あげますから許してください」

俺が言うと、鮎川先生が動揺する

「な、先生を物で釣ろうだなんて……ど、どんな写真？」

「……そうっすね、吹雪さんの生着替えの写真なんてどうですか？」

「……………いいでしょう。今回はそれで勘弁して上げます」

鮎川先生は鼻血を垂らしてその場を去って行った。そんな約束をしてから、俺は構内を歩く。そういえば、もうすぐ昼時か？そろそろ戻って飯を食べに行くか。荷物持ったままだし一応寮に戻らないとな。寮に戻ると、部屋が開いている。2人ともちゃんと鍵閉めろって言っただろうが

「ただいま……………」

「おかえりなさい」

「秋さんっ！」

俺の前に飛び出してくる影があった。お前は……



「レイ!？」

オシリスレッドの服を着たレイがいた。そうだった、こいつも2年時に学校に来るんだった。

「お前・・・まさか」

「うん!飛び級で来ちゃった!一気に高校生になったの!すごいでしょ!」

うんうん、すごいすごい、でもなあ・・・俺はレイの頭を無言で撫でた後、ガツチリと頭を掴んだ。

「なんでそういうことするかなお前はもおおお!」

そして手に力を込めてアイアンクローをした

「ニャー!痛い!痛い!痛い!頭潰れちゃうよ!謝るから許してください秋さんっ!」

「俺のこの手が真っ赤に燃えるー!」

「わーれーるー!割れちゃうから!頭割れちゃうからあ!」

しばらくしてから雪乃にやめるように言われて手を話した。レイは涙目で俺を睨む

「酷いです秋さん」

「ただでさえ、今面倒事に遭遇したんだ。これ以上面倒事が起きた

「俺も流石に怒る」

「ひどい……」

「で？なんでここにいるんだ……」

俺が言うと、レイは頭をさすりながら俺に証明書を見せて来た。

「KC社に行つて頼んで、高校に飛び級させてくださいって頼んだの」

「……こいつがここまでやると思わなかった」

「僕もよ……」

「私も……」

俺達3人が同時にため息をつく。こいつ、まさか原作でも同じことしてたのか？

「海馬社長に手紙書いたの……僕は今の小学校のカリキュラムじやデュエルの腕は絶対に上がらないからデュエルアカデミアに行かせてくださいって。それで、試験受けて問題ないけど、年齢層で問題があるから『オシリスレッド』で入学を許可してくれたの」

社長、あんたねえ……

「まあ、そこまではもう過ぎたことだからいいだろう。だけど新一年生が島に来るのは明日からだろう？それになんで俺の部屋に……」

「

「だって、社長から武藤秋と同室で行動も共にすることって言われたよ？」

「は？」

あの人は・・・面倒事俺に押しつけるつもりか。

「はいこれ、海馬社長から秋さんにだって」

「ん？手紙か・・・何々？」

その小娘の面倒を見る

海馬瀬人

・・・社長、このまえいいカード上げたでしょ。伝説の白石3枚と、エクスプロード・ウイング・ドラゴン、そしてFGDを。今度トゥーン・ブルーアイズ・ホワイトドラゴンでも送りつけてやるうか

「はあ・・・わかった。って言ってもなあ。このベッド3つしかないんだぞ？どうする気だ」

「大丈夫！秋さんと一緒に寝るから！」

「アンタは調子に乗らないの！」

そう言いながら今度はツアンがレイにアイアンクローをかます

「ニャー！痛い痛い痛い！なんでみんな今日はアイアンクローなの！？」

「アンの頭が掴みやすいからよ」

「割れる！割れちゃう！秋さんのやつより心なしか痛い！」

「当たり前よ、本気でやってんだもの」

と、さらりと言うツアン。まあ、そりゃ痛いよな。それからして離す。レイは痛そうに頭を抑えていた。

「うう・・・ひどい」

「レイ、お前が悪い」

「あうう・・・」

「ま、相部屋はしょうがないから許可する。これからよろしくな」

「はいっ！」

涙目からすぐに笑顔になる。こういつところは子供っぽいな、本当に。やれやれ・・・

「とりあえず飯行こうか・・・もうお昼だしな」

「はいっ！」

「そうね、もうそんな時間・・・」

「そう言えばカミュ・ラの食事久しぶりね」

そんなことを言いながら俺達は食堂へと向かうことにした。

食堂

「お、カミュ・ラ久しぶり」

「あら、秋・・・もう帰ってきたの」

「まあな、飯よろしく」

そう言いながら席に着く。この感じも久しぶりだな

「そういえばこの寮、誰が寮長になったのかしら。大徳寺先生いなくなっただし・・・」

「ああ、そうだな。カミュ・ラなんか知ってる？」

「私よ、寮長」

・・・は？

「今、なんて？」

「だから、私が寮長よ。校長からやってくれないかって頼まれたの。」

文句ある?」

「いや、別にないけど」

変なところで、この世界の進行方向が曲がったな。別にいいけど。この後食事をしてお茶を飲んでいる。なんというか、お茶がなかなかうまいのだ。

「お茶が変わってる?」

「ああ、私を変えておいたわ。あのお茶まずくてしょうがないから」

「ただいまーってか!カミュ・ラ!飯頼むよ!」

そんな話をしていると、十代達が帰ってきた。

「十代」

「お!秋と雪乃とツアン!久しぶりだな!って、秋の制服がオベリスクブルーになってる」

相変わらず元気だな、オメーはよう

「って、あれ?」

「お久しぶりです、十代さん」

「レイ!?な、なんでここに!?!」

驚く十代。まあ当然だ・・・コイツ小学生だし、それなのに現在オ

シリスレッドの制服着てるし。

「今日から、早乙女レイ！オシリスレッドで入学しました！」

正確には明日から、だけどな。

「へ〜そっか！これからよろしくな、レイ！」

流石十代、レイがここにいることについて深く突っ込まないところはさすがだな。

「それにしても、翔はどうした？」

「ん？ああ、船酔いで部屋で寝てるよ」

あいつもあいつで相変わらずなんだな。

「いよっし！飯食ったら久しぶりにデュエルしようぜ」

「あのな、明日から嫌ってほどデュエルの勉強するんだから、明日でいいだろ。俺も船乗ってから疲れてるんだよ」

「ちえー・・・ま、仕方ないか。じゃあレイ！デュエルしようぜ！」

「僕が？えーと・・・はい！」

HERO対コントロール奪取ねえ・・・一体どんなデュエルになることやら

「とりあえずはい、ご飯食べてからにしてね。片づけるの面倒だか

ら

「うおっ！海老フライだ！サンキュー、カミューラ！」

「特別よ、アンタいつもこれなら全部残さず食べるし」

まあ確かに、十代は嫌いな食べ物好きな食べ物と一緒に食べるタイプだしな。

「食事終わったら流しに皿入れといてね、私寝るから」

そう言っただけでカミューラは眠たそうに食堂を後にしていった。

「そういえば十代さんってどれくらい強いのかな？」

「そうね・・・ハッキリ言って秋と同等。下手するとそれ以上を行くかも」

レイとツアンがそんなことを話している。うーん、まあアイツのデツキは基本的にヒーローがピン刺しではあるけど、ドロー運とかも考えるとアイツの方が上だしな。これで超融合とか出されたら俺、勝てなくなるな。下手すると俺、この中で一番弱い？

「秋？何を唸ってるの？」

「いや、なんでもない」

「そう？ならいいのだけど」

こうして昼飯の時間は過ぎて行った。そして・・・デュエルス



ペース。まだ始業式前日ということでもいない。デュエルしてても問題ないだろう

「んじゃ、始めるぜ！レイ！」

「はい、よろしくお願いします・・・恋する乙女の方、見せてあげる！」

「「<sup>デュエル</sup>決闘！」」

新しい始まり（後書き）

次回、レイVS十代です

## 恋する乙女の実力（前書き）

というわけで、十代とレイの戦いです

レイ「今日の最強カードは・・・『苦渋の選択』！僕のカードだよ！」

通常魔法（禁止カード）

自分のデッキからカードを5枚選択して相手に見せる。

相手はそこから1枚を選択する。相手が選択したカード1枚を自分の手札に加え、残りのカードを墓地へ捨てる

今や禁止カードです。これあったらジャンドはどうなるんだろう。

多分、凄いことになるだろうなあ・・・

## 恋する乙女の実力

Side秋

「「デュエル  
決闘！」」

早乙女レイ LP4000

遊城十代 LP4000

「先攻は僕でいいですか？」

「おう！来い後輩！」

うん、こつこつデュエルは気持ちいな。頑張れよ、レイ

「僕のターンドロワー！僕は手札から『シールド・ウイング』を守備表示で召喚！カードを2枚伏せて、ターンエンド！」

シールド・ウイング ATK0/DEF900

「俺のターンドロワー！俺は手札から『E・HEROバブルマン』を守備表示で召喚！フィールドにこのカード以外のカードがない時、俺はカードを2枚ドロワーする！カードを2枚セットし、ターンエンドだ！」

E・HEROバブルマン ATK800/DEF1200

互いにモンスターを守備表示で召喚し、そして伏せカード。互いに様子見か。どちらもデッキのネタは割れてるしな。

「僕のターンンドロー！僕はさらに『黄泉ガエル』を守備表示で召喚！ターンエンド！」

黄泉ガエル ATK100/DEF100

さて、どちらも攻守が共に低いが厄介な効果を持っている。どつする十代？

「俺のターンンドロー！俺は手札から『E・エマーゼーシーコール』を発動！俺は『E・HEROエアーマン』を手札に加えるぜ！」

「その瞬間罨発動！『マインドクラッシュ』！僕がカードを宣言して、そのカードが中にあった場合、相手はそのカードを墓地へ送る！僕が指定するのは『E・HEROエアーマン』！」

まあ、たった今手札に加えたんだからな、あつて当然か

「つく！俺のエアーマンが・・・」

「そのモンスターが厄介なのは知ってるから、墓地に送らせてもらうよー！」

「なら俺は手札から『E・HEROクレイマン』を守備表示で召喚！ターンエンドだ！」

「僕のターンンドロー！ふふっ！行くよ十代さん！」

ん？動くのか、レイ

「僕は手札から速攻魔法『エネミーコントローラー』を発動！使うのは第二効果！僕のフィールドの黄泉ガエルを生贄に、エンドフェイズまでクレイマンのコントロールを得る！」

クレイマンが移動し、レイのフィールドで守備表示となる。

「さらに、シールド・ウイングを攻撃表示に変更して、魔法カード『強制転移』を発動！僕のフィールドのシールド・ウイングと、十代さんのフィールドのバブルマンのコントロールを入れ替える！」  
うわぁ・・・学園祭でもやっていただけかなりえげつないコンボだな。作ったのは俺だけでも

「僕はクレイマンを生贄に捧げるよ！出て来い！」  
「風帝ライザー」

風帝ライザー     ATK2400 / DEF1000

「このカードの召喚に成功した時、カードを1枚、相手のデッキの1番上に戻すよ！選択するのは十代さんの僕から見て左の伏せカード！」

風帝ライザー・・・あいつ、恋する乙女抜いたのか？この前の学園祭では帝を抜いて恋する乙女を入れてたはずなんだが

「っく！」

「行くよ！バトル！風帝ライザーでシールド・ウイングを攻撃！」

「つぐ・・・」

遊城十代    LP4000    LP1600

「これで僕はターンエンド！」

「流石レイだぜ！でも勝負はまだまだこれからだ！俺のターンドロ  
ー！俺は手札から『サイクロン』を発動するぜ！レイ、お前の伏せ  
カードを破壊！」

「うあっ！僕のミラーフォースが・・・」

さて、サイクロンを使ったということは今度は十代が動くか

「さらに手札から魔法カード『融合』を発動！フィールドのシール  
ド・ウイングと、E・HEROネクロダークマンを融合！現れる、

『E・HERO Great TORNADO』！」

E・HERO Great TORNADO    ATK2800/D  
EF2200

「このカードの召喚に成功した時、相手フィールドのモンスターの  
攻撃力と守備力は半分になる！」『ダウンバースト』！」

風帝ライザー    ATK2400/DEF1000    ATK1200  
/DEF500

E・HEROバブルマン    ATK800/DEF1200    ATK

400/DEF600

「そして、『E・HEROスパークマン』を召喚！」

E・HEROスパークマン ATK1600/DEF1200

「バトルだ！Great TORNADOで風帝ライザーを攻撃！  
『スーパーセル』！」

「きゃああっ！」

早乙女レイ LP4000 LP2400

「そしてスパークマンでバブルマンを攻撃！」

一気にライフを減らされたな。融合1枚でここまでとは・・・恐ろしい。流石十代。だけどレイもまだまだ行けるはずだ。頑張れレイ

「カードを1枚伏せ、ターンエンド！」

「ぼ、僕のターンドロ！スタンバイフェイズ、黄泉ガエルはフィールドに魔法罫がない時、墓地から特殊召喚できる！」

黄泉ガエル ATK1000/DEF1000

「さらに手札から『天使の施し』を発動！3枚引いて2枚を墓地へ送る！そして手札から『苦渋の選択』を発動！僕が選択するのは『邪帝ガイウス』『邪帝ガイウス』『シールド・ウイング』『アメーバ』『アメーバ』！」



「苦渋の選択・・・俺の世界だったら禁止カードだけど、この世界だと禁止でも何でもないからな。さて、十代は何を落とすだろうか？俺の予想だが、これはカードを墓地へ送ることに意味があるような気がするな。」

「うーん・・・なら、シールド・ウィングだ！」

「ならそれ以外を墓地へ送るよ」

十代の選択、一見合っているようにも見えるが。これは・・・

「僕の墓地に、悪魔族が3体存在する！僕の墓地には『邪帝ガイウス』が2枚、『バトルフェーダー』が1枚！これらを除外して、僕は『ダーク・ネクロフィア』を特殊召喚！」

ダーク・ネクロフィア ATK2200/DEF2800

守備表示で召喚されるダーク・ネクロフィア。その守備力はGre at TORNADOと同じだ。十代はそれ以上を出せば勝てるが、ダーク・ネクロフィアはかなり厄介な効果を持っているからな。そしてフィールドには2体の壁か。これはレイの勝ちで行ける気もするな

「あの、秋？」

「ん？どうした雪乃」

ちよつと雪乃が顔を青くしている。まあ、原因は大方・・・

「怖い？ダーク・ネクロフィア」

「ええ・・・」

まあ、怖いのは多分あの人形だろうな。破壊された時はもつと大変なことになるだろうけど。

「僕はこれでターンエンド！」

「俺のターンドロー！俺は手札から『天よりの宝札』を発動！互いのプレイヤーはカードを6枚になるようにドロー！手札から『ミラクル・フュージョン』を発動！フィールドのスパークマンと、墓地のバブルマンを除外！現れる『E・HEROアブソルトZero』！」

E・HEROアブソルトZero ATK2500/DEF2000

「そして手札から『マスク・チェンジ』を発動！アブソルトZeroを墓地へ送り、『M・HEROヴェイパー』を特殊召喚！」

あれ？アイツ散々悩んだ癖にマスク・チェンジ入れたのか。俺のデッキはE・HEROデッキだー！とか言ってたのに。まあ、有効打ではあるな、これ。そう、普通なら

「アブソルトZeroがフィールドを離れた時、相手フィールドのモンスター全てを破壊する！」

砕け散るモンスター達。だが、ダーク・ネクロフィアと、それを抱える人形は不気味に笑ってから消えて行った。

「……………」

「よしよし……………」

俺の後ろに隠れ、なんてものを見せてくれたんだと言わんばかりにレイを見る雪乃。まあ、俺もちょっと怖かったな。

「GreatTORNADOで攻撃だ！」

「畏発動『攻撃の無力化』！」

「つつつそ……………なら、カードを2枚伏せて、ターンエンドだ！」

「エンドフェイズ、ダークネクロファイアの効果発動！相手の表側表示のカードを1枚選択して、そのモンスターにこのカードを装備！そしてその装備されたモンスターのコントロールを得る！僕が選ぶのはGreatTORNADOだ！」

「ああ！また俺のヒーローが！」

「ごめんね十代さん、このデッキ、こつこつデッキだから」

さて、これで形成はまた変わる。ヴェイパーは破壊する効果を受けないだけであり、それ以外はただのバニラだ。まあ、GreatORNADOも同じようなもんだけど

「僕のターンドロ―！僕は手札から『ローンファイア・ブロッサム』を召喚！」

ローンファイア・ブロッサム ATK500/DEF1400

「そしてローンファイア・ブロッサムを生贄に捧げることで、『キラ・トマト』を特殊召喚！」

キラ・トマト ATK1400/DEF1100

「さらに手札から『薔薇の刻印』を発動！このカードは自分の墓地に存在する植物族モンスター1体をゲームから除外して発動！このカードを装備した相手モンスター1体のコントロールを得るよ！自分のエンドフェイズ時に装備モンスターのコントロールを相手に移す。よって僕はヴェイパーのコントロールを得る！」

これで十代のフィールドには伏せカードのみ、そしてレイのフィールドにはGreatTORNADO、ヴェイパー、キラ・トマトがいる。

「バトル！ヴェイパーで攻撃！」

「畏発動！『攻撃の無力化』！攻撃を無効にしてバトルフェイズを終了する！」

「あう……僕はカードを1枚伏せ、ターンエンド！」

さて、ここから十代のディスティニードローが始まるかな？

「さすがレイだぜ……俺のターンドロ！よし、俺は手札から『強欲な壺』を発動！カードを2枚ドロ！そして畏発動『リビングレットの呼び声』！戻って来い、エアーマン！」

E・HEROエアーマン ATK1800/DEF300

「エアーマンの第2効果！俺は手札に『E・HEROプリズマー』を加えるぜ！そして魔法カード『ヒーロー・マスク』を発動。デッキから『E・HEROフェザーマン』を墓地へ送り、エアーマンをフェザーマンとして扱う！さらにE・HEROプリズマーを召喚！プリズマーの効果により、フレイム・ウイングマンを見せてデッキから『バースト・レディ』を墓地へ送り、プリズマーをバースト・レディとして扱う！」

E・HEROプリズマー ATK1700/DEF1100

「そして『融合』を発動！現れる、E・HEROフレイム・ウイングマン！」

E・HEROフレイム・ウイングマン ATK2100/DEF1200

ここでフレイム・ウイングマンか。勝負あったな

「こゝ、ここでフレイム・ウイングマン!？」

「悪いなレイ！この勝負もらった！フィールド魔法『摩天楼・スカイスクレイパー』発動！バトルだ！フレイム・ウイングマンでGreatTORNADOを攻撃！『フレイム・シュート』！」

フレイム・ウイングマン ATK2100/DEF1200 AT  
K3100/DEF1200

「きゃああああっ！」

早乙女レイ LP2400 LP2100

「そして、破壊したGreatTORNADOの攻撃力分、ダメージを受けてもらうぜ」

早乙女レイ LP2100 LP0

十代の勝ちか。レイもまあ頑張ったな。

「あーあー、負けちゃった。さすが十代さん」

「ガッチャー！楽しいデュエルだったぜ、レイ」

「僕も楽しかった・・・でもおしかったなあ」

俺は十代達の所に近づく。

「二人ともいいデュエルだったな。レイ、最後伏せたのなんだったんだ？」

「リビングデット・・・ブラフの意味も込めたのに、十代さんまったく関係なしだったから」

ま、こいつ常につまみに行くからな。

「雪乃さん？どうしたんですか？」

俺の後ろにひつつく雪乃を見るレイ。雪乃は恨めしそうにレイを見る。

「自分の胸に聞きなさいな、レイ」

「ええ！？僕なんか悪いことした！？」

「雪乃は嫌いなんだよ、お化けとかな」

俺が言うと、ああ、そういえばとレイが思い出し、デッキからダーク・ネクロフィアを取り出した。

「僕の使ったコレですか？」

「み、見せないで！怖いから！」

「イタイイタイ・・・」

そのつねるのやめろ。本当に

「にしても、十代もなかなか危なかったな」

「ああ、もうちょっとでやられてたぜ」

「十代さん神ドロすぎるよ。本当に」

それは同意だな。どうしたらそこまでなるのか俺も聞きたいよ、まったく。そして、俺達の言葉に首を傾げる十代。

「そうかなあ？」

そんな感じで、俺達はデュエルスペースを後にした。この時、俺達を影から見ている人物がいるというのは、俺達は知らなかった。

その日の夜

「お願いツァン、今日は私に譲って！」

「なんでよ、今日は僕って言ったでしょ？」

着替えが済んだと連絡が来たので戻ると、二人が言い合いをしていた。

「お願いよ、私今日あのカードみてから怖くて仕方がないの」

「おい、どうしたんだ？」

話しかけるも言い合いに夢中らしい。レイに聞くか

「レイ、どうしたんだあいつら」

「僕の見せたダーク・ネクロフィア・・・すっかり雪乃さんのトラウマらしくて、今日はどうしても秋さんと寝たいんだって」

「・・・なるほどな」

結局、二人はじゃんけんしてる。そして勝ったのは雪乃。そしてじゃんけんが済むと、ようやく俺がいたことに気が付いたらしい。

「あ、あらか秋・・・帰ってきてたの？」



「ああ、寝るからもう電気消すぞ。入るならさっさとしてくれ」

「ええ」

「もぉ・・・」

雪乃は嬉しそうに、ツァンはちょっと悔しそうにベッドに入った。ベッドに入ると、レイが潜り込んできた。

「おい、レイ？」

「駄目ですか？」

「・・・はぁ、好きにしろ。おやすみ」

「おやすみなさい、秋さん」

こうして、今日も夜が更けていく。

余談だが、この日雪乃はダーク・ネクロフィアに追いかけられる夢を見たらしい。

恋する乙女の実力（後書き）

さて、2年時開幕です！

## 波乱の新学期（前書き）

というわけで、2年生の4月スタートです

レイファンの皆さんお待たせしました。レイちゃんがこの話の主体になります。

あと、TFキャラも沢山いますのでよろしくお願いします

レイ「今日の最強カードは・・・あれ？またないの？はぁ・・・」

ごめんねレイちゃん

## 波乱の新学期

Side秋

一夜明けて、今日から新学期だ。俺達の部屋の朝はまあまあ早い。朝7時。俺は身体を起こす。

「雪乃、朝だ・・・起きろ」

「うん・・・んっ・・・んっ・・・おはよう、秋」

「ああ、おはよう。さてと・・・レイ、起きろ」

雪乃は眠たそうに洗面所へと向かって行く。未だに眠っているレイを揺すが、起きようとしなない。

「んっ・・・お母さん、後5分・・・」

「誰がお母さんだ、誰が。いい加減にしないと加減なしで頼つねってやる」

「んっ・・・」

よし、頼つねり決定。俺は思いっきりレイの頬をつねった。

「いふあい！いふあい！は、はね？ふあきふあん？」

「もう朝だ、さっさと支度しろ。いつまで寝ぼけてんだまったく」

俺はため息をつきながら上で寝るツァンを起こしに行く。

「ツァン、朝だ起きろ」

「ん・・・ふぁ・・・秋、おはよ」

「ああ、おはよう」

俺は着替えをトイレで済ませる。2人はさっさと着替えるがレイは遅い。小学生の着替えを見ても嬉しいと思う性癖を持っていないので出ても問題ないのだが、レイに問題があるので俺はいいというまですぐトイレで待つ。そして許可が出てからトイレを出る。

「あの、秋さん。僕何を持っていけばいいですか？」

「筆記用具とデッキとデュエルディスク。それと、昨日部屋にあった通信端末だ。それだけでいい」

余計にデッキとか持っても意味ないしな・・・まあ、俺は俺で結構持つてるけど。

「あと、財布、昼飯は食堂とかだからな」

「はい」

テキパキとバックに言ったものを入れるレイ。コイツ、もしかしたら一番準備が早いかな。二人はいつも化粧に時間がかかるし。先に飯を食いに行くか

「先行くぞ、また後でな」

「ええ、わかったわ」

「僕たちもすぐに行くわ」

こうして俺とレイは先に食事を済ませ、学校へ行くのだった。

「ねえ秋さん」

「ん？」

「僕、学校の授業付いていけるかな」

・・・まあ、小学生だしな。基礎勉強は厳しいかもしれない。がこの学校デュエルの勉強こそいいもの、他は普通の高校以下だしな。偏差値低いし。レイのデュエル知識は俺より劣るとはいえ、飛び級が認められるほどだ

「分からないことがあったら聞け、極力は答えてやる」

「はいっ!」

「それと、別に固く喋らなくていいぞ。苦しいだろ？」

俺が言うと、レイはちょっとだけびっくりした顔になった

「え、いいの？」

「ああ、その方がいい。この学園ではあんまりそう言つのではないし」

「じゃあ・・・うん、秋さん」

笑顔で喜ぶレイ。さてと、今日はなんだったけな。新人の相手と、臨時校長の話と・・・あ、そうだった。十代がエド・フェニックスと戦うんだっけか。ま、その辺はどうでも良いかな。俺は干渉しなければいい話だし。学校について教室を別れる俺とレイ。レイのことが少し心配ではあるが、まあ大丈夫・・・か？

「昼休みに2年の教室に來い。飯はみんなで喰うからな」

「うん、秋さん。またね」

レイが走って教室に入っていく。俺が2年の教室に入ると、すでにいつものメンバーが座っていた。

「おはようっス！秋君」

「おはよう秋、今日は早いのね」

「俺がいつも遅いみたいな言い方だな、明日香。遅いのは十代だろ。どうせアイツは寝てんだろうけど・・・」

言いかけた瞬間、教室のドアが開く

「セーフっ!!」

「セーフじゃねえよ、これが普通だ、十代」

入ってきたのは十代だ。まったく、こいつは2年になってもいつも通りだな。

「おつす！翔く起こしてくれよー」

「僕は何度も起こしたっス」

「うつそだあ！俺は・・・」

なんて他愛もない話をみんなで繰り広げながら、朝のHRを待つ俺達。はあ・・・こういう日常が続いてくれると、俺はいいんだけどなあ

S i d e レイ

秋さんと別れて教室に入る僕。ああ、怖いよ・・・周りみんな知らない人で、しかもみんな年上。今すぐダッシュで秋さんの所に逃げたい。

「よいしょ・・・」

指定された席に座る僕。これが通信端末で、教科書で・・・ふむふむ、あ、頑張れば行けそう。これはこれで簡単なデュエルの問題ばっかりだし。うんうん、頑張ろうつと！

「あ・・・」

「はえ？」

僕の隣に、ブルーの女子生徒さんが話しかけてきた。え？あれ？僕なんかしたっけ



「あの、隣よろしいでしょうか？」

「え、あ、はい……どうぞ……」

なんか、すつごく気弱そうな人だなあ。というか、隣って言うか殆ど席埋まってて残る場所ここくらいでしょ

「ふう……間に合いました」

「間に合ったって……あと、15分くらいありますけど、時間」

まだ8時15分。授業開始は8時30分だし。まだ時間あると思うけど……

「うえ！？だって、今日は8時20分じゃ……」

「いやあの、プリントには8時30分て……」

「はうえ……や、やっちゃました……」

頭を抱える女の人。いや、別にいいんじゃないの？早いことはいいことだし

「大丈夫ですよ、そういうことよくありますって」

僕もよく勘違いはするし、よくあるって

「そ、そうですね？ありがとうございます。そうですねば、お名前は……」

チャンス到来！この人となら友達になれるかも！

「僕は早乙女レイっていいいます」

「私は宇佐美彰子しんじょうと言います。あれ？でもなんでレイさんはオシリスレッドの服を着ているんですか？」

「あ、えと・・・僕、まだ小学6年生で、飛び級でここにきたから」

「飛び級！？」

あ、驚いてる驚いてる。まあ、そうだよねえ・・・というか、当然だよ。飛び級した小学生が高校にいたら。ってか、なんか宇佐美さんうわの空なんだけど！？

「え、えと・・・彰子さん？」

「あ、いえ・・・すみません、あまりの事態に意識が飛びました」

いや、意識飛んだって・・・この人、本当に大丈夫？

「あ、あはは・・・よろしくお願いします」

「こちらこそ。あ、私のことは彰子でいいですよ」

「はい。彰子さん」

とりあえず友達が出来たし、うん！これから頑張れる気がする・・・  
・・・多分

とりあえず、朝礼が終わってから教室に戻る。僕は彰子さんと談笑している、突然3人ほど女子生徒が僕の前に来た。

「ちょっと、あなた？」

「はい？なんですか？」

僕の前に仁王立ちしているのは蒼い髪をした女性。何の用だろうか？

「あなた、そこは私の席よ。とつとどきなさい」

はえ？ここは僕の席のはずだけど・・・

「ここ、僕の席ですよ？」

「そこが一番見やすいの。とつとどきなさい」

むう・・・なんだこの人、突然やってきて

「なんで僕がどかないといけないんですか。僕がどく義理はないです」

「貴女、オシリスレッドでありながら幸子さんになんて口を・・・」

「はぁ・・・？」

この人誰だろ。中等部から上がってきたのかな？

「レ、レイちゃんまずいですよ・・・この人確か、中等部で女子ではエリートで、中等部2代目の女帝って言われている・・・海野幸子（うらのゆきこ）さんです!」

「ゆ・き・こ! 私は海野幸子ですわ! ムキーっ! 私が一番嫌いな名前を間違われることをよくもおー!」

「ひ、ひい! ごめんなさいいいい!」

なんなんだろうこの人、本当にうるさい。というか、たかが席くらいでうるさい人なあ。そういえば、2代目女帝って言ったけど

「ねえ彰子さん、この人雪乃さん並みに強いのか?」

「なっ・・・雪乃お姉さまの名前を気安く! 貴女、どんな神経しますの!?!」

「いや、だって古い付き合いだし・・・同じ部屋に住んでるし」

「な、な、なんですってえ!?!」

一回一回、リアクションが大きいわこの人。ほら、周りも注目し出しちゃったじゃん。それにしても、雪乃さんって有名人なんだね

「とにかく、話がずれたけど僕は席を譲る気ありません。もう授業始まるので」

「貴女・・・覚えてらっしゃい」

そう言ってさち・・・じゃなかった、幸子さんは席に戻った。はあ、

後で秋さんたちに相談しよう。

昼休み

「ふう……」

今日はガイダンスばかりだなあ。午後は上級生とデュエルって話だけ。誰と戦うのかな。昨日は十代さんとやったし、今日は楽しみ。

「あ、レイちゃん……よかつたらお昼にしませんか？」

「えっと……じゃあ一緒に行きますか？一緒に食べる先輩いるけど」

「えっと……じゃあ、一緒に」

先輩と聞いて、若干緊張している。どうしたかと尋ねれば雪乃さんと食べるのかと聞いてきた。彰子さんも中学からエスカレーターで上がってきた人みたいで、雪乃さんのことはよく知っているらしい。そして2年生の教室に行くと、秋さん達を見つけた

「あ、秋さん！」

「ん？レイが来たか、みんな行くこうぜ」

そこには雪乃さん、ツアンさん、十代さん、明日香さん、翔さん、三沢さん、万丈目さんがいる。あれ？彰子さん？

「彰子さん？どうしたの？」

「あ、あの人達って……」

「一緒にお昼食べる先輩だけ……」

「はふう……」

「つて、ええ！？気絶しちゃった!？」

「あの、レイ……どこから突っ込みを入れていいかすごく困るんだけど」

「まあ、確かに。この後事情を説明していると彰子さんは目を覚まして、楽しく食事をした。うんまあ……彰子さんは震えっぱなしだったけど」

教室

「あの、彰子さん大丈夫？」

「ふう……ご飯の味が分かりませんでした」

「まあ、ドローパンでハバネロを食べても全然動じなかったからね。確かに味が分からなかったんだらうけど」

「彰子さん、どうして気絶なんてしちゃうのさ」

「だ、だって……あの方たちは学園でも腕利きの決闘者で、学校

へ挑戦状を叩きつけたセブンスターズという集団を叩きのめしたと言われる人たちですよ？その中でも遊城十代さんと武藤秋さんは圧倒的なデュエルを見せ、私達の間では有名人です。遊城先輩は『神の手を持つ決闘者』武藤先輩は『変幻自在の決闘者』と呼ばれます」

秋さん、十代さん、なんだか大変な呼び名がついています。秋さんの  
はまあ、普通だけど

「へ、へえー……でも、とてもいい人達だよ。それに、秋さんは……」

はふう……昨日は幸せだったなあ……あんなにひつついて眠ったの久しぶりつたし。温かかったし。これが毎日続くといいなあ

「武藤先輩は、どうしたんですか？」

「はうえ!？」

し、しまった、トリップしてた。

「あ、えと……すごく優しいんだ！僕のデッキ改造してくれたのは秋さんだし」

「そ、そうなんですか……私のデッキも見てもらえるかなあ……」

「明日言ってみたら？」

「そ、そんな！私なんか……」

と、遠慮気味の彰子さん。うーん、明日聞いてみよう、秋さんに

「そういえば彰子さん何を使うの?」

「私のは恐竜さんです」

そう言ってデッキを見せてくれる。恐竜・・・おお、すごい! ジュラックっていうモンスターがいっぱいだ!

「彰子さん恐竜好きなんですか?」

「はい、父の出してる本はいつも楽しみで楽しみで・・・」

楽しそうに話す彰子さん。へえ、すごいなあ・・・

「あ、もうすぐ外だね。行こう?」

「そうですね」

そうやって僕たちはデュエルディスクを腕に着けて、外へ出ることにした。さあて・・・誰が相手かなあ

Side秋

「なあ、雪乃。海野幸子って知ってるか?」

「ええ、知ってるわ。女帝の2代目を名乗ってる生徒でしょ?」



女帝、現在雪乃が呼ばれている二つ名だ。

「そいつがどうもレイに突っかかっているらしくてさ。レイが鬱陶しいって言うってたな」

まあ、当面なにも起きてないからいいだろうけど。今日もあの宇佐美って子が友達になってるから安心はできる・・・か？まあいいや。

「ほら秋、次あんたよ」

帰ってくるツァン。おいおいおい・・・

「ツァン？もしかして完膚なきまでに叩き潰したのか？」

「え？ええ、弱いんだもの」

デュエル場で腕を付いている男子オベリスクブルーの1年生。トラウマでも出来ないといいんだが、まあいいか。

「さてと、どうしよっかな」

「シンクロじゃないの？」

「いつも同じじゃ芸がねーだろ」

面白くもないし、この前組んだアレで行くか。

「さて、相手は・・・ありゃ？レイか」

「あれ？秋さん、ひよっとして秋さんが相手なの？」

「らしいな」

レイのデッキは俺が組んでいるからなあ……自分で組んだデッキとの戦いになっちゃうよ。

「うーん……やだなあ」

「どうしたの？」

「だってほら、お前のデッキ俺が組んだじゃん」

するとレイはああ、そのこと？とディスクを構えた。

「このデッキ、僕流にアレンジしてあるから大丈夫」

「……ほう？いいだろう。お前の昨日のデュエルを見る限りそれなりに成長してるらしいからな」

「うん、僕が勝ったらなんか我がまま聞いてくれる？」

我がままねえ……ま、いつか

「良いぞ。高いものを買うとかなしな」

「うん、じゃあ行くよ……」

「「決闘！」  
デュエル」



## 波乱の新学期（後書き）

というわけで、新キャラ2人です

宇佐美彰子 TF1より登場

恐竜好きなブルー生徒であだ名は「ウサミン」

父の影響で恐竜好きになっただけ。父親は考古学会の重鎮。

兄弟が沢山いる

内気で、ネガティブな少女である。

趣味はお弁当作りで、学校でも材料を買って自分で作ったりもしている

大富豪の娘。

庶民の生活を全く知らないため、高飛車でイヤミたらしい喋り方を  
するが、本人にはまるで悪気はないらしい。

社交界デビューを控えており、良家の子女のたしなみとして社交デ  
ュエルの特訓をしている。

名前の読みは「ゆきこ」。

「さちこ」と読もうものなら激怒されるので要注意。

オリジナル設定で高飛車であり、プライドが高い。

典型的オベリスクブルー設定。ようするに万丈目みたいな感じ

今回は初等で嫌味キャラですが、話の進み具合でいいキャラへと変  
貌していくので、ファンの方はお待ちください

## 天才（前書き）

というわけで、作者が描きたかった主人公VSレイです

前は描けなかったから描けて良かった

レイ「今度こそ最強カード・・・『クロス・アタック』？」

### 通常魔法

自分フィールド上に表側攻撃表示で存在する、

同じ攻撃力を持つモンスター2体を選択して発動する。

このターン、選択したモンスター1体は相手プレイヤーに直接攻撃する事ができる。

もう1体のモンスターは攻撃する事ができない。

遊馬が使用したカードです。

遊馬編にも収録されています。1箱買って大量に出てきました。

フォトンシヨックウエーブで大量に持ってたのにorz

ではでは、本編どうぞ

## 天才

S i d e 彰子

「デュエル  
決闘！」

秋 LP4000

レイ LP4000

武藤先輩とレイちゃんのデュエルが始まりました。オシリスレッドからオベリスクラブにまで上り詰めた秀才、武藤秋先輩。そして小学校から飛び級でデュエルアカデミアに入学した天才、レイちゃん。どちらが勝つんでしょうか

「あれはアイツ・・・ついてないな」

「まったくだ、変幻自在の決闘者と当たっちゃまうとは」

周りの生徒が言うけど、私はそうは思えません。小学校から高校に飛び級してまでデュエルアカデミアに来たということは、それ相応の実力を持っているのだと思いますし。

「先攻は僕ね！ドロー！僕はモンスターを裏守備表示でセット！カードを1枚セットして、ターンエンドだよ！」

「俺のターンドロー！俺は手札から『セイクリッド・シユラタン』を守備表示で召喚する！」

セイクリッド・シユラタン ATK700/DEF1900

出てきたのは攻撃力の低いモンスター・・・

「シユラタンの効果発動！このカードの召喚に成功した時、デッキから『セイクリッド』と名のついたカードを手札に加える！俺が加えるのは『セイクリッド・スピカ』だ。カードを2枚伏せ、ターンエンド」

「速攻魔法『サイクロン』発動！左の伏せカードを破壊！」

伏せていたのはサイクロン？そっか、伏せたターンは発動できないことを利用するんですか。すごいなあ・・・

「っち、伏せたのは『血の代償』だったんだがな・・・まあいいだろっ」

「僕のターンドロ！僕はモンスターをさらにセットし、カードを4枚セットしてターンエンド！」

カードを4枚セット？一体何を・・・

「俺のターンドロ！」

「この瞬間発動『マインド・クラッシュ』！僕が指定するのは『セイクリッド・スピカ』！」

「っち、セイクリッド・スピカは手札にある。墓地に送る」

凄い、レイちゃんはさつきから武藤先輩の動きを封じている。

「仕方がない、俺はセイクリッド・シユラタンを生贄に捧げ『セイクリッド・エスカ』を召喚！」

セイクリッド・エスカ ATK2100/DEF1400

「このカードの召喚に成功した時、デッキから『セイクリッド』と名のついたカードを手札に加える。俺は手札に『セイクリッド・シユラタン』を加える」

また同じカードを・・・何か意味があるのでしょ

「そして、墓地のセイクリッド・シユラタンを除外することで、『  
靈魂の護送船』を特殊召喚する！」

靈魂の護送船 ATK1900/DEF1000

レベル5の上級モンスターにしては、攻撃力が低い。何か、策があるんでしょ

「レベル5のセイクリッド・エスカと靈魂の護送船をオーバーレイ！2体のモンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築！エクシーズ召喚！現れる、『セイクリッド・プレアデス』！」

セイクリッド・プレアデス ATK2500/DEF1500

現れたのは金と白の鎧を着た、騎士のようなモンスター・・・エクシーズ召喚、聞いたことのない召喚方法に周りは困惑するけど、レイちゃんは特に動揺を見せません。噂では武藤先輩は普通の生徒が使



用しない召喚方法をとるって聞いたけど・・・本当だったんですね。

「セイクリッド・プレアデスの効果発動！オーバーレイ・ユニットを一つ取り除くことで、相手のフィールド上のカードを1枚、手札に戻す！最初に伏せたセットモンスターを手札に戻してもらおう」

「あっ・・・！」

「バトルだ！セイクリッド・プレアデスでセットモンスターを攻撃！」

カードが反転して姿を現すのは『メタモルポッド』。あのカードは手札を全て捨てて5枚ドローするカード。レイちゃんの手札は1枚から手札を捨てて5枚のドロー出来る。一方の武藤先輩は手札3枚を捨ててからのドロー・・・その中にはモンスター効果で加えたカードもあります。これはちよつと痛い。

「つち、そつちを手札に戻せばよかったかもな」

「ちなみに、今僕が捨てたのは『マシユマロン』だよ」

ふえええ・・・レイちゃんもタダものじゃないです。そんな戦略を立てられるんですね

「ならば、カードを1枚伏せ、ターンエンドだ」

「僕のターンドロー！僕は手札から『アメーバ』を召喚！」

「させるかつ！プレアデスの効果発動！オーバーレイ・ユニットを取り除き、そのカードを手札に戻す！」

ア、アメーバ！？なんであんな弱小カードを・・・

「残念でしたっ！速攻魔法『エネミーコントローラー』発動！このカードの第二効果によって、アメーバを生贄にエンドフェイズまでセイクリッド・プレアデスのコントロールを得るよ！」

「っちい！」

レイちゃんのフィールドに現れるセイクリッド・プレアデス。

「そして、バトル！セイクリッド・プレアデスで秋さんに攻撃！ダイレクトアタック！」

「っちい！」

秋LP4000 LP1500

「だがこの瞬間俺の畏発動！『ダメージ・コンデンサー』！手札1枚をコストに、その受けたダメージ以下のモンスターを特殊召喚する！俺は手札の『シャイン・エンジェル』を墓地に送ることで、デッキから『セイクリッド・エスカ』を特殊召喚！」

セイクリッド・エスカ ATK2100/DEF1400

「そしてエスカの召喚時効果発動！手札に再び、『セイクリッド・スピカ』を加える！」

「なら僕はメインフェイズ2に入るよ！速攻魔法『神秘の中華鍋』を発動！セイクリッド・プレアデスを生贄に捧げ、その攻撃力分の

ライフを回復する！」

レイ LP4000 LP6500

「ターンエンド！」

ここで大きなライフの回復。そしてプレアデスは武藤先輩のフィールドに戻ることなく、レイちゃんのライフを回復させて墓地へと送られました。

「確かに、俺の知ってるデッキとは少し違うな・・・流石か、俺のターンドロ―！俺は手札から『強欲な壺』を発動！カードを2枚ドロ―する！そして手札から『セイクリッド・ポルクス』を召喚！」

セイクリッド・ポルクス ATK1700/DEF600

「このカードの召喚に成功したターン、通常召喚に加えて1度だけセイクリッドと名のついたモンスターを召喚できる。俺はポルクスを生贄に捧げ、『セイクリッド・スピカ』を召喚！」

セイクリッド・スピカ ATK2300/DEF1600

「そしてこのカードの召喚に成功した時、手札からレベル5のセイクリッドと名のついたモンスターを特殊召喚する！来い、『セイクリッド・エスカ』！」

セイクリッド・エスカ ATK2100/DEF1400

「そしてエスカの召喚に成功したことでデッキから『セイクリッド・グレティ』を加える」

武藤先輩のデッキが恐ろしい速度で回って行く。モンスターの特殊召喚、そしてモンスターをデッキからサーチする。あのデッキの完成度の高さがよくわかるもの。すごいです……。あの人見たいに、私なんかでもいつかはなれるのでしょうか……

「そして手札から永続魔法『セイクリッドの聖痕』を発動。このカードはセイクリッドと名のついたカードのエクシーズ召喚に成功した時、カードを1枚ドロー出来る。俺はレベル5のスピカとエスカでオーバレイ！2体のモンスターでオーバレイ・ネットワークを構築！エクシーズ召喚！現れる『セイクリッド・プレアデス』！」

セイクリッド・プレアデス ATK2500/DEF1500

再び現れるセイクリッド・プレアデス。すごいです、ここまですぐにモンスターの召喚を行うなんて

「そして、セイクリッドの聖痕の効果で、カードを1枚ドローする。手札から『貪欲な壺』を発動！墓地の『セイクリッド・プレアデス』『セイクリッド・スピカ』を2枚、『セイクリッド・エスカ』を2枚デッキに戻し、カードを2枚ドロー！バトルだ！セイクリッド・プレアデスでダイレクトアタック！」

レイ LP6500 LP4000

「うっ……。畏発動！『ダメージ・コンデンサー』！手札1枚をコストに、デッキから『シールド・ウィング』を召喚！」

シールド・ウィング ATK0/DEF900

「ならば、カードを2枚セットしてターンエンド！」

レイちゃんのライフは元の4000へと戻った。ライフでは圧倒的にレイちゃんの方が有利です。

「僕のターンドロー！僕は手札から『強欲な壺』を發動して2枚ドロー！よし、僕はもう一度『アミーバ』を召喚！」

「また同じ戦法か・・・！プレアデスのオーバーレイ・ユニットを取り除いてアミーバを手札に戻す！」

「なら僕は手札から『強制転移』を發動！シールド・ウィングとセイクリッド・プレアデスのコントロールを入れ替えるよ！」

「させるか！畏発動『強制脱出装置』！お前のシールド・ウィングを手札へ戻す！」

「あつ・・・僕のコンボが・・・な、なら『二重召喚』を發動！『シールド・ウィング』を守備表示で召喚！ターンエンド！」

シールド・ウィング ATK0/DEF900

ここまでターン数はそこまでかかっていません。でも、これだけのデュエルを小学生対高校生で繰り広げるなんて。レイちゃんは凄いなと思います。秋さんのコンボは明らかに上位の物。だけど、それくらい付くレイちゃんのデュエルタクティクスは確実に私より上です・・・うう、なんだか自身をなくしそう

「俺のターンドロー！俺は手札から『戦士の生還』を發動！『セイクリッド・ポルクス』を手札に戻す！そして『セイクリッド・ポルクス』を召喚！」

セイクリッド・ポルクス ATK1700 / DEF600

「そして効果により、『セイクリッド・グレティ』を召喚！」

セイクリッド・グレティ ATK1600 / DEF1400

「グレティも効果が存在するが、その効果は使用しない。俺はレベル4のポルクスと、グレティをオーバーレイ！2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！エクシーズ召喚！現れる、『No.39 希望皇ホープ』！」

No.39 希望皇ホープ ATK2500 / DEF2000

「さらに、手札から『クロス・アタック』を発動！自分のフィールドに表側表示で存在する、同じ攻撃力を持つモンスター2体を選択して発動！1体の攻撃を放棄する代わりに、もう1体はダイレクトアタックが出来る！行け！希望皇ホープ！ダイレクトアタックだ！『ホープ剣スラッシュ』！」

「きゃああああああっ！」

レイ LP4000 LP1500

これで、武藤先輩とレイちゃんのライフは同列になりました。攻撃力などを見ても、これだと武藤先輩が完全に形成を逆転しています。

「俺はこれでターンエンドだ」

「ぼ、僕のターン・・・ドローク！き、来たあ！僕は手札から『溶岩魔人ラヴァ・ゴーレム』を秋さんのフィールドのモンスター2体を

生贄にして秋さんのフィールドに特殊召喚するよ!」

溶岩魔人ラヴァ・ゴーレム ATK3000 / DEF2500

わ、わざわざ相手のフィールドに攻撃力3000のモンスターを!?

「やってくれたなレイ……」

「えへへ、凄いでしょ」

「ああ、凄いな……この土壇場でこいつを引き当てるとは……」

「そして、僕はカードを2枚伏せて、ターンエンド!」

た、ターンエンドって……フィールドには守備力900のモンスターしかいないのに

「俺のターンドロー!」

「秋さんのスタンバイフェイズ、ラヴァ・ゴーレムの効果で1000のダメージを秋さんは受ける」

秋 LP1500 LP500

「っち……やるな。だが、俺はまだ負けてないぜ?俺はラヴァ・ゴーレムを生贄に捧げ……サイバー・ドラゴンを召喚!」

サイバー・ドラゴン ATK2100 / DEF1600

「ターンエンドだ!」

「僕のターンドロワー！うーん、なんだか引きが悪くなつたなあ・・・  
僕は2体目のシールド・ウイングを召喚！ターンエンド！」

シールド・ウイング ATK0 / DEF900

「俺のターンドロワー！俺は墓地のセイクリッド・グレティを除外！  
『靈魂の護送船』を召喚！」

靈魂の護送船 ATK1900 / DEF1000

「レベル5のサイバー・ドラゴンと、聖痕の護送船でオーバーレイ  
！2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！エクシ  
ーズ召喚！現れる、『No.61ヴォルカ・ザウルス』！」

No.61ヴォルカ・ザウルス ATK2500 / DEF1000

「ヴォルカ・ザウルスの効果発動！オーバーレイ・ユニットを1つ  
使い、表側表示のモンスターを1体破壊する！俺はシールド・ウイ  
ングを破壊する！『マグマックス』！」

「恐竜さんだあ・・・」

恐竜さん！恐竜さんが出てきました！そして、その恐竜さんの効果  
で破壊されるシールド・ウイング。さつきからシールド・ウイング  
を攻撃しないということは、戦闘での攻撃耐性があるんでしょうか。  
・  
・

「シールド・ウイングは2回も戦闘で破壊されないからな。こうで  
もしないと破壊できない。本来、ヴォルカ・ザウルスはモンスター



を効果で破壊した時、攻撃力分だけダメージを与えるが、シールド・ウィングは攻撃力0・・・意味がない。俺はこれでターンエンド」

「僕のターンドロ―！僕は手札から「その瞬間、畏発動！」」

「ふえ！？」

「『マインド・クラッシュ』！選択するのはもちろん『アメーバ』だ」

アメーバ・・・そういえばレイちゃんの手札にずっと温存されっぱなしでしたね。アレのどこが危ないんでしょうか・・・？

「あう・・・絶対忘れてると思ったのに・・・」

「そんなわけないだろ」

「僕が次のターンキーカードを引けば勝ちだよ、秋さんどうするの？」

この攻防、いつまで続くんでしょう。すごい戦いです

「その様子からして帝来てないな？」

「僕はこれでターンエンド！」

帝・・・帝って、邪帝とか、風帝って言うカードでしたっけ。

「俺のターンドロ―・・・カードを1枚伏せ、ターンエンドだ」

カードを伏せただけ？ヴォルカ・ザウルスの効果を使わないんでしようか？

「僕のターンドロロー！どうして効果使わないのか知らないけど、僕の勝ちだよ！僕は伏せていた『リビングデットの呼び声』を発動！墓地の『シールド・ウイング』を蘇生し、それを生贄に捧げる！来い！『風帝ライザー』！」

風帝ライザー　ATK2400/DEF1000

「このカードの召喚に成功した時、デッキのカードを1枚戻す。僕はヴォルカ・ザウルスを選択する！」

デッキに恐竜さんが帰ってしまいました・・・でも、この状況って、秋さんの負けなんじゃ・・・

「これで僕の勝ちだね！風帝ライザーでダイレクトアタックだあ！」

風帝ライダーが秋さんへと向かって行く。

「甘い、甘いなあレイ・・・最後の最後、勝利を焦ったな？」

「へ？」

「罠カードオープン！『異次元殺法ベクトル・チェンジ』！このカードは、相手が攻撃宣言時、攻撃表示のモンスターと守備表示のモンスターを選択して発動する！相手の攻撃表示のモンスターを守備表示にして、表守備表示のモンスターを攻撃表示にする！」

風帝ライザーの攻撃が止まってしまい、シールド・ウイングは翼を

広げて攻撃の姿勢を見せます

「こ、これじゃ攻撃が出来ない・・・」

「さあ、どうするよ？レイ」

「うう・・・ば、僕はこれでターンエンド。でも秋さんのターンでモンスターが来なかったら僕の勝ちだよ！」

そのとおり、秋さんの罫はこのターンの一時的しのぎでしかない。

「そうだな・・・俺がカードを引くか引かないか、それに全てが掛っている。俺のターン、ドロー！！つぶ」

笑った。まさか・・・

「俺が引いたのは・・・『死者蘇生』！」

「なっ・・・」

「死者蘇生の効果により、墓地から『No.39希望皇ホープ』を復活させる！」

No.39希望皇ホープ ATK2500/DEF2000

「行くぞ、希望皇ホープで、シールド・ウイングを攻撃！『ホープ剣スラッシュ』！」

「きゃああああああああっ！？」

レイ LP1500 LP0

大健闘・・・としか言いようがありません。武藤先輩と、レイちゃん  
のデュエル。周りもいつの間にか魅入ってしまっていた。これが、  
レイちゃんの実力。あの秋さんをあそこまで追いつめた、あの力。  
彼女はきつと・・・天才なんでしょう。私も、頑張りたいなあ・・・

S i d e 秋

あ、あぶなかつたあ・・・あそこで死者蘇生を引くとは思わなかつ  
た。デツキは残り十数枚。セイクリッドはデツキ消費と、手札消費  
が激しすぎる。俺はへたり込んだレイの所へ歩み寄った。

「レイ、お疲れ様」

「・・・」

返事がない、どうしたんだ？俺はかがんでレイの顔の高さにまで持  
つてく

「レイ？」

「えいつー！」

すると、レイが俺に勢いよく抱きついた。

「ちよ、おい！？」

「負けちゃったけど、これくらいの我がままはいいでしょ？秋さん？」

「はぁ・・・はいはい」

俺はそのまま抱っこして、ステージを降りる。やれやれ、デュエリストな顔をしていても、やっぱりこいつはまだまだガキなんだな。この後、俺が雪乃とツァンに文句を言われたのは言うまでもない

S i d e ？？？

僕は今日、遊城十代とデュエルをした。すべてはそう、彼の運命によつて。あり合わせのデッキで彼に挑み、彼は見事僕に勝利した。

「あの程度で喜ぶとは・・・」

僕のDの力なら、彼等たやすいだろうな。だが、それ以上に危険なのはあの男、武藤秋だ。僕も知らないカードを使いこなし、エクシードというモンスターを使っていた。

「斎王に、連絡を入れるか」

収穫は予想以上のものだった。斎王が言っていた『星の男』、武藤秋・・・彼も同じく、僕のDの力を持って、戦うとしよう

S i d e 幸子

なんなんですよ！？なんなんですよ！？あの小娘は！子供で、オシ

リスレッドの分際で！あの武藤秋とのデュエルは！あれではすつかり、あの小娘がクラスの人気を集めてしまったではないですか！

「きいい！見てらっしゃい、小娘・・・そのうち目にものを言わせてやりますわ！」

私はその不快な雰囲気を持ったデュエル場を後にした。

天才（後書き）

というわけで、エドがまだ出てきません（笑）  
最初のエドは本当に嫌いですからねえ・・・私

幸子はこの描写ですけど、幸子も好きなキャラです。  
ちゃんといい子に成ります。多分高飛車なのは治らないけど・・・

（汗

それでは

## 過去と今（前書き）

というわけで、今回は万丈目に関する話です

万丈目はデュエルしません、この小説では段々と万丈目は成長していきます。

ではどうぞ！

万丈目「今日の最強カードは・・・ふん、『ベビー・トラゴン』か」

自分のメインフェイズ1でこのカードのエクシーズ素材を1つ取り除き、

自分フィールド上に表側表示で存在する

レベル1のモンスター1体を選択して発動する事ができる。

選択したモンスターは相手プレイヤーに直接攻撃する事ができる。



## 過去と今

Side秋

始業式が始まってから数日。レイは宇佐美彰子という生徒と仲がよくなったらしい。俺とのデュエル以降、ブルーからの視線が少々気になっているようだが、雪乃やツアンが大抵の生徒を黙らせているようだ。俺は珍しく一人、校内を歩いていた。

「ふぁ・・・帰ったら何をしようかな」

休みが明けてから学校にいと、かなり本土のほうが恋しくなる。テレビなどを見る気はないが、やはりデュエル以外のこともしたい。お金はカードを売ったりしているので溜まっていると言えは溜まっている。

「売店になんかうまいもんでも売ってないかな」

基本、あの売店では何でも売っている。デザート類はセイコさんが作るものが絶品だ。市販で販売されたものよりも安く、そして美味しい

「よし、売店で何か買うか」

目的を決めて歩こうとすると、急にオベリスクブルーの集団に囲まれた。誰だこいつら？見たところ1年のようだが

「お前が武藤秋だな」

「そうだが、誰だ？」

「僕は、中等部でトップのエリートだった五階堂だ」

五階堂？確か・・・えーと、えーと、ああ！あの万丈目みたいな奴か。万丈目を落ちぶれた奴だなんだという、エリート思考の生徒

「その五階堂つてのが何の用だ？それ以前に、先輩に向かってその口のきき方・・・何様のつもりだ？」

「黙れっ！オシリスレッドだった分際でおベリスク気取りか！万丈目さんはお前のせいで・・・万丈目さんはお前のせいで落ちぶれてしまったんだ！」

「はあ！？」

こいつ、何言つてんだ？万丈目が落ちぶれたのが俺のせい？アイツのエリート思考には今まで問題があつて、今でこそ仲間というものを持ってちゃんとしたのに・・・あれのどこが落ちぶれてんだ？

「僕は貴様を許さない・・・僕は貴様に決闘を申し込む！」  
デュエル

「デュエルねえ・・・」

「成り上がりの屑である貴様を倒し、万丈目さんの目を覚まさせる！今から30分後、デュエル場に来い。逃げるなよ？僕とのデュエルは殆どの生徒が知ってるんだからな・・・逃げれば負け犬だ」

そう言つてオベリスクブルーの集団は立ち去つて行つた。

「・・・とりあえず、売店行くか」

\*

## デュエル場

デュエル場では大勢の生徒が賑わっている。デュエル場の入り口には十代達が待っていた。

「秋、大変なことになったな・・・」

「ああ、まあな」

「・・・秋」

すると、万丈目が俺のところに来る。いつにもなくテンションが低い

「・・・貴様が負けるとは微塵にも思っていない。だが、何故あの五階堂という生徒は俺のためにデュエルをするなどと言っている?」

万丈目から聞かされたのは、五階堂は『万丈目先輩のために、武藤秋を肅正する』ということらしい。

「よくわからんが、万丈目、お前がアイツから見て落ちぶれたらしい」

「何?この俺が、だと?」

「アイツは以前の万丈目そのものだ・・・エリート思考で他人を見

下し、仲間を、絆を信じることを知らない」

俺の言葉に、「あっ」と、十代、明日香、三沢、雪乃、ツアン、翔が声を上げた。

「この学園の典型的な『見下し現象』・・・今の2年、3年は改善した意識を、1年に叩きこまないとな」

「秋、貴方まさか・・・」

「今回は、全てレベル1、ランク1のモンスターしかデッキに入っていない。これで十分だ」

ようやく完成したローレベルデッキ。こいつの力を見せてやるぜ。

「そろそろ時間だ、行った方がいい」

三沢に促され、時間を見る。後5分・・・じゃあ行きましようかね。

「・・・」

「おう」

俺は小さく万文目が呟いた言葉に相づちを打って壇上に登った。万文目からの一言、それは『勝て』この一言だった。

S i d e 雪乃

私達は秋を見送ってから観客席に戻った。

「雪乃さん！ツアンさん！こっちこっち！」

「み、みなさんこんにちは・・・」

レイと彰子が既に席を確保してくれていたけど、席は超満員。よく席を取って置いたわね。流石はレイだね。さて、デュエルステージに立つのは秋と、中等部トップエリート、五階堂の坊や

「よく逃げずに来たな！」

「そうだな」

「諸君！これより、万丈目先輩を腐敗させたゴミの粛清を行う！よく目に焼き付けておけ！」

あの坊や、秋のことを知らないのかしらね。それとも、オベリスクブルー以外の生徒に興味がないのかしら？なんとも、残念な独裁者って感じね。万丈目の坊やに憧れを持っているのはわかるけど、一部の生徒も騒いでいる。あれは五階堂の坊やの舎弟というところかしら。他の2年生たちは今度は一体どんなデュエルを見せてくれるのかとワクワクしている感じね。

「どうでもいいけど、そのゴミに負けたらお前はどつなる？ゴミ以下か？」

「ふんっ！僕がお前に敗北するなどありえん！お前のゴミの様なデュッキにはな！」

言葉を選ぶべきね、あのデュッキをゴミなんて。多分、始業式のデュ

エルを見てないわね？あの坊や

「そうか、なら俺も先に宣言しておこう。このデッキに入っているモンスターのレベルは全てレベル1だ。エクストラにはランク1のみ・・・これでお前を倒す」

「なんだと！？僕を舐めているのか！？」

ざわめく会場。主に1年生ね。隣にいる彰子とレイも驚きの表情。どんなデッキなのか、私としても楽しみだわ。

「事故が起きなければ、俺はお前を完膚なきまでに叩き潰せる。かかって来い」

「行くぞ！」

「『デュエル  
決闘！』」

秋 LP4000

五階堂 LP4000

「先攻は僕だつ！僕のターンドロ！俺は手札から『切り込み隊長』を召喚！効果発動！このカードの召喚に成功した時、『荒野の女戦士』を特殊召喚！」

切り込み隊長 ATK1200/DEF400

荒野の女戦士 ATK1100 / DEF1200

レベルもあってなければチューナーでもない。シンクロもエクシーズもできないモンスター同士で一体何を？そもそも、チューニングもエクシーズも秋以外やってるのはツアンか、私くらいなもの・・・

「そして、切り込み隊長に『宝玉の剣』を装備し、荒野の女戦士に『神剣・フェニックスブレード』を装備する！」

切り込み隊長 ATK1200 / DEF400 ATK1500 / DEF400

荒野の女戦士 ATK1100 / DEF1200 ATK1400 / DEF1200

「カードを1枚伏せ、ターンエンドだ！」

「何この酷い初手・・・」

「まったくね、アレでよくエリートなんて名乗れるものだわ」

私とツアンが呟くと、彰子が驚いて私達を見る。

「え・・・」

「当然でしょ？そもそも、あの程度の攻撃力で得意げになるなんて・・・1年の時の万丈目そのままね」

「ほんと、昔の万丈目君ね」

「ツアン君、天上院君・・・頼むからそういう風に人の過去を掘り返さないでくれ、心なしか胸が痛い」

そんな会話をしながら、視線をデュエルスペースに戻す。

「俺のターンンドロー・・・さて、俺は『サイバー・ヴァリー』を攻撃表示で召喚」

サイバー・ヴァリー ATK0/DEF0

「攻撃力0を、攻撃表示!？」

「うあー・・・出た、嫌なサイバーモンスターッス」

「そんなに酷いんですか？」

「ああ、あのモンスターは相手が攻撃宣言するとゲームから除外してそのバトルフェイズを無効にし、サイバー・ヴァリーのコントローラーは1枚カードをドローする」

サイバー・ヴァリーはなかなか知られてないモンスターね。彰子も首を傾げている。すると当然・・・

「貴様! 攻撃力0を攻撃表示だ!？」

あの五階堂の坊やも知るわけがないわね。

「カードを1枚伏せてターンエンド・・・どうぞお好きに攻撃を」

「つく! 馬鹿にするな! 俺のターンンドロー! バトルだ! 切り込み隊



長でサイバー・ヴァリーを攻撃！」

「サイバー・ヴァリーのモンスター効果発動！攻撃宣言にこのカードをゲームから除外することで、バトルを終了し、カードを1枚ドロウ出来る」

「なんだと!？」

普通考えないのかしら？攻撃力0のモンスターを攻撃表示にしてたら何かしら効果があるって。

「で?」

「つく・・・僕はもう1枚カードを伏せて、ターンエンドだ！」

「俺のターンドロウ・・・俺は手札から『ミスティック・パイパー』を召喚」

ミスティック・パイパー ATK0/DEF0

「このカードをリリースすることでカードを1枚ドロウする。そしてそのカードがレベル1のモンスターだった場合、さらにカードを1枚ドロウ出来る。ドロウ・・・レベル1のモンスター『マツボツクル』。よってもう1枚ドロウする。フム、俺は手札から『苦渋の選択』を発動！選ぶのは『ワイト』2枚、『ワイトキング』2枚、『ワイトメア』1枚だ」

「ワイトだと!?!舐めてるのか!」

「さあな、さっさと選べ」

これは、必勝パターンね・・・

「ならば『ワイト』を手札に加える！」

「良いだろう、残りは全て墓地だ」

さて、もう次のターンで秋の勝ちが近いわ。どうなるのかしら

「次に・・・おい」あ？

「お前、どこまでこの僕を馬鹿にする！」

「はあ？」

あの坊や、いきなり何を言い出すのかしら。

「このエリートである僕に、ワイトだと・・・！？ふざけるのも大概にしる！オシリスレッドからオベリス  
クブルーになつてエリートを気取ってるのかお前は！」

「・・・・・・・・」

「お前みたいな奴や、オシリスレッドの屑どもみたくないやつを見て  
いるとイライラする！雑魚の癖に上上がるうとあかく・・・雑魚  
は雑魚らしくしてればいいんだ！」

五階堂の坊やの言葉に、レイが反応する。

「レイ、気にしちゃだめよ」

「ツァンさん……」

「どうせ、あんなのすぐに負け犬の遠吠えになるんだから」

ホントだわ。それにしても、心なしか……秋から怖いオーラが出てるのは気のせいかしら

「……おい、クソ餓鬼」

「なっ……」

あーあ、あの様子じゃキレちゃってるわね、秋。オシリスレッドには十代の坊やや翔の坊や、そして……レイがいるからね

「お前、今の発言覚えておけよ？お前はその雑魚に倒されるんだからな……俺は手札から『天使の施し』を発動。カードを3枚引いて2枚、墓地へ送る。カードを1枚伏せてターンエンドだ」

「僕のターンだ！僕は切り込み隊長に『グレード・ソード』を装備する！攻撃力を300上げて、このカードは2体分の生贄として扱える！」

切り込み隊長    ATK1500 / DEF400    ATK1800 /  
DEF400

得意げになってるけど、この後の展開が読めていて可哀想だわ。

「そして切り込み隊長を生贄に、『ギルフォード・ザ・レジェンド』を召喚！」

ギルフォード・ザ・レジェンド ATK2600/DEF2000

「このカードが召喚に、成功した時、自分の墓地に存在する装備魔法カードを可能な限り自分フィールド上に表側表示で存在する戦士族モンスターに装備する事ができる！そして先に宝玉の剣の効果で1枚ドローだ！」

そして墓地のカードは確か・・・グレート・ソードと、宝玉の剣

ギルフォード・ザ・レジェンド ATK2600/DEF2000  
ATK3200/DEF2000

「さらに、手札から『破邪の大剣・バオウ』を装備する！これで攻撃力は500上がる！」

ギルフォード・ザ・レジェンド ATK3200/DEF2000  
ATK3700/DEF2000

攻撃力が1500も上がったわね。まあ、ここまでくれば『普通の生徒なら驚きの声を上げるでしょうね。私達の周りは呆れてる人間ばかりね。三沢の坊やはいつも秋の大戦を見てメモしてるけど、今回はメモをする気にもならないみたいね。』

「手札から『サイクロン』を発動だ！その伏せカードを破壊する！」

「サイクロンにチェーンして『威嚇する咆哮』このターン、お前は攻撃できない」

伏せカードを警戒するのはいいけど、これであの子はまた攻撃でき

ない。

「ツチ、運のいい奴だ・・・俺はこれでターンエンドだ」

「俺のターンエンドロー・・・『強欲な壺』でカードを2枚ドロウする。ふん・・・この手札でいけるか」

手札は7枚・・・そのうちの1枚はマツボツクルだけ・・・

「俺は手札から『高等儀式術』を発動する。デッキの『ワイト』を生贄に、儀式召喚！いでよ、『サクリファイス』！」

サクリファイス ATK0/DEF0

「そして手札の『マツボツクル』を墓地へ送ることで、手札の『ロボツクリ』を特殊召喚する」

ロボツクリ ATK200/DEF400

「そして、マツボツクルはマツボツクリの効果で墓地へ送られると、特殊召喚される」

マツボツクル ATK400/DEF200

召喚されたのは3体のモンスター・・・サクリファイスは恐らくレジエンドを取り込むために用意したんでしょう。そしてレベル1のモンスターが2体と、伏せカード・・・どうなるのかしら

「そして畏発動『エンジェル・リフト』レベル2以下のモンスターを蘇生する。蘇生するのは『ミスティック・パイパー』だ。」

ミスティック・パイパー ATK0 / DEF0

「ミスティック・パイパーをリリースして効果発動。カードを1枚ドロー・・・引いたのは『ワイトキング』。よってもう1枚ドロー・・・『魔法石の採掘』を発動。手札の『ワイトメア』とサイクロンを墓地へ送り、墓地から『強欲な壺』を回収して発動。カードを2枚ドロー」

これで墓地にはワイト3体、ワイトキング2体、ワイトメア2体落ちた・・・

「手札から『二重召喚』を発動。俺はこのターン2回の召喚を行える。さらに『ワイトキング』を召喚」

ワイトキング ATK0 / DEF0

周囲が騒然となる。主に1年生ね。ワイトなんてカード、ただの雑魚カードとしか思っていないのは間違いよ？ なんとたつて今の攻撃力は・・・

「ワイトキングの攻撃力は墓地のワイトの数×1000だ。ワイトが3体、そしてワイトとして扱うワイトキングが2体、同じくワイトメア3体・・・総計で攻撃力は8000だ」

「こ、攻撃力8000だとお!？」

ワイトキング ATK0 / DEF0      ATK8000 / DEF0

カオスね・・・秋、相当怒っているんじゃないの？ それにしても、

ワイトメアはいつの間にも・・・多分、天使の施しでかしら？

「手札を1枚伏せ、『命削りの宝札』を発動。カードを5枚ドロし、5ターン後に全て捨てる。そして『サイバー・ヴァリー』を召喚。レベル1のサイバー・ヴァリー、コロボツクリ、マツボツクルでオーバーレイ！3体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！エクシーズ召喚！現れる、『ベビー・トラゴン』！」

ソリットビジョンで岩が突き出す。初めて見るランク1エクシーズ・・・いったいどんなモンスターが!?

『トラ〜?』

そこにいたのは、なんとというの・・・なんて、なんて可愛いモンスター・・・

『可愛い〜!』

女子から絶叫が飛ぶ。すごく、可愛いわ・・・デュエルモンスターズでもああいうタイプのモンスターはあんまりいないわね

ベビー・トラゴン ATK900/DEF900

「サクリファイスの効果発動。1ターンに1度、相手モンスターを吸収する。俺が選択するのはギルフォード・ザ・レジエントだ。そしてその攻撃力と守備力をサクリファイスに換算する」

サクリファイス ATK0/DEF0 ATK2600/DEF2000

「な、な、なあ!?!」

場には攻撃力8000のワイトキング、攻撃力3700のサクリフアイス、そして攻撃力が900のベビー・トラゴンがいる。勝ったあつたわね

「そして、これで最後だ。ベビー・トラゴンのモンスター効果発動。オーバーレイ・ユニットを1つ使うことで、モンスターを1体選択。選択したモンスターはこのターンダイレクトアタックが出来る・・・俺が選択するのは『ワイトキング』だ」

「ひ、ひい!」

「ゴミはなんだったけ?五階堂・・・行け!ワイトキング!ベビー・トラゴン!ワイトキングでダイレクトアタックだ!」

ワイトキングの方にベビー・トラゴンが乗り、五階堂の坊やに向かって行く。そして攻撃を放った。

「う、う、うわああああああああああ!」

五階堂 LP4000 LPO

デュエル場に完成が響く。そしてベビー・トラゴンは喜びながら飛びまわる。ああ、可愛いわ。そして、ソリットビジョンが消えて消滅した。

「さて・・・誰が誰を粛正するんだったかな?」

「つく、くそ!」



そう言って逃げようとする五階堂の坊や。もう完全に、五階堂の坊やが『秋』に『肅正された感じだものね

」どこへ行くつもりだ？」

だけどその先には、既に万丈目の坊やが立ちふさがっていた。

「ま、万丈目さん・・・」

「エリートを名乗っておきながら負けたら逃げるか？負けたいいわけでも考えに行くつもりだったんだろっ」

凶星らしく、押し黙る五階堂の坊や。まあ当然よね、かつての自分を見ているのだから

「貴様は俺を落ちぶれたと言ったが、それは貴様の勝手な妄想だ」

「な、なんでですか！オベリスクブルーだった貴方は！あんなデッキを使わなかった！」

「確かに、俺は今の貴様と似たような戦いをしてきた・・・だがな、俺は知った。デュエルモンスターズを通じて人との絆を、モンスターとの絆を・・・そして何より、あそこの馬鹿が教えてくれた。この世に不要なカードなどないとな。それによつて、この今の万丈目サンダーがある！」

万丈目の坊や、少しだけ見直したわ。中等部時代よりだいぶマシになっただじゃないの

「俺のようになるなど、今の貴様には到底不可能だ。今後、俺の名

を語ってこのような馬鹿げたことをした場合・・・その時は、この万丈目サンダー自身が相手になってやる！」

「っ・・・！」

五階堂の坊やはそのままとボトボと立ち去って行った。

\*

レッド寮 食堂

Side秋

デュエルを終えて、みんなで食事している。今日はデザート食べれなかったんだよなあ。セイコさんのデザート、あのブルーの軍団に囲まれて売り切れてたし

「それにしても見直したぜ万丈目！お前からあんな言葉を聞くなんてな！」

「当然だ。この万丈目サンダーは奴よりも上の超スーパーエリートだからな！」

そう言うところは変わってないのな。

「ま、ちょっとくらいは見直してあげるわ、万丈目」

「ツアン君、君は本当に言葉に棘しかないんだな」

そんな感じで談笑して、1日は過ぎて行った

過去と今（後書き）

というわけで、万丈目の相手、五階堂の話でした。  
そろそろ本編に沿った方がいいな・・・頑張ろう（汗

## 恋する乙女の日常（前書き）

というわけで、レイのお話です

前に原作やるとか言っておきながら放置でした、スイマセン（汗）  
とりあえず、現在5D・s編を少しずつ完成にあります。フォーチ  
ユンカップに近づきつつある感じですよ

秋「今日の最強カードは・・・また、ないのか」

最近思いつかないです

## 恋する乙女の日常

Siddeley

入学してから、僕は秋さんから離れて授業を受けている。まあ、学年が違うから教室が違うのは当たり前だけど。やっぱりいつも寂しい。僕の隣にいるのは宇佐美彰子さん。入学式で隣になって話したのがきっかけで、友達になった。で、もう一人新しい友達が一人

「おはようございますっ！レイちゃん、彰子ちゃんっ！」

「ゆまさん、おはよー」

「おはようございます」

宮田ゆまさん。なんか、3人組で組む授業で一緒になってから仲良くなった人で、とってもいい人。

「今日もいい天気ですねー」

「のんきだね、ゆまさん・・・今日小テストだよ？」

「ほうえ！？ほ、ホントですかっ！急いで勉強しないと・・・」

なんというか、彰子さんとはまた別の意味で心配な人。どこか抜けていて、なんというか、なんでもかんでも信じてしまう人。疑うことを知らないのかな？そんな感じがする。ちなみに使うのはHEROデッキという、なんと十代さんと同じだったりする。普段は次元斬なんだけど、十代さんのデュエルを見てヒーローに切り替えたと

か何とか。それゆえに十代さんのファンらしい。この前会った時なんて興奮抑えるの大変だったし、明日香さんの目が心なしか怖かったし……

「今日もお昼は武藤先輩や遊城先輩たちとですか？」

「うん、そうだよ。十代さんがゆまさんとデュエルするの楽しみにしているって」

「ホントですかっ！たのしみですう〜」

あはは……また、明日香さんの目が光らないことを祈ろう。うん、そうしよう。

「ゆまさんはすごいですね、私なんかあの人達の前だと未だに緊張しちゃいます」

「そうですか？私はとっても楽しみなのです」

「それよりさ、彰子さん、ゆまさん、テスト勉強……」

「「あ」「

忘れていたんだね、本当に抜けているなこの二人……まあ、とりあえず僕もテスト勉強しようっ

\*

テスト勉強はまあ、簡単だったね。小テストは5問だけだし、問題

はこんな感じ

問1 サイクロンにチェーンし、実質効果を無効にすることが出来るカードはどれか

死者蘇生

早すぎた埋葬

浅過ぎた墓穴

問2 攻撃力が高いモンスターの順序に並び変えよ

ブラック・マジシャン 北風と太陽 トウーン・ジエミナイ・エル  
フクリボー F・G・D ホワイト 屋根裏の物の怪

問3 青眼の白龍の攻撃力と守備力を答えよ

問4 レベルB地区、グラヴィティ・バインド・重力の網、魂を削る死霊が相手フィールドに存在する状態を打破する場合、どれが最も効果的か

大嵐

神獣王バルバロス



ブラック・ホール

問5 スネークホイッスルの発動タイミングはどれか？

ドローフェイス

メインフェイス

ダメージステップ

こんな感じ。どれも結構簡単だった。とりあえず、モンスターの並び替えで、屋根裏の物の怪について首を傾げたけど。まあ、大丈夫かな。ゆまさんと彰子さんは5問目で悶えてたけど・・・ま、大丈夫かな。このテスト3点取れればいいから。授業が終わって、お昼になった。お昼になると十代さんに会えるのが楽しみなゆまさんと、秋さん達に会うのに緊張している彰子さん。なんというか、どっちもどこか抜けてるのに、そこだけ対照的違う二人。すると、僕は秋さんを見つける

「あ、秋さん！」

「お、レイ・・・と、宇佐美と宮田か」

「こ、こんにちは武藤先輩」

「こんにちはっ！武藤先輩！」

とりあえずこの後、他の皆さんとも合流していつもの場所で食事を

とること」

「はい、秋。あーん」

「あー」

「今度はこっちよ、あーん」

「あー」

相変わらず、これは見てて恥ずかしい。秋さんが雪乃さんとツアンさんに食べさせてもらっている。というか、半ば強制的に食べさせられている。秋さんが箸を取ろうとしたらすばやく秋さんから箸を奪っていたし。十代さんたちは慣れたという感じで問題なく食事をしている。いいな、僕もやりたい・・・でも、やりたいなんて言ったらまたツアンさんにアイアンクロー喰らっちゃうから言わないでおこう。ゆまさんは「すごいですっ！」って言うてるだけで、特にないけど、彰子さんは驚きでいつも最初に手が止まっちゃう・・・

「あ、今日はステーキパンだ」

うん、ドローパンは楽しいよね、色々なパンが出てくるし。トウガラシパンなんか引いた時は大変だけど。十代さんはいつもいいパンばかり引く。流石「神の手を宿す決闘者」かな。

\*

午後

「えーと、じゃあそのまま直接攻撃で」

「ぐああああっ!」

午後の授業は主に実技のデュエル。ハア・・・つまんない。中学から上がってきた人、そして女子生徒の人は自動的にブルー生徒に上がるらしい。この前の秋さんと戦った人を見ても、やっぱり弱い一言。この学校・・・本当にデュエルの学校なのかな

「あつう」

「はづ」

落ち込んだ様子で彰子さんとゆまさんが帰ってきた。

「どうしたの？二人とも」

「負けちゃいました・・・」

「あつう・・・私も・・・」

あらー・・・まあ、二人もだいぶデュエルレベル低いみたいだし、そもそも持つてるカードが持つてるカードだから、大変なんだね。僕はそのまま秋さんにもらったカードで頑張ってるけど

「まったく、お話になりませんわねえ・・・」

この嫌味ったらしい口調は・・・

「幸子さん」

「・・・あら、レイさんと彰子さん、それにゆまさんじゃありませんか」

確か午後の実技の二人の相手、幸子さんだった気がする。

「私の実力、思い知りましたこと？」

「あう」

「はう」

確か、この人のデッキは水属性を中心として回していくデッキ。アトランティスを軸にバンバン回していくタイプの・・・そんなデッキだった気がする

「ふふふ、デッキが弱いなら強いカードを買えばよろしいのに・・・」

「・・・」

嫌味つたらしく言ってくる幸子さん。二人はそのまま黙ってしまった。当然と言えば当然だし、幸子さんの言い分は分からなくもない、でも

「強いカードを買ったところで、その人が強いなんていうわけじゃないと思うよ」

「・・・なんですって？」

あ、怒った。二人のことを言葉で傷つけるなんて許さないんだから！年上だなんて関係ない、このまま言い返してあげる！

「それに、いくらカードが強くても、使う人の器が小さかったらデュエルなんてたかが知れてるよね」

「ムツキー！貴女、私に喧嘩売ってますの！？」

「べつにー？さっきのプレイングもいくつかミスがあったし、あんなミス同じ状況だったら同じ女帝

の雪乃さんだったら絶対しないよ。あんなミスをするのによく『女帝』なんて付けられるよねー」

僕と幸子さんがぶつかり合う。周りはざわざわしてるけど、知ったことじゃない！

「もういいですわ！貴女とはいずれ決着を付けたいと思っていましたの！デュエルですわ！」

「いいよ、僕が勝ったら二人に謝ってもらおうから！」

「・・・おい、お前ら何やってんだ」

今まさにデュエルしようとしたその時、デュエル場に聞いたことのある声が聞こえた。あれ？

「秋さん！？どうしてここに・・・」

「次、このデュエル場は2年が実習で使うんだ。もう休み時間だし、デュエルなら向こうのフリースペースでやれ」

「・・・明日の休日、この決闘場でデュエルですわ！私の実力、思い知らせてあげますわ！」

そう言つて幸子さんは取り巻きの生徒たちを連れてデュエル場を後にしていった。秋さんは僕の横でやれやれとため息をついていた。  
むー・・・

「秋さん！どうして邪魔を・・・」「この馬鹿」「あつっ!？」

秋さんにいきなり頭を叩かれた。あつう、なんで？

「あのままデュエルしていたら、お前の負けだったんだぞ」

「へ？」

僕の、負け？

「雪乃から聞いた話だと、アイツは確かにプレイングこそ雑ではあるが、相手のデッキをとことん追求し、それに対する対抗策を必ず練ってくる。水属性のカードを確かに中心的に回すが、それに加えて相手のデッキにメタを貼る奴だ」

「じゃあ、僕があのままデュエルしてたら・・・」

「ま、メタカード貼られてなーんも出来ずに終わりだな」

「じゃあ、秋さんはそれで乱入してきてくれたの？それはそれで、確かに嬉しいけど・・・」

「2年がこの後実習で使うのは事実だ。今日はもう1年授業終わるだろ？先に帰ってデッキ考えてる」

「はい」

こうして僕は二人と一緒に決闘場を後にし、部屋でデッキの構築を練ることにした。

\*

## 秋の部屋

「むー……」

僕は一人、デッキと睨めっこしていた。秋さんも同じく、一人で大量のケースからデッキをいじくっていた。

「ねえ、秋さん」

「手伝わないぞ」

「……意地悪」

この問答を、もう何回繰り返しただろう？手伝って欲しいというと、今回は『自分でまいた種だから自分の力で解決してみる』って、手伝ってくれない。カードは提供してくれても、組んでくれる気はないみたい。雪乃さんとツアンさんは二人して出かけたままだし……

「うーん、僕のデッキのメタカード・・・きつとこれなんだろうなあ」

僕の前にあるのは『所有者の刻印』『洗脳解除』の2枚。このカードでコントロールを取り戻されたら僕はダメージを受ける。

「やっぱりまったく別方向のデッキを今から作るべきかなあ・・・」

だめだ、慣れてないデッキなんか使ったら事故起こしてそれこそ何もできないに決まってる。だったらやっぱり、そのまま戦うしかない。なら、このデッキに何かしら改造の要素を・・・改造？

「そっか！」

幸子さんがメタカードを入れてくるなら、こっちも幸子さんのメタカードを・・・って、僕そんなカード持ってない！あうううう・・・僕が持ってきたのは街で買ったカードとかだし、購買のパックでそんなカードが都合よく手に入るわけないし・・・

「トホホ・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そして夜、僕は結局デッキを元の形で戦うことにした。やっぱり、そのまま戦って勝つしかないよね。うん、明日はこれで・・・ふみや・・・



Side秋

「・・・・・・・・・・はあ」

レイは机の上でデッキを握りしめ、眠りこけた。俺はレイを担いでベッドに寝かせ、デッキを見た。

「相変わらず、デッキ調節が下手糞だな・・・まったく」

今回自分で起こした問題だから自分で解決させるつもりだったが、まあ・・・カードを入れておいてやるくらいならいいだろう。俺が手出しするのはあの海野って奴との関係もそうだが、何よりこいつのためにならない。こいつは小学生と言う扱いではなく、一人のアカデミアの生徒として、そして何より一人の女としてこの学園で生きていくためにもこいつには一人で物事を解決させなきゃいけない。俺が卒業して1年はコイツ一人の力で乗り切ることになるからな

「さて、このカードとこのカードを抜いて、このカードをと・・・」

俺はカードを入れると、ベッドに戻った。レイが相変わらず、俺にひつつく。反対側にいるツアンも、ではあるが・・・

「レイ、頑張れよ」

「ふみゃ・・・・・・・・」

俺は優しく、レイの頭を撫でてやった。

S i d e l e i

決闘場

「よく逃げずに来ましたわね」

「そつちこそ、尻尾を巻いて逃げたかと思つたよ」

デュエル場には沢山の生徒がいた。まるでこの前の秋さんのデュエルの時見たいだ。証明しなきゃ、僕の実力を・・・そして、幸子さんに二人へ謝ってもらうんだ。そのためにも、僕は勝つ！

「行くよ！」

「来るといいですわ！」

「「デュエル  
決闘！」」

恋する乙女の日常（後書き）

次回、レイVS幸子激突・・・最近、レイの話しか描いてねえ（汗

## 決闘で得るもの（前書き）

レイVS幸子です

個人的にかなり短いですが、次回が長いだけにこの長さでいいかな？と

レイ「今日の最強カードは『スキルドレイン』だよ！」

永続罫

1000ライフポイントを払って発動する。

このカードがフィールド上に存在する限り、

フィールド上に表側表示で存在する効果モンスターの効果は無効化される

## 決闘で得るもの

Side 秋

「デュエル  
決闘!」

早乙女レイ LP 4000

海野幸子 LP 4000

二人のデュエルが始まった。さて、海野幸子……中等部では二代目の『女帝』と言われていたがその実力はいかなものか？正直、出会ったところの雪乃もさほど実力が高いというわけではなかった。雪乃自身、授業は不真面目だし、学校の校則はよく破るし……だが、ここ最近の雪乃の実力はOCGでも通じるほどだ。つまり、レイが負けるということはないのだが……まあ、見るとしよう

「先攻は私ですわ!ドロー!手札から『伝説の都アトランティス』を発動!このカードは海として扱い、水属性モンスターのレベルを一つ下げますわ!」

アトランティスを主軸にするデッキ……まあ、ジュンコとほぼ一緒だな。

「そして『ギガ・ガガギゴ』を召喚!」

ギガ・ガガギゴ ATK 2450 / DEF 1500 ATK 2650 / DEF 1500

「攻撃力2450がいきなり!?」

「このカードはレベル5・・・よってレベル4として扱えますの。カードを2枚セットしてターンエンド!」

さあ、この布陣にどう対抗する?レイ

「僕のターンドロ―!僕は手札からモンスターを裏側守備表示でセツト!カードを1枚セツトしてターンエンド!」

「私のターン!ドロ―!私は手札から『アトランティスの戦士』を攻撃表示で召喚!」

アトランティスの戦士 ATK1900/DEF1200 ATK  
2100/DEF1400

攻撃力が上昇しているのでこれはこれで・・・さあ、どうするレイ?

「バトルですわ!アトランティスの戦士でセツトモンスターを攻撃!」

「セツトしていたのは『マシユマロン』!このカードは戦闘では破壊されない!フィールド上に裏側表示で存在するこのカードを攻撃したモンスターのコントローラーは、ダメージ計算後に1000ポイントダメージを受ける!」

マシユマロンが海野幸子に噛みつく。これで1000のダメージ。OCGならたいしたことはないのだが、LP4000のこの世界ではダメージが大きい。まあ、状況によるがな

海野幸子 LP4000 LP3000

「きいいいいっ！鬱陶しいですわ！カードをさらに1枚伏せ、ターンエンド！」

やたらセットカードが多いな。コントロール奪取を警戒しているのか？もともとアトランティスの効果のせいでレベルを下げて召喚する『ギガ・ガガゴ』なんかのカードは『インターセプト』で奪えない。なら、他の警戒か？

「僕のターンドロ！僕は手札から『溶岩魔人ラヴァ・ゴーレム』を相手フィールドの2体のモンスターを生贄にして特殊召喚する！」

「な、なんですってえ！？」

溶岩魔人ラヴァ・ゴーレム ATK3000/DEF2500

「僕はこれでターンエンドだよ！ラヴァ・ゴーレムはスタンバイフェイズ、コントローラーに1000ポイントダメージを与えるから」

「きいいいい！よくも・・・なーんて、言うと思いませんか？私、これをお待っていましたのよ！」

「へ？」

「エンドフェイズ、罨発動！『スキルドレイン』！1000のライフを払い発動しますわ！このカードがフィールド上に存在する限り、フィールド上に表側表示で存在する効果モンスターの効果は無効化される！」

海野幸子 LP3000 LP2000

「私のターンンドロー！これでラヴァ・ゴーレムの効果は無効にはなり、ダメージは受けませんわ。そして貴女のフィールドのマシユマロンの効果も無効ですわ」

「しまった・・・！」

対レイ用のカードがこれか。洗脳解除、所有者の刻印他、コントロールを止めるにはモンスターの効果を防ぐという方法もある。この場合、アメーバの効果も無効。得意の強制転移なんてのもシールド・ウィングをサンドバックにする方法も取ることはできない。海野幸子のメタはこれだけじゃないだろう。だが、このスキルドレインは自らの動きも鈍くしてしまう。俺の予想だが・・・彼女の手はこれだけではないはずだ

「さらに、私は手札から『神獣王バルバロス』を妥協召喚！」

「ば、バルバロス！？」

「本来妥協召喚なら攻撃力は1900になってしまいますわ。しかし、スキルドレインの効果でそれは無効となる」

神獣王バルバロス ATK3000 / DEF1200

「さあ、行きますわ！ラヴァ・ゴーレムでマシユマロンを攻撃！そしてバルバロスでダイレクトアタックですわ！」

「つく！タダではやられないよ！畏発動『体力増強剤スーパージ』発動！攻撃力2000以上の攻撃を受ける時、プレイヤーのライフ



を4000回復！」

早乙女レイ   LP4000   LP8000   LP5000

「そしてさらに！罨発動『痛恨の訴え』！このカードは直接攻撃でダメージを受けた時、最も守備力の高いモンスターのコントロールを次の自分のターンまで得る！」

この場合、守備力が最も高いのはラヴァ・ゴーレムだな。

「つく・・・面倒ですわね」

所有者の刻印、洗脳解除を使おうと、本来のラヴァ・ゴーレムの持ち主はレイになる。つまり、ここでそれらのカードを使うことはない。

「ならば、ターンエンドですわ！」

「僕のターン、ドロー！僕は手札から魔法カード『死のマジックボックス』を発動するよ！僕のラヴァ・ゴーレムを再び幸子さんのフィールドへ送る代わりに、バルバロスを破壊する！」

ボックスに包まれ、コントロールが映るラヴァ・ゴーレムと、破壊されるバルバロス。

「さらに罨カード『強制脱出装置』を発動！僕はラヴァ・ゴーレムを選択！これにより、ラヴァ・ゴーレムは僕の手札に戻るよ！」

フィールドはがら空き、これじゃあ仕切り直しだな。

「そして、カードを1枚伏せてターンエンド！」

「つく、私のターンドロ！私は手札から『天よりの宝札』を発動しますわ！互いのプレイヤーー互いにカードを6枚になるようにドロ！しますわ！」

「ええ！？最強のドロカードを・・・」

「うふふふふ、私に集められないカードなどなくってよ！」

そういえば彼女、大富豪の娘ってことらしいな。大体のカードはかなりの量を持っているはずだ。少なくともレイよりも多くな

「私は手札から『ヒゲアンコウ』を召喚しますわ！」

ヒゲアンコウ ATK1500 / DEF1600 ATK1700  
/ DEF1800

「さらに『大嵐』を発動！フィールドの全てのカードを破壊しますわ！」

破壊されるのはレイの伏せていたインターセプトやくず鉄のかかし。だが、海野幸子はスキルドレイン程度だ。

「そしてそれにチェインして『マインド・クラッシュ』を発動しますわ・・・そう、貴方の手札の『溶岩魔人ラヴァ・ゴーレム』をお捨てなさい！」

「つく！」

ラヴァ・ゴーレムは相手のモンスター2体をリリースして特殊召喚するカードだ。つまり、あの子が次に召喚するモンスターが決まる。まあ、アトランティスの効果で、1体分で十分になるんだがな

「手札から再び『伝説の都アトランティス』を発動しますわ！そして『二重召喚』を発動！このターン私はもう一度召喚が出来ますの。ヒゲアンコウをリリース、来なさい、私の最強の僕！『超古深海王シーラカンス』！」

超古深海王シーラカンス ATK2800/DEF2200 AT  
K3000/DEF2400

「攻撃力3000・・・！また、同じ攻撃力を持つ・・・」

「これが私の本当の最強のモンスターですわ！そして効果発動！手札1枚をコストに、デッキからレベル4以下の魚族モンスターを可能な限り自分フィールド上に特殊召喚する事ができますわ！私が召喚するのは『アトランティスの戦士』を2体、そして光鱗のトビウオ2体ですわ！」

ヒゲアンコウ？ ATK1500/DEF1600 ATK1700  
0/DEF1800

ヒゲアンコウ？ ATK1500/DEF1600 ATK1700  
0/DEF1800

光鱗のトビウオ？ ATK1700/DEF1000 AT  
K1900/DEF1200

光鱗のトビウオ？ ATK1700/DEF1000 AT

K1900 / DEF1200

「このカード達は攻撃はできませんわ。さあ、バトル！シーラカンスで直接攻撃！」

「僕は手札から『バトルフェーダー』を手札から特殊召喚するよ！これによってバトルフェイズを終了する！」

バトルフェーダーが現れ、シーラカンスの攻撃を防ぐ。

「ごさかしい・・・ターンエンドですわ！」

「ぼ、僕のターンドロロー！僕は手札から『強欲な壺』を発動！カードを2枚ドロローする。ドロロー・・・!?」

レイが驚いている。あのカードを引いたのか？まあ、大丈夫だろう。アイツならカードの使い時を理解するはずだ。

「ぼ、僕はカードを2枚伏せる。そしてモンスターをセット！ターンエンドだよ！」

「私のターンですわ！ドロロー！私はアトランティスの戦士を生贄に捧げ、再び『超古深海王シーラカンス』を召喚しますわ！」

超古深海王シーラカンス？ ATK2800 / DEF2200 A

TK3000 / DEF2400

アトランティスの効果で1体のリリースか、まあこれならいいかもしれないな。

「さあ、再びバトルですわ！シーラカンス！そのセットモンスターを攻撃なさい！」

「セットしていたのは『シールド・ウイング』！戦闘では2回まで破壊されない！」

「ならば、バトルフェーダーを攻撃！」

ゲームから除外されるバトルフェーダー・・・これで、レイのフィールドに残るのはシールド・ウイングだけとなった。

「さあ、そのモンスターで何が出来ますの？これでターンエンド！」

「・・・つく」

早乙女レイ LP5000 LP4000

「僕のターン、ドロー！え！？・・・そっか、秋さん、ありがとう」

「・・・？」

引いたか、あのカードを

「僕は手札から『永遠の湯水』を発動！相手の魚族モンスターは全滅する！」

「な、な・・・そんな、私のモンスターたちが・・・」

アトランティスが干上がり、シーラカンス達が破壊される。これで海野幸子のフィールドにモンスターはいない。そして、レイはまだ

召喚権を残している。

「僕はフィールドのシールド・ウィングをリリースするよ！そして来い！『風帝ライザー』！」

風帝ライザー ATK2400 / DEF1000

「風帝ライザーの効果で戻すカードは相手フィールドにないけど、僕の伏せたカードを戻すよ！そして攻撃力は十分だ！行け、風帝ライザー！ダイレクトアタック！」

「きゃああああああああああっ！」

海野幸子 LP2000 LP0

ダイレクトアタックが決まり、歓声が響き渡る。

「ま、今回はよく頑張ったな・・・レイ」

俺は歓声の中、静かにそう呟いた。

S i d e レイ

僕は勝った。幸子さんに。ゆっくりと幸子さんの方へと近づいた。

「僕の勝ちだね、幸子さん」

「……………そう、ですわね。私の負けですわ」

「なら、ちゃんど彰子さんとゆまさんに昨日のことは謝ってね」

「敗者は勝者に従う・・・そういたしますわ」

そう言う幸子さん。なーんか引つ掛かるなあ

「ねえ幸子さん、聞いてもいい？」

「なんですの？」

「幸子さん、昨日のアレ・・・嫌味で二人にあんなこと言ったの？」

「あんなこと、とは？」

あ、やっぱりわかってないんだ。

「『デッキが弱いなら強いカードを買い』っていう、あの言葉だよ」

「・・・アレは、別に嫌味で言ったわけではありませんわ。ただ、思ったことを述べただけですの・・・やっぱり、嫌味に聞こえてましたのね」

「へ？」

「私、お金持ちの家に生まれてたから、ついつい、そういうふうに言ってしまうんです。昔、雪乃お姉さまにも言われたことがありますの・・・『貴女の言葉に悪意はなくても、他人からすれば悪意にしか聞こえない』と」

少しだけ落ち込む幸子さん。そっか、あの時のことは別に嫌味だっ

たわけじゃないんだ。

「じゃあさ、これから少しずつ変わって行くつよ」

「変わる？私が？」

「うん、別にすぐにつてわけじゃないよ？幸子さんがそう言う言動をすぐに出すのはただ単に、僕たちみたいな普通の生徒との関わる経験が少ないからでしょ？言ってみれば、僕たちみたいなお金持っていない人と」

言い方が微妙だけど、まあいっか。

「だからさ、僕と友達になろうよ、幸子さん」

「・・・ありがとう、レイさん」

こうして、僕にはもう一人友達が増えた。学園生活、頑張ろうつと！

Side秋

「ふふっ・・・」

「あら、どうしたの秋？」

「いや、レイがすっかり友達を作ってたから安心してさ」

俺は言いながらデュエルスペースを後にする。メールでレイから海野幸子たちと昼食を取るって来たから、俺と雪乃、そしてツァンと



一緒に飯を食べに行くことにする。

「まるで妹の面倒見てる兄ね、秋ったら・・・僕は兄弟いないからわかんないけど」

「まあ、実際に凜がいるからな。それもあるけど」

「そうね・・・さ、ご飯を食べに行きましょう？今日のご飯は何かしら」

そう言いながら、俺達は食堂へと向かって行った。

その後ろにある影に、気が付くことなく

決闘で得るもの(後書き)

次回から長編起動開始!

アニメとは違う亮VSエドをお楽しみください!

## 動きだす者達（前書き）

ようやく、光の結社編です。

エドとのデュエル・・・はあ、これもカイザーと同じく回したことがないから苦労しました

だれか、Dの回し方を教えて欲しいです

秋「今日の最強カードは『奇策』未OCGのゼアルで登場したカードだ」

通常罠

相手モンスターの直接攻撃宣言時、手札からモンスター1体を墓地へ送って発動する。

この戦闘によって発生する戦闘ダメージは、墓地へ送ったモンスターの攻撃力分ダウンする。

あと、相変わらずお願いしていますが、『指摘だけ』を感想欄に記入するのをご遠慮願います。

それは感想ではないので、出来れば小説の感想が欲しいです。

なんというか、感謝はしているのですが『また指摘だけか・・・』

と、私自身感想に対して嬉しさを感じなくてついて（汗

あと、同じ様なご指摘はご遠慮願います。

またか、という感じになってしまっているので。ホントお願いします（泣

## 動きだす者達

Side秋

最近はずかしく過ごしている。平和といえば平和である。翔がラーイエローになったり、ティラノ剣山が十代の舎弟になったりだ。そして、カイザーがエドに負けたりとある。だが、今目の前にある、この世界での物語の要を俺は見ている。

「うああああああっ！」

十代 LPO

そう、エド・フェニックスに十代が負けた、ということである。

「十代が負けた!？」

「……………」

D・HERO……か

「十代！」

十代は目を虚ろにして、その場に崩れ落ちた。

「他愛もない……さあ、次は君だ。武藤秋！」

俺？何故俺がこいつと戦うことになるんだろうか

「何故俺なんだ？」

「・・・とある人から頼まれていてね、君を完膚なきまでに叩き潰しておく必要があるんだ」

「良いだろう、十代の仇をとらせてもらう。明日香、十代を連れて医務室へ」

「え、ええ・・・」

十代は明日香に担がれ、医務室へと運ばれて行った。

「おい」

「なんだい？」

「あそこまでする必要があったか？D・HEROの力をもってすれば、あんな酷い戦いをしなくても済んだはずだ」

俺の言葉に、エド・フェニックスはそれを鼻で笑っていた。

「そんなの知ったことじゃない。僕は運命が成すがままに、彼を倒した。それだけさ」

「良いだろう、なら・・・俺もお前を完膚無きまでに叩き潰す！」

「<sup>デュエル</sup>決闘！」

S i d e 雪乃

私達は、今日信じられない物を見た。それは十代の坊やの敗北。それも圧倒的に押されて負けた。あのエアーマンやアブソルートZeroなどの強力なモンスターを今回使わなかったというのもあるけれど、それでもあの十代の坊やが負けるなんて普通考えない。いいえ、考えられない。明日香はそのまま十代の坊やを担いで医務室に向かったし、大丈夫でしょう。そしてそんな強敵に、秋が今挑もうとしている。

「<sup>デュエル</sup>決闘！」

武藤秋 LP4000

エド・フェニックス LP4000

「先攻は僕がもらうよ！僕のターンドロ！僕は手札から『融合』を発動！手札のフェザーマンと、バースト・レディを融合！現れる、『E・HEROフェニックスガイ』！」

E・HEROフェニックスガイ ATK2100/DEF1200

フェニックスガイ！さっきのデュエルでも出てきたE・HERO・・・あのカードは戦闘では破壊されない。厄介だわ。1ターン目で融合を含め素材を揃えるだなんて・・・

「そして僕はカードを2枚伏せて、ターンエンドだ！」

「俺のターン、ドロ！手札から魔法カード『地砕き』を発動。相手フィールドにいるもつとも守備力の高いモンスターを破壊だ。消

えな」

「ぐっ……」

破壊されるフェニックスガイ。確かに戦闘では破壊されなくても、効果による破壊ならば、破壊できる

「なら僕は罠を発動『D・タイム』！自分のフィールドの『E・HERO』がフィールドを離れた時、そのレベルと同じ『D・HERO』を手札に加える！僕は『D・HEROダッシュガイ』を選択！」  
ダッシュガイ！また新たなD・HEROということね。秋は一体どんな戦法で行くのかしら

「俺は手札から『霊滅術師カイクウ』を通常召喚！」

霊滅術師カイクウ ATK1800/DEF700

「そして装備魔法『バウンド・ワンド』を発動！このカードは装備したモンスターのレベル×100ポイント、攻撃力をアップさせる」

霊滅術師カイクウ ATK1800/DEF700 ATK220  
0/DEF700

「バトル！霊滅術師カイクウでダイレクトアタック！」

「罠カード『攻撃の無力化』攻撃を無効にする！」

「カードを2枚伏せ、ターンエンド」

「ふっ……どうした？お得意のエクシーズ召喚はしないのかい？」

「お前程度の相手なら、必要がない」

お前程度って……相手は一応、仮にもプロよ？そんな相手に対してその言い方は……

「お前……僕を馬鹿にしているのか？」

「運命だなんだなんて言っている奴に、負ける気はしないな……運命なんてものは、自分の力で勝ち取るものだ。それがデュエルモンスターズだ！それがわからないお前に、俺は負ける気はない！」

今の秋はきつと、十代が負けたことと、エド・フェニックスの言動に怒りを覚えているのでしょね。そして、秋の世界にもD・HEROはあったと言っていた。つまり、アレは恐らく、D・HEROを封じるカードがいくつもあるはず

「その言葉、すぐに後悔させてやろう。僕の運命の力は絶対だ！僕のターンドロ―！僕は手札からフィールド魔法『幽獄の時計塔』を発動！」

出たわ！さつき十代を苦しめた幽獄の時計塔！このカードがフィールドにあるのはまずい！

「そして僕は手札から『命削りの宝札』を発動！カードを5枚ドロ―する！」

エド・フェニックスも十代と同様のドロ―運を持ち合わせている男。そんな男が命削りの宝札なんかでドロ―したら……



「僕はさらに『D・HEROディスクガイ』を召喚して『二重召喚』を発動！ディスクガイを生贄に捧げ、現れよ！『D・HEROダッシュガイ』！」

D・HEROダッシュガイ ATK2100/DEF1000

ディスクガイにダッシュガイ・・・D・HEROってどれだけいるのかしら？

「手札から装備魔法『早すぎた埋葬』を発動！ライフ800をコストに、蘇れ『D・HEROディスク』！」

D・HEROディスクガイ ATK300/DEF300

エド・フェニックス LP400 LP3200

先ほど生贄で墓地に送ったカードを特殊召喚？ライフを払ってまで一体何を・・・

「ディスクガイを特殊召喚した時、カードを2枚ドロー！そしてダッシュガイの効果発動！D・HEROを生贄に捧げることで、このターンのエンドフェイズまで攻撃力を1000ポイントアップさせる！」

D・HEROダッシュガイ ATK2100/DEF1000 A

TK3100/DEF1000

ディスクガイ、なんて恐ろしい効果なの！？そして流石はプロデュエリストね。多少のコストはあっても、それに見合った見返りをモ

ンスター効果で得ている。ダツシュガイの攻撃力は3100になり、カイクウの攻撃力を上回っている。

「行け！ダツシュガイ！霊滅術師カイクウを攻撃しろ！『ライトニング・ストライク』！」

「つく・・・！」

武藤秋 LP4000 LP3100

「ダツシュガイは攻撃してから守備表示となるが・・・罨カード『最終突撃命令』を発動し、再び攻撃表示に変更！」

ライフが再び互角に！でもきつと、そのままやられる秋じゃない！

「俺はバウンド・ワンドの効果発動！このカードを装備したモンスターが戦闘で破壊された時、そのカードを特殊召喚できる！戻って来い、『霊滅術師カイクウ』！」

霊滅術師カイクウ ATK1800/DEF700

「カードを1枚伏せ、ターンエンドだ！」

「俺のターンドロー！この瞬間、幽獄の時計塔の効果によりカウンターが1つ乗る」だったらどうした。俺は手札から『魔導戦士ブレイカー』を召喚！」

魔導戦士ブレイカー ATK1600/DEF1000

幽獄の時計塔 カウンター0 1

「そして召喚に成功した時、カウンターが乗る。これにより、魔導戦士ブレイカーの攻撃力は300ポイントアップ!」

魔力カウンター 0 1

魔導戦士ブレイカー ATK1600 / DEF1000 ATK1  
900 / DEF1000

「そしてブレイカーの効果で、魔力カウンターを取り除いて幽獄の時計塔を破壊する! 『マナブレイク』!」

魔導戦士ブレイカー ATK1900 / DEF1000 ATK1  
600 / DEF1000

「つく!」

破壊される幽獄の時計塔。これで当面の危機は去ったと考えるべきかしら? またあんな展開されて『D・HEROドレットガイ』を召喚されたらたまったものではないわ

「だが、君のフィールドにダッシュユガイを超えるモンスターはいない」

「そいつはどうか? バトル! 『霊滅術師カイクウ』でダッシュユガイを攻撃!」

どうして!? 攻撃力はダッシュユガイの方が上よ!?

「血迷ったか! 反撃しろ! ダッシュユガイ! 『ライトニング・ストラ

イク』！」

「この瞬間！速攻魔法『突進』を発動！攻撃するモンスターの攻撃力を700ポイント上げる！いけ！カイクウ！」

霊滅術師カイクウ    ATK1800 / DEF700    ATK250  
0 / DEF700

「甘いな！罨発動！『D・チェーン』！このカードは攻撃力500ポイントアップの装備カードとなり、自分フィールド上の「D H ERO」と名のついたモンスターに装備する！」

「甘いのはお前だ！カウンター罨発動『盗賊の七つ道具』！1000のライフをコストに、罨の発動を無効にし、破壊する！」

「なんだと！？ぐあああつ！」

エド・フェニックス    LP3200    LP2800

武藤秋    LP3100    LP2100

「そしてカイクウの効果でディスクガイとデIFエンドガイを除外！そして魔導戦士ブレイカーでダイレクトアタックだ！行け！」

「ぐあああああつ！」

エド・フェニックス    LP2800    LP1600

「俺はこれでターンエンド！」

押している。あのエド・フェニックスを・・・考えて見れば、確かにエド・フェニックスはプロリーグでカイザーを倒し、そしてここで十代を倒した。その実力は確かに強いかもしれない。でも、秋も同じだった。カイザーを倒し、十代を倒している。そして私の知る限り、確かあの轟元暁という男もプロだった。もしかしたら、秋はプロリーグでも十分に力を発揮することが出来るのではないかしら？

「つく・・・この僕が、負けるはずがない。運命に導かれた僕が・・・僕のターンドロワー！ふっ、やはり運命は僕の味方だ！僕は手札から『天よりの宝札』を発動し、カードを6枚になるように！」

そ、そんな！エド・フェニックスの手札は0枚。6枚ドロワーだなんて・・・

「魔法カード『D・スピリッツ』を発動！このカードは自分のフィールドにD・HEROがいない時、レベル4以下の『D・HERO』を特殊召喚する！来い！『D・HEROディフェンドガイ』！」

D・HEROディフェンドガイ ATK1000/DEF2700

守備力2700ですって？ビツク・シールド・ガードナーより守備力が上がらない。どうということなの！？

「そして僕はディフェンドガイを生贄に捧げ・・・現れよ！『D・HEROダブルガイ』！」

D・HEROダブルガイ ATK1000/DEF1000

攻撃力1000？生贄を使った上級モンスターにしては、随分とお粗末ね。

「そしてフィールド魔法『ダーク・シティ』を発動！」

幽獄の時計塔じゃない！？ダーク・シティ・・・暗闇の街・・・十代の坊やが使うスカイスクレイパーとは真逆に、暗い街ね・・・

「このカードがある時、ダメージステップにD・HEROの攻撃力は1000ポイントアップする！」

なんですって！？スカイスクレイパーと同じ・・・

「そしてダブルガイは1度のバトルフェイズで2度の攻撃が出来る！行け！ダブルガイ！カイクウを破壊しろ！」

ダブルガイがカイクウに覆いかかり、カイクウを倒す。

D・HEROダブルガイ ATK1000/DEF1000 AT  
K2000/DEF1000

武藤秋 LP2100 LP1900

「そして、ブレイカーへ追撃！行けッ！」

「ぐあああっ！」

武藤秋 LP1900 LP1500

「秋！」

ライフが逆転され、秋のフィールドには何もなくなっていました。

かろうじて、さっきの天よりの宝札の効果で手札が6枚あるとはいえ・・・あの男、エド・フェニックスはまだ何か秘策を持っているに違いない

「僕はカードを1枚伏せ、ターンエンドだ」

「俺のターンドロ―！」

秋の手札は7枚・・・秋のデッキはビートダウンデッキのようね。本気で、エクシ―ズもシンクロもしないで戦うつもり？

「・・・俺は手札から異次元の女戦士を召喚！」

異次元の女戦士 ATK1500/DEF1600

「バトル！異次元の女戦士でダブルガイを攻撃！」

攻撃力は500上！これならダブルガイはたやすく破壊できる。

「この瞬間、手札から『D・HEROダガーガイ』の効果発動！相手が攻撃してきたとき、このカードを手札から捨てることでこのターンのエンドフェイズまでD・HEROの攻撃力は800ポイントアップする！」

「何っ!?!」

D・HEROダブルガイ ATK1000/DEF1000 AT  
K1800/DEF1000

「さあ、反射ダメージを受けろ！」

「つち！」

武藤秋 LP1500 LP1200

まさか、D・HEROにあんなモンスターもいるなんて。秋のライフが1000を切ってしまった。

「だが、異次元の女戦士の効果により、このカードとダブルガイをゲームから除外する！」

フィールドは何もない、まっさらな状態となった。

「俺はカードを2枚伏せて、ターンエンド！」

「僕のターンドロ―！手札から『E・HEROスパークマン』を召喚！」

E・HEROスパークマン ATK1600/DEF1200

「君の友のカードにやられるとは皮肉だね・・・行け！スパークマン！『スパーク・フラッシュ』！」

スパークマンが秋へと向かって行く。そんな・・・まるで十代が秋を倒すかのような光景に見える。

「つく・・・畜生、畜生・・・」

そ、そんな・・・あの伏せカードはブラフ!?秋に限ってそんな・・・でも、あの表情、本当に何もないという表情・・・そんな・・・



秋の、負け？秋でさえ、あのエド・フェニックスには勝てないというの？

「さあ、喰らえ！」

「ちくしよ  
な」  
！……………なーんて

「!?!」

……………え？

「俺はまだ何もかもを諦めたわけじゃない！罨カードオープン！『奇策』！このカードは自分の手札からモンスターカードを1枚墓地へ送ることで発動する！この戦闘によって発生する戦闘ダメージは、墓地へ送ったモンスターの攻撃力分ダウンする！俺は墓地から『魔導戦士ブレイカー』を墓地に送る！ブレイカーの攻撃力は1600！よってスパークマンの攻撃力は実質通らない」

「そんな、これじゃあダメージが0に！」

こんな罨カードを伏せていたのね。最後の最後、驚かされるわ。そして、秋……貴方の演技、私と一緒に芸能界でやっていけるわ。

「つく……これで僕のターンは終了だ！」

「俺のターン、ドロー！」

相手フィールドにはスパークマン。秋、お願い勝って……

「俺は『霊滅術師カイクウ』を召喚！そして、速攻魔法『エネミーコントロール』を発動し、カイクウを生贄にこのターン、スパークマンのコントロールを得る！」

「な、なに！？」

「友のカードにやられる？違うな、俺が友のカードでお前を倒すんだよ・・・行け！スパークマン！『スパーク・フラッシュ』！」

スパークマンがエド・フェニックスに攻撃をぶつける。まるで、その秋の怒りが具現化したかのように

「ぐ、ぐああああああああああつ！」

エド・フェニックス LP1600 LPO

勝った・・・あの、エド・フェニックスに、秋が

「勝ったあ！やった！秋！」

私とツアンが秋に抱きつく。

「そんな、ありえない・・・僕が・・・運命に導かれるはずの僕が・・・」

「行こう、十代が心配だ」

「え、ええ・・・」

秋はエド・フェニックスを無視し、そのまま私達を連れて会場を後にしていった。ふふっ、流石は私のいい人・・・ね

S i d e ????

エドから遊城十代に勝利し、武藤秋に敗北したと報告を受けた。私の運命さえ覆す、あの男・・・その男はタロット占いで『星』の正位置が示されていた。星の正位置・・・それは『希望』、『ひらめき』、『願いが叶う』・・・これは、まずい。恐らく遊城十代以上に私の計画に支障をきたしてしまうだろう

「ならば、利用するものはとことん利用するまで」

私はもうすぐ学園に転入する予定だ。そして学園を『白』に染める・・・上手くいけば、この武藤秋も我が手駒として使うことが出来るかもしれない

「そのためにまずは・・・」

私は2人の生徒の写真を見る

「利用できるものは、とことん利用しなくてはな・・・ククク」

そこに映るのは、紫色の髪の女子生徒と、ピンク色の髪の女子生徒だった。

**動きだす者達（後書き）**

というわけで、今回秋のデッキはビートダウンでした。

原作ではそう言うデッキ見ないから面白いかなと思ったけど、書いてる私が面白くなかった（汗

とりあえず、次回また新キャラが登場します

お楽しみに！

## 運命の輪（前書き）

通算80話になりました

そして何と……ありえないことに、200万ヒットを達成しました！

わーい！

というわけで今回は斎王が登場します

で、先に言っておきます。今回TF6のネタばれを明記します。多分なので、TFをプレイしてから見ることをお勧めします

このような形になって申し訳ありません  
そして、最後に……これからもこの小説をよろしくお願いします  
では

秋「今日の最強カードは……『Z・ONE』だ」

セツトされたこのカードが破壊され墓地へ送られた時、  
自分の墓地に存在する永続魔法またはフィールド魔法カード1枚を  
選択して手札に加える

今日は殆ど謎パートです

そしてごめんなさい……斎王のデュエルは書かないことにしました。  
た。スイマセン（汗）

## 運命の輪

Side 秋

エド・フェニックスとのデュエルから数日してから、いきなり明日香が部屋に押し掛けてきた。現在時刻は夕方である。あとちよつとで夜になるくらいかな。

「突然ごめんなさい、ちよつと・・・色々あつて」

聞けば、原作通り明日香をアイドル育成コースに教頭たちが入れようと企てているらしい。ま、それは明日香に限った問題じゃない。限った問題じゃないが・・・

「お前らまでここに来る必要があるのか？」

部屋には雪乃、ツアン、レイに加えて何故か宮田と宇佐美、そして海野がいた。

「す、すす・・・すいません・・・」

「なんか私達もアイドル育成コースに入れられそうで・・・」

「レイさんに相談して、ここに逃げてきた次第ですわ」

おいおいおい・・・教頭、アンタそついう趣味だったのかよ。

「レイ・・・？」

「う、ごめん秋さん・・・やっぱり、友達を見過ごせなくて・・・  
その・・・」

はあ・・・まあ、友達を守りたいっていいのがあるからいいとして、  
あの臨時校長め・・・ただでさえ今面倒事が起きてるのに

「てか、明日香・・・お前吹雪さんの所行けばよかつたんじゃない  
の？」

「・・・それが、兄も私をアイドル養成コースに入れようとしてる  
の。十代はあんな状態だし、あと頼れるのは貴方だけなのよ」

万丈目と三沢いるだろうが・・・まあ、三沢はマリアさんといい感  
じだし、万丈目は・・・うん、駄目だ。アイツも吹雪サイドだな。

「ともかくにも、この部屋に8人も寝れねーよ・・・」

「そうね・・・」

「あらそう？私達2は秋と寝ているから、ベッド1段に私達3人で  
一つ、2段目、3段目に2人ずつ寝て、布団で1人寝れば・・・ま  
だ何とかかなると思うわ」

雪乃、お前は俺をストレスで殺す気か？こんなに女子に囲まれたら  
色々とまずい気がするし。

「あのな・・・男子1人に女子7人で寝られるかよ・・・だったら  
俺はブルーの寮で寝る」

「だ、め、よ？ 私達と一緒に寝るのは日課でしょ？」

「そうよ！ 僕たちと寝ないとだめなんだからね！」

もついやだ・・・まあ、とりあえずこの子達がアイドル養成コースに入れられなければいいんだから・・・

「明日香、明日だが・・・吹雪さんとデュエルしろ」

「え？ なんで？」

「とりあえず吹雪さんは教頭達に言いくるめられているんだろう・・・なら、その吹雪さんを叩けば何とかなる。時間くらいは稼げるだろ」

「なるほど・・・でも、私のデッキで兄さんに勝てるかしら」

あー・・・そう言えばこの前色々渡しちゃったんだよなあ・・・吹雪さんに。しょうがない

「明日香、デッキ貸せ・・・とりあえず、詰めるだけ詰める。シンクロとエクシーズがごっちゃにはなるが・・・」

「ええ、わかったわ・・・」

「その間に・・・つと」

俺は紙の束を渡した。

「これ、何？」



「シンクロ、エクシーズに関するモンスター問題だ。解いて見る」

「ど、どういう風に？」

「例えば・・・以下のモンスターでシンクロ召喚を行えという問題。一番上ならグローアップバルブ、ダーク・リゾネーター、二トロ・シンクロンがチューナーだ。で、非チューナーがチューニング・サポーター、ボルト・ヘッジホッグ、クリッターで構成されている。そしてシンクロモンスターはスターダスト・ドラゴン、氷結界の龍トリシューラ、A・O・Jカタストルだ。この中から当てはまるものを作る・・・要するに足し算だな」

「なるほど・・・いざという時、レベルを合わせられないと困るものね。」

「そういうことだ、一年のお前らもデュエルの問題集を作っているからやってみ」

そう言つて束を渡す。実はこの問題とかは全て雪乃とツアン、そしてレイの特訓用に作った問題だ。雪乃とツアンに関しては既に終えている。

「今それぞれに渡したのは自分が今作っているデッキの属性の問題のはずだ。やれるだけやってみろ」

こうして勉強会を急遽スタート。俺はその間にカードを漁る。とはいっても、基本スタンスがこれだもんなあ・・・明日香は。サイバー・ブレイダーデッキを崩さないで、シンクロを入れるとなると・・・これと、これだろ？一族の結束を使う意味でも戦士族シンクロか

？そうなるよXセイバーか・・・戦士族軸になるとなあ・・・

「なあ明日香？」

「これがこうで・・・あ、何？」

「サイバー・ブレイダーがデッキからでないとかっばだめ？」

と、俺が聞くと、少し悩んでいるらしい。今までサイバーガールデッキで戦ってた明日香としては、悩む所があるのだろう。

「・・・ううん、今回は勝ちに行かないといけないわ。貴方がそれ以上の技術を持っているなら、そのデッキを使いこなして見せる。要望としては戦士族と言ったところかしらね」

「了解」

俺が言うと、明日香は再び問題に取り組み出す。よっぽどアイドル育成コースに行くのが嫌ということらしい。それ以外にも、勝利したいというのもあるんだろうけどな

「あつううう駄目ですわかんないです・・・」

「どうした、宮田」

「先輩・・・ここ分らないです・・・」

わかんないって・・・どれどれ？

「ああ、ここはこのカードをこうして、この効果でこうする。する

とここでこれだけのライフを削り取れるだろ？」

「なるほど〜・・・！すごいですっ！武藤先輩天才ですう〜！」

と、宮田が喜ぶ。いやいやいや・・・

「あいな、宮田。この問題作ったのは俺だからな？製作者が出来ないと困るからな？」

「あの〜・・・先輩」

「どうした宇佐美」

「これは・・・」

と、俺に問題を見せてくる。これは確か・・・

「ここをこうして、この効果で半永久ループを回す。そうすればここはこういう形で・・・」

そろそろ疲れて来た。全然デッキ作れないじゃん。うーん・・・と  
りあえずこのカードは抜いて、このカードはここだろ？で・・・

「あの・・・武藤先輩」

「今度は海野か・・・どうした？」

「じじは・・・」

「それは、このカードの効果でこれを墓地に送る。で、このカード

の墓地効果でコイツを引っ張ってくる」

「参考になりますわ。ありがとうございます」

はぁ・・・疲れる。この問題の解き方を教えながらデッキの制作。雪乃とツアンも、万が一アイドル育成コースに入るようにしないために自分でデッキを組み直している。

「はぁ・・・」

「秋、大丈夫？」

「ん？ああ・・・」

ツアンがデッキを持って俺のところに来る。そう言えば、六武衆っていじる要素もうない気もするんだけど・・・

「デッキ見てもらっていい？」

「ん・・・ちヨイ待つて。どれどれ・・・」

デッキの基本軸は崩してないし、これはこれでいいかな。うん・・・

「問題はない、かな・・・これだと俺も勝てる気がしない」

「ほんと？ならよかったわ」

「ねえ秋？次は私のをいいかしら？」

今度は雪乃か・・・

「はいはい・・・えーと・・・？」

リチュアも似たようなもんだけど・・・なるほど、エクシーズ要素が少し増えたな。うん、なるほど・・・このカードで、こうすれば・

「すごいな、いいと思う」

「ホントに？ありがとうございます・・・じゃあ少し休憩しましょ。私達がちよっとお菓子と飲み物でも買ってくるわ」

「そんなお姉さま！私めが・・・」

「幸子、貴女は問題をやりなさいな・・・大丈夫よ」

そう言ってツアンと雪乃が出ていく。デッキの基礎はこうだな。これでもいいや。これならレダメのデッキにも対応が出来る。と思うな

「さて・・・お前らも休憩しろよ。大丈夫か？」

見れば、頭からショートして煙が出ている1年生組。

「ら、らいひよぶです〜」

「はい〜」

「大丈夫ですわ〜」

「うう、久しぶりにやったけど難しくなってる・・・」

宮田、宇佐美、海野、そしてレイが答える。少ししたら雪乃達も戻ってくるだろうし……

S i d e 雪乃

「お菓子、これでよかったのかしら？」

「ま、食べられないなら僕たちが食べればいいでしょ」

私は今、ツアンと一緒に後輩たちにお菓子を買い、寮へと戻っていた。まったく、臨時校長と教頭の考えることは分からないわね。私は高校を卒業した時の進路は決まっているし、幸子だって社交界デビューを控えているのよ？もうちょっと考えて運営して欲しいわ。そのうち学園が崩壊しそうで怖いわ

「どうしたの？雪乃」

「いいえ、なんでもないわ……」

それにしても何かしら？さっきから人の視線が……？そんなことを考えていると、私達の目の前に男が現れた。

「初めまして……君たちが藤原雪乃と、ツアン・ディレだね？」

「……貴方、誰かしら？」

見たことない生徒ね……先輩でもなさそうだし……そもそも、制服が白い……？

「君たちの運命を占おう・・・決闘を申し込む」<sup>デュエル</sup>

決闘を・・・？いきなり言ってることが全開で意味分らないわ。

「悪いけど僕たち急いでるの。今度にしてくれない？」

「敗北が怖いかい？私には見える・・・君たちの運命がね。君たちは私に負け、私の僕となる」

「私達が貴方の僕？悪い冗談ね・・・貴方程度の男で私達は満足しないわ」

私が言うと、男は不気味に笑っていた。

「既に私の手中になった男が一人・・・君たちは私に勝つことではできない」

「いちいちうるさいわね！僕たち急いでるんだってば！」

すると、草むらから男が出てきた。白い服を着ているけど・・・貴方は・・・

「万丈目の坊や！？」

「タッグデュエルだ・・・さあ、ディスクを構えろといひ」

万丈目の坊やが私達の前にデュエルディスクを投げる。この雰囲気・・・逃げる雰囲気じゃないわ。人の気配を無数に感じる。万丈目の坊やのことも気になるし・・・ここは受けるしかなさそうね

「いいわ、受けてあげる。いいわねツァン」

「仕方ないわね・・・僕もあそこまで言われたらやるしかないわ。いいわ！やってあげる！」

デュエルディスクを展開する。さあ、行くわよ！

「デュエル決闘！！」「」「」

Side秋

アイツらが出て30分・・・おかしい、遅いな。そんなに距離はないし、この時間じゃもう売店もやってないし・・・ちよつと心配だな  
「お前らちよつと休憩していいぞ・・・ちよつと様子見てくる」

そう言つて俺は寮を後にし、外に出た。

デュエルアカデミア 学園内

売店にはもういなかった・・・というか、もうやってすらない。となると、やっぱりどこかに寄り道しているのか？PDAにも反応はない。おかしいな・・・

「・・・ん？」



廊下を歩いていると、オベリスクブルーの女子生徒が廊下の植木鉢がある隅っこに蹲っていた。

「おい、大丈夫か？」

「……………」

そこにいたのは、灰色の髪にツインテールの少女だった。髪は雪乃より短めではあるが、綺麗なツインテールの髪の形をしている。1年生……か？多分

「どこか調子が悪いのか？」

「……………」

首を振る少女。じゃあどうして蹲ってたんだ？

「じゃ……………」

「猫？」

「……………船に」

「え？」

「船に紛れ込んだの」

船……定期便のことか？なるほど、本土の港か何かにいたのが紛れ込んでいたのか……

「連れて歩いてたけど・・・寮、猫は飼っちゃだめだから」

まあそもそも、寮の中にペットを持ち込んでいる生徒がないからな。まず

「そ、そうか・・・蹲っていたから調子が悪いと思ったんだが・・・大丈夫ならよかった」

「貴方は・・・・・・・・」

「ん？ああ、2年の武藤秋だ」

「・・・レイン恵」

レイン恵？随分珍しい名前だな。まあ、この学校ではあんまり珍しくもない・・・か？すると、俺の服をレイン恵が掴んでいた

「見つけた・・・」

「え？」

「武藤秋・・・私が探すべき、これからの未来を担う男」

この子、一体なにを・・・

「・・・・・・・・」 『初めまして』 「

「!？」

いきなり、レイン恵から別の声が聞こえる。男の声だ。

「『こんな形で会うことを許して欲しい・・・城戸秋』」

「誰だ!？」

突然の事態に驚く。明らかにレイン恵が喋ってはいない。レイン恵を通して誰かが会話している。千年アイテムの類か？俺のを知っている・・・いつたい？

「『私は・・・いや、俺は未来の君自身だ。今は彼女を通し、君に会話を促している』」

会話を・・・いや、それよりも

「未来の、俺・・・だと？」

「『そうだ・・・今から20年後の未来の城戸秋だ。正確には、世界の意思に負け・・・20年間無様に生きのびてしまった』」

世界の意思？

「世界の意思？それに、20年生きのびたって・・・」

「『今から20年後、ゼロリバーズが起きる前に世界が崩壊する・・・そんな未来。それも全て、俺が世界の意思に負けたせいだ』」

「だから、その世界の意思ってなんだよ・・・」

「『俺達は『武藤秋』という身体に宿る別世界の魂・・・言うなればイレギュラーだ。そしてそれはこの世界にとって毒となり、世界

はそれを排除しようとする。私は十代と共に斎王との戦いに挑み、そして突如現れた世界の意思に負けた。全ては私のせいで、世界が滅びた』」

世界が滅ぶ・・・だと！？そんな話・・・信じられるわけがない。  
この世界の歴史は・・・

「『この世界はアニメの世界ではない。言うなれば『平行世界』だ・・・限りなく近い、それでしかない。そしてこの世界は私という存在をリセットしようとしている。私は十代たちに守られ生きてきた。そして、この未来を変えるためにレイン恵を送った・・・きっと君の力になるだろう』」

この子が？いや、それよりも気になることがある。この現状を世界の意味はどうかしようとするんじゃないだろうか？

「『時間がない・・・よく聞くんた。斎王とデュエルした後・・・必ずや・・・の・・・カードを・・・』」

「何のカードだ？聞こえないぞ・・・」

「『駄目か・・・やはり阻害されてしまう。レインは一応人間だが純粋な人間ではない。一種のクローンの技術で生み出された子供であり、半アンドロイドだ。そしてレインはこの役目を終わると私のことを忘れてしまう。君に後を任せたい』」

おいおいおい・・・言ってることがめちゃくちゃだぞ。まるで意味がわからん

「『もう・・・駄目か・・・未来を・・・たの・・・』」

「最後に聞かせる！世界の意思！それを倒せばいいのか!？」

「『そう……だ……』……』……」

レイン恵は驚いた表情で俺を見ていた。

「ああ、すまん……驚かせた」

「……猫」

見ると、猫が俺の肩に乗っていた。なんで？

「貴方は……レッド寮に住んでるの？」

「まあな……」

「じゃあ、一緒に行く」

「は？」

「猫、飼って欲しい……貴方に」

この子、本当に変わっているな。20年後の俺……か。その俺が未来から送り込んだ、言うなれば未来人か。

「と、とりあえず戻るか……レイン恵」

「レイン……」

「ん？」

「レインって呼んで……」

なんか、妙な所でこだわるんだな。未来の俺よ、なんでこういっ子を過去に送り込んだんだ。お前の趣味か

「わかった……行くぞレイン」

「………ん」

こうして俺はレインと仔猫を寮へ連れて帰ることにした。そしてこの日、雪乃とツァンが俺達の寮へ戻ることにはなかった。

## 運命の輪（後書き）

ということ、TFのレイン恵です。そしてTF6で分かった新事実ということを加えました

レイン恵

TF4から登場した無口系美少女キャラである。綾波レイや長門有希の同類。名前の由来も綾波レイとその中の人林原めぐみとを組み合わせたものかもしれない。

デュエルアカデミアに通う女子高生のようなのだが、何所に暮らしているかは誰も知らず、また成績も全てキツチリ平均値を出すなど奇妙な特技を持っており、その素性は謎に包まれている。

一方で猫や犬などの動物に好かれてしまう体質らしく、会話中にも頻繁に猫の話が持ち出される。また、朝に弱いらしい。

・・・が、数あるモブキャラクターの一人でしかなく、この時はグラフィックも既存のモノのカラーチェンジだった。

TF5では一部のD2デュエリスト（いわゆるモブキャラ）に新規グラフィックが与えられたが、彼女のグラフィックは以前と殆ど変わり無いまま一つパツとしないものだった。

だがTF6でまさかのツインテール化。動きにも細かな変化を与えられ、特にディスプレイニードローの演出はとてまかつこよくなった。そしてTF6では色々と真実に近づき、未来から送られてきたか、別世界から来た可能性がある。

この小説では未来の秋が送りこんだ半アンドロイドの少女という設定

**問答無用！（前書き）**

というわけで、明日香VS吹雪です。

秋「・・・・・・・・・・・・・・・・」

レイン「・・・・これ」

レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン

このカードは自分フィールド上に表側表示で存在するドラゴン族モンスター1体を

ゲームから除外し、手札から特殊召喚することができる。

1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に手札または自分の墓地から

「レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン」以外のドラゴン族モンスター1体を

自分フィールド上に特殊召喚することができる。

レイン「・・・・・・・・・・12月、日本のデュエル会波乱」

12月のストラクは既に3つ予約しましたw



問答無用！

Side 明日香

今私は、ステージに立っている。デュエル場で兄とデュエルするためだ。正直、今はそんなことをする気分じゃない。十代があんなことになっているのだから、私は十代を見なきゃいけないの……もう、兄さんは本当に空気が読めないんだから！

「兄さん、私が勝ったらそのアホな育成コースに入るのやめてもらうからね」

「そんな……いいじゃないか明日香。僕は君の可愛さをだね」

「問答無用……潰すわ、兄さん」

私が言つと、兄さんは不敵に笑みをこぼしていた。

「っふ……僕のデッキは秋君のカードのおかげで最強とも言えるデッキだよ？今では亮にも引けを取らないそんなデッキだ。そんなデッキに勝てるかな？」

「御託はいいわ……行くわよ！私が勝ったらアイドル育成コースの廃止！そして迷惑している生徒たちに校長と教頭が謝る！」

「僕が勝ったら君と、スカウトした生徒は芸能界デビュー……行くよ？」

「<sup>デュエル</sup>決闘！」

明日香 LP4000

吹雪 LP4000

Sideレイ

始まった明日香さんと吹雪さんのデュエル。一体どちらが勝つんだろ。そして、雪乃さんとツアンさんが昨日から部屋に戻ってこない。ブルー寮にも帰ってないみたいだし、どうしたんだろう？

「雪乃……ツアン……」

「秋さん、秋さん？」

「ん？ああ……どうした？」

きつと、雪乃さんとツアンさんが心配なんだと思う。秋さんはさっきからうわの空だったし……

「明日香さんのデュエル、始まったよ？」

「ああ……そうだな」

「……」

僕の隣にいる銀髪の不思議な女の子、レイン恵さん。昨日から事情があつて僕たちと一緒にの部屋にいるけど……雪乃さんとツアンさ





札から『X・セイバー』と名のつくモンスターを特殊召喚する！来なさい！もう一体の『XX ボガーナイト』！」

XX ボガーナイト ATK1900/DEF1000

「そしてこの二体のモンスターでオーバレイ・ネットワークを構築！エクシーズ召喚！現れなさい！『No.39 希望皇ホープ』」

No.39 希望皇ホープ ATK2500/DEF2000

「き、希望皇ホープだって！？まさか秋君のカードを・・・」

「そうよ、秋の力をもらったのは兄さんだけじゃない・・・！私はさらに手札から『苦渋の選択』を発動！私はデッキからカードを5枚選ぶわ。私が選ぶのは『荒野の女戦士』『ジャンク・シンクロン』『エトワール・サイバー』『XX・セイバー フラムナイト』『ネクロ・ガードナー』よ！」

「なら『ネクロ・ガードナー』を手札に加えてくれ」

まあ、墓地にネクロ・ガードナーがあつたら困るもんね。でも、明日香さんの狙いは墓地にカードを送ること・・・だと思っ。

「手札から『一族の結束』を発動！私の墓地には戦士族だけがいるわ！これによりホープの攻撃力は800ポイントアップ！」

この手は、正直いい手じゃない。XセイバーとXXセイバーは明日香さんと一緒に見た時、戦士族以外のカードもあった。しかも、そっちのカード達のほうが有用性も高い。

NO.39 希望皇ホープ ATK2500/DEF2000 AT  
K3300/DEF2000

「バトルよ！行きなさいホープ！レッドアイズ・ダークネスメタル  
ドラゴンを攻撃！『ホープ剣スラッシュ』！」

吹雪 LP4000 LP3500

「ぐっ・・・だがこの瞬間畏発動！『レッドアイズ・スピリッツ』  
！レッドアイズと名のついたモンスターの召喚条件を無視して特殊  
召喚だ！戻って来い！ダークネスメタル！」

レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン ATK2800/DE  
F2400

「ならばカードを1枚伏せ、ターンエンド！」

「僕のターンドロー！僕はレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴ  
ンの効果を発動！」

あのカード、一体どんな効果が？見たところ攻撃力が上がる効果は  
ないみたいだけど・・・

「自分の墓地にある『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』  
以外のカードを、特殊召喚できる！来い！『ホルスの黒炎竜Lv6』  
！」

「なんですって!?!？」

ホルスの黒炎竜Lv6 ATK2300/DEF1600

「そして、僕はレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンに『団結の力』を装備！」

レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン？ ATK2800/DEF2400 ATK5200/DEF2400

「攻撃力が5200!?!」

攻撃力5200!これは酷い・・・モンスター1体で800上がるから合計で攻撃力が2400も上がっている。

「バトル!レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンで希望皇ホープを攻撃だ!」

「させないわ!畏発動!『潔癖のバリア-クリア・フォース-』!」

クリア・フォース?ミラー・フォースじゃなくて?

「このカードは、バトルフェイズ中に発動できるわ!このターン、相手フィールド上に存在する全てのモンスターの攻撃力は、魔法・罫・効果モンスターの効果による攻撃力の変化を無効にして元々の攻撃力になるわ!」

「なんだって!?!それじゃあ・・・」

「そう!レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンの攻撃力は元に戻る!」

レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン？ ATK5200 / DEF2400 ATK2800 / DEF2400

「反撃よ！希望皇ホープ！」

ホープが向かってきたレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンを切り捨てる。これでまたライフに差が開いた。

吹雪 LP3500 LP3000

「ならば僕はカードを1枚セット、ターンエンド！」

「私のターンドロロー！私は『強欲な壺』を発動してカードをさらに2枚ドロロー！手札からチューナーモンスター『X セイバー パシウル』を召喚！」

X セイバー パシウル ATK1000 / DEF0 ATK900 / DEF0

フィールドに現れたのは剣を持って膝を付いた戦士・・・明日香さん、やるんだね？

「さらに、私は手札から『早すぎた埋葬』を発動！800のライフをコストに、墓地から『荒野の女戦士』を特殊召喚！」

明日香 LP4000 LP3200

荒野の女戦士 ATK1100 / DEF1200 ATK1900 / DEF1200



これでチューニング出来る！明日香さん行けー！

「私はレベル4の荒野の女戦士に、レベル2のX セイバー パシウルをチューニング！」

4 + 2 = 6

「雪風に舞う氷結の龍よ、裁きの時は来た！今こそその稲妻で撃ち払え！シンクロ召喚！吹きすさべ！」氷結界の龍ブリューナク」！

氷結界の龍ブリューナク ATK2300 / DEF1400

出てきたのは氷の龍・・・ブリューナクって、確か神話に出てくる槍なんだよね。秋さんが言っていたけど、ブリューナク、トリシューラ、そしてグングニールはそれぞれ槍の名称で、デュエルモンスター物語もあるって言うていたっけ。

「さらにブリューナクの効果で手札のネクロ・ガードナーを墓地へ送り、兄さんのフィールドにいるレッドアイス・ダークネスメタルドラゴンを手札に戻すわ！」

「な、なんだってえ！？」

「そしてバトル！希望皇ホープでホルスの黒炎竜Lv6を攻撃！」  
ホープ剣スラッシュ」！

「ぐあああああつ！」

吹雪 LP3000 LP2000

これでライフは2000！ブリューナクの攻撃が通れば明日香さんの勝ちだ！

「これで終わりね・・・ブリューナクでダイレクトアタック！」

「甘いね明日香！畏発動！『リビングゲットの呼び声』！蘇れ、『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』！」

出てきたのはレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン！ブリューナクの攻撃力じゃ、あのカードは超えられない！

レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン ATK2800/DEF2400

「つく・・・私はこれでターンエンド！」

「僕のターンドロロー！未来融合の効果により、融合デッキから『F・G・D』を特殊召喚師、さらに僕は手札から『強欲な壺』を発動し、カードを2枚ドロロー・・・ふっ、『サイクロン』を発動！一族の結束を破壊する！」

F・G・D ATK5000/DEF5000

「っ・・・！」

No.39希望皇ホープ ATK3300/DEF2000 ATK2500/DEF2000

っ、ついに出てきた！F・G・D！そしてホープの攻撃力も下がった。これはまずい！？

「そしてバトル！レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンで氷結界の龍ブリューナクを攻撃だ！『ダークネス・メタルフレア』！」

「墓地のネクロ・ガードナーの効果を発動！攻撃を無効にするわ！」

「ならF・G・Dでブリューナクを攻撃だ！」

「希望皇ホープの効果発動！オーバーレイ・ユニットを一つ使うことで、相手の攻撃を無効にする！『ムーン・バリア』！」

ホープの背中のマント？がシールドになってF・G・Dの攻撃を防いだ。

「カードを3枚伏せ、ターンエンド！」

攻撃は防いだけど、次の攻撃を喰らったら明日香さんは大ダメージを負っちゃう！明日香さん……！

「頑張ってください明日香さん！」

「そ、そ、そうです！頑張ってください！」

「頑張ってくださいまし！明日香様！」

ゆまさん、彰子さん、幸子さんが声を上げる。まあ、他の人達もだけど……この会場の半分は、アイドル養成コースとは関係ないわゆる『吹雪さんのファン』の人達、そしてアイドル養成コースに賛成している教員。そしてもう半分はアイドル養成コースに入れられそうな女子生徒たちと、野次馬の人達。まあ、僕と秋さんは野次

馬というよりも身内って感じ……

「ねえ、秋さん？」

「……………」

駄目だ、完全に聞いてない……僕は強く秋さんを揺すった。

「秋さん！秋さんってば！」

「え？あ、ああ……すまん、どうした？」

どうしたって……

「秋さん見てよ！あの状況を！」

「…………え？あれ……いつの間に」

「いつの間になって……ちゃんと見てなきゃ！」

「あ、ああ……すまん」

こんな秋さん、初めて見た。そんなに雪乃さんとツアンさんが心配なのかな？まあ、当たり前だよな。ブルー寮にも戻ってないって言うし……どうしたんだろう

「秋さん、この状況……秋さんならどうするの？」

「…………そうだな、次引いたカード次第だが、ブリューナクの効果を使わざるを得ない。ここで明日香のドロローがどうなるか、だな」

確かに、ブリューナクはフィールドにいるだけ、攻撃しなくても強力な効果を発揮するカード。明日香さん、頑張つて！

「私のターン、ドロー！私はここで『命削りの宝札』を発動！ハンドレスから5枚のドロー！そしてさらに、ブリューナクの効果発動！手札の『ネクロ・ガードナー』を墓地へ送ることで、まず兄さんのフィールドにある『F・G・D』を兄さんの手札に戻すわ！もつとも、F・G・Dは融合デッキにだけどね」

「甘いよ明日香！畏発動『天罰』！手札1枚をコストにモンスター1の効果は無効にし、破壊する！」

「きゃあ!？」

ブリューナクが破壊された!？まずい、フィールドにはホープだけになつちやう!

Side 明日香

「(今の私に、F・G・Dを倒すすべはない。残された手と言えば・・・)」

手札は4枚。そしてあるのは『デブリ・ドラゴン』と『調和の宝札』・・・このカードを使い、カードを2枚引く・・・そして残された手を使うしかない。F・G・Dは戦闘破壊できなくても『効果』なら破壊できる。それに、未来融合さえ破壊できれば。でも、そのためにはあのカードを引かないと・・・

「もう諦めたらどうだい？明日香・・・」

「なんですって?」

兄さんの言葉に、私は顔を上げる。

「この状況は僕が逆の立場でも無理だと思っよ。サレンダーして、一緒に芸能界デビューしよう」

「嫌よ・・・私はそんなことのために今までのデュエルを無駄にしたいくない」

そう、この学園で学んだこと。そして作ってきた仲間を裏切るような真似はしない。私は、諦めない・・・デュエルの行方は、最後の最後までわからない。そうでしょ・・・十代

「私は手札から、『調和の宝札』を発動! 攻撃力1000以下のドラゴン族チューナーを墓地へ送ることで、カードを2枚ドロー出来る」

このドローに、全てが掛っている。来て、逆転のカード!

「カードを2枚、ドロー・・・!」

来た!

「私は手札から『死者蘇生』を発動! 蘇れ・・・『ジャンク・シンクron』!」

ジャンク・シンクron ATK1300/DEF500

「そして、『XX セイバー エマーズブレイド』を通常召喚！」

XX セイバー エマーズブレイド ATK1300/DEF800

「レベル3のXX セイバー エマーズブレイドに、レベル3のジヤンク・シンクロンをチューニング！」

3 + 3 = 6

これが、全てを断ち切る、この状況を打破するための切り札！

「集いし刃が駆ける時、その戦場に一輪の花が咲き誇る！風に舞え、剣を掲げよ！シンクロ召喚！戦場を舞い、そして踊れ！」XX セイバー ヒュンレイ！」

XX セイバー ヒュンレイ ATK2300/DEF1300

現れたのは、この状況を打破してくれるであろう、最後の私の切り札。XX セイバー ヒュンレイ。

「攻撃力2300・・・それじゃあ僕のF・G・Dは超えられないよ、明日香」

「そうかしら？ヒュンレイのモンスター効果発動！このカードがシンクロ召喚に成功した時、相手フィールドに存在する魔法、罫を3枚まで、破壊できる」

そう、これが意味するのは、相手フィールドの2体の存在を保つ要を破壊すること。





歓声が上がる。勝った・・・私は勝ったのよ。これで、アイドルコースも廃止、みんなも楽になると思うわ。これも、秋達のおかげね。

「あす、か・・・僕と芸能界で・・・」

「ていつ！」

私はまだ諦めてない兄さんを思いつきり踏みつけた

「ぐふっ！」

「に・い・さ・ん？いい加減にしないと、もう口もきいてあげないからね」

そうやって私はデュエル場を後にすることにした。

S i d e 秋

明日香のデュエルを見終えてから、寮へと戻ることにした。雪乃、ツアン・・・アイツら一体どこ行ったんだ？そんなことを考えていると、通信が鳴る。そこには一文

『現在使われていないデュエル場で待つ 藤原雪乃』

この文章を見た瞬間、俺は嫌な予感が頭をよぎる。俺は急いで駆けだした。

「しゅ、秋さん！ちょっと待ってよ！」

「.....」

待ってるよ、雪乃、ツァン！

問答無用！（後書き）

次回、子安登場！

背負う男(前書き)

というわけで、2話連続投稿!

明日1時間目から授業なのにやっつけられないんだぜ!  
そして、新パツク発売まであと5日!

秋「……………」

レイン「なし」

はい、ありません…………ごめんなさい

## 背負う男

Side秋

明日香のデュエルが終わってから突然の通信。別のフロアにあるデュエル場に来て欲しいというメッセージだった。突然の雪乃の呼び出しにレイとレインでデュエル場に走った。嫌な予感が頭をよぎる。万丈目もここ数日、レッド寮には帰ってきていない。辿りついた別のデュエル場。そこにいたのは、白き制服を着た雪乃とツアン、そして後ろに控える万丈目の姿だった。

「お前ら……」

「雪乃さん！？ツアンさん！？」

「……」

そして現れる青い長髪の男

「お前は……」

「私の名は斎王……初めまして」

斎王……子や（ry。この野郎……万丈目だけじゃなく雪乃とツアンまで巻き込みやがって。

「お前……二人に何をした？」

「特にしていませんよ……そう、彼女達は生まれ変わった。光の

結社の一員としてね」

この野郎……

「そんな……雪乃さん！ツアンさん！どうしちゃったの!？」

「私達は、斎王様の……忠実なる僕」

レイの言葉に、二人は同時に答える。完全に洗脳されてやがる。そして不敵に笑みを零す斎王に、俺の身体は怒りがこみ上げる。

「斎王……って言ったな。二人を元に戻せ」

「それはできないな……彼女達は運命に導かれ、白の結社に目覚めた」

「俺は『できる』『できない』なんて話はしてねえ……戻せって言ってるんだ」

Sideレイ

今、僕は秋さん、そしてレインさんとデュエル場にいた。状況はさっぱりわからない。でもわかるのは雪乃さんとツアンさんがあの男……斎王って言う人に操られてしまっているということ。普通ならありえないけど、あの二人は今どう見ても普通じゃない。そして、僕の横にいる秋さんも……あんなに怒っているのは見たことがない

「俺は『出来る』『出来ない』なんて話してねえ……戻せって言ってるんだ」

秋さんの声が、恐ろしい。今まで怒っている場面は何度か見たことがある。でも、本当に今の秋さんは怖かった。だけど齋王って人は特に反応を見せない

「そうか・・・ならば、貴様が我がしもべとなるのなら、この二人を解放しよう・・・」

そ、そんな酷い条件・・・あの人、酷い。

「・・・・・・・・」

秋さんがゆっくりと齋王って人の方へ向かって行く。

「秋さん!?!」

僕は慌てて駆け寄ろうとするけど、レインさんに抑えられる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・駄目」

「ちょ、レインさん!離して!」

「黙って、見てて・・・」

「え・・・・・・・・?」

僕はその抑えられた状態でその先を見た。一步、また一步秋さんは齋王のところ近づいていく。そして、目の前にまで辿りついた

「私の下僕になるんですね?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・オラァっ！」

次の瞬間、ドゴっ！と鈍い音が鳴った。アレは手で殴った音じゃない・・・デュエルディスクで殴り飛ばしてる！斎王はそのまま飛ばされてしまった。

「「「斎王様！」」」

殴り飛ばされたところに行く、3人。雪乃さん、ツアンさん・・・本当に洗脳されてるんだね。

「斎王・・・テメエは1度や2度殴っただけじゃ気がすまない・・・」

「貴様！斎王様にないを・・・」

「黙れ・・・」

他に隠れていたらしい白い制服を着た生徒がいた。3人くらいかな・・・そしたら秋さんはその人達もそのまま殴り飛ばす。秋さんってあんなに喧嘩強かったの？

「つく・・・野蛮な猿め」

「うるせえ・・・とつとと雪乃とツアンを元に戻せ」

あ、万丈目さんは別にいいんだ・・・いや、きっと秋さんなら考えられているだろうけど、雪乃さんとツアンさんのことばかりに頭が行っているんだと思う。



「・・・今日は挨拶です、そのうち貴方を白の結社へ招待しましよ  
う」

そう言って去って行く斎王。そして雪乃とツアンさん・・・

「待て！」

追おうとするけど、今度はレインさんが秋さんを抑えつける。い、  
いつの間にあそこに・・・

「駄目・・・」

「離せ！俺は・・・」

「今の貴方に、何ができるの？」

レインさんの言葉に、動きを止める秋さん。

「今の貴方は・・・きつと力しか振るわない。それじゃあ、  
二人を助けられない」

「くっそ・・・」

「秋さん・・・」

結局、僕はそのうなだれたままの秋さんを連れて寮に戻ることにしか  
できなかつた。僕は・・・どうすればいいんだろう。

## レッド寮

寮に帰って来てからも、秋さんは椅子に座ったままだった。

「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

「こ、この無言の空間は辛い。秋さんは頭を抑えてる。どうしたら、二人は元に戻るんだろう。」

「・・・レイ」

「は、はい!?!?」

いきなり声をかけられてびっくりした。ど、どうしたのかな

「すまんが、レインと一緒にちょっと外に出ててくれ」

「え、あ・・・うん」

僕は言われるがまま、レインさんと外に出ることにした。とりあえず・・・食堂にでも行って待ってよう。

## Side秋

「・・・・・・ミラ、マハード、マナ」

俺は3人を呼びだす。いつもはレイがいるため出てくることは少なくなっただが、今だからこそ、3人の力は必要だ

「マスター……大丈夫ですか？」

「……あんまり、良くないな。3人に頼みがある」

「3人の洗脳を解く方法ですか？」

「……それもあるが、シエンとサラを探して欲しい。アイツらの状態も気になる」

冷静に、アイツらを助けないといけない。さつきレインに止めてもらわなければ、どうなっていたことが……

「そしてマハード……やっぱり」

「はい、洗脳を特には強い衝撃……デュエルによる多大な攻撃が必要になります」

まあ、この世界だと定石と言えば定石だろう。だが、アイツらのデツキに対して多大な攻撃？無理だな

「リチュア、そして六武衆の攻撃を破る手段なんてそうそうねーな……」

これは俺の予測だが、アイツらは二人で俺にデュエルを仕掛けてくるだろう。斎王殴ったしな……ああ、あの時殴らないですぐにデュエルに持ち込めば良かった。

「はぁ……」

「マスター、大丈夫ですって！きっと二人は元に戻りますよ」

「マナ・・・ありがとう」

励ましてくれるマナ。だけどマナ、お願いだから頭をなでなでするのはやめてくれない？

「では、私はシエンたちの様子を見に行きます。ミラ、マナ・・・マスターを頼むぞ」

「はい！」

そう言っつてマハードが部屋を飛び出していく。そういえば

「レイのやつどこ行ったのかな・・・」

S i d e レイ

食堂に行くと、なんだか翔さんと・・・誰だろ、イエローの生徒さんが喧嘩してる。三沢さんじゃない人がここにいる。イエローの生徒がここにいるって珍しいかも

「翔さん、どうしたの？」

「あ、レイちゃんっす・・・あと、はどなた？」

「・・・？誰だドン？」

ど、ドン？何その変な語尾

「僕は早乙女レイ。オシリスレッドだよ。こっちはレイン恵さん」

「……………よろしく」

「俺はテイラノ剣山！ラーイエローザウルス！」

「……………あ、やっとわかった。ドンっていうのは「プテラノドン」、ザウルスは「ザウルス」って感じに恐竜についての語尾なんだ。この人、彰子さんとなら仲良くやれる気がする。」

「それにしても、なんで女子なのにオシリスレッドなんだドン？」

「あ、その……………僕一応、まだ小学6年生だから」

「つまり、飛び級っす」

僕と翔さんの言葉に驚くテイラノさん。なんか、本当に珍しい名前……………変な名前って言ったら失礼だけど。というか

「二人はどうして喧嘩してたの？なんかすごい騒いでたけど」

「聞いてレイちゃん！さつきね……………」

翔さんから話を聞くと、十代さんの舎弟はどっちか？ってことでもめていたらしい……………。変な理由。もっとまともな理由だと思っただのに

「どっちでもいいじゃない、そんなの」

「よくないっす！僕は兄貴と1年生の時から一緒っす！」

「いた期間なんて関係ないドン！器としては俺の方が相應しいドン！」

ホント、男の子って馬鹿みたい。そんなことより現状をみなよ、現状を・・・十代さんは行方不明だし、秋さんやツアンさん、雪乃さんだってそれどころじゃないのに・・・

「ねえレイちゃん！どっちがアニキの舎弟に相應しいと思う！？」

「女性の意見も聞くドン！」

え、そこで僕に振ってくるの！？レインさん助け・・・って、いない！？カミュ・ラさんにお茶頼んで飲んでるし！

「レイちゃん！」

「どっちだドン！？」

ブチっ

「あーもー！うるさい！！！」

「「！？」」

僕は今までにないくらい大きな声を上げてしまった。自分でもびっくりかも

「どっちが舎弟だっていいじゃない！今十代さんは行方不明で、秋さんだって今大変なのに！そんな状態なもの知らないで二人で騒い

で馬鹿じゃないの！？そんなくだらしないことで喧嘩するなら十代さんの舎弟なんてなれるわけがないでしょ！馬鹿！」

年上に向かって失礼だとは思ってたけど関係ない！これだけ言わないとこの二人は絶対に聞きわけないもの！

「……………」

「まったく、こんな小さい子に怒られるなんて貴方達本当に駄目ね……………」

「カミューラさん……………」

「食堂はご飯を食べる場所よ……………喧嘩するなら余所でしな」

いつの間にか僕の後ろにいたカミューラさんが怒っていた。翔さんとテイラノさんはそくさと食堂を後にしていった。

「ほら、お茶でも飲んで落ち着きなさい」

そういつて渡されるお茶はすごくおいしかった

「あ、ありがとうございます」

カミューラさんとは同じ女性だから挨拶なんかよくするけど、あんまり喋らないんだよね。すると、カミューラさんはほほ笑んでいた。

「子供にしては、頑張ったね…………見直したわ」

「あう・・・でも、秋さんや十代さんの力にはなれないから・・・僕、あんな風に二人に八つ当たりを・・・」

「そんなことないわ・・・ああいうガキには一喝必要なのよね。聞いたわよ、雪乃とツアンが洗脳で操られたってね」

カミューラさんも知ってたんだ、そのこと・・・

「秋はいつも自分で抱え込んでうからねえ・・・支えてやんな、アイツのことを」

「カミューラさん・・・」

「あたしもね、アイツにある意味助けられた存在なのよ」

助けられた存在・・・？一体どういう・・・

「セブンスターズ、知ってる？」

「えっと彰子さんが言ってました・・・デュエルを学園に挑んできた集団だって」

「そう、その一人がこのカミューラなのよね」

「ええ！？」

僕は驚いた。確か、殴りこんできて秋さん達が撃退したって聞いた人の一人がここにいるなんて

「あたしはね、つい最近まで眠ってた・・・吸血鬼だったんだ」



「きゅ、吸血鬼!?!」

きゅ、吸血鬼ってあれだよな、血を吸ったりする日本でいう妖怪みたいな・・・そういえば、カミユラさんの肌って翠だし・・・赤い服ばかり着てるし、歯の一部分だけ妙に長いし・・・

「そ、吸血鬼。そしてあの子の御仲間を苦しめた存在」

「苦しめた・・・?」

「セブンスターズとのデュエルは普通じゃない。デュエルが『現実のダメージ』となるのさ」

現実のダメージって・・・そういえば、学園祭の時とか、秋さんは所々包帯を巻いてはいたけど・・・そんなことがあったなんて

「その様子じゃ聞かせてないか・・・ま、当然よね。あんなの忘れた方がいいから」

「カミユラさんはどうしてセブンスターズからここの寮長になったんですか? 敵、だったんですよね」

「ええ、私の力で蝙蝠を使ってデッキを見たり、人質を取って負けを強要させたりね。そんな方法で一度はあの丸藤亮も倒しちゃったしね」

ええ!?!それは初耳なんだけど!

「そんな酷いことをしても、秋は私とデュエルをした・・・私の闇

のデュエルは負けた方の魂が封印されるデュエルだった。でもアイツ、どうしたと思う？その魂を封印しようとするカードを自分の危険を冒してまで破り捨てたのよ」

それは、カミユ・ラさんを助けるという意味で・・・かな？でもそれだけみんなに酷いことしたのに・・・

「秋さんは、どうしてカミユ・ラさんを助けたの？」

「あたしも思ってたわ。どうしてあたしを助けたのか・・・ってね、あの万丈目も怒ってたくらいなもの。だけどアイツ、なんて言ったと思う？」

わからない・・・秋さん、万丈目さんをどうやって説得したのかな

「『誰かを助けるのに、理由はあるのか？』ですって」

「えー・・・」

秋さんらしいと言えば、確かに秋さんらしいかも。秋さんってみんなに敵しいことを言ったりするけどすごく優しい人だし

「それからアイツに部屋をもらってここに住むようになって、校長から寮長を頼まれたのよ。ずっと眠りにつくはずの吸血鬼がこんな人生を送ってる。おかしなものよね」

言いながら紅茶を飲むカミユ・ラさんは、どこか嬉しそうな表情だった。

「だからね、アイツは・・・武藤秋という人間はなんでもかんでも

背負っていく男なのよ。一人で荷物を抱えて、抱えて最後には潰れる・・・そんな感じ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「だからどこかでその荷を支える人間が必要なのよ」

荷を、支える・・・

「あたしが言えるのはここまで。後は自分で考えるといいわ。私はそろそろ仕込みをしないとね」

そっか・・・秋さんは僕たちの知らないところで頑張ろうとしている。なら、僕も秋さんを助ける。助けになる。

「ありがとうカミューラさん！さっそく行動だ！行こうレインさん」  
「！」

「ん・・・ごちそうさま」

こうして、僕たちは食堂を後にした。

Sideカミューラ

レイを見送った後、材料を見る。最近は校長に交渉して材料の幅を増やしたかいがあったわ。それにしても・・・

「こんな役、柄じゃないのよねえ・・・」

セブンスターズであり、人々を苦しめたこの吸血鬼が、人間にアドバースするなんて、ホント柄じゃない。これもあの子の影響ね

「はぁ・・・頼んだわよ」

あたしは言いながら暗くなった空に蝙蝠しもへを解き放つ。遊城十代の捜索、そして他にも雪乃とツァンの情報確認。そして秋が警戒していた斎王という男の情報・・・アイツに受けた恩を返せるとは思っていない。でも、アイツの仲間である以上、やれることはやる

「さて、今日もガキどもの飯を作るとしますか・・・」

こうして、私は洗い終わっていた野菜に手を駆けることにした。流水、最近じゃ慣れたわね

## 背負う男（後書き）

さあ、本格的に第二章が始まりました！雪乃達の運命はいかに！

## 思い出の場所で（前書き）

眠い・・・連続投稿というか、すごく思いついて書き続けたらこんな時間に

これからも頑張ります

レイン「これ・・・最強」

ゴヨウ・ガーディアン（禁止カード）

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊し墓地へ送った時、そのモンスターを自分フィールド上に表側守備表示で特殊召喚する事ができる。

ほんと、ひどい壊れカードです

## 思い出の場所で

S i d e l e y

あれから、少しして・・・十代さんが帰ってきた。そしてエド・フエニックスと戦い、宇宙から来たと言われるHEROの力で勝利。そしてレッド寮取り壊し計画もクロノス先生のおかげで回避された。でも、それとは別に『光の結社』は動き始めていた。万丈目さん、雪乃さん、ツアンさんが次々とブルーの生徒を倒して白い制服を着る様にさせている。多分、洗脳された人がそのデュエルに勝つと、その相手を光の結社に取り込まれてしまうというもの。

「ど、どうしましょう・・・」

「女子寮戻れないよ・・・」

「正直、まずいですわね・・・」

なんとか、彰子さんとゆまさん、幸子さんだけはレッド寮にまで逃げて来れた。僕たちは秋さんが動けるようになるためにも、情報を集めていたから先に自分たちの安全を確保する意味でも今回の情報収集は無駄じゃなかったと信じたい。

「あれ、秋先輩は・・・」

「あ、うん・・・なんか、ちょっと出かけてくるって」

「ええ！？秋先輩だってオベリスクブルーじゃないですか！危ないですよ！」

と、ゆまさんがいうけど・・・

「みんな・・・秋さんが負けると思う？そこらへんの生徒に」

「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

黙り込むみんな。まあ、普通負けないよね・・・

「でも、お姉さま達は分かりませんわよ」

「ほえ？」

「雪乃お姉さまとツアン様の強さは異常ですわ・・・殆ど5ターンもかからず勝利しているのですから」

そうだった・・・雪乃さんとツアンさんを強くしたのは秋さん本人だった。でも、それなら秋さんは二人のデッキを知ってることになるけど・・・あれ？

「そういえばレインさんは？」

「あれ？さっきまでここにいませんでしたこと？」

ついさっきまで、僕たちと一緒に逃げて来たと思ったんだけど・・・どこいったかったのかな



周りは白い制服を身にまとった人間が増えていた。さつき十代達が囲まれて連れていかれていた。おそらく、原作通りの話なんだろう。俺はとある目的の場所を目指す。だが、目指す先々で白い制服を着た生徒がうるついている。さらに言うなればデュエルの対策が思いつかない。

「……………さて、どうするか」

俺のデッキで、雪乃とツアンに勝てるか？と聞かれれば正直無理な話だ。1対1ならともかくとして、2体1の場合、先攻を取られてしまえば勝てる望みは果てしなく薄い

『マスター！』

「（マナたちか……）」

マナとマハードが戻ってきた。2人には先日からいろんなところに飛び回ってもらっているからな

『シエン達の様子を確認してきました』

「（で、どうだった？）」

『自我はしっかりと保っていますが……主の元を離れることとはできません』

だろうな……シエン達がちゃんとアイツらの傍にいるならそれでいい……まあ、デュエルでは大問題だけど

「……………秋」

「ん？レイン……？駄目だろ、ここに来たら（みんな、後を頼む）」

『『『了解です』』』

レイン、レイと一緒にいるように言ったのに。白の結社になった連中に狙われたらどうするつもりだまったく

「大丈夫………これ」

そう言っただけで差し出してきたのは3枚のカード。これ、白紙のカード？そう思った瞬間、カードがカードの1枚が輝きを放った。

「これは……」

そこに現れたのは1枚のカード。このシンクロモンスターは……

「見つけたぞ！武藤秋だ！」

白の生徒に見つかった。つち！

「………行って」

言いながらレインがデュエルディスクを構えていた。おいおいおい……

「レイン、お前……」

「大丈夫………秋は、早く」

「・・・つく！もし困ったらこれを使え！後は任せる・・・負けるなよ」

そう言つて俺はあるものを渡してレインにその場を任せ、目的地へと急いだ。

Side Out

秋とレインを発見したのは1人の生徒だった。レインと同じようにデュエルディスクを構える。

「オベリスクブルーか・・・丁度いい、お前も斎王様の素晴らしさを教えてやる！」

「・・・勝敗を」

「<sup>デュエル</sup>決闘！」

「・・・」

Sideレイン

レイン恵 LP4000

白の結社の生徒 LP4000

私は、デュエルしている。白の結社と名乗る、その男と・・・このデュエルで、秋の足止めをしなければならぬ。それが今回、私の使命

「先攻は俺だ！ドロー！俺は手札から『デーモン・ソルジャー』を召喚！」

デーモン・ソルジャー ATK1900/DEF1500

「カードを2伏せ、ターンエンド！」

「・・・ドロー！」

フィールドには攻撃力1900・・・上手くすれば、行ける。

「手札から『手札断殺』を発動・・・互いに2枚墓地にカードを送り、2枚ドロー！」

私が墓地に送ったのは、馬頭鬼と、ゾンビ・マスター・・・これなら、私は任務遂行に近づける。

「モンスター・・・召喚！」

ゾンビ・マスター ATK1800/DEF0

「モンスター効果、発動・・・手札のアンデット、墓地へ送って、レベル4以下のアンデットを特殊召喚。手札の『真紅眼の不死竜』を墓地へ・・・墓地のゾンビ・マスター復活！」

ゾンビ・マスター ATK1800/DEF0

「そして、馬頭鬼の墓地効果……このカードを墓地からゲーム除外し、墓地のアンデットを復活……特殊召喚『真紅眼の不死竜』」

真紅眼の不死竜 ATK2400/DEF2000

これで私のフィールドには3体のモンスター……行ける

「真紅眼の不死竜で、デーモン・ソルジャーを攻撃……」

「つく！畏発動『攻撃の無力化』！戦闘を無効にし、バトルを終了する！」

届かなかった……でも、まだ策が尽きたわけじゃない。

「私はカードを2枚伏せ、ターンエンド」

「俺のターン、ドロー！俺はデーモン・ソルジャーを生贄に、『デーモンの召喚』を召喚！」

デーモンの召喚 ATK2500/DEF1200

攻撃力2500……私のモンスターを上回っている。

「そして、装備魔法『白のヴェール』を発動！このカードは装備モンスターが攻撃する場合、相手フィールド上に存在する魔法・罫力ードはダメージステップ終了時まで全て効果が無効化となる！」

「させない……畏発動『威嚇する咆哮』」

「つち！」

これで、攻撃できない・・・次のターンで、逆転のカードを・・・引く

「俺はカードを1枚伏せ、ターンエンド！」

「私のターン・・・ドロー！」

来たのは・・・駄目、これじゃ防げない。なら、やることは一つ。さつき秋に渡されたカードを・・・使う

「私は、2体のゾンビ・マスターでオーバーレイ・・・2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築・・・エクシーズ召喚・・・現れて『No.39希望皇ホープ』」

No.39希望皇ホープ ATK2500/DEF2000

「これで、カードを1枚伏せてターンエンド」

「つち！武藤秋のエクシーズモンスターか・・・いや、ここでお前を倒せばそのカードも斎王様のものになる・・・俺のターンドロウ！俺は『リビングデットの呼び声』を発動！墓地のデーモン・ソルジャーを蘇生！そしてそれを生贄に捧げ、2体目の『デーモンの召喚』を召喚！」

2体目・・・！不死竜さえ上回るそのモンスター・・・まずい

デーモンの召喚？ ATK2500/DEF1200

「行け！デーモンの召喚！真紅眼の不死竜を攻撃しろ！」

「させない……ホープのモンスター効果。オーバーレイユニットを一つ墓地へ……攻撃を無効。『ムーンバリア』」

ホープがデーモンの召喚の攻撃を防ぐ。

「なら2体目だ！いけえ！」

「もう一度、ホープの効果を発動……」

なんとか防いだ……これで、次のターンも耐えなければ。

「つち……なら、俺はこれでターンエンド！」

「……私、ドロ」

来たのは、強欲な壺……これで、ドロする……それで頼みの綱を……

「手札から『強欲な壺』……カードを2枚ドロ」

「なら俺は畏カード『便乗』を発動しておく！」

……しまった、そんなカードを入れたなんて……でも、まだ問題は無い。これなら、行ける。

「私は不死竜を守備表示……そして、カードを1枚伏せ、ターンエンド」

「俺のターンドロ―！俺も『強欲な壺』の効果で2枚ドロ―！行くぜ！畏カード『ライトニング・ボルテックス』を発動！手札1枚をコストに、表側モンスター全てを破壊する！」

「っ……！」

「これでお前のフィールドはがら空きだ！」「それを、待つてた……」「なんだと!？」

そう、この瞬間……この時。モンスターを効果で破壊する効果……自分でもできたけど、相手がしてくれるなら、好都合

「モンスターが効果で破壊された時……『機皇帝ワイゼル』を特殊召喚」

機皇帝ワイゼル     ATK2500/DEF2500

「な、なんだこのモンスターは……」

攻撃力は互角……攻撃してきても、これならいける。

「っち！攻撃力は互角か……だが1体を犠牲にすれば問題ない！行け！デーモンの召喚！」

「速攻魔法『突進』……攻撃力を700上昇」

機皇帝ワイゼル     ATK2500/DEF2500     ATK3200/DEF2500



「ぐああっ！」

白のヴェールの方で攻撃すればよかったのに………  
カ？それとも、よほど白への執着心が強いのか………理解不能

白の結社の生徒   LP4000   LP3200

「うち……ターンエンドだ」

「……ドロー」

来た

「手札から『命削りの宝札』を発動。カードを5枚ドロー」

「なら俺は便乗で2枚ドローだ！」

相手は何枚引こうが関係ない。この5枚のドローは……私の勝利  
への道

「私は手札から『ゾンビ・マスター』を召喚……そして効果で『  
ゾンビキャリア』を墓地へ送り、ゾンビキャリアを召喚……」

ゾンビキャリア   ATK400/DEF200

「………チューニング」

4 + 2 = 6

私が持ち得る、今最善の手のために……このカードを使う。

「シンクロ召喚……最高にして、最大の権力……」  
『ゴヨウ・ガーディアン』」

ゴヨウ・ガーディアン ATK2800/DEF2000

「攻撃力2800だと……!?!」

でも、終わりじゃない……

「手札からフィールド魔法『アンデットワールド』発動……これにより、フィールドは全てアンデット族になり、生贄召喚はできなくなる」

長く喋るのは嫌い……時間の無駄。でも、今は時間を稼ぐことも、極力しないといけない。それが私の使命

「手札から『強制転移』を発動……互いのフィールドのモンスター1体ずつのコントロールを入れ替える……『ゴヨウ・ガーディアン』を選択。貴方は、デーモンの召喚」

「はぁ？攻撃力の低い方を手に入れてどうするつもりだ？」

「……」

相手は知らない……今場にいる、このカードの恐ろしさを……

「機皇帝ワイゼルの効果……1ターンに一度、相手フィールドにいるシンクロモンスターをこのカードに装備する」

吸い込まれて行くゴヨウ・ガーディアン

「そして、このカードの攻撃力は装備したモンスターの攻撃力分、アップする」

「な、なにに!?」

機皇帝ワイゼル     ATK2500 / DEF2500     ATK53  
00 / DEF2500

「な、な、なあ!?」

「これで・・・貴方を守るカードは何もない。ダイレクトアタック」

「ぐああああああああっ!」

光の結社の生徒     LP3900     LPO

「勝ったの・・・」

生徒は倒れ、気絶している。やはり、デュエルでの勝利が・・・洗脳を解く鍵になる。私は急いで、秋が目指す場所へと向かうことにした。

Side秋

レインにその場を任せた後、俺は崖の方へと来ていた。今日はそこに、俺の待ち人がいるからだ。その目的の場所に、まだ人はいない。

・・・俺は静かにそこで待つことにした

「・・・・・・・・・・」

デッキは確認済み、後は・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・」

「来たか」

来たのは二人の白い制服を着た女子生徒。

「・・・・・・・・ツアン、雪乃」

「・・・・・・・・何故私達を呼びだしたのかしら？」

雪乃の言葉に、俺は崖の方を見る。

「ここ・・・・・・・・覚えてるか？お前らが俺に好きだと言った場所だ」

「・・・・・・・・・・」

だんまり、か・・・・・・・・洗脳で俺のことを忘れさせてるのか？それとも、齋王への忠誠心と、俺が好きだったという気持ちで混線しているのか・・・・・・・・

「あの時、『好き』と言ってくれたお前らの言葉が・・・・・・・・俺は嬉しかった」

「そんなこと・・・・・・・・私達は知らない。私達にあるのは・・・・・・・・齋王様

の使命」

斎王の使命……か

「いいだろう……来い！」

「全ては光の結社のために」

「<sup>デュエル</sup>決闘！」

これが、俺の………決意だ、来い斎王！お前の野望を打ち砕く！

思い出の場所で（後書き）

次回、3人激突！

想いの先に（前書き）

連続投稿です！

秋「今日の最強カードは『ダスト・シユート』だ」

ダスト・シユート

相手の手札が4枚以上の場合に発動する事ができる。

相手の手札を確認してモンスターカード1枚を選択し、そのカードを持ち主のデッキに戻す

これで何回泣かされたかわからない（泣

## 想いの先に

Side 十代

俺は光の結社から送り込まれた刺客を倒し、ある場所へ向かっていった。秋からのメッセージ。それはとあるデュエルを見届けていて欲しいというもの。もし自分が負けたら、自分にすぐさま挑み、自分を全力で止めてくれと・・・それは光の結社の人間に負けたら洗脳される。だから洗脳でデュエルする前に俺に止めてくれというメッセージだった。そして場所につくと、戦いは始まっていた。それは秋と・・・雪乃とツァンのデュエルだった。

「デュエル決闘！」

武藤秋 LP8000

藤原雪乃（白）&ツァン・ディレ（白）LP8000

ターン順路 武藤秋 ツァン・ディレ 藤原雪乃

「先攻はもらう・・・俺のターンドロワー！俺はモンスターを裏守備表示でセット！カードを1枚伏せて、ターンエンド！」

2対1・・・本当なら俺も加勢したいけど、秋が『俺がやらなければきつと意味がない』と言っていた。秋は大切な人達を取り戻すために1人で挑むつもりだ。

「私のターン、ドロワー・・・」



ツァンが僕じゃなくて私って言うてる・・・アイツ、本当に洗脳されてるってのがよくわかるな。

「私は手札から『六武衆の結束』を発動・・・そして『真六武衆カゲキ』を召喚」

真六武衆 カゲキ ATK2000/DEF2000

「このカードの召喚に成功した時、『六武衆』を特殊召喚・・・来て、『六武衆 - ザンジ』」

六武衆 ザンジ ATK1800/DEF1300

真六武衆 カゲキ ATK2000/DEF2000 ATK1700  
0/DEF2000

「そして結束を墓地へ送り、カードを2枚ドロ・・・」

やべえ！六武衆のデッキが廻り始めてる！ただでさえ、あのデッキは厄介なのに！

「そして『連合軍』を発動。そしてカードを1枚伏せて、ターンエンド」

六武衆 ザンジ ATK1800/DEF1300 ATK220  
0/DEF1300

真六武衆カゲキ ATK1700/DEF2000 ATK21  
00/DEF2000

「私のターンドロォォォ」

「その瞬間罨発動！『ダスト・シュート』！相手の手札が4枚以上ある時、その手札を確認し、1枚をデッキに戻す！」

よっしゅ！秋の奴冴えているぜ・・・雪乃のデッキは儀式デッキだ・・・これなら

「・・・俺が選択するのは『イビリチュア・ガストクラーク』だ」

「・・・く」

やったぜ！アイツの手札には儀式モンスターはいないし、それを呼ぶカードもない。

「なら私は『シャドウ・リチュア』を墓地に捨て、『リチュアの儀式水鏡』を手札に加える。そして『リチュア・ビースト』を召喚し、効果発動・・・墓地のシャドウ・リチュアを復活させる」

リチュア・ビースト ATK1500/DEF1300

シャドウ・リチュア ATK1200/DEF1000

「そして2体でオーバーレイ・ネットワークを構築、エクシーズ召喚！現れよ『イビリチュア・メロウガイスト』」

イビリチュア・メロウガイスト ATK2100/DEF1600

儀式召喚がなくてもエクシーズ召喚か・・・！雪乃のデッキは前以

上に厄介なデツキになってる。これにどう迎え撃つんだ・・・秋！

「私はこれでターンエンド」

「俺のターンドロー！」

ここから攻撃が可能だ。だけどフィールドには3体のモンスター・・・この状況、秋はどうするつもりだ？

「俺は手札の『レベル・ステイラー』を墓地へ送る。そして『クイック・シンクロン』を特殊召喚！」

クイック・シンクロン ATK700/DEF1400

「さらに、伏せていた『ライトロード・ハンターライコウ』を反転召喚！リバーズ効果により、俺は『イビリチュア・メロウガイスト』を破壊する！」

「畏発動！『六尺瓊勾玉』・・・六武衆がフィールドにいる時、破壊効果を無効にして破壊する！」

「ぐっ・・・」

これじゃあ3枚墓地に落とす効果さえ発動しないのか！洗脳されていてもツァンはやっぱり強い・・・！

「ならば、俺は手札から『ワン・フォー・ワン』を発動！手札の『グローアップ・バルブ』を墓地に送ることで、チューニング・サポーターを特殊召喚！」

チューニング・サポーター ATK1000/DEF1000

「そして、レベル・ステイラーの効果でクイック・シンクロンのレベルを一つ下げてフィールドに特殊召喚！そしてその墓地からの蘇生に対して『ドッペル・ウォリアー』を特殊召喚！」

クイック・シンクロン 5 4

レベル・ステイラー ATK600/DEF0

ドッペル・ウォリアー ATK800/DEF800

フィールドに次々とモンスターが並んでいく。これが秋の本来のシンクロデッキか・・・！いつもの回り方とデッキが一味違うぜ！

「レベル1のチューニング・サポーターとレベル・ステイラー、レベル2のドッペル・ウォリアーに、レベル4のクイック・シンクロンをチューニング！」

1 + 1 + 2 + 4 = 8

これは・・・！

「集いし闘志が、怒号の魔人を呼び覚ます！光差す道となれ！シンクロ召喚！粉碎せよ、『ジャンク・デストロイヤー』！」

ジャンク・デストロイヤー ATK2600/DEF2500

来た！ジャンク・デストロイヤー！チューナー以外のモンスターは3体だから3枚のカードを破壊できる。

「俺はジャンク・デストロイヤーの効果により、チューナー以外の素材のカード分フィールドのカードを破壊！俺は六武衆・ザンジ、イビリチュア・メロウガイスト、連合軍を破壊！『タイダル・エナジー』！そしてチューニング・サポーターの効果でカードを1枚ドロし、ドッペル・ウォリアーの効果でドッペル・トークン2体を特殊召喚！」

「ザンジの身代わりにカゲキを使用し、ザンジの破壊を無効化する！」

六武衆 ザンジ ATK2200/DEF1300 ATK1800/DEF1300

ドッペル・トークン？ ATK400/DEF400

ドッペル・トークン？ ATK400/DEF400

破壊され、フィールドに残るのはキザンと伏せカードだけ・・・これならいける！」

「バトルだ！ジャンク・デストロイヤーでカゲキを攻撃！『デストロイ・ナツクル』！そしてトークン2体でダイレクトアタック！」

藤原雪乃（白）&ツァン・ディレ（白）LP8000 LP6400

「カードを1枚伏せ、ターンエンド！」

秋の手札はなくなっただけ、先制ダメージを与えさせ！やったな秋！

「私のターン、ドロー・・・私は再び『六武衆の結束』を発動。『真六武衆・カゲキ』を召喚し、効果で『六武衆の影武者』を特殊召喚」

真六武衆 - カゲキ    ATK2000 / DEF2000    ATK1700 / DEF2000

六武衆の影武者    ATK400 / DEF1800

「そして、再び結束を墓地へ送ってカードを2枚ドローする」

フィールドにチューナー・・・やばい！アイツを呼ぶ気が!?

「レベル3の真六武衆・カゲキに、レベル2の六武衆の影武者をチューニング」

3 + 2 = 5

「天下統一の武士よ！その真なる力を解放し、世界を統べよ！シンクロ召喚！いでよ！『真六武衆 シエン』！」

真六武衆 - シエン    ATK2500 / DEF1400

『つぐ・・・主殿、しっかりしなされ!』

シエンは精霊だからな・・・だけどツアンにシエンの声は届いていない。

「そして、シエンに装備魔法『白のヴェール』を装備する!」

『ぐ……つく……秋、どの……主を……たの……』

シエンまで操られた状態みたいになっちまった！やばいぞこれ！だけどジャンク・デストロイヤーはともかく、トークンの攻撃力は400だ。

「バトル！シエンでドッペル・トークンを攻撃！」

ドッペル・トークンが破壊される。シエンは何も言わず、そのまま切り捨てていた。白のヴェールが装備されているモンスターが攻撃する時、魔法と罠は発動できない。しかもシエンは魔法罠の発動を無効にできる……やっかいだぜ

「ぐあああつ！」

武藤秋 LP8000 LP5900

「私はカードを1枚伏せ、ターンエンド」

「私のターンドロ……私は手札から『強欲な壺』を発動してカードを2枚ドロ……手札の『ヴィジョン・リチュア』の効果発動。手札のこのカードを墓地へ送ることで、手札に『イビリチュア・ソウルオーガ』を加え、『リチュアの儀水鏡』を発動……手札の『リチュア・エミリア』『リチュア・エアリアル』を生贄とし……現れよ！『イビリチュア・ソウルオーガ』！」

イビリチュア・ソウルオーガ ATK2800/DEF2800

攻撃力2800！これはやばい……ダスト・シユートでデッキに

儀式モンスターを戻したのに・・・攻撃力もジャンク・デストロイヤーを上回ってやがる！

「そしてリチュア・チェインを召喚！召喚に成功した時3枚をめくり、儀式魔法があれば手札に加える！儀式カード『リチュアの儀式水鏡』を手札に加え、好きな順に戻す」

リチュア・チェイン ATK1800/DEF1000

「さらに装備魔法『白のヴェール』をイビリチュア・ソウルオーガに装備し、ジャンク・デストロイヤーに攻撃！そしてシエンでトクンを攻撃！そしてリチュア・チェインでダイレクトアタック！」

「うああああっ！」

武藤秋 LP6900 LP2800

武藤秋 「カードを1枚伏せ、ターンエンド」

ライフの差が開いちまった！しかもフィールドには伏せカード1枚しかも伏せカードはシエンのせいでつかつには発動できない！これはやべえぞ・・・

「つく、俺のターン・・・」

「・・・一つ聞かせてもらっわ」

ドローしようとする秋に、雪乃が問いかけた。なんだろう・・・雪乃の表情が、少しだけ和らいでいる気がする。



「なんだ？」

「何故、貴方は私達と2対1でデュエルを挑んだのか・・・」

「・・・」

考えてみれば、秋に2人が挑むならともかく、秋から2人に同時に挑んだ。どうせなら1人ずつ戦った方がはるかに楽だ。なのに、どうして秋は1人で2人の相手を・・・？

「それは、このお前達が特別で・・・そして、この場所が俺にとって特別な場所だから」

「特別な、場所・・・」

「この場所で、お前達が俺を好きだと言った・・・そしてそれを受けて俺はここで誓った・・・この世界で出来た大切な人を守ると。それを誓った場所がここだからだ。だから、俺は諦めない。お前達を、助け出す・・・俺は、お前らが好きだから」

「っっ・・・！」

二人が秋の言葉に揺れる。まだきつとどこかに、雪乃とツァンの心のどこかに、秋が好きだという気持ちが残っているんだ！だからなのか、少しだけ2人の気持ちが揺れている。

「秋・・・私・・・僕・・・違う・・・私の役目は・・・斎王さまの・・・違う・・・」

「秋・・・私は・・・貴方が・・・違う、私のこの身は、斎王様の・・・」



レベル・ステイラー ATK600/DEF0

「そして、通常召喚！『グローアップ・バルブ』！」

グローアップ・バルブ ATK100/DEF100

合計のレベルは9！そうか、トリシューラを・・・これなら勝てるぜ！

「俺は、レベル1のレベル・ステイラーと、レベル1のグローアップ・バルブをチューニング！」

1 + 1 = 2

レベル2のシンクロモンスター！？そんなモンスター聞いたことないぞ！？いや、シンクロは元から知らなかったけど、秋は今までそんなモンスター召喚なんてしたことなかったはずだ！

「集いし願いが、新たな速度の地平へ誘う！光差す道となれ！シンクロ召喚！希望の力！シンクロ・チューナー『フォーミュラ・シンクロン』！」

フォーミュラ・シンクロン ATK200/DEF1500

シンクロ・チューナー！？初めて聞いたぜ、そんなシンクロモンスターが存在していたのか！

「そして、このカードのシンクロ召喚に成功した時カードを1枚ド

ロー出来る。そして墓地の『グローアップ・バルブ』の効果により、デッキトップのカードを1枚墓地へ送り、再びグローアップ・バルブを特殊召喚！」

落ちたのはスポーアだ。でも秋は一体何を・・・！？

「レベル7のジャンク・デストロイヤーにレベル1のグローアップ・バルブ」をチューニング！」

7 + 1 = 8

「集いし願いが、新たに輝く星となる！光差す道となれ！シンクロ召喚！飛翔せよ、『スターダスト・ドラゴン』！」

スターダスト・ドラゴン ATK2500/DEF2000

この局面でスターダスト・ドラゴン！？秋の奴、本当に何を考えているんだ！？

「プレイミスのような・・・スターダスト・ドラゴンでは、勝てるのはチェインだけ・・・」

「それはどうか・・・見せてやる・・・俺の新しい力を」

新しい・・・力？そういつて、秋は静かに目を閉じた。

Side秋

ここまで、条件は全て揃えた。後は、俺のエクストラデッキに眠る



「生来せよ！」『シューティング・スター・ドラゴン』！

想いの先に（後書き）

ほんと、ほとんど人が予想していたでしょう・・・こいつです

## 導き出された答え(前書き)

V S 雪乃&ツアン編完！

秋「今日の最強カードは『シューティング・スター・ドラゴン』だ」  
シンクロモンスターのチューナー1体＋「スターダスト・ドラゴン」  
以下の効果をそれぞれ1ターンに1度ずつ使用できる。

自分のデッキの上からカードを5枚めくる。

このターンこのカードはその中のチューナーの数まで  
1度のバトルフェイズ中に攻撃する事ができる。

その後めくったカードをデッキに戻してシャッフルする。

フィールド上のカードを破壊する効果が発動した時、  
その効果を無効にし破壊する事ができる。

相手モンスターの攻撃宣言時、このカードをゲームから除外し、  
相手モンスター1体の攻撃を無効にする事ができる。

エンドフェイズ時、この効果で除外したこのカードを特殊召喚する。

こいつか、スカーレット・ノヴァが出たら大抵のデッキは積みます



## 導き出された答え

Side十代

「生来せよ！『シューティング・スター・ドラゴン』！」

俺は今、光を見た・・・その流星の龍と名付けられたその一体のドラゴンは、現れてから空中を舞いその曇っていた空を晴らした。これが、本当の光・・・今まで見て来たスターダスト・ドラゴンの輝きよりも強い輝きを持ったドラゴンが、俺の目の前にいる。

「行くぞ！シューティング・スター！」

秋の言葉に、降りてきたシューティング・スター・ドラゴンは答えるように吼える。その吼える声は、凜々しく、何物をも寄せ付けなほどの勢いがある。なのにそれでいて、何故こんなに聞き入ってしまうんだろう。

シューティング・スター・ドラゴン    ATK3300 / DFE2500

「攻撃力・・・3300・・・」

「ソウルオーガを、上回った!？」

「行くぞ！シューティング・スター・ドラゴンの効果発動！デッキトップから5枚のカードを確認し、その中のチューナーの数だけ、攻撃することが出来る！」

すげえ！そんな効果があるのか・・・！

「行くぞ！アイツらを救うだけの力を・・・今、この時に！」

なんだ！？一瞬だけど、秋の身体が赤く光ったような・・・何かの、  
円のような・・・？俺がそんなことを考えていると、秋がカードを  
引き始めた。

「1枚目！チューナーモンスター『ジャンク・シンクロン』！2枚  
目！チューナーモンスター『デブリ・ドラゴン』！3枚目！チュー  
ナーモンスター『クイツク・シンクロン』！4枚目！チューナーモ  
ンスター『ゾンビキャリア』！そして5枚目！チューナーモンス  
ター『エフェクト・ヴェーラー』！」

引いたカード全部がチューナー！？ってことは・・・

「これで俺は5回の攻撃が出来る！行け！シューティング・スター・  
ドラゴン！『スターダスト・ミラーージュ』！」

「つく！この瞬間暴発動『聖なるバリア・ミラーフォース』！」

「無駄だ！このカードは破壊する効果を1度だけ無効にし、破壊す  
る効果がある！1回目のバトル！イビリキュア・チェインを攻撃！」

5つにわかれたシューティング・スター・ドラゴンのうち、1体が  
リキュア・チェインに特攻し、激突して爆発する。

藤原雪乃（白）＆ツァン・ディレ（白）LP6400 LP4900

「2回目のバトル！イビリキュア・ソウルオーガを攻撃！」

「速攻魔法『サイクロン』を発動！イビリチュア・ソウルオーガに装備された白のヴェールを破壊！」

白のヴェールを破壊した？そうか、白のヴェールには装備されたモンスターが破壊された時、その元々の攻撃力分のダメージを受けるんだった。

藤原雪乃（白）＆ツアン・ディレ（白）LP4900 LP4400

「そして3回目のバトル！真六武衆・シエンを攻撃！」

藤原雪乃（白）＆ツアン・ディレ（白）LP4400 LP3600

「この時、シエンの元々の攻撃力分のダメージを受けてもらう！」

藤原雪乃（白）＆ツアン・ディレ（白）LP3600 LP1100

「これで最後だ・・・！この一撃で目を覚ましてくれ雪乃、ツアン！4回目のバトル！行け！シューティング・スター・ドラゴン！」

4回目のバトル。その激しい光を放つシューティング・スター・ドラゴンの光は、今までのバトルよりもいっそう輝いて見えていた。

「きゃあああああああああああああああああ  
！」「」

藤原雪乃（白）＆ツアン・ディレ（白）LP1100 LP0

その場に倒れる、雪乃とツアン。秋はデュエルディスクをしまつて

から、慌てて駆け寄った。

「雪乃！ツァン！」

俺も秋の所に走って行った。

Side秋

「雪乃！ツァン！」

俺は、二人を抱き起こした。

「しゅ……う？」

「雪乃！」

「秋……僕……今まで何を？」

「ツァン……元に戻ったのが、良かった、良かった……！」

俺の目から自然と涙がこぼれていた。

「何を泣いてるの？秋……駄目よ、坊やじゃ、ないんだから……  
すー……すー……」

「そう、よ……なんで泣いてるの？ばか……みた……くー……  
……くー……」

二人はそのまま気を失い、眠りについてしまった。

「秋！」

「十代……」

俺の言った通り、俺の影で見守ってくれていたんだな……俺は気を失った二人を降ろし、カードを見つめる。シューティング・スター・ドラゴン……これが、俺の新しい力……

「秋？」

「いや、なんでもない……十代、保健室に2人を運ぼう」

「ああ、そうだな」

こうして、俺は思い出の場所を後にした。この時気が付かなかった。俺達を見る影があったということ。

S i d e 齋王

「……そうですか。もういいですよ」

生徒の一人から、藤原雪乃、ツアン・ディレが武藤秋とのデュエルに負けたと報告を受けた。っち、使えぬ駒め……まあ、大量のオベリスクブルーの生徒が白に塗りかえられ、現在は万丈目を筆頭にしている。問題はないだろう。

「だが、面倒だ……」

最早、藤原雪乃と、ツアン・ディレは使えまい……次に使える手駒も必要だ。万丈目以外にも、有能な手駒がな……そして、破滅の光を……くくく

「当面は様子見としよう……後は、私の運命がままに」

私は再び、タロット占いをすることにした。

S i d e l e i

秋さんたちが帰ってこないと心配で探してたら雪乃さんとツアンさんを担いでいた。僕たちは秋さんに頼まれて服を持ってきた。そしてそのまま着替えさせてあげた。こんな白い制服、燃やしちゃえばいいんだ！着替えの時、幸子さんが雪乃さんの着替えをさせていて、『はあ、はあ……お姉さまの匂い』なんて言ったのは多分気のせいだと思う。

「秋さん、十代さん、いいよー」

なんとか着替え終わったので、僕はそのまま秋さんと十代さんと呼ぶ。

「ありがとうレイ、みんな」

「それにしても、秋さん！心配させないでよ！」

「ああ、ゴメンなレイ……お前達を危険な目に合わせられないからな」

そういえば、いつの間にかレインさんも戻ってきていた。本当にいつの間にか。だんだん、レインさんが怖くなってきた。

「でもよかった、これで2人は元通りなんだね？」

「・・・ああ、そうだな」

どこか、秋さんは元気がない気がする。どうしたんだろう？

「でもすごかったな秋！最後に出した新しい切り札！」

「ああ・・・俺の、新しい力だ」

そう言ってみているカード・・・シューティング・スター・ドラゴン？初めて見たけど、すっごく綺麗・・・

「あわわ・・・す、すごい綺麗なカードです・・・」

「ホントですう！すっごく綺麗〜！」

「なんて輝きですの・・・私の持つ宝石よりも、綺麗で神々しい・・・」

今までスターダスト・ドラゴンは見たけど、このモンスターの輝きはそれの比じゃないくらい、輝いていた。

「・・・」

秋さんはそのままカードをしまうと、僕たちに向き直った。

「今いるレイ、彰子、ゆま、幸子、レインには、言っておくことがある」

「言っておくこと？」

首を傾げる僕たち。一体何かな？

「今後、白い制服を着た生徒とは一切デュエルをするな」

「ほえ？」

「どんな状況下であろうと、何とんでもデュエルをせず逃げて来い。例えなんと罵られようと、罵倒されようと、決闘者の誇りだろうと、そんなものは捨てて、必ずデュエルをせずに逃げる」

な、なんかものすごいこと言われてるんだけど……

「ど、どうしてですかあ？」

「レインがさつき、白の生徒と戦ったんだが……内容が所々気になる」

所々気になる？一体何が？ってか、レインさん光の結社の生徒と戦ったの！？

「今までの成績やデッキ内容が、その生徒は明らかに異なっていた。……つまり、斎王が洗脳した人間のデッキをいじくっている可能性がある。あの男はエド・フェニックスのマネージャーだった男だ。資金も多いんだろう」



つまり、今まで低いレベルだった生徒たちのレベルが、格段的に上がってきたってこと!?

「レイとレインはともかく、彰子、ゆま、幸子・・・お前達では相当厳しい」

「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

秋さんの言葉に押し黙る3人。まあ、3人の実力って言うと難しいからね・・・

「だから必ず、授業後はレッド寮に戻り、カードの特訓を行う・・・空き部屋も用意しておくから、そこでやるぞ」

「「「はい!」「」」」

秋さんが力を貸してくれるのが嬉しいのかな。3人ともちよつと嬉しそう。

「俺も手を貸すぜ、何でも言ってくれ!」

「わあ!十代さんが手伝ってくれるんですか!?!」

「おう!任せとけ!」

喜ぶゆまさん。まあ、ゆまさんは秋さんのファンだもんねえ。そりゃそうなるよ。でもこれじゃあまた明日香さんが・・・って

「そついえば明日香さん遅いなあ」

「明日香？明日香がどうかしたのか？」

「うん、さっきPDAで呼んだんだけど・・・」

さっきコールした時はすぐに出てくれたんだけど・・・おかしいなあ

「まさか、明日香さんも・・・」

「明日香なら大丈夫だって！」

と、十代さんは微塵にも心配してない様子。本当に大丈夫かなあ・・・

Side 明日香

さつきレイから連絡があった。秋が雪乃とツアンとデュエルして秋が勝利し、二人を洗脳から解除させたという。私は急いで保健室へ向かって行く。すると、そこには椅子に座ったまま担がれる万丈目君の姿があった。

「やあ！天上院君！」

「ま、万丈目君・・・何してるの？」

「万丈目ではない、万丈目ホワイトサンダーと呼んでくれ」

長いわよ、言いくいし。

「それで、万丈目君・・・本当にそれ、何してるの？」

「今僕は斎王様の元で光の結社として他の光の結社の生徒を統括しているんだ」

それで偉そうなのね・・・なんだか、昔の万丈目君よりも性質が悪くなったわね。戻ったというよりも悪化したと言った方が正しい気がするわ。

「どうだい天上院君、君も光の結社に入らないかい？」

「お断りするわ・・・興味ないもの」

私が言っただけで通り抜けようとすると、白い制服を着た生徒が邪魔をする。

「ちょっと、どいてよ」

「天上院君、君にも是非光の結社の素晴らしさを知って欲しい」

そう言いながら万丈目君がデュエルディスクを展開する。まさか、デュエルを仕掛けるつもり？

「デュエルだ天上院君！僕が勝ったら君も光の結社に入ってもらおう」

「お断りよ。貴方とデュエルする気はないわ」

「デュエリストなのに逃げるのかい？」

万丈目君、調子に乗ってるわね・・・今まで私に勝ったことあった

かしら？

「そこまで言うならいいわ・・・その腐った根性、叩き直してあげる！」

そう言いながら私もデュエルディスクを取り出し、装着。デッキをセツトした。

「行くわよ、万丈目君！」

「来るといい、天上院君！この万丈目ホワイトサンダーの力、とくとご覧にれいれよう！」

「デュエル  
決闘！」

Side秋

明日香をレイが呼んだらしいが、まったく来る気配がない。PDAにも連絡できないし、よわったな。

「うつん・・・あら？」

「ふぁ・・・あれ？」

すると、雪乃とツアンが目を覚ました。

「雪乃さん！ツアンさん！目が覚めたんだね！」

「え？ええ・・・私、今まで何してたのかしら？」

「僕も何してたっけ・・・確かお菓子を買いに行ったところまでは覚えてるんだけど」

と、首を捻る二人と、驚くレイ達。

「え、ええ！？何にも覚えてないの！？」

「え、ええ・・・私、一体何してたの？というか、何故私は保健室にいるのかしら」

「ホント、僕も記憶があやふや・・・」

・・・記憶がない、か。シューティング・スター・ドラゴンの力か？いや、あのモンスターにそんな効果はないだろう。だけど、俺は二人にある決意を固めていた。

「なあ、二人とも・・・」

俺が言うと、考えるのをやめて俺の方を見る。二人の顔を見ると決心が揺るぎそうになる。だが・・・俺は意を決していった。



導き出された答え（後書き）

個人的に考えた超展開・・・のつもりです（汗

## 守るべきもの（前書き）

久しぶりに更新です

でもデュエルは次回というね

原麗華 「今日の最強カードは『覇者の一括』です」  
相手スタンバイフェイズで発動する事ができる。  
発動ターン相手はバトルフェイズを行う事ができない。

委員長が頑張ります

ちなみに、前回の話でライフ計算が違うという指摘を受けましたが・  
・作者の気力が限界に近いので計算訂正がどうなってるのか分かりません

分かる人・・・ヘルプです  
メッセージで送っていただけると嬉しいです



## 守るべきもの

S i d e 雪乃

「……………俺と、別れてくれないか」

突然の言葉だった。驚いたのはもちろん私だけではない、ツアンも……そして周りにいるレイ達も驚いた表情だった。そして秋の顔も、冗談を言っているような顔ではなかった。

「い、いきなりどうしたの秋？何の冗談？」

ツアンも同様に隠し切れてはいない。

「冗談のつもりでこんなことは言わない……………俺にはもう関わるな」

そう言いながら秋が立ち上がり、部屋を出ようとする。私はどうしてそうなったのかまったくわからない。

「ちよ……………待ってよ秋！？どういうことなの！？どうして……………」

「……………荷物は、マナとミラにまとめさせてある。じゃあな」

そう言って部屋を出て行ってしまった。ツアンは本当にパニックになっただけで泣いてしまった状態で、レイがなんとか抑えている。私もパニックになる一歩手前……………なんとか気持ちを抑えながら私は十代の坊やに顔を向けた。

「十代の坊や・・・知っていることを教えて頂戴。私とツアンには・・・記憶が飛んでいる気がするのだけど」

「・・・あ、ああ。実は・・・」

その後、十代の坊やから聞いたのは驚くべきことだった。私とツアンは最近転校してきたその斎王という男に洗脳を受け、その男の下に付いて実質人質となり、その洗脳の足掛かりとしてブルーの生徒を白く染めていたということだった。そしてそんな私達を止めるために、秋がデュエルをしたことだった。言われてみれば、少しずつ自分のやったことを思い出してきた気がする。

『私達は、斎王様の忠実なる僕・・・』

「っ・・・！」

私は、秋に向かってなんてことを・・・でも、秋は私達を取り戻してくれたはずなのに・・・何故、別れるということになるのかしら。私達はただただ、そこで考えることしかできなかった。

S i d e ツア ン

秋に別れて欲しいと言われて、頭が真っ白になった。何故？どうして？僕・・・何かしたの？僕が悪かったの？わからない、分からない・・・ワカラナイ！どうして、どうして別れるの？僕が嫌いになったの？僕が嫌になったの？

「・・・ツアンさん」

「レイ……」

「泣かないでツアンさん……きつと、秋さんには考えがあるの」

「っ……！じゃあ、なんで……」多分、ツアンさんを守るため……え？」

「あのね？ツアンさん……ツアンさんは今まで洗脳を受けてたのレイから事情を聞いて、僕は驚いた。僕は今まで、斎王って奴の所の下で洗脳されて命令を受けていたということ。そしてそれを止めるために秋が僕たちとデュエルすることになったのだという。」

「秋……」

思い出した……僕は斎王って奴と戦って負けた。そして、斎王のところを下になって次々と生徒を倒していた。

「僕……なんてことを」

「大丈夫だよ、きつと秋さんはツアンさんのこと好きでいると思う。だから、泣かないで」

「ありがとう……レイ」

あれから、数日。学校の授業は殆ど人がいない。と言うのも殆ど光の結社に取り込まれたからというのが正しい言い方だろう。俺は十代と翔、ティラノの4人で食事を取っていた。

「なあ、十代……」

「ん？」

「飯って、食う時……こんなに寂しいもんなんだな」

「……ああ、そうだな」

明日香と万丈目が光の結社に入ってしまった。早急に2人を助けなければならぬ。それだけではない、白の結社に取り込まれた過半数の生徒をどうにかして取り戻さないといけない。その日、俺達は無言のまま昼食を終えた。放課後、俺は広場のベンチに座る。生徒の数は少なく、今は殆どの生徒が光の結社に洗脳されているのだろう。はあ……

「何をしているんですか？こんなところで」

俺の前で仁王立ちをしている女子生徒がいた。緑色の髪に、眼鏡をかけた女性……

「委員長……」

「元気がありませんね、いつもの秋君ではないみたいですよ」

言いながら座る委員長の制服は未だにオベリスクブルーだった。まだ洗脳されていない、数少ないブルー……か

「今日は珍しく、いちゃついていないとも思ったのですが・・・雪乃さんとツアンさんも元気がないようでしたし・・・喧嘩でもしたんですか？」

「・・・・・・・・別れたよ、あの二人とは」

俺の言葉に、少し驚きの表情を見せる委員長。

「そうですね・・・・・・・・これからは学業に専念できそうですね」

「・・・・・・・・」

委員長の嫌味に、何も言えない俺。すると、また委員長はため息をつく。

「まったく・・・・・・・・そんな様子じゃ学業には身に入りそうにありませんね・・・・・・・・何があったんですか？」

「委員長？」

「今は、委員長としてではなく、『原麗華』個人としてお話を聞きますよ・・・・・・・・貴方は学友ですからね」

それから、俺は委員長に事の顛末を話すことにした。今ある現状、斎王と言う男と光の結社について。そして先日デュエルのことを。委員長はその間俺の話に口を挟まず、真剣な眼差しだけを俺に向けていた。そして、全ての話を終えた。

「・・・・・・・・・・というわけだ」

「・・・結論から言いましょう。バカですか、貴方は」

「バツ・・・」

突然バカ呼ばわりされる俺。だが、反論できない。自分でもバカなことをやったとは思ってる。自覚もあるし。だけど、雪乃やツアンが安全なのはこれが一番なんだ。

「いくらお二人を守るためとはいえ、そんなことをするのはただのバカです。お二人の気持ちを考えてはいないのでですか？」

「考えたさ・・・でも、でもどうしようもない・・・俺は、強い人間じゃない」

俺は弱い。どんなにこの世界でデュエルモンスターズが強かろうと、二人を守るだけの力はない。その結果、あの二人は洗脳されたのだから。俺はヒーローじゃない。小心者で、弱い人間だ。

「別に弱くたっていいじゃないですか」

「え？」

突然の委員長長の言葉に、驚く俺。何を言ってんだ、委員長・・・いや、原は。

「貴方が強かろうと、強くなかろうと、それはお二人を守れない理由にはなりません」

「だが・・・」

「貴方にとって、『強い』とはなんですか？力があることですか？デュエルが強いことですか？確かに貴方は強くないかもしれませんが・・・でも、貴方のその今まで彼女達と築いてきた『絆』は、貴方が思うほど弱くないと私は思います」

絆・・・

「・・・雪乃さんとツアンさんは、中学時代から私は色々と衝突を繰り返していました」

突然語り始める原。まあ確かに、普段からも結構言い合いしたりしてるし・・・雪乃となんか本当に水と油みたいな感じだからな

「雪乃さんの性格は良く言えばフリーダム、悪く言えば素行が悪い生徒でした。ツアンさんも他人を寄せ付けず、ほとんど孤立無縁状態。委員長としてよく衝突していたものです」

思い返してみれば・・・と、苦笑する委員長はどこか懐かしそうに話している。俺が知らない、雪乃とツアン、か・・・

「雪乃さんは授業をさぼることが日常茶飯事、それに教師を誘惑しようとしたりもしました。ツアンさんも一人で何でもやってしまい、クラスでの協調性なんてまるでありませんでしたから・・・でも貴方と・・・秋さんと出会ってから、彼女達は変わった」

「え？」

「前はアレだけ不真面目だった授業にも、雪乃さんは出るようになります、孤立だったツアンさんもいろんな人と話すようになりました・・・

「……貴方と言う存在が、彼女達を変えたんです」

「委員長……」

「彼女達は私の学友です。貴方が半端な気持ちで彼女達に好意を抱いていたというのなら、私は貴方を許したくはありません」

強い口調と、鋭い目が俺を刺した。俺達の絆……俺の想い……そして、二人との、大切な約束……

何があっても、守る

「っ……!」

「どうやら、大切なことを思い出したんですね」

委員長の言葉に、俺は強く頷いた。そうだ、俺は約束したじゃないか……アイツらを守る。それが、今俺であり続けられる理由。

「……ああ。俺、二人のところに行ってくる」

「ええ、頑張ってください……」

こうして、俺は委員長を残して駆けだした。

S i d e 麗華

「まったく……」



私は残つてからため息をつきました。私は委員長・・・生徒の模範であり続けなければならぬ。素行の悪い生徒や、不純異性交遊をする生徒を注意する立場でもある。でもそれと同時に、生徒が困っていたり悩んでいたりするなら、力になる。それが私の持つ持論だった。

「頑張ってくださいね・・・秋君」

私はもう一度走っている秋君にエールを送り、その場を後にすることになりました。ま、今度は委員長としてあの3人に対応しなければならぬんですけどね・・・

「委員長というのは、やはり辛いです・・・」

そんな私の呟きは、風の中に消えて行った

S i d e 雪乃

私はツアンと外を歩く。寮への足が自然とオシリスレッドの場所へ向こうとするのを直してブルー寮に戻ることにする。すると、数人の白い生徒に囲まれた。

「貴方達、何かしら？」

「藤原雪乃とツアン・ディレだな？再び白の結社に入れ」

「嫌よ。僕たちはあんな奴とは決別したんだから」

「そうよ・・・お断りするわ」

そもそも、あの齋王と言う名の男のせいで秋との絆が断ち切られたに等しいんだから。どんなことがあっても、あんな場所へは戻らない。

「そうか・・・ならば決闘だ」

「お断りよ。その手には乗らないわ」

十代の坊やに教えられたこと・・・白い生徒とはデュエルし、負けると洗脳されてしまう。だから決闘してはいけないと。

「ならば力づくで齋王様の元へ連れて行く!」

襲い掛かる生徒達。つく・・・

「触らないで!」

「つく! 離しなさい!」

抵抗するも抑えつけられた。つく・・・数が多すぎる!こんなに多い男たちは捌けないわ。このままじゃまた、私達は齋王に洗脳されてしまう・・・

(秋・・・ごめんなさい)

「やめろっ!」

諦めたその時だった。突然上がった声と衝撃。そして私達を掴んで

いた男たちが殴り飛ばされる。

「ぐあっ！」

「ぎゃっ！」

「こいつらに……汚い手で触ってんじゃねえ！」

そしてバランスを崩した私達を受け止めた一人の男……そこにいたのは

「秋！？」「

「貴様……武藤秋か！」

白い生徒を無視し、秋はデュエルディスクにデッキをセットして構えを取った。

「……雪乃、ツアン、俺は間違っていた」

「秋……？」

「俺は、俺はお前達が安全である方を選んでお前達を付き離れた……でも、実際は……きつと俺は……お前達を守れなかったことから目を背けていただけだったんだ」

言いながらデュエルディスクを展開させる秋の視線は前だけを見ていた。そして向こうの白の結社も、私達を取り押さえようとしていたリーダー格らしき男がデュエルディスクを構えている。

「俺はお前達が思っているほど強い人間じゃないし、実際強くもな  
んともない……でも、それでも俺は……お前らとした約束のた  
めに、傍にいます。傍に、いたい……」

秋との約束……

『何があっても守ってくれるかしら？』

『ああ、もちろん……』

あの言葉が蘇る。秋は、忘れてなんていなかった。私との約束を……

「だから、今度こそ……お前達を守る。行くぞ！お前達の相手は  
この俺だ！」

「つく……とんだ邪魔だが……お前を倒し、斎王様の光を浴び  
させてやるぞ！」

「<sup>デュエル</sup>決闘！」

負けないで、秋……

S i d e ツァン

突然、秋が僕達を助けた。どうして……ここに。そう思っている  
と、秋はデュエルディスクを展開していた。

「……雪乃、ツァン、俺は間違っていた」

秋は前を見たまま、喋り始める。いったい、何が間違っていたの？

「俺は、俺はお前達が安全である方を選んでお前達を付き離れた・  
でも、実際は・・・きつと俺は・・・お前達を守れなかったこと  
から目を背けていただけだったんだ」

「秋・・・」

雪乃にも聞こえないくらいの小さな声で、僕は秋の名前を呼んだ。

「俺はお前達が思っているほど強い人間じゃないし、実際強くもな  
んともない・・・でも、それでも俺は・・・お前らとした約束のた  
めに、傍にいる。傍に、いたい・・・」

約束と言われ、思い出すのはあの月の夜にした大切な約束と、僕の  
決心

絶対に、この手を離さない

「だから、今度こそ・・・お前達を守る。行くぞ！お前達の相手は  
この俺だ！」

「つく・・・とんだ邪魔だが・・・お前を倒し、斎王様の光を浴び  
させてやるぞ！」

「<sup>デュエル</sup>決闘！」

そこまで言うなら、僕はもう一度秋を信じる・・・だから、負けな  
いで、秋

## 守るべきもの(後書き)

というわけでデュエルです・・・頑張ります

ちなみに、ツイッターやってます。

やってるかたがいればフォローとか欲しいなとか思ったり思わなかったり

<http://twitter.com/#!/AKIKAZE7010>

ではまた次回！

## 星に願いを（前書き）

とりあえず、これで一区切りです。

そろそろ日常的話を書こうかなあ・・・

そして、5D・S編を楽しみにしていた方々、お待たせしました・・・

次回より、急遽5D・S編を上げます。お楽しみに！

秋「今日の最強カードは・・・また、ないのか」

ごめんなさい

## 星に願いを

S i d e 雪乃

秋が、私達を守るように光の結社たちの前に立ちふさがった。そして、その光の結社をまとめているリーダーらしき男とデュエルすることになった。あら？あの男・・・前に秋とデュエルした万丈目の坊やを慕っていた・・・えーと・・・名前なんだったかしら

「<sup>デュエル</sup>決闘!!!」

武藤秋      L P 4 0 0 0

五階堂      L P 4 0 0 0

ああ、思い出したわ。確か五階堂の坊やだったわね・・・

「先攻は俺だ！ドロー！」

先攻は五階堂の坊や。でも、あの子の実力で秋に勝るとでもいうのかしら。多分・・・いいえ、確定的に無理でしょうね。それにしても、この前まで一人称は『僕』じゃなかったかしら？『俺』に変わっているのは洗脳の影響かしら・・・

「俺はカードを裏守備表示でセット！さらに2枚セット！ターンエンドだ！」

3枚、カードを伏せただけ？一体何をたくらんでいるのかしら・・・秋、負けないで。



「俺のターンドロ―！俺は手札の『レベル・ステイラー』を墓地へ送ることで、『クイック・シンクロン』を特殊召喚！」

クイック・シンクロン ATK700/DEF1400

「さらに、クイック・シンクロンのレベルを下げて『レベル・ステイラー』を特殊召喚！そして墓地からのモンスターの特殊召喚に成功した時、『ドッペル・ウォリアー』を特殊召喚できる！」

ドッペル・ウォリアー ATK800/DEF800

フィールドにはシンクロン・・・秋がいつも使っているシンクロデッキ。なのになぜかしら、いつもと雰囲気が違うように見える。

「この瞬間、畏発動『激流葬』を発動！フィールド全てのモンスターを破壊する！」

「っ・・・！ならばカードを1枚セットし、ターンエンドだ！」

モンスターを並べた瞬間に吹き飛ばされるなんて・・・なかなかえげつない真似するわね、あの坊や。でも、あの坊やにあんな技術あったかしら？

「俺のターンドロ―！俺は伏せていた『スキルドレイン』を発動！ライフ1000をコストに、モンスターの効果を無効する！そして『神獣王バルバロス』を妥協召喚！」

五階堂 LP4000 LP3000

神獣王バルバロス ATK3000/DEF1200

「スキルドレインの効果で効果は無効だ！そして『二重召喚』を發動して『可変機獣 ガンナードラゴン』を妥協召喚！効果は同じく無効だ！」

可変機獣 ガンナードラゴン ATK2800 / DEF2000

スキルドレインによるビート！？最上級モンスター達が一気に・・・これは酷いわ。秋、大丈夫なの？

「そして、装備魔法『白のヴェール』をバルバロスに装備する！このカードの効果により、装備モンスターが攻撃する場合、相手フィールド上に存在する魔法・罫カードはダメージステップ終了時まで全て効果が無効化される！いけ！バルバロス！」

「させるか！手札から『バトルフェーダー』を特殊召喚する！これによりバトルフェイズを終了する！ちなみにバトルフェーダーの効果は手札からだ。よって効果は発動可能だ」

「っち、命拾いしたな・・・俺はこれでターンエンドだ」

なんとか防いだけど、次はこうはいかないはず・・・秋、頑張つて

「俺のターンドロ―！俺は伏せていた『リミット・リバーズ』を發動！このカードの効果で俺は『クイック・シンクロン』を墓地から蘇生させる！」

クイック・シンクロン ATK700 / DEF1400

「レベル1のバトルフェーダーに、レベル5のクイック・シンクロ

ンをチューニング！」

1 + 5 〃 6

「疾風の使者よ、鋼の願いが集う時・・・その願いは、鉄壁の盾となる！光差す道となれ！シンクロ召喚、現れる『ジャンク・ガードナー』！」

ジャンク・ガードナー ATK1400/DEF2600

でてきたのはジャンク・ガードナー・・・これなら、攻撃を2回まで防ぐことが出来るって、ああ！スキルドレインのせいで効果を使うことが出来ない！

「そして、カードを1枚伏せてターンエンド」

「俺のターンドロロー！俺は『強欲な壺』でカードを2枚ドロロー！バトルだ！行け、バルバロス！そのモンスターを破壊しろ！」

バルバロスはそのまま突進し、ジャンク・ガードナーを破壊した。

「ジャンク・ガードナーが破壊された時、墓地から効果を発動！モンスター1体を守備表示にする！」

守備表示になるガンナードラゴン・・・秋に焦りが見える。この前まで弱かったはずの五階堂の坊やがこんな戦術を使ってくるなんてやっぱり、あの斎王と言う男は生徒たちのデッキをいじっている。

「そして畏発動！『奇跡の残照』！このターン、破壊されたモンスター1体を復活させる！」

ジャンク・ガードナー ATK1400 / DEF2600

「ならば俺はターンエンドだ」

フィールドにはガンナードラゴンとバルバロスがいる。スキルドレイン・・・このカードのせいで秋は本来のデッキの効果を活かしきれてはいない。

「どうだ！これが光の結社の力だ！圧倒的力！圧倒的な支配力！この力でお前を蹴散らす。俺に屈辱を与えた貴様をな！」

「・・・・・・・・俺のターン」

秋は五階堂の坊やを無視し、カードに手を駆ける。

「ドロー！俺は『命削りの宝札』で5枚ドロー！そして手札からチユナーモンスター『スポーア』を召喚！」

スポーア ATK400 / DEF800

「そして、『サイクロン』でスキルドレインを破壊！」

再び発動されるサイクロン。これで効果が使える。でも、この状況で秋は一体何を・・・

「さらに俺は『愚かな埋葬』を発動。デッキから墓地へ『ダンディライオン』を送る。そしてこれにより、トークンを強制召喚！」

綿毛トークン？ ATK0 / DEF0

綿毛トークン？ ATK0/DEF0

「レベル1の綿毛トークン1体と、レベル6のジャンク・ガードナ  
ーに、レベル1のスポーアをチューニング！集いし願いが、新たに  
輝く星となる！光差す道となれ！シンクロ召喚、飛翔せよ！」スタ  
ーダスト・ドラゴン」！」

スターダスト・ドラゴン ATK2500/DEF2000

現れるのはスターダスト・ドラゴン。現在守備表示のガンナードラ  
ゴンを破壊するには十分な攻撃力だわ。

「いけ！スターダスト・ドラゴン！可変機獣 ガンナードラゴンを  
攻撃！」シューティング・ソニック」！」

「させるか！速攻魔法『神秘の中華なべ』を発動し、ガンナードラ  
ゴンを生贄に捧げる！」

五階堂 LP3000 LP5800

「カードを2枚伏せてターンエンド！」

フィールドはバルバロスがいる。そしてライフも大幅に回復された。  
・バルバロスがフィールドにいるけど、秋ならきつとなんとかす  
るはず……

「俺のターンドロー！」

「この瞬間、『砂塵の大竜巻』を発動し、白のヴェールを破壊する

「！」

「つく・・・！バトルだ！行け、バルバロス！スターダスト・ドラゴンを攻撃！」

「永続罨オープン！『シンクロ・ストライカー・ユニット』！このカードは装備カードとなり、シンクロモンスターに装備する！装備したモンスターの攻撃力を1000ポイントアップする！」

スターダスト・ドラゴン ATK2500/DEF2000 AT  
K3500/DEF2000

攻撃力が上がり、バルバロスはシューティング・ソニックによつてかき消された。これで白のヴェールの効果分も大ダメージを与えることが出来る！

「ぐあああああつ！」

五階堂 LP5800 LP5300

「つくぞ、くぞ、くそお！俺は『命削りの宝札』を発動し、カードを5枚ドロー！2枚伏せる。そして『死者蘇生』でバルバロスを蘇生！ターンエンド！何故だ、俺は斎王さまの力を得て、絶対的な力を得たはずなのに・・・！」

神獣王バルバロス ATK3000/DEF1200

スターダスト・ドラゴン ATK3500/DEF2500 AT  
K2800/DEF2000

悔しがらる五階堂の坊や。まあ、当然よね・・・自分の力でもないのでそれを自分の力と過信し、秋に勝負を挑んだのだから

「お前は勘違いしている・・・」

「何!？」

秋は鋭い目で五階堂の坊やを睨みつける。

「それは斎王に与えられた力だ・・・お前の力じゃない。そして何より、お前はカード達を信じていない。そんなお前が俺に敵うはずない・・・見せてやる、お前に俺の力を・・・絆を信じた先にある光・・・お前達のまやかしの光を打ち砕く!俺のターン!」

そう言いながらドローする秋。その雰囲気はいつもとは何かが違っていた。

「俺は、伏せていた畏カード、『エンジェル・リフト』を発動!レベル1のスポーアを蘇生する!」

スポーア ATK400/DEF800

スポーアを蘇生・・・?ここで出すならダンディライオンを除外してレベルを4にし、綿毛トークンとチューニングでカタストルを召喚すれば秋の勝ちだと思っただけれど・・・

「行くぞ、レベル1の綿毛トークンと、レベル1のスポーアをチューニング!」

レ、レベル2のシンクロモンスター!?今まで、そんなモンスターを秋は使ったことがないはず・・・いえ、記憶の隅に何か違和感がある。秋が私達と戦った時、同じことをしたような・・・?

「集いし願いか、新たな速度の地平へ誘う!光差す道となれ!シンクロ召喚!希望の力、シンクロチューナー」フォーミュラ・シンクロン!」

「シンクロチューナー!?!」

シンクロモンスターのチューナー・・・!?初めて見るカードだね。そして気になる言葉・・・希望の力というもの。いったい、あのモンスターにどんな力があるというの・・・?

「このカードの召喚に成功した時、カードを1枚ドロ!今の俺には見える・・・大切な物を・・・愛する人を守るために得た力・・・!クリア・マインド!」

一瞬、秋の背中に何か赤い円のようなものが光った気がした。アレは一体・・・?それにしても、愛する人・・・そう言われて顔が赤くなった。隣にいたツアンも、同じように顔を赤くしている。秋の言葉が、今日は一層温かく聞こえる。

「レベル8シンクロモンスター、スターダスト・ドラゴンに、レベル2シンクロチューナー、フォーミュラ・シンクロンをチューニング!」



シンクロモンスター同士をチューニングさせるなんて・・・そんな召喚方法が!?

「集いし夢の結晶が、新たな進化の扉を開く!光差す道となれ!アケセルシンクロオオオオオ!」

「消えた!?!」

スターダスト・ドラゴンがフォーミュラ・シンクロンと共に空へと消えていく。そして秋が持っていた白紙のカードに、絵が宿る。さらに秋の後ろから光の輪が出現し、そこから1体のモンスターが飛び出した。

「生来せよ、『シユーティング・スター・ドラゴン』!」

「シユーティング・スター・ドラゴン・・・」

「綺麗・・・」

その強い輝きを放つ、ドラゴン。流星の龍の何相應しい姿と輝きは、今まで見て来たスターダスト・ドラゴンの輝きを超えていた。

「行くぞ、シユーティング・スター!」

シユーティング・スター・ドラゴンが吼える。この声・・・そうだが、私は聞いた・・・この凛々しく、美しい声を・・・これが、シユーティング・スター・ドラゴン

「シユーティング・スター・ドラゴンの効果を発動!デッキの上からカードを5枚確認し、チューナーの数だけ攻撃できる!」

カードを5枚引き抜く秋。いったい、何枚のカードがチューナーなの？

「俺が引いたチューナーはジャンク・シンクロン、エフェクト・ヴェーラー、グロリアップ・バルブ、そしてゾンビキャリア・・・4枚のチューナーだ、よってこのターン俺は4回の攻撃が出来る！行け、シューティング・スター・ドラゴン！『スターダスト・ミラーシユ』！」

シューティング・スター・ドラゴンが3体に分裂し、1体目のシューティング・スター・ドラゴンがバルバロスへと向かって行く。

「1回目のバトル！神獣王バルバロスを攻撃！」

「ぐっぐっぐっ！」

五階堂    LP5300    LP5000

「2回目のバトル！ダイレクトアタックだ！」

「と、畏カード『リビングデットの呼び声』を発動！蘇れ『神獣王バルバロス』！」

神獣王バルバロス    ATK3000 / DEF1200

再び召喚されるバルバロス。でも無駄よ、後攻撃は2回残っているのだから

「バトル続行！バルバロスに攻撃だ、シューティング・スター・ド

ラゴン！」

五階堂 LP5000 LP4700

「3回目、4回目のバトル！シューティング・スター・ドラゴン、ダイレクトアタック！」

「う、うわああああああああっ！」

五階堂 LP4700 LP0

その場に倒れる五階堂の坊や。他の光の結社の生徒が担いで行ってしまった。そして残ったのは私とツアン、そして・・・秋

「えつと・・・」

なんて言い出していいかわからないという感じの秋。私達はとりあえず、秋に抱きついてみた。

「え、ちょ・・・！？おい、雪乃、ツアン・・・？」

Side秋

ゆっくりと歩み寄ってくる二人。二人にあんなことを言ったんだ。殴られても仕方がない。そう思っていた。だが二人は俺が思っていたことと真逆の行動に出ていた。俺の体に抱きついて来ていた。

「え、ちょ・・・！？おい、雪乃、ツアン・・・？」

「何も言わないで、秋・・・」

雪乃に言われても、動揺は隠せない。二人はただただ俺を強く抱きしめている。そして震えているのが分かる。俺も二人を強く抱きしめる。

「ゴメンな、二人とも・・・もう、離さないからな・・・」

俺は再び誓う。今度こそ、俺は二人を守るのだと。どんな外敵からも、どんな脅威からも、この二人を守ると・・・

\*

レッド寮

「2日来なかったただけなのに、久しぶりに帰ってきた感じね」

「そうね、このボロい感じがね・・・」

と、二人とレッド寮に戻ってきた。いつの間にか二人はまとめてあった荷物を持ってきていた。そして部屋を開ける。

「ただいまー」

「あ、秋さん！それに雪乃さんとツァンさん、お帰り！」

部屋にいたのはレイとレインだ。

「ただいまレイ・・・あら？その子は誰？」

「ああ、この子はレイン恵って言って・・・」

そこで俺は言葉を止めた。そういえば、こいつらレインのこと知らないんじゃないの・・・？洗脳されてからレインと知り合ったし・・・。そんなことを思っていると、レインが俺のところへ寄ってくる

「これ・・・」

「ん？」

渡されたのは最近世話をしているネコの餌のお金だった。

「どうすれば・・・」

「あ・・・後でやっとく、心配するな」

「ん・・・」

俺が頭を撫でると、嬉しそうにしているレイン・・・はっ！このま  
ずいと思っている状況で無意識に手が！？後ろから不穏な空気を感じ、  
ゆっくりと後ろを振り返る。

「秋・・・」

がっしりと肩を掴まれる俺。

「えーと・・・」

「お話ししようか・・・」

「はい・・・」

この後、結局怒られる俺だった。でも、俺の取り戻したかったものは確かに今俺の手の中にあった。

星に願いを（後書き）

次回より5D・s編やりますw

ツイッター

<http://twitter.com/#!/AKIKAZE7>  
010

よろしければフォローお待ちしております

## 導かれた者（前書き）

というわけで、5D・s 編始まります。

かなり書き溜めているので、結構な速度で更新できます・・・まあ、書きためた場所までは

それと同時進行で本編も書いていくので遊戯王中心になって行きます

ま、楽しんでってください

ツイッターやってます・・・

<http://twitter.com/#!/AKIKAZE7010>

後書きだと見てくれる人が少ないかなと思ってやってみました（笑）

秋「おい、そのツイッターのせいで今日の最強カードがないってどういうことだ」

だつて、デュエルしないから・・・仕方ないだろ

秋「よし、ちょっとこつちこい」

あ、ちよ、なにすんだ・・・やめ・・・あーっ！

秋「5D・s 編・・・始まるぜ！」



## 導かれた者

Side ????

また、駄目だったか・・・

この世界は必ずや破滅の方向へ向かって行く・・・・・・・・未来は破滅し、消えていく

やはり未来は変えられないのだろうか・・・

いや、待て・・・まだ希望はある。まだ、一つの可能性が・・・残されている

未来を今度こそ、正しき方向へ・・・・・・・・

Side秋

「ここ、どこ?」

気が付くと、知らない場所に俺は立っていた。立ち並ぶビル群。ここは一体どこだろうか。とりあえず、周囲に十代達の姿がない。卒業して旅に出た俺と十代。そして雪乃とツアンたち。だが、今俺は一人ということらしい。やれやれ・・・また何かの厄介事か

「とりあえず、場所の把握をしないとな」

周囲を見ると、信じられない物を見つける。

「アレは、ジャック・アトラス……の看板」

キング ジャック・アトラスの無敗神話DVD好評発売中！と書かれたでっかい看板を見つける。やれやれ、どうやらここは未来ということらしい。カードは……カードは……あれ！？マハードとミラがいねえ……って、遊戯兄さんに返したんだった。忘れてたぜ

「（ミラ……ミラ？）」

『マスター！おはようございます……って、どこどこですか？』

カードから出てきたミラも首を傾げる。やはり、この場所はミラにもわからないらしい。

「（ここは未来の町……ネオドミノシティみたいだ）」

『ええ！？ここって未来なんですか！？』

驚きを隠せないミラ。まあ、そりゃそうか。とりあえず、これからどうするかなあ……

「とりあえず、と……」

ここが未来であるのなら、俺の銀行口座はどうなっているのだろうか？コンビニらしき場所を見つけてATMを確認した。残高が凄いことになってるんですけど……（汗）

「何十年も使ってなければそうなるよな」

利息が重なり、重なり、重なりまくってこの額か。でも安心した。これで未来俺が元々いる世界のものと代わりがないということが分かったのだから、それはそれで良しとしたい。とりあえずATMから十万円を降ろした。未来なのに引き出せる最大残額変わらないんだ・・・まあいいか。銀行からお金を降ろし、コンビニを出る。

『マスター、これからどうするんですか？』

「（んー・・・どうしようか、どうしたい？）

『そうですねえ・・・とりあえず、私だったら宿を探しますけど』

宿、か・・・そういえばここって未来なんだよな。凜はどうなったんだろう。結婚したのかな？そうしたら子孫とかいそうだけど・・・ご先祖の兄が来たって言っても信じないだろうしなあ。てか、ゼロ・リバースのせいで色々と地形変わってるし、どこに住んでいることやら。

「適当に宿でも探すか・・・はあ」

カードは相変わらず沢山トランクに入ってたままだ。これならまた十分デッキが組める。そして何より楽なのはこの世界で公然でシンク口やっても驚かれないだろうということだ。エクシーズ召喚は問題があるだろうけど他は問題あるまい。そして何より、この時代ではゴヨウ・ガーディアン使えたよな・・・ニヤリ。そんなことを考えながら町を歩いていると、大きな建物を見た。デュエルアカデミア  
ネオドミノシティ校・・・へえ

「ここがデュエルアカデミアかぁ・・・時代も変わるところも違うのか」

そこにそびえたつのは立派な学校だ。綺麗で広い校舎だ・・・ちょっと中を見学してみたいが、今の俺は不審者だろうし、立ち去るでしょう。俺が探しているのは宿だしな。すると、生徒たちが歩いている。どうやら下校時間のようだ。俺はそこから立ち去る。さて、宿を探しに・・・

「あ・・・」

「うん？」

そこに立っていたのは緑色の髪をした少女と、少年。私服のその子たちが双子であるというのが分かった。そしてその双子がこの世界で、この時代で、重要な役割を担っているということも俺は知っている。

「何か用かな？」

「あの、えっと・・・その、貴方の横にいるのは・・・」

少女、龍可

が口ごもりながら俺に聞いてくる。まあ、おおかた俺の隣にいるミラのことを気に成るんだらう。この子の隣にいるクリボンも俺のことを不思議そうに見つめている。

「俺の精霊が見えるのか？」

「やっぱり！貴方も精霊が見えるんですね！」

と、何やら嬉しそうな龍可。ふむ、イマイチ話が読めないのだが・

「えーと？」

「あ、ごめんなさい・・・その、私以外に精霊を持つてる人を見たのが初めてだったからつい」

「いや、気にすることはない。ただ、人に話しかける時はまず自己紹介だな」

俺が言うと、龍可は慌てる。

「う、ごめんなさい突然。私、龍可」

「俺は龍可！へー、大人でも精霊って見えるんだな。俺は見えないけど」

「あ、あはは・・・そうだな、信じていけばいつかは見えると思うぞ。ミラ、今は人がいないから実体化していいよ」

「はいっ！」

と、出てくるミラ。二人はその様子に驚いていた。

「せ、精霊が実体化した・・・」

「これがカードの精霊・・・」

驚いている二人。まあ、ミラは特別なカードだからな。実体化も出来れば他にもいろんなことが出来る。たとえば俺を物理的に守ったり、魔法を現存しているものにぶつけたり。

「こいつは『久遠の魔術師ミラ』だ」

「ミラです。精霊を見ることが出来る人を久しぶりに見ました。よろしく願います」

「あ、こちらこそ・・・見えると思うけど、私の精霊はクリボンよ」  
『クリクリ』

と、俺の周りを飛ぶクリボン。遊戯王ではクリボー、GXはハネクリボー、5D'sはクリボン、そしてZEXALではクリボルトだ。どのシリーズにおいても、この茶色い毛玉は愛されているだろう。

「そういえば、まだ貴方の名前を聞いてないんですけど・・・」

「ああ、失礼。俺の名前は武藤秋というんだ。よろしくな」

そう言って龍可、龍亞と握手する俺。すると、龍亞が固まった。

「どうしたの？龍亞」

「ねえ、今・・・武藤秋って言った？」

「ああ、どうし・・・やべっ」

しまった、俺この前十代倒しちゃったから決闘王になってたんじゃ

ん。雪乃が十代と戦うのは2代目決闘王と戦うことと同義だから、ちゃんとした場所でやるとか言ってアメリカのデュエル場で正式な決闘王とのデュエルをしたんだっけ。十代ものりのりで本気で戦った末に俺が勝って決闘王になったんだっけ。決闘王になって2カ月だが、少なからず名前が残ってしまっているのだろう。

「武藤秋って・・・あの決闘王と同じ名前・・・」

「え？あ、そういえば・・・偶然かしら？」

龍可が首を傾げると、慌てて龍亞が鞆を開ける。それに乗るのはデュエルモンスターの歴史と書かれた雑誌。そして俺にこれを指差した。

「偶然じゃないよ！これ！この写真って数少ない武藤秋のデュエルアカデミア時代の写真！」

それに映るのは俺、十代、雪乃、ツアン、明日香、そしてレイに翔、剣山、吹雪さん、万丈目、三沢が映る写真。書かれている題材は、デュエルアカデミア黄金時代を築いた決闘者達という項目だ。

「ここに映っている写真と、顔がそのまんまなんだ！」

「本当だわ。じゃあ、本当にあの武藤秋さんのの？」

「エー・・・ヒトチガイジャナイカナ？」

と、ふいと目を逸らしたが・・・

「嘘つけー！」「」

一発で否定されてしまった。

S i d e 龍可

私達が散歩していると、学校の校門の前に黒い服を着た男の人が学園を眺めていた。でも私はそれより驚いていたのはその隣にいたカードの精霊だった。楽しそうに精霊が話しかけているのを見て、私はその男の人が精霊を見ることが出来るのだろうと確信した。そして興味本位に、その人に話しかけて見た。話してみると精霊が実体化するというビックリするものを見た。クリボンにはそんな力はな  
いみたいだけど、このミラという人は特別な精霊らしい。そして・

「武藤秋って・・・あの決闘王と同じ名前・・・」

3代目決闘王である武藤秋。その名前は非常に有名な物。2ヶ月だけの決闘王。それ以来は一切の音沙汰がない決闘王。それ以降は4代目決闘王ジャック・アトラスが君臨し続けている。龍亞が私達に見せた写真は間違いなく本人

「ここに映っている写真と、顔がそのまんまなんだ！」

「本当だわ。じゃあ、本当にあの武藤秋さんなの？」

「エー・・・ヒトチガイジャナイカナ？」

と、武藤秋さんはふいと目を逸らした・・・



「嘘つけ！」

思わず龍亞と一緒に叫んでしまったけど、この反応からすると本当に本物みたい。でも、そうなると疑問があるわ。なぜその3代目決闘王が私達の目の前にいるのかしら？3代目決闘王がいたのはもう何十年前の話。見たところ20歳くらいだし・・・この年で60歳ですなんてことはないだろうし。

「でもさ、秋さんって今何歳？どう見ても20歳くらいだけど」

「今年で21歳」

「でも、この写真つてもう何十年前も前だよね？なんで？？」

秋さんは少し困った顔になったけど、私達に改めて向き直った。

「今から話すのは多分信じられない話だけど、どうする？」

「俺聞きたい！」

「私もちよつと興味あるかも」

私達が言うと、秋さんとミラさんは頷いた。そして次に私達が聞いたのは、信じられないことだった。

「実はね、俺達はその写真の時代の人間なんだ」

「「？」」

俺がそう一言言うと、よくわからないという感じに首を傾げる二人。俺はさらに簡単な説明を加えた。

「気づいたらこの場所において、俺達はその辺を歩いてたんだ。つまり、俺達はタイムスリップしてきちゃったんだ」

「タイムスリップ・・・」

信じられないというような顔をする二人。そりゃまあ、普通なら信じられないだろうな。まあ、信じられないならそれはそれでいいんだけど。まあ、俺自身もまだ信じられないけどな

「それじゃ、俺達はそろそろ行かないと」

「行ってくて、どこに？」

「なにぶん、過去の人間なものでね・・・宿でも探さない」と

俺が言うと、突然龍亞が慌てる。

「俺、秋さんの話信じるよ！うちに来ない？うちなら空いている部屋が沢山あるんだ！」

「そうね、私も信じる。精霊を持っている人に悪い人はいないと思うから。私も信じるわ」

「二人とも・・・」

なんとも、二人ともいい子たちだ。普通こんな話信じないだろうに・  
・俺としては信じてくれるのは嬉しいが、この子達の未来がちょ  
っただけ不安だ。

「でも、いいのか？」

「それに、過去から来たってことは身分証明できるものがないでし  
よ？そんなんじゃない、セキュリティに捕まっちゃうよ」

セキュリティ・・・ああ、そういえばそんなんいたな。

「うん、だから一緒に行こう！ほら！」

そう言われて引つ張られる俺。やれやれ、俺はついていくしかなさ  
そうだ。こうして、俺は一緒についていくことにした。

ネオドミノシティ トップス

「でけえ・・・」

上層地帯『トップス』。その最上階・・・二人の住まいだ。広い。  
とにかく広い。この二人の両親はいつたい何者なんだろうか。二人  
の両親はアニメでは一回も登場してないからな

「ようこそ、我が家へ！」

「荷物はそこに置いてね」

庭は広く、プールもある。原作通りと言ってしまえばそこまでだが、実物はかなり広い。テレビの目線と実際の目線というのはやはり違うものだ実感する

「ねえねえ！デュエルしようよ！」

「デュエルを？」

「だって、目の前に3代目決闘王がいるんだもん！俺の力がどこまで通じるか試したいんだ！」

「もう、龍亞・・・失礼でしょ？ごめんね秋さん」

デュエル、か・・・確かに、この世界のデュエルというのも悪くないだろう。

「良いだろう、この決闘王3代目武藤秋、その挑戦受けよう」

「いやったあ！」

なんて言ってみたがどうしようかな・・・デッキ。デッキがあるのはいいが、エクシースデッキはビックリされるだろうし、シグナーの龍は使わないほうがいいだろうし、ここは・・・しょうがない、このデッキで行こうか。俺と2人は外へ出る。龍可はベンチに座って観戦するらしい・・・が

「おい、龍亞・・・大丈夫か？」

「うん！おっとと・・・」

デュエルディスクが何と言うか、でかい。ものっそいでかい。俺が使っているアカデミアのものはまた違うせいかな、重いようだ。えーと、確か遊星が龍亞の手をデュエルディスクと固定してたのを覚えてるな……

「ミラ、リボン貸してくれる？」

「はい、マスター」

リボンを龍亞の手に結び、固定してやる。

「これでいいか？」

「うん！ありがとう！じゃあ早速！」

と、デュエルディスクのシャッフルが始まる。そうだった、この時代はオートシャッフル機能が付いてるんだな、羨ましい……。俺は手でデッキをきると、ディスクにそれをセットした。

「さあ、始めようか」

「うん！いくつぞー！」

「「デュエル  
決闘！」」

導かれた者（後書き）

次回、秋VS龍亞です。ようやくこの小説で初・・・相手がシンク口です

ではまたw

星を宿す者（前書き）

というわけで、早速更新です

授業の合間に更新してます。ストックがあると調子乗って更新してしまいますので、後で痛い目を見るのが目に見えていってしまうがな  
い（汗

では、どござ

龍亞・龍可「なーにつかな、なーにつかな！今回は、コレ！」

龍亞「おっしゃー！パワー・ツール・ドラゴンだ！」

龍可「1ターンに1度、デッキから装備魔法をサーチ出来るわ」

龍亞「ねえ龍可、このコーナー確かアニメだとダークシグナー編からじゃない？」

龍可「気にしたら負けよ・・・」

## 星を宿す者

Side 龍可

「<sup>デュエル</sup>決闘！」

武藤秋 LP4000

龍亞 LP4000

二人のデュエルが始まった。私の知る限り、武藤秋という人物は2カ月という間でも決闘王として名をとどろかせた人物であると認知している。といっても、歴史の教科書程度だけ……

「先攻は譲る……こい！」

「いよっしゃー！俺のターン！シャキーン！」

カードをドロースする龍亞。でもやっぱりディスクが重くてよろけてしまう。大丈夫かしら？龍亞が使っているのはDデッキ<sup>デュフォーマー</sup>。対して秋さんは一体何を使うつもりかしら？記録だと色々なデッキを使っているみたい……

「俺は手札から『D・キャメラン』を守備表示で召喚！」

D・キャメラン ATK800/DEF600

「カードを2枚伏せて、ターンエンド！」



「D……か」  
ディフォーマー

「そっか、Dのシリーズは最近出たばかりだから珍しいのかしら？  
秋さんの時代にはないはずだわ。」

「へっへー！かっこいいでしょ！」

「ああ、個性的なモンスターだ……さて、俺のターンだ」

「空気が変わったのが分かる。少しだけ秋さんの目がするどくなった。」

「俺のターンドロー！行くぜ、十代……俺は手札から『E・HEROエアーマン』を召喚！」

E・HEROエアーマン ATK1800/DEF300

E・HERO！？にしては、初めて見るかも……珍しいのかしら？

「このカードの召喚に成功した時、HEROと名のつくモンスターを手札に加える。俺は手札に『E・HEROオーシャン』を加える。そして『融合』を発動！フィールドのエアーマンと手札のオーシャンを融合！現れよ、『E・HEROアブソルトZero』！」

E・HEROアブソルトZero ATK2500/DEF2000

「初めて見るE・HERO……2代目決闘王もHEROを使っているのは知っているけど、秋さんも使うだなんて……」

「すっげー……！初めて見たよ、そんなHERO！」

「そうか・・・バトルフェイズ！アブソルートZeroでカメランを攻撃！『瞬間凍結』！」

「させないよ！畏発動『デIFOORM』！攻撃を無効にしてDと名のつくモンスターの表示形式を変更するよ！」

攻撃表示となったD・カメラン・・・カメランは守備表示ならデIFOORM  
「D」と名のついたモンスターを魔法・畏・効果モンスターの効果の対象にする事はできない。そして攻撃表示ならバトルで破壊された時レベル4以下のDと名のついたモンスターを特殊召喚できる。

「ならば、カードを2枚伏せターンエンド」

「いつくぞー！俺のターンドロー！いよっし！『D・モバホン』を召喚だ！」

D・モバホン ATK1000/DEF1000

「モバホンのモンスター効果！ダイヤルを回してその数だけカードをめくり、その中にDと名のついたモンスターがいたら、1体を特殊召喚できる！ダイヤルオン！」

ダイヤルが光る。出たダイヤルは・・・4

「4枚引いてと・・・お！もう一枚のモバホンだ！モバホンを特殊召喚！」

D・モバホン ATK1000/DEF1000

「もう一回ダイヤルオン！」

もう一度行われるダイヤル。今度出たのは・・・5ね。龍亞のデッキがとてもよく回ってる。デュエルディスクの重さに耐えられないのは相変わらずだけど

「5枚ドローして確認！えーと・・・ディフォーマーD・スコープン！このカードを特殊召喚だ！じゃじゃーん！」

D・スコープン ATK800/DEF1400

これでレベルの合計は7・・・龍亞のエースの登場ね。秋さんは少し驚いた顔している。どうしてレベルの低いモンスターばかり出すのかきつと気に成るのね

「いづくぞー！レベル1のモバホン2体と、レベル2のカメラマンにレベル3のスコープンをチューニング！」

1 + 1 + 2 + 3 = 7

「世界の平和を守るため！勇気と力をドッキング！シンクロ召喚！愛と正義の使者！『パワー・ツール・ドラゴン』！」

パワー・ツール・ドラゴン ATK2300/DEF2500

「パワー・ツール・ドラゴン・・・」

ビックリしている秋さん。説明したほうがいいのかも

「秋さん、シンクロ召喚はレベルの合計でモンスターを特殊召喚す

るの。それにはチューナーが必要なんだけど、さっきのモンスターにはスコープンがチューナーだったのよ」

「なるほどね・・・了解した。龍亞、続けてくれ」

「オツケー！パワー・ツール・ドラゴンの効果発動！装備魔法をデッキからランダムに手札に1枚加えるんだ！『パワー・サーチ』！なーにかな、なーにかなっ！っ！」

引き出される1枚のカード。それを龍亞がドロ―する。

「やった！俺ってばついてる！『ダブルツールD&C』をパワー・ツール・ドラゴンに装備！このカードを装備していると装備モンスターの攻撃力は1000ポイントアップする！そして装備モンスターが攻撃する場合、バトルフェイズの間だけ攻撃対象モンスターの効果は無効化されるんだ！」

パワー・ツール・ドラゴン ATK2300/DEF2500 A  
TK3300/DEF2500

「バトルだ！パワー・ツール・ドラゴンでE・HEROアブソル―トZeroを攻撃！『クラフティ・ブレイク』！」

武藤秋 LP4000 LP3200

「やるな・・・だが、ここで畏発動！『ヒーロー・シグナル』！モンスターが戦闘で破壊された時、自分のデッキ、または手札からレベル4以下の『E・HERO』を特殊召喚する！来い、『E・HEROフォレストマン』！」

E・HEROフォレストマン ATK1000/DEF2000

「そして墓地のアブソルutzeroの効果発動！このカードがフィールドを離れた時、相手フィールド上に存在するモンスターを全て破壊する！」

「な、なんだつてえ！？だったらパワー・ツール・ドラゴンが破壊される時、代わりに装備されたカードを墓地へ送る！カードを1枚伏せてターンエンドだ！」

あのE・HERO・・・すごい力を持っているのね。あんな効果初めて見たわ。

「俺のターンドロー！スタンバイフェイズ、フォレストマンの効果によりデッキ、または墓地から『融合』を加えることができる。俺はデッキから融合を加える」

「な、なんだつてえ！？」

すごい、秋さんの使うHEROには1体1体、強力な効果が宿っている・・・

「そして手札から『融合回収』を発動。墓地のエアーマンと融合を手札に戻す。そして再び『E・HEROエアーマン』を召喚！」

E・HEROエアーマン ATK1800/DEF300

「効果により、俺はデッキから『E・HEROネクロダークマン』を手札に加える。そして融合を発動！フィールドのフォレストマンとネクロダークマンを融合！現れる『E・HEROエスクリダオ』」

「！」

E・HEROエスクリダオ ATK2500/DEF2000

「このカードの攻撃力は墓地のE・HEROの数だけ上がる」

出てきたのは黒い体をしたHERO。E・HEROって正義の味方よね？あれ、正義の味方かしら・・・それはさておき、えーと、墓地のカードはネクロダークマンとアブソルトZero、オーシャン、フォレストマンの4体。つまり攻撃力は2900ね。

E・HEROエスクリダオ ATK2500/DEF2000 A  
TK2900/DEF2000

「さらに、融合を発動。フィールドのエアーマンと、手札の『E・HEROバーストレディ』を融合！現れる、『E・HEROノヴァ・マスター』！」

E・HEROノヴァ・マスター ATK2600/DEF2100  
E・HEROエスクリダオ ATK2900/DEF2000 A  
TK3100/DEF2000

攻撃力3100と攻撃力2600のモンスターが立ち並ぶ。すごい・

「バトル！パワー・ツール・ドラゴンにノヴァ・マスターで攻撃！」

「うわあっ！パワー・ツール・ドラゴン！」

龍亞 LP4000 LP3700

「ノヴァ・マスターがモンスターを破壊した時、カードを1枚ドロ  
ーする。そしてダイレクトアタック！エスクリダオで攻撃だ！『D  
ark（ダーク） diffusion（ディフュージ  
ョン）』！」

「うわあああああああつ！」

龍亞 LP3700 LP600

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「お、俺のターンだ！まだまだ、諦めないもんねー！ドロー！しゃ  
きーん！」

そうやってカードをドローする龍亞。もう勝負見えてるんだからや  
めたらいいに。すると、龍亞の表情が一気に明るくなった。

「よし、まだチャンスはある！俺は手札から『死者蘇生』を発動  
！戻って来い『パワー・ツール・ドラゴン』！」

パワー・ツール・ドラゴン ATK2300/DEF2500

「そして効果発動！パワー・サーチ！」

再びカードを引く龍亞。引いたカードは一体何かしら？

「いよつしゃあ！俺が引いたのは『巨大化』！パワー・ツール・ド  
ラゴンに装備！」

パワー・ツール・ドラゴン ATK2300/DEF2500 A  
TK4600/DEF2500

巨大化するパワー・ツール・ドラゴン。すごい迫力ね。

「いつくぞー！パワー・ツール・ドラゴンでE・HEROノヴァ・マスターを攻撃だ！『クラフティ・ブレイク』！」

武藤秋 LP3200 1200

E・HEROエスクリダオ ATK3100/DEF2000 A  
TK3200/DEF2000

「俺はカードを1枚伏せて、エンドエンド！」

「やるな・・・龍亞、君は強い」

まあ、いつもはデュエルタクティクスが低いせいでミスばかりするけど、今日は以外に安定している。これは勝負が分からないわ。

「へっへーん！決闘王に褒められるなんて照れるぜ！」

「だけど、その油断はいけないな・・・龍亞、最後まで気を引き締めることだ」

そう言つて秋さんはカードをドロ―した。

「俺のターンドロ―！よし、行くか、十代！俺は『ホープ・オブ・ファイフス』を発動！墓地のノヴァ・マスター、ネクロダークマン、



エアーマン、バーストレディ、アブソルートZeroを墓地に戻してシャッフル、2枚ドロロー！」

E・HEROエスクリダオ ATK3200/DEF2000 A  
TK2700/DEF2000

どうしてわざわざ墓地のカードを戻したのかしら？そんなことしたらエスクリダオの攻撃力が下がっちゃうのに。でも、この状況で秋さんは少しだけ笑っていた。

「来たか・・・俺は手札から『E・エマージェンシーコール』を發動！手札に『E・HEROエアーマン』を加える！そして『E・HEROエアーマン』を召喚！」

E・HEROエアーマン ATK1800/DEF300

「効果発動。発動するのは第一効果・・・このカード以外のHEROと名のついたモンスターの数だけ魔法、罫を破壊する！俺は・・・俺は、伏せられたカードを破壊だ！」

伏せカードを破壊！？伏せられていたのは・・・ミラーフォース。でも、巨大化を破壊するべきだとも思えるけど・・・攻撃力は相変わらず4600だし、どうやって超えるつもりなのかしら。

「なんで伏せカード？確かにミラフォだったけど・・・そのモンスターたちじゃ俺のパワー・ツール・ドラゴンは倒せないよ？」

「それはどうかな？龍亞、言っただろう・・・最後まで油断は禁物だ。俺は手札から『ミラクル・フュージョン』を發動！墓地に存在する『E・HEROオーシャン』と『E・HEROフォレストマン』

を除外することで、エクストラデッキからモンスターを融合召喚する！龍亞、君のモンスターが世界を守る使者なら、こちらは地球そのものを見せてやるう。いでよ！『E・HEROジ・アース』！」

E・HEROジ・アース ATK2500/DEF2000

「E・HEROジ・アース!?」

出てきたのは白い体のE・HERO。確かアースは・・・日本語に訳すと地球。世界を守る使者と、その星そのもののモンスター・・・でも、状況だと龍亞のパワー・ツール・ドラゴンの方が上のはず

「そしてジ・アースの効果発動！自分のフィールドのE・HEROと名のつくモンスターたちをリリースすることで、そのモンスターの攻撃力分・・・攻撃力をアップさせる！E・HEROエスクリダオ、E・HEROエアーマン！お前達の力をジ・アースと一つに！」

ジ・アースの中に溶けて消えていくエアーマンとエスクリダオ。それによってジ・アースの白い身体は紅く変わって行く。

「これがジ・アースの真の姿、地球灼熱（ジ・アース マグマ）だ」

E・HEROジ・アース ATK2500/DEF2000 AT  
K6800/DEF2000

「攻撃力、6800・・・」

攻撃力は巨大化したパワー・ツール・ドラゴンを大きく上回った。私は驚いてジ・アースを見る。でも、龍亞はその驚きと同時にその

凄さを実感しているようだった。これが決闘王3代目、武藤秋の実力

「・・・行くぞ、ジ・アースでパワー・ツール・ドラゴンを攻撃！

アース・マグナ・スラッシュ  
『地球灼熱斬』！」

「うわああああああああっ！」

龍亞 LP600 LPO

パワー・ツール・ドラゴンをジ・アースが叩き斬り、龍亞のライフは0となった。

「楽しいデュエルだったよ、龍亞」

「うん！俺も楽しかった！またやろうよ！」

「ああ、もちろんだ」

「じゃあもう一回！」

そう言っただけで意気込む龍亞。でも気が付くと時刻は夕方。そろそろ夜ごはんの時間だわ。

「龍亞、もう夕方だし・・・デュエルは明日にしたら？そろそろ飯食べに行きましょう？」

「・・・そういえば、二人とも両親は仕事でいつもいないと言っていたけど、食事はどうしてるんだ？」

「基本的に朝は龍可が簡単に作ってくれるよ。昼と夜は基本的にど

っかで食べるんだ」

「……………」

龍亞の言葉に、呆れ気味の秋さん。どうしたのかしら？

「二人とも、買い物に行こうか」

「「え？」」

「外食ばかりではちゃんとした身体が作れない。俺が今日夕飯を作るよ」

「いいの？」

「ああ、泊めてくれるという話だったし、それくらいはするさ。いいな、ミラ？」

「はい、もちろんです」

秋さんが言うと、いつの間にかミラさんが隣にいた。こうして、私達は買い物をして外へ出ることにした。

Side 秋

はぁ……アニメでは一切描写がなかったが、まさか外食で済ませていたとは。買い物は二人のお金と俺のお金。ミラたちも荷物を持ってきている。ちなみにミラは前に買ってやった私服。

「ミラさん、これなら精霊だって誰も思わないわ」

「でも秋さん、それなんとならないの？」

龍亞に指を刺されるのは帽子とグラスだ。どっからどう見ても怪しい人だが・・・しょうがないだろう

「君たちの時みたいに正体がばれたら敵わないからな」

「それもそうね」

すっかり夜だな、早めに夕飯を作るとしよう・・・

「ねえ、アレ見て！」

すると、倒れている人影を見つける。紅いDホイールと、一人の男。この男は・・・

「どうしよう、秋さん！」

「・・・気絶しているだけのようだ。とりあえず中に運んだほうがいいと思うが」

予想通りだったが、その男は『不動遊星』。この世界、この時代の主人公だ。

「ミラ、そのバイクを頼む」

「はい、了解です」

そう言つて軽々とDホイールを持ちあげるミラ。まあ、ミラは魔法で身体を強化しているのだろう。こうして、俺達は中へと入って行った。今日の夕飯、どうしようか

おまけ

「なーにかな、なーにかなっ！」

「もう、龍亞・・・もうちょっと大人しくしなきゃ」

俺は現在調理中。遊星はソファーに寝かせた。よつと・・・

「ほい、完成だ」

そう言つて出したのはオムライス。うむ、我ながらいい出来だ。

「ちゃんと付け合わせも食べよ？」

「「いただきまーす！」」

二人が口に料理を運ぶ

「おいしいー！」

「うまーい！」

どうやら上手く出来たようだ。一応遊星の分も作ってはあるが、恐らく次の日まで起きないだろう。

「ミラ、アイツの分だけど食べるか？」

「はい、いただきます」

「こうして夜は更けていく」

星を宿す者（後書き）

主人公登場！

http://twitter.com/#!/AKIKAZE7  
010

ツイッターやっています。



## それぞれの思惑（前書き）

というわけで連続更新

今度から小説を更新するたび、ツイッターで上げることになりました  
良ければチェックしてください

[http://twitter.com/#!/AKIKAZE7  
010](http://twitter.com/#!/AKIKAZE7010)

秋「毎度毎度、お前は宣伝しないと気が済まないのか」  
すいません

秋「今日の最強カードは『カード・フリッパー』だ」

通常魔法

手札を1枚墓地へ送って発動する。

相手フィールド上に存在する全てのモンスターの表示形式を変更する

表示形式を変更して殴る。ニトロ・ウォリアーが使う

## それぞれの思惑

Side秋

翌日、俺はベッドで目を覚ました。そうだ、龍可と龍亞の家に泊まっているんだったな。時間は7時か。二人はまだ寝ているようだ。リビングに降りると、まだ遊星が寝ていた。そしてその近くに、台所に立って料理をしているミラの姿があった。

「おはようございますマスター」

「おはようミラ。不動遊星は？」

「寝てます。かなりの疲労が溜まっているみたいで、魔法をかけてはあげましたけど・・・」

なるほど、まあ、安らかに寝ているところを見るとそれなりに回復はしているらしい。すると、龍亞と龍可が降りてきた。

「おはよう秋さん」

「秋さんおっはよー！」

「ああ、おはよう二人とも」

挨拶をすませると、二人が遊星を覗きこんだ。ミラも料理を終えて遊星を見ると、その遊星の顔の刺青に気が付いた。

「この刺青、一体なんでしょう？」

「マーカーだよ、前科がある人が付けるんだって」

「じゃあ、この人悪い人なのかしら」

と、考え込むミラと龍可。しかし、一方の龍可は特に考えたり怯える様子はない。

「でも、龍可の精霊は大丈夫だって言ってるんだろ？ミラさんもど  
う？」

「うん、そうだけど・・・」

「ええ、彼はカードを大切にしているようですし・・・悪い方には  
見えません」

「なら大丈夫だって！」

龍可はこういうところで他のシティの人間とは違う。まあ、純粹と  
いうか、ちょっとお馬鹿というか・・・他人を信頼する優しい心の  
持ち主だ。すると、遊星はその声に反応したのか薄く目を開けてい  
た。身体を起こし、周囲を見渡す。

「うっ・・・ここは・・・それにお前達は？」

「あ、目が覚めた？覚えてないかな・・・昨日の夜、下で行き倒  
れていたんだ。俺は龍可で、こっちが龍可。それと、この人がムガ  
ツ！？」

慌てて龍可が龍可の口を塞いだ。

「（龍亞！今秋さんの名前直接出そうとしたでしょ！）」

「（そ、そうだった・・・）」

「・・・？」

「こっちはえっと・・・そう、秋人<sup>あきと</sup>！秋人さんとミラさんなんだ」

龍亞が慌てて俺の名前を考えてくれたらしい。俺は秋<sup>あき</sup>じゃなくて秋人ね、アキってされたら大変だったけど、まあいいか。しかし、遊星はそれを無視する。気に入くないな、それは

「おい」

「・・・？」

「助けられてその恩人たちに対してその態度か？自己紹介くらいしたらどうだ」

俺が言うと、遊星は俺を睨みつける。だが、すぐにそれをやめた。

「・・・不動遊星だ。助けてくれたことに感謝する」

「俺に言うな、二人に言え。俺も居候だからな」

すると遊星は二人に向き直る。無視されると思ったが、意外だな。この話中の遊星は随分と表情も硬いし、喋らないと思っていただけだが

「ありがとう、おかげで助かった」

「どういたしまして」

「へへっ」

「ここはどこだ？」

「ここはトップスだよ。ネオドミノシティでも上のところなんだ」

カーテンが開き、昨日のプールが姿を現した。すると、遊星の視線はジャックのポスターとフィギアに向けられた。俺も見たとき驚いたけどな。

「遊星もキングに興味があるの？」

「………興味ないな」

龍亞のお宝グッズ。キングのフィギアとポスター……今のうちに売っておけ、龍亞。そのうち価値がなくなっちゃうから。

「そつだ！遊星って強いのか？デュエルしようよ！」

「もう、龍亞……昨日デュエルしたばかりなのに」

騒ぐ龍亞と、それを抑えながらも呆れる龍可。俺だけなんか蚊帳の外だな。

「とりあえず朝食にしませんか？遊星さんも今起きたところですし」

「そつだね！」

「そうだな。不動、君はどうだ？」

「……俺には関わらないほうがいい」

と、一言。その一言で龍可の表情が若干固まった。やれやれ

「悪いが、俺にも人を見る目くらいある。お前が厄介事を抱えていても、お前が悪い人間には見えないさ」

「……………」

「とりあえず、飯食ってから話をしよう。それでいいだろう？」

「……………ああ」

無表情で言わないでくれ、顔が怖いから。それから朝食を作り食事。今日のメニューはパンとベーコンエッグとソーセージ、それにサラダと牛乳。まあ、シンプルイズベストってことで一つ。そして朝食を終えると再び昨日と同じ庭に出る俺達。龍亞に丸めこまれ、遊星はデュエルすることを承諾した。ベンチには呆れた様子の龍可と、デュエルを見るために座る俺とミラ。すると、遊星は周囲を見渡していた

「ここには、誰もいないのか？」

「このフロアは、おれ達だけだよ。」

「ここね、ホテルの一番上なのよ。あたし達、ずっと前から二人きりなの。まあ、昨日からしゅ……じゃなかった、秋人さんがここ

に住んでるけど」

「勉強も、全部ネットで出来るから、外にも滅多に出ないんだ。」

頭を抱えなくなる。未来ある子供たちが引きこもりというのは悲しいものだ。・・・将来子供が出来たら不安でしょうがないな。

「頑張ってくださいね二人とも」

「うん、頑張るよー！いつくよー遊星！」

昨日と同じようにリボンでディスクを固定する龍亞。

「「<sup>デュエル</sup>決闘！」」

遊星 LP4000

龍亞 LP4000

「先攻は俺ね！ドロー！しゃきーん！」

さて、龍亞のデュエル、どうなるかな？

「俺はD・モバホンを召喚！」

D・モバホン ATK1000/DEF1000

「モバホンのモンスター効果！ダイヤルを回してその数だけカードをめくり、その中にDと名のついたモンスターがいたら、1体を特殊召喚できる！ダイヤルオン！」

出た目は3か。カードはあるかな？

「俺はめくったカードから『D・マグネンU』を特殊召喚！」

D・マグネンU ATK800/DEF800

「カードを1枚伏せてターンエンド！」

「俺のターンドロ・・・俺は『スピード・ウォリアー』を召喚！」

スピード・ウォリアー ATK900/DEF400

でた、過労死。ミラも苦笑している。カードの気持ちが変わるのだから。

「（また俺かよ・・・って言ってます）」

だろうね、遊星よ・・・もうちょっといたわってやれよ、スピード・ウォリアー

「バトル！スピード・ウォリアーでD・マグネンUを攻撃！『ソニック・エッジ』！そしてバトルフェイズ中、スピード・ウォリアーの攻撃力は倍になる！」

スピード・ウォリアー ATK900/DEF400 ATK1800/DEF400



「畏発動！『ディフォーム』！攻撃を無効にしてDの表示形式を変更するよ！」

「ターンエンド」

「この変形を見せたかったんだよねー！！」

「調子に乗るの早すぎない？」

「まー見てなって！俺のターンドロー！」

嬉しそうな龍亞。まあ、普段から人とデュエルしないというなら、こういうのは嬉しいだろう。

「俺のターンドロー！D・マグネンUを召喚し、モバホンの効果発動！ダイヤルオン！出た目は2！えーと・・・よし、D・チャツカン等特殊召喚だ！ちなみに、D・マグネンUが守備表示の時、このカード以外のモンスターに攻撃は出来ない。でも、マグネンUが2体いるから、遊星は攻撃できないよ！」

D・チャツカン ATK1200/DEF600

ほう、ロックか・・・これなら確かに攻撃は防げる。ステータスが低いDを守る手立てになるからな。

「そして永続魔法『ガジェットボックス』を発動！1ターンに1度自分フィールド上に「ガジェット・トークン」1体等特殊召喚する事ができる！でも、3回この効果を使用した時、このカードを破壊するんだ。こい！ガジェット・トークン！」

ガジェット・トークン ATK0/DEF0

「そして、チャッカンの効果発動！モンスターをリリースして相手に600ポイントのダメージを与える！俺はガジェット・トークンをリリース！」

「・・・！」

不動遊星 LP4000 LP3400

「絶対調ね、龍亞」

「俺はこれでターンエンド！やったやった！おれのコンボ、決まったよ！最高に気持ち！すごいでしょ！名づけて、おれ自慢のデイフォーマーデッキ！昨日は決まらなかったけど」

絶対調なのはいいが、昨日も言った通り、油断すると痛い目を見る。もう1つミスしてるし。

「俺のターンドロ！俺は手札から魔法カード『カードフリップ』を発動。手札1枚をコストに、相手フィールドの全てのモンスターの表示形式を変更する！」

ピンポイントすぎるだろ・・・まあ、二トロ・ウォリアーのことを考えればあのカードは有効と言えば有効だ。これで龍亞のモンスターたちによるロックは解けてしまった。

「そしてチューナーモンスター『ジャンク・シンクロン』を召喚！」

ジャンク・シンクロン ATK1300/DEF500

「ジャンク・シンクロンの召喚に成功した時、レベル2以下のモンスターを特殊召喚する。俺はさつきコストで墓地に送った『ニトロ・シンクロン』を特殊召喚」

ニトロ・シンクロン ATK300/DEF100

「レベル2のスピード・ウォリアーとレベル3のジャンク・シンクロンをチューニング！」

2 + 3 = 5

「集いし星が新たな力を呼び起こす！光差す道となれ！シンクロ召喚！いでよ、『ジャンク・ウォリアー』！」

ジャンク・ウォリアー ATK2300/DEF1300

「ジャンク・ウォリアーのモンスター効果、レベル2以下のモンスターの攻撃力分、攻撃力がアップする。『パワー・オブ・フェローズ』」

ジャンク・ウォリアー ATK2300/DEF1300 ATK  
2600/DEF1300

だが、攻撃力を上げててもこのターンに決めることはできない。やるとしたら恐らく・・・

「さらに、レベル5のジャンク・ウォリアーに、レベル2のニトロ・シンクロンをチューニング！」

「集いし思いが、ここに新たな力となる。光差す道となれ！シンク  
口召喚！燃え上がれ、『ニトロ・ウォリアー』！」

ニトロ・ウォリアー ATK2800 / DEF1800

やはりニトロ・ウォリアーか。これは勝負が決まったようだ。あ、  
一応カードもドローしている。ニトロ・シンクロンの効果だったな。

「バトル！ニトロ・ウォリアーで、D・マグネンUを攻撃！『ダイ  
ナマイト・ナツクル』！」

「うわっ！」

龍亞 LP4000 LP2000

「さらに、ニトロ・ウォリアーの効果発動。このカードが戦闘でモ  
ンスターを破壊した時、表守備表示のモンスターを攻撃表示に変更  
してバトルする！モバフォンを攻撃表示に変更！『ダイナマイト・  
インパクト』行け、ニトロ・ウォリアー！！『ダイナマイト・ナツ  
クル』！」

「う、うわあああっ！」

龍亞 LP2000 LP0

勝負ありだな、すると龍亞は半泣き。まあ、仕方がないだろう。龍  
可が龍亞を慰める

「ほら、泣かない泣かない」

「な、泣いてないよ！」

「デュエルを楽しむ気持ちは伝わってきた。だが、“D”を揃えた時点で満足してなかったか？オレの反撃を読まず、自分のデュエルに満足するようでは・・・キングへの道は遠いな」

遊星は微笑みながらも、優しく龍亞に話しかける。やはり自分の仲間に子供がいるというのもあるんだろう。うーむ、ま、龍亞のためにも補足するか？

「それに、龍亞はミスをしていたな。そのミスがなければ勝敗はわからなかった」

「ミス？」

「チャツカンの効果のコンボが決まったのはメインフェイズ1だ。まだバトルフェイズが残っていた。スピード・ウォリアーの攻撃力は召喚成功時のターンのみ。だから攻撃力は900のままだ。攻撃力1200のチャツカンで攻撃すれば、シンクロ素材が消えてしまい、遊星はジャンク・ウォリアーでしか攻撃が出来なくなっていたはずだ」

元々、ジャンク・シンクロンの効果はジャンク・ウォリアーを出すためにあるようなものな気もするしな。

「遊星、またオレとデュエルしてくれる？」

「そのうちな。世話になった」

そう言っつて背を向ける。つまり、出て行こうというのだ。

「だめだよ！」

「このマーカーを見る。オレといたら、お前たちに迷惑がかかる」

「迷惑なんかじゃないよ。オレ、遊星の力になりたいんだよ！」

「また始まった、龍亞の力になりたい病。．．．でも、今日ぐらいゆっくりしてつた方がいいんじゃない？」

俺の時も龍亞は力に成りたいという。でも．．．

「龍可？人の力になりたいのは病気にしたら駄目だろ？」

「あ、あはは．．．」

まったく龍可は．．．ま、遊星のことをフォローすることくらいはしてあげますか。

「まあ、ここに住んでいる人間が言うんだ。居候の俺が言うのもなんだが、出て行くなら身体を万全にした方がいい。どこでセキユリテイが監視しているかわからないしな」

「すまない．．．世話になる」

こうして、遊星は今日一日ここで遊星は過ごすこととなった

夜

龍可と龍亞が眠った頃、リビングで遊星がデュエルディスクの調整を行っていた。

「器用なもんだな」

「秋人、起きていたのか」

「今日は眠れなくてな……行くのか？」

俺の言葉に、遊星は改良し終えたデュエルディスクを机に置くと、頷いた。

「ああ、二人に迷惑はかけられない」

「そうか……」

「二人に礼を言っておいてくれないか？」

やれやれ……

「礼つてのは本人たちの前で言うもんだぜ？まあ、言うてはおくけど」

「すまない。それと、こちらでも聞きたいことがある」

「なんだ？」

「お前は、何者だ？」

遊星の言葉で、空気が凍る。

「どついつ意味だ？」

「……昔、子供の頃俺は済んでいた孤児院で『デュエルモンスターズの歴史』という本を読んだことがある。その中に、ある男がいた。詳しくは記載されていないが、2ヶ月間決闘王として君臨した男、武藤秋。俺はその写真をハッキリと覚えている」

この言葉が何を意味するのか。それは俺の正体を知っている。そして、その矛盾を教えるということだ。

「……ふっ、お前の言うとおりだ。俺は確かに武藤秋人ではない。武藤秋……3代目決闘王だ」

「やはり……だが……」

「そう……年齢が合わない、というのだろうか？その通り、俺はこの時代の人間ではない。タイムスリップによってこの時代に来てしまった。今のところ原因は不明だがな」

「そんなことが……」

驚く遊星。だが、その半分信じられないというのもあるだろう。

「信じるか信じないかはお前の自由だ。俺は説明するの面倒だしな」



「……………そうか」

言いながら外に出る遊星。俺も外に出る。すると牛尾が待ちかまえていた。

「待つてたぜ屑やるおー！」

「……………」

牛尾さん来たー……アンタ人のこと屑とか言ってるけど自分の黒歴史（高校時代）振り返ってもそんなこと言えるのか？

「……あん？なんだオメエ、テメーもその屑の仲間か！」

「屑に屑って言われたくねーな」

俺の言葉に、牛尾が切れる。

「ああ！？テメー……セキュリティに逆らったらどうなるかわかってんのか！？」

逆らつてねーし、事実だし。すると俺達を何かが照らした。それは車のライト。出てきたのはイエーガーだ。牛尾はイエーガーに言われて退散。残ったのは俺と遊星、そしてイエーガー

「それで、俺に何の用だ」

「これです」

渡されたのはフォーチュンカップの招待状、そしてラリーたちの写真

「来週までにフォーチュンカップにご参加ください。参加されない場合、その写真の方々がどうなるか・・・お分かりですね？」

「・・・・・・・・」

そう言いながらイエーガーは俺に向き直る

「そして、貴方様にもこれを」

「・・・・・・・・何のつもりだ？」

それは遊星と同じくフォーチュンカップの招待状だった。

「ゴドウィン長官より・・・伝説の3代目決闘王にもこれをと・・・  
イーヒツヒツヒ」

「・・・まるで意味がわからんな。俺がこの世界に来たのは昨日だ。  
何故俺のことを知っている？」

「イーヒツヒツヒ・・・それにお答えする義務はありませんよ。貴  
方の選択肢はそれに参加するか、しないか・・・その二択」

「しない、と言ったら？」

「貴方様がお世話になった双子がどうなることやら・・・イーヒツ  
ヒツヒ」

なるほど・・・人質は確保済み、か。カッチーンときたよ

「だが俺は行方不明のはずだ。それをどう説明として大会に出すつもりだ？」

「それはこちらで手配いたしますのでご安心を・・・ヒッヒッヒ」

「そうかい、ならゴドウィンに伝えな『お前の策には乗ってやる・・・ただし・・・』」

言いながら俺はゆっくりとイエーガーに近づき、そして・・・

ドゴッ！

「ぐぶえらあ!?!」

俺は思い切り、イエーガーを殴り飛ばした。

「『その腐った考えと脅しで俺を飼いならせると思っちなよ・・・』  
そうこの拳ごと伝えな」

「ヒッ・・・ヒッ・・・長官の補佐である私を殴るとは・・・お、  
覚えてらっしゃい!」

そう言ってイエーガーは車に乗り、さっさと退散していった。

「秋・・・」

「・・・なあ、遊星？」

「なんだ？」

「……殴っておいてこれと言つのもなんだが

「どーしよ、完全に逃げられない状況になっちまった」

「……何も考えないで殴ってたのか、あれ」

その後しばらくの沈黙が続く。そして遊星がDホイールにまたがる。

「どうやら、また会うことになりそうだな」

「ああ……その時は是非、決闘王の貴方とデュエルがしたい。次会つのを楽しみにしています」

急に敬語になる遊星。あれ？

「なんで敬語？」

「気にしないでください……ではまた」

Dホイールは走って行き、それは見えなくなった。

「やれやれ……」

とりあえず、デッキ調節しないとな

それぞれの思惑（後書き）

つてなわけで、龍亞VS遊星

そして秋がフォーチュンカップに出場します。  
次回をお楽しみに！

## 黒き薔薇（前書き）

というわけで更新です

ちよつと遅くなってしまいました。

とりあえず書いてて5竜が出せないという辛い状況が続きます。

ぶつちやけ、ぶつぱも出来なければリリースして破壊を無効にも出来ない・・・辛すぎる（汗

秋「今日の最強カードは『薔薇の刻印』だ」

### 装備魔法

自分の墓地に存在する植物族モンスター1体をゲームから除外して発動する。

このカードを装備した相手モンスター1体のコントロールを得る。

自分のエンドフェイズ時に装備モンスターのコントロールを相手に移す。

自分のスタンバイフェイズ時に装備モンスターのコントロールを得る。

TF5やTF6で十六夜アキにハンデデュエルを仕掛け、毎回使われて負けます。

ツイッター

<http://twitter.com/#!/AKIKAZE7010>

ザ・インタビュアー

http://theinterviews.jp/akikaz  
e7010

インタビューはなんか、その人への日頃のことの質問に付いてとか、私の場合なんかは小説についての質問に答えています。よろしければどうぞ。

そして、今日は大学でガガマジシャンを書きました。

pixivに上げたんで良かったら見てやってください

http://www.pixiv.net/member/il

lust.php?illustration\_id=23379227&am

p;mode=medium

では、本編をどうぞ

## 黒き薔薇

Side 秋

「えー！？秋さんもフォーチュンカップに!？」

「・・・ああ、色々あってな」

龍亞と龍可のペントハウスにて、そんな会話をする俺達。そういえばまだアキに会ってないな。そろそろ遊星達と会うことになるだろう。遊星が出て行ったことにも少しがっかりしてはいたが、まあそのうち会えるからいいだろう。

「それで確認なんだが龍亞」

「何？」

「お前、本当にフォーチュンカップ出る気か？」

俺の言葉に、龍亞は何を今更という顔である。

「もっちらん！龍可の代わりに変装して・・・」

「やめとけ」

「え？」

「・・・フォーチュンカップ、何か嫌な予感がするんだ」



俺の言葉に、二人から笑顔が消える。

「嫌な感じって・・・？」

「二人は疑問に思わないか？何故タイムスリップして数日の俺に、そんな招待状舞い込んだ？」

そもそも、謎が多いな・・・元々この大会の本音はシグナーの覚醒。そして表側はシティとサテライト、どちらも合わせ誰が最強なのか決める大会だったはずだ。物語としての原作を捻じ曲げるのは不本意だが、会ってからこの子たちを変な目に会わせたくない。それにこれなら5竜の一角が覚醒しないせいで未来組の連中が接触してくる可能性もある。そうすれば過去に変えることが出来る可能性もあるはずだ。

「えっと、それは秋さんが有名だからじゃ・・・」

「あんな、俺は今までの自分の経歴を見たが、俺は決闘王になった2カ月後に姿を消している。この世界に来たのは俺が決闘王の称号を得てから2カ月。つまり、この期間はあっているんだ。そして正体を知るのは龍亞と龍可、二人のはずだろう？どーして、俺がここにいることと俺の正体が割れてんだよ」

「確かに・・・ちょっと変ね。龍亞や私は他人に秋さんのことまったく言っていないし・・・」

「そう、まるで俺がこの時代にくることを知っていたようになる」

何故、ゴドウィンは俺がこの時代に来ることを知った？赤き竜の力・・・？それとも、赤き竜そのものが、俺をこの時代へと連れてきた

のだろうか？それとも、この時代の物語の終盤に出てくる『奴ら』の仕業か・・・いずれにせよ、俺はこの二人を守る意味でも大会に出なくてはならない。

「・・・どうやら、俺の出場は急遽ということらしいな。招待状の用紙の材質が違う」

「ホントだわ・・・」

俺を大会に出させる理由、それは・・・シグナーの痣を持つ者の覚醒を急がせるためか、それとも俺自身に何か役割を背負わせるつもりなのか

「俺はどうしても大会に出なければならぬ・・・真実を知るためにもな。だが、龍亞、君は出てはいけない」

「どーしてさ！俺だって秋さんのために・・・」

龍亞が言いかけて、ミラが一步前が出る。

「龍亞君、マスターのことも察してください・・・マスター」

「・・・好きにしろ」

俺は言いながらソファアに座った。ミラは二人に視線を合わせるためにしゃがんでいた。

「・・・察するって、何をだよミラさん」

「マスターは人質を取られているのです。この大会に出なければ、

危険が及ぶ人物たちがいる」

「危険が及ぶ人物・・・一体誰が？」

龍可が首を傾げるのも当然である。この時代に俺の子孫などいない。親族はいても、親しいということはない。答えは一つ、ここ数日で親密になった者達

「貴方達が、です」

「「!!」」

二人の表情が固まる。まさか、この町のトップに人質とされるとは信じられなかったからだろう。

「ゴドウィン長官の補佐が招待状を届けた時、貴方達のことを話題に出しました。つまり、『大会に出なければ貴方達に危険を及ぼす』という意味なんです」

ミラの言葉に、すっかり黙り込んでしまう二人。

「私達は少しの期間しか過ごしていませんが・・・私もマスターも、貴方達はもう家族と対等の存在なんです。そんな家族が危険にさらされるのは嫌でしょう?」

「.....」

「秋さん.....ミラさん.....」

この後、結局龍可は大会を諦めることとなった。これなら二人に危

険が及ぶこともないだろう。そして、シグナーの痣を持つ龍可を覚醒するために何をするかは分からないが

「守るさ・・・今度こそ。そうだろう・・・？『秋』」

時は静かに過ぎていく

数日後

俺達は何故かデュエル場に行くことになった。マーカーを付けた連中もいるような無法地帯なのだが・・・まあ、あんまり気にすることはないだろう。それより問題は・・・

「やった〜！僕の宝物だ！」

龍亞の隣で俺のサインに喜んでいる天兵だ。

「天兵君、くれぐれも・・・」

「はい！これは一生宝物です！」

いや、そうじゃなくてな・・・

「俺の存在は今極秘の状態なんだ。他言無用で頼むよ」

「はいっ！」

龍亞がさっきポロっと言ってしまったのでサインをせがまれ、しょうがなく書いたが・・・心配だ。ミラのこととはなんとか誤魔化して

いるものの、後々ばれそうで怖い。せめて俺の正体はあまりばれない方向で行きたい。少なくともフォーチュンカップが始まるまでは決闘場に着くと、デュエルが沢山行われていた。ライディングデュエルは初めて見るが、なかなか面白そうだ

「D・ホイール、か・・・」

「秋さんはD・ホイールには乗れないもんね」

「バイクには乗れるんだがな・・・」

どうも、D・ホイールは少し勝手が違うらしい。『スピードワールド』はオートパイロットだからいいとしても、怖い

「あ、アレって遊星さんじゃないですか？」

「あ！本当だ！遊星ー！」

龍亞が大声で遊星を呼ぶ。すると遊星もこちらに気づいたらしい。氷室たちもいるところを見ると原作通りらしい

「秋さんも一緒か」

「ああ、遊星。そっちは？」

「俺は氷室だ」

「ワシは矢薙じゃ」

二人が挨拶してくる。ここは、偽名だな

「俺は・・・」おっと、それ以上は言うな「何？」

「遊星から話は聞いてる。決闘王」

おい、遊星・・・お前以外と口軽いんだな、この時期のお前は結構無口だったはずだぞ

「二人は信頼できるから話した・・・その、すまない」

「・・・まあ、いい。出来ればこのことは他言無用で願いたい」

「もちろんだ。本物の決闘王に会えるとは思わなかったよ」

「ワシもじゃ」

本物の、ねえ・・・恐らくジャックのことだろうな。そんな感じでしたら話していると、突然デュエル場で爆発が起きる。

「な、なんだ!？」

「アレは・・・」

「魔女だ!」

「逃げるー!」

エリアにいた人間が次々に逃げ出す。そこにいたのは仮面を付けた女と、ブラック・ローズ・ドラゴンだ。おいおいおい・・・

「・・・・・・・・・・」

「痣が!?!」

遊星の赤き竜の痣が反応している。そしてそれに気が付いた魔女はこちらを見る。龍亞と天兵はすぐこちらに引き戻したはいいが、震えている。そして、瓦礫が爆発の振動で飛んできた

「っち!ミラ!」

「はい!」

ミラが魔法を使い、飛んできた瓦礫などを防ぐ。

「み、ミラさん?」

「すげえ・・・・・・・・」

「遊星、ここは俺達がなんとかする。なんとか、龍亞と龍可たちの家まで逃げるんだ!」

「だが、秋さん!あなたが・・・」

遊星が俺の心配をしようとするが・・・『魔女』は一步一步、こちらに近づこうとしている。

「今、D・ホイールという足で脱出できるのは君たちだけだ!」

「っく・・・・・・・・必ず後で会おう」

「ああ、もちろんだ」

遊星達が走り去ろうとすると、ブラック・ローズ・ドラゴンの蔦が遊星達に伸びる

「ミラ！行くぞ、装備魔法『ワンダーワンド』を2枚装備！なんとか防げ！」

「攻撃力ギリギリじゃないですか！5竜の一角を相手取るのも無茶なのに！もうっ！」

2本のワンダーワンドを手に、ミラが魔力を解放してなんとか蔦を弾き飛ばす。これなら何とかなるだろう。すると、俺へ黒薔薇の魔女、十六夜アキの殺気が飛んだ。その仮面の下からうかがえる冷徹な目が、俺を刺す。

「……………なぜ、邪魔をした」

「あつちには子供がいた。怪我をさせる気だったのか？」

「……………関係ない。アイツは忌むべき印があった。それより……………お前はサイコデュエリストか？」

魔女の答えに、俺は苦笑する。

「くつくつく……………サイコデュエリストねえ。残念ながら俺はそんな可愛いもんじゃないさ、魔女……………いや、『十六夜アキ』？」

「……………っ！？貴様、何者だ？」



「さあな、俺に勝てたら、教えてやるよ」

俺はそう言いながらデュエルディスクを構える

「……………死んでも後悔するなよ」

「<sup>デュエル</sup>決闘!!!」

武藤秋 LP4000

黒薔薇の魔女（十六夜アキ） LP4000

「私の先攻……私は『ローンファイア・ブロッサム』を召喚」

ローンファイア・ブロッサム ATK500/DEF1400

「そしてこのカードをリリースすることで、デッキから『ギガプラント』を特殊召喚!」

ギガプラント ATK2400/DEF1200

「さらに魔法カード『テラ・フォーミング』を発動。私はデッキから『ブラック・ガーデン』を手札に加える。モンスター達の命を養分に……バラの命の花園、『ブラック・ガーデン』を発動!」

辺りが薔薇の茨に覆われる。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「俺のターンドロ―！」

いきなり面倒な物出してくれたな。ブラック・ガーデン・・・そしてフィールドには攻撃力2400のギガプラント・・・俺の手札にサイクロンはない。この時代では強欲な壺は禁止だ。そして世界に影響を与えかねない俺が持つ5匹の竜達は出せない。厳しいな、このデュエル

「俺は手札から裏守備表示でモンスターをセット。そして、カードを3枚伏せる。この場合モンスターはセット・・・つまり召喚・特殊召喚には適用されない。ターンエンドだ」

「私のターンドロ―・・・私はギガプラントを二重<sup>デュアル</sup>召喚！墓地の『ローンファイア・ブロッサム』を特殊召喚する」

ローンファイア・ブロッサム ATK800/DEF1400 A  
TK400/DEF1400

「そして再びローンファイア・ブロッサムの効果で2体目のギガプラントを特殊召喚。これでお前の場には『ローズ・トークン』が3体フィールドに召喚される。」

ギガプラント？ ATK2400/DEF1200 ATK1200  
0/DEF1200

ギガプラント？ ATK2400/DEF1200 ATK1200  
0/DEF1200

ローズ・トークン？ ATK800/DEF800

ローズ・トークン？ ATK800/DEF800

わざわざギガプラントをデュアルした・・・？どついう目的かは知らんが、このままではダメージを受ける。

「バトルだ！ギガプラントでローズ・トークンを攻撃！」

「甘いな！永続罨発動『強制終了』！このカードはこのカード以外のカードを墓地に送ることで、このターンのバトルフェイズを終了できる。俺は伏せカードを墓地へ送る！これによりバトルを終了させる！」

「つち・・・ターンエンド」

強制終了は発動出来ても、コストを削るのが大きすぎる。特に俺のように手札の量に頼り、デッキからコンボを連携する俺のデッキでは強制終了は最終手段に等しい・・・

「俺のターンドロー！」

来た！

「俺は手札から『サイクロン』を発動！ブラック・ガーデンを破壊する！」

「つく・・・」

「さらに、手札から『ドレット・ドラゴン』を召喚！」

ドレット・ドラゴン ATK1100 / DEF400

「そして、『メタモルポッド』を反転召喚だ！」

メタモルポッド ATK700 / DEF600

「互いのプレイヤーは手札を全て墓地へ送り、5枚ドロー！行くぞ、レベル2のローズ・トークン2体と、レベル2のメタモルポッドに、レベル2のドレット・ドラゴンをチューニング！」

2 + 2 + 2 + 2 = 8

「闇を蹂躞する不屈の闘志よ、今こそ鋼の身体に魂を宿し大地を砕け！シンクロナイズ！立ち上がれ、『ギガンテック・ファイター』！」

ギガンテック・ファイター ATK2800 / DEF1000

「チューニング・サポーターの効果でカードを1枚ドローギガンテック・ファイターの攻撃力は戦士族モンスター1体につき100ポイント上昇する！バトル！ギガンテック・ファイターでギガプラントを攻撃！『ギガンテック・インパクト』！」

十六夜アキ LP4000 LP2400

「カードを1枚伏せ、ターンエンド」

「・・・私のターンドロー。私は手札からチューナーモンスター『夜薔薇の騎士』を召喚！」

夜薔薇の騎士 ATK1000/DEF1000

「チューナー・・・来るか、奴が」

「そしてこのカードの効果で、手札の植物族モンスターを特殊召喚できる。来なさい、『ボタニカル・ライオ』」

ボタニカル・ライオ ATK1600/DEF2000

「レベル4のボタニカル・ライオとレベル3の夜薔薇の騎士をチューニング！」

3 + 4 = 7

「冷たい炎が、世界の全てを包み込む・・・漆黒の花よ、開け！シンクロ召喚！現れよ、『ブラック・ローズ・ドラゴン』！」

ブラック・ローズ・ドラゴン ATK2400/DEF1800

来たか、ブラック・ローズ・ドラゴン！史上最悪のリセットモンスターめ・・・

「ブラック・ローズ・ドラゴンの効果発動！このカードの召喚に成功した時、フィールド上の全てのカードを破壊する！『ブラック・ローズ・ガイル』！」

「っく！うおおおおおっ！」

激しい風が俺を打ち付ける。そして破壊されるカード達。すまない、ギガンテック・ファイター・・・

「そして私は手札から『死者蘇生』を発動。蘇れ、『ブラック・ローズ・ドラゴン』」

そんなこつたるうと思った

「ブラック・ローズ・ドラゴンでダイレクトアタック！『ブラック・ローズ・フレア』！」

「手札から『バトルフェーダー』を特殊召喚！これでバトルフェイズを終了する！」

「……カード2枚伏せ、ターンエンド」

状況は悪いな。ここでシグナーの竜を出すべきか否か……出せば後で面倒になる。このドローで状況が変わるか否か……！

「俺のターンドロー！」

来たっ！

「手札から再びチューナーモンスター『ジャンク・シンクロン』を召喚！」

ジャンク・シンクロン ATK1300/DEF500

「ジャンク・シンクロンの効果発動！レベル2以下のモンスターを復活させる！戻って来い、メタモルポッド！」

メタモルポッド ATK700/DEF600

「レベル1のバトルフェーダーとレベル2のメタモルポッドに、レベル3のジャンク・シンクロンをチューニング！」

1 + 2 + 3 = 6

「雪風に舞う氷結の龍よ、裁きの時は来た！今こそその稲妻で撃ち払え！シンクロナ召喚！吹きすさべ！」氷結界の龍ブリューナク！」

氷結界の龍ブリューナク ATK2300/DEF1400

「ブリューナクのモンスター効果発動！手札を任意の枚数捨て、捨てた数だけフィールドのカードを手札に戻す！俺は手札の『クイツク・シンクロン』を墓地に送り、ブラック・ローズ・ドラゴンをエクストラデッキに戻してもらおう」

「つく・・・」

これで一気に攻める。

「バトルだ！ブリューナクでダイレクトアタック！」

「畏カード『攻撃の無力化』！攻撃を無効にする！」

「カードを1枚伏せ、ターンエンド」

「つち、攻撃が通らなかった！」

「・・・私のターンドロー！私は手札から3体目の『ローンファイア・ブロッサム』を召喚！そしてこのカードをリリースし『ギガプラント』を特殊召喚！」

ギガプラント ATK2400 / DEF1200

「そして、装備カード『薔薇の刻印』を氷結界の龍ブリユーナクに装備する」

「しまった・・・」

「このカードは、自分の墓地に存在する植物族モンスター1体をゲームから除外して発動する。墓地の『ギガプラント』を除外。そしてこのカードを装備した相手モンスター1体のコントロールを得る。自分のエンドフェイズ時に装備モンスターのコントロールを相手に移す。自分のスタンバイフェイズ時に装備モンスターのコントロールを得る。これでブリユーナクのコントロールはもらった。」

ブリユーナクがアキの方へとつく。 っち・・・やばい！

「バトル、ギガプラントでダイレクトアタック！」

「ぐあああああああつっ！」

武藤秋 LP4000 LP1600

ギガプラントの鞭が俺の身体を叩きつける。 っくそ・・・闇の決闘と同じ痛みが・・・

「畏発動・・・『ダメージコンデンサー』・・・！手札1枚をコストに、その攻撃力以下のモンスターを攻撃表示で特殊召喚する！来い、『ボルト・ヘッジホッグ』！」



ボルト・ヘッジホッグ ATK800 / DEF800

「行け、ブリユーナク・・・」

武藤秋 LP1600 LP1000

「っ・・・あ・・・」

「ここまで受けて、まだ・・・立てるか」

俺はブリユーナクの攻撃を受けてフラフラになりながらも、その場に踏みとどまった。危ない、危ない・・・まあ伊達に、闇の決闘をやって生きのびてないからな。この程度・・・屁でもない

「さあ、どうした・・・バトルフェイズは終了か？」

「・・・つく、ターンエンド。これで私の場からお前の場に、ブリユーナクが戻る」

さて、と・・・これでカード引けないと、下手すると死ぬな。よくよく考えて見れば今までで一番ピンチじゃね？俺

「俺のターン・・・何故・・・」あ？

「何故、諦めない・・・お前に、勝ち目はない」

「さあね・・・自分で考えな。俺に言えることは、最後の最後まで最後のドローまで、俺は諦めないということだけさ。俺のターンドロー！..」

来た、か・・・

「チューナーモンスター『ゾンビキャリア』を召喚！そしてチューナーがいる時、ボルト・ヘッジホッグを特殊召喚！」

ゾンビキャリア ATK400/DEF200

ボルト・ヘッジホッグ ATK800/DEF800

「レベル6の氷結界の龍ブリューナクに、レベル2のゾンビキャリアをチューニング！」

6 + 2 = 8

「集いし鉄くずが、新たに息吹く命となる。今こそその意思を竜となりて姿を現せ！シンクロ召喚！瓦礫の化身『スクラップ・ドラゴン』！」

スクラップ・ドラゴン ATK2800/DEF2000

来るのは鉄くずより生まれし者・・・捨てられた物の怨念が宿る、龍の姿

「攻撃力、2800・・・だが、このターンで私を倒すことは・・・

」

「どうかな？俺はカードを1枚伏せる。そしてスクラップ・ドラゴンの効果発動！自分のフィールドと相手フィールドのカード1枚づつを選択して破壊する！フィールドのボルト・ヘッジホッグと、ギガプラントを選択、これによってそれぞれを破壊する！」

「そ、そんな……」

「いくぞ！スクラップ・ドラゴンでダイレクトアタック！『スクラップ・ブラスター・カノン』！」

「きゃあああああっ！」

十六夜アキ LP2400 LPO

「勝った……」

「つく、私が……負ける、なんて……」

やべっ、身体が……言うこと気かねえ。俺はその場に膝をついた

「俺の、勝ちだ……」

「あれだけの攻撃を受けて、何故……お前は平気なんだ」

「さあ、な……とつとに行けよ……もう、俺以外ないんだからな」

くらくらする……な……

「……次こそ、お前を倒す」

そう言ってアキは消えていく。俺はそれを見送ってから、その場に倒れ伏した。俺、死んだんじゃないか？

黒き薔薇（後書き）

V S アキでした

ぶっちやけ5竜使えなくても戦えますけど、これはガチすぎて酷い  
（汗）

## 開幕（前書き）

フォーチュンカップ開幕です

秋「今日の最強カードは・・・珍しい、デュエルがあるのになしか」  
出てるカードは殆ど紹介しちまった

ツイッター よろしければフォローよろしくです  
更新情報なんか呟いてますんで

<http://twitter.com/#!/AKIKAZE7>  
010

## 開幕

Side秋

目を覚ますと、そこは知らない場所だった。知らない部屋なのに、どこか温かい空気を感じる。

「知らない、天井だ・・・」

そんなことを言いながら起き上がる。身体は包帯だらけで、傷を治療した跡があった。ここはホテルの一室のようだ。すると、ドアが開く。そこにいたのは、紫色の髪をツイントールに結った女性と、ピンク色の髪にウェーブが掛った女性。俺が愛し、大切に想う二人の女性。

「雪乃！？ツアン！？」

「秋っ！」「」

二人が俺に抱きついてきた。それは嬉しい・・・嬉しい、が・・・

「いつ・・・！」「」

「あ、ご、ごめんなさい・・・」

「っ、っい・・・」

身体に激痛が走る。まあ、すぐにミラが直してくれたから問題はな

いのだが。そして、二人がここにいた。それも、俺と旅に出た時のままで。

「二人とも、無事だったのか・・・」

「ええ、何とかね」

「気が付いたらよくわからない場所にいたの・・・で、爆発が起きた場所に行ったら秋が倒れてたから。とりあえず避難できる場所にまで避難してホテルに隠れたのよ・・・心配したんだからね」

そうだったのか・・・

「ゴメンな二人とも、迷惑をかけた」

そう言いながら俺は二人を抱きしめる。相変わらず、二人は温かい。

「ねえ秋・・・ここはいつたい、どこなの？」

「ここは・・・」

俺はそれから、雪乃とツアンにこの場所のことを説明した。この場所は未来の場所であること。そしてフォーチュンカップのことを話した。

「未来・・・」

「この世界が・・・」

窓の外には未来都市が広がっている。ビル群の数々、そして遠くに

見えるのはサテライトだ。

「ねえ秋・・・あの島は何？」

「アレはサテライトだ」

「サテライト？」

「そう、こちらは身分の高い人間が住むシティで、あつちは身分の低い人間や犯罪者が住む場所だ。この世界ではそのように格差と差別が出来ているんだ」

日本の未来が、このようなことになるとは思ってもみなかっただろう。当然と言えば当然だが。

「町は発展しても人の心は腐ってるってことね」

「ま、そんな感じだな」

「それで秋、これからどうするの？」

「ああ、これだ」

俺は服から『フォーチュンカップ』の招待状を見せた。これで俺達がこの世界にきた原因を知ることが出来ればいいんだがな

「とりあえず、その男の策に乗るのね？」

「ああ、とりあえず、にはなるけどな」



これからどうするかだな。とりあえず龍可と龍亞の家にカード置きっぱなしだし、取りに行かないと。後は・・・

「二人とも、この時代では『シンクロ』は一般的に使われているんだ。だから、2人とも大平にシンクロが出来る」

「あら、そうなの・・・ようやく、簡単にできるのね？」

「やっとシエンの時代になるのね・・・腕がなるわ」

現在、雪乃のデッキは改良中だが、ツァンのデッキは真・六武衆だ。大体の人間には負けることはないだろう。

「後は、この時代で特別なことはあるの？」

「この時代では、『Dホイール』と呼ばれるバイクでデュエルをする」

「バイク・・・？」

「乗りながらデュエルするの？危ないんじゃない？」

一応オートパイロットだけど、スピードワールド2だとマニュアルなんだよな。理解してもらってから免許を取りに行かせるのも手だな。この先、ライディングデュエルは必要になってくる

「ともかく、一度俺は世話になってる家に戻る・・・二人はどうする？」

「私も行くわ。秋の怪我は深くないけど・・・心配なもの」

「僕も。それに・・・この町をもう少し見たいから」

こうしてホテルを出る。ん？トップスはすぐ近くみたいだな。敷地内みたいだからいちいち警備の前を通ることもなさそうだ。

「このホテル、どうやって入ったんだ？」

「面倒だったから金に物を言わせて入ったわ。すんなりとこの敷地内に入れたから」

「・・・そうですか。こうして、俺達は龍可と龍亞のいるトップスの最上階にまで戻ることにした。」

龍可と龍亞のペントハウス

「秋さん！」

「秋兄ちゃん大丈夫だった!？」

龍可と龍亞が駆けつける。そこには遊星もいた。あれ？なんであなたいるんですか・・・まあ、二人を抱えて逃げてくれたしな。天兵君は帰ったらしいが・・・まあ無事だったから良しとしよう

「ああ、なんとかな・・・生きのびたよ」

「秋さん・・・」

「遊星、二人を助けてくれてありがとう」

「いや・・・それより、その二人は？」

そう言いながら、俺を支えていた雪乃とツァンを見る。

「あ、あ、あー！もしかして！決闘女帝と決闘女神！？」

「決闘女帝？」

「決闘女神？」

それぞれ、雪乃とツァンが首を傾げる。まあ、当たり前と言えば当たり前だろう。それぞれ二人はどのように名を知られてはいない。写真を見せると、そこには紹介の場所に雪乃が決闘女帝、ツァンが決闘女神と書かれている。相変わらず明日香は決闘女王と書かれているが。

「二人の呼び名だよ・・・この時代でのな」

二人はその意味を理解すると、少しだけ気恥ずかしそうにしていた。

「それにしても、魔女から良く逃げ切ったよな」

「まあな・・・あはは」

適当にごまかし、荷物をまとめた。

「大会でまた会おう。俺達には用事が出来てしまったからな」

「えー！行っちゃおうの!？」

「ああ、フォーチュンカップで会おう、龍亞、龍可、そして遊星」  
こうして、俺たち3人はホテルへと戻ることにした。

\*

## ホテルの一室

「で、このカードがこれで、これが・・・」

「ねえ秋、近くのカードショップのカード、開けて見ない？」

ホテルに戻り、早速デッキ調整。ツァンは未来のカードに興味津津らしい。六武衆のカードは殆どツァンの手にあるが、やはり別のデッキと言つのも興味あるのだろう。

「おう、開けてていいぞ」

「あら・・・強欲な壺が禁止なのね、面倒だわ。これじゃあ命削りの宝札や天よりの宝札じゃないと補えないわね・・・手札」

雪乃はどうやらこの時代の禁止、制限カードの要項をネットで確認しているらしい。まあ、リチュアデッキになってからは普通にエクスーツばかりだから雪乃はシンクロ余りやらないからな。

「ん、よし・・・出来た。新・シンクロデッキだ」

主軸は一応5D'sの龍を抜いたデッキだが基本は変わらない。フエイバリットはトリシューラになるが・・・問題はないだろう。雪乃とツアンもデッキを調節し、今まで主だった『強欲な壺』『早すぎた埋葬』『苦渋の選択』などのカードを抜き、新たに需要のあるカードを突っ込んだ。さあ・・・後はフォーチュンカップだ。

数日後

S i d e 龍可

『さあ！ついに始まったフォーチュンカップ！キング、ジャック・アトラスに挑戦するのは果たして誰か！さあ、キングの入場だ！』

ついに始まったフォーチュンカップ。私と龍亞は席で見る。結局秋さんの言われた通りに参加はしなかった。でも代わりに秋さんが出ることになったのは・・・それはいいのかしら？そして入場してくるキング、ジャック・アトラスと、そのフエイバリットモンスター『レッド・デーモンズ・ドラゴン』。そして、入場する選手の中には遊星がいる。遊星がブーイングを受けるけど、ゴドウィン長官がそれを沈めた。そして・・・

『ここで皆さんに重大なお知らせがある！実は後一人！スペシャルな選手を紹介しよう！』

スペシャルな選手・・・そう、きっと決まっていると思うけど秋さんのことね

『さあ、登場していただくこう！3代目決闘王！』武藤秋』ー！』  
会場がざわざわと騒ぎ始める。そして出てくる秋さんの腕には、新型のデュエルディスクが装着されている。

『3代目、決闘王武藤秋は数十年間行方不明だったが、事故で意識不明のままコールドスリープに眠っていたところを数週間前、現代に蘇った！今回、先代決闘王と、現決闘王のデュエルを見ることが出来るのか！期待しよう！』

コールドスリープ・・・なるほど、そのままの年齢であることに疑問が出ないようにしたのね。

「さあ、第一試合だ！第一試合はいきなりだが先代決闘王である『武藤秋』そして、『ボマー』のデュエル！さあ、デュエルの時間だ！」

頑張つて、秋さん！

Side秋

なるほど、龍亞を大会に参加させなかったからこうなったか・・・ボマー・・・か、おい待て、ボマーだと？D・D・B来るんじゃない？

「悪いが、こちらには負けられない理由があるので・・・全力で潰させてもらつぞ」

「・・・来い、こちらも全力で答える」

「決闘！」

Side遊星

デュエルの初戦はいきなり決闘王の秋さんのデュエル。これは観客に強烈な印象を与えられるだろう。俺は現在、決闘女帝、決闘女神や、龍可、龍亞たちと共に観戦席にいる。というのも、控室の空気があまりよろしくないからだ。まあ、ここにもシテイの人間から見られる目は大して変わらないのだが、ここにいる方が幾分楽だ。秋さんは俺達が孤児院に住んでいたときにデュエルモンスターズを見た、憧れの人物だ。決闘王として名をはせた3人・・・武藤遊戯、遊城十代、武藤秋・・・その3人の中でも、秋さんの資料のデッキは驚いた。レベルが1だけのモンスターのデッキなどもあった。殆ど負けなしのこの人に俺達は憧れを抱き、そしてジャンクモンスター達を拾い、デッキを作った。あの人のデッキを生で見ることが出来る・・・楽しみだ。

「デュエル  
決闘！」

秋 LP4000

ボマー LP4000

「先攻は譲ろう、元決闘王」

「そりゃどうも・・・って、元を付けるなコラ！」

元・・・まあ確かに、今はジャックがキングだが・・・その言い方はない気がするな。

「俺のターンドロー！俺はモンスターを裏守備表示でセット！カードを2枚伏せてターンエンドだ」

『おーっと！決闘王の武藤秋、このターンは伏せたただけだ！』

いや、いい手だ。様子見と言う点では非常に納得のできる戦法だ。秋さんは過去のデュエリスト・・・そのデュエリストなら相手のデッキを知る必要があるからな。秋さんはどれだけシンクロを理解したのだろうか？

「私のターンドロー！私は、『マジック・リアクター・A I D』を召喚！」

マジック・リアクター・A I D   A T K 1 2 0 0 / D E F 9 0 0

「さらに『二重召喚』を発動。私はマジック・リアクター・A I D をリリースし、『サモン・リアクター・A I』をアドバンス召喚！」

サモン・リアクター・A I   A T K 2 0 0 0 / D E F 1 4 0 0

出てきたのは戦闘機のロボットのようなモンスター・・・あのモンスターの効果は一体？いや、二重召喚してまで出したモンスターだ・・・余ほどの効果があるんだろう。

「バトル！裏守備表示モンスターを攻撃だ！」



「セットしていたのは『ライトロード・ハンターライコウ』！このカードはリバースした時フィールドのカードを1枚破壊し、デッキからカードを3枚墓地へ送る。俺はサモン・リアクター・AIを破壊する！」

「つぐ……」

ライトロード……だと？秋さんのデッキは多彩で記録はうやむやだがライトロードを使ったことがあっただろうか？

「ねえ雪乃さん、秋さんのデッキ……今日はライトロードなの？」

「いいえ、違うわ……秋のデッキは新しくなった『シンクロデッキ』よ」

「ええ！？秋さんこの短期間でシンクロを理解したの！？」

と、驚いている龍亞。そういえばそうだな、タイムスリップして数日……それにもかかわらずシンクロを覚えているとは……流石だ。

「えっと……そうね（言えないわね、秋がシンクロを学生時代から使ってたなんて。秋が別世界から来た影響でこの世界の柱となる5匹の龍まで使えるなんて……黙っておきましょう）」

なんだ？若干藤原雪乃の表情が変わったような気がしたが……まあ、いいだろう。デュエルを見なければ。

「私はカードを1枚伏せ、ターンエンドだ」

「俺のターンドロ―！俺は手札から『カードガンナー』を召喚！」

カードガンナー ATK400/DEF400

カードガンナー！？あの低い攻撃力のモンスターで何をする気だ？

「カードガンナーの効果、デッキからカードを3枚まで墓地へ送り、送った数×500ポイント攻撃力を上げる」

再び墓地にカードを・・・秋さんのデッキは墓地にカードを送ってばかりだ。一体何を？

「お、墓地に送ったカードのうち、1枚が『ダンディライオン』だ。『綿毛トークン』が2体、フィールドに特殊召喚される」

カードガンナー ATK400/DEF400 ATK1900/  
DEF400

綿毛トークン？ ATK0/DEF0

綿毛トークン？ ATK0/DEF0

綿毛トークンは特殊召喚されたターンはリリース素材にはできないが、シンクロは可能。だが、秋さんはカードガンナーを召喚している。どうするつもりだ？

「俺はデッキの一番上のカードを墓地に送る・・・お、『レベル・ステイラー』だ。そして墓地のチューナーモンスター『グローアップ・バルブ』を特殊召喚！」

グローアップ・バルブ ATK1000/DEF1000

チューナー！そうか、墓地効果での特殊召喚・・・それによりアレだけ墓地にカードを送っていたのか。考えてみれば秋さんは墓地効果を利用するデッキか。この短期間でこれだけのテクニクを・・・  
・・・流石だ。となると、後はシンクロ召喚・・・合計のレベルは6か

「レベル1の綿毛トークン2体と、レベル3のカードガンナーにレベル1のグローアップ・バルブをチューニング！」

1 + 1 + 3 + 1 = 6

「雪風に舞う氷結の龍よ、裁きの時は来た！今こそその稲妻で撃ち払え！シンクロ召喚！吹きすさべ！」氷結界の龍ブリューナク！！」

氷結界の龍ブリューナク ATK2300/DEF1400

氷結界の龍ブリューナク、だと・・・？あのカードは確か超限定のカードだったはずだ。氷結界シリーズと呼ばれたシリーズのパックでも1カートン（12箱）につき、ブリューナク、トリシユウラ、グングニールが1枚ずつ入っているといわれるほど希少だ。トリシユウラに限っては本当に当たる確立が低いとも聞く・・・

「すっげえ！ブリューナク持ってる人初めて見た！」

「すごい・・・あの、ツアンさん。秋さんはどうやってブリューナクを？」

「どっつて・・・えーと・・・先週から、カードパックを大量に漁

つてたわ。その中の一枚ね。(い、いえない・・・学生時代から使  
ってるなんて・・・)」

まただ・・・今度は決闘女神、ツァン・ディレの表情が若干変わった。この二人は俺たちに何かを隠しているのだろうか？

「ブリユーナクの効果により、手札のカード1枚を墓地に送りアン  
タの伏せカードを手札に戻す！」

「ぐっ・・・」

「ダイレクトアタック！行け、ブリユーナク！」

ボマー LP4000 LP1700

これで大幅にライフを削った。周囲の観客もザワザワと驚きの声を  
上げる。あのようなテクニクは滅多に見ることはできないだろう。

「俺はこれでターンエンド！」

「っく、ここで負けるわけにもいかん、私のターン！」

この状況からあのボマーという人物はどう反撃をするつもりだろう  
か・・・

## 開幕（後書き）

というわけで、龍亞が参加しないことでこの世界は色々方向が  
変わる・・・ように出来たらいいなとか思ったり思わなかったり

ではまた次回

## 並行世界（前書き）

前回の感想で、天よりの宝札、また命削りの宝札に付いての考査がありました。

天よりの宝札はこの時代では出てきていないので、禁止カードでは？というもの

まあ、確かにその通りですね。でも、まあ知つての通り私のデュエルタクティクスのなさと、小説でのプレイングセンスのなさは本当にひどいので、手札補充しないと話とデュエルが進まないという現状をご理解いただければと思います。

ツイッター、フォロワーが増えてきました。

ありがとうございます。ここの更新情報は随時お伝えしていきます  
<http://twitter.com/#!/AKIKAZE7010>

秋「今日の最強カードは『ダーク・ダイブ・ボンバー』・・・通称『DDB』だ」

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上  
自分フィールド上に存在するモンスター1体をリリースして発動する。

リリースしたモンスターのレベル×200ポイントダメージを相手ライフに与える。

このカードが出た場合、次のターンは回ってこないと言われていました。禁止カードになって正解だと思いますね、うん。

ぶっちゃけ酷いにもほどがあるこのカード・・・昔は本当に酷かった

このカードに関しては、制限、準制限なくして一気に禁止カードとなりましたからね。

昨日遊星編3と、DREVをヴェーラー欲しさに購入しました。そしたら遊星編3で2枚出てきて、DREVではまったくと言っていいほど出なかったorz

10パック近く買って警告1枚って・・・

ってか、DREV・・・トライデントウォリアーとアマゾネスの女王って・・・どんだけ外れなんだよ!!!

拳句の果てにドラゴエクリテスとか！攻めてスクラップ・ドラゴンかキマイラ出てくれよ!!!

つと、まあそんな愚痴をこぼしながら次のストラク3つを予約した秋風です。

次のストラク、レダメに付いては騒いでましたけど・・・

ライラ

光の援軍

カイバーマン

伝説の白石

サモプリ

DDR

・・・なんだこの豪華ストラクは。1000円のストラクなのに5000円分くらい入ってるぞ。どんなクリスマスプレゼントだ、これは

皆さんもぜひ予約を！

では本編をどうぞ！

## 並行世界

Side遊星

秋 LP4000

ボマー LP1700

「私のターン！」

『さあボマー選手、この状況からどう打開するのか！』

戦況は秋さんが圧倒的有利。この状況からボマーがどのように戦況をひっくり返そうとするか、見ものだな。

「私は、手札から『ライトニング・ボルテックス』を発動！手札1枚をコストに、相手のフィールドの表側で存在する全てのモンスターを破壊する！」

破壊されるブリューナク。確かに、あのモンスターがフィールドにいる限り手札があれば伏せたカードも、召喚したモンスターも無効化されるからな。

「さらに、手札から『天よりの宝札』を発動！互いのプレイヤーはカードを6枚になるようにドローする！」

天よりの宝札だと！？最強のドローカードじゃないか！あの男、あんなものまで持っていたのか。一応、制限カードだが・・・この土



壇場で引くとはな。

「そして『トラップ・リアクター・RR』を守備表示で召喚する！」

トラップ・リアクター・RR ATK800/DEF1800

さっきはマジック・リアクターだったな。今度はトラップ・リアクター……シリーズのようだが、どのような効果を持ち得るカードなんだろうか。

「カードを2枚伏せて、ターンエンド！」

ブリューナクを破壊されたとはいえ、秋さんも手札は6枚だ。次はどんなシンクロモンスターを……ん？秋さんの表情が少し辛い表情だ。どうかしたのか？

「あー……ねえ、雪乃？」

「ええ、多分ね……」

と、二人は秋さんの表情を理解したようで、何やら互いに頷いている。何が多分なのだろうか？

「ねえ、何が多分なの？」

「……基本的に、秋はドロー運が悪いの。6枚ドローなのはいいけど、よく手札で事故が起きることがあるわ。（まあ、原因はシンクロ出来てもスターダストたちを出せないからエクストラデッキが辛いという部分もある……どうするの？秋）」

再びデュエル場に目を向ける。どうやら秋さんは動くようだ。

「俺のターンドロー・・・！っち、俺はモンスターをセットし、カードを3枚セット！ターンエンドだ！」

これでフィールドには4枚の伏せカードが存在する。ここからどうするのだろうか。

「私のターンドロー！私は伏せていた『リビングデットの呼び声』を発動！墓地に存在する『マジック・リアクター・AID』を特殊召喚！」

マジック・リアクター・AID ATK1200/DEF900

再び現れるマジック・リアクター・AID・・・一体ボマーは何をするつもりなんだ？

「そして『死者蘇生』を発動！蘇れ『サモン・リアクター・AID』！」

サモン・リアクター・AID ATK2000/DEF1400

フィールドには3体のリアクターが・・・これはいつたい？

「そして私はリアクター3体が存在する時、『デルタ・リアクター』を発動！3体を墓地に送り、『ジャイアント・ボマー・エアレイド』を特殊召喚する！」

ジャイアント・ボマー・エアレイド ATK3000/DEF25

00

『おおーつと！攻撃力3000の強力なモンスターが召喚されたあ  
！』

攻撃力3000のモンスター！なるほど、それぞれが重なり合い生まれるリアクターのモンスター達か・・・歓声が沸く。攻撃力3000のモンスターなどそう見ることもないからな。だが、死者蘇生やリビングデットなど、多くのカードを使用している。ボマーも必死のようだな。

「バトル！ジャイアント・ボマー・エアレイドでセットモンスターを攻撃！『デス・エアレイド』！」

ミサイルがセットモンスターに向かって行く。リバーズしたのは・・・ボルト・ヘッジホッグ。やはり墓地効果で効果を発揮するカードか。

「私はカードを1枚伏せターンエンド！」

「俺のターンドロー！俺は手札から『ジャンク・シンクロン』を召喚！」

ジャンク・シンクロン・・・！まさか、俺が使っているカードまで使っているとは。確かに、ジャンク・シンクロンは使用用途が多い・・・使っている俺もよく助けてもらっているが、あそこからどんなモンスターが召喚されるんだ？

「この瞬間、ジャイアント・ボマー・エアレイドのモンスター効果発動！相手がカードをプレイした時、そのカードを破壊しプレイヤーに800ポイントのダメージを与える！この効果は1ターンに1度使うことが出来る」

「なにつ！ぐあっ！」

秋 LP4000 LP3200

「ふっ・・・これでうかつにモンスターも出せまい」

まさか、あのカードにはそんな効果があったのか。破壊されるジャンク・シンクロン。これではフィールドはから空きのままだ！

「だがジャンク・シンクロンは召喚には成功している。墓地のレベル2以下のモンスターの効果が無効にして特殊召喚する！来い、『ライトロード・ハンターライコウ』！」

ライトロード・ハンターライコウ ATK2000/DEF1000

「そして、罫発動『リビングデットの呼び声』！墓地に落ちた『デブリ・ドラゴン』を特殊召喚する！」

デブリ・ドラゴン ATK1000/DEF2000

デブリ・ドラゴン・・・！秋さんにはドラゴン族シンクロモンスターもいるのか・・・

「そして墓地のボルト・ヘッジホッグの効果により、チューナーがいる時、このカードを特殊召喚する！そしてカードを1枚伏せる」

ボルト・ヘッジホッグ ATK800/DEF800

合計のレベルは8・・・この状況で一体どんなモンスターを召喚す

るつもりなんだ！？ジャイアント・ボマー・エアレイドを超えるシンクロモンスターなどそうそう聞いたことがない。

「レベル2のボルト・ヘッジホッグと、レベル2のライトロード・ハンターライコウに、レベル4のデブリ・ドラゴンをチューニング！」

2 + 2 + 4 = 8

「集いし鉄くずが、新たに息吹く命となる。今こそその意思を竜となりて姿を現せ！シンクロ召喚！瓦礫の化身『スクラップ・ドラゴン』！」

スクラップ・ドラゴン ATK2800/DEF2000

現れたのはスクラップ・ドラゴン。その名に相応しく、瓦礫で出来た竜だが・・・初めて見るシンクロモンスターだ・・・

「スクラップ・ドラゴンの効果発動俺はこの伏せカードと、ジャイアント・ボマー・エアレイドを破壊する！」

爆発するジャイアント・ボマー・エアレイド。これでフィールドにモンスターはいない。そして攻撃力はダークエンド・ドラゴンの2800でボマーを打ち倒すことができる。

「行け、スクラップ・ドラゴン！ボマーにダイレクトアタックだ！『スクラップ・ブラスター・カノン』！」

「やらせはせん！畏発動『炸裂装甲』！攻撃してきたスクラップ・ドラゴンを破壊する！」

破壊されるスクラップ・ドラゴン。これで互いにフィールドにはモンスターがいない状態だ。

「ならば、カードを1枚伏せてターンエンド……！」

「私のターンドロ！私は負けるわけにはいかない！」

ボマー……凄いい気迫だ。デュエルも終盤だな。俺はそろそろDホイールの調整に行くか。

「氷室、Dホイールの調整をしたい……付き合ってくれ」

「ああ、わかった……んじゃ、後でな」

こうして俺達はDホイールのメンテナンスに行くことにする。秋さん、頑張ってくれ。

S i d e 雪乃

遊星の坊やがDホイールの調整に行くと言って席を立った。フィールドには伏せカードが3枚。秋がそう簡単に破れるとは思えないけど……あのボマーと言う男の焦りは何？

「私はチューナーモンスター『ブラック・ボンバー』を召喚！」

ブラック・ボンバー ATK100/DEF100

チューナーモンスター……まさか、この局面でチューニングする気なの？

「そしてブラック・ボンバーの効果発動！このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在する機械族・闇属性のレベル4モンスター1体を表側守備表示で特殊召喚する事ができる！ただし、この効果で特殊召喚した効果モンスターの効果は無効化される。戻って来い、『トラップ・リアクター・RR』！」

トラップ・リアクター・RR ATK800/DEF1800

「レベル4のトラップ・リアクター・RRにレベル3のブラック・ボンバーをチューニング！」

3 + 4 = 7

「シンクロ召喚！現れる、『ダーク・ダイブ・ボンバー』！」

ダーク・ダイブ・ボンバー ATK2600/DEF1800

攻撃力2600のモンスター・・・秋は少し焦っているように見える。あのカードを知っているのね？

「バトルだ！行け、ダーク・ダイブ・ボンバー！」

「つく！畏カード『和睦の使者』を発動！このターン発生するバトルダメージは0となる！」

「なかなかやるな・・・流石は決闘王と言ったところか。だが甘い！ダーク・ダイブ・ボンバーの効果を発動！このカードをリリースし、このカードのレベル×200ポイントのダメージを与える！」

「ぐあああつ！」

武藤秋 LP3200 LP1800

「悪いが私にも使命があつてな・・・さらに、手札から『早すぎた埋葬』を発動！800のライフをコストに、私は再び『ダーク・ダイブ・ボンバー』を特殊召喚！」

ボマー LP1700 LP900

ダーク・ダイブ・ボンバー ATK2600/DEF1800

まずい！またリリースされたら一気にライフを削られてしまう！

「私は再びダーク・ダイブ・ボンバーを・・・手札から『エフェクト・ヴェーラー』の効果発動！このカードを手札から墓地へ送り、モンスターの効果を無効にする！」なんだと！」

これで効果は無効にできたけど、何故2回目には警戒をしていたのかしら・・・でもこれでもライフ差はさほどない。まだ勝負の行方は分からないわ。頑張つて頂戴、秋・・・！

「私はこれでターンエンド！」

「俺のターンドロロー！・・・よし、俺は手札の『グローアップ・バルブ』を墓地に送ることで、クイック・シンクロンを特殊召喚する！」

クイック・シンクロン ATK700/DEF1400



「さらに、手札から魔法カード『オーロラドロー』を発動！手札がこのカード1枚の時、カードを2枚ドローする！そして手札から『貪欲な壺』を発動！墓地の『ジャンク・シンクロン』『カード・ガンナー』『スクラップ・ドラゴン』『氷結界の龍ブリューナク』『ライトロード・ハンターライコウ』をデッキの戻しシャッフル。カードを2枚ドロー！」

ドローに次ぐドロー・・・通常召喚を残した上、手札が2枚から3枚へ戻る。相手がこのデュエル中に天よりの宝札を使ったとはいえ、秋のドロー加速は恐ろしいわね。

「そして手札から俺は『ワン・フォー・ワン』を発動！手札のレベル・ステイラーを墓地へ送り、デッキから『チューニング・サポーター』を特殊召喚！」

チューニング・サポーター ATK1000/DEF1000

「そして通常召喚！『ジャンク・シンクロン』！」

ジャンク・シンクロン ATK1300/DEF500

フィールドが一気に3体並ぶ。ジャンク・シンクロン、クイック・シンクロン、チューニング・サポーター。そして、ジャンク・シンクロンの効果を使えば4体になる。秋のシンクロデッキは展開力は広いからこれくらいは普通ね。

「ジャンク・シンクロンの効果で俺は『ドツペル・ウォリアー』を墓地から特殊召喚！レベル2としたチューニング・サポーターに、レベル3のジャンク・シンクロンをチューニング！」

2 + 3 = 5

「刻まれし正義の名のもとに、今こそ破壊の限りを尽くせ！シンク  
口召喚！起動せよ、『A・O・Jカタストル』！」

A・O・Jカタストル ATK2200/DEF1200

「チューニング・サポーターの効果で1枚カードをドロ―！さらに、  
カタストルのレベルを一つ下げること、『レベル・ステイラー』  
を特殊召喚！」

レベル・ステイラー ATK600/DEF0

「レベル1のレベル・ステイラーと、レベル2のドッペル・ウオ  
リアーに、レベル5のクイック・シンクロンをチューニング！」

1 + 2 + 5 = 8

「光速より生まれし肉体よ、革命の時は来たれり！勝利を我が手に  
！シンク口召喚！煌めけ、『フルール・ド・シュヴァリエ』！」

フルール・ド・シュヴァリエ ATK2700/DEF2300

攻撃力は2700・・・ダーク・ダイブ・ボンバーの攻撃力を上回  
ったわね。それにしても、この会場の驚きよう。すごいものね・・・  
私とツァンは慣れてるけど、この周り具合は驚くのが普通ね。

「バトル！フルール・ド・シュヴァリエでダーク・ダイブ・ボンバ  
ーを攻撃！『フルール・ド・オラージュ』！」



とを本物の武藤秋かと疑っている目もあるし。

「いいデュエルだった・・・流石は3代目決闘王か・・・」

「ボマー・・・アンタとのデュエル、いいデュエルだった」

「・・・だが負けは負けだ。私は私の使命を果たす！」

そう言っつてマイクの電波をジャックするボマー・・・おいおい、ここでやる気か！？Dホイールは・・・！？おい、あの突っ込んできているのはまさか！

「Dホイール！？」

巨大なDホイールがこちらへ突っ込んでくる。俺はそれを避けると、それに飛び乗ったボマーを見上げる。

「ボマー！お前何を・・・！」

「済まないな、決闘王・・・聞いてくれみんな！私はこの大会に優勝し、式典でゴドウィンが行った事実を公にするつもりだった。だが、今になってそれは叶わぬ夢 ならば、この場で復讐を果たすまで！これを観よ！」

映るのは村だ。どこか辺境の地の村。そしてその村が大爆発を起こし跡形もなく消え去っていた。

「これがゴドウィンの実験により消えた私の村だ！私の姉弟を含めた村人全員は行方不明・・・今この場で復讐を果たすまでよ！」

困惑する会場。だが、ゴドウィンへの対応は早かった。原作とは全く違う形で、セキュリティが彼を捕獲する。

「つく……！」

「……ボマー……この世界は、俺の知る世界ではないのか……？」

セキュリティに連行されるボマーを見て、俺はただそう呟くしかなかった。

Sideゴドウィン

「……ふ」

市民に安全を保證すると演説してから私はデュエル場に残った武藤秋を見つめていた。彼の方が赤き竜の痣を持つ者達を確実に目ざめに近づけることが出来る。ボマー……貴方はもう用済みなのですよ。

「さて……」

しかし武藤秋が私の選んだ少女の出場を止めるとは予想外でしたが……まあいいでしょう。手は打ってある。私は静かにその次の試合を見届けることにしましょう

## 並行世界（後書き）

秋が知らない、原作とは違う世界・・・その世界は歪めた結果なのか？

それとも・・・

待て、次回！

## フリートーク（前書き）

というわけで、フリートークです

ツイッター

<http://twitter.com/#!/AKIKAZE7010>

この間60人だったのが84人にまで増えました。とても嬉しかったです。

メッセージや、返信くれた方には極力帰すつもりです・・・こんな私のメッセージでよければ聞いてやってください

というか、丁度100部目が番外編って・・・残念すぎる（汗

あと、今日2枚目のフォーミュラを当ててしまいました

お店に売ろうと考えたけど、900円というのに絶望した

## フリートーク

一同「読者の皆様、今日はホント、すいませんでしたー！」

ツアン「って、秋！なんでこのつけから僕達謝ってんの！？」

秋「いや、実はさ、不測の事態が起こってさ？前、雪乃とツアんどっちがヒロインになるか悩んだじゃん？それで今回感想で『アキを是非ヒロインに』って声があつたんだ」

雪乃「前は私ルートか、ツアンルートか作者は作っていたよね・・・」

ツアン「まさか・・・」

秋「そ、今回そのためにアキをヒロインに加えるという暴挙に出ましたー」

雪乃「そして、そのせいで今まで書き溜めてた奴全部修正して時間なくなりましたー」

ツアン「なので今日は更新する話があつりませーん！って、ええ！？ちよ、嘘、嘘でしょ！？じゃあどうするのよ、今日の話！というか、あの作者バカそんな暴挙に出たの！？作者！何が不足の事態よ！衝動的にもほどがあるでしょ！」

秋「まー、まー、今裏で必死に本編作っているってさ。今日はそれまでフリートークで繋げって言うお達しだ。」



ツアン「どこの出前なのよ、それ・・・で？後何分持たせれば出来る上がるの？」

雪乃「えーと・・・あとwordで4ページくらいかしら？」

ツアン「話の1話の半分じゃないのよそれえ！大体、この前だつて一緒に同人活動している人に『こういうトーク入れられちゃうと同人小説に出来ないんだよね、読者はそういうのに付いてこないからさー』って怒られたばかりじゃないの！」

雪乃「何を言っているの。こんな小説、前回、前々回からずっと修正点でまくりなんだからいい機会よ。作者が一度見直すっていう必要もあるのよ。そもそも、私達の秋への好意で作者がTF愛用者を何人敵に回していると思っっているの？」

ツアン「うっ・・・まあそうなんだけど」

秋「そうだよ？同人活動とか、来年の夏コミよりも、とりあえず俺らは、目先の話のことを考えればいいんだよ」

ツアン「いやだから、目先の今日の話はどうするんだって話をしてるのよ。やっぱりまずいわよ。ワードで4ページ分、ずっとこんな話オンリーなんて。この小説読んでくれる人達に申し訳ない気が・・・」

雪乃「もう・・・あきらめが悪いわね。もしかしてどこかの回し物なのかしらツアン？pixivかしら？それともアルカディ「あー！駄目よ！そんな具体例出しちゃ！」」

秋「まあ、読者様達の言うこともわからなくてもない。要するにあれ

だろ？俺達がずっとダラダラ喋ってるんじゃないかって、何かしら展開が欲しいわけだろ？」

ツアン「まあ、多分……」

秋「しょうがねえ……なら次から頑張るか！」

雪乃 ツアン「おー……！」

ツアン「……え？」

つてなわけで、ガチで時間がなかったので今回は5D's編での秋達のキャラ位置の紹介をしようと思います。いや、ホントスイマセン。今回のコレの元ネタ分かる人は多分作者と親友です。

武藤秋 21歳 遊戯王GX終了後

卒業後、プロリーグを蹴って1年間十代達と旅に出る。雪乃、ツアンとは婚約した恋人状態。3期の事件において精霊の力を得ていることで、疑似的にサイコデュエリストのようにカードの力を実体化させることが出来るが、それは本人の意思で左右される。使用デッ

キは相変わらずシンクロ、エクシーズを使うが、ペガサスと会談しそのカードをの情報を提供。公式的にシンクロモンスターたちが採用された。なので、秋は試験デュエリスト第一号と言う形にある。エクシーズもペガサスから直々に使用を許可されており、彼自身がこの世界で未来での大きな分岐点未来を分ける分岐点となっていた。ワールド・デュエル・チャンピオンシップにおいて、決闘王を決める大会を開催。武藤遊戯他、有名な決闘者達の中に参加し決闘。決勝戦で2代目決闘王『遊城十代』を破り、3代目決闘王の称号を得る。そして再び旅に出ているところに何故か未来へと来てしまった。

藤原雪乃 21歳 遊戯王GX終了後

卒業後、女優としての夢を投げ捨ててまで秋の旅に同行。本人いわく、手綱を持ってないとこの女に掴まれるかわからないということらしい。秋とは婚約者として恋人同士であり、ワールド・デュエル・クイーンカップにおいて準優勝という成績を残す。1位は明日香。2位、3位は雪乃とツアンが引き分けとなり、称号として『決闘女帝』という称号を得た。ファンクラブまでも存在し、婚約報告をした時は何人のファンを泣かせたかは分からない。

また、サラの力によって精霊と会話したり、精霊に触れたりすることが出来る。これも3期が影響している。旅に出てある日秋がいなくなると、自分たちも謎の渦に巻き込まれて未来へと飛ばされた。

ツアン・デイレ 21歳 遊戯王GX終了後

卒業後、雪乃と殆ど同じ理由で秋の旅に同行する。この時点ですでに秋とは婚約者として正式な恋人になった。ワールド・デュエル・クイーンカップにおいても、準優勝を勝ち取りその名を『決闘女神』という称号を得た。性格は相変わらずだが、秋への愛は本人いわく

誰にも負けないと自負している。シエンの力を使い、精霊を視覚化、会話をすることが出来る。これも3期が影響している。旅に出てある日秋がいなくなると、自分たちも謎の渦に巻き込まれて未来へと飛ばされた。

まー・・・大体現状こんな感じですね

今日はマジですいませんでした。ホント時間なくて、こんなおしか作れなかったです。

明日にはちゃんと話を上げます

ではノシ

## フリートーク（後書き）

というわけで、次回こそ本編上げます

## 孤独な闇を染める光（前書き）

というわけで、今回は秋VSアキとなります

アキ「今日の最強カードは・・・ボタニカルライオよ」

ボタニカルライオ

自分フィールド上に表側表示で存在する植物族モンスター1体につき、

このカードの攻撃力は300ポイントアップする。

このカードはフィールド上に表側表示で存在する限り、コントロールを変更する事はできない。

ジャンプフェスタに登場したプロモーションカード。効果も強力でかなりの値段で取引されています。

作者が今欲しいカードベスト5に入るカードです

では本編をどうぞ！

しつこいですが、ツイッターやってます。気軽にフォローの方をお待ちしています

<http://twitter.com/#!/AKIKAZE7010>

## 孤独な闇を染める光

Side秋

控室に戻ると、雪乃達がいた。

「お疲れ様、秋」

「ああ、雪乃、ツアン・・・ふう」

俺は腰を降ろし、デュエルディスクを外した。とりあえずと・・・

「ミラ？」

「はい、盗聴器は全て外してます」

コップの中には水に浸された無数の盗聴器があつた。とりあえずこれで普通の話せるといふわけか。デュエル場では十六夜アキと、えーと・・・ジルなんとかつてのが戦っている。テレビではそんな様子が見れる。

「大変だったわね」

「ああ・・・スターダストとかが出せないからな」

状況次第ではシューティング・クエーサーも出すことができたし、本当にシンクロデッキで5D'sが出せないのは辛すぎる。

「エクシーズはしないの？秋」

「微妙、だな・・・状況次第だ。次はデッキを変えるが・・・エクシーズをやってから観客がどんな反応するかだな」

前にもやったが、エクシーズはこの世界に存在しない物だ。万丈目が十代と戦う時同様に、他の人間に見られるのは辛い。だが、対戦カードを見る限り、次の相手が十六夜アキだ。俺はシード枠となっている。前のデッキの対策はされているだろうし、一応エクシーズを出す言い訳も考えることはできているからな。

『勝者、十六夜アキー！』

テレビからは十六夜アキの勝利と、それへのブーイングが巻き起こっていた。ここは原作と一緒に・・・さて、どうしたものか。本格的にエクシーズで戦わないといけなくなる。

「大丈夫？秋・・・そんな難しい顔して」

「いや・・・大丈夫だ。少し、な」

とりあえず、遊星のデュエルは問題ないはずだが・・・問題は龍可のデュエルだ。

「龍可は？」

「ああ、あの子なら席にいるわ」

マジかよ、そういえば遊星は次の試合に向けてDホイールの調整をしているせいではないし・・・



「やばいな・・・」

俺は立ち上がり、扉を開ける。

「ど、どうしたの秋？」

「龍可をすぐどこかに連れだす。行くぞ」

俺達は駆けだし、観客席へと走る。

「ど、どうしたの秋！急に！」

「説明は後だ。俺は観客席にはいけない・・・雪乃、ツアン、龍可と龍亞を連れてここを離れる」

「わ、わかったわ」

そう言って駆けだす2人。これで何とかなるだろう・・・

「イーヒッヒッヒ」

「・・・ピエロか」

俺の後ろにはイエーガーが立っていた。っち、あざとい奴。監視力メラの事を忘れてたぜ。

「どうかされましたかな？」

「テメエこそ、こんなところで何をしている？」

『さあ、次の対戦はサテライトの流れ星、不動遊星と・・・』

外ではMCが次の対戦に付いて説明している。気配が、3、4・・・いや、もっとか？

「困りますなあ・・・貴方ともあるうお方がその辺をつろつかれては」

「悪いが静かにしているのは嫌いでね・・・」

「ゴドウィン長官がお呼びです・・・付いて来ていただけますかな？イーヒツヒツヒ」

嫌な笑みを浮かべるイエーガー・・・つち、ミラはいてもこの数はどうなんだろうな。だが、俺の知らない未来が起きた今・・・アイツから話を聞くのも一興か。

「いいだろう、案内しろ」

「どつぞ」ちらへ・・・」

こうして、俺はイエーガーに付いていくこととなった。

長官室

「・・・」

「初めまして、3代目決闘王・・・武藤秋」

そこにいるのは長身の男。長身つか、こいつジャックよりでかいんだな。大男って感じた。

「お前がゴドウィンか」

「ええ、よろこそ過去よりおいでなさいました」

コイツ・・・俺が過去から来ることを知っていたのか？何故？

「お前、どうして俺が過去から来たことを知っている」

「さあ、何故でしょう・・・」

短く笑うゴドウィン・・・教える気はない、そう言いたいようだ。だがダークシグナーとしての覚醒も、シグナーの竜の力も取り込んでいないこの男がどうやって俺のことを？やはり、裏で動くZ・O・NEが関係しているのか？

「貴方にはお願いがありましたね、ここへ呼びました」

「お願い？」

どうせシグナーの力を覚醒しろなんだって言う話だろう。

「ええ、次の対戦で貴方には負けていただきます」

「ほっ?」

次の相手は十六夜アキか・・・この前みたいな痛い思いはもうしたくないんですけど。ものすく。

「次の対戦カードは貴方と十六夜アキのデュエル・・・彼女の力を図る意味でも「断る」ほう？」

「言ったはずだ。俺はお前の操り人形になるつもりはない」

「ならばあの双子がどうなっても良いと？」

・・・つぶ、墓穴を掘ったなゴドウィン。

「お前があの双子に危害を加えることはない」

「と、言いますと？」

「あの双子・・・特に龍可には特別な力が宿っている。そう、シグナーとしての力をな」

俺の言葉に、表情をゆがめるゴドウィン。どうやらこいつは俺がシグナーについて知らないと思っていたらしい。まあ当然か。俺は過去の人間だ。シグナーのことなど知るはずがない。

「シグナーを知っているとは・・・驚きましたよ。どこでそれを？」

「答える義務はない」

たいした収穫はなし、か・・・この男から何か情報を聞けるかと思っただけが、とんだ無駄足か。やはり先の未来にいるイリアステルから話を聞かなければなるまい。

『さて、次の対戦は特別な対戦カードだ！ゴドウィン長官がランダムに選んだデュエリストたち二人が敗者復活に望む！その2人は、この二人だあ！』

司会者の言葉で外に映し出される龍可と、フランク・・・だっけ？まさか！

「てめえ・・・」

「ふふふ・・・」

不敵に笑うゴドウィン。つち、こんなところにいる場合じゃない。くそっ！部屋を出ようとすると、黒服の男たちが立ちふさがる。

「貴方に部屋を出て行かれるわけにもいきませんな」

『秋・・・！』

「雪乃か！」

通信が入る。もしものために持っていた通信機だ。雪乃の声からは焦りの声が聞こえる。

『龍可ちゃんがもう既に控室にいたわ。私たちじゃ手も足も出ない』

「俺はすぐそちらへ行く。ミラと合流してくれ」

「・・・ほう、ここから出るつもりですか？」

余裕を構えるゴドウィンだが、俺は俺を抑えつけようとする黒服達を蹴り飛ばし、殴り飛ばした。

「なっ……」

「伊達に旅なんかしてないんでね……！」

俺はドアを開け、そのまま廊下を走り抜けた。そして雪乃、ツアンと合流する。このままだと龍可はフランクと戦い、シグナーの力を覚醒する。

「秋！」

「雪乃、ツアン！」

「どうするの？龍可ちゃんは連れてかれて、もうステージでデュエルを！」

ここで下手な介入はできない。くそ……！この先の未来が分からないのに……

「マスター、龍可ちゃんの意識が精霊界へ引つ張られています」

余計な手出しはここから先出来ない。俺達に出来るのは、龍可の無事を祈ることだけ、か……無事でいてくれ、龍可。

\*

大会日2日目

龍可の戦いは無事に原作通りだった。引き分けで終わり、龍可はシグナーとして覚醒し、そして龍亞も無事に目を覚ました。そして次の対戦カードは十六夜アキと、俺のデュエル。現在はその時間まで控室で待っている。

「・・・雪乃、ツアン、そしてミラ。お前達は龍可と龍亞を守ってあげてくれ」

「マスター正気ですか？相手はこの前の・・・」

「分かってる。まあ、色々あったせいで俺もお前達精霊の力を借りることはできるんだ。そんな不安そうな顔するなよ」

この先の未来、彼女のシグナーの力を覚醒させ、ダークシグナーとの戦いにまで持っていかなければイリアステルは出て来ない。龍可が覚醒した今、大筋のシナリオ通りに物語を進めなければいけない。十六夜秋に勝っても、彼女の力を引き出せばいい。なら、やはり必要になるのは“力”か。

「未来を変えず進めば奴らが出てくる。俺達はその修正するための力となるしかない・・・」

「武藤秋さん！時間です！」

「それに、あの女は俺と同じだ・・・孤独の中がどれだけ辛いかわかってる。だから俺は戦う」

外からスタッフの声が聞こえる。さて、行くか。ボマーの件もある

から何が起こるかは分からないが、この先の未来を変えることにはなるが、行くしかない。俺は腹をくくり、部屋を出ていこうとしたが、二人の手が俺の肩にあった。

「雪乃？ツアン？」

「秋・・・負けないで」

「ちゃんと、無事に帰ってきてね・・・」

不安そうな二人の顔。俺は笑みを作り、二人の唇にそれぞれキスをする。

「大丈夫、必ず帰るよ・・・お前達の元へ」

そう言っただ俺は外へ出る。

『さあ、次の対戦は3代目決闘王の武藤秋と、ここまで快進撃を続ける十六夜アキのデュエルだ！さあ、互いのデュエリストの入場だ！』

俺が入場すると歓声がわく。が、それは純粹な応援ではなかった。

「あの魔女を倒せー！」

「頼んだぞ決闘王ー！」

不愉快だな、こういう応援。めちゃくちゃウザい。そして逆に十六夜アキが入場するとブーイングが巻き起こる。そして俺と十六夜アキが所定の位置へ着いた。



「いいデュエルにしよう」

「……………」

俺が言うも、十六夜アキは無視。デュエルディスクを構えた。

『さあ！デュエルの時間だ！』

「<sup>デュエル</sup>決闘！！」

十六夜アキ LP4000

武藤秋 LP4000

Sideツァン

会場では十六夜アキにすさまじいまでのブーイングが響く。あの子、  
すごく悲しい目をしているわ。

「……………」

「どうしたの？ツァンさん」

「ううん、なんでもないわ……」

あの子が、どこか昔の私と重なる。他の女を助けるなんて普段はし

て欲しくない。でも秋、今はあの子を助けてあげて……あの悲しい目を……

「<sup>デュエル</sup>決闘！」

『さあ、先攻は十六夜アキだ！』

「私のターンドロー……私は、『ボタニカル・ライオ』を召喚」

ボタニカル・ライオ ATK1600/DEF2000 ATK1  
900/DEF2000

「ボタニカル・ライオの攻撃力はフィールドの植物族モンスター1体に付き、300ポイントアップする」

自身も適用するというその効果……ボタニカル・ライオは強力なモンスターね。

「ターンエンド」

「俺のターン、ドロー！よし、俺は裏守備表示でモンスターをセツト！カードを1枚伏せてターンエンド！」

『決闘王武藤秋！やはり最初は様子見だあ！』

ま、秋はいきなり攻めに行かないから……これがいつも通りなんだけどね。多分、あのデツキだから。

「私のターンドロー！私は手札から『ギガント・セファロタス』を召喚！」

ギガント・セファロタス ATK1850/DEF700

「これにより、ボタニカル・ライオの攻撃力が300ポイントアップする」

ボタニカル・ライオ ATK1900/DEF2000 ATK2200/DEF2000

・・・凄い効果ね。攻撃力が1600のはずなのに一気にここまで上がるなんて。

「バトル！ボタニカル・ライオでセットモンスターを攻撃！」

「セットしていたのは『ゴゴゴゴーレム』！」

ゴゴゴゴーレム ATK1800/DEF1500

「このカードは守備表示の時、1ターンの1度戦闘では破壊されない！」

「ならばギガント・セファロタスで攻撃！」

「ぐっ・・・！」

ギガント・セファロタスがゴゴゴゴーレムをかみ砕く。これによってゴゴゴゴーレムは破壊され、その破片が秋に当たり、頭から血を流す。

「秋！」

思わず立ち上がりたくなってしまっ。でも、秋はフラフラしながらもその場にしっかりと立っている。ホッ・・・

「ターンエンド」

「俺のターンドロ―！俺は手札から『レベル制限B地区』を発動する。これにより互いのフィールドのレベル4以上のモンスターは全て守備表示になる。俺は『ズババナイト』を召喚！」

ズババナイト ATK1600/DEF900

ズババナイトのレベルは3・・・よって、レベル制限B地区の効果を受けない。これなら問題ないわね。そしてこのコンボならモンスターを問わず破壊できる。

「バトルだ！俺はズババナイトでギガント・セファロタスを攻撃！行け、ズババナイト！」

ズババナイトがセファロタスに斬りかかる。そしてセファロタスを破壊した。それによって歓声上がる。「魔女に裁きを」「魔女を倒せ」そんな言葉が聞こえてくる。随分と酷いのね。彼女はどれだけ孤独なのかしら・・・とりあえず、これでポタニカル・ライオの攻撃力は下がるわね。

ポタニカル・ライオ ATK2200/DEF2000 ATK1900/DEF2000

「なんか、周りが怖い・・・」

「ねえ氷室のおっちゃん、どうしてみんな魔女が怖いのにここに来てるの？」

「人間つてのは、醜くて嫌な生き物なのさ・・・どんなに恐ろしくても、憎しみの対象が生贄にされるのを大衆は見たいと思うようになる。それに多勢に無勢つて奴だ。こんだけ人がいれば誰が何言つても、シラをきれるだろ？」

ホント、この世界の人間は嫌な感じ。人間はゼロリバーズのせいで生まれた人間の格差で変わったと秋が言っていたけど、日本でこんな光景を見るとは思わなかったわ。

「俺はこれでターンエンド！」

「私のターンドロ・・・私は手札から『薔薇の刻印』を発動。ゲームからギガント・セファロタスを除外し、ズババナイトのコントロールを得る」

ズババナイトの額に薔薇の刻印が・・・！ズババナイトは十六夜アキの元へ行き、片膝を付いた。ナイトつて言われいてるから案外紳士ね、ズババナイト。

「これでフィールドは空ね・・・行きなさい、ズババナイト！」

「ぐああああっ！」

武藤秋 LP4000 LP2400

ズババナイトの剣が秋を引き裂く。秋の服が裂け、血が溢れている。あんなデュエルを見たのは闇の決闘以来・・・秋、負けないで。

「つく、この瞬間畏発動『痛恨の訴え』！痛恨の訴えは、ダイレクタアタックを受けた時、相手フィールドに存在する最も守備力が高いモンスターのコントロールを、次の自分のターンまで得る！」

効果により、ボタニカル・ライオが秋のフィールドに舞い降りる。

「十六夜」

「・・・？」

「楽しいか、俺のことを傷つける・・・いや、他者を傷つけることが」

突然の秋の言葉に、驚いた顔になる十六夜アキ。秋は気にせず言葉を続けた。

「お前が俺にダイレクタアタックをした時、お前は笑っていた・・・まるで力の暴走を喜ぶようにな。お前が力を使おうが知ったことじゃない。だが、お前は孤独になる一方だ」

「私にはダイバインがいる・・・ダイバインがこの力を望んでくれた。なら私はこの力を使う・・・そうよ、私は楽しい。この力が！この他者を恐怖に陥れ、孤独になるこの力が！」

十六夜アキはその表情を歪める。なんて悲しい目なのだろう。あの子の言葉と表情とは裏腹に、彼女の眼はどこまでも悲しいものだった。

「・・・そうか、俺はそんな風には見えないけどな」

「黙れ・・・私はメインフェイズ2へ移行する！私はチューナーモンスター『黒薔薇の魔女』を召喚！」

黒薔薇の魔女 ATK1700/DEF1200

「レベル3のズバナイトに、レベル4の黒薔薇の魔女をチューニング！」

3 + 4 = 7

「冷たい炎が、世界の全てを包み込む・・・漆黒の華よ、開け！」

こ、このシンクロ召喚の時の口上・・・まさか、この口上は！

「咲き乱れよ、『ブラック・ローズ・ドラゴン』！」

ブラック・ローズ・ドラゴン ATK2400/DEF1800

『おおーっと！ここで十六夜アキのエースモンスター『ブラック・ローズ・ドラゴン』の登場だあ！』

ブラック・ローズ・ドラゴン・・・！秋がこの前言った、この時代の世界の鍵となる5体のうちの1体であり、私達が良く知っている最悪のリセットカード！

「ブラック・ローズ・ドラゴンの効果により、フィールドにある全てのカードを破壊する！『ブラック・ローズ・ガイル』！」

「うわあああああっ！」

突風・・・いいえ、嵐が周囲を巻き起こす。そしてフィールドにあつた全てのカードが破壊されてしまった。秋はなんとかその場に踏みとどまり、十六夜アキを見ていた。周りの観客は恐怖におびえ、逃げ出す人間まで出てきていた。

「あはははは！どう？これが私の力！人々が畏怖する黒薔薇の魔女の力！」

「つぐ・・・軽いな」

「なんですって・・・？」

秋の言葉に、驚く十六夜アキ。まあ当然よね。体中ボロボロなのにまだ笑っていられる余裕があるんだから。

「こんな物、学生時代に受けた委員長のビンタよりも・・・あれに比べたら全然マシだ。さあ、どうする」

「うち・・・私はカードを2枚伏せ、ターンエンド」

「俺のターンドロ・・・十六夜、憎しみは正しい力を生まない。考えてみる、お前はその力が良かったと思っただことがあつたか？」

「考える必要なんてない・・・デイバインが全部考えてくれる」

さつきから出てくるデイバインという名前。一体誰なのかしら。それでも秋は言葉を続けている。

「憎しみは力なんて生まない。人の力を生むのは『絆』だ・・・お





六夜アキに暴言吐きたいなら目の前にまで出て来い！人を盾にして好きかってしてんじゃねえ！俺にも言いたいことがあるならここまで来てみる！この臆病者どもがあ！」

その気迫に押され、会場が本当に静かになる。それだけ秋の怒号は迫力があつた証拠だった。隣にいた龍可や龍亞も驚いて秋を見ている。

「秋兄ちゃんがキレた・・・」

「秋さんって怒ると怖いんだね・・・」

「そうね・・・昔はキレた時、デュエルの対戦相手に攻撃力8000でダイレクトアタックもしたことがあるわ。でも、それだけ怒るのは他者の時だけよ」

雪乃が言う。そう、初めて秋が怒つたのはカイザーに。そして次は五階堂とのデュエル・そのあと沢山怒っていた。記憶がうる覚えだけど、斎王を殴った時の剣幕も凄かった。

「・・・さあ、デュエルを続けよう」

「お前・・・」

「行くぞ、俺は手札から『ゴブリンドバグ』を召喚！」

ゴブリンドバグ ATK1400/DEF0

「そしてこのカードの召喚に成功した時、手札からレベル4以下のモンスターを特殊召喚！現れる、『ガガガマジシャン』！そしてこ

のモンスターは守備表示となる」

これでレベル4のモンスターが2体・・・やるのね、秋。

「行くぞ、俺はレベル4のゴブリンドバグと、レベル4のガガガマジシャンでオーバーレイ！2体のモンスターでオーバーレイ・ネツトワークを構築！エクシーズ召喚！」

『おおーつと！？これは一体なんだあ！？』

光の渦の中に、2体のモンスターが突っ込んでいく。そして現れる39という数字と、塔の様な物。それが変形し、それは人型のモンスターへと変わる。

「現れる、『No.39 希望皇ホープ』！」

『ホオオオオオプ！！！！』

No.39 希望皇ホープ ATK2500/DEF2000

彼女の孤独に、希望を見せてあげて・・・秋！

孤独な闇を染める光（後書き）

ホーブ登場！闇を光に塗り替える！

## 絶望を希望へ（前書き）

というわけで、エクシーズが活躍します  
あの2体のモンスターも活躍しますよ！  
作者が大好きなカード達です

秋「今日の最強カードは・・・『憎悪の棘』か」

「ブラック・ローズ・ドラゴン」または植物族モンスターにのみ装備可能。

装備モンスターの攻撃力は600ポイントアップする。

装備モンスターが守備表示モンスターを攻撃した時、

その守備力を攻撃力が超えていれば、

その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

装備モンスターがモンスターを攻撃した場合、

ダメージ計算後に攻撃対象モンスターの攻撃力・守備力は600ポ

イントダウンする。

装備モンスターと戦闘を行った相手モンスターは、その戦闘では破壊されない。

作者はSなのでこういうカードが好きだったり（笑）

ツイッター

<http://twitter.com/#!/AKIKAZE7>  
010

## 絶望を希望へ

Side十六夜アキ

武藤秋 LP2400

十六夜アキ LP4000

私は今、デュエルをしている。対戦相手はかつて決闘王と呼ばれた男だった。昔見たことがある。パパが買ってくれた本・・・その本に描かれた、その男について。そしてあの男とは、仮面を付けていたときに会ったことがある。私のことを知り、本名を知っていた。彼は何者だろうか？いいや、そんなことはどうでもいいことだ。私はディバインの言うとおりと戦うだけ。そして目の前の武藤秋は私の知らない召喚を行っていた。

「現れる、『No.39 希望皇ホープ』！」

『ホオオオオプ！！！！』

No.39 希望皇ホープ ATK2500/DEF2000

モンスターが雄叫びをあげる。これはいつたい・・・！

『こ、これは一体どういうことだあ！？シンクロ召喚ではないようだが・・・ん？おおっと！ここに情報が来た！武藤秋が行ったのはエクシーズ召喚！シンクロ召喚を立案した、デュエルモンスターの親、ペガサス・J・クロフォード会長が立案したシンクロ召喚と共に開発され、それはテスト的に3代目決闘王だった武藤秋の手に

渡ったという、違法なカードではないようだあ！」

ざわめく会場。そんな方法の召喚があったとは・・・いや、そんなことより問題は目の前の希望皇ホープ。その攻撃力は2500・・・さあ、来なさい。

### Side遊星

秋さんが召喚したモンスター・・・希望皇ホープ。その金と白の身体をした騎士の様な姿をしたモンスターの周りには2つの球体が舞う。これがかつて3代目決闘王が持っていたと言われる、『皇の証』なのか・・・。本に記載されていた決闘王の証としてペガサス・J・クロフォード氏に与えられた、今では知る人はほとんどいないと言われたカードの1枚だ。その本に書いてあることが事実かは分からないが・・・

「俺は、希望皇ホープでダイレクトアタック！行け、ホープ！『ホープ剣スラッシュ』！」

希望皇ホープが雄叫びをあげ、剣を放り投げてそれを掴み十六夜アキへと斬りかかる。だが、十六夜アキには伏せカードがある。

「畏発動！『リビングデットの呼び声』！私は墓地から『ブラック・ローズ・ドラゴン』を選択！」

再びフィールドに舞い戻るブラック・ローズ・ドラゴン。やはり、アレを見ると俺の右腕の痣がうづく。

ブラック・ローズ・ドラゴン ATK2400/DEF1800

「ならば希望皇ホープでブラック・ローズ・ドラゴンを攻撃する！」

「手札から『ガード・ヘッジ』の効果を発動！ブラック・ローズ・ドラゴンの攻撃力を半減させる代わりにこのターン、破壊からブラック・ローズ・ドラゴンを守る」

ブラック・ローズ・ドラゴン ATK2400/DEF1800  
ATK1200/DEF1800

十六夜アキ LP4000 LP2700

ライフは削ったが、ブラック・ローズ・ドラゴンがフィールドに残ってしまった。これでは次のターン反撃されてしまう。

「つく、俺はカードを1枚伏せてターンエンド！」

「私のターンドロ・・・ブラック・ローズ・ドラゴンの攻撃力は元に戻る」

ブラック・ローズ・ドラゴン ATK2400/DEF1800

「そして私はブラック・ローズ・ドラゴンに装備魔法『憎悪の棘』を装備する。このカードはブラック・ローズ・ドラゴン及び、植物族モンスターに装備することで装備したモンスターの攻撃力を600ポイントアップする。そして、ダメージ計算後に攻撃対象モンスターの攻撃力・守備力は600ポイントダウンする・・・そして、装備モンスターとバトルするモンスターはその戦闘では破壊されない」



なっ・・・十六夜アキ、まさか秋さんのことをなぶり殺しにするつもりか！？そんな強力な力でその効果は危険すぎる・・・！

ブラック・ローズ・ドラゴン ATK2400/DEF1800  
ATK3000/DEF1800

「バトル！ブラック・ローズ・ドラゴンで希望皇ホープを攻撃！  
ヘイト・ローズ・ウィップ！」

「つく！させるか！希望皇ホープのモンスター効果を発動！このカードはオーバーレイ・ユニットと呼ばれる、エクシーズ召喚に使用した素材を1つ取り除くことで相手モンスターの攻撃を1度だけ無効にする！『ムーン・バリア』！」

ホープの羽根が開き、その薔薇の棘を防ぐ。でも、オーバーレイ・ユニットは残り一つ。なんとか攻撃を防いだが、これでは後1度しか使えない。どうするつもりだ、秋さん！

「ならば私はメインフェイズ2で『ローン・ファイア・ブロッサム』を召喚！」

ローン・ファイア・ブロッサム ATK500/DEF1400

「そして、このカードをリリースすることで『ギガプラント』を特殊召喚！」

ギガプラント ATK2400/DEF1800

「カードを1枚伏せてターンエンド」

フィールドに2体目の上級モンスターが……！これはまずい。このままでは秋さんは

「俺のターンドロー！俺は伏せていた『リビングデットの呼び声』を発動！蘇れ、『ガガガマジシャン』！」

アレは……さっき素材となったモンスター……そうか、先ほどの使用した素材は墓地へ行くのか。それで召喚される。なるほど

「そして俺はこいつを召喚する！来い、『ガガガガール』！」

出てきたのは……なんというか、ギャルのようなモンスターだな。髑髏のキーホルダーが付いたスライド式携帯電話を手にしている。よくよく見ればブラック・マジシャン・ガールに似ている気がする。というか、ガガガマジシャンもブラック・マジシャンに似ている。なんとも個性的なモンスターだ……制服っぽい服を着ている所を見ると、二人とも学生という設定なのだろうか？

『ガガガ先輩！』

『ふんっ……』

……今、喋らなかつたか。あのモンスター達。俺の気のせいだと思うが……そう思うと、2体のモンスターは何やらポーズを取った。一部の男性の観客たちはそのブラック・マジシャン・ガールに似たモンスターに興奮したのか、歓喜の声を上げている。

『『ガガガ！』』

……間違いなく、ポーズを取ったな。そして多分喋るよう

にソリットビジョンが設定されているんだろう。恐るべしKC社の技術だ。目の前にいる十六夜アキもビツクリしているぞ。その、なんとというか……

(。。。) 十六夜アキ

なんて表情だ。

「俺はガガマジシヤンの効果発動！このモンスターのレベルを任意の数値に出来る！俺はガガマジシヤンのレベルを3に変更！」

ガガマジシヤン レベル4 レベル3

「いくぞ、レベル3のガガマジシヤンと、レベル3のガガガールをオーバーレイ！2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！」

『先パイっ！』

『おっっ！』

光の球体となり、渦の中に消えていく2体のモンスター……最後まで芸が細かいな。あの2体のモンスター

「エクシース召喚！現れろ、『No.17リバイス・ドラゴン』！」

今度出てきたのは、何かがとぐるを巻いた球体。さながら巨大な眼球を思わせる。そしてそれが開くと、1体のドラゴンが出現した。

No.17リバイス・ドラゴン ATK2000/DEF0

「そしてリバイス・ドラゴンのエクシース素材となった『ガガガガール』の効果を発動！このカードが『ガガガ』と名のつくエクシースモンスターとエクシース素材となった時、相手モンスターを1体選択してそのモンスターの攻撃力を0にする！『ゼロゼロコール』！俺は『ブラック・ローズ・ドラゴン』を選択！」

ブラック・ローズ・ドラゴン ATK3000/DEF1800  
ATK0/DEF1800

エクシース素材となったガガガールが半透明でリバイス・ドラゴンの横に出現し、なにやら携帯電話を操作している。そして携帯電話の画面から光が放たれ、ブラック・ローズ・ドラゴンに照射される。本当に芸が細かいな。

「そしてリバイス・ドラゴンのモンスター効果発動！オーバーレイ・ユニット1つを取り除き、攻撃力を500ポイントアップさせる！」

リバイス・ドラゴン ATK2000/DEF0 ATK2500  
/DEF0

「行け！リバイス・ドラゴン！ブラック・ローズ・ドラゴンを攻撃！『リバイス・ストリーム』！」

「畏発動！『ローズ・ブリザード』！このカードは相手が攻撃してきたときにその攻撃を無効にし、そのモンスターの表示形式を守備表示にする！」

守備表示の体制を取るリバイス・ドラゴン。だが希望皇ホープの攻撃が残っている。

「希望皇ホープでブラック・ローズ・ドラゴンを攻撃！『ホープ剣スラッシュ』！」

「畏発動『シフト・チェンジ』！攻撃の対象を入れ替える。攻撃はギガプラントへと変更されるわ！」

剣の軌道が曲がり、ギガプラントに直撃する。そしてギガプラントはそのまま消えてしまった。

「俺はカードを1枚伏せて、ターンエンドだ」

「私のターンドロ！私は手札から『命削りの宝札』を発動。カードを5枚ドロし、5ターン後に全て捨てる。そして『シンクロキヤンセル』を発動。エクストラデッキへ『ブラック・ローズ・ドラゴン』を戻す」

破壊される憎悪の棘。だが、彼女の墓地には1組が揃っていない。つまり、素材となった黒薔薇の魔女は召喚できないのだが・・・

「私は2体目のチューナーモンスター『黒薔薇の魔女』を召喚！」

黒薔薇の魔女 ATK1700/DEF1200

5枚のドロの上、あのモンスターは2体目が存在していたのか！だが、一体そのモンスターで何をする気だ！？

「黒薔薇の魔女の効果発動。自分フィールド上にカードが存在しない場合にこのカードが召喚に成功した時、自分のデッキからカードを1枚ドロする。この効果でドロしたカードをお互いに確認し、

モンスターカード以外だった場合、ドローしたカードを墓地へ送り、このカードを破壊する。ドロー！ふふふ・・・」

十六夜アキが笑った？　いつたい何を引いたんだ？

「私が引いたのは『薔薇の妖精』このカードは魔法、罠、モンスター効果でデッキから手札に加わった時、特殊召喚できる！来なさい、薔薇の妖精！」

薔薇の妖精    ATK600 / DEF1200

まずい！合計のレベルは7・・・！これではまたシンクロ召喚されてしまう！

「レベル3の薔薇の妖精に、レベル4の黒薔薇の魔女をチューニング！」

3 + 4 = 7

「冷たい炎が、世界の全てを包み込む。漆黒の華よ、開け！シンクロ召喚！再びフィールドに舞い戻れ、『ブラック・ローズ・ドラゴン』！」

ブラック・ローズ・ドラゴン    ATK2400 / DEF1800

「ブラック・ローズ・ドラゴンの効果発動。墓地の植物族モンスターをゲームから除外し、守備モンスターを攻撃表示に変更する。私は『薔薇の妖精』を選択。そしてその表示形式を行ったモンスターの攻撃力を0にする」

なん、だと・・・！？それではリバイス・ドラゴンが・・・！

NO・17リバイス・ドラゴン ATK2500/DEF0 AT  
KO/DEF0

「バトル！ブラック・ローズ・ドラゴンでリバイス・ドラゴンを攻撃！『ブラック・ローズ・フレア』！」

秋さん！モンスター効果で攻撃を防がなくては！

「・・・つく、畏発動！『ダメージ・ダイエット』！」

何！？モンスター効果を発動しないだと！？そして見たことのない畏カードが発動した。このカードは  
いつたい？

「このターン、全てのダメージは半分になる！ホープの効果は使わないっ！うおおおっ！」

武藤秋 LP2400 LP1200

な、何故効果を使わなかったんだ！？使っていればこのターンダメージを受けず、リバイス・ドラゴンは破壊されなかったはずだ！

「まさか効果を使わず、ダメージを受けるとは・・・」

「あいにく、頑丈に出来ていてね・・・この程度ならまだいけるさ」

「私はカードを2枚伏せてターンエンド！」

「俺のターンドロ―！」

もう秋さんの身体はボロボロだ。そして秋さんの手札はこのドロ―したカードだけ。大丈夫なのか！？

「俺は手札から『命削りの宝札』を発動！カードを5枚になるようにドロ―する！」

ここで5枚のドロ―か。秋さんはドロ―運が悪いと聞いているが、大丈夫なのか？それにしても十六夜アキといい、秋さんといい、あんな高価なカードを持っているとは・・・

「行くぞ、希望皇ホープ！ブラック・ローズ・ドラゴンを攻撃！『ホープ剣スラッシュ』！」

十六夜アキ LP2700 LP2600

破壊されるブラック・ローズ・ドラゴン。だが、十六夜アキは何を仕掛けてくる？

「畏発動『ウィキッド・リボーン』！800のライフをコストに、墓地のシンクロモンスターを復活！フィールドに舞い戻れ、『ブラック・ローズ・ドラゴン』！」

ブラック・ローズ・ドラゴン ATK2400/DEF1800

十六夜アキ LP2600 LP1800

「このカードを発動したターン攻撃は出来ず、このカードで特殊召喚されたこのカードの効果は無効になる」



「俺は、カードを2枚伏せてターンエンド！」

これでフィールドには希望皇ホープとブラック・ローズ・ドラゴン・  
・いくらブラック・ローズ・ドラゴンが攻撃力を1000上回って  
いるとはいえ、秋さんのライフは700。そして秋さん自身の体力  
がアレだけの攻撃を受けてどれだけ持つことか・・・

「私のターンドロ・・・私は手札から『憎悪の棘』をブラック・  
ローズ・ドラゴンに装備する」

またあのカードか！これでホープの攻撃力をブラック・ローズ・ド  
ラゴンが上回った！

ブラック・ローズ・ドラゴン ATK2400 / DEF1800  
ATK3000 / DEF1800

「バトル！ブラック・ローズ・ドラゴンで希望皇ホープを攻撃！  
『ヘイト・ローズ・ウィップ』！」

「耐えてくれ！ホープ！」

また！？秋さんは何故効果を使わない！？確かに憎悪の棘の効果で  
破壊はされない。だが、その分ホープの攻撃力は下がり、秋さんは  
ダメージを受けるんだぞ！？

武藤秋 LP1200 LP700

No.39 希望皇ホープ ATK2500 / DEF2000 AT  
K1900 / DEF2000

「いったい、何を考えている……」

「どうやら十六夜アキも効果で防ぐと思っただけらしい。すると、秋さんは笑っていた。」

「どうだ十六夜アキ……気は、済んだか？」

「なんだと……？」

「一体何を考えているんだ、秋さん……！」

Sideアキ

「どうだ十六夜アキ……気は、済んだか？」

「なんだと……？」

「この男、何を考えている。まさか、わざと私の攻撃を受け続けたとでもいうのか？ そんなバカなことを何故……？ そう思うと、何故か人を傷つけることが楽しくなくなる。心の奥が締め付けられる。」

「……十六夜アキ、俺はな、本当の孤独を知っているんだ」

「！？」

「本当の、孤独？」

「俺は独りだった……でも、このデュエルモンスターズが様々な絆を生んだ。このデュエルモンスターズで友が出来た、恋人が出来

た。そして何より、“絆”が出来た。」

「絆……」

「このカード達は様々な絆を作る。だからそんなカード達を憎しみに使っちゃいけない」

「黙れっ！絆だと！？このカード達は私に破壊しか与えない！絆など、与えるものかつ！」

「そんなことない……」

「何……？」

この男、一体何を言って……？

「俺と君は今、このカードたちを使ってデュエルをしているんだ。もう、俺と君には“絆”が出来たじゃないか……」

「え……」

この男、これだけの傷を負っても、これだけ戦っても、私にそんなことが言えるのか！？どうしてこの男は……どうして、貴方は……

「一つ聞かせて……どうして貴方は、そこまで私に……」

「……俺も、同じように孤独だったからだ」

この男……

「私は……これで、ターンエンド……」

どうして？ 苦しい……胸が締め付けられる。これは何？ そして何故、この男は……まだ、あんな目をしていられるの？

「苦しいか、十六夜アキ」

「！？」

優しい笑顔が、そこにはあった。

「大丈夫……お前は変わる。お前自身がお前を愛し、他者を信じる事が出来るのなら」

「っ……！それが、それが出来ないから！ 私はこうしている！ こうして戦っているんだ！」

「なら俺が、お前を変えてやる……お前の中に巢食つその混沌から、お前を！」

突然、眩しい光を感じた。見れば、希望皇ホープが輝きを放っているのが分かった。これは一体……！？

「行くぞ！ 俺のターン！ 俺は希望皇ホープをオーバーレイ・ユニットと一体とし、ホープを次なる姿へと進化させる！」

エクシードモンスター自体をオーバーレイ・ユニットに……！？  
一体彼は何を……！

「カオス・エクシーズ・チェンジ！」

希望皇ホープが出現する前の塔のような形の状態に戻り、渦の中へと消えていく。い、いったい何が起きているの……!?

「混沌を光に変える使者……今こそ現れよ！」CNo.39『!」

別の塔のようなものが現れ、それが展開していく。その肩にはCNo.と書かれたモンスターとなった。先ほどの白と金の色とは異なる、黒と金の色のモンスター。背中には巨大な剣があった。

「希望皇ホープレイ！」

『ホオオオオオオプ!』

CNo.39 希望皇ホープレイ ATK2500/DEF2000  
ユニット2

「俺は、希望皇ホープレイの効果発動！オーバーレイ・ユニット1つにつき、攻撃力を500ポイントアップさせる！俺は全てのオーバーレイ・ユニットを取り除き、攻撃力を1000ポイントアップさせる！」オーバーレイ・チャージ『!」

ホープレイと呼ばれたモンスターの背中の大剣が引き抜かれ、その剣へオーバーレイ・ユニットが吸収されて行く。

CNo.39 希望皇ホープレイ ATK2500/DEF2000  
ATK3500/DEF2000

「そして、使用したオーバーレイ・ユニット1つに付き、相手モン

スターの攻撃力を1000ポイントダウンさせる！」

「な、何！？」

ブラック・ローズ・ドラゴン ATK3000/DEF1800  
ATK1000/DEF1800

「行け！希望皇ホープレイ！ブラック・ローズ・ドラゴンを攻撃！」

効果を使ったホープレイの黒い体の部分が白銀に輝く。その輝きが私を包み込んだ。

「『ホープ剣カオススラッシュ』！」

私の、負け・・・

十六夜アキ LP1800 LPO

Sideツァン

『決まったー！勝者武藤秋！その逆転劇は見事なものだあ！』

十六夜アキは糸が切れたかのように倒れてしまった。秋はフラフラになりながらも十六夜アキを抱き上げ、俗にいうお姫様抱っこで会場を後にしていく。会場は依然として静かなまま。弱っていても秋の目は鋭く観客を睨んでいた。それに付いては後ね。とりあえず今は秋の身体の心配をしなくちゃ。

「ミラ、ここを頼むわ」

「分かりました」

龍可と龍亞をミラに任せ、私達は秋がいるであろう控室の方へと走って行った。ちゃんと約束は守ったんだし・・・後でちゃんと抱きしめてあげるんだから！

絶望を希望へ（後書き）

ということでもVSアキでした

もうすぐGX編に戻るつもりです



## 憧れの存在（前書き）

遅くなりました。5D・S最終回です。

次回からGX編に戻ります。また修学旅行編が長く設定してあるので、大変なことになりますが、これからもよろしくお願いします

遊星「今日の最強カードは『スピード・ワールド』だ」

フィールド魔法（DS2009&amp;アニメオリジナル）

「Sp」と名のついた魔法カード以外の魔法カードを発動する事はできない。

お互いのスタンバイフェイズ時、お互いのプレイヤーはこのカードに自分用のスピードカウンターを1つ置く（お互い12まで）。

プレイヤーがダメージを受けた時、ダメージを受けたプレイヤーのスピードカウンターを1000ポイントにつき1つ取り除く。

秋・遊星「ライディングデュエル！アクセラレーション！」

<http://twitter.com/#!/AKIKAZE7010>

ツイッターやってます。フォロー待ってます



ようやく顔の距離を理解したらしく、俺が十六夜アキを抱き上げているのに気が付いたようだ。十六夜アキの顔は一気に赤くなり、そして……

「きゃああああああああつ！」

バツチーンっ！

清々しいまでのビンタの音が響き渡る。い、いてえ……さっきのボタニカル・ライオの攻撃よりも、ブラック・ローズ・ドラゴンの攻撃よりも、この一撃がめちゃくちゃ痛かった。

「お、お前な……」

俺はゆっくりと十六夜アキを降ろした。どうやらまだ混乱をしているが、それ以上に驚いた表情にもなっていた。

「あ、その……ご、ごめんなさい……わざとじゃ……」

「いや、まあ……正しい反応だったから許す……その様子じゃもう大丈夫そうだな」

「あ……」

俺はとりあえず、近くの椅子に座った。まったく

「今のお前、いい顔してるよ」

「……っ。別に、お前に言われても嬉しくない」

「そうかい・・・まあいいや。えーと、包帯包帯っと・・・」

とりあえず傷はミラが後で直してくれるけど、この後の遊星とのデユエルのためにもきっちり応急処置だけはしておかないとな。

「っと・・・」

が、怪我をしているせいで上手く腕は動かない。すると、別の手が包帯を抑えていた。

「ん？」

その手は、俺の所目の前にいたはずの十六夜アキの手だった。「

「・・・その怪我じゃ・・・できないでしょ？やってあげる」

「・・・お、おう。悪いな」

自分で傷つけた傷を自分で治療するなど、普通しないだろう。だが十六夜アキは少し気まずそうながらも必死に俺の身体に包帯を巻いていく。上半身、右腕、頭に包帯を巻いてくれる。彼女のそれほども優しく、本物の『十六夜アキ』が見えた気がした。

「・・・終わったわ」

「上手だな」

俺は言いながらその巻かれた包帯を見ていた。丁寧に巻かれた包帯はとても綺麗に巻かれていた。前はツアンや雪乃がやってくれてい

るんだが、それよりも上手い。

「ありがとな」

「・・・私が、やった傷だから・・・」

あらら・・・落ち込む十六夜アキ。とりあえず、おじさん・・・  
まあ、デイバインのことだが、奴が来るまで話でもしてますか。

「気にすんな、俺は気にしない」

「だけど・・・私は・・・」

「俺が気にしないからいいんだよ。それにしても、いいデュエルだったぜ？またやるうな」

俺が言うと、驚いた顔になる十六夜アキ。まあ、あんなサイコデュエルした相手となど絶対にデュエルをやらないだろう。

「けど、私は・・・」

「別にサイコデュエルやるうってわけじゃない・・・いつか普通のデュエルをやるうってだけだ。別にアレだぞ？俺はMじゃないからな？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・クスッ」

俺が言うと、十六夜アキはクスリと笑った。俺、何かおかしいことを言っただか？俺は蟹とは違うんだ。勘弁してくれ。

「貴方、変な人……」

「そうかい……寝め言葉として受け取っておく」

そんな風に笑っていると、勢いよくドアが開いた。そこにいたのは長身の男……おじさん（ディバイン）だ。

「アキ！」

「ディバイン」

医務室はお静かに。ディバインはアキを見ると安堵のため息をついていた。

「よかった、何ともなさそうだな……つと、貴方はあの有名な武藤秋さんじゃありませんか」

あの有名な、つてなんだ？嫌味か？つてか、最初からここにいたんだから気づいてんだろ。

「アキがお世話になりました。途中でアキを庇ってもくれて」

「別に。デュエルで邪魔されなくなっただけだ」

「そうですか……そういうえば、アキから聞きましたが貴方も『サイコデュエリスト』のようですね？」

ニコニコと笑みをこちらに向けるディバイン。正直、超不愉快だ。こいつのことはよく知っているからな……俺を組織に取り込もうとしているのだろう。近いうちにきつと遊星がアキを助けだすだろう

うし・・・適当にはぐらかしておくか

「知らないな、俺はそんな力を持っていない」

「おかしいですね、デュエルディスクから装備魔法のようなものを  
実体化させたと聞きましたが？」

「知らないと言っているのが分からないのか？頭の悪い奴だ。それ  
とも日本語が理解できないのか？」

デイバインを睨みつける。だがデイバインは笑みの姿勢を崩してい  
ない。本当に不愉快だ。後ろではアキが俺に対して申し訳なさそう  
にしている。その様子にも気が付いていない。

「・・・まあ、いいでしょう。実は私はサイコデュエリストたちを  
集めていましてね・・・アキのように、その力に苦しんでいる人間  
を救おうというもので。組織的な活動を行っています」

どうやらデイバインは俺がサイコデュエリストであると完全に誤解  
して話を進めている。俺の力は長年に渡る精霊の力の理解の結果生  
まれた力であり、サイコデュエリストのそれとはまた違う。

「もしよろしければどうぞ。お待ちしておりますよ・・・行くうか、  
アキ」

そう言って渡された名刺。場所が記してあるようだ。

「・・・さようなら」

「ああ、またな」

そう言つて俺は十六夜アキを見送つた。そしてその直後

「秋！」

雪乃とツァンの二人が飛び込んできた。どうやら今、すれ違いに十六夜アキと会つたようで焦つた顔をしている。

「秋、大丈夫だった？ なにもされてない？」

「怪我は！？ あんなに喰らつてたけど大丈夫なの！？」

「落ちつけ二人とも、大丈夫だから・・・」

焦っている二人をなだめる。すると二人は泣きながら俺に抱きついた。

「えっぐ・・・ひっぐ・・・」

「うっ・・・うっ・・・」

「ったくもう・・・ごめんな・・・心配かけた。大丈夫・・・俺はここにいますよ」

俺は言いながら優しく二人を撫でることにした。その2人の温もりを感じながら。

\*



二人が落ち着いた後、次の試合の対戦カードを見た。俺VS遊星だ。この対戦カードは実質決勝戦だ。本来ならアキと遊星が戦うはずだったが・・・まあ仕方がないな。ここまできたら。とりあえず、全力で向かうだけだ・・・ふふふ、この数週間でただ単にデッキを組んでいただけではない。遊星、全力で戦わせてもらっぞ

S i d e 遊星

俺はデッキの調整を終え、その出番を待った。ついに、秋さんとデュエルをすることが出来る。あの決闘王と・・・

「お、おい遊星！」

「どうした、氷室・・・」

氷室が慌てて控室に入ってきた。手には何やら紙を持っているようだが・・・

「これを見る！」

「・・・これは！」

内容は次のデュエルの時刻と、方式だ。この大会では2種類のデュエル方法が存在する。1つはスタンディングデュエル。普通のデュエルのことだ。そしてもう一つはライディングデュエル。俺が今までやってきたデュエル方法だ。そして、基本はライディングデュエルの方式を取り、戦うのだがライセンスを持っていない選手もいる。

十六夜アキや秋さんのようにライセンスを持っていない人間とデュエルする場合はスタンディングデュエルになるのだが・・・

「ライディングデュエル・・・だと!？」

1時間後、調整を終え次第デュエルを始めるとのこと。秋さん貴方はまさかこの数週間でライディングデュエルのためのライセンスを会得していたというのか・・・

「氷室、Dホイールを調整する。手伝ってくれ」

「ああ、わかった」

俺はすぐにDホイールを置いた場所へ向かい調整を行う。長きにわたって共に戦って来た相棒。それを見る。

「エンジン出力やシステムは異常がなさそうだが・・・なあ遊星」

「なんだ？」

「決闘王は過去の人間なんだろ？ライディングデュエルできんのか？」

確かに、彼は過去の人間だ。この短期間でライディングデュエルの法則を理解し、さらにそれ専用のデッキを組み終えているなど、普通じゃありえない。

「確かに、どんなデュエルをしてくるかは分からない。だが、俺は全力で戦う」

「そうだな、勝ってジャックとの決着をつけないとな」

「ああ……」

俺と氷室は引き続きメンテナンスをすることにした。

\*

## デュエルスタジアム

『さあ！いよいよ決勝戦だ！決勝戦は『サテライトの流れ星』不動遊星と『3代目決闘王』武藤秋のデュエルだ！』

会場はざわざわとし、心なしか客も減っている。どうやら次の俺達の戦いにシテイの人間は面白くないようだ。まあ、当然ではあるな。サテライトの人間と、あの魔女の味方をした人間がデュエルをする。どちらも応援などしたくはないだろう。残っているのはジャックのファンや、純粹にデュエルだけを楽しみに来た客と言ったところだろう。俺はDホイールをふかしステージに入り、スタート地点に着いた。そしてその後が続くように、俺の隣に蒼いDホイールが横に並んだ。

「秋さん……」

「おう、いいデュエルにしようぜ」

「はい」

俺が答えると、秋さんは首を傾げた。

「なあ遊星……なんでお前はいつも俺に敬語なんだ」

「いえ……その……」

「一応、俺とお前の歳はそんなに変わらないぞ。2歳くらいか？」

俺は19で、秋さんは21だ。年上には俺もあまり敬語を使っていない。だが、彼に敬語を使うのには別の理由がある。

「それは、貴方が俺の憧れだからです」

「憧れ？」

「はい……子供の頃見た、『決闘者の歴史』という本に載っていた貴方が俺の目標で、憧れでした。だからその敬意で、敬語を使っています」

俺が言うと、秋さんは苦笑していた。

「そっか……そいつは嬉しいね……遊星、俺は全力でお前と戦う。それは決闘王としてではなく、一人の決闘者として。ライディングデュエルだからって手を抜くなよ？」

「ええ、全力でやらせてもらいます」

『さあ！準備はいいか！フィールド魔法！』『スピードワールド』セ

ツトオン！』

『『スピードワールド』セット、オートパイロットスタンバイ』』  
フィールド魔法『スピードワールド』がセットされる。俺はアクセ  
ルを握る。秋さんも前を見て、真剣な表情だ。そして、スタートオ  
ンが鳴り響く。俺はすぐにスタートした。

『ライディングデュエル！アクセラレーション！』

さあ、デュエルだ秋さん！

憧れの存在（後書き）

次回からGXに戻ります

## 外伝 ZEXAL編（前書き）

GXの進みが悪いので、ゼアル編の番外編をお試し1話編で書きました。

アニメ見てて、こうなったらな・・・なんて感じですが  
ではどうぞ

ツイッターやってます

<http://twitter.com/#!/AKIKAZE7010>

ちなみに、個人的な解釈なのですが、5D'sとZEXALは別の世界ではないかと

ゼロリバースが起きた 遊戯王5D's

GX終了

ゼロリバースが起きない 遊戯王ZEXAL

こうではないかなと個人的に妄想しています。

そうさせるのは一応ZEXALの決闘庵での一件でブラック・マジシャン。ブラック・マジシャン・ガール、ネオス、レインボードラゴン、炎の剣士などなど、歴代のデュエリストが使ってきたモンスター達の像が並んでいるのにもかかわらず、実質決闘王となっているはずの遊星のエースモンスター『スターダスト・ドラゴン』が存在していない。

つまり、シンクロは別世界のカードである。  
と言っ感じます

では、ZEXAL編をお楽しみください。1話だけですけど  
汗



## 外伝 ZEXAL編

### Side遊馬

俺、九十九遊馬！デュエルチャンピオンを目指す中学一年生だ！今は俺はハートランドで開催されたワールド・デュエル・カーニバルに参加している。とはいっても、その大会の本戦に出るにはハートピースを5つ集めなきゃいけないんだ。現在俺のハートピースは3つ・・・まあ、3つ目が合わないわけだけど

『遊馬、何を誰に説明しているんだ』

「なんでもねーよ・・・」

俺の頭上に浮いているのはアストラル。なんでも凄腕のデュエリストらしい。まあ、俺と幼馴染の小鳥からすれば決闘者の幽霊って感じ？なんでもアストラル世界っていう世界から来たらしい。こいつのせいで俺の日常は色々とおかしいことになっている。

『さあ遊馬、早く次の相手を探すのだ。そして今度こそナンバーズを・・・』

「わーってるよ！もう、ナンバーズ、ナンバーズって、それはお前の都合だろうが」

ナンバーズ・・・そう呼ばれたデュエルモンスターのカードが存在する。それは100枚あって、すべてコイツ、アストラルの記憶らしい。そして俺は色々あってこいつのためにナンバーズを集めていたりする。デュエル中に口出ししてきたり、色々と五月蠅いが・

・・・まあ、今では大切な仲間の一人だ

「ねえ遊馬、アストラルはなんて？」

「ああ、早くナンバーズを持つてる相手と戦えってさ」

「あはは・・・」

こっちの女の子は小鳥って言って、俺の幼馴染だ。こいつはデュエリストじゃないけど、色々と協力してもらったりしてる。ちなみに、コイツにはアストラルが見えないからな。

「さーてと、次は誰とデュエルするかな・・・」

出来れば次はハートピース持っている奴で頼みたい。さっきのアンナはデュエルカーニバルに参加してなかったみたいだしな。そんなことを考えていると、俺の前に男が現れた。どうも、20代・・・ちよっとくらしいの男か？変わったデュエルディスクを持った青いジヤケットの男

「お前が九十九遊馬・・・だな？」

「・・・そうだけど、アンタ誰？」

また、俺に対して勘違いってことはないよな？

「君の持つナンバーズ、見せてもらいたい」

「何！？ナンバーズだと！？お前、カイトの仲間か！」

カイト、天城カイト・・・アイツは自分のことをナンバーズハンターって名乗っている。俺と同じようにナンバーズのカードを探しているらしい。そしてその取り方は強引で、デュエルに勝ったら相手の魂ごと引き抜くという奴だ。そんな奴の他にナンバーズを知っているってことは、やっぱりこいつもカイトの仲間か！

『遊馬！油断するな・・・あの男、強いぞ！』

「わかってる！デュエルだ！俺のナンバーズは渡さないぜ！」

「いや待て、俺は・・・」

「カットビングだ！俺！デュエルディスク、セット！Dゲイザーセット！」

俺はデュエルディスクを展開し、Dゲイザーをセットした。

「つく、やるしかないのか！」

「デュエルターゲットロックオン」

『ARビジョン、リンク完了！』

「<sup>デュエル</sup>決闘！」

????? LP4000

九十九遊馬 LP4000

「先攻は俺だ！カットビングだぜ俺！ドロー！俺は手札から裏守備

表示でモンスターをセット！カードを1枚伏せて、ターンエンド！」

「良いだろう、俺のターン！俺は手札から『スピード・ウォリアー』を攻撃表示で召喚！」

スピード・ウォリアー ATK900/DEF900

「攻撃力900う？」

俺がセットしたのは『ゴゴゴゴレム』だ。守備力は1500だし、戦闘では1度破壊されない。

『遊馬、油断するな・・・攻撃力900を攻撃表示、何か裏がある』

「わーってるよ」

「行くぞ、バトルだ！スピード・ウォリアーで裏守備モンスターを攻撃！」

「セットしていたのはゴゴゴゴレム！守備力は1500だ！反射ダメージを受けやがれ！」

ゴゴゴゴレム ATK1800/DEF1500

俺が言うと、男はニヤリと口を緩ませる。

「スピード・ウォリアーのモンスター効果発動！このカードは召喚に成功したバトルフェイズ、攻撃力が2倍になる！行け！『ソニック・エッジ』！」

スピード・ウォリアー ATK900/DEF900 ATK1800/DEF900

スピード・ウォリアーの攻撃がゴゴゴレムに直撃する。つく！そんな効果があったのか・・・でも！

「ゴゴゴレムは戦闘では1度だけ破壊されない！」

「・・・俺はカードを2枚伏せて、ターンエンド！」

「俺のターン、ドロー！」

引いたのは、ガガガマジシャン！

『遊馬、ここはホープを召喚しろ』

「はあ！？何言ってるんだよ」

『こちらが先に先手を取る。相手は1ターン目でナンバーズを召喚せず、様子を見ている。伏せカードが気になるが、後手に回るとこちらは不利だ』

そうだ、アイツ・・・なんかすげえ強そうだ。それにいつも相手の方が先にナンバーズを召喚しちまう。こっちが先に召喚して先手を取っておけば・・・よし

「俺は『ガガガマジシャン』を召喚だ！」

ガガガマジシャン ATK1500/DEF1000

「行くぜ！レベル4のガガマジシャンと、ゴゴゴゴーレムをオーバレイ！2体のモンスターでオーバレイ・ネットワークを構築！エクシース召喚！現れる、『No.39希望皇ホープ』！」

No.39希望皇ホープ ATK2500/DEF2000

「それが希望皇ホープ・・・」

「行くぜ！希望皇ホープで、スピード・ウォリアーを攻撃！『ホープ剣スラッシュ』！」

「畏発動！『ガード・ブロック』！このカードは相手ターンの戦闘ダメージ計算時に発動する事ができる！その戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは0になり、自分のデッキからカードを1枚ドロー出来る。カードを1枚ドロー！」

スピード・ウォリアーを破壊したけど、ダメージは与えられなかった・・・でも、相手のフィールドは全滅だ！

「俺はカードを2枚伏せて、ターンエンド！」

「俺のターン、ドロー！俺は手札から魔法カード『ワン・フォー・ワン』を発動！このカードは、手札のモンスターを墓地へ送ることで、フィールドにレベル1のモンスターを特殊召喚できる！」

レベル1のモンスターを特殊召喚だって！？それにしても、スピード・ウォリアーといい、ガード・ブロックといい、聞いたことないカードばかりだな。

『遊馬、これはもしかしたらナンバーズ召喚の複線かもしれない』

「わかってるよ！」

「俺は手札のボルト・ヘッジホッグを墓地へ送り、デッキから現れよ、『チューニング・サポーター』！」

チューニング・サポーター ATK1000/DEF1000

「わあ、可愛い！」

と、小鳥が言う。確かに、出てきたのは鍋を被った小さい奴だ。攻撃力1000・・・でも油断できない

『油断するな、あの男はまだ通常召喚を残している』

「わーってるよ、お前に言われなくたって」

「俺は手札からチューナー・モンスター『ジャンク・シンクロン』を召喚！」

「『『チューナー・モンスター!?!?』』」

チューナー・モンスターってなんだ!?!?聞いたことのないカードだぞ・

「ジャンク・シンクロンの効果発動!このカードの召喚に成功した時、レベル2以下のモンスターの効果を無効にし、自分の墓地から表守備表示で特殊召喚!戻って来い、『スピード・ウォリアー』!」

スピード・ウォリアー ATK900/DEF900

「そして、墓地のボルト・ヘッジホッグの効果を発動！このカードは自分フィールドにチューナーがいる時特殊召喚できる！」

ボルト・ヘッジホッグ ATK800/DEF800

フィールドにはレベル2が2体、レベル3が1体、そしてレベル1が1体だ・・・これじゃあエクシーズ召喚は出来ないぜ？一体あいつどうするつもりなんだ？

「あの男、レベルがバラバラのモンスターを召喚して一体何をやるつもりだ？召喚出来てもランク2のエクシーズモンスターがせいぜいだ」

アストラルも混乱している。そして何より気になるのがあの「チューナー」と呼ばれたモンスターだ

「行くぞ、レベル2のスピード・ウォリアー、ボルト・ヘッジホッグ、レベル1のチューニング・サポーターに、レベル3のジャンク・シンクロンをチューニング！」

2 + 2 + 1 + 3 = 8

「『チューニング！？』」

な、なんだそれ！？聞いたことない召喚方法だぞ！？

「集いし願いが、新たに輝く星となる！光差す道となれ！シンクロ召喚！飛翔せよ、『スターダスト・ドラゴン』！」



スターダスト・ドラゴン ATK2500/DEF2000

「きれー・・・」

俺と小鳥、そしてアストラルまでがそのモンスターに魅入ってしまった。現れたのは白銀のドラゴンだった。すげえ・・・こんなモンスター初めて見たぜ。って、そうじゃねえ！

「シンクロ召喚って！聞いたことのない召喚方法だぞ！？なんだそれ！」

「シンクロ召喚とは、チューナーと呼ばれるカードを核にエクストラデッキにあるカードのレベルが合うように召喚する。先ほどのモンスターたちの合計はレベル8。そしてスターダスト・ドラゴンのレベルは8、よって特殊召喚できるというわけだ。そしてチューニング・サポーターの効果。このカードがシンクロ素材となった場合、カードを1枚ドロー出来る。」

『なるほど、エクシーズ召喚とはまた違うカードか・・・』

すげえ召喚方法だ。でも、攻撃力は互角！

「ナンバーズはナンバーズでしか破壊できない！攻撃は互角だから相討ちは出来ないぜ！」

「俺は手札から装備魔法『ファイティング・スピリッツ』を装備！このカードを装備したモンスターの攻撃力は、相手フィールドにいるモンスター1体につき、400ポイントアップする！」

スターダスト・ドラゴン ATK2500/DEF2000 AT

K2900 / DEF2000

「攻撃力が2900!?!」

これじゃあホープが破壊されなくても、ダメージを受けちゃう!

「バトル!スターダスト・ドラゴンで希望皇ホープを攻撃!」  
「シューティング・ソニック!」

「ホープのモンスター効果発動!自分のオーバーレイ・ユニットを一つ取り除き、相手モンスターの攻撃を無効にする!」  
「ムーン・バリア!」

「俺はこれでターンエンドだ」

相手の場には攻撃力2900のスターダスト・ドラゴン・・・このターンで、何か逆転のカードを引かないと

「俺のターン、ドロー!」

引いたのは・・・よし、ダブル・アップ・チャンス!これなら大ダメージを与えられるぜ!

『待て、遊馬』

「なんだよ」

『今君はその『ダブル・アップ・チャンス』を使おうとしているのだから、そっちではなく、左の『破天荒な風』を発動するんだ』

「こつち？」

破天荒な風は自分のモンスターの攻撃力を1000上げるカードだ・  
・こつちだと大ダメージは与えられないぜ？

『君は忘れてはいないか？あの伏せカードを』

「伏せカード・・・」

そういえば、相手には1枚伏せカードがある。

『切り札は最後まで取っておけ・・・』

「お前の言うことを聞くのは相変わらずアレだけど・・・俺は『破天荒な風』を発動する！このカードは自分のモンスターを1ターンの間1000ポイントアップさせるぜ！」

No.39 希望皇ホープ ATK2500/DEF2000 AT  
K3500/DEF2000

「バトルだ！希望皇ホープでスターダスト・ドラゴンを攻撃！『ホープ剣スラッシュ』！」

希望皇ホープがスターダスト・ドラゴンに斬りかかる。よっしゃ！  
これで・・・

「断ち切らせはしない！畏発動『くず鉄のかかし』！相手の攻撃を1度だけ無効にする！そして、このカードは再びセット出来る！」

「なっ！？攻撃が止められた!？」

『しかも墓地へ送られず再セット出来るとは……なんて強力な罠カードだ』

くっそ、俺にも手立ては少ない……だったら

「俺はカードを1枚伏せて、ターンエンド!」

「俺のターン、ドロー!どうした?CNo.39を使わないのか?」

「『!?!?』」

ホープレイのことまで知ってるのか!?

「へっ!切り札つてのは最後まで取っておくもんだぜ!」

「……俺は手札から『命削りの宝札』を発動。カードを5枚になるようにドローする。5ターン後に全て捨てる。手札のレベル・ステイラーを墓地へ送ることで、チューナーモンスター『クイック・シンクロン』を特殊召喚!」

クイック・シンクロン ATK700/DEF1400

「そしてレベル・ステイラーの効果により、クイック・シンクロンのレベルを1つ下げて、レベル・ステイラーを特殊召喚する!」

クイック・シンクロン ATK700/DEF1400

「さらに、墓地から特殊召喚に成功した時、『ドッペル・ウォリアー』を特殊召喚する！」

ドッペル・ウォリアー ATK800 / DEF800

またフィールドにモンスターが並んだ！？

「レベル2のドッペル・ウォリアーと、レベル1のレベル・ステイラーに、レベル4のクイック・シンクロンをチューニング！」

2 + 1 + 4 = 7

今度はレベル7かよ！

「集いし叫びが、木霊の矢となり空を裂く！光差す道となれ！シンクロ召喚！いでよ、『ジャンク・アーチャー』！」

ジャンク・アーチャー ATK2300 / DEF2000

今度は攻撃力2300のモンスター！？また何か仕掛けてくるつもりか！

「ジャンク・アーチャーの効果発動！1ターンに1度、相手のモンスター1体をゲームから除外する！俺はホープを除外！『ディメンション・シユート』！」

「な、なにに！？」

ジャンク・アーチャーの開けた穴にホープが吸い込まれた。

「これで終わりだ・・・2体のモンスターでダイレクトアタック！」

「う、うわああああああああっ！」

九十九遊馬 LP4000 LPO

ま、負けちまった・・・って、あれ？

「アストラル、お前・・・」

アストラルは消滅せず、そこに残っていた。ナンバーズを持つ人間と戦って負けたら、アストラルは消えるはずなのに・・・

『この男・・・まさか？』

「お前は何か勘違いをしていないか？」

男は俺に近づいてくる。思わず身構えたけど、男は倒れている俺に手を差し伸べていた。

「立てるか？」

「お、おう・・・」

手を取り、立ち上がる。

「誤解があったようだ・・・俺は確かにN.O.を知っているが、そのカイトという人間を知らない」

は？どういうことだ？

「君は、この男を見たことはないか？」

そう言っただけで見てきた写真……それは黒髪の男の写真。うーん……見たことねえな

「いや、わかんねえ」

「そうか……どこへ行ったんだ」

男は随分と悩んでいるみたいだ。俺もちょっと聞きたいことを聞いてみよう

「なあ、アンタなんで『No.』を知ってるんだ？それに、俺のことやホープレイのことだって……」

「……色々とあってな、かつてNo.を使う人間とデュエルしたことがある。その人が俺の探し人だ。君のことは、色々とあってな」  
探し人？そういや、自己紹介がまだだったな。

「俺は九十九遊馬、こっちは小鳥……なんか困ってるなら助けになるぜ？アンタの名前は？」

「ありがとう、俺の名は不動遊星……異世界からこの世界に来た『決闘者』だ」

これが、俺と遊星の出会い。後にハートランド全体を巻き込む大事件になるとは、この時はまだ知らなかった。

外伝 ZEXAL編（後書き）

アンナちゃんと、トマトと戦う間の話ってことで書いてみました。

まさかの不動遊星の登場でした。GX編は本当に次回、書かせていただきます



## 愛（前書き）

お久しぶりです。そろそろ、投稿しないと読者から忘れられるとも思ったので、書きあげることになりました。

とりあえず頑張ります

ツアン「今日の最強カードは『ネフティスの鳳凰神』よ

星8 / 炎属性 / 鳥獣族 / 攻2400 / 守1600

このカードがカードの効果によって破壊され墓地へ送られた場合、次の自分のスタンバイフェイズ時にこのカードを墓地から特殊召喚する。

この効果で特殊召喚に成功した時、フィールド上に存在する魔法・罫カードを全て破壊する。

話はGX編へと戻ります

ツイッター / <http://twitter.com/#!/AKIKAZE7010>

## Side秋

あれから、数日が過ぎた。修学旅行も近くなり、学生たち（2年生）が準備を急いだりもしている時期だ。現在光の結社は学校の半分以上を掌握している。残っているのは2年生でも俺、雪乃、ツアン、十代、翔、三沢、マリア、ジュンコ、ももえ、委員長くらいで、1年生も彰子、幸子、ゆま、レイ、レインくらいしか見かけない。本当に掌握するつもりかアイツら。最近カイザーからも連絡が来なくなったし、いよいよやばいとも考えられる。朝、俺は目を覚まして身体を起こした。

「ふぁ……」

「んう……ぁ……」

「ふう……んっ……あふ……」

相変わらず、両側に寝る雪乃とツアン。この二人はこの前以降、一層強く俺を求めるようになった。トイレや風呂以外、どこにでも付いてくる。というか、離れない。レイもそうだが、アイツは基本的に学年が違うのでいないことの方が多い。

「よいしょ……って、動けねえし」

動こうとしても基本的にこの二人が俺の腕を掴んで離すことがない。

前は外そうと思えば頑張つて外れたんだが、今はガツチリホールドするようになった。体制が辛いので再び寝つ転がると、二人はまたその胸を押し当てるように身体にひつついてくる。この二人の行動に慣れた物の・・・やっぱり恥ずかしいと言えば恥ずかしい。はあ・

「まあ悪くはないんだけどさ・・・」

「・・・何が？」

「それは・・・レイ、いつの間に起きてた？」

レイが俺のことをジト眼で見ている。レイもパジャマなので今起きたというところであろう。今日は休日だし、急ぐ必要はないのだが。

「ずるいよ。僕も一緒に寝る！」

「わ、バカ！上に乗っかるな！重い！」

「やー・・・お休み」

完全に逃げ場を失った。というかレイの奴本気で寝始めやがった！スリスリするな！俺の男としての色々とあれ・・・男として大切な何かが失われて行く気がする！首を横に向けると、レインも起きているらしく俺のことを見ている。

「・・・」

「レイン、ちょ・・・助け・・・」

「ネコに、餌を上げてくる……」

秋は見捨てられた！

「ちよ、おい！レイン！カムバーク！」

結局、雪乃とツアンが起きるまでの2時間の間、俺はこの状態を続ける羽目になった。

\*

食堂

「はぁ……」

食堂で俺はため息をついて食事を取っていた。本当に辛かった。

「秋、大丈夫か？」

「もうだめ……十代、後は任せた」

「どう俺に任せてんだよ……」

十代や翔たちがここにいるが、雪乃やツアンは現在シャワーを浴びている。と言うのも、彼女達の日課がそれだからだ。

「しょうがないッスよ、秋君」

「……何が」

「アレだけ大変なことがあった後ッス。二人はきつともう秋君ナシじゃ生きていけないッス」

翔、それ結構辛いんだよ？最近俺、そのせいで胃が痛くてどんどん痩せてきているんだよ？本当に酷いんだよ？

「黙れっス、リア充もげろ」

翔がグレた・・・

「ま、秋が大変なのはわかってんだけどやっぱり明日香や万丈目も心配だぜ・・・」

彼女達は光の結社が占領したブルー寮で生活しているからな。万丈目達の精霊も心配しているし、結構つらそうだ。それに、斎王も何度も十代や俺に刺客を送ろうとしているし。

「そついえば秋、お前修学旅行どこがいいんだ？」

「・・・ディニーランド」

「やめるッス！この小説終わっちゃうッス！」

いや、なんとなく行ってないなあなんて。

「ってか秋、お前の世界にもあったのか？」

「おっ」

どこの世界に行っても、あのネズミ様は存在するんだな・・・

「まあ、俺もランドは行ってみたいけどさ、どうせなら『海馬ランド』だろ！」

海馬ランド・・・要するにあれか、童実野町に行きたいとそう言うことだな？別にいいけどさ

「ってか、海馬ランドって実際どうなの？面白いのか？」

「うーん、やっぱパンフレットとかも凄いな、それにここは遊戯さんの家があるんだぜ！」

「・・・行ってどうするんだよ」

前に、あそこの爺さん所の店のレシートを見つけたが、物があんまりよくないし、値段も高い上に数も少ない。あんまり行って得するような所じゃないなあ・・・まあ、それでも今は親類ではあるんだけどさあ

「遊戯さんいるかもしれないじゃん！」

「・・・(マハード)」

『ええ、多分いませんね。マスターはいま世界中を飛び回っています』

「(だよな)」

あの人GXで登場するの最初と最後だけだしな。流石にイレギュラ

「でもそれはねえだろ。いくらなんでもそれだと世界崩壊もいいところだからな。そんな感じに食事を取っていると、ツアンが慌てて食堂に入ってきた。」

「ツアン、どうかしたのか？」

「秋！逃げるわよ！」

「はあ！？」

いきなり何を仰っているんですかこの人は。そもそも逃げるって一体どこに逃げろってんだよ。そんなことを思っていると、眼鏡をかけた男が入ってきた。スーツの長身の男。誰だ？

「ツアン、パパの顔を見た瞬間にそれはないだろう」

パパって・・・ツアンの父親？前に家に行った時は出張でいなかったとか言ってたからな。初めて見た。

「・・・で、君が武藤秋君かね」

「はあ・・・そうですけど」

眼鏡を釣り上げ、俺を見下ろすツアン父。なんか、腹立つな・・・

「率直に言わせてもらおう。うちの娘と別れたまえ」

「はい？」

いきなり率直に言ってきたな。何事だ。俺の脳はスーパーコンピュータ

「タじゃないからこのわけのわからん事態に追いついていけんぞ。」

「パパ！何勝手なこと言ってるの！」

「君と言う存在が私は非常に気に入らない。既に彼女がいる状態からツアンと恋人状態にあるなど、非常に男として・・・何より父親として許せん！即刻別れた」だからさつきから何勝手なこと言ってるの！」グバア！」

横からツアンのとび蹴りが入った。うわあ・・・痛そう。いや、本当に

「ツアン！親に蹴りを入れるなんて・・・反抗期か！？」

「うっさい！さつきから娘の意見を無視してその恋人にそんな剣幕で言い寄って！そもそも、この話パパにはしてなかったはずよ！なんで知ってるの！」

「この話は、ママがしてくれたんだ・・・そして何故娘の彼氏に言い寄って別れさせようかって？決まっているだろう！世界で一番可愛い私の娘がどこぞの知らぬ二股変態男の毒牙にかかっているかと思ついてもたつてもいられない！」

「・・・誰が変態だ、誰が」

「二股は否定しないのかよ」

と、十代が俺に突っ込みを入れるが・・・要するにこの人、親バカつてことか。モンペってわけではなさそうだが・・・いや、モンペか？まあいいや・・・とりあえず、落ち着かせようか。



「いや、あの……ツァンの御父さん？」「誰がお父さんだあ！」……  
・駄目だこりゃ」

「秋君、火に油注いだけッスよ」

カンカンに怒っているツァンの御父さん。そしてその父親に怒っているツァン。誰かこの事態に収拾付けて欲しいんだけど。

「とにかくツァン！この男と別れなさい！こんな男じゃなくてもお父さんが認めた良い男を紹介するから」

「五月蠅い！今まで碌に構ったりもせず僕のことをホッポリ出していたくせに！僕が誰と付き合おうと、誰を愛そうと僕の勝手ですよ！ほっというてよ！」

そう言っただけに抱きつくツァン。そして睨まれる俺。あの、俺はこれどうすればいいの……？

「良いだろう……そこまで言うのなら、武藤秋君、君にデュエルを申し込む！」

「え……俺？つてか、デュエル？」

ツァンの御父さんは言いながら俺に手袋を投げってくる。

「君が勝てば、君とツァンの交際を認めよう。だがもし……私が勝ったら、私はツァンを連れて帰る」

「はあ！？」

何を言い出すんだこの人は……ってか、デュエル万能すぎるだろ！あいかわらずだけれども！ってか、この感じ久しぶりだなおい

「さあ受けるか受けないか……」

「秋……」

俺を不安そうに見るツアン。上等だ。

「ツアンは二度と離さないと約束した……デュエルだ！」

「よかろう……」

こうしてデュエルすることになった俺。あれ？結局俺すごく厄介事に巻き込まれてる？

\*

デュエル場

S i d e ツア ン

パパがいきなり乗り込んできてから、こんな事態になった。デュエル場で秋とデュエルすることに……パパは海馬コーポレーションと繋がりのある会社の重役でもあるから、学園側はすんなりとパパの要請を受け入れていた。

「秋……」

「大丈夫よ、ツァン」

「雪乃……」

僕の隣で、雪乃が静かに呟いていた。

「秋は負けないわ」

「………うん」

僕達は決闘場に目を向ける。ここにいるのは僕、雪乃、十代、翔、  
剣山、三沢、レイ、レイン、彰子、幸子、ゆま……お願い勝つて  
！秋！

「君を完膚までに叩き潰す！」

「……悪いですけど、手加減するつもりは全くないんで」

「<sup>デュエル</sup>決闘！」

ツァン父 LP4000

武藤秋 LP4000

「先攻は私がもらおう。私は手札から『切り込み隊長』を召喚！」

切り込み隊長 ATK1200 / DEF400

「そして、切り込み隊長の効果で『ネフティスの導き手』を特殊召喚！」

ネフティスの導き手 ATK600 / DEF600

「なあ、ツアンの親父って強いのか？」

「知らない。僕はパパがデュエルしたところなんて見たことないわ。でも、ママが言うには、昔大会ではよく優勝しているって」

いつも仕事、仕事、仕事でデュエルモンスターズになんて興味ないんじゃないかって思ったのに。僕がこの学校に来たのだって、パパの門限だなんだが嫌だからだし

「で、でも・・・それだけ強いってことなんですか」

「しかし、秋様に勝てる実力者なんてそういませんわよ」

彰子と幸子が言うけれど、幸子の言うとおり、秋に勝てる人間などそうはいない。僕の後ろに座っている十代を除いてね。ビートダウンや、ロックでも秋は毎回それを破るプレイングを思いつく。っと、フィールドは2体のモンスター・・・ネフティスの導き手・・・聞いたことのないモンスターだけど、パパあんなの持ってたっけ？

「さらに私はフィールドのこの2体を生贄に捧げ、デッキから『ネフティスの鳳凰神』を特殊召喚する！」

ネフティスの鳳凰神 ATK2400/DEF1600

レベル8のモンスターがもう出てきた。にしては、そこまで強くないみたいだけど。

「そして私はカードを1枚セットしターンエンド!」

「俺のターン、ドロー!俺は裏守備表示でモンスターをセット!さらにカードを1枚伏せてターンエンド!」

秋は今回どんなデッキを使うのかしら。僕のためについて言ってくれたし・・・きつと、本気で戦ってくれてるはず。そう信じましょう。

「私のターンドロー!私は手札から『トレードイン』を発動!手札の『ネフティスの鳳凰神』を墓地に送ることで、私はカードを2枚ドロー!バトル!ネフティスの鳳凰神!裏守備モンスターを攻撃しろ!」

表になって現れたのは・・・あれは、ダンディライオン!?ダンディライオンが破壊されると、2体の綿毛トークンが召喚された。

「俺が伏せていた『ダンディライオン』は、破壊された時『綿毛トークン』2体を特殊召喚する!」

綿毛トークン? ATK0/DEF0

綿毛トークン? ATK0/DEF0

ダンディライオンを召喚したということは、あのデッキはシンクロデッキ?よね、多分。次のチューニングに繋げるための

「ならば私はこれでターンエンド！」

「俺のターン！俺は手札から『調律』を発動！このカードはデッキからシンクロンと名のつくカードを手札に1枚加える。そのコストとして、デッキの一番上のカードを墓地に送る。俺が加えるのは『クイツク・シンクロン』！」

言いながらカードを手札に加え、デッキの一番上のカードを墓地に送る秋。これならいけるのかしら？

「そして、手札の『チューニング・サポーター』を墓地へ送り、チューナーモンスター『クイツク・シンクロン』を特殊召喚！」

クイツク・シンクロン ATK700/DEF1400

「さらに、通常召喚！チューナーモンスター『ジャンク・シンクロン』！そして効果により、このカードの召喚に成功した時レベル2以下のモンスターを復活！蘇れ『チューニング・サポーター』！」

ジャンク・シンクロン ATK1300/DEF500

チューニング・サポーター ATK1000/DEF1000

「チューナーモンスター？」

これでモンスターがフィールドを埋めた。やる気ね、秋。

「俺はレベル1の綿毛トークンと、レベル1のチューニング・サポーターに、レベル3のジャンク・シンクロンをチューニング！」

「チューニング!?」

1 + 1 + 3 = 5

「リミッター解放、レベル5！レギュレーターオープン！スラストーウォームアップ、オーケー！アップリンク、オールクリア！GO、シンクロ召喚！カモン『TG ハイパー・ライブラリアン』！」

TGハイパー・ライブラリアン ATK2400/DEF1800

現れるライブラリアン。これでネフティスの鳳凰神と攻撃力は並んだ。秋の得意とするシンクロ召喚にパパはどう対抗するつもりなのか。

「なるほど、特殊なモンスター召喚を持っているんだね、君は」

「ええ、本来なら一般人に見せるカードではない・・・だが、大切な奴を守るためなら俺は俺の命さえ惜しまない！」

「ほう・・・なら、君の覚悟がどれほどのものか見せて見る！」

パパの声と共に、ネフティスの鳳凰神が吼える。

「チューニング・サポーターがシンクロ素材となった時、カードを1枚ドロウする。さらにレベル5のクイック・シンクロンに、レベル1の綿毛トークンをチューニング！」

1 + 5 = 6

「疾風の使者よ・・・鋼の願いが集う時、その願いは鉄壁の盾となる！光差す道となれ！シンクロ召喚！現れる、『ジャンク・ガードナー』！」

ジャンク・ガードナー ATK1800/DEF2600

「ライブラリアンの効果でカードを1枚ドロー！そしてカードを1枚伏せターンエンド」

秋のフィールドには強力な守備モンスターが召喚された。ここからパパがどう戦うのか・・・

「私のターン！」

秋、本当に負けないでよ・・・！



## 愛（後書き）

ってなわけで、ツァン父登場。母と違って名前がないというね・・・

実は、この話最初は雪乃でやるうと思っただんですけど、既に両親が出ていたのでこっちにしました。

TF6でも確か門限がどうちゃらこっちちゃらと、非常に厳しいお父さんだったという記憶があります

次回もお楽しみに！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2721v/>

---

遊戯王～拒絶に巻き込まれた転生録～

2012年1月5日01時07分発行